蝶の如く

蝶々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蝶の如く

【Ｎコード】
Ｎ６３０５Ｐ

【作者名】
蝶々

【あらすじ】
普通じゃない家柄に生まれた青年が気がつくと、そこは荒野の真ん中だった。
こいつは夢だと都合のいい判断をしているところに・・・
恋姫無双の二次小説です。

蝶の如く～1～（前書き）

環境依存文字などについて、使わない方向で書いてありますので、
誤った漢字で記載してあることがあります。
出来るだけ違和感のないように似たような漢字を使用していますが、
その点ご了承ください。

蝶の如く～1～

俺の名前は平教経。
名前でわかると思うけど、一応平家の末裔なんだとさ。
家には家系図があるし、本当だと両親にも一族にも言われたけど、
旨く作ってあったよ、あの巻物。
確かに年季が入っていたけど、偽物だと思う。そう判じる根拠も持
たないから口外しないけど。

あぁ、一族ってのは、周りの家の皆様ね。
うちの家から分家していった家で、２０軒はある。
うちの家が山の上、というか石垣があるから城跡？にあり、その周
りを囲むように
分家がある。
集落への唯一の入り口となる道には見張りを担う家があり、その家
には鐘があって
侵入者があることを知らせる事が出来るようになっている。

そんな感じで普通の家じゃないとは思うけど、普通に両親の愛情を
感じて、
価値観なんかは普通の人間と同じようなものを持つように育ったと
思う。

異常なのは、分家の爺さんが小野派一刀流の免許皆伝だったことと、
その爺に小さい頃からおかしな鍛錬をさせられて、今じゃ立派に人
外認定されても
おかしくない位身体能力というか、剣の腕、動体視力が高いことだ。

分家の爺さんは本当に世が世なら達人として門弟が多くいるような

人だと思う。
何人か内弟子がいたが、壮年の彼らを子供扱いしていた（無手で真剣持った相手を投げてた）。

「常在戦場」
これが師匠たる爺さんの教えだ。これを教えるために、常に内弟子であるオッサン共と
真剣で立ち会いを行っていた。師匠に言わせると、殺すつもりでやって初めて人を殺すことについて実感を伴った鍛錬が出来るのだそうで、実際に何度か死にかけたし殺しかけたこともある。

とにかく、ぶっとんだ爺さんだった。

一度、拳銃を持った相手と相対した場合、どうするか？と反発心から聞いたことがあるが、
「教経ェ……残念じゃが鉄砲は真っ直ぐしか弾が飛ばんのんじゃ。
相手が引き金引く時に避けりゃ問題ない」
と、有り難いお言葉を頂いたことがある。俺は残念でも何でもありません。
「あなたの頭が残念です」と言いたかったがそんなこと言ったら間違いなく死ねるから言わなかったけど。

一番思い出（トラウマ）に残っているのは、いきなり抜き打ちに刀で首筋を皮一枚だけ斬られたことかな……はは……あん時は穴という穴から液という液を出したなぁ……まだ４歳だぜあの時……
「殺気に慣れる必要がある」
とか言って殺気に当てられ続けてもの凄く怖い思いをさせられたりしたが、あれが殺気なんだねぇと成長してヤンキー達に凄まれた際に実感した。まぁ、ヤンキー達には暴力の世界で生きていくことを断念して貰った。Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩって言うのか？させて貰

ったよ。

俺自身の爺も異常で、齢５歳のかわいい孫に、「雪中行軍じゃぁ～」とか抜かしながら朝５時から１８時まで延々山の中歩かされたり……

……結構悲惨な幼少時代なんじゃないかと思ってるけど、同時にいい思い出になってる辺りが度し難い。

まぁ、その甲斐あってそこらのちんぴらが凄んだ程度じゃ何とも感じない立派な？男になったと思う。

ある程度の暴力なら何とでもなると漠然と思ってる、楽天家な俺の誕生だね。

で、成長して普通に就職して、新人歓迎会という名の暴飲暴食の宴　兼　かわいい女の子に唾付けちまおうの会をやってる最中なんだけど……なぜか会社の先輩に絡まれてるわけで……北の国から？

「だから！俺は生まれてくる時代を間違えたんだって！」

「はいはい、あ～あ～」

「ホモじゃねぇよ！世が世なら武将……いや君主として天下に名を残す自信があるんだってば！」

「妄想乙」

「お前だって世が世なら平家の貴公子様だぜ？戦国時代に行ってみたいとか思ったことがある口だろ？」

「お客様の中に精神科の先生はいらっしゃいませんかぁ～？急患で

す～」
「真面目に話をしているんだよ！実力主義だとか言いながらそんなことないこんな時代じゃ……」
「ＰＯＩＳＯＮ？」
「テメェ先輩様を舐めてんのか？あぁ？」
「うわぁ、後輩に『舐めろ』ですって奥さん、最低ですわよこの男」
「……場所考えて言えよ、平」
「しっぶ～や！しっぶ～や！」
「はぁ、もういいや」

お諦めになりましたか。
家柄が家柄だけにそういう話を振ってくるやつが多すぎなんだよねぇ。まったく……

「おい平」
「へ？」

振り返ると先輩達がいい笑顔で酒瓶を両手に持って大挙してきた。

「とにかく飲め飲め」
「っぷはぁ～」
「いいねぇ。こいつノリがいいし酒も飲めるし。いやぁ～いい新人

引いてきたな今年は！」
「それほどでもないっすよ」

～2時間後～

「そらそら、まだまだ酒はあるんだから、ジャンジャンバリバリ飲んでいこー！」
「それｗｗｗｗパチンコｗｗｗｗ」
「頭の回転早いなこの馬鹿ｗｗｗよし、俺のボトル持ってきてー！」
「来た、下町のナポレオンｗｗｗいいｗｗｗｗｗちこｗｗｗｗｗ」
「今日は寝かさないからね？ｗｗｗｗｗｗ」
「アッーｗｗｗｗｗｗ」
「周りの奴がわからんネタするなよお前ら……」

明るい先輩が多いし、雰囲気はいい。
いい会社に就職できたもんだとしみじみ感じながら、先輩のナポレオンをがぶ飲みしてやったのだった。

「……ん……」

目を覚ますと、そこは何もない荒野の真ん中だった。

「は？」

昨日会社の飲み会終わって気持ち悪いまま風呂に何とか入って寝て……

で？

なんだこれ？

俺の家じゃないんだけど……というか何で外で寝てんだ？

「現実味があるけど、これ夢かな」

でもなぁ、夢って夢だって気がつかないんだけどなぁ。偶に気がつく時があるくらいで……

「これがその夢だと気がついた夢ってやつか？それなら好き勝手できるな！」

教経が勝手にこの状況を判断していると、背後から3人の男が声をかけてきた。

「おいテメエ！いい服着てるじゃねぇか」

「なんだな」

「兄貴、こいついいとこのぼっちゃんかなんかじゃないですか？」

振り返った次の瞬間、そこには衝撃の光景が！

なんと小汚い服を着て山賊のコスプレをした、頭の不自由な若人が3名いた！

「このお金でもっとましな服でも買いなさい」

そういって俺はポケットに入っていた財布から千円札を渡す。

「もう乞食と間違われるような格好はするんじゃないよ？」

そういって俺は立ち去り、彼らは若干頭の不自由さから解放されて、日雇い労働者ながら充実した人生を送ったのだった。

～ｆｉｎ～

じゃ、なくて。

よくポケットに財布入ってたな。４万９千円と９９９円か。

白地のカッターシャツにジーパン、ご丁寧に黒のロングコートまで着てる。

さすが俺の夢、ご都合主義だね。

しかし、夢なんだから一張羅じゃなくてもっとこう格好いい服とか着たかったなぁ……まぁ、ファッションに興味ないから思いつかないし、だからこそのこの格好なんだろうけどさ。

「お前、俺たちを舐めてんのか！アァ！？なんだこの紙切れ！」
「？……あぁ、あれか。千円では足りない、と」
「せんえん……？なんだそりゃぁ！とにかく、金目のものおいていけ！」
「兄貴、あいつの荷物、剣がありますぜ」
「なんだな」

荷物……？お、竹刀袋に巾着があるじゃん。さすが夢、後付で何でもありだな。
ちょうどいいから若人に人生の厳しさというものを教えてあげる必要があるな。
棒きれ持ったら無敵の俺に絡んだのが悪い。
竹刀袋の中身は……清麿！？

「なんでこれがここに……あ、夢だからか」

竹刀袋の中身は、江戸時代後期、新刀期最高の刀鍛冶である「源清麿」が打った、名も無き名刀。師匠が持っていた、人を斬っても脂が付着せず、何人でも斬ることが出来ると師匠が言っていた刀だった。

「おう、その剣おいていけ！あと服も全部おいていけ！」
「お、おいていくんだな」

山下清……なのか……？
確か芦屋さんが死んで、芸人が後引き継いだけど、全く似てない。

「ぼ、僕は……」
「あぁ！？」

「ぼ、僕は、お、おにぎりが、た、食べたいんだなぁ」
「あ、兄貴、おいらもおにぎり食べたいんだなぁ」
「テメェ馬鹿にしてんのか！おいデク！テメェも何言ってやがる！こいつ身ぐるみはがせ！」

からかうのは面白いけど、そろそろ限界だな。

「おらぁ！痛い目見たくなかったら……」
「凄んでばかりじゃまったく驚異にならんな」

殺気を放出しながら、抜き打ちに首の皮一枚だけ斬ってやった。

「ひぃっ」
「あ、兄貴！」
「みえなかったんだな」

「お前らに選択肢をやろう。
１つ、土下座して頭を踏まれる。
２つ、土下座して靴を舐める。
３つ、土下座してケツからおにぎりを食う。

さぁ、好きなのを選ぶといい」

「な、全部一緒じゃねぇか！」
「いや、兄貴、土下座の後が一緒じゃないっす」
「お、おにぎりが食べたいんだな」

……ケツからか？ケツからでもかまわんのか？

とりあえずこの夢の世界の第一村人（第三までいるが）から情報収集を試みる。
情報を制するものは世界を制する、だ。

「とりあえず、ここはどこだ？」
「へ、へい。并＜へイ＞州の太原でやす」

并＜？＞州の太原……中国かよ。
問題は、どういう設定の世界か、だよな。
飲み会の席で相手にしなかったが、タイムスリップして武将で活躍、とか考えてた頃がありましたよ、はい。
武将として活躍できるような世界なら……燃えるな。

「今一番ここらで有名な人間は誰だ？お前らが知っている人間の中で、だ」
「はぁ、そ、それでしたら劉虞さま……かな」

劉虞……公孫賛に責められて死んだっつ～人か？
三国志じゃん。なかなか燃えるな。関羽、張飛、趙雲……どれくらい強いのかな？
おお、燃えてきたじゃん。でも出来るなら春秋戦国時代が良かったなぁ。

「まぁいいや、あぁ、髭」
「へ、へい。なんでしょう？」
「懐に入れてあるもの出せ」
「……何でやしょうか？」
「惚けるんじゃねぇよ。さっきから懐気にしてるのは分かってるんだよ。

どうせどっかの誰かからふんだくったもんが入ってんだろ？出せよ」

「……」

「……死にたいのか？」

「ひぃっ……こ、これでやす」

太平要術の書……？

へぇ、これ何が書いてあるんだ？

……この世界は夢ではありません！？

なんだこれ……時代は……後漢時代。俺が生きている時代より１８００年昔の時代です。だと？

んなこと説明してくれなくても大体分かるだろうが馬鹿が。

男にとっては夢のような世界……と。

夢の世界の説明がしてあるな……・夢じゃないわけないだろうが。

まぁ、戦乱の時代なら確かに男にとっては夢のような時代だわな。

とにかくこいつらからもっと情報を聞き出す必要があるけど、こんな所じゃなんだし……

「まぁいいや、お前ら……」

「まてぇい！」

ん？誰か来たみたいだな。それならそいつから情報聞き出して、この賊共はさっさと引き渡すとするか。犯罪者捕まえましたよ～って体裁でなら、聞きたいことも聞き出せるだろうし、悪い扱いはされないだろう。

って！

「危ねぇよ！」

都合のいいことを考えていたら、いきなり女が槍繰り出して来やがった。

蝶の如く～2～（前書き）

もうちょっと書きためたものがあるので、続けて投稿していきます。
少し長ったらしいですが、宜しくお願い致します。

蝶の如く～2～

～星　Ｓｉｄｅ～

私は姓を趙、名を雲、字を子龍、真名を星という。
仕えるべき主を見つける為に旅をしている。
といっても、一人旅では何かと不便であり、似たような目的を持つ二人と一緒の旅である。

「は～、いい天気ですね～」
と、風。姓を程、名を立、字を仲徳。真名は風。
その真名の通り、飄々とした風を思わせる女性である。
「ええ、そうですね」
とは稟。姓を郭、名を嘉、字を奉孝。真名は稟。
これまた真名の通り、凛然とした雰囲気を持った女性である。
共に知謀に長けており、旅をする中で何度も世話になっている。

「ですが風、いくら次の町まで距離がないとしてもいささかゆっくりしすぎなのでは？」
「む……ぐぅ～」
「寝るな！」
「やれやれ、日暮れまでには次の町に到着できそうだな」

いつも通りの二人の遣り取りを見ていると、今が荒廃した時代であることを忘れそうになる。

「ん？あれは……」
「おぉ～、流れ星ですね～」

「こんな昼間にか……面妖な」

「あの流れ星、この先に墜ちていくように見えますね～」
「そうだな」
「そうだな、じゃなくて……あれは墜ちているんですよ！」
「相変わらず的確な突っ込みですね～」

流星は眩い光を発しながら、我々が向かう先へ墜ちていった。

「二人が良かったら、見に行ってみないか？」
「星！」
「風は賛成です～」
「ちょっと風！」
「と、言うことだが、稟はどうする？」
「……二人が行くのに私だけ行かないというわけにはいかないでしょう」
「といいつつ、しっかり体は反応してしまうおぼこな稟ちゃんなのでした～」
「ちょっと風！あ、星、待ちなさい！」

騒いでいる稟と風をおいて、私は流星が墜ちたとおぼしき場所へ向かったのだった。

「！」

感じたことのない威圧感に先を見ると、一人の男が剣を突きつけて三人組の男達を脅迫している。剣を突きつけられた男が、懐から何かを取り出し、それを男が取り上げていた。

「賊か！」

「ん～、どうですかね～って、星ちゃん」

「……行ってしまいましたね」

「稟ちゃんはどう思いますか？」

「衣服からして、剣を突きつけている男性が賊に襲われたが返り討ちにした、というところでしょうか」

「ですね～。大事になる前に星ちゃんに追いつきましょう～」

このような時代だ、賊が旅人を襲うなどありふれたことで、襲われた人はそれこそ五万といる。だが、だからといって目の前での無法を見逃すほど私の槍は無力なものではない。あの男にはこの趙子龍の前で無法を働いた罪を償って貰うとしよう。その身を以て。

「まてぇい！」

男の注意をこちらに引くべく声をかけながらその背後に走り、一撃を放つ。

「危ねぇよ！」

私が繰り出した槍をかわし、男が怒鳴った。

私の鍛錬もまだ不足しているようだ。手加減したとはいえ、まさかかわされるとは思っても見なかった。

「なかなかやるようだが、この私の槍の前で無法は許さん！
そこの三人組、疾く逃げるがいい！」

「ひぃっ、お助け～」

「兄貴、まってくれよ」

「なんだな」

とりあえず3人は逃がした。

後はこの男に少々教育してやるだけだ。

～教経　Ｓｉｄｅ～

「なんだこの状況は」

賊共を引き渡して情報を得る云々言ってる状況じゃないってことだけは理解できるが。
にしても、すごいなこの槍捌きは。
突く、薙ぐ、払う。
すべての動作に無駄がなく、常に次の動作を念頭に置いた体捌きを行っている。
が、師匠ほど容赦がない訳じゃない。

「おいあんた、自分が何をしているのか分かっているんだろうな？」
「貴様こそ、無辜の民を虐げるだけしか能が無いようだが私が相手では不満か！」
そう言いながら目の前の女はどんどん突いて来やがる。

「そういうことを言ってる訳じゃねぇだろうが……よっと」
目の前に突き出された槍を清麿で左に払い、相手の体勢を崩す。
が。
はね除けられた反動を利用してそのまま回転し、今度は右から槍を横薙ぎに薙いできた。
槍は的確に俺の右足の太股を狙っている。

避けるとしたら飛ぶしかないが俺を空中に飛ばすことを目的にしているのは間違いない。
普通なら右足が前になるはずの横薙ぎの動作なのに、次の動作に遷るために「左足を前に」しているからだ。
跳躍したら最後、正面から突き殺されることになるだろう。
そうなると、ここは……前に出るべきだ。

幸いにも槍というものは持ち手の箇所だけ刃がないという武器ではないからな。
穂先でなければ殴られる程度のものだ。それでも鉄で出来ていた場合痛い思いをするだろうが。
遠心力の関係で考えても、根本で打撃を受ける方が遙かに衝撃が少なくてすむ。
それを予測しての動作であれば命がないかも知れんが、それは御運の尽きというやつだろう。

「ちぃっ」
「うぐっ」

槍を受けた脇腹で少し鈍い音がしたが、こちらも女の鳩尾に刀の柄で一撃を見舞ってやった。かなりきつめに入れてやったが、なかなかどうして、女もやるようだ。気を失わなかったばかりか、槍を構えて次の攻撃に備えている。

これは本気でやらないと駄目かもわからんね。
俺は師匠を超える強さを手に入れたはずなのに、すっかり鈍っちまったみたいだ。

「なぁ姉ちゃん」
「なんだ！」
「これから少し本気出すからさ、楽しませてくれよ？」
師匠以外の人間に本気になるのは初めてだ。世界は広いねぇ……って夢の世界か。
まぁ、何でもいい。師匠に勝つようになってから本気を出す事なんて全くなかったからもの凄く楽しみだ。

目の前の女がかなり痛い思いをするだろうが、そこはそれ、夢なんだし、いきなり俺に槍付けてきた訳だから仕方がないよなぁ？

「じゃぁ、いくぜっ」
「！」

とりあえず少し深めに、抜き打ちに斬りつけてみる。
女だから胸斬られるのはつらいだろう。だからこそ、斬ってみたい。
俺の夢で俺に絡んできたんだ、非道は容赦して貰う。

女は俺の太刀筋を見極めたのか、少しだけ後ろに下がって躱した。
斬れたのは服だけだ。
あぁ、やはりこの女はかなりの遣い手だ。

「あっ」
と、思ったら胸を片手で隠している。

「むっ」
今の恥じらった顔はかわいいな……
じゃない、油断は禁物だ。今のが罠でないとは限らない。気を引き締めて太刀を振るう。

「くっ」
これも躱される。しかも、前に倒れるように、だ。動きが不自然すぎるぜ？後ろに下がる。危ないねぇ、躱しながらこちらを突き殺そうとしてくるとは、ね。
今のもかなり疾く斬りつけたんだが、それでも躱され、かつ反撃しようとする。
面白い、世の中は本当に広い。

「ならば全力でやらせて貰うぞ！」

瞬動を行う中で抜刀切りを行う。
疾さを極めた太刀、躱し続けることが出来るのか？師匠を超える存在であれば、
間違いなく何度かは躱せるだろう。問題は、どれくらい躱し続けることが出来るのか、だ。
いや、もしかしたら反撃をしてくるかも知れんが、それはそれで面白い。

あとは、根比べということになる。俺自身、瞬動を続けるのは１０分がせいぜいだ。
すべてを躱して反撃をしてくるようであれば、俺の負けだろう。
三国時代で武将でわっしょい物語はここで終焉を迎えるわけだ。
まぁ、それもいい。所詮夢なのだから。

「では……」
「待ってください！」

また女が出てきた。しかも今度は二人だ。

～星　Ｓｉｄｅ～

どうなっている？

長年積み重ねてきた研鑽から来る自信がどんどん削られていく。
私は確かに手加減はしているが、それは力の加減であって疾さに関しては一切手加減していない。

「なんだこの状況は」
これだけ攻め立てているにも関わらず、目の前の男には言葉を発する余裕があるようだ。

「おいあんた、自分が何をしているのか分かっているんだろうな？」
無論、賊を討伐してやろうとしている！
だが、相手は冷静に彼我の距離を測り私が繰り出す突きを躱し続けている。

「貴様こそ、無辜の民を虐げるだけしか能が無いようだが私が相手では不満か！」

単なる賊であればこの挑発に易々と乗ってくれるのであろうが、どうやらそう簡単にはいかない相手らしい。
攻めは知らんが、躱すことに長けているようだ。

「そういうことを言ってる訳じゃねぇだろうが……よっと」

私の突きを戻す前に槍を払っただと！？
面白い、だが私を本気にさせたことを後悔するがいい。

槍を払われた反動を利用し、そのまま体を回転させる。
狙いは男の右足の太股だ。

薙げればよし、薙げなくとも避けるには跳躍して槍を躱すしかないはずだ。
そこを正面から突いてやる！

回転して正面を向き、槍を薙ぐ。
確かに男はそこにいた。そして、跳躍していなかった。

やった、これで男を打ち倒すことが叶うだろう。
だが、この男はこんなに近くに立っていただろうか？

次の瞬間、鳩尾に衝撃を感じた。
「ちぃっ」
「うぐっ」

私の手元に体を移動させ、受ける衝撃を軽減しただと！
多少の手応えはあったが、せいぜい肋骨にヒビを入れた程度でしかないだろう。鳩尾にかなり強い打撃を受け、吐きそうになっているが、何とか体制を整える事が出来た。
こちらは肋骨が折れている。正直痛み分けどころではない。

……どうやら私よりこの男の方が強いらしい。
通常、相手の手元に飛び込もうという考えは出来ても、それを実際に行う人間はいないだろう。
理屈は確かに分かるが、私が看破していた場合、間違いなく死ぬことになる。
この男は既に幾度も死線を越えているに違いない。

「なぁ姉ちゃん」
「なんだ！」
「これから少し本気出すからさ、楽しませてくれよ？」

そう言った男は嬉しそうに嗤う。
あれで本気でないとは一体この男は何者なのだろうか？
その全身から隠しようのない殺意の塊が私に絶え間なくぶつけられる。
たかが賊だと侮ったつもりはないが、まさかこれほどの男がこの世界にいるとは思っても見なかった。
賊どころか、この男は……。戦っていて思う。恐らく、最初に想像していた人間像からかけ離れた人間なのではないか。

「じゃぁ、いくぜっ」
「！」

脅威を感じ、一歩後ろに下がった。
気がつくと、服の胸の部分が斬られている。

「あっ」
命の遣り取りの最中であるが、やはり恥ずかしいものは恥ずかしい。
片手で胸を隠してしまう。

「むっ」

目の前の男は私の顔を見て、意外そうな顔をした。
確かに、今武人として立ち会っているにも関わらず、「女であるが故の所作」をした。
私は少々恥ずかしくなり、腕を外して槍を構え、前に出ようとした。
が、足下にあった石に躓いてしまった。

「くっ」

蹲いた状態から体制を急いで立て直すと、男は私から距離を取っていた。
どうやら追撃をされずにすんだようだ。

「ならば全力でやらせて貰うぞ！」
何がならばなのか全く分からなかったが、どうやら男は全力を出すらしい。
まだ上があることに驚きを感じるが、それはどうでもいい。
私の命数はここで尽きようとしている。だが、私も武人。全力でそれに抗ってみせる！

「では……」
「待ってください！」

気がつくと、風と稟がやってきていた。

蝶の如く～3～（前書き）

もう一丁。

蝶の如く～3～

～第三者視点　Ｓｉｄｅ～

「待ってください！」

教経と趙雲の間の緊張がまさに爆ぜようとした時、外部から声がかかった。

「待ってください。こちらにあなたに危害を加えようとするつもりはありません」

稟が教経に声をかける。

「いやいや、危害を加えられたばかりで、今から危害を加えられるかもしれん所なんだが？」

そう答えながらも、教経は既に続きを行うつもりを失っていた。

見るからに武技に長けていない二人の少女が自分たちに声をかけてきたには理由があるだろう。

まずその理由を聞いてみようという雰囲気を醸し出している。

「申し訳ありませんが、少し状況を整理させてください」

「俺は構わないよ。そっちの姉ちゃんがいいならね」

「星ちゃん、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ、風。稟も有り難う」

趙雲は構えを解き、胸元を隠しながら槍を地に立てた。

「なかなか扇情的な光景だな」

「っ」

その言葉に、趙雲は両手で胸元を隠す。

「いや、すまん。言ってみただけなんだよ。とりあえず、服を変えるなりなんなりして貰えるとこちらとしても助かる」

そう言いながら、教経は女を見ないようにそっぽを向いた。

教経としても、夢とはいえさすがにやり過ぎたと感じており、一旦落ち着いて話をするつもりになっていた。

～教経　Ｓｉｄｅ～

「ということは、あれか？俺が賊だと思ったってのか？」

「申し訳御座らん」

「で、いきなり突いてきたけど俺じゃなかったら死んだんじゃないかね？」

「重ね重ね申し訳御座らん」

「どう見てもあっちの世紀末スタイル的な三人の方がむさ苦しい顔をしているし、

賊っぽいと思うんだがなぁ……『新鮮な水だぁ～』とか『ヒャッハー』とか

言いそうだったし……モヒカンじゃなかったけれども……」

「申し訳……世紀末スタイル？」

「ああ、いい、こっちの話だよ」

あれから俺の相手をしていた姉ちゃんが服を着替え、４人で改めて話をした。
姉ちゃんが言うには、俺が刀を突きつけ、かつ太平要術の書を受け取っていた為に
無辜の民を恐喝しているのだと思い、それを阻止しかつ俺を懲らしめてやろうと思って
ああいう行動を取ったらしい。

「？ま～何事もなくて良かったですね～」
「いや、無かったことにするなよ」

ちっちゃい金髪の女の子がさらりとすべてを無かったことにしようとした。

「おうおう、男が小さな事にこだわるんじゃねぇよ！男だったら、
『大丈夫だぜお嬢さん。俺は全く気にしてないから。ついでに俺と結婚してくれ。』
くらい言うもんだぜ！」

……腹話術まで使ってなに言ってくれっちゃってるのこの娘。

「風！……すいません。後で言って聞かせておきますので……」
もう一人の眼鏡っ娘が言う。
結構苦労してそうだな、この空気の読めなさから考えて。ご苦労さんです。

「とりあえず、自己紹介から始めませぬか。私は姓名を趙雲、字を子龍と申すもの」

「風は程立、字を仲徳といいます～」
「私は戯志才と申します」
「俺は平教経、字はないよ」

趙雲とはねぇ……そりゃ強いわ。あれだけ俺の太刀を躱せる理由としては一番納得できる回答がまさか自己紹介で得られるとはねぇ。
で、程立ってあれか、程？か？戯志才って確か曹操の所の、最初の軍師らしい軍師だったよな。郭嘉が旬？の推挙で仕える前までの。
というか、年齢的に3人とも同じ感じに見えるけど……
まぁ、夢だからな、その辺もご都合主義なんだろうさ。

で、なんでこいつら全部女？
よく分からんが俺は溜まってるのか？溜まってもこんな幻想生み出すなよ俺……自信なくなるな。

「字がない？」
「珍しいですね～」
「確かに。そのような風習がある地方の方ですか？」

あまりにひどい妄想の内容に自分の脳みその中身が腐ってんじゃないかと悲観的になりそうになっていると、名前について質問が来た。

「いや、なんというか、俺は……」

むぅ、どう説明すべきかな。
ここは俺の夢で、お前らは俺の妄想の産物に過ぎなくて、とか言えないしなぁ。
でも俺の夢なんだからその辺もご都合主義になってるべきだろうになんなんだよ。
主人に優しくない夢だな。

「……そうだな、ここことは全く違う、近いようで全く遠い世界から来たのさ」

とりあえず正解が分からないので意味深な言葉で逃げることに決めた。

どうせ夢だ。厨二的な回答で問題ないだろう。

「「「……」」」

おお、なんか知らんが痛い人を見るような目では見られていないから問題ないのか？

「その服装……我々のものとは全く違いますな」

いや、今気がついたのかよ……

「もしかしたら、お兄さんは……」

厨二病じゃねぇよ。

「ん？風っ」

「どうしたんですか、稟ちゃん？」

「あれを」

眼鏡っ娘が指さす方を見ると、旗を立てて馬に乗っている人間が数十名、駆けている。

「ん～、この辺りの官軍でしょうかね～

見つかると面倒なのでさっさと逃げましょうか～」

「なんか悪いことでもしてんのか？程？？」
「いえいえ～私たちは悪いことは何もしていないですよ～？」
「ただ今はまだ、官軍に遭遇したくない、というわけでして」

なんか釈然としないが、まぁいいか。積極果敢に犯罪行為をしていそうにはないしな。
「面倒になるなら俺もごめんだな。今日は疲れたし」
「……それは申し訳御座らん」
「いや、責めてないって。楽しかったし、そっちも恥ずかしい思いしてるわけだしお相子でいいさ」
「そう言って頂けると……。ではひとまず最寄りの町へ行きましょう」
「ラーサ！」
「？」
「了解ってことさ」
「お兄さんは変な言葉を使いますね～」
「まぁ、そういいなさんな。そのうち慣れるさ」

とりあえず町で情報収集して、それからこの夢が覚めるまで何をするか話をする方がいいな。

とりあえず町にやってきたが、これは村の間違いじゃないのか？
まぁ、三国時代の町なんだから、こんなもんかも知れないけど。

「さて、まず宿を取りましょうか」
「そうですね～それからゆっくりとお兄さんのお話を聞きましょう～」

簡単に言ってくれちゃってるが、俺は問題に気がついてる。

「……なぁ、ここってこのお金使えるのか？」

そう、お金の問題だ。
俺が持っているのは４万８千９９９円。
さっきの頭が不自由な３人組に千円あげた時の反応からして、間違いなく使えないだろう。

「これは……綺麗な意匠が施してある硬貨ですね～」
「この紙はお金なのですか？」
「この硬貨には穴が開いているな」

３人は思い思いに俺の財布から金を取り出して眺めているが、やはり使えないようだ。

「どうやら使えないらしいな。そうなると、俺は文無しなんだけど」
「あぁ、それであれば私が貴殿の分を払いましょう。迷惑をかけましたからな」
「そう言ってくれるけどな、趙雲。俺は金を人から借りるのは大嫌

いなんだよ。
　ついでに言うと貰うのももっと嫌だ」
「では、この硬貨を好事家に売ってみては？かなりの意匠ですし、これは高く売れると
　思いますが」
「戯志才さんよ。俺はこの手のものが好きな好事家がどこにいるか知らないし、そういう
　交渉ごとに長けているとも思えないんだが」
「そういうことであれば、風に任せるのがよいと思います。
　あれで一番抜け目がないですから」
「お兄さんさえよければ、任されますが～」

程？か。確かに抜け目のない老人のイメージが強いな。

「……なら全面的に任せようか」
「宜しいのですか？言い出した私が言うのもおかしな話ですが、なぜ全権委任するのですか？」

程？が偉人だって知ってるからって答えられないよなぁ。
適当に言っておこう。

「口調はともかく、先程から会話の最中に俺がなんたるかを注意深く伺っているし、洞察力に自信があるんだろう。ついでに俺が使う言葉についていち早く突っ込んだりと、注意力も、頭の回転が早いことも分かる。もっと言うとこの口調だと真意が測りにくいし、はっきり言って交渉ごとに向いているだろう。国でいうなら一流の外交官だ。そう言った人間にものを依頼するなら、条件付きではなく自由に手腕を振るって貰う方が大体いい結果が出るものだよ」

なかなかいい出任せだな、俺。詐欺師でもやっていけるんじゃない

か？
就職先間違えたかな……

「良い結果が出る、とは限りませんが」

食い下がるねェ。

「ふむ、さっきあったばかりの俺が彼女の才能を信頼しているのに、君はそこまで信頼していないのか？」

「！」

「まぁ、任せるさ。それで結果が出なかったら、それは俺の責任でこの仕事を請け負ってくれた彼女の責任ではない」

「そこまで言われては張り切らないわけにはいきませんね～。稟ちゃん、風はこれを頑張って売ってきますよ～」

そういって程？は町の中へ消えていった。

「我々はさしあたり宿に部屋を取ってきます。風があいった以上、それなりの結果は出るでしょうから」

「んじゃ、俺も一緒に待たせて貰おう」

まぁ、果報は寝て待つさ。

～風　Ｓｉｄｅ～

星ちゃんが掛かっていった男の人は、とてもとても強い人でした。
風にはよく分かりませんが、その剣捌きはとても美しいものでした。
来ている服も異国のもので、とても似合っていました。

「俺は平教経、字はないよ」

何とか争いを収めて自己紹介をしたお兄さん。
傍目であれだけ尋常ではない動きをしていたにも関わらず、息一つ切らしていません。
星ちゃんが無事であったのも、恐らくお兄さんが加減をしていたからだと思いました。

それにしても、字がない、とは珍しいものです。
どこの出身なのか、非常に興味があります。

「……そうだな、ここことは全く違う、近いようで全く遠い世界から来たのさ」

お兄さんは少し困ったような顔で答えてくれました。
流星が墜ちた場所にいた人。どこから来たとははっきり言えない事情を持つ人。
ひょっとするとお兄さんが今噂になっている天の御遣いなのかもしれません。

それであれば、星ちゃんが負けたのもうなずけます。

話をしていると、遠方より軍旗を掲げた一団がやってきました。

「ん～、この辺りの官軍でしょうかね～

見つかると面倒なのでさっさと逃げましょうか～」

「なんか悪いことでもしてんのか？程？？」

……私の名前は程立だと紹介したのですが、何故お兄さんは風が改名しようとしている「程？」という名前で風を呼んだのでしょうか？星ちゃんは名前を間違った程度にしか思っていないようですが、稟ちゃんはちゃんと気がついているようです。

これは後できちんとお話をしないといけませんね～。

ふふっ、お兄さん、風はしつこいですから覚悟してくださいね～

「……なら全面的に任せようか」

町に到着してまずお兄さんが言ったのは、自分が文無しだ、ということでした。

では、ということで、稟ちゃんがお兄さんが持っていた硬貨を好事家に売却してはどうか？そしてそれを風に任せてみてはどうか、という提案に、お兄さんは全権委任すると答えました。

それを疑問に思った稟ちゃんがお兄さんに、何故、と質問をすると、
「口調はともかく、先程から会話の最中に俺がなんたるかを注意深く伺っているし、洞察力に自信があるんだろう。ついでに俺が使う言葉についていち早く突っ込んだりと、注意力も、頭の回転が早いことも分かる。もっと言うとこの口調だと真意が測りにくいし、はっきり言って交渉ごとに向いているだろう。国でいうなら一流の外交官だ。そう言った人間にものを依頼するなら、条件付きではなく自由に手腕を振るって貰う方が大体いい結果が出るものだよ」

と答えていました。
……正直風は自分でも自信がありましたが、一流の外交官だ、と断言される程経験は積んでいません。ですが、こう評価されると嫌な気持ちはしません。むしろ、嬉しい感情が先に立ってしまいます。

「良い結果が出る、とは限りませんが」
確かに、稟ちゃんの言うとおりです。最善の努力が最良の結果をもたらすわけではありません。
結果が出なかった際に、全権委任したことの意味を踏まえた対応がお兄さんに出来るのでしょうか？

「ふむ、さっきあったばかりの俺が彼女の才能を信頼しているのに、君はそこまで信頼していないのか？」
「！」
「まぁ、任せるさ。それで結果が出なかったら、それは俺の責任でこの仕事を請け負ってくれた彼女の責任ではない」

……風の目もまだまだなようですね～。
うまくいかなかった時の責任はすべて自分にある、ですか～。なかなか言えることではありません。遇ったばかりの風を信頼してくれるというのが、才能があるから、というのもよく分からない人です。持ち逃げしたり嘘をついて少なめにお金を渡すとか疑わないのでしょうか？

ですが風はここまで信頼をされて裏切るような人間ではありません。お兄さんの期待と信頼に応えられるように、風も最善を尽くすだけです。

……仕えるべき主、というものがひょっとしたら風にも見つけることが出来たのかも知れませんね～

ただ、それと名前の件とは別問題ですよ？お兄さん。
風は、しつこいんです。いろんな意味で逃がしませんからね～、ふふっ。

蝶の如く～4～

～教経　Ｓｉｄｅ～

あの後しばらくして程？が帰って来た。
結果は……

「お兄さん、風に感謝してくださいね～」
「風……かなり吹っ掛けてきましたね……」
「ですが相手も納得しての取引ですからね～風が悪いわけではありませんよ～」

上々だった。
よく分からんが、しばらくお金に困ることはないだろうというのが稟の言葉だ。

「ああ、感謝しているよ」

いや、実際に価値は分からないが、それでもこの娘が見ず知らずの俺のためにかなり難しい交渉をしてきたのだろうということは分かるからな。

「教経殿？何故頭を撫でているのです？」
「いや、そこに頭があったし、感謝してるんだよ、とね」

気がついたら程？の頭を撫でていたらしい。無意識で撫でているとは恐るべし俺。
程？は撫でられて嬉しそうにしている。
……あれか、いつの間にか俺は「撫でポ」スキルを身につけたって

ことか？

「さて、話の続きをしよう。只その前に聞いておきたいことがあるんだが？」

程？の頭を撫でるのをやめ、進行役を担うであろう戯志才に質問する。

程？は少し残念そうな顔をしていたが、気のせい……だよな。

「なんでしょうか、教経殿」

戯志才が眼鏡を中指で押し上げながら答える。眼鏡萌え属性持ちだからたまらんな、おい。こんな夢を見るなんて、よくやった俺！そこに痺れる！あこがれるぅ！

「さっきから3人はお互いのことを名前と違う形で読んでいるが、渾名か何かか？」

「……真名です」

「真名？」

なんだそりゃ？

「その人の本当の姿を表す名前のことです。神聖なもので、本人の許しがない限りはその名を口にしてはいけません。口にすれば、即座に殺されても文句は言えない程のものです」

「……そりゃとんでもないな」

良かった、言わなくて。渾名で呼ぶほど親しくないから、という理由で遠慮してて本当に良かった……

そして何でそんな面倒くさい設定をしてるんだよ俺。どんな夢だ？

「真名をしらないのですか？」
「知らんよ」
「ふむ……」

そういって戯志才は黙ってしまった。

「では、お兄さん、風からも質問があるのですが」
「ん？どうぞ」
「お兄さん、あそこで何をしていたのですか？あそこには流星が墜ちたと思うのですが、お兄さんもそれを見に来たのですか？」
「流星？」
「はい、私達3人はそれを見ています。おそらく、賊達もそれを見てあそこに行ったのだと思うのですが」

お、復活の戯志才。

「いや、俺は見てないな」
「……ふむ～、そうですか」
「……どうしたのだ、風？」
「……ぐぅ」
「「寝るな！」」
「おぉ！風としたことが陽気に誘われてついつい寝てしまいました」

ついつい俺も突っ込んじまったが、大丈夫かこの程？。

「流星を確認するために行ったあの場所で、まぁ、ああいうことになってしまったわけですが」

少し気まずそうに趙雲が言う。

「だから気にしなさんな。あれはまぁ、俺も悪かったんだろう。今度から周囲には気をつけるさ」

こういうとあれだな、恐喝してたっぽいな。

「……やはり恐喝を？」

「分かってて聞くのは良くないなぁ、趙雲」

「ふふっ、すみませぬな」

艶やかに笑うものだな。男なら凛々しい、女なら妖艶、か？どういうイメージなんだろうな、俺の中の趙雲って。

「ではお兄さんは、天の御遣いなのですか～？」

文字だけ見ると「初めての～」的なものかと突っ込みを入れてみたい。

が、メタなのでやめとく。

「御遣い？」

「都で噂になっているのです。簡単に言うと、流星に乗って御遣いがやってくる。その御遣いが乱世を鎮めるであろう、という予言があったのです」

「へぇ。予言ね。俺は占いは嫌いでね」

「ほう、何故です？」

「剣を交えたお前さんなら俺がどういう人間であるか大体分かるであろうに。

予言なんてものは一種の呪いと同じだ。それあるが為に人はそのことを意識して行動してしまう。「予言があるから、それを意識して

行動する」、当たり前のことで不自然じゃないと思うかも知れないが、予言を意識しているからこそ取れる行動と、予言を意識しているからこそ取れない行動が出てくる。

『今日西の方へ行けば、貴方は死ぬことになる』

なんて言われたら、そんなことあるかと思って西に行っても、びくびく警戒してしまうだろう。それが結果的に大金を持っているように見受けられた場合、殺されてしまう可能性がある。

もちろん、西に行く用事を明日以降に持ち越したりする人間だって出てくるだろう。

そういう意味で、呪いと同じなんだよ。

大体が悲観的なものであるにも理由があるしな。

結果として実現した結果が予言と同じようなものであれば予言通りであるといい、そうでない場合は予言のおかげで回避できたというのさ。そうやって人の意識から本来取れる選択肢を狭めておいて、選択した行動の結果によらず予言のおかげ云々抜かすのが予言屋だ。ただのペテンさ」

「ペテン？」

「ああ、詐術を行う人間の一つの手管、さ。

だから俺は嫌いなんだよ。俺は自由に生きたい。俺は自分の意志で選択する。俺が好きな時に飯を食い、好きな時に酒を喰らい、好きな時に寝て、好きな時に好きな女を抱きたい。選択肢を限定しようとするような奴らは大嫌いだ」

「成る程、共感できる部分ばかりですな」

「まぁ、そうだろうな。あんたも自由人っぽいしな。

……まぁ、結果からいうと、俺は御遣いじゃないと思うよ。品行方正でもないだろうしな」

「教経殿が天の御遣いであるかどうかはひとまずおいておきましょう。私から後１つ質問があります」

「ほい、どうぞ」

「では、教経殿。貴方はこの町に移動する前に風のことを……」

「逃げろ～、賊が来るぞ～！！！！」
「！」

「おいおい、何だよ。ゆっくりしてたってのにゆっくり出来ないじゃないかね」

さっきの今でまた賊かよ。

「……とにかく状況を確認しましょう。星、貴女は教経殿と共に混乱を収めてきてください。風、私と共にこの町の状況の把握をしましょう。教経殿、話はまだありますので後で」

さすが戯志才、落ち着いているねぇ。郭嘉ってこれを超えるのか。
すげぇもんだ。
なにげに俺が勘定に入っているところがまた優秀だねぇ。

「わかった、教経殿、行こう」
「あいよ」
「じゃぁ稟ちゃん、行きましょうか～」

いつになったら落ち着くのかねぇ……

「大変だ～、賊が、賊が来るぞ～！！！今度の賊は１０００人を超えているぞ～！！！！」
「もう駄目だ！賊に逆らわずに金目のものを出して命乞いをした方がいいぞ！！！！」

このオッサン達うるさいな。
というか、最初から逃げ腰でどうするよ。頑張れよ！もっと頑張ってみろよ！
……テンションがおかしい。

「おい、オッサン共」

「なんだあんたは！聞いていなかったのか！？賊が来るぞ。命乞いした方がいいぞ！」
「うるさいなぁ。落ち着けよオッサン。むさ苦しい」

思いっきり殴ってみた。
飛んだ。

スイーツ（笑）
さすが俺の夢補正、おもっくそ殴ったのに死んでない！ビバ！夢！

「な、何しやがる！」
「いや、あまりに取り乱していたからな。あのまま町中を駆け回られても困るだろ。収拾が付かんし」
「確かにそうですな」

クックッと趙雲が笑う。
これが本調子の趙雲か。なかなかかわいいな……じゃなくて。
事態を一旦収拾するならともかく、本格的に収拾するとなると賊共をお掃除しないと駄目だな。

「で、オッサン。今町中にいる青年～壮年で戦えるものはどれくらいいるんだ？」
「５００が精々だ。１０００を超える賊共に渡り合えるような数はいない。大体県令が逃げ出しているんだぞ！」

うわぁ、最低のドカスだな、県令。
まぁ、騒いでるオッサンをうるさいからって殴った俺もなかなかのものだという自負があるけど。

「まぁいい。とりあえずオッサンよ、町中を駆け回ってそいつら集めてくれんかね？広場的な場所に」
「ど、どうするつもりだ？あんた、そもそも何者だ？」

もの凄く不審な顔してるな。まぁ、服装からしてこの世界じゃあり得ない格好してるから仕方がない事かもしれないけど。
なんて説明するかな……まぁ、後で適当に出任せ言えばいいだろ。

「んなこと言ってる場合じゃないだろ?さっさと行った行った」

とりあえずオッサンはおっかなびっくり?振り返り振り返り走っていった。

まぁ、俺に警戒心を抱けるようになったのなら、動転せずに状況を連絡できるようにはなっているだろう。騒ぎ立てる前に長老的な人に報告に行くなりすりゃいいのに。

とりあえず一通り巡って事態の沈静化を図らないとな。まずは俺から話をするまでの間だけでも。

「さて、どのようなお話をなされるおつもりか?」

一通り巡ってある程度町が落ち着きを取り戻したと思える頃、星がそう話しかけてきた。

どうでもいいが、そのニヤニヤやめろ。

「さて、な。俺が大層なことを言ったところで、奴さん達がやる気にならなきゃどうにもならない」
「やる気になったら？」
「俺の夢を実現させるさ。その為にいま夢見てんだろうしな」
「夢？それはどのような？」

馬鹿にするかと思いきや、意外に真面目に聞いてくるな、趙雲。
てか、今夢見てるってネタバレしたんだがやっぱり気付かないか。
そりゃそうだよなぁ。どっちにでも取れるもんな。
でもな星、俺の言う夢は寝てみる夢なんだぜ？

「ああ、夢はでっかく天下統一さ」
「ほう、天下統一」
「で、平和な世の中にして、みんなでヘラヘラしてられる世の中にしたいね。悪ふざけ推奨で」
「その為の足がかり、ということですかな？」
「そうだな。ここの人たちには迷惑だろうがな」
「何故迷惑なのです？賊共から守って貰えるではありませんか」

こういうのは面倒だから嫌なんだが、真面目に話をするかね。

「……その後でつらく長い戦が続くさ。そしてその中で幾人も死んでいく。それでも幸せか？愛する人に死んでこいと言い、喜んで死にに行かせる人間を恨まないなんて無理じゃないかね？」
「しかしそれは必要な犠牲でしょう」
「確かにそうかも知れんが、それでも人の感情は論理では割り切れないものだと俺は思うよ。それに、自分の行動や理念のために人が死ぬという事実を、『必要な犠牲』という便利な言葉で片付けて、その事実について深く考察しないというのは頂けない。

もしこの町の人が俺にきっかけを与えるなら、それはご愁傷様でしたとしか俺には言えない。やっかいなもの抱え込みましたね、とね。

趙雲、人の理想は人を殺すよ。人の理想は、その人とそれに共感する人にとってはとても大切なもので何よりも価値を持つものだけど、それを理解しない人、共有できない人にとっては何の価値もないものだ。それを踏まえた上で、出来るだけ多くの人が納得できる、よりよい選択が出来るといいんだけどね……」

「なかなか考えるものですな。ただの武辺かと思っておりましたのに」

「それはひどいな。これでも人の上に立つべく教育されてきた自負があるんだが？」

「偶にふざけるのをおやめになればらしいのですが」

わかってるんだよそんなこと。

ニヤニヤ復活するな。

～稟　Ｓｉｄｅ～

「１０００人を超える賊、ですか」

「そのようですじゃ」

「ではこの町で戦えそうな人はどの程度いますか～？」

風が質問をする。ここは風に任せよう。交渉ごとに強い、と教経殿もおっしゃっていたし、現にそれを証明するに足る結果を出して見せたのだから。

「……５００人に満たない程度じゃ」
「今すぐに襲ってくるわけではないのでしょう～？」
「そのようですが……」
「では、防備をすれば防げるのではありませんか～？」
「……じゃが県令様は真っ先に逃げてしもうたらしいし、儂らに出来ることは……」

駄目ですね、防備をしようにも完全に戦意をなくしているこの人達を率いて戦うことは無謀としか言いようがない。戦意を持っているならいかようにも出来る自信があるが、残念ながら……

「そうですか～。残念ですね～。せっかく天の御遣い様がいらっしゃるのに」

ちょっと風？

「天の御遣い様ですと？」
「そうですよ～？この町にいらっしゃっていますよ～。風達は御遣い様に仕える軍師なのですよ。都で噂になっている御遣い様……ご存じないわけではありませんよね～」
「おお……！では……！ではこの町は救われると言うことですな！！」

成る程、戦意向上のために教経殿を御遣いに仕立て上げる、ということですか。
それであれば何とかなるかも知れませんね。

「長老！なんか変な格好をした旦那が広場に集まれって……」

変な格好……教経殿、ですか。

何を言うつもりなのでしょうか。

「おお、その方が御遣い様ですな？」

「見慣れない格好をしていたのなら、御遣い様ですね～」

「御遣い？」

「そうじゃ。とにかく全員に連絡をするのじゃ」

「は、はい」

平教経。

星を剣で打ち負かした男性。

男性でありながら、かなりの武人である星を打ち負かすなど、考えられないと思った。

この町に移動する際に、風のことを「程？」と呼んだ男性。

何故風が改名しようとしている名前を知っていて、かつ風をその名前で呼んだのか、非常に怪しいと思った。

私より風のことを正しく評価している節がある男性。

私の方が一緒に旅をし、長い時間風と共にあるというのに、真名を預けて貰っているというのに、教経殿の方が風のことを高く評価していて、そしてその評価の方が正しかった。

物事や人を見抜く目について自信があった。それなのに、私はそこまで深くは見抜けなかった。

なぜ、教経殿は風を正しく評価できたのだろう。
そして、その教経殿の目に、私の才はどのように映っているのだろうか？

正しく評価をして貰えるのだろうか？
それとも、私は自分が思っているほど才能はないのだろうか？

長老と話をして星や教経殿と合流すべく風と道を急いでいると、前方にその捜し人達がいた。
何か話し込んでいるようだ。

「ああ、夢はでっかく天下統一さ」
「ほう、天下統一」
「で、平和な世の中にして、みんなでヘラヘラしてられる世の中にしたいね。悪ふざけ推奨で」

……なかなか面白そうな話をしている様だ。星は気がついているが、

教経殿は気がついていない様だ。どのような価値観を持っているのか、少し様子を見させてもらうことにする。

「その為の足がかり、ということですかな？」

民を自分の立身出世の足がかりとしか考えていないようなら、教経殿は駄目だな。

「そうだな。ここの人たちには迷惑だろうがな」

足がかりとしか思っていないのか！

罵声を浴びせようとした私を風が止める。

なぜ？

「お兄さんは「ここの人に迷惑」と言っていますよ～稟ちゃん。最後まで聞いてみましょう」

……確かにそうだが、もし納得いかない場合は罵声を浴びせることにする。

「何故迷惑なのです？賊共から守って貰えるではありませんか」

さて、どう答えるだろうか。

「……その後でつらく長い戦が続くさ。そしてその中で幾人も死んでいく。それでも幸せか？愛する人に死んでこいと言い、喜んで死にに行かせる人間を恨まないなんて無理じゃないかね？」

「しかしそれは必要な犠牲でしょう」

「確かにそうかも知れんが、それでも人の感情は論理では割り切れないものだと俺は思うよそれに、自分の行動や理念のために人が死ぬという事実を、『必要な犠牲』という便利な言葉で片付けて、そ

の事実について深く考察しないというのは頂けない。
もしこの町の人が俺にきっかけを与えるなら、それはご愁傷様でしたとしか俺には言えない。やっかいなもの抱え込みましたね、とね。
　趙雲、人の理想は人を殺すよ。人の理想は、その人とそれに共感する人にとってはとても大切なもので何よりも価値を持つものだけど、それを理解しない人、共有できない人にとっては何の価値もないものだ。それを踏まえた上で、出来るだけ多くの人が納得できる、よりよい選択が出来るといいんだけどね……」

……どうやら私が思って以上に教経殿は物事を深く考えることが出来る人らしい。
犠牲が出ることを承知の上でなお、天下安寧のための天下統一という戦乱の世を現出しようとしている。今の吐露を聞く限りにおいて、必要な犠牲と自分が背負わなければならない業というものを理解した上で、前進しようとしている。

内心でホッとしている自分がいるのを訝しく思いながら、彼らの方へ歩いていった。

「なかなか考えるものですな。ただの武辺かと思っておりましたのに」
「それはひどいな。これでも人の上に立つべく教育されてきた自負があるんだが？」
「偶にふざけるのをおやめになればらしいのですが」

風が彼を「天の御遣い」に仕立て上げようとしているが、実は本当にそうなのではないか？
自分の才を預けるに足る人間は、曹操殿だけだと思っていたがそうではないのかも知れない。

蝶の如く～5～（前書き）

今回は星のターン。
ずっと星のターン。

なかなか先に進みませんが、おつきあい下さい。

蝶の如く～5～

～星　Ｓｉｄｅ～

これで私の命数も尽きたか、という時に、稟と風がやってきた。

「待ってください。こちらにあなたに危害を加えようとするつもりはありません」

「いやいや、危害を加えられたばかりで、今から危害を加えられるかもしれん所なんだが？」

そう言いながらも、目の前の男は殺気を納めた。

警戒はしているようだが、稟の話を聞いてみよう、ということらしい。

……助かった。正直に言って、私は自分の死は確定的なものであると思っていたから。

「星ちゃん、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ、風。稟も有り難う」

本当に有り難い。声を掛けるならここしかない、というタイミングで介入してくる辺りは流石だ。構えを解いて槍を立てる。

と。

「なかなか扇情的な光景だな」

慌てて胸を両手で隠す。

やはりこの男は……賊か？

「いや、すまん。言ってみただけなんだよ。とりあえず、服を変えるなりなんなりして貰えるとこちらとしても助かる」

申し訳なさそうな顔をしてそっぽを向く。

……照れているのだろうか。意外に初心な男だ。

「ということは、あれか？俺が賊だと思ったってのか？」

「申し訳御座らん」

落ち着いて話をするうちに、どうやら私が早合点をしてしまっていたらしい事が判明した。

「で、いきなり突いてきたけど俺じゃなかったら死んだんじゃないかね？」

いや、殺さないように加減はしたつもりなのだが。
避けた本人が言っているのでひょっとしたらそういうことが起きたかも知れぬ。

「重ね重ね申し訳御座らん」
「どう見てもあっちの世紀末スタイル的な三人の方がむさ苦しい顔をしているし、賊っぽいと思うんだがなぁ……『新鮮な水だぁ～』とか『ヒャッハー』とか言いそうだったし……モヒカンじゃなかったけれども……」
「申し訳……世紀末スタイル？」
？よく分からない言葉を使う人だ。

「ああ、いい、こっちの話だよ」

そういって話を切られた。

風がすべてを無かったことにしようとしたが、男は素早く突っ込みを入れていた。
……なかなか面白い御仁のようだ。
いつまでもこうしているわけにも行かないので、自己紹介を互いにすることを提案する。

「とりあえず、自己紹介から始めませぬか。私は姓名を趙雲、字を子龍と申すもの」
「風は程立、字を仲徳といいます～」
「私は戯志才と申します」

「俺は平教経、字はないよ」

字がない、とはまた珍しい御仁だ。
真名がない、という人間が存在する事は知っている。大体が複雑な家庭事情によるものだ。が、字というものは恩人などに付けて貰うことも多く、すべての人間が持っていると言っても過言ではない。
ひょっとすると、彼は漢の民ではないのかも知れない。
たとえば、烏桓の人間には字がない。そのように、漢以外の文化を有する国から旅してきたのだろう。

そう考えていると、稟が彼に出身を質していた。

「いや、なんというか、俺は……」

少し言いにくそうに、どう説明したものかと考えているようだ。

「……そうだな、ここことは全く違う、近いようで全く遠い世界から来たのさ」

……具体的な地名でも国名でもなく、漠然としたものの言い方をしている。
何故だろう？言いよどむ事情が彼に存在する、と考えた方がしっくり来る。

刃を交えて感じた彼の人間性からすると、もっと歯切れの良い回答が帰ってくるものだと思っていた。剣は巧緻を極めるが詐術に満ちたものではなく、ただ真っ直ぐに駆け引きをしていた。ああいった剣を振るえるものが、我々に対して嘘を以て回答することをするはずはない。

であればこそ、何らかの事情がある、と見ているのだが。
と、あることに今更にして気がつく。

「その服装……我々のものとは全く違いますな」

彼が羽織っている外套や衣服は、見たこともないようなものであった。
外套はその素材が。衣服はその意匠が。
そういえば彼の振るっていた剣もまた見たことがないものであった。
無論、その剣術も。

流星が墜ちた場所にいた、見たこともないような格好をし、見たこともないような剣を使い、見たこともないような剣術を使う男。男性でありながらこの私を打ち負かすほどの武を持つ男。
この平教経という男性は……噂になっている『天の御使い』ではないのか。

「もしかしたら、お兄さんは……」

風も私と同じ事を考えているようだ。
その言葉に、彼は眉をひそめて不満そうな顔をしている。
どうやら間違いではないらしい、と勝手に当たりを付ける。

すばらしい武人であることは確かだ。
が、しかしそれだけで予言にあるようにこの乱世を鎮めることが出来るのだろうか。

町に到着してまず教経殿が言ったのは、自分が持っている紙と硬貨がお金として使用できるのか？ということであった。
紙はともかく、硬貨には見事な意匠が施してあるが、漢では使うことは出来ないだろう。何となくそのことを感じた教経殿は、自分が文無しだ、ということをはっきり言った。

……迷惑を掛けてしまったのだ。そのくらいの世話は焼かせて貰おう。

「あぁ、それであれば私が貴殿の分を払いましょう。迷惑をかけましたからな」

そういうと、教経殿は金を借りるのも貰うのも嫌だ、と答えてきた。
この状況で何ともまぁ、頑固なお人ではある。
が、好意を断られたにも関わらず、私は何となく納得してしまって

いた。むしろ清々しささえ感じた。こういうお人なのだろう。自分のことは自分でやる、他人には迷惑を掛けられない、か。

そこで稟が教経殿が持っていた硬貨を好事家に売却してはどうか？そしてそれを風に任せてみてはどうか、と提案すると、教経殿は全権委任すると回答した。

なかなかに気宇が大きな御仁のようだ。
出遭ったばかりの風に、そのような大事を簡単に託している。
見れば、稟も意外そうな顔をしていた。

「宜しいのですか？言い出した私が言うのもおかしな話ですが、なぜ全権委任するのですか？」
「口調はともかく、先程から会話の最中に俺がなんたるかを注意深く伺っているし、洞察力に自信があるんだろう。ついでに俺が使う言葉についていち早く突っ込んだりと、注意力も、頭の回転が早いことも分かる。もっと言うとこの口調だと真意が測りにくいし、はっきり言って交渉ごとに向いているだろう。国でいうなら一流の外交官だ。そう言った人間にものを依頼するなら、条件付きではなく自由に手腕を振るって貰う方が大体いい結果が出るものだよ」

……まさか風の才を見込んで頼んでいるとは思っても見なかった。
それも、一流の外交官という評価。
風を見るとまんざらでもない様子だ。
続けざまに稟が質問する。

「良い結果が出る、とは限りませんが」

そう、その通りだ。望むほどの結果が出なかった場合、教経殿はどうするつもりなのか。

「まぁ、任せるさ。それで結果が出なかったら、それは俺の責任でこの仕事を請け負ってくれた彼女の責任ではない」

……風は嬉しそうに教経殿を見つめている。
まさか、惚れたか？後でからかってみるとしよう。
普段があだからからかう甲斐があるだろう。あれで風は意外に純真だからな。ククッ。

それにしても、なかなか見事な心構えであると言える。
人の上に立つものというのは、こうでなくてはならないという私の理想をそのまま体現したかのような言葉。

俄然興味が沸いてきた。この御仁は今の世の中をどう思っているのだろうか。
何とも思っていないのだろうか。それとも、世を憂い、何かしらの行動を起こそうとしているのだろうか。

それ以前の問題だが、彼の為人はどういったものなのだろう。

宿で落ち着き、風が教経殿は御遣いではないのか、という質問をした時の回答が面白かった。

「御遣い？」

「都で噂になっているのです。簡単に言うと、流星に乗って御遣いがやってくる。

その御遣いが乱世を鎮めるであろう、という予言があったのです」

「へぇ。予言ね。俺は占いは嫌いでね」

心底嫌そうな顔をして言う。その理由が知りたいものだ。

「ほう、何故です？」

「剣を交えたお前さんなら俺がどういう人間であるか大体分かるであろうに。

予言なんてものは一種の呪いと同じだ。それあるが為に人はそのことを意識して行動してしまう。「予言があるから、それを意識して行動する」、当たり前のことで不自然じゃないと思うかも知れないが、予言を意識しているからこそ取れる行動と、予言を意識しているからこそ取れない行動が出てくる。

『今日西の方へ行けば、貴方は死ぬことになる』

なんて言われたら、そんなことあるかと思って西に行っても、びくびく警戒してしまうだろう。それが結果的に大金を持っているよう

に見受けられた場合、殺されてしまう可能性がある。
もちろん、西に行く用事を明日以降に持ち越したりする人間だって出てくるだろう。
そういう意味で、呪いと同じなんだよ。
大体が悲観的なものであるにも理由があるしな。結果として実現した結果が予言と同じようなものであれば予言通りであるといい、そうでない場合は予言のおかげで回避できたというのさ。そうやって人の意識から本来取れる選択肢を狭めておいて、選択した行動の結果によらず予言のおかげ云々抜かすのが予言屋だ。ただのペテンさ」
「ペテン？」
「ああ、詐術を行う人間の一つの手管、さ。
だから俺は嫌いなんだよ。俺は自由に生きたい。俺は自分の意志で選択する。俺が好きな時に飯を食い、好きな時に酒を喰らい、好きな時に寝て、好きな時に好きな女を抱きたい。選択肢を限定しようとするような奴らは大嫌いだ」

成る程、かなりひねくれた御仁のようだ。
自分がしたいようにしたいから嫌いだ、と言っている様に感じられるが、それは最後の言葉がすべてを覆い隠しているからに過ぎない。彼が尊重しているのは、「個人が自分の意志で自分の行動を選択すること」だ。照れ隠しなのか何なのか、彼は素直にそれを伝えようとしない。
そういった言動は他人に誤解を与えることを分かっていてなお、そういう言動を取る辺り、私達は似たもの同士なのかもしれない。

そのまま話をしていると、外から騒がしい、物騒な声が聞こえてきた。
稟に言われ、事態を収拾するために表に出ると男達が騒いでいた。

「大変だ～、賊が、賊が来るぞ～！！！今度の賊は１０００人を超えているぞ～！！！！」
「もう駄目だ！賊に逆らわずに金目のものを出して命乞いをした方がいいぞ！！！！」

全く騒々しい。
そう思っていると、騒ぐ男達のうち一人を教経殿が殴り飛ばす。
……教経殿、何故貴方は嬉しそうにニヤニヤ笑っているのだ？
まさかおふざけで殴った、などと言うことはなかろうな……

「いや、あまりに取り乱していたからな。あのまま町中を駆け回られても困るだろ。収拾が付かんし」

なるほど、それは一理ありますが教経殿、笑った顔のままでは説得

力がありませんな。
どうやら本当に悪巫山戯で殴ってみたというのが正解らしいな。
この御仁が私と似ているのはどうやら間違いない様だ。そのことに思わず笑いがこみ上げてくる。

「確かにそうですな」

笑いながらそう答えておいた。
すると教経殿は私の顔を惚けたように見ていた。……ああいう顔で見つめられると少々恥ずかしい。私を打ち倒してなお余力をもてるほどの武人で、かつ人の上に立つ器量を有するであろう御仁。それが女性でなく、男性であり、私と似た性格をしているから私について誤らずに理解してくれそうな御仁。
異性としての魅力がないと言えば嘘になる。
刃を交えて、彼は私のことをどう感じたのだろう。

そう思って教経殿をみていると、何もなかったかのように話を戻していた。
何ともまぁ、つれない御仁だ。

教経殿は、広場に戦えそうなものを集めるように言って男を行かせた。
彼は賊を討伐しようとしている。それは私にも分かった。
その後、二人で一旦落ち着くように、と町の中を一巡して説き、混乱を沈静化していった。

町を巡って感じたことは、戦意が全くない、ということだ。
これでは戦うという話にはならないだろう。我々が一騎当千の武と神算鬼謀の智を有していても、兵たる民に戦意がなければどうにもならない。
しかし、同時に面白いことになっている、とも感じている。
彼はこの状況でどのような選択をし、どのような将来を紡ぎ出すつもりなのだろうか？

「さて、どのようなお話をなされるおつもりか？」

我知らず笑っているまま、そう質問してみる。

「さて、な。俺が大層なことを言ったところで、奴さん達がやる気にならなきゃどうにもならない」

流石に感じるべき事は感じていたようで、教経殿はそう答えた。
では、彼らがやる気になったらどうするつもりなのだろうか？賊を

討伐する、それで終わるのか？それを聞いてみる。

「やる気になったら？」

「俺の夢を実現させるさ。その為にいま夢見てんだろうしな」

夢、と言った。この御仁はこの乱世において夢を抱いている！この荒廃した世界に希望を見いだしている！

「夢？それはどのような？」

思わず、聞いてしまう。

「ああ、夢はでっかく天下統一さ」

「ほう、天下統一」

まさか、『天下統一』という言葉が出るとは思っても見なかった。理想を語るものだと思ったが、その前の現実的な、ある意味で非情な道を口の端に乗せるとは。

「で、平和な世の中にして、みんなでヘラヘラしてられる世の中にしたいね。悪ふざけ推奨で」

軽口を叩くが、恐らくそれは照れ隠しなのだろう。私達は似ているのだ、私の目はごまかされませんぞ？

そうなると、この賊共の争乱を切っ掛けにして、天下統一に乗り出す、ということだろうか。見ると、どうやら稟と風もこちらの話を伺っているようだ。このまま話をした方がいいだろう。

「その為の足がかり、ということですかな？」

「そうだな。ここの人たちには迷惑だろうがな」

やはりそのつもりのようだが、迷惑とはどういう事だろうか。
稟が声を掛けようとしているが、風が止めたようだ。

「何故迷惑なのです？賊共から守って貰えるではありませんか」

そう、民にとって強力な指導力を持つ君主を頂くことは良いことはあっても悪いことはないはずだ。少なくともその辺りにいる有象無象の県令などより、教経殿の方が優れた資質を持っていることはまず間違いないだろう。
戦における将としてどうかはまだ分からないが、その辺りは周囲のものが補えば事足りることだ。風の一件から考えて、下のものに自分の不足を補って貰うことを全く恥ずかしいとは思わないらしいし……
と、ここまで考えて彼を主にするかどうかかなり現実的に考えている自分を自覚した。

まだ、まだ早いだろう。彼という人間がある程度の器を有する事は分かったが、それと我が主たる器があるかはまた別物なのだから。
教経殿は少し考えてから言葉を紡ぎ出す。

「……その後でつらく長い戦が続くさ。そしてその中で幾人も死んでいく。それでも幸せか？愛する人に死んでこいと言い、喜んで死にに行かせる人間を恨まないなんて無理じゃないかね？」

まず民の幸せを考えている様だ。これであれば……
しかし、教経殿が言っていることは、少し民に思いを馳せすぎだと思う。偉大な事績を為すには必要な犠牲を伴うものだ。その点を問いただす。

「しかしそれは必要な犠牲でしょう」

得た回答は私にとっては衝撃的なものだった。

「確かにそうかも知れんが、それでも人の感情は論理では割り切れないものだと俺は思うよ。それに、自分の行動や理念のために人が死ぬという事実を、『必要な犠牲』という便利な言葉で片付けて、その事実について深く考察しないというのは頂けない。もしこの町の人が俺にきっかけを与えるなら、それはご愁傷様でしたとしか俺には言えない。やっかいなもの抱え込みましたね、とね。

趙雲、人の理想は人を殺すよ。人の理想は、その人とそれに共感する人にとってはとても大切なもので何よりも価値を持つものだけど、それを理解しない人、共有できない人にとっては何の価値もないものだ。それを踏まえた上で、出来るだけ多くの人が納得できる、よりよい選択が出来るといいんだけどね……」

……人の理想は人を殺す、か。

それにしても、何という顔をして何ということを語る人なのだろう。これは些か反則ではないのか。そのような切ない顔をされて、こういう事を語られたら……その、何というか、とにかくずるい。

「なかなか考えるものですな。ただの武辺かと思っておりましたのに」

見とれていたことが少々気恥ずかしく、思ってもいなかったことを言っていた。

これは少し失敗したかもしれぬ。そう思っていると、

「それはひどいな。これでも人の上に立つべく教育されてきた自負

があるんだが？」

どうやら痛痒にも感じていないらしい。やはり私のことは理解して貰っている様だ。

そのことを何よりも嬉しく感じている自分を発見し、私は遂に仕えるべき主を見いだした気持ちでいた。

「偶にふざけるのをおやめになればらしいのですが」

そういっても彼は苦笑いするだけだった。

蝶の如く～6～（前書き）

まだ戦は始まらない・・・
もうちょっと掛かると思いますが、お付き合い頂けると幸いです。

蝶の如く～6～

～教経　Ｓｉｄｅ～

「教経殿」

趙雲と少々恥ずかしい話をしていると、戯志才と程?が帰って来た。
戯志才は何とも微妙な顔をしている。程?に至っては嬉しそうな顔をしてこちらを見ている。
……まさかこいつら、さっきの話を聞いていたんじゃ有るまいな……
そう思って趙雲を見やると、ククッっと笑っていた。

……分かってるよ、柄じゃないって。だからそんな態度取るな。恥ずかしいだろうが。

「……首尾は?」
「上々ですよ～」
「上々?」

この町の人間には全く戦意がなかった。それはこの二人も感じているはずだ。
それでいてなお上々と言い切る何かが程?にはあるらしい。

「……教経殿、教経殿には天の御使いになって頂く必要があります」
「はぁ?」
「風が先程この町の長老格の老人に、貴方が天の御使いである、と断言したのです」
「……ふ、そういうことか」

趙雲も得心したようだ。無論俺も。そこまで鈍くは出来ていない。

「演じろ、ということだな。偉大な天の御使い様とやらを」
「はい、そういうことです」
「どうやら賊さん達はまだ周辺でこちらの様子を窺っているだけのようですので、あと二日ほどは時間があると思いますよ～」

どこからその二日っていう猶予をはじき出したのか分からんが、程?様のお言葉だ。
ここは信頼して、それを前提に動いた方がいいだろう。

「まぁいい、とりあえず広場に移動しようか」
「それが宜しいでしょうな。戦うにしても、やる気にさせなければ勝てるものも勝てません。期待して宜しいのでしょう?」

趙雲がいたずらっぽくこちらをみて笑う。
とりあえずむかついたので頭を撫でながら答えてやる。

「まぁ、期待に添えるかどうかは分からんが思っていることを伝えるだけだ。結果は天のみぞ知るってね」
「む～……お兄さん、風も期待していますからね～」

程?は何故か不機嫌そうだ。なぜ自分が期待している、とアピールする必要があるのか。
とりあえず頭を撫でておこう。

「ふふ～」
「むっ」

程?は嬉しそうに笑っている。どうやら正解だったようだ。が、今

度は趙雲が……ええぃ、めんどくさい。

「では、行きましょうか」

戯志才は相変わらずクールだねぇ。クール＋眼鏡……萌えるぜ。

広場に行くと、結構な数の人間がいた。そして、混乱はしていないがざわめいてはいた。

これだけの人間がいる前で今から話をすると思うと、なかなか緊張してしまうな。

高校生の時分に全校集会でよく挨拶をさせられていたが、あの時とは掛かっているものも何もかもが異なるから仕方がないことだと自

分に言い聞かせる。
俺が一段高い場所に立っても、民達はざわめいていた。

「皆、聞いてほしい」

ざわついていた民達が一斉にこちらを見る。
……ちょっと怖いぜ、あんたら。

「俺は天の御遣い、平教経だ。この度、この町を賊が襲おうとしているという話を聞いて皆の力になるために自分に出来ることをしようと思っている」
「助けてくれるんじゃないのかよ！」

成る程、天の御遣い様は偉大だな。一声ですべての人間を助けることが出来ると思われているらしい。

「なにを馬鹿なことを」
「なんだと！」
「この町には自分の大切なものを守るのに、すべて他人に任せないと守れない腑抜けばかりと見える」

こういうのはまず怒らせて、言いたいことを言わせてみるに限るな。

「うるさいぞ！テメエに何が分かるんだよ！大体どうやって俺たちが賊からこの町を守るんだ！県令だって逃げ出したんだぞ！」
「そうだそうだ！」
「大体天の御使いなんてもんに何が出来るってんだよ！」
「ふざけたこと言っているとぶっ殺すぞ！」

仕掛けは上々。いい具合にＦｉｓｈ！できた。

さて、後は話の方向を自力で何とかする方に持って行くだけだな。

「貴様らが言っているのは、逃げるための口実に過ぎないだろうが。守りたいものがそこにあるのに、貴様らはいつ来るかも知れない他人をずっと待ち続けるのか？
おい、オッサン。
あんたの子供が目の前で井戸で溺れている。あんたはいつ来るかも分からない他人を待って、自分の子供にただ頑張れと声を掛けることしかしない腐れ野郎なのか！」

「なんだと！」

「どうなんだ、お前は腑抜けなのか？」

「ふざけるな！なんとしてでも自分で助けるに決まっているだろうが！」

「では改めて訊くがな、オッサンよ。自分の子供の危急を自分で助ける気概を持っているのに、何故今回だけ自力で何とかしようとしない？」

「そんなこと言ったって、具体的にどうしたらいいのかなんて分からない！
本来俺たちがこういう目に遭わないために県令がいて、税を納めているんだ！
その税金で立派な将軍なりなんなりを養っていて、有事の際に俺たちを率いて戦ってくれるはずだろうが！
そういった存在がいないのが問題なんだよ！だから逃げるしかないんだ！」

オッサン、全くいいこと言ってくれるよ。取っつきやすくなった。
思わず笑みがこぼれる。

「……話を聞いていなかったのか？その戦うための将を御遣いである俺とその配下でやろうというのだ」

広場で民が隣のものと話をし始める。少しざわめいているが嫌な感じはしない。
ここが勝負所だろう、こいつらまとめて釣り上げてやるさ。

「聞け、民よ！
我が後ろに控えているもの達、一人は一騎当千の武を持つ武人でありこの国で五指に入る英傑だ！その横にいる二人は、神算鬼謀、奇計百出と言って良い程優秀な、これまたこの国で五指に入る英傑だ！
そしてここに天の御使いである俺がいる！
貴様らの勝利は約束されているようなものではないか！

聞け！民よ！
貴様らには天がついている！
たかが匪賊共に後れを取るような私ではない！
私を信じ、武器を手にするのだ！皆の手で、貴様ら自身の手で大切なものを守ってこそ、人が人として人らしく生きていける第一歩となるだろう！
立てよ民人！
貴様らが貴様ら自身の手で自らの安寧を勝ち取った時、私は天に召されるであろう！」

最後は何となくジーク的な何かになっている気がする。
逆襲もしそうな感じですね、わかります。
どこかで聞いたことのある台詞の羅列に、民達は静まってしまった。
これは……やり過ぎたのか？

「「「「「……うぉー！！！！！！」」」」」
「「「「「「御遣い様～！！！俺たちついていきますぜ！！！！！」」」」」

……うるさい。めちゃ盛り上がってるな。
むさ苦しいったらありゃしない。まぁ、女性がこのテンションで同じ事叫ぶより遙かにましな気がするけど。
が、悪い気はしないな。

「……ご苦労様でした」
「お兄さん、かなり慣れた感じでしたね～」
「ふむ、人の上に立つべく教育を受けてきた、というのは本当のことのようですな」
「かなりやっちまった感があるが、戦意としてはこれで問題ないだろう。後はどう戦うか、だな」
「そうですね。その辺りの方針を決めるために、一旦宿で話し合いを持ちましょう」

まぁ、戯志才と程?がいるんだ。策の方は問題なし。
将も俺と趙雲がいる。民に持たせる武器を槍にすれば、俺にも考えがあるから現場も問題にはならんだろう。
あとは、どうやって士気を維持しつつ戦を展開するか、だな。

～稟　Ｓｉｄｅ～

「皆、聞いてほしい」

教経殿は静かに語り始める。
声を張り上げているわけではないが、その声は万人に染み渡るような声だ。
その声には、人主たる器を持つ人間だけがもつ、圧倒的な存在感はない。
だが、それを無視することも叶わぬ、不思議な声だ。

「俺は天の御遣い、平教経だ。この度、この町を賊が襲おうとしているという話を聞いて皆の力になるために自分に出来ることをしようと思っている」
「助けてくれるんじゃないのかよ！」

そう民が応じる。確かに、風の言葉が民に行き渡っているなら、無条件にすべての人間を救ってくれると考えるのも無理はないだろう。

「なにを馬鹿なことを」

「なんだと！」

「この町には自分の大切なものを守るのに、すべて他人に任せないと守れない腑抜けばかりと見える」

その言葉を聞いて、民は激高している。

どういうつもりかと教経殿を後ろから見ているが、どうやら落ち着いているようだ。これは彼の計算らしい。交渉ごとには長けていない、と言っていたが、なかなかどうして長けている。

「貴様らが言っているのは、逃げるための口実に過ぎないだろうが。守りたいものがそこにあるのに、貴様らはいつ来るかも知れない他人をずっと待ち続けるのか？

おい、オッサン。

あんたの子供が目の前で井戸で溺れている。あんたはいつ来るかも分からない他人を待って、自分の子供にただ頑張れと声を掛けることしかしない腐れ野郎なのか！」

まず身近で、自分一人の力で何とかなりそうな大切なものの危機について説いている。すべての人間が自分に置き換えて考えることが出来るという点で、この話は良くできている。

そう判断する。

「なんだと！」

「どうなんだ、お前は腑抜けなのか？」

「ふざけるな！なんとしてでも自分で助けるに決まっているだろう

が！」

「では改めて訊くがな、オッサンよ。自分の子供の危急を自分で助ける気概を持っているのに、何故今回だけ自力で何とかしようとしない？」

問題点がなんなのか、それを民に理解させようとしている。

……論理的で、かつ感情的にも理解しやすい状況と、今回の出来事を結びつけて考えさせる。

そう簡単にできることではないだろう。彼はこういった状況を何度か経験しているのだろうか。

「そんなこと言ったって、具体的にどうしたらいいのかなんて分からない！

本来俺たちがこういう目に遭わないために県令がいて、税を納めているんだ！

その税金で立派な将軍なりなんなりを養っていて、有事の際に俺たちを率いて戦ってくれるはずだろうが！

そういった存在がいないのが問題なんだよ！だから逃げるしかないんだ！」

その言葉に、多くの民がうなずいている。

彼の思い通りに話が進んでいるのだろう。彼は笑みを浮かべる余裕さえある。

さながら、魚が餌に食いついたことを喜ぶ太公望のようだ。

「……話を聞いていなかったのか？その戦うための将を御遣いである俺とその配下でやろうというのだ」

上手い。正直に感心する。

最初から彼はこの方向で話をするつもりだったのだ。

自分では理詰めすぎる話になり、民に現状の問題点を認識させることは出来ても結局納得させることは出来なかったかも知れない。ここで一気に声の質が変わった。時代の覇者たるにたる、威厳に満ちた声。

こういう声を持つ人間に、私は未だ遇ったことがない。

「聞け、民よ！

我が後ろに控えているもの達、一人は一騎当千の武を持つ武人でありこの国で五指に入る英傑だ！その横にいる二人は、神算鬼謀、奇計百出と言って良い程優秀な、これまたこの国で五指に入る英傑だ！そしてここに天の御使いである俺がいる！

貴様らの勝利は約束されているようなものではないか！

聞け！民よ！

貴様らには天がついている！

たかが匪賊共に後れを取るような私ではない！

私を信じ、武器を手にするのだ！皆の手で、貴様ら自身の手で大切なものを守ってこそ、人が人として人らしく生きていける第一歩となるだろう！

立てよ民人！

貴様らが貴様ら自身の手で自らの安寧を勝ち取った時、私は天に召されるであろう！」

……神算鬼謀、奇計百出。

どちらがどちらの評価かは分からないが、それはどちらでも構わない。

教経殿の目に、私はそのような、この国で五指に入るような英傑として映っている！

そのことに感動を覚える。

私は自分の才能に自信がある。事戦場における軍略に関しては、風

にも勝ると自負しているが、この国で五指に入るような人間であるとは思っていなかった。

それをこの人は！

何という人なのだろうか。風や星がこの人に惹かれていることは気付いていたが、ここまで信頼をされて初めて、彼女たちの気持ちというものが自分も理解できた気がする。

人はよく自分を知るものに仕える、と言うのが理想の君臣論であるが、彼はまさしく理想の君主像を私の目の前に提示して見せている。

この民の士気の高さはどうだろう。

人を惹き付け、導き、決して信念を曲げず、困難に負けない志操を持ち続ける。

彼は英雄と呼ぶにふさわしい人なのかも知れない。

～教経　Ｓｉｄｅ～

「今後の話をする前に、一つ教経殿に謝らなければならないことがあります」

宿の一室に入った瞬間、戯志才がそう言いだした。
謝らなければならないこと……なんだ？

「なんだ？戯志才」
「その、戯志才という名前は偽名なのです」
「ふぅん」
「な……それだけですか？」
「物騒な世の中だ。偽名を使う人間だっているだろうし、それを明かしてくれたって事は俺のことを信頼してくれた証だろう。喜びこそすれ、責める所以はないな」

そういうと、戯志才は頬を赤く染めてうつむいた。
……やべぇ、クーデレか、最高じゃないか！

「では改めまして。私は姓を郭、名を嘉、字を奉孝。真名は稟と申します」
「稟！？」
「稟ちゃん！？」

成る程、郭嘉その人だったのか。こりゃ神算鬼謀ってのは間違いじ

ゃないな。
一層安心度が増した。というか。

「なぁ、郭嘉。真名ってのは神聖なものなんだろ？俺に教えるって事は、そう呼んでもいいって事なのか？」
「構いません。これから共に賊と戦う同志に、真名を預けない、と言うことの方が問題だと思います」
「まぁ、それもそうか」

「では私も改めて自己紹介致しますかな。姓を趙、名を雲、字を子龍、真名を星といいます。これから宜しくお願い致しますぞ、主よ」
「風も自己紹介しますね～
姓を程、名を立、字を仲徳。真名は風。ですが本日より名前を『？』に改めます。星ちゃんと同じく、これから宜しくお願い致しますね～、お兄さん」

なんか物騒な言葉が聞こえた気がするなぁ、おい。

「主ってなんだ？」
「おお、主よ。天下の五指に入る武人が主にお仕えすると言っているのに何という顔をされているのですか。嬉しい時は笑うものですぞ？」

そう言いながら趙雲は俺の顔を引っ張りやがる。

「ぷっ、主、なかなか傑作な顔をされていますな」
「ひゃめろ、ひょううん」
「星、です。真名を預けた以上、呼んで頂かなければ困ります」
「はかったよ、ひぇい」

「宜しい」

ったく、いてぇじぇねぇか。

「で、いいのかよ？」

「何がで御座いますかな？」

いや、趙雲って劉備に仕えるんじゃなかったか？程？に至っては曹操だろうに。

「……俺に仕えるってことだが、本当にそれでいいのか？見たとおり、俺は結構いい加減な男だ。世の英雄たる資格もないように自分では思っているんだが」

「風はそんなことは思いませんよ～。先程の話といい、星ちゃんと話していた夢の話といい、風がお仕えするにふさわしい人物であると思っていますので～。お兄さんはもっと自分に自信を持ってもいいと思いますよ～？」

「そう言うがな、程？」

「風、です」

「いや、て……」

「風、ですよ～？お兄さん」

「……風」

「はい～」

なんて顔で笑いやがるよ。何も言い返せないじゃないか。

「はぁ、まぁ、いいや」

「それで、稟ちゃんはお兄さんにお仕えしないのですか～？」

「……私も教経殿にお仕えしようと思います。人主たる器であることを、この目で見させて頂きましたから」

「郭……稟もか」

一瞬すごい目をしたなこの娘。ヤンデレの気でもあるのか……？それは怖いな。

刺されないように気をつけないとな。

「じゃぁ、俺も改めて。姓は平、名は教経、字はないし真名もない。好きに呼んでくれて構わない」

「では、教経殿、と」

「お兄さんはお兄さんですね～」

「主、夜伽の際は教経と呼ばせて頂きましょうかな」

なかなか過激だなぁ、おい、星。夜伽って……かわいいからそれもありかな。

「おやおや、既に主殿は私との情事に思いを馳せておられるようだ」

「よ、夜伽……あられもない星の姿に発憤した教経殿がそのままその怒張を星に押しつけ……ブーッ」

なっ、なんだこの鼻血のアーチは！

虹が……嫌な虹だな……

「はいはい稟ちゃん、トントンしましょうね～。トントン」

「フガフガ」

やたら手慣れた対応だな。

「……これ、いつもなのか？」

「そうですな。稟は想像力が豊かですので」

そういう問題じゃないだろうこれ。一見して致死量の血が出ているように見えるんだが何故生きてる……

ああ、夢だからか。

だけど、これからのことを考えると能力面で全く文句が出ない人間が自分に仕えてくれるって言ってるのは正直有り難いな。何にせよ、賊共を殲滅してからなんだが。

この夢もなかなか楽しくなってきたじゃないか。

蝶の如く～7～（前書き）

睡眠時間削って何やってるんだろう・・・
とりあえず、更新です。

蝶の如く～7～

～教経　Ｓｉｄｅ～

「さてお兄さん、風から質問があります」

稟も落ち着いたところで風が切り出してくる。

「ああ。何だ」

「お兄さんは、何故風の名前を程?と呼んだのですか?」

「ん?」

どっかで失敗でもしたか?

「惚けても無駄ですよ～お兄さん。この町に来る前に、お兄さんは風のことを『程?』と呼んだのですから」

「間違い有りません。私も、後で教経殿にあると言った話はその話でした」

「そう言えばそうでしたな」

……どうやら失敗していたようだ。

ごまかすことも出来るが、俺に仕えると言っている三人に嘘をつくのは気が引ける。

「……今から言うことは嘘でも何でもない。他言は無用だ。……それと、誓って言うが俺は正気だ」

「はい」

これを言った時にどうなるのかわからないが、とりあえず話をして

みる事にした。
これは夢であろうと言うこと。
俺は彼女たちの生きているこの時代よりも、ずっと将来の時代で生きている人間であると言うこと。だからこそ、彼女たちの名前は知っていたのだ、ということ。
程？の改名についても、当然理由を知っているということ。

「流石に夢の中の存在だ、と言われては納得がいきませんな」

と、星。
そりゃそうだろう、妄想の産物だってことだからな。

「だがなぁ、証明するにしてもなぁ……」
「お兄さん、お兄さんが勝手にそう考えているだけではないのですか？」
「いや、それはないだろうさ。これが時を遡ったと言う状況だとしても、流石に知っている武将が全員女性のワンダーランドが実際にかつてあった、というのは非現実的すぎる。それはあり得ないだろう」
「……ここが教経殿の夢の世界であるかどうか、はひとまずおいておきましょう」

稟は落ち着いているなぁとしみじみ感じる。出来る人間ってのはこう、雰囲気が違うねぇ。

「ですが、教経殿が未来の人間である、ということも証明できていないと思うのですが？」

ん～。どうするべきか。証明できるものって……携帯もないしな。
ライターもない。何か文明の利器的なものが有れば一発だと思うが。

「この衣装はどうだ？この時代では無いと思うが」
「確かにそうかも知れませんが、それでもどこかで作られたものである、と言われると技術的に無理なものではないと思います。外套の素材はよく調べないと分かりませんが」
むぅ、流石郭嘉だ。論理的だね。
何か無いのか、証明できるものは。夢なんだから都合のいいものがあってしかるべきだろうが、俺！
「あ！」
「なんですかな、主よ」
「そう言えばあの賊の三人組から取り上げた書物に、この時代の説明がしてあったんだよ！俺が生きている時代より１８００年昔である、とね」
「ほう、その書物はどこに？」
「ここにある。これを見ればきちんと理解できるはずだ」
そう言って太平要術の書を懐から取り出して渡す。
これで理解はして貰えるだろう。
「……主よ、この書はすばらしいものです。が、主の言ったようなことは述べられていませんが」
すばらしいもの？何が？壺か？
「どういうこと？」
「槍術について詳細に記載してありますな、私が改良したいと考えていた槍術について、事細かに説明がしてあります」
「またまた、星、嘘ばっかり」

そう言って中身を見ると、確かにあの時のままだ。
この世界は夢じゃない、後漢の時代、１８００年昔、男にとっては夢の世界。

「星、貴女は何を言っているのです？」

稟から突っ込みが入る。流石稟、ふざけないで真面目に話をしてくれてようとしている。

「これは孫子が記述したと言われている兵書十三編について、詳細に記載してある書物ではないですか」
「はぁ？」

駄目だ、稟もふざけている。
……そうだ、風だ！それでも風さんならやってくれる！

「星ちゃん、稟ちゃん。何を言っているのですか～。これは太公望と召公の、政に関する会話を記述した、歴史的にも価値の高い書物ではないですか～」

……みんな思い思いに違うことを言っているようだ。
マジックマッシュルームを全員で食べたのか？
いや、そもそもキノコ的なものを食べてない気がするからそれはないか。

「二人とも何を言っているのだ！ここを見ろここを！槍を如何にして己が四肢の如くに振るうのか、その極意が記載して有るではないか！これだ、これを知りたかったのだ！」
「星、馬鹿なことを。そこには孫子十三編の虚実篇が記述してある

ではないですか！」
「みんなお馬鹿なことを言っていますね～そこは召公が太公望に小義と大義の差とそれを取り違えた時に起こる悲劇について語っている箇所ではありませんか～」
「いやいや、だからこの世界は夢じゃないって書いてあるじゃん」
全く以て収拾がつかない状態だ。

「ふぅ～、とりあえず、全員巫山戯ているわけではないようですね」
「確かに」

「そうですね～」
「お巫山戯であれだけ熱くなってたらいろいろ怖いわ」
稟が進行役に戻った。
「……教経殿、現状から推測したこの書の正体について、話しても構いませんか？」
「ああ、宜しく頼むよ、稟。俺には考えられない」
「……では。あり得ないことだと思いますが、これはこの書を手に取った人間が知りたいと思った情報を教えてくれる、そういった妖のようなものではないかと思うのです」
「成る程～、それであれば全員違うものが見えているのも理解できますね～」
確かに、色々と辻褄があうな。
だがそうなると問題がある。
「どうしたのです、主？難しい顔をなさっておられますが」
「いやな、星。これがもし自分が知りたい情報を与えてくれるものだとすると、だ」
「……成る程」
「そういうことですか～」
「稟、風。主が考えていることが分かるのか？」
「ええ。つまり、『この世界は夢である』という教経殿の言は誤っている、ということになります。教経殿が未来の人間である、と言うことの証明にはなりますが」
そう。
この世界は夢じゃないってことになる。

「ふむ。それで何か問題がありますかな？」
「星ちゃん、いきなり知らない時代、例えばですが秦の始皇帝の時代に星ちゃんが何かの拍子に行ったとしたら、こちらの世界に戻りたいとは思いませんか～？」
「成る程、生きて行くには問題ないが郷愁の念からは逃れられそうにないな」
「そういうものでしょうね。教経殿もそう言う状況にある、ということです」

稟はそこで一旦言葉を切って、俺に問いかけてくる。

「教経殿、この世界が夢ではない、ということが事実だとして、貴方はどう生きていくのです？
星に言ったとおり、天下統一を目指して邁進するのですか？
それとも、教経殿が生きる時代に戻るための方策が見つかったら、すべてを投げ捨てて本来自分があるべき場所へ帰ってしまうのですか？」

真剣な目で三人が俺を見つめてくる。
こんな時になんだが……かぁいいなぁもう。

「俺は……帰らないと思うよ」
「何故そう言いきれるのです？」
「そうだなぁ……。あっちの世界はさ、俺が居なくても間違いなく回っていく世界だよ。あっちじゃ俺はただの一般人だ。民の一人でしかないのさ。だから責任も個人が負担すべき程度のものでしかない。
だが、この世界では……いや、今この時点での俺自身はそうはいかない。
稟、君や星、風に仕えて貰うことになり、どうなるかは分からない

がうまくいけばこの町を足がかりに義勇兵団を興して天下争乱へ乗り出すことになるだろう。その状況ですべてを投げ出すことは出来ないし、何より、俺自身が天下争乱の中で一体何ほどの事が出来るのかを確認したい。その上で天下統一できるならこれに越したことはない。

男児の本懐ここに極まれり、だ」

そういうと、三人は安心したかのような笑顔を浮かべた。

やはり、心配だったのだろう。そりゃそうだよなぁ。

自身が仕えるべき主が見つかった、と言っていた矢先に居なくなるかも知れないなんて言われたら。

「……そのお言葉を信じています」

「風はお兄さんを信じていますからね～？」

「主、帰るとしたら私もお供致しますからな」

約一名、問題発言をしている人間が居るが、それは放っておくとしよう。

「お兄さん」

「ん？何だ風」

「お兄さんはこの書物をどうするおつもりですか？」

さて、どうするかね。恒例の三択だ！

1．ファイヤー！

2．なぎ払え！
3．見るがいい、ラピュタの雷を！
ここで俺が選ぶのはなんと1番だ！というか2番も3番も無理だろう。必要なもの的に考えて。

「こうするのさ」

そう言って書物を暖炉の中にぶち込んで燃やしてやった。

「あぁ！槍術の秘伝書が！」
「孫子の兵法が！」

なんてことをしてくれたんだというような声を星と稟が挙げている中、風だけは笑っていた。

「さすがはお兄さんですねぇ～」
「確かに頭の悪さは流石ですが、一体どういうおつもりですか！」
「主、事と次第によっては許しませぬぞ！」

稟にもの凄くひどいことを言われている気がするんだが。

「はぁ……星、稟、聞いていいか？」
「何なりと」
「何でしょうか？」
「答えが分かっている状態でこれから先の人生を歩みたいのか？お前らは」
「？」
「！」

星は分かっていないみたいだな。稟は分かったようだけど。

「星、自分で見つけた理でない、他人の理、しかもずるをして得たそれを以て天下無双の槍である、と名乗りを上げるつもりかね？俺なら御免被りたいな。俺は俺自身が鍛錬によって得た剣術を以て天下に剣聖と謳われるような男になりたい。星はどうなんだ」

「……なるほど、私としたことが武芸者としてあるまじき心得違いをしていたようですな」

どうやら気がついてくれたようだ。

「分かってくれたようで安心したよ」

「さすがはお兄さんですね～。そういう矜持を持つ人は風はとても好きですよ～」

風、なにげに問題発言というか、爆弾発言だと思うんだが。

というか、何歳だ？外見からすると……やめとこう、背筋が寒い。

「主は常に我々のことを考えてくれているのですな。この趙子龍、感服致しました。そのご高恩に報いる為に、今宵私が夜伽をつとめさせて頂きましょう」

……あぁ、この人もこの人で何も分かってない気がする。星よ。何故そうやって俺をからかうんだ。

あれか、好きな人の気を引きたいけどはっきりは言えないからこうやってからかって好意を持っているって事を暗に伝えているつもりだってか？

どうせ何も出来ないと思っているんだろうがなぁ……何も出来ないんだよ！

星のちょっとアブない発言に稟を見ると……

「教経殿が書を焼いたのは星と私の気を引くためで……そ、そうなると教経殿は私にもそういうことをするつもりであって……ああ、駄目です教経殿、確かに好ましくは思っていますがそういうことはその……あぁ、そ、そこは……の、教経殿、ふ、服を……」

……はい、発射準備ＯＫなご様子ですね。
いやぁ～凛さんって、ほんっとにすばらしいものですね。
普通電車の発車時刻、快速電車の発車時刻、凛の鼻血の発射時刻って感じで時刻表作るべきだろこの頻度は。
１番線、凛が発射します。ご注意ください。

「ブーッ」

……彼女の妄想の中の俺は、何をやらかしたんだろうか……
出来れば一生知りたくもない。

「はいはい、凛ちゃん、トントンしましょうね～、トントン」
「フガフガ」

さっき見たのと全く同じ光景が再現されているな。
ああ、血の虹の向こうに時の涙が見えるよ……

で、稟さん復活しました。

「こうなると教経殿は天の御使いである可能性が高いわけですが」

稟さん、鼻血出し過ぎて頭に血が回っていませんか？何を言っちゃってるんですか？

「確かにそうなりますね～」

「うむ。間違いないだろうな」

全員納得して居るみたいだが残念。俺は納得していない！

この先に進みたかったらこの俺を倒してからにすることだな！

……若干死亡フラグっぽいから撤回させてください。

「なんで？」

「いや、教経殿、なんで？ではないでしょう」

「いやいや、稟さん、そう言うわけにもいかんでしょう。全く理由が分からないんだけど？」

「……未来から来た、と言うことが事実であるとすると、貴方は今後この世界がどういう道をたどるのかを知っていることになります。その知識を以てすれば、この世界に安寧をもたらすことが出来るのではありませんか？そういった意味で、予言にあった天の御使いとは教経殿のことだと思うのです」

「なるほどねぇ」

頭の回転が速い、というより、よくそっちと結びつけて話を構築で

きるな。
そもそもの出来がどうやら違うらしい。

で、そうだとして何か変わってくるんだろうか……ああ、徴兵というか、募兵がしやすくなるのか。
金も集まりそうだな。その代わりに面倒くさいことも増えるんだろうが。
認めたくない奴は絶対にいるだろうからな。特に漢王朝の人間は、だ。天命我にあり、を地でいっている奴らばかりだろうしな。

「天の御使いを名乗り続け、知名度を上げていけ、と。そう言うわけだな？稟」
「その利点に気がつかれる辺りは流石です」
「欠点もあるが、それはとりあえず置いておいていい、ということだろ？」
「……その通りです」

眼鏡をこう、クイックイッと中指で押し上げながら答える稟。
グッと来るものがあるねぇ。重ねて言うが俺は眼鏡属性持ちなんだよねぇ。
１２０％中の１２０％～！！！って人に何となく口調が似ちゃってるねぇ。
まぁ、俺は麦茶が好きなんだよねぇ。

「では今後の大方針が決まったようですから、さしあたって迫っている目の前の危機に対応する策を考えることにしましょうか～」
「そうだな。まぁ、稟に風がいるから私としては全く心配していないが」
「教経殿もそうですか？」

そりゃそうだろう。
郭嘉に程?だぜ?烏桓討伐と十面埋伏だぜ?
あれが思いつく人間なんだ、思い切りの良さも緻密さも兼ね備えているわけだからな。

「あぁ、全く心配していないよ。これ以上ない軍師殿が二人もついているし、将として国で1，2を争う星もいる。現状で望める最高の人材がここにいる訳だ。第一、君らを信頼できない、となるとこの段階で俺は君主失格だろうぜ」

当たり前だ、とか言われるかと思ったんだが。
そう言うと三人ともうつむいてしまった。かわいいねぇ。

「と、とにかく方針についてこれから話し合いましょう」

稟がそう言うと他の二人もそれに同意し、夜を徹して基本方針と兵自身の戦い方について話し合った。
お掃除の時間まで、あと少しだ。

蝶の如く～8～（前書き）

お気に入り登録４５件。
誠に有り難う御座います。

ご都合主義であり、ただ書きたいことを書き殴っているだけの拙作ですが、今後とも宜しくお願い致します。

蝶の如く～8～

～教経　Ｓｉｄｅ～

基本方針を皆で確認した後、それぞれがそれぞれの持ち場で自分の本分を果たすべく準備に明け暮れた。
兵達ににわか作りの槍を持たせ、俺が考える現状で彼らが出来る最良の槍術を教え込み、星は志願してきた兵達に殺気を容赦なくぶつけて兵を選別・再編し、稟と風は木の杭で柵を巡らせ堀を作り、盾のようなものを作る作業の監督をしていた。

「やれやれ、漸くおいでなすったか」

二日後くらいに来る、といった風の予測が当たった。
どうやって予測したのかねぇ……後で聞いてみるか。

「星、上手くやれよ」

町の南、比較的近い位置にある山を見ながら、そう呟く。
今回の戦の是非を担うことになるのは、星。彼女が戦略上の目的を達成できるか否かでこの戦の勝敗は決するだろう。

稟と風で出してきた案は、こうだ。

1．まず星が率いる、比較的頑健な体つきをし、戦う意欲が旺盛な者３０名を町近くの山に伏する。これは、星の殺気を受けて比較的まともに動くことが出来た者達であり、戦力として一番期待できる人間だ。

2．この町の入り口である東と南をそれぞれ兵を配置して守り、賊共に出血を強いる。兵の分配は東に３５０程度、南に１００程度。賊は東から来る、という情報からそのように兵を分配する。将は最初東に全員を集め、南には配さない。

兵の配分については、風が言い出したことだ。賊共がすぐに襲いかかって来ずに様子見をしたことから、街道が近い東側に兵を集中させ、その上で手薄になった南から本隊が来るだろう、というのが風の見通しだった。稟もその見通しに全面的に賛成している。

将の配置については、弓で東から来る部隊の部隊長を狙撃できないかと俺が言い出し、まずは全員東に居て、本隊が出てきたことが遠目に見えた時点で俺が南に移動することにした。

3．敵本隊が南から押し寄せた際、戦線を膠着させ、なおかつ押し上げることで混戦状態を作り出す。これは俺の役目になる。この成果次第で星の戦果が左右されることになるだろう。一番重要で、一番危険な役だ。これを俺がやるといった時星が自分がやると言い返してきたが、一番人死にが出ることが分かっている箇所だ。俺がやるべきだと言い張った。

今後はいざ知らず、事始めになるのだ。自分が安全な場所にいる、というのは耐えられないし、なによりいい運試しになるだろう。これを乗り越えられないで天下は手に入らない。人生には賭博を行わなければならない時がある。今が最初のそのときだと俺は思う。

そういったことを言うと全員が呆れた顔をしていたが、不承不承ながら賛成してくれたのでそのようにした。

運試しをする前に死ぬことになるかと思ったが、それは置いておこう。

4．南の戦線を混戦状態にしたら、星が率いる３０人が山から駆け下り、頭を一気に殺る。頭を殺されれば士気は低下するだろう。そ

こを全軍で叩きに出る。
これがすべてだ。
さて、上手く行けばいいんだが。出来れば、人死にが少ない形で、ね。

～星　Ｓｉｄｅ～

「それは危険ですぞ、主！その役目、この趙子龍に御命じ下さい！」
「教経殿、何を考えていらっしゃるのです。今回貴方は天の御使いとして決して倒れてはならぬ立場にあること、理解していないとは言わせませんよ？」
「お兄さん、それは少し無謀だと思うのですよ」

どのように戦うか、と話し合う中で、今回最も危険な役割を主自身が担う、と宣言した。
それに対する私達の反応は、当然こういうものになる。

「あのなぁお前ら……まぁいいや、全部論破してやるよ。
星。俺が山の中に隠れちまったら、兵の士気が落ちるだろうが。苦境になればなる程、逃げたんじゃないかって思うのが人の性というものだろうに。士気を維持するには俺は町にいるべきなんだよ。そうなると軍師二人は戦闘民族じゃないんだし、俺が前線に立つって結論になるだろうに。

稟。御遣いだからこそ前に立たなくてはならんだろうよ。兵として訓練を受けた者どもならまだしも、鋤や鍬を手に持っていた普通の農民だったんだ。自分を奮い立たせるに、厳しかった訓練という経験による裏打ちがない以上、御遣いという存在が必要とされるのは目に見えているだろう。

風。俺は無謀だと思っていない。出来ないことを出来ると思い実行するのが無謀だ。これは多少の無理に過ぎないんだよ。何とかなる、そう思っているから出るんだ。俺は自殺願望バリバリの変態さんじゃない。余程の傑物が出てこない限り、後れを取るつもりはない。星を相手にしていたのを見ていたんだろ?それは分かるはずだ。

それにな、人生ってのは安全に行ける時は安全に行くのが最良なんだろうが、博打をしなきゃならん時があるだろう。俺はそれは今だと思っている。俺たちの事始めだし、天下を取る云々抜かしている訳だからどこかで運試ししとくべきなんだよ。これで死んだらそもそも天下なんてちゃんちゃらおかしい話だろうが。

だから、頼む、やらせてくれないか?」

むぅ、我が主ながら弁が立ちすぎるな。もっとこう私を頼ってくれても良いと思うのだが。
そう言われると何も返す言葉がないではないか。頑固な人であるし、間違いなく自説を曲げることはしないだろう。そのくせこうやって頭を下げてくるのだ。我々が折れるしかない、ということが分かっていてやっているのではないかと勘繰ってしまう。
横を見やると、稟も風も同じように呆れたような顔をしていた。

「……仕方がありませんね～。お兄さんの言うことは正しいようですからそのようにしましょう」
「風！」
「但し、必ず生きて帰って貰いますからね？」
「……まぁ、努力はするさ」
「努力では駄目です」
「分かった分かった、必ず帰ってくるさ」

全く、我々の心配を袖にするなど、何という主であろうか。
ここは懲らしめてやらなければ……ククク主よ、自らの言動を悔いることですな。

「では、主たっての願い故に、やらせて差し上げましょう。さぁ、この星の躰を存分に味わうが宜しい」

さて、どういう反応をするか……楽しみだ！

「ふむ、ここには稟も風もいるが……星がそういうなら仕方がないな」

……ん？思っても見なかった反応が返ってきたな……だがそれなら

それで……いやしかし、私はまだそういった経験はないわけで……
そう思っていると主は私のあごを手で掻い摘んで上を向かせる。
すぐ目の前に主の顔がある。主の唇がすぐそこにある。これは……
その……

ここでか？
いま？
ここで？
稟や風の前でか？
確かに二人に差を付ける良い機会だがその、
ちょっと、
恥ずかしいというか、
なんというか、
その、
あの、
とにかく、
あ、主ぃ……

目を瞑り、そのときを待つ。
が。

「ぷっ」

ぷっ？

「ふはははは！星、一本取ってやったぞ！風、見たか今の顔！稟、どうだ、傑作だっただろう！いやぁ～仕返ししてやろうと機会を待ってたんだよ！」

……ほう……主……私を弄んだということですな……

「ははははは……って、風、稟。どうした？」
「あ～、教経殿」
「ん？」
「この度はご愁傷様でした、なのですよ～」

思い知って貰いますぞ、主よ！！！

「この趙子龍の純情を弄んだ罪、その身で償え――！！！！！」
「ちょっ、お前、それ死ぬだろ！」
「五月蠅い、死んでしまうが宜しい！」
「いやいやいや、これから運試しとか言ってるのに試す前にここで死んでどうするよ！な、星、話せば、話せばきっと分かるからさぁ～って、死ぬ！ヤヴァイ！それは本当にヤヴァイって星！星さんってば！」

……此度は弄ばれただけで終わりましたが、次回はこうはいきませぬからな、主よ。
そうですなぁ、戦が終わって私がきちんと役目を果たしたら褒美を頂かなければなりませんかなぁ、主？

～風　Ｓｉｄｅ～

遂に賊さん達がやってきました。

「皆さん、では始めて下さい～」

風の号令で兵隊さん達が盾を持って門付近に立てた柵の後ろに構えています。

「なんだ～糞共、びびっちまったのか？」

そう言った賊さんの口に弓矢が刺さっていました。
恐らく、お兄さんが城壁の上から射殺したのでしょう。
なぜ、弓が使えるのか？と聞くと、精神鍛錬の一環としての弓術というものは非常に優れたものなのだ、という全く関連のなさそうな回答をされました。
それでは答えになっていません、と重ねて質問をしたところ、自分は太刀？を使うが、太刀を振るう際の精神状態と射を行う際の精神状態とが同一になるように鍛錬をすることを強いられていた為、射の訓練もやっていたからなのだそうです。

……お兄さんに強いる事が出来るというのは本当にすごい人がいたものです。

「風、惚けている暇はありませんよ？」

稟ちゃんはそう言うと、盾の後ろ、正確には盾を持って立っている人の左右に槍を持った人を配置し、残りのすべての兵隊さん達に弓を射掛けさせました。

「ちっ、テメェら！こっちも反撃してやりやがれ！」

相手は柵でなかなか前進できない様で、ただ弓だけを射掛けてきます。

が、それは盾に防がれ、それを越えてくるものも城壁からある程度垂らした布を地面に突き立てた棒に括り付けた、即席の幔幕のようなものに阻まれています。

これで本当に防げるのが不思議ですが、お兄さんが言うことですから根拠があるのでしょう。

「柵を越えてきた賊さんに、対応をお願いします～」

何人か柵を越えてきましたが、槍を持った兵隊さん達に思い切り上から頭を叩かれています。

それを防ごうと手に持った獲物で頭上を守った瞬間、兵隊さん達は槍を叩き付けるのではなく、胸を突いてどんどん賊さん達を倒していきます。

非常に理にかなっていて、そして短期間でも習得できる槍術であると、星ちゃんが感心していました。

お兄さんの知識はとても面白いものです。

この分だと、かなり楽に撃退できそうですね～

～稟　Ｓｉｄｅ～

戦闘が始まって随分時間がたったような気がするが、辺りの喧噪は鎮まる気配がない。

「郭嘉様！新たな敵兵が近寄ってきます！」

「了解しました。では手筈通りに。……御遣い様が居られるのです、

何の心配もいりませんよ」
「はっ、はい！」

決められていた通り、風の盾隊の後ろに槍隊を配置し、弓を射掛けさせる。
もう何度も繰り返している動作に、兵達は慣れてきている様だ。
だが、このくらいの時が一番危ないだろう。ちょっとした切っ掛けで戦線が混戦状態になることは兵書によく記されていることだ。

「なんであっちは矢があんなにあるんだよ！」

そう怒鳴っている人間がいる。あれがこちら方面の前線指揮官であろう。
矢があるのは当たり前だ。幔幕に当たって落ちた矢を拾って射掛けているだけなのだから。その簡単な絡繰りさえ見抜けない賊共は、どんどん弓を射掛けては私達に矢を補給してくれる。

「射掛ける矢はたくさんあるのです。さぁ、どんどん射掛けて下さい」
「「「「お～！！！！」」」」

作戦は順調だ。士気も非常に高いものがある。
このまま推移すれば、我々の勝利は間違いないだろう。それも、圧倒的に少ない被害で。

「！テメェら、何やってやがる！弓を射掛けるのを……」

件の前線指揮官らしき男が、絡繰りに気がついたようだが、それが彼の発した最後の言葉だった。

……教経殿は異常だと思う。
敵の前線指揮官を一矢で射貫く。
弓の達人なら簡単にできる、と思うだろうが戦場ではそうも行かない。
まず的は動いている。そして飛び交う矢から身を隠すことを念頭に置いて行動している。
また、風もある。射掛けた弓が風に流されることなどよくあることだ。
だが、教経殿はそれを軽々と、傍目には飄々と行っている。

無造作に。
何の苦労もないように。
これだけ騒がしい戦場において、集中力を保つことがどれほど難しいことか。
あの顔の下で、実際にはかなり苦労をしているのだろうな、と思うと、少し可愛く思えてしまう。

「流石御遣い様だ。簡単に賊共を殺していくぞ！」

……周辺の兵の士気は非常に高い。
これも計算の内なのだろう。その為に、あのような涼しい顔をして賊を殺し続けているのだろう。

君主としての度量、将としての器、武芸者としての実力。
このすべてを兼ね備えている人間が果たしてこの大陸に幾人いることだろう。

私は恵まれているのかも知れない。
そう思いつつ、周辺の兵に気を引き締めるように通達する。

～教経　Ｓｉｄｅ～

「２」

「３」

懲りもせずによく前線に出てくるもんだね、指揮官ちゃん。

その見通しの甘さの代償は、自分の命で支払って貰うことにしようか。

「4」

賊の指揮官を一矢で殺す。中々に難しい。が、涼しい顔をしてやり遂げなければならない。

……本当は肋骨が痛いんだよね。まぁ、星はもっと痛いだろうけど。一応稟と風に包帯でテーピングのようなものをして貰ったが、大丈夫だろうな？星。

「流石御遣い様だ。簡単に賊共を殺していくぞ！」

……周りの兵の視線が痛いです。

それにしても。

人を殺すのは初体験なんだが、意外や意外、最初あり得ない位緊張していたが一人殺してからは全くそんなこともない。罪悪感もほとんど無い。

殺さなきゃ殺される。

そういう状況ならば迷い無く殺れ。

実際の世界がどうあれ、俺にとっては俺の主観が世界そのものであり、それが正しいのだ。それを疑う余地はない。なぜなら、俺にとって世界とは俺の主観を通してしか眺めることが出来ないものであるからだ。だから、俺の目に映える世界は俺のためにある。俺が生きている限り、俺にとっては。

全部俺の周りの爺共に幼少期から聞かされた、有り難いお説教だ。

……師匠や分家の爺共に感謝しなきゃならないねぇ。死んでも頭が上がらないよ。全く。

ここまで既に４人も指揮官を射殺している。偶に気が向いたら雑兵ちゃんにもお歳暮がてら届けているけど。

「そろそろこっちの責任者が出てきてもいい頃だと思うんだけどな……」

今回の目的は、東門方面軍の司令官的な賊さんをさくっと殺っちゃうことだ。

それをすれば、遠巻きに申し訳程度に攻撃して兵力を惹き付けようとするだけで、今のように柵を越えて町に乱入しようとする事はなくなるだろうと思っている。兵というものはそれを率いて効率的に運用できるものが居て初めて脅威となりうる。

「いい加減に出てきてくれないと、集中力が持たんよ」

賊に突入して殺してきてもいいが、多分無事じゃ済まないだろう。まだ５００人程度の賊が残っている。

……うん、賊っていう言葉の響き的に行ける気がしてきたが絶対嫌だね。今そんなことをする必要はない。

「おっと～？お待ちしておりましたよ～ご主人様～」

馬鹿が、馬に乗って偉そうに死にに来やがった。
あの辺りだとまだ遠いが、射殺せない距離じゃない。現に４人目はあの辺りで殺してる。ここで射殺すことが出来ればかなりこちらが楽になる。そうなれば、早いうちに南側へ移動できる。ひょっとすると、幾人かの兵も連れて行くことが叶うだろう。

だが。
失敗すればそれまでだ。
ここは慎重に行くべきでないのかと考える。
確かに、もう少し出血を強いればもっと近寄ってきてくれるかも知れない。
だがそれはいつになるか分からない。

そうやって暫く悩んでいると、馬上の男が他の男に引き摺り下ろされた。

「危ねぇ。射掛けたらまずかったな」

賊さんも頭が不自由なりに頭を使ったらしい。
要するに身代わりを立てて殺されないことを確認した、ということだろう。
……あれが指揮官なんだろうな。
雑兵を身代わりに、自分の一存で殺させる事が出来る権利を有する人間。
使う頭があったこと自体が驚きだが、そうなると近づいてきてくれる、というのは絶望的な確率だな。あそこが安全だ、と確認したのだから。

「まぁでも自分が指揮官だってのを分からせちまったのは、御運の尽き、だねぇ～」

そう言って城壁の上に立ち、弓に矢を番え、狙いを定める。流石に遠いので今までのように物陰に隠れて弓を引いていたのでは当たらないかも知れない。また、当たったとしても致命傷足り得ないかも知れない。万全を期すためには、城壁の上で敵の視線に己をさらしながら射を行うしかない。こちらに気がついた賊さん達が弓を射掛けてくる。左腕と左肩に矢が刺さったようだが、残念だねぇ。射を行う、というのは無我の境地にあるってことさ。確かに後で痛い思いをするんだろうが、今は関係ない。

「お前さんの認識の甘さの代償、お前さん自身の命で『確かに』支払って貰った！」

今最高に調子がいいみたいだ。

奴さんの顔がはっきりと見える。

こちらを見て怒鳴っていた奴さん。

驚愕した顔。

信じられないという顔。

死に魅入られた、惚けた顔。

馬から落ちた奴さんの周囲の兵が我先に逃げ始める。

……おいおい、逃げるには早いんじゃないか？お前さん達の大事な大将がまだ南にいるんだろうに。

何にせよ、こちらでの俺の仕事は果たせたようだな。

そう思い、左腕、左肩から矢を抜きながら、城壁を後にする。

……周囲の兵の視線が在らぬ方に向いているのは何故だ？何でそっ

ぽを向いている？
と。

「教経殿！危ないことはしないで下さいと申し上げたではないですか！」
「お兄さん？風も稟ちゃんと同じく、東側では危ない真似はしてはいけませんとお伝えしたはずですよね？」

……ＯＫ。説教という仕事が残ってたみたいだ。
勿論、受ける側さ。

蝶の如く～9～（前書き）

書きためていたものがすっからかんになりました。
これから少し更新速度が低下すると思います。

蝶の如く～9～

～教経　Ｓｉｄｅ～

吃驚したことについ数十分前から今までの記憶がない。
そして、気がついたら傷の手当てがしてあって、南側の守備陣地に来ていた。
なんというキングクリムゾン。思い出そうとするが……何も思い出せない。
多分何もなかったのだろう。考え事でもしていたのだろうか。

「おお、御遣い様。御遣い様のおかげで何とかなりそうですよ！」

そう兵達が声を掛けてくる。
すまんなぁ、これからここが一番の激戦区になる予定なんだよ。
だが、余計なことを言って、無駄な心配をさせることもないだろう。

「まぁそうだろうな。何、俺たちに任せておけば何も問題はないさ」
「へ、へい！」

そう言って城壁の上に移動し、前方を見やる。
ちょうどそのタイミングで、向こうの森の後ろに土煙が上がっているのを確認できた。

「結構人がいるみたいだな。東側から５０人連れてきてはいるが、押さえられるか？」

土煙が上がる、というのは、人が多いということか、騎馬が多い、と言うことのどちらかを意味している。

願わくば、前者であって貰いたいものだ。
騎馬を想定した戦い方の修練なんて全く積んでいない。
まず馬の足を斬れ、と言ったところで、それを実戦で実践するには修練が必要だ。
いざとなれば、柵を利用する。これは流石に抜く事は出来ないから、それを盾にして攻防を行うしかない。
だが死傷者は想像以上のものになるだろう。

「とにかく様子を見ることだな」

そう独りごちて、前方を、余裕のある表情を作って見ていることにした。

～星　Ｓｉｄｅ～

「どうなっている、戦況は？」
「は、はい。南門付近で敵本隊と御遣い様が統率する隊とが激しい攻防を行っているようです！」

激しい攻防。
それはそうだろう。賊共が来る方向も人数も想定通りだった。
だが、予想以上に騎馬が多かったのだ。
いくら準備をしてあったといえども、それは歩兵に対する備えであって騎馬に対する備えではない。

騎馬の脅威は、何よりも馬そのものにある。
軍馬というものは、他の生き物とぶつかることを恐れるようでは使い物にならない。
その為に特別な訓練を施し、漸く軍馬となることが出来るのだ。
つまり、馬自体をぶつけてくる。
馬の体重は５００Ｋｇを超える。それがもの凄い速さで体当たりしてくるのだ。
まともに当たればひとたまりもない。

その上で、馬上の人間が飛びかかってきたりするのだ。
これに対応できる人間はそう居ないだろう。特に混乱した戦場の中においては。

「大丈夫なのか、主は」

自分の肋骨の痛みを忘れて不安になる。
主も、自分ほどではないとはいえ手負いの状態のはずだ。
普段通りの武威を発揮できるとは思えない。

早く、戦線が混戦状態に陥らないだろうか。
いや、この際それを待つまでもなく、敵大将を討ち取るために突出すべきではないのか？
しかしそれを行っては、せっかくこれまでやってきた事が無駄になってしまう。
私の一存でそのような真似をするわけにはいかない。
ここは、堪えるところだろう。

主の姿を探して、戦場を見つめる。
主は、間違いなく一番先頭に立っているだろう。あの人はそういうお人だ。だからこそお仕えしようと思ったのだが、こうも心配になるとは思っても見なかった。尤も、私が女で主が男であるから、というのが最大の要因なのだろうが。

「趙雲様！敵の前線への圧力が薄くなっているように見えるのですが……」
「まだだ。混戦とは言えないだろう。あれは膠着状態だ。待つのだ。耐えるのだ」

主よ、早く、早くしてくれないと、この私ですら趨りだしてしまいそうなこの焦燥感に兵達は耐えられなくなってしまいますぞ。

～教経　Ｓｉｄｅ～

「こいつは……随分と侮っていた、ということなんだろうなぁ、おい」

周りに群がってくる賊共を斬りつけながら、そう口にしてみる。
別に口にしたからと言って状況が好転する訳じゃない。が、言わずには居られなかった。

「御遣い様、危ないですぜ！」

わかってるって～の。矢と馬、だろ？

「わかってるっての」

矢を掴みながら、そう答える。

馬ってのは賢い生き物でさぁ。

きちんと判断できるのよ、自分に危険が迫っているのかどうなのか。

殺気全開の俺にぶつかって来ようとした馬は１０頭も居ない。

「わりぃなぁ、俺は馬が好きなんだけど、俺に従わない馬ならまだしも殺しに来る馬なんて必要ないんだよね。……だから、死んでくれ」

馬がこちらに駆けてくる。

馬ってのは足が全てだ。体重を支えるのも走るのも、４本の足が全て揃っていて初めて出来ることなのだ。サイレンススズカやキーストン的に考えて。だから足を斬るのが一番だ。

こちらにぶつかってこようとする馬から逃げるのは難しいだろう。

馬に向かっていく。折れても問題ない左腕などなら、ぶつかっても戦力の低下にはならない。

だから、如何に致命傷を避けてぶつかり、いなし、馬の足を斬るのかが問題だ。

馬にぶつかりそうになった瞬間、馬の左足が前に来たタイミングで馬の左、俺から見て右に移動しつつ、左足を切りつけてやる。左腕に馬面が当たったが、所詮腕だ。簡単にいなすことが出来る。肩だと躰ごと持って行かれたんだろうから運が良かったとしか言いようがないな。まあ、いなす、といっても矢傷がまた開いてしまった様だが。

その他の馬は、もう柵に近づいてこようとしない。

これで、何とか騎馬の脅威は収まった、という所なんだろう。

……だがここまでに払った代償が大きすぎた。
予定では、南からやってくる賊共は約３００。これを１５０で迎え撃ち、かつ期が至れば星が３０名の虎の子を率いて壊滅させるつもりだった。膠着状態に持ち込んだ時点で、１２０名程度残っていてくれれば、と思っていたのだ。

だが現状、賊共が２００を越えて残っている状況でこちらは７０人程度。
はっきり言って殺されすぎた。
こちらの立てた策が甘かった。それに尽きるのだろうがそれは採用した俺に責がある。
策は尽きた。これで終わりだろう。敗戦は確定的だ。普通なら、だけど。

「だけどねぇ、残念ながら俺がいるんだよねぇ。ここにさぁ」

前を見据える。
賊共が下卑た面を並べてこちらに向かってきている。

「ヒヒッ、さっさと降伏したらどうだ？兄ちゃん。尤も降伏したところで皆殺しだぁ～」
「ヒャハハハハ」

何のために瞬動使わなかったと思ってる？
こういう時に切ることが出来る切り札が必要だと思っていたからさ。

「まぁ、何にしても、あんたらには死んで貰うしかないかな」
「何言ってやがるこの糞野郎が！」

「ぶっ殺してやるよ～兄ちゃん！」

……瞬動を使う。まぁ、吃驚人間ショー的な物ではなく、己が振るう剣速と同じ速度で己の体を動かすってのを瞬動って呼んでいるだけだが。

だが、躰への負担は半端じゃない。特に、足の親指。慣性を完全に制御するには足の指の力が必須だ。

ここ数日の疲労に東門付近での戦闘による疲労もあり、肉体的にはそろそろ限界が近い。気を失いそうになるが、そういうわけにも行かないだろう。だって、男の子だもんってか。

「このＺａｋｕは通常の三倍の速度で動けるんだよねぇ。多分三倍じゃ済まないんだろうけどさ」

見た感じ武芸が達者というわけではなくただの力自慢のようだが、万全を期す。

俺を半月形に囲んでいる中で、先ず槍を手にした二人を殺るべきだろう。

右へ。まず右から切り崩す。

一番右の男はまだヘラヘラと笑っている。……そのまま死んじまうことになるが、自業自得だな。槍を持ち手の箇所から切り落とし、返す刀で逆袈裟に、左下から右上へ刀を一閃させる。

落ちようとする槍の穂を、その隣にいた刀を持った男に歳暮代わりにくれてやる。

槍は喉を突き破る。男はまだ笑っているようだ。

次。

その向こう、中央にいる槍を持った男。走り込み、清麿を切り上げる。右腕ごと槍の穂を切り飛ばす。そのまま男の肩の高さまで刀を跳ね上げたところで、首へ。綺麗に切り飛ばす。

再び手に入れた槍の穂を、男の右腕を添えてその向こうにいた４人

目の腹へ投げつける。俺からの歳暮が余程嬉しかったのか、笑っている。御遣い様からの歳暮だもんなぁ。あの世で自慢してやれ。

5人目。これが最後。

右袈裟、左袈裟。これを連続して行う。残り物には福があるって言うだろ？

清麿で二回も斬って貰えるなんて、こいつはとんだ果報者だ。清麿はそれが影打でも無い限り国宝並みに価値のある、世に出れば間違いなく文化財認定されるようなものなんだからな。

ふぅ。

何の武芸も納めていない人間だと、まぁこんなものだろう。

全く反応できていなかったな。

5人が5人とも、自分がどうやって死んだのか分かっていないだろう。いい笑顔で逝ったのは間違いない。本望だろうさ。

自分が振るえる剣速＝自分が認識できる速度、だ。

自分がその速度の中に生息したことがないのにその速度を見極めることは出来ない。

剣速並みに動くことが出来る俺にとっては、有象無象共は据え物斬りの据え物にしか見えない。

「こ、こいつ今何しやがった！」

「……流石に姿が消える訳じゃないんだから、何をやったかくらいは分かるんじゃないかね？」

そう言いつつ更に賊を斬りつけていく。

流石に躰がきつい。

そう思っていると、町の中から残りの人間全てが出てきていた。

「お前ら、御遣いの旦那があれだけやってくれてるんだ、俺たちがやらないで誰がやるんだ！」

あのオッサン、あの集会ん時のオッサンか。

「おおよ！やぁってやるぜ！」

……ロボットアニメ的な何かに出てきそうな人が、主人公的な台詞を宣っている。

まさかピストルの発射音がしたりしないだろうな？

見ると、賊共の前線は一人で殺しまくっていた俺にドン引きしているようで。

突っかかって混戦状態を現出するとしたら、前線の賊共が怯んでいるこの時をおいて他にはないだろう。

「おい貴様ら！賊共を殲滅する！俺に続け～！」

そう叫びながら賊の集団に飛び込み、斬りつけていく。

右袈裟、逆袈裟、左胴払い。

この動作で４人斃せた。まだだ、まだ行けるだろう。

少なくとも師匠との死合いではここから先の世界があったはずだ。

体力の限界を超えて初めて見える、剣理に満ちあふれた世界が。

そこまで持って行く。そうすれば、より多くの賊共を殺すことが出来るだろう。

「剣とは所詮人殺しの道具だ。すなわち、剣理とは最も理に適った斬人の法のことを言うのだ」

んなこたぁわかってるよ、この糞爺。

「考える前に躰を動かせ。常在戦場、止まる時は死ぬ時だということをしかと認識しろ」

だからこうやってこいつら殺して回ってるんだろうが。

……にしても、きついな。戦いは数だ、ってのが実感できるねぇ。さすがだねぇ、ドズル兄さん。

周囲からどんどん人が減っていっている。

だが、これで混戦状態には持ち込めたんじゃないか？

そう考えたのを最後に、意識を手放してしまった。

～星　Ｓｉｄｅ～

「趙雲様！」

「見えている！私は失明して居るわけではないぞ！」

南門前の状況が一変した。

南門の中から、恐らく全ての兵が飛び出し、賊共に向かっていく。

やはり主は先頭にいるようだ。

主が賊の集団に飛び込む。

その数瞬後、周囲の賊が膝を折って斃れていた。

「流石は我が主！皆、今こそ敵将を討ち取る時ぞ！私に続け～！」
「「「「「お～！！！！！」」」」」

これまで目の前で多くの仲間達が命を散らしていく様をただ手を拱いて見ているしかなかった兵達の士気は非常に高い。このまま一気に賊将の首を頂く！

東門も南門も、最早限界といっても差し支えないほど疲労困憊していることだろう。
彼らがそうなったのは、偏に我らが賊将を討ち取ることを信じ、その為の布石となった為だ。

……なんとしても賊将を。

槍を抱え、敵中をひた走る。立派な馬に乗り、一人だけ武具が立派だった男が居たのは確認している。
その男を討ち取る。それでこの戦は勝利だ。

「貴様ら、邪魔をするなぁ～」

前方に立ちふさがった二人を、左の男は槍を左から薙いで、右の男はその流れまま胸の前で槍を止めて突くことで一気に仕留め、再び走り出す。

「あそこか！」

見れば賊将は周囲の賊に怒鳴り散らしている。
自分で前線に立たないから兵が奮い立たないのだ、ということを教えてやりたいものだ。

将が前線に立った我が軍。ただの農民でこの士気、この強さ。賊といえども将が前線に立てば、もっと苦戦したであろうことは想像に難くない。

「賊将よ！私は常山の趙子龍！天の御遣い、平教経の槍なり！我が槍の錆になるがいい！」

そう声を掛けるが……賊将は……逃げ出した。

なんということだろうか。この私とまともに向き合う気概さえない。このような相手に同志達が苦しめられていたのかと思うと、腸が煮えくり返るようだ。

「逃がすな、必ず首を取れ！」

道を塞ぐ賊共を、隊の兵が排除する。

私は奴が逃げた方向から、最寄りの森に逃げ込もうとしていると判断し、先回りすることにした。

「逃がさんと言ったはずだ」

目の前に出てきた賊将に槍を付け、そう宣言する。

賊将も観念したのだろう、剣を抜き構える。

なかなかに剣を使うようだ。が、平教経という一流の武人とつい先日死合いをしたばかりの私には、その構えは児戯に等しく見える。

はっきり言おう、隙だらけだ。

ちょうどいい、この賊将は、教経殿に試した槍術で討ち取るとしよう。

教経殿のために初めて立てる武功を、教経殿を懲らしめるために使った槍術で以て為す。

……なかなか良い趣向だと思うが、気に入って貰えるだろうか。

賊将の左肩へ、槍を突き出す。

それを受けて、賊将は右に、右足に体重を預けて左足を下げ、左半身を後ろへ捻ることで躱そうとする。

その刹那、教経にそうしたように、躰を回転させて賊将の右足を狙って槍を薙ぐ。

星が正面を向いた時、賊将の右足はその持ち主に永遠の別れを告げていた。

～第三者視点　Ｓｉｄｅ～

「敵将、討ち取ったり～！」

星の声が戦場に響き渡る。
星はそのまま槍の穂に敵将の首を引っかけ、賊軍の中を馬に乗って駆け回る。

それを見た賊共は戦意をなくし、撤退していった。

「今が好機です。追撃して下さい！」
「さあ～みんな頑張るのですよ～」

稟と風の采配に従って、落ちていく賊共に追撃を掛ける。
気勢を上げる兵に追い立てられ、決して少なくない損害を出しながら逃げていく賊共。
それを見ながら、ここから漸く自分達の本領を発揮できる。漠然と

二人はそう考えていた。

「主はどこだろうか」

星は教経を捜していた。
途中まで主が剣を振るっていたのは分かっている。だが、あの後一向に主を見なかったし、主が居るであろう事を示す、賊共の怯えた悲鳴などが聞こえてこなかった。

まさかあり得ぬ事とは思うが。そう思いながら教経を探す。
死体に躓いて転んだ先にあった物は。

「主？」

教経が羽織っていた外套。
それが死体の間から見えている。

そんなことはあり得ない。
主は自分よりも強く、自分よりも怪我は軽かった。
だが、目の前には主が来ていたはずの外套が、死体に埋もれてしまっている。

「誰か、誰か居ないか！この死体を全てどけろ！今すぐにだ！」

気が動転している。目の前の死体を足で蹴り付け、そこから退けようとする。
考えたくもない事態を、否定できない自分が居る。

死体を退けているうちに、教経が見えてくる。
全身血まみれだ。
息をのみ、ゆっくりと教経に近づく。

「主……？主！」

教経の躰を抱え、抱き寄せる。
まだ戦場に居るにも関わらず、涙がこみ上げてくる。

「……星、か」

教経の意識が覚醒した。ただ気を失っていただけのようだ。

「主、吃驚させないで頂きたい！」

先程まで涙を浮かべていた顔を見られることを嫌って、顔を背ける。

「なぁ、星。……その、かなり眠いんだよ、俺ぁ……このまま少し寝ちまってもいいかね？」

「……構いませぬよ」

「なんかあったら……起こして……」

そう言って再度教経は意識を手放した。

蝶の如く～9～（後書き）

ススズはともかく、キーストンは結構悲しい話です。
競馬のお話ですが、興味があるようでしたらググってみるといいと思います。

蝶の如く～１０～（前書き）

妄想がズバッと参上したので、ズバッと怪傑することにしました。

眼鏡っ娘属性持ちなのは主人公だけじゃないんだよねぇ。

飲み物は麦茶が好きなんだよねぇ。

蝶の如く～１０～

～星　Ｓｉｄｅ～

「なぁ、星。……その、かなり眠いんだよ、俺ぁ……このまま少し寝ちまっていいか？」
「……構いませぬよ」
「なんかあったら……起こして……」

そう言って主は寝てしまった。
本当に人騒がせな主だ。死体の中に埋もれてしまっていた主を見つけた時、心の臓が止まってしまったのではないかと思うほどの衝撃を受けた。

思いを告げぬまま、何も叶えることが出来ぬままに、主を失う。

女としても、武人としても。
これほどに恐ろしいことはないとしみじみ思う。
そんな私の気持ちも知らず、主たるこの御仁は私の腕の中で気持ちよさそうに眠っている。

見ると左腕の矢傷が開き、まだ血が流れているようだ。
眠い、というのは失血しているが故なのかも知れない。応急処置にしかならないが、矢傷をきつく縛ってこれ以上失血しないようにする。主の躰を改めるが、大きな傷は他には無いようだ。

主を抱え直す。先程までの喧噪が嘘のように静かだ。
主の寝息が聞こえてくる。こうしてみると、本当に普通の、十人並みな顔立ちなのだが。惚れてしまうとは、出遭った時には思いもよ

らなかった……我ながら最悪な邂逅だったと思う。
出陣前の夜、主にからかわれたことをふと思い出す。

「いっそ、今唇を奪ってしまおうか」

そういう考えが湧いてくる。
そうすれば、もしこの先主と離れ離れになってしまうことがあったとしても、その思い出だけを頼みにずっと主のことを想い続けることが出来る。

我ながら女々しいことだと思うが、私は女だ、それがどうした。
周囲を見る。人はまばらだ。
私達を見ている人間は居ない。
……今ならば。

「……主……その、お慕い申し上げております……」

そう呟いて口吻を交わそうとしたその時。

「星ちゃん、抜け駆けは良くないですよ～？」

そんな言葉と共に、真っ黒な風と稟が現れた。

～稟　Ｓｉｄｅ～

東側の戦闘については、拍子抜けする位順調だった。
教経殿が南側へ移動された後も、賊共は我々を恐れてか積極的に攻め寄せてくることはなかった。

その後暫く防戦に明け暮れていたが、南側から星が、賊将の首を掲げて馬を趨らせてきた。

「敵将、討ち取ったり～！」

……本当に絵になる。私や風では、ああはいかないだろう。
星を見た賊共は我先に逃げ出している。自分たちの大将の首が晒し者にされているのに実力で止めさせようともしない。

「風、追撃を行いますよ。二度とこの町に近づかないように、徹底

的に」

流石に風は分かっているようで、殲滅戦ですね～、といつも通り暢気な声で答えてくる。

口にした言葉は、暢気とはかけはなれたものですが。

「これ以上の追撃は無意味ですし、お兄さんの所へ行ってみましょう」

「ええ、そうしましょうか」

風の言葉に同意する。

追撃を止め、町へ戻り、南側へ移動する。

自分が考えていた以上に、南側の戦闘行動は激しかったようだ。

「郭嘉様、お疲れ様です！」

「ええ……少し良いでしょうか？」

「は、はい！」

「南側の兵が随分少ない……また、怪我人も多いように見受けられ

るのですが」

一見して分かる。策に穴があったのだ、と。

自分と風が、何かの要素を見逃していたはずだ。

「その、賊共が騎馬隊といって差し支えないほどの軍馬を揃えて来ていたのです」

「なっ」

その言葉は、正直に言って予想外だった。

賊が騎馬隊を作っている、とは思っていなかったのだ。

「状況は分かりました。教……御遣い様は？」

「ああ、御遣い様であれば、先程発見されました」

……発見された？

「発見された、とはどういうことですか？」

「そ、それが、戦の最中に御遣い様のお姿が見えなくなって……今南側郊外で趙雲様がお世話をして居られるはずです」

……説明になっていない。

そう思い、相手から更に情報を引き出すべく詰問しようとすると。

「稟ちゃん、何か嫌な予感がするのですよ～。具体的に言うと、お兄さんと星ちゃんの関係絡みで」

風がそう言い、私の手を取って教経殿達がいると言われた郊外へ向かった。

目の前で星が教経殿を抱きかかえている。
それはまぁ、いいとしよう。問題は、口吻を交わそうとしているように見えることだ。

「星ちゃん、抜け駆けは良くないですよ～？」

……風が真っ黒だ。

「さて、何のことかな？」
「……星ちゃん、一度はっきりさせておいた方が良いかもしれませんね～」
「……何をかな？」
「……きっとお兄さんは風のことを一番大切に思ってくれていると思うのですよ～？最初にお兄さんに信頼して頂いたのはこの風です

から～」
「……それを言うなら、私は主と直接刃でお互いの存在を語り合った仲だ。男女の仲など及びもつかぬ、深いつながりを有しているわけだ。風には申し訳ないと思うが、主の心は私で占められていると思うぞ？」
……不毛な争いだ。
「……なら勝負ですね～」
「……ほう、その勝負受けて立とうではないか」
「……星ちゃん、今星ちゃんはお兄さんを抱き抱えていますね～。その状態で風と撃ち合って貰いましょう。これなら風でも星ちゃんに勝てるでしょうから～」
「待て風、それでは主が……」
「問答無用～」
「このっ！危ないだろう風！」
「星ちゃん、お兄さんが地面に投げ出されてますが」
「負けるわけにはいかんのだ！」
「チッ」
何という黒い風。
あ、教経殿が起き……た。
「……痛てぇなぁおい、お前ら、俺が寝てるのに何やってくれてんだ？ああ！？」
凄まじい殺気ですね。
どうやら教経殿は寝起きの機嫌が最悪なようです。
「いや、主、これは風が……」

「私は何も知りませんよ～」
「……この！何とか言え！」
「私は知りませんよ～」

走って逃げる風、追いかける星。
あの二人はどこまで走っていくつもりだろうか。

「はぁ、眠ぃんだよ……稟」

教経殿が手招きしている。先程の剣幕から考えて、逆らわない方が良さそうですね。

「なんでしょうか？」
「ちょっとこっち来て貰ってっと」
「なななな何を！」
「これでいいや、お休み、稟」
「の、のの、教経殿！」

教経殿は私を抱き寄せると膝枕の状態を無理矢理作ってそこに寝転がった。
恥ずかしい……と、目を泳がせる。躰を見ると無数の傷がある。
左腕の矢傷は、応急処置が為されているが、かなり酷いことになっていることが伺える。

……それもこれも、全て軍師である私が賊の規模や構成などを甘く見通してしまっていたからだ。『国で五指に入る』と言われ、舞い上がっていたのだ、きっと。
その罰として、私自身ではなく教経殿が怪我をしたのではないか、そう思ってしまう。

あれだけ見込んで貰っていたのに。
あれだけ信頼して貰っていたのに。
私はその期待に応えることが出来なかった。

「……申し訳ありませんでした」
「……あぁ？何がだ」
「策が十全なものではありませんでした」
「いや、問題ないんじゃないかね？俺が居たから上手く行った。それも、稟の計算の内だろう？」

そう言うとこちらを見上げながらニヤリと笑う。
気を遣って下さっているのだろう。だが、有耶無耶にすることは出来ない。信賞必罰は武門の拠って立つところだ。これが正しく行われないと、国家も集団も規律が保てない。

「そういうわけにもいかないのです。私のせいで……」
「そんなことはないさ。決めたのは俺だ。俺のせいだ」
「違います。私は軍師なのです。見抜かなければならなかった。私は……」

私は……私は、軍師失格だ。
そう言いたかったが、教経殿に『お前は不要だ』と言われるのが怖くて言い出せない。
……必要として欲しい。他の誰でもない、この人に、私自身を必要として欲しい。

「待った」

怖くて泣きそうになっていると、教経殿が再び体を起こしてこちらに向き直る。

「いいか、稟。これは気を遣って言ってるわけじゃないからな。どう考えても、あの状況で立てることが出来る最良の策だったのは間違いない。問題なのは俺も、稟も風も星も、皆所詮賊だと考えていたことだ。

敵を侮った。それが最大の計算違いを招いた。よくあることだ。普通なら敗死してるところだろう。

だが幸いにも俺たちは生きている。この教訓を次に生かせる機会を得ることが出来たって事だ。同じ事を何度も繰り返すのなら稟が今思っているように軍師失格だろうな。だが、1回の失敗で積み重ねてきた全てを駄目だと断ずることはしないよ。

稟、俺には君が必要だ。ずっと側にいて助言してくれないと困る」

途中から私を抱きしめながら、教経殿はそう言った。

どうしたのだろう、私はこういうことには慣れていないので、すぐに悪癖が始まって鼻血を出してしまうと思っていたのに。先程まで感じていた恐怖感は霧消し、何故だかとても安心している自分を教経殿の腕の中に発見する。このまま、ずっとこうしていて欲しい。

「あ～！稟ちゃん、ずるいですよ～」

「稟！主と抱擁など、なんとうらやましいことを！」

風と星が帰ってきたようですね。教経殿も抱きしめるのを止めてしまいました。

……今まで、風や星ほど私の気持ちははっきりとしていたわけではありませんでした。でも、今回のことではっきり分かりました。私は教経殿のことが好きなのでしょう。そうでなければ、私自身を必要として欲しい、なんて思わないに違いないから。

敵は強大、負けないように頑張らないと。

私は、軍略には、自信があります。
恋も戦、なのでしょうからね。負けることはあり得ません。

私は、郭奉孝。

教経殿が見込んでくれた、
教経殿が必要だと言ってくれた、
教経殿の軍師なのですから。

蝶の如く～11～（前書き）

こんな時間までなにやってるんだかなぁ。

蝶の如く～11～

～教経　Ｓｉｄｅ～

戦が終わった。稟と風が戦後処理に右に左に飛び回っている。
俺も何かしようと二人に近づいてはご用はないかと聞いてみたが、
大将なのだからどっかり構えていて下さいの一点張りでとりつく島
もなかった。

一人になり、稟が纏めてくれた今回の戦の結果を見る。

戦場に投入した俺たちの兵は、４８２名。
そのうち戦場に華と散ったのは１３８名。
死傷率は６０％を越えている。正に激戦と言っていいだろう数値に、
思わず頭を抱える。
特に南門では９２名死んでいる。
死んだ人間の約７割が南門付近の戦闘で命を落としたことになる。

町を守りきり、賊も追撃によってかなりの数を討伐したようで、生
き残った人間の顔は大概明るいものだ。だが、兵として戦い、死ん
でいったもの達の肉親は悲嘆に暮れている。

これが自分の行動が招いた結果である、と態々ご丁寧に目の前に据
えられている様で、少々居心地が悪い。はっきり言って、認識が甘
かったとしか言えない。策が、ということではなく、この世界が現
実のものである、ということについて。

間違いなく彼らは生きていた。
その彼らを、天下争乱に名乗りを上げたいという極めて個人的な顕

示欲によって殺してしまったようで。勿論、顕示欲だけじゃない。賊などが居ない、安寧な世の中を作り出したいという気持ちはある。だが、根本には顕示欲がある。自分の力をこの世界で試してみたい、自分の力を世に示したい。その傾向を、俺という人間は強く持っていると思う。

せめて、死んでいった人間の為に出来ることはないのか。罪悪感を和らげるための、逃げとしか思えない思考だが、それでも何もしないよりは遙かにましに思える。

何をするか考えた結果、遺体を集めて神葬祭をすることにした。自分が殺したも同じなのだ。神道の作法ではあるが、あの世とやらがあるならそこに導いてやるのも自分の仕事だろう。

「主。」

神葬祭を終え、広場に座り込んで焚き火にあたっていると星がやってきて隣に座った。

「ん、どったの？」

「主、様子がおかしいですが、どうかしたのですか？」
「……」
何とも答えにくい質問だな。
「……大方自分の業の深さに思いを致しておられたのでしょう？」
「……星は鋭いねぇ。そうだよ、その通りだ。」
「で、ご自分の業の深さに絶望されましたか？」
少し厳しい顔をして、星はこちらを見つめている。
……不謹慎だが……可愛いねぇ
「いいや、そんなことはない。」
「では、何を思い悩んで居られる。」
「嗤ってくれて構わんが、俺は怖いのさ。」
そう言って星を見る。何も言わず、じっとこちらを見つめている。
「……この戦で俺の理想のために多くの人間を殺した。もう、俺には立ち止まることは許されない。例えどんなことがあろうとも、だ。俺が理想を途中で投げ出せば、何故自分たちは死なねばならなかったのかと毎夜俺の枕元に立って恨み言を言ってくるだろう。だから俺は立ち止まらず、ただただ邁進するしかない。より多くの人を殺し殺されながら。
……なぁ、星。俺はそこまでは強くなれそうにないんだよ。自分の大切な人が死んでしまった時、俺の心は間違いなく折れてしまうだろう。そんな脆弱な心の持ち主が、このまま人殺しを続けていって良いのかな……」
星はまだ、じっとこちらを見つめている。

……幻滅させちまったかなぁ。

～星　Ｓｉｄｅ～

「……この戦で俺の理想のために多くの人間を殺した。もう、俺には立ち止まることは許されない。例えどんなことがあろうとも、だ。

俺が理想を途中で投げ出せば、何故自分たちは死なねばならなかったのかと毎夜俺の枕元に立って恨み言を言ってくるだろう。だから俺は立ち止まらず、ただただ邁進するしかない。より多くの人を殺し殺されながら。

……なぁ、星。俺はそこまでは強くなれそうにないんだよ。自分の大切な人が死んでしまった時、俺の心は間違いなく折れてしまうだろう。そんな脆弱な心の持ち主が、このまま人殺しを続けていって良いのかな……」

主の様子がおかしいから様子を見るように、と稟や風から言われて広場に座り込んでいた主を捕まえて話をしてみると、主がこのようなことを言った。

成る程、確かに主が悩んでいることは理解できる。だが、私のような一介の武辺でも、稟や風のような軍師でも、主の悩みの内容は理解できても共有することは叶わぬだろう。

今主が悩んでいるのは、人主たる者がぶつかる壁のようなもの。臣たる我らには全く切実さを伴わぬ悩みだ。我らは主のために、主が命じたことをするだけだから。

己がすることを己で考え己で実行する立場の者にしかない悩みと言える。

だが、弱い人間で何が悪いのだろうか？弱いからこそ理解できることもあるのではないか？普段の主であればそう考えることが出来るであろうに、今の主では思いつかないらしい。

どのように答えたものか、少し悩ましいが。このまま黙っていても要らぬ誤解を受けそうだし、話してみることにする。

「主。」

「……ん」
「主は弱い、ということを自覚なさっておられるのでしょう？」
「そうだねぇ」
「自覚があるなら、それを補うべく行動すれば宜しいではありませんか。幸いにして主には私も、稟も風も居ます。我ら3名で不足であればその他のものもおりましょう。皆で乗り越えていけば良いではありませぬか。」
「だが……」
「だが？」
「だが、人が死ぬよ、星。途中で事業を投げ出してしまいそうな人間が、その可能性があるにも関わらず事業を継続しても問題無いのかってことが悩みなんだよ。」

……少々荒療治が必要なようだな。

「主！」
「ん？」
「目を瞑って歯を食いしばって頂きましょう！」

怒気を漲らせて言うと、素直に目を閉じ歯を食いしばっているようだ。少し可愛い。
覚悟を決めた主に、こちらも覚悟を決めて……

口吻をする。

「……んっ」

「……んっせ、星！」
「ふふっ、目が覚めましたかな？」
……恥ずかしい。が、そのまま話を続ける。
「主よ、先程も言いましたが、主は弱くとも構わないのです。主が挫けそうになった時、それを支えるために臣たる我らがいるのです。それに、主が何もかも嫌になって投げ出してしまいたくなったら、私も稟も風も、それこそ全力でお説教し、なだめすかし、ケツを蹴り上げて事業を継続させて差し上げます。嫌だ嫌だと言ったとしてもそれは受け付けませぬ。私をその気にさせたのです。最後まで男として責任を取って頂かなければ困るというものですからな。」
そう言うと主は黙り込んでしまった。
やはりいきなり接吻はまずかっただろうか。
しかし、出陣前にからかわれた事もあるし、何より賊将の首級を挙げた褒美も貰っていなかったのだ。この位は許して貰わなくては困る。
「……はは」
主が笑う。
ご自身の中で、一応整理を付けることが出来たようだ。
「そうだな、稟も風も星も居る。投げ出しそうになった時は宜しく頼むさ。」
そう言って微笑んでくれた。
……が。

「……主？口で情を交わした女が目の前に居るにも関わらず、他の女の真名を先に呼ぶとはどういうことですかな？」
「えぇ！？そこ！？この流れで今そこが問題になるの！？」
「当たり前でしょう！」
「ちょ、じゃぁ言い直すからさぁ」
「今更遅い！問答無用ですぞ！」
「だからさぁ、出陣前でも戦後でも槍振り回して追いかけ回すの止めてくれ！」

そう言って主は走って逃げ出す。
やはり、こういう精神状態の主の方が面白くて好きですぞ？
クックッ

～教経　Ｓｉｄｅ～

星を何とか振り切って、再び広場に戻ってきた。……瞬動使うかどうか本気で悩んだぞ……

あんなに悩んでいたのに、吃驚させられ、その上走り回らされたらすっかり精神的にリフレッシュ出来たようだ。今にして思えば、その辺りは『ある程度』割り切って置かなければならないことで、既に割り切ったはずのことだ。そのことを思い出させてくれた星に、感謝している。

にしても、キス、したんだよなぁ。好かれているとは思ってたけどまさかいきなりあんなことをしてくるとは思ってもみなかったわけで。……いい香りがしたな、星。

「はぁ……」

思考が桃色に染まりそうだ。頭を振る。

「御遣い様」

頭を振っていると、町の長老的な爺さんが何名か連れてこちらに来る。

その中に、稟と風も居るようだ。

「風、どういう状況なの、これ」

「今後、この町を中心に募兵を行って義勇兵団を立ち上げようと思っていることをお話ししたのですよ～。そうしたらお兄さんに会わせて欲しいと仰いましたのでお連れしました～」

「そいつはまたご苦労様」

風と稟の頭を撫でる。
風は満面の笑みだ。稟は恥ずかしそうに、だが嬉しそうにこちらをチラチラと見ている。
……萌えるねぇ。この眼鏡っ娘、俺の弱点を全て知り尽くしているねぇ。恐るべし郭奉孝！正に神算鬼謀！そこに痺れる！憧れるぅ！
大切なことだから2回と言わず何回も言うが俺は眼鏡属性持ちなんだよねぇ。好きな飲み物は麦茶なんだよねぇ。
そろそろ本当に１２０％中の１２０％状態になっちまうかも知れないねぇ。

じっと稟を見ていると、風に頭を強めに殴られた。太陽の塔的なオブジェで。
ふっ……世話ぁ掛けちまったな。

「……御遣い様、この町に住まう者の総意として、貴方様を県令として戴きたいと思うのです。」

若干引きながら、爺がそう言ってくる。
眼鏡っ娘属性も持たないオールドタイプが！このこと前に出てくるから！
……危ない、ここでこの爺殴り殺しちゃったら大惨事だ。自重しよう。

「へぇ。そりゃまたどうして。」
「……郭嘉様と程?様から、御遣い様がこの乱世を鎮めるために遂に立ち上がる決意を為された旨、既に聞き及んでおります。義勇兵団を立ち上げるとのお話でしたが、義勇兵団というものは根拠地を持たぬ流浪の集団で御座います。」
「……まぁ、そうだな。」
「で、あれば、この町を根拠地として活動為された方が流浪する必

要もなく、税の名目で一定の収入も確保でき、名のある人材も集まって来易くなると思います。御遣い様には利益こそ在れ損はないと思うのですが、如何でしょうか。」

いかにも俺のために言ってくれているようだが、中々どうして食えない爺さんのようだなぁおい。

「爺さん、建前なんかどうでもいい。『貴方様のためで御座います』なんて気持ち悪い事言ってんじゃねぇ。本音を言え、本音を。……俺たちにそれだけの利益を提供する代わりに、何をやって欲しいんだ？」

「……単刀直入に申しますと、近隣の賊共からこの町を優先的に守って頂きたい。」

「成る程、それで根拠地に立候補したわけだ」

根拠地として税を納める。支配範囲が大きくなっても、ここを根城としてやっていって欲しい。そして守って貰いたい。中々頭がいいじゃねぇか、この爺。無駄に歳食ってるわけじゃない爺のいい見本だな。ホルマリンに漬け込んで標本にでもするか？

「……如何でしょうか？」

「爺さん、流石に俺の一存で即答できるわけがないだろうが。我が子房達に確認しないとなぁ。」

そう言って二人を見やる。

稟も風もうなずいている様だ。いつの間にかやってきていた星も頷いている。

「……というわけだ、爺さん。爺さんは交渉に成功したってわけだな。」

「有り難う御座います。」
「具体的な話は稟と風の二人としてくれ。俺はそういう面倒なのはしたくない。」
そう言った俺を、稟も風も苦笑いをしつつ見ている。

……漸くだ、これからだ。
ここから、俺が俺であることを、どのような人間であるのかを、この世界に刻みつけてやる。

蝶の如く～12～（前書き）

教経と風の拠点的なお話。

蝶の如く～12～

～教経　Ｓｉｄｅ～

賊共からの激しい求愛行動をはね除けてからそろそろ一月が経過する。

あれから、県令とやらに祭り上げられた俺は、適当にぶらぶらして遊んでいるわけにもいかず、稟と風が持ち込む案件について判断を下し、必要な書類に押印し、兵を募集し、商人共に資金提供を持ちかけ、とまさしく八面六臂の大活躍をしている。

それ＋αとして、自己鍛錬も当然行っている。最近躰を維持することしかしていなかったからなぁ。思いっきり躰をいじめ抜いて全盛期の肉体を取り戻せた、とは言えないがそれなりに鍛えることが出来たと思う。

……実はもう既に全てが面倒くさくなってしまってたりするんだよねぇ。俺はほら、飽き性だからねぇ。仕方がないよねぇ。もういいよねぇ。パトラッシュェ……

「お兄さん？」

やぁ、いい笑顔だね、風。

本当、その笑顔が黒い、瘴気的なものを纏っていない可愛らしい笑顔で、かつ俺の頭ん中覗かなきゃすぐにでも嫁に欲しいくらいなのにねぇ。

「仕方がないですね～ではすぐにお嫁さんにして貰いましょうか～」

恒例の爆弾発言、いつもお勤めご苦労様です。
それはともかくその頬を染めた天真爛漫と言っていい笑顔は、お兄さんの心のドストライクで御座いますね。いやぁ、いいモン見れたわ。これ計算じゃないだろうな。

……何で会話が成立しているのかは全く理解できないし、触れないからな。
傍目的には間違いなく風は不思議少女の枠を大きく飛び出した、アダムスキー型からの電波受信機にしか見えないだろうねぇ。太陽の塔的なアンテナが立っている事も踏まえると。

「まぁ、冗談は置いておいて、だ」
「……ぐぅ」
「寝るな！」
「おぉ！お兄さんがお嫁さんにしてくれないなどと言うものですから、あまりにも辛い現実を目の当たりにして現実逃避をしてしまいました～」

現実逃避＝寝る。
いやぁ、風さんって、ほんっとにすばらしいものですよね。普通意識が覚醒してる状態だったら繋がんねぇだろうがよその二つはよ。
ここは対抗して全力でスルーだ！

Q：急に
B：ボール（嫁さん候補）が
K：来たので

必殺のQBKだ！世界を（ある意味）驚かせる自信がある！ゴール前にサイクロンが吹き荒れるぜ？このサイクロンってのは掃除機のことじゃないんだねぇ。ダイソンなんて目じゃないんだねぇ。詳細

は『へなぎさわ』で先生に聞いてみるといいんだねぇ。

「実は最近気がついたことがある」

「何ですか～？」

流石日本が誇るへなぎサイクロン、華麗にスルーできた。

「俺さぁ、確かに向こうで白文を読む機会があって勉強したことがあるけど、全く理解できなかったんだよねぇ……」

「……はあ～、なんですか～それは？」

「要するに、だ」

「はい～」

「……この書類に書いてある内容が全く読み取れないってことだよ」

「成る程～それは困りましたね～」

「そうですね～」

全く困った感じがしないな、うん。

「ではお兄さん、立派な風のご主人様になるために文字のお勉強でもしましょうか～」

「立派な風のご主人様ってのが意味不明だけど、教えて貰えるなら教えて貰いたいねぇ」

「お兄さんは本当に照れ屋さんですね～。大丈夫ですよ～痛いのは最初だけですから～」

風さん、イタいのは貴女の頭の中身が、だねぇ。

ついでに言うと、痛いのは貴女の方なんじゃないかねぇ、勿論、性的な意味で。

……ケツは貸さんぞ、ケツは。生憎あ～あ～言うのは趣味じゃないんでなぁ。

とりあえず、真面目に風から文字を習っている。
教師として、かなり優秀なようだ。結構な時間こうやって教えて貰っているが、文字の由来について教えてくれたり、その文字が本来持つ意味を教えてくれたりするから、飽きが来ない。
他人にものを教える際に、相手の興味を惹き付けて集中力を持続させる。こんな事さえ出来ない教師ってのは本当に居るだけで迷惑な、給料泥棒以下のドカスだ。教科書見て読み上げるだけなんて、低能どころか無能に分類されても文句は言えんだろうさ。

稟も頭がいいが、風もやっぱり頭がいいな。

「ではお兄さん、この文字は？」
「我、だな」
「おぉ～、お兄さん、きちんと読めるじゃないですか～」
「まぁ、知っている文字とよく似ているから類推しているだけなんだけどな」
「では、これはなんでしょうか～」
「愛、だね。直江兼続の涎掛け的に考えて」
「？？」
「いや、こっちの話だよ」

「お兄さん、お巫山戯はほどほどにして下さいね～」

巫山戯てるのは分かるのか。

「では、これはなんでしょうか～」

「風、だな。風の真名だろ？」

「そうですよ～良くできましたね～」

「いや、流石にそれは分かるよ」

「では、今の文字を続けて書いてみて下さい～」

「へいへい」

我、愛、風、っと。

「ほれ、出来たぞ」

「おぉ～、お兄さん、それを風に頂けますか～？」

こんなモン欲しいのか？

「ほい」

「……お兄さんは本当に大胆ですね～」

「はぁ？」

「風のことを愛しているなんて、そんなことは知っていますが、改めて恋文として頂けると本当に嬉しいものなのですよ～」

ＯＫ、落ち着け、まだだ、まだ慌てるような時間じゃない。

もう一度最初から考えてみよう。

我。うん、俺。

愛。うん、直江兼続。

風。うん、風。

直訳すると？

俺と直江と風。
俺と直江と風。
俺と直江と風。
俺と直江と風。
俺と直江と風。
俺と直江と風。
俺と直江と風。
俺と直江と風。
俺と直江と風。
俺と直江と風。
♪俺とお前とっ、大五郎～♪

俺は俺で、直江がお前で、風が大五郎ってことになるな！
いやぁ、確かにダイターン３だ！もとい、大胆なスリだ！

……いや、本当は分かっているんだが……認めたくないというか。
ほめられて調子に乗せられ、見事に策に嵌ってしまった。
これは程？の罠だ！

「あぁ～、風？」
「はい～なんですか～？」
「それを返して……」
「オ　ニ　イ　サ　ン？」

風・・さん・・的な何かが俺の目の前に居る。圧倒的な存在感だ。
俺は操作系だ、強化系とは相性が悪い。ここはおとなしく引き下がることにしようか。

「……いえ、なんでもありません」
「そうですか～それならいいのですよ～。では、続きをしましょうか～」

……何となくだが、後何枚か余計なものを書かされそうだな……俺の単純さから考えて。

その日から暫く、風は上機嫌だった。
その理由を知った稟と星が、文字を教えてあげるだのなんだの言い出すのはまた別のお話だ。

金輪際、俺は誰かから文字を習ったりしないからな、絶対だからな！

あ、稟、この文字なんだけどさ、ちょっとよく分からなくてさぁ。
困っちゃってるんだよねぇ。

なに？文字教えてくれるの？眼鏡クイクイさせやがってこの野郎！
いや、女だが。
いいねぇ。さすがは郭奉孝、俺の弱点をよく分かっているねぇ。そこに痺れる！憧れるぅ！

～風　Ｓｉｄｅ～

お兄さんが県令に就任してから、一月が経過しました。
お兄さんは、県令としての仕事をこなすだけでなく、『天の御使い』という名声を利用して兵を募集し、商人達に資金を提供させていました。
『天の御使い』で在ることの利点を十分に理解しての行動に、驚かないで納得している風が居ます。

お兄さんは面倒くさいと言ってすぐに風や稟ちゃんに政関連の書類を投げつけてきますが、決して頭が悪くてそれが出来ないからではなく、本当に面倒なことをしたくないからのようです。むしろ、頭の中身は私達二人でも敵わない様な、突飛な思考回路に満ちあふれています。

破損した町の外壁の修理をどうするのか、稟ちゃんと話をしている時に偶々お兄さんが通りがかったので何となく聞いてみました。

「日雇い労働者でも集めてパパッと片付けちまえよ」
「日雇い労働者？」
「要するに、外壁修理しますよ、お給金これだけ出しますよ、働きたい人はいませんかって貼り紙貼ってやりゃ一発なんじゃねぇの？」

……成る程、中々理に適っていますね～。最初からお給金を決めているから、それ以上にお金を使うこともありませんし、働きたい人間を集めるわけですからやる気が無くて進捗がはかどらない、なんてことも起こりそうにありませんね～。

「しかし教経殿、民は応募してこないでしょう」

稟ちゃんがそう指摘します。勿論、風もそう思います。

「何故に？結構おいしい話じゃないか？絶対金持ってるお上が募集してるんだぜ？」

「正にそこが問題なのですよ、教経殿」

「はぁ？」

「お兄さん、今この国で、自分が約束した事を守る県令が何人いると思いますか？」

「……あぁ、信用問題って事か」

「はい～」

「でも俺たちはこの町を救ってやっただろうに」

「それとこれとはまた別問題でしょう。

賊から自分たちを守ってくれる、それは分かっているでしょうが、だからといってお金に汚くない、とは限りません。特に、教経殿。教経殿は面倒くさいからという理由で政にあまり首を突っ込んでいません。

ですから、この通達も『天の御使い』たる教経殿から出たものではなく、その臣である我々から出されているものだと思うでしょう。

『天の御使い』は自分たちをだまさないと思っているでしょうが、私達は別物なのです」

そこが問題なのですよね～

「そんな簡単な問題かよ。解決してやるさ」

そう言うと、教経殿は町の広場の方へ歩いていった。

「何を考えているのでしょうか？」

「わかりませんが、お兄さんについて行ってみましょう～」

そう言って風達もお兄さんの後を付いていきました。

「よう、元気か貴様ら！今日は貴様らにおいしい話を持ってきてやったぞ！」

教経殿が大きな声を張り上げると、たくさんの人が集まってきます。

「ここに大きな丸太ん棒がある。こいつを南門まで担いで運んだ人間に百金を与えよう！簡単なモンだろうが！誰かやってやろうという奴は居ないか！」

……百金とは、また大金ですね～

突然の話に町の皆さんは訝しんでいますが、『天の御使い』たるお兄さんが言っているのです。ひょっとすると本当に百金貰えるのかも知れないと悩んでいるのが手に取るように分かります。金額が金額だけに、なかなか信じ切れない様子ですね～

「ほ、本当に百金貰えるんだろうな！？」
「たりめぇだろうが！俺は嘘は言うが、人を騙して弄ぶような真似はせんぞ！」

……星ちゃんが思いっきり被害者になっていた記憶があるのですが、ここは触れないでおきましょう。

「……よぉぉし、やぁってやるぜ！！！！」

……ぴすとるの発射音が云々という電波を受信しましたが無視します。意味が分かりませんからね～

自分が運ぶ、と言った人は丸太を肩に担ぎ上げて南門まで移動していきます。
その後を、お兄さんと群衆が付いていきます。

「……ぶはぁ～、つ、疲れたぁ～」

やぁってやるぜ！さん、改め忍さん（お兄さん命名）は、無事に丸太ん棒を南門まで運びました。

「おぉ～中々やるじゃんダンクーガ。ほれ、約束の百金だ」

そう言って大金を彼に渡します。
早速名前が変わっている気がしますが、もうどうでもいいのでおいておきましょう。

「ほ、本当にくれるのか！」
「当たり前だ、そう言っただろうが」

お兄さんはそう言って苦笑いします。

「さて、諸君！明日、広場に仕事をして貰いたい、という張り紙がなされる！そこに書いてある報酬は、今こうやってダンクーガに金をくれてやったように、間違いなく支払いが履行される！安心してくれて構わない！詳細は明日の朝を楽しみに待っていることだ！もう解散していいぞ！」

あの様子だと町の皆さんは、明日の朝広場に集合するでしょうね～

……お兄さんは何故このようなことを思いついたのでしょうか。

「お兄さん、今のをあの一瞬で思いついたのですか？」

「いいや」

「どういう事なのです？」

「今のはな、秦の商鞅が法を導入した際に、その利益を説くために実際に行ったとされていることさ」

お～、成る程～実績のある手法だったのですね～

しかし何故お兄さんはそのことを知っているのでしょうか？

「その手の史書が大好きでねぇ。よく読み漁っていたものさ」

史書……春秋でしょうか。ただ読んだだけでは覚えていないものですし、読んだ人によって覚えていることはまちまちです。どうやらお兄さんは『人を統率する』ということに関連した箇所について読み拾っているようで、非常に豊かな知識を持ちそれに裏打ちされた柔軟な発想が出来る人のようです

やはりお兄さんはすごい人です。

……後はこれで風に手を出すことを躊躇するような腑抜けでなければ、理想のご主人様なんですがね～

でも、風はしつこいんです。覚悟して貰いますからね～

ふふっ

……大切なことだから何度も言うのですよ～

蝶の如く～13～（前書き）

星の拠点的お話。

蝶の如く～13～

～星　Ｓｉｄｅ～

槍を繰り出しながら、一歩踏み込む。

しかし、簡単に躱され、槍を引くのと同時にこちらへ接近してくる。
槍は、ある一定の距離を保っていることが前提となる武器だ。
その距離を詰められてしまうと、相手の獲物の方が格段に有利になってしまうだろう。

「そうはさせませんぞ、主！」

槍を引きって居ない状態で、再度槍を突く。但し、地面を。
その反動を利用し、後方へ大きく飛ぶ。

「ちぃ、やるねぇ。これで決められると思ってたんだが、流石にそう簡単にはゆかんかね」

主は楽しそうに嗤っている。

「当然！この星の槍術を甘く見て貰っては困りますな！」

そう言いながら、再度突きを放つ。今度は、突き殺すことを目的とせず、唯々速さだけを追い求めた突き。流石にこの突きに合わせて飛び込んでくることは出来ない。なぜなら、主には瞬動とやらを使わないという約束で立ち会って貰っているからだ。

「ちぃ、だが当たらなければどうと言うことはない！」

なにやら赤い彗星だの鍬吐露?だのとぶつぶつ仰っておられるが、恒例のお巫山戯時間なのだろう。「我が主ながら、頭蓋の中身が腐っているのではないかと疑いたくなる時が多い」

「……おい星、そういうことは考える物であって口に出す物ではないなぁ」

「おお、口の端に乗せてしまっておりましたかな?」

「馬鹿が、その手には乗らねぇよ」

そういってニヤリと嗤う。

普段は単純な主らしく引っかかるが、立ち合いになると挑発など主には全く無意味なものになる。今の悪態など、多少突っかかって来てもいいと思うのだが。どういう鍛錬をしていたのだろうか。

「まぁ、いいさ。今の言動、後悔させてやるぜぇ、星?」

主がその気になったようだ。

こちらも全力で打ち倒させて貰おうか!

槍を小脇に抱え、奔る。槍を繰り出す。主目掛けて一度突き、二度目の突きは地面へ。狙いは主の……

「背後なんだろう?」

槍を支点に跳躍して空中にある私に、地面を確と踏みした主がニヤリと嗤いかける。

あぁ、これは負けだな。

そう思った時、脇腹に鈍痛を感じ、私は意識を失った。

「んっ」
「……気がついたか」
目を覚ますと、主に膝枕をされていた。目の前には主の顔。その後ろには蒼空が広がっている。
……なかなかに心地よい。今暫くこのままで居るとしよう。
「……またやられてしまいましたな」
「星はな、少し素直すぎるなぁ」
「は？」
ひねくれていると言われることはあるが、素直だと言われたことはない。
どういう事かと考えていると、
「ばぁ～か、性格じゃねぇよ、槍捌きのことさ。……例えば今の立ち合いで言えば、地面を付く時必ず躰が前傾姿勢になる。槍を繰り

出す時の基本の型としては確かに突く点に対して躰の前面、正確に言うと右肩と左肩を結ぶ線が正対するようにするのが正しいんだろうさ。槍が腰で突くものである以上な。だがそれを知っている人間からすれば、何を目的にしているのかを簡単に推測できるだろ？」

成る程、そういうことか。次はそれを利用して主を嵌めてやるとしよう。

「しかし主はいろいろなことをご存じですな」

「太刀というものはなぁ、武芸百般に通じるものなんだねぇ」

「それほどに強ければ、瞬動など必要としないのではありませんか？何故あれを極めようと思ったのです？」

「……極めようとして努力した訳じゃない。極めさせられたんだよ。爺共に」

心底忌々しそうに吐き捨てる。

瞬動、というものを見てみたいということで主と立ち合った際、あっという間に負けてしまった。

私の突きが戻るのに合わせてこちらに突っ込んできた。それは分かった。だが問題は、私の躰はその速さでは動かないということだった。

……あれは些か卑怯だと思う。

「主、あれは卑怯ですぞ」

「何が卑怯なものかよ。あれは弛みのない鍛錬の末に身につけた、謂わば武技の頂の一つだ。詐術でも奇術でもない、種も仕掛けもないただの技なんだよ。お前さん、自分の突きが速いことに文句を言ってくる人間がいても、歯牙にも掛けんだろう？それと同じだ。その手の苦情は受け付けていないんだよ」

確かにそうだが、それでも物には限度というものがあるだろうに。
私の槍捌きが速いことを引き合いに出しているが、理不尽さにおいて比較対象にもならないではないか。……だが、弛みのない鍛錬を続ければ、私でも身につけることが出来るということなのか？

「主、鍛錬とはどのくらいの期間行ったのです？」
「……なんだ、身につけたいのか？」

それはそうだろう。もしあの動きを私が出来たなら……天下無双の槍であると自他共に認められる存在になることは疑いようのないことのように思える。武人であれば当然、それは望むところだろう。
見ると、主は指を折ってなにやら勘定をしているようだ。

「……ざっと数えてみたが、１５年くらい掛かってるぞ、おい。爺共め、それを見越して3才というご幼少のみぎりから無茶ばかりさせてた臭いな……糞！忌々しい爺共め！何かの拍子にこっちの世界に来やがったらキッチリお歳暮届けてやるからなぁ、楽しみしてろ！この化け物爺め！」

……なにやら主の機嫌の雲行きが怪しいな。
が、どうやら主の祖父殿とその友人たる剣の師匠は主になにやらとんでもないことをさせていたらしい。

「主」
「……あぁん？なんだ、星。俺は今何故だか急に機嫌が悪くなったんだよ」

それは貴方のご尊顔見れば一目で分かりますとも。
ぱっと見で極悪非道な山賊間違いなしという尊いお顔をしておりま

すからなぁ。
道行く人間全てが思わず手を合わせて拝むでしょうな、命ばかりは、と。

「どのような鍛錬をしていたのです？主は」
「していた、じゃねぇんだなぁこれが。『させられていた』んだよ。……あぁ～全く糞爺め！絶対半殺しじゃ済まさねぇからなぁ！殺ぁぁぁってやるぜ！！！」

なんなんだこの殺気は……話を聞くには先ず主を落ち着かせる必要があるようだ。
己が主といえど、流石にこんな物騒な殺人兵器と同じ空間に居たくはない。

「で、落ち着かれましたかな？」
「……ああ、いきなり頭を抱き抱えられて胸に埋められたら爺ぶっ殺すとか言ってる場合じゃないだろうが」
ぶっきらぼうに答える。いけませんなぁ、主。もっと素直にならなくては。
まだ学習できていないようですが、他の者ならいざ知らず、似たもの同士である私には全く通じませんぞ？
「……嬉しいくせに」
「……五月蠅いんだよ」
「ふふっ、主。もっと楽しいことを致しますかな？」
「絶賛ご遠慮中だよ」
「おお、お堅い御仁だ」
「全盛期の俺に近づくためには禊ぎする位じゃなきゃ無理なんだよ」
全盛期の主、か。
ん！？これで全盛期ではないのか！？
「全盛期ではないのですか？今のこの強さで？」
「たりめぇだろうが。ちっとぬるいんだよ。今の俺は。『常在戦場』地でいってた基地外高校生だったんだよ」
「高校生？」
「あ～……私塾の学生のようなもんだ」
「成る程」
なんともまぁ、武に関しては本当に世に隔絶している感があるな、主は。

「で、俺が何させられてたか、だったな」
「そうです」
「……とりあえず4歳くらいの時に身の丈越える木剣持たされてだな」
「ほう」
「物干し竿に吊された布きれを、『斬れ』って言われて毎日それを斬るために剣速を上げようと努力してた」
「はは、主。面白い冗談ですな。木剣では『破る』事は出来ても『斬る』事は出来ますまいに」
「……できるぞ？圧倒的な剣速を以て、間合いさえ間違わずに振るえば意外に簡単だ」

……馬鹿な……

「後はねぇ……そうそう、『人の気配を感じるためには先ず大自然と一体となる必要がある』とか言われて、目隠しされた上でよく分

からん山に放り投げられて1週間瞑想してろって言われてやってたな」

「……効果があるとは思えませんが？」

「いやぁ、意外や意外、これがちゃんと続けているとあるんだよねぇ。山ん中にいる、例えば猪であるとか熊であるとかの発する気配って言うのが分かるようになるもんなのよ」

……目の前に居るのは本当に人間なんだろうか……

「あと、『能く剣を使うためには良い目を養わなければならない』とか言われて、これまたよく分からん山に連れて行かれて3週間くらいずっと流れ落ちる滝を見続けていろって言われてずっと見てたな」

「……それで何が見えるようになるのです」

「星、滝ってなぁ、水が一粒一粒集まって出来ているんだぜ？」

……何を言っているんだこの人は。

「そんなことは私でも分かります」

「いやいや、分かるんじゃないんだって。見たらそうなってるもんなんだよ」

つ、疲れる……常識がぶっ飛んでいる回答にも程がある……

あぁ、だから主には常識がないのか……

「あとはそうだなぁ……躰の重心が常に臍の下に来るようにしなきゃならんとかで、今俺が佩いている清麿と同じようによく斬れる剣の上を素足で歩かされてたな。それが丁度5歳くらいか」

なんなんだその鍛錬方法は。

「主、それは一歩間違えると足が斬れてしまいますぞ？」
「あぁ、一度右足の小指がおさらばしたよ？すぐに小指持って医者に駆け込んだらしいが俺は覚えてない」

……それは幼児虐待以外の何物でもないと思うのですが……
……主がああなるのもうなずける。

ただ、何気にいい思い出を語っているような楽しげな主の表情ははっきり言って怖い。
これをいい思い出として消化してしまっている時点でこの人はもういろいろと手遅れだと思う。

お師匠殿、一体貴方は何を育てようとしていたのですか……人型決戦兵器か何かですか？

「後はねぇ……」

主、もうおなかがいっぱいです……私はそのような鍛錬には耐えられそうにありません。まず精神的な意味で。

蝶の如く～１４～（前書き）

稟と教経の拠点的なお話。

蝶の如く～１４～

～稟　Ｓｉｄｅ～

「結構な人数が集まったもんだねぇ」

募兵に応じてきた者達を目の前にして、教経殿が笑っている。

「そんなに『天の御使い様』が率いる天兵とやらになりたいもんかね？俺なら御免被りたいがなぁ、そんなこっ恥ずかしいご大層なお名前を戴いちまったら戦場でもお行儀良くしなきゃならなそうだもんなぁ」

……そういう理由で嫌だという人は多分貴方だけだと思います。

「教経殿。彼らは一応星が行った選抜試験を抜けてきた者達です。それなりに見所がある者が揃っていると思います」

「ふぅん。無駄に自分に自信がある、と。じゃぁ、とりあえず挨拶でもしとくか」

私の言葉をおそらくわざと悪く解釈して、広場に設けられた壇上に上がる。

「ようこそ、同志達よ。俺が『天の御使い』、平教経だ。先ず募兵に応じてくれたことに感謝する。ここに来てくれた、ということは、俺と同じ目的のために戦って貰えるものと信じている。ここに来る前に我が配下一の武人である趙雲の試しを受けて来て居ると思うが、そこで見所があると判断されたものだけがここにいる

事になる。貴様らは選ばれた兵であることを自覚して貰いたい」

先ず頭を下げ、御遣いの人間性が優れていることを示す。
次に、理想を掲げ、共に在れば彼らが希求する安寧をもたらす為の戦いに参加できるのだということを認識させる。
最後に、自分たちは選ばれた人間であるという自覚を持たせ、自信を持たせる。
相変わらず、教経殿の話術は巧みだ。

教経殿の考える『良くできた話術』について、一度その考えを伺ったことがある。

「稟、人はなぁ、自分が信じたいものしか信じないんだよ。だからいくら正しいことを目の前に提示してやっても信じない奴はいつまで経っても信じない。なぜなら奴らが欲しているのは自分が正しい事を示す某かの証拠のようなものであって、『正しいこと』そのものではないからだ。
だからなぁ稟、信じたいものを信じさせてやる様に話を進め、途中からだんだんと信じるものを変質させてやるのさ。信じているものと信じさせたいものとをすり替えると間違いなく反発するから、相手が信じているものの範囲を広げるんだ。信じさせたいものが含まれるまで、信じているものの境界を広げてやるんだよ。そこまでして初めて、自分が信じているものはこれだ、と相手に提示してやる。後は相手が勝手に、そいつ自身にとって都合がいいように判断してくれるさ。何せ彼にとっては稟は既に同じ思想を共有する同志なのだから」

誠に『良くできた話術』だ。
いや、最早これは話術とは言わず、洗脳とでも言えばいいのだろう

か。
教経殿は、論理的に物事を考えるが、人の思想や宗教、果ては感情についてまでかなり論理的な説明をする。
だから、話をしているととても楽しい。何事も理詰めでないと気が済まない私にとって、教経殿は格好の話し相手なのだ。

「だが諸君、少し考えれば分かって貰えると思うが、今この世界は荒廃している。
いくら貴様らに優れた資質があるとしても、それを磨かなければこの世界を生き抜いていくことは叶わぬ事だろう。だから、相当に厳しい修練に耐えて貰うことになる。口汚く貴様らを罵ることもあるだろう。それこそ、教官たるものを殺してやろうと決意するような罵声を浴びせかけられることがあるかもしれない。だが、それに耐えて欲しい。それに耐え抜いた時、貴様らは本当に俺の同志となったと言える。
諸君、俺は待っている。貴様らが俺の本当の同志になってくれる日を。

さて、修練は五日後から開始することになる。その前に、会っておきたいものに会い、喰らっておきたい酒や飯を堪能してくるといい。給金として支払う予定の内から、半額を前払いしよう。無論俺が述べた事以外にこの金を使ってしまっても構わない。
同志たる貴様らの晴れの日に向けての、ほんの手向けだと思ってくれればいい。
では、五日後に、ここで同志たる貴様らを待っている。解散！」

『同志たる貴様ら』、この言葉で既に軍属であるという意識を植え付けている。
こう言われては、既に他人のような気がしなくなっていることだろ

う。
相手の意識を、自分の側へ完全に取り込んでいる。
この辺りの言葉遣いと呼吸は、天性のものだろう。
教経殿がそう言うと、皆思い思いに金を受け取り、必ずここに帰ってくると言い残して広場から出ていった。

「ご苦労様でした」
「……はぁ……だりぃ……」

思わず吹き出しそうになる。なんという可愛い顔をするのだろうか。

「……なんだよ稟、そんなに俺の顔は面白いか？」

教経殿が、少し不機嫌そうに言う。
今なら分かる。これは、照れ隠しなのだ。星と良く似ているのだ、教経殿は。

「ええ、面白いですよ」
「……ちっ、だんだんと可愛げが無くなっていく事だな」

……そのお言葉は頂けませんね。
伝家の宝刀を抜かせて頂くとしましょうか。
恋戦に参戦するにあたって、教経殿の分析は万全に行ってあるのです。
この郭奉孝が神算鬼謀の士であることを、教経殿には実感して頂きましょう。

クイックイッ。

眼鏡を左手の中指で押し上げる。

教経殿を見ると、何とも言えない、ニヤける寸前で何とか踏みとどまっているような表情で、じっと私のことを見つめている。

やはり食いついてきましたね？

教経殿は眼鏡を掛けた私がお好みで、しかもこのような動作がこの上なく教経殿の嗜好に適うようだ。

風、星。どうやら、この恋戦、貴女達には勝ち目はないようですよ？まぁ、私が参戦した時点で私の勝ちは確定しているようなものなのですが、ね。

しかしこうなると、教経殿はいつかこの動作に耐えられなくなり、私に襲いかかってくるのだろう。

教経殿は、優しくしてくれるのだろうか、それとも、戦場における彼のように荒々しく私の躰を求めてくるのであろうか。興奮が激しい場合、私はどのように弄ばれてしまうのだろうか。教経殿からあられもない格好をすることを要求された時、私は……私は……

「……おい、稟？稟さ～ん？」

「ブーッ」

「ちょっ、なんだってんだ！？……だから言ったじゃねぇか、稟の鼻血の発射時刻表誰か作れよ！何番線から発射するかも分かりゃしねぇ！風の役割だろうがこういうのは！人身事故で山の手止まるぞ！ここしばらく見てないと思ってたら突然来やがった！……休火山みたいなもんだったのか？あれだ、ベスビオス的な。そうなると噴火周期とか、後は噴火前予震的な何かがあるはずなんだけど、一体それはなんなんだろうね？」

……なにやら教経殿が仰っているようだが、早いところ風の言うところのトントンをして貰いたいです、教経殿。気が遠くなってきましたもので……

妄想癖を何とかしない限り、どうやら圧倒的な差が付かないようですね……早く何とかしなくては。

あの時……抱きしめられた時は何ともなかったのに……はぁ……

～教経　Ｓｉｄｅ～

「蝶、ですか？」

稟が問うてくる。

「そうだ。揚羽蝶。それを俺の旗印とする」

「ほう、何故です。『平』、で宜しいのではありませんか？」

「いや、それがあっても問題無いが、それだけというのは駄目だ。俺の一族の象徴なんだよ、揚羽蝶は。だからそれを使いたい」

揚羽蝶を、俺の隊が掲げる旗の旗印とする。

そう言った時、稟も星も、風でさえも訝しんでいた。

まぁ、この時代にはそういう風習がないから仕方がないんだろうが、これは譲れないねぇ。

……揚羽蝶の紋。伊勢平氏である平清盛一党が好んでその意匠を取り入れ、誰もが一目で平家であると分かる、今では平家の象徴にさえなっている紋。

天下争乱に乗り出すと決めた時から、これを旗印とすることを決めていた。

「あと、赤旗だな」

「赤旗？」

新聞じゃないぜ？

「ああ、唯々赤いだけの旗。それも用意して貰おうか」

「……それもお兄さんの一族を象徴するものの一つなのですか？」

「そうだ。我が軍の将全員にある程度の数立てて貰おうか。これは譲れないねぇ」

本当かどうかは知らんが、平家を名乗るものとしては、ね。

「まぁ、宜しいでしょう。主がそう言っているのであれば他の二人はどうあれ、私は問題ありませんぞ？むしろ将来私の旗印となるのですから積極的に慣れていかなければなりませぬ。違和感の残らぬものとしなければなりませんからな」

そういってニヤニヤとこちらを見てくる星。
その言葉に、ハッとして、慌てて稟と風が同じ理由で同意してくる。

「いやいや、お前ら、俺はこれで真面目な話してるんだが？」
「教経殿、私も真面目な話をしているのです」
「お兄さん、風は至って真面目です」
「おや、主。私が本気であることはつい先日証明して見せたはずですか？」

……星ェ……

「……教経殿、星が言う『本気の証明』とは一体何のことでしょうか。教経殿の軍師であるこの私はなんの報告も受けていないのですが？」

ヤヴァイよ、食いついてきた。さすがは郭奉孝！そこに痺れる！憧れるぅ！
そして俺も眼鏡をクイックイッっとする動作に絶賛食いつき中です！
……相変わらず萌えるねぇ。何度目か分からないが、俺は眼鏡属性持ちなんだよねぇ。そして、麦茶が好きなんだよねぇ。

……稟よ、人様に報告するような事じゃないから。

「……お兄さん、風はお兄さんから頂いた恋文に書いてあった内容を信じていますからね？」

あれはね、風・・さん・・的存在に恐喝されたんであって風にあげたんじゃないんだよ？

「教経殿？」

「お兄さん？」

「ふっ、醜いものですなぁ。そう思いませぬか、主」

星ェ……これ以上はやらせないんだってばよ？

「詳細は星に聞くがいい！さらばだ諸君！フハハハハ！」

瞬動を使って逃げる！

身につけてて良かった瞬動！これのおかげで彼女が出来ました！宝くじも当たり、今本当に幸せです！

って、風・・さん・・的存在が目の前に居る……のか？

「オ　ニ　イ　サ　ン　？」

おいおい、俺は操作系だぜ？強化系とは相性が悪いんだ。ここは引かせて貰うぜ？

「はは、冗談じゃないか風。俺の口から説明させて貰うに決まっているじゃないか」

「そうですよね～では、説明して貰いましょうか～」

俺達の戦いはこれからだ！

平教経先生の次回作にご期待下さい！

……次回作を書く機会を得られれば、だが。

結果から言うと、今こうして回想しているから分かると思うが、次回作を書く機会を得ることは出来たようだ。尤も、色々と大事なものを、そう、大事なものを失ってしまった気はするが。

あの後、先の戦の後に思い悩んでいた際に星と口吻したことを言うと、稟は息をのみ、黙ってしまった。風も黙っていた。星は、得意

げにその二人を見ていた。そこまでは良かったんだ。そこまでは。

その後どういう話の流れであんな事になったのか、全く覚えてない。

その、衝撃が強すぎて。

……稟と風が、俺に対して口吻してきたのだ。

本来であればそれを阻む役割を率先して担うべきであろう星が、風・・さん・・的存在の前に萎縮してしまった俺を羽交い締めにし、次々に唇を奪われてしまったのだ。

あれか、これが強姦された気分か。

もの凄く汚されてしまった気がする。トラウマになるんじゃないかこれ。

もう御婿には行けないなぁ……俺死んじゃおうかなぁ……

……でもあれだな、稟も風も、可愛い顔してたな……うん、ありだな、あり。うんうんそうそう、得したんだよなぁ、きっとそうだ。よくよく考えるといい思い出なんじゃないかこれ？ははっ、なんだよ～、俺は何を悩んでいたんだろうなぁ、そうそう問題ないよ問題ない！いやぁ、良かった良かった、これも役得って奴だね。憎いね憎いね～。風の上気した顔！ウヒョー！サイコー！！稟なんて口吻した後恥ずかしそうにチラチラ上目遣いで眼鏡いじりながらとかおい！萌えてきたねぇ。何度も言うが俺は眼鏡属性持ちなんだよねぇ。何だ良いこと尽くめじゃないか馬鹿野郎！くぅ～、もっと注意して観察すべきだったんだよ俺はさぁ～折角の機会を逃しやがって！本当に我ながら情けなくて涙が出てくらぁ。大体俺はさぁ……

蝶の如く～15～（前書き）

これで更新速度が急激に低下する気がしている蝶々で御座います。

今7後とも宜しくお願い致します。

蝶の如く～15～

～星　Ｓｉｄｅ～

面白いことになるだろうと稟と風が主に口吻するのを手伝った後、暫くしてから主に報告しなければならぬ事ができたので、十分な時間も経ったことだし、と、様子を窺うべく話を向けてみた。

……後で三人で話をしたが、あれは少々強引に過ぎたと三人ともが結論付けた。あれはまるで強姦のようではなかったか。やっている最中は気がつかなかったが、今になって思えば間違いなく強姦の類だと思う。

「それにしても主は果報者ですなぁ。この国で有数の美女達に言い寄られ、あまつさえその全員の唇を貪るとは。これほどに周囲の人間に羨まれる境遇にあるお方は漢広しと雖もそうはおりませんぞ？」

……さて、精神的に傷ついていなければよいのだが。

「そうだなぁ、確かに得した気分ではあるねぇ」

……耳を疑ったが主の表情を見るに、どうやら聞き間違いをしているわけではなさそうだ。本当に得をした、と喜んでいるような節さえある。……あれがいい思い出になっているのか……

どうやってその結論に至ったのか、その過程が全くもって理解できないが、こういう、ある意味幸せな思考回路であるから祖父殿やお師匠殿からの鍛錬という名の苛烈な虐待もいい思い出として消化されてしまったのだろう。本当に便利な生き物だな、この主という生き物は。

「まぁ、それならば宜しい」
「本当は宜しくないだろうがよ。ああいうことはもっと雰囲気をだな……」
「宜　し　い」
「……はい」

あぁ、こういう時の主は可愛いな。

「で、どうしたんだ星」
「はっ、実は并州の内、新興と楽平の有力者らから書状が届いております」
「新興？楽平？」
「教経殿、新興はここ太原の北、并州で最も北に位置する郡です。楽平は太原の東、并州の東端に位置する郡です。ちなみに太原の西は西河郡、南は上党郡です。これらに太原郡を合わせた５つの郡から并州はなっております」
「ふぅん。知らなかったよ。解説ご苦労様、稟」
「はい」

役立てたことが嬉しかったのか、稟は嬉しそうだ。
この辺りは私の出身に近いから私でも説明できたものを……
後で妄想するように仕向けてからかってやることに決める。

「で、星。その書状にはなんて書いてある？」
「……私がここで読み上げてしまっても構わぬので？」
「馬鹿だなぁ、星。俺たちは運命共同体だ、どうせ全員知ることになる。俺が読んでからその内容を皆に教えるよりここで星が読み上げた方が遙かに効率が良いだろうが」
「しかし主、形式というものがありましょう」
「……一州の主になったのならまだしも、今はまだしがない県令様でしかないぜ？そういうことは身の丈に会わせて調整するんだよ。身の程を弁えない人間は不幸になるんだからねぇ」
「あぁ、教経殿」
「どうした、稟？」
「申し上げたことを失念されているようですが、教経殿は既に県令ではありません」
「首になったって事？」
「いいえ、太原郡の郡守、即ち太守になって居られます」
「……いつ？」
「……この間ご説明差し上げたと思うのですが？」
「どうやったの？」
「我々三人は何もせず、ただ各地を流浪していたわけではありません。中央官吏に伝手を作ったり地方太守に誼を通じたりしてきたのです。その伝手を使えば、ある程度のことは何とかなります」
「……無理はするなよ、稟。星、今回はとにかく読み上げてくれ」
「では、読み上げさせて頂きましょう」

新興の有力者からの手紙を読み上げる。

新興自体の賊の被害については、さほどでもないらしい。が、それは、新興にいる賊から受ける被害であり、その東、冀州・常山から定期的に態々遠征してくる賊共がおり、この対応に手を焼いている。これを撃退して貰えるなら、新興に住まう民を説き、『天の御使い』の傘下に収まる事もやぶさかではない。

「へぇ。些か気に入らないところがあるが、悪い話じゃないな。が、相手のある話だからな。簡単に請け負ったはいいが賊を目の前にするとそこには何と十万の大軍が！、なんてことになったら目も当てられないな。次行ってみようか。次」

「はぁ、放っておかれるので？」

「まさかな」

主はそう言って苦笑いをする。

成る程、後で議論するおつもりのようだ。

「だが、『付き従うにやぶさかではない』程度の人間に下について欲しいとは思わない。それは覚えておいてくれよ？助けはするが、俺には俺の考えがある。無条件には助けんからな？」

……こういう時の主は威厳があり、逆らおうとは思わない。

我らは主の臣下となったのだ、主の意向を優先させるのは当然だろう。誤っていない限りは。

次の書状を読み上げる。

楽平自体の賊の損害については、さほどでもないらしい。が、それは、楽平にいる賊から受ける被害であり、その北、冀州・常山から定期的に態々遠征してくる賊共がおり……ん？

「あ～、星、もういいや。同じ事が書いてあるわけだよな？」

「はっ、その通りです」
「……違う郡で同じ被害、か。風、少し調べ物をして貰っても構わんか？」
「なんでしょうか～」
「それぞれの郡が同時に襲われているのか、別々に時期を分けて襲われているのか調べてくれ」
「かしこまりました～」
「稟。稟にも頼みたいことがある」
「はっ、なんなりと」
「常山にいる賊共の勢力分布とそれぞれの規模が知りたい。郡境付近の者どもだけで良い。頼めるか？」
「……教経殿はただお命じになれば宜しいのです。私達はその通りにやるだけですから」
「……良くできた軍師様だよホントに。では稟、調べろ。出来るだけ詳細に、な」
「承知致しました」
「とりあえずこれらが分からんことには現状の俺たちで何とかなるのかの判断も出来んからな」
「主、私には何の仕事もありませぬのか？」

不満げに尋ねる。
私だけ役に立てない。それは御免被りたい。
戦に敗れることは大嫌いなのだ。特に、この恋戦にて敗れるのは。

「ちゃんとやることはあるぜ？練兵だよ。俺も一緒にやる。殺気全開でぶつけて訓練させるぞ」

……主と一緒か。ふふっ。
稟達には悪いが、普段政向きの話で主との時間を確保して居るのだ。
こう言う時は独占させて貰う。練兵帰りに買い物にでも付き合って

貰いますかな。
買うのは……うむ、下着が良いな、勝負下着。主をからかうことが出来、かつ主の劣情を誘う下着も買うことが出来る。なかなかどうして、私にも軍師がつとまりそうではないか。ククッ

「では、一旦解散だ。それぞれの有力者には、物事には必要な準備というものがある、とでも書いて寄越してやれ。事態が切迫して『とにかく助けて下さい』と言ってくるまで待ってやるとしよう。助けて貰う側が助ける側とほぼ対等な関係を築ける、などと甘い幻想を抱いている様だから先ずその幻想をぶち壊してやる」
「他の者を頼ることも考えられますが、その辺りを教経殿はどのようにお考えでしょうか」
「それならそれで構わんさ。俺たちは来るべき飛躍の秋の為に、内政に軍備にと忙しいのだからな」
「承知致しました」
「承った」
「わかりました～」

主はある程度長期的な視野に立っているらしい。
理想と現実。
その間で上手く加減が出来るお方だ。まず間違えることはないだろう。

～教経　Ｓｉｄｅ～

郊外に兵を整列させる。
２０００名の兵。壮観だねぇ。これが皆俺に付き従うわけだ。戦になれば逃げだす奴も居るんだろうがな。

「主、如何ですかな、この星が鍛えた兵共は」
「つわもの、ときたか、星」
「左様、そこらの官軍に比べれば遙かに練度は高いと自負しております」

官軍に比べれば、か。
まだ不満みたいだな、星は。

「まぁ、そんな微妙な言い方しなさんな。いずれ星が望むような兵になるさ。実践を幾度かくぐり抜ければな。俺が偉そうに言えたものではないが」
「……御意」
「さて、んじゃ始めるとしようか」

そう言って兵を１０人ずつ、２００組に分ける。
それを二人で分担する。要するに一人１００組。
兵を見渡しながら、言う。

「貴様ら、今からこの俺が直々に手合わせをしてやろう。良い訓練になるぞ?今から１００組を連続して2巡するまで相手にしていく。もし俺を打ち倒すことが出来たなら、その場で将にしてやろうじゃないか。どうだ、やる気になったか?」

余裕だろう。そう考えているようだ。

実戦を経験したことがない人間が何を以てその余裕の根拠としているのかは分からんが、今貴様らが持っているのは余裕なんかじゃなく慢心だって事を嫌って程教え込んでやるよ。今までお前らが積んできた鍛錬は普通の人間であることを止めるためのものじゃない。厳しいっつったって死ぬ訳じゃない。

俺はなぁ、俺自身がああいった鍛錬をしてきたが故に鍛錬に関してはそれなりに厳しい方でなぁ。
まぁ、愉しんでいってくれよ。俺も愉しむからさ。

「ほらほら、次！とっとと前に出ろ！」

2巡目、97組目。

一番見込みがあった組。太原での実戦経験者が揃っている組。御遣い様に守って貰える太原の人間がなんでこんな所に居るんだろうと最初思ったが、太原の若いのが何人か入ったって報告を稟から受けていた気がする。まぁ、問題はそこじゃなくて、先頭でいきり立っている奴だろう。

「今度こそ、やぁぁぁってやるぜ！」

そう、ダンクーガだ。お前こんな所まで来てなにやってんだよ……あれか？金無くなったのか？

「「「「おうよ！」」」」

その言葉に周囲のオッサン共が応えている。

オッサン共、分かってないなぁ。そこは「ＯＫ！忍！」って答えるところなんじゃないかね？

どうでも良いから早く合体しやがれ。見てみたいから。組体操的なものになるのか？ああ、濃厚なホモスレ的な合体は止めてくれ。ん

なことしなくても免許証は返してやるから。

この組には俺の全開の殺気に当てられているのにちゃんと動いて俺に向かって武器振り上げて来た奴が数人いたからな。やはり、実戦の経験は大きいのだろう。特にダンクーガに関してはあの南門の激戦を生き抜いている。先ず間違いなくこいつはものになるだろう。あの悲惨な戦いを生き抜いて、凄惨な光景目の当たりにして。それでも戦う意志を持っている時点で大した男だよ、ダンクーガ。普通は二度と戦いたくないって思うだろうからさ。御遣い様が守ってくれんだから。

……これ以外の組は駄目だ。全員そうだとは言わないが、動くことは出来ても戦うことはできなかった。まぁ、俺以上の殺気をぶっ放せる人間なんてそうはいないんだから実戦になると今回の経験が役に立つだろう。ましてや、次も賊共が相手になる気配が濃厚だ。賊の中に俺並みのものが居るなんてことは絶対に無いだろうからなぁ。

「やれやれ、ダンクーガ、またぶん殴られたいのか？」
「うるせぇ！俺は断空我なんて名前じゃねぇんだよ！」

何気にあってないか、その当て字。……多分正解だと思う。やるな、ダンクーガ。
でもなダンクーガ、お前の顔、左右のバランスがえらいことになっちゃってるんだよねぇ。すまんな。暑苦しくてつい、ねぇ。

「はぁ。じゃぁなんて名前なんだ、テメェはよ」
「俺は……」
「もう良いじゃん、ダンクーガで。そう名乗っちゃいなよ。その名前、お前にくれてやるからさ。この御遣い様からお歳暮代わりに。んで真名は忍な」

「なっ……馬鹿にしてんのか！」

馬鹿にはしていない。暑苦しい馬鹿だとは思ってるけど。

「なんでも良いや。とっとと掛かってこいよダンクーガ」

「なっ……あんたが俺の名前を訊いてきたんだろうが！んでその名前で呼ぶな！……よしっ、隊列を組め！」

「おおっ」

「まかせろ！」

断空砲、フォーメーションだ！ってか？

甘いねぇ。俺はそれを待つほど気は長くないんだよねぇ。

本音を言うと、そろそろ飽きてきたんだよねぇ。

「隊列を整えるのは良いが、少し隙だらけなんじゃないかね？お前さん方。隊列を整えるまで待って貰えるとでも思っているのか？だとしたら大きな間違いだねぇ」

走っていってあまり動けていない４人をぶっ飛ばす。

ぶっ飛ばすって言っても足踏んでぶん殴るだけだ。痛いよね、これ。

「それから、お前らもっと周囲に気をつけないと。前に敵ガイルと思って見ていたら後ろからサマーなんてことはざらにあるんだよねぇ」

瞬動で奴らが全く警戒していなかった後ろに回り込んで手刀で５人の意識を刈りとる。

……ちゃんと一回目も後ろから殴りつけてやったのに。

学習しない奴らだ。

「あぁ、お前ら！」
「さて、ダンクーガ、お祈りは済んだか？」
「絶対にあんたに一撃入れてやる！」

そう言って殴りかかってくる。
おいおい、お前槍もってんじゃん。何で殴りに来るんだよ！
……はぁ。ちょっと頭が残念な子なのか？
ダンクーガが伸ばしてきた右手手首をひっつかんでこっちに引っ張りながら、自分の躰を回転させ沈み込ませる。こう言うと何か高度なことをしているようだろう？ただの一本背負いさ。勿論、引き手をずっと持ってあげない、投げっぱなしの、だけどなぁ。ダンクーガ。痛いぜ？覚悟しとけや。

「のわっ」

そう言ってダンクーガは飛んでいった。
『のわっ』なんて言う人間、本当にいたんだねぇ。

いやぁ、良い仕事したわ。今回は。
……この組の人間中心に部隊編成すりゃ間違い無いだろう事が分かったのは大きな収穫だな。
特にダンクーガは、頭はともかくとして、俺が目の前で殺気飛ばしてるのに全く問題にせずに殴り掛かって来やがった人間だ。しっかり活用させて貰うとするさ。こういう暑苦しいのが居ると周囲の人間は意外に萎縮したりしなくなるもんだろう。

さて後3組だ。

さっさと終わらせて星と一緒に帰ろ帰ろ。

買い物に付き合えって言われたけど、何たかられるんだろうねぇ。
憂鬱だねぇ。

蝶の如く～16～（前書き）

ヒャッハー！
新鮮なクリスマスプレゼントだぁ～

蝶の如く～16～

～稟　Ｓｉｄｅ～

教経殿から受けた命令をこなし、報告すべく移動する。。
報告すると言っても……まだ恥ずかしくて目をまともに合わせるのは無理そうだ。

その、自分から口吻をすることになるとは思ってもみなかった。
星と既に口吻したことを聞かされた時、目の前が真っ暗になった。が。
それは星からしたことで教経殿からしたものではないということが風の誘導尋問によって判明し。

それならばと、風主導で私達二人がそれぞれ教経殿の口吻したのだ。
風曰く、平等にして頂かなくては困ります、ということで。
星は、何故か嬉々とした表情を浮かべて協力してくれた。

……教経殿は嫌がらなかった。それが少し嬉しかった。

考え事をしているうちに、教経殿の前まで来ていた。

「稟、ご苦労さん。で、首尾は？」
「はっ、こちらに取り纏めました」

そう言って調査結果を渡す。

「へぇ、よく調べてあるじゃないか、稟。常山との郡境付近の賊共についてだけで良いと言ったのに、ほぼ全域に渡っているな。……

こいつはかなり価値がある資料になりそうだねぇ」

教経殿は面白そうに資料に目を通しながら、そう褒めてくれた。
役に立てたことが何より嬉しい。

「はっ」
「後は、風から情報を仕入れたらある程度青写真が描けるようになるだろう」

そう言って教経殿は私の方を見る。
……あのようなことをしたが、教経殿は私のことを嫌っていないのだろうか？
眼鏡を中指で押し上げながら、チラチラと教経殿の方を伺っていると、教経殿はいつも通りの『あの』顔で私の方をじっと見つめている。
どうやら、嫌われては居ないと思って良いようだ。

「お兄さん、お待たせしたのですよ～」

風が部屋に入ってくる。

「おつかれさん、風。そっちはどうだった？」
「はい～いろいろと情報を集めてみたのですよ～。まず襲われている時期ですが重なった時期は全くありませんね～。襲ってくる周期ですが、辺りの人たちに聞いたところでは４０日前後、だと思われます～。襲ってきた賊の規模はいつも同じくらいで、およそ５００とのことでしたよ～下回ることはあっても上回ることはなかった、とのことでした～」

流石は風だ。教経殿は襲われている時期が重なっているかどうかに

ついてのみ言及されていたが、襲撃間隔や襲撃参加人数については何も仰らなかった。伝え忘れていただけなのかそれとも風を試そうとしたのかは定かではないが、それらは間違いなく必要な情報だった。

「よく調べてくれたな、風」
「いえいえ～お兄さんのためですから～」

風は教経殿と普通に会話をしている。
……我が友人ながら、偶にその神経の図太さを疑ってしまう。
どれだけ図太いのか、と。

「これで絵図が描けそうだな」

教経殿が私が先程お渡しした資料に目を通しながら、地図を前に話し始める。

「先ず、隣接する2つの郡へ出稼ぎに来ると言うことは、常山、新興、楽平の3つの郡が接している、この辺りに賊共の根城があると考えて良いと思うんだが、さて、我が子房達はどう思う？」

我が子房。即ち張良。漢の高祖に天下を取らせしめた人物。
教経殿はそれになぞらえて、そう私達を呼ぶ。その期待には応えなければならない。風を見れば、真剣な表情で地図を見ている。風も同じ思いで居るのだろう。
今度こそは。

そう思って地図を見る。教経殿が指さしているのは、3つの郡が接している箇所にある、山岳の麓辺りだ。

……４０日程度の間隔で、と言うことを考えると、その辺りが妥当だろう。
それ以上遠ければ略奪したもので愉しむ時間がさほど取れない。つまり、随分と物資を余した状態で再び略奪に行く、ということになる。それはあり得ないのではないか。
それ以上近ければ、襲撃は４０日程度の間隔では済まないだろうし、何よりそこより国境に近い場所は平原だ。身を隠すようなものがない場所で集団生活をしているとは考えられない。

「教経殿が考えている通りだと思います」
「お兄さんの考えでまず間違いはないと思いますよ～」

そう言うと教経殿は微笑む。

「で、襲撃人数が５００、となると……こいつら、かな？」

教経殿が、略奪を行っている賊に目星を付けたようだ。
教経殿の横に立ち、資料を覗く。……多分、間違いないだろう。
全体で８００名前後の賊。これに違いない。だが、教経殿は何故彼らに目を付けたのだろうか。

「教経殿、何故彼らだと？」
「……稟、自分たちの根城を空にして遠足に行く馬鹿は居ないだろうよ。ある程度食料や酒、金などが備蓄してあることを想定しているが、それを近隣の同業者達から守るためにはそれなりの抑止力が必要になってくる。つまりこの場合は兵数だ。襲撃に５００名を供出して、かつ残りの人数で周辺にいる同業者に対する抑止力としての兵数を確保できそうな奴らを探したのさ。そうしたらこいつらしか居なかった。だからこいつらだと思った。……何か間違ったのか、俺は？」

非常に論理的だ。そして、それで間違いないだろう。
私と似たような思考によって同じ結論を出したようだ。

「いえ、私も教経殿と同じ理由で、彼らに間違いないと思います」
「稟と同じ理由か、それは嬉しいねぇ」

心底嬉しそうに、教経殿が私に笑いかける。
……この人は計算してこれをやっているんだろうか。

～風　Ｓｉｄｅ～

「稟と同じ理由か、それは嬉しいねぇ」

お兄さんが稟ちゃんに微笑んでいます。
稟ちゃんは、あれが恥ずかしい時の癖でしょう。頬を軽く上気させながら、眼鏡を左手の中指で押し上げる動作を繰り返しています。

……お兄さんが喜んでいるようです。
稟ちゃんのあの伝家の宝刀は、お兄さんを滅多切りに出来るようです。
もし稟ちゃんが過度の妄想により鼻血を吹き出すという悪癖を持っていなかったらと思うとぞっとしますね～

「で、風。次はどちらの郡が襲われるんだっけ？」

おぉ、風の番ですね～。稟ちゃん、負けませんよ～？

「最後に襲撃されたのは新興郡ですので、次は楽平郡になるでしょうね～」
「ここら辺りから楽平郡へ、だな……」

お兄さんが考え込んでいます。
賊さん達がどの辺りの町を襲うのか、それを考えているのでしょう。

「遠足に行くのに往復で１０日以上は掛けたくないだろうな。お楽

しみの時間を確保しなきゃならんことから考えて。そうなるとここから……ここまでの町の内のどれか、ということになるのかな」

お兄さんが予想した町を見てます。

……町の外壁などを考えるとあり得ない町が入っていますね～。

まぁ、お兄さんは地図しか見ていませんから仕方がないのでしょうけど。

「お兄さん、この町とこの町、あとこの町も対象に選ぶ必要はありませんよ～」

「へぇ。また何で？」

「それらの町は外壁が強固で、官軍とは別に自警団が編成されているのですよ～」

「成る程、それは襲う側からすると面倒だな」

「そういうことですね～。ですので、対象となる町はこの町とこの町、あと、この町と、この町。この４つの町ということになりますね～」

「……風、実はどの町が襲われる可能性が高いか、見当が付いているんじゃないのか？」

「ふふっ、そうですよ～お兄さん」

「それはどこだ？」

「それは恐らく最も南にある町だと思うのですよ～」

「根拠は？」

その町は、まだ1度も賊に襲われたことがない町。そして、調べた限りでは賊さん達は北から順番に町を襲っているのです。賊さん達がこの町まで来ることが億劫で最北の町に再度襲撃しに行くことも考えられますが、あの町にはもう略奪するほどの魅力ある物資は残されていませんでした。量的に。そのほかの町は最北の町以降に襲われている町。物資も、当然更に少ないはず。だから、恐らくこの

町。

そうお兄さんに伝えます。

「理に適ってるな。それを採用しよう」

お兄さんがそう決断しました。

～星　Ｓｉｄｅ～

「じゃぁ、星。今回の遠征には、兵をどれくらい連れて行くかね？」
漸く私にお鉢が回ってきたようだ。
「無論５００、と言いたいところですが、出来れば１０００、それが無理でもせめて８００は引き連れて参りましょう」
「その心は？」
「……相手よりも多く兵を引き連れていけば、取り得る行動・選択肢というものにゆとりを作ることが叶いましょうからな」
「ん、流石星だ。将として間違いなくこの国で１，２を争う存在になれるよ」
はっきり言って、主に遇うまでは私は将としての責務というものについて全く考えたことがなかった。私の武技があれば大抵のことが出来る。そう思っていたし、実際に大抵のことは何とか出来ていた。だが主は、先の賊との戦が始まる前に私にこう仰った。
『将として国で１，２を争う星』
この言葉を聞いた時、確かに嬉しかったが、只それだけの事だったのは主には内緒だ。
何せあの時の私は、自分が居れば問題なく戦に勝てると、何の裏打ちもないままに思い込んでいたのだから。だが、死体に埋もれた主を発見した時、そんなことはないのだということを思い知った。己の槍だけでは主は守れない。それを実感した。
戦が終わり、主が町の長老と話をしている時、稟や風を主は「我が子房」と言っていた。
彼女達が張良になぞらえられたことに最初は驚いていたものだが、

彼女達を見ている内にその評価は妥当なものなのかも知れないと思えた。だから、私に対する評価も、ひょっとすると妥当なものなのではないか。私には将としての才能があるのではないか。その時初めてそう思った。

それから私は、皆に隠れて兵書に目を通してみた。
今まで目を通さなかったことが損失であると思えるようなことが書いてあった。
今の主からの問いに、以前の私なら迷い無く最大でも５００で行くことを声高に主張しただろう。
だが、今は違う。戦というものは基本的に敵より多くの兵を集めた方が勝つ。それを覆す事に意義を見出していたがそれは敗亡への第一歩でしかないと思う。

兵数が少ない方が勝った例は有名だ。だが、それが有名になるのは、それが珍しいからだ。珍しい、すなわち、滅多にないということ。

……私から見て、以前の私は非常に危なっかしい。
『槍一本で立身出世』。大いに結構。それは今でも思う。
だが、身を立て、世に出た後に就く地位で求められるのは、まさしく将としての働きなのだ。
それを、全く考えたことがなかったのに、『立身出世』を望んでいたのだから。

その危なっかしい私を見て、主は国で１，２を争う将器があると言い、こう考えることが出来るように導いてくれた。巡り合わせが良かったのだと、本当に思う。
この人は私の何を見て、そう言いきることが出来たのだろうか。
やはり、人の上に立つ英傑というものは、そういう目が備わっているのだろうか。

……この人が見ている風景を、私も見てみたい。
この人の目には、今の世は、人は、どのように映っているのだろう。

「どうした、星。俺の顔になんか付いてるか？」

主の顔をじっと見ていると、そんなことを言ってくる。
主との距離がもっと近くなれば、この人が見ている風景を私も見ることが叶うのだろうか。

いい加減この距離を縮めたいものだ。そう切実に願っている自分が居た。

蝶の如く～17～（前書き）

クリスマス・・・
殺意があふれてくるねぇ。前が見えないんだねぇ。

蝶の如く～17～

～教経　Ｓｉｄｅ～

「……相手よりも多く兵を引き連れていけば、取り得る行動・選択肢というものにゆとりを作ることが叶いましょうからな」

星がそう答える。

「ん、流石星だ。将として間違いなくこの国で1，2を争う存在になれるよ」

……星は随分変わった。星に話しかけながら、そう思う。

この世界で一番はじめに出遭った、自分が知っている英傑。

この世界で一番はじめに死合った、実力のある武芸者。

それが、星。趙子龍。

だけど、俺が勝手に想像していた趙雲とは少し違ってた。

まぁ、性別を抜きにしてだけど。

……自分の腕に自信を持ちすぎだった。はっきり言えば、過信。だからこそ、相手の力量も確認せず、いきなり俺に突きかかって来た。もし相手が腑抜けた俺でなく、『常在戦場』糞爺だったら、星は殺されていただろう。最初の一突きを放った刹那に。間違いなく。

自分が強ければ、世の殆どのものがどうとでもなる。

そんな、危うさを感じさせる女性だった。

あの賊との戦の前、星に、将として国で1，2を争う、と言った。

趙子龍にはそうあって欲しい。そう思ったからというのもあるが、頭の回転が速くまたよく人を観察している為、将に向いていると思ったからだ。この言葉で発奮してくれれば、そう思った。
だがその時には望んだような反応はなかった。嬉しそうにはしていたが。

だけどこの間の練兵の際、星は兵の練度に納得していなかった。
昔の星なら、兵の練度など歯牙にも掛けなかっただろう。自分が居れば問題無いのだから、と。
ひょっとしたら。
星は将として成長しようと裏で努力をしているのではないか。
そう感じた。

それが今、確信に変わった。
こう言うと少し変な気もするが、星は、間違いなく趙子龍その人だった。
やはり、英傑だ。何の理由もないが、そう思う。
何の理由もなく自分が英傑であることを周囲に納得させることが出来る存在。
それが、英傑というものなのだろう。

見ると、星がじっと俺の顔を見ている。
……また良からぬ事を考えているんじゃあるまいなぁ、星？

「どうした、星。俺の顔になんか付いてるか？」

そう言っても、星は何か考え事をしているようで、返事をしなかった。

何を考えているのやら。

星を見ながら、そんなことを思っていた。

～稟　Ｓｉｄｅ～

方針は決まった。
引き連れていく兵の数も決まった。

これによって、持って行かなければならない兵糧などの補給物資の総量も決まった。

後決まっていないのは、誰が遠征に参加するのか、ということだ。

勿論教経殿は外せない。

”『天の御使い』が兵を挙げ、強奪を繰り返す賊を討伐した”これを全国に広める為には、何としてもその場に本人が居なければならないだろう。

そうなると、星には太原を守備する将として居残って貰わなければならない。

……納得しないだろうが、説得しなければならないだろう。

後は、軍師として私と風のどちらを伴うのか、ということが問題になる。

私としては、自分が適任だと思っている。

戦場での駆け引きについては、風に勝っていると思うから。

そう思いつつ、議題として提示する。

「教経殿。方針も引き連れる兵数も決まりました。後は誰が征くのかを決めねばなりません」

星を見つめていた教経殿がこちらを見る。

「……誰が征くべきだと思う？」

「お兄さんは外せません。軍師としては稟ちゃんを伴われるのが良いと思うのですよ～」

「成る程。星が太原の守将、風がその軍師、ということか」

「はい～、そうするより他に途はないと思いますよ～」

……風からそう言い出すとは思わなかった。
私よりも風の方が、精神的には成熟している。
問題は……

「主、私を連れて行かない、というのは頂けませんな」

……やっぱり。

「そうは言ってもな、星。太原の守将が居ない。それでは遠征している兵に里心が付いてしまう」
「……それでも納得がいきませぬ」
「はぁ……星、どうしたら納得してくれるんだよ」
「……戻ってきたら、一日付き合って頂けますか？」
「それで納得するのか？」
「納得は出来ませんが、説得はされましょう」

……星、何か企んでいるのでは……

「……面倒だが仕方がない、それで手を打とうじゃないか」
「……なにやら気に入らないお言葉がありましたがそれは良しとしましょう。二言はありませんな？」
「ああ、無いよ。平氏の赤旗に誓って」
「宜しい」

満面の笑みを浮かべている星。いつもの、教経殿に悪戯を仕掛けようとしている時に浮かべている笑いとは違う、『女』の笑貌。
……風と目を交わす。風も気がついている。
絶対に抜け駆けはさせませんよ、星。

～教経　Ｓｉｄｅ～

次に襲われるのはここだ。あの後すぐ、風に、そう流言を飛ばさせた。

有力者とやらが俺に全面的に膝を屈しない限り、俺は動かない。危機感を持たせぬと、どうやっても間に合わない時に助けてくれと言ってくる可能性がある。それは避けたい。俺の名声的な意味で。『天の御使い』と称する以上、見捨てる、というのは望ましくない選択だ。だからこそ対等に近い形の関係に持ち込めると思ったのだろう。

……だが、俺が動かないうちに賊共に襲われるのは民だ。だから、先手を打ってやったのだ。民から突き上げを喰らうように。

流言に踊らされた民からの突き上げを喰らい、楽平郡の有力者達が直接太原にやってきた。

漸く切羽詰まったか。そう思い、会って話を聞いてやった。御遣い様に従うには、条件がある。こう始まった。助けて貰う側から条件を提示する。こいつらは揃いも揃って阿呆だ。

「貴様らとは語るべき何物もない」

そう言って俺は部屋を後にする。風、お前に任せた。そう目語したつもりだ。

自分の寝室で清麿に打ち粉を打っていると、風が報告に来た。全面降伏だそうだ。それならば構わない。交渉ごとはやはり風に任せるに限る。

再び話し合いの席に付く。無条件に俺に従う。それを、盟約させた。盟約。

現代のそれとはちょっと違う。俺がやったのは春秋戦国時代的なそれだ。要するに、血で誓いを立てさせたのだ。互いの血を混ぜ合わ

せ、その血で約定を書き連ね、天帝に報告する。これで彼らは呪縛される。違えれば一族郎党皆天帝の怒りに触れて罰を受ける。この世界にはそういう文化が根付いている。利用できるものは全て利用させて貰う。

じゃぁ、お掃除に出発するとしますかね。今度の戦は俺が、最初から最後まで主導権を握る戦いだ。ヒィヒィ言わせて引きずり回してやるから覚悟しておけ、ドカス共。

襲撃されるであろうと目星を付けた町に一番近い、それなりに深い森に軍を待機させ、来賓のご到着をお待ちしている。……招いたわけではないから来賓とは呼べないか。

「ふぁ～あ、今日も天気だ俺ぁ眠い」

「教経殿、気を抜きすぎです」

「絶賛森林浴中なんだから無理な相談だろ、それ」

おお、稟がちょっと怒っている。
眼鏡クイクイしながら怒られてもなぁ。漲ってきたんだぜ？
俺は眼鏡属性持ちなんだよねぇ。麦茶が好きなんだよねぇ。

「大将～」
「何だ居たのかダンクーガ」
「偵察から帰って来たんだよ！」

あぁ、そういえばそんなこともあった気がするな。
誰か『やって』くれる人いるか～？って態々聞いてやったら案の定、
『やぁぁっってやるぜ！！！』って回答が帰って来たんだよなぁ。
お約束過ぎて吹いたわ。

「で、どうだった？」
「あぁ、賊共は来てないみたいだったぜ大将」
「ホントかぁ？……お前、頭が悪いからなぁ」
「何さらりと失礼なこと抜かしてるんだよあんたは！」
「いやいや、事実じゃん」

ダンクーガをからかうのは面白い。良い暇つぶしになるねぇ。

「で、狼煙があがって無かったって事で良いんだよな？」

敵を発見したら狼煙を上げろ、そう言って既に４人１組を５組、合計２０人北へ偵察に向かわせてある。４人なのは、敵情を記した資料などを手に入れて戻る場合を想定し、確実に情報を持ち帰らせる為だ。敵に見つかったら一人はとにかく逃げる。残り三人で足止めをする。残る三人は死ぬだろうが、そこは死んで貰うしかない。苦

情は、俺が死んだ時にあの世とやらで受け付けてやるからさ。

「あぁ、煙は出てなかったよ」
「そうか、ご苦労さん。休んできてくれ。飯と酒が用意してある」
「……最初からこういう対応してくれよ……」
「悪いな、暇だったんだよ」
「……何で俺だけ……」

いやぁ、そりゃお前にいじり甲斐があるからだよ。良かったね、ダンクーガ。君は御遣い様のお気に入りなんだからこれからも宜しく愉しませてくれ給え。

「……教経殿、実は他の町を襲っている、ということはないでしょうか」
「無いんじゃない？」
「しかし、明後日辺りに来るというのであれば、狼煙が上がっていて良いと思うのですが」
「……もし他の町襲ってたらどうするつもり？」
「兵３００をここに残しておいて、その町へ急行すべきかと」
「却下」
「教経殿！」
「稟、落ち着けよ。一度決めた方針を転換するのは事故の元だ。大丈夫さ、落ち着け。賊共は馬鹿だから迷子になったりしてるんだろうさ」

そう言っても稟は落ち着かない様子だ。作戦を変更すると言い出すことからして、らしくない。
……ひょっとして先の戦のことをまだ気にしてんのか、この眼鏡っ娘は。早く功績を立てて軍師であることを認めて貰いたいってか？政関連で十分に軍師として有能だって事を示してるし、うちの軍師

は稟と風しかありえないってことあるごとに伝えてるつもりなんだが。まぁ、稟は軍政向きの軍師だ。戦場で本領を発揮し、それを見せたい。それで焦っている、そういうことか？

まぁいい、お話して稟の中にある問題を解決した後で、軍師として認めてるって事をきちんとお伝えしますかねぇ。

「稟」
「はい」
「お前、まだ先の戦のこと引き摺ってるだろ？」
「……はい」
「何が引っかかってる？」

どうしても消化できない『何か』があるんだろう。
賊共を読み切れなかったことがそんなにショックだったのか？

「……期待に応えられませんでした」

返ってきた答えに少し驚いた。そっちか。
……負担になっちまってるのか。
郭嘉だから気持ちの切り替えは出来ているだろう。そう思ってたが……やはり甘かったんだろうなぁ、俺の見通しは。自惚れかもしれんが、稟は俺に好意を持ってくれていると思う。無論、男女の仲として。

『好きな男の期待に応えられなかった』

俺は女じゃないからそれがどれほどの重みを持つものなのかわからない。ただ、決して軽くはないのだろうという事はわかる。

……どう答えたものかなぁ。
想定外の回答にそう思っていると、握り飯片手にダンクーガがこっちに走ってきた。
良いタイミングだ、俺はすぐに気の利いた回答が出来そうになかったからな。

「大将！」
「どうした？」
「煙上がってるぜ、多分」

……多分ってお前、なんだよその報告は……

「あぁ？どこに？」
「森ん中から見えるわけ無いだろ！こっちだよこっち」

稟をつれてダンクーガの後ろを付いていく。

「ほれ、あれ。あれが大将の言う『のろし』ってやつなのか？」
「……あぁあれで間違いないだろう」

これで稟も落ち着きを取り戻してくれるだろう。
やれやれだぜ。

「おい、ダンクーガ」
「あぁ？」

……相変わらず態度悪ぃなこいつは。こいつだけだぞ、御遣い様って呼ばないの。御遣いの大将ってなんだよ。
ま、こいつはこいつで俺の呼びかけ方が気に入らないんだろうけど。

「お前、休憩してなかったのか？」
「……気になってたからな。煙が上がらないってことは、あいつらになんかあったのかも知れねぇじゃねぇか……だからつい……」
……存外いい拾いものだったかもな、こいつ。
威勢が良くて面倒見が良い。良い先手大将になれるかもな。大将っても将軍じゃねぇが。

「いいかダンクーガ。体を休めるのも立派な仕事だ。今後こういうことはやめとけ。誰かに頼んどけばいいだろうが」
「ああ、分かったよ大将」
「働きついでだ、他の奴らに賊が来たって知らせろ、そして死ぬ準備をしとけって言っとけ」
「物騒なこと言うんだな」
「ダンクーガ、お前、分かるだろ？戦んなった時、心構えが出来ていないとすぐに死ぬぞ。南門、きつかっただろ？覚悟してなきゃ躰は動かねぇんだよ」
「……」
「死ぬ準備云々の箇所はお前の言葉で伝えていい。……駄目そうな奴が居たら目を掛けてやれ。太原の人間でな」
「……分かったよ大将」

そう言ってダンクーガは皆の所へ行った。

「さて、稟」
「はい」
「さしあたっての不安は取り除かれたか？」
「はい」
「そうか、まだ不安なようなら抱きしめてやろうかと思ったんだがなぁ、おい」

そう言ってニヤニヤ笑ってやる。
俯いてるねぇ。そして、恥じらっているねぇ。可愛いねぇ。
俺は眼鏡属性持ちな……

「……ではお願いします」

そうきましたか。最近大胆になってきてるなぁ、稟。
最初っからぶっ飛んでる人間が二人くらいいるけど。

「はいはいっと」

稟をゆっくり、後ろから抱きしめてやる。

「稟」
「はい」
「もっと自信持っていいぜ。稟は俺の信頼に応え続けてくれてる」
「……そうでしょうか」
「俺がそう感じてる。俺にとってはそれが全てだ」
「……はい」

良い香りがするねぇ。

あと、二日くらいか。
うちの稟ちゃん不安にさせてくれたんだ。しっかりお礼とご挨拶、

しないといけないよなぁ？

蝶の如く～18～（前書き）

新鮮な妄想をお届けします。クリスマスなので。

蝶の如く～１８～

～教経　Ｓｉｄｅ～

小高い丘から、戦場を眺める。
その俺の目の前を、稟が指揮する兵３００が撤退していく。
平氏の赤旗を並べ、ゆっくりと。しかも整然と。

整然と撤退しているにも関わらず、賊共は何の疑問も持たずに稟達を追う。
狙いは、稟達が運んでいる兵糧などだろう。

「馬鹿共が」

そう吐き捨てる。
そんな端量の兵糧なんて放っておいて、最初の目的通り町に襲いかかれば良いものを。何を目的として軍事行動を起こしているのか。
それを見失っている時点でお前らの負けは確定だ。

頃合いだな。そう思い、後ろを振り返る。
『揚羽蝶』。俺の、平家の旗印。悠然と風に舞っている。
その向こうで控えている兵達を見やる。皆、不安そうだ。

「さて、貴様ら」

声を掛けると皆がこちらを見る。

「目の前に居るのは、お前達の家族を殺すことに何のためらいも覚えない、正しく人間の出来損ないだ。糧食を奪い、親を殺し、子を

殺し、女を犯し、町を焼く。これらのことをもう何度も繰り返してきている屑共だ。
これより俺たちは死地に入る。そこに天はない。唯々鬼が居るばかりだ。己の欲望に飢えた、餓鬼共がな。剣を振るえ！槍を突き立てろ！貴様らは今日ここで、あの鬼共を殺す為にこの世に生を受けたのだ！」

結構過激なことを言っているが、皆真剣に聞いているようだ。
……こういうのは柄じゃないんだがなぁ。

「本日ここから、貴様らも鬼になるのだ！世に巣くう悪鬼共を殺して回る、戦の鬼に！天下を平定して初めて貴様らは鬼であることを止めることが出来る！俺にはな、我が身を鬼に堕としてでも、それでも成し遂げたい理想がある！貴様らもそうだろう！？
皆で鬼となってやろうぞ！それで救えるものがあるなら、鬼になるのも本望だろう！目の前の屑共を殺せ！俺たちが俺たちであることを止める覚悟を持っていることを、その身を以て分からせてやるのだ！

征くぞ！平家の郎党共よ！誇りある戦の鬼共よ！これより敵に突撃する！」

勢いよく丘を駆け下り、敵の腹背へそのままなだれ込む。軍の方は稟が上手くやるだろう。俺のすぐ後ろから『殺ぁぁぁってやるぜ！』と聞こえてきた。意図せず笑いがこみ上げる。端から見たら笑いながら斬人する基地外にしか見えんだろうなぁ、今の俺ぁ。

他の兵も萎縮せず、ダンクーガと同じように、殺気に満ちあふれている。
この分だと、すぐに片が付きそうだな。

「屑共。この俺様、御遣い様が直々に殺しに来てやったぞ?もっとしっかり持て成して貰いたいものだなぁ、おい」

浮き足だって混乱状態に陥っている賊共の中を、清麿を振るいながら駆け抜ける。

腕、首、足、背中。

目に見える隙を、手が届く順に、斬りつけることが出来る限り清麿で斬り捨てる。

「またつまらぬものを斬ってしまった……」

いいねぇ。一度言ってみたかったんだよねぇ。

この間の戦では、そんな余裕もなかったしねぇ。

「テメェら、気合い入れてくぞ!押せ押せぇ!こいつらみんなぶっ殺してやるんだ!」

「退けぇ!カス共!」

「死ねっ!死ねっ!死ねっ!死ねっ!死ねぇぇぇぇぇ!」

周りの兵のテンションがえらいことになっている。さすがの俺もドン引きだ。

ちょっと発破かけ過ぎたな。まぁ、後でしっかり落ち着かせてやるさ。

初陣の人間も多くいる。このままのテンションで突っ走らせた後で冷水を頭からぶっかけてやる位がちょうどいいだろう。

見ると、賊共は来た道を引き返すべく逃げようとしている。

だが残念だねぇ。俺は『腹背を』突いたんだぜ?勢いよく駆け下ってくる６００匹の鬼共の方へ行くってのは、自殺志願者としか思え

ないなぁ。逃げるなら、前だよ、前。尤も、稟がそこにいるからどうにもならんと思うがなぁ。お前らはさ、調子に乗りすぎたのさ。身の程を弁えない奴は死ぬしかないんだよ。

「ほら、屑。道を開けんと死ぬぞ？まぁ、今お前は死んだわけだが」目の前に飛び出してきた賊を脳天から唐竹割に斬る。……清麿は本当によく斬れる。

賊の顔に、縦に一筋赤い線が浮き上がる。
右半身と左半身が、それぞれ別のタイミングで崩れ落ちる。

「ひぃっ、ば、化け物だぁ！」
「半分以上人間止めちまってる自覚はあるがな、化け物ってのは、無抵抗な、武器を持たない人間を躊躇いなく殺せるお前ら自身のことだろうさ」
逃げ出した賊の背中へ、死んだ賊が持っていた槍を投げつける。

「逃げろ！逃げろ～！」
「も、もう駄目だ～」
「た、たすけ、助けて！助けて！」

奴さん達は大混乱だ。逃げていく賊共を殺すのは、もう兵に任せておけば大丈夫だろう。
さて、賊共の領袖はどこにいるのかね？
是非ともご機嫌伺いさせて貰わなきゃならないからねぇ。

～稟　Ｓｉｄｅ～

「今です！全軍反転し、敵に逆撃を加えて下さい！」

教経殿が、これ以上ない瞬間に、これ以上ない箇所に横槍を入れてきた。

さすがは、教経殿。後は前方から逃げ出そうとする敵を徹底的に叩くだけ。

私が立てた策は、単純なものだった。

私が３００の兵を引き連れて、賊に一当てして後退し、教経殿が待ち受ける丘の前へ賊を引っ張る。

そこに教経殿率いる６００の兵が横撃を加え、敵を混乱させる。教経殿は中へ突入し、賊将を討ち取る。私は外周から賊共を、それこそ薄皮を一枚ずつ引き剥がすように殲滅していく。

そういう絵を描いていた。

今のところ、上手く行っている。

だが、油断はしない。何か想定外のことが起こるのが戦だ。そうこの間の戦で思い知ったばかりではないか。

「もっと自信持っていいぜ。稟は俺の信頼に応え続けてくれてる」

後ろから私を抱きしめながら、教経殿はそう言ってくれた。

……この戦できちんとした結果を、これが郭奉孝なのだという結果を出せれば、素直にそう思えると思う。だから、しっかりしないと。

「ん？」

賊共の中で、強固に反撃をしてくる箇所がある。

恐らく、あそこに賊将が居るのだろう。

「誰か」

「はっ！」

「教経様に伝令を。賊将が居るであろうと思われる箇所はあそこです。それをお伝えして下さい」

「畏まりました！」

そう言って伝令が走っていく。

見落とさずに済んで良かった。賊の集団でも比較的外側に位置している。逃がさないようにする為に、私は前線からある程度兵を引き抜き、再編して、包囲を突破されないようにその箇所の包囲の厚み

を増す。

平家軍を統率し、賊将を絶対に逃がさない。それが、今回私に求められている役割だ。必ず、必ず果たしてみせる。私自身のこれからの為に。

～教経　Ｓｉｄｅ～

「申し上げます！」

使い番が走ってきた。

「何だ！俺は今ちっと忙しいぞ？」

右手にいた賊の臑を斬り飛ばしながらそう答える。

「はっ、郭嘉様からの伝言です。賊将はあの辺りにいます」

そう言って使い番は、賊の集団でもやや外側後方を指さす。

「へぇ。稟に感謝すると伝えといてくれ」

「はっ、ではこれで」

「おい、ダンクーガ！」

「何だよ大将！」

「お前、５０人くらい引き連れて俺に付いてこい！見込みのある奴優先して引っ張って来いよ？」

「了解！」

おいおい、だからそこは「ＯＫ！忍！」って言う所……じゃないのか、俺は忍じゃない。

「おらおら、死神様のお通りだ！」

まぁ、手にしているのは死神の鎌じゃなくて清麿なんだけどねぇ。ついでに極めて趣味的なフォルムを有するガンダムにも乗っていないねぇ。

俺は多分、モーゼの生まれ変わりなのだろう。進むと賊共がどんどん道を開けていく。
開けない奴には清麿で説法してやると、改心して道を開けてくれる。
偶に躰を開いてまで開けてくれる。……瀬戸内ジャクソン『セッポーウ！』っていう糞スレがあったなぁ。

「テメェら、何やってやがる、そいつ殺したら俺たちの勝ちだぞ！殺れ！」

変なこと考えてるうちに、どうやら主賓をもてなす為のテーブルにたどり着いたようだ。いらっしゃいませご主人様、でも教経はドジっこなので清麿突き立てちゃうかも知れないけど、あんたの為じゃないんだからね！……おお、ドジっこでツンデレ！きっと売り上げが伸びるだろう。愉しんでいって下さいねぇ。ご主人様。

「お前ら！大将の邪魔する奴らは全部俺たちが相手するんだ！殺ぁぁぁっってやるぜ！」
「おうよ！」

だからさ、言ってるじゃない。そこは「ＯＫ！忍！」って言う所…だな、うん。

「まぁいい、どのみちテメェ殺したら俺の勝ちだ！」
「へぇ。そうかい」
「ああ、そうだっよっ！」

そう言いながら、獲物を上から叩き付けるように振り下ろしてくる。
……戦斧か。重そうだねぇ。まともに受けたら清麿折れちゃうねぇ。
でもねぇ……清麿で受ける。接触した瞬間、刃の上を滑らせて戦斧のベクトルを曲げてやる。

「糞！これで死ね！」

地面に戦斧を叩き付けることになったのが意外だったのか、随分と悔しがっている。そのまま跳ね上げればいいものを、もう一度持ち上げて、もう一度同じように叩き付けてくる。学習能力がない奴は俺は嫌いなんだよねぇ。

「これじゃ死ねないなぁ。ほら、早く死なせてくれないかね？本人がいい加減飽きているのに、一向にこの躰は死んでくれなくてねぇ、困ってるんだよ」

叩き付けてきた戦斧を、また同じように清麿でいなしてやる。戦斧を地面に叩き付けた瞬間、奴さんの右手に衝撃が加わっているその刹那に、手首を返して清麿を閃かし、奴さんの右手首を斬り飛ばしてやった。

「馬鹿にしやがって！殺してやる！」

「……もうお前さんにはそれは出来ないんじゃないかね？」

「何を、あぁ……痛ぇ！痛ぇよ畜生！」

鈍いなぁ。力自慢の相手はもうこんなモンで良いか。

「さて、屑。そろそろ閉店の時間だ。蛍の光が聞こえてきただろう？だから、貴様が愉しんだ代金を頂かないとなぁ。ちなみに、当店はぼったくり推奨店でなぁ？お代は……そうだなぁ、お前の……」

瞬動で脇を駆け抜けながら、首を撥ね飛ばす。

「……首で良い」

「いよっしゃぁ～大将が敵ぶっ殺したぞ！そら、残りも殺せ！」
「おお！」

……そろそろ、こいつらにも落ち着いて貰わなきゃならんかな。

追撃という名の殲滅戦を行っている。
が、助さん、格さん、もう良いでしょう。そろそろ印籠出してははぁ～で終わりにしようぜ。

「よし、追撃を終了して太原に帰還する！」

そう宣言したが、一向に言うことを聞かない兵達。興奮が冷めやらぬ様だな。

「もういい、止めろ！」

でかい声で言って聞かせる。

だが。

「何で止めるんだ！御遣い様！まだあいつら生きてる！」

「そうだ！もう二度とこんなことしないように徹底的にやってやるんだ！」

「殺ぁぁぁってやるぜ！」

「おうよ！」

……俺を怒らせるな。

「黙れ！貴様らはもう十分に殺したではないか！これ以上、誰を殺すというのか！貴様らはまだ殺し足りないのか！殺しに酔うな！殺しの快楽に飲み込まれるな！」

皆、ハッと息をのむ。

どうやら、冷めた、か。

「……隊列を組み直して各組で点呼しろ！怪我をしている人間の手当を早急に。欠けてしまっている同志が居るなら戦場を探してやれ、まだ生きている可能性がある。死んでいたなら、遺品となるものを回収して後で届けに来い。家族に手渡してやらねばならぬ。遺体は全て埋葬する。俺が弔ってやる。俺の家の郎党だからな」

興奮から冷めた兵達は、それぞれすべきことを見つけて帰還の準備を始めた。

「お見事でした。教経殿」
「あぁ、稟もご苦労さん。伝令、助かったぜ？」
「はい。お役に立てたようで幸いです」
「とっとと兵を纏めて、家に帰るぞ」
「はい」

太原へ帰還する。隊伍を組んで整然と。

後ろを振り返る。
『揚羽蝶』が舞っている。気持ちよさそうに、ひらひらと。

「教経殿」
「ん？」

「完勝でしたね」
「あぁ、そうだな。この旗の下での初めての戦で、初めての勝利だ。帰ったら祝杯あげなきゃな」
「はい」

稟がそう言って笑う。
もう、大丈夫だろう。稟は、自分が俺の信頼に応えられている、と自信が持てるようになった様だから。

もう一度、後ろを振り返る。
『揚羽蝶』が舞っている。気持ちよさそうに、ひらひらと。

ふと、考える。
俺は天下を平定することが出来るのだろうか……清盛のように。

伊勢平氏が生み出した、日の本を席捲した、歴史上最も美しき揚羽蝶の如く。

蝶の如く～19～（前書き）

皆様、クリスマスを如何お過ごしでしょうか。
サンタクロースがプレゼントを持ってきてくれない人が多いでしょう。私もそうです。

蝶の如く～19～

～星　Ｓｉｄｅ～

主が楽平から帰還した。
兵達に話を聞くと、完勝、という言葉以外では表すことが出来ない勝利だ。

主か帰還した。ということは、一日付き合って貰えるということだ。
主と一緒に何をしようか、それを考えているだけで私は愉快な気分になる。
そして一日の最後には……

「星ちゃん、ご機嫌ですね～」

風だ。ふふっ、それはそうだろう。

「まぁな」
「こんな真っ昼間からお兄さんとの情事を想像して嬉しがるなんて、星ちゃんはとんだ淫乱娘ですね～」
「なっ……人聞きの悪いことをいうな！」
「……ぐぅ」
「寝るな！」
「おぉ！……麗らかな春の陽気に襲撃されて、ついつい寝てしまったのですよ」
「風、今は冬だ。ついでに言うと、春の陽気は襲撃などしないぞ？」
「ま～ま～星ちゃん、冬の次の季節は、春なのですよ～」

……相変わらずのようだ。

「星ちゃん、留守の将を引き受けた時の約束のことですが～」
「うん？」
「当然風も一緒にお兄さんに一日付き合って貰いますので～」
何！？
「い、いや、風！風は主と何も約束はしていなかったではないか！」
「ですが、風もお留守番をしたわけですし、同じ境遇にある二人が同じ約束をして貰っていても不思議はないのですよ～」
約束して貰っていても不思議はないって……
風、お主は約束していないではないか……
「いや、それならばそれでも良いが、別々の日に主を一日付き合わせれば良いではないか」
「……掛かりましたね～星ちゃん」
「何？」
「風が一緒にいると困ることをお兄さんにするつもりですね～？」
「……そんなわけがあるまい。この趙子龍。そのようなことはしない」
「本当ですか～？」
「本当だ」
「絶対に～？」
「絶対だ！」
「……ぐぅ」
「寝るな！」
「おぉ！麗らかな春の……」
「風、それはもうやった」
「では、風が一緒にいても問題はありませんね～、星ちゃん」

とりあえず言いたいことは山ほど有るが、直前の言葉からどうやったらその結論が……？

「おや、問題があるのですか～星ちゃん。

グッ……問題あるに決まっておろう！風！

私がそう言えない性格をしていることを分かっていてこのような……

「……問題ない」

「そうですか。では、お兄さんの所へ一緒に行きましょう～」

「くぅ……」

「どうしたのですか～星ちゃん、おいていきますよ～？」

……悔しい……主と二人きりで居られると思っていたのに……

これ以上はもうどうしようもないから今日は諦めよう。

だが、もう手段を選んでいる状況ではないことは分かった。

風、稟、私。三竦みの状態になっている気がする。

これを打破するには、少々強引な手を使わないと駄目だろう。

丁度、今の風のように。

風、私は恨みは忘れぬぞ？

～風　Ｓｉｄｅ～

お兄さんが帰ってきました。
稟ちゃんは、すっきりした顔をしていました。
溜まっていたものをすっかり落として、いい女になって帰ってきたのですよ～
こういうと、変態さんは喜びそうですが、別に何かあったわけではありませんのであしからずご了承下さいね。

お兄さんが帰ってきたら、一日付き合って貰うと言っていた星ちゃんの機嫌がいいです。

稟ちゃんも、お兄さんに抱きしめられたと聞きました。
風は稟ちゃんがすごく悩んでいたのを知っていたので、お兄さんが稟ちゃんを安心させる為に抱きしめてあげたのを聞いてお兄さんらしいと思うと同時に、ちょっと稟ちゃんがうらやましくなったのです。

……むぅ～お兄さんは風にもっと構ってくれるべきだと思うのですよ。

そう思っていると、星ちゃんがどうしても一緒にお兄さんに一日付き合って貰いたいと言ってきたので、風は仕方なく付いていってあげることにしました。

「ところでさぁ、風」

「なんでしょうか～」

「……その飴、どこで売ってんの？」

「お兄さん、年頃の女性には秘密がいっぱいあるものなのですよ」

「……今の質問に年頃と性別関係有るのか？」

「そうですね～、お兄さんがどうしても今風が舐めているこの飴を舐めたいというのであれば、仕方がありませんから舐めさせて差し上げましょう」

「風！そうはさせんぞ！」

「おやおや、星ちゃん、どうしてここにいるのですか～」

「最初からずっと一緒にいる！」

「そうだったのですか～。あ、お兄さん、風は次はあのお店でお茶を飲みたいのですよ」

「へいへい、分かって御座いますよおぜうさま」

「おぉ～、風はお嬢様ですか～。そんなお嬢様にお兄さんは劣情を抱いてしまい、我慢が出来ずとうとう自分の女にしてしまうわけですね～」

「……主、私は次はあちらへ行きたいのですが」

「わかったわかった、劣情話が終わったら星の行きたい店に行ってみよう」

こんな心温まる会話を続けながら、一日お兄さんと一緒にいました。

お兄さんが女の霊的なものに取り憑かれて酷く殴られていたようで

したが、自業自得というものなので仕方がないと風は思うのですよ。
ちゃんと風に構ってくれないと。風は放置されて喜ぶ変態さんではないのです。
お兄さんを使って、実験をすることにするのです。
ふふふ～

～教経　Ｓｉｄｅ～

今日は楽しい一日丁稚の日だった。

星に一日付き合わされると思っていたら何故か風も一緒だった。

そして、星の機嫌が異常に悪かった。

風も、偶に風・・さん・・的存在を召還して俺に傳くことを強要してきた。

なんというか、女って怖い。

でもそれに逆らえない俺がもっと怖いです。

いつか、いつか大変な間違いを犯してしまいそうで。無論、性的な意味で。

稟が居たら、もっと酷くなってたんだろうなぁ……あの混沌とした状況かつ時刻表がない状態で1番線から稟が発射したらと想像しただけで、酷いめまいを感じる。

今日は本当に疲れた……8割気疲れだろこれ。

とにかく、そんな辛い思いではとっとと忘れて早く寝た方が良い。

寝よう。うん。寝よう。

新しい朝が来た。希望の朝だ。
おはよう御座います。希望の朝に絶望している教経です。

朝起きたらフローラル的な良い臭いがした。
何故か、金縛りにあって起きれないと思ったら、風が俺に馬乗りになって寝てた。
俺の服の前がはだけてた。風はちゃんと服着てるけど。

けどなぁ、俺今多分すげぇ青い顔している自信有るわ。うん。
もしかして、俺お婿に行けない躰に？

この状態を誰かに、というか星と稟に見られたら問答無用的な何かが発生する気がするんだよ。うん。何か思い出しちゃいそうな感じだけど、何だろうね？

「主、起きていらっしゃいますかな？」

あ。

「……ほう」

いやぁ、星。今日も綺麗だよ。その美しい手には槍は似合わない。
どうか俺の手を取っておくれ？

「はは、主。風と共に寝たのですかな？」

いやいや、星。その美しい手にはさ、槍はさ、似合わないとさ、思うんだよねぇ。

「アルジ？」

おお、星・・さん・・的存在が遂に覚醒したわけだね。こう連続するところを見ると、俺にはハンターブリーダー的な才能が豊かにあるみたいだねぇ。

俺は操作系だ。強化系とは相性が悪い。ここは一旦引かせて貰うぜ？

あ、風が上にいて逃げられないのか。

星・・さん・・的存在が一歩一歩、ゆっくりと近づいてくる。

怖いですねぇ～恐ろしいですねぇ～

それでは皆さん、さよなら、さよなら、……さよなら。

～星　Ｓｉｄｅ～

主に夜這いをかけようかどうかと悩んでいるうちに朝になっていた。
物の本によると、『夜討ち』『朝駆け』といって、頭がはっきりしていないうちに奇襲をするのが常道なのだそうだ。うむ、役に立つなこの本は。

いざ、朝駆けへ。

そう思って主の部屋に入ると、何と主の上に風がまたがって寝ているではないか。
しかも主の服ははだけている。

……風に先を越されたか。
いや、まだ分からぬ。主に問いただしてみなければ、何があったのかは分かるまい。

普段の言動はアレだが、風は純情だ。
いきなりそういうことにはなっていないだろう。目の前の主の往生際の悪さから考えて。

ただ主、ごまかそうとするのは頂けませぬなぁ。
私が美しいのであって手が美しいわけではありますまい？

そうでしょう？

アルジ？

蝶の如く～２０～（前書き）

ヒャッハー！一人寂しく連続投稿だぁ～！

蝶の如く～２０～

～教経　Ｓｉｄｅ～

楽平郡での一戦から、二月経過した。

『楽平郡にて天の御使いと天兵が賊を屠る』

こんな恥ずかしい流言が、今そこかしこを飛び交っている。

かなり恥ずかしい。俺は見せ物じゃないんだ。耐えられんぞこんなの。俺を見つけてはキャーキャーキャーキャー言ってくるが、俺はパンダじゃない。勿論、キリンさんでも象さんでもない。

ただ、この恥ずかしい風評のおかげで、募兵も集金もしやすくなったと稟が言っていた。まぁ、御輿になった時点である程度こうなるのは分かってたから仕方がないと思って諦めることにする。但し、ある程度だ。耐えられなくなったら俺が性格破綻者だって事を見せつけてやるさ。

ただいまの俺は絶賛政務中だ。

目下の問題は、そろそろ根拠地が手狭になってきてることだ。

一度本格的に拡張工事をしなけりゃならない。

が、俺たちにはまだそんな途方もない金を捻出できるほど懐に余裕がない。カツカツだ。

どうにもならないことを考えても仕方がない。次。

流民の流入が増えており、彼らによって治安がやや低下する傾向に

ある、か。
治安低下の原因は、さしあたって生きていくのに十分な金や食料が手に入らないからだろうな。だが、公共事業的な張り紙はこれ以上無いほど既に貼ってる。
そうなると、どうするかな。
町の郊外で屯田でもさせるか。金のない奴ら集めて屯田の名目で町から一旦追い出す。帰ってくる頃には自分が耕した土地で喰っていけるようになってるからそんな問題も起こさないだろう。

これで行ってみようか。次。

なになに、目通りを希望する人間が居る？
へぇ、物好きな奴が居るな。阿呆か。ここは動物園じゃないんだよ。
え～、名前は……げぇ！？関羽！？
何しに来たんだ、この神様は。
一人か？そうか、一人か。

……劉備とか張飛とかと一緒に行動してない時期か？塩の密売やってたとかなんとかいう話があったような……張飛だっけ？でもあれは肉屋だった気が……まぁ、いいや。

「なぁ、風」
「どうかしましたか～お兄さん」
「この、関羽っての、男だよな？」
「いいえ～女性でしたよ～お兄さん」

女の関羽かぁ、まさかとは思うけど、『強い』って書いて『こわい』って読むような、岡本綾子的な顔してないよな？

～愛紗　Ｓｉｄｅ～

私は、姓は関、名は羽、字は雲長、真名は愛紗。
巷で『黒髪の山賊狩り』として多少は名前が通っている武芸者だ。
今の世を憂い、悪を正し、正義を打ち立てて再び安寧な世にしたい。
その為に、己が出来ることとして山賊共を討伐してきた。

常山の賊の規模が拡大している。
そう人から聞いて、常山へ行くべく旅をしていると、常山に近づくにつれ、多くの人が同じ噂を口にしていた。

『楽平郡にて天の御使いと天兵が賊を屠る』

これを聞いて、私は目が醒める思いがした。

『天の御使い』

予言によれば、この天下に安寧をもたらすもの。それが遂に顕れたのだ。

私一人では叶わないであろう大規模な賊共の討伐を、その者は一軍を組織して行ったらしい。

聞けば、天の御使いは并州・太原郡の太守となっており、そこを拠点に賊共を討伐しているという。武も智も有する、正に英雄と呼ぶにふさわしい人物であり、特にその武勇は、この世に冠たるものがある。そう聞いている。我が武を預けるに足るかどうかは分からぬが、一度訪いを入れてみるとしよう。叶うなら、その武技を見てみたいものだ。

～教経　Ｓｉｄｅ～

「御遣い殿、この度はお目通りをお許し頂き、誠にありがとうございます」

目の前の綺麗な姉ちゃんが、そう言ってこちらを見上げてくる。
こちらに歩いてくる時から遠目に見ていたが、本当に良い躰してるよね。
乳、尻、ふとももも。乳、尻、ふとももも。
井戸に向かって何度も叫ばないと劣情が押さえられ無くなるかも知れないねぇ。

だが、一番俺の興味を引いているのは、そんな事じゃない。
確かに良い乳。良い尻。良いふとももしてる。大事なことだから何度も言うぜ？
腕も女性らしくか細いし、足も細い。
だがそんな躰してるくせに、持ってる威圧感というか、なんというか。とにかく、思わず斬りつけてみたくなっちまう程の良い武人の雰囲気を持ってるってことだ。

関雲長は伊達じゃないって感じだ。フィンファンネル的に考えて。

「いや、こちらこそなかなかいいモンが見れた。礼を言うよ」
「はぁ」
「で、関羽。太原くんだりまで態々何をしに来たんだね？」
「……御遣い殿にお会いしてみたく、やって参りました」

なぁにがお会いしてみたく、だ。いきなり殺気浴びせてくんじゃねぇよ。まぁ、糞爺とトントンってところだな。量的には。質的には糞爺の方が容赦ないと思うが。まぁ、トラウマになってるからどうしても糞爺のほうが怖ぇと思っちまうんだがねぇ。

星が即座に反応して槍を出せるようにしている。

「星、黙って見てろ。……へぇ。そいつは少し不足してるだろ？ただの御遣い見物なら、そんなに殺気飛ばして俺を試そうとはしないと思うんだがね？」
「……殺気を浴びている、とおわかりになっておられるので？」
「たりめぇだ。俺ぁそういう環境で育てられたんだからよ」
「この殺気を浴びても何ともない、と？」
「あぁ、涼しい風が吹いてる程度だろ」
「……失礼ながら御遣い殿。御遣い殿は自分の武技に自信がおありか？」
「あぁ、有るよ。お前さんを打ち倒せると思う程度には、ね」

そう言って嗤ってやる。
おお、食いついてきたねぇ。期待通りの反応だ。怒った顔も可愛いもんだねぇ。

「御遣い殿、宜しければ私と手合わせをお願い致したい」

俺の望み通り、関羽と戦えそうだな。

～愛紗　Ｓｉｄｅ～

駄目で元々、と御遣い殿が居られる町で面会を希望してみると、御遣い殿が会ってくれるという。面会まで時間があったので、町で御遣い殿の情報を集めてみた。

「あぁ？御遣いの大将の武勇？」

「……そうだ、何かご存じであれば、教えて頂けないだろうか」

なんということだろう。御遣い殿に対してぞんざいな口をきいている。この男は少々礼儀がなっていないようだ。

「そうだなぁ。多分大将は人間じゃないと思う」
「……は？」
「だから、人間じゃないと思う」

……なんなんだその答えは……

「……なぜ貴殿がそのような意見を持つに至ったか、教えて頂きたいのだが」
「この間賊を討伐しに行った時、大将が賊の親玉の首を刎ねて殺したんだがそんとき大将がこう、ぱっと消えて、気がついたら首を刎ね飛ばしてた。あんなこと、人間じゃ出来ねぇと思う」

……消えるとはなんだ……この男はひょっとして頭が……

「そ、そうか。忙しそうな所を済まなかったな」
「あぁ、別にかまわねぇよ」

疲れた。人が消えるなどとあり得ぬことを言う男だ。
そのまま、特にこれといった収穫がないまま、面会の時刻がやってきた。

御遣い殿に無礼ながら殺気を叩き付けたところ、全く反応しなかった。殺気に反応できない人間が、武勇に優れるなどあり得ない。噂とは存外当てにならぬものだと失望していた時、何故殺気を飛ばして来たのかと聞かれた。

殺気を浴びている、ということに気がついているのかと聞くと、気がついているという。
その上で、私の殺気を、涼風が吹いている様だと言った。

流石に慢心が過ぎるのではないか。その自信が過信でないか、試してみたい。

「……失礼ながら御遣い殿。御遣い殿は自分の武技に自信がおありか？」

そう尋ねる。

「あぁ、有るよ。お前さんを打ち倒せると思う程度には、ね」

慢心している。武芸において、私は人後に落ちぬ自信がある。それほどまでに言うので有れば是非向後の参考にさせて貰いたいものだ。出来るものなら、だが。

「御遣い殿、宜しければ私と手合わせをお願い致したい」

気がつけば、私はそう言っていた。

～教経　Ｓｉｄｅ～

立ち合うに当たって、互いに武器を選ぶ。
俺は木剣。関羽は長刀のようなもの。

「じゃぁ、いつでもいいぜ」
「……関雲長、参る！」

その掛け声と共に繰り出してきた右からの、つまり俺の左からの横薙ぎは、一見して当たればただでは済まないことが分かる。

いきなりご挨拶だねぇ。
自分が舐められていることが許せなかったのだろうが……お前さんの方でも俺のことを舐めてるみたいだねぇ。

「ほいっと」

一歩だけ、後ろに下がってこれを躱す。糞爺に仕込まれてる見切りの業は半端なもんじゃねぇんだよ、姉ちゃん。

「！」
「そんな意外だったか？だとしたら心外だねぇ」

そう言いながら、たった今薙いだばかりの、長刀を持っている左腕の付け根向かって突きを放つ。横薙ぎをする為に左足に重心を掛けてるンだ。そこを、俺の剣速で突く。まぁ、不可避の突きだろう。力的には加減をしてやるがな？

「うっ」
「ふん。関羽、甘く見てたみたいだな？油断大敵って奴だ」
「……確かにそうですな！」
「んなっ」

姉ちゃんは右腕で俺の服をひっつかみ、左足を払って地面に叩き付けようとしている。叩き付けられたら、そのまま押さえつけて首筋に長刀押しつけて終了って流れだな。そうなると……

引き手を切る動作で、自分の服を破るしかない、か。
おいおい、これこの間新調したばっかりの着流しなんだけど。勿体ないことさせんなよ。

「やりやがるな関羽！」

そう言って引き手を切ろうとする。が、姉ちゃんは俺を後ろに押し、引き手を離して長刀を両手で持っている。

あぁ、こりゃぁやばいな。

「そちらこそ、この私を見くびっておられたようですな！」

俺が突いてやった同じ箇所、左腕の付け根を午後は〇〇思いっきりテレビされた。いや、突かれた。滅茶苦茶痛てぇ。が、骨が折れないように手加減しやがったな、この女ぁ。

……良い度胸してんじゃねぇか、糞アマ。俺相手に手加減だぁ？あの鍛練を積んだ俺に、手加減。巫山戯てんじゃねぇぞ、コラ。俺はなぁ、剣に命掛けてんだよ。そんじょそこらの口ばっかり君と同程度に思われるなんざ、俺の矜持が許さねぇ。大体、糞爺に申し訳がたたねぇだろうが。

『もうお前には、これ以上、儂が伝え遺すべき何物もない』

そういって、ちっと寂しそうに正座してた、あの一瞬だけやたら弱々しく感じた、あの糞爺に。俺が舐められるってのは、糞爺が舐められてるのと同じだ。それは、それだけは、例え何があっても、絶対に受け入れることは出来ねぇ。俺が、俺だけが、爺さんの剣を正しく伝えられた、最期の弟子なのだから。

「糞アマ、覚悟は出来てるんだろうな」

こいつを叩きのめす。手加減せずに、全力で。

俺のお師匠に、地に這いつくばって土を噛ませて、詫びを入れさせてやる。

～星　Ｓｉｄｅ～

これはまずい。

はっきり、そう思う。

先程までは、互いに様子見だった。主の剣はあのように軽くはない。関羽と名乗った女の実力を計っていたのだろう。だが、関羽が主の

左肩辺りを突いてから、主の様子が一変した。

主からは殺気しか感じられない。この辺り一帯には、殺気しかない。

女の突きが、手加減されていたものだった。

どうやらそれが、主の癇に触ったらしい。

主の顔は、私と最初に死合った時とは違い、無表情だ。それがより一層恐ろしさを増して印象づけている。目は、焦点が合っていないかような、それでいて全てを見通しているような、そんな目をしている。木剣を片手にだらりと持っているが、それで居て全く隙というものがない。どこにどう打ち込んでも、間違いなく打ち倒される。そう感じる。

思わず身構えるが、相手が私ではないことを思いだして躰の緊張を解く。

主は、恐らく瞬動を使うだろう。あの速度の中で本気で剣を振るえば、例え木剣と雖も無事では済まない。運と当たり所が余程に良ければ打撲。だが、間違いなくそれで済まそうと思っているような気配ではない。

気当たりが酷い。躰が、思うように動かない。

直接その殺気を向けられていない私で、この為体だ。あの関羽という女は、もっと酷いことだろう。主が彼女を殺さないように、横槍を入れなければならない。主の為に。

あの女が例え死んでしまおうと、別に私は構わない。主は故無くして人を殺すようなお方ではない。だからあの女を主が殺すなら、それは周囲はどうあれ主にとっては必要なことなのだろう。だが、面会に来た人間をさんざんに打ち据えたあげく殺した、とあっては主の不利益にしかなり得ない。それは、主の臣として避けるべく行動

すべきだろう。例え、主の意志に反しても。

～愛紗　Ｓｉｄｅ～

目の前に、鬼が居る。

剣の、鬼が。

私の左肩を突いてきた。感じる力量からすると、ある程度手加減されていた。

……舐められている。それは、耐えられぬ屈辱だった。故に私も、手加減をしてやったのだ。どうだ、屈辱だろう?そう、得意げに思っていた。

その手加減が、この鬼を喚んだ。

怖い。そう思う。

隙だらけに見えるが、自分がどこにどう打ち込んでも、無残に殺される自分しか想像できない。

逃げ出したい。

武芸を修めて初めて、逃げ出すことを考える自分に気がつく。

駄目だ。逃げることは許されない。ましてやこの鬼に背中を向ければ、死有るのみ。

萎縮する全身に再び闘気を漲らせ、闘うべく構えをとる。

私は、こんな所で斃れる訳にはいかないのだ。

世を、正すのだ。その為に、私は生きてきたのだから。

蝶の如く～21～（前書き）

これが最期のプレゼントだぁ～

蝶の如く～21～

～教経　Ｓｉｄｅ～

瞬動を行いながら、女の左腕を『斬る』。
女は打たれると思っていたのだろう、『斬られた』ことに驚いている。

馬鹿が。その程度、師匠の弟子である俺なら簡単にできるんだよ。
次は、右腕だな。

再び瞬動を行う。
手首の内側。斬らせて貰う。動脈掻き斬ってやるよ。

だが、女は反応して手首を返し、手首の外側を斬る事になってしまった。
反応してくることは想定外だったが、この女の武技は流石のものだ。
だがな、姉ちゃんよ。太刀ってのは一刀で仕留める類のものと連続で振るわれるものとがあるんだぜ?俺が今振るっているのは、連続して振るわれる類のものなのさ。

斬り上げた木剣を、そのまま斬り下げる。
綺麗なお躰、傷つけてやるよ。師匠を侮辱したことを一生忘れられないように。その傷を見る度に、そのことを悔いると良い。

流石に避けられない。そのまま女の左肩から右脇腹にかけて、袈裟に斬る。
血が出ている。当たり前だな。容赦はせんよ。

姉ちゃんは片膝をついた。
やれやれ、偉そうなことを言っておいて、その程度か。
生かしておく価値もない。師匠に、死んで詫びを入れて貰うことにしようか。

そう思い、最期の瞬動に入る。
跳躍して頭をかち割ってやるよ。師匠の教え通り、理に適った斬人の法を以て、な。

跳躍した。
姉ちゃんは気がついていないらしい。
これで、終わりだ。剣を振るう。

手応えはあった。打ち斃してやった。

だが、俺の目はあり得ないものを映していた。

斃れているのは、星。

「星！何やってやがる！どうして飛び込んできた！」

木剣を投げ捨てる。

我に返った。ぞっとした。もし、頭を思い切り木剣で打ったのだとしたら……

「おい、誰か居ないか！誰か！誰か居ないのか！誰でもいい、出てこい！誰か居ないのか！？」

俺の切羽詰まった声を聞きつけて、遠くからダンクーガが走ってくる。

「ダンクーガ、医者だ！医者を呼べ！今すぐ、どんなことをしても良いからここに引き摺ってこい！ごたごた抜かすなら足の一本でも斬り捨てて構わん、すぐに連れてこい！急げ！」

俺の剣幕にダンクーガは驚きながら、それでもものの凄い速さで駆けていった。

星。

俺が、頭に血を上らせていたばっかりに。

まさか、俺が……俺に敵意を向けてこない、それどころか好意を持ってくれている人間を、間に立ちはだかったことにも気がつかずに打ち倒すなんて。

不敵に笑う星。

楽しそうに笑う星。

恥ずかしそうな星。

凛々しい顔の星。

我が儘を言う星。
俺に好意を持ってくれている、可愛い、星。

嫌だ、何かの間違いだ。
俺が、この手で、それを消すなんて。
嫌だ。これは、何かの間違いなんだ。
俺が、この俺が、この手で、星を……

「星、しっかりしろ。星！しっかりしてくれ、頼むよ、星、返事をしてくれ。星……」

未だ気を失ったままの星を両腕に抱えて、俺はずっとそう言っていた。

～愛紗　Ｓｉｄｅ～

鬼が来る。
とんでもない疾さで。
私の左腕目掛けて剣を振るってくる。

疾すぎる。
目で、その動きを追うことは出来る。だが躰はその速さで動くはずがない。

「この間賊を討伐しに行った時、大将が賊の親玉の首を刎ねて殺したんだがそんとき大将がこう、ぱっと消えて、気がついたら首を刎ね飛ばしてた。あんなこと、人間じゃ出来ねぇと思う」

成る程、武芸の心得のない人間には、確かに信じられない光景だろう。心得があっても信じられないのだから。あり得ない疾さ。それを、あの男は『消える』と表現したのだ。『人間ではない』、と。

左腕を捨てることになるか。
木剣とはいえ、この速度で打ち据えられた後、使い物になるとは思えない。
打たれた時の衝撃をある程度和らげる為、筋の緊張を解く。だが。

「！」

『斬られた』。木剣で、『斬る』だと？

あり得ない。目の前の鬼は、その武技は、あり得ないものだ。
『この世に冠たる武勇』
正しく、そういうに相応しい。

またこちらに向かってくる。息をつく暇が全くない。
次は、右腕、というより右手首を狙っている様だ。

剣を振るうその形は美しい。余程の修練を積んだものと思われる。
だが、だからこそ、どこを狙っているのかが分かる。手首の内を斬られれば、死ぬ。手首を返す。
斬られたが、大したものではない。
そう思っていると、跳ね上げた木剣をそのまま斬り下げてくる。

まずい。後ろに少しだけ上体を反らすことが出来た。
が、斬られる。左肩から右脇腹にかけて、真っ直ぐに、疾風が駆け抜ける。傷は深くはないが、範囲が広い。
斬られた衝撃で、体勢を崩して膝を折る。

負けた。
そう思い、それを伝えようと顔を上げる。
が、鬼がそこにいない。

どこに行ったのか？
そう思っていると、躰を後ろに引っ張られ、白い何かが私の前に立つ。

次の瞬間、その白い何かが倒れ伏した。

～教経　Ｓｉｄｅ～

「左肩および左鎖骨が綺麗に折れております。また、かなりの衝撃を受けたようで、ある程度臓腑が傷ついているようです。しかし、気を失ってはおりますが、命に別状はありません。綺麗に骨が切断されていることから考えて、完治するまで無理をしなければ後遺症も残らないでしょう。安静になさることです」

「……そうか、すまなかったな」

「いえ、では、私はこれで」

そう言って医者が部屋を出て行く。

あの後、ダンクーガが医者の首根っこをひっつかんで来、すぐに星を診察させた。

結果は、聞いたとおり。

……よかった。死んでいなかった。

騒ぎを聞きつけた稟と風が、関羽の手当をしながら事情を聞いていた。

「お兄さん、少しやりすぎだと思うのですよ」

「……あぁ、分かってる。反省してる」

「教経殿、今回は皆無事であったから良かったものの、次はどうなるか分かりません。ご自重下さい」

「……あぁ、分かってる。反省してる」

風も稟も、それ以上俺には何も言わなかった。

「関羽、本当に申し訳なかった。この通りだ」

「い、いえっ、御遣い殿、頭をお上げ下さい」

「そういうわけにもいかん。俺は俺の行いに対して責任を負わなければならぬ。それが先ず一人の男として当たり前の、有るべき形だ。本当に済まなかった」

「御遣い殿、元はと言えば失礼にも御遣い殿を試した私に責があるのです。そう一方的にご自分を責められることはありません。私も、申し訳ありませんでした」

「……すまないな、関羽。そう言って貰えると、俺も多少救われた気がするよ。その傷が癒えるまでは、俺たちに面倒を見させてくれ。出来ることであれば何なりとさせて貰うから」

「そうはいきません、と言いたいところですが、流石にこの怪我で

は旅を続けるわけにも参りません。お言葉に甘えさせて頂きます」
「あぁ、甘えてくれ。そうでもしないと俺の馬鹿さの償いが出来ないから。何故俺があまでムキになってお前さんを殺そうとしたのか、落ち着いてからきちんと話をさせて貰う。それが、礼儀というものだろうから」
「はっ、畏まりました」
「じゃぁ、また今度な」

そういって、稟、風、関羽を送り出す。

星。良かった。
星の寝顔を見ながら、そう思う。
剣を、星の頭に振り下ろしていなくて本当に良かった。
星の髪を撫でつけながら、しみじみと思う。

「俺は、星のこと、こんなに好きだったんだな」

綺麗な寝顔。不敵な目を開いていないだけで、こんなにも顔から受ける印象が変わるのだろうか。可愛らしい、女の子。

「本当に、本当に良かった。星」

安心から、涙がこみ上げて来やがる。喪っちまったと思った。俺の過失で。俺が、俺の好きな人を、俺の手で殺した。そう思っていた。
頭を撫でながら、星の寝台の横で、ずっと俺は泣いていた。

「……主」
「……ん」
「主、起きて下さい」

誰かに呼びかけられて、目が醒める。
泣き疲れて、寝てしまっていたようだ。
気付くと、星が俺の頭を掻き抱きながら、俺の頭を撫でていた。

「星！目が醒めたんだな！」
「！主、声が大きいです。急に躰を動かさないで下さい。肩が痛い」
「あぁ、すまん」

急いで体を起こそうとして、顔をしかめた星を見て止めた。
そうだよな、痛いよな。俺が傷つけてしまったのだから。

「主、泣いていらっしゃったのですか」
「……あぁ、そうだ」
「なぜ、泣いていらっしゃったのです？この星が、主にとって掛け替えのない存在であると、漸くお気づきになられたのですかな？」

いつもの調子で星が言う。
一丁前に、俺に気を遣っているらしい。でもなぁ、星。俺は今それに乗って自分の気持ちを有耶無耶にする気分にはなれないんだよ。だから、俺の気持ちを聞いて貰うよ、星。

「……あぁ、そうだ。思い知らされた」
「……」
「星、俺は、お前のことが好きだ。喪いたくない。お前を俺自身の手で殺したかも知れないと思った時、もし本当にそうだったら自殺しようと思ってた。自分にけじめを付ける為に。俺は、お前のことが、本当に好きだったんだよ、星。それくらい、掛け替えのないものだって分かったんだ」
「……主……」

星がじっと俺の顔を見つめている。
可愛い、女の子。長いまつげが震えている。

「何で泣いてんだよ、星」
「主が、悪いのです。唐突に、私にそのようなことを仰るから」
「星」

星に顔を両手で挟んでこちらを向かせる。
星が、目を瞑る。
月の光が差し込む中、二つの影が重なる。

「……主、主から口吻してくるとは思いもよりませんでした」
「……俺は、我慢できそうにないんだよ、星」
「あ、主、それは……」
「……怪我してるのは分かってるけど、それでも俺ぁ星と……」
「……主、私はその、こういうことは、その、実は初めてで、だか

ら、その……」
「……分かってる。優しくするよ。星」
「……はい、主」
「夜伽の時は、教経って呼ぶんだろ？」
「……はい、教経様……」

そう言って、もう一度口づけを交わす。
そのまま夜が明けるまで、お互いにお互いの存在を感じ合うように、何度もお互いを求め合った。

蝶の如く～22～（前書き）

プロット見直したけど、どうなんだろうこれ。
作者的には、これが限界臭いです。足りないと思われるところは、
稟ちゃん並の妄想力で補っておいてくだしあ。

蝶の如く～22～

～教経　Ｓｉｄｅ～

「主、そろそろ起きてご自分の部屋にお戻りにならないと、皆に感づかれますぞ？」
「……んん、あと5分……」
「？ごふんだかなんだか分かりませんが、早く起きて服を着て下さい、主」

なにやら星が言っている。
服を着ろ、と言われて、一気に覚醒する。

「おはよう御座います、主」

そういって、星が微笑んでいる。卑怯くせぇな、その笑顔は。

「……あぁ、おはよう」
「ふふ、主、照れているのですかな？」
「あぁ、そうだよ、悪いか」
「別に悪いとは言っておりませんが？」
「口の減らないことだな、星」
「それはもう」

そういってクックッと笑っている。
態勢が悪い。とっとと服を着て、出て行った方が良さそうだ。

「はいはい。とっととお暇することにするさ」

そう言いながら服を着て、部屋を出ようとすると、星は少し寂しそうな顔をした。

「星」

「なんですかな、主？」

「早く傷を治してくれよ。また、な」

「……はい、主」

そう言って部屋を後にした。

部屋を後にし、誰にも会うことなく自分の部屋に戻った。

水差しから湯飲みに一杯水を注ぐ。
水を飲んで、少し落ち着いてから執務室へ行く。

「お兄さん、おはよう御座います、なのですよ～」
「あぁ、風、おはようさん」

……一番やっかいな人間につかまった気がする。

「お兄さん、なにやらすっきりしたお顔をしていますね～」
「……まぁ、気持ちの整理がついて落ち着いたってことだろ」
「そういうことにしておきましょうか～」

……完全にバレてる気がする。

「で、風は何でここにいるの？」
「大人の階段を駆け上がったお兄さんのお顔を見ておこうかな、と思いまして～」

そういうことにしといてくれるんじゃなかったのかよ。

「あぁ、大丈夫ですよ～お兄さん。稟ちゃんは鈍いので気がついていないと思うのですよ」
「いや、風さん？そういうことにしておくって言ってなかったっけ？」
「ぐぅ」
「寝るな！」
「おぉ、ぽかぽか陽気に誘われて」
「いやいや、今日は寒いと思うんだが」
「それでお兄さん、次は風達をその毒牙に掛けてしまうわけですね

？」

頼むから話を聞いて欲しい。

「いやいやいや、何故そういう展開になるのか全く以て意味不明なんだが」

「いつぞやも申し上げましたが、皆平等にして頂かなくては困るのですよ」

「はぁ」

平等にって言われてもなぁ。その、星とああいう事した以上は責任というものがあるわけで。東京は、世知辛いわけで。おお、邦衛が出てきそうな感じだな。

「お兄さんが何を考えているのかは分かりますが、お兄さん、風も稟ちゃんもお兄さんのことが好きなのですよ」

……邦衛か？邦衛が分かるのか？

「……それは、まぁ、分かってるけど」

「昔から英雄色狂いと言いますから、仕方のないことなのです」

「好むだろ、好む。狂ったら駄目だろう、狂ったら」

「まぁまぁお兄さん、お兄さんの頭はもう結構狂っているので的を射ていると思うのです」

風ェ……

頭狂ってるのと色狂いとはまた別モンだろうがよ……

「お兄さんは、風や稟ちゃんのことは好きではないのですか～？」

自分の発言を華麗にスルーするとは、やるな！既にＱＢＫレベルと見た！

……惚けた感じで聞いてきてはいるが、目が、ね。

びくびくしてる子猫みたいな目をしてるよ、風。

風や稟が、居なくなったことを想像してみる。今回と同じように、俺がなんらかの過失を犯してしまった結果として、風や稟が居なくなってしまったとしたら。

そこまで考えて、具体的に想像するのを止めてしまった。

そのことを想像すること自体に、耐えられない。

俺の為に死ね、と言えない。

死んだ時、仕方がなかったのだと、割り切れない。

有能だから居て欲しいんじゃない。二人だからこそ、だと思う。

「……好きだ、と思うよ。多分、星と同じくらいに」

「それならば問題ありませんよね～稟ちゃん」

はぁ！？

「……教経殿」

「あ～、稟、いつから？」

「『あぁ、風、おはようさん』の辺りからです」

……思いっきり最初からだねぇ。んで俺も気付かなきゃ駄目だねぇ……

「では、お兄さん」

「ん？」

「きちんと、平等にしてもらいますので～」

「いや、それは、な、風」
「星ちゃんだけなのはずるいと思うのですよ」
「……私もそう思います」

なんだ？いつから俺は後宮作るべく頑張ってたんだ？
いや、でも、星がなぁ。
そう、なんて言うかなぁ。
……下手しなくても刺されそうな気がするんだが。槍で。

「あぁ～、もう！なんて答えて良いかわからんが、とにかく分かったよ！」
「分かって頂ければ良いのですよ～。お兄さん、こちらが今日の予定と決済して貰わないと困る案件なのですよ」

はぁ、自業自得なんだろうけど、これからどうなるんだよ……パトラッシュ……俺ぁなんだか眠たくなってきたよ……眠っても良いんだよね？

～風　Ｓｉｄｅ～

星ちゃんの治療が終わって、お兄さんは私達を星ちゃんの部屋から送り出しました。

最初に騒ぎを聞いた時は、折檻しようと思っていたのですよ～。でも、お兄さんの暗澹とした顔を見てしつこく言うのは止めることにしました。責任を感じているようですし、今後同じ事をするとも思えませんでしたから。

お兄さんはああ見えて、上手く切り替えが出来ない気がするのです。精神的に。

だから、星ちゃんの部屋に残って、様子を見ているつもりなのだと思うのです。

仕方がないので、風がお兄さんを慰めてあげようと思うのです。仕方なくなのです。

朝になっても、お兄さんは部屋に帰っていなかったのです。いくら何でも、ずっと星ちゃんの部屋にいる、というのはおかしいのです。

これまで何度か、三人それぞれの部屋で夜お話をしたりしていますが、どんなにお酒に酔わせてもお兄さんは必ず自分の部屋に帰っていったのですから。あれが帰巣本能というものなのでしょうか。興味深いものなのです。

話が逸れましたが、ずっと星ちゃんの部屋にいたとするなら、部屋にいなければならない何かがあったと思うべきなのです。星ちゃんの容態が悪化したり苦しそうな顔をしていたりしたのであれば、お医者さんをつれてこいと叫び回るはずです。そうなると答えは一つしかないのです……お兄さんは、星ちゃんと。

……風は結構嫉妬深い方だと思います。お兄さんが、風以外の女の子と宜しくするのはいい気はしないのです。でも、お兄さんが風を相手にしてくれなくなる方が嫌です。風は少し他の人とは違っているようで、風と話をすると皆心底疲れた顔をするのです。でもお兄さんは、風と普通にお話をしてくれます。女の子としてみてくれます。そのお兄さんを、簡単に諦められるわけはないのです。

「お兄さんは、風や稟ちゃんのことは好きではないのですか～？」

朝、お兄さんの執務室で待ち伏せをし、星ちゃんとそういうことがあったという確信を得た後、そう聞いてみました。世に英雄と謳われた人たちは、皆色を好んだのです。星ちゃん一人と決めつけず、きちんと風を相手にしてくれれば、我慢してもいいのです。

……でも、お兄さんが風を好きでなかったら。ただの軍師としてしか見てくれていないのだとしたら、それさえ叶わぬことになります。風が、そこに入る余地があるのか。それを聞くと後戻りは出来ません。怖かったですが、それでも、聞きたかったのです。

「……好きだ、と思うよ。多分、星と同じくらいに」

良かった。安心したのですよ。稟ちゃんを見ると、稟ちゃんもホッとしているようです。

これで、方針が決まったのです。

……お兄さんを、風と稟ちゃんと星ちゃんの共有財産にする。

それが、一番問題がないのです。

星ちゃんは、仕方がないと言ってくれる気がするのです。

まぁ、そう言って貰うのですよ。

お兄さんは、風達皆のお兄さんです。

一人だけなのは、駄目なのです。

平等にしてもらわないと、困るのですよ、お兄さん。

～教経　Ｓｉｄｅ～

本日分の仕事を終えて、とりあえず一息入れている。
そういや、関羽と話をするって言ってまだ何も話をしていない。
昨日の今日で、顔を合わせるのが個人的には少し気まずいんだが、会って話をするべきなんだろう。

そう思って、関羽にあてがわれた部屋に行く。
ドアの前で中の様子を窺うと、中から声を掛けられた。

「なんのご用でしょうか」

……よく気がついたな。

「あぁ、すまん。俺だ。平教経だ。今ちっと良いか？」
「はっ、構いません」

そういいながらドアを開け俺を招き入れてくれた。

「昨日の別れ際の約束を果たしに来たのさ」
「はぁ」
「言ったろ、何であんなにムキになってお前さんを殺そうとしたのか、説明するってさ」
「ええ、そうでした」
「ここ、座って良いか」
「どうぞ、水を持ってきます」
「すまんねぇ」

そういって椅子に座る。
甲斐甲斐しいねぇ。そして、良い乳、良い尻、良いふともも。
井戸ってどこにあるんだっけ。涸れ井戸。叫んでこないとなぁ。煩悩退散、煩悩退散。

「どうぞ」
「悪いな」
「いえ」

さて、お話をしようか。

「……俺がああムキになったのは、な。お前さんが手加減したからなんだよ」
「……」

「俺はさ、関羽。多分他の武芸者と比べても異常だと思われるような鍛錬をしてきた。一流と言われている武芸者でも、絶対にここまでのことはしていないだろう、と思えるほど、異常で異質な鍛錬を。だから、手加減された時に、馬鹿にされたと思ったのさ。俺のお師匠含めて、ね」

「……」

「何で手加減したんだ、関羽？あん時本気で一発入れとけば、お前さんの勝ちだっただろうに」

「……御遣い殿」

「ちょっと待った。『御遣い殿』ってのはやめにしないか。教経で良い」

「では、教経様。ご質問に対して質問で返すのは失礼と存じますが、教経様こそ何故私に手加減をしたのです？」

……言われて初めて気がついた。いや、『気付かされた』。

俺は確かに、関羽の左腕の付け根を突いた際に、手加減をした。それは、面会に来た人間に結構な怪我をさせるわけにも行かないだろうというつもりあっての手加減だったが、それを言うのであれば、関羽が本気で突けない理由にもなる。

むしろ、彼女の方がより手加減をしなければならない立場にあったのだ。本気で突けるわけがないではないか。そんなことをすれば、あの場にいた星や軍兵共から追い立てられる可能性だってある。いや、間違いなく追い立てられたことだろう。

本気でやれ。

そう思うなら、先ず俺が本気を出すべきだったのだ。俺が最初から本気でやれば、関羽がそれに本気で応えるのは当たり前のことで、不思議なことではない。怪我をしても、洒落にならないものでなければ周囲のものも笑って流せるだろうから。

成る程、先に侮辱したのは、俺、だな。
これはまた、なんともまぁ、恥ずかしいな。
しかもそれを、本人が気付いたのではなく、相手に言われ思い返して初めて『気付かされた』ってのがより一層恥ずかしさを際だたせているねぇ。

こいつぁ……本当に、恥ずかしい。頭に血を上らせて、師匠を馬鹿にされたと一人で勝手に盛り上がって、相手を殺そうとする。俺ぁただの餓鬼じゃねぇか。

「……済まん、返す言葉もない」
「ど、どうされたのです、教経様」
「俺なりに理由はあった。けどそいつはお前さんにとっても同じだった。俺が勝手に侮辱されたと思ったのは、全く以て筋違いも甚だしいものだった。俺の方が先にお前さんを侮辱していたんだってのが、実は今お前さんに聞き返されて初めて気がついたんだよ。恥ずかしながら、な。済まなかった。本当に、申し訳ない」
「い、いえ。それに昨日も申しましたが、そもそも私が教経殿を試そうと失礼なことをしたのが問題なのです」
「いや、そういうわけにはいかんだろうさ。俺が餓鬼臭かった。お前さんを一方的に悪モンにして、自分には問題無いって思い込んでたわけだ。そのことから、目を背けるわけにはいかないだろう。本音言うと、恥ずかしいから背けたいんだが」

そういうと、関羽は仕方がない、と言った面持ちで、

「分かりました。教経様の気が済まぬようですから、こう言いましょう。教経様、私にも非は御座いました。ですので、貴方の謝罪を受け入れましょう」

そう言ってくれた。

「……そうか。許して貰えるか」

「ええ。許します。ですので、この話はもう終わりにしませんか？」

「あぁ、そうしよう。……有り難うな、関羽」

そう言って、その後関羽の旅の話などを聞いた後、部屋を後にした。

蝶の如く～23～

～稟　Ｓｉｄｅ～

「風、本当に行くのですか？」
「当然ですよ～稟ちゃん。お兄さんが心変わりしないうちに、こういうことはさっさと済ませなければならないのです。お兄さんも、まさか今日いきなり来るなんて思っていないはずなのです。兵を以てするに敵の虚を撃つべし。これ兵法の基本なり。ですよ」

風から、教経殿の寝所に行く、と言われた時、いくら何でも早すぎる、と思いました。
しかし、風が一人で行く、と言った時、私一人だけ残されるのは嫌だ、という感情があり、また、私一人だけで教経殿の寝所を訪ねるなど到底出来そうにもないということに気がついて、風に同行することにしました……しましたが。教経殿の寝所の前まで来て、拒絶されたらどうしようかという不安が湧き起こり。

「稟ちゃん、ここまで来て怖じ気づいたのですか～」
「そ、そんなことは」
「あるみたいですね～」
「うぅ」
「稟ちゃん、お兄さんの言葉、覚えていないのですか？お兄さんは、稟ちゃんのことを好きだと言っていたのですよ？」
「そ、それは分かっていますが」
「であれば、心配はないのですよ」

……風は緊張しないのだろうか。
そう思って風を見るが、普段と変わりないように見える。

「お兄さん、入りますよ～」

あ。

……行ってしまった。

私だけ残されるのは嫌です。付いていくしかないのでしょう。

「失礼します、教経殿」

そういって寝所に入ります。

「お、いらっしゃい」

教経殿は、いつも通りな様子で私達を迎え入れてくれました。

……着流しの掛け合わせが崩れ、胸板がはっきりと見えています。

「どうした、二人とも。二人が揃ってくるなんて、何か重大な相談事でもあるのか？」

「何よりも重要なことについてお話があるのですよ」

「そりゃ大事だな。水用意するから適当に座ってくれ」

「はい」

湯飲みを出しながら、教経殿が問いかけてくる。

「んで、なんの話だ？」

「いやらしいことについてですね～」

……風、そんなあっさりと。

あ、教経殿が湯飲みを落とした。

「……いま、なんと？」
「ですから、いやらしいことについてですね～」
教経殿は固まっているようだ。
風、その剛速球は流石に打ち返せないと思うのですが。
「お兄さん、風はお兄さんにきちんと『平等にしてもらう』と言いましたよね～」
「いやいや確かにそう言っていたけども」
「それに、お兄さんは『わかった』と言ったのですよ」
「その前に何か付いてただろうが、こう、葛藤してますよ～的なものが」
「それはこの際どうでもいいのですよ」
「……はぁ……」
風、このままでは話が進みませんよ。
「教経殿」
「ん」
「その、教経殿は、わ、私達とはそのようなことはしたくない、ということでしょうか」
「おぉ、稟ちゃん、大胆ですね～」
「……いや、その、そういう訳じゃないけど」
「ふむ、お兄さんは性欲魔人ですからね～」
「人聞きの悪いことを言うな！」
これで風は照れているのでしょうね。
「では、何が教経殿をそう躊躇させているのでしょうか」

「……その、何だ。これでそういうことをすると、少し軽薄すぎやしないかね、俺は？」
「大丈夫ですよお兄さん、お兄さんが軽薄なのは今に始まったことではないじゃないですか」
……風、それは逆効果だと思います。
「軽い気持ちで好きだと答えたのですか？教経殿は」
「そんなことはないよ、稟」
……恥ずかしい。
そういって真剣な面持ちで私をじっと見つめてくる。
「むむむ、我糸口を見つけたり。稟ちゃんの伝家の宝刀が今、お兄さんを滅多切りにしているのですよ」
「……いや、待てよ俺、我慢だ、我慢。我慢するんだ。俺はやれば出来る子のはずだ。うんうんそうそう、我慢我慢……萌えるねぇ、俺は眼鏡属性持ちなんだよねぇ。麦茶が好きなんだよねぇ……いやいや、違うだろ俺、そうじゃないだろ俺。まだだ、まだ慌てるような時間じゃない。ここは我慢だ……１２０％中の１２０％……いやいやいや……」
いつの間にか眼鏡を触っていたようです。
教経殿はなにやらぶつぶつと仰っては葛藤しておられるようですが、ここが勝負所なのは分かりました。ここまで来たら、恥ずかしいも何もあったものではないでしょう。
「教経殿……お嫌なら突き飛ばして下さい」
そう言って、顔を近づける。

教経殿は……そのまま、私に口づけをされた。

「お兄さん、平等にしなければならないのですよ」

そういって風も教経殿に口づけをする。

少々の沈黙。

「……負けだな、負け。俺の負けだよ」

「嫌々ですか？」

「いいや。んなこたぁない。……駄目だな。俺ぁ自分がこんないい加減な人間だとは思わなかったけど。でもまぁ、仕方ないだろ。これが現実だ。認めざるを得ない、な」

苦く笑った教経殿は、私達二人を連れて寝台に移動した。

「俺は二人も好きみたいだ」

そう言って、抱きしめてくれた。

～星　Ｓｉｄｅ～

「すまん、この通りだ」

主が寝台の横で、土下座している。

聞けば、風と稟を抱いたのだそうだ。確かに、主の寵を一身に受けることが出来ないことは残念ではあるが、私達三人はお互いが抱いている感情に気がついていたのだ。こうなるであろう事も、何となく想像はしていた。私とて、同じ立場になったら同じ事をしただろう。そもそも、これ程の男に惹かれない女があるだろうか。気宇は大きく、志操を持ち、なにより、心根が優しい人なのだ。口調はともかくとして。美しい花に蝶が集まってくるのは、致し方のないことだろう。が、主をからかうのは面白いのでからかうことにする。

「……主、あの夜、この星に言った言葉は皆嘘だったのですか……？」

そう、涙を浮かべたふりをして主に言ってみる。

「いや、そんなことはない。そんなことはないが……その……」
「……うぅ……酷い……」
「とにかく済まん。本当に済まん。その、なんと言ったらいいのか、なんと言うべきか……」

主は何とも珍妙な顔をしている。浮気をした亭主を嬲る、というのはこういうものかな。
ククッこれだから止められないのだ、主遊びは。

「……何故私を裏切ったのですか……？」
「あぁ、いや、裏切ったつもりは……いや、裏切ったことになるのか、そうだよな……済まん、星。この通りだ。謝ってどうにかなる問題でもないし、その、これからの事を考えてもその、あ～、なんて言えばいいんだよ……星のこと、ちゃんと好きなんだよ、でも、二人も、その、好きというか、あぁ～、とにかく済まん。本当に申し訳ない。その、あ～……」

……駄目だ、限界だ。

「……ぷっ」
「ぷ？」
「あははは、主、そのように面白い顔をなされるものではありませんぞ」
「……星？」
「主、この星は主を束縛するような、器の小さな女ではありませんぞ？」

見れば主は、唖然とした顔をしている。
なんともまぁ、この主は面白い顔をするものだ。

「それに主が二人を憎からず思っておったのは、気がついておりましたしな」
「……まぢで？」
「まぢで、とは？」
「あ～……本当に？」
「ええ、本当に」
「……俺自身、考えさせられるまではっきりとした感情には気がつかなかったんだが？」
「私が気がついたのは、主の寵を受けてから、ですな」

私に対する接し方と、二人に対する接し方。大して変わりがなかったのだ。当然、二人にも私に対する感情と同じ感情を持っていると気付く。

「それにしても……はぁ……焦らせないでくれ、星」
「……主、いい気はしない事は間違いないのですぞ？」
「……すいません」
「平等に、と風が言ったのでしょう？」
「……なんでわかんだ、そんなこと」

主が驚いた顔をしている。それは分かる。風達が口吻した時に、正しくその論法で主を逃げられないようにして、見事に口吻為果せたのだから。

「さて、いい女というものは好きな男のことは大概見通せるものなのですぞ、主？」

そういうと、主は少し青い顔をしていた。
ふふっ、これくらいの意趣返しはさせて頂いても構いませぬよなぁ、

主。

「まぁ、宜しい。主の寵を受ける蝶の中で、一番の蝶になれば良いだけですからな」

「……星」

「そう気に病まずとも、宜しいのですよ。自由気ままに、気の向くままに。さながら空に浮かぶ雲のように、己のやりたいことをやりたいようにやりたい時にやる。その方が貴方らしいのですから」

「……やれやれ、星には敵いそうにないな」

そういって、主は苦笑いをする。

どうやら、気持ちに整理が付いて普段通りの主に戻れたようだ。

……そう、その方が貴方らしいのですよ、教経様。

私が、私達が好きになったのは、そのような貴方なのですから。

蝶の如く～２４～

～愛紗　Ｓｉｄｅ～

「何で手加減したんだ、関羽？あん時本気で一発入れとけば、お前さんの勝ちだっただろうに」

御遣い殿と手合わせをした次の日、御遣い殿が何故私を殺そうとしたのか理由を説明しに来た。理由は、『手加減され、馬鹿にされたと思ったから』だった。
それを言うのであれば、私の方でもそうだ。御遣い殿が最初から本気で立ち合ってくれてさえいれば、あのような真似はしなかった。
それは失礼に当たるからだ。そのことを伝えなければならないだろう。

「……御遣い殿」
「ちょっと待った。『御遣い殿』ってのはやめにしないか。教経で良い」

少し意外だった。御遣いであるにも関わらず、そう呼ばれることをあまり好んでいないように見える。

「では、教経様。ご質問に対して質問で返すのは失礼と存じますが、教経様こそ何故私に手加減をしたのです？」

そう聞き返すと、教経様は少し考えているようだ。
目を細め、眉をしかめている。
質問に質問で返したことが、やはり気に障ったようだ。
質問の内容といい、どうやらまだ精神的に幼いところが残っている

ようだな。そう思っていた。

が、帰って来たのは、『済まぬ』という言葉だった。詳しく聞けば、どうやら自分が先に私を侮辱していたようだ、その事に今私に言われて初めて気がついたのだ、という言葉の後に改めて謝罪の言葉を述べ頭を下げられた。

こうもはっきりと自分の非を認めるとは思っていなかった。いや、昨日の立ち合い後の言動から、自らの過ちを認めるにやぶさかではない器量を有している人物であるとは思っていたが、今私に言われて初めて誤りに気がついた、と仰るとは思わなかった。それを認めるのは、勇気が必要なことだと思う。何せ、相手に言われて気がついた、ということを述べるのは、自分が至らないということをさらけ出すことに相違ないのだから。

こうまで言われて、こちらが折れない訳にはいかないだろう。互いの立場を考えれば、あちらは太守。こちらは一介の武辺に過ぎないのだ。ここは当然、目下である私が折れて関係改善を図るべきだろう。そう思い、お互い様なのだから気にしなくとも構わないと暗に伝えたが。

「いや、そういうわけにはいかんだろうさ。俺が餓鬼臭かった。お前さんを一方的に悪モンにして、自分には問題無いって思い込んでたわけだ。そのことから、目を背けるわけにはいかないだろう。本音言うと、恥ずかしいから背けたいんだが」

どうやら、教経様はこういうことを有耶無耶にすることを好まれないようだ。しかも、教経様が謝罪して、それを私が受け入れる、という形でしかこの事態を収束させることが出来ないらしい。それは、教経様の非を表沙汰にする、ということに他ならない。無かったこ

とに謝罪はいらない。謝罪をし、受け入れるという形式を踏めば、確かにあったことになるのだ、彼の過ちが。

頑固なお人のようだ。だが、自らの非をあったことにして貰わないと困る、と考えるとは。

謝罪を受け入れる。そう伝える。勿論、私にも非があったことを申し添えて。

その言葉に、教経様は謝辞を述べた。

『天の御使い』平教経。

その武技は、世に冠するものだった。

その為人は、少々言葉遣いに問題があるものの、人の上に立つべくして立つ人間であろうと思われる。

この人は、何を目的としているのだろうか。どのような理想を持っているのだろうか。

傷が癒えるまでに一度聞いてみよう。そう思った。

～教経　Ｓｉｄｅ～

星との修羅場?を終え、執務室に帰ってくる。

「お兄さん、星ちゃんに刺されて死んでしまっているものと諦めていたのですよ～」

風ェ……

「教経殿、星はなんと言っておりましたか?」

あぁ、稟。本当にかわいいなぁ、稟は。

「自分が俺の寵をうける蝶のなかで一番になってみせる、とさ」

「そうですか」

「む～」

稟は眼鏡をクイクイしてる。

この野郎、誘ってるのか?

風は、何故だかふくれっ面だ。

気持ちよさそうだからほっぺたぷにぷにしてみる。

「む～、なんですか～人のほっぺたをぷにぷにと～」

「いや、何となく気持ちよさそうだな、と思って」

「お兄さん、昼から発情するなんて風はそんな淫乱ではないのですよ～」

……誰もそんなことは言っていないと思うんだが。

「はいはい、風は純情だもんねぇ」

「そうなのですよ。純潔はお兄さんに無残に散らされてしまいましたが」

恥ずかしがるくらいなら言わなきゃいいのに、ねぇ。かぁいいねぇ。

「とにかく、これで星との問題？も何とか片が付いた……か？」

「いいえ、まだです。教経殿」

「へ？」

まだなんか星に謝らなきゃならんことがあったっけ？俺は君たち以外に手を出した覚えはないんだが。……まさか、俺には実は夢遊病の気があって毎晩とっかえひっかえ町娘を拉致してお代官様的なプレイを……うん、ないな。常識的に考えて。

「星が担当していた、兵の練兵や町の巡回などを代わりに行えるものがおりません」

「あぁ～、そっちの話か」

頭ん中がすっかり後宮の王様になっちまってるみたいだな。

切り替えよう。

「といってもなぁ、稟。代わりが出来るほどの人間は居ないぞ？俺も暇じゃないし、一番見込みがあるダンクーガは頭がちょっとアレな子だから無理だ」
「そこで、お兄さんに提案があるのですよ」
「提案、ねぇ」

何となく予測が付いた。あれだろ、フィンファンネル的なものに頼みたいんだろう？伊達じゃないから。

「そうなのです」
「頭ん中読むなよ！」

そしてお前さんはフィンファンネルって何か分からんだろうが。

「ぐぅ」
「寝るな！」
「おぉ～……お～？」
「本気寝かよ！」
「関羽殿に頼めないでしょうか、教経殿」

……最近スルースキル高いな、稟。
お友達なんだからもっと構ってやって頂戴。

「関羽に、出来ると思うか？確かに巡回は出来ると思うが、練兵の経験なんて無いと思うんだが？」
「それなら大丈夫だと思うのですよ。兵書などにある程度目を通していたようですから」

風がそういうと、稟も頷いている。

「何で風がそれを知ってるんだ？」
「そういったものがあれば読ませて欲しいと仰っていたので、稟ちゃんの兵書をお貸ししたのですよ～。勝手に」
「ちょっと風！無いと思っていたら勝手に貸し出していたのですね！」
「おぉ、お兄さん～稟ちゃんが風をいじめるのですよ」

とてとてと歩いてきて俺の袴を掴む。
そこは素直にいじめられといて下さい、風さん。どう見てもお前さんが悪い。

「まぁ、頼むことは出来ると思うが、引き受けてくれっていう言い方はせんぞ？俺からいうと命令っぽくなるだろうからな。太守？なんだろう？」
「……なぜ太守のくだりが疑問形なのか、激しく問い糾したい所ですが……依頼の仕方は教経殿に一任します」
「はいはい、一任されましたよ、軍師様」

そういって、稟の頭を撫でる。
照れているようだな。眼鏡をクイクイしてる。
……萌えるねぇ。俺は眼鏡属性持ちなんだよねぇ。そして麦茶が好きなんだよねぇ。髪を下ろして眼鏡掛けてくれないかねぇ？当社比１２０％中の１２０％で大爆発する自信があるんだが。

うん？駄目かね。そうかね。

～愛紗　Ｓｉｄｅ～

中庭で鍛錬をしていると、教経様がこちらに向かって歩いてきた。

「精が出るな、関羽」

「はい。傷口もふさがったので、多少は躰を動かしませぬと」

そういうと、少しばつの悪そうな顔をされた。

「……済まなかったな」

「教経様、それはもう終わったはずのことですよ？」

「そう言うがな、アレは俺にとっては痛恨の、しかも最高に恥ずかしい失態なンだ。そうパパッと忘れられるわけ無いだろうが」

口調とは裏腹に、かなり繊細な人なのかも知れない。
話題を変えた方が良さそうだ。

「それで教経様、どうなさったのです。態々私を捜して来られたのではありませんか？」
「あぁ、そうなんだよ。ちっと関羽に、もし良かったらってことでお願いしたいことがあってな」
「まぁ、私がお役に立てることであれば、協力を惜しむつもりはありません。居候のような身分ですから」
「いや、そういうつもりで居られるのは困るんだよ。関羽、お前さんは、お客さんなんだよ。居候じゃない。無条件に持て成されるのが当たり前だと思って貰わないと」
「しかしそういうわけには参りません」
「参ってくれ」
「参りません」
「参ってくれって」
「参りません」
「……頑固モンめ」
「……教経様ほどではありません」
「まぁ、いいや。ただな、これはお願いであってそれ以外の何物でもないから、嫌だったら絶対に断ってくれ。気を遣うのは止めてくれ。純粋にやっても良いと思えたなら、引き受けて欲しいンだよ」

成る程、それがあっての先程の言葉か。よく気を遣うお人だ。

思えば、本当に変わった人なのだ。御遣いの名声。太守の地位。どちらか一つでも備えていれば容易に人に命令を下して従わせることが出来るだろうに。他人に何かを強制したくない、そういうことなのだろう。

「俺が失態を犯したせいで星……趙雲が怪我をしたのは知ってると思うが、彼女に普段頼んでいた仕事を、彼女の代わりに出来る奴が居ないんだよ。それで、町の治安維持と練兵を、出来れば関羽にやって貰いたいって思ってるンだよ。勿論、趙雲が復帰するまで、だ。給金も、趙雲と同額出させて貰う。……どうだろうか？」

……流れの武芸者に依頼するようなことではないと思うのだが。大体、練兵をする、というが、私はそのようなことをした経験がない。

また、自分の軍兵の練兵を外部の者に委ねる事にも問題があるのではないかと思う。機密保持の面で。

「教経様、治安維持は何とか私でもつとまるでしょうが、練兵、となる話は別です。私にはそのような経験はありませんし、教経様の思っているような結果は出せないと思いますが。また、軍の内部における情報伝達の仕方などが漏れる可能性もあります」

その辺りをどう思っているのだろうか。

「練兵に関して思ったような結果が出ないなんて事はざらにある。気にしなくても良いさ。むしろ普段とは違う人間に練兵されるって経験の方が有益だと俺は考える。経験がないということだが、誰だって最初は経験がない。趙雲の完全復帰まで2ヶ月程度は掛かるだろうから十分経験が積めるだろうしな。兵書を読んでいる、とも報告を受けている。能力的には実はあまり心配してないんだよ。あと、機密漏洩の件に関しては、盟って貰うから問題無い。まぁ、あくまでも保険程度にしか考えてないが」

成る程、理路整然としている。武だけでなく智にも優れたものがあるのかも知れない。

しかし、能力的には心配していない、と仰ったのか。そう見込まれているというのは、世辞と分かっていても嬉しいものだ。
そう考えていると教経殿は、

「……やはり、駄目だろうな。いや、済まなかった。こちらが無茶をお願いしようとしたんだ。関羽が気にする事じゃない。鍛錬をしているところを、邪魔して済まなかったな」

と、この場を後にしようとした。どうやら少し考えている時間が長かったらしい。

……正直に言えば、やってみたい。この先どうするにせよ、練兵をする、という経験は得難いものだろう。機密漏洩に関しては、その情報を売ることで幾ばくかの金を得ようなどと考えるような、見下げ果てた女ではないつもりだ。私が私である以上、漏らすことはないだろう。であれば、これは良い機会なのではないだろうか。
2ヶ月。そう仰った。教経様を見極めるに十分な期間だろう。

「お待ち下さい」
「んぁ？」
「その申し出、お引き受け致しましょう。喜んでやらせて頂きます」
「……嫌だったら断ってくれて構わん、と言ったはずだが、本当に構わんのか？気を遣っているだけじゃないのか？」
「言葉通りです、教経様。喜んでやらせて頂きます、と申しました」
「……そうか。助かるよ、関羽。宜しく頼む」
「はっ」
「じゃぁ、稟のとこに行くか。これから先の予定含めて話し合わないと駄目だろうからな」
「承りました」

そう言って、教経様は歩き始める。
その後ろを、これからのことを考えながら、黙って付いていった。

蝶の如く～25～

～教経　Ｓｉｄｅ～

目の前で兵達が紅軍と白軍、二手に分かれて押し合いをしている。
紅軍が優勢のようだ。それは、そうだろう。紅軍には奴がいる。

「やぁぁぁってやるぜ！」
「ＯＫ！忍！」

ダンクーガは、本当に成長したと思う。
楽平郡での戦いの後、ダンクーガを先手大将に正式に任命した。先手、とは先鋒ということだ。まぁ、先鋒の大将という意味ではなく、常に先鋒を勤める部隊の部隊長、という程度の意味だが。
下に人間が付くことで自覚が出来、よく自分の部隊の面倒をみている。
……相変わらず頭はアレな子なんだが。そして、仕込みは上々、細工は流々ってね。仕上がり具合は上々のようだな、先手部隊員達よ。
ククククッ。既成事実にしてやったからなぁ、ダンクーガ。

そのまま紅軍が中央を突破するか、と思ったが白軍は突破されているのではなくて突破させているのだということに気がついた。えぐいことをするねぇ。アレ、多分前線にいたら気がつかないと思うぜ？紅軍を突破させながら、後ろから半包囲陣形を布こうとしている。
紅軍からすると、訳が分からない状況だろう。自分たちが攻めていたはずなのに、いつの間にか後ろから攻め立てられているのだから。
そのまま紅軍は敗勢を覆す事もなく、白軍勝利で演習は終わった。

「関羽、よく一月でここまで仕上げたな」
横に立つ関羽に、そう話しかける。
「はっ。元々の練度が高かったことが大きな要因でしょう」
「それでも見事なモンだった。中央を突破させて後背から追い立てる。口で言うのは簡単だが、兵を上手く用いるのは難しい。それをやって見せたのだからな。流石は関羽、というところだな」
「あ、有り難う御座います」
照れ屋さんだねぇ。
既に癖となっているようで頭を撫でながら、そう思う。
「まぁそう照れなさんな」
「別に照れてなどは居ません！」
で、意地っ張り、と来たか。微妙に違う気もするがね。そんなだから兵達に『鉄の女』とか言われちまうのさ。ツンデレとはちっと違うが、これはこれでありだな、あり。
「はいはい」
「教経様、聞いておられるのですか！」
「あぁ、確かこの後一緒に飯でも食おうって言われた気がするねぇ」
「教経様！」
「ははっ、じゃぁ、また後でな。飯でも一緒に食おうや」
そう言って練兵場を後にする。
いやぁ、いいもん見させて貰った気がするわ。『乳、尻、ふとももー！』的に考えて。

それにしても。

流石は、関雲長。関雲長は伊達じゃない。このまま俺ンとこの将になってくれんものかなぁ。そうしたら、俺がもっと楽できるようになるだろうに。まぁ、俺が楽できるかどうかは置いておいても、一軍を任せるに足る将が後一枚欲しい。一朝事あった際、俺は留守の将になるつもりは全くない。そうなると星が留守の将を勤めることになるが、毎回毎回留守というわけにはいかないだろう。あの気性的に考えて。そうなると、どうしてもあともう一枚。もう一枚だけで良い。安心して留守を任せることの出来る、文武に確かな将が欲しい。

でもまぁ、無理かもしれない。

星、稟、風。本来であれば、皆違う主君を戴いたであろうはずの彼女達が俺の配下に付いてくれているのは僥倖以外の何物でもない。これ以上を望むのは、少し欲張りすぎなのかも知れない。

関羽は、劉備の下に付く。そう思っておいた方が良いだろう。まぁ、それでも一応誘い水は向けてみるが。碌でもない縁な気がするが、それでも確かに縁があったのだ。何もせずに諦めるには、あまりにも惜しい。良い乳。良い尻。良いふとももも。……背筋が寒くなってきたからやめとこう。うん。

～愛紗　Ｓｉｄｅ～

練兵が終わり、教経様にお褒めの言葉を頂戴した。

「見事なモンだった。中央を突破させて後背から追い立てる。口で言うのは簡単だが、兵を上手く用いるのは難しい。それをやって見せたのだからな。流石は関羽、というところだな」

『流石は関羽』

この人は人をよく褒める。何を以ての流石なのかは私には分からないが、褒められて悪い気はしない。頭を撫でてくるのは癖なのだろうが、気恥ずかしい。私は子供ではないのだ。……これですぐにおちゃらけた話をしなければ良い話で終わるのだが。

「ははっ、じゃぁ、また後でな。飯でも一緒に食おうや」

そう言って練兵場を後にされた。

この一月で、随分『平教経』という人が分かった気がする。

まず口が悪い。

何故この人は人に誤解を与えるような言動を好んでするのだろうか。素直に伝えれば良いものを、素直な言葉で伝えない。だから人はこの人を誤解すると思う。最初は。

女にだらしない……と思う。

よく、頭を撫でる。私も一度ならず頭を撫でられ、恥ずかしい思いをした。私を見てニヤニヤしていることがある。そうかと思えば郭嘉殿を見て同じようにニヤニヤしていることがある。睨み付けると、薄ら寒そうに辺りを見回してどこかに歩いていくのだが。

関係ないが、最近中庭の裏の涸れ井戸で、『乳、尻、ふとももー！』という叫び声が何度も確認されており、教経様直々の調査の結果、幽霊の仕業であろうという結論が出ている。……少し怖い。

真面目に政務を行わない。

『面倒くさい』が口癖で、程?殿と郭嘉殿に政務を投げつけて脱走するのをもう４回も見ている。脱走した後町をぶらぶらして、件の断空我?殿と派手に喧嘩をしたり、町の長老の家でご飯を無理矢理馳走になっていたり、かと思うと鍛冶屋に何かを作ってもらおうとして断られ、『頑張れよ！そこは頑張れよ！そんなことじゃ世界とは戦えないんだよ！もっと！もっと熱くなれよ！』と非常にご近所迷惑な興奮ぶりで鍛冶屋を乗せて一緒に鉄を打っていたりした。暑

苦しい。

意味不明な言動が多い。

この間など、先手大将の配下の者達を集め、彼の口癖である『やぁ ってやるぜ！』と言われたら、何が何でも『ＯＫ！忍！』と応え るのが先祖代々平家に伝わる、平家の『血の掟』であるなどという、明らかな嘘を真顔で吹き込み、懸命に洗脳したあげく何度も練習をさせていた。それはもう、愉しそうに。その設定だと断空我殿は教経様と同じ天の住人ということになるのですが。何故こんな事を、という問いに答えて曰く、『男とは、くだらないものに命をかけるのものなのだよ、明智君』。教経様、私は関羽です。

……こうして考えてみると、少し、いや、誤魔化せないな、随分と問題がある気がしてきた。というより軽く目眩を覚える。ひょっとすると、いや、しないのかも知れないが、人格破綻者といって差し支えないかもしれない。何とか矯正しようと期を捉えては献言しているのだが、全く以て改善の傾向は見られない。

だが。

町で酔漢が暴れている時、率先してそれを鎮圧して回っていた。出来るだけ、痛い思いはするが後に響かぬ程度に手加減をして。どうしても解決できそうにない問題に、全く新しい手法による解決案を提示していた。出来るだけ辛い思いをする人間が少なくなるように、時には強引な手法を採って。

警邏中、子供らにじゃれつかれて、それは嬉しそうに微笑んで、大人げなくも本気で遊んでいた。本気で遊んでやらないと子供だって面白くないだろうが。そう言いながら。

町の長老から、茶飲み話をしながら現状の不満などを上手く引き出し、それを程?殿や郭嘉殿に伝えていた。町に住む者達の生活をより良いものに変える為に。

どちらが本当の教経様なのかは分からない。
本人は前者だと言い張るが、そんなこともないだろう。特に、子供と遊んでいる時の目は、それはもうお優しい目をされていた。そういうと、そんなことはない、俺は子供は嫌いなんだよと不機嫌そうな顔を取り繕ってぶっきらぼうにお答えになるが。

「関羽。飯食いに行こうぜ」
「はあ」
「はあ、じゃねぇだろうがよ、はあ、じゃ。関羽が誘ったんだろうが」
「記憶には御座いませんが」
「政治家か。とにかくいいから飯に行こうぜ。俺ぁ腹減ったんだよ」

こうなるとどうあっても言うことは聞かないだろう。
諦めて付いていくことにする。

「関羽、ちっと真面目な話があるんだが」

食事を終え、中庭で寛いでいると、教経様がそう仰った。

「はっ」
「……お前さん、このまま俺ンとこの将になっちゃくれないかね？」
真面目に、そう聞いてくる。
この一月余りで確認した教経様の才と人格は、才は申し分なく人格も、多々問題点を抱えているものの、おおむね好意的に受け止められるものだった。だが、仕える、となると話は別だ。この人が持っている志や理想というものを全く聞いたことがないのだから。
「教経様、教経様に伺っておきたいことがあるのですが、宜しいでしょうか」
「あぁ、何なりと聞いてくれ。気が済むまで、な」
「……教経様は、この世界で何をなさるおつもりなのです？」
「天下統一、だねぇ」
……天下統一。御遣いなればこそそれは当然だ、とは思うが、現状のこのような小勢で、自ら天下を統一してみせると口にするのか、この人は。
「何の為に天下を統一なさるのです」
「楽したいンだよ。天下が統一されて治安が良くなったら、俺ぁヘラヘラ笑って、喰っちゃ寝して、毎日をだらだらと過ごしたいンだよ。出来りゃぁ皆そうやってへらへらと生きていって貰いたいもんだ。何の憂いもなく、ただただ平凡な日々を送る。『平凡な人生』って奴を送って貰いたい」
らしい回答だが、『平凡な人生』、とは何だろうか。
教経様は、この言葉に特別な思い入れがあるようだが。

「『平凡な人生』？」

「そ、『平凡な人生』。

非凡な人生ってのは、非常な人生と同義だ。その人生は、あり得ないほど波乱に満ちた人生だろう。栄光や名誉に満ちあふれたそれであればいいがなぁ、命を狙われた挙げ句に落とすとか、押し込み強盗に自分以外の一家を皆殺しにされ、世に絶望して自殺するとかそういうことだって有るだろうよ。良い方はともかく、悪い方は碌なもんじゃねぇ。是非お断りしたい人生だねぇ。

平凡ってのは、平穏ってのと同義だと思ってるンだよ。喜びも人並みなものだろうが、苦しみも人並みなものだろう。その人生には越えられない苦痛なんて物ぁ無いんだ。それがどんなに有り難いか、今この非常の世を生きている俺たちには分かっているはずだ。

……いつも町で一緒ンなって遊んでる餓鬼共に、そんな人生を歩んで貰いたい。あいつらが戦場に引っ立てられて、苦痛に満ちた表情で死んでいく。そんな光景は俺ぁ見たかぁない。情が湧いてるからだろうがな、そんなモン想像したら涙が出てきちまいそうになるンだよ。俺が作りたいのは、そういうことがない、平凡な、そう、本当にありふれた日常という奴に満ちあふれた、平々凡々な世界なのさ」

これが、『平教経』という人の本質だろう。何の理由もないが納得してしまった。いつの間にか息をのんで聞いていたようで、肺腑からゆっくりと息を吐き出しながら、そう語った教経様を見る。

「だから関羽、お前さんの力を、それを実現する為に貸してくれねぇかな。俺は、俺一人では無力なんだよ。いくら剣の腕がたとうが、お前さんが実感したとおりで、俺はまだまだ未熟なンだ。いくら俺が救ってやりたい人間が目の前に居ても、俺の手は生憎と二本しかない。三人目を救ってやろうとするなら、この手に握りしめている命を一つ、斬り捨てないと救ってやることは出来ないのさ。だから、

俺と一緒に来て、一緒ンなって手をさしのべて救ってやっちゃぁくれないかね。お前さんがいれば、後二人は確実に救えるはずだから」

私の力で、武で、人を救う。

今までも、そうやってきた。だが、私はどこかいい気になっていなかっただろうか。山賊共を討伐して、感謝され、まるで自分が救世主であるかのように得意になっているだけではなかったか。私がやっていたのは目の前で困っている人間を救って満足していただけのことだ。

この人は違う。この世界をどうしたいのか。はっきりとした理想を抱いている。

この人は、この人なら、私の武に、私が武を振るうことに、理由と意味をくれるだろう。例え、剣に斃れることになろうとも、この人の理想の為に斃れるのであれば何の悔いもないだろう。

「どうかな、関羽」

そういって、じっと私を見てくる。

「……私は、姓は関、名は羽、字は雲長。真名を愛紗と申します。教経様」

「……俺は、姓は平、名は教経。字も真名もない」

お互いに、そう名乗り合う。

「これから、宜しく頼むよ、『愛紗』」

「……はい、教経様」

この人の理想を、夢を、必ずこの世に顕現させてみせる。

誰もが、『平凡な人生』を送れる世の中を。

我が青龍偃月刀に盟って。

蝶の如く～26～（前書き）

少し短い。

蝶の如く～26～

～星　Ｓｉｄｅ～

怪我が完治し、鈍ってしまった躰を鍛え直して現場に復帰することになった私が一番初めにやったことは、新しく同志となった愛紗と手合わせをすることだった。真名は、同じ主に仕えることになったのであるから、とそのことを伝えられた時に交換してある。

主との撃ち合いを見る限り、かなりの腕前であることは分かっていた。是非、試してみたい。主以外の猛者と手合わせをして、自分がどれほどの者なのかを確認したい。先方でも、自分が打ち倒されようとした時に素早く飛び込んだ私の腕前に興味があるようで、手合わせを申し込むと一も二もなく同意してきた。

「さて、愛紗よ。私の槍、見事に捌ききれるかな？」

「星、私を見くびるな！この私の偃月刀の業を以て勝ってみせる！」

ふふっ。気負っているようだな、愛紗よ。

だが、私とて主と鍛錬をしてきたのだ。そうおいそれと敗れるわけにはゆかぬ。

まず、速さに重点を置いた突きを続けざまに放つ。

躱せるかな？

そう見ていたが、愛紗は躱すのではなく長刀で跳ね上げて来た。

……流石にやるようだ。

「ほうっ、愛紗、私の槍に合わせるとはなかなかやるようではない

か」

「何度も言わせるな！私を見くびって貰っては困る！」

だが。跳ね上げた事で重心がやや右に傾いているぞ？愛紗よ。
跳ね上げる力を利用して槍を大きく回し、右足を薙ぐ。
これは長刀に阻まれる。

「次は私の番だ！」

そういいながら長刀を振るってくる。やや左上から右下へ。
凄まじい速度だ。
私をのけ反らせ、返す刀で足を打つ。そういうことだろうが、主との死合いで、そういう場合の対処は理解したつもりだ。

前に出る。主が丁度そうしたように。
愛紗はどうやら驚いているようだ。この状況で前に飛び込める人間が果たして何人いるだろうか。だが、愛紗よ、私はその何人かの人間になったのだ。主と死合ったことによって。

「くっ」
「貰った！」

槍の石突きで、愛紗の鳩尾を突く。だが、愛紗はそれを躱そうとせず、相打ち狙いで長刀を短く持ち直し、そのまま薙いでくる。

「ぐっ」
「むっ」

……やられた。最期の最期に油断をした。
まさか、相打ち狙いで来るとは思っていなかった。油断無く、攻め

立てていたのに。

主の前で勝てなかった。それが一番悔しい。

「それまで、だな。二人とも、流石の武技だ。眼福だったよ」

「「はっ」」

「でもなぁ、星、最期、油断したろ？駄目だなぁ星。次はしっかり勝てるように鍛錬しないとなぁ？」

……主は最近意地悪だと思う。が、どうやら主と一緒に鍛錬する口実が出来たようだ。その機会は掴んでおく必要があるだろう。……ここは素直に伝えるとしてみようか。

「そうですな、主。一緒に鍛錬して頂きますぞ？」

そういうと、素直な言葉に少し驚いたような顔をした後で、主が嬉しそうに笑う。

「だな。星、手加減はしないからな？」

「瞬動は、おやめになって頂きますぞ？」

「いや、手合わせってのは、本気でやらんとえらい目に遭うってのをこの間実感したばかりだからなぁ？それは聞けない相談だろうさ」

「はは、主。それとこれとは話が別物で御座いますな」

「いやいや。星、絶対に使うからな」

「主？使わなかった場合の益が、お分かりになっておられないようですな？」

そういって、ひらりと裾をめくって太股を露わにしてみる。

「うん、使わないよ。使わない」
「宜しい」

怪訝そうな顔をして愛紗がこちらを見ている。まぁ、この娘はその手のことに鈍いようだしな。顔合わせの時に話をした限りでは、今はまだ主に女として恋い焦がれてはいないようだが、さてはて、いつまで耐えられるのかな？我が主は、誠美しい花であるからなぁ。

……一番の蝶が、この私であるのは譲りはしないが、な。

～風　Ｓｉｄｅ～

「風、関羽が俺に仕えてくれることになったぞ」

練兵を視察し、町へご飯を食べに関羽さんと出かけていったお兄さんが、そういいながら嬉しそうに帰って来ました。お兄さんは、本当にどうしようもない人です。可愛いから、誘ったに違いないのですから。風が気がついていないと思っているのでしょうが、お兄さんが関羽さんの胸、お尻、太股に並々ならぬ興味を持っている事は既に判明しているのです。稟ちゃんが眼鏡をくいくいするのを眺めているのと同じ顔をして、関羽さんの躰を、それこそ舐めるように見ている時があるのです。

本当に仕方がない人です。これでは本当に色狂いなのです。
惚れてしまった風が、悪いのですが。

「そうですか～」
「それは重畳です」

稟ちゃん、気がついていない様ですが、お兄さんは関羽さんが大好物なのかも知れないのですよ。
警戒しながら関羽さんを見ます。

む～、いやらしい躰をしてお兄さんを誘惑するとは、とんだメス豚なのです。
でも、風だって負けてないと思うのですよ。お兄さんは変態さんなので、風のような体つきの娘が大好きなはずなのです。

「……何か今もの凄く謂われのない悪口を言われている気がするんだが。誰かに。どこかで」

とうとうお兄さんが壊れてしまったようです。前から壊れているの

は知っていましたが、まだ半壊程度だったのですよ。それが、全壊に格上げされたようなのです。
お兄さん、風が、今、ここで、言っているのですよ～。心の中で、ですが。あんな事をしたのですから、十分に謂われはあるのですよ。

「改めて、私は、姓は関、名は羽、字を雲長。真名は愛紗と申します。今後、宜しくお願い致します」
「風は、姓は程、名は?、字を仲徳。真名は風なのですよ。宜しくお願いされるのですよ。愛紗ちゃん」
「私は、姓を郭、名を嘉、字を奉孝。真名は稟と申します。こちらこそ、宜しくお願い致します」

少し、お話をしてみる必要がありますね～。

自己紹介を一通り終えた私達三人は、女同士交流を深める、という名目で集まってお話をしています。星ちゃんの部屋で。なので、正確には、四人でお話をしているのですが。

「教経様が想っておられる理想の世の中、というものは本当にすばらしいと思います。私は、我が武を、その世界を顕現させる為に振るいたい、そう思ったのです」

なぜ、お兄さんに仕えることに決めたのか。そう聞いてみると、逆るようにお兄さんが語った夢、皆が『平凡な人生』を送れる世の中にしたい、を語った後、愛紗ちゃんはそう言いました。……お兄さん、どんな顔をしてその夢を語ったのか、何となく風には想像がつきます。もの凄く、こう、胸が締め付けられるような感じがするのです。お兄さんのことを、もっと好きになった、そんな気がします。

一通り、互いの出身地や育ちなどの話に華を咲かせた後、今日は解散、ということにして愛紗ちゃんには部屋に帰って貰ったのです。

「……で、風。どう思う？あれは、主に恋い焦がれるようになるかな？」

流石は星ちゃんです。風が愛紗ちゃんを部屋に戻した意図をよく分かっているのです。それでこそ、お兄さんの一番を争う好敵手なのです。

「そうですね～お兄さん、多分最初は凛々しい顔をして、遠くを見ながら切なそうに理想を語ったに違いないのですよ。とんだスケコマシなのです。風や稟ちゃん、星ちゃんもあの顔にあっけなくおまたを開いてしまったのですから、愛紗ちゃんも時間の問題だと思うのですよ」

「ふふふふふ風！」

「駄目ですよ～稟ちゃん、お兄さんとの情事を想像しては」

「あ、ああ貴女はなんてことを……」

そういいながら、稟ちゃんは妄想という名の目眩く世界への入り口

の扉の前で準備万端のようです。

あ、旅に出たようです。

久しぶりの宇宙の旅、愉しんでくると良いのですよ、稟ちゃん。

「たたた、確かに、教経殿と、その、ああいうことになって……しかも風と二人でその……ああ、駄目です教経殿……そこは……その……あぁ！いけません！……いけません、教経殿！そう言う私に教経殿は……あぁ……」

「ふむ、久しぶりだな」

「そうですね～経験を経て、稟ちゃんの妄想に磨きが掛かったと思うので、もの凄いものが見られるのではないかと風はわくわくしているのですよ」

「……風、ここは私の部屋なのだが？」

「まぁまぁ、いいじゃないですか」

「いや、血なまぐさい部屋で療養など、私は御免被りたいのだが」

「……稟ちゃんの鼻血を、お兄さんに掃除して貰えばいいのではないかと風は思うのですよ」

「……成る程。だが風、敵に塩を送るとは、どういうつもりかな？」

「あのいやらしい躰をしたメス豚からお兄さんを守るのですよ～星ちゃん。風達は、運命共同体なのです」

「……まだ躰の完治していない星を教経殿は荒々しく……な、なんということを……あぁ、でもそれは……ひぃ！そのようなことまで……星、何故貴女は平気なのですか！……」

「そろそろなのです」

「うむ。だろうな。実況が最高潮だ」

いちばんせんから稟ちゃんが発射します。

「ブーッ」

「おぉ！凛ちゃん、世界記録なのですよ。おだゆうじも吃驚なのです」

「これはまた凄まじいな……」

どこからどう見ても惨殺現場。覚醒した凛ちゃんの妄想力は、本当にすごいものなのです。

蝶の如く～27～（前書き）

袁紹のせいでこんなことに・・・
勝手にキャラが大暴走。

修正しようとしたけれど、修正しようがないところまで逝っているのでこのまま逝きます。

蝶の如く～27～

～教経　Ｓｉｄｅ～

愛紗が俺たちの同志となってから、なんだかんだでもう二月経った。
その間に、太原郡、楽平郡、新興郡、西河郡の４郡に巣くっている賊を、次々に討伐していった。やはり、将が増えたことで軍の行動範囲が飛躍的に伸びたことが大きい。また、討伐を繰り返して名前を上げれば上げるほど旗下に参じる兵も、商人が献じてくる金も増えていった。それも、討伐が順調にいった主要因として挙げられるだろう。

そろそろ、地力はついてきたと思う。
黄巾の乱が何時発生しても、何とかなるだろう。食糧自給率的に考えて。
そんなある日、風が書状をもってきた。

「お兄さん、袁紹さんからお手紙が来ているのですよ」

お手紙って風さん……ラジオか何かじゃないんだから。
袁紹って、あの袁紹か。何の用だ？というか、男じゃないんだろうなぁ、多分だけど。

本番入りま～す。

え～、何々？

初めまして教経さん。

はい、初めまして。

私は名族である袁家の袁紹ですわ。
俺は歴史上最も有名な負け組、平家の教経ですわ。
この度、常山に巣くう汚らしい賊さん達を討伐することに致しましたの。
太原にはもうおりませんので、討伐できませんのことよ。
ですから、貴方にこの私を手助けする名誉を与えて差し上げますわ。
はぁ、面倒くさいので謹んでご遠慮申し上げますわ。
ついては、雪融け花芽吹く頃、常山で合流しなさいな。
何時だよ。常山のどこなんだよ！お前は馬鹿か！死ね！
お～ほっほっほ。お～ほっほっほ。
あ～ほっほっほ。あ～ほっほっほ。
袁紹
教経
はいカーット！
「……風、俺は寝る」
「ぐぅ」
「先に寝るな！」
「おぉ、吹きすさぶ寒風に誘われて～」
「……凍死するぞ、風。誘われるんじゃない、そっち行ったら死ぬぞ！そして、漸く今が春だよ。麗らかな～とか言ってたのが漸く今

なんだよ！」
「まぁ、そんなことはどうでも良いのです」
……振っといてこれかよ。まぁいいよね、かぁいいもの。
「風、こいつ、真性と書いてホンモノって読む馬鹿なの？」
「はい～そうですよ～」
「やっぱりねぇ。じゃぁ無かったことにしようか」
「教経様！何を仰っておられるのですか！使者殿が目の前に居られるのですよ！風、貴女も全力で肯定するのは止めて教経様をたしなめて下さい！」
「見なかった奉孝で、あ、これじゃ稟だね、方向でお願いします」
「教経殿、お呼びでしょうか」
「いやぁ、稟ちゃんは可愛いよねぇ。眼鏡クイクイして欲しいンだよねぇ」
「教経様！」
「こうでしょうか」
「稟、お前も何をやっているのだ！」
「やるねぇ、流石は郭奉孝。俺の弱点を知り尽くしているねぇ。そこに痺れる！憧れるぅ！」
「……」
「俺は眼鏡属性持ちなんだよねぇ。そして、麦茶が好きなんだよねぇ」
「ノリツネサマ？」
おお、愛紗・・さん・・的存在も目覚めてしまったようだねぇ。やはり俺にはハンターブリーダー的な才能が豊富にあるようだねぇ。しかもどうやら、心の叫びって奴がちょいと漏れてた様なんだねぇ。ほんの一文字ほどダダ漏れたみたいなんだよねぇ。一文字だからそれほど問題はないと思うんだよねぇ。

俺は操作系だ。強化系とは相性が悪い。ここは一旦引かせて貰うぜ？
あばよぉ～とっつぁん！
って。あら？躰が宙に浮いていて移動できてないみたいですな。

「ノリツネサマ？」
「ははは、愛紗、いつもの冗談じゃないかね。大丈夫大丈夫、ちゃんと話聞くから大丈夫だよ。愛紗～今日も相変わらずの良いｔ……力瘤してますねぇって　へブッ！」
「……こいつらに頼むって、姫、本当に大丈夫かぁ？確かに一人もの凄いのが居るのは分かるんだけどさ……」
使者がそう、失礼なことを言っていた。

「待たせたな、俺が平教経だ」
「……いや、アレを無かったことにするのは流石に無理だと思うんだけどなぁ、あたいは。顔が半分腫れてるし……」
「……待たせたな、俺が平教経だ」
「……あたいは文醜ってんだ。宜しくな、御遣いの兄ちゃん」
「な！貴様！教経様に何ということを！」
「まぁまぁ愛紗、これでお相子に出来るだろ？」

「な、なるほど。教経様の深慮遠謀には恐れ入ります」

何となくまた勢いで変な方向に行きそうだから用件だけは済ましておこう。

「で、さ。文醜つったっけ？」

「おう」

「これさ、もうそろそろ春だから頭がちょいとアレな感じの人になっちまったって事でイイの？」

「……いや、姫はいつもそうだから」

「……要するに病気なんだね？」

「あたいはそんなこと言ってないからな！」

ふむ。会いたくない人ＮＯ．１的存在な気がする。各種雑誌アンケート的に考えて。

「で、これ何時なのよ。そしてどこなのよ？」

「えぇっと～、あ～これに書いてあるよ」

ほうほう。

「成る程。何でこれ最初に出さないんだよ、文醜。頭かち割るぞ？ダンクーガ、清麿もってこい！」

イイ笑顔でそう凄んでやる。吃驚してるみたいだな。

「はいよ、大将」

「の、教経様。殺気をお納め下さい。断空我殿も空気を読んで下さい」

「俺は断空我じゃねぇよ！」

「ではどうして来たのだ！」

ん？おぉ！気がつかなかった。
ダンクーガぁ、お前こんなとこでなにしてんだよ。
あっち行ってろ、しっしっ。

「すまんすまん。文醜、済まなかったな。だがこの次は済まさないからな？」
「わ、わかったよ、御遣いのアニキ」

アニキ、だとぅ！？
それだと俺がビルダーみたいだろうが！ドイツ、ドイツ、ジャーマン！
プロテイーン！ビルドアーップ！ビルドアーップ！
そら～必殺のポージングだぁ～！
いいよいいよ～、キレてる！キレてる！

「……なんかまたおかしくなりそうな雰囲気だから、あたい帰るよ」
「……申し訳ありません。文醜殿、しっかりと教経様には反省させてオキマスノデ」
「さいならぁ～」

とりあえず、出兵することになったんだとさ。後から聞いた話だと、だけど。

「さて、教経様」
「はいっ、もうしません！」
「いえ、教経様？」
「ん？あれ、俺どうしてた？」
「ずっとここに座っておられました」
「そっか」

なんかさぁ、変な夢見てたんだよねぇ。愛紗にマウントポジション取られて殴られ続けるとか、どんな夢なんだよ。ヒョードルに見えたわ。

「んで、なんだっけ？愛紗」
「はっ、この度の出兵に伴う兵ですが、５０００程で如何でしょうか」
「……防備の方は大丈夫なのか？」
「主、この星と稟が防備に当たるのですぞ？３００００もあれば十分でしょう」
「ご安心下さい、教経殿」

まぁ、二人がそう言うんなら大丈夫だろう。

「はぁ、で、何時出発になるんだ？」
「二週間後に出発することになりますね～」
「補給物資は？」
「既に準備できていますよ～」

流石に、優秀だねぇ。圧倒的じゃないか、我が軍は！てか。

「んじゃ、行ってみようか、馬鹿の顔でも眺めに、さ」
「はっ」

愛紗、そこは否定してあげても良いと思うんだよねぇ。
否定しようのない事実であるとしても。

～愛紗　Ｓｉｄｅ～

「お待ちしておりました。天の御使い様の軍、で宜しいでしょうか」
「あぁ、それで宜しいんじゃない？」
「私は、顔良と申します。宜しくお見知り置き下さい」
「俺は平教経だ。宜しく、顔良」
「では、こちらへどうぞ。麗羽様がお待ちです」
「案内ご苦労さん」

指定の場所で、袁紹軍と合流した。
申し継ぎの者として出てきた顔良という者に案内されて陣中を行く。

「愛紗」
「はっ、なんでしょうか教経様」
「そう警戒するな。大丈夫だ、殺気出してる人間も、俺を殺せるほどの武勇を持った人間も居ねぇよ、ここには」
「そういうわけには参りません。教経様は我らの旗印なのです。ここで喪っては星や稟に申し訳が立ちません」

そういうと、教経様はやや呆れていたが、警戒することを止めるように言わなくなった。
……当然だ。教経様を喪うわけにはいかないのだ。

「麗羽様、平教経様をお連れしました」
「入ってきて宜しくってよ」

そう言われて中に入る。
袁紹。字を本初。
三公を輩出した、歴史的な名族の家長だ。

冀州を中心に強大な勢力を誇っている。
のだが。
「お～ほっほっほ。この度はよくいらっしゃいましたわね～教経さん」
……これはなんだ。
「あぁ、良く分からんお手紙有り難うよ、袁紹さん」
「まぁ！？あのすばらしい文章が理解できなかったのですか？全くこれだから得体の知れない人間は駄目ですわ～。その点私は名族である袁一族出身ですから、あの程度の文章は簡単に理解できるのですわ～。お～ほっほっほ」
教経様を侮辱したな……？
「あ～ほっほっほ。んで、賊共の勢力・布陣は？」
教経様が、怒りに震えていた私の右肩を抱きこちらを向いて右目を瞑って笑いかけている。
……まともに相手をするな、ということですね、教経様。
……ところで、その、少し、恥ずかしいのですが……
「あ、はい。こちらになります。現在、黒山賊約１００００がこの本陣に向かって移動中との報告を受けています。それに対し、我が軍は縦深陣を布くことで出血を強い、敵の勢いが衰えたところで包囲。殲滅することを目的とします」
「な～にを言ってらっしゃるのかしら、斗詩さん。華麗にやっておしまいなさ～い」

「ふ～ん。あんたも大変そうだねぇ。上司がこんなだと」
「あ、あはは……」
……何となく、他人のような気がしない。
「で、俺たちは遊撃でいいんだよな？」
「はい、それで構いません。お互いの軍の特徴を把握していない状態で連携した行動は不可能だと思っていますので。それであれば、最初から方針を確認した上で個々に動いた方が良いと思います」
成る程、この顔良という者は、なかなか軍略に明るいようだ。
「了解、了解っと。んじゃぁ、こっちはこっちでこれから北側山中へ移動するわ」
「北側山中ですか？」
「そうそう。袁紹軍が華麗じゃない賊共の攻撃を、華麗に耐えている所へ、俺たちのみすぼらしい軍が突撃するのさ。で、俺たちのみすぼらしい軍が苦戦している所を、華麗なる袁紹軍が華麗に助け出して賊を撃退するっていう筋書きだねぇ」
「あら、貴方なかなか分かっていらっしゃいますわね～。褒めてあげても宜しくてよ？お～ほっほっほ。お～ほっほっほ」
「いや～お褒めに預かり光栄で御座いますなぁ～。馬鹿めが。あ～ほっほっほ。あ～ほっほっほ」
……教経様、それは言いすぎだと思います。そしてなぜ袁紹は気がつかないのか……はぁ。
「お～ほっほっほ」
「あ～ほっほっほ」

開戦の刻は近い。
だが、力が……入らないのだが。
力なくうなだれる私の肩に、顔良が手を置いて顔を横に振る。
……お互いに、苦労しているな。

そう苦笑いをして、未だ笑い？の収まらぬ二人をおいて陣屋を出た。

……放っておくしか無いのだ。

蝶の如く～２８～

～教経　Ｓｉｄｅ～

馬鹿の巣から帰って来た俺たちは、軍議を開いた。

「さて、風。基本方針は？」

「はい～。如何に手を抜いて勝つか、に焦点を合わせるべきかと～」

……風は気付いているな。俺の目論見に。

「風、どういう事だ？」

「愛紗ちゃん、よく考えて下さいね～。なぜ、袁紹さんはお兄さんに助力するようにお手紙を出したのでしょうか～？」

そうそう、それが問題なんだよねぇ。

隣に居るから、ということなら、劉虞だってそうだろうし、公孫賛だってそうだろう。

その中から、戦力の詳細が不明である俺たちに白羽の矢を立てたのだ。

しかも、俺たち『だけ』に。

「？教経様が天の御使いであり、その軍勢は正に騎虎の勢いがある。それを頼みにした、ということではないのか？」

「違いますね～では、お兄さんはどう思いますか？」

「……まぁ、俺たちの軍勢がどの程度のものか、目の前で闘わせて見物してみたいってのが正解なんだろうさ」

だから目の届かないだろう山中に駐屯して、戦いっぷりがよく見え

ないようにしようとしているのさ。

「流石はお兄さんなのですよ。風もそれに違いないと思うのです」
「……成る程、そういうことでしたか。では、袁紹のあの言動は、全てこちらを試す為のもの、ということでしょうか」
「愛紗、残念でも何でもないが、アレはただの馬鹿だ。周囲のものは優秀なようだがな」
「そ、そうですか」

愛紗、真面目だねぇ。でも、真面目すぎると足下掬われちまうぜ？
俺みたいな不真面目な人間に。

「で、どう手を抜く？」
「簡単なのですよ～お兄さんや愛紗ちゃんが先頭に立つのではなく、先ず兵隊さん達だけで敵軍を食い止め、その後でお兄さんと愛紗ちゃんが動くようにすれば、普段我が軍が見せている実力の半分も見せていないことになるでしょうから」

確かにそうだろうが、それだと……

「風、それだと人死にが多く出るんじゃないかね？」
「はい～そうですね～」
「……風、その策は」
「お兄さん」

風が、厳しい声を出す。
珍しい事もあったモンだ。

「お兄さんはいつも自分が居る状況で全ての戦が行われると思いますか？」

「……いんや」
「であれば、今から少しずつでもその事に慣れておかなければならないのですよ」
「……」
「現状、我が軍はお兄さんに対する依存度が高すぎると思うのですよ。戦力的な意味ではなく、心理的な意味で。お兄さんが居ることで士気が揚がるのは良いことだと思いますが、お兄さんが居ないと話にならないようでは困るのですよ」
「……はぁ。それは分かっちゃいるが、な」
「納得は出来ない、ですか。教経様？」
「そりゃそうだろう。特に先手には、太原での初陣からずっと一緒にやってきてる奴らが居るンだ。気になるのが人の情というモンじゃないかね？」
「お兄さん、お兄さんのその優しさはお兄さんの美点ですが、度が過ぎればそれは弱点にしかなり得ないものなのですよ。あと、少し厳しい言い方をしますが、お兄さんは思い上がっていると思うのですよ。自分が居れば何とかなると思っていませんか？」
……まぁ、思ってるな。確かに、思い上がりだろう。
星の事を言ってられない、か。
「……風、有り難う。俺は思い上がっていたらしい。これからも、至らないところがあれば是非諫言してくれ。必ず耳を傾けるから。……今回は、風に任せるよ」
「分かって頂ければ良いのですよ、お兄さん」
そう言って、嬉しそうに笑う。
……敵わないなぁ。
「では、風。兵達だけで敵軍を食い止めた後、どうする？」

そう愛紗が問う。

「先ず様子を見なければなりませんが、賊さんは袁紹軍の縦深陣を前にして、全軍で突入するほどお馬鹿ではないと思うのです。黒山賊は、その辺りにいるお馬鹿さんと同列に見ない方が良いと思います。敵将は、必ず様子を見ようとするはずなのです。自らは戦闘に参加せずに」

「……敵将の位置を掴み、それを討ち果たすべく行動する。そういうことか」

今のでその結論をはじき出せるのか。

やっぱり関雲長は伊達じゃない。

「そうです。それを愛紗ちゃんにやって貰います」

「任せて貰おう。この青龍偃月刀に誓って敵将の首を挙げて見せよう」

「じゃぁ、俺はその辺で補助に廻って戦線を維持するって事だな」

「そういうことです」

「では、この方針で行こう。開戦まで、暫く時間がある。兵に休息を取らせておこう。後飯も」

「承知致しました～」

「はっ、畏まりました」

兵の皆には、正念場になるだろう。何せ、俺が先頭に立って居ない状況での初めての戦になる。しかも、敵の方が多勢と来ている。全ての敵兵がこちらに向かってくるわけではないが、受ける威圧感は相当なものがあるだろう。

……死なせずに済ませることが出来るはずの人間を、それと分かっ

ていながら死なせる、か。

風や愛紗が戦の準備をしている間、俺はずっとその事だけを考えていた。

～風　Ｓｉｄｅ～

黒山賊と袁紹軍が山麓で激しく押し合っています。

開戦から既に２刻。袁紹軍は流石に地力があるようで、寄せてくる黒山賊をしっかりと跳ね返しています。

平家軍は、先手がまだまだ元気です。

「まだまだぁ！テメェら！殺ぁぁぁってやるぜ！」
「「「「「OK！忍！」」」」」

……いつも通り、暑苦しいのです。
随分と苦戦をするだろう。そう思っていたのですが、断空我さんの威勢に周囲の兵が引き摺られ、思いも寄らぬ健闘をしています。このまま戦線を維持することが出来れば、焦れた敵総大将が必ず動いてくると思うのです。……兵数の少ないこちら側へ。それまで、耐えて貰わなくてはなりません。

敵の総大将は、まだ焦れないのでしょうか。
ちなみに、平家軍の総大将は、既に焦れるどころの話では無くなっています。
防衛線を突破しようとちょっとした突撃祭り中なのです。

「そこを退けろ、愛紗。ちょっとそこまで散歩に行って、そこら中に溢れかえってる生ゴミをお片付けしてくるだけだ。なぁに、すぐ戻る。ほんの1刻もあれば綺麗になるだろうさ」
「教経様、駄目だと何度も申し上げているではありませんか」
「愛紗、こう考えるとなんの問題も無いじゃねぇか。俺は思い出作りに行ってくるだけなンだよ」
「……どのような思い出ですか？」
「彼岸花のような、鮮やかな朱の華がそこら中に咲いた、美しい思い出だねぇ」
「なんの問題も無いどころか問題しかありません！とにかく落ち着いて下さい！」

通常であれば、こちらの防衛線はもう突破されてしまっていたことでしょう。が、今お兄さんの前にいるのは『鉄の女』の異名をとる

愛紗ちゃんです。その異名に相応しい鉄壁ぶりでお兄さんを押さえ込んでいます。ですが、戦場でのお兄さんは色々とぶっ飛んだ人になってしまうので、そろそろ突破されてしまうかも知れないのです。

「む～、愛紗ちゃん」

「風、教経様がそろそろ押さえられなくなりそうなのだが」

「愛紗ちゃん、ちょっと外に出て貰っても良いですか？お兄さんに説教をするので」

「？分かったが……大丈夫なのか？」

「大丈夫なのですよ～その辺りを巡回して、兵を励ましてきてあげて下さいね～」

「？分かった」

愛紗ちゃんはよく分かっていないようですがそれでも外に出て行ってくれました。

「風、俺はそろそろ前線に出るぞ？」

「はいはい、お兄さん、その前にこっちを向いて下さいね～」

そういって、お兄さんに口吻します。

「っ」

「ん……ふぅ。お兄さん、落ち着きましたか？」

「……あぁ」

「前線に出ますか？」

「……いんや、止めとくよ」

「それならいいのですよ」

愛紗ちゃんがどこまで行ったのか分かりませんが、お兄さんが次に我慢できなくなるまでに帰って来てくれれば問題無いのですよ。

～愛紗　Ｓｉｄｅ～

風に言われて、本陣の陣屋を出る。
本当に、大丈夫なのだろうか。きちんと押さえられるのだろうか。
でもまぁ、大丈夫なのだろう。風が断言する、ということは、勝算あってのことだから。

それにしても。
教経様がああまで好戦的になるとは思わなかった。
本当に、大変だ。あの方は常に前線で戦ってきたと星が言っていた。
だから、皆が闘っている今戦場に自分が居ないことに我慢出来なく

なったのだろう。

今回、漸く留守ではなく教経様と共に戦陣に望むことができた。
共に立つ初めての戦陣。ここで、負けるわけにはいかない。

眼前で繰り広げられる攻防。皆、必死に闘っている。
敵の総大将は、何をしているのか。まだこちらに寄せてこないのか。
そう思って戦場を眺めていると、『張』の旗が上がり、その旗が急速にこちらに近づいてきていた。

来たのだ。
まず、本陣に戻らなければ。

本陣に戻ると、陣屋の外で、先程までの異常な興奮状態から醒めた教経様が、戦場を眺めておられた。

「教経様。敵総大将がこちらに向かって参りました」
「そうだねぇ」

そう言って、悠然と戦場を眺めておられる。
総大将が悠然と構えていることがこれ程に心強いと感じるとは。

「愛紗、これからが本番だ。平家に関雲長があることを思い知らせてやらないとなぁ」
「……はい」
「……愛紗、ちっとこっち来い」
「はっ」

教経様の側まで行くと、前から私の両肩を掴み、のぞき込んでくる。

「……愛紗、緊張しているのか？」

私が緊張していることが分かったからか、そう声を掛けてくる。

「……恐らく、そうだと思います」

躰が強ばっている。それが、分かる。

私にとって、これは初めての大規模な戦だ。

何も変わりはしないと思っていたが、そんなことはないと実感している。

「……ふむ。『鉄の女』も形無しだねぇ」

「なっ！」

「可愛い顔をしているのに、普段ああもツンツンしているからそんな渾名を付けられちまうンだよ、愛紗」

「教経様！何を言っておられるのですか、このような時に！」

「もっとこう、俺にしな垂れ掛かってくるとかしてくれると嬉しいんだけどなぁ？」

そう言いながら、私の手を取る。

「の、教経様！」

「愛紗は自分に自信を持った方が良いぜ？」

「えっ」

「折角そんなに良い乳、良い尻、良いふとももをしているのだから」

……ほう。

「……教経様、たっぷりとお話をする必要があるようですね？」

「いやぁ、良い笑顔だねぇ、愛紗。じゃぁ俺はそろそろ前線に行か

なきゃ行けない時間だからお暇させて頂きますのことよ。あ～ほっほっほ」
「しっかり反省して頂きましょう！」

「ご反省頂けましたか？」
「……はい」
「ああいったことを二度と言いませんね？」
「だが断る」
「……二度と言いませんね？」
「はい！不肖この平教経、お言葉しっかりとこの胸に刻みまして御座います！」

……はぁ。本当にこの人は仕方のない人だ。

「で、愛紗」
「まだ何かご用ですか？」
「緊張、解れたか？」

……あ。

「……その様子だと、解れたみたいだな」

「教経様……」
「まぁ、殴られ損にならなくて良かったよ。はは」
「申し訳ありません。教経様」
「ありがとう、だろ？愛紗」
「……有り難う御座います。教経様」
「あいよ、どう致しまして」

私が緊張していることを知ってあのように心にもないことを仰って私を怒らせ、私の緊張を解そうとなされるとは。……本当にこの人は仕方のないお人だ。

「じゃぁ、愛紗。屑の親玉、とっとと首にして俺ンとこに持ってこい」

そう言って不敵に笑う。
ただ、教経様。そのように腫れたお顔では締まるところも締まりませんよ？

そう思って少し笑ってしまう。

……麾下の騎兵達と共に前線の賊共を蹴散らして賊将を前線に引き寄せた後、馬を駆って敵将に向かう。それが現状望める最も確率の高い策だろう。
そう思い、一度偃月刀を振る。

……全身全霊をかけて事に当たるのだ。
教経様のご要望通り、敵将を首とする為に。

蝶の如く～29～

～教経　Ｓｉｄｅ～

そろそろ前線に立っても良いのですよ。
そう言われ、最も激しく押し合っている箇所へ駆けつける。
随分損耗しているようだが、まだ戦線維持は可能だと判断する。
ここからは、俺も貴様らと一緒に闘う。

ダンクーガ。目の前に見える。斜め右後背から、槍で突き貫こうとしているドカス。
飛び込んで槍の穂を落とし、そのままの勢いで臑を斬り飛ばした。

「貴様ら、待たせちまったなぁ？」

そう言って、周囲の兵に俺がここにいる事を認識させる。
が。周囲の反応が芳しくない。

「た、大将！どうしたってんだ！？」
「？はぁ？」
「くっ……大将……こんなんなってまで、俺らのことを心配して……」

なんだ？とうとうダンクーガは壊れたのか？

「おい、ダンクーガ？」
「いや、良いんだ大将、無理しなくても良いんだよ！ここは、この俺に任せてくれ！いや、俺たちに！……絶対に！そのあんたの心に応えてみせる！」

……何一人で盛り上がってるんだよダンクーガ。結構恥ずかしいこと言ってるの自覚してるのか？どこの戦隊ものの赤色だよ。昼メロじゃないんだから落ち着けよ。
それともアレか、お前、実は修造なのか？

「おい、テメェら！大将をここまでやってくれた、目の前の屑共に思い知らせてやるんだ！平家の郎党が皆戦の鬼であることを！心行くまで、たっぷりとなぁ！」
「「「「「「「おうよ！」」」」」」」
「総員、気張って付いてこいよコラァ！殺ぁぁぁぁぁぁぁぁぁってやるぜ！！！」
「「「「「「「ＯＫ！忍！」」」」」」」

……もの凄く士気が揚がっている。
正直に言おう、俺が敵だったら相手にしたくない。目が血走ってる奴しか居ないし、はっきり言って怖い。

ダンクーガ、なかなかいい発破掛けるじゃねぇか。
立派な先手大将になったモンだよ。
ただなぁ。俺は別にその『目の前の屑共』とやらになんかされた覚えはないぜ？

何でこいつらこんなに燃え上がってやがるんだ？ちょいとした火遊び楽しみに来た賊共が次々に全身やけどで天国に搬送されているようなんだが。……あぁ、地獄か。

まぁ、いい。俺は俺に出来ることを為すのみだ。

「ほらほら、ここに御遣い様が居るぞ？とっとと掛かってきてとっ

とと死に花咲かせやがれ」

前から右から左から。

本当にお前らはうじゃうじゃ湧いて出てきやがるなぁ、屑共。

「だがなぁ、屑共。お前らには力も、業も、覚悟も、何もかもが足りない。そして何より……」

清麿を鞘に収め、抜刀斬りを行う。

「速さが足りない！」

太刀行きの速さに全く反応できず、目の前に居た賊は首になった。

これも、言ってみたかったんだよねぇ。なかなか格好良いものなんだねぇ。そのうちに兄者的な何かを武器にして斬りつけそうな口調なんだねぇ。その際はウーロン茶でも良いんだねぇ。

周りの屑共は、槍を付けてくるでもなくただ呆然としている。

さて、前線に隈無く彼岸花を咲かせて廻ることにしましょうかねぇ。

まぁ、その前にここに溜まっている生ゴミを、綺麗なお花に昇華させてあげないとなぁ。生臭くて仕方がないだろ？手間賃として、腕一本、足一本、首一つ。どれでも良いから取り立ててやることにするさ。俺の気の向くままにな。

～愛紗　Ｓｉｄｅ～

前線の賊共を一通り蹂躙した後、敵将に向かって馬を駆けさせる。
敵将の周りは賊共で溢れかえっている。足を止めれば、たちまち包囲されてしまうだろう。

「皆、二列に隊列を組み直せ！駆けながらだ！」

青龍偃月刀を頭上で振って指示を出す。
練兵の甲斐あってか、非常に滑らかに隊列を組み直せた。

「これより敵中を突破しその後背に出、馬を返して再度敵中を突破する！千々に引きちぎってやるのだ！一列は私に続いて右から左後背へ！もう一列は、左から右後背へ！賊共を掻き乱してやれ！征くぞ！」

馬を駆る速度を上げる。
賊共は私の意図するところをどうやら見抜けていないようだ。
一度陣を突破されれば、賊は混乱状態に陥ることは間違いない。

そこを、帰りの突撃で、敵将を首としてやることにしよう。

「そこを退け！私は平教経が家臣、関雲長！前に立ちはだかるならば容赦はしない！」

青龍偃月刀を、右に左に振るって駆ける。
賊将の旗を左手に見ながら、雲霞の如く集まっている賊共を時に偃月刀で斬り、時に馬そのもので撥ね飛ばす。

「下郎共、私の邪魔をするな！」

あと、少し。あと少しで、敵中突破に成功する。
左手から攻めている隊は、やや遅れているようだが、それでもあの訓練を耐えてきた者達だ。そうそう後れを取るものは居ない。あちらも、先ず間違いなく突破できるだろう。

目の前に槍を持った下郎。槍で馬を突いてくる。
……遅い。星の突きに比べ、なんと悠長な突きを放つことか。
槍を偃月刀の背で跳ね上げてそのまま斬り下げ血の華を咲かせる。

眼前に、まだ血塗られていない大地が広がった。

突破した。先ずは、満足。
だが、ここからが本番なのだ。

……今。この関雲長の武を、教経様の為に全身全霊を懸けて振るう刻が、今、やってきたのだ。

「さぁ、再度突入するぞ！」

馬首を巡らせ、再度駆けさせる。
脆い。
やはり、一度突破されたことで敵の指揮系統は混乱している。
目の前に、『張』の旗。
敵将。
どうやら私が目の前に来て初めて私の意図に気がついたようだ。

……だが、最早遅い。
私はもう、偃月刀を振り上げているのだから。

「俺が作りたいのは、そういうことがない、平凡な、そう、本当にありふれた日常という奴に満ちあふれた、平々凡々な世界なのさ」
……教経様の、夢。何人にも、それを汚させはしない。例え、剣に斃れることになろうとも。

「だから関羽、お前さんの力を、それを実現する為に貸してくれねぇかな」
……教経様の、真摯な依頼。共に歩めと言ってくれた気がした。一介の武侠に過ぎなかった私に。

この私が、関雲長が、必ずや成し遂げてみせる。
『平凡な人生』に溢れる、教経様が想われる世の中を顕現させてみせる。
きっと、私はその為に、この末世に生を受けたに違いないのだから。

「教経様が夢の実現の為、その首捧げて貰おうか！」

偃月刀を、真一文字に振り抜く。
賊将の首。
確かに、この関雲長が、我が青龍偃月刀で頂いた。
……教経様と、共に、歩む。その確かな証として。

「敵将、平家が将、この関雲長が討ち取ったり！」

その首を偃月刀に掛けたまま、敵陣中をひた走る。
私が敬愛して已まない、教経様の元へ。

～教経　Ｓｉｄｅ～

「そら屑共。どうした？俺を殺したらお前らの勝ちが確定するかも

しれんぞ？どうだ、試してやろうという奴はおらんのか！」

口調は余裕綽々だ。
だが体力的には、ちっとばかりきつい。
賊共が次々に、それこそ地から湧き出るようにやってきやがる。
戦が始まってから、もう４刻近く経過している。兵達の体力は、もう限界を越えているだろう。

袁紹軍は、こちらに賊共を押しつけるように動いていた。袁紹軍に押され、賊共がこちらに雪崩を打って攻め掛かってきているのだ。
傍目から見れば見事な連携に見えるのだろうがな。
顔良つったか？なかなかやってくれるじゃねぇか。味方じゃなかったら今すぐ走っていって斬り捨ててやるところだ。自分の立場に感謝しておけ。ただ、いつか必ず意趣返しはさせて貰うからなぁ？俺ぁ性格が悪いんだよ、ほんの少しだがなぁ。

……愛紗、信じてるぜ？
馬を駆って敵陣に突撃してゆく愛紗の後ろ姿を見ながら、そう思う。

お前さんならきっとやれるだろう。
俺ぁお前さんを信じてここで待っているだけだ。お前さんが戻ってくる場所を、屑共から、この俺自身の手で守りながら。

「ほらほらほらほらっ！俺を殺せる奴は居ないのか！」

清麿を振るう。目の前の敵を殺す為に。

「屑共！俺の家の郎党共を、貴様ら如き屑が、よくもその手に掛けてくれたな！褒美に決して逃れられぬ死をくれてやる！心当たりのある奴ぁ、今すぐ俺に斬り殺されにこい！」

清麿を振るう。死んでいった兵達の仇を一人残らず殺し尽くす為に。

清麿を、振るう。唯々、愛紗を信じて。

「大将！関羽の姐さんがやったぜ！」

ダンクーガに言われ、周囲の糞虫共を斬り捨てながら前方を見る。大きく揺れながらも先程まで立っていた、『張』の旗。それが目に映らない。

やったのか。

賊共からの圧力が、心なしか薄れている気がする。
そう思っていた時、俺の目に愛紗の姿が飛び込んでくる。

……美しい。
長い黒髪を風に靡かせ、凛々しく馬を駆る。
青龍偃月刀に賊将の首を掛け、無人の野を征くが如く。

俺は、惚けたように、愛紗を見ていた。
愛紗が、その顔に笑みを貼り付けてこちらに馬を寄せてくる。
俺の目前で下馬し、片膝を付いて、敵将の首を俺に捧げた。

「教経様。お申し付け通り、敵将の首、この愛紗が討ち取って参りました」

……あぁ、愛紗。お前さんは本当に『いい女』だなぁ。

「信じてたぜ、愛紗。ご苦労さん」

もう既に癖になってしまっているのだろう。
愛紗の頭を撫でながら、俺はそう言った。

蝶の如く～３０～

～教経　Ｓｉｄｅ～

６３４。
この戦で命を落とした郎党の数だ。
俺が最初から陣頭に立って指揮をしていれば、もっと人死にを減らすことが出来ただろう。
彼らは、俺が、俺の都合の為に、殺した。
そこにどのような理由があり、どう言い訳をしようとも、その事実は変わらない。

戦前に風が言ったことは、正しい。それは間違いないことだ。
正しいが、人は正しいから生きているのではない。どうしようもない極悪人を心から愛する人がいる。その事実一つだけで、その事が証明できるではないか。そう思う。
だが、既に賽は投げられ、目が出揃っている。
この事実を、今更無かったことには出来ない。

「お兄さん、準備が整いました」
「あぁ、分かった」

神葬祭を執り行う。
もう幾度となく執り行ってきた、戦の鬼共を鬼であることから解放し、彼らの家の守護神とするための神事。
神葬祭とは、そういうものだ。少なくとも、俺が家長を務めるこの平家においては。
眼前に並ぶ、６３４の棺。

その一人一人の人生を、祝詞と共に彼らの祖霊に奏上する。

祝詞を詠み上げながら、想う。

太原で共に闘った者のうち、何人かが命を落とした。
それ以降、共に闘い、共に苦しみ、共に笑い、共に泣いた者達も。
皆、死んだ。俺と共に在った為に。

今までも、何人も死んでいった。
それは、割り切っておかなければならないものだった。
だから、割り切ったのだ。

彼らが望んだ平穏な世を創り出す為に、彼らはその礎となったのだ、と。
俺が志操を曲げず、彼らが希求して已まなかった世の中を創り出す。
そうすることで、彼らの死には意味がある、そう俺が思える。だから、天下を平定するのだ。死んでいった者達の為ではなく、何よりも先ず俺自身の為に。

そう思っていた。そう割り切っていた。
どこかで聞いたことのある言葉を並べ立てながら。
自分のことを内心で女々しい奴だと思いながら。
……割り切った、つもりだった。

だが、今回死んだ者達の死は、今までとは違った色合いを持つ。
俺が、死ななくて済んだ者を殺してしまった。今後起こり得ることだという、尤もらしい理由を付けて。どうしても、そう思ってしまう。この思いに決着を着けなければ、前に進めない。

だが、立ち止まれば、犬死にをさせただけになる。
だから、自分なりの結論を出さなければならないのだ。借り物の言葉ではなく、自分の言葉で。

戦の前、今回こうすると決めた時点で、自分がこういう状態になることは分かっていた。だから、ずっと考えていた。

彼らが俺の夢の為に払った犠牲の対価として、俺がなにを差し出してやれるのか。

考え続けて漸く出した結論は、整合性も論理性もないものだ。
『決して言い訳をせぬこと』。
『決して泣かぬこと』。

言い訳をしたり泣いたりすれば、少しは気持ちが楽になるに違いない。人間とは、自分の心を壊さぬ為に、自分を正当化したり誤魔化したりして生きていく生き物だと思う。だから、それを自分から取り上げるのだ。そうすれば俺の人生は、少なくとも他の人間よりも苦痛に満ちたものになるだろう。その為に、俺の心が壊れてしまったとしても、それが俺が彼らに差し出してやれるものだ。俺の夢の為に、俺の都合によって死んでいく者の為に。俺は、強くなければならないのだ。だから、俺の弱さの象徴を斬り捨てる必要がある。

そう思ったのだ。郎党共が死という、それこそ生きている俺には全く想像することも叶わない苦痛を受け入れることを強いられたのに、俺だけが楽になるなんて許されるわけがないのだ。

そんなものは、天下を平定した後に、存分にやれば良いのだ。恥も外聞もなく。
思うがままに言い訳をし、感情の趨くままに泣き喚けば良い。

今の俺に、それは『許さない』。
言い訳をしたければ、泣きたければ、天下を平定するが良いのだ。

～愛紗　Ｓｉｄｅ～

教経様が祝詞を詠み上げている。
その顔は、少し青ざめているかのように見える。

透き通った表情。
あの人に、あの様な表情は似合わない。あの人は、もっと明るくあ

るべき人なのだ。死者を悼むのは良い。責任を感じるのは人の心の作用として当然の帰結だ。だが、あんなに透き通った顔をするなんて。

啜り泣く声が聞こえる。そちらを見やると、風がさめざめと泣いていた。
自分達の考えが、間違っていた。そう言う。

私はそうは思わない。
いずれ、教経様は風の言うとおりの考え方をなさらなければならなくなっていたはずだ。それが早いのか遅いのか。只それだけの違いではないか。
そう言うが、風は、そういうことではないのですよ、と力なく応えた。

時期尚早だったのだ、と。

教経様がお優しいことは、皆分かっていた。だから、人が死ぬ度に辛そうな顔をする教経様を見ては、星も、稟も、風も、本当に心を痛めていたのだ。教経様が死んでいった者達に囚われぬように、教経様ご自身の精神を如何にして強いものにしてゆくのか。そのことを、出陣前ずっと話し合っていたことを私は知っている。

教経様のお陰で確かに救われている人間が居るのだということを実感していれば、きっと真正面から自分自身の罪悪感と向かい合ったとしても、ああなることはなかっただろう。
今、この時点でそれと向き合わせてしまった為に。自分が人を殺すだけでなく救えてもいるのだということを実感出来ていない今、向き合わせてしまったが為に。教経様が教経様で在るが故に、教経様

が死んでしまう。そう風は言う。

まさか。そう思う。

教経様は罪悪感から自ら命を絶つような、そのような無責任な人ではないだろう。

だが風は、そういうことではないのですよ、と重ねて言った。

今まで神葬祭を行っている最中、教経様は泣きそうな顔をしながらも己を叱咤してそれを執り行っていた。だが、あの顔は違う。あれは己を叱咤しているのではなく、切り刻んでいるだけだ。教経様は、なにか極端な、悲しい決意をしているに違いない。そのせいで、教経様は死んでしまうだろう。最早、そこには私達が知っている『平教経』という人は亡く、彼が抱いた夢の残骸が、歪な情操を有して、教経様の形をとって残っているだけだろう。

だが、あの提言をした風自身が、教経様を諫めることは叶わない。

だから、私に、教経殿を助けて欲しい。何かしらの極端な、悲しい結論を出してしまったであろう教経様を、助けて欲しい。

幼子のように啜り泣きながら、そう風は言った。

「教経様」
「なんだ愛紗」
「教経様にお話があります」

神葬祭を終えた後、教経様に宛がわれた陣屋で期を捉まえて話をする。

「教経様、教経様はなぜあのように透き通った顔をなさっておられたのですか？」
「……そんな顔をしていたか、俺は」
「はい。……教経様、私は星達から、教経様は神葬祭の際いつも辛そうな顔をなさっていたと聞いております。今回に限りそうでなかったのには理由があるだろう、そう思ったのでその理由をお聞かせ願いたいと参りました」

教経様の表情に大きな変化はない。
風が言っていたことを思い出す。
確かに、おかしい。確かに顔は普段通りだ。態度についても、少し落ち込んでいる程度にしか見えない。だが、この人は今確かに『哭いている』。涙を流していないだけで。
普段通りの教経様なら、その感情に従っているのではないか。顔を歪ませ、多少の涙は見せるのではないか。ここは教経様の陣屋で、誰にも見られることはないのだ。それが、私の知っている『平教経』という人だ。

「愛紗、俺はな、今まで自分のすることに対して言い訳もしてきたし、その結果に対して涙も見せてきた。だが、それは今後許さないことにしたンだ。死んでいった奴らが俺の夢の為に払った犠牲の対価として、俺がなにを差し出してやれるのか。それを考え抜いて、俺はその二つを俺自身から取り上げてやることにしたンだよ」

死んでいった者達が払った犠牲の対価。

この人は、今そう言ったのか。

「天下を平定した後なら、いくらでも出来ることだ。そう思う。だから、そうするんだ」

風が言ったことは、正しかった。この人は、死んでしまう。いや、自らを殺してしまう。

『言い訳をしない』。

『泣かない』。

簡単なことだ。そう思う人間が多いだろう。だがそれは違う。

言い訳というが、それはその考え方を理解できない、もしくは理解しようとしない人間にとって、であって、理解できる人間にとっては当然のことであったり、信念といって差し支えないものであったりするだろう。それを周囲に漏らさぬ、ということは、理解者を得られぬ、ということに他ならない。孤独に苛まれるのは目に見えている。

孤独に苛まれた支配者。考えただけでもぞっとする。

彼の行いを親身になって注意する人間が居ない。彼の考えを親身になって注意する人間が居ない。支配者である彼ではなく、彼そのも

のを心配して注意してくれる人間が居ない。
行き着くところは、暴君だろう。
彼は孤独だ、他者の感情など知ったことではない。彼は孤独だ。他者の生活など知ったことではない。彼は孤独だ。他者は、血の通った人間は、彼の住む世界には存在しない。暴君しか、ないではないか。こんな悲しい人間が行き着くところは。

泣かない、というが、では泣かずにどうやって自分の気持ちに整理を付けるのだ。感情に身を任せず、論理的に物事を考えることは必要なことだが、論理で感情が捌けるわけがないではないか。
自分に良くしてくれたから人が死ぬと悲しいわけではない。好きだから悲しいのだ。論理的であったり客観的であったりする理由は、後から適当に見繕って言っているに過ぎない。感情は、感情によってしか制御できないものだ。溢れる感情をもてあまし、気が狂ってしまうに決まって居るではないか。
猿でさえ、我が子を奪われれば腸がズタズタになる程に悲しんで絶命するというのに。人であれば、それ以上の悲しみが襲ってくるだろう。それを、泣かずにどうやって整理するというのだ。

間違いなく、教経様は死んでしまう。精神的に。

それで天下を平定したとして、その天下になんの意味があるのだ。教経様が、『平教経』としてそれを為さない限り、意味がない。
いや、民達にとっては意味あるものだろう。
だが、私達にとって、教経様が『平教経』として創り出した、あの優しく、稚気が旺盛すぎ、少し幼い所のある『平教経』が創り出した世の中でないと、意味がない。

自分を犠牲にする、それは立派な心がけだろう。だが、そんなものは私達には必要ない。私達は、教経様であればこそ従ったのだ。彼

であればこそ。強さと弱さが同居する彼であればこそ。己の弱さを素直に認めることが出来る、弱くも強い彼であればこそ。

有り体に言えば、嫌だ。そんなものはいらない。嫌だ。嫌なのだ。とにかく嫌なのだ。犠牲になんてなって欲しくない。傲岸不遜で不敵な、そんな人間を演じたい、偽悪趣味を持ったこの愛すべき善人が居なくなってしまうなんて嫌だ。

教経様の『夢』の為にこそ、私は自分の武を奮いたい。

間違っていたのだ。そうではなかったのだ。

『教経様』の夢の為にこそ、私は自分の武を奮いたいのだ。

「教経様。教経様は間違っておられます」

「……何が間違っている！俺のせいで！俺の夢の為に皆死んでいく！そんな奴らの為に俺が出来ることが他に何かあるのかよ！」

「教経様！教経様が死んでいった者達のことを想ってそのような結論を出されたことは分かります！分かりますが、では生きている者達はどうなるのです！」

「……生きている者達？」

「そうです！教経様。星や稟、風、そして私。付き従ってくれている兵達。教経様が教経様で無くなってしまった時、生きている私達は、残される私達は一体どうすれば良いのです！」

「天下を統一する。その目的も、理由も何も変わらないだろうが！俺の夢の為に、従ってくれているのだろうが！それが為し得るなら、この際俺がどう変わろうがどうだって良いだろうが！」

「貴方が！貴方が貴方でなくなって、それで天下を統一すれば皆が喜んでくれるとでも思っているのですか！私は嫌です！星にしても

稟にしても、今自分の陣屋で泣いている風にしても！絶対に嫌だと言うことでしょう！」

「……」

「貴方は自分のせいで消えていく命のことしか考えておりません！貴方が夢を抱いて行ってきたことで確かに救われた人間が居るのです！私は、只の武侠でしかなかった。貴方が夢を私に語り、共に歩もうと、そう言ってくださった事でこの世に救いを見出すことが出来たのです！この世の中をより良いものに変える為に、自分の力を奮うことが出来る。ただ目の前の者を救うのではなく、貴方と共に歩むことで自分にも世を変えるが出来る。そう思わせてくれたのは貴方なのです！」

私は、泣いてしまっている。

教経様の顔が歪んで良く見えない。

「貴方が貴方であればこそ、皆希望を胸に今日を生き、明日を闘う事が出来るのです！その貴方が！その貴方が変わってしまって、それでも闘っていけと！そう仰るのですか！」

「……愛紗……」

「私は嫌です！教経様、貴方が貴方で居てくれることが、どれ程今を生きる人々に希望を与えてくれることか！いや、言ってしまえば他の者などどうでもいいのです！死んでいった者達のことを考える前に、何故私達のことを考えて下さらないのです！？」

「……愛紗、もういい」

「良くありません！何故！何故貴方は！貴方は……」

そう言って、私は泣き崩れてしまった。

～教経　Ｓｉｄｅ～

愛紗が、泣いている。
もうずっと泣き続けている。

……俺は、死んでいった者達のことしか考えていなかった。
星、稟、風、愛紗、ダンクーガ。兵達。
太原で懸命に生きている人たち。

彼らは、俺の夢を信じてくれている。
彼らは、今のこのどうしようもない俺の事を信じて、俺の夢に希望を見いだしている。
そんなことが、考えられなかった。

分かっていたはずの事じゃないか。

自由気ままに、気の向くままに。それが俺らしい。

星は、そう言ってくれたじゃないか。
稟も風も、そういう俺が好きだと言ってくれたんじゃないか。

俺が俺のままであって欲しい。
愛紗も、そう言って泣いているじゃないか。

俺は何をやってるんだ。

死んでいった者達は、今生きて俺を信じて付いてきてくれている人間と同じように、俺の事を信じてくれていたんじゃないか。それを悲しんで俺が変わってしまうってのは、彼らを犬死にさせたのと同じ事じゃないか。俺の為に死んだのに、俺が俺じゃなくなるなんて。

その事を、考えられなかった。

その結果が、これだ。
愛紗を泣かせ、そして、どうやら風も泣かせているらしい。

愛紗の肩に、そっと手を置く。

「……愛紗。俺が間違っていたみたいだ」
「……教経様……」
「すまんな、愛紗。世話を掛けちまった」
「……」
「変わっちまったら駄目だったんだな。この碌でもない俺のままでないと駄目だったんだな」
「……そうです」
「俺が未熟で、愛紗に世話掛けるのは、これで二回目か」
「……そうです」
「……もう泣き止んでくれよ、愛紗」

「……無理です」
「俺は俺として、俺のままで生きていく。そう言ってるンだよ、愛紗」
「……分かっています」
「なら、どうしてそんなに泣いているんだ。もう、泣くことはないだろうに」
「……嬉しいのです」
「……」
「……貴方が、貴方として生きていくと言ってくれたことが嬉しいのです」
「……愛紗……」
「……風も、泣いていますよ」
「分かってるさ。迎えに行こう、愛紗」
「……はい」

俺は、俺として、俺のままで生きていく。
それが、死んでいった者達に、ただ唯一の俺が出来ること。

それが、俺が風と愛紗に迷惑を掛けながら、漸く出す事が出来た結論だった。

蝶の如く～31～（前書き）

松田優作が好きです。Gパン的に考えて。
まぁ、コーヒー吹き出す方が好きなんですが。

蝶の如く～31～

～風　Ｓｉｄｅ～

黒山賊の討伐から3ヶ月が過ぎ、山は初夏の彩りを見せています。

あの後、袁紹さんが朝廷に奏上し、お兄さんは并州牧に任命されました。

お兄さんは、今まで『馬鹿の純粋種』と呼んでいた袁紹さんのことを、感謝を込めて『おっほっほ』と呼ぶことにすると宣言しています。相変わらず、こういった方面でお兄さんが考えていることは分からないのです。

ですがこれは、袁家の力というものを見せる為の、一種の示威行動。そう、風は思います。

何せ、今中央での権勢争いが激しくなっているのですから。風達の実力をある程度計ったつもりの袁紹さん達は、風達を与しやすいと考え、袁家の力というものを見せることで従属させ、最終的には臣下にしてしまい、并州を袁家のものにしてしまおうと考えているのでしょう。残念ながら、それはお兄さんが袁紹さんのことを鼻で嗤って『おっほっほ』呼ばわりすることをもたらしただけのようですが。

不敵に笑いながら『おっほっほ』さんを持てる限りの罵詈雑言で馬鹿にしているお兄さんを見て、本当に良かったとしみじみしてしまうのです。

あの晩。

お兄さんがお兄さんであること。そうあり続けること。
それこそが、死んでいった人達にお兄さんがしてあげることが出来ること。
だから、どんなことがあってもお兄さんはそう生きていくことにする。

風の陣屋まで来て、お兄さんはそう言っていました。
……本当に、良かったのです。

風は、お兄さんがもうどうにもならないところまで行ってしまっていたら、と星ちゃんや凛ちゃんに申し訳ない気持ちで一杯だったのです。風が、時機を見誤ったが為に、皆が好きなお兄さんを殺してしまったかも知れない。そう思って、ずっと泣いていたのです。後事を、愛紗ちゃんに託して。

愛紗ちゃんは、良くやってくれたと思うのです。
手合わせの一件から、お兄さんに諫言をするに向いている類の人だとは思っていました。人に諫言するに、まずその至らなさを想わせること。それが諫言の要諦なのです。お兄さんから話を聞いた限りでは、これを自然にやっていたのですから。
だから、一緒に来てくれていて、本当に良かった。そう思います。

でも、太原に帰って来てから、少し気に入らないことがあります。

愛紗ちゃんの仕事ぶり。
例えば、警護を理由にお兄さんと一緒によく町を歩いています。理由と都合が付く限りにおいて、お兄さんの側に居ようとするのです。
その、ある種の可愛らしさを、星ちゃんはにやにや笑って見ているようです。時に冷やかしながら。

愛紗ちゃんの目。
お兄さんが朝議で寝ていると、怒りながらも優しい目でお兄さんを見つめているのです。その雰囲気を察知した稟ちゃんが、眼鏡をクイクイしてお兄さんをはんたぁぶりぃだぁにしてしまい、愛紗ちゃんが覚醒することになるのですが。

愛紗ちゃんの悲しそうな顔。
お兄さんが、夜、稟ちゃんと自分の部屋で過ごしている時、偶々通りがかった愛紗ちゃんがお兄さんと稟ちゃんの関係に気付いたそうなのです。その時、それは悲しそうな顔をしていた、と愛紗ちゃんをこれまた偶々見かけた星ちゃんが言っていました。本当に偶々なのか、疑わしいことなのです。
それは置いておいて、稟ちゃん、最近大胆になってきたのですよ。自分で夜這うなんて本当に淫乱なのです。翌日稟ちゃんにそう言うと、まだ見ぬ大地を求めて妄想の扉から旅立って行きました。８じちょうどのあずさ2号で。はんたぁつながりなのです。狩人だけに。

……よく分からない電波を受信してしまったのです。

それほどまでにお兄さんのことが好きであるならば、愛紗ちゃんもはっきりとすればよいのです。でも、愛紗ちゃんは悩んでいるようで、何も行動を起こそうとしないのです。はっきり言ってしまえば、へたれなのです。そこが気に入らないのです。

風は、星ちゃんと稟ちゃんに、愛紗ちゃんがお兄さんを救ってくれたことを伝えてあります。わざわざ、愛紗ちゃんの目の前で。風は、もし愛紗ちゃんにその気があるのならお兄さんを共有する仲間になっても構わない、と考えています。認めているのです。愛紗ちゃんの気持ちは、軽々しい憧れなどではないのです。だから、他の二人がいる場所で愛紗ちゃんが果たした役割を説明し、彼女を持ち上げ、

風が愛紗ちゃんを認めていることを稟ちゃん達に伝えたつもりです。

……間違いなく、お兄さんは愛紗ちゃんの胸、お尻、太股が大好きなのです。涸れ井戸で叫んでいるのを、もう何度も見ているのです。

だから、そのいやらしい躰でお兄さんを誘ってしまえばいいのです。お兄さんは獣なので、間違いなく食いつくのです。

丁度、眼鏡をクイクイする稟ちゃんに我慢できなくなっていたように。

……そうは言っても、そういう愛紗ちゃんの奥ゆかしさも含めて、お兄さんも憎からず思っているに違いないのです。む～、借りは返さなければならないのです。風は、愛紗ちゃんに救われたのです。だから今度は、風が愛紗ちゃんを助けてあげるべきなのですよ。仕方がないからなのです。愛紗ちゃんを応援したいと思ったからではないのです。仕方がないからなのです。大事なことなので、二回言うのですよ。

～星　Ｓｉｄｅ～

「なぁ、星。最近愛紗がおかしくないか？」

そう、主が言う。おかしいも何も、溜息ばかり吐いている。主、他の誰でもない貴方のせいで。まぁ、稟もその原因の一翼を担っているが。

主は、そこまで鈍くない人だ。愛紗が自分に好意を持ってくれていることに気がついているはずだ。だが、あの様に深刻な溜息を吐く原因になるほどには好かれてはおるまい、などという戯けたことを考えているようだ。

……全く。仕方のない人だ。本当は気づいているでありましょうに。ここで愛紗の気持ちを主に伝え、抱いてしまえと言ったとしても、きっと何のかのと理由を付けて踏み切らないに違いない。

曰く、『星に悪い』。
曰く、『風に悪い』。
曰く、『稟に悪い』。

悪いことなどありはしない。それを言うなら、主。私だけを見て、私だけを抱いて、私の為だけに生きてくれれば良いのだ。私達三人を好きになった以上、何人増えようと何も変わらないということに全く気がつかない。……イライラしてきたので後でいじめて差し上げよう。

兎も角、美しい花には蝶が集うものなのだ。蝶達がその花がよいと集ってくるのであって、花が蝶を捕食するのではない。どの蝶にも、花を愛で、花に愛でられる権利があるはずだ。花に嫌われない限りにおいて。だから集ってくればよいものを。

集ってきた後のことは、花には関係ないことだ。蝶達が、花の寵を競うだけだ。自分が一番花に愛されている蝶なのだと主張する為に。

まぁ、主も私に操を立てようとした位なのだから、そう割り切れるお人でもないのだろうが。……ちょっと操を立てることが出来ていた時間が短すぎると思うのですがね？主？次の日の夜とは、どういうつもりですかな？

一度、愛紗を掴まえて話をしなければならないかな。

まぁ、精々からかってやるとしようではないか。

ククッ。愛紗よ、歓迎するぞ？

あぁ、主、ちょっとお話があるのですが宜しいでしょうかな？

いえいえ、怒ってなどおりませぬよ。ちょっと虫の居所が悪いだけですから。

はは、八つ当たりなどではありませんぞ、主。

ふとももを思い切り抓ってやりたくなっただけですから。

～稟　Ｓｉｄｅ～

愛紗が、教経殿を好いているようです。遠征から帰って来てから、傍目にそう分かるようになりました。教経殿も、そんな愛紗を憎からず思っていらっしゃるようで。しかし、二人とも互いのことが気になっているのに、互いに一歩が踏み出せない。

全く以て、仕方のない二人だと思います。でも、愛紗を見ていると、きっと自分もこうだったのだろうと思え、微笑ましい気持ちにもなります。もう少し、あとちょっとだけ、勇気が出ない。よく、分かります。私が勇気を出したのは、いつも引っ込みがつかなくなってからでしたから。

「愛紗、今日の練兵についてなんだが」

「はい、教経様」

当たり障りのない会話をし、執務室を出て行く愛紗を、教経殿は食い入るように見ています。
……全く。そんなにあのお尻が良いのでしょうか。私は、郭奉孝。私にも意地というものがあるのです。そう思いながら、伝家の宝刀を抜き放ちます。

今度は、こちらを食い入るように見つめ、鼻息が荒くなってきたようです。
……本当に気が多い人です。好きになってしまった私も私、なのですが。

そうぼんやり考えていると、教経殿が私を抱きすくめ、胸に手を伸ばしてきます。
まだ、昼なのですよ、教経殿。
そう言っても、教経殿は収まらず、次々に私を求めてきます。
誰に見られても構わないではないか。いっそ、町の皆に見せてやろうか。
そう、私の耳元で、いやらしく囁きます。

恥ずかしい。「あぁ、稟、この書類について何だけどさぁ」でも、教経殿がそれを望むなら私は。

私は、教経殿「この嘆願書、ちょっと虫が良すぎると思わんかね？」に蹂躙されてしまうだろう。あっという間に。
そう、このようないやらしい私を、教経殿は求めているのだ。

私は、私は……

「ここにはこう書いてあるけど……稟？お～い、稟さん？……なんだこの既視感は。要するにこれはあれか？午前８時になったってこ

とか？あずさ2号的に考えて。……おいおいおいおい待てよおい、ここにはまだ処理してない書類が山ほど在るだろうが！ちょっと待って！お願いだからちょっと待って！

稟！目を醒ませ！無駄な妄想を止めて今すぐ投降しろ！今なら、今ならまだ間に合う！な～んつって！な～んつって！太陽に吠えろ、的な！Gパンキター！ばっシティばっ、ばっシティ！あ、これ探偵の方だ。

いやいや、遊んでいる暇はない！俺の、俺の貴重なプライベートタイムが大ピンチ！地球が！地球が壊れちゃう！リプリィィィィィィ！助けてぇぇぇぇぇぇぇ！」

「ブーッ」

「うおぁ！なんじゃぁこりゃぁ～？……って感じにさ、今俺は血まみれになっているわけですが、その辺り、どうなんですかね、解説の風さん」

「はい～、稟ちゃんは本当に淫乱なのです」

「ええ、本当にそうですね！左脇腹をこう、抉り込むように相手のボディを……っておい！友達なんだからちっとは手心加えるなり多少柔らかい表現に変えてやるなりしてやれよ！」

「……メス豚？」

「いや、俺に聞くなよ……というか、風！居たのか！」

「居たのですよ」

「だぁ～！何で一緒に妄想止めてくれなかったんだよ！おかげでご覧の有様だよ！」

「どう致しましてなのですよ～。稟ちゃんが突如考え込んで暫くしてから恍惚とした表情を浮かべ始めたので楽しみに待っていたのですよ。初日の出妄想なのです。時期的に考えて」

「今は初夏だよ！冒頭でお前さんがそう言ったんだろうが！メタ発言させるんじゃない！最初っから気付いてたんなら止めてくれよ！ったくどうすんだよこの殺害現場に落ちている書類の山ぁ」

「まぁまぁ、その辺りは稟ちゃんとお兄さんが何とかしてくれるの

で、お兄さんは気にしなくても大丈夫なのですよ」
「成る程、それなら大丈夫……じゃねぇじゃねぇか！俺のプライベートタイムがぁ～！」
「ぷらいべーとらいあん？」
「……貴様、見ているな！？」
「風は電波を受信しただけなのです」

……教経殿。風。いい加減そのわけの分からない漫談を止めて、トントンして貰っても良いでしょうか……その、気が遠くなってきたもので。あぁ、私にも刻が見える……

「こういうわけで、稟ちゃんも愛紗ちゃんを応援してあげようと決意したのでした？」
「風、電波受信しすぎだろうが。……どういう意味だ？」
「さぁ？風には分かりかねます」

……その流れには、無理があると思います。二人とも。
まぁ、応援はしてあげますが……その為にも、いい加減に……トン……トン……を……

「主、ここにいたので……稟！しっかりしろ！」
「だれかたすけてください～！なのです」
「ひ～とみ～をと～じて～き～みを～えが～くよ～そ～れだ～けでぇ～いいんだねぇ」
「……主、風。もうその辺りでいいでしょう。これ以上は稟が……」
「鎮まれ！鎮まれぃ～！こちらにおわすお方をどなたと心得る！畏れ多くも先の留守大将、趙子龍様に在らせられるぞ！御前である、頭が高い控えおろぅ～！」
「この宝？が目に入らぬか～」
「……済まぬ、稟。これは私でも無理だ」

……星、諦めたら、そこで私の人生終了ですよ？

蝶の如く～32～（前書き）

これが今年最期の更新になります。
午前8時の、あずさ2号ではありませんが、帰省してしまうので。

今回はずっと、愛紗のターン。
・・・女性の心情描写って、本当に難しい・・・

蝶の如く～32～

～愛紗　Ｓｉｄｅ～

「はぁ」

最近、気が重い。

教経様との出陣後、私は教経様を常に意識している自分が居ることを自覚した。

夢ではなく、いつの間にか教経様自身に惹かれていたことに気付かされて。普段あんなにもお巫山戯が過ぎる、どうしようもない教経様を、掛け替えのないものだと自覚させられて。いつもあの人を目で追いかけている自分が居た。教経様は、私によく笑いかけて下さる。……偶に不埒な視線と共に笑っていることもあるが。ニヤニヤと。……その笑顔を、私はずっと見ていたいと感じていた。

だが……教経様をそういう目で見るようになって初めて、星や風、稟の関係が理解できるようになった。三人とも、教経様を好いている。臣下としてではなく、一人の女性として。いや、愛していると言っていいかもしれない。そして、互いを意識し合って教経様の心を捕らえようと動いていた。好敵手のような関係。そう感じた。

……私とて。私とてこの人の寵愛を一身に受けたい。だから、参戦させて貰う。

そう思い、少し見え透いている気はしていたが、理由を付けては教経様と共にいる時間を作ろうとした。そして、それは成功していた。

けれど、教経様は稟と、その、そういうことを。稟とそういう関係だったのだ。……悔しいが私は負けたのだ。教経様が稟を選んだのなら、私の出る幕はない。だから諦めよう。そう思った。

でも、駄目なのだ。

どうしても、教経様を目で追ってしまう。その都度、自分は負けたのだからと目で追うのを止めようとするが、それが叶わない。諦められないのだと思う。胸が、苦しい。何と女々しいことか。だがそんな自分を、仕方がないではないか、と肯定する自分も居るのだ。好きなのだから、愛しているのだから、それは当たり前のことなのだ、と。

「……はぁ」

どうすればいいのだろう。どうすれば自分で自分を納得させることが出来るのだろう。

「おや、愛紗。こんな所で何をやっているのだ、お前は」

星がやってきた。

「私がここにいて何か問題になるのか」

「やれやれ、この娘は本当に刺々しいな。そんなことだから主にまで『鉄の女』などと言われてしまうのだぞ？愛紗」

五月蠅い。

「おや、拗ねた」

「拗ねてなど居ない！」

「はは、拗ねて居るではないか」

「拗ねてなど居ないと言っている！」

「……主が心配しておったぞ？」

「なっ！何を」

「朝から晩まで溜息ばかり吐いている様子だったからなぁ、お前は」

「……教経様は、何と？」

「さて。何であったか」

「星！」

「そんなに主と稟が情を交わしていたことが衝撃だったのか」

星は、教経様と稟の関係を知っている。

それでいてまだ諦めていないのか。

「何故星がそれを知っている」

「決まっている。私も主と情を交わしているからだ」

「なっ」

「意外か？だが考えれば直ぐに分かるであろうに。夜、主に報告があるからと私達三人のうちの一人が夜話から抜け出て行ったことが何度もあったではないか。教えてやるが、風もだ」

私だけが、知らなかったのか。
私だけ、除け者にされていたのか。
何も知らないで、舞い上がっていたのか。
馬鹿みたいではないか。一人で勝手にそう思い込んでいただけで、最初から勝負も何もあったものではなかったのだ。

「愛紗よ、もう少し素直になってみたらどうなのだ」
「何に素直になるのだ！」
「お前は主の事を好いているのだろう？」
「……違う」
「またそうやって意地を張る。何故お前が主を好きであることを素直に認めないのだ」
「私は別に」
「やれやれ。本当に強情だな、この『鉄の女』は。主はどうやってこの女の心を絡め取ったのやら」
「……貴様！」
「おぉ、怖い怖い。まるで子供ではないか、愛紗よ。都合が悪くなったら、理由も何も関係なく感情のままに怒るなど」
「貴様に何が分かる！」
「分からぬなぁ。何せ私が一番最初に主と情を交わしたのだ。主に懸想をしていて、その主が他の女と情を交わしたことを知った時の気持ちなど分からぬよ」
「なっ」

星が、一番初めに？稟ではなかったのか？

「稟と風は、それでも諦められないと言って自分の気持ちを主に伝え、主を強引に籠絡して情を交わしたのだ。全く以てやるものではないか……お前と違って。愛紗、そうは思わぬか」

「……」

稟を抱いていた。

でも星が一番最初で……

風達がそこに後から飛び込んで。

頭が、混乱している。何も、考えられない。

星から立て続けに信じられぬような話を聞いて。

「まぁ、そんなことは良い。今の問題はお前の気持ちなのだ、愛紗」

「……私の気持ちだと」

「そうだ。お前はどうなのだ。何も障害がなかったとして、お前は主とどうなりたいのだ」

何も障害がなかったとして。

「……私は教経様の寵愛を一身に授かりたい」

「あははははっ」

「何が可笑しい！」

「いや、なかなかに素直になったものだと思ってな。何も障害がなかったら、そうまで素直になれるのに何がそのようにお前を悩ませているのか全く分からぬな。言っている通り、私も稟も風も、皆主と情を交わしている。主は気の多いお方なのだ。まぁ、英雄と呼ぶに相応しいお方だ。色恋に関してだけ見れば間違いなく英雄だろうな。何せこの私の他に二人も好きだと言っているのだ。この私を目の前にして、済まないなどと謝りに来たにも関わらず、だぞ？」

そう言って、ククッと笑う。
……しまった。続けざまに驚かされて、思ったままに答えてしまっていた。

「そして愛紗、私が見たところでは主はお前のことも好きなようだ。丁度私達を好きなように」

……教経様が、私を。
思わず、赤面してしまう。

「く、口から出任せを言うな！」
「何が出任せなものか。お前だって気がついているだろうに」
「……そんなことがあるはずがない」
「あり得ぬ、か。では何故主はお前と一緒にいてあんなにも愉しそうにしているのだ。私達が少々妬けてしまうほどに」
「……」
「……臆病者め」
「誰が臆病者だ！」
「ここには私以外にはお前しかおらぬではないか。それともお前の目には他に誰かが居るように映っているのかな？いやはや、恋に悩める乙女とは誠不思議なものだな……この臆病者め」
「何だと！」
「主に受け入れて貰えるかどうかが分からないから自分の想いを伝えない。臆病者以外の何者でもないではないか」
「……」
「どうやら自覚出来たらしいな」
「……五月蠅い」
「愛紗よ、お前は自分の想いを受け入れてくれるから主を好きになったのか？」
「そんなことはない！」

「では、主がどうあろうとも主が好きなのだろう？」
「……そうなのだろうな」
「では、その想いを伝えてみてはどうなのだ。後悔したいのか？主が死んでしまった後で、棺に向かって愛を囁くのか？お前が死んでしまう時に、主を思って一人虚空に向かって愛を呟くのか？お前はそれで満足できないから、その想いを遂げたいと望んでいるからこそ、そうやって溜息を吐いて毎日を憂鬱な気持ちで過ごしているのではないのか？」
「……」
「伝えようと伝えまいと、お前が主の元でやることは変わらないのだろう？主の夢の為に、その武を奮うのだろう？違ったか？」
「そうだ」
「では、伝えれば良い。伝えても伝えなくてもお前が何も変わらないのなら。その手が届くうちに、その想いを告げることが出来るうちに。お前は、主が居なくなることの恐ろしさを実感してきたのではないのか？常山で。今のあの主に、お前の気持ちを知っていて貰いたいとは思わないのか？」
……知っていて欲しい。受け入れられなくとも、せめて、この想いだけは、知っていて欲しい。だが。
「まだ納得がいっていないのか。頑固な女だ」
「……星、お前に聞きたい」
「なんだ、愛紗」
「教経様が他の女と情を交わしている事をどう思っているのだ」
「仕方のないことだろう。主は、ああいう人なのだ。自由気ままに、気の向くままに、やりたいことをやりたいようにやりたい時にやる人だ。それを束縛しようとは思わぬ。主は、あの人はそうあるべき人で、その主を私は好いているのだ。確かに、少々寂しい気もするが、な」

「それで構わないのか、納得出来るのか、星は」
「構いたいが、構えぬよ。主という、誠に美しい花に蝶が集うのは当たり前のことなのだから。後は、その集った蝶達の中で私こそが主に最も愛されていることを証明してやれば良いだけのことだ。主が私を好いていてくれているのは間違いないし、私も主を好いている。ただ、主には他にも好きな女が居るだけのことだ。それに我慢がならないのなら、私に夢中にさせてやればいいのだからな」

自分が一番だと証明する、自分に夢中にさせる、か。星らしいな。恐らく、他の二人も似たようなものなのだろう。だから、三人の関係を好敵手だと感じていたのか。
……教経様にとっての一番は、まだ決まっては居ないらしい。
私は、まだ諦めなくても良いのだ。まだ、私が入り込む余地があるのだ。

もし、教経様が受け入れて下さったら。
……嬉しい。私だけを見て私だけを愛して貰いたいが、この際そこは我慢する。
私も、星と同じように考えられると思うから。

「いい顔をするようになったではないか。愛紗よ」
「……ふん。礼は言わぬぞ」
「さて、礼を言われるようなことは言った覚えはないのだがな。頭の固い、素直でない女をからかってやっただけのことでなぁ。まぁ、感謝するというのなら精々旨い酒でも飲ませて貰うことにしようか」
「言っていろ」
「あぁ、愉しみにしているさ」

きちんと私に報告するのだぞ?愛紗。良い酒のあてになるのだから。
そう言って星は離れていった。

一日の仕事を終えて、自分の部屋に帰る途中、風に出くわした。
どうやら私を待っていたらしい。
風にはやることが多くある。こんな所に用もなく立っているはずもないのだ。

「愛紗ちゃん」
「風。どうしたのだ」
「お兄さんから連絡なのですよ。今日、お話があるから愛紗ちゃんの部屋で待っていて欲しい、とのことでしたよ～」
教経様が？

「分かった」
「……愛紗ちゃん、しっかり綺麗にしておくと良いと思うのですよ」
「ああ、片付けておく」

「そうではなくて、愛紗ちゃん、ちょっと汗の臭いがするのですよ」

そう言って風が私の手をとって臭いを嗅いでいる。

「風！」

「……まぁ、今日は譲ってあげるのです。頑張ると良いのですよ、愛紗ちゃん……では、風はこれで～」

「ちょっと、風！」

なにやらぼそぼそと言っていたが、なんと言っていたのだろうか？

……湯浴みしておいた方が……良いのだろうな。

汗臭いまま教経様と話をするなど、今は避けたいところだ。

……そんなに、汗臭かったのだろうか。

「よっ、愛紗。邪魔するぜ？」
「あ、はい」

夜も更けて来た頃、教経様がやってきた。一体何のお話なのだろうか。
とりあえず、湯飲みを出して水を注ぎ、教経様に渡す。

「悪いねぇ」
「いえ」

昼間、星と話たことを思い出して、緊張してしまう。
何故か教経様も、緊張している……というよりはビクビクしている？

「さて、教経様」
「……はい」
「お話があると聞いたのですが」
「……は？」
「え？」

ん？話が噛み合っていない？

「いや、俺は稟に、愛紗が俺に言いたいことがある、だから部屋に来いと怒っていたって聞いたんだけど？」

……稟、何故そのような嘘を。
何故か素直に来た教経殿にも疑問を感じますが。激しく。

「私は風から、教経様からお話がある、と聞いて待っていたのですが」

「え？」

教経様には全く心当たりがないらしい。
これは……風、稟、そして、昼間の星。確かに、『報告しろ』、と言ったのだ。あのお節介な女は。
貴女たち、もしかして……

「愛紗、俺に説教するんじゃないの？」
「い、いえ。そのようなことは致しません」
「……はぁ～。焦った。昼間ダンクーガと喧嘩して防壁ぶっ壊したのバレたのかと思った」
「……教経様。今、何と？」
「あ」

全く！またこの人は！
そう思い怒りそうになるが、思い留まった。

折角、星達がお膳立てをしてくれたのだ。
私一人で、こういう機会を創れるとは思えない。緊張して、二人で逢う約束など、取り付けられるはずもないのだ。まんまと乗せられてしまった気もするが、この機会を逃さぬ方が良いだろう。

「教経様」
「ひぃっ！すいません！もうしません！俺じゃないです！ダンクーガ！あいつが全部悪いんです！嫌がる俺を無理矢理に！だからダンクーガをやっちゃえばいいと思います！好きにして下さい！この際死んでも構いません！マウントポジションで目眩く血塗られた旅を心行くまでお愉しみ下さい！」

……教経様の中で、私は一体どういう存在になっているのだ？その

反応はちょっと酷いと思います、教経様。私だって流石に傷つきます。

「……はぁ。怒りませんから」

「……え？」

「ですから、怒りません」

「……愛紗、もしかして『おっほっほ』から良からぬ頭の病気を……アレは空気感染するのか？だとしたら、この俺の最近の異常なテンションにも説明が付くな……ブラックジャック先生的なものを早く捜さないと取り返しが付かないことに……！」

……アレと私が同じように見えているというのですね？教経様、貴方はいつも通りです。『てんしょん』とは、何ですか？ぶらっく……？まぁ、宜しい。とにかく、教経様はお仕置きが大好きなんですね？

「反省してください！」

教経様にしっかりお話をした後、そういう雰囲気にもならず世間話をしたりしている。
話は様々に変わるが、こうやって二人だけで長々と世間話をするのも、得難いものだ。

「しかし、愛紗が居てくれて本当に助かったよ」
「そう言って頂けると幸いです」
「本当に感謝してるんだよ。もうちょっとで、俺は俺じゃなくなるところだったからな」
「……はい」
「愛紗が居なかったらと思うと、ゾッとするねぇ」
「有り難う御座います。ですが、教経様としては少々窮屈なのではありませんか？こんな可愛い気の無い女がずっと側に居て口うるさく注意をしていると」
「そうか？可愛いと思うぜぇ？愛紗は」

不意打ちは卑怯だ。
顔が、赤くなる。

「そ、そのようなことはありません」
「照れちゃって、可愛いねぇ。真面目な話、そのようなことはあるだろうさ。人がなんと言おうと、愛紗は可愛いよ。まぁ、もうちょっと素直になればもっと可愛いと思うんだけどねぇ」
「素直ではない、ですか」
「……普段の自分が素直だと思ってるのか？アレで？」
「……少々素直ではないかも知れません」

「ははは」

……可愛い、か。好いていて、くれるのだろうか。こんな私でも。
一緒に居たいのにそう言えず、嬉しいのにそう伝えることが出来ず、好きなのにそれを告げることも出来ず。そんな私でも、教経様は好いていてくれるのだろうか。

『素直になれば』
そう、仰った。少し恥ずかしいが、教経様は、私の気持ちに気付いているのではないか。素直になれないことに気がついているということは、素直な気持ちを想像できるということに他ならないのだから。
もし、そうであるならば。
もし気がついていて、あのようにいつも私と愉しそうにしてくれていたのならば。誘いに嫌な顔一つせず、一緒に町を廻ってくれていたならば。

……少し性急な気もするが。
そういう話が出来る雰囲気であるだろう。辛うじて。

……怖い。稟達は、いや、稟達もこのように怖かっただろう。
良い結果と、悪い結果。双方が交互に頭に思い浮かんでは消えていく。
それに、翻弄されてしまう。
良い結果を想っては、嬉しくなった勢いで話を切り出しそうになり。
悪い結果を想っては、恐ろしくなって止めてしまおうと思ったり。

……だが、このまま想いを告げずに居るのは、駄目だ。
星が言った通りなのだ。
教経様が私の想いをはっきり知らぬまま、この想いを告げる機会を

永久に失ってしまうようなことがあれば、私は後悔するに決まっている。好きだと言っておけば良かったと女々しく泣き暮らすのは目に見えている。

……言った方が良い。言うのだ。

「どうした愛紗。……怒っちまったのか？」
「教経様」
「んん？」
「教経様。私は……私は、教経様を、お慕い申し上げております」

言ってしまった。
もう、後戻りは出来ない。

私は教経様の顔を見ることが出来ず俯いたまま、教経様の言葉を待っていた。

蝶の如く～32～（後書き）

良いところでぶった切ってやった。
後悔はしていない。

この先の展開を、1月3日まで妄想して好きにお愉しみ下さい。
稟ちゃんの如く。

蝶の如く～33～（前書き）

あけましておめでとう御座います。
本年も、宜しくお願い致します。

蝶の如く～３３～

～教経　Ｓｉｄｅ～

皆様如何お過ごしでしょうか。

執務室での惨劇から復活した稟と共に并州全域から集められた情報・嘆願・報告などを取り纏め、急を要するものについて押印を繰り返す作業を終えて、机に突っ伏している教経です。

……いくら最近逃げまくってたからって、この量はおかしいだろうが。これならまだ刺身の切り身にタンポポ乗せるバイトの方が楽だわ。俺は記念スタンプラリーのスタンプマシーンじゃねぇんだよ。スタンプ集めてもポケモンもしまじろうも貰えねぇんだよ。おぉ、俺今上手いこと言ったな！

……ポケモンって、海外じゃ『ｐｏｋｅｍｏｎ』で放送されてたんだよなぁ。ポケットモンスターって俗語じゃ卑猥な言葉だし、まかり間違ってそれでＯＫ出て放送しても勘違いをした大きなお友達からクレームの嵐間違いないからって理由らしいが。まぁ、確かに、「ポケモン、ゲットだぜ！」とか言いながら股間に向けてポケモンボール投げつける番組なんて見たくもないしなぁ。対象年齢というか対象視聴者層はどの辺なんだよ。そして何を掴まえるつもりなんだよ、何を。まぁ、ナニなんだろうけど。ガチホモ的に考えて。

「教経殿」

そんな馬鹿なことを考えている俺に、稟が話しかけてきた。

「……何だよ、稟。俺は今股間に投げつけるポケモンボールのこと考えるので一杯一杯なんだよ」
「？ぽけもんぼーる……？」
「……あぁ、済まん。何でもない」

最近風が的確に反応しやがるからどうにも口からおかしな発言が吐いて出やがる。

「まぁ、いつも通りである意味安心しましたが」

そこは心配するところだろう、稟。
いつも通りって、それじゃ俺がまるでガイキチさんみたいじゃないか！
謝罪と賠償を要求する！

「教経様、愛紗が教経様を呼んでいましたよ？また何かされたのですか？」

……ヤヴァイ。ダンクーガぶん殴ったら防壁まで一緒に飛んでったとか言えねぇ。

「いや、全く記憶に御座いません」
「……記憶にはないが心当たりはある、ということですか」

眼鏡を押さえながら、やれやれといった感じで首を振る。
……良いねぇ。萌えてくるねぇ。流石は郭奉孝。俺の弱点を知り尽くしているねぇ。そこに痺れる！憧れるぅ！俺は眼鏡属性持ちなんだよねぇ。麦茶が好きなんだよｎ

「教経様、愛紗は部屋で待っているようですから、早く逝った方が

良いと思いますよ?怒っている人間を無駄に待たせると、余計に怒らせることになると思いますが」

……稟ちゃん、最期まで言わせてくれないと。俺のアイデンティティ的なものが崩れてしまうので。そして、何となくだけど漢字がおかしかった気がするのは気のせいかね?稟ちゃん。その内、『ケーン!』とか言わないだろうな。世紀末覇者伝説的に考えて。俺の人生には一片どころか叩き売るほど悔いが残っているんですが?

「教経殿?」
「あ~、了解。んじゃ逝ってくるわ」
「……教経殿、きちんと応えてあげて下さい」

何にだ?

「?」
「いえ」
「まぁいいや。んじゃ、逝ってきま~す」

今日も元気にドカンを決めたら、ってか?
まぁ、しょうがない。怒られてくるか。ヒョードル様に。

呼び出されて行ってみた愛紗の部屋で、愛紗が待っていた。まぁ、そりゃそうだわな。知らないオッサンが居たらぶっ殺すわ。愛紗は風呂にでも入っていたのか、ほんのりと上気した顔をしている。……可愛いねぇ。これで素直なら、もっと可愛いのにねぇ。まぁ、それが愛紗の良いところでもあると思う辺り、俺も結構物好きだねぇ。

いつも通り、愛紗は俺に水を用意してくれた。これから地獄の2丁目か3丁目まで逝ってくることになる事を考えると、末期の水的なものになるんだろうか。

「さて、教経様」

……おいでなすった。

今日は何発殴られるんだろうか……羊的な感じで数えてたら眠くなるんだろうねぇ。眠りは眠りでもその前に『永遠の』とか『永久の』とかが付きそうだが。

「……はい」

「教経様、お話があると聞いたのですが」

「……は？」

誰が？俺が？いつ？どこで？

「え？」
「いや、俺は稟に、愛紗が俺に言いたいことがある、だから部屋に来いと怒っていたって聞いたんだけど？」
「私は風から、教経様からお話がある、と聞いて待っていたのですが」
「え？」

……あ～、これは、あれか。俺は嵌められたって事だな。最近愛紗の様子がおかしかったから、それをきちんと解決してこいってことだろう。とっとと怒られて、その辺りについて少しお話をしますか。ちょっと怖いんだけど、ね。

怒られる、という件について言うと、愛紗が俺を怒らないなどと言

って心配させるものだから、ついつい余計なことを言ってしまってスタープラチナ的なラッシュをいつも通り、いや、いつも以上に喰らった。『無駄無駄ぁ』って言ってやりたかったけど無駄じゃありませんでした。全部有効打でした。燃え上がる俺のヒートではどうにもなりませんでした。波紋的に考えて。

その後そのまま、愛紗と世間話をしている。
こうやって二人で世間話をするってのは、最近無かったから結構嬉しいモンだ。
何故か、避けられてた気がするし。そうかと思えば、いつも俺の方を見ていて。

常山と、帰って来た後の愛紗の言動で、俺の事を好いていてくれているのかと思っていた。それだけに、避けられたり深刻な溜息を吐いていたりする最近の様子は、愛想つかされたんじゃないか、俺は何かまずい事しただろうか、と俺を不安にさせていた。俺は、常山で愛紗に泣かれながら言われた言葉に結構グッと来て、そこから愛紗が女性として気になっていたから。だから、その事について訊くのがちょっと怖かったんだけど。

愛紗は、俺の事をきっちり見通している。そう思う。自分で言うのも変な話だが、俺は少しお巫山戯が過ぎるし、糞爺みたいに傲岸不遜で居たいって思ってるからそういう態度を取ってるが、そういうのをひっくるめて全部肯定してくれている気がする。俺の人間性そのものを、無条件に。その上で、俺が間違った結論を出しちまった時に、普段の愛紗からは想像できない位感情を剥き出しにして、俺の為に泣いて諫めてくれた。

こういう『佳い女』はなかなか居ないと思う。

俺が愛紗に持つに至ったこの好意には、そういう女性に対する甘えのようなものが含まれている事は否めない。多分、そうだろう。俺を、理解してくれている。俺が俺で居ることを許してくれる。だから、居心地が良い。だから、一緒に居たい。そう思うようになったのだと思う。だが俺自身を理解して、それを無条件に受け入れて、それでいて心から諫めてくれる人間がこの世に何人いることか。そう思えば、俺が愛紗に惹かれるのは自然なことじゃないのか、と自己弁護にも似た言い訳を捻り出している自分が居る。

……我ながら、何とも仕方がない人間だと思う。星、風、稟。既に俺には、三人が居てくれる。それでも、愛紗を求めるのか。愛想を尽かされることが、そんなに嫌なのか。

愛紗と、常山での話をしながら、そう思っていた。

「有り難う御座います。ですが、教経様としては少々窮屈なのではありませんか？こんな可愛い気の無い女がずっと側に居て口うるさく注意をしていると」

そのまま話をしていると、愛紗がそんなことを言ってきた。

……全くこの娘は。自分が可愛いって事を少し自覚した方が良いと思うんだが。可愛い気のない女に惹かれるほど物好きじゃないんだよ、俺は。

「そうか？可愛いと思うぜぇ？愛紗は」

「そ、そのようなことはありません」

愛紗の照れた顔。ちょっと、ドキッとする。普段が普段だけに、ギャップがあって余計にこう、グッと来るものがあるねぇ。これで素直になったら、どんな破壊力秘めてるんだよこの神様は。

「照れちゃって、可愛いねぇ。真面目な話、そのようなことはあるだろうさ。人がなんと言おうと、愛紗は可愛いよ。まぁ、もうちょっと素直になればもっと可愛いと思うんだけどねぇ」

「素直ではない、ですか」

「……普段の自分が素直だと思ってるのか？アレで？」

「……少々素直ではないかも知れません」

「ははは」

こうやって明るく二人だけで話をするのは、本当に愉しいモンだ。だけど、このままって訳にはいかない。

どうして、愛紗は最近あんなに溜息ばかり吐いていたのか。それを、訊かなきゃならない。何度も言うが、少し怖いけど、な。

『貴方に愛想が尽きました』なんて言われたら。

俺が勝手に好意を持ったんだとしても、それでも今愛紗に好意を持っているのは間違いない。だから、そう言われちまったらショックだ。今後どんな面提げて愛紗と接して良いかも分からん。でも、訊かないで済ますわけにはいかないだろう。あんな顔してたんだ。辛そうというか、悲しそうというか、物憂げな、というか。あんな顔をして貰いたくはない。愛紗らしく在って欲しい。後のことは、起こってから考えるしかない。起こっても居ない問題に対処なんて出来ない。だから、考えるだけ無駄なのだ。

そう思い、話を切り出すべく愛紗を見るが、愛紗も何か考え込んでいるようだ。

……無いとは思うが、ひょっとして先の会話で怒らせてしまったのか？

「どうした愛紗。……怒っちまったのか？」

恐る恐るそう訊いてみると、愛紗は何か決意をしたような、踏ん切りを付けたような雰囲気で話しかけてきた。正に俺が今訊きたいことについて話をしそうだ。そんな気がする。先ず間違いないだろう。

「教経様」

……怖いな。だが、それを悟らせるのは俺の意地が許さん。くだらない意地だが、な。

「んん？」

そう、惚けたふりして応える。

「教経様。私は……私は、教経様を、お慕い申し上げております」

愛紗は、俺が恐れていた言葉と正反対の言葉をその口から紡ぎ出した。
その言葉は、俺がそうあって欲しいと思っていたものだ。が、それだけに都合が良すぎないかと、狐につままれているような気がして。
愛紗はじっと俯いたまま、こちらの様子を窺っている。

「……」
「……」
「……愛紗」
「……はい」
「その、俺はさ、愛紗が最近溜息を吐いていたり、少し俺を避けていたような気がしていたから、愛紗に愛想を尽かされたんじゃないかと不安になってたんだ」
「そのようなことはありません！」
力強すぎる否定に、少し驚く。
「それはその……教経様が稟と……稟を抱いていらっしゃったのを知ってしまったからなのです」
……なんて言えばいいんだろうなぁ、こんな時。
「私は、教経様にこの想いを告げることをせず、教経様のことを忘れようと、一人の女として好意を抱く前の関係に戻ろうと、そう思っていたのです」
「……そうか」
「……ですが、星に言われて、それはやめにしたのです。教経様にこの想いを告げよう。もし受け入れて下さるなら、一番の蝶になっ

てみせようと、そう思って……」

……一番の蝶になってみせる、か。

俺がなりたいのは、史上一番の揚羽蝶。愛紗がなりたいのも、一番の蝶。星も、風も、稟も。……お似合いと言うべきなのかな。

此処に至って初めて思い当たったが、これは三人がお膳立てをしたのだと見るべきなんだろうな。……惚れた女に気を遣わせて。情けないような、そこまで俺の事を想ってくれていることが嬉しいような。本当に、複雑だけど。

星、風、稟。お前ら、受け入れちまって構わないのかよ？そりゃぁ、受け入れたいよ。俺だって愛紗に好意を抱いているんだ。けど、それでいいのか？お前ら、影で泣いたりしてないのか？

そう、うだうだと考える。風、星、稟のことを。

『平等にして貰わないと困るのですよ』

風、それはつまり、そういうことなのか。風に言われて、と愛紗が言っていたが、お前さん、分かっていてそれでも猶愛紗の思いを受け入れてやれって言うのか。

『まぁ、宜しい。主の寵を受ける蝶の中で、一番の蝶になれば良いだけですからな。』

星、お前は本当にそれで良いのか。お前の気持ちだけに応えてやることが出来ないでいる、こんな糞みたいな、そんな俺で構わないってのか。愛紗を受け入れてやれと、そう言うのか。

『応えてあげて下さい。』

稟。お前も、分かっていて、それで構わないって事なのか。それでも、愛紗の想いに応えてやれって、そう言うのか。

……そう、言うんだろうなぁ、お前さんらは、さ。
俺が俺らしく、やりたいことをやりたいようにやりたい時にやればいい、か。
……今は、感謝しとくよ。風。星。稟。
俺は愛紗を、好きになった女の子を泣かさずに済みそうだから。

「愛紗」
「……はい」
「俺はな、愛紗。あの三人のことが好きだ」
「……はい」
「三人も好きなんだ、俺は。節操がないことだと自分でも思うけど」
「……私は」
「愛紗、ちょっと聞いててくれ」
「……はい」

受け入れられない、そう思ったのかも知れないな。でもなぁ、愛紗。
俺はそんなに大人じゃ無いんだ。欲しいものは欲しい。ただの餓鬼なんだよ。お前さんが一番知っているだろうに。

「そんな風に節操がない俺だけど、それでも、俺の事を好きだと言ってくれるなら、愛紗、俺はお前の気持ちに応えたい。いや、お前に俺の気持ちに応えて貰いたい」
「えっ？」
「俺は、愛紗。愛紗も好きなんだ」
「……」
「だから、もし良かったら、愛紗、その、一人の女性として、一人の男としての俺を支えて貰いたいんだ。これから。ずっと」

そう言うと、愛紗は俯いたまま泣いているようだ。

……流石に、これが悲しいから流している涙ではないことは分かる。

「愛紗。それでも、喜んでくれるのか、お前は」

「……素直に嬉しいとも言えない私を、好いていてくれるのですか？」

「それが愛紗だろう。俺は素直な女を好きになった訳じゃない。愛紗を好きになったんだ。愛紗が、この碌でもない俺を好きになってくれたように、俺も、『愛紗』という一人の女の子を好きになったんだよ」

……愛紗は頭を俺の胸に押しつけるようにしてしな垂れ掛かってきた。

「その、教経様」

「……愛紗、抱くからな？」

「……はい……」

そのまま部屋の燭台を吹き消して、この世に二人しかいないかのように静かな夜を、二人だけで過ごした。

蝶の如く～３４～

～稟　Ｓｉｄｅ～

教経殿を愛紗の部屋に送り出してから、私達三人は星の部屋に集まって話をしています。

「しかし、稟。良かったのか。順番で言えば、今日は稟の番だったはずだが」

「ええ、構いませんよ。愛紗を見ていると、何となく私もああだったのだろうな、と思ってしまって。他人事には思えませんでしたから」

「稟ちゃん。愛紗ちゃんは稟ちゃんほど淫乱ではないのですよ」

「風！」

「稟ちゃん。欲求不満は明日お兄さんにぶつけるのが一番で、風にはそういった趣味はないのですよ。本当に申し訳ないと思うのですが」

「人が聞いたら誤解するようなことは言わないで下さい！そして、本当に申し訳なさそうな顔をするのも止めなさい！」

全く、風は。

でも、このことは風から言い始めたのだ。

愛紗が、苦しんでいる。愛紗が教経殿に抱いている気持ちは、私達三人に勝るとも劣らない、真剣なものだ。憧れなどではない、志を好いているのでもない、教経殿自身を、その全てをひっくるめて好きなのだ。だから、それを何とかしてあげたい。想いを遂げさせてあげたい。教経殿が教経殿として生きていくことを決意したのは、愛紗が居たからなのだから。私達三人は、彼女に借りがあるのだ。

そう言って。その時、星はニヤニヤしながら、頷いていた。

……我が友人ながら二人とも気が知れない。好敵手を更に一人増やそう、だなんて提案をする人間と、それをニヤニヤと笑いながら受け入れる人間。本当にどうしようもない。

でも、その一方でやはりそうでなくては、とも思う。星はいざ知らず、私と風に関しては、今の愛紗と全く同じ状況で苦しんだのだ。他人事に思えない、と言ったが、あれは言葉の上だけでなく本当にそのままの事だ。同じ経験を、私達二人はした。そして、教経殿が受け入れて下さった。そのお陰で、私達は今、幸せと言ってもいいだろう充実した毎日を送れている。臣下として、器量に優れた主君を戴いて。女として、その壮大な気宇や志操に全身を染め抜かれて。もし愛紗がそうあることを望むなら、きっと受け入れてあげるのが良いのだ。

そう思ったからこそ、教経殿に受け入れてあげて欲しいと伝えたのだが、果たして上手くいったのだろうか。

「まぁまぁ、稟、落ち着け。結果が気になるのであれば、後から愛紗に詳細に報告させることになっているのだ。それを聞けば良いではないか……ククッ」

……星、また碌でもない遊びを思いついていたようですね。

「そう心配するな、稟。稟も一緒に聞けば良いではないか。主がどのようにあの愛紗のいやらしい躰を貪り、花開かせたのか、手取り足取り教えて貰いながら酒でも飲むとしようではないか」

……の、教経様が愛紗のあのいやらしい躰を……

「クッ」

「稟ちゃん、鼻血が出ているのですよ。やっぱり稟ちゃんは淫乱なのです」
「ふ、風！」
「はい、チーン」
「チーン」

全く。そう毎回鼻血を出してばかりだと思われても困ります。私とて、教経殿とそういう経験を重ねて多少は……多少は……あぁ……教経殿……いやらしい手つきで胸を……愛紗は、きっと処女なので……な、なんと！そのようなことは……いけません！いけません、教経殿！それでは愛紗は壊れてしまいます！……

「ふむ、また旅に出たな」
「そうなのです」
「風、どうなるかな」
「愛紗ちゃんは、一番いやらしい躰をしているので、稟ちゃんの妄想力によってその戦闘力は数千倍に跳ね上がるに違いないのですよ。かいおうけんなのです」
「よく分からんが、とにかく凄いことになりそうなのは分かった」
「……少し辛そうな顔をする愛紗に構わず、教経殿はそのいきり立った怒張を……」
「……前から思っていたのだが」
「はい？どうしたんですか？星ちゃん」
「稟は一体どうやってこの手の語彙を増やしているのだろうか」
「あぁ～、稟ちゃんは昔から８０１本が大好きだったのです。戦いに勝利するには先ず敵を知らなければならない、というお馬鹿な理由を付けてはそれを眺めて発射していましたね～」
「成る程、昔取った杵柄、と言う奴か」
「現在進行形で取っているのですよ。あ、げんきだまが飛んでいきますよ。世界中の皆から少しずつ妄想を分けて貰って」

「……げんきだま？」
「それはそうなのです。いやらしいことなのですから、げんきなたまになるのですよ、星ちゃん」
「……最早何も言うまい」
「ブーッ」
「おぉ！凛ちゃん、辺り一面ぺんぺん草一本生えない不毛の地に変えてしまったのです」
「そもそも此処は石敷きの床なのだから草は最初から生えていないぞ、風」
「そう言うお約束なのですよ、星ちゃん」

……あぁ、刻が、私にも刻が見える……
……愛紗、私は、貴方の報告は、聞きたくありません。その、命に関わりそうなので。

～愛紗　Ｓｉｄｅ～

少し息苦しさを感じて、目が醒める。
目を開けると、教経様が寝ていた。裸で。私も、裸だった。
一瞬何が起きているのか分からなくなり、叫び声を上げそうになるが、昨晩のことを思い出して何とか踏み止まった。

……昨晩何があったのか、それは思い出したくない。恥ずかしくて、死んでしまいそうだ。その、稟が教経様に抱かれている所に出会した時、稟はそれは切なそうな声を上げていた。まさか、自分が、この私が、同じように切ない声で鳴くなんて。思い出すと、顔から火が出ているのではないかと思うほど顔が熱くなる。

教経様は、まだ寝ている。
その腕に抱かれて、ずっと寝ていたのだ。
こうなってみると、今までずっとこうしたかったのだ、ということに気がつく。
私は、教経様が、本当に好きだったのだ。

昨日、一番嬉しかった言葉を思い返す。

「だから、もし良かったら、愛紗、その、一人の女性として、一人の男としての俺を支えて貰いたいんだ。これから。ずっと」

『ずっと支えていて欲しい』
こんな恥ずかしい言葉を、照れもせず、真っ直ぐに私の目を見つめて言ったのだ、この人は。好きな人にあんな事を言われて、私は天にも昇る気持ちだった。あれは、その、まるで結婚の申し込みでは

ないか。あんな事を他の三人にも言ったのだろうか？……多分、言っているのでしょうね、教経様は。

この人は本当にどうしようもない人だ。でも、この人がこんな風にどうしようもない人だから私の想いを受け入れてくれたのだ。そう思うと、複雑な気持ちだ。

「……んぁ……」

馬鹿みたいに口を開けて、少し鼾をかきながら、教経様はまだ寝ている。

こうしてみると、年相応の、いや、もうちょっと幼いかもしれない、普通の『男の子』に見えてしまう。

でも。

剣を持って私に向かってきた時の教経様。

私に謝罪をしてきた時の教経様。

夢を語っていた時の教経様。

戦場を悠然と眺めていた時の教経様。

自分の過ちに気がついて自分らしく生きていくと宣言した、あの教経様。

紛れもない、『男』の顔。『女』である自分を惹き付けて已まない、『男』である教経様。

この人は、二面性に溢れている。

誰より大人な考えをしていることがある癖に、子供のように単純で。

人を傷つけるのが嫌いな癖に、好戦的で。

論理的に在ろうとしている癖に、感情的で。

傷つき易くて傷つきたくないから傲岸不遜なふりをしている癖に、

死んでいった者達の為に自分を犠牲にするようなことをしようとして。

それを、一貫していない、駄目な人間だと言って嫌う人もいるだろう。

だが、こんな人間臭い人だから、私は好きになったのだと思う。

私にしてからが、そうご大層な人間ではないのだ。

素直になりたいのにそうなれず。

好きだと言いたいのにそう言えず。

……私に、お似合いだと思う。割れ鍋に、綴じ蓋。そんな感じなのだろう。欠陥だらけの二人が寄り添ってみると、不思議に互いの穴がふさがる。安心できる。そんな関係。

だから、私は、この人と、生きていく。

きっと私達は、お互いを補い合って生きていくことが出来るから。

もう一度、教経様を見る。

どうやら、起きたようだ。目は、まだ醒めていないようだが。

……本当に、仕方のない人。

自然に笑みが湧いてきて、愛しくなって、そのまま口づけをした。

～教経　Ｓｉｄｅ～

夢を、見ている。
愛紗が、俺を見て優しく微笑んでいる。
微笑むだけでなく、俺に近づいてきて、そっと口づけをしてくる。

あぁ、夢だろうなぁ。
愛紗は、こんなに素直に俺に口づけしてくるわけ無いモンなぁ？
ったく、夢でこんだけ素直なのに。もうちっと普段こういうところを見せてくれても良いと思うんだけどなぁ。お前さん、そうは思わんかね？

唇に、唇が押し当てられる感触。
最近、俺の妄想力も稟に迫るものがあるよなぁ。
こんなにはっきりした感触があるなんて。

そっと唇を離し、愛紗はこちらをじっと見ている。
……全く、可愛いモンだ。碌でもない縁から始まった、俺たちの関係。まさか、こうなるなんてねぇ。思っても見なかっただろ？俺だって、思ってなかったさ。

そうだろ？まぁ、いいや。まだ俺はこの夢を見てたいんだよ、愛紗。だから、もうちょっとだけ、あとほんの少しだけで良いから、抱き合っていたい。

そう言うと、愛紗は嬉しそうに微笑んで俺に抱きついて来て、目を閉じる。

あぁ、この夢は、本当に良くできた夢だな。

……お休み、愛紗。お前さんが、俺のように良い夢を見れますように。

例えそれが、一時の、胡蝶の夢に過ぎぬとしても。

蝶の如く～35～（前書き）

漸く黄巾の乱。
先のことを思うと気が遠くなる。

蝶の如く～35～

～教経　Ｓｉｄｅ～

「はぁ、黄巾の賊共を討伐せよ、ねぇ」
「如何なさいますか、教経殿」

愛紗とああいう事があってから暫くして、朝廷から勅使という形で使者がやってきた。そいつが持ってきた内容が、冒頭の発言になったわけだ。

……まぁ、準備してたから全く問題無いんだけどな。
あれは御遣いなどではなくただの商人だ、などと影口を叩かれながらも投機を行って利を得、その利を持って糧食を買い求め、更にそれを転売してより大きな利益を得てきたのだ。
全ては、この秋の為に。ここで飛躍してやる。俺たち全員の夢の為に。

「如何も糞もないだろうに、稟。俺たちはその備えをしてきた。正しく、この秋の為に」
「はい」
「出陣だ。星、愛紗。陣触れを」
「はっ！」
「畏まりました、教経様」
「この度は、将、軍師、全て。つまり、四人全員伴う。いいな？」
「わかったのですよ、お兄さん」
「承りました」

全員で、やる。

太原の留守については、ダンクーガにやらせる。
アレで問題無いだろ。賊共はほぼ全部が鉅鹿に集まりつつある。
その状況で、今まで散々にやられてきた并州で暴れようと考える阿呆はおるまい。
一応、ダンクーガに釘は刺しておくが、あれでいて気が回る男だし、何より目下の者を大事にする人間だ。あいつなら、絶対にやってはならない判断ミスをしないだろう。民衆を捨てる、といったような。

「率いる兵数はどうしますか？お兄さん」
「１５，０００率いていく。并州には７，０００も居れば十分だと思うが。どうかな？」
「それでも少し多いくらいだと思うので、問題無いと思いますよ～」
「では、出発は何時になさいますか？」
「官軍と合流しろ、と言ってきている。合流して貰わないと賊が怖くてたまらんのかも知れんしな。まぁ、纏めて面倒を見てやるさ。官軍を太原で待ち受ける。出発は、そいつら次第だろうさ」
「はっ」

張角、だっけ？
もう死んでるんだっけか？確か、黄巾の乱が終熄する頃には奴さんは死んでたはずだ。
まぁ、お前さんの夢の残りカスは俺がしっかり再利用してやるよ。
俺の夢のために、な。

官軍を待って1週間後、漸くやってきた。
思っていたよりも整然と行軍している。騎馬が多いのも特徴だろう。
ウチの騎馬隊はかなりのものだと思っているが、鐙なしであれだけの動きをするのはかなりのものだと思う。そう思っていると、官軍から将だろうか、一名こちらに馬で駆けてくる。
……女だ。なんて格好してやがるよ、姉ちゃんはよ。胸にサラシ。袴をはいてるが下着着けてないのか？露出狂って奴なのか？もう暖かいモンなぁ。シーズン真っ盛りってところか。

「いやぁ～済まんかったなぁ。待ってくれとったんやろ？ウチが官軍の纏めをやっとる、張遼や」

……こいつは驚いた。

「……へぇ。あんたが張遼か」
「ん？なんや、あんたウチのこと知っとるん？」

そりゃ知ってるさ。并州牧になって最初に捜した人間が張遼なんだからな。上党辺りにいると思ってたんだが、居なかったのさ、お前さんは。まさか官軍に居るとは思ってもみなかったがな。
張来来、張来来。
演義じゃ、関羽に匹敵する将。史実じゃ、関羽なんて目じゃない将。

「まぁ、ね。知ってると思うが、俺は平教経。字も真名もない。宜しく。張遼」

「ウチは姓は張、名は遼、字は文遠。宜しく、経ちゃん」

……誰だよそれは。

「経ちゃんて誰だよ」

「嫌やわ～、経ちゃん言うたら経ちゃんしかおれへんやんか」

これはあれだな、風と同じだ。何言っても無駄だ。そんな気がする。

「……まぁ、それでいいさ」

「おおきに～」

なにがおおきになのかさっぱり分からん。

「んじゃ、明後日出発って事で良いか？そっちの軍、それなりに急がせてきたみたいだからな」

「……へぇ～、なんや分かるんかいな」

「まぁ、分かるだろうさ。馬はいざ知らず、人となるとな。皆疲労の色が濃いぜ？ゆっくり休息すべきだと思うがね」

「ほな、そうさせて貰うわ」

「愛紗」

「はい、教経様」

「張遼を客間へ案内してくれ。愛紗が以前使っていた部屋だ」

「畏まりました。張遼殿、こちらへ」

「宜しく頼むわ」

「稟、風。張遼の兵達に兵舎を割り当ててやってくれ。野営させて無駄に体力を使わせる訳にもいかん」

「承りました」

「わかりました」

「星、平家軍の装備の最終点検を頼む」

「承知」
「んじゃ、明後日の出発まで適当に疲れを癒しておいてくれ。今日の所は、これで解散だ」
……俺の中じゃ、張遼は「山田～！」って良いながら偃月刀振り回すひげ面のオッサンだったんだけどなぁ……調子狂うわ。

太原を出発し、鉅鹿に近づく俺たちの目の前に、４０，０００の黄巾賊が現れた。ここで、俺たちを食い止める、というのではなく、俺たちを殲滅する、という構えだ。魚鱗ではなく、鶴翼。こちらは官軍と併せて２５，０００弱。まぁ、間違っちゃいない。奴らの方が兵数が多いし、鶴翼陣で左右から包囲殲滅ってのは常道だろう。が、身の程は弁えた方が良いと思うぜ？訓練されてきた軍兵に対するに、只の野党。兵一人で賊三人は殺せるだろう。自分が死ぬこと

なく、な。そうなると、７０，０００でどっこいどっこいって所だろうに。見通しが甘すぎるんだよ、馬鹿共が。

「なぁ、経ちゃん。どうするん？」

「そうだねぇ。軍を一列に並べて目の前を横断し、中軍を突かせてみるか。無視して先に行くような様子でな。どうせ馬鹿だから我慢できないだろう。隊伍もろくに組まずに突っ込んできてくれるだろうさ。俺が中軍を受け持つ。前軍に愛紗と風。星と稟は、中軍に居てくれ。張遼には、後軍を頼みたい」

「えぇけど、土手っ腹を突かせるんやろ？経ちゃん、大丈夫かいな」

「大丈夫だろう。あいつらは所詮屑だ。どこまで行ってもな。屑に後れを取るような奴が此処にいると思うか？」

「あははっ、はっきり言うなぁ自分。気に入ったで！」

「そりゃ有り難うよ」

まぁ、こういう戦が実際にあったんだけどな。腹を突かせ、それをいなして耐えるうちに前軍と後軍が左右から襲いかかる。さながら、双頭の蛇のように。胴に絞め殺されながら、二本の頭に散々に食いちぎられちまうと良いさ。そのつもりがあって腹を突かれるのと、不意を突かれるのとは訳が違うってことを実感して貰うことにしますかねぇ。

「じゃぁ、細かい段取りを決める。といっても、戦闘中止の合図とその後のことだけだがな」

「教経様、どういうことでしょうか？」

「愛紗、ここでの俺たちの勝ちは揺るがない。此処には俺が居て、稟が居て、風が居る。星も、愛紗も。張遼だっている。どう考えても、賊共にこの全員に対応できる器量があるとは思えない。双頭の蛇に喰い殺されるのは目に見えているだろうが。猪武者は幸いにしていないことだし、戦略上の目的は鉅鹿の黄巾賊討伐だってのは皆

分かっている。あとは、どの時機に戦を中止して鉅鹿に向かうのか、鉅鹿に向かう際にどう兵を再編するのか、というところだけが問題になるわけだ。だから、戦闘中止の合図ぐらいで良いのさ」
「成る程。よく、わかりました」
「主、私が前軍でないところが納得いかないのですが」
「……先鋒は武門の誉れ、か？」
「その通りです」
「星、よく考えろよ？確かに配置上は中軍に位置しているが、さっきから言っているとおり、これは双頭の蛇なんだよ。腹を突かせてからこちらに引きずり込んで、胴で絞め殺しながら頭で喰らう。そういう陣形なんだ。要するに、中軍と言いながらもここが実質先鋒なのさ。これでも納得いかないのか？星は」
「いえ、納得致しました、主」
「やれやれ、頼むぜ星。お前さんにはいずれこの規模の兵を指揮して貰うことになるんだから」
「はっ」
「なぁなぁ、経ちゃん」
「ん？」
「経ちゃんが自分で今考えたんか？この策」
「あぁ、そうだ」
「へぇ～。腕っ節に自信があるんかと思ってたんやけど、頭の方もかなりキレるみたいやな」
「褒めても何も出んぞ？まぁ、戦に勝ったら酒ぐらいくれてやるが」
「ほんまか！」

えらい食いついてくるな。

「あぁ、くれてやるよ。太原で作った酒をな」
「おぉ～、あれがまた飲めるんやな！これは気合い入れて行かなアカンわ」

「やる気が出てきたようで何よりだ」
「絶対やからな!?」
「分かったって、張遼。顔が近い。胸も近い。……良い体してるよね、露出狂だけあって」
「露出狂とちゃうわ!まぁ、良い体って褒めてくれたのには礼を言っとくわ」
「……教経殿?」
「……お兄さん?」
「……主?」
「……教経様?」

心の声がダダ漏れたらしい。どうなってんだよ俺の心の蛇口。クラシアンでも呼んで見て貰うか?……おいおいおい、四人一度に殴られたら天に還っちまうだろうが。あの世的な意味で。

「ちょ、待てよ、落ち着けって」
「あははは っ、自分ら、おもろいなぁ」
「面白くないからこいつら怒ってるんだよ!」
「まぁ、ええわ。ウチは準備があるよって。経ちゃん、また後でな〜」

……あぁ、生きてたらな。

「主、やって参りましたぞ！」
「あぁ、そうだねぇ」

……そんなことより俺は顔が痛いんだよ。

賊共は、取るものも取り敢えず、といった様相でこちらに突っかかって来る。慌ててやってきても何も変わらないだろうが、馬鹿共が。これだけ近づいて猶整然としている軍を目の前に、何も感じていないらしいな。

「星。頼むぞ。信頼してる」
「……お任せあれ！」

そう言って、星は愛馬に跨って前線へ趨く。
さしあたって、星が居れば問題無いだろう。
俺は、まだ此処にいて賊共を見極める必要がある。これが擬態であれば、こちらと接触して暫くしてから全軍でゆっくりと後退し、自陣近くに引き摺り込んで中軍を袋だたきにする、という策が考えられる。万に一つ。いや、億に一つの可能性だと思うが、その可能性がないとは言えないだろう。

そう思って戦場を注視していると、稟が俺に話しかけてくる。

「教経殿、教経殿が思っているようなことはどうやらないようですよ」

何考えてたかがわかるのか、稟。

「……どうしてそう言いきれるンだ、稟？」

「敵の後軍が動いています。真っ直ぐにこちらへ。これが策なら、後軍は左右に分かれて足止めをするはずです。そうでないと、我が軍を引き摺り込む前に全軍崩壊の危機に直面することになります」

「そうとばかりは言えないのではないかね？全軍で連動して動けば問題無いと考える場合もあるだろうに」

「いえ、それはないでしょう。もしその策を思いつく人間が居るなら、左右から迫る騎馬隊を自由にはさせないはずです。徒ばかりならばまだしも、騎馬に戦場を蹂躙されるともう収拾が付きません。一旦後退して再編するしか無くなるのです。我らを殲滅したいのであれば、騎馬を止めない限りそれは叶わないのです。ですから、教経殿は心配する必要はないと思います」

……流石は稟だ。観察眼といい、相手の器量の程を何通りか考えてその思考を辿って正答に近いであろうものを導き出すところといい。俺だけだと、どうしても不安だからな。ある程度は分かっても、間違いないと言い切るにはもっと時間が必要になるだろうし。

「稟、安心できたよ。稟のお陰で余裕を持って見ていられそうだ」

「い、いえ。教経殿の軍師として当然のことです」

稟を撫でると、嬉しそうに顔を染めてそう言う。

俺の軍師として当然、か。

その期待には応えないとなぁ？

「じゃぁ、敵の中軍がぶつかってきたら俺も前線に出るぜ？全軍の指揮は、稟。お前さんに任せる」
「教経殿。教経殿は前線に立つべきではないと思いますが」
「そうだろうな。だが、俺のために皆死んでくれている。俺だけが後方でのうのうと過ごすわけにはいかんだろうさ。俺が俺であるために、どうしても必要なんだよ」
「しかし」
「稟。俺はな、この手で天下を掴みたいンだ。手袋越しなんかじゃなく、直に、この手でな。だから俺は征く。お前さん達には心配掛けることになると思うが、それは諦めてくれ。というより、受け入れて欲しい、かな。他でもない、お前さん達にだけは」
「……そういう言い方をされると、何も言えなくなるではありませんか」
「済まんね。だがこれが俺の性分だ」
「まぁ、いいでしょう。但し、必ず星と一緒に行動すること。それだけは守って下さい。お願いですから。心配で指揮が手に付かなくなってしまっては困るでしょう？」
そうきましたか。只では転ばない。稟らしいね。
「了解、了解」
「教経殿！」
「分かってるよ、稟」
そういって、稟を柔らかく抱きしめる。
……稟は、俺の頬に口づけをしてきた。
「約束、ですからね、教経殿」
「……あぁ、約束だ」

全く以て、この軍師様には敵わないね。
出来るだけ心配掛けないようにしなきゃならんだろう。それが男の甲斐性ってモンだ。

蝶の如く～３６～（前書き）

取り敢えず実家で書きためたものはこれでお終いで御座います。
最低でも週に１回は更新したいなぁ。

蝶の如く～３６～

～風　Ｓｉｄｅ～

「風、敵の前軍が我が軍の中軍と接触したぞ」
「そのようですね。では愛紗ちゃん、鋒矢の陣を」
「わかった。全軍鋒矢の陣を取れ！」

愛紗ちゃんの号令一下、陣を素早く形成します。流石に愛紗ちゃんなのです。お兄さんではありませんが、関雲長は伊達じゃないのです。ふぃんふぁんねる？的に考えて。

「このまま微速前進して、敵さんの様子を見ましょう」
「ああ」

風達が近づいているにも関わらず、敵さんは対処すべく動いてきません。
まぁ、前線に盾を並べ、その後に騎馬をついて行かせているので騎馬隊の規模が見えていない、というのも大きいとは思うのですが。
全く反応が見えないところを見ると、どうやら敵さんはお兄さんの策に完全に嵌ってしまったようなのです。

「こうまで反応しないとは。我々を侮っているのか？」
「いえ、そうではないと思うのですよ。敵さんは、お兄さんの旗目掛けて闇雲に突撃しているだけでしょう。こちらの様子は盾で見えていませんし、まさか騎馬がこれ程居るとは思っていないと思うのですよ」

お兄さんの旗印。揚羽蝶。悠然と戦場に舞っている。それだけでな

く、『郭』の旗も、『趙』の旗も。今回は、稟ちゃんも星ちゃんもお兄さんの側に居ます。あの二人が居れば、大丈夫なのです。

「では、こちらはこちらの責を果たすとしようか、風」
「はい。愛紗ちゃん、敵さんは全く心構えが出来ていないと思いますから、いきなり騎馬で蹂躙してあげるのが良いと思うのですよ」
「分かっている、風。……後軍との連携は上手く行くだろうか？」
「張遼さんは、騎馬の指揮に長けていると思いますので、こちらに連動して動いてくれると思うのですよ」
「そうか……よし、征くぞ！騎兵は全員騎乗しろ！敵後軍の腹背からひとかたまりとなって飛び込むぞ！飛び込んだら向こう側へ抜けて、風の率いる盾隊と挟み込んで蹂躙する！一揉みに揉んでやれ！」

相性がいい、と言うのでしょう。愛紗ちゃんは風が考えていた絵図通りに軍を動かそうとしてくれます。この分なら直ぐに敵さん達を駆逐できると思うのですよ。

「では、風達も愛紗ちゃんの後について敵さんに向かいますよ～。はぐれないようにして下さいね～」
「はっ！了解致しました！」

……双頭の蛇。お兄さんはえげつないことを考える人です。
これに柔軟に対応できる軍は、そうないことでしょう。自分が思い描く戦を、思い通りに行う為に、兵の練度を上げ続けてきたのだと分かります。

飛躍の秋。風と一緒に居る時、そうお兄さんは言っていました。
これは、その手始めに過ぎないのです。こんなところでお兄さんを立ち止まらせるわけにはいかないのですよ。私達皆の為にも。

～星　Ｓｉｄｅ～

賊共の中軍がこちらにぶつかってきたのだろう、前線が押されている。
だが、そう簡単に前線を押し上げることができると思って貰っては困る。
ここには、私が居るのだ。

「皆、今一度気勢を上げよ！我らは太原で苦しい訓練を積んできたではないか！目の前の賊共のように、只飯と酒を喰らって遊び呆け

ていたわけではあるまい！ここを耐えれば、あとは楽なものだ！平家の戦の鬼がどれ程のものか、目にものを見せてやるのだ！」

「「「「「「おぉ～！」」」」」」

前線に躍り込み、槍を振るう。

賊共を槍で突き、薙ぎ、叩き付ける。周囲を取り囲もうと回り込んでくるが、それを許す兵は居ないのだ。平家には。

主は、自分が一人で闘うことを前提に鍛錬をしている。だが、兵達には三人一組で敵に当たるように指導している。兵達個々の武技を磨いた方が良いのではないか、という私の問いに主はこう答えたものだ。

『誰もが皆武技に才能があるわけじゃねぇだろうが。俺はこれで、自分は武に関して天与の才を持っていると自負している。それは、衆に秀でていることを自覚しているからだ。衆に秀でているのは、皆がそういう才を持っているわけではないからだろう？軍のことを考えるならそれを基準にしてものを考えないと駄目なんだよ。例え一人で当たることが敵わぬ敵を目の前にしても、三人がまるで一人であるかのように連携して当たれば、死ぬ確率は少なくなるだろう。俺にしても星にしても、ある程度実力のある人間が完全に連携して攻撃を仕掛けてきたら、間違いなく苦戦するだろうし、嘗めてかかったら大怪我をすることだって考えられるンだ。

だから、ある程度の体力と基礎が身にが付けば、あとは轡を並べて闘う友と共に闘う術を身につけさせた方が良いんだよ、星。その方が、軍としてだけでなく、普段もまとまりが出てくるはずだからな。互いに助け合いながら生きていく。これに越したことはないだろうさ。それが当たり前になっていれば、戦のない世の中になっても爪弾きにされるようなことはないだろうからなぁ。皆で手を取り合って上手くやっていってくれるさ。』

主は、軍事は軍事、政務は政務で仕事自体はきっちりと分けるが、それぞれがお互いに良い影響を与えることが出来るようにものを考える。よく、このようなことまで考えて居られるものだ。まぁ、だからこそ私や愛紗は安心して武を奮えるのだが。この主に付いている限り、我らが武の奮い方で誤ることは無いだろうから。

「さぁ、どうした！この趙子龍の槍をその身に受けてみたいというものは居ないのか！」

そういって賊共を挑発する。

存外、張り合いのないものだ。主であればこのような安い挑発には乗らぬぞ？

胴を、突く。皮を裂き、肉に突き刺さる感触が槍を伝って手に感じられる。肉が締まらぬうちに、槍を引き抜く。戦で最も危険なのは、槍を刺し過ぎて肉が締まり、抜けなくなった時だ。そのような初歩的な過ちを犯しはしない。

槍を持った賊を優先的に屠っていく。

左から多くの賊がやってくるが、右からの圧力は余り感じられない。

そちらを見ると、主がやってきて清麿を振るっていた。

「待たせたな、星。奴さん達は蛇に絞め殺されにやってきたようだぜ？間違いなくな」

そう不敵に嗤う。

「そうですか。それは重畳」

「はっ、全く以てその通りだ」

そう言って、主は静かに辺りを見渡す。死んでいる兵達を目にして少し哀しそうな顔をしたが、直ぐに強い意志を感じることが出来る目をして、彼らを再度見渡している。

……あぁ、この主の顔は、『美しい』。

人は、苦しまなければ美しくはなれない。苦しまない人は、美しくない。美しい人は、皆例外なく苦しんだ人なのだ。己の至らなさに。己が抱える矛盾に。我が主は苦しみ、そしてその苦しみから抜け出した。この勇ましくも儚い、夢を抱いた揚羽蝶は、漸く羽化したのだ。そう、実感できる。あとは、優雅に天下を舞うだけだ。

「ふっ、主。思えば主とこうして肩を並べて闘うのは初めてですな」

「そうかぁ？そういえばそんな気もするが、まぁ、そんなことはどうでもいいだろうさ。楽に屑共を掃除できる分、少々物足りなく感じるんだろうけどねぇ」

「まぁ、危険は少ないに越したことはありませんぞ？主」

「わぁ～てるよ。だからこそ、一番安心できる星の隣に来たんだろうに」

「ふふっ。主、今日は中々に素直ですな？」

「まぁ、おかげさまで、な！」

二人でそう会話をしながら、目の前の賊共を次々に屠っていく。

私が槍で牽制し、怯んだところを主が斬る。

周囲にいるものを次々に斬り捨てていく主に怯んだ者を、私が槍で突き殺す。

ここが戦場であることを忘れてしまうような、優雅な演舞。まるで、蝶が舞うように。

「さぁ、主。敵の腹背から右翼が突っ込んでいるようですぞ？我ら

も負けてはおれませんな！」
「たりめぇだろうが！こちとら負けるつもりはさらさら無いンだよ！」

主は、まだ羽化したばかりの蝶に過ぎない。
人は、まだその真価を知ることはないだろう。
だが、これから世の人々にその蝶の美しさを広く知らしめなければならぬのだ。

平教経という、揚羽蝶の美しさを。

～稟　Ｓｉｄｅ～

教経殿が前線に出ていった後、風達前軍が敵後軍の腹背を散々に攻め立てている。
その動揺を受けた敵中軍に、張遼殿が率いる後軍が遮二無二突き進んでいく。もの凄い突破力だ。指揮官の力量があれだけで分かろうというものだ。

騎馬に蹂躙され、敵中軍及び敵後軍の前線は既に崩壊しつつある。組織立った抵抗をまだ続けているが、それも時間の問題だろう。騎馬を甘く見たこと。それが彼らの敗因だ。

「中軍全体に伝令を。少しずつ前線を押し戻します。予備兵力の全てを敵の前面に叩き付け、こちらに敵の注意を再度惹くのです。また、その際に疲労してどうにもならない兵を後方へ回して休息させて下さい」
「はっ！伝令！予備兵に全兵力を持って前進しろと伝達を！」
「兵を休息させる場所と水を用意しろ！怪我の手当も出来るようにするんだ！」

伝令が慌ただしく走っていく。
風達の前軍は、敵後軍を蹂躙し終えて中軍に攻め掛かっている。
張遼殿の後軍は、全体を二つに分け、一つはそのまま風達と敵中軍を挟み込むように叩き、一つは敵前軍の後背を扼そうという構えを見せて敵を混乱させようとしている。

ここで一気に決める。これが決定打になるだろう。

「本陣も前へ。教経殿達と合流し、敵前軍を殲滅。そのままの勢いで敵中軍を叩きます。敵中軍が軍としての機能を保ち得なくなった時点で兵を再編し、鉅鹿へ向かいます。再編と、負傷兵の手当の準

備をしておいて下さい」

本陣を押し上げ、敵軍に圧力を掛ける。
卵の殻のように、罅を入れることが出来るだろう。
本陣が前線に移動する、ということの意味を、風は理解しているはずだ。間違いなく、全軍を敵に叩き付けてくれるだろう。

敵軍を包囲すれば、これを完全に殲滅せしめる自信はある。
が、この度は包囲をせずに、逃げるに任せる。

この出征の目的を違えるわけにはいかない。蛇足、というものだ。
余計な足を描いてしまったために本来目指す絵図を描けないなど、低能も良いところだ。私は違う。そうはならない。

このまま、鉅鹿へ。
教経殿が望む天下を描く為の、戦略。
それを、描いているのだから。

中軍が前線を押し上げ始める。
前軍は、敵中軍に向かって突貫している。
その周囲を、後軍が寄せて叩いては引く運動を繰り返して損耗を強いている。

こちらの兵の損耗は少ない。
このまま、鉅鹿で主力となりうるだけの兵力を有して決戦に望めるだろう。
あと、一押しだ。

「今です！全軍突撃を！」

こちらの攻勢に対応し始めた敵を見て、そう命を下す。
一直線に力を加える。丁度、前軍と合流するように。
敵は、こちらの急激な攻勢の変化に対応出来ていない。敵中軍の牙門旗が大きく揺れている。
……崩れる。
張遼殿の後軍が一気に寄せていく。
こちらに合わせて、一気に牙門旗の元へ。

「敵将、この張文遠が討ち取ったで！」

張遼殿が、そう名乗りを上げる。
その衝撃が敵軍に伝播し、皆算を乱して逃げ始めた。

「旗を振って下さい。平家の旗を」
「はっ」

完勝。
次も勝ってみせる。いや、戦略上の勝ちは既に決まっているのだ。
これあるを見越して準備を十分にしてきたのだから。後は、どういう戦術で戦略上の命題を満たすのか。これに尽きるだけだ。

これからの事を思い、私はそう考えていた。

蝶の如く～37～（前書き）

例によってネタです。

蝶の如く～37～

～教経　Ｓｉｄｅ～

賊共を退けて鉅鹿に到着した俺たちを待っていたのは、黄巾賊共だけではなかった。
俺の目に映ったのは、『曹』の旗。
……曹操。曹孟徳。その人がそこにいた。

「私は曹操。曹孟徳よ」
「俺は平教経。字も真名もない」
「へぇ。貴方が天の御使い、平教経なの。思ったよりも普通ね。噂なんて当てにならないものね」
「あぁ、そうだよ。俺は平凡な人間なんでなぁ。別にご迷惑をおかけしてるわけでも無かろうに、ご丁寧な挨拶痛み入るね」
「あら、別にそう邪険にすることはないと思うのだけど？」
「なら自分の言葉が含んでいる険を取り除く努力でもすることだな」

訪いを入れてきた曹操を陣屋に招き入れ最初に抱いたのは、こんなちっこい娘が曹操か、という感想だった。意外だった。ちょっと、驚いた。それが顔に出ていたのだろう、曹操の機嫌が少し悪くなり、心温まる会話を絶賛継続中だ。驚いたことに腹を立てるって一体何なんだ？

「貴様！華琳様を愚弄するか！」

曹操の後に控えている二人の姉ちゃんのうち、黒髪のがそう突っかかって来る。

「……おい、曹操さんよ。お前さんの所の番犬は躾がなってないみたいだな？主君同士の会話に割って入ってくるほど自分は偉いと思っているらしい」
「貴様ぁ～！」
「止めなさい、春蘭」
「ですが、華琳様！」
「やめなさい、と言っているのが分からないのかしら」
「うっ……申し訳ありません」

ふうん。家臣はしっかりと掌握している、ね。流石は、曹孟徳。

「家臣の失礼な言動について、謝罪するわ。ごめんなさい、平教経」
「あぁ、別にいいさ。気にならないからな。それと、姓名を続けて呼ばれるのに慣れてないンだよ。好きに呼んでくれて構わないが、出来れば分けて呼んでくれないかね」
「そう。じゃぁ、平。貴方、春蘭に殺されると思わなかったの？」

ここで返答間違えたらエラいことになるだろうな。
愛紗ん時みたいに、さ。

「殺すつもりだったんだろうが、生憎と俺の周りにも頼りになる人間がいるんでね？そう易々とは殺せないだろうよ」
「まぁ、そうでしょうね」

意外にあっさり引いたな。

「で、何の用だったんだっけ？曹操は」
「今日は顔合わせだけよ。明日、軍議を開きたいの。それに参加してくれるでしょう？」

……喋り口がSっ気タップリの女王様みてぇだな。俺は生憎ブヒブヒ鳴く趣味がないからご遠慮申し上げるがね。日本が生んだ孤高のパンパニスト、自〇党の山〇拓じゃないし、そういうプレイは御免被るさ。

成る程、主導権は私のものよ、か。
だがねぇ。それは出来ない相談なんだよねぇ。
俺達の方が兵数が多いし、主導権は俺が握るのさ。申し訳ないがね。
その為に官軍を引き連れて此処まで来たんだからな。
指を咥えて見ておいて貰えるかね？

「いや、こちらで軍議を開こうと思っていてな。出来れば、参加して貰いたいンだがね」
「あら、どちらが開いても良いじゃない」
「まぁ、こちらには官軍もいるしな。こちらに参加して貰った方が、後々やりやすいと思うぜ？お前さんが何を望むにしても、な」
「……まぁ、いいでしょう。では、明日私が再度訪いを入れるわ」
「申し訳ないが、その方向で頼むわ」
「春蘭、秋蘭、行くわよ」
「はっ」
「はい」

さて、曹操、か。
あれを皆はどう見たのかねぇ。

「教経殿、お疲れ様でした」
「あぁ？俺は疲れちゃいないぜ？」
「稟。教経様はあの程度の殺気では全く疲れを感じない。気にならない、と言っていた通りだ」
「そういうことだ。涼風にも感じなかったがな。謝らないなら本気で殺そう、って感じだったし、切迫した状況じゃなかったしなぁ。とにかく今すぐ殺すって感じじゃなかった。だから、気にもならなかったンだよ」
「しかし主、なかなかの武人でありましたぞ、あの二人は」
「だねぇ。あの後の姉ちゃん二人について、何か知っているか？」
「あれは恐らく、夏侯姉妹でしょうね～」

……夏侯『姉妹』って……
夏侯惇と夏侯淵か。

「頭が残念そうなのは、夏侯淵か？」
「……いいえ、教経殿。あれは夏侯惇殿だと思います。伝え聞いている為人と一致していましたから」

おいおい、史実だと夏侯惇は冷静沈着な大将軍様だったはずだぜ？
あれじゃダンクーガ並の残念具合じゃないかよ。

「それにしてもお兄さん、良く気が付きましたね～。風が口を挟もうかと思ったのですが」
「まぁ、俺主導で黄巾賊を討伐したっていう風評が欲しいからなぁ。そう簡単には譲ってやらんよ。余程大きな代償がない限りはな」
「流石はお兄さんなのです」
「で、曹操自身について、どう思った？」
「見た限り、ですが。ご自身に強烈な自負を持っておられるようです。それ故に、教経殿が意外そうな顔をして自分を見たことが気に障ったのだと思います」
「あと、それなりの武人ではあるでしょうな。主には及ばないと思いますが」
「苛烈な人、という印象を受けますね。意志の強さを感じさせる言動でした」

成る程、皆きちんと観察してたって訳だ。心強いねぇ。

「風はどうでも良いのですよ」
……風ェ……

そう言った後、風は俺の方にとことこ歩いてきて、膝の上に座った。

「……風。なんぞこれ？」
「お兄さん、今日は風の順番なのです。これ位のことは何でもないことなのですよ」
「いや、風。ここには張遼もいるし、そういうのはどうかなぁと思うんだが？」
「あぁ、経ちゃん。ウチは気にせぇへんから好きにしとってええよ？」
「……そういう問題じゃないだろうが」
「お兄さん、どの辺りに問題があるのですか？」

「どの辺りって……」

それはお前さん、今お前さんの目の前に三匹の鬼が居るでしょうに。

「おぉ～、三匹が斬る！ですね」

「それわかる奴いないから！というか、俺斬られるのかよ！」

「まみやりんぞう、千石しょもう！なのです」

「最終話まで見たことある人絶対にいないから。そしてそれは、続々　三匹が斬る！の方だから」

「そんなことはどうでも良いのですよ」

……またか？またなのか？

というか、何でそんなこと知ってるんだよお前さんはよ！

「年頃の女性には秘密があるものなのですよ、お兄さん」

「さて、教経様？風？」

「風、いかんなぁ、抜け駆けは。まだ夜には早いだろう。此処はこの星が主の膝の上に座りますかな？」

「ちょっと星！場を混乱させないで下さい！」

「……稟、本陣の兵が言っていたが、戦前に主に口づけしておったそうだな？」

あぁ、見られてるよね、あれはね。

だって俺と目があったんだもの。使い番。誰かに言いたくなるよねぇ。

仕方がないよね、人間だもの。

のりつね

「あ、あれは教経殿にきちんとして貰おうと思って！」

そう言った稟を置き去りにして風達三人が俺を取り囲む。
……あれだな、『ご用だ！ご用だ！』って感じだな。寛永通宝でも飛んできそうだ。大川橋蔵的に考えて。

「お兄さん、風は口づけしていませんよ？」
「教経様、それは少し依怙の沙汰が過ぎると思うのですが？私だって前軍で頑張ったと思います」
「主、何事も平等にしなければなりませんよなぁ？」

あ～張遼助けてくれないかなぁ～……って、居ないじゃねぇか！
あの野郎……いや、女か。
酒抜きにしてやるからなぁ、コラァ！

「オニイサン？」
「ノリツネサマ？」
「アルジ？」

おぉ、遂に三人同時に覚醒したんだねぇ。凄い威圧感だ。俺の戦闘力を『たったの5か、ゴミめ』だとすると、三人は『私の戦闘力は５３万です』とか言いそうだよな。細木数子のコラ、似てたな。ドドリアさんに。

まぁ、いい。
俺は操作系だ。強化系とは相性が悪い。此処は引かせて貰うぜ？

……と思ったが。
既に三方向からにじり寄られていて逃げるとかそういう問題じゃない。
これは……ペロリ。青酸カリだ！
じゃ、なくて。

……仕方がないから好きにさせる、か。それしかないよなぁ。
もうお婿に行けない！……あ、嫁貰えば関係ないのか。

「あ～、三人とも、こっちおいで？」

そういうと、発を解除して此方に寄ってくる三人。
風や星はいつも通りだが、愛紗までなぁ。結構素直になったモンだ。
そう思っていると、次々に口づけしていった。星だけ、唇に。

「あ～！星ちゃんずるいのです。風ももう一度するのですよ」
「星！私は頬にしたのですよ！？何をしているのです！」
「教経様、失礼します」

……最後変な言葉が聞こえたねぇ。
まだだ、まだ慌てるような時間じゃない。
それでも、それでも平なら何とかしてくれる！

『諦めなさい、試合終了ですよ』

日が沈んでゆく空で、安西先生がそう言っていた。

「だれかたすけてください？」
「いや、それはもう終わったから」

……おっつぁん、俺ぁ真っ白な灰になっちまったぜ……

蝶の如く～３８～

～教経　Ｓｉｄｅ～

四人に良いようにされた明くる日、大きな陣屋で軍議を開いている。
司会役は稟。補佐に風。
俺たちはその説明を聞いている、という形だ。

「……そういうわけで、先ず前面に主力を置いて敵を引きつけ、左右から攻め上がるのが宜しいかと」
「異議はありますか？曹操さん」
「いえ、無いわ。それより、受け持ちについて話し合った方が建設的だと思うのだけれど」
「そうだな。稟、案を」
「はい。先ず敵前面にて敵を引きつける部隊ですが、これは教経殿と張遼殿が率いる隊でやって貰います。右翼として、曹操殿の隊。左翼として、愛紗と風が率いる隊。正面には１７，０００。右翼８，０００。左翼７，０００。これで如何でしょうか」
「まぁ、我が軍については妥当でしょうね」
「曹操も納得してくれたみたいだし、これで行くかね」
「戦術上の目的は？」
「張角・張宝・張梁を討ち取ること。それが主命題になります。戦略上の目的も変わりありません」

そうなんだよねぇ。張角は、間違いなく死んでいるはずなのに。
何で生きてるのか全く分からん。

「平、貴方大丈夫なの？敵は１００，０００は居るのよ？平家軍の全軍を以て当たった方が良いのではないかしら」

「１００，０００って言っても戦えるのは5～６０，０００程度だろうよ。全部が全部戦えるなら、様子見なんてせずに襲いかかってきてるだろうぜ？」
「それでもかなりきついと思うのだけど？」
「……そんな生半可な訓練させてないんだよ、うちの郎党には。張遼んとこを考えても、４０，０００までなら互角にやれるだろう。策混みでならもうちょっと行ける気もするが大言壮語して失敗したら目も当てられないからな。そういうことにしておくさ」
「まぁ、いいわ。とにかくやれるのね？」
「あぁ、やってみせるさ」
「そう、それなら構わないわ。秋蘭、行くわよ」
「はい。華琳様」

そう言って陣屋を出て行く。
まぁ、色々と準備があるだろうしな。
俺たちを出し抜くために。

「さて、こっちの話だが」
「はっ」
「星、そう気負うな。気楽に行こうぜ、気楽に、な」
「はぁ」
「先ず、張遼。済まんな。一緒に苦労してくれ」

そう言って頭を下げる。
一番割に合わない役どころだ。御免被りたい。そう思うのが普通だ。

「ん、ええよ」
「……もうちょっと恨み言言われると思ってたんだが」
「いや、経ちゃん、先の戦でウチに敵将討たせてくれたやんか。ホンマやったら、官軍盾にして闘こうてもバチは当たらへんところやったと思うで？せやから、今回は全面的に、あんたの言うとおりに動いて協力したる」

気持ちいいほど武人の矜持に溢れてるねぇ。

「済まんな。正直助かる。甘えさせて貰うよ」
「ま、えぇけどウチに甘えとったら四人にまた怒られるんとちゃう？」
「そういう意味じゃないだろうが！」
「ニシシ」

……はぁ。頼むから。心臓に悪いから止めてくれよ。

「んじゃ、愛紗と風で７，０００率いて行ってくれ。急勾配になっていたり、柵が建ててあったりするが、基本的に広い道だと聞いて

いる。歩兵と騎兵を有機的に組み合わせることで、より良い戦果が期待できるだろうからな。まぁ、釈迦に説法な気もするが」
「教経様、本当に大丈夫ですか？」
「あぁ。こっちは気にしなくても良い。攪乱しまくってやるよ。俺たちで張角・張宝・張梁の三人を討つことが出来れば、更に望ましい風評が立つだろうからな。だからこその７，０００なんだ。まぁ、だからといって無理はするなよ、愛紗。俺にとってはそんな風評よりお前さん達の方が大事だ。先ずお前さん達があっての話だからな？」
「有り難う御座います。ですが、必ずや討ち取って見せます」
「そう気負うなよ、愛紗。風、風も頼むぞ。気負わないように、適当にやってくれれば良い」
「わかっているのですよ、お兄さん」
「後は、奴さん達の前に広がっている平原にちょいと悪戯仕掛けとくかね」
「悪戯、ですか？」

愛紗はポカンとしている。
……可愛いねぇ。

「あぁ、悪戯だ。草むらの草を結んでおくのさ。所々に、目立たないようにな」
「……成る程。騎馬の足を捕る、ということですね」
「目的まで分かるってのは凄いな、稟」
「教経殿が考えることですから。話を聞けば同じ結論は出せると思います」
「そう言うがね、そういう人間は中々居ないモンだよ」
「む～、お兄さん。風も分かっているのですよ？」
「はいはい」
「騎馬の足を捕って前線を膠着させた所で、火を着けてしまうので

すね～」

……それは考えてなかった。

風向きを考えると、確かに有効だろう。平原から山側へ向けて風が吹いている。延焼するのは奴さん達だけだ。良く思いつくな。流石、奇計百出と思わせるだけはあるねぇ。

「風、それは考えてなかったよ。お陰で楽になりそうだ。有り難う」

「いえいえ～お兄さんがそう言ってくれれば献策した甲斐があるというものなのですよ」

今回兵数的には厳しいが、主導権を握り続けることが出来る、という点では前の戦と何も変わりはない。戦は主導権を握った方が勝つのさ。戦い方も何もかも、主導権を握った方が決めることが出来るのだからな。

「頼むぞ、皆。これで黄賊共のお祭り騒ぎは終わりにさせるンだ」

「はっ、畏まりました」

「分かっているのですよ、お兄さん」

「承知致しました」

「承知しました」

「了解や」

各自が各々の責務を果たすべく、陣屋を出て行く。

出来るだけの準備をし、出来るだけの策を立てた。人事は尽くした。

後は、天命を待つだけだ。

「では、そろそろ始まりますかな、主」
「あぁ、そうだろうねぇ」

山手側から殺気がビンビン伝わってくる。
正面本陣から兵が移動し、減少したことは確認しているはずだ。
この機に、一気に殺る。
そう思っていることだろう。

「教経殿、来ました！」
「お～、壮観だねぇ」

賊共の騎馬隊。ひとかたまりになって駆けてくる。その数およそ８，０００。

「柵の後に身を隠し、長柄の槍を以て対応するのです！」

そうそう。交通事故起こして貰わないと困るからな。その後で火箭を浴びせてやるよ。

「どうやら、そのまま草むらに突っ込んでくるようです」
「あぁ、見えている」

さて、どうなるか。
先頭の騎兵が、草むらを突破しそうだ。
数が少なかったか？だがあれ以上は増やせないだろう。傍目でおかしいと思ってしまうだろうからな。違和感を覚える程度だが、その違和感から全てを看破されてしまっては意味がない。

先頭集団の騎兵が、草むらを突破して駆けてきた。
……失敗したか。
そう思ったが、後続の騎兵が次々に落馬し始めた。その後の騎兵は、味方を踏まぬように急停止しようとして落馬したり立ち往生したりしている。見れば、敵騎兵の殆どが草むらに入り込んでいるようだ。

「今だ」
「弓兵、火箭を浴びせてやれ！」

星の号令で、一斉に火箭を放つ。

「ぎゃぁ～」
「あぢぃ～、助けてくれ～」
「うひぃ！逃げろ～」

大混乱だな。火遊びって愉しいよなぁ。こう、惹き付けられるものがある。だから放火魔ってのが居るんだろうがな。

「此方に抜けてきた騎兵共は？」
「数が少なく、全て対処致しました」
「よし。これで敵に騎兵が居たとしても、大した脅威にはならん数だろう。これで勝利自体は確定したようなものだな」
「はい。それではこれから、敵歩兵に当たります」
「張遼に伝令を。敵騎兵を殲滅せり、前線で好きなだけ暴れてこい、とな」
「はっ！」
「あれで宜しいのですか？」
「張遼に限って、見極めを誤ることは無いだろう。押し込めすぎても駄目。引きすぎても駄目なんだ。その辺は上手いことやるだろうよ。戦するために生まれてきたような女だからな、あれは」
「はい」
「星、そろそろ俺たちも征くぞ？」
「はっ。準備は出来ております」
「教経殿、ご武運を」
「あぁ、ありがとうよ、稟。星、征くぞ！」
「教経隊！趙雲隊！前進するぞ！賊共を駆逐するのだ！」

兵と共に駆け始める。
草むらを大きく迂回して左方向から俺たちが。右方向から張遼の騎馬隊が突入する。
良いタイミングだ。

「やぁやぁ我こそは、ってか？」

賊の先頭集団とぶつかる。
此方に向かって尽きだしてくる槍の穂を切り落とし、そのままの勢いで懐に飛び込んで斬り捨てる。周りにいるのは餓鬼共だ。何を思

ってこの世に迷い出てきたものやら。しっかり送ってやるからなぁ、地獄まで。俺は伝承者じゃないから、有情拳的なものが使えないんでかなり痛い思いをすることになるだろうが、そこは我慢してくれると嬉しいねぇ。

右と左から、同時に剣を突き出してくる。
お前らが使っているその剣は、膂力で叩き付けるように作られてるんだよ。そんな剣を寝かしていたら、腹をぶっ叩かれて剣が折れちまうだろうが。

剣の腹を清麿の鞘でぶっ叩く。左側の男が持っている剣がそこからあっけなく折れた。自分の命をそんななまくらに預けるなよ、馬鹿が。
右から突いてくる男。頭を突き刺そうとするなんて、お前は本当に阿呆だな。狙うなら腹なんだよ、腹。それなら余程のことがない限りは躱されて反撃を受けることもなかったものを。

突きを見きって頭を右に躱す。そのまま体を右前へ移動させて左下から右上へ逆袈裟に斬り上げる。剣を折られ、呆然としていた賊は、星に一突きに殺された。

「主、危ない真似はなさいますな」
「星、危なく見えたのか？」
「いえ、見えませんでしたな」
「んじゃ、問題無いだろうが、よっと！」
「そういうわけには参りませんな！皆から主を任されているので、責任重大なのですぞ！？」
「まぁ、そうだろうとは、思ったよ！」

会話を続けながら周囲の賊共を掃討する。

「いやぁ、余裕があって何よりだねぇ」
「誠、張り合いがありませんな」
「ンじゃ張り合うか」
「ほう。主。この星より多くの敵を屠ってみせると？」
「まぁ、そういうこった。そら、４人目だ」
「ちいっ、主、中々やりますな！これで５人目！」
「こっちはこれで６人目なんだねぇ」
「それ！６！７！８！」
「おぉ～、やるねぇ、星。鍛錬の成果は着実に出ているってか？７！」
「当然ですな。主、剣で槍の広さから生まれる利点を埋めるのは難しゅう御座いますかな？９！」
「ちっ、言ってろ。８！９！こいつで１０だよ！」
「此方も１０！」

俺たちの周りに、賊共の死体が折り重なっていく。
周囲の兵達は、そんな俺たちを見てスリーマンセルでしっかりと賊共を叩いているようだ。

「はぁ、はぁ……ったく、こっちに向かってくる奴が居なくなっちまった」
「主、息が、上がって居るようですな？」
「ハッ、お前さんも同じだよ、星」

負けず嫌いだなぁ、星は。俺も人のことを言えないが、ねぇ。

「まぁ、宜しい。前線を二人出回って潰していきますかな」
「そうだねぇ。賊共にしっかり教えてやらんとなぁ」

前線の戦況は、のっけからこっちに優勢だ。

「黄巾賊は、今日で終わりだな」

そう呟いて、次の戦場へ星と共に移動した。

～愛紗　Ｓｉｄｅ～

「風、先ず徒を突っ込ませて柵を取り払おう。そうでないと騎馬の

利点が生かせない」
「はい。それがいいでしょうね～。一つ柵を壊したら騎馬で蹂躙する。これを繰り返しましょう」
「そのつもりだ」
「では、風から先に行くのですよ。愛紗ちゃん」
「気をつけてな、風」
「大丈夫ですよ、愛紗ちゃん」

そう言って風が軍を柵に向かわせる。
急がなければならないが、気負うな、と教経様は仰ったのだ。風からも、そう言われた。二人にそう言われるということは、私は気負っているのだろう。気負いは、怪我に繋がる。落ち着かなければ。

前方を見る。風は柵に縄を取り付け、引き倒そうとしているようだ。あれならば、直接柵を壊すより遙かに少ない労力と被害で柵を壊すことになる。
流石は、風だ。

「騎馬隊、全員乗馬するのだ！先行部隊が柵を引き倒したら、敵に突っ込んで蹂躙する！味方を撥ね飛ばすなよ？」

騎兵達がその言葉に笑う。
いつも通りだ。これなら、やれるだろう。

「今だ！全軍、敵に向かって突撃しろ！」

駆ける。風の軍は、中央を開けるように左右に散っていく。
私の考えていることが手に取るように分かっているようだ。私も、風が考えていることがよく分かる。相性が良いのだろう。

「下郎共！邪魔をするなぁ！」

馬で撥ね飛ばす。偃月刀を頭上で振り回し、一振りで3人殺す。
他の騎兵も、次々に賊共を殺していっている。

平家の騎兵は、教経様が考案された鐙を採用したことで他家の騎兵とは大きく異なり、馬上での戦いで力を余分に使うことがない。鐙で踏ん張ることが出来ることにより、槍にせよ剣にせよ、普段とそう変わらない力で振るうことが出来るのだ。また、類い希な操馬技術を得るに至った。太股の力を、馬を制御することだけに使うことが出来る為に、小回りがきくのだ。だからこそ、今回の戦でも騎馬が活躍できる。こういった場所でも。

「風！此処は制圧した。次に行くとしよう！」
「了解なのですよ、愛紗ちゃん」

少しずつだが、確実に敵本陣に近づいている。
これで間に合わなかったら、それは仕方がないだろう。
此方は、順調に行っているのだ。これ以上は望めない。

「まぁ、確実に行くとしよう。まだ先は長いのだから」

そう独りごちて、前を進む風を見る。
もうそろそろかな。

「騎馬隊！同じ事を繰り返すが、油断するな！」

再度突入。制圧。
さて、曹操軍より先にたどり着けるだろうか？

蝶の如く～３９～（前書き）

ユニークユーザーが２６００程度。
有り難う御座います。

引き続き作者の妄想をお楽しみ頂ければ幸いで御座います。

蝶の如く～39～

～教経　Ｓｉｄｅ～

本陣に殺到してくる賊共の勢いが無くなり、戦線は完全に膠着状態だ。
俺と星は、稟のいる本陣に一旦帰還している。

このまま、時間を潰させて貰いたいモンだ。賊共から掛かってこいだの何だのと威勢の良い言葉が聞こえてくる。此方の兵は、指示通りに適当にあしらってやっているようだ。敵が引こうとしたら嵩に掛かってここぞとばかりに追撃を掛け、敵が頭に血を上らせて戻ってきたら此方が引く。そうやって、膠着状態を長く維持するのだ。時間が経てば経つほど、俺たちに有利な状況に変わっていくことは目に見えているンだ。せこいと言われようと、武人にあるまじき心構えだと言われようと、そんな安い挑発に乗るつもりはないンだよ、俺は。勝つべくして勝つ。それが至上の兵法だ。

愛紗、風。無理してないだろうな？絶対に無理はしてくれるなよ。

そう思い戦場を見ていると、敵本陣側から前線に動揺が走っている。
見れば、敵本陣に火の手が上がっている。
……どうやら、敵大将を討ち取ったと思って良いようだな。
問題は、誰が、というところなのだが。

「敵総大将、曹操軍の将、この夏侯惇が討ち取った！」

夏侯惇が、むさ苦しいひげ面のオッサンの首を提げて戦場を駆け回っている。

……やられちまった、か。

だがそれでも、俺主導で黄巾賊共を討伐した、という風評は得られる。これ以上を望むのは虫のいい話だったということだろう。身の程は、弁えないと、な。不幸になどなりたくはない。

星も稟も、無事だ。

遠目に『関』と『程』の旗も見えている。二人も無事だろう。

まずはそれを喜ぼう。

今日も、俺たちは無事に生き延びたのだから。

勝利に沸く戦場を見渡しながら、そう考えていた。

軍を再編し、曹操と最期の軍議をする。

その準備をしている最中に、稟から話があると呼び出された。

「邪魔するぜ、稟」
「教経殿」
「どうした、稟。呼び出したりなんかして」
「曹操殿の所に放っていた細作から、気になる報告があったのです」
稟が気になる報告、か。
「続けてくれ」
「はい。その細作が言うには、夏侯淵殿が敵本陣から三人の女性を自軍に保護した、ということでした」
「その話だけ聞くと、別段違和感は覚えないが。稟が気になっているのは、何だね？」
「……彼女達が曹操軍に連れて行かれる際、黄巾賊共の中に、張角様、と言う声があったというのです」
「……そいつは、穏やかじゃないな」
「はい。それで、どうしたものかと思いまして」
どうしたモンか、ねぇ。
曹操が保護した、ということは、もう黄巾の乱を起こすような事はしない、と判断したってことだろう。それとも、そもそも周囲のどうしようもない屑共に監禁されて祭り上げられていただけとか。そうでなければ、あの女は許さんのではないか？だが、それなら保護なんて必要ないはずだ、な。そんな無害な連中なら別に野放しにしていてもなんの問題も無いわけで。……何か利用方法を考えついた、とか？俺にはさっぱり思いつかないが。夜伽でもさせるのかね？
……百合、ねぇ。
『お姉様、アレを使うわ！』『えぇ、良くってよ。』とか言いながら、電動コケシをウィーンウィーンいわせるわけですね、分かります。バスターコレダー的に考えて。……何が良いのかさっぱり分か

らん。まぁ、ないだろ。ないない。

曹操の真意が那辺にあるにせよ、此方がそれを知っている、ということを教えておいて、後日何らかの取引に使えればそれで良しとするのが一番良い気がする。そう、稟に伝える。

「分かりました。それとなく、此方が気付いている、ということが伝わるように致します」

「ンな事出来るの？稟ちゃん」

「はい。出来ます」

……凄いな、この娘。簡単に言うけど、それ難しいと思うぜ？どうやって自然にやるんだよそんなこと。細工が過ぎれば露見するし、かといってやり方間違えたら全く伝わらないし。ひょっとして、歴史上の俺が知っている郭嘉も、こんな風だったのか？いや、本当に凄いわ。

「稟、稟が居てくれて本当に助かる」

「ど、どうされたのです、教経殿。いきなりそのようなことを仰って」

「いや、凄い人間が仕えてくれているんだなぁと感動してた所」

そういえば、そんな人間に惚れられてるってのも凄いねぇ。あ～の日あ～の時～あ～の場所で稟～と遇え～なか～ったら～。

……こうなってなかっただろうねぇ。もし巡り合わせが悪かったら、稟は曹操軍か。嫌だねぇ。絶対に嫌だねぇ。これが敵に回るとかあり得ない。全面降伏だな。ケツ毛全部抜かれちまうような負け方しそうだなぁ。俺ぁ。

まぁ、それを言い始めたら、俺に仕えていてくれている人間全てが

そうなんだけどなぁ。
……恵まれてるんだな、本当に。
それが身につまされて分かっただけでも意義があったって言えるかな、この戦には。

曹操との、最期の軍議。
戦功の報告を行い、今後追って沙汰在ることを張遼から聞かされた。
まぁ、余り期待はしていないがね。俺は太守らしいからな。この上はないだろう。
そう思っていると、未来の覇王様からいきなり話を切り出された。

「で、平。私に何か言いたいことがあるんじゃないかしら？」

直球だねぇ。イチローでも打ち返せないんじゃないかね、そのスト

レート。内野安打も怪しい球速だと思うんだがね？

「さぁ。なんであると思っているのか、それを知りたいものだねぇ」
「そんなことは私に訊かれても困るわ。貴方に言いたいことがないのなら私から話すことはないもの」
「なら、それでいいだろうに。何か問題でもあるのかね？」
「まぁまぁ、経ちゃんも孟ちんもそう険悪な会話続けんともっと仲良うしたらええのに」
「険悪な会話をした覚えはないわ」
「右に同じく」
「はぁ。まぁ、ええよ。取り敢えず、ご苦労さん。これで解散や。まぁ、経ちゃんとは太原まで一緒に行ってお酒飲ませて貰わんと困るけどな」
「はいはい、歓待させて頂きますよ」
「ホンマやろな！？」
「あぁ、ホンマホンマ」
「気のない返事やなぁ」
「じゃぁ、私達はこれで失礼するわ」
「あぁ、曹操」
「何？」

……張角達には、名前を捨てさせろよ？バレちまうぜ？
そう、耳元で囁く。

「！」
「じゃぁ、な。曹操。また逢う日まで、壮健でな」
「……えぇ、貴方も壮健でね、平」

そう言って、曹操達は自領に帰るべく自陣に帰って行った。
次に逢うのは、戦場かな？何にせよ、楽しみなこった。出来れば、

味方が良いねぇ。相手は……『おっほっほ』辺りが良いなぁ。気兼ねなくやれるからねぇ。借りもあるし、なぁ。顔良？

「……なんやったん？」

「野暮用って奴さ。張遼が気にするような事じゃないさ」

「ふぅ～ん」

「さぁ、帰って宴会でもしようぜ？酒もしっかり出してやるよ。お前さん達には今回世話になったと思ってるンだ。そこらの官軍と一緒の扱いはしないさ」

「よっしゃ～、直ぐに出発やで～」

本当に酒が好きだな、張遼は。

太原に帰還して、祝宴を行っている。

誰も彼もが嬉しそうに笑っている。これで、賊の被害が減る。そう思って。

だが、俺はこの先の歴史を知っている。

色々と歴史が変わっちまっている以上、全てがその通りにはならないと思うが、戦乱の時代が幕開けるのは間違いないンだ。そう思うと、少し気が重くなる。だが、俺はもう立ち止まらない。俺の為に死んでいった奴らの為に。俺は俺として俺らしく生きていく。彼らが望んだ、俺の夢の実現を成し遂げる為に。

「教経様、どうなさったのですか？」
「あぁ、愛紗か」
「少し哀しそうなお顔をされていましたよ？」
「あぁ、ちょっと考え事をな。再確認、という奴だよ。心配ない。俺は俺だよ、愛紗」
「……それなら宜しいのですが」
「主、愛紗と二人で何をいちゃついておられるのですかな？」
「星、私は別にそのような」
「やれやれ、星、もう酔っているのか？」
「そんなわけがありますまい、主。霞と飲み比べをしておりましたが、まだまだ行けますぞ？」

誰だそれ？

「あぁ、主はまだ知りませんでしたなぁ。先程、張遼と真名を交換したのですよ」
「へぇ」
「経ちゃ～ん、このお酒美味しいなぁ。なぁなぁ、このお酒、お土産に持たせて欲しいねんけどなぁ～」
「こっちもこっちで出来あがってんじゃねぇか」
「なぁ～ええやろ～？お土産にくれたら、真名交換したるさかい」

そんな軽いモンだったっけ？真名。

「なぁなぁなぁなぁなぁ～、それで駄目なんやったら、今晩付き合ったるよ？」
「は？」
「またまた～知らん顔してからに。ほれ、男と女がすることっちゅうたら一つしかあらへんやろ？」
「おい、張遼。洒落にならんからそういうことは言うな」
これで稟までが『稟・・さん・・』的存在に目覚めたら間違いなく死ねるぞ。唯一の癒しが恐怖の対象に……
「なぁなぁ～せやったら黙っとくからお酒お土産に持たしてやぁ～」
「分かった、分かったから落ち着け！抱きつくな！胸を押し当てるな！」
「えぇ～でも、こういうの好きやろ、自分」
強く否定できない自分が哀しい。
「教経殿」
「うへい！」
「教経殿、私がどれだけ教経殿のことを好いているのか、分かっているのですか？」
……何か変だ。
「あぁ、お兄さん。稟ちゃんはお酒を飲み過ぎておかしくなっているのですよ」
「……さいですか」
「それなのに教経殿はいつもいつも他の女性にかまけて……」
説教モードの稟。しかも、俺の女性関係について。

これ初めての経験じゃね？

「教経殿！聞いているのでしゅか！」
「はぁ、聞いておりまちゅ」
「ふじゃけているのではないのでしゅよ？」
「……風」
「なんですか、お兄さん」
「何でだんだん呂律が怪しくなってきてるの？」
「それはですね、いろんなお酒を飲ませてみたのですよ。その後頭も振っておいたのです」

それだな。

「教経様。教経様は最近私に構ってくれていないと思いますです」
……あぁ、此処にも酔っぱらいが……

「クックッ。主、うらやましいことですなぁ。美女を独り占めで御座いますぞ？」
……星ェ……

「お兄さん、風はお兄さんの味方なのですよ」

おぉ、風が黒くない！なんということでしょう！劇的ですな。

「但し、今後お兄さんには風の事を一番に考えてもらわないと駄目なのです」

残念。真っ黒でした。スイミーなんて目じゃないです。吃驚なＡｆ

ｔｅｒ。何というＡｆｔｅｒ。

「なぁなぁ経ちゃん、これ、修羅場なん？」

「……知るかよ……」

……まぁ、今日くらいはパァーと騒ぐさ。

「酒持って来んか～！」

「おぉ～経ちゃんもイケる口やったんやなぁ～」

「さぁ、主、飲み比べと行きましょうか」

「負けるつもりは更々無いンだよ！」

ん？稟、どうしたんだ、そんな顔して。え？何で今此処で愛の告白始めてるの？稟ちゃん。

愛紗？何かその、胸的なものがずっと俺の腕に当たってるんだけど？当ててる？はぁ。そうですか。

風、お前さんどこに座ってるんだよ。もぞもぞ動くんじゃありません。

星、は……何で抱きついてくるんだよ……

……収拾が付かないねぇ……

蝶の如く～４０～（前書き）

黄巾の乱。
覇王様編です。

この妄想も、遂に４０話になりました。
皆様から頂いたコメントに考えさせられ、推敲し、また励まして頂いたお陰です。本当に有り難う御座います。

これからも宜しくお願い致します。

蝶の如く～４０～

～華琳　Ｓｉｄｅ～

私は、姓は曹、名は操、字を孟徳。真名は、華琳。
この荒れ果てた世界に覇を唱え、安寧をもたらす事が出来る人間だと自負している。

その手始めとして、黄巾賊討伐を行う為、配下である春蘭、秋蘭、桂花、季衣を伴って鉅鹿にやってきていた。

「華琳様、官軍がやってきたようです」
「そう、意外に早かったわね。確か黄巾賊の別働隊が楽平辺りまで出張って殲滅しようとしていたはずだけど」

そういって、秋蘭を見る。
姓は夏侯、名は淵、字を妙才。真名は秋蘭。
私の一族に名を連ねる、冷静沈着にして弓の腕前に優れる優秀な将。
その秋蘭が答える。

「官軍は、并州牧　平教経と共にこれを撃退したようです。黄巾賊の別働隊はその将を討ち取られ、軍としての機能を保ち得ないところまで叩きのめされたという報告が上がっています」

并州牧　平教経。
天の御使い。その武は世に冠たるものであり、その智は天下を遍く治ることができる。
そう、民達が噂をしていたのは知っている。

この短期間に賊を退けたことから見て、それ程実像とかけ離れた噂ではないようね。
まあ、本人ではなくその名声に惹かれて集まった周囲の者達が優秀である可能性が高いと思っているのだけれど。

「どうやって短期間でそれを為し得たのかしら。調べてあるのでしょう？桂花」

姓を荀、名を？、字を文若。真名は桂花。
我が子房と呼ぶに相応しい知略の持ち主。
当然、情報収集はしているでしょう。

「はい。平軍、彼らは平家軍もしくは平家と自称しておりますが、この平軍が兵書にない全く新しい陣によって黄巾賊およそ４０，０００を打ち破ったようです。兵達によれば、その陣を『双頭の蛇』と呼んでいたようです。
前軍と後軍を蛇の頭に、中軍を蛇の胴にそれぞれ見立て、胴の部分で敵の突撃を耐え、いなし、出血を強いている所に蛇の双頭が襲いかかって食い破る、というものです。平軍の軍兵の練度は我が軍に劣らず高いものと推測されます」

『双頭の蛇』。言い得て妙じゃない。その陣に対応するには、高い柔軟性と困難に耐えるだけの精神力を植え付けられた兵が必要ね。
賊共では一溜まりもないでしょう。
これ程の策を考えつく軍師が居るとは。欲しいわね、その軍師。

「そう。よく調べてくれたわ。桂花」
「か、華琳さま～」
「華琳様！私であれば全滅させてご覧に入れます！」

春蘭。
姓を夏侯。名を惇。字を元譲。真名は春蘭。秋蘭の姉。
私の配下の中で一番の武を誇る、私の可愛い剣。
そんなことで張り合うなんて、可愛いわね。

「えぇ。春蘭ならきっと出来るわ」
「か、華琳様～」
「ふふ。姉者は可愛いなぁ」
「ねぇ、秋蘭様。ボクお腹がすいちゃったんですけど」

そう言っているのは、季衣。
姓は許、名は楮、字を仲康。真名は季衣。
類い希な膂力を有する、親衛隊の将だ。
……貴女、さっき夕食を取ったばかりでは……まぁ、季衣らしいけれど。

「では、訪いを入れましょう。春蘭、秋蘭。付いてきなさい」
「はっ」
「はい」

さて、挨拶という名の視察に行きましょうか。
御遣いとやらを見物するのも、一興でしょう。

平家軍の陣屋に入る。
入って直ぐ、私を意外そうに眺めている男に気が付いた。

……どうせ私の背丈が低いことに驚いているのでしょう。
失礼な男ね。これだから男は駄目なのよ。女を見るに、外見を以てしか判断できない低能ばかり。この男も、そういうところがあるのでしょうね。私の敵にはなり得ないわ。

その思いが言葉を険しいものに変える。

「へぇ。貴方が天の御使い、平教経なの。思ったよりも普通ね。噂なんて当てにならないものね」
「あぁ、そうだよ。俺は平凡な人間なんでなぁ。別にご迷惑をおかけしてるわけでも無かろうに、ご丁寧な挨拶痛み入るね」

私の言葉に、皮肉を以て応える。
……直接的な言葉を選ばず皮肉った辺りの機知は中々のものね。
そう思いながらも、言葉を続ける。

「あら、別にそう邪険にすることはないと思うのだけど?」
「なら自分の言葉が含んでいる険を取り除く努力でもすることだな」

その言葉に、春蘭が反応した。

「貴様！華琳様を愚弄するか！」

……春蘭。私の為に怒っているのは分かるけど、少し場を考えて頂戴。

そう思っていると、平教経が平然と答えてくる。

「……おい、曹操さんよ。お前さんの所の番犬は躾がなってないみたいだな？主君同士の会話に割って入ってくるほど自分は偉いと思っているらしい」

……全く以て言う通りね。少し恥ずかしいわ。

「貴様ぁ～！」

自分までも愚弄されて、春蘭が殺気を平教経にぶつける。

彼が謝らなければ、春蘭は本当に殺そうとするだろう。

官軍の将が居る前で、此方に非がある形で狼藉を働くのはまずいわ。

「止めなさい、春蘭」

「ですが、華琳様！」

「やめなさい、と言っているのが分からないのかしら」

「うっ……申し訳ありません」

春蘭は我慢できたようね。

しっかりと押さえておくように、と秋蘭を見る。

秋蘭は頷いた。

……本当に頼りになるわ。秋蘭。お願いね。

それにしても、私も少し大人げなかったかしら。互いに抱いた悪感

情を多少和らげる必要があるわね。ここは、私から謝罪した方が良いでしょう。官軍の将の心証の問題もあることだし。

そう思い私が謝罪すると平教経は、気にならないから構わない、あと、自分のことは姓か名で呼んで欲しい、と言った。

……この男は春蘭の殺気を受けて全く動じていなかった。『気にしない』ではなく、『気にならない』と言ったのだ、この男は。それはつまり、春蘭の殺気など無いに等しいと言ったようなものだ。どうやら本人は失言に気がついていない様だが、そう言えるのは無能か偉才かの何れか両極端な人間しか居ない。

大体、私を目の前にしてこれだけ自然体で居られる人間を、私は未だかつて見たことがない。無論配下の者達は別だが、私を目の前にした者の殆どは、私の身の丈を見て馬鹿にした後、私の気宇の大きさや覇気に気圧されて卑屈になるか強く反発してくるかの二通りの者しか居なかった。

ひょっとしてこの男は馬鹿なのかしら。麗羽のように。

そう思って彼の周囲にいる人間を見る。

武に関しても智に関しても、秀でているであろうと思わせる目で私を観察している。

こういった者達の心を絡め取る人間が、馬鹿であろうはずはない。

であれば、この男は間違いなく偉才であろう。

私に対するに全く対等に付き合おうとし、そして恐らく、付き合えるであろう男。

……この男は、間違いなく私の覇道の障害となって立ちはだかってくる。

それが、どうしようもなく愉快だ。

春蘭に殺されると思わなかったのか、などと訊きながら、そう思っていた。

「で、何の用だったんだっけ？曹操は」

平が話しかけてくる。

……この戦の主導権を握りに来たのよ。貴方、気が付くのかしらね。

「今日は顔合わせだけよ。明日、軍議を開きたいの。それに参加してくれるでしょう？」

そう言った私に、平は拒絶の意を表したばかりか、自分が軍議を開くから私に参加しろ、と言ってきた。

頭の方も、流石に切れるようね。状況から考えて、私が主導権を握ることは叶わないでしょう。ここは、彼の言うことに従っておいた方が良さそうね。しっかりとその器量を計らせて貰う為にも、ね？

「春蘭、秋蘭、行くわよ」

明日、私が再度訪いを入れることを宣言して、彼の陣屋から出る。

春蘭はまだしも、秋蘭は彼のことをどう思ったのかしら。

「一代の傑物、と見えました」

平教経という人間をどう見たか、と秋蘭に訊いた回答だ。

「あら、どうしてそう思うのかしら？」

私と同じ感想を抱いた秋蘭に、そう訊いてみる。

こういう時間は愉しいものね。

「は。先ずあの者の身のこなしについてですが、舞を極めた者のように無駄な動きがありませんでした。最初は舞だと思っていたのですが、姉者の殺気を受けて平然としていたのを見て、舞ではなく何らかの理のある型を有する武芸を収めた結果、ああなったのであろうと推測致しました」

「それで？」

「華琳様と話をしている最中の彼は、華琳様を計っておりました。華琳様が姉者を強い一言で我慢させたのを見た際、彼は納得の表情を見せていました。華琳様の器量が大きいことを知っていて猶、華琳様の器量を計ろうとしていたのです。言葉遣いとは裏腹に、慢心することがない、きめの細やかな思考が出来る人間であると思われます。

また、華琳様からの提案を受ければ主導権を明け渡すことになることに気が付いて、それを尤もらしい理由で撥ね付けた上で自分が主

導権を握る手腕についても見逃せません。
最期に、あの者は最期まで華琳様の覇気に屈することも反発することもなく、飄々としておりました。今まで述べてきた理由により、それは彼が無能であるからではなく、むしろそれが気にならない程自身が器量や才に恵まれているからだと結論付けることが出来ます。これらのことから、あれは傑物であろうと思った次第です」

……秋蘭は本当によく見ているわね。

「私もそう思うわ。秋蘭、明日の軍議に貴女も出席しなさい。彼の周囲にいた者達も、才能を有している可能性は高いわ。将来を見越して、彼女達の力量を計っておく必要があるの」
「畏まりました、華琳様」

本当に楽しみだわ。
こんな所でこんな者達に出会えるなんて。
やはり私は天に愛されている。天はその愛する者にこそ困難を与えるのだから。

翌日の軍議。
司会を務めている郭嘉とその補佐の程?。
話の進め方、必要な情報の提示の仕方とその時機。その全てが理に適っている。

……これは才能を有しているという次元の話ではないわね。はっきり言って、桂花に匹敵する才を有しているわ。それは間違いないでしょう。

兵の配置。私達の配置の仕方も、理に適っている。敵本陣前に配して使い捨てにするつもりが有るかも知れないなどと勘繰っていたが、それを官軍と勤めた上で猶別働隊により戦術上の命題を果たそうとしている。考えられる限りで最良の策。

でも、中央が薄いわ。別働隊に兵を割き、私達に殊勲を為さしめぬように動くつもりなのでしょうが、それを見抜けない私だとは思わないで貰いたいものね。

「平、貴方大丈夫なの?敵は１００，０００は居るのよ?平家軍の全軍を以て当たった方が良いのではないかしら」

そう言った私に、平は問題無い、やれるのだ、と答えた。
彼の示した見解は、恐らく正しい。少し見込みがある者であれば、気が付く程度のものだ。だが、なんの気負いも無く軽口まで叩きながらそれを提示してくるところにこの男の真価があるだろう。彼にとって、それは当然のこと。つまり、この戦に向けて万全の準備をしてきたという自信がある。そう見える。

この男に負けるわけにはいかないわ。

「そう、それなら構わないわ。秋蘭、行くわよ」

そう言って自陣に帰る。

彼らを出し抜く為の策を考える為に。

戦場を駆ける。

秋蘭が後から弓で援護する中を、春蘭が強引に突破していく。

その春蘭の脇で、季衣が群がってくる敵兵を薙ぎ倒している。

どうしても、殊勲が欲しい。あの男に負けたくない。

そう伝えた時の春蘭は、心強かった。

「華琳様！私にお任せ下さい！例えこの身が朽ち果てようとも、華琳様の為に敵将を屠って見せます！」

死んでしまっては意味がない。
そう伝えたが、必ずそれを成し遂げると言い切った春蘭。
そして、その春蘭を見ながら頷き、自分も共に進むと言った秋蘭。

この二人と季衣が居れば、強引な手法でも行けるかも知れない。
そう思って今、私にしては珍しく力で押し続ける戦をしている。
桂花は、私の意思を尊重した上で最良の策を献策してくれている。

２０名程度の小隊に分かれ、それぞれが連動して山中を一斉に駆け上がる。黄巾賊共が対策を施している道を突破するのには時間が掛かるだろう。それでは、確実に平家軍に先行して敵本陣に躍り込むことは出来ない。
だから、被害が出るのは承知の上で、小隊を打ち寄せる波のように、小刻みに、東側全体に叩き付けることで山道の守備隊を分散させ、薄くなった守備隊を春蘭と秋蘭が率いる精兵２００を以て突破し、敵将を討つ。

……本当に桂花は良く考え出してくれたわ。最良の策を。

「どけぇい！邪魔だ！」
「しっ」
「どいてどいてどいてぇ～！」

敵守備隊を突破し、遂に本陣へ乗り込む。
平家軍は、まだ中腹から少し上辺りにしか居ない。
勝った。これで殊勲は私の物だ。
そう思っている私の元へ、秋蘭が女を三名伴ってやってきた。

詳しく話を聞いて、驚いた。
彼女達が、張角・張宝・張梁だと言うのだ。
関係のない民間人の振りをして抜け出そうとしていた彼女達に、季衣が気付いたらしい。

三人から聞いた限りだと、黄巾賊共は彼女達を慕って集まった者どもだ。それが制御しきれず暴徒と化した。黄巾賊の真相は、そんなものだったのだ。

……彼女達を処断するのは簡単だが、彼女達が有する人を惹き付ける力。これを有効に活用したいわね。

幸いにも、張角達三名の顔は知られていない。
処断したことにして、匿ってしまえばなんの問題も無いわね。

殊勲と、有効な力。その双方を手に入れられる。
そう思い、彼女達の身の安全を保証してあげた。

最期の軍議に出席する前に、桂花から驚くべき情報を聞かされた。
曰く、『平教経が張角達三名を曹操軍が匿っていることを察知しているらしい』。

私の顔は、恐らく蒼白になっていることでしょうね。
これが知れれば、私を追討せよという勅が下されるだろう。
だが、身の安全を保証した者達を今更処断することなど、私の誇りが許さないわ。

まず、軍議に出て、その場の状況によって今後の身の振り方を考えましょう。その方が建設的ね。
そう思い、平家軍の陣屋に向かった。

平が何を考え、どう行動するのか。
それを見極めようと話を振ったが、どうやら情報が誤っていたようだ。知っていれば、間違いなく此処で問題にするはずでしょう。

話が終わり、ホッとして自領に帰るべく陣屋を出ようとした私に、平が近づいてきた。
まだ、何か用でもあるのかしら。

『……張角達には、名前を捨てさせろよ？バレちまうぜ？』

！この男……斬り捨てておくべきか？幸いにも、平の発言を聞いた人間は居ない。私に対し、耐えられない侮辱を行ったのだと言えばどうとでもなる状況ね。
そう思っている私に続けて話しかけてくる。

「じゃぁ、な。曹操。また逢う日まで、壮健でな」

『また逢う日まで』

どうやら、平は問題にするつもりが無いらしい。

私に貸しがある。私は借りが出来た。その事を私に認識させる為だけに伝えてきたようね。

「……えぇ、貴方も壮健でね、平」

そう言いながら、陣屋を出る。

……ふふっ。本当に食えない男ね。いずれこの借りを返せと言ってくるつもりなのでしょう？平？

私と、対等につきあえる、恐らく史上例のない程の器量を持った男。

いいわ。認めてあげる。

貴方は、この曹孟徳と対等に付き合うに相応しい男よ。

貴方を屈服させて、私に仕えさせてみせるわ。

その才、この曹孟徳の為に奮わせてみせる。

愉しみにしていなさい、『教経』。私も、愉しみにしているわ。

蝶の如く～41～

～教経　Ｓｉｄｅ～

黄巾賊討伐の祝宴から一夜明け、人々は普段通りの生活に戻った。
……まぁ、一握りの人間はまだ寝ちまってるけど。
稟とか。愛紗とか。

……思い出したくないねぇ。昨晩のことは。
調子に乗りすぎちまった。この年で腹上死するかと思ったンだぜ？

「ザキヤマ秋の大乱交祭りなのです」
「……風、それだと『来るぅ～！』って言う人だらけの大乱交祭りになっちまうぞ」
「よく分からないのです」

……なら言うなよ……想像しちまって吐き気がしただろうが……

「主、昨晩はお愉しみでしたな？」
「……お前さんも、随分乱れてたよな、星。『あ、主、主ぃ。私は……私はもう……』って」

顔を真っ赤にするくらいなら言うなよ、星。
あと、そんな可愛い顔すンな。滾ってくるだろうが朝から。

「お兄さんはゼンリンなのです」
「風、それは地図な。今風が言うべきだった言葉は絶倫な」
「ぐぅ」
「寝るな！」

「おぉ！歌舞伎役者に誘われて～」

……獅童か？獅童さんか？

「知らないのです」

「ぶっ壊れすぎだ。あと何度も言うが俺の頭ん中覗くな」

「あははははっ、ホンマ自分ら見とると飽きんわぁ～」

張遼、笑い事じゃないんだよ。まぁ、飽きないのは否定しないが。

「まぁ経ちゃん、程々にしとかんといつか刺されるで？」

「……気をつけるさ」

「あははははっ、自覚はあるんやなぁ」

無かったら只の馬鹿だろうが。

「はぁ～、おもろかったわぁ」

「俺は面白くないンだよ」

「まぁまぁ。……ほな、ウチは行くわ」

「あぁ。張遼、世話になったな」

「こっちかてこんなお土産持たしてもろて、有り難うなぁ、経ちゃん」

「気にすんなよ」

「ウチ、洛陽に居るからこっちに来たら遊びに来てや？」

「あぁ、忘れてなかったらな」

「また照れてからに」

「照れじゃねぇんだよ。行く機会なんてそうそう無いだろうが！」

「まぁ、月にもええ土産話が出来たわ」

話聞けや張遼。

月？

「あぁ、今ウチが仲良うしとる娘や。董卓っちゅうねん。司隷校尉や」

董卓だと！？

「……董卓、ね」

「どうしたんや？経ちゃん」

「いや、董卓ってどんな人間なのかが気になってな」

「なんやホンマに女好きやな、経ちゃんは」

「お兄さん？」

「主？」

「違げぇよ！純粋にその政務の内容が気になってるんだよ！」

「月はえぇ娘やでぇ～経ちゃん。いつも民のことばっかり考えとるような娘やし」

……張遼が言うんだ、間違いないンだろうが、意外だな。

俺の知る歴史とは大きく違うみたいだ。

良い娘、か。それなら、反董卓連合ってどうなるんだろうな？

「そうか。それなら良いンだよ。後一応だが、土産に持たせた酒が飲みたかったら洛陽にあるこの酒屋に行け。そこに太原から酒を卸す事になったンだ」

「おろ？経ちゃんはウチも狙うとるんか？」

「今の会話のどこにそんな要素が含まれてるンだよ！さっさと帰れ！」

「つれないなぁ。……ま、ええわ」

良いんなら言うなよ……疲れる……

「ほな、またな。経ちゃん。星も風もな」
「……じゃぁな、張遼。壮健でな」
「霞、この次もまた酒を飲むとしよう」
「霞ちゃん、またなのですよ」

最期がちょっと慌ただしかったが、黄巾賊祭りもこれで漸く終わりだな。

張遼を送り出してから暫く後、朝廷から黄巾賊平定の勲功褒賞が行われた。

のだが。

「……今、なんて言ったんだ?愛紗。悪いがもう一度言って貰える

かね？」
「は、はい。その、教経様を雍州牧とする、と」
「いや、その後だよ。その後」
「……并州は召し上げ、後任が定まるまで袁紹殿がそれを監督する、とあります」
「事実上の罰則にしかならんじゃねぇか。それ」
「……はい」
「はぁ～」

一体何がどうなってやがるんだ。

「稟。何が起きたのか、調べることは出来るか？」
「……出来ますが、勅命を違えることは出来ないと思います」
「わぁ～てるよ。でもなぁ、どなた様がお世話して下さったのか、知りたいだろう？歳暮の季節も近いしなぁ。暮れの元気なご挨拶、かましてやりたいじゃないかね？」
「一応、調べてみます」
「あぁ、頼むわ。まぁ、利益を得た人間が『おっほっほ』なのを考えると、間違いなくあの頭ん中が年がら年中春爛漫がやりやがったんだろうけどな。……風。朝廷に金出せって調整してふんだくれるだけふんだくって来てくれ」
「はぁ。それは構いませんが」
「その金を、移動費用と移動後の領地経営に充てる。それを踏まえてふんだくって来てくれ」
「分かったのですよ、お兄さん」

にしても、ちっときついぞ。漸く并州経営が軌道に乗ってこれから利益回収に走ろうって時に、并州から出て行かされるなんてなぁ。考えもしなかったねぇ。まさか、軍事力ではなく政治力でやってくるとはね。顔良、なんだろうねぇ。只の猪だと思ってたが、本当に

やってくれるよ、ビチクソ野郎が。それとも、田豊なりが献策したのか？

……それは兎も角、太原の町の爺に話しに行かんとな。

俺は、約束を守れなくなっちまったからなぁ。

「よう、爺さん、邪魔するぜ？」

「これは御遣い様、ようお越し下さった」

爺さんは、いつも通り俺を少し迷惑そうに迎えてくれた。

いつも思うが、ちょっと失礼なんじゃないかね、お前さんは。

眼鏡属性も持たないニュータイプの出来損ないの癖に。

『墜ちろ！カトンボ！』ってか？

「爺さん、ちっと話があるんだ」
「……なんでしょうかな。我が家は既に昼食を終えていましてな」
「違げぇよ！……実はな、今回の黄巾賊討伐の恩賞として、雍州牧の地位を与えられたンだ」
「はぁ」
「……で、并州牧の地位は召し上げられた」
「……」
「後任は、袁紹っていう馬鹿だ。……済まんな、爺さん。俺はあんたとの約束を破ることになっちまった。この町を守るって言ってたが、それは叶わないことになった。本当に、申し訳ない」

そう言って、頭を下げる。俺には、頭を下げることしか出来ん。

「……御遣い様。それは、仕方のないことです」
「……」
「そういって下さるだけで、救われた気がします。もう頭をお上げ下さい」
「……済まん」
「それで御遣い様。いつ頃出立なさいますので？」
「もう一月ほど掛かるだろう。引き継ぎも必要だしな」
「それでは、我らにも準備する時間がありそうですな」
「……なんの準備だ、爺さん」
「御遣い様に付いていくのですよ」
「本気で言っているのか、爺さん。遠いぜ？」
「付いていく、という我らを、御遣い様は伴っては下さいませぬか？」
「……まぁ、戦時じゃないんだし、勅命でもある。道中特に問題が起こることはないと思うが」
「では、御遣い様に付いていくことにしましょう。
……身分不相応な事を申し上げますが、并州内に雍州へ移動する旨

触れを出されるべきですな。ご自分がどれ程の人に慕われて居られるか、実感なさることになるでしょう」

「……４，５万集まるか？」

「甘いですな。１０万を下ることはまずありますまい」

「そんなに糧食用意できないぜ？」

「持参致しますよ。ある程度は、で御座いますが」

「……わかった。何とかしてみよう」

……付いていく、か。有り難いことだよ、本当にな。

付いてきてくれる人間の安全と生活だけは保証しないとな。

根城に戻ると、風と星が丁度出立しようとしていた。

丁度良いタイミングだ。掴まえることが出来て良かった。

「風。糧食を買い集めておいてくれ。洛陽でもどこででもいいから」

「分かりましたが、どれほど必要ですか、お兄さん」

「１０万の軍勢が３ヶ月ほど行軍できるだけの糧食を」

「……それはまた無茶なことを言い出しましたね。お兄さん」

「……太原の爺さんに話をしたら、付いていく、とさ。并州内に雍州へ移動する旨触れを出したら１０万は付いてくるだろうとか言いやがったよ」

「成る程。それでは何とか１５万分の糧食を集めてみましょう。朝廷から色々と理由を付けてお金をふんだくってくるのですよ」

「……済まんな。苦労を掛ける」

「今更なのですよ。確認したいのですが、霞ちゃんに話をして協力を仰いでも構いませんか？霞ちゃんに大きな借りが出来る可能性も考えられますが」

「あぁ、構わない。使えるものは全て使ってくれ」

「分かったのです」

「気をつけてな。星、護衛、宜しく頼むぞ」

「お任せあれ。まぁ、少ないとはいえ精兵を伴うのですから問題在りますまい」

「そう願うよ、本当にな」

「では、お兄さん。行ってくるのですよ」

「あぁ、頼んだ」

「……行ってらっしゃいの口づけはないのですか？それくらいの役得があっても良いと思うのです。暫くお兄さんに会えないわけですから」

……風らしいな。

そう思って苦笑いをしながら、風の唇を軽く啄んでやる。

「あっ……」
「……風、行ってらっしゃい」
「主？」

分かってるさ。
星の唇も、軽く啄む。

「ん……」
「……星も、行ってらっしゃい」

二人は振り返り振り返り、洛陽に向かって出発した。
そんな二人に手を振りながら、これから先の困難に思いを馳せていた。

間に合うのだろうか。
時代はまだ大きく動き出しては居ない。大きく動き出す前に、なんとしても地盤を固める必要がある。
足下が不安定なのに踏ん張る事なんて出来ないのだから。

その猶予を、与えられるか否か。
……天のみぞ知る、か。便利な言葉だな。思考停止に持ってこいだ。
だが俺は違う。足掻いて足掻いて足掻きまくってやる。
時間がないなら創り出せばいい。
今回のことで思い知らされたが、何も戦場でやり合うだけが戦争じゃない。
現代人に経済戦争しかけようと思わせたこと、しっかり後悔させてやるさ。

蝶の如く～42～

～愛紗　Ｓｉｄｅ～

皆様、お疲れ様です。
引き継ぎの資料を作成し終え、執務室で机に突っ伏している教経様を眺めている愛紗です。

「あの、教経殿、それ程に大変でしたか？」
「引き継ぎの資料作成自体はそんなに大変じゃなかったンだが、作成している最中に『おっほっほ』の得意げな顔が思い浮かんで何度も破り捨てそうになる自分を抑えるのに大変だったンだよ。……糞！絶対に！絶対に思い知らせてやるからな！俺はな、余り人を恨む性質じゃないが恨んだら絶対に忘れん人間なンだよ！」

あ、教経様が爆発した。凄い殺気だ。
……本当に怒らせないように気をつけよう。私は大丈夫だと思うけど。

「……愛紗、何とか止めて下さい。私は怖くて体が動きません」

そう言われてもどうしたら良いのか。
……とにかくなだめてみよう。

「教経様、落ち着いて下さい」
「はぁ、はぁ、はぁ……あ～！イライラするんだよ！今日の前に来たらぶっ殺してやる自信があるぞ！こう、全身余すところ無く切り刻んでやる！膾の如くなぁ！死ね！死ね！死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

変なところに自信を持たないで下さい、教経様。あと危ないので清麿を振り回すのは止めて下さい。剣速が尋常でないことになってますよ。気が触れたようにしか見えません。それと、今人が入ってきたら死ぬと思います、その場所だと。

「どうしたんだ大将！って、どわぁ！」

あぁ……断空我殿の眉毛が……前髪も一直線に……

「なんだコラァ！って……ふはははははは、ダンクーガ、お前面白い顔してるな！馬鹿面提げやがってこの野郎が！はははははは！は、腹が、腹がぁ～！」

断空我殿の機転で上手く行ったようです。
流石は断空我殿。肉を切ったら骨が出た、ですね。

「何が面白いんだよ、この野郎！危ねぇじゃねぇか！」
「断空我殿、感謝します。お陰で教経殿が元に戻りました。直ぐに少し違う所に飛んで行ってしまいましたが」
「俺は断空我じゃないって何度も言ってるだろうが！」
「ぷっ」
「あん？……何で笑ってるんだよあんたまで！」
「す、すいません。ですが……その顔は……ぷぷっ」

……私も無理です。断空我殿。
取り敢えず、笑いながら鏡を指さします。

「な……なんじゃこりゃ～！」
「ぶはははは、あれか、松田優作か！はははははは、やめとけやめと

け、お前じゃどうやっても三枚目だよ！はははは！」
「……いつもいつも訳わかんねぇこと言いやがって！今日こそあんたをぶん殴ってやる！」
「ほれほれ、どうせいつも通りお星様になるんだろうが！掛かってこいや、この平安貴族が！ぶははは！テメェがその顔で『麻呂がやぁってやろうかの？』とか言いながら蹴鞠してるの想像したら死にそうになるくらい腹がいてぇ！はははは！」
「てめぇ～！やぁぁぁぁぁってやるぜ！」
「ＯＫ！忍！」

ノリノリでガッツポーズをする教経様。
火に油を注ぐだけですよ……まぁ、積極的に延焼させようとしているのは分かりますが。

「あんたがそれ教え込んだんだろ！気が付いたら皆そう言うようになってたぞ！この野郎！」
「いつ気が付いたんだよ馬鹿！ははははは！馬～鹿、馬～鹿！それは平家の『血の掟』なんだから仕方がないだろうが！」
「んなわけあるか！止めさせろ！」
「やなこった！馬～鹿、馬～鹿！」
「あ～！絶対にやってやるからなぁ！」
「掴まえられるなら掴まえてみろよ！ほれほれ！」

そんな６歳児並の会話をしながら二人は町へ駆け出していった。扉を突き破って。
……６歳児に仕えている自分って……しかもそういう関係で……はぁ……
横を見ると、稟も同じようにげんなりとした顔をしていた。

「……６歳児並の喧嘩ですね」

「……そう思います」

……どうせ、防壁なり人様の家なりを壊して帰ってくるのでしょう。扉の分も併せて、帰って来たら折檻です。教経様。

～教経　Ｓｉｄｅ～

〇月×日

今日は一日イライラしていた。

だからいつも通りダンクーガをぶっ飛ばして遊んだ。愉しかった。
でも家に帰ったらお母さん的存在になっていた愛紗と稟に、正座で説教された。ほんの3時間ほど。
またダンクーガをぶっ飛ばして遊ぼうと思いました。まる。

「あばばばばば　へブッ！」

あ……ありのままに今起こったことを話すぜ。
『反省文を書いていたと思ったら、愛紗にオラオラッシュを喰らった』
な……何を言っているのかわからねーと思うが、俺も何をされたのかわからなかった。記憶がぶっ飛んでる的な意味で。
頭がどうにかなりそうだった……むしろ、顔面が。物理的な意味で。
ゴン・・さん・・とか鬼嫁とか、そんなチャチなモンじゃぁ断じてねぇ。
もっと恐ろしい物の片鱗を味わったぜ……

「教経様、ご反省頂けましたか？」
「はいっ！反省しました！」
「……はぁ」

深い溜息吐いてるね？愛紗。体調でも悪いのかね？

「もういいです、教経様」
「そうかね？じゃぁ、俺はこれで」

そう言いながらスキップで部屋を出て行く。

「……待って下さい。いえ、待ちなさい！」

愉しい愉しい鬼ごっこ。
捕まったら痛いんだろうねぇ。
まぁ、良い気晴らしになるわな。

遠くに稟が見える。
こっちを見て、眼鏡をクイクイしている。

「馬鹿め、そんな餌に俺がつられると思うなよ！？」
「……教経殿、目の前まで来てそれは説得力がないと思うのですが」
「残念！それは残像だ！」

残像だって言ってるのに稟が俺に抱きついてくる。
……稟ってさ、結構良い体してるよね。
気付くと、後から愛紗も抱きついてきていた。

「お前さん方、まだ夜には早いぜ？」
「えぇ、分かっていますよ、教経様」

そういうと、愛紗は更に俺を求めるように強く抱きしめてきた。
……可愛いねぇ。
ところで、愛紗、そろそろさ、その、ね、息が、息、が……

「教経様、ご反省頂けましたか？」
「あ〝い〟」
「それならば宜しいのです」
「げほっ、げほっ」

……死ぬかと思った。

「あ、愛紗、洒落になってない」

「教経様、洒落じゃないですよ？」
「……すいません」
「はい」

そう言って愛紗はにっこり笑った。
……完全に尻に敷かれてる気がする。糞爺共が全員その嫁さんの尻に敷かれてた時点で、それに教育された俺もそうなるのかな～？とは思ってたけど、ねぇ。

「では、教経様も戻ってこられましたし真面目に話をしましょうか」
「あいよ」

死にそうだったがね。

呼吸音がダースベイダー的だったもの。ちょっと濁った感じの。

「先ず、私の方から。教経殿の想像通り、この度のことは袁紹殿が帝に提案されて実現したようです」
「やっぱりねぇ。利益を得たのがあの馬鹿だけだからな」
「袁紹殿は并州牧を兼ねることを望んでいたようですが、なんの功績もない者にその地位を与えるのは公正を欠く、という董卓殿の言葉により、それは叶わなかった模様です」
「……偉く立派な人間に聞こえるな、董卓は」
「はい。洛陽の民衆にその為人を訊くと、全ての人間が董卓殿を褒めていたそうです」
「殆ど全てじゃなく、『全て』、なのか？稟」
「はい。『全て』です」

そいつは凄いな。
だが、馬鹿の恨みを買ったのは間違いない。
……まさかとは思うが、個人的な恨みだけで反董卓連合結成しないだろうな。

「で、愛紗はなんかあるのか？稟が、先ず私からと言っていたが」
「はい。教経様、風が便りを寄越しております」
「……これまた早いな」
「はい。此方になります」

何か問題でも発生したのか？
……成る程、早馬で張遼に知らせて協力を仰いだのか。張遼は快く承知してくれたらしい。有り難い縁だねぇ。戦友、となると特別だろうからな。武人にとっては。
にしても、風はやることに卒がないな。

「教経様、なんと言ってきているのですか、風は」
「張遼が協力してくれるそうだ」
「それは、有り難いですね」
「あぁ。本当にな」

後は、どれくらい金をふんだくれるのか、に掛かってるわけだ。
それ次第で、今後の展望が大きく変わってくるからな。

「で、俺からはちょっと相談があるんだ、稟」
「なんでしょうか」
「今、冀州の糧食の相場は安いか？それとも高いか？」
「高いです」

すっと回答が出てくる辺りが優秀だよな。

「んじゃ、稟。冀州で糧食売り払ってきてくれ。許せる限り」
「はぁ。しかし教経殿。糧食を確保する為に風が奔走しているのでは？」
「まぁ、最期まで話を聞け」
「はい」
「糧食の相場が安いのはどこだ？」
「荊州ですね。一番安いと思います。今年豊作だったようですし」
「じゃぁ、売り払って出た金で糧食を買い占めて、それをまた冀州で売り払ってくれ」
「……」

俺がやろうとしていることに何となく気が付いたみたいだな。

「で、冀州の糧食相場が暴落したら、全部買い占めてくれ。買えるだけな」

「……成る程。袁紹軍の糧食を減らしておこう、と？」
「というよりは、奴さん達から巻き上げてやりたいんだよ」
「教経殿は面白いことを思いつきますね、本当に」
「まぁ、悪戯の鬼だからな」

そう言うと、稟と愛紗が顔を見合わせてクスクス笑っている。
何が面白いんだ？

「何か面白いこと言ったのか、俺は？愛紗？」
「いえ、本当に6歳児並なのかな、と」
「はぁ？」
「此方の話です、教経殿」

そういってまた二人で笑っている。
何が面白いんだか。
まぁ、泣いたり怒ったりしてるよりは遙かに良い。
それでいいさ。

「まぁいいや。俺は風呂に入って寝る」
「あ、それでは私はこれで失礼します。教経殿」
「……教経様、お背中をお流しします。参りましょう」
「へいへい。しっかり今日の仕返ししないとねぇ」
「の、教経様！？」
「冗談だよ、愛紗。行こうか」
「……はい」

いつまでも初々しいというか、奥ゆかしいね、愛紗は。

……袁紹、まだまだ仕掛けてやるから愉しんでくれや、なぁ？

蝶の如く～43～

～教経　Ｓｉｄｅ～

風達が帰って来た。
そう言って愛紗が執務室に駆け込んでくる。

「まぁそう焦りなさんな。お前さんが走ったら風達が早く帰ってくるわけでもあるまいに」
「は、はい。済みません」
「畏まる必要もないさ。んじゃ、門までお出迎えに行くとしますかね」
「はい」

稟達と三人で待っていると、風達が馬を駆ってやってきた。
……どうやら首尾は上々のようだ。顔を見れば分かる。

「ご苦労さん、風」
「……む～、お兄さん？違うのですよ」
「……おかえり、風」
「ただいま、ですよ。お兄さん」

そう言って抱きついてくる。
頭を撫でてやると、目を細めて嬉しそうにしている。

「星、お帰り」
「はっ。ただいま帰りました、主」

そう言って、物欲しそうにこっちを見てくる星。

……分かってるさ。
頭を撫でると、くすぐったそうに、でも嬉しそうにしていた。

「報告は、後でゆっくり聞くから旅塵を落としてくると良い。食事を用意させておくから」
「では、また後で、なのですよ。お兄さん」
「分かりました。風、行こうか」

そう言って二人で連れ立って風呂に向かう。
さて、どんな案配に上手く行ったのかね？

風達が旅塵を落とし、広間にやってきた。
既に準備させていた食事を各々の席に運ばせる。

「主、豪華な食事ですな」
「まぁ、久しぶりに会えたんだ。これ位しても罰は当たらないだろ

うがよ。俺も二人の元気そうな顔を見れて嬉しいしなぁ」
「主……」
「お兄さん……」
「……全く教経様は……」
「……こういう演出を当たり前にするところが何とも心憎いですね……」

何か変なこと言ったか？
まぁ、二人とも喜んでくれて居るみたいだし、これが正解だって事で良いんだろう。

そのまま、和やかに談笑しながら、食事を済ませた。

「んじゃ、報告を受けようか」
「はい。糧食についてですが、１５万人が3ヶ月行軍できるだけのものを買い集めることが出来たのですよ」
「良くやってくれた。張遼にもしっかり礼をしなきゃならんねぇ」
「主、その事についてなのですが」
「ん？」
「実は霞ではなく、董卓殿の世話になったのです」

……どこまでも想像を裏切ってくれるな、董卓様は。

「どう世話になったんだね？」
「本来お兄さんが貰えるはずだった金額の約3倍の金子を頂けることになったのですが、その調整を董卓さんがやってくれたのですよ。霞ちゃんに話をしたら、董卓さんを紹介してくれたのです」

ん？今なんか変なこと言ったな？

「……なぁ」
「はい」
「金、黙っててても貰えたの？」
「当然なのですよ。移動するのに準備が必要なのは当たり前なのですから」
マジかよ。
「それだと俺はとんだ強欲野郎になっちまったって事だなぁ」
「いえいえ。風が事情を正直に話したのですよ。お兄さんを慕って約１５万の民衆が付いてくる、と」
「さりげなく水増しされていることについては何も言うまい」
「……多分、そうなるのですよ。
まぁ、それは置いておいて、その話を聞いた董卓さんは、こういった民に慕われる州牧に、何の褒詞も褒賞もなく唯々移動させるというのは信賞必罰の理念に反する、その功を賞することで広く天下にそういった政を行う人間こそ望ましいということを知らしめることが出来る、その結果として同じように民を大事にする官吏が増え、それがきっとこの国を良くしてくれるだろう、だから金子を授けるべきだ、という感じに陛下を説いてくれたのです」
……先ず隗より始めよ、か。
かなり老練な政治家の相貌が見えてくる。一流、いや、超一流の政治家だろう。先行投資の有用性とその効能、宣伝の重要性についてしっかりと理解できている。この時代、そういう人間が居ることの方が珍しいと思う。春秋戦国時代ならまだしも、三国時代は哲学史・思想史的には停滞期だ。それも、旧来の思想に囚われているからではなく、それを見失った結果としての。そんな中で、旧時代の有用な政治思想をしっかりと実践しているところが凄い。知っているだけなら誰でも出来るが実践するとなると話は別だからな。

「……董卓殿は、本当に凄いですね。いえ、侮っていたつもりはありませんが、それでも此処までの政治家とは思っていませんでした」

稟も、そう言って驚いている。

「稟の言うとおりだ。まさか、そこまでの人物とはねぇ」

「あと、糧食を安く買い求める為に、官が購入する兵糧と一緒に我らが買い求めたい糧食を購入して下さいましてな。そのお陰で、随分と多くの糧食を購入できたのです」

そこまで考えつくのか、董卓は。

「……疑問があるんだが」

「なんでしょうか、お兄さん？」

「なんでそこまでしてくれたンだ？董卓は」

「霞が紹介してくる人間が悪い人であるはずはない。であれば、霞の友人として出来るだけのことはさせて貰う。そう仰っておられました」

人格も全く問題無い。問題無いどころか、人主として理想的だと言える。

「……こいつは素通りできないな。頭をきっちり下げて礼を述べる必要があるねぇ」

「出来れば、そうして頂きたいのですよ」

「分かった。必ずそうする」

こういった有能な人間とは、敵対したくないからな。

敵対せずに済むならそれに越したことはないのだから。

袁紹軍が、并州を接収しにやってきた。
顔良、良く俺の前にのこのこと顔を出せたな？マリオに倣って踏みつぶすぞ？
一緒に居るこのちっさいのは誰だか知らんが。

「引き継ぎはこれで全てだ。こっちの資料に大体のことは纏めてある」
「確かに受け取りました。朱里ちゃん、内容に問題はありませんか？」
「……はい、問題在りません。それより、お聞きしたいことがあるのですが宜しいでしょうか」
「構わんが、お前さんは誰だね？」
「あ、失礼致しました。袁紹軍の客将となっている、劉玄徳様の臣、諸葛亮と申します」

……劉備!?諸葛亮だと!?袁紹の客将だって!?
全く予想していなかった回答に、大混乱だ。
諸葛亮が世に出てくる時代も違えば劉備の状況も違う。
一体、どうなってやがる。俺がいることでこの変化が起きたのか、
それともこの世界ではこれが史実の流れだとでも言うのか。

「……で、訊きたい事ってのは何だね?」

内心の動揺を悟らせぬように注意しながらそう尋ねる。

「太原の郊外に集結している約１５万の民衆は何でしょうか」
「あぁ、あれは物好きにも俺について雍州に移動しようっていう人間だ」
「それは困りますね。勝手に移動するなど許されるはずがありません」
「なんでだね?」
「それをやられてしまえば、并州の人口低下によって農産や商業に悪影響を及ぼしますし、そもそも戸籍台帳と実態が乖離してしまうことになります。朝廷はそれを許さないでしょう」

成る程。しかし、こんなちっこい成りしてても流石に諸葛亮だ。的確に問題点を突いて来やがるな。論理的だ。……反論が難しいな。
無理に連れて行けば、民衆が不利益を被るのは間違いない。朝廷に問題行動として報告させないようにする為に、如何にして言いくるめるか。

「それについては問題無いのですよ」

……風?

「ここに、勅許があるのです。此処にはこうあります。『この度の并州牧の領地替えに際し、此を慕って付き従おうとする者の移動については、今回に限り認めるものとする』。つまり、これは陛下に認められた、民達の正当な権利という訳なのです」

「……その書状を見せて頂けますか？」

「どうぞ～」

「……どうなの、朱里ちゃん？」

「……間違い在りません」

……間違いないのかよ。てっきりねつ造したのかと思ったが。

「ご理解頂けたようで何よりなのですよ。では、風達はこれで失礼致しますね～」

そう言って、俺の腕を取って太原から出て行く。

顔良と諸葛亮は、それをただ見ているだけだった。

「風」
「なんでしょう」
「あれ、どうしたんだ？」
「？どれですか？」
「勅許だよ」
「董卓さんに頼み込んで貰っておきました。ひょっとしたらこうなるかも知れないと思っていましたので」

……風。最高だよお前さん。

「お兄さん、風に惚れ直しましたか？」
「あぁ、惚れ直した」
「お、お兄さん……」

顔を真っ赤にして俯く風。
純情だね。そしてなにより、可愛いねぇ。
それにしても、また董卓か。この借りはでかいねぇ。

「じゃぁ、出発しようか、皆」
「はっ」
「総員、出立の準備を！」
「民達にも通達をしておいて下さい」
「はっ、畏まりました！」

慌ただしくなってくる。そういえば、稟に頼んだことは上手く行ったのか？諸葛亮が居るンだ、ひょっとすると失敗したかも知れない。

「稟」

「はい」
「この間頼んでおいたこと、どうなった？」
「全て上手く行きました」
「……そうか、良かった」
「何を心配されていたのですか？教経殿は」
「……さっき、諸葛亮が居ただろう？あのちっこい娘」
「はい」
「あれな、俺の時代じゃ天才軍師だの何だの言われて祭り上げられてる人間なんだよ。だから気が付いて対処されちまっていないかが気になったのさ」
「大丈夫ですよ、教経殿。途中で気が付いても対処は出来ませんから」

そう言って、眼鏡をクイクイする稟。
……良いねぇ。萌えてくるねぇ。俺は眼鏡属性持ちなんだよねぇ。
そして麦茶が好きなんだよねぇ。

は、置いといて。

「何でそう思うんだ？」
「教経殿、私達が糧食を売却したのはただの商人です。袁家を相手にしたわけではありません。
教経殿の目論見を挫いて価格を安定させる為には、商人から糧食を購入する、もしくは接収する必要がありますが、商人からあの膨大な量の糧食を購入するだけの金子を短期間で用意することは出来ません。
そうなると糧食を接収するしか方法がありませんが、接収するには大義名分が必要になります。そうでなければ、袁家が支配する地域ではいつ財産を没収されるか分からない、と言う噂が立ち上ることになります。勿論、そうなるように私が仕向ける部分もありますが。

そうなってしまえば、袁家の経済力が一気に低下することになるでしょう。何せ商人が寄りつかなくなり、出店しなくなるでしょうから。そうなると物流が滞るようになります。その結果、袁家が今有している経済力は大打撃を受けるのです。物が動かない限り、利益は生じ得ませんから。知謀に優れているならば、そのようなことはしないはずです。ですから、この度の策については何の心配もない、と考えておりました」

そこまで考えていたのか、稟は。

「……流石は、俺の軍師様だよ」

「当然です。私は教経殿の軍師ですから」

そう言って、笑う。その笑貌に、見とれてしまう。

……愛しい。そう思うよ、心から。この笑顔をずっと見ていたいモンだ。

「じゃぁ、行こうか。俺たちの新しい家へ」

稟の肩を抱きながら、そう言う。

「……はい」

皆で、雍州へ。そこで再び地力を付けて、いつか袁紹をぶっつぶしてやる。

必ず、どんなに時間が掛かろうとも、な。

蝶の如く～４４～

～詠　Ｓｉｄｅ～

ボクは姓を賈、名を駆、字を文和。真名は詠。
親友の月を補佐する、董卓軍の軍師よ。

元々ボク達は涼州を統治していたのだけど、月の政の評判を聞きつけた朝廷からの要請により、司隷校尉として洛陽に入ったの。全く、汚職官吏が多すぎて嫌になったわよ。ぜ～んぶ、処断したけどね。
月に色目使ってた汚らわしいケダモノ共は全員死刑よ！勿論、命を取った訳じゃないわ。男としての死刑よ！フンッだ！
そうして、洛陽で政の補佐をしながら過ごしていたわけ。

黄巾賊討伐が終わった後、霞から戦友を助けてやってくれ、と言われた。
彼らが望む糧食と金子の調達に、月の力を貸して欲しい。そう、真面目な顔をして頭を下げられた。
……まぁ、霞が戦友だと言い切って助力を依頼してくるくらいなんだから悪い人間じゃないんだろうけど、月がそんなことに力を入れる必要はないと思う。

そう思ってたけど、月は、友人である霞が協力を要請する為に頭を下げても良いと思う人間が悪い人のはずはない、月も友人の為に出来ることをする、と言って協力を約束していた。……ホントに、甘いんだから。でも、そこが月の良いところでもあるんだけど。仕方がないから、糧食購入については官軍で購入する際に含めて購入し、価格を抑えて彼らの為に分配出来るようにしておいた。……月に頼まれたから、仕方なくなのよ、仕方なく。

糧食を手配してから、霞の友人が、天の御使いと言われている并州牧の平教経だということが判明した。これだけの糧食を確保して、一体何をするつもりなのよ。

残る問題は、金子の問題。糧食の金子もまだ受け取ってない。平教経の臣下が礼を述べにやってきている、と言うので、月と一緒に会うことにした。本来なら、月を表舞台には立たせないのだけど、礼を述べに来ている人間を無碍に扱うわけには行かないでしょ？……女だから、月に対応させるの。男だったらボクだけで対応するに決まってるでしょ！

「それにしても、平教経？本当に強欲な奴ね。金子を強請に来たようなものじゃない！」

謝辞を受けた後、いきなりそう言う。だって本当の事じゃない。

「詠ちゃん、配下の方の目の前なんだよ？」

「だって、本当の事じゃない！」

「まぁ、そう言われても仕方がないとは思うのですよ」

程？と名乗った女がそう言う。

のほほんとした口調だけど、かなりの切れ者なのは分かってるのよ。このボクを、賈文和を甘く見ない事ね。

「でも、自分の為にそういうことを仰る人ではないのですよ。その点については承知しておいて貰いたいものなのです」

「それは、どういうことですか？」

「……お兄さんは、自分を慕って付いていくという民衆の糧食を確保する為に、自分の金子を出しているのです。ただ、付き従いたい

という人数が多すぎるのです。今の金子では、とても購える量ではないのです」

「……それって、どれくらい必要になるの？」

「恐らく、ですが、１５万程度の民衆が付き従うと思うのです。お兄さんは、間違いなく負担を掛けないように移動すると思いますので、長安までと考えても２ヶ月くらいは掛かると見積もっているのです。もしその先まで行くことをお兄さんが考えているのであれば、３ヶ月分。それを確保する為に、私がやってきたのですよ」

１５万。とんでもない数だ。だから、あんなに糧食を必要としていたのね。

でも本当にそんなに人に慕われているのかしら。

「詠ちゃん。詠ちゃんは失礼なことを言ったみたいだよ？」

「わ、分かってるわよ。……程？、その、ごめんなさい。そういう事情があるとは思わなかったの」

「構わないのですよ。分かって頂けたら何も言うことはないのです」

「そういう事情であれば、私も陛下にお伝えして何とか金子を多く下げ渡して貰えるようにお話をしてみます」

「有り難う御座います。出来れば、あと一つだけお願いがあるのですが」

「……何よ？」

「民衆がお兄さんに付いて并州から雍州に移動することについて、陛下の勅許を頂いておきたいのです。本来であれば、離民は認められない事だと思います。が、民衆の為にもそれを是非お聞き届け頂きたいのですよ」

「……分かったわ。その件については、金子を多く下げ渡して貰う調整が成功した場合に、その場で行いましょう。時間をおくと勅許はおりないと思うわ」

「重ね重ね、有り難う御座います」

そう言って、程?は宿舎に帰っていった。

後日、月と程?が陛下と調整した結果、本来下げ渡される予定の３倍の金子を下げ渡されることになった。まぁ、当然よね。ボクが考えた筋書き通りに話をすれば、金子を下げ渡すことが漢王朝の利益になると思うようになっているんだから。勅許についても、その場で頂けたようだ。

程?とその護衛は、下げ渡された金子から糧食の代金を支払い、丁寧に礼を述べて帰っていった。
糧食は、洛陽で受け取る、と言い残して。

「詠ちゃん、有り難う」
「まぁ、月の頼みだから仕方なくよ、仕方なく」

……ホントに、月は甘いんだから。

～星　Ｓｉｄｅ～

太原を出立して１ヶ月。
道中全く問題も無く、順調に来ている。民達がしっかり付いて来ることが出来る速度で行軍している為、旅は捗らないがそれでいいのだと思う。追われている訳ではないのだから。

主は、愛紗と同じ馬に跨り、愛紗の腕の中で眠りこけている。
暢気に眠る主の顔を見ながら、私達二人が帰還した際の主の計らいを思い出す。
……あれは本当に嬉しかった。食事が豪華だったことではなく、主が私が元気でいたのが嬉しいと言ってくれたことが。我ながら小娘のようだと思いながらも、やはり、嬉しくなってしまう。愛しい人に大切にして貰えるのは、何より嬉しいものだ。
最近、自分の中で、女としての自分が大きくなっているような、そんな気がする。主に出遭う前の私であれば、それを良しとせず、ねじ伏せてしまおうとしたかも知れない。何よりも先ず武人であることを優先させただろう。だが、今はそうは思わない。この人がもたらしてくれた変化。それは、大切にしたい。この人から与えられる言葉、思い出、影響。その全てが大切なものに感じられる。
私に夢中にさせようと思っていたのに、いつの間にか私の方が夢中になっている。もう、主の居ない人生など考えられない程に。どう将来を描いても、必ず主がそこにいる。……本当に、憎いお人だ。

愛紗を見やると、嬉しそうだ。愛しそうな顔をして主を眺めており、その二人を、周囲の兵や民達は微笑ましそうに眺めている。思えば愛紗も変わったものだ。最近、態度に険が無くなってきている。人と接する際、相手を余計に緊張させることがなくなった。そもそも、あの様に人前で主といちゃつくようになるなど考えられもしなかった。

主の寵を受けた四人が四人とも、主の側であれば自分らしく居られるし、自分の変化についてありのままに受け入れることが出来ていると思う。この人は、人主として私が望みうる最高の器量を備えている人だと思っているが、男としての器量もまたこれ以上望めない程の人だったのだろう。

これで独占できれば更に嬉しいものを。そう思うが、独占できないからこそこれ程までにこの人が愛しいという所もあるだろう。四六時中一緒に居ればそういうわけにも行かないだろうが、私と一緒に居て嫌そうな顔をしたことは一度もない。疲れていたこともあっただろうに、嫌そうな顔一つせず、私と共に夜を過ごしてくれる。それが、その心遣いが嬉しい。

ちなみに、私も愛紗と同じ様に主と馬に同乗したが、断空我に『似合いの夫婦だな』、などと言われ、それに主が『だろう?』と応えたものだから、気恥ずかしくてついつい槍の石突きで突いてしまった。断空我だけ。まぁ、断空我だから大丈夫だろう。主に思いっきり殴られても死なないのだから。

……何故あの男には眉毛が無かったのだろうか。

漸く洛陽に到着した我々を、霞が迎えてくれた。
相変わらず、元気そうだ。

「おぉ～、ひっさしぶりやなぁ～経ちゃん、歓迎するで！」
「久し振りっつっても2ヶ月程度しか経ってないだろうが。……張遼、後で改めて礼をさせて貰うが、取り敢えず世話になったことに礼を述べさせて貰おう。有り難う。お前さんの助力のお陰で助かった」

そう言って主が頭を下げる。
普段が普段だけに、こういう切り替えをされるともの凄く真摯に見える。
霞を見ると、少し照れくさそうにしているようだ。
まぁ、普段の主を知っているだけにそうなるのは当然だろうな。

「……経ちゃん、水くさいことはなしにしようや。ウチらは戦友や。敵対したのなら兎も角、そうでないなら助力するのは当たり前のことや」
「……張遼、照れてンのか？」
「……別に照れてないわ」
「つれないねぇ……まぁ、いいや」

主との挨拶が一段落したようなので、霞に話しかける事にした。

「霞、久し振り、と言ってもこの間まで世話になっていたが」

「おお、星！久し振りやなぁ。で、約束のモンは？」

……いきなり土産の催促とは。

やれやれ、本当に霞は仕方がないな。まぁ、世話になっている内に互いに気の置けない相手になっているから霞のこの態度は当たり前だが。

「此処にあるぞ？主秘蔵の酒がな」

「うわぁ～、これ旨そうやなぁ～。ほな貰うで？」

「あぁ、構わぬとも」

「……星、お前さん、何勝手に人の酒持ちだしてンだ？」

「主、霞に礼をしなければなりますまいに。霞が酒が良いと言う以上、主の秘蔵の酒を渡すのは当然ではありませんか」

「……何か納得いかねぇけど、仕方がない……のか？騙されてる気がしないではないんだが」

主は納得がいかない風情でそうぶつぶつと呟く。なにやら悩んでいるようだ。

ふふっ、主。別に主の秘蔵の酒である必要はないと思いますぞ？私が霞の相伴に預かって飲ませて貰いたいから、という理由では断じてありませぬ。

「……何か引っかかってんだよなぁ。もうちょっとで分かりそうなんだが」

そう言ってまだ悩んでいる主を見て、稟と風が笑っている。愛紗も

気が付いているらしい。声を押し殺して笑っている。
気付かないのは主ばかり。誠、面白いものだ。
こうやって皆で和やかに暮らして行ければ良いな。

本当に、心から、そう思いますよ。我が主。

～教経　Ｓｉｄｅ～

洛陽に入城する手続きを済ませ、指定された宿舎へ移動する。
民達は、洛陽郊外に用意されていた仮宿舎へ既に収容済みだ。皆、直ぐに出て行ったようだが。此処まで長い旅だったが、民達はさほど疲れていないらしい。初めて見る洛陽の町へ繰り出して買い物を愉しんだり、食事を愉しんだりしているようだ。

……お前さん方、観光に来た外人さんじゃないんだからな。分かってるんだろうな？

そう思うが、辛いはずの旅の中で楽しみを見つけられるのは良いことだろう。

彼らは、俺の為に故郷を捨てたのだから。辛くないはずはないのだ。住み慣れた町。思い出に溢れた家。それら全てを、彼らは捨ててきた。俺でさえ、太原から離れるのは寂しかったのだ。彼らの辛さは推して知るべしだろう。だがそれでも、皆俺に笑ってみせる。そこまで俺を信じ、慕ってくれていることに、ちょっと涙が出そうになっちまう。誰に見せるつもりもないがねぇ。

「御遣い様！遊ぼう！かくれんぼしようよ！」

見ると、小僧共が１０数人、こっちを向いて笑っている。

……こいつらは、家を捨てたってことにまだ実感が湧かないんだろうなぁ。

「……お前ら、迷子になるぜ？この辺で鬼ごっこしとけよ」

「じゃぁ、御遣い様が鬼ね！」

「きゃははは」

「わ～い」

「ちょっ、待てよ！……って、行っちまいやがった」

……俺には、彼らを幸せにする義務がある。

もしそれが義務でなくても、必ず俺がそうしてみせる。

その幸福がたった一時の、仮初めのものでも構わない。これから始まる末世の苦しみを少しでも軽減してやりたい。俺が生きていた時代ならいざ知らず、彼ら自身が能動的にその幸福を追求していけるような世の中ではないのだ。身分の差がある。貧富の差も激しい。

生まれを、越えることが出来ない。だから、おこがましい気もするが、俺が彼らを幸せにするンだ。俺には、それだけの力があると思うから。

俺の家。
俺の町。
俺の国。
俺の、家族。
俺は、その家長だ。
家族を幸福に出来ない家長など不要だ。家族を幸せにする為なら、何だってしてやる。切羽詰まって余裕がないなら、例え他家の人間を不幸にすることであってもそれが俺の家族の幸福に繋がるならそれをしてやる。そのことについて、別に何とも思わない。確かに罪悪感は感じるだろうが、俺は、俺の家の家長なのだ。その俺がよその家のことを優先して考えることなどあり得ないではないか。よその家のことは、よその家で何とかしてもらう。余裕があれば、考えてやっても良いがな。

「家長としての責任は、果たす。それが平家の頭領ってモンだ。そうだろ？糞爺共」

我知らず呟きながら、町へ愉しげに駆けて行く小僧共の背中をずっと見ていた。

蝶の如く～45～（前書き）

申し訳ないねぇ。
だがどうしても、眼鏡っ娘だけは譲れないんだねぇ。
新撰組の服装、傾いてて好きなんだねぇ。

蝶の如く～４５～

～詠　Ｓｉｄｅ～

平教経が洛陽に到着した。
引き連れている民衆の数に、驚く。

程？がああ言っていたから洛陽郊外に宿舎を仮設しておいたけど、あれでは少し足りないかも知れない。まさか、本当に１５万居るんじゃないでしょうね？
とにかく、彼らの状態を把握しておかないと。衰弱していたりするものが居て、洛陽で命を落とした、なんて、このボクの誇りが許さないのよ。出来るだけ面倒を見てあげて欲しいという月からのお願い。受けた以上は、最善の手を打たせて貰うわ。

そう思い、町を出て郊外の宿舎を見て回る。
……随分元気ね。一月かけて移動してきた訳だから確かに余裕があったとは思うけど。彼らの健康状態を気にしながら行軍してきた、ということなんでしょうね。
一通り巡ってみたが、特に問題のありそうな人間は居なかった。

郊外から、平家軍の将達に割り当てられた宿舎周辺へ移動する。
程？達は元気だろうか。糧食の引き渡しについて、話をしておかなければならない。

宿舎の入り口辺りで、浅葱色にダンダラ模様の羽織を着た男が何か考え事をしていた。
霞と同じような服装をしている。霞から聞いた姿形に似ている。恐らく、あれが平教経だろう。……傾いた格好をしているわね。でも

まぁ、なんというか、似合ってる、かな。嫌みがない感じで。

見ていると、平教経に子供達が絡んでいる。

「御遣い様！遊ぼう！かくれんぼしようよ！」

「……お前ら、迷子になるぜ？この辺で鬼ごっこしとけよ」

「じゃぁ、御遣い様が鬼ね！」

「きゃははは」

「わ～い」

「ちょっ、待てよ！……って、行っちまいやがった」

……子供に随分なつかれているわね。ぶっきらぼうに受け答えしていたけど、『迷子になるからこの辺で遊べ』なんて、案外子供のことが好きなんじゃないの？こいつ。

平教経は、そのまま子供達をじっと見つめている。

……結構様になって……じゃなくて！何でボクがこんなこそこそと覗きみたいな真似をしなきゃならないのよ。これは……そう、あいつの為人を知る為の偵察よ、偵察！

当初の目的も忘れ、平教経をじっと観察し続ける。

月の敵になるかならないか、それを見極めるのよ。

そう思って観察していると、平教経がそっと呟いた。

「家長としての責任は、果たす。それが平家の頭領ってモンだ。そうだろ？糞爺共」

そう言って、ずっと子供達の背中を見つめていた。

覚悟を示すような厳しい、それでいて、柔らかい光を宿した瞳で。

その横顔を夕日が照らしている。雰囲気があるというか。何というか。

……胸が、締め付けられるような、そんな感じがする。

「賈駆っち、なにしとるんや？」

「わぁっ！なな何なのよ霞！？吃驚させないで！」

「？な～にを見とったんや……おろ、経ちゃんやないか」

「ちょっと観察してたのよ！」

「ははぁ～ん、賈駆っち、さては経ちゃんに一目惚れしたんか？いやぁ～、経ちゃんもやるなぁ～」

ほ、惚れ！？

「そんなことあるわけ無いじゃない！」

「……エラい突っかかって来るなぁ自分。まさか、ホンマなんか！？いやいや、賈駆っち、おめでとうさん。お堅い賈駆っちにも漸く春が来るんやなぁ。ツンツンのみの賈駆っちが遂にデレる。永久凍土が、ツンドラならぬツンデレに変わる訳や」

「……なんなの、それ？」

「……さぁ、ウチにもよう分からんねん。何となく口を吐いて出ただけやし」

「まぁ、良いわよ。程？と話をしなきゃいけないんだから邪魔しないでよね！」

「はいはい、賈駆っちの恋の邪魔はせぇへんよ～？」

「霞～？」

「ニシシ。ほなウチは星に用事があるさかい。これで失礼するわ」

「とっとと行きなさい！……ったく！」

ボクが一目惚れなんてするわけ無いでしょ！

全く。霞はホントにどうしようもないわね。そんなことも分からないなんて。

アイツの顔を思い出す。
……ま、ブ男じゃないわね。それだけよ、それだけ。

～教経　Ｓｉｄｅ～

董卓に礼を述べる為訪いを入れたが、董卓の体調が思わしくなく、本人が応対できないとのことだった。
別に待っていても問題無いが、民衆を引き連れている。出来れば早めに長安へたどり着きたい。明後日には、出発したいんだが。
……この際、代理の者でも構わないから礼を言って出発することにするか。大変に礼を失する事になるが、明日も駄目であればどうせ代理の者に伝えることになるのだ。こういったことは早いほうが良

い。

そう思い、代理でも構わぬから目通りの上一言礼を述べさせて欲しいと伝えると、代理の者が対応する、と回答があった。

「じゃぁ、行くとしますかね。稟、明後日出発できるように、準備をしておいてくれ」

「畏まりました」

さて、行くとしますかね。代理って、まさか霞じゃないよな？

「ボクは、姓は賈、名は駆、字を文和。董卓の代理よ」

……ボクっ娘で眼鏡っ娘。

この野郎、俺を殺す気だな？全ての要素を兼ね備えた、正しくパーフェクトと呼ぶべき存在だ。パーフェクトジオング的に考えて。あ、足は飾りなんだっけ？俺は偉い人だから分からんのだ。済まんな。

……圧倒的じゃないか、敵軍は！我が軍の兵は既に裏切り済みだ！

残ったのは理性のみだ！

賈駆、って言ったのか。

漢字が違う気がするが、あのカクだよな。一流の戦略家であり、老練な政治家でもある、あの。ひょっとして、一連の対応は全てこの

娘の頭ン中から出てきたって事か？

「俺は、姓は平、名は教経、字も真名もない。元并州牧にして、現雍州牧だ」

「……それで、何の用かしら？」

体調悪いのか？ほんの少しだけだが頬赤いぜ？といっても、そこまで近くにいる訳じゃないから多分、だけどな。

どうやら董卓陣営の中で、風邪でも流行しているらしいな。

「申し継ぎの者から伝えて頂いたとは思うが、この度の董卓殿のご助力について、一言礼を申し上げようと訪いを入れさせて頂いた。改めて、御礼申し上げる。お陰で、民を誰一人飢えることなく長安までたどり着かせ、来年の収穫までの生活を保護してやれる目処が付いた。皆、あなた方のお陰だ。有り難う」

なんか意外そうにしている奴が居そうだな？

……まぁ、俺だってこういう口調で話せるのさ。

流石にこういう場面で砕けた口調で話すのはちょっと、な。

返事がないので、失礼だとは思ったが、賈駆を見る。

……本格的に熱が出てきたんじゃないのか、この娘。上の空というか、なんというか。

「……賈駆殿。体のお加減が悪いようであれば、このまま退出させて頂くが？」

「えっ、ああ、ごめんなさい。少し考え事をしていたものだから。失礼したわね」

「お気になさらず。礼を申し上げようというだけでしたからな、そもそもが。我らは、明後日の日の出と共に洛陽を後にしようと思っております。それまでの間、色々とご迷惑をおかけすることになる

と思いますが、宜しくお頼み申し上げる」
「え、えぇ、気にしなくてもいいわ。董卓からも面倒を見るように言われているし」
「そう言って頂けると助かります」

ホッとしたのと、今までの自分の言動がらしくなくて少々気恥ずかしいのとで、無意識に笑みが零れる。

「……」
「では、私はこれで失礼致します。賈駆殿」
「……え、ええ」

……本当に体調が悪そうだな、賈駆。
早く風邪直せよ？

宿舎に帰ろうとしていると、張遼に声を掛けられた。

「経ちゃん」
「お、張遼か。んな所で遇うなんて奇遇……でもないか」

「あははっ、まぁ、そういうこっちゃ」
「で？」
「なんやの？」
「何か用事があるから声かけてきたんだろ？お前さんは」
「あぁ、そうそう。どうやった、賈駆っち？」
「……体調が悪そうだったな」
「は？」
「だから、体調悪そうだったって言ってンだよ。反応が薄いし、熱でもあるんじゃないか？頬も少しだけ赤かった気がするしな」
「……ふぅ～ん。やっぱりそうなんやんか」

『やっぱり』、か。気付いてたんなら休ませとけよ、張遼。

「良く言って聞かせとけ。無理して死んじまったら天下の損失だろうが、とな」
「どういうこっちゃ？」
「ありゃ一流の軍師だろ？多分、一流の前に超が付く、な。そういう人間が居なくなるってのは、天下の損失以外の何物でも無かろうに」
「……へぇ～、おもろい口説き文句やなぁ、経ちゃん」
「……どうやったら今のが口説き文句になるんだよ」
「ま、ええわ。で、女の子としての賈駆っちはどうやった？経ちゃん、ああいう娘好きやろ？」
「まぁ、好きだな。可愛い。ボクっ娘なのもポイント高いな」
「は？どういう意味や？」
「あ～、とにかく、好みって事で良いさ」
「そかそか」

何でこいつはニヤニヤニヤニヤ笑ってるんだよ。

「ひょっとしてそれだけか？」
「そうやけど？」
「……帰るからな」
「ほなさいなら～また明日な～」

毎回そうだが、調子狂うぜ、全くよ。

～詠　Ｓｉｄｅ～

「平教経殿が董卓様に目通りを願っております。一言、お礼を申し

上げたいとのことですが如何致しましょうか？」
「だ、そうよ。月、どうする？」
「詠ちゃん、男の人と私が会うのに、反対しないの？」
「ま、まぁボクが観察した結果、その辺にいるケダモノとは違うっていう結論を出したって事よ」
「……本当に？」

……何故か月が笑ってるのが気になるわね。

「本当よ」
「ふ～ん。私に何も言ってくれないんだね、詠ちゃん。霞さんが、詠ちゃんが恋してるって教えてくれたよ？」
「ぶっ」

お茶を吹き出してしまった。
霞、あんた月になんてこと吹き込んでくれたのよ！

「そそそんなことあるわけ無いでしょ！月、それは霞が勝手に言ってるだけよ」
「そうなの？」
「そうよ！」
「ん～。じゃあ、この話は止めよっか、詠ちゃん」
「そうね。それで、どうするの？月？」
「私ね、ちょっと朝から体調が悪いの。だから、詠ちゃん、私の代わりに平教経さんとお話ししてきて欲しいな……」

え？

「いや、月？月に礼を言いたいって言ってるんだし、それなら明日にしましょう」

「え～……」
「え～じゃないの！ちょっと、董卓の体調が悪いから今日は無理だって言っておいて！」
「畏まりました」

全く。霞のせいで月に誤解されることに……覚えておきなさいよ、霞。
どうやってギャフンと言わせてやろうか考えていると、また申し継ぎの人間が来た。

「あの」
「何よ！？」
「た、平教経様が、代理の方でも構わないのでお礼を申し上げたいとのことですが」

……アンタも明日で良いのに今日にこだわるわね。

「……」
「詠ちゃん、私は体調が悪いから、お願いね」
「ちょ、ちょっと月～」
「詠ちゃん、代理、お願い出来ないかな……？」

その顔でお願いって卑怯だと思う。

「もぉ～、分かったわよ！ボクが行けばいいんでしょ！」
「うん。詠ちゃん、お願いね」

はぁ。全く。月の態度がちょっと引っかかるけど、仕方がない、か。

「ボクは、姓は賈、名は駆、字を文和。董卓の代理よ」

そう挨拶をした私をしっかりと見据えながら、アイツが挨拶をしてくる。

「俺は、姓は平、名は教経、字も真名もない。元并州牧にして、現雍州牧だ」

……堂々としているわね。

昨日とは違い、深い藍色に揚羽蝶の紋を白抜きで描いた羽織。色のせいもあると思うけど、服装が変わるだけでこんなに涼しげで落ち着いた男に見えるなんてね。ちょっと意外。

正面から見る顔。少し眉毛が太い気もするけど、全体的に精悍な感じを受ける。

「……それで、何の用かしら？」

じっと見ているのが少し気恥ずかしくなって、そう訊いてしまう。

礼を言いに来たって分かってるじゃない！もう。調子が狂うなぁ。

「申し継ぎの者から伝えて頂いたとは思うが、この度の董卓殿のご

助力について、一言礼を申し上げようと訪いを入れさせて頂いた。
改めて、御礼申し上げる。お陰で、民は誰一人飢えることなく長安までたどり着き、来年の収穫までの生活を保護してやる目処が付いた。皆、あなた方のお陰だ。有り難う」

……昨日宿舎前で見たコイツとは違って、丁寧な口調で謝辞を述べてくる。
その挙措には、確かな知性が感じられる。昨日は、野性的な感じだったのに。
『あなた方のお陰』
その言葉に、また少し気恥ずかしくなってしまっている自分がいた。

そのボクを見て何を勘違いしたのか、ボクの体調を心配してきた。
……気を遣ってくれるのは嬉しいけど、ボクは別に病気なんかじゃないの！
そう思っていると、明後日まで洛陽に滞在するがその間の世話を頼む、とこれまた丁寧にお願いされた。
……ホント、昨日とはうって変わって知性的で……何か別人と話をしてるみたいね。どっちが本性なんだろう。って、きっと昨日のが本性よね。周りに誰もいないところで演技するなんて、只の馬鹿だもの。

「え、えぇ、気にしなくてもいいわ。董卓からも面倒を見るように言われているし」
「そう言って頂けると助かります」

そう言うと、安堵したような、ちょっと照れくさそうな、そんな笑みを浮かべた。
……痺れるような、惹き付けられるような、良い笑顔だった。

「では、私はこれで失礼致します。賈駆殿」

その言葉に適当に応えながら、先程の笑貌を思い浮かべていた。

「お～い、賈駆っち」

来たわね、諸悪の根源が。

「霞、あんた月になんてこと吹き込んでくれたのよ！」

「？経ちゃんのこと、好きなんやろ？ええってええって、分かっとるって」

「何にも分かってな～い！

「まぁまぁ、そう興奮せんと。愛しの経ちゃんから、賈駆っちへの愛の言葉を届けに来てやったんやで？」

「なな何言ってんのよ！」

「え～っとな。先ず賈駆っち、経ちゃんな、賈駆っちが熱出しとるって勘違いしとったんやけど、きちんと体を休めんとアカンって心配しとったで。賈駆っちのような超一流の軍師が死んでしもうたら天下の損失やって」

……アイツは、ボクの何を見てそう言ったのよ。まぁ、言ってることは当然だけどね！ボクのこと、中々分かってるじゃない。

「後な、これが一番大事なんやけど、賈駆っちのこと、女の子としてどう思ったかって訊いてきたんや」

ちょっと！

「あ、アンタ何やってんのよ！」

「気になるやろ？」

「ばばば馬鹿じゃないの！？何やりたい放題やってくれちゃってるのよ！」

「なんとなぁ、賈駆っち！おめでとうさん！経ちゃんは、賈駆っちのこと可愛くて好きだ、やって！最高やって言うとったで」

「なななな何を馬鹿なことを言ってるのよ！」

か、可愛いって。好きってどういうことよ。

「……賈駆っち、ホンマに何でも無いんやったらそないな態度は取らへんもんやで？」

「五月蠅いわね！とにかく一目惚れなんてしてないって言ってるの！」

「……ほな、訊き方を変えよか。経ちゃんのこと、少しは気になるやろ？ほんのちょっとだけは」

思い浮かぶのは、昨日の顔。昨日の、瞳。今日の、笑貌。

……胸が、締め付けられるような、そんな感じがする。これは、何だろう。

その事が。

「……気になる」

「ほれ。やっぱり」

あ。

「い、今のは違うわよ！」

「な、月。ウチの言うた通りやろ？」

へ？

「詠ちゃん」

「ゆ、月！」

「詠ちゃん、良かったね、相思相愛だなんて……」

「ち、違う違う、違うわよ月！今のは違うの！ボクは別に何とも思ってないんだから！」

「も～……詠ちゃんは、直ぐにそうやって……素直じゃないんだから」

「霞！どうしてくれるのよ！月が完全に誤解しちゃったじゃない！」

「まぁまぁ、誤解やないんやし、特に問題無いやんか」

「も～知らない！」

そう言って、駆け出す。

とにかく、ここから逃げ出さないと。こんな雰囲気、いたたまれないわよ！

後の方で、まだ月と霞が愉しそうに話をしている。

……あの感じが気になっているだけで、惚れてなんか居ないわよ。

蝶の如く～４６～

～風　Ｓｉｄｅ～

お兄さんが、昨日に引き続いて董卓さんに訪いを入れました。
ですが、どうやらまだ体調不良だったようで、賈駆さんと話をしてきたようです。
むむむ、宝？、助さんも八兵衛もいないのですよ。

帰って来たお兄さんの手には、書物がいくつもありました。

「お兄さん、その書物は一体何なのですか？」
「これか？賈駆がくれたンだよ。雍州の地図と戸籍の台帳らしい。あと、地産についても詳しく記載してあるそうだ。きっと領地経営に役立つだろうから持っていくと良い、と言ってくれたンだ。有り難いことだねぇ。……ちっと借りが大きいのが気になるがね」

……お兄さん、それは本当に有り難いことなのですよ。あり得ない的な意味で。
国が監督した資料を勝手に持ち出せば、最悪死罪になってしまうのです。
そう思って中身を見てみると、国の資料ではあり得ない程の情報が、多岐にわたって詳細に記載されていました。この資料、ひょっとして賈駆さんが個人的に作ってきたものなのではないでしょうか？

これは、貴重な資料なのです。これがあれば短期間で雍州の経営が軌道に乗ると思います。しかし、これで更に董卓さんに借りが出来てしまったのです。この借りを返すのは、並大抵のことでは難しい。
そう思います。

「……しかしなぁ。この借り、どうやって返すかね？」

お兄さんは、借りの大きさに悩んでいるようです。確かに、頭の痛い話なのですよ。

ですが、お兄さんの気の病みようは少し異常だと思います。元々お兄さんは、自分にないものを他人に補って貰うことに全く頓着しない人なのです。だからこそ、人主足るに相応しい器量を有している、と思っているのですが。そのお兄さんが、借りを作ったことを悔やんでいるかのような言動を繰り返す。これは、ただ事ではないと思うのです。

「今すぐ返せるような借りではないと思うのですよ、お兄さん。だから、董卓さん達にいずれ返すということだけ忘れないようにすれば良いのですよ」

「……今は、それしかないか」

余り気にしないようにと言った言葉にも、それ程納得しているようでは在りません。

……後で稟ちゃん達に話しておく必要がありますね。

それは兎も角、明日は出立なのです。

稟ちゃんと、この資料を基に事前に打ち合わせをしておかなければならないのです。

……2ヶ月。

最低でもその程度無いと、雍州を把握できないのです。数字で把握するのと実際に見るのとでは全く異なるのです。地図を見て真っ直ぐに進めると思っていても、実際にそこに行ってみると嶮岨な山が屹立していて直進などとんでもない、ということは多々あるのです。

賈駆さんに頂いた資料の精度を疑うわけではありませんが、風自身

で実感して初めて見えてくるものがあるはずなのですから。
それを怠る者に、政を行う資格はないのです。目の前にある事象や光景を、身のこちら側に引き込んで物を考える。
それが、軍師というものなのですよ。

～教経　Ｓｉｄｅ～

洛陽出立の日。
張遼と賈駆が、態々見送りに来てくれた。

「見送りにまで来て貰って、悪いな」
「何を言うとんねん、経ちゃん。ウチらは戦友やろ？」

そう言って闊達に笑う。
全く、義理堅いね、お前さんは。

「あぁ、そうだな。戦友だ」

そういって、握手を交わす。

「経ちゃん、丁度ええ機会やから、ウチの真名教えたるわ」
「……良いのかよ？神聖なものなんだろ？」
「そやかて、星や稟、風、愛紗とは真名を交換しとるんや。経ちゃんにだけ教えへんのは逆におかしいと思うで？」
「ま、そりゃそうか。そういうことなら、有り難く」
「ウチの真名は、霞や」
「確かに、受け取ったぜ、霞。俺には、真名はない。だから好きに呼んでくれればいい」
「了解や、経ちゃん」

好きに呼んで良いって言っただろうが。

「……ま、んなこったろうとは思ってたけどな」
「あははっ。まぁ、気をつけてな、経ちゃん。旅の無事を祈っとるで」
「有り難うよ。霞、お前さんも、壮健でな」
「経ちゃん、前と同じ事言っとるで？」
「ほっとけ。真名が入ってる分違うだろうが」

そう言って、互いに笑う。
こういうのもいいモンだな。

「貫駆」
「……何よ」

こっちはちょっと不機嫌だな。

「お前さんに貰った資料、必ず役に立ててみせる。有り難うな」
「と、当然じゃない。あれが役に立たないなんて事はないんだから」

……口調はツンツンしてるが、少し嬉しそうだな。
あれか、コイツは……ボクっ娘&眼鏡っ娘&ツンデレなのか？
おいおい、なんだよそのジェットストリームアタックは。しかも仕掛けてくるのがむさいオッサントリオじゃないから間違いなく自分から当たりに行く奴が続出だろうが。俺なんか先頭走ってやられに行くぜ？
若しくは、『こんな所にのこのこ来るから！』とか言いながら分身してヴェスバー的なものでがっつり撃墜してくれて構わんよ？

「……アンタ今なんか変なこと考えてるでしょ」

どうやらニュータイプのようだな。察知しやがった。
バイオセンサーの恩恵か？

「イグザクトリィ」
「？」
「何でもない、忘れてくれ」

つい、いつものノリでな。正直済まんかった。

「……もし何か困ったことがあったら、言ってこい」
「な、何よ。いきなり」

「お前さんには随分世話になったみたいだからなぁ。董卓が皇帝に行った説得の言葉、全部お前さんの頭ン中から出てきたモンだろ？……借りは返すもんだ。借りっぱなしじゃなくてな。助けられる限り、必ずお前さんを助けてやるよ。だから、言ってこい」

「……別に今困っていることなんか無いわよ」

まぁ、今は、な。

だが将来どうなるかなんて分からないだろうが。特に、お前さん方はな。

「別に今すぐ何か助けてやる、とは言っていないだろうが。将来困ったら、言って来いよ？賈駆」

「ふん。……そこまで言うなら助けて貰ってやるわよ」

「ははっ、素直じゃないな？賈駆」

「う、うるさい！アンタに何でそんなこと言われなきゃならないのよ！」

おお、何というツンデレ。

「はいはい」

「適当に流すな！」

「がっつり突っ込んでやろうか？逃げ場がないように」

「……もういいわよ」

ふっ。勝ったな。何に、か分からないけども。

「それよりアンタ、昨日とは随分口調が違うわね」

「そりゃ、あれはよそ行きの服だ。こっちが普段着なモンでねぇ。幻滅でもしたかね？」

「そんなこと無いわよ。こっちの方が自然だと思うわ」

よく見ていらっしゃることで。

「そうかね……じゃぁ、な。賈駆。また逢う日まで、壮健でな」

そう言って右手を出す。

賈駆は、その手をじっと見つめている。

……菌的な何かが見えるのか？もやしもん的に考えて。

「……ちゃんと洗ってるぜ？」

「そんなこと当たり前でしょ！」

「いい突っ込みだ」

「ったく、もう。ほら、これで良いんでしょ？」

そう言いながら、おずおずと俺の右手を握ってくる。

可愛いねぇ。

「あぁ、それで良いんだよ。素直な方が可愛いぜ？賈駆」

「ななな何言ってるのよ！」

顔が真っ赤だ。こういうことに慣れてないんだろうねぇ。

しっかりボクっ娘&眼鏡っ娘&ツンデレを堪能させて貰った。ごちそうさまです。

……あとは、出立するだけだ。

「……じゃぁ、俺たちはそろそろ行くよ。本当に世話になった。董卓殿にも宜しく伝えておいてくれ」

「了解や」

「分かったわ」

「じゃ、な」

そう言って二人に背を向け手を挙げて振る。
ここから、一路長安へ。
出来るだけ早く、雍州を纏めないとな。

～稟　Ｓｉｄｅ～

太原を出立して二月。洛陽を出立して約一月。漸く、長安に到着した。
途中夜盗の集団に出会したが、全く問題にならなかった。
平家軍２２，０００はそのままの規模で此処まで来ているのだ。調練を繰り返しながら。実戦さながらに野営を行い、移動も陣の組み替えを行いながら。
夜盗如きに不意を突かれることはあり得なかったし、兵個人の力量

を見ても最早夜盗など歯牙にも掛けない程逞しくなっている。
長安の城門を前に、教経殿が驚いている。

「おぉ～、流石は長安だな。城って感じだ」
「それはそうです。ここには約三十万もの人間が暮らしておりますから」
「流石に稟だな。もう把握しているのか」
「教経殿。それは当然です。あれだけ詳細な資料があれば、数字を覚えるのに一月も必要ありません。口数が県別ではなく集落単位に記載してある資料など、そうはありませんからね」

あの資料は、生半可な人間には作れない。あれを作った賈駆殿は一国の宰相を務めることが出来るほどの者だろう。私が、彼女に劣るとは思わないけれど。

「……金子と糧食のことを併せると、本当にでかい借りだねぇ」
「教経殿、風も言っていましたが、借りを作ったことをそこまで気になさっておられるのは何故ですか？」

確かに、大きな借りです。
ですが、だからといって此処まで気にされるのはおかしいと思います。

「……反董卓連合」
「……？」
「俺が知っている歴史の流れでは、悪虐な董卓を討伐する為に諸侯がこぞって集結して討伐軍を結成するンだ。それを、反董卓連合。そう呼んでいるのさ」
「董卓殿が、悪虐、ですか？」

あれほど民衆に慕われて居るではないですか。

「だから俺にも分からんのだよ、稟。あれだけ善政を布いている董卓を討伐する名目など、無いと思うからな。だが、もし俺の知っている歴史通りに反董卓連合が結成されたなら、俺は董卓に味方しなきゃならん。例え天下を敵に回しても、だ」

天下を敵に回す。

それ程の勢力が反董卓連合に参加する、ということでしょう。

ですが、味方しなければ『ならない』、とはどういう事でしょうか。

「……理由を伺っても宜しいでしょうか？」

「俺が窮して居る時に手を差し伸べてくれた人間がいる。その人間が、危機に直面している。命を落とすに違いない危機に。さて、此処で質問だがな、稟。

これを助けない、という結論を俺が出すと思うかね？お前さんは」

……出さないでしょうね、教経殿は。そういうお人ですから。

「……その顔は、どうやら察したみたいだな。だから、憂鬱なのさ。勝ち目を増やす為には、随分と面倒なことをしなきゃならないだろうからねぇ」

勝ち目を、増やす。

その状況でも勝てる可能性があり、その可能性を増す為の策がある。

そう言っているのだ、この人は。

「だがねぇ、出来れば、御免被りたいのさ。俺は昼寝でもしていたい。本音言うと、な？」

そう言って、茶目っ気のある顔で私を見てくる。ちょっと可愛い。

「ふふっ」

教経殿らしい言葉とその表情に、思わず笑ってしまう。

「何が面白いンだよ、稟」

「いいえ、教経殿はどこまで行っても教経殿だな、と。そう思ったのです」

どこまでも、自分のままで。

飽くまでも、自分らしく。

星が言っていた。教経殿は、羽化したばかりの揚羽蝶だ、と。

私が選んだ、私の主君。

私達の、揚羽蝶。

揚羽蝶はその美しさを増しながら、この天下を舞うだろう。

きっと人はその美しさに心奪われるに違いない。

揚羽蝶が見せる、その儚い、ほんのささやかな夢の美しさに。

蝶の如く～47～（前書き）

仕事が忙しく、この一話で限界でした。。。

蝶の如く～47～

～教経　Ｓｉｄｅ～

雍州に到着してから、既に3ヶ月が経過している。
今のところ、領内の民から反発を受けることもなく順調に馴致できている。
引き連れてきた并州の民も新しい土地と家に馴染み始めているようだ。

引き連れてきたダンクーガの眉毛は、今だその眉に馴染みを見せないようだが。

「……おい、大将。俺の眉になに貼ってやがる」
「海苔」

そう。わざわざお連れしたのに、全く馴染まない。馴染んでくれない。何が不満なんだ、海苔。やっぱりあれか？暑苦しすぎるからか？ダンクーガが。
……本当に困ったモンだ。この海苔は我が儘なのかもしれないな。
いや、寂しいのか？今度は違う海苔も一緒に連れてこよう。

「いい加減ぶっ飛ばすぞこの野郎！」
「本気出したらぶっ飛ばせるような言動だが、やっぱりぶっ飛ばされるダンクーガなのでし、たっと！」
「あがっ！」

思いっきりぶっ飛ばしてやった。

「ファー！」

おうおう、初めて見る断空砲に長安市民も大興奮みたいだ。いやぁ、良いものを見たね諸君。我先に逃げていく長安っ子達。太原の小僧共は、いつも通り棒持って追っかけていく。追撃は宜しく頼むぜ？餓鬼共。後で菓子買ってやるから。

お、城壁にぶち当たった。

……やっぱりあれだな、城壁って凄いな！だって壊れないンだぜ？引っ越し万歳！これで愛紗の説教が減る！

「何だいあれは」

小僧共にフルボッコされているいつも通りのダンクーガを見ながら、綺麗なお姉さんが歩いてくる。綺麗なお姉さんは、好きですよ？訊かれるまでもなく。

「ようこそ。馬騰、で良いんだよな？」

「あぁ。姓は馬、名は騰、字は寿成。……今噂の天の御使いが私に話があるって言うから態々来てやったのに、アンタ何やってんだい」

「俺は、姓は平、名を教経。字も真名もない。……噂してくれと頼んだ覚えもないがな。あんたの歓迎ついでに将来の長安名物断空砲をお目に掛けただけさ」

馬騰。涼州出身の、漢の征西将軍。もういい加減慣れてきたけど、これまた女だ。本当に、有名どころが全部女なんじゃなかろうな？

……安西先生、男の友人が欲しいです……

『諦めなさい。嘘つきは泥棒の始まりですよ？』

心の安西先生は辛口だった……反論できない自分が可愛い。

「で、何の話があるってのさ、この私に」
「まぁ、詳しい話は城でな。歓待の用意もしてある。焦ることもないだろう？案内する」
「ああ、頼むよ。長安を攻めたことはあるけど、町中歩いたことはあまりないんだ、私は」
「へいへい。頼まれましたよ」

そう言いながら、城へ案内する。
大事な話があるのさ、馬騰とな。

～稟　Ｓｉｄｅ～

長安に到着して二月余り。
漸く雍州の現状を把握し終えた私と風に、教経殿が相談を持ちかけてきた。
曰く、『馬騰を長安に招待して話をしたい』。

……いつものことだが、突飛なことを言う人だ。

「教経殿、何を考えていらっしゃいますか？」

「何、ちょっと反董卓連合についてな」

反董卓連合。

あの話を聞いた後、風達にその話はしておいた。

皆あり得ぬ事だと言っていたが、教経殿はそれが間違いなく起こると思っているようだ。この間話をした時には、同じようにあり得ないだろうと言っていたはずなのに。何故、考えが変わったのだろうか。

「お兄さん、反董卓連合が結成されると何故思うのですか？」

「決まってるだろう。袁紹が馬鹿だからだ」

「……それは理由になっていないと思うのですが。教経殿」

「ふむ……じゃぁ、こう言おうか。

奴さんはこの世のことが自分の思い通りにならないと気が済まない人間だ。俺を并州牧にするように朝廷に働きかけたのは、并州を自分の支配下に置く為だった。だが、その目論見を見事にぶっ壊した俺に対してあの馬鹿は何をしたか。雍州への国替えだ。

では、その後で自分が并州牧も兼ねようとしている時にそれを見事に邪魔してくれたのは誰だった？」

「董卓さんですね」

「そう、董卓だ。では、奴さんはその事に対して何の報復行為もしないと思うかね？」

「……間違いなく、するでしょう」

「そう。だから、反董卓連合は結成される。馬鹿と諸侯の我欲によってな。であれば、今から出来ることをしようと思ったのさ。言うなれば、親董卓連合を結成してみようかな、とねぇ」

『馬鹿だから』
その言葉の中に、これ程緻密な思考の結果が込められていると誰が思うだろうか。この人は相変わらず極端な言い方をする。そんな教経殿を愛しいと感じている私は既に手遅れなのでしょうけど。

……親董卓連合。
それは良いが、何故馬騰殿なのでしょう。

「教経殿、何故馬騰殿なのですか？」
「馬騰ってのは、只の兵卒から将軍にまでなった人間だ。厳密に言うと兵卒からたたき上げた訳じゃないが、それでも下っ端だったわけだ。それがその地位にまで昇った。その事だけで、優れた人物だと分かる。手を組むなら有能な人間の方が良い。
それに、董卓は涼州の人間だろう。同じ涼州の人間なンだ、多少の親近感は持っていてもおかしくない。大体、あれだけ立派な領主様なンだ。同郷の誇りに思えこそすれ、悪感情を持っていることはないだろうよ」

成る程。確かにそうかも知れない。

「では、馬騰殿に連合の話を持ちかけるのですか？」
「あぁ、今言った推測を交えてな。エラい目に遭った俺が言うことだ、信憑性を持たせながら話をすることが出来るだろう。何せ、実際に起こったことを元にして話をするンだ。そこから導き出される結論が少々飛躍したものでも、そんなことがあるのかも知れない、と思うのが人というものだからねぇ。
……まぁ、馬騰には悪いが俺の構想に何としてでも乗って貰う。拒否はさせんよ。俺に目を付けられたのが御運の末だった、と思って諦めて貰うとするさ」

そう言って、人の悪い笑顔を浮かべた。
……この偽悪趣味がある限り、人がこの人の本性を知ることは難しいだろう。でも、その方が私にとっては良いことかも知れない。きっと皆この人を好きになるに決まっているのだから。好敵手は、これ以上増えて欲しくないのだ。

～愛紗　Ｓｉｄｅ～

「馬騰、俺と連合を組まないかね？董卓を助ける為に」
馬騰殿を連れてきた教経様は、酒を勧めながらいきなり話を切り出した。
親董卓連合の結成。
稟から話を聞いた後、五人で話し合いを持った時に宣言された。
この人は本当にやるつもりなのだ。

「……確かにアンタの言うことが本当に起こるかも知れない。けど、そこまでして董卓に助力をしてやる義理はないんじゃないのかい？アンタには。ついこの間出来たばかりの繋がりに、己の存在自体を

掛けるような危険を冒してまで拘る必要があるとは思えないねぇ」
「……董卓を、我欲にまみれた糞共に殺させたくないンだ、俺は。董卓達は、窮した俺に手を差し伸べてくれた。その彼女達が窮すると分かっていて、手を拱いている程腑抜けてはいないンだよ。彼女達を救うのが、俺にとって最良の選択なのさ。俺の心情的にな」
「それでも、借りを返したいだけにしては背負う危険が大きすぎると思うんだがねぇ、私は」

……その通りだ。私も星も、風も稟も。皆そう言って教経様に諫言した。
だが、この人は平家の頭領として、それは出来ないと言いきったのだ。
その理由が気になりながらも、ああもはっきりと自分の意思を表明した教経様に、それ以上誰も何も言えなかった。

「そうだろうねぇ。俺も、正直そう思う」
「ならどうして助力しようと思うのさ。正直、もし反董卓連合がアンタの言う規模で結成されるなら、私だってそっちに参加せざるを得ない状況だろう。そんな中、アンタはあの娘に付くと言う。……その真意は那辺にあるんだい？」

いい加減な回答は許さない。
馬騰の全身から殺気を感じる。
これが、馬寿成。教経様が連合を組む相手に指名するだけのことはある。これ程の武人には滅多にお目にかかれないだろう。
……教経様は、なんと答えるのだろうか。

「義を見て為さざるは勇無き也」
「……」
「正しいことだと分かっているのに大勢に流されたり圧力に屈した

りしてそれを行わないのは、勇気がない臆病者と同じだ、ということだ。俺はな、馬騰。平家の頭領足るべく一族の糞爺共に色々と教えられてきた。正直ぶっ殺してやろうと思ったことが何度もあるが、この言葉を教えてくれたことには感謝してる。

董卓達は、正しく政を行い、今この世を懸命に生きている人間を救ってやれるだけ救ってやろうとしている。それは、正義だ。決して独りよがりなものではなく、多くの者にとって有益な、そんな正義の実現を目指している。その董卓達を醜くも自分たちの我欲の為だけに抹殺しようとしている糞共がいる。その際に、正義を打ち立てる事を目指している董卓を助けてやるのは、正しく『義』だろうよ。俺はただその義を為そうというだけだ。

俺はな、糞爺共に腰抜けと言われるのは嫌なンだよ、馬騰。義を見て為さざるような、そんな腐った男にはなりたかぁないンだ。『平家の頭領は、そんな糞虫には勤まらん』。そう言われて育ってきたし、俺自身義を見て為せる男でありたいと思う。

だから、助ける。

平家の頭領として、一族郎党が誇れる自分でありたい。それだけの事なんだよ」

『見義不為、無勇也』

正しいと分かっていることは何があってもやれ。ただそれだけの言葉だが、胸が熱くなる。確かに、月並みな言葉だ。だがそれを、何者にも屈せず、譲れぬこととして貫き通せる人間がこの世のどこにいるというのだ。

ここに、一人いる。

その事を、声を大にして皆に教えてやりたい。その人は、私の主君なのだ。そう言ってやりたい。私は、この人と出逢えて本当に幸福だ。心からそう思える。

「……参ったね」
「何が？」
「いい加減に応えたら殺してやろうと思ってたのさ。でも、満足のいく答えが聞けたよ」
「……じゃぁ、連合の件、承知して貰えると思って良いんだな？」
「ああ、私はアンタの側に付く。……馬鹿な男だよ、アンタ」
「それは知ってるさ。嫌になるほどに、な」
「けど、これ以上ない程に良い男だ。馬家の頭領が立派に勤まるよ、アンタなら。どうだい、馬家の頭領になってみるかい？」

何だと！？
教経様、教経様はそれを受け入れるようなことはありませんヨネ！？

「……怖いから遠慮しとくよ」
「ははは、愛されてるじゃないか、この女誑しが」
「誑そうと思って誑してるわけじゃねぇよ」
「そういうのを女誑しって言うのさ。知らないのかい？」
「……けっ」
「まぁ、これから宜しく頼むよ、盟主様」
「……対等で良いぜ？お前さんと俺の地位なんてこの際どうでも良いンだからな」
「そういうわけには行かないのさ。……言いたくはないが、漢はもう長くないだろう。皆好き勝手にし始めている。最早国としての体裁を保つのに精一杯さ。漢王朝が滅亡した後、直ぐに別の王朝が打ち立てられれば良いのだろうが、そうはならないだろう。長きにわたる戦乱の世がこれから始まることになる。
アンタに遇うまでは、私は漢に殉じるつもりだった。戦乱の世で多くの民衆が為す術もなく唯々死んでいくのを見るのはもうたくさんなんだ。だから娘達に全てを託して死のうと思っていた。それが、自分の死に様として相応しいと思っていたのさ。

だけど、アンタに遇って気が変わったよ。無論、私自身もそう長くはないだろうが、アンタの考える理想の国って奴を見てみたいもんさね。その為には、外からじゃ駄目だ。内でその国を実感しなきゃ意味がない。だから、アンタに従うことにするのさ」

……要するに、臣従する、というのか。

西涼の、漢の征西将軍である、あの馬騰が。

「臣従するってか？」

「ああ、そうさ。涼州はアンタに従う。いや、貴殿に従おう」

「……承けようじゃないか、馬騰。お前さんの申し出を」

親董卓連合。

教経様と、馬騰。たったの二人。

だが、不思議と負ける気がしないのは何故だろうか。

「……あと、言っておくけど私はアンタを馬家の頭領にすることを諦めた訳じゃない」

……何だと？

「……はぁ？」

「私には娘がいてね。馬超ってんだ。字は孟起。真名は本人を誑して聞いておくれよ。まだ私には及ばないが、若い頃の私に似ていい女だよ？その婿になって貰おうかねぇ」

そういって馬騰が私を見て嗤う。

……いいだろう、その勝負、受けて立とうではないか。私だけだと思っていたら大間違いだ。他に三人もいるのだからな！……言っていてなんだか悲しくなってくるのは気のせいだと思いたい……

「……なんか、ややこしい事になった気がするのは気のせいかね……」

教経様、絶対に入り婿などさせませんからね？

あと、背中が煤けてますよ？教経様。

役満でも喰らいましたか？

蝶の如く～４８～（前書き）

本日の更新はこの一本のみになりそうです。先日に引き続き。

次の更新は明日になると思います。

ネタの神様なり偉大な文豪の霊的なものなりが降りて来てくれれば深夜に更新できるとは思いますが。

蝶の如く～４８～

～華琳　Ｓｉｄｅ～

『反董卓連合』。

麗羽も、あざといことをするものね。
自分が并州牧を兼ねる為に、手段を選ばず教経を雍州へ追いやった。
その後釜に座ろうとした自分を足蹴にした董卓が許せなかったのでしょう。『董卓は陛下を誑かして国政を壟断し、民を虐げている』などという苦しいお題目を掲げ、董卓を討伐しようというのだから。
……でも、その馬鹿のお祭りには参加させて貰うわ。この私、曹孟徳の名声を更に高める為にね。貴女は精々頑張って洛陽でも手にお入れなさい。国都だから意味がある、そう思っているのでしょうけれどね。貴女は、馬鹿だから。

皇帝でないものが、その臣下を討伐する為に追討の号令を発し、その号令に多くのものが付き従う。臣下が、その膝元で、軍事を専らに行う。最早、漢王朝はその鼎の軽重を問われる所まで来ている。
あとは、その鼎を奪い取るだけよ。その事に気が付いていない貴女が、天下に覇を唱えることなど出来ないわ。

……それにしても。
もし麗羽が正式にこの連合を結成すべく檄文を諸侯に発した時、教経はどうするのかしら。
桂花からの報告に拠れば董卓に多大な借りを作ったようだが、無事雍州へ移動し、瞬く間にそれを掌握して見せた。たったの３ヶ月で雍州全域を掌握したその手腕はやはり見事なものね。檄文が廻ってくる頃には、以前と変わらぬ精強な軍を発することが出来るでしょ

う。

その時、どうするか。

……反董卓連合に参加する。

恐らく、そうするでしょう。あの男は、参加した場合の利としなかった場合の害を、しっかりと理解できるでしょうから。恐らく、味方として逢う最後の機会になるけれど。

……愉しみだわ。

その後のことを想うと、とても愉快な気持ちになる。

あの男を、屈服させる。それは私にとって、とても甘美な想像だ。

想像に耽っていた私に、秋蘭が話しかけてくる。

「華琳様、平より書状が届いております」

「そう。これへ」

「はっ」

教経からの書状。一体私に何の用かしら……まぁ、分かるのだけれど。

きっと貴方は借りを返せと言ってくるのでしょう？

でも、この戦でも殊勲は譲れないの。分かるでしょう？教経。

そう思い、書状を見る。

「なっ」

「どう致しましたか、華琳様」

「いえ、何でも無いわ、秋蘭」

『二人きりで逢いたい。逢って話したいことがある。』

たった、それだけ。
護衛は当然。それは仕方がない。
だが、話をする時に余計な人間には居て欲しくない。
そう言っている。
……それは分かるが。
これでは、まるで逢瀬を望んでいる男からの恋文じゃない。確かにこの書き方なら誰に書状を奪われたとしても、そういう憶測を呼ぶだけで諸侯に警戒心を抱かせるものではないけれど。そこまで考えて書状を出しているのだとしても、もう少し違った書き方があろうというものだわ。

……試されているのでしょうね。この私の器量を。自分を信じて話をする気があるのか。その器量が私にあるのか。そういうことでしょう。私を甘く見ない事ね、教経。私は貴方を屈服させる女なのよ?

「秋蘭。この書状を読んで、それを成す為に準備なさい」
「はぁ」

秋蘭が書状を見て顔色を変える。

「華琳様。これは」
「聞く耳持たないわよ?秋蘭。教経は私を試しているの。彼を信じて話をしに来るか?とね。私は、あの男に負ける訳にはいかないのよ」
「……畏まりました、華琳様」
「お願いね、秋蘭」
「はっ」

護衛は秋蘭率いる三百人程度の部隊にしましょう。

教経もその程度の人数で来ると言っているのだから。

～星　Ｓｉｄｅ～

「主、正気ですか？」
「俺は至って正気だぜ？ついでに言うと元気でもある」

曹操に逢いに行く。二人きりで話をする為に。
そう言って、主は私に護衛を務めるように言いつけた。
何を話しに行くというのだ、あの女と。

「主、一体何を考えているのです」
「反董卓連合に如何にして勝つか、だ」
「その為に必要なことだと？」
「そうだ。どうしても曹操と話をする必要がある。奴さんに貸してある貸しを、返して貰うのさ」

……ふむ。私には全く想像できないが、主はどうやら曹操に何かさせるつもりらしい。

「曹操殿に何をさせるのです、主」
「勝つ為に必要なことを、だねぇ。曹操が俺の申し出を承けない限り、望み薄だからなぁ」
「……望み薄、ですか？」

負ける、というのか。
負ければ、皆無事では済まない。主も、無事では済まないだろう。
……主がいなくなる。それには、耐えられない。耐えられそうにない。

「あぁ。と言っても、多分星が想像している結果とは違うぜ？戦に負けて皆討ち取られるとか、そんなことにはならねぇよ」

私の内心を見抜いたようなことを言う。

「では、どういう事なのです」
「董卓が殺される。それが、俺たちの『敗北』だ。何せ俺たちは、董卓を助けることを目的として軍を発するンだからなぁ。極端な話だが、戦場で連合諸侯を皆殺しにしても、董卓が死んでしまったら俺たちの負けなンだよ」

「では『勝利』とは、董卓殿が生き残ること、ですな」
「あぁ、そうだ。そういう絵図を描いているンだよ、俺ぁ。戦場で何とか勝ったと言える状況なら、連合に参加した諸侯も一定の満足感を得られるだろうしな。名声も、それなりにだが得られるだろう」
「董卓殿を討ち取らんと欲している者どもがその程度で満足するでしょうか」

それは難しいだろう。そう思う。
董卓殿を殺せば、圧倒的な名声が得られるのだ。それを簡単に諦めるとは思えない。

「多分、曹操以外はな。奴さん以外の人間はこの先の戦乱の世を睨んで、何としても此処で董卓を殺しておく必要があるとは思っていないだろう。適当な口実があれば、その命など簡単に諦める程度のモンだろうぜ？
風と稟に今まで色々な諸侯を調べて貰っているが、董卓の命そのものを必要とし、それに執着するのは奴さん只一人だと思う。まだまだご自分の名声に満足していらっしゃらないようだからねぇ。だから、奴さんにはきっぱりと諦めて貰う必要があるのさ。そうなれば、俺が望む形で何とか戦を終わらせることが出来るだろうと思ってるンだ。
その為に、貸しを使う。これっきりだが、恐らく要求をのむだろう」

のまないのではないか？
主の考えは、少し甘いと思う。

「何故、諦める、と、そう言い切れるのです、主。そこが私には分かりませぬ」
「星、奴さんは俺の事を高く評価してくれているようだ。太原にも、そしてこの長安にも随分と奴さんが放った密偵がいるらしいからな

ぁ。風が言うことだ、先ず間違いないンだろう。常に警戒をしておく必要がある相手。そう思っているらしい。

……だが、その評価は少々高すぎる。今この時点の俺が出来ることは、それ程多岐に渉るものじゃない。勢力がもう少し大きくなった時に、徹底的に現状を洗い出せば済むだけのことだ。今から警戒するほどの脅威的存在じゃない。俺自身はそう思っているが、奴さんはそうは思っていないようだ。この際、その警戒心を利用させて貰う。

俺を警戒しているのなら、この先の戦乱でいつかの貸しを返して貰おうと言われる事の方が嫌なはずだ。何だかんだと言っても、董卓が曹操にとって脅威になることはあり得ない。あれは、董卓は、乱世におけるより治世においてこそその力を十全に発揮できる人間だ。それくらいのことは分かっているだろう。それに比べ、この俺は乱世でこそ力を発揮できる人間だ。自分で言うのも何だがなぁ、物騒なんだよ、その物の考え方がな。

その俺に『借りを返す』事と、『今此処で董卓を殺して更なる名声を得る』事。

その双方を天秤に掛けた時、奴さんは俺に借りを返しておく事を重く感じ、優先するだろう。自分自身の、俺に対する誤った、高すぎる評価に拠ってな。奴さんは乱世の英傑として名を揚げることを少しばかり先に延ばしてしまうことになる。その選択が奴さんにとって大きな痛手となるだろう事に気が付かないままに、なぁ。

だから、上手く行く。

それで俺は董卓を助けてやれる。俺がこうありたいと思う自分で居られるだろうさ。お前さんが好きだと言ってくれる俺でなぁ？」

そう主が嗤う。その笑貌は、自信に溢れている。

……こういう時、いつも思う。この人は、何という人だろうか。

天下にこれ程の武人はない。これ程の知謀の士は、捜せばいるだろ

うがそうはいないだろう。
だがそれが、唯一人としてこの世にある。今、この私の目の前に。
人主としてこれ以上望めないほどの器量を有して。切なくなるほど儚い夢をその胸に抱いて。
その武と智とを、己の願望を只満たす為だけに使うことを良しとせず、自分の信念を貫き通す為に使い切る。『見義不為、無勇也』。信念などではない、と言っていたそうだが、これを信念と言わずして何と言うのか。そしてその信念の、何と好ましいことか。

この人を育て上げた老人達は、この人の内に何を見出し、何をさせようと考えていたのか。主が暮らしていた世界は、戦乱など殆ど存在しない世界だと聞いたことがある。そんな中で、このような男はさぞ生きにくいことだろうと思う。
只の民の一人にしては、気宇が大きすぎる。器量が大きすぎる。主ではないが、自分の分限を弁えない人間は不幸になるのだ。それは、分限を越えた振る舞いをすると不幸になる、ということだけではない。その才能を精一杯に使って、本来そう在るべき自分という存在を実現できないということ。そのこと自体が不幸なのだ。周囲の者も主自身も、いずれその器量に見合った地位を望むことになっただろう。
その道は、果てしなく遠く、また険しいものに違いない。今この乱世にあってさえそれは容易なことではないのだ。平穏な世の中であれば、尚更に難しいことだろう。人から恨まれ、疎まれ、排除しようと思われて、その命を散らすことすら考えられる。
それでも猶、平家一門の老人達はこの人をこう育てたのだ。その一族の頭領として、その地位に相応しい男で在るべく。只ひたすらに、平家の頭領たれ、と。

『平家の頭領』。それがどれ程の重みを持つのか、私には分からない。

ただ、これだけは分かる。

この人は、時代の旗手足るべくして生まれ、育てられ、この世に顕れたのだ。

その男を主君に戴いている事に震えるような思いを抱きながら、主の笑貌を見つめていた。

～華琳　Ｓｉｄｅ～

書状で指定された場所へ行くと、既に教経がそこにいた。

様子からして、待たせてしまったようね。

「待たせたわね、教経」

「いや、それ程は待ってないぜ？」

「あら、それなら謝る必要なんて無かったわね」
「……多少とはいえ待ったンだ。社交辞令的には必要なことだろうが」
「貴方にそれが必要かしら」
「必要なんじゃないかね？」
そう軽口を叩き合う。
相変わらず、元気そうじゃない。
「で？何の用かしら。と言っても、借りを返せ、と言うつもりなのでしょうけど」
それ以外に貴方が私と話したいことなど無いでしょうからね。
「その通りだ。よく分かってるじゃないかね、俺の事を」
「それはそうよ。で、どうやって借りを返せ、と言うの？貴方は」
……さて、なんと言うかしら。
「……反董卓連合。知らないとは言わさねぇぜ？」
「それで？」
殊勲を俺に譲れ、などと情けないことを言わないでしょうね、教経？
「俺は、董卓に付く。その時に、借りを返して貰いたい」
……なんと言ったの？董卓に付く、と言った？
教経、貴方まさか借りを返す為にそうするのかしら。
私の見込み違いだったのかしらね。死ぬと分かっていて猶その道を選ぶほど馬鹿ではないと思っていたのだけれど。己の理想のために、

己を曲げることが出来ないなんてね。

「自分が何を言っているか分かっているの？死ぬわよ、貴方」
「何を言っているか分かっているし、死ぬつもりもないんだよ。生憎となぁ」
「ならば、勝てるとでも思っているのかしら？」
「あぁ、思ってるぜ？」
「……甘いわよ。勝てるわけ無いでしょう。貴方がそんなに甘い見通しをしているなんてね」

私がいるのだ。勝たせるわけがないじゃない。
この男は、大局を見誤った。それがこの男の死因になるだろう。

「ハッ、お前さんが今考えている様な意味で『勝てる』と言った訳じゃ無いンだよ」
「じゃあ、どういう意味なの？」
「俺の目的は董卓を生かすことだ。董卓が生き残れば、俺の勝ちだ」
「……それを諸侯が許すと思っているの？貴方」
「別に許して貰わなくても構わんよ。許さざるを得ないようにしてやるさ」

……何か、企んでいる。人の悪い笑顔で、心底面白そうに嗤っている。この男がそうすると言っているのだ。鉅鹿でもそうだったが、この男は出来ないことを出来るとは言わない男だ。策がある。それも、碌でもない類のものが。この顔がそう言っている。

「だが、どうやらお前さんだけは董卓の命そのものを欲しているンだろ？」
「よく分かっているじゃない。その通りよ。董卓の命が欲しいの。この私の名声を更に高める為にね」

「だから、貸しを返して貰おうと思ってな。董卓の命、諦めてくれないかね？それで、貸し借りは無し。そういうことにしようと思ってるンだがね？」

冗談ではない。桂花などはそう言うだろう。

だがこれから先の戦乱を考えると、今此処で借りを返しておく方が間違いなく得策なのだ。

……この男は自分の器量を低く評価しすぎている。

董卓の命など、大した価値もない。治世にあってはいざ知らずこの乱世においては、私の名声を高めることが出来る、ただその一点においてのみ意味を持つだけの、路端に転がっているただの石ころのようなものだ。けれど、教経は違う。この男が私の臣となれば、私は間違いなくこの手で天下を掴むことが出来る。そう思わせるだけの器量を持つこの男には、それこそ国士無双と呼ぶに相応しい価値がある。

自分の器量を把握しきっていないが為に、こんな所で私に対する優位を捨てるなんてね。貴方らしくもない。けれど、その過ちはしっかりと利用させて貰うわ。私の覇道の為にね。

「……いいわ。董卓の命、諦めてあげる。ただ、私の目の前で他の諸侯に殺されるようなことになっても私は助けないわ。それでも、貸し借りは無し。それで良いのかしら？」

「上等だよ、曹操。お前さん以外に、あれを殺させるような真似はさせんさ。それぐらいのことは出来るだけの器量があると自負しているからなぁ。お前さんだけが、俺の手に余りそうだったンだ。だからこその取引なのさ」

「言うものね。まあ、私も貴方だけが私と対等な存在たり得ると思っているけれど」

「……そうではないかも知れないがね」
「意味深なことを言うものね。確かに有力な諸侯や将来有望な者達はいるわ。でも、貴方と比べると全く話にならない。その気宇、その器量、その才能。貴方だけが私と対等な存在なのよ、教経」
「高評価には有り難く喜ばせて貰うことにするさ……董卓の件、頼むぜ？」
「ええ、分かっているわ。一度した約束を一方的に破棄するなど、私の誇りが許さないもの」

これで、話は終わり。
後は、貴方を屈服させるだけよ、教経。

「ところで、さっきから気になっていることがあるんだが、良いかね？」

先程までとがらりと雰囲気を変えて、そう話しかけてくる。

「何？答えられることならば答えてあげるわ」
「お前さん、俺の事を『平』と呼んでいたはずだが？」
「認めてあげたのよ。平家の主としての貴方ではなく、貴方自身をね。だから、『教経』と名を呼ぶことにしたの。別にどう呼んでも構わないのでしょう？」
「……高く評価されたものだねぇ、俺は。まぁ、いいさ。俺は気にしない。今後もそれで構わないさ、曹操」
「『華琳』よ」
「おい、お前それ真名だろうが」
「ええ、そうよ。私は貴方を認めているの。どうせ将来貴方が臣従した時に授けるつもりなのだから、今教えておいても変わりはないわ。そう呼びなさい、教経」
「言ってろ……まぁ、受け取ることにするさ、『華琳』。だが、そ

う簡単には従わないぜ？俺ぁ」
「ええ、愉しみにしているわ、『教経』。では、次は戦場で逢いましょう？」
「ハッ、逢いたくないもんだねぇ」
「あら、私が逢ってあげるのよ？もう少し嬉しそうにするのが男の甲斐性というものでしょう」
「生憎とそんな甲斐性は知らんねぇ。ま、互いに死力を尽くすとしようか、華琳」

そう言って、護衛の方へ向かって歩みを進める。
きっと貴方を臣従させる。それが私の覇道には必要なことだから。

蝶の如く～４９～

～風　Ｓｉｄｅ～

馬騰さんを臣従させたお兄さんはまだ策を講じているようで、星ちゃんに曹操さんと逢いに行く際の護衛を命じていました。曹操さんに貸してある貸しを返して貰う。そう言っていたそうです。

……馬騰さんがお兄さんに臣従することを宣言し、真名を交換した際に、お兄さんに不幸があったようですが、それはまた別の話なのです。

そろそろ、反董卓連合というものが結成されるかも知れないのです。稟ちゃんが冀州全域に放っていた細作の報告に拠れば、檄文の素案を既に作成し、あとは袁紹さんの号令を待つのみとなっているようです。ただ、まだもう少し号令を発することは出来ないでしょうね～。冀州でお兄さんが糧食を買い占めた。その事は、袁紹さん達の行動を大いに掣肘するのです。糧食も満足に用意していないものに誰が従うというのでしょうか。そういうわけで、まだもう少し、時間があると思うのです。この秋の収穫が終わるまでは、動けない。そう思っています。

「風、頼みがある」

考え事をしていた風に、お兄さんが話しかけてきます。

最近、お兄さんがより輝いて見えるようになりました。空に輝く星々も、お兄さんがいよいよその輝きを増して行くであろうことを示しています。占いが嫌いだと言いきったお兄さんには一言も言えないのですが。

愛紗ちゃんから聞いた、馬騰さんと話をした時に語っていた『平家の頭領』としての在るべき姿。

『見義不為、無勇也』。

論語に書いてあるその一節を口にし、義を見てそれを為すことが平家の頭領としてあるべき自分だ、と言いきったお兄さん。出遭った頃とも、常山で自分の業に思い悩んでいた頃とも違う、しっかりとした覚悟がある上で。その信念を貫く為に多くの人が死ぬ。それが分かった上で猶そう言ったお兄さんを見て、本当に強くなったものだと思うのです。揚羽蝶が羽化した。本当に、その言葉通りだと思うのですよ、星ちゃん。

「なんでしょうか、お兄さん」

「今、糧食は大量にあるんだよな？」

「はい。お兄さんが冀州で買い占めた糧食がありますから。十五万人程度の軍が５ヶ月行軍して漸く消費できるだけの糧食です」

「……そんな大量にあるのか」

「お兄さん、稟ちゃんがその手の事を適当にするわけがないのですよ。徹底的に叩きまくったのです」

「……そいつは災難だねぇ……」

流石に、お兄さんは稟ちゃんの器量がどれ程のものかが分かっているようなのです。

風はどちらかというと政向きですが、稟ちゃんは戦向きの軍師です。それこそ、『戦』と付くものに関して追随するものが居ないと風に思わせるほどの。そんな稟ちゃんが本気になって買い叩く。生半可な結果で済むわけがないのです。それも、大好きなお兄さんが考えた策なのです。あらん限りの知恵を絞って、これでもかとやったに違いないのですよ。

……最近、稟ちゃんはお兄さんのことばかり考えているようですし、

本当に憎いあんちくしょうなのです。

「反董卓連合に参加しそうな諸侯について、調べは付いたか？」
「それについても、既に調査済みです。こちらに纏めてあるのですよ、お兄さん」

そう言って書状を出す。
袁紹、袁術、公孫賛、曹操、孫策。
有力な諸侯、軍の中核を担うであろう諸侯だと、この5名なのです。

「じゃぁ、風。今からその糧食を、俺たちが戦うに必要とする分を残して反董卓連合に参加しそうな奴らの領土に隠せ。といっても、別に山の中とか地面掘り返して隠せって訳じゃ無い。懇意にしている商人から倉庫を借りておくなりなんなりして、とにかく馬鹿共に勘づかれない様にしておいてくれればいい」
「……」
「で、反董卓連合を結成して軍を進めて来、俺たちとぶつかって居るであろう正にその時に、その糧食を民達に配ってやるンだ。軍に糧食を徴発されているだろうから、きっと困窮しているだろう。だから当然、ただでな。その上で、こう言ってやるのさ。
『董卓様と平教経様から、戦に苦しみその日の糧食にも事欠いている民達へ、このようなことになる前に命令を受けて、わずかではあるが心ばかりの贈り物をさせて貰いに来たのだ』とな。そして更にこう言わせろ。
『ところが袁紹はその二人を、討伐しようという。この通り、私はしがない一官吏でしかないが、多少は世の中が見える人間だと思っている。私には、本当は袁紹殿が国政を壟断するつもりなのではないのか、いや、もっと言ってしまえば、皇帝陛下を弑し奉るつもりなのではないか？と思えてならぬのだ。余り大きな声では言えぬがな。そうでなければ、このように民を慈しむ心を持つ方々をあの様

にあしざまに罵って討伐しようとは思わぬのではないか。』とねぇ。

……さて果て、領民共は何と思うかな？あの糞野郎共め、我々は騙されないぞ！とでも思うのかねぇ……ククク。

人はな、風。例え与太話だと思っても、此処まで印象の強い話を忘れることは出来ないだろうよ。そんなときにその噂に結びつくような話が耳に入ったとしたら？

それになぁ、人間が人間を殺す事、その事を心から愉しんで戦に参加する奴なんて滅多にいないんだよ。彼らが人を殺すには、大義が必要なのさ。自分たちは間違っていない、相手が間違っている、だから相手は殺すしかない、殺してもしても構わない。そう考えて精神的な安定を保っているのさ。では、その大義を目の前からいきなり取り上げてやったとしたら？

……想像するだけでも愉しいとは思わんかね？」

……えぐいことをするものです。碌でもない事を考える人です。ですが、有効でしょう。はっきり分かります。自分たちに、自分が大変な最中糧食を分けてくれるような人間を悪い人間である、と断じて動ずることのない人間など居ません。そしてお兄さんの言うとおり、その噂を否定したとしても、その耳に残るのは疑いないのです。そんなとき、袁紹こそ悪虐であるという話を噂として流したらどうなるか。よその領民である自分たちに気を遣ってくれるような人を悪虐な者と共に自ら進んで討伐しようという領主を戴きたいとは思わないでしょう。

その関係が良好であれば、討伐軍からの離脱を願い、その関係が悪化しているならば、暴動、最悪は一斉蜂起することも考えられます。そのような国元の状況が伝わって、果たして継戦出来るでしょうか。否。断じて否。そのようなことは出来ないのです。継戦すれば、国を失うことに繋がりかねないのですから。

それにしても、良くもまあこんな事を思いついたものです。戦を行い、戦線を膠着させ、その間に国元に流言を飛ばして動揺を誘う。それは、風も考えていましたし、その準備は万端です。ですが、この案であれば一気に厭戦の風潮を蔓延させることが出来ます。国元にいる家族から前線で戦う息子に手紙を送らせて、実態を知らせる。その一手だけで連合軍を千々に打ち破ることが叶うでしょう。軍とは生き物なのです。士気の揚がらない軍は動きの遅い亀のようなもので、こちらの動きに反応が遅れ、打ち破るに容易であるに違いないのですから。

「お兄さん、お兄さんは最初からこれを想定して糧食を買い集めていたのですか？」

もしそうだとすると、お兄さんには軍師など必要ないのです。

「馬鹿だな、風。そんなことあるわけ無いだろうが。あははは」

……そんなに笑うことも無いと思うのですよ。お兄さん。

「それは穿ちすぎだ。俺はそんな大層な頭をしちゃいないンだよ。大体、反董卓連合なんて最初はないだろうと思ってたンだぜ？知っているだろうに」

「そうだったのです」

「ははは。風、俺を評価してくれるのは嬉しいが、きちんと俺自身を見てくれよ？天の御使いでも何でも無い、ただ一人の男である俺を。他の人間ならいざ知らず、風達にだけは俺自身を見ていて欲しい」

……お兄さんはいつもこうやって女を口説くのです。

本人にはその自覚がないようですが、全く困ったものなのです。

『風にだけは、俺自身を見ていて欲しい』

……わかっているのですよ、お兄さん。風は、お兄さんのこと、いつも見ているのですから。例えその場にいなくても、風の心の中にはいつもお兄さんが居るのですよ。お兄さんの心の中には、風の他にもたくさん女の子が住んで居るみたいですが。

何ですか？一文字抜けている気がする？気のせいなのですよ。

～雛里　Ｓｉｄｅ～

私は、ホウ（广＝まだれに龍）統。字は士元。真名を雛里。
友人である朱里ちゃん、諸葛亮、字は孔明、真名を朱里と言いますが、その朱里ちゃんと共に平原の相となっている桃香様にお仕えしています。
あわわ、桃香様とは、姓は劉、名は備、字を玄徳。真名は桃香。前漢の中山靖王劉勝の末裔であり、賊に追われていた朱里ちゃんを助けて下さったお方です。桃香様に命を救われた朱里ちゃんが私を呼び寄せたことで、私も桃香様にお仕えすることになりました。
朱里ちゃんを救ってくれた恩義と、桃香様が抱いている理想を実現させる為にお仕えしているのですが……

「お姉ちゃん、鈴々と一緒に遊びに行くのだ！」

これは、鈴々ちゃん。
姓は張、名は飛、字を翼徳。真名は鈴々。桃香様の義妹で、いつも元気な女の子。

「じゃぁ、町に行って遊ぼっか？」
「……あの、桃香様。政務をやって頂かないと、その、困ります……」
「……あ～、あはは。……後でやるから、ね、雛里ちゃん。お願い！この通り！」
「……必ず、ですか？……」
「うん、絶対！」

本当は駄目なんだけど。

「……じゃあ、必ず後でやってください……」

「有り難う！雛里ちゃん！」

そう言って桃香様は鈴々ちゃんと執務室を走って出て行きます。

今の私達は、冀州牧である袁紹さんの客将、という立場になっており、決して安心できる立場ではありません。いつ袁紹軍に吸収されてもおかしくない。そう思います。

ですが桃香様は余り人を疑わないお人なので、袁紹さんのことを信じています。袁紹さんは、その、頭がちょっと……、な人なので、それ程警戒する必要はないと思いますが、配下の顔良さんは桃香様を都合良く利用しています。その配下である私達も、何かにつけて利用されているのが現状です。并州を受け取りに行く際にも、朱里ちゃんが連れて行かれ、引き継ぎ資料の内容などを精査させられました。

このままでは、桃香様はご自身の理想を実現させることが出来ない。

私と朱里ちゃんは、そう結論付けています。

しかし、桃香様にその事を申し上げても、袁紹さんは分かってくれているので大丈夫だ、と仰ってまともに取り合って頂けません。一度、袁紹さんの真意を伺った際に満足できる回答を得てしまった為です。質問をする前に顔良さんに何かを耳打ちされた桃香様は、『華麗なる袁紹さん』は民の幸せの為を考えて日々過ごしているのか、とお伺いになり、袁紹さんは当たり前だと答えたのです。そういう訳で、桃香様はそれ以降全く袁紹さんを疑わなくなってしまいました。

立派な理想を抱いていらっしゃるのに、それを実現させる為の努力を少々怠っておられる。そう思ってしまいます。

「雛里ちゃん、ちょっと良いかな」
「あ、朱里ちゃん。どうしたの……？」
「これなんだけど」

反董卓連合結成の檄文。
その素案が目の前にあります。

「此処に書いてあること、本当なのかな？」
「……分からないけど、本当のことなら助けてあげないと」
「うん。そうだよね」
「うん……」

これから先どうなるかは、分からない。動乱の時代がやってくる。
それは間違いないです。その中で私達がどう生き残っていくのか。
それはその時にならないと予測できません。
でも、桃香様の理想を守る為に出来ることをやっていくしかありません。朱里ちゃんも私も、桃香様の理想は尊いものだと思うから。

その為に、必ず袁紹さんの配下から抜け出す。このままでは、理想は死んでしまう。配下から抜け出す為に必要なことは、袁紹さんが自分のことしか考えていないことを桃香様に分かって頂くことです。
……朱里ちゃんと策を考えないと。桃香様の目を醒ます為の、策を。

蝶の如く～５０～（前書き）

馬騰の真名、碧（へき）。違う読みだと「みどり」。
翠（すい）も違う読みだと「みどり」。

作者の頭だとこれが限界です・・・

いつの間にやら評価が２，０００になってました。
ユニークは、一日約３，０００名。

このような妄想を読んで頂き、有り難う御座います。
今後とも、宜しくお願い致します。

蝶の如く～５０～

～翠　Ｓｉｄｅ～

あたしは、姓を馬、名を超、字を孟起。真名は翠。
西涼を根拠に威勢を張る、馬騰の娘だ。
平教経から長安へ招待されたお母様が、今日帰ってくるという連絡を受けて迎えに出た。

雍州牧　平教経。『天の御使い』。
あたしでも知っている、『天の御使い』の噂。
曰く、この世界に安寧をもたらすものである。
曰く、その武は世に冠たるものである。
曰く、その智は世を遍く治める事が出来るものである。

その噂を聞いた時、そんな奴いるはずがない、何かの冗談だ、と思ってた。
その平教経がお母様を長安に招待したい、と言ってきた時、あたしは行くことに反対した。得体の知れない人間の招待を受ける事なんて無い。何を考えているのか、分かったものじゃない。そう、主張した。
そのあたしに、お母様はこう言って長安へ訪いを入れることにしたのだ。

「お隣さんからの折角のご招待だし、為人を知る為の良い機会になるだろう。何より、私は暇なんだ、翠。だからちょうどいい。御遣い見物と洒落込むとするさ」

……お母様らしいと思うけど、主目的が暇つぶしなのはどうかと思

うんだ……

まあ、結果としてお母様は無事に帰ってきたから、あたし達は一安心なんだけどさ。

『天の御使い』の為人って、どんなものだったんだろう。

「ではな、馬騰。糞共が集結する前に、必ず檄文が回されてくるはずだ。その檄文を受け取ったら、長安へ来てくれ、軍勢を引き連れてな。特に騎馬を出し惜しみするな。此処で余力を残して戦うなど、あり得ない話だからな。糧食については心配しなくても良い。こちらで全て賄えるだけの量がある」

雍州と涼州の境界までお母様を護衛して来た男が、お母様にそう言った。傾いた格好だ。浅葱色にダンダラ模様の羽織を着ている。態度や言葉遣いからみて、この男が平教経なのだろう。

それにしても、お母様に命令しているかのような物言い。お母様は何故こいつを殺さないんだろう。こういう失礼な奴は大嫌いなはず

なのに。

「……わかったけど、糧食に関してはそこまで甘えるわけには行かないだろうさ。余力を持っておく為にも、私達も通常通り用意していくよ。あと、私の真名、教えただろう？『ご主人様』。それを呼ばない、というのは侮辱以外の何物でもないよ？」

……？

『ご主人様』って……お母様、それって……え？どういうこと？

「……済まなかったが、その『ご主人様』っての、何とかならねぇのか、碧。呼ばれる度にこう、むず痒いってぇか、なんてぇか。とにかく据わりが悪い」

「好きに呼んで良いって言ったのはアンタだよ？今更それを無しにするなんて、ねぇ？」

「ちっ……分ぁったよ。俺の負けだよ……ったく。何でこんな面倒なことになってるんだよ……」

そう言って頭を掻いている。お母様がそう呼ぶ事に決めていて、コイツが呼ばせている訳じゃ無いみたいだ。

「で、ご主人様。アンタに紹介したかったのがこの娘さ。私に似て、いい女だろう？」

「ななな何言ってるんだよお母様！私がいい女なんてそんなわけ無いじゃないか！」

「いい女だねぇ、碧。確かにお前さんが自慢したくなるのはよく分かる」

「★■※@▼∀っ！？」

いい女って……。ニヤニヤするわけでもなくいやらしい目で見てく

るわけでもなく、自然な顔で当たり前のことのようにそう言い放つ。
……コイツ、本当にそう思ってる……？でもあたしががさつな女だって知ったらきっとそんなことをも思わなくなるに違いないよ。

「ほら、翠。ご挨拶しな。アンタのご主人様になるんだから」
「……はぁ！？何言ってるんだよ、お母様！」
「そのままさ。アンタのご主人様、はっきり言えば旦那様になる男だ。そう言ってるのさ」
「何なんだよ、それ。あたしは結婚なんてまだしないし、その、結婚は好きな人とするもので、そう言われても困るよ、お母様」
「……翠、アンタ、自分が馬家の跡取りだってこと、忘れてるのかい？」
「えっ……？」
「馬家の頭領の伴侶として、相応しい男でないと私は認めないよ。あんたが好きになった男だろうと、どうしようもない男だったら私が殺す。そう言ってきたはずだ」
「……それは……そうだけど……」
「だから、この男と結婚して貰うよ、翠。それが、一族の長としての努めだ」
「……」
何も言い返せない。けど、知りもしない男と結婚なんて絶対に嫌だ。

～教経　Ｓｉｄｅ～

目の前で昼ドラ開幕。俺は視聴者だ……って訳ないんだよねぇ……。
馬超に睨まれてるしねぇ。凛々しい顔してるな、眉がちょっと太いけど。ダンクーガに分けてやって貰えないかね？
それにしても、俺の目の前でする話じゃないだろうがよ、お前さん。
そう思って碧を見る。
……立派に一族の長の顔をしてやがる。本気なのは分かるが、ねぇ。
馬超、暗い顔してるぜ？ムンク的な表情まで後もうちょっとって感じだ。

「……碧、ちょっと待て」
「……何だい、ご主人様」
「お前さん達一族の方針について、余りとやかく言うつもりはないがね。取り敢えず、当事者の一人として、いくつか意見させて貰っても構わんかね？」

「ああ、構わないよ。何だい？」
「先ず第一に、お前さんが言っていることは正しいが、馬超が言っていることもまた正しいだろうさ。一族の為に自分を犠牲にすることは必要なことだろうが、自分を殺しすぎて馬超が変質してしまったら意味がないんじゃないかね？今のこの馬超に、お前さんは後事を托そうと思っていたんだろう？
第二に、いきなり顔を付き合わせた人間のことをよく知る機会も与えずに、勝手に決めるのは良くないねぇ。現状で強引に事を進めて結婚させたとして、夫婦仲が上手く行くと思うかね？そんな中で子が出来たとして、どう育つと思うね？望まれて生まれてきたわけではない自分という存在を自覚し、歪な人格を形成してしまった結果、自分を必要としない馬家そのものを無くしてしまおうと考えるようになることだって十分に考えられるんじゃないかね？馬家の為の決定が、馬家を駄目にすることになっちまうねぇ。
そして最期に、俺の意志を無視して話を進めるのが一番の問題だねぇ。言ったとおり、俺は馬家の頭領になんてならないぜ？俺は平家の頭領だ。生まれた時からそう言われて育ってきたし、それ以外の者に今からなるなんて俺自身が出来ないのさ。
だから、そうやって馬超と俺の意志を無視する形で、本人達にとって重大な問題を勝手に決めるのは止めろ、碧。飽くまで無視する、というなら、俺にも考えがある」

そう言って、碧を見る。剣呑な雰囲気だ。

「……どうするってんだい？」
「実力行使さ。俺より強いンなら、言うことを聞いてやっても良いんだねぇ。弱者は強者に従うものだからなぁ、おい」
「へぇ、私とやり合うってのかい？」

そう嗤って言い放つ。

……上等だよ、碧。一刀流を舐めくさってるのか？その舌ぁ切れちまうぜ？

殺気をぶつけてやる。全力全壊だ。あ、これだと魔法少女だな。スターライトブレイカー的に考えて。全力全開だ。

馬騰は、愛紗や星よりも強い。殺気の質が少しばかり高い。研ぎ澄まされた、抜き身の日本刀。そんなイメージが頭に浮かんでくる。剣を使うのは分かっている。星にも言ったが、剣を修めた人間は武芸百般に通じると思っておいた方が良い。

……手加減が出来そうにないな。峰打ちするしか方法がない。ったく、戦の前に怪我させるとかありえねぇのに。だが、愉しいなぁ？碧。

～翠　Ｓｉｄｅ～

平教経とお母様がにらみ合っている。
お母様は、本気だ。その殺気が、あたしの肌を打つ。けど平教経は全く意に介していないみたいだ。しかもコイツから感じる殺気は、お母様以上だ。

平教経は、嗤っている。心底愉しそうに。お母様を前にして、愉しいと思うなんて。
お母様の顔を見る。その額には、汗が滴っている。
……嘘だろ。あのお母様が。まだ一合も合わせてないのに、気圧されるなんてあり得ない。

そのまま二人はにらみ合っていたが、お母様が殺気を納めた。

「……なんだ、碧。止めちまうのかよ？」
「……殺すつもりだっただろう、アンタ」
「……いンや、そんなことはないぜ？腕一本、貰おうと思ってた位だ」
「……私の負けかな。アンタにどう斬りかかっても、膾斬りにされる自分しか想像できなかったよ」

コイツ、お母様に戦わずに勝つなんて。

「じゃぁ、言うことは聞いて貰うぜ？」

あ。そうだ！これであたしは結婚しなくても済むんだ！

「全く。まあ、そういう話だったからねぇ。今は仕方ないか。ただ、アンタに聞きたいんだけどさ」
「あぁ？」
「翠のこと、気に入らなかったのかい？」
「いんや。気が強そうだが別嬪さんだし、先の言動からして貞操観念が強い純朴な可愛い女の子だと思うぜ？ちっとがさつなところがあるんだろうし、そそっかしそうだけどな。頭を使うのも苦手そうだ」
「★■※@▼∀っ！？」
「よく見てるじゃないか。なら、何が嫌だったのさ」
「言ったぜ？馬超の意志を無視するな。俺の意志を無視するな。俺は平家の頭領にしかなり得ない」
「折角据え膳用意してやったんだ、食べるだけ食べればいいじゃないか」
「それは俺にとっての話だろうが。馬超の意志を無視してそういうことにはなりたくないんだよ。力尽くでものにするなんてのは、最低の屑がやることだ。恋愛ってのは、もっと愉しむものなのさ。付かず離れず、切なくなるような気持ちを抱いて相手を眺めているのが一番愉しいと思うぜ？一番幸福で、一番切なくて、ねぇ」
「要するに、翠の為、かい？」
「……それもあるが、俺の為だな。董卓を助ける、と言った時に言っただろうが。俺は俺でありたいんだよ。自分が誇れる人間で、な。俺が誇りに思える俺は、こういう時に相手の気持ちを忖度せずに自分本位でやりたいようにやる人間じゃない。だからやらないのさ」
「結果として、翠の為じゃないか。流石女誑しだ。一流は違うねぇ。あははは」
……私の為……？
「……うるせぇよ」

平教経は照れているみたいだ。さっきと全然雰囲気が違う。結構愛嬌がある顔をしてるな。

「それにな、俺はその手の事に困ってないンだよ。だから手は出さないンだ」

「……あぁ、愛されていたものねぇ。私がアンタをご主人様って呼んだ時これ以上ないほどによく分かったけど……」

「……だろうねぇ。まぁ、その愛の伝達方法が拳だったけどな……ハハハ……」

？何があったのか分からないけど、とにかくコイツは悪い奴じゃないみたいだ。

「けど、翠。ご主人様のことは『ご主人様』って呼ばなきゃ駄目だからな？」

「な、なんでだよ！そんな恥ずかしいこと言えるわけ無いだろ！？」

「涼州はコイツに従うのさ。臣従するんだ。だから、そう呼ぶのさ。それ以外は認めないよ。これは馬家の頭領としての私の命令だ」

「そんな」

「待てよおい、嫌だって言ってンだろうが！特に俺が！」

……コイツ、お母様は良くてあたしが駄目ってどういう事だよ。そりゃお母様に比べたらあたしはがさつだし頭も良くはないし、体つきだって中途半端だけど、そんな嫌がること無いじゃないか。

「……わかったよ、お母様」

「何が分かったんだい？」

「お、おい、馬超。嫌なンだろ？だから止めといた方が良いと思うぜ？」

うるさい！此処で引いたら涼州魂が廃る！

「アンタは黙っててくれよ、『ご主人様』」

「……はい」

「あたしは、コイツのこと、『ご主人様』って呼ぶ事にする」

「あははは、もう呼んでるよ、翠。見なよコイツの顔！あははは！」

「……これ愛紗に知られたらどうなるんだよ俺……あれ以上は無理だぞ、物理的に考えて……」

「とにかく、これから宜しくな、ご主人様」

「……もう好きにしてくれ……」

後日ご主人様と話をした時に、お母様に上手く乗せられたって事に気が付いたのは、また別の話だ。

最初っから、そのつもりだったんだろうな、お母様は。そう言うとご主人様はげんなりとした顔をしていたけど。

まあ、とにかく、別の話なんだ。

蝶の如く～51～

～稟　Ｓｉｄｅ～

『反董卓連合結成の為、袁紹が檄文を発した』
細作から、その報告を受けた後直ぐに、檄文が送付されてきました。
随分と時間が掛かったようですが、当然のことです。
最早袁家の領内には満足に糧食が残っていないでしょう。そうなるように、私が仕向けたのですから。当然のことです。

「主、反董卓連合への参加を呼びかける檄文が廻ってきました」
「漸く、か。随分時間が掛かったみたいだなぁ？糞が。まぁ、それもこれも稟のお陰だ」
「いえ、そのようなことはありません」
「そのようなことがなかったらもっと早くに反董卓連合は結成され、為す術はなかっただろうさ……稟、有り難うよ。お前さんが徹底的にやってくれたからこそ、この現状がある」
「……有り難う御座います」

その言葉に、嬉しく、そして恥ずかしくなってしまう。
いつまで経っても、慣れない。慣れないどころか、酷くなっている気がする。教経殿に褒められると、それこそ天に昇るかのような気持ちになる。もう、抜け出せないと思う。この人から。

「……いいねぇ。俺は眼鏡属性持ちなんだよねぇ。そして、麦茶が好きなんだよねぇ……」

なにやらぼそぼそと言っていますが、どうやら麦茶をお好みなのは分かりました。

……今度部屋においでになった時の為に、準備をしておかなくては。

「お兄さん、へぶん状態なのはわかりますが、お話を進めましょう」
「俺はあんな顔してないだろうが！……風、どこでそんな言葉知ったんだ？」
「分からないのです。風は」
「『電波を受信しただけですから』、だろ？」
「む～」
「ははは。こちとらお見通しなんだよ！」
「教経様、話が進まないので少しおとなしくしておいて頂かないと。分かりますよね？」
「……はい」

流石は『対教経殿最終説教兵器』、愛紗です。あっという間に陥落させました。我が軍は圧倒的です。
悪ノリする前に叱る。母親のように見えますね。

「では、今回の戦の目的を那辺におくのか。教経殿のお考えをお伺いしたいのですが」

皆承知の上でしょうが、こういった事は何度確認しておいても良いものですからね。それを見失って敗亡した勢力の何と多いことか。
私達は、そうはならない。その為に必要なことなのですから。

「戦略目的は、董卓の生存だ。今回だけでなく、今後に繋がる形での、な」
「分かっているのですよ、お兄さん。それでは戦術目的は、どのようなものになるでしょうか」
「？水関、虎牢関。この2つの関で連合軍と対峙し、奴らを奔命に疲れさせる。その間に策を以て連合軍の軍兵の士気を低下させる。

その上で、馬鹿共に軽くお仕置きをしてやる。それが戦術目的になるだろう。

そうしておいて、？水関、虎牢関だけでなく洛陽までも放棄して馬鹿共にくれてやり、俺たちは長安に帰る。函谷関に蓋をして、出来るだけ多くの人間を引き連れて、だ」

「主、なぜ撤退するのです。なぜ洛陽を放棄するのです。親董卓連合の結成。潤沢な兵糧を用いた策。そして、曹操との密約。これだけの要素が揃っていて、負けることはありますまい。連合軍を殲滅することすら可能であるこの状況で、なぜ洛陽を放棄して撤退などしなければならぬのです！」

「教経様、星の言う通りです！教経様の策により、此度の戦の勝ちの目は多くなりました。なぜ勝てないなどとお考えになっておられるのです！」

星と愛紗は教経殿にそう言い募っている。

風は、静かに目を閉じている……寝ていないでしょうね？

「愛紗、誰が『勝てない』、と言ったのかね？」

「今、教経様がそのように仰ったではありませんか」

「俺は『撤退する』と言ったンだ。『勝てない』とか『負ける』とか言った覚えはないねぇ」

「……そう言われれば、そのような……」

教経殿が私達を眺める。

私の顔を見て、笑いながら頷いている。私が教経殿の考えていることを理解している事が、分かっているようだ。

「稟は分かっているようだが、説明が必要だろうからねぇ。俺から説明してやるさ。

先ず、星。今回の反董卓連合の糞共が目的としていることは何だと

思う」
「董卓殿の命を頂戴することですな」
「そうだ。それが袁紹の馬鹿の主目的でもある。だが馬鹿の目的は、それだけじゃないんだねぇ。風？」
「……洛陽の占拠とそれに拠ってもたらされる皇帝陛下の身柄なのです」
「正解だ。それが副次的目的だな。その二つが奴さん達の戦略目的なのさ。
星と愛紗が言った通り、今回の戦闘で俺たちが負ける、ということはほぼ無いと思っているンだよ、俺はな。だが、それは俺の軍が勝つ、というだけのことで戦略目的を完全に果たしたと言えないものだ。確かに、戦に勝てば董卓の命を救ってやることが出来る。それは間違いない」
「では、何故教経様は」
「まぁ、待てよ、愛紗。俺のお話はこれからだ。
董卓を殺せず、国都洛陽を押さえることも叶わなかった馬鹿は、ずっと俺と董卓に対する恨みだけを募らせていくことだろうねぇ。俺は兎も角、董卓に対して執着心を持たせるのはまずいンだよ。手段を選ばず暗殺に出ることもあり得るわけだろうが。
古来、暗殺というものが成功してきている理由はな、暗殺ってのは狙う側で全てを決定する事が出来る為なンだよ。いつ、どこで、どうやって。その全てを、暗殺を仕掛ける側が決定できる。どんなに警戒しても、それを全てはね除け続けることは難しい。二度三度と失敗して諦めてくれればいいが、折角連合を結成したのに目的を何一つとして果たすことが出来ず、自分の風評を地に落としてしまったあの馬鹿がそう簡単に諦めると思うかね？きっと俺と董卓が死ぬまで、その命を狙い続けることになるだろうねぇ。
この一戦で袁家を根絶やしにすることが出来ない以上、戦略上の主命題である董卓の命を今後董卓が自然死するまで確保してやる為に

は馬鹿の為に代替的行動を用意してやることが必要なンだよ。代替的行動があれば、それによって主目的を満たせなかったという不満は解消される。この場合の代替的行動、それは、副次的目的である洛陽の占拠だろう。それを行うことで、憎い董卓を殺す、という妄執に似た主目的への執着から解放されることになるだろうよ。そういう訳で、洛陽の放棄は戦略的勝利を掴む上で絶対に必要な要素なンだ。

……分かって貰えたかね？俺は勝てないんじゃない。敢えて『勝たない』んだよ。表面的にはな。実質は大勝利なんだがねぇ……ククククッ」

……教経殿は、人の心理をよく理解している。

何事に付けても論理的な考えを求める教経殿は、人の心の働きについても独特の理論を持っている。夜話として幾度も討論したことがあるが、事人の心の働きについて、私も風も教経殿に全く歯が立たなかった。この人の、人の心の働きについての考察は深すぎる。意識と無意識。幼少時の体験からもたらされる精神的な制約。人の精神が持つ、自己防衛的忘却能力。そういったことについて、論理的な説明をされたことがある。この人はまだ、こんなに若いのに。どうやってそのような価値観や考え方を身につけたのか、本当に不思議だ。

「……成る程、確かにそうかも知れません。稟は分かっていたのか？教経様がこのように考えていることを」

「代替的行動云々という形で考えていた訳ではありませんが、一定の満足感を与える為に必要な行動として洛陽を占拠させることを考えておられるであろうとは思っていました」

「……ふむ。愛紗よ、どうやら我々では主達には及びも付かないらしい」

「……全くだな。偶に自分の無学さが恨めしくなる」
「そうはいいますが、星、愛紗。私と風は教経殿と共に戦場で戦う事など出来ません。こういった部分でのみお役に立てるのです。同じようなものだと思いますが」
「稟ちゃん、そんなことはないのですよ」
「風？」
「稟ちゃんは昨晩もお兄さんのお役に立ったのですよ。性的な意味で」
「ふ、風！」
「ああ、そうだな。全く、最近稟はいやらしいからな。嬌声が私の部屋にまで聞こえてくるのだ。何とかして貰わないとな」
「せ、星まで！な、何を言っているのです！」
「確かに、良く聞こえてくる」
「愛紗！」
「稟ちゃん、昨晩のお兄さんは、それはそれはいやらしかったようなのです。稟ちゃんのそのいやらしい体を、お兄さんはどのように貪ったのですか？その胸をそのように触って貰ったのか、風は興味津々なのです」

ど、どのようにって……その、髪を下ろして教経様を誘って……いつもとは違って少し荒々しくて……それでもその、優しくて……逞しくて……教経殿の胸板……背中にひっかき傷を作ってしまって……教経殿はその、何度も何度も私の……

「……おい、お前ら。こうなるのが分かっていてやりやがっただろうが」
「いやぁ、主、愛されておりますなぁ」
「風、どうなるのだ？これから」
「そういえば、愛紗ちゃんは見るのは初めてなのですよ。平家名物が見れるのです。愉しみにしておくと良いのですよ」

「おい風。議場が使えなくなると思うんだが？前回の覚醒した稟の発射現場を見る限り」
「発射？」
「まぁまぁ、愛紗よ。愉しみにしておけ」
「はぁ」
「……教経殿は何度も私の胸を力強く揉みしだき……の、教経殿、止めて下さい！……あ……わ、私は嘘を吐いていました。その、続けて下さい……続けて欲しいです、教経殿……」
「……お兄さん、昨晩はお楽しみでしたね」
「どこの宿屋だよ。というか、今すぐ止めさせろ！恥ずかしいだろうが！実況させんな！これを当事者の一方である俺に聞かせるとかどんなプレイなんだよ！」
「愛紗、今すぐ主を羽交い締めにしろ！」
「分かっている！」
「だぁ～、お前ら止めてくれ、こんな恥ずかしい思いさせるなぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
「どうした大将！」
「丁度良いところに清掃員が来やがったのです。そこに立っていると良いのですよ。もう少しなのです」
「はぁ？何が？というか、修羅場中だったのな。悪かったな、大将。誰かに刺されて死んでくれ」
「テメェ！ダンクーガ！ぶっ殺すぞ！」
「あぁん！なんだコラやってみろ！」
「時間になったのです」
「うむ。三番線から稟が発射しますぞ、主」
「ブーッ！」
「おわっ！……な、なんじゃぁこりゃ～！」
「……ダンクーガ、前にも言ったがお前にはその役どころは無理なんだよ。当然、探偵も駄目だ。アレはかっこいいからな。お前は、お前だけは認めない！」

「テメェ、また訳の分かんねぇこと言いやがって！というか、これ大丈夫なのかよ！大将、これ死んだんじゃないのか？」
「馬鹿め！稟を舐めるなよ！？こんなモン序の口なんだよ！」
「これで序の口かよ……俺だったら死ぬぞ、この血の量」
「断空我よ、それは皆同じだと思う」
「だから俺は断空我じゃないって言ってるだろうが！」
「……これは凄いな」
「これが平家名物血の池地獄なのですよ。地獄巡り、愉しいですよ、愛紗ちゃん」
「なんだそれは？有名な観光地か何かなのか？風」
「知らないのです」
「……いつも通りの風か。所で、稟がぴくぴくしているが、大丈夫なのか？」
「大丈夫なのです。この程度のことは、日常ちゃめしごとなのです」
「風、それは茶飯事な」
「テメェ、待ちやがれ！」
「主、断空我遊びは愉しいですな！」
「だろ！今度また長安名物断空砲ぶっ放してやろうと思ってるンだよ、一緒にどうだ？」
「愉しそうですな。その際は是非」
「テメェ！この間太原の餓鬼共に棒きれでフルボッコにされたぞ！あれ、テメェがけしかけただろうが！」
「そんなことはない。お腹をすかせた餓鬼共が菓子が食べたそうにしていたから、それを振る舞ったら喜び勇んでお前を殴りに行っただけだ」
「俺が聞いた順番と逆なんだよ！」
「あぁ、お前は馬鹿だからなぁ」
「成る程、確かにそうですな」
「このアホ夫婦が！思い知らせてやる！やぁぁぁぁぁってやるぜ！」
「それにしても、城壁が丈夫で良かった」

「そうなのです。いちいち修理をしなくて大助かりなのですよ」

……どうでもいいですから。誰でも良いですから。誰か、トントンをお願いします。

その、気が遠くなってきましたもので。

「この宝？が目に入らぬか～」

……風、それはもう前回使ったネタで、しかも全くその流れではないので何が何やらわかりませんよ？

蝶の如く～52～（前書き）

明日からお仕事再開。
更新速度が落ちると思います。

今日中にどこまで書けるかなぁ・・・

蝶の如く～52～

～詠　Ｓｉｄｅ～

「賈駆っち、大変や！」

平教経たちを見送ってからほぼ半年が経過した頃、霞が血相を変えて執務室に飛び込んできた。いつもおちゃらけた霞がここまで血相を変えて走り込んで来るなんて、余程のことがあったに違いない。

「どうしたのよ、霞」

「今アンタんとこの細作から報告があったんや！

袁紹を中心に、諸侯が連合を結成して軍勢を集結させとるで！狙いは月の討伐みたいや！」

「な、なんですって！」

ボクの諜報網では、事前にそんな動きは見えなかったわ……いや、ボクの諜報網に掛からないように周到に準備してきた、ということね。でも、今の今まで気が付かないなんて！

「それで、その規模は？」

「まだよう分からへんけど、約二十万の軍勢になるみたいや。いろんな奴が参加を表明して続々と集結しつつあるで。袁紹、袁術、公孫賛、曹操、孫策、孔チュウ、劉岱、張バク、喬瑁、鮑信……」

「……もういいわ。聞いているだけで気が滅入ってくるから止めて」

二十万。董卓軍と霞達官軍を糾合しても、十万が限度。

その兵力差は十万。しかも、ボク達は何の準備も出来ていない。正に青天の霹靂なのだ。こんなこと、想像できる方がおかしい。これ

じゃ、どうやっても……いえ、諦める訳にはいかないのよ。ボクは月の軍師なんだから。絶対に月だけは守ってみせる。

「賈駆っち、どないするんや？」
「ちょっと待って！今考えてるんだから！」
「なぁ、賈駆っち、まず月に報告せんとあかんのとちゃう？」
「わかってるわよ！付いてきて、霞」
「了解やで」

突然すぎて、策が建てられない。
絶望しそうになる。
でも、それは許されない。

月は、ボク達はどうなるのだろう。

「詠ちゃん、どうしよう……」

突然の、そして大きすぎる問題に、月の動揺が激しい。
……それはそうなるわよね。ボクだってまだ整理できていないんだから。

でも先ず月に落ち着いて貰わないと。自信がある振りをしてでも。

「大丈夫よ、月。私が絶対に月を守ってみせるわ。霞、お願い。協力して」

「当然や。なんやよう分からんお題目掲げて月を殺しに来る奴らに一泡吹かせたる！」

「……恋も協力する」

「ねねも当然協力するのですぞ！」

「私の武を忘れて貰っては困る！」

「……皆さん、有り難う御座います」

恋。

姓は呂、名は布、字を奉先。真名は恋。

漢の中郎将であり、その優れた武勇の腕前から、前漢の将軍李広になぞらえて『飛将』と呼ばれている。

ねね。

姓は陳、名は宮、字を公台。真名は音々音。

恋の軍師を自任する、知謀に優れた士。まあ、ボクには劣るけど。

華雄。

姓は華、名は雄、字も真名もない。

ボク達の中で最も長い戦歴を誇る勇猛な将だ。

この三人が居ても、十万の兵力差は大きい。

でも、居ると居ないのとでは大違いだ。特に、恋は。

恋は、一人で三万の賊を相手に立ち回りを演じ、傷つくことがなかった程の武人だ。彼女が居てくれれば、ボクの策に多少の幅を持たせることが出来る。

ねねについても、軍師が二人いるのと一人なのとでは軍の展開の仕方に違いが出てくる。ボクがある程度管理する必要はあるが、全てを管理しなくても良くなる。その点で、ねねの存在は有り難い。華雄についても、その実力は折り紙付きだ。何度も戦に参加し、その全てで優秀な結果を残してきた。一軍の将足る人材は多い方が良い。その点、華雄は申し分がないのだ。少し猪なのが気掛かりだけど。

「じゃあ、策を考えましょう。皆で」
「恋殿が居れば連合軍など簡単に撃退できるのですぞ！」
「ねね、山賊とはちゃうで。訓練された二十万の兵に囲まれてしもうたら、恋と雖も流石に死んでまう。阿呆なこと言うんはやめときぃ」
「なんですと！」
「やめなさい！」
「詠、ちょっと黙っておくのです！」
「なんですって！いくら恋でもそんなこと出来る訳無いでしょ！？」
「恋殿を舐めるななのです！簡単にやっつけてしまうのですよ！」
「そうだ！この私も居るのだ！連合軍など鎧袖一触だ！」
「目ぇ醒ましぃ！そないなこと出来るわけがないやろが！アンタら、阿呆か！？」
「な、なんだと！」

「止めて下さい！」

……月が泣きそうな顔をして、声を荒げて制止した。

「……もう、止めて下さい」
「……詠、霞。ねねが悪かったのです。きちんと策を建てて対応を考えるのです」

「……ボクも悪かったわ。そうね、そうしましょう」
「……喧嘩、良くない」
「……そうやな、恋。華雄、ほな、ウチらは軍勢の準備をしよか？」
「……うむ。私も、悪かった」
「……恋もやる」

……状況が状況だけに全員感情的になってしまっていたようね。恋は別にして。
本格的にぶつかり合う前に月が止めてくれて本当に良かった。戦う前に負けるところだったのだから。

頭脳労働組と肉体労働組に分かれてそれぞれが出来る準備をしようとしているところへ、申し継ぎの者が走ってくる。……本当に今日はよく人が走り込んで来る日ね。

「申し上げます！」
「何？」
「平教経、兵６０，０００を率いて函谷関を抜けこの洛陽へ進軍してきます。その内訳は、騎馬２８，０００、徒３２，０００。行軍速度は極めて速いとのことです！」
「どうして今まで気が付かなかったのよ！」
「騎馬軍が先行してあっという間に接近してきたのです！その後方に徒の兵が展開しております！」

平教経。
……アンタも、ボク達を殺そうって言うのね。許さない。月に受けた恩義を忘れるなんて。ボクを、裏切るなんて。

「霞！今すぐ動ける者をかき集めて対応する必要があるわ。ボクも前線について行く！直ぐに準備して！」

「了解や。……賈駆っち、大丈夫なんか？経ちゃんが相手やで？」
「霞、今そんなこと言ってる場合じゃないの！行くわよ！」
「……分かった。了解や、賈駆っち。経ちゃんも、辛いやろうな」
「詠ちゃん……」
「大丈夫よ、月！アイツを殺してでも月を守る。それがボクの役目だから！」
「詠ちゃん……」
「賈駆っち、征くで！」
「分かったわよ！じゃあ、後でね、月」

……後があるかどうか、分からない。
ねねを見る。ねねは大きく頷いてくれた。華雄も頷いている。
……きっと、ねねと恋、華雄が月を逃がしてくれる。それを、信じよう。ボクはその時間を稼ぐだけだ。例え、死んでしまったとしても。

～教経　Ｓｉｄｅ～

久し振りに見る洛陽は、少し慌ただしさを感じさせるものだった。
まぁ、そりゃそうだろう。何せ今洛陽の城門は続々と軍勢を吐き出しているんだから。
それを眺めながら、右手を挙げる。それを見た愛紗が号令を掛ける。

「全軍止まれぇい！」

おお、皆ピタッと止まったな。凄いモンだ。良く訓練されてるのがこれだけで分かるねぇ。

「じゃぁ、俺ぁ挨拶に行ってくるかね」
「……教経殿、使者を先行させた方が良い、とあれほど言ったではありませんか。軍が展開されつつありますよ？」
「馬鹿だなぁ、稟。それじゃ兵達が緊張感を以て行軍しないだろうが。その状況で試したいこともあったしな」
「お兄さん、いきなり撃ち掛かって来られたらどうするつもりなのです」
「ん？躱すかな。ま、大丈夫だろ」
「……教経様、そういう問題ではないと思いますが」
「まぁ、良いではないか。主らしい」
「ははは、ご主人様らしいじゃないか。驚かせてやるつもりなんだろうさ。これだからこの男は面白いのさ」
「お母様、笑い事じゃないと思うぞ、これ」

笑い事で済むレベルだろうよ、まだ、な。ドッキリでしたって言ってみたらどうなるのかね？

まぁ、真面目な話をすれば、平家軍として出しうる最速の行軍速度は分かった。撤退する時もこの速度で行けるだろう。それを見極めることが出来たことが大きな収穫かね。

「んじゃ、行ってくるわ」
「お気を付けて」
「土産に酒でも買ってきておくれよ」
「お母様！もっと緊張感を持ってくれよ！」
「何だい全く、五月蠅いねぇ。自分もご主人様と一緒に行きたいのかい？この娘は」
「そそそんなことない！あたしは別にご主人様の心配なんかしてないからな！」
「翠ちゃん、全部ダダ漏れなのですよ」
「主、私にも土産が必要ですぞ？」

……さくっと無視しとこうかね、うん。稟は本当に良い子です。
馬超の真名？合流した時に預けられたよ。仕えるんだし、自分の為に碧を説得してくれたから、とね。俺の為でもあったんだよ。
さて果て、元気かね、霞と賈駆は。

両軍の中間点で二人を待つ。
霞と、賈駆がこちらに向かってきた。
馬から下りて、俺の方へ。俺も馬から下りる。

「アンタ、何しに来たのよ！月を殺そうって思ってるんでしょうけど、そうはいかないわよ！」

開口一番、賈駆がこう怒鳴った。
おうおう、ツンツンツンツンしているねぇ。
見送りの時はツンデレだったのに。やっぱり使者先行させた方が良かったのか？
でもなぁ、安穏とした雰囲気で行軍しても意味がないし、警戒感漂う中を行軍させて練度を測りたかったんだよねぇ。そうでないと、ぶっつけ本番で様子を見ながら撤退することになる。そんなことに気を遣ってられない状況も考えられる訳で、ねぇ。

「経ちゃん、何しに来たんや？」
「ああ、挨拶に来た」
「そう、じゃあ、これでお終いね」
「まぁそう焦りなさんな。俺の話を聞いてから決断しないと、後悔するぜ？間違いなくな」
「うるさい！アンタなんかと話す事なんて無いのよ！この、裏切り者！」

凄い剣幕だな。そこまで余裕がない、ということだろうな。これは。
しかし、裏切るも何もない関係だと思うんだけどなぁ。董卓軍とは。

何を裏切ったって思ってるンだ?恩を仇で返しやがって、とかなら分かるんだけども。

「賈駆っち、ちょっと落ち着きぃ。経ちゃん、早う用件言わんと、賈駆っちとホンマに戦う羽目になるで?」

「みたいだな。じゃぁ、先に結論から言おう。

んんっ……我らは董卓殿に味方する。この度の戦、間違いなく非は連合にある。雍州牧　平教経と征西将軍　馬騰。この二名によって親董卓連合を結成した。この二名だけだが、董卓殿にお味方致そう。

……と、まぁ、碧はもう俺の臣下だがなぁ。あと、曹操とも密約がある。曹操だけは、董卓の命を見逃してくれる。例え捕まってもな。

まぁ、そんなことにはさせないがね?ついでに言うと、奴さん達をぶちのめす為の策の仕込みも上々だ。細工も流々なんだぜ?

霞、俺がお前ら殺しに来る訳無いだろうが。見損なうなよ、この俺を、な。戦友なんだろう?

賈駆、お前さんに言っただろ?必ずお前さんを助けてやる、とねぇ。忘れてんなよ、軍師だろう?

……二人とも一別以来、壮健だったか?」

霞は吃驚した顔をしてやがるな。そのアホ面はなかなか見物だぜ?何を惚けた面してやがるよ。

「……経ちゃん、心臓に悪いで、ホンマ」

「いやいや、霞、お前さんの顔、アホ面で可愛かったぜ?壮健そうで何よりだ」

「うっさいわボケ!まぁ、お陰さんで負けなくて済みそうやわ」

「たりめぇだ。賈駆は元気だったか……って……」

賈駆は、泣いていた。

……追い込まれていた、か。ホッとして、緊張の糸が切れたみたいだな。
可愛いところがあるじゃないかね。

「賈駆、済まんな。まさかそこまで心理的に追い込まれていたとは思っていなかったンだよ。使者を先行させるべきだったかも知れん。申し訳ない」
「……うっさい。こっち見るな」
「本当なら手ぇ拍って喜ぶ所だろうが。……ったく、何で泣いてやがるンだよ。そう自分を追い詰めるな」

そういって、親指で涙をぬぐってやる。

「あっ……」
「そりゃ経ちゃん、聞くだけ野暮やで」
「はぁ？」
「賈駆っちは経ちゃんと戦わずに済んでホッとしとるんや。しかも、経ちゃんが『助けたる！』とか言うとるんやで？どこの純愛物語やねんっちゅう話や。賈駆っちは経ちゃんに一」
「ちょ、ちょっと霞！アンタ黙ってなさい！」

純愛物語って。そういうの読むんだな、霞。

「賈駆っちは俺に……何？」
「アンタも黙ってなさい！」
「へいへい」

機嫌が悪いな、このツンデレラは。
ガラスの靴持っていったらそれ持って頭かち割りそうだもんなぁ。
ツンデレラ。

ツンデレラは王子殺害未遂の罪で投獄されました。めでたし。めでたし。

「いやいや経ちゃん、そんなチマチマしとらんとやな、そこはほれ、こうグッと抱き寄せてな？」

「……し～あ～？」

「あはははは、なんでもあらへんねん、経ちゃん」

「……霞のお陰で普段の調子が取り戻せたみたいだな？賈駆」

「ふん、アンタも元気そうね」

「あぁ、おかげさんでな。入城させて貰えるか？これからの話をしときたい」

「わかったわ」

赤い目を擦りながら、賈駆がそう応える。

……まぁ、喜んでくれてるってことでいいんだよな？多分。

蝶の如く～53～

～詠　Ｓｉｄｅ～

「……良くそんなこと思いついたわね」

洛陽の城内で、郭嘉と程?から策の内容を聞いた私の感想だ。
自分たちが集めた糧食を、敵領内の困窮した民に施して流言を飛ばし、士気を落とす。その効果は覿面だろう。
曹操との密約。月の命そのものを心から欲している曹操にそれを諦めさせる。その事で月の生存率を上げる。
どちらも、考えついてもボクには実行できないわ。前者は糧食と時間が不足している。後者は、曹操にその要求を呑ませるだけの代償を提示することが出来ない。アイツだからこそ出来たことね。

聞けば、最初からこれあるを見越して準備をしてきたのだと言う。

「それにしても、反董卓連合に参加して名声を得る方がアンタ達にとって得なんじゃない?どうして袁紹達と事を構えようと思ったのよ」
「詠ちゃん、助けて貰ってるのにそんなこと言っちゃ駄目だよ……」
「……賈駆っち、ホンマは嬉しゅうて仕方がない癖に」
「べ、別にボクは嬉しくないわよ!」
「話しても良いですか?」
「……ええ、ごめんなさい」
「では、稟ちゃんからどうぞ」
「教経殿に反董卓連合に参加しない危険性を説きましたが、教経様が断固として諫言を拒否した為です。教経殿には今述べてきたような策があった為に、勝算が立っていての決断だったのでしょうが」

「……そう」

アイツが、自分でボク達を助けるって言ったのね……。べ、別に嬉しくなんか無いわよ。

「まあ、どうして助けようと思ったのか、という話になると、お兄さんが平家の頭領として譲れないことだから、と言ったからですが」

「平家の頭領として譲れないこと、ですか？」

「はい。『見義不為、無勇也』。義を見て為せる男こそが平家の頭領として相応しい。そう仰っておられましたから」

「実際の戦をどう推移させるか、という点については、お兄さんに直接確認して貰った方が良いのですよ」

「分かったわ」

『見義不為、無勇也』。

そんなことを本気で考えて貫こうとするなんて、馬鹿ね、アイツ。

……ま、まぁ、口だけの奴なんかに比べれば遙かに好感が持てるけど。

あの日の、横顔が目に浮かぶ。あの厳しくも柔らかい目の光。

……『見義不為、無勇也』、か……様になってるじゃない……

～教経　Ｓｉｄｅ～

「勝負しろ！平教経！」
「いやいや、経ちゃん、ウチとやって貰わんと困るで？」

皆様こにゃにゃちわ、幸田シャーミンです。
たった今入ってきたニュースです。

平教経を巡って、二人の痴女がヤるとかヤらないとか卑猥な言い争いをしている模様です。いっそのこと『やらないか』と言って貰いたいものです。
一方は袴の下に何も履いていない痴女。もう一方は胸甲の下に何も付けていない痴女。もう寒い季節なのに、変態というものは本当に元気ですよね。
ＮＯ　痴女、ＮＯ　ＬＩＦＥ。あ、これだと痴女大好きフリスキー的な感じになっちゃうね。皆様はお気を付け下さい。
幸田シャーミンでした。それでは皆さん、ごきげんよう。

「……アンタ今変なこと考えているでしょ？」

はい。考えております。ツンデレラ様。

「いや。考えてない」
「……何か今もの凄くむかつくこと考えてなかった？」

まさか、そんなことはありませんよ、ツンデレラ。

「いや、そんなことないって言ってるじゃないかね？」
「……さっきからアンタが受け答えする前にこう、イラッと来るんだけど？」
そんなことあるわけないじゃないですか、ははは。
「しつこいね、このツンデレラは。ニュータイプって怖いよね」
「……何か知らないけどとにかくアンタが巫山戯たこと言ってるのはよく分かるわ」
あ、逆だった。思考と発言が。
「いやいやいやいや、褒めてるんだって！褒めてるんだって！賈駆！可愛いって言ってるんだよ！」
「なななな何恥ずかしいこと大声で言ってんのよ！飛んでけ！」
「へブッ」
……お前さん、それ香ちゃんハンマーじゃ……新宿の種馬的に考えて……１００ｔってどういうことだよ……俺より強いんじゃないかね、そんなモン持てるって……むっ！……今、秋葉原でボクっ娘眼鏡っ娘ツンデレ喫茶を開いたら儲かるんじゃないかとかいう天啓を授かった……設定料金は……そうだな個室で一時間５万円だ！どうだ、来る奴いるか！？……何か来そうな気もするな……俺が行きそうだからな……

「では、平！私と戦って貰うぞ！」

どうやら『や　ら　な　い　か』競争で華雄が勝ったらしい。

アッー！

「はぁ、いいけど、話にならないと思ってるンだがね？」

「まぁそうだろうな！この私に貴様のような軟弱な男が勝てる訳もあるまい！」

いやいや、俺はノンケだって構わないで喰っちまう男なんだぜ？

……おぇ……無理無理。

「なっ、貴様！」

「あ～愛紗、落ち着け落ち着け。軟弱でも『貧弱！貧弱ぅ～！』でも構わんがね。勝手に決めないで貰えないかね？俺は昼寝したかったんだが」

「ハッ、貴様、世に冠する武を持つと言われているが、たいしたことはないな！」

「まぁ、そうかもねぇ」

「張り合いのない！貴様を仕込んだ師も実に下らぬ奴だったのだろうな！はっはっはっはっは」

「あっ」

……へぇ。

「？愛紗、どうしたんや？」

「……教経様の前でそのお師匠様の悪口を言うのは、星でさえ、例え冗談であってもしない。何故なら、殺されるからだ」

「こ、殺……じょ、冗談やろ？」

「……私は馬鹿にした訳ではないが、馬鹿にされたと感じた教経様に殺されかけた事がある。その時星も死ぬかと思ったと言っていたが」

「……ほ、ホンマか……」

「……ちっと耳が遠くなったのかも知れんのでね、もう一度、言って貰えるかね？」

「何度でも言ってやろう！貴様も貴様の師も、下らぬ奴だ！はっはっは！どうした！悔しいのか！」

「……その下らぬ俺からの忠告だがねぇ。お前さん、自分が強いとでも思っているのかね？」

「当たり前だ！私は最強の武を有しているのだからな！」

「……どうやらお前さんに足りないのは危機感みたいだねぇ」

……董卓軍の将で戦前だ。殺すのは我慢してやるがねぇ、かなり痛い思いをして貰うぜ？

「の、教経様！絶対に殺さないで下さい！」

「か、華雄、直ぐに謝らんかい！このド阿呆が！」

「……外野は、黙っててくれないかね？」

あんまり五月蠅くするようなら、一緒にお仕置きするしか無いがね？そう思って二人を見やると、黙ってうんうん頷いている。

……まぁ、分かってるさ、愛紗。殺しはしないよ、殺しは、ね。

「ふんっ、少しは出来るのかも知れんが、たいしたことはない！」
「ご託は良いから、掛かってきてはどうかね？」

華雄が戦斧を振り下ろしてくる。
……遅いねぇ。力はありそうだが、力があるだけの馬鹿に負けるはずもないだろう？
一歩。たったの一歩。だがそれだけで十分なんだよ。

「何！？」
「……別に大した事じゃないだろう。ただの『一寸の見切り』だ。それとも、お前さんの武芸の師は、こんな事も教えてくれなかったのかね？大した事のない、下らぬ俺の師匠でさえ教えてくれたことなんだがねぇ？」
「貴様！我が師を侮辱するか！」
「……貴様にはそれを言う資格なんて無いンだって事を嫌って程教えてやるよ」

清麿を抜き放つ。勿論、峰は返さない。

「！」
「惜しいねぇ、もうちょっとで腕斬ってやったのに、どうして避けたんだね？」

言いながら清麿を鞘に収める。
良く避けたな。ただの阿呆でもなさそうだ。それなりに使う訳だ。
……だが、それとこれとは話が別なんだねぇ。

「き、貴様！私を本気で殺すつもりだったな！？」
「……通信簿に良く人の話を聞きましょうって書かれた口か？腕斬ってやるって言っただろう？死にはしないさ。今回の戦に参加する

のは無理になるだろうがねぇ？」
「私も貴様を殺すつもりで行くぞ！死ねぇ！」
……本当に人の話を聞かない馬鹿だねぇ。
今度は下から、か。
懐に走り込む。
「間に合うと思っているのか、馬鹿め！」
……俺の狙いが何か分かって居るのかねぇ。俺の狙いは、お前さんが戦斧を握っている右手の指を踏みつけてやることなんだよ。馬鹿めが。
「グッ！」
握った指を踏まれると、鉄の柄で挟まれて激痛が走るだろう？
そうすると、当然持っていられないよなぁ？
そのまま、清麿の柄で顎を跳ね上げてやる。口は災いの元っての、教えてやるぜぇ？
ぬるぽ。
「ガッ」
良くできました、ねぇ。
……ちゃんと「ガッ」出来たから、この程度で済ませてやるよ。顎の骨が折れてるかも知れんがね。

「……なぁ、愛紗」
「なんだ、霞」
「ひょっとして、経ちゃんってもの凄く強ないか？」
「……当然だ、私も星も一度も勝ったことがないのだから」
「へぇ～。なんや愉しみやな」
「……霞？」
「経ちゃん、次はウチやで！」

……華雄で終わりじゃないのかよ。

「多少疲れたんだがね？」
「汗もかかんとよぉ言うわ」
「……殺すのを我慢するのに疲れてるんだがね？」
「……さよか……」
「で、霞、お前さんも死にたいのか？」
「ウチは経ちゃんの師匠を馬鹿にはしてへんよ！？そして華雄は死んだんか！？」
「……冗談だよ、冗談」
「……今言うたら冗談にならへんって」
「んじゃ、やるかね？」
「よっしゃ、やったるで！」

霞が偃月刀を構える。

……結構、いや、かなりやるね。隙が見えない。華雄とは格が違うか。

「ほな、行くで！」

偃月刀で突いてくる。星と同等くらいの疾さだ。
見切って避けようとして、大きく後へ飛び退る。
目の前を、偃月刀が横に通過する。突きから、薙いだのか。

「……危ないな、霞」
「……アレを躱すんかいな」

続けて霞が前に出てくる。
横に大きく振ってくる偃月刀を見切って躱し、懐へ。
が、直ぐに偃月刀が戻ってくる。
もう一度、飛び退る。
その俺に向かって、偃月刀で突いてくる。今度は、薙ぎの動作から突き、ね。
これはリーチの差が大きいと厳しいねぇ。

後に倒れながら、突いてくる偃月刀の柄をつかみ取って霞の左手の指を蹴る。

「くうっ」

……成功した。が、羽織が破れている。いや、斬られている。
本当に、疾い、な。

「やっぱりやるなぁ、経ちゃん」
「そりゃお前さんの方もだねぇ」

「けど経ちゃん、まだ本気出してないやろ？」
「本気は本気だ。けど、命の危険を冒してまで勝負に出るつもりがないんだよねぇ」
「いやいや、そうやない。まだなんかあるやろ。態度に余裕がありすぎやで、自分」
……観察眼も一流か。凄いな。
「見てみたいかね？」
「あぁ、是非見せて貰いたいわ」
「……じゃぁ、いくぞ？」
「掛かってきぃ！」
１００％中の１００％！！！
瞬動に入る。霞の顔が驚愕に歪む。まぁ、皆そうなるだろうな。この疾さで動くってのは人間止めてますって宣言してるのに等しいだろうからねぇ。
霞の左腕を強く打とうと、右上段から左下へ清麿を走らせる。勿論、峰を返して。
だが、霞はこの速度にほんのわずかだが反応して腕を動かし、打点をずらした。
「いっ」
……確かに打ったが、打点をずらされるとは思わなかった。愛紗も星も最近漸くある程度反応することが出来るようになってきたものに、いきなり反応してきた。
だがね、霞。俺はこの速度で動き続けることが出来るんだよねえ。
そのまま、霞の後を取り、右腕を脇下から回して前から首筋に清麿を宛がう。こう、太刀で自害する時に首をはねるような形で。

「……チェックメイト」
「……なんやよう分からんけど、ウチの負けやな」
「そうだねぇ。だが、霞。凄いな」
「なにがや？」
「打点をずらしただろ？いきなり対応されるとは正直思ってなかったんだよ」
「はは。なんの自慢にもなれへんわ。でもまぁ、おおきに」
霞は凄いね。『張来来』ってのが怖かったのは理解できた気がする。
「……ところで経ちゃん」
「ん？」
「いつまでこの格好でおるん？」
あ、密着してたの忘れてた。……良い香りするね、霞。
「あぁ、済まんね。直ぐに離れるよ」
「まぁ、別に構わへんよ？そんなにウチと密着しとりたいんやったら、夜ウチの部屋にでも来るか？」
……お前さん、そんなこと言ったらヒョードル様が……
「霞？教経様を誘惑するのは止めて貰おうか？あと、教経様？誘いに乗ったらどうなるか、分かって居ますよね？」
「あ、あはは。愛紗、冗談やって。冗談、な？」
「はい！分かっております！」
……冗談でも言うなよ、霞……

蝶の如く～５４～

～教経　Ｓｉｄｅ～

「実際の戦の推移について？」
「そうよ、詳細はアンタから聞いてくれって程？に言われたわ」

霞と仕合った後、賈駆に呼び出されて洛陽の城壁の上に行った。
城壁から突き落とされるのかと思ったが、どうやら違ったようだ。
本当に良かった。ここから香ちゃんハンマー的なものでぶっ飛ばされたら死ねる。間違いなく死ねる。

「……アンタ、また変なこと考えてるでしょう？」

……本当に高性能だな、バイオセンサーは。何で分かるんだ？

「いや、考えてないし、これからも考えないです、はい」
「……まぁ、良いわ。で、どうするのよ？」

何とか誤魔化せたようだ。

「？水関と虎牢関。基本的にここで奴さん達には消耗して貰うつもりだ」
「……時間稼ぎをする、ということね。策が発動するまでの」

……流石に優秀だな。

「そうだ。策が発動し、敵の士気が目に見えて下がったら、これを叩く。但し、奴さん達が逃げない程度に叩く。此処が一番大事だ」

「……今ひとつその必要性が見えないんだけど？殲滅できるなら殲滅した方が良いと思うけど、ボクは」
「それだと駄目なんだよ」
「何が駄目なのよ」
「賈駆、袁紹の目的が何か分かるか？」
「……月の命と、洛陽？」
「そうだ。では、その二つの目的を二つとも達成できなかった時、袁紹はどうすると思う？」
「……懲りずにもう一度攻めてくるんじゃないの？」

その認識の甘さは命取りだぜ？賈駆。
アレは馬鹿なんだからな。

「……董卓の命を狙う。それも、暗殺を仕掛ける。成功するまで、執拗にな」
「なっ」
「だから、勝てるが勝ちすぎては駄目なんだよ。勝ちすぎればもう袁紹は引っ込みがつかなくなる」
「ちょっと待ちなさいよ。それじゃ、程よく勝つだけでも駄目じゃない！そんなことじゃ満足しないわよ、袁紹は」
「……だから、お前さん達には洛陽を捨てて貰う」
「……」
「洛陽を袁紹に取らせれば、袁紹は一定の満足感を得られるだろう。董卓の命を執拗に狙うこともなくなる。目的の一つが達成されている以上、軍事的行動の成果があった、ということになるからな。その上で、兵の士気が揚がらず、国元で不穏な空気が蔓延している、となれば、董卓討伐を諦めて各々自分の領地へ帰還することになるだろう。それで初めて、董卓の命が生涯保証されることになるだろう、と思っているのさ。俺はな」

さて、賈駆はどう判断するかな、この策を。

「……すればいいの……」

「ん？」

「それからどうすればいいのよ、ボク達は。その後、洛陽を捨ててしまった後、ボク達はどうなるのよ。洛陽を捨てれば、間違いなく司隷州全体に侵攻してきて全ての領地を奪われてしまうわ。領地もなく、諸侯に疎まれているボク達は、どうすればいいの！？」

確かに、拠って立つ場所が無くなる、な。

だがねぇ、俺が居るじゃないかね。何とかしてやれると思うんだがね？

これ以上迷惑掛けられないとか戯けたことを考えてるんじゃ無かろうね？

「ねぇ、応えなさいよ。諸侯に疎まれて、殺しても構わないと思われているボク達は、一体どこに逃げて生きていけばいいのよ？それともずっと、これから先の人生、ずっと日陰者として、人の目を只ひたすらに避けながら生きていけって言うの！？」

……やれやれだな。このツンデレラってぇお姫様は。

もうちっと人に頼るって事をした方が楽に生きていけるぜ？

俺を見てみろ、俺を。

星が居て稟が居て風が居て愛紗が居る。頼りっぱなしだが、頼っていること自体を恥ずかしいと思った事なんて無い。人間てのは完璧な奴は居ない。もし居たら、そいつはもう人間じゃねぇよ。『人の形をした何か別のもの』でしかない。

ったく、自分を追い込みやがって。

「肝心なところで馬鹿なんだな、賈駆。俺が居るだろうが」
「……え？」
「え？じゃねぇよ。俺が居るだろうが。俺はお前さんを疎まない。俺は俺ンとこに逃げて生きていって欲しい。俺はお前さんに、これから先の人生もずっと日向で人の注目を集めて生きていって欲しい。だから、俺ンとこに逃げてくればいいんだよ、賈駆」
「……ホントに？本気で、そう言ってくれてるの？ボク達は、アンタの世話になっても良いの？それをすれば、アンタはほぼ全ての諸侯の敵としてずっと疎まれ続け、攻められ続けることになるのよ？分かってるの？いつか攻め滅ぼされることになるかもしれないのよ？攻め込まれる大義名分を、常に抱えておくって事よ？」
「あのなぁ、今回董卓に付くって決断をした時点で、『たとえ天下を敵に回しても』っていう覚悟を決めてるんだよ。今お前さんが言っているのは今更のことだ、織り込み済みのことなんだよ」
「そのせいで、多くの領民が死んでいくわよ？ボク達が居るばかりに、アンタの領民や配下が死んでいくのよ？それに、耐えられるの？大体、今回のことはボクがもっとしっかりしていれば防げたこと。自業自得なのよ？」
「自分を追い込み過ぎなンだよ、お前さんは。今まで全てのことをそつなくこなしてきたからなンだろうが、もっと適当で良いンだよ。物事はなるようにしかならねぇ。落ち着くべきところに落ち着くンだよ。誰のせいでもない、そのモノ自身に相応しい形で全てのモノが落ち着くンだ。
水が低きに流れるのは水がそういうモノだからであって誰かが低いところに水を態々運んでいくからじゃない。犯罪者がむごたらしく殺されるのは、そいつが犯罪を犯したからであって貧しい生まれであったからじゃない。『そういうモノだから』『そこに落ち着く』ンだ」
「……」
「……『見義不為、無勇也』。これは、平家の頭領として絶対に外

れるべきではない、生き様のようなモンだ。信念と言うよりは、な。平家の郎党となり、不幸にも平家に統治された以上、俺がそうありたいと思う俺である為に、皆には死んで貰うしかない。

『お前なんか要らない、死ねばいい』と思った時、俺を殺しに来ればいいのさ。だが俺が生きて『平教経』としてその生を謳歌する限り、この俺の夢を信じて付いてきてくれた多くの人間が居た以上、俺は俺として俺のままで生きていくことを貫いてやる。そう決めたンだ、それが死んでいった者達へ俺が出来る唯一のことだって思ってるンだよ。

お前さんがもっとしっかりしていれば防げたことだと言うが、人は完全じゃ居られないンだよ。誰だって間違う。誰だって迷う。誰だってどこかが不足してるンだ。だから誰かと一緒に生きていくンだろうが。お互いの不足しているところを補い合うように。それが自然なことなンだよ。

だから、気にしなくて良いンだよ、貫駆。甘えちまえよ。どんな難癖付けられようと、どんなに俺が困ることになろうと、俺が守ってやる。どんなことをしてでもな。

例えこの決定の為に命を落とす事になろうとも、俺はそれで誇りを持って死んで行ける。俺らしく、俺の生を精一杯に生ききった。そう自信を持って言える。それが、平家の頭領として相応しい生き様ってモンだと思ってる。だから、俺の迷惑なんて考えずにやりたいようにやっちまえ」

話の途中から、貫駆はずっと俯いて肩を震わせていた。

……この意地っ張りめ。こういう時は素直に泣けばいいものを。

そう思って、貫駆を抱き寄せる。

「なっ、なによ」

全く抵抗しない上に涙声でその言い様は無いだろうが。ったく。

「泣いても良いンだよ、賈駆。状況が許す限り、泣きたい時には泣けばいい。俺はそう教えられたぜ？皆に。泣いて、気持ちに整理を付けて、もう一度歩き出せばいい。大事なのは、見失わないことなンだよ。自分自身をな。もう一度歩き出した時、周囲をよく見て見ろよ。きっとお前さんに手を差し伸べてくれている人間が居ることに気がつけるさ。経験者が言うことだ、それは間違いないンだからねぇ。それから歩みを進めていけば良いンだ。だから、泣いて良いンだよ」

俺の腕の中から、歔欷する音が聞こえてくる。

……お前さんも、きっと歩みを進める事が出来るさ。後ろ向きにではなく、前を向いて、空を見上げて、胸を張って、な。

そのまま城壁の上で、ずっと賈駆の頭を撫でながらすっかり暗くなった空を眺めていた。

～詠　Ｓｉｄｅ～

「落ち着いたか？」
「……うん」
「……まあ、なンだ。とにかく俺に頼れ。良いな？」
「……うん」

自分たちの命以外、全てを失う。
そのことはボクがもたらしてしまったこと。そう思えてならなかった。
ボクのせいで、月が死んでしまう。命はあっても、日陰でしか生きられないなら、死んだのと同じ事だ。その事に、耐えられなかった。
ボクだって、コイツに頼ることは考えた。正直、頼りたかった。助けてくれるのは、もうコイツしか居ないんだから。でも、それをすれば今度はコイツがボク達と同じ目に遭う。助けに来てくれたコイツに、そんなことまで押しつけたくなかった。
それなのに。

『俺が守ってやる。』
『例えこの決定の為に命を落とす事になろうとも、俺はそれで誇りを持って死んで行ける。』
『泣いても良いンだよ』

そんなことを立て続けに言われて、あっという間に泣いてしまった。
泣かないように、我慢してたのに。

……こんなの、ボクの柄じゃない。
そう思うけど、コイツの腕に抱かれて、頭を撫でられてると、ホッとする。今まで張り詰めていたモノ全てが撫でられる度に取り払われていくような、そんな感じがする。

……コイツの周りにいる女って、皆こうやって誑かされたんでしょうね。

「……ねぇ」
「あぁ？」
「アンタって、女誑しだって馬騰が言ってたけど、やっぱりこうやって誑かしてきたの？」
「……碧、テメェ覚えとけよ……さぁ、どうかね。どっちかというと、俺が泣きつく側だった気がするけどな」
「……嘘よ」
「本当だよ。自分らしく生きていくことを貫く、って言ってたろ？死んでいった者達の為に俺が唯一できることだからって」
「……うん」
「その答えを出す過程でな、愛紗に叱られて泣かれ、風に泣かれて。俺ぁ、極端な答えを出しちまっててなぁ。『強くある為に自分を徹底的に殺す。その為に自分が自分で居られなくなっても構わない』。そう思ってたンだよ。それを叱られて思い直させられて、漸く自分にとっての答えを出したンだ。形から言うと泣かれた訳だけど、実情を考えると俺がのたうち回って助けてくれって言ってたようなモンだと思う」
「……ふぅん」

コイツでも、そんなことあったんだ。ちょっと意外。
あんな顔してあんなに心に響く言葉を吐いたのに。コイツに、そんなことがあったなんて、ね。

「……もう、大丈夫よ」
「そうか？なんならまだ抱いて撫でててやるぜ？」
「う、うるさいわね」
「……もうちょっと掛かりそうだねぇ。キレがまだ不足してるぜ？

普段通りに戻ったのなら、直ぐにでも俺の腕を払って抜け出ていくだろうに」

「……ふん」

「はは。ま、お前さんらしいと思うがね。賈駆」

「……詠よ」

「……詠」

そう言って、優しくボクのことを抱いてくれている。

最初から分かってたことだけど、口が悪いだけで心根は本当に優しい。人としてのあり方が、本当に好ましい。慈しむような目でボクを見ている。こんな男がこの世にいるなんて。

……ボクは、コイツのことが好き。きっと、初めてあの顔を見た時から、ずっと。霞が言っていたことが正しいのがちょっと気にくわないけど。『ボクを、裏切るなんて』。コイツが軍を率いて洛陽に来た時、そう思った。裏切られたと感じたのは、ボクの好きという気持ち。だからこその、あの感情だったんだって、今にして気付いた。

あとちょっと。もう少しだけ。きっと明日からは、いつも通りのボクで居られると思うから。もうちょっとだけ、一緒に居て欲しい。胸を貸しておいて欲しい。

「……そろそろ、帰るかね。冷えてきたぜ？」

「……きょ、今日だけ、一緒に居なさいよ。明日からはちゃんとするから……その、今日だけ……今日だけで良いから、甘えさせなさいよ……」

「……了解だ。お姫様」

そう言って、頭を撫でるのを止めて、両手でボクを包み込むように抱いた。

それから朝まで、ボク達はずっと一緒に居た。その、ボクの部屋で。
……ボクは、コイツに誑かされた。全部見られたんだから。心も何もかも、本当に、全部。

ちょっと、ご挨拶しに、行かないとね。
趙雲も程?も郭嘉も関羽も、皆そうだって言うんだから。
やっぱり、女誑しだ。

蝶の如く～55～（前書き）

きりが良かったのと、ネタがパパッと思い浮かんだものでして。
はい。申し訳御座いません。

蝶の如く～55～

～星　Ｓｉｄｅ～

「教経殿、何故昨晩私の部屋においでにならなかったのですか？」
「教経様、一体どういう事情で一晩行方をくらませていらっしゃったのです？」
「お兄さん、どういうことなのか、説明が必要だと思いませんか？」
「ご、御免。何か全部話しちゃって……」

目の前で、主が頭を抱えている。
詠、ネタ晴らしは最期にしなければ意味がないとあれほど言ったであろうに。

……主が、またやらかした。
勿論、女性的な意味で。ついでに、性的な意味でも。

今日の昼、中庭で稟と話をした際、昨晩主が稟の部屋に来なかったことについて、何か知らないか？と聞かれた。主が稟の部屋に行かない。そんなことがあるはずがない。だが、稟の表情は深刻だった。他の二人なら、何か知っているかも知れない。そう思って、『非常招集』を掛けた。

この『非常招集』とは風が考えた物で、主の女性関係に何かしらの変化を感じ取った際に行う緊急招集のことだ。非常招集だということを伝えるように、と使い番に言うと、もの凄い勢いで走っていった。
……きっと、風に弱みを握られて良いように使われているのだろう。
でないとあんなに必死な表情で城内をひた走ることなど無いだろう

から。

それから一刻もしない内に、風と愛紗がやってきた。愛紗は練兵中だったが、騎馬に跨り、青龍偃月刀を持ったままの格好で、もの凄い速度で洛陽の町中を駆けてきたようだ。息を切らしているからな。もう少し迷惑という物を考えた方が良いと思うぞ？……は？勿論、私は考えない。私は全てに優先されるからな！

話し合いを持った結果、二人も知らない、ということだった。

断空我などの、主の身辺を警護しようと自発的に警邏している者達を掴まえて訊いてみたが、昨晩は一晩中部屋にいなかったようだ、と言っていた。特に断空我は、朝主が見つかるまで、ずっと城の内外を問わずに走り回って捜していたようだ。先手の兵達を総動員して。……だから昨日の晩、「ＯＫ！忍！」と五月蠅かったのか、城内が。寒い季節なのに暑苦しいことだ。

何だかんだと言っても、断空我は主のことを掛け替えのないものだと思っている様だ。そう言ってやると、うるせぇよ！とか、んなことあるわけないだろうが！とか言っていたが、主に死なれたらこの先何に希望を見いだして生きていけば良いか分からないだろうが、とぼそぼそと語っていた。主といい、この男といい、素直ではないものだ。まぁ、だからこそああやっていつも喧嘩をして仲良くしていられるのだろうが。似たもの同士なのだろう。全く、小僧のようなものだな、二人とも。……はぁ？私は大人の女性だ。主にしっかりと開発されているのだからな！ククッ。わかったかな？

この時点で分かったことは三つ。

夜、稟の部屋に行かなかったこと。

一晩中、自室にいなかったこと。

朝、主は何処かから無事に戻ってきたこと。

これらの事から考えられることは……！
分かったぞ！犯人はこの中にいる！婆様の名にかけて！
ちなみに私の婆様は取り立てて特徴のない、普通の婆様だ。趣味はひなたぼっこ。偶にそのまま昇天したのではないかと思うくらい微動だにしない。

そう思って全員を眺める。
一人。二人。三人。四人。

ふむ、此処には容疑者が四人いる。
？四人？

「アンタ達、顔突き合わせて何やってるのよ」

ほう、賈駆か。

「い、いえ。別に何でもありません」
「そ、そうです、そうです。何でもありませんよ」
「そうなのですよ。賈駆さんには余り関係のないことなのです。平家軍の主立った将と軍師に関わる秘め事なのですよ」
「……ふぅ～ん。それって、アイツの事じゃないの？此処にいる全員、アイツに誑かされた訳だし」
「……まぁ、そうですね」
「賈駆さん、どうしてそれを……って、霞ちゃんですか」
「馬騰からも色々聞いたわよ。超一流の女誑しだって」

主、主の与り知らぬところで主の評価はうなぎ登りですな。
間違いなくストップ高です。
ある意味、ストップ安ですが。

「で？なに話してたの？郭嘉は何か深刻な顔してたし、問題でも起こったの？」
「……丁度良いので少し聞いてみたいのですが、良いですか？賈駆殿」
「いいわよ、関羽。何？」
「昨日の晩、教経様を城内で見かけたりしませんでしたか？私達に割り当たられた区画一帯と、城外にいらっしゃらなかったので、もしかしたら董卓軍の皆様が使用している区画に居たのではないかと思っているのですが。……特に、霞の部屋などに。居ませんでしたか？」

そういった愛紗に、賈駆は何やら言い辛そうに、顔を赤らめている。
……真犯人を発見した。犯人は、お前だ！
ふふ。我ながら惚れ惚れする名推理だ。これで十分生きていけるな。

「その、だから、言ったじゃない。『此処にいる全員、アイツに誑かされた』って」
「……霞でなくて、こっちですか……」
「……はぁ……お兄さん……」
「……私の他に眼鏡っ娘が……これは戦略の練り直しが必要ですね……」

……誰一人あり得ぬ事だとショックを受けていないところが、問題だと思いますぞ？主。
全員が全員、主ならやりかねないし仕方がないと思っているということですからな。
当然、私も主ならやりかねないと思っておりますよ？

「……その、何か言うことは無いの？『この泥棒猫！』とか、『淫

売！』とか……」
「この泥棒猫の淫乱眼鏡っ娘め、なのです」
「ちょ、ちょっと！淫乱って何よ！」
「賈駆、声が大きすぎる。皆こっちを見て居るぞ？あと、風、口調がのんびりしすぎだ」
「おぉ！お兄さんだから当たり前のことだと思っていたのでつい同好の士を発見した思いがしまして」
「はぁ……また好敵手が増えた……」
「教経様は本当に仕方のない……」
「「「「はぁ……」」」」

仕方のないことだと思ってしまうところが、なんともまぁ。
皆が皆、しっかりと調教されてしまっているからなぁ、主に。

「それでその、なんて言って良いか分からないけど、その」
「ちょっと待って下さい」
「え？」
「賈駆殿、賈駆殿は教経殿のどこに惹かれてそうなったのです？」
「……一目惚れ、かな」
「はぁ！？」

これは意外だ。想定外だ。

「べ、別にそんなに驚くこと無いじゃない！」
「いや、しかし賈駆殿。教経様のお顔は十人並みなものだし、そこまでの美男という訳ではない。その教経様に一目惚れとは……物好きなのか？」
「ち、違うわよ！顔見ただけで惚れる訳無いでしょ！その、アンタ達が長安に移動する時に洛陽に駐屯してたでしょ？」
「ええ」

「その時に、アイツが『家長としての責任は、果たす。それが平家の頭領ってモンだ。』って言いながら、子供達が走っていくのをじっと、厳しいけど、優しい目で見てるのを見て、それでその、まぁ、そういうことに」

……流石は釣りキチ　ジゴロ。
その表情と言葉一つで見事に一本釣りしましたな。
川のヌシも余裕で釣り上げられることでしょう。

「……賈駆さん、でもそれだけでお兄さんとそういうことにはならないと思うのですが」
「そ、それはその」
「どの？」
「星、黙っていて下さい」

おお、怖い怖い。

「……昨日、戦の経過をどう考えているのか、という話をしている時に、洛陽を放棄しろ、と言われて。でもそうすると、月もボクも逃げる場所がないと思って。アイツに頼りたかったけど、迷惑掛けることになるから、それはできないと思って。どうして良いか分からなくなって」
「……成る程。どうせ主のことだ。『俺が守ってやる』だの何だのということを、さぞ凛々しい顔で自分の信念を述べながら言ったのでしょうな」
「う……そ、そうよ」

賈駆の顔がまた赤くなった。
……これはまた、この短期間に良く此処までの重症に。主の顔を思い出してなのは間違いないが、顔だけでこうなるとはまた可愛らし

い女であることだ。だからこそ、主も抱いたのだろうが。

「……皆、これは仕方あるまいよ」

「……まぁ、そうですね。無かったことにはできませんし」

「む～、賈駆さん、風の真名は風なのですよ」

「私は、稟です。賈駆殿」

「愛紗と申します。賈駆殿」

「私は星だ。宜しくな、賈駆殿」

「へ？どういうこと？」

「お兄さんは、皆のお兄さんなのですよ。お兄さんを共有するお仲間に入れてあげても良いのです」

「ななな何言ってるのよ！きょ、共有って……ど、どういうことよ！？」

「賈駆殿、私達は、一日交替で教経様と夜を共にしているのです」

「へ？」

「賈駆殿が教経殿を好いていらっしゃるなら、こちら側へおいでになった方が良いと思いますよ？」

「そうだな。それが一番の解決方法だからなぁ。愛紗の時もそうであったし」

「わ、私のことは今関係ないだろう！」

「ある」

「どこが！」

「知らぬ」

「せ～い～……今日という今日は許さぬぞ！」

「おお、怖い怖い。賈駆を放っておいて良いのか？愛紗」

「……くっ……覚えておけ！」

「私は忘れっぽいのでなぁ」

「言っていろ！」

「言っているさ」

「二人とも、賈駆さんが呆気にとられているのですよ」

「……その、四人とも、何とも思わない訳？ボクがその、アイツとそういうことをするのに」
「賈駆殿、よく考えてみられよ。此処に四人もいるのですよ？」
「そうなのです」
「我らはそれぞれ、主に集った蝶なのだ。主にとって一番の蝶になればよい。皆そう思っているのだ」
「……まぁ、そうね。ボクは、賈駆。字は文和。真名は詠よ。……負けないわよ？」
「詠、歓迎しよう」
「これで詠ちゃんも立派な肉奴隷予備軍なのです」
「ちょ、ちょっと！人聞きの悪いこと言わないでよ！」
「まぁまぁ、詠。落ち着いて下さい。夜に集まって、教経殿の話でもしましょうか」
「それは良い」
「……でも、その前にやることがあるのですよ」
「そうですね」
「当然です」
「当たり前だ」
「……あ～、御免、教経。なんかこうなっちゃった」

そういう訳で、こうなった。

「全く、教経殿は女性に少しだらしなさ過ぎるのです！」
「……はい、申し訳ありません」
「お兄さん、皆平等にしなければならないのですよ？」
「……はい、心得ております」
「教経様、少しご自重下さい。一体何人泣かせれば気が済むのですか？」
「……誠に以て申し訳のしようが御座いません」
「主、私だけを愛してくれていればこうは成っていなかったのですぞ？自業自得ですな」
「……ただいま痛感して居るところで御座います」
「ぼ、ボクのことも、きちんとして貰わないと困るんだからね！？」
「……新規参入おめでとう御座います。精一杯勤めさせて頂きます」

全く仕方のない主だ。だがまぁ、仲良きことは美しきかな、かな？
まぁ、まだ懸想している人間も居そうだし、後何回殴られればいいのでしょうな？主。

蝶の如く～５６～（前書き）

一話で限界で御座います。

蝶の如く～５６～

～碧　Ｓｉｄｅ～

入洛から六日が経過した。
平家軍は十分に休養を取り、また精神的な疲れも癒すことができたようだ。
ご主人様はまたぞろその女誑しの腕を披露し、董卓軍の軍師である賈駆を誑かした。賈駆が涼州にいる時から知っているが、頭が固く、その手の事には一切興味がないような女だった。頭にあるのは董卓のことだけ。そんな女だったのだ。
それがいとも簡単に。全く以て面白い。あの賈駆が、顔を赤らめて、愛しそうに名前を呟いていたのだから。あははは。良い酒の肴になるねぇ、あの顔は。折角私が忠告してやったのに、ねぇ？この私を誑かすほどの超一流の女誑しなんだ、気をつけろって言ってやったのに。あははは。あの顔、本当に面白いねぇ。

「お母様、何をニヤニヤしてるんだよ。そろそろご主人様から招集が掛かるよ？ほら、酒呑んでないで早くしっかりしてくれよ～」

……それに引き替え、この娘は。全く、我が娘ながら情けない。パパッと襲って身籠もってこいってんだ。
コイツがご主人様のことを気にしているのは分かってるんだ。そうさせる為に、態々顔合わせの時にあんな真似させて貰ったんだからねぇ。見事にご主人様も乗っかって、翠のことを思っての言葉を熱く語ってくれたからねぇ……断ったのが翠の為云々の話の時、チラチラチラチラご主人様の顔を見てたのは、分かってるのさ、翠。まだ自覚が足りないみたいだし、もう一押ししておかないと、ご主人様と決定的な関係になることは難しいみたいだけどねぇ。

やれやれ、全く我が娘ながら手の掛かることだ。
風辺りに画策して貰おうかねぇ。あの娘はその手のことに遺憾なくその辣腕を振るいそうだ。だがねぇ、その為にも、もう一手。あともう一手、必要だねぇ。

「お母様～！いい加減にしとかないと、ご主人様に怒られるだろ！？」

「……ご主人様、ご主人様と五月蠅い娘だよ本当に。そんなに好きならとっとと目合ってくれば良いじゃないか」

「ままま目合うって何言ってるんだよ！」

「良い感じに成長してるんだ。その体ならご主人様も大満足さ。とっとと裸になって部屋で待ってればいいじゃないか。『ご主人様、翠を抱いて下さい』って言えば、あの男は即お前を抱いてくれるだろうさ」

「★■※@▼∀っ！？」

……やれやれ。まだまだ駄目かねぇ。早く孫の顔が見たいもんだがねぇ。

～教経　Ｓｉｄｅ～

「教経様、？水関近くに連合軍が集結しつつあります」
「そろそろ、だねぇ。碧、兵の士気はどうだ？気圧されたりしていないか？」
「平家軍については全く問題無いと思うよ、私は。涼州兵も雍州兵も士気が高い。騒ぐでもなく怯えるでもなく、只淡々とそこに存在している。戦士として、これ以上ない状態だと思うねぇ」
「まぁ、お前さんと俺の軍だ。徹底的に鍛えてある。よくぞ此処まで、と感慨に耽っちまいそうだ。愛紗、星、翠、良くやってくれた」
「はっ」

平家軍は、大将を俺、副大将を碧、正軍師を稟、副軍師を風とする編成を取っている。その下に将軍である星、愛紗、翠がいる。ちなみに、星の強い勧めによって、ダンクーガが近衛の隊長として俺の側で護衛に当たることになった。これでいつでもダンクーガ遊びができる。
まぁ、冗談は置いておいて、良い人選だと思う。俺自身が腕が立つこともあって、護衛など必要としないが、何かあった時に心から信頼できる、底抜けに素直な人間が側に居てくれることがどれ程有り難いか、分かって居るつもりだ。そいつは、絶対に裏切らないだろうからな。なにがあっても、どんな状況になろうとも。糞爺共が良

く言っていた。『信頼は、その心を頼むものであってその才を恃むものではない。それを履き違えるな。』と。

「で、これから正に戦に行く訳だが、董卓軍の様子はどうかね？」
「流石は詠、と言えるだけの陣容を整えております。兵の練度については一部心許ない隊がありますが、それは前線へ出ることはなく、後方支援に当たらせるようです。？水関に、霞と華雄。虎牢関に、呂布と陳宮。そういう陣容です。兵の配置は、？水関に５０，０００、虎牢関に３０，０００。洛陽に２０，０００の計１００，０００です」

史実通り、か？どうやって負けたのか、それは忘れちまった。
が、そうだとしても董卓軍の配置が史実通りなだけだ。ここには俺たちが居るからねぇ。

「連合軍の兵数は？」
「当初２００，０００と号しておりましたが、教経殿と碧の不参加により１６０，０００程度となっております。兵の士気は高いようですが、練度のばらつきが大きく連携は期待できそうにありません」
「成る程。まぁ、練度の問題より諸侯の思惑が一番の原因なんだろうがね。まぁ、策が決まればそれこそ蜘蛛の子を散らすように蹂躙してやれそうだな」
「はい」
「お兄さん、平家軍の配置について、ご指示をお願いします」
「……？水関には俺と愛紗。軍師に風。虎牢関に碧、星、翠。軍師に稟。兵数は、？水関に２５，０００。虎牢関に３５，０００。２５，０００の内訳は、８，０００が騎馬。残りの騎馬は全て虎牢関へ回す」
「教経様、何故？水関に厚く兵を配さぬのですか？」
「決まっている、奴さん達を引き込む為だ。比較的早い段階で？水

関を抜かせる。その与えられた勝利により、虎牢関も抜けると思ってそのまま突っ込んできてくれるだろうさ。勝っている時に引く事は非常に難しいことだからな。あの馬鹿にその決断を下すことができるとは思えない。

？水関と虎牢関の間。此処は一方を川で塞がれ、もう一方を山が塞いでいる。そして、洛陽側が虎牢関。より河内方面が？水関。あちら方面から洛陽に向かうなら、此処を通るしかない、という閉所だ。より少ない兵で、多くの兵を相手にできる。全ての軍兵を展開することが叶わないからな。一度に相手にする兵数を限定することができる、という点で、虎牢関は防衛するにうってつけの場所だ。

此処と？水関の外側が奴らにとっての長期滞在場所になるだろうねぇ。さっきも言ったが、一つ関を抜いた以上、そう簡単には引き返せないのが人情ってものだろうからな。その時点で策が発動してくれるように時機を掴んで行わなければならないが、成功すれば一気に幕引きまで俺たちがその手で行うことができるだろう。まぁ、間違いなく成功すると思うがな」

「教経様、？水関を『抜かせる』と仰いましたが、『抜かれた』場合はどうなるでしょうか」

流石は、関雲長だ。その違いでどういう齟齬が生じるか、それを気に掛ける辺りがまた優秀だねぇ。

「？水関は抜かれても良い。時期が早くなってもその分虎牢関で抗戦すれば問題無いからな。だが、虎牢関は駄目だ。『抜かせる』必要がある。碧、星、翠。呂布と陳宮が暴走しないようにしっかりと手綱を締めておいてくれ。両方とも、戦術的なものの見方はできるだろうが戦略的なものの見方ができない人間だろう。何度か軍議で顔を合わせているが、恐らく俺の見立てに間違いはないと思う。暴走するようなら、三人がかりで呂布を押さえてしまえ。若しくは、董卓が死ぬ、と言ってやれ。あれは董卓を慕っているようだしな。

効果があるだろう。陳宮は黙らせておけ、稟。必要なら拘束して監禁しても構わん。俺の命に従わない人間は不要だ。此処は俺の戦場だ。他の誰にも文句は言わせん。董卓にもそういってあるし、了解も得ている」

「わかったよ、ご主人様。星と翠との三人でなら何とか押さえられるだろう」

「畏まりました」

「ご主人様、？水関を抜かせた後、ご主人様達はどうするんだ？」

「俺たちは山中に陣を設けてそこから奴さん達を攻撃してやる。関を抜かなければならない奴さん達が山中に陣を構える俺たちを先に殲滅しようとは思わないだろう。被害を出しまくった場合はそう思わんだろうがね」

「でも、そうしてきたらどうするんだ？」

「ここ二日くらいで、木々を伐採させ、道を造り、道を塞ぎ、石を取り除き、石を設置してきた。この辺り一帯は、攻めるに難く守るに易い。進むに難く引くに易い。山裾からの道は陣に向かってより細く、より数多くなる。逆に山中の陣から後ろは、比較的広い道を通してある。そのように変えてあるンだ。

逆茂木も用意したし、落石も用意してある。心ばかりのもてなしだが、きっとご満足頂けるだろう。それに、撤退時は直ぐに虎牢関へ移動するしな。敵中突破になるのか陣の後からになるのか分からんが、少なくとも二つの道を選択するだけの余裕がある。兵達も動揺せず、余裕を持って戦えるだろう。

何より、こちらに主力を向けてくれるのならば碧に言って持ってこさせたアレがあるんだ。痛い思いさせてやるよ。山中でアレを使えば、こちらがどういう状況かは直ぐに分かるはずだ。虎牢関に守備兵を残して、騎馬隊で一撃して離脱し、また虎牢関に戻ってくれれば問題無い」

「アレを戦に使おうって考えつく時点でアンタの勝ちだと思うけどね」

「お兄さんは本当に物騒な人ですから」
「まぁ、否定はしないさ」
「主、アレとは？」
「見てのお楽しみだ。先ず間違いなく虎牢関では使用することになるからな」
「？水関では使用しないのですか？教経様」
「ああ、使用しない。警戒されても困るし、どう使うのかが分かったら撤退する可能性がある。関を抜くのは難しい、と判断してな。それに、最初から小出しに使用していては思ったように損害を与えられない可能性がある。対策ができていない状態で、間違いなく損害を与えられることができる時に、一気に投入する。それが頭の良いやり方だと思わないかね？」
「……主と話をしていると、主が敵であることが本当に可哀相になって来ますな」
「当然です。教経殿なのですから」
「やれやれ、稟は教経様にぞっこんだな」
「とにかく、こんな感じだな。山中の陣を放棄して虎牢関に集結したら、それからの詳細について話をすれば良いだろう。その時点で状況がどうなっているのかを、今この時点で想像しても意味がない。将来の事は、将来考えればいい。今は目の前に見えることを片付けるだけで十分だ。進むべき方向は分かっているのだからな」
「「「「「「御意」」」」」」

一生懸命考えた、この戦絵巻。
空の青、雲の白、山の緑、袁紹軍の金。是非とも後一色、追加したい。
……連合軍諸君、精々頑張ってくれ給え。
俺がこの戦場で描く戦絵巻を、貴様らの血を加えることで極彩色に彩る為に、ね。

……ところで、何で皆御意って言ったンだ？
何となく？はぁ、そう決めたのね？まぁ、別に良いけどさ。なんか偉くなった気がするンだねぇ。
『馬を曳けぇい！』とか言いそうだよねぇ、暴れん坊的に考えて。

～翠　Ｓｉｄｅ～

?水関に向かって出発するに当たって、ご主人様が全軍の総帥として演説を行う事になった。１６０，０００の軍勢に向かって、気後れせずに演説できるのか?ご主人様は。
そう思っていると、星が私に話しかけてきた。

「翠、どうしたのだ?何やら不安そうな顔をしているが。今回の戦に、何か不安材料でもあるのか?」
「いや、そうじゃなくてさ、ご主人様はこんな大勢の兵の前で演説するって言うけど気後れしたりしないのかな~?とか思って。失敗したりするんじゃないかとか、ちょっと思ってたんだけどさ」
「ははっ。そういえば翠は聞いたことがなかったのだな、主の演説を」
「どんな感じなんだ?ご主人様の演説って」
「それは聞いてのお楽しみだろう。ただ、『人主足る者の声』とはこういう人の声なのだ、ということがよく分かると思うぞ?では、後でな」
「あ、ああ」

そう言われ、素直に待つことにした。
ご主人様は、何と語りかけるのだろうか。

「俺が今回の戦で総帥を務めることになった、平教経だ。
貴様らには最早知っていることと思うが、改めて現状を説明してや

る。
現在反董卓連合を名乗る糞共が？水関の東に集結しつつある。その軍兵は１６０，０００。総大将は、家柄を誇ることしかできない、馬鹿で有名な袁紹だ。
翻って我らを見れば、その軍兵は１６０，０００。全くの互角だ。
総帥たる俺と馬鹿とを比較すれば、圧倒的な勝利が得られると分かることだろう。

だが、我々は程よく勝つ事を目的とする。詳細は言えぬが、戦略上の目的を満たす為に上司から不可解な命令を出されることもあるだろう。だが、これには従って貰いたい。従わないものは、死んで貰う。総帥たる俺の言を軽んじる人間が居ることの方が軍にとっては害悪だからだ。このことについては、肝に銘じておいて貰おう」
ここで、一旦言葉を切って兵達を睥睨している。
普段のちゃらちゃらしたご主人様とは違い、威厳に満ちている。
有無を言わせない迫力がある。

「……よく分かって貰えたようだ。
これから我らは？水関と虎牢関で、反董卓連合に参加した糞共を叩きに出る。
反董卓連合は、欲塗れだ。漢王朝の元で善政を布いてきた董卓に、一体何の罪があるというのだ。反董卓連合に参加している諸侯は、董卓を妬みこれを打ち倒すことで、その我欲に塗れた全く民達のことを考えない非情な政を行って、その私腹を肥やす為に諸君らを搾取することを目的としている、正に屑共だ！
敢えて言おう、カスであると！」

辺りを静寂が包んでいる。
ご主人様の声が、良く聞こえる。本当に良く通る声をしている。
語り口調である言葉でさえ、聞こえて来ていたのだ。

『人主足る者の声』。
これが、そうなのか。

「我らはそのような私欲に塗れたカス共を討ち取りに征くのだ！
平家の軍兵共には予てより言って聞かせていることだが、再度此処に宣言する！
貴様らはそのような我欲に塗れた餓鬼共を殺して廻る為にこの世に生を受けたのだ！餓鬼共を悉く屠ってやる為に、貴様らも鬼になるのだ！世に巣くう悪鬼共を殺して廻る、戦の鬼に！俺は貴様らの総帥として、共に一匹の鬼となろう！この俺と共に戦場で、餓鬼共を狩って！狩って！狩りまくってやろうぞ！
この戦で死ぬことを連合軍の餓鬼共は犬死にだと貶してくることだろう！貴様らが戦の鬼であることを止めさせようとしてくるだろう！だが、決して犬死になどではない！貴様らがこの世に確かに在ったのだというその記憶も！その夢も！貴様らがこの世に確かに在ったのだというその記憶も！その全てを！この俺が背負って生きて行ってやる！この俺がこの俺として俺らしく生きていく限り、確かに貴様らはこの世で戦の鬼として生ききったのだとこの俺が証明してやる！
それでも犬死にだと貶してくるのであれば、それで構わぬではないか！皆で犬死に気違いになってやろうぞ！その手に剣を取って餓鬼共を殺せ！剣が折れたなら絞め殺してやれ！腕を撥ね飛ばされたのなら首を噛み切って殺してやれ！我らが戦の鬼であることを止めさせるには、殺さぬ限りそれが叶わぬ事を教えてやれ！我らが犬死に気違いであることを、骨身に染みて分からせてやれ！

剣を取れ！槍を持て！これより気勢を上げる！
天が我らの所行を認めぬと言うならば、天すら殺してやる！我らは『義』の為に！ただ『義』をこの世界に打ち立てる為に戦うのだ！
天に己が牙を突き立てて、貴様らが確かに在ったという証を！貴様らの『義』を！刻みつけてやるのだ！全軍、気勢を上げよ！」

ご主人様が清麿を天に突き上げる。
次の瞬間、地鳴りのような雄叫びが上がる。皆が剣を、槍を、天高く突き上げて。
気が付けば、あたしも震えながら声を精一杯に張り上げている。その手に槍を持ち、天を穿つかのように突き上げながら。
これが、平教経。これが、あたしのご主人様。

兵達を見るご主人様の顔は、威厳と覇気に満ちた相貌だった。
天の御使いの噂。誇張が過ぎると思っていた。実際にご主人様を見てきても、その存在が天下を大きく揺るがす程のものだとは思っていなかった。

それは、間違いだったんだ。

ここに、『王』がいる。
戦の鬼共を率いる、『戦鬼の王』が。

蝶の如く～57～（前書き）

ほぼネタです。

兄さんが好きです。
でも大佐の方がもっと好きです。

蝶の如く～57～

～詠　Ｓｉｄｅ～

「よう、詠。元気か？」

演説を終えて月に出陣の挨拶に来たコイツは、普段通りだった。
……これがあんな演説したなんてね。
今のコイツからは想像も出来ないけど、結構格好良かった。
絶対にコイツには言わないけど。

「元気に決まってるでしょ？」
「そうだよなぁ、昨晩あんなに元気だったもんな？」
「あ、アンタ何言ってんのよ！」
「待て待て待て！そのハンマーは待て！というか、今どこから出した！？」
「うるさい！飛んでけ！」
「ヘブッ！」

壁に思いっきりぶつかって、ピクピクしている。
……コイツが悪いのよ、コイツが。出陣前だからって、少し手加減してやったんだから感謝しなさいよね！

「ったく。ほら、しっかりしなさいよ！」
「……痛ぇ」
「わ、悪かったわよ。でも自業自得じゃない！」
「……ほっぺたが痛ぇ」
「だ、だから悪かったってば」
「ほっぺたが痛ぇ」

「どうすればいいのよ！」
「こう、ちゅーっと」
「ばばば馬鹿じゃないの！？」
「えええ袁紹じゃないよ！？」
「そういう事じゃないわよ！」
「……今生の別れになるかも知れん。それでつい、な」

……死ぬかも知れない？コイツが？……考えても見なかったけど……でも……

「な～んつって！な～んつって！」
「……」
「……おい、詠？そんな深刻な顔するなよ。勝つ為の算段はしてあるんだから」
「……こっち向けなさいよ」
「はぁ？」
「ほっぺたこっち向けなさいよ」
「……本気かよ」
「あんたが言ったんでしょ」
「さいですね……ほれ」
「……んっ」

……頬に口づけをした。
無事に帰ってこれるように、願いを込めて。

「……これで良いんでしょ？無事に帰ってこれるように、願掛けといてあげたわ」
「……生きて帰ってこないとねぇ」
「当たり前でしょ！責任とって貰うんだからね！」
「責任てお前さん、結構恥ずかしいことをサラリと言うな……詠、

有り難うよ」
「ふ、ふん」

恥ずかしいことさせないでよね！

「詠ちゃん……」

は？

「詠ちゃん、教経さんとそういう仲になったんだね……おめでとう」
「ゆゆゆ月！いつからそこに！？」
「『よう、詠。元気か？』の辺りからだよ、詠ちゃん」

そう言って月はニコニコ笑っている。
……よくよく考えてみれば当たり前よ！ボクはコイツが月に訪いを入れてきたから、広間に移動してたんだから。月だって当然移動してくるに決まってるじゃない！……ボクとしたことが、迂闊だった……

「教経さん、詠ちゃんのこと、宜しくお願いします」
「お願いされるまでもなく宜しくはヤっております、はい」
「何言ってんのよ！この馬鹿！」

あ～もう！後で絶対に月から質問攻めにされるじゃない！
飛んでけ！

「……仕切り直して挨拶って事で良いかね？」
「それは構いませんけど……その、大丈夫ですか？」
「意外に人間って丈夫なんだなぁとは思うけど、これを大丈夫とは言わないと思う」
「ふん、自業自得よ！」

馬鹿なことばっかり言ってるからでしょ！

「はいはい。……董卓。俺は前線に行ってくる。合図があり次第洛陽から長安へ移動出来るようにしておいてくれ。詠、無いとは思うが身辺には気をつけてくれ。合流は函谷関で、だ」
「分かってるわよ」
「教経さん、済みません……私がしっかりしていなかったからこんなことに……」
「それは違うだろう。さっき兵達にも言ったが、責められる謂われはない。お前さんは堂々としていればいいのさ。『義は我にこそあり』、とねぇ」
「そうそう、月は気にしなくて良いのよ！」

「教経さん、詠ちゃん……有り難う」

少しは気が楽になってくれれば良いんだけど。

「……教経さん、私の真名を貴方に預けます。私の真名は月です」

「……知っての通り、俺には字も真名もない。月の好きに呼んでくれて構わない」

「分かりました。では……ご主人様とお呼び致しますね。碧さんもそう呼んでいましたし」

月、参考にしては駄目な人だと思う。その人は。

「あ～……まぁ、そう呼びたいなら仕方ないけど……それだと何か主従っぽいぜ？」

「……今回のことが終わったら、私はご主人様に臣従しようと思うんです。ですから、そうお呼びします」

「……何でまた臣従しようと思ったのかね？」

「私はこの戦の後、地位も領地も失います……そんな私がご主人様と対等な立場にあるとは思えません。それに、私ではこの難局を乗り切ることは出来なかったと思うんです。でも、今こうやって助けて頂いています……ご主人様に救われた命ですから、ご主人様に使って頂くのが良いと思うんです……」

「月……」

「……分かった。この戦で勝利出来たら、その申し出を承けよう。だがねぇ、月、『使って頂く』、というのは頂けないんだねぇ。……俺はお前さんを使役しないよ。俺を支えてくれると嬉しい」

……何でコイツはこういう臭い台詞をポンポン思いつくのよ……

「……へぅ……有り難う御座います、ご主人様……良かったね、詠

ちゃん。これでご主人様とずっと一緒に居られるね」
「ななな何言ってるのよ！月！」
「詠ちゃん、偶には素直にならないと駄目だよ……？」
「……わ、分かってるけど……」
「……やれやれだぜ」
「……何かむかつくわね、その言い方と身振り手振りが」
「第三部ではこれが正義だ」
「はぁ？」
「……悪いねぇ、ついつい」

第三部って何よ。
相変わらず訳分かんない事言う奴ね。

「では後で、な。函谷関で逢おう」

そう言って、振り返ることもなく出て行った。
……死んだりしたら許さないんだから。絶対。

～風　Ｓｉｄｅ～

？水関。まず、此処で時間を稼ぎ出す。
その為に、平家軍２５，０００を率いてやってきたのです。
お兄さんは、？水関に立って連合軍を眺めています。

「こうやってみると、凄い数の人間だな。風、見ろ！人がゴミのようだ！」
「言葉をつつしみたまえ、君は今楽太郎の前にいるのだよ、です」
「ラピュタ王な。風が今言ったのは腹黒い落語家な。……じゃなくて、なんでその台詞が出てくるんだよ！」

風にも分からないのです。

「さぁ。知らないのです」
「……言いたいことは山ほど在るが取り敢えずそれはおいておこうか」

それが良いと思うのです。さっきから豚野郎ならぬ猪女が飛び出そうとしているのですよ。

「華雄！落ち着け！」
「この阿呆！経ちゃんが言うたこともう忘れたんか！」
「そこを退けろ！関羽！霞！月様に仇為す屑共を一人残らず殺してやるのだ！」

鉄の女と神速の痴女によって、猪女は行く手を阻まれているようで

すが、うるさいのです。

「どうしたもんかねぇ。まさか戦う前に将軍一人惨殺する訳にも行かないしねぇ」

……惨殺なのですか、お兄さん。

「ご挨拶に行ってきたら良いと思うのですよ、お兄さん」

「……発散させとく、てか？だがねぇ、戦端を開く前だし、いくら連合軍の奴らが馬鹿ばかりだとしても、流石に警戒しているのではないかね？」

風はそう思わないのですよ、お兄さん。

「お兄さん、それはお兄さんだからそう思うのですよ。お兄さんは知らない相手のことを、知らないからこそ恐れ、警戒するのですよ。それは『臆病』と言えますが、臆病でない人間が大成する訳がないのです。何も恐れない、ということは、自分が死ぬことも恐れない、ということですから。大願を果たせず、横死することは間違い無いのです。お兄さんはそれを恐れている。君主とはそうあるべき者なのですよ。

でも袁紹さんは違うのです。あの人は他人の意を忖度することが出来ない人なのです。この世にあるのは自分の欲望ばかり。目の前にあるのは、取るに足りない者達ばかりなのです。取るに足りない者達を警戒しようとは思わないものです。

そういった大将の下で完全に緊張感を保っていられるほど、人は周囲と隔絶した存在では居られないのですよ。余程優れた人物でも、油断とまでは行かないでしょうが、その警戒は本来彼女が行うであろうものに比べるとやはり不足があるものになるのですよ。

大体、お兄さんが連合軍側に居たとして、警戒はするでしょうが、

いきなり飛び出してくるようなことが本当に起こると考えますか？
その可能性が非常に高いと考えて、軍兵に警戒を怠るな、戦っている時と同等の緊張感を保っていろ、と言いますか？」
「……言わないだろうな、多分。戦の前から疲れてどうするのか、と考えるだろう。警戒は最低限度に押さえるだろうねぇ」
「ですから、これっきりですが、ご挨拶に出向いても問題はないと思うのですよ。強襲して混乱させ、収まる前に離脱する。これを守って頂く必要はありますが、逆に言えば守って頂く限りにおいてどれだけ暴れても問題無いのですよ。？水関には、霞ちゃんと風が居れば問題無いのです」
「……仕方がないかねぇ。まぁ、俺も馬鹿にはお世話になったお礼をまだ出来ていなかったからねぇ。丁度良い機会だろう、奴さん達にしっかり俺の事を覚えて貰うことにしようかね。……決して恨まれてはならない人間だ、とねぇ」

そう言ってお兄さんは獰猛な笑みを浮かべます。

「なぎ払え！なのです」
「……早すぎて腐ってるのか、俺は？」
「さぁ、知らないのです」

思う存分、戦ってくれれば良いのですよ、お兄さん。

「愛紗、華雄。征くぞ？騎馬のみで敵に突貫する。しっかり付いて来い。但し、個別に動くことは許さん。俺と共に駆け、共に戦い、共に去るのだ。疾きこと風の如く、な」

言いながら、お兄さんが関を降りていきます。
その後を愛紗ちゃんと華雄さんが追いかけていきます。
……連合軍の皆さんには、災難なのですよ、本当に。

～雪蓮　Ｓｉｄｅ～

わたしは孫策。字を伯符。真名は雪蓮。
？水関を目の前にして油断している連合軍を何とかした方が良い、って冥琳に言われて総大将の袁紹にそう言ったのだけど。

「教経さんも董卓さんも、大した事のない家柄なのですわ。私のように名家に生まれた生まれながらの名族の前に、簡単にひれ伏すことでしょう。お～ほっほっほ。お～ほっほっほ」

……総大将を選ぶ為の軍議で分かって居たことだけど、やっぱり馬鹿だった。それも、とりつく島もない程の。
冥琳、あいつとは関わりたくないのよ、わたし。

冥琳。姓は周、名は瑜、字を公瑾。
わたしの親友にして、孫呉の知嚢。冥琳が居なかったら、孫呉復活までの道のりは今より遙かに困難なものになっていただろうと思う。
でもね～……わたしが政務をサボると直ぐに怒るんだから。一寸くらい見逃してくれても良いと思うんだけどな～。

なんであんな馬鹿を頭に戴いて戦わなきゃならないんだか。でもまぁ、わたしはこの戦で孫呉の名声を確固たるものにする為に此処にいる訳だし、それだけはさせて貰うわ。それに、面白いことがありそうなのよね～。私の勘は良く当たるのよ。結構楽しみなのよね～。

取り敢えず、あの馬鹿はもう放っておいて、準備をしておかなくちゃね。

「ねぇ、冥琳」
「何だ雪蓮」
「なんか面白いことがありそうなのよね。孫呉の兵達が油断しないようにしっかり引き締めておいて貰える？」
「……勘か？」
「そうよ」
「……やれやれ。祭殿、頼めますか」
「ふむ。儂に任せておいて貰おうかの」

そう言って、祭が引き締めに向かう。
黄蓋。字を公覆。真名は祭。
孫呉の宿将。そう呼ぶに相応しい将だ。お母様の代から孫呉に仕える、わたしが頭が上がらない数少ない人の一人だ。もう一人は横にいるけど。

「雪蓮」
「ええ、わかってるわ」
？水関の門が開き、中から騎馬が勢いよく飛び出してきた。その数は約２０，０００。
連合軍の油断を突いて、果敢に攻め掛かってきたのだ。
「掛かれぇ！掛かれぇ！」
先頭を征く男がそう声を張り上げながら、連合軍に突貫している。
遮るものがないかのように、次々に諸侯の陣を突破していく。こちらには来ないようだ。曹操軍があちら側に展開しているが、それを避けるように動いている。曹操軍は、混乱に陥った諸侯の軍兵を押しつけられる格好になっており、有効な反撃行動に出られないで居る。
「こちらに向かってくるつもりはないようね」
「そうだな。袁紹・袁術の陣に向けて突貫しているようだ。此処は様子見をさせて貰うのが良いだろう」
「そうね。精々頑張って袁術の兵を減らしてくれれば有り難いわ。こっちに向かってきたら、容赦はしないけど」

突貫してきた軍を見る。
『揚羽蝶』の旗に『平』の旗。

あれが、天の御使いみたいね。……中々傾いた格好をしているわね。

馬上の男を見ながらそう思う。女性上位のこの世の中で、男が将となることは難しい。それをあの男は、君主に収まっているのだ。その器量の程が分かろうというものだ。
遮二無二進んでいる。連合諸侯の配下でそれなりに名のある将がその進撃を止めようと彼の前に出るが、悉く殺されている。その剣速はあり得ないほどに疾い。

『関』の旗。『揚羽蝶』の旗に寄り添うように進んでいる。見れば、美しい黒髪を纏めた女が、頭上で偃月刀を振り回しながら突貫している。その君主の脇で、君主を狙う者を悉く一刀のもとに斬り伏せている。凄まじい武勇だ。

『華』の旗。お母様に負けた華雄だろう。だが、その武勇は確かなもので、前に立つ雑兵を薙ぎ倒しながら前に進んでいる。他の二人には劣るが、連合でもあれ程の武人は中々居ない。

一通り袁紹軍・袁術軍を蹂躙した後、平家軍は馬を返した。
殿で、男が袁紹軍に向かって語りかけている。

「愚かにも我欲に塗れ、『義』を見て為せぬ糞共よ。貴様らに決して勝利は来ない。
たとえ殺されようとも、悪に屈しない心。それがやがては勝利の風を呼ぶ……
人、それを凱風という……！」

「き、貴様何者だ！」
「お前達に名乗る名前はないっ！」

……貴方は平教経じゃないの。
そう思うが、なんとなくアレに突っ込んではいけない気がする。

「……雪蓮、アレは何だ」
「さぁ。分からないけど、多分突っ込んだら負けだと思うわ。剣狼的に考えて」
「……勘か？」
「勘よ」

平教経が馬上からこちらを見やる。
わたしと目があった。不敵に嗤っている。
……面白いじゃない。腕が立つみたいだし、何よりその態度が気に入ったわ。

戦が始まった。私の、孫呉の悲願の為の、初めの一歩となるべき大戦が。
……後で挨拶に行かないとね。くだらない男だったら殺してあげるわ。

蝶の如く～５８～（前書き）

新撰組知ってる人なら直ぐにわかるはず。
そんな真名です。オリキャラは。

蝶の如く～５８～

～琴　Ｓｉｄｅ～

私は、姓を太史、名を慈、字を子義。真名は琴。
私が至らず、母に迷惑を掛けて居た際に母の面倒を見て下さった孔融様へ恩返しをする為に、此度の大乱に孔融軍の卒として参加している。軍へ参加したのは、先に述べた通り孔融様へ恩を返したい為であるのは勿論の事だが、今洛陽で圧政を布いている董卓とそれに荷担する平教経を討伐し、無辜の民達を救う事こそ正義であると感じたから。

志を同じくする諸侯と共に、巨悪を討って正義を実現する。
孔融様はそう仰っていた。その孔融様を助力することは正義の実現を剣で目指す私にとって願ってもないことだ。
悪を打ち倒す。その為に私は力を尽くすのだ、この剣を振るって。

「敵襲！敵襲だ！」

その声に前を見れば、袁紹軍と袁術軍に向かって？水関から騎馬隊が突撃を行っていた。
『揚羽蝶』の旗が風に棚引いている。集団の先頭にいる派手な羽織を着込んだ男を殺そうと、多くの友軍が立ちはだかったているが、その悉くを一刀の下に斬り伏せている。あれが、平教経だろう。

……もし、こちら側に来れば。
孔融軍の隣は曹操軍だ。到着してからの軍兵の様子を見る限り、非常に練度が高く、また戦意も旺盛だ。彼らと連携できれば、己が武勇を恃んで突出してきた敵将を討ち取ることが叶うかもしれない。

普通であれば。

だが、敵騎兵から逃れる為に諸侯の軍兵達が曹操軍と孔融軍の前に殺到してきており、現状それを捌くのに精一杯だ。この状態で敵がこちらに来たら少なくない損害を被ることは間違いないと思うが、曹操軍を避けるようにして軍を移動させている。

此処にいては、敵将は討ち取れない。そう判断し、平教経を討ち取るべく陣から抜け出て移動する。彼を殺せば、この戦の目的の約半分を達成出来る。この機会を失う訳には行かないだろう。見れば、袁紹軍の一部が動揺が収まらぬ友軍を叱咤するかのように果敢に戦い、騎馬隊の勢いを押し止めようとしている。騎馬と徒とが交互に寄せて戦っている。

騎馬隊の勢いが完全に止まった時。その時が殊勲を狙う時だろう。本当は剣で斬り殺してやりたいが、乱戦の中彼に近づくことが叶わない。弓を使う。一矢で、その命を頂戴する。

彼が見える場所で静かにその時を待つ。だが友軍が徐々に落ち着きを取り戻しつつあったその時に、敵騎馬隊は馬首を巡らせ？水関へ退却し始めた。殿を務めながら平教経が語りかけてくる。

「愚かにも我欲に塗れ、『義』を見て為せぬ糞共よ。貴様らに決して勝利は来ない。

たとえ殺されようとも、悪に屈しない心。それがやがては勝利の風を呼ぶ……

人、それを凱風という……！」

貴様のどこに、『義』があるというのか。

『義』を見て為せぬのは、この正義の連合に加盟しない貴様の方ではないか。

悪。

そう言ったのか。この私を、孔融様を、『悪』と言ったのか。
この男には生きている価値はない。
必ず、私が斬り捨てる。
この太史子義が、ね。

～愛紗　Ｓｉｄｅ～

？水関に篭もって防戦に専念して半月もしないうちに、華雄が出撃する、と言い出した。連合軍から罵声を浴びせられ、怒りが収まらぬようだ。

これまでのところ、教経様の構想通りに戦は進んでいる。
諸侯の軍勢が入れ替わり立ち替わりに押し寄せてきては、矢を射掛け、罵声を浴びせてくる。だが、教経様は関の上に高々と掲げられた平家の旗の下で悠然と構え、兵達はそんな教経様を見て落ち着いて対処出来ている。逆に、敵兵を挑発し、笑う余裕を見せていた。
……教経様も一緒になって敵兵を挑発していたが。

ある時は、その、お尻を出して叩き、『これでもくらえぇぇぇい！』と叫んで。お尻に矢が刺さりそうになって直ぐにやめたけれど。
またある時は、矢が飛び交う中関を上ろうとしている敵兵の面に向けて、その、尿を掛けながら、『喰らえ！必殺の！ゴールドスプラッシュだぁぁぁ！』と叫んで。
……まるっきり6歳児だ……教経様、戦が終わったら折檻です。何故か、周囲の兵が私から逃げていく。

ま、まぁ兎に角、順調に防戦をこなせている、と言って良いと思う。なにせまだ一度もあわやという場面を迎えていないのだから。こちらにはまだ矢も豊富にある。射掛ける敵にも事欠かない。

ここで、構想から外れさせる訳にはいかないのだ。華雄が出撃して死ぬようなことがあれば士気が下がり、結果として教経様の構想を揺るがしかねない。教経様は抜かれても問題無い、と言ったが、予定通り『抜かせる』が良いに決まっているのだから。予定された退却と、予期せぬ撤退。受ける被害も大きく違うのだから。

そう思って華雄を止めようとすると、教経様がやってきて華雄を殴りつけた。

「貴様、何をする！奴らは私の武を侮っているのだぞ！」
「……華雄、お前さん、聞いていなかったか？俺の命を軽んじるも

のが居れば殺す。そう言ったはずだ」
「グッ……」

悔しそうにする華雄に、構わず話を続ける。

「華雄、貴様の武も大した価値がないな」
「何だと！」
「そうではないか。その武を奮う理由が、自分の武人としての矜持を守る為、などとみみっちい事を言いやがるのがいい証拠じゃないかね？」
「それの何が悪い！」
「そのせいで月は死ぬことになる。貴様は自分が仕えている主を己の武を奮うことで殺すことになるわけだ。そんな奴を誰が天下最強だと尊敬してくれるのかね？主殺しの間抜けじゃないか」
「何を言っている！私は最強だ！月様を殺させはしない！」
「どうやって？」
「戦に勝つ！それだけだ！」
「袁紹の目的を説明してやったろうが。それをもう忘れたのか？」

董卓殿の命。洛陽の奪取。
？水関に入った時、教経様から華雄と霞に袁紹の目的を説明してある。
霞は、教経様が今回描いた戦の全貌を知り、それを実現する為に協力することを約束してくれた。
華雄も約束したはずだが、やはりこ奴は駄目らしい。

「それがどうしたのだ！」
「言ったはずだ。目的を果たせなかった袁紹は、月を暗殺しようとするだろう、と。それが分かって居て猶、俺の構想を破綻させ、袁紹を復讐鬼にしようとしているわけだ。

……貴様が、月を殺す。
己の武人としての矜持などと言う、糞ほどにも価値がないモノに拘ってな」
「価値が無いだと！」
「無いな。お前は、月の為にその武を奮うと言っている。だが、その実情は月を殺す為にその武を奮おうとしている。貴様のような奴の矜持にどれ程の価値があるというのかね？馬の糞ほどの価値もないと思うがねぇ」
「いい加減にその口閉ざさんと貴様を殺すぞ！」
「……テメェこそいい加減にしやがれ！」

教経様が殺気を叩きつける。
華雄の顔色が変わる。教経様への恐怖から、一気に冷静になったようだ。

「良いか、貴様に選択肢をくれてやる。
貴様の武を貶される事と、月を殺される事。
どちらかを選べ。今すぐに、ここでだ。どちらも選ばぬと言うことは許さん。もしそう言うなら今此処で俺が貴様を殺してやる。宣言通りにな」

さて、どちらを選ぶのやら。
華雄は俯き、考え込んでいる様だ。
暫く沈黙した後、顔を上げて応える。

「……私の武を貶される事を選ぼう」
「ほう、何故だね？あれ程に拘っていたじゃないか、そのくだらない矜持とやらに」
「……月様がこの世に居ないなど、耐えられぬ。それならまだ私が貶されている方が遙かにマシだ。月様だけは、死なせる訳には行か

ないのだ。私は自分が猪武者であることは自覚している。大した学が無いどころか、字も真名もない。周囲のものがそれらのことで私を馬鹿にして見下している事は分かって居る。だがそんな私を馬鹿にせず、慈しみ、気に掛けて下さったのが月様だ。例えこの命が無くなろうとも、月様だけは絶対に死なせたくない。幸せになって欲しい。そう思うからだ」

……華雄は、直情的に過ぎる。が、その心映えは一角の人物となるだけのものはあるようだ。

「……それを選択できるなら、お前さんにはまだ見込みがある。あぁ、勿論、お前さんが天下無双の武人となる見込みがある訳じゃ無い。お前さんにはそれは無理だ。何せ俺にすら勝てないのだからな」

「……くっ」

「……だが、お前さんなら最高の武士に成ることが出来るだろう。月の為に、己の武人としての矜持どころかその命さえ捨てることが出来る、今のお前さんになら、な」

「……最高の、もののふ、だと？」

「そうだ。

どんなに馬鹿にされようとも、どんなに軽んじられようとも。その者が望むのは唯々その仕える主の望みを叶えることだけだ。そしてその身の無事のみを願い、只ひたすらに主を守る。己を捨て去り、主の為にその武を、その勇を、その智を、その忠を捧げるのさ。己を評価するに、他者の評価は只唯一、その主からのものが在れば十分だ。その他のものは必要ない。その者にとって、それは無用なのさ。

その者の真価を知るものは少ないだろう。ひょっとすると、その主しかそれを知ることはないのかも知れない。だが、それは武士の望むところだ。自分に遠慮して他の人間が主を助ける機会を狭めることなど、望んでいないからだ。主の為になることであれば、積極的

に自分の地位をもっと有能なものに譲ってやるだろう。主が己を知っていてくれる。それだけで、武士には十分なのさ。

だが一朝事あった時、周囲のものは終に知ることになるだろう。如何にその者が勇敢であるかを。如何にその者が主に忠たるかを。如何にその者が、武人の鑑となるべき者であるのかを。

今のお前さんなら、この天下で最高の武士になれるはずだ。唯々、月の為に。その為だけにお前はこの世界で生きて行く。そのお前さんを、誰も汚すことは出来ないだろう。例え天下無双で無くとも、その武は誇り高く、また尊い。その心映えは美しく、見事の一言しか発し得ない。それを貶す者どもは、只のカスだ。気にとめる必要もない。」

「……最高の、武士……」

「そうだ。お前さんは、正しくそういう存在になれると思うぜ？

……訊こうか、華雄。お前さんは、天下無双の武人となりたいのか？それとも、天下最高の武士となりたいのか？」

「……私は、月様の為に、この天下で最高の武士となろう。」

「良い返事だ。それを聞いて安心した。

……愛紗、華雄を押さえる必要はない。武士に対して失礼だからな。」

「は、はい。」

もう、暴れようとしない。罵声もどこ吹く風だ。哀れむような顔すら浮かべて眺めている。

……この短期間で、教経様は華雄の内面を塗り替えてしまった。

唯々、董卓殿の為に。

そう心に固く誓って居るであろう華雄の顔は、誠に美しかった。

……誰も、これを汚せない。誰も、これを貶めることは叶わない。

誰もが、この在りように心震わされるに違いない。

私も、肖りたいものだ。
唯々、教経様の為に。

蝶の如く～５９～

～華琳　Ｓｉｄｅ～

「桂花、戦況は？」

「はい。諸侯軍が？水関に入れ替わりで次々に押し寄せ、親董卓連合軍に休みを与えることなく攻め続けておりますが、状況は芳しくないようです。やはり、？水関を現方針で抜くのは至難のことかと」

「そうね。それが分からない馬鹿ばかりだから、教経に舐められるのよ。だからこそ、教経はああも巫山戯たことをしたのでしょう」

あれは、傑作だったわ。

教経が、袁紹軍が関に取り付き登ろうとした矢先、兵に向けて放尿した。ゲラゲラと笑いながら、勢いよく。大体、戦になれば尿意など催さないものを、あの男は平然と放尿して見せたのだ。矢が飛び交っている中で。度胸が良いというか、なんというか。アレのせいで麗羽は完全に冷静さを失い、当初の計画通りに攻め続けて、眠ったり休んだり出来ないようにしてやるのだ、と息巻いていたが、恐らく無駄でしょうね。

現状、？水関で確認されている兵は、最大で５０，０００程度。それも、教経がこちらに騎馬で奇襲を掛けてきたその時だけだ。それ以降確認されている兵は、常に３０，０００弱。残りの兵は、恐らく？水関の向こう側に陣屋を設けてゆっくりと休んでいるのではないかしら。親董卓連合の兵の顔色は良く、疲労や睡眠不足に苛まれているような顔色をしているものが居なかったことは確認している。相手は教経だ。間違いなく５０，０００を大きく越える兵を用意してあるだろう。アレは、そういう男なのだから。

？水関に篭もる将達についても、計画が無駄に終わることは間違いないでしょう。教経自身は関の上で昼寝をしているのが目撃されている。攻め立てようと騒ぎ立てようと、全くの無駄。その配下の将は、程？は教経の膝の間に収まって寝ており、無駄。関羽は常に教経の側に控えており、教経を狙った矢を全てはじき返していた。あれも、恐らく堪えない類の人間だろう。無駄。張遼についても、ケラケラと笑って酒を呑んでいるところが目撃されており、無駄。一番駄目そうな華雄に関しても、あるときから全く罵声に反応せず、侮蔑を込めた目で罵声をあげる兵を眺めているだけだ。あれも、相手にしていないのであろうから無駄。

此処は、当初の案に固執するべきではない。連合軍の兵も休息を十分に取っているが、相手も十分休んでいる。順番次第だが、最大でも５０，０００程度の連合軍が？水関に攻め掛かっても、３０，０００で完全に対処されてしまう。相手側の兵は多い場合でも１００，０００程度でしょうから、この際連合軍で一斉に押す戦をしてみてはどうかしら。そうなれば、教経と雖も対処しきれないはず。戦において、数とは全てを凌駕するのだから。

只そうなると、連合軍側の編成が鍵になるわね。有象無象が１００，０００寄せたところで前線を混乱させてしまうだけで望んだ戦果を得られないでしょう。教経が強襲を掛けてきた時にしっかりとそれに備えることが出来ていた孫策。強襲を受けながらその勢いを止めようと奮戦していた袁紹配下の劉備。そして、この私。その３つの軍を核として３方向から圧力を掛ける。これなら、どうかしら。

……恐らく、行けるでしょう。

麗羽を説得しなくては。まぁ、簡単なことだけど。『華麗なる麗羽ならこの策の効果が分かって、許可を出してくれるのでしょう？まぁ、既に考えついていてそれを私に言わせているだけなのでしょうけど』とでも言ってやれば、あの馬鹿は直ぐにでも許可してくるで

しょうからね。

「秋蘭、麗羽に会いに行くわ。膠着しつつある戦線を大きく動かして現状を打開する。その策を麗羽に認めさせる為に、ね」

「御意」

教経、悪く思わないでね。私に素直に従わない、貴方が悪いのよ？

ふふっ、貴方がどうするのか、本当に楽しみだわ。

～教経　Ｓｉｄｅ～

？水関で防戦を始めて、そろそろ一月になる。

奴さん達は間断なく攻めて俺たちを奔命に疲れさせるつもりで居る

のだろうが、残念ながら全く意味がない。なにせ、？水関の後側に陣屋を構築してそこでぐっすり眠らせているからなぁ。

戦を始める前、？水関にいる兵を三分割した。

抗戦組、待機組、休息組。各２５，０００。これをローテーションさせているのだ。基本的に２５，０００で対応することとし、寄せ手の将や兵数に応じて待機組も参加させる。寄せ手が交代したらこちらも交代させる。勿論、疲労が激しい場合も交代させる。今まで、それは上手く機能している。

「さて、そろそろ董卓様と俺様からの心ばかりの贈り物をお届けに上がる使者が、それぞれの戦場に到着した頃かな？」

「恐らく、到着したと思うのですよ。呉郡に関しては多少心許ない気もしますが、それでもあと僅かというところまでは行き着いていると思うのです」

「なら、そろそろ？水関を放棄するか」

「ちょっと待ちや、経ちゃん。もう？水関を放棄するんか？」

「あぁ、放棄する。あと２ヶ月もしない内に、それぞれの故郷から『董卓様・教経様有り難う』というビデオレターが届くはずだからねぇ」

「びでおれた－？」

「あ～、とにかく、俺たちに感謝している、その恩人に対してなんたることをしているのかこの馬鹿息子め、とかいう手紙なり便りなりが前線に届くって事だ」

「成る程」

「そうなると、こいつらは領地に帰っちまう可能性がある。それは駄目だ、許さない。袁紹の目的を果たす為の捨て駒として、しっかりとその役割を果たさせてやる必要がある。そうでないと、袁紹は満足しないだろうよ。自分の目的を果たす為に諸侯を顎でこき使い、目的の一つである董卓討伐は叶わなかったが洛陽奪取には成功した。

名家でない有象無象共が自分に傅くことも確認出来たし、先ずは満足ですわ、となるだろうからな。その為には、そろそろ勝利を諸侯と馬鹿に味わわせる必要がある。その勝利の味が忘れられずに未練がましくいつまでも虎牢関に攻め掛かって貰う為に、な。だからこその？水関放棄だ」

「……改めて経ちゃんの口から聞くと、ホンマにえげつないな、自分」

「褒め言葉にしかならんよ、その言葉はな」

「教経様、放棄するのはよいのですが、不自然に過ぎませんか？」

「あぁ、そうだろうな。だから、不自然で無くす必要がある」

「打って出て、形勢不利と見て退却する。そう言う形を整える、ということですね？お兄さん」

「そうだ。その為に皆には死んで貰う。俺の為にな」

「今更に打って出ると、逆に勘繰られはしないか？」

「だから、お前さんに芝居をして貰うのさ、華雄。武士には申し訳ないことだがな」

「芝居？」

「そうだ。やはり罵声には我慢が成らない、だから飛び出した。それに引き摺られて、俺たちも関外で戦わざるを得なくなった。哀れ、親董卓連合軍はその敗亡に向かう第一歩を踏み出してしまったのだ。……なんとも悲しい、良い京劇になりそうな、お涙頂戴的なシナリオが用意してあるんだよねぇ」

「……経ちゃん、そのニヤニヤした顔で言われても全くこう、迫ってくる感じがせぇへんわ」

「ククク、奴ら、乗せられているとも知らずに、華雄を馬鹿にして勝った勝ったと騒ぐんだろう？これが笑わずにいられるか？あははははは」

「ふっ。お前がそういうのだ、間違いなく成功するのだろう。私は月様の為になるのであれば別に何でも構わない。直ぐにそれを実行するとしよう」

「華雄、自分ホンマ変わったなぁ」
「霞、『士別れて三日、即ち更に刮目して相待すべし』、だ」
「成る程、正しく今の華雄殿に相対する人間全てが心得ておくべき金言ですね」
「まぁ、そんなわけだ。次に連合軍が攻め寄せてきたら、その罵声に猛々しく応じて関から飛び出してくれ、華雄。但し、深追いはするなよ？まぁ、お前さんに限ってそんなことはしないと思うが」
「任せて貰おう。心配については、当然だろう。私ならそうしたであろうからな。だが今の私は武士だ。そのような愚にもつかぬ事はせぬ」
「良し。では、関から撤退する際の撤退先だが、俺たち平家は山へ移動する。華雄、お前さんは虎牢関へ移動してくれ。お前さんの変貌ぶりを見て、きっと呂布と陳宮も思うところがあるはずだ。奴らが関外で戦おうとした時に、それを説得してやってくれ」
「わかった。恋とねねについても、承った。必ず、分かってくれるだろう。月様の為なのだから」
「あぁ、宜しく頼むぜ。霞、霞は俺たちと一緒に来てくれ」
「了解や」
「兵の振り分けは、平家軍２３，０００と霞の率いる隊の内１０，０００が山へ。華雄率いる隊と霞の隊の残りは虎牢関へ。そういう形にしよう。これで、山中に３３，０００、虎牢関に６８，０００ということになる。一戦して減少したとしても、虎牢関には大体６５，０００程度の兵が居れば抜く事は出来んだろう。華雄と霞。上手くやってくれると信じている。余り無駄死にをさせないように頼むぜ？風、全軍の撤退時期について、見極めてくれ。撤退すべきと思ったら、銅鑼を鳴らしてくれればいい。
華雄。虎牢関では、軍師に稟が付いている。アレが居る限り、負けはない。間違いなくな」
「では、私は虎牢関に到着したら、郭嘉の指示に従うとしよう。間違いないのだな？」

「あぁ、俺など問題にならぬ程に頭が良い。彼女の言に従っていれば間違いない。それは保証してやる」
「わかった」

さて、そろそろ華琳辺りが痺れを切らしてくるんじゃないのか？それとも、孫策かな？いや、諸葛亮が袁紹を上手く乗せて献言するということも考えられる。
まぁ、どうでもいい。俺の手の内で踊ってくれる分には、誰がどんな格好でどんな踊りを踊ろうと構わない。これは、俺が描いた俺の戦だ。俳優として、精一杯俺の期待に応えてくれれば文句はないさ。
舞台の上であろうと、舞台袖であろうと、な。

～朱里　Ｓｉｄｅ～

「諸葛亮様、敵軍が？水関から飛び出してきました！『華』の旗を掲げ、一直線にこちらに向かって来ます！」
「わかりました。予定通りにお願いします」
「はっ」

敵が、餌に食いついた。
？水関に篭もる将の内、最も堪え性がない華雄さんに向けて罵声を浴びせ続けること一月。漸く華雄さんがその本来の性質を剥き出しにして、親董卓連合軍を敗亡の沼地へ誘ってくれた。

「鈴々ちゃん、後は宜しくね。気をつけてね」
「わかってるのだ！鈴々は強いのだ！行ってくるのだ！」

鈴々ちゃんが前線へ趨く。
戦線は、押され気味だ。華雄さんは猪だが、その武勇には確かなものがある。

「鈴々ちゃん、大丈夫かな」
「大丈夫ですよ、桃香様。それに、こちらは私達だけで攻めている訳ではありませんから」
「……うん、そうだよね。こんな策を思いついていたなんて、やっぱり袁紹さんは凄いね」
「それは、……そうですね……」

それは、違うだろう。そう思うが、ここで強く袁紹を否定しても頑なに成るだけだと思い、その言葉を飲み込んだ。桃香様は、袁紹にすべてを任せようと思っているのでしょうか。

「あ、？水関から全軍が出てきているみたいだよ？」

?水関から、張遼軍が曹操軍へ向けて一斉に掛かっていく。平家軍は孫策軍に向かっている。
桃香様と袁紹のことを考えるのは、後だ。今は、目の前の戦に勝たなければならない。

「手筈通り、更に華雄さんを挑発して下さい」
「畏まりました！」

伝令が走っていく。前線に到着すれば、聞くに堪えない罵声を浴びせ始めるだろう。

『華雄の猪！』
『華雄の字無し！字を付けてくれるような人が一人もいないと見えるな！』
『華雄の真名無し！どうせ親に捨てられたのだろう！貴様は不要な人間だったのだ！』

これを聞けば、間違いなく突出してくるはずだ。
その時に、華雄さんを討ち取る。出来れば、生け捕りにして欲しい。
敵軍の内情を把握したい。

いつ、華雄さんは突出するのか。そのことばかりを考えていた。
彼女が、既に私達の知る彼女ではないということも知らずに。

～雪蓮　Ｓｉｄｅ～

？水関から敵軍が一斉に攻め掛かってきた。
可哀相に、華雄の猪に引き摺られて、勝てる戦で負けてしまうなんてね。
こちらにも軍が向かって来ている。
『揚羽蝶』の旗印だ。浅葱色にダンダラ模様の羽織を捜す。
……先頭にいる。

「来たわね、平教経が」
「……雪蓮、駄目だぞ」
「……わたしまだ何も言ってないんだけど？」
「お前のことだ。どうせ平教経とやり合おうというのだろう？」
「いいじゃない。どうしても挨拶しておきたいのよね～」
「駄目だ」
「ぶ～ぶ～」
「祭殿に折檻して貰うか」
「も～、わかったわよ。じゃぁ、わたし後ろに下がってるからね」
「ああ、そうしていてくれ」
「はいはい」

そういって、後方に下がる。でも、わたし、きっと迷子になっちゃ

うと思うな～。冥琳。偶々、本当に偶々行き着いたところが平教経の前だったのよ、本当。嫌になっちゃうわよね？わたしも吃驚しちゃったのよ、本当よ、本当。……うん、これで完璧ね。

「じゃぁ、ご挨拶に行ってこようかしら」

馬に跨り、平教経の下へ。どんな奴なのかしら。

馬を下り、前線で剣を振るっている平教経に向かう。
その周囲を7人の兵が囲んでいる。

「お前を殺して、俺たちは出世するんだ！」
「7人で完全に囲んでいるんだ！殺れるはずだ！」
「命乞いをするなら今の内だぞ！ははは！」

兵達は自分たちの優位を疑っていないようだ。
確かに、あの状況から抜け出すのは難しいだろう。

「……お前さん達、もしかしてまだ自分たちが死なないとでも思ってるンじゃないかね？」
「何言ってやがる！死ぬのはお前だ！」
「残念だねぇ。知ってたかね？身の程を弁えないと、不幸になるンだねぇ。……呉れて遣るから遠慮無く受け取ってくれ。不幸を、な」

そう言った次の瞬間、平教経から凄まじい殺気を感じた。
わたしを誘っているのかしら。こんなに興奮を覚えるなんて。

平教経は、見たこともないような疾さで兵達の間を駆け抜けた。それこそ、あり得ない疾さで。気付けば、周囲にいた兵達は皆死んでいた。皆、首を刎ねられて。
孫家の兵に弱兵は居ない。祭が徹底的にしごいているからだ。だが、その兵達をいとも簡単に斬り伏せている。それも、首を刎ねているのだ。そう簡単には出来ない芸当だ。

「あなた、やるじゃない」
「……誰だね、お前さんは」
「私は、姓は孫、名は策、字は伯符。孫家の総大将よ」
「……俺は、姓は平、名は教経。字も真名もない。平家の頭領をやらせて貰ってるよ」
「そう、じゃぁ、早速だけど、死んでくれるかしら？」

不意を突いて、胴を斬りつける。
平教経は少しだけ後に下がり、私の剣を躱した。
完全に、見切られた。ぞくぞくしてくる。

「この状況で腕試しかね？殺せる時には確実に殺しておいた方が良い、と俺は思うんだがねぇ」
「あら、腕試しだと分かるわけ？」

「分からいでか。殺すつもりなら胴を両断するつもりで踏み込んでくるだろうに」
「へぇ……じゃ、今度こそ本当に死んで？」
「お前には出来ないかも知れないがね」

平教経と対峙する。
わたしと平。二人の間の空気が固着する。
……隙がない。であれば、隙を作るしかないわ。

剣を下から斬り上げる。但し、地面を刺して土塊を飛ばしながら。
だが、平は目を閉じず、真っ直ぐに私に向かって来た。

冗談じゃない。
土塊を顔に向けて飛ばしているのに、瞬き一つせずにそのまま突っ込んでくるなんて。
思う間に、目の前まで平が来ていた。
これは、拙い。斬られる。
反射的に首を守るように剣を立てた。しかし、平は笑いながらその片刃の剣を寝かせ、胴を突いてくる。躱せない。間に合わない。
腹部に来るであろう衝撃に耐える為に身構えていたが、突然彼は後に飛び退った。
私と彼の間を、一本の矢が通ったようだ。

「成る程、正々堂々と戦う事もない、か。誠、その腐った性根には感服仕った」
「待ちなさいよ！わたしがそんなことするはずないじゃない！」
「俺はお前さんのことなど知らん。お前さんがどういう人間かなど、今の今まで知らなんだ。その俺に、わたしがそんなことするはずない、などと言ったところで、只の言い訳にしか成らないのではないかね？」

「策殿！離れられよ！その男は弓で射殺す！」

そう言って、祭が弓で矢を射る。弓勢が強い。不意打ちに近い形で矢を射掛けた。射ているのが祭であることを考えると、平は死ぬ。

「ば、馬鹿な」

「……矢を手で掴むことが、そんなに珍しいかね？こんな曲芸紛いのことは１０かそこらで出来るようになっていたンだがねぇ。まぁ、水を差してくれた礼をしなきゃならンだろう。お前さん達二人には此処で死んで貰うことにしよう。その方が、後腐れが無くて良いだろう？そうは思わんかね」

言いながらこちらに向かって奔ってくる。

さっきのアレ。間違いない。きっと首を刎ねようとしてくるだろう。剣を立てる。

「！」

防ぐことは出来たが、剣を撥ね飛ばされてしまった。

「……どうやって防いだのかね？太刀筋を見て反応することなど出来ないだろうに」

「勘よ」

「……勘かよ……まぁ、いい。どのみちここでお前さんは終わりだ」

もう一度、来るつもりだ。祭が立ちふさがるが、恐らく二人とも殺されてしまうだろう。

……冥琳、蓮華を頼むわよ。絶対に、孫家の宿願を果たして頂戴。

その時、突如銅鑼が鳴った。

「……残念だが時間のようだ。此処でお前さんを殺しておいても良いンだが、時間がないからな。また次の機会にその首を刎ね飛ばすことにするさ」

「……今殺しておかないときっと後悔するわよ？」

「……かもしれん。が、今は退却しなきゃならん。目的を忘れて戦いに酔うなど、低能のすることだ」

そう言って、戦場をうろついていた馬に跨った。

「ではな、孫策。いずれ会うこともあるだろう。その時、お前さんが敵であればその首貰い受ける。……その時まで、壮健でな、孫策。……はやっ！」

馬の胴を蹴り上げて奔らせ、撤退していく。その後を、平家軍が整然と付いて行く。

見れば、張遼の隊も華雄の隊も一斉に退いているようだ。

「祭、今よ。？水関を落とすの！」

「しょ、承知！しかし、策殿、あとできっちりとお話をさせて頂きますからな！？」

「わ、分かってるわよ」

今は、？水関を落とすのが先だ。冥琳、怒るんでしょうね……はぁ。

……平教経、か。

蝶の如く～６０～（前書き）

ネタです。壊れてます。
お気を付け下さい。

蝶の如く～６０～

～星　Ｓｉｄｅ～

？水関が陥落した。
主の思惑通りに。

前線から虎牢関へ撤退してきた華雄が、そう言った。聞けば、華雄が挑発に乗った振りをして敵軍に攻撃を加える為に関の門を開放して進み、それを切っ掛けとして一戦して退いてきたようだ。現状、主達は予定通り山中の陣へ移動しているらしい。
挑発に乗った振りではなく、我慢出来ずに乗ってしまったの間違いであろうが。

「やれやれ、漸く私の出番かい。待ちくたびれちまったよ」
「涼州魂を見せてやろうぜ、お母様！」
「……ご主人様の為にかい？アンタも本当に好きだねぇ」
「ち、違う違う！そんなんじゃない！」
「素直じゃないねぇこの娘は。パパッと襲って身籠もって来いってんだ」
「★■※@▼∀っ！？」

……馬親娘は相変わらずの様子だ。
だが、碧。主を襲うなど出来はしないぞ？５人もいるのだからな。
そう簡単には突破させません。

「恋殿、敵軍がやってきたら、打って出てやっつけるのです！これだけの兵があれば、可能なのです！」
「ちんきゅ、頑張る」

「はいなのです！」

ふむ。主が言っていた通り、今回の戦の全貌をしっかりと見据えた戦いが出来ないようだな。稟や風とは大違いだ。未熟に過ぎる。

「ちょっと待ってm」

「待って貰おうか」

……華雄に私の言を遮られた。

華雄？

「なんなのですか！」

「恋、ねね、月様の為にどうしても虎牢関を抜かせる訳には行かぬのだ。関外に出て戦うのは止めてくれ。それが切っ掛けとなり、平の策が成らぬうちに虎牢関が抜かれてしまっては駄目なのだ。それでは、月様が死んでしまう」

「何を言っているのですか！勝てば全て問題無いのですぞ！恋殿が居るのです、勝てるのです！あの男が言っていることは杞憂に過ぎないのです！そうなるとは限らないのですぞ！ここで、恋殿の強さを連合軍の諸侯に見せつけてやるのです！華雄も共に出撃してその名を揚げると良いのです！」

「……ねね、お前は私よりも頭が良いはずだ。分かって居るだろう。勝ってはならぬのだ。戦場での勝ちは、月様の死に繋がる。それを見過ごす訳にはいかんのだ。頼む。平の指示に従って、関を守って戦ってくれ。この通りだ」

そう言って、華雄が土下座をした。

信じられぬものを見るような顔をして、ねねが華雄を見る。

私も、信じられぬ。この女は、自分の武勇を誇ることしかできない猪武者だったはずだ。それが、董卓殿の為に恥も外聞もなく土下座

までして、何とか董卓殿の為になる様に事態を向かわせようとしている。

……何があったのだ、華雄に。

十中八九、主がなにかをしたのであろうが、こうまで人が変わるものなのか。

「ねね、華雄が正しい。恋は我慢する。ねねも、我慢」

「……わかったのです。ねねも、華雄が正しいと思うのです」

「……分かってくれるか。済まん、この通りだ。有り難う」

「と、兎に角頭を上げるのですよ、華雄。どうしたのです、頭でも打ったのですか？」

「……あぁ、頭を打った。いや、打たれた。これ以上ないほどに強くな。己の至らなさに気がつけて良かった。そう思うよ」

これは、別人だ。

その在りようの、何と好ましいことか。

「『士別れて三日、即ち更に刮目して相待すべし』、ですね」

「稟？」

「平もそう言っていたが、どういう意味だ？」

「日々鍛錬している者は三日も会わなければ見違えるほど変わっているということです。転じて、いつまでも同じ先入観で物事を見ずに常に新しいものとして見よ、という意味になります。教経殿も、同じ事を言っていたのですか？……そうですか」

そう言って、稟は嬉しそうにしている。

……こういうところは、稟に敵わない。思考の進め方が、二人は良く似ている。稟がそう嬉しそうに言っていた。全く、すっかり骨抜きにされてしまっているな、稟。だが、あれくらい素直な方が主は

喜ぶのかな……。

「ほらほら、アンタ達、愛しの君のことを思って股を濡らすのは後にしな」

「碧！わ、私は別にそんなことはありません！」

「お、お母様！何言ってるんだよ！これから戦なんだぞ！？」

「やれやれ、翠、アンタも濡らしてたのかい？」

「そんなことあるわけないだろ！星も何か言ってやってくれよ！」

……ふむ。

「そうだな、稟も翠も濡らすのは戦の後にした方が良いだろう。主に逢った時にたっぷりと可愛がって貰うと良い」

「せ、星！……でも教経殿はそんなはしたない私が……」

「★■※@▼∀っ！？」

ククッ。

稟はどうやらそのまま旅に出たようだ。いつも通りで何よりだな。

平家名物を見れば、皆落ち着くことだろう。これも軍師としての努めだ。励むが良かろう。

翠は固まってしまっているが、何やらぼそぼそと呟いているようだ。

何々？私みたいながさつで可愛くない女でも可愛がって貰えるのかな、とな？ふむ。可愛がって貰えるとは思うが、憧れ程度の思いで主に集ってこられるのは迷惑でなぁ？もう少しその思いを育んで、愛と言えるものになったなら考えてやらんでも無いがなぁ？

碧はニヤニヤと二人を見ている。

どうやら、私に似て人で遊ぶことに楽しみを見いだせる類の人間のようだ。同好の士を発見した。固く握手を交わす。

「アレがご主人様へ抱いている感情が愛情にまで育ったら、しっかりけしかけてやっとくれよ」
「まぁ、考えておいてやろう。ただ、一番の蝶は私だがな？」
「別に何番でも良いのさ。アレが思いを遂げられるならねぇ」
「碧自身もそうではないのか？」
「私は別に良いのさ。アレのところにご主人様が通ってくるようになったら、ちょいとお裾分けして貰えばいいんだからねぇ」
「成る程、強かなことだ。その時、主はどんな顔をするのかな？」
「何だかんだと言って、アレは英雄なのさ。色を好む。現状を考えれば分かるだろう？一緒に美味しく戴かれちまうだろうさ」
「……嬉しそうだな？碧」
「それはそうさ。私だって女だ。惚れた男に抱かれたいと思うのは当たり前のことだろう？」
「まぁ、そうか。しかし、強敵になりそうだな」
「それは安心してくれて構わないよ。私は別にアンタ達のようになりたい訳じゃ無い。死ぬ前に、惚れた男に一度は抱かれてみたいという程度の思いなのさ」
「……ふむ。急がねばならんのではないか？」
「まだ大丈夫だろうさ。あと１０年くらいは生きて居れそうだからね。恋をすると、若返るものなのさ、女っていうものはねぇ」
「違いない」
「お前達、昼間っから何を言っているのですか！」
「馬騰、趙雲。少しその、周囲を考えて発言をだな……」

なんと、華雄に説教される日が来るとは。
碧を見ると、碧も目を見開いてこちらを見ている。
その顔がなんとも珍妙で、笑ってしまう。
碧も、どうやら私の顔が面白かったらしく、笑い始めた。

「ははははははっ。いや、これは面白いな。参った、参った！はは

ははははっ」
「あははははっ。ま、まさか華雄にねぇ。あははははっ、星、お前さんの顔、傑作だったよ。あははははっ」
「……何が面白いのだ？」
「……ねねは何となく分かるのです」
「……？」
「……はしたない私に教経殿は……」

おお、稟がそろそろ発射するか。

「ブーッ！」
「うわっ！な、なんなのですか！これは！」
「へぇ。これが平家名物血の池地獄かい。なかなか凄いモンじゃないか」
「お、お母様！これ死んじゃうだろ！？星、何落ち着いてんだ！」
「あぁ、これはな、普通だ。いつものことだから気にしなくてもいい」
「……虹、きれい」
「いや、恋。それは汚いと思うんだが」
「……なんで？」
「……の、教経殿、私は、私は……ブーッ！」
「倒れたまま二度目の発射とは。これは二段構造ロケット……サターンＩＢ？終に人類の技術も此処まで来たのだ！征け！アポロ７号！人類の夢を乗せて！」
「……どこに行くというのですか……」
「知らん。私に聞くな」
「宇宙空間だ。これから地球を１６３周する」
「うちゅうくうかん？ちきゅう？」
「何なんだい、それは」
「実は、私にもさっぱり分からん」

「……誰でも良いので、トントンをお願いします。その、意識が遠くなってきましたので……見える、私にも敵が見えるぞ……」
「……袁紹か？」
「知らん」

相変わらずの平家の雰囲気。
負ける訳にはいかないのだ。これを、失う訳には行かないのだ。
アポロに乗って宇宙へと旅立った稟を見ながら、そう思っていた。

……どうでも良いが、締まらないことこの上ないな。

～教経　Ｓｉｄｅ～

「お～凄いじゃんこれ」
「……臭いのです」
「経ちゃん、何でこんなに牛が居るのん？」
「教経様、これは？」
「碧に言って持ってこさせたもの、その１の『牛』だ。哺乳綱ウシ目、偶蹄目の、ウシ科ウシ亜科の動物で野生のオーロックス、あぁ、これは絶滅してるンだが、を基にして、新石器時代に西アジアで家畜化されたと言われているねぇ」
「いえ、そういうことではなく……というか、何ですかその説明は？」
「学術的な牛の説明ですが、何か？」
「愛紗ちゃん、お兄さんはいつも通りのへぶん状態なのです」
「成る程」
「風、何度も言うが俺はあんな顔しない。愛紗、納得しないように。霞、笑うな」
「いやいや、こんな時やのに、あんたらはホンマ何も変わらへんのやなぁって思ってなぁ」
「いちいちこんな時用の自分を用意するほど俺は人格破綻してないんだよ」
「……教経様、破綻していると思いますが。ご自覚がないのでしょうか？」
「僕のどこが破綻しているって言うのさ！」
「主に、そういうところです」

最近愛紗がお母さんみたいだ。

「……教経様、何か折檻でもされたいようなお顔をなさっておられ

ますが、折檻致しましょうか？」

ま、まさか此処にも乳タイプが！もとい、ニュータイプが！
流石に愛紗だ。良い乳、良い尻、良いふとももも。
乳！尻！ふとももも～～～～～～！！！！！！！
乳！尻！ふとももも～～～～～～！！！！！！！
乳！尻！ふとももも～～～～～～！！！！！！！
乳！尻！ふとももも～～～～～～！！！！！！！
乳！尻！ふとももも～～～～～～！！！！！！！
はぁ、はぁ……。
ふと、目の端に風が映る。
……うん。頑張ってくれ。風。俺も頑張る。

「……お兄さん、何となく風に喧嘩を売っていませんか？」
「大丈夫だよ、風。風はこれから大きくなるかｒ　へブッ！」
「オ　ニ　イ　サ　ン　？」
「いやいや、俺が好きなのは、風みたいな女の子なんだよ？風」
「それはわかっているのですよ。お兄さん」

……ヘルメットがなければ即死だった。
何か額に刺さっている気がするが気のせいだろう。うん。気のせいだ。
此処はギャグパートだ、何とか致命傷に止めることが出来たはずだ。
……？致命傷に？あれ？ヤヴァイんじゃね？

「ア、アニキ～、も、もう、駄目だぁ～」
「の、教経様！？」
「やれやれだぜ、なのです」
「……第三部ではそれが正義だ……グハッ」
「つ、経ちゃん、経ちゃん！？」

「……」
「だれかたすけてください～、なのです」
「……ひ～とみ～をと～じてぇ～」
「……死ぬんならはよ死なんかい！」
「おうふっ！」

扱いが、ちょっと酷いんだねぇ？この世界。
この碌でもない、素晴らしい世界は。
あ～、缶コーヒー飲みてぇ。

は？一寸皆さんこっち向いて下さい？
あ、知ってる知ってる、これあれだろ？トミー・リー・ジョーンズ
的に考えて。
ピカッと光って記憶ｇ

蝶の如く～61～（前書き）

頭の故障もやや沈静化しました。
再開します。

蝶の如く～61～

～教経　Ｓｉｄｅ～

「教経様、この『牛』は何なのです？」
「まぁ、その内に分かるさ。大変役に立つと思うんだよねぇ」
「はぁ。まあ、教経様がそう仰るのであれば」
「経ちゃん、何に使うのん？」
「まぁ、その時になれば分かる。その時になってどれ程の効果があるかを見ている暇はないだろうがね」
「ふ～ん」
「そんなことは置いておいて、現状の確認をするのですよ」

……風は察して居るみたいだな。
まぁ、春秋戦国時代に実際にやった人間が居るからねぇ。

現状の確認。
たしか、牛について説明して、シャア的なヘルメットを被っていたお陰で致命傷で済んだ俺は、トミー・リー・ジョーンズ的な黒服にこっちを向いてと言われて……？
……！　頭が割れるようにイタい。
痛い！頭が痛いよ！兄さん！

「お兄さん、へぶん状態は後でお願いします」
「教経様？」
「……はい、済みません」

ディモ～ルト　ディモ～ルト　やれやれだぜ。

「現状ですが、連合軍は虎牢関前に軍を展開しています。その数は約１００，０００。一方で、山中の風達に対しても警戒しているようです。約２０，０００の兵をこちらに差し向けています。袁術軍のようです」
「へぇ。２０，０００程度で抑えられる、と？」
「そう思っていると思うのですよ、お兄さん」
「……じゃ、決まりだな。まずそいつらを叩いてやるか。そうすればこっちにより多くの兵を向けてくるだろう」
「ですが、いきなり出て行くのは良くないと思うのですよ。？水関で既にやりましたので、警戒しているはずなのです。此処は、一旦山中へ引き摺り込んで戦線を膠着させた上で、やるべきなのです。？水関が基準になるはずですから、一旦山塞へ篭もった風達が出てくるとは思わないのですよ。此処には、華雄さんがいませんから」
「分かってるさ。先ずは山へ引き入れて落石だの何だのしっかり喰らわせてやる」
「……それならいいのですよ、お兄さん」
「落石が成功したら、こっちに来た敵を適当にあしらいながら出血を強い、最終的には牛に頑張って貰う間に虎牢関へ移動する。俺は、敵中突破するかな。お前さん方はどうする？」
「風は、陣の後の道から行くのですよ。負傷兵達を運ぶのにはどうしても広い道が必要ですから」
「では、私も風についていきましょう。負傷兵達を護衛するものが必要でしょう。霞、教経様に同行し、御身を守ってくれ」
「わかっとる。愛紗も風も安心しとってええで。ウチが請け負ったるわ」
「霞の護衛か。これは光栄だねぇ。安心出来そうだ」
「大船に乗ったつもりでおりぃ！」

……ククク。第二章開幕だ。第三幕まで一気に行くぞ？ここからが、お愉しみだ。

誰が主演なのかそんなことは俺は知らンが、主演女優を張りたいなら、しっかり演技してくれよ？袁紹。ああ、お前は馬鹿だから台詞が覚えられないかもなぁ。でも大丈夫さ。お前の役どころは、俺に良いようにあしらわれてイライラした後、洛陽を手に入れて有頂天になり、その後の人生で高転びに転ぶ役なンだからなぁ。台詞なんて必要ない。その時の感情をありのままに表現してくれればいいさ。まぁ、この戦の直後は高転びに転ぶなんて想像も出来ないンだろうがねぇ。

だが、将来華琳にやられちまう基を此処でお前さん自身が作ることになる。洛陽を手に入れた。その事がお前の慢心に繋がるのさ。漢王朝なんていう、既に腐っちまって何にも使えないガラクタを手に入れて、それがこの世界で唯一無二の、高貴な価値を持つものだと信じて居るが為に、な。人は家柄や組織に従うんじゃない。人は人に従うのさ。その事が理解出来ないお前さんには丁度良い役どころだと思わんかね？

今の内に言っておいてやるよ。逢えないだろうからなぁ、その時には。

主演女優賞、おめでとう袁紹。そして、さようなら。

アリアリアリアリアリアリアリアリアリーヴェデルチ！

「……やはり折檻が必要ですか」

ＮＯ　ＴＨＡＮＫ　ＹＯＵです、ヒョードル様。

何故懲りもせずに阿呆な事をするのか？とな？

フハッ！だぁ～から俺はアホなのだぁ～！

～琴　Ｓｉｄｅ～

「今だ、全軍突貫して虎牢関を落とすのだ！」

孔融様の指揮の下、虎牢関へ攻め掛かる。関の上から間断なく矢が放たれてくる。だが、私も弓の腕には覚えがあるのだ。しっかりとお返しをしておく。そのように身を乗り出して矢を射ようとするから、死ぬことになるのだ。

「梯子を！梯子を掛けろ！」

「早くしろ！待ってる間にも味方がやられてるんだ！急げ！」

梯子を何丁も連ねて城壁に掛ける。

……虎牢関に乗り込んで敵将を斬る。それで、士気は大いに揚がることになるだろう。

友軍と友に、梯子を駆け上げる。上がりきったところで、いきなり槍を突き出してきた。
……だが、想定通りだ。予想していないとでも思っていたのだろうか。槍の穂を斬り飛ばし、そのままの勢いで関の上に躍り込む。すれ違いざまに、槍を持つ雑兵を斬り伏せる。

「我が名は太史子義！誰ぞ、私に殺されたいものは居ないか！」

そう名乗りを上げた私に、近づいてくるものが居る。

「大した自信だ。我が名は趙雲。趙子龍。平教経が槍なり！この私が相手になってやろう！」
「退け、下郎！平教経の首を所望！」
「馬鹿め、主は山中の陣に居られる。大体、貴様のような下郎を主が相手にするはずがあるまい。私でも惜しい程なのに」
「……口だけは達者なようだな」

身の程を思い知らせてやる必要があるだろう。
そう思い、抜き打ちに斬りつける。

「ふむ。なかなか早いが、主にはほど遠い、か。まあ、アレをお前に求めるのは酷というものだろうが」

私の抜き打ちを躱し、そう嘯く。
……思い知らせるような身の程ではないようだ。私と互角か、少し上かも知れない。

「では、こちらからも行くぞ！はいっ！はいっ！はいっ！はいっ～！」

四肢の付け根を狙って、次々に突きを繰り出してくる。
……疾い。避けることは難しいだろう。剣でいなして軌道を逸らしつつ隙を窺う。

「……まさか、全ていなされるとはな」
「意外か？出来るのが自分だけだとは思わぬことだ」
「思っては居らぬさ。何せ主にはまだ一度も勝っていないのだから、な！」

槍を横に薙いで来る。
これも疾いが躱せぬ疾さではない。後ろに下がって躱す。

「……主の剣と似た剣を持っているから、てっきり主と同じように対処をしてくると思っていたが、どうやらそうではないらしいな」
「抜かせ。貴様の主のことなど知ったことか。平教経のことで知っているのは、奴は生きている価値がない極悪人だということだ」
「……ほう、悪、とな」

……挑発に乗ってきたな。

「そうだ、極悪人だ。何が天の御使いだ。洛陽で圧政を布く董卓と結託し、無辜の民を搾り取ろうとしているだけの極悪人ではないか！生きている価値がどこにある！奴のような人間の出来損ないは、この世から消し去るべきなのだ！貴様ほどの武人が、何故あの様な屑に従っている！あの様な男が、この世界に安寧をもたらせるはずがないではないか！その望みは、醜悪な我欲に塗れたものに違いないのに！」
「貴様、主を、愚弄したな……？」

良い感じだ。もう少し頭に血が上れば、斬り伏せることも可能だろ

う。

「どうした、悔しいのか？事実を言い当てられて」

「貴様！」

よし、来た！

「待ちな！星！」

槍を手に飛びかかってこようとした趙雲を、貫禄のある女が制止した。

……近い。此処まで接近されるとは。私もまだまだ鍛錬が不足している様だ。

「碧、黙ってみていろ。この女を殺す」

「まぁ、待ちなよ。此処は私に譲って貰おうか？」

「何だと！」

「……星、冷静になりな。アンタ、挑発されてたんだよ。……ったく、ご主人様のことになると趙子龍も形無しだねぇ」

「む……」

「私に任せて貰おうか、星。アンタはあっちへ行って他の奴らに対処しておきな。これは、平家軍副将としての命令だ」

「……分かった。だが、その女には思い知らせてやって貰わねば困るぞ？碧。主も、主が抱いている夢も、理想も、その全てを悪だと断じたも同然なのだからな！」

「……ああ、分かって居るともさ。だから、私が怒っているんだろう？」

「……太史子義、と言ったな。命があったら覚えておくがいい」

「待て、逃げるのか！趙雲！」

「……アンタ、誰を目の前にしているのか、分かって居ないようだ

ねぇ？」

いきなり、剣風が目の前に湧き起こる。

……剣を振った。只それだけだ。だがその剣風は、触れれば只では済まないことを如実に語っていた。

「……太史子義だ。貴女の名前を聞こうか」

「……馬寿成。征西将軍さ。今は、平教経の配下だ」

馬寿成。義侠の人と聞くこの女が、何故極悪人の下に付いているのか。

「……何か弱みでも握られているのか？私で助けになれることがあれば、手助けするにやぶさかでないが？」

そう言った私を、馬騰は嗤った。

「あははは っ。アンタ、おめでたい頭をしているねぇ。常に自分は正しく、敵が悪い。そう考えているのかい？」

「当然だ。私は正義をこの剣で為す為に生きているのだから」

「正義、ねぇ。アンタ、本気で連合軍に正義があるとでも思っているのかい？」

「当たり前だ！洛陽で圧政を布いている董卓に荷担する貴様らよりは遙かに正義に近しい存在だ！」

「……もしそれが全て袁紹の作り上げた嘘だったとしても、かい？」

……嘘、だと？そんなことがある訳がないだろう！四代に渡って三公を輩出した、漢の名族であり、忠臣だぞ？それが何の益あってそのような嘘を態々吐かねばならぬのだ。

「そのような見え透いた嘘に踊らされる私ではない。虚言を以て私を惑わそうとした罪を、その命で購って貰おう！」

右上段から左下段へ斬り下げる。その剣を、馬騰は後ろに下がって躱した。

だが、私の剣は一度行ったら終わりではないのだ。どうやら、見積もりが甘かったようだな、馬寿成。

返す刀で、左下段から右上段へ斬り上げる。だが、馬騰はこれも後に下がることで躱した。

？確かに、斬ったと思ったが。少し遠いのか。間合いが、遠いように感じる。

「……やるようだな。流石は、馬寿成。何故貴女のような人物が、鬼畜共に従うのだ」

そう言って挑発してみる。

「……ふん。私は星ほど純情じゃない。相手にしている人物を見損なうと、死ぬよ？小娘が」

今の今まで無防備に只立っているように見えた馬寿成。

それが、気が付けば目の前に迫っていた。

何故。いつの間に。どうやって？

「流石、と言ってくれたね？その流石の馬寿成から感じる覇気や殺気にしては小さいものだと疑問に思わなかったようだねぇ。これだから、小娘は駄目なのさ。己を韜晦することをしない。駆け引きを知らない。そして何より、相手を恐れることをしない。そういうの

を、阿呆というんだよ！小娘！」
「ぐっ……あ……」
右の肋骨を、その剣の柄で目一杯に叩かれた。
間違いなく、折れた。それが分かった。
今の言からするに、自分の殺気や覇気を押さえて、距離感を狂わせていた、というのか。私は、確かに距離を測っていたはずだ。この目で、確かに。それを、狂わされるとはどういうことだ？
「……不思議そうな面をしているねぇ。簡単なことだ。星と話しをしている時、私は持てる限り全ての殺気をアンタにぶつけていたのさ。星が向こうに行ってから、それを押さえた。アンタの精神は、どうやら私の殺気をきっちりと脅威だと感じていたみたいだねぇ。だからこそ、殺気を押さえた状態を、私が遠くにいるように感じていたのさ。実際は最初と同じ位置に立っていたよ。だが、アンタの体は、差し迫った命の危機が遠のいた為に、私が遠くにいるようにアンタに見せていたのさ。人の体は、その精神に依存する。星を挑発して勝ちをその手中に収めようとしていたんだ。それくらい、理解出来るんだろう？小娘。
……目に見えるものがこの世の全てではないのさ」
「……ぐっ……殺せ……貴様らのような……大悪人に殺されることだけが……心残りだが」
「……まだ、言うのかい。……本当に信じ切っているようだねぇ。馬鹿の唱えるお題目を」
「何が、悪い」
「……その命、一度だけ助けてやるよ。拾った命でしっかり考えてみると良いよ。アンタが、如何に馬鹿なのかについて、ね。
次遇った時、同じ事を言うようであれば、殺す。この私が、必ずね」

私の全身を、かつて感じたことのない殺気が打つ。
直ぐ側に居るように感じるが、居ると感じる場所より遙かに遠い場所にいることを、私の双眸は確認している。これで、私は惑わされたのか。こうも、惑わされるものなのか。

「とっとと帰りな。味方は全員帰りつつあるよ？アンタを見捨ててね」
「くっ……礼は、言わぬ」
「礼を言われる筋合いはないねぇ。お前如き小娘に、私が殺してやる価値はない。只それだけのことさ。良く覚えておくことだね。今日の醜態を」

馬騰の言葉を背中に聞きながら、関から飛び降りて自陣へ向かう。
……いや、逃げる。逃げている。
私は、負けたのだ。初めて、負けた。この世に生を受け、物心ついてから武芸を修めてから後、負けたことがなかった私が、負けた。
それも、完膚無きまでに。殺す価値もないと哀れみさえ受けて。屈辱に、身が震える。悔しい。涙が、零れてくる。
私は、正しいはずだ。奴らが、悪のはずだ。何故、私が正義ではないなどと言うのだ。何故、悪党であるのに、私を殺さなかったのだ。

『目に見えるものが全てではない』

そう言った馬騰の顔と言葉が、頭から離れなかった。

蝶の如く～62～

～雪蓮　Ｓｉｄｅ～

虎牢関への一度目の攻撃も、二度目の攻撃も、失敗に終わった。
そして今、三度目の攻撃も失敗に終わろうとしている。
馬寿成。呂布。この二人の武勇が特に突出している。その周辺に寄せていった兵達は、次々に黄泉路へと旅立っていった。また、防備に当たっている兵の対応も見事なものだ。弓兵は常に関の奥に配置され、下からは見えないようになっている。稀に、無謀にも身を乗り出してくる馬鹿が居るようだけど、それ以外のものは見えない。
そして、その見えない箇所から、大量に弓を射掛けてくるのだ。一斉に。その上で、関の上に呂布と馬騰。そのほかに、華雄。そして、趙雲という将が居る。また、馬騰の娘である馬超も、その母に恥じぬ活躍を見せている。時に鉄扉を開いて騎馬で突撃をしてくる。その時機は、正に此処しかない、というものだ。冥琳が、横で唸っていた。この戦、負けるかも知れない。そう言って。

前方の虎牢関を見やる。
どうあっても、突破させない。そういう意気込みが見える。まるで、炎のように。その気炎は天をも焦がすようだ。かなり苦労をすることになるだろう。そう思う。
只でさえ、虎牢関は堅牢な作りになっている。その鉄扉は、丸太で殴りつけた程度ではびくともしない。残された道は、力尽くで関の壁に取り付き、関の上の敵兵を皆殺しにして洛陽へ向かうか、鉄扉を開いた時に中から勢いよく飛び出してくる騎馬に正面からぶち当たってこれを壊滅させ、洛陽へひた走ることだけだが、孫呉の兵だけでそれを行おうとは思わないし、出来るとも思えない。
何とか鉄扉をこじ開けられないかと諸侯が集まって何度も会合を開

いているが、曹操でさえ有効な解決策を提示出来ていない。此処まで来たら、犠牲は覚悟の上で全ての諸侯の力を結集して、押して押して押しまくるしかない。そうでないと、此処まで来た意味がないのだ。

「雪蓮、平家の山塞に攻め掛かった袁術軍が敗北したそうだ。８，０００名もの死傷者を出して、な。山塞へ向かう道は上に行くほど細くなり、至る所に障害物がある。それをどかそうと立ち往生をしていたところに、落石計を掛けられた、ということらしい」

平家の山塞。平教経以下３０，０００余りの兵が篭もって虎牢関外で抗戦している。
兵力を分散させ、虎牢関へ掛かる負担を軽減しようという構えだ。

「へぇ。それはまたこっぴどくやられたものね～。私達には朗報以外の何物でもないけれど」
「そうだ。これで、この戦が終わった後、随分とやりやすくなることは間違いない。平教経には感謝しても仕切れぬほどだな、雪蓮。……見逃して貰ったことだしな？」
「……わかってるわよ、冥琳。もう無茶なんてしないから」
「どうだか。どうせ平教経を目前にしたら、また駆けて行くのだろうと思っているのだが？」
「ぶ～ぶ～。わたしそんなに命知らずじゃないってば」
「……それなら、最初からおとなしくしているよ、雪蓮」

……口ではどうやっても敵わないから、黙ってお説教聞き流すことにしましょう。

平教経。
わたしは、アレは一騎打ちだと思ってた。恐らく、彼もそうだと思

う。確認する術はないけど。でも、わたしはそう宣言した訳ではなかった。彼も、そう言わなかった。だから、弓を射掛けたのだ、と祭は言っていた。確かに、わたしは助かった。けど、本当はわたしはもう死んでいるはずの人間だ。あの時、わたしは死んだ。間違いないのだ。彼はわたしを間違いなく殺せたのだから。

彼は、わたしを非難した。だが、それは口調だけだった気もする。気にしていない、ということなのだろうか。だがもしも相手が彼でなかったら。間違いなく、矢に射貫かれて死んでいただろう。わたしの身を案じてやったこととは言え、後味が悪かったに違いない。

もし、機会が得られれば。

ちょっと聞いてみたい。どう思ったのか、どう思っているのか。その上で、一度きちんと謝っておきたい。そうでないと本気で戦うなんて出来そうにない。本気で戦ったところで、勝てそうにないんだけど、ね。

「雪蓮、聞いているの！？」

「あ～はいはい。聞いてる聞いてる」

「しぇ～れ～ん～！？」

「分かってるってば。大丈夫よ、大丈夫」

冥琳の問いかけに、今日も適当に応えながら、彼のことを考えていた。

～朱里　Ｓｉｄｅ～

袁術軍がほぼ半数の兵を失いました。
また、第一次・第二次・第三次虎牢関攻略戦に参加した諸侯の軍も、大きく損耗して居ます。
特に酷いのは、劉岱さん、孔融さん、鮑信さん、喬瑁さんの軍。
何とか再編して、洛陽を目指す陣容を整える必要があります。そうでないと、桃香様の目を醒ますことが出来ないのですから。

平家の山塞。アレは、危険ですね。もう少し多くの兵を割り振っておくべきでした。
そう言うと、斗詩さんは申し訳なさそうにしていました。
多分、アレで十分だと袁紹さんが言い張ったのでしょう。

「斗詩さん、兵の再編案についてですが」
「朱里ちゃん、もう出来たの？」
「はい。先ず、袁術軍にはそのまま平家の山塞の押さえを務めるように通達を出して下さい」

「え、でも」
「それから、劉岱さん、孔融さん、鮑信さん、喬瑁さんに、袁術軍に合流してその任を助けるように、と」
「……成る程。それなら何とか」
「はい。但し、次の虎牢関攻略戦では、袁紹軍が先頭に立たなければ成りません」
「……諸侯が疑っているから、よね？麗羽様の器量を」
「そうです。どうしても、袁紹軍が主力となって戦う必要があります。例え、被害が大きくとも。そうでないと、今後の展望が開けません」
「有り難う、朱里ちゃん。麗羽様は、私の方で何とか説得してみるから」
「……桃香様も連れて行くと良いと思います。身内意識がないだけに、良い格好をしたいと思うでしょうから」
「あ、あはは……」

桃香様は、袁紹さんと共に天下を統一し、その下で理想を実現しようとしているのかもしれない。どちらにも転がることが出来るように、道を広げておく必要もある。仕方が、ない。そう思います。……少し、辛いですが。その為には袁家との仲を良好なものにしておかないと。切るのはいつでも出来るのです。誼を結ぶには、時間が掛かるのですから。今から、準備はしておく。それが桃香様の軍師としての私の努めなのですから。

「しゅ、朱里ちゃん！これ！」

いつもおとなしい雛里ちゃんが、私の陣屋に飛び込んできます。
その様子に、斗詩さんも驚いているようです。

「ど、どうしたの？雛里ちゃん。」

「こ、これ、見て下さい！」

雛里ちゃんが差し出した手紙に書いてあったこと。

『董卓と平教経は、私達に貴重な糧食を分け与えてくれた。なぜ、彼らが悪虐だと言っているのか、私には理解出来ない。出来れば、軍を抜けて帰って来て欲しい。そんな心優しい方々を討伐するなんて、とんでもないことだ。』

『……実は袁紹様こそが国政を壟断しようという噂がある。そんな人間に従って、私達の生活を気遣ってくれる方々を討伐するなど、どうか止めておくれ。もしお前にその権限があるのなら、お前のご主君に討伐軍からの離脱をお勧めしてくれないかい？』

『国政を壟断しようとする袁紹に荷担し、義を失った領主に用はない。即刻立ち上がり、その非道を明らかにするのだ。これは、正しく我らの天命なのだ！天は我らと共にある。前線にいる兵士諸君よ、今すぐその君主の首を討ち取って、共に立ち上がろう！』

「こ、これは！」

「拙いですよ、朱里ちゃん。雛里ちゃん。これでは、虎牢関攻撃など言っている場合ではありません。」

……私達にとっては千載一遇の好機。そう見える。

これを、桃香様に見せる。そうすれば、きっと目を醒まして下さる。

そう思って雛里ちゃんを見ると、雛里ちゃんも頷いている。

「では、これは預かりますね。麗羽様に見せて、対策を考えなければならないので。」

「あ……」

「？どうしたの？朱里ちゃん。」

「いえ、なんでもありません。済みません。」

「？じゃあ、私はこれで、ね。後でまた相談に来ると思うから、その時は宜しくね。」
「はい。」

斗詩さんは、袁紹さんに報告に行ってしまった。
桃香様に見せるべき、諸侯の国元からの書状を持って。
そう思って、がっかりしていると、雛里ちゃんが耳元で囁いた。

「……朱里ちゃん、あれは、写しなの。」
「……え？」
「……これが、ホンモノ。」

その帽子の中に、先程の書状が入っていた。
これで、桃香様の目を醒ますことが出来る。

「桃香様に会いに行こう、朱里ちゃん。」
「うん。そうだね、雛里ちゃん。」

これで、私達は飛翔出来る。この豪奢だが窮屈な、古びた鳥籠から抜け出して。

「袁紹さんが、国政を壟断する？」
「桃香様、そこは大事なところではありません。大事なのは、董卓さんと平教経さんが、袁紹さんが言うような極悪人ではない、ということです。」
「そんなことない。袁紹さんが国政を壟断するって非難している、この手紙がおかしいよ！そう思うでしょ？雛里ちゃん。」
「そうなのだ。袁紹のお姉ちゃんは馬鹿だから、そんなことできっこないのだ。」
「……桃香様、大事なのは、袁紹さんの話ではないです。袁紹さんが言っていたことが、嘘だった。それが問題なのです。」
「……まだ、嘘だって決まった訳じゃ無いよね？だって、誰も見たことがないんだよ？洛陽は酷いことになっているんじゃないの？」
「桃香様、誰も見たことがないものを、どうして圧政を布いていると言い切れたのです。それが一番の問題ではないでしょうか。」
「そんなことない！袁紹さんは洛陽に一杯知り合いが居るし、その人達から聞いたに違いないよ、雛里ちゃん。」

ここまで、桃香様が袁紹さんに肩入れするなんて。思っても見なかった。

「……桃香様、お伺いしたいことがあります。」

雛里ちゃんが、声を上げる。
聞こうとしていることは、わかるよ、雛里ちゃん。
でも、それがもし、本当だったら、どうするつもりなの？

「何？雛里ちゃん。」

「……桃香様は、袁紹さんに天下を統一して貰って、その下で桃香様の理想を実現したいとお考えになっていらっしゃるのでしょうか？」

「……そこまでは、考えてないよ。でも、袁紹さんは悪い人じゃないよ？だから、今は助けてあげようと思うの。斗詩さんだって、猪々子さんだって、いい人だよ。助けてあげるのは、悪いことなの？」

「それは、悪いことではありません。ですが、桃香様。私達は、桃香様ご自身が桃香様の夢を実現させる為にお仕えしているのです。それを、お忘れにならないで下さい。」

「……うん。分かってる。」

「……それでしたら、良いのです。その、申し訳ありませんでした。こんな偉そうな口を利いてしまって。」

「ううん。雛里ちゃん、有り難う。言って貰わなかったら、きっと私はちゃんと考えなかったと思うから。」

「……はい。」

『今は助けてあげる』

そう言っていた。その言葉を信じよう。

いつか、袁紹さんから独立して自分の道を歩み始める時が来る。

きっとそれは、もうすぐだと思うから。洛陽を奪取した時、間違いなく袁紹さんの本性が見えてくるに違いないのだから。その時。その時に、きっと桃香様は目を醒まして下さるだろう。

～教経　Ｓｉｄｅ～

「お兄さん、袁術軍に諸侯軍が合流しています。」
「へぇ。まだ懲りないのか。好きだねぇ、奴さん達も。石を腹一杯になるまで喰らっていたはずなのにな」
「またまた、経ちゃん。これが目的で喰わせてやったんやろ？」
「その通りだ」

只、落石計を仕掛けるにしても、もう石が残り少ない。
後一度位なら今までと同じようにほぼ無傷で対処出来るだろうが、その後はそうはいかないだろう。数的に優位になるように道を作り込んであるとは言え、時間を掛けて障害物を取り除かれればその優位もなくなる。俺なら、被害が出てもそれをやるだろう。ということは、敵もやるということだ。それを念頭に置いておかないと、痛い目を見ることになるだろう。

「……教経様、斥候が帰ってきました。」

愛紗の言葉に下を見ると、ダンクーガが斥候から何かを受け取って

こちらに走ってきている。
落ち着けよ、ダンクーガ。転んで怪我しても知らねぇぜ？
「ご苦労さん。何をそんなに慌ててるんだよ、ダンクーガ。落ち着け。」
「こ、これが落ち着いていられるか！」
「ほれ、一緒に深呼吸してやる。吸って～」
「あ？」
「ほれ、吸って～」
素直に息を吸い始めるダンクーガ。
流石の単細胞だ。そこに痺れもしないし憧れもしない。
「吐いて～、吸って～、吐いて～、吸って～、吸って～、吸って～、吸って～、吸って～」
「死ぬわ！」
「おお、良く気が付いたな、ダンクーガ。お前さんにしては上出来じゃないか。」
「テメェ！……って、そんな事してる場合じゃないんだよ大将！これ、見てくれ！」
ダンクーガが持ってきたのは、諸侯の国元からの書状だった。
大体俺が書いて欲しかったことが書き連ねてあるようだ。
「……成る程、確かに、巫山戯てる場合じゃなくなったみたいだな。」
「あぁ。」
「ダンクーガ、お前今から直ぐに牛共をかき集めろ。近衛の兵全部使って構わん。角としっぽに藁を巻き付けておいてくれ。」
「？わかった。」

「教経様、では？」
「そうだ。虎牢関へ向かうぞ。全軍を虎牢関に集結させる。移動は、今夜半。今まで散々言って聞かせてきた通り、進む方向と、合い言葉を絶対に忘れるなと言っておけ。」
「はっ。」
「霞、行けるな？」
「任せときぃ。準備は万端やで。ウチとこもきっちり言い聞かせてあるさかい、先ず間違いはあらへんやろ。捕まった場合の証言についても徹底させとるし、経ちゃんの構想通り上手く行くやろうと思うで？」
「お兄さん、牛、愉しみにしているのですよ。」
「はは。まぁ、確かに風達からはよく見えるかも知れんな。見物しているが良いさ。出発する時に、山塞には火を掛ける。山に火が回るだろうから、それに巻き込まれないように移動してくれよ？風達に余裕がある速度でも、負傷兵にとっちゃ負担になるだろう。その状態で火に巻かれるかも知れない恐怖に晒されながら、体に負担となる速度で移動するってのは一寸可哀相だからな。」
「分かって居るのですよ、お兄さん。」
「まぁ、風に任せるよ。信頼してる。」
「任されるのですよ。」
「愛紗、頼むぜ？絶対に無いと思うことが起こるのが戦場だ。敵兵が徘徊していることは先ずあり得ないが、それでも注意に注意を重ねてくれ。此処まで命を懸けて戦ってきて、その命を幸運にも拾った者共なんだ。此処で死なせるには惜しい。」
「分かっております、教経様。」
「うん、頼むよ、愛紗。」

さて、第二幕の終焉と第三幕の開演だ。
派手に飾ってやるとするさ。
戦絵巻を、極彩色で、な。

蝶の如く～６３～

～琴　Ｓｉｄｅ～

山が震えている。いや、大地が。
目の前に広がる光景が、信じられない。

山に、たいまつが明々と灯った。
そう思っていたが、次々に灯されていくたいまつの数が尋常ではない。山塞辺りを、横に広く、三列程度の厚みを持って広がっていた。
そのたいまつの群れが、一斉に山を駆け下りて来たのだ。
大きな地鳴りを伴って。まるで、火の壁が崩れ落ちるかのように、一斉に山裾に向かって駆け下りていた。

それが角と尾に火を掛けられた牛の大群であることに気付いた時には、もう既に手遅れだった。
闇で分からないが、たいまつの数から言って５，０００頭程度の牛が連合軍陣地目掛けて突進してきたのだろう。孔融軍も、その他の軍も大混乱に陥っている。牛は、その角と尾に火が付いていることもあり、平地に降り立っても猶暴れ回っている。どうやっても、沈静化出来ないだろう。

「て、敵襲！敵襲だ！平家の鬼共が来るぞ！」

袁術軍の兵士がそう叫び声を上げながら逃げていこうとする。
平家の鬼共。
聞けば、平家の兵達は、唯々連合軍の兵を殺す為だけに戦っているのだそうだ。
剣が折れても、首を絞めてくる。

腕を斬り飛ばしても、歯で首筋に噛みついてくる。
一体、どうやってこのような兵を育てたのだ。
死ぬことを、厭わない。兵達とて、元は只の農民達が大半だ。

……只の悪党に、そうまでして忠誠を誓うだろうか。

いや、駄目だ。そう考えては駄目だ。それでは、私は何故此処にいるのか。この戦で今まで私が何をしてきたのか。私の全てが、崩れ去ってしまう。認めることは、出来ない。出来そうにない。

……母から、手紙が来た。
内容を見て、愕然とし、直ぐに破り捨てた。

『董卓と平教経が、困窮する民の為に糧食を施している』

認められない。私は、そんなものは見ていない。母上が、騙されているのだ。きっと、そうだ。大悪党である董卓と平教経を殺せば、問題無い。何も、問題無いのだ。今まで通り、正義を追求する私で居られるはずだ。奴らを殺しさえすれば、連合の皆は私の正義を褒め称えてくれるはずだ。

『目に見えるものが全てではない』

五月蠅い、黙っていてくれ。私は、私の正義を貫くだけだ。
平家の鬼共。兎に角、狩って狩って狩りまくってやるのだ。
私が私である為に。

「やたら郎党共が悲鳴を上げていると思って来てみたら、どうやらお前さんが斬り殺してくれてたみたいだな」

平家の郎党共を求めて斬り進んでいる内に、自陣から随分と離れてしまった。

引き返して更に平家の郎党を斬っていた私に、そう話しかけてくる影があった。

……浅葱色にダンダラ模様の羽織。間違いない。平教経だ。

この闇夜で、それでも目立つ服を着込むとは。こいつは馬鹿だ。

「平教経だな。私は、太史慈。その首、頂戴する」

「……太史慈、か。まさかこの戦場に居るとはね。で、今、なんと言ったのかね？良く聞こえなかったんだが」

「貴様の首、この太史子義が頂戴する！」

「……お前には出来ないかも知れないがね。やってみるかね？」
「抜かせ！この外道め！」

距離を詰めて、抜刀斬りを放つ。
剣速も十分だ。闇夜で、私の獲物の長さも測れていないだろう。この時機で放たれる私の剣を、躱せるものなら躱してみろ！

斬り上げている。まだ、肉を割いた感触がない。
もう、半分以上斬り上げている。

……まさか、躱されたというのか。

「危ないねぇ。辻斬りは、御法度だぜ？……まさか抜刀斬りにお目にかかれるとは思ってもみなかったがね。しかも、言うに事欠いて外道とはねぇ……まぁ、今のこの惨状じゃ言い得て妙か」
「くっ……運のいい奴め」
「運が良い……？はは、自分の力量を高く見積もりすぎだ。慢心するなよ、童。お前は、まだまだだ」
「わ、わっぱだと！」
「あぁ。声や体格からして小僧って呼ぶのは無理があるみたいだからなぁ。だから、童と呼んだんだよ。俺の方が腕が立つようだし、俺が目上でお前が目下だろうが。そう呼ばれても仕方があるまい？」
「ちぃ、減らず口を！」

構わず、斬りつける為に前に踏み込む。
次の瞬間、私は投げを打たれて宙を舞っていた。

「ぐっ！」

折れている肋骨に衝撃が響く。

かなり痛いが、気を失うほどではない。
そのまま、押さえつけられる。

「……童。殺気を垂れ流しすぎだ。いつ仕掛けてくるのかが丸わかりだ。その癖、やたらと揺らいでいる。……何を悩んで居やぁがる。相手を斬り殺す。その瞬間においては、情は不要。斬る事を嘆く位なら、斬ってからそれを嘆くが良い。お前さんの剣の師は、そう教えてくれなかったのか」
「貴様、我が師を侮辱するのか！」
「……今のお前さんの在りようは、お前さんの師を侮辱しているものだと思うが、違うかね？」
「五月蠅い！黙れ！黙ってくれ！」
「滅茶苦茶だな、お前さんは。情緒が不安定に過ぎるぞ……まぁ、いい。言っても分からんなら思い出させてやるだけだ。お前さんの師匠がお前さんに教えたであろうことをな……小野派一刀流、平教経。貴様は？」

私を解放し、立ち上がって剣を正眼に構えている。
……尋常に、立ち合う。
そう言うのか。今なら、私を簡単に殺せたはずなのに。
立ち上がって、剣を構える。

「……我流一刀流、太史子義。……いざ！」
「……参ろうか」

勝負は、一瞬だろう。
迂闊には動けない。
剣を下段に構えながら、平教経を注視する。
その表情は、その心を一片も映していない。
その眼は、何処か一点を見つめているだけで私に注目している様子

はない。

まるで潮が満ちるかのように、私達の間にある空気がじわじわと重苦しくなってくる。

……我が師は、剣を振るう際には、何も考えなくとも良いと言っていた。

但し、剣を振るうことの意味については、その都度、命を奪う度に、しかと考えておけ、と。

そう言っていた。あれは、いつだったのだろうか。

私は、いつからそれを考えることを止めてしまったのだろうか。

それを考えていれば、考え続けていれば、終に今日のような日を迎えることは無かったかも知れないのに。

……剣は、只の剣に過ぎない。それを、努々忘れるな。

それを振るう者が正義を忘れれば、その行為は只の斬人に過ぎない。

何の意味も持たない。

己が正義を貫く為にこそ、剣を振るうのだ。その正義が何たるかを常に考えておけ。

そう、言われていたはずだ。いつから、自分の正義を疑わなくなったのか。

私は、いつから、こうも歪な人間になってしまったのか。

師が死んでから、私に勝てる人間が周りに居なくなってからか。

平教経はまだ動かない。平然と、泰然と、唯々剣を構えている。

一分の隙もなく、一分の揺らぎも見せず。

剣士として、既に完成しているかのように見える。何をすれば、こうなれるのか。

汗が額から滴る。

息が、苦しい。
もう少し、耐えられる。
まだなのか。まだ、この男は、耐えられるのか、この空気に。

私は、もう、耐えられない。
……動くしかない。

右手を、斬り飛ばす。
その為に、右下から左上へ刀を奔らせる。
だが、平は右手を太刀から離して私の太刀を躱し、左やや下側から、右やや上に向けて太刀を一閃させようとしている。その太刀を、振り始める。

……疾い。これは、どうやっても斬られる。
ああ躱すとは思わなかった。こんなに太刀行きが疾いとは思わなかった。

『己を韜晦することをしない。駆け引きを知らない。そして何より、相手を恐れることをしない。そういうのを、阿呆というんだよ！小娘！』

馬騰の、言う通りだ。私はまた、相手を計ろうともせずに。駆け引きも碌に行わずに。
同じ事を繰り返したのだ。死んで、当たり前だろう。

そう思って、目を閉じる。
正義を剣で実現することが、最早叶わない、惨めなだけの私だが。
せめて、最期くらいは潔く、何者にも恥じることの無いような最期を迎えたい。

「……何を、思い詰めてやがる、童」

その声に目を見開くと、そこに平教経の顔があった。
既に刀を納めている。

「勝負は、お前さんが今感じている通り、俺の完勝だ……命の遣り取りをした仲だ。同じ剣を志す者でもある。人生の先輩としても、剣士としても、お前さんに対して何らかの助言をしてやれると思うんだがね、俺ぁ」

「……貴様のような極悪人に、何を教えて貰うというのだ！」

「そうだねぇ。鍛錬を強要してくる爺共から如何にして逃げ回るか、とか、どうやって虐めてくれた爺共に仕返しをするか、とか。そういうことなら、得意だ。頼ってくれて構わない」

……こいつは、何なのだ。

「……一寸は落ち着いたみたいだな。で、童。何をそんなに悩んで居やぁがる。剣が曇ってたぜ？」

「……私は、この剣で正義を貫く為に今回この連合に志願して参加した。悪を斬り捨てて正義を打ち立てる為に。……だが、貴様のところの馬騰が、この連合は嘘によって発足した、偽りの正義だと言ったのだ」

私は、何を語っているのだ。

「……それで？」

「……北海の母から手紙が来た。その通りだった。董卓も、貴様も、袁紹が言うような悪などではなかった。それを、認めたくなかった。だから、私はお前を殺そうとしたんだ。お前を殺せば、私は私が正しかったのだと自分に言い聞かせることが出来る。周囲も、私の正

義を認めてくれる。そう思っていたんだ。
……私は、今まで何をやっていたのだ。この連合に騙されて。偽りの正義を掲げ己の正義を見つめ直すこともせず、平家軍の者共を殺して。」
「……」
「私は、自分が正義だと思っていた。相手が悪だと思っていた。だから、斬り殺したのに。それなのに、相手は悪じゃなかった。私は、正義ですらなかった！正義と思っていたものは、醜い嘘で塗り固められた、糞みたいなものだった！己の正義を貫いて、悪を斬り捨てようと思っていたのに！」

私は、何をやっているのだ。
たった今、斬り殺そうとしていた相手に、このような話をするなんて。

「……『悪・即・斬』、か」
「……『悪・即・斬』……？」
「そうだ。お前さん、『悪・即・斬』を己の信念として定めているんだろう？」

『悪・即・斬』。
言われて初めて気がついた。それこそが、私が求めているものだ。
そうやって正義を打ち立てるのだ。
これ程簡潔で、これ程わかりやすい表現は他にないだろう。
なぜ、私を惹き付けて已まないその言葉が、この男の口から発せられるのか。

「……一時期、俺も憧れてたからなぁ。アレに。牙突的に考えて」
「……貴様が、か」
「そうさ。だが、その頃の俺には、正義ってのが一体どんなモンな

のか、全く分かっちゃ居なかったンだねぇ、これが」

……今の私も、もう分からない。
分からなく、なってしまったのだ。
いや、実はとうの昔に見失ってしまっていたのだろう。
だから、他人からの伝聞をそのままに信じてしまったのだ。

「……正義とは、何なのだ」
「その辺に落ちている石ころだ」
「何だと！貴様、やはり極悪人ではないか！」
「……ちっと落ち着いて話を聞け」

何故こんなに落ち着いているのだ、この男は。
いちいち逆上する私が、餓鬼みたいではないか。

「……くっ」
「……正義ってのはな、皆自分なりに何かしら持ってるモンだと思う。それが価値あるモンなのかどうかは、分からない。勿論、自分にとっては掛け値無しで価値があるモンだ。だが、他人にとってはどうかな？いや、自分にとってさえ、常に絶対的な意味を持つもので在り得るかな？」
「正義は、絶対だろう」
「いいや、俺はそうは思わないね。例えば、腹を空かせて盗みを働いた小僧が居るとする。その小僧を罰することは正義だ。例えその罰が斬首だとしても、法でそう定められていればそれは正義だ。そうだろう？」
「……あぁ」
「だが、その小僧が盗みを働いたのは、腹を空かせて待っている弟共に飯を食わせてやる為に、その小僧が取り得る最後の手段だったからなンだ。

さて、童。お前さんに聞くがな。この小僧を斬り殺すことが、絶対の正義だと思うか？

それにだ、例えばだが、この小僧と家族が食いっぱぐれることがないような政を実現する為に運動することは正義足り得ないかね？」

「……小僧を斬り殺すのは、完全な正義だとは言い難いと思う。後から言ったことも、正義足り得ると思う。」

「そうだねぇ。俺もそう思う。正義ってのは、そういうモンだと思うぜ？絶対に正しい正義なんてありはしないのさ。それがある、と言う奴は、大体周りが見えていないだけの餓鬼だ。童、丁度今のお前さんのように、な。正義ってのは、それを理解出来る人間に取ってさえ、今の例を見る通り、状況やそれを取り扱う人間の心情に大きく左右されるモンだ。ある状況で二つの正義を提示された時、その両方共に正義であると言えることだってある。それも、今言った通りだ。

では、他人に提示された正義を全く理解出来なかったとしたら？恐らく、何の価値も認めることはないだろう。そこらに転がっている、石ころ同然にな。正義は、それに価値を見いだせる人間には、玉たり得る。が、見いだせない人間には只の石ころだ」

「……」

「だから、正義ってのは、自分の思う正義でしかないのさ。より多数を幸福にする為の正義を見つけ出して、それを貫く人間にこそ、『悪・即・斬』は相応しい。俺は、そう思うけどねぇ。

まぁ、今の俺なら、きっと『悪・即・斬』を貫けると思うが」

そう言ってニヤリと嗤う。

「……私は、どうすればいいのだ、これから」

「そんなこと、俺が知るかよ。テメェで考えやがれ」

「此処まで話をしておいて、それはないだろう。貴様は貴様の正義についてすら話していないではないか。」

「ったく、世話掛けさせやがるな……俺の夢は、世の中の人間が『平凡な人生』を送れる世の中を実現することだ。何の波乱もない、乗り越えられない苦しみのない、人並みな人生を誰もが送れる、そんな平凡な世の中を作り上げるのが俺の夢だ。
その俺の夢を実現する為に、その実現を阻もうとする奴らを斬る。それが俺の正義だ。
我欲によって俺の夢を阻む奴らは、悪だ。少なくとも、俺にとっては。そして、俺の夢を共に抱いてくれているものにとっては。だから、斬るンだ。『悪・即・斬』の下に。
勿論、そいつなりの正義を以て俺の夢を否定してくる奴だって居るだろう。
だがそれでも、俺が思い描く夢をこの世界に現出させる為に斬り捨てるのさ。そいつの正義諸共にな。それが覚悟というものだ」

連合軍に極悪人のように言われているこの男は、そのようなことを考えているのか。
嘘を言っている、と思わないでもない。
だが、あれ程の剣を修めた人間が、そのようなくだらない人間であるとはどうしても思えなかった。

「まぁ、童。貴様は貴様の正義を見つけて、その正義を貫くことだ。『悪・即・斬』の下に、ね。人生と、剣の先輩からの有り難いお言葉だ。しっかり覚えておくが良いさ。
……じゃぁな、童。次に殺しに来る時は、しっかりとした自分の正義を持って俺を殺しに来い。そうでないと、また説教だぜ？あと、テメェの師匠に宜しくな。もっとしっかりと仕込みやがれ、とでも言っておいてくれ。剣の腕じゃなく、剣士としての心構えを、な。
必ず、伝えろよ？童。故郷に生きて帰ってな。
……ったく、私とか貴様とか正義だとか悪だとか、エラくませた童だな、本当によ……」

そう言って、平教経は立ち去っていった。

故郷に、生きて帰れ、か。

自分を殺そうとした私に、生きろなどと言う。

あれは、悪党ではない。只の善人だろう。

そうでもないと、自分を殺そうとした人間の悩みを聞いて話をした上で、無事に故郷に帰れ等と言うはずがないではないか。

……私は、盲いていた。自分の正義が唯一無二の、絶対的なものだと思い込んで。さぞや、醜かったことだろう。

素直に、そう思えた。

蝶の如く～６４～

～教経　Ｓｉｄｅ～

童のもとから立ち去った後、虎牢関へ急いでいる。

「経ちゃん、こんな時に何を考えとるんや」
「……済まんな、霞。急がなきゃ成らないのは分かってたんだが、どうにも、な」

霞に、苦言を呈された。
まぁ、当たり前だろう。虎牢関へ急がなければならない時に、敵方の童を相手に暢気に説教をしていた訳だからねぇ。

「何であんな奴に構ってやったんや？アイツ、ウチとこの兵も平家の兵も、まるで親の敵みたいに殺しまくっとったんやで？経ちゃんのことやから、問答無用で斬り殺すと思っとったんやけど」
「……俺も最初はそう思ってたんだよ」
「なら、何で直ぐに殺さんかったんや」

そう、霞が聞いてくる。

……太史慈。
先ず、その名前に驚かされた。
呉の有力な武将。曹操が臣下に欲しいと思って招聘しようと画策した男。
見たところまだ童にしか見えなかったが、その実力を計らずに戦うのは、無謀に過ぎる。

丸一日睡眠を取っていない状態で瞬動などあり得ない。気絶しちまう。
気絶したら、殺されるのは分かっている訳だからな。あれは使えない。

だから、様子見をした。そしたら、俺を殺そうと抜刀斬りをして来やがった。
アレは、大陸の剣技じゃない。俺の国の剣技だ。鞘走らせた反動で、一気に相手を斬る。そういう業なのさ。
それを躱した後、軽く挑発をした後の奴の行動が面妖しかった。

……俺の思い描く太史慈という男は、武に優れた男だ。
感情にまかせて相手を殺そうとするような男ではなく、殺す瞬間は殺すべくして殺すだけの男だ。そこには感情が入り込む余地はない。
そういう心構えを以てして相手を屠る、一流の武人だ。
だが、アレは違う。
何が何でも殺さなければならない。そういう、切迫した感情を感じたのさ。
だがそれで居て、殺すことを躊躇っているような気配があった。そういう自分を無理矢理に押し殺しているような、そんな気配もあった。心身が一致していない。そう感じたンだ。

俺の国の剣技をあの域まで修めるには、かなりの鍛錬が必要とされる。それは、腕を磨くことだけじゃない。俺の国の剣技では、先ず内面が問題になるンだ。強き剣は強き心がそれを支えるからこそ強いのだ。それを、教えられていないはずはない。どんな流派においても、先ず教えられることだ。心なき力はただの暴力だ。力なき心はその持ち主を終には殺す。だからこそ、共に鍛えなければならない。『心身一如』を為せ。そう教えられる。
あの域に達するまでの鍛錬をした人間が、それを為し得ていないな

どあり得ない。そうでないと、あれ程の剣士には成れないンだ。

何かがある。童からそれを奪うほどの、何かが。そう思ったのさ。だから、尋常に立ち合ったンだ。殺し合うこと程、相手を理解出来る手段はない。殺す為には、相手を計り、理解しなければならない。その力量を。その心を。その理解が正しければ勝ち、それが誤っていれば即ち負ける。俺は糞爺からそう教わった。

その結果として引き出した答えが、アレだった。

……俺には、弟が一人いる。

ある日、奴が泣きながら帰って来たことがある。

『虐められ、殴られた』

そう言って。

俺は、その餓鬼共をぶっ飛ばしに行った。そこで、俺の弟が俺という存在の威を借りて、普段そいつらを虐めていることを知らされた。だが、一度振り上げてしまった拳の落としどころが分からず、俺は自分が正しいのだと言い張ってそいつらをぶっ飛ばしたンだ。今思うと、恥ずかしい限りだが。自分が間違っていたことが恥ずかしく、そしてその事実を受け入れることが出来なかったンだ。

そして、糞爺に説教をされた。

『正義とは何か』、とね。

置かれた状況もやったことも全く違うが、童を通して、あの日の俺を見せられている気がした。

あの日、俺が糞爺に説教されたように、この童を俺が説教をしてやらねば成らない。教え、諭してやる事が、同じく剣に生きる者として、同じように迷い、諭された者として当然の、義務のようなモン

だ。そう思ったンだ。

だから、説教をした。童の状態を把握した時点で、殺す気が失せてしまったのさ。

そう、霞に言った。

「……経ちゃんらしいけど。お人好しも程々にしとかんと、いつか死ぬで？」

「気をつけるさ」

「……まぁ、このことは皆には黙っといたるよ」

「……済まんね。バレたらこっぴどく怒られそうだ」

「秘蔵の酒でええで？……ほな、急ごうや。皆待っとるはずや」

「テメェ……まぁ、いい。急ごうか」

そう言って、虎牢関へ急ぐ。

童め、貴様の世話を焼いたから、俺がこんな目に遭っている。

……とっとと、目を醒ましやがれ。

阿呆め。

「現状で、どれくらい兵は残ってる？」

虎牢関に到着し、将を集めた席で、稟にそう訊いた。

「１００，０００強です」

「……そうか、結構死んだな」

「……はい」

想像していた最悪の状態から考えれば、遙かにマシな数字だが、それでも多くの人間が死んだ事には変わりない。だが、先ずはこの戦を俺の思い通りに描ききる事こそが肝要だ。

「……これから、虎牢関も放棄するぞ。敵軍の士気はもうガタガタだろう。まともに戦えるのは、袁紹軍を中心とした約６０，０００弱しかいない。その他は、士気が低すぎて駄目だ。早い内に放棄しないと、奴ら、本当に撤退しかねない状況に勝手に追い込まれて居やがる。

……大変なことにな、何と俺たちは勝ってしまうかも知れないンだ。それは困るンだ。負けないと駄目なンだよねぇ。普段戦には負けたくないし勝ちたいと思っているものだが、こんなに切実に負けたいと思うなんて我ながら笑えてくるな。……予想以上に連合軍が糞だったからねぇ、勝ち過ぎちまった感が否めない。折角準備させたアレを使うこともなかったしなぁ。まぁ、楽だったから良かったンだが」

「教経殿、アレとは何なのですか？」

「風達が帰って来たら説明するさ」

「では、今から説明して貰うのですよ」

声に振り返ると、風がそこに立っていた。愛紗も、無事に帰って来たようだ。

皆、無事で良かった。

「風！無事に虎牢関に到着だな」
「はい。途中で敵に遭遇することもなかったですし、問題無いのですよ」
「愛紗も、良くやってくれた」
「はい。教経様」

これで、平家軍は全員揃った。

「じゃぁ、これからの大筋を説明するぜ？」
「はっ」
「……虎牢関に、火を掛ける」

声を上げようとする稟を、片手を上げて制止する。

「勿論、此処が石造りの関だってことは重々承知の上で言っている。碧、アレを使うから有るだけ全部虎牢関に撒いてくれ。乾いている箇所がない、という様にな」
「分かったよ。今すぐにやらせる」
「お兄さん、アレとは何なのですか？」
「『火の水』だ」
「『火の水』？」
「そうだ。おかしな臭いのする水で、火を付けると水が無くなるまで燃え続ける。そういった性質を持った水なのさ。そいつを、虎牢関に満遍なくまき散らし、連合軍が虎牢関に侵攻してきた頃に火が付くようにして撤退する」

ウイグル自治区に油田があることを覚えていた俺は、碧を通じて羌族に捜して貰い、大量に持ってきて貰ったのだ。何処かに、石油が

わき出ているところがあるかも知れない。そう思って、駄目で元々と捜して貰ったら、あったのだ。それを、此処で使う。

「……教経様は、最初からこれを考えていらっしゃったのですか？」
「いや。最初は、虎牢関に取り付こうとする連合軍の頭からかけてやって、火箭を馳走してやるつもりだった。余りの豪華な馳走に、その喜びをのたうち回って表現してくれることを期待していたンだが、どうやら馳走に与るだけの金も体力も無かったらしい」
「……ホンマ、碌な死に方せぇへんで？経ちゃん。えげつなさ過ぎるわ」
「ご主人様は物騒すぎるよ……あたしはご主人様の臣で良かった。そんな死に方したくないもんな」
「まぁそう褒めるな」
「「褒めてない！」」

さいですか。

「とにかく、虎牢関に火を付けたら長安へ移動する。月には既に使者を出してある。彼女達も一路長安を目指して移動する。俺たちはそれを護衛するンだ。俺の時のように民衆が多く付き従うだろうし、そいつらを殺させる訳には行かないからな」
「畏まりました」

……虎牢関には、派手に燃えて貰うことにするさ。
この壮大な劇に、幕を引く為に。
この戦で散っていった平家の郎党共をあの世に送ってやる為の、浄化の炎を以て、な。

～華琳　Ｓｉｄｅ～

「華琳様、平家軍が虎牢関を放棄する模様です。次々に兵が進発していきます」

教経達が、山塞を放棄して虎牢関に合流した。

そう袁術が麗羽に報告をした事実を桂花から聞いた時、思わず手にした杯を地面に叩き付け、袁術の無能さを口汚く罵った。この士気が奮わない現状で、虎牢関に更なる戦力と士気を大いに上げる事が出来る人物が合流する。それを無為に眺めていたばかりか、既になってしまった後で報告をするなんて。どれだけ足を引っ張れば済むのかしら、あの甘ったれた餓鬼は。そう言って。

教経は、終に連合軍に、私に、戦場で勝つことが出来る機会を作り上げた。

次が、決戦の秋。しかも開戦当初とは異なり、あちらの兵が多く、こちらが少ない。あちらの兵の気勢は上がり、こちらの兵の気勢は大いに下がっている。……勝てる要素が、終ぞ見あたらない。如何

に負けるか。それが私にとって至上命題のように思えていた。

その教経が、一戦もせずに虎牢関から兵を退くですって？

……何か、考えているのかしら。

「……どこに向かっているの？」

「長安を目指している模様です」

勝てる現状を捨て、その上更に洛陽を捨てる、と言うの？

……虎牢関に何か罠があるのではないかしら。あの男にしては不自然すぎる行動だ。逆に罠がないとも考えられるが、余りにも不自然であるから更にその裏を考えて虎牢関に兵を進める、と思っての行動かも知れない。……全く、本当にやっかいね、貴方は。でもね、教経。私は自分の直感を信じることにしているのよ、こういう時はね。

「わかったわ。桂花、洛陽入りの準備を。他軍は知らず、私達は暫く待機なさい。虎牢関に近づいては駄目よ」

「はっ」

「……虎牢関一番乗りは、致しませんか？」

「秋蘭、あの教経が、何の備えも策もなく唯々虎牢関を放棄する、と？」

「……いえ。思いません」

「そう。そういうことよ」

「はっ」

教経の、思い通りの戦、ね。

『董卓が生き残れば、俺の勝ちだ』。

その通りに、あの男は董卓を生き残らせた。

諸侯は、逃げた董卓を討伐しようとはしないでしょう。私でさえ、密約が無くてもやらなかったかも知れない。
教経の、策。想像通り、えげつない策。抗うことも備えることも出来ない策。
董卓と教経は極悪人どころか善人も良いところだった。その事実が判明したことで、董卓と教経を殺す口実が無くなってしまった。民達にとっては、私達の方が無道で無法な無頼にしか見えないでしょう。この状況では、如何に麗羽が馬鹿でも彼らの命は諦めざるを得ないでしょうね。まぁ、麗羽のことだから、洛陽を手に入れたら全てを忘れるのでしょうけど。アレは、馬鹿だから。底なしの。

……此処まで、全てを考え抜いた策を構築して戦を描いた。
その企画力、実行力は、私を越えるかも知れない。
だけど、教経の真骨頂はそこではないわ。戦場での勝利を捨てることで、当初の目的をしっかりと果たした。教経は、彼が私に言って見せた形で『勝った』。董卓の命を救うという主命題を果たす為に、この状況で戦場での勝利を簡単に捨てることが出来るその慧眼と意志の強さこそが、教経の真骨頂だと思う。

「か、華琳様！虎牢関が！」
「どうしたの、春蘭」
「と、兎に角ご覧下さい！」

……春蘭の慌てぶりは、可愛いわね。
秋蘭も、そんな顔をして春蘭を見ている。
それにしても、何があったのかしらね。

「華琳様！あれを！」
「なっ！」

……虎牢関が、燃えている。木材で構成されている箇所が燃えているのではない。関全体が、それこそ真っ赤に燃えている。虎牢関は石造りだ。どうやって燃えているのか、全く分からない。

虎牢関一番乗りを争っていた、袁紹と袁術の軍勢が炎に巻かれて死んでいく。

「……華琳様。華琳様はこれあるを見越していらっしゃったのですか？」

「……まさかね。こんな事になるなんて、考えもしなかったわ」

「……平教経は、妖術使いなのでしょうか」

「それはないわ。妖術使いなら、私と取引することもなく、唯々戦場に赴いて妖術を使えば良いのだから」

「……確かに、そうですね」

これで、この戦は終わりだろう。

教経なりに、幕の引き方という物を考えていた、ということでしょうね。

この炎で、全てを浄化する。

謂われのない言い掛かりに基づく戦に巻き込まれて、多くの人間がこの戦場に散っていった。

彼らを、彼らの魂を、浄化する。あの猛々しくも美しい、真っ赤な虎牢関で。

炎が全てを燃やしていく。

妬みも、憎しみも、哀しみも、欲も。旧時代のしがらみも、何もかも。

そんな意図があるのではないかしら。もしそうだとしたら、貴方、良い詩人になれるわよ、教経。

……それにしても、一体、どうやったのかしら。

～琴　Ｓｉｄｅ～

平教経と話をした翌日、孔融様に従って洛陽に入った。
洛陽で民から聞いてまわった董卓と平教経の実像は、それは立派なものだった。
現在、洛陽の至る所で略奪行為を働いている袁紹軍や袁術軍と比べると、雲泥の差だ。
袁紹達を側溝に溜まった汚泥とすれば、彼らは汚れのない湧き水のような存在だ。

やはり、私の目は盲いていた。真の正義を見失っていたのだ。
平教経が連合軍に語った、あの台詞を思い出す。

『愚かにも我欲に塗れ、『義』を見て為せぬ糞共よ。貴様らに決して勝利は来ない。
たとえ殺されようとも、悪に屈しない心。それがやがては勝利の風を呼ぶ……
人、それを凱風という……！』

本当に、その言葉の通りだった。何一つとして、間違っていなかった。
平教経。
董卓など、見捨ててしまえば良かったものを、助けることに義を見てそれを為す為に。己の存在全てを賭けてまでそれを為したのだ。
『義』。ただ『義』を為す為だけに。
その軍兵は例え殺されようとも、悪に屈しない心を持っていた。そしてその心が、勝利の風を呼び込んだ。正に、凱風。何という見事な男だろうか。

そう思っていると、袁紹軍の一部が洛陽から長安へ、董卓を慕って移動中の民達を襲撃しているとの連絡が入った。……諸侯は、誰も動こうとしない。

『貴様は貴様の正義を見つけて、その正義を貫くことだ。『悪・即・斬』の下に、ね。』

……私の正義は、私の剣で無道を行う輩を、悪を、斬り伏せることだ。
それは、変えられない。昨晩、ずっと考えてそう結論を出した。
だが、悪を見極めなければ、また同じ事の繰り返しになってしまう

だろう。

考えてみる。

袁紹軍を斬り伏せることは、正義の実現に繋がるだろうか。

袁紹軍は、悪と呼べるのか。

……いずれの答えも、是。迷い無く、そう言える。

であれば、私は、私の信念を貫くだけだ。

『悪・即・斬』を。

～碧　Ｓｉｄｅ～

「ちょっと、厳しいねぇ」

そう独りごちる。
袁紹軍の一部が、洛陽から董卓を慕って移動している民達を襲撃している。
そう連絡を受けて、先行して救援に来た。
だが、数が多すぎる。引き連れてきた兵は５００。それで十分だと思っていたが、これでは持たない。

「そこをどきな！邪魔なんだよ！」

剣を振り、二人を殺した。何人斬り殺したか分からない。
それでも、まだ多くの下衆共が残っている。
私以外の人間は、その殆どが死に体だ。
私自身も、既に刀傷を２箇所に受けている。

まだ暫くは大丈夫だ。傷はそれ程深いものではない。
だが、このままでは、私もどうなるかわからないねぇ。

「死ねぇ！化け物が！」

後から、斬りつけてくる。
その剣を跳ね上げて、袈裟に斬り下げる。
さらに、後から仕掛けてくる。返す刀で横へ一閃する。
また二人斬り殺した。あと、２０人程度。
それで、この屑共を殲滅出来る。
だが。

「！……ちぃっ」

……右脇腹を、槍で刺されていた。

これでは、満足に剣を振ることが出来ない。

「へへへへ、姉ちゃん、随分とやってくれたな？これからタップリと愉しませて貰うぜぇ？」

そう言いながら、下衆が寄ってくる。下卑た笑いを浮かべながら。

惚れた男ならまだしも、こんな下衆に抱かれるなど願い下げだ。

死んだ方が、マシだ。

「ほれ、裸になるんだよ！」

「！」

そう言って私を裸に剥こうとした賊の顔に矢が突き立った。

後ろを振り返ると、太史慈が弓を持ってそこに立っていた。

「……借りを返しに来た。馬騰」

「……やれやれ。まぁ、下衆共に犯されるぐらいなら、多少小便臭いがマシな面構えになったお前に殺されてやった方が良いってもんさね」

「……勘違いして貰っては困るな」

「はぁ？」

「『悪・即・斬』の下に、下衆共、貴様らを全て斬り捨てる！」

そう言って、太史慈は雑兵共の集団に走り込んで次々に屠っていく。

……良い腕してるじゃないか。何の迷いもない、澄み切った剣。

「お母様！」

「碧！無事か！？テメェの命は俺のモンだ！勝手に死ぬことは許さねぇからな！」

……ご主人様が駆けてくる。おまけも一緒だが。第二陣を率いてくるはずだったのに、それを置いて駆けてくるなんてねぇ。
まったく、年甲斐もなく、キュンと来ちまった。

「何だ？知らないのが居るな……助太刀してくれてるのか？」
「あぁ、そうさ」
「……碧、傷が結構深い。下がっておけ。翠、碧を守っていろ。下衆共は、俺が殺す」

……相も変わらず、とんでもない殺気だ。
ご主人様は下衆共に駆け寄り、一番近くにいた男の首を刎ね飛ばす。
頭のない体が、血しぶきを上げながら倒れていった。

「ひぃっ！」
「よう、屑共。……お愉しみのようだねぇ」
「ま、待て！餌をやる！この女共の内、一人を好きにさせてやる。悪い話じゃ無いだろう。それに、金もやるぞ！？……どうだ、俺たちと一緒にこいつらを輪姦さないか？」
「……屑、俺が誰だか分かって居ないようだねぇ。お前らは、死ぬンだ。
俺に、殺されるのさ……『悪・即・斬』の下になぁ！」

ご主人様が駆ける。
瞬動。今まで見てきた中で最も高みにある、武技の頂にあるであろう業。
目の前に居る全ての悪を、一太刀で斬り殺した。その首を刎ねて。
清麿を納めながら、嘯く。

「……犬は餌で飼える。人は金で飼える。だが壬生の狼を飼う事は、

何人にも出来ん」

……誇り高き狼だねぇ。本当に。

翠、アンタ何惚けた面してご主人様を見つめているのさ。早いとこ自分の気持ちに気付いて素直にならないと、この狼の周りは番いで溢れちまうよ？

～琴　Ｓｉｄｅ～

袁紹軍の一部を追いかけた。

どうやら、平家軍の将が民を守る為に出張ってきているようだ。

……流石は、平家軍だ。そうでなくてはならぬ。

そう思って、更に馬を飛ばす。

将は、馬騰か。だが、手傷を負ったようだ。
下衆が、見るに耐えない醜悪な面をして、馬騰を犯すべく裸に剥こうとしていた。

「下衆め。私は、借りがあるのだ、その女丈夫にな」

馬を下り、矢を番えて、下衆の面に放ってやる。どこまでも下衆な行為への憤りの全てを込めて。

……一矢で、射殺した。
だが、これではまだ借りを返したことにならない。
この下衆共を全て、殺すまでは、ね。

「『悪・即・斬』の下に、下衆共、貴様らを全て斬り捨てる！」

屑共を片端から斬り捨てる。
右に、左に。群がり来る下衆共を皆殺しにしていく。

気付けば、残り１０数名ほどが少し離れた場所に残っていた。

……そこには、平教経がいた。
昨晩のように、浅葱色にダンダラ模様の羽織を羽織って。

「ま、待て！餌をやる！この女共の内、一人を好きにさせてやる。悪い話じゃ無いだろう。それに、金もやるぞ！？……どうだ、俺たちと一緒にこの女を輪姦さないか？」
「……屑、俺が誰だか分かって居ないようだねぇ。お前らは、死ぬンだ。
俺に、殺されるのさ……『悪・即・斬』の下になぁ！」

あり得ない疾さで、屑共の間を駆けて行く。
皆、一太刀。それも、首を刎ねている。

……最高の剣士。それが目の前に居る。私が扱う得物が得物だ。我が師以外には二人と居らず、師が死んだ今となってはもう居ないと思っていた、剣の達人。それが、今目の前に居る。
……学びたい。教えて欲しい。技術だけではない。その剣士としての在り方を。出来れば、共に歩んでみたい。『悪・即・斬』を、共に掲げて。

「……犬は餌で飼える。人は金で飼える。だが壬生の狼を飼う事は、何人にも出来ん」

誇り高き、狼。
壬生の狼。
私も、そうなれるのだろうか。

平教経が、刀を納めながら語りかけてくる。

「……どうやら、お前さんが碧を助けてくれたみたいだな。有り難うよ。姉ちゃん」
「……昨晩のように、童と呼ばないのか、平教経」
「……太史慈か……お前さん、女だったのかよ……」
「そうだ。貴様は、いや、貴方は男の、しかも子供だと思っていたようですが」
「あ～、悪かったな、太史慈。暗くて、髪の毛とかよく見えなかったんだよ。黒髪だし。身長と服装で全て判断してただな」
「いえ、別に構いません」
「……その様子からすると、ちゃんと目を醒ましたみたいだな。世話焼いた甲斐があったってモンだ。あと、丁寧な言葉遣いなんて、

別にしなくても構わんぜ？」
「そういう訳には行かないでしょう」
「そうかね。別に俺は構わんのだがね……お前さんのお陰で、碧は命を拾ったようだ。この礼をさせて貰いたい。何か望みがあれば言ってくれ。俺に出来ることなら、叶えてやるさ。とんでもないこと以外なら、な」

……とんでもないこと以外なら、何でも。そう言った。

「私も、壬生の狼になりたい」
「はぁ？」
「壬生の、狼になりたい。なって『悪・即・斬』の下、悪党共を斬り捨てて行きたいのです」
「……調子に乗って台詞なんて言うモンじゃないな……」
「叶えて、下さいませんか。この私の望みを」
「……質問、いくつか良いか」
「構いません」
「お前さん、壬生の狼になりたい、と言うが、それは俺の臣下になると言うことかね？ひょっとして」
「ひょっとしなくても、そう言っております。自分の主君が最高の剣士なら、言うことはありませぬ」
「……言っておくが、俺はまだ最高の剣士じゃない。腕には自信があるが、内面的には師匠にまだまだ及ばん」

この人を越える剣士が居る、というのか。
信じられぬが、本人がそう言うのだ。間違いないだろう。

「二つめだ。壬生の狼になりたい、と言ってもだな。この世界には新撰組はないぜ？」
「新撰組？」

「あぁ。『悪・即・斬』を座右の銘とした人間が所属していた組織だ。俺が勝手にそう名乗っただけだからねぇ、壬生狼ってのは」
「しかし、そう名乗られたのでしょう？」
「……まぁ、な」
「では、私もそう名乗ります」
「……まじでか……」
「まじ？」
「本気で御座いますか？ってことだ」
「本気です」
「……はぁ。身から出た錆、だな。諦めるさ。こういうのは諦めが肝心だ」
「……では？」
「最期に一つ。お前さん、壬生狼を名乗る、と言ったな」
「ええ。言いました」
「……『悪・即・斬』。貫けるか？」

真面目な顔で、そう問いかけてくる。

「無論、死ぬまで」
「……分かったよ。お前さんを俺の臣下にするし、壬生狼でも何でも名乗ればいい」
「本当ですか！？」
「嘘言ってどうするんだよ」
「では、これから宜しくお願い致します、たいｒ……なんと呼べば良いでしょうか？」
「そう言えば、自己紹介、ちゃんとしてなかったな。俺は、姓は平。名は教経。字も真名もない。好きに呼んでくれて構わない」
「私は、姓は太史、名は慈、字を子義。真名は琴と申します」
「……男装の女剣士で名前が琴って……まんま新撰組じゃねぇか…

…」

「お屋形様、どうされたのです？」

「……お屋形様、ねぇ」

「……気に召しませんでしたか？」

「まぁ、なんでもいいさ。これから宜しく頼むよ、琴」

「はい、お屋形様」

……私は、壬生狼になる。なってみせる。お屋形様のような、誇り高き壬生狼に。『悪・即・斬』を、この命尽きるまで貫いて。

蝶の如く～６５～（前書き）

碧や琴などオリキャラの容姿について。
碧は、馬超が常に髪を下ろして居るところを想像して貰うと良いと思います。ただ、目つきや眉毛、口の造形は、すべて００８３のシーマ様を想像してました。作者は。
琴は、二次小説でも人気のネギまの刹那を想像すると良いと思いますが。画像検索で新撰組のダンダラを着たのがありましたから、アレで良いかなと思います。サイドポニー。あれは良いものだ。

蝶の如く～65～

～教経　Ｓｉｄｅ～

「主、私は納得いきませんな。こ奴は主の夢も理想も何もかもを悪だと断じたのですぞ！？」

星が吼える。

琴が臣下になった。

その事を皆に伝えたところ、星が真っ先に、凄い剣幕で吼えた。

「いや、星。琴にしても、連合の正義って奴を信じてた訳でなぁ。前に言ったと思うが、人間ってのは理由もなく人を殺し続けるなんて出来ないンだ。どうしても、自分を正当化する為のお題目が必要だ。そのお題目上、月と俺は極悪人だった訳だから、そう言うのは普通だと思うンだが」

「主、それとこれとは話が別です！」

「星、アンタ少し落ち着きなよ」

「碧！お主は何とも思わぬのか！？」

「思わないねぇ。この娘は、袁紹の馬鹿を盲信してた訳だけど、漸く目が醒めて、晴れて小娘から娘に昇格した訳さ。人は変わる。それが徐々になのか、劇的になのかは、人に拠るだろうに」

「しかしだな」

「……大体、星。アンタ、ご主人様と初めて遇った時、殺そうとしたんだって？」

「うっ……し、しかし、あれは」

「しかしも案山子も有るもんかい。そのアンタが、此処まで劇的に変わっている訳だろうに。身も心もご主人様に捧げるほどに。それで居て、琴の言うことが納得出来ない、というのは少し我が儘に過

ぎると思うんだがねぇ、星？」
「う……」
「あ、あの。申し訳ありませんでした」
……尊大な言葉遣いをしない琴は、なんというか、ちょっと可愛げが有る。
愛紗は、面語して直ぐに気に入ったようだ。まぁ、サイドポニー？同士、気が合うんだろうねぇ。
碧は、助力して貰ったこともあり、納得しているようだ。
翠は、母親の命の恩人だと思っている。大歓迎だろう。
稟と風は、星が認めるなら認める、というスタンスのようで。仲が良いことだ。

「……何が申し訳ないのだ」
「……あの時、何故貴女があれ程に怒るのか、理解しようとも思っておりませんでした。ですが、今なら分かります。もし私が、お屋形様のことを『悪・即・斬』を貫けぬ腑抜けである、と言われたら、何をしてでも必ず殺そうと思うでしょう。それが突然同僚になると言われても、納得がいかないと思います。
……私のあの時の言動に対して、申し訳なく思います。済みませんでした。
ですが、今私はお屋形様と共に歩んで行きたいと願っているのです。
……認めて頂く訳には、行かないでしょうか……？」
「……ふん。これでは私が聞き分けのない子供のようではないか。
……良いだろう。但し、完全に許した訳ではない。これからのお前の言動と態度で、主に対する忠誠と想いを示せ」
「……はい。今は、それで十分です。有り難う御座います」
「……どうなることかと思ったが、なんとか纏まったみたいで結構なことだ」

目の前で殺し合いとかしてくれるなよ?本当に。

「教経殿、函谷関が見えて参りました。董卓殿がお待ちになっておられるようです」
「そうか。無事で何よりだ」
「平。月様の元へ先に行っていても構わないか?」
「あぁ、行くといい。その方が俺も安心だからな」

華雄が馬を駆って函谷関へ向かう。
華雄には、虎牢関で合流した後、念の為更なる強化を掛けておいた。
曰く、『士は己を知る者の為にこそ死ぬのだ』。
如何にそれが素晴らしいことか、武士として当たり前のことなのかについて、延々と聞かせてやった。大いに感ずるところがあったようだ。マシュマー状態だろうな、今の華雄は。『月様、ばんざぁ～い!』とか言いながらMSに乗ってそうだ。

……此処までやった俺がこう言うのもなんだがね、お前さん。
もの凄く違和感が有るンだねぇ。強化しすぎたか?

「……恋も、行きたい」
「とっとと許可を出すのです!平!」
「呂布も行ってくるといい。……だが陳宮、テメェは駄目だ!」
「な、なんですとぉ～!?」
「……ねね。留守番、頑張る」
「れ、恋殿～!」
「冗談だよ、行ってこい」
「覚えておくのです!いつかぎゃふんと言わせてやるのです!……恋殿～」

今なんじゃない!?ザキヤマ的に考えて。

函谷関に、『董』の旗が見える。戦火に燃ゆることもなく、風にはためいている。
それを見て漸く、実感が湧いてくる。
俺ぁ、『勝った』ンだなぁ。

～詠　Ｓｉｄｅ～

「それにしても、最初から勝つつもりだったのね、アイツ」
目の前に堆く積み上げられた酒樽を見て、そう思う。
アイツは、負けるつもりが全くなかったのだ。祝勝会の酒まで用意していたのだから。
どこからその自信が来るんだか。
「申し上げます！」

「何？」
「平教経様があと僅かで函谷関へいらっしゃるそうです」
「そう、ご苦労様」

アイツが、帰ってきた。董卓軍も平家軍も、将は誰一人欠けることなく函谷関に向かっているらしい。
……ホントに、良かった。
出立前に、死ぬかも知れないなんて言うから。ホントに、心配したんだから。

「詠ちゃん、嬉しそうだよ？」
「べ、別に嬉しくなんて無いわよ」
「見送っていた時、詠ちゃん、少し泣きそうだったよ？」
「そそそそんなことないわよ！月の勘違いよ！」

……アイツが出陣した後、月に根掘り葉掘り聞かれた。

どこを好きになったのか。
なぜ、アイツなのか。
抱きしめられて、幸せだったのか。
その、そういうことは、気持ち良かったのか。
あ、愛して、いるのか。
……全部、答えさせられた。『詠ちゃん……隠し事するのは、良くないよ……？』と言われて。普段の月とはちょっと違って、有無を言わせぬ迫力があった。……でもあんな直接的に訊かなくても良いと思うんだけど……ボクは。

……答え？
ななな何でそんな恥ずかしいこと言わなきゃならないのよ！馬鹿じゃないの！？ふんっだ！

「月様、ただ今戻りました」

一番に、華雄が戻ってきた。戦場で暴走しなかったのかしら、この猪。

「華雄さん、有り難う御座いました。華雄さんのお陰で、私は今生きています」

そういって、月が頭を下げる。

「……いえ、私は何もしておりません。全て、平教経の策に拠るものです。それに、私が月様の為に戦うのは当たり前のことです。魚が水の中でしか生きられぬように、私は月様の元でしか生きていく

ことは出来ないのですから。お気に病まれる必要はありません。礼であれば、平教経に申し上げるべきだと思います」

……誰よ、これ。

てっきり、『ふはははは！まぁ、平もよくやったが何より私の武勇に拠るところが大きいだろう！はははははは！』とか言うものだと思っていたのに。ボクは、きっと頭を強く打ったのだろう。若しくは、これは夢よ。きっとそうよ！

……はっ！まさか……これは、実は華雄の皮を被った暗殺者では！？

「……平の話では、もし戦に勝ってしまえば、月様のお命を頂戴しようと袁紹が画策する可能性があるとのことでした。平の思惑通りの結果を得ることが出来ましたが、万に一つということが御座います。本日より、この華雄は官を辞し、月様の身辺の警護に当たろうと思います」

失礼なことを考えているボクを余所に、華雄がそう言った。

……正直有り難い。華雄は、猪だが優秀な武人だ。

その華雄が、月の身辺警護に専念してくれるなら、これ程心強いことはない。頭は兎も角、その節義や忠誠心は大いに信頼出来るものだと思うから。

「……華雄さん、私にはそこまでして貰う資格が、無いと思います……」

そう言った月に対し、華雄が滔々と語った。

「資格を有する、という言葉の意味がよく分かりません。資格というものがあるとして、他の誰にもそのようにお仕えしようとは思いません。私は、貴女だからこそそうしてお仕えするのです。

字も真名もないこの私を、只の一人の人間として侮蔑せず接してくれたのは貴女が初めてでした。私が粉骨砕身してお仕えするのに、貴女程相応しい人はいないでしょう。

人は己を知るものの為に死ぬのだ、と平にも言われました。貴女こそが、私の武を、忠を、この命を捧げるに相応しい人なのです」

驚いた。

華雄が、こんなに雄弁に語るなんて。

その言葉はありきたりなものだけど、こう、心の底から本当にそう思っているっていうのがよく分かる。その表情に、物腰に、言葉遣いに。その全てに驚かされる。

「……華雄さん……有り難う御座います……宜しくお願いします」

「良き主を戴くことが出来ることは果報なのです。礼を述べるとすれば、私の方こそ述べるべきでありましょう。月様、有り難う御座います。この命尽きるまで、お仕え致します」

そう言って跪拝し、頭を垂れる。

……これは、別人ね。

己の武勇に対する過信と、それを証明する事への執着。華雄の欠点はその二つだった。だけど、見事にそれが無くなっているように見える。憑きものが落ちてしまったかのように。

どうやったのか分からないけど、兎に角アイツが華雄をこう変えたらしい。

その後、華雄は月の右後に立った。そこから、月を常に護る。そういう事らしい。

こうさせるつもりで、華雄を変えたんでしょうね。

全く。よくこんな事思いつくわね。人間を丸々変えてしまおうなんて、普通は考えないわよ。

恋とねねがやってくる。これから、慌ただしく、そして騒がしくなりそうだ。

……早く帰ってきて、ボクに顔を見せなさいよ、ばか。

～翠　Ｓｉｄｅ～

「過ごさぬ様に注意して呑めよ、皆」

「分かっておりますとも、主」

「経ちゃん！これ！この酒は！？」

「……そいつは新しく仕込ませた生酒だ。癖はあるし、まだちっと

ばかり若いと思うが、旨いと思うぜ？」
「星！早うこっち来んかい！こんな酒持ってきてるなんて、ホンマ経ちゃんは酒飲みの心をようわかっとる！」
「琴、これらは全て教経様が考案された方法で仕込まれた、米を元にした酒だ。癖もないし、甘いのも辛いのもある。良く味わって呑むと良い」
「……これを、お屋形様が考案されたのですか？……流石は、お屋形様です」
「稟ちゃん、次はこのお酒を飲むと良いのですよ」
「風。私はそろそろ駄目な感じですが」
「そんなことはどうでも良いのです。要は、風が面白いか面白くないかが大切なのですよ」
「詠ちゃんも、ご主人様のところに行かなくていいの？」
「良いの。どうせ後で逢うんだから」
「そうだな。今日は詠の番だから、思う存分甘えると良い。主は優しくしてくれると思うぞ？」
「ななな何言ってんのよ！」
「賈駆っち、愛しの経ちゃんが、こっち見とるで～？ほれ、こう、ちらっとサービスしたらんかい！」
「ちょ、ちょっと！や、やめなさいよ霞！」
「ふむ、では今宵は詠の代わりに私が夜伽の相手を務めるか？」
「……へぅ……夜伽……」
「ちょっと星！そんなこと認める訳無いでしょ！？ボクの番なんだから！」
「詠ちゃん……」
「やれやれ、詠も災難だな。ただ、星の標的が私から詠になったのは正直有り難い」
「お屋形様、私はお屋形様のことを、その、尊敬しております……剣士としても……」
「……誰だよ、琴がこんなに成るまで酒呑ました奴は……剣士とし

て『も』ってどういう事だよ……いや、別に聞かせてくれなくてもいいから。何となく惨劇にハッテンしそうだから。あ、発展だ、発展。アブねぇ……『ハッテン！ボクの街！！』とかいう新番組がスタートしそうだったな……完二的に考えて」

「教経様、琴は酒をほんの５杯ほど立て続けに呑んだだけです」

「……とんだ下戸だった、というわけだ」

「まぁ、そうですね。……ところで教経様？水関でのお振る舞いについて、少しＯＨＡＮＡＳＨＩがあるのですが」

「……なんか文字が違う気がするんだよねぇ……じゃ、俺はそういうことで失礼するぜ？」

「ノ　リ　ツ　ネ　サ　マ　？」

「ま、まて！話せば！話せば分かるから！」

「教経様が！泣くまで！殴るのを！止めない！」

「毎度毎度修羅場っててご苦労なこった。……大将、そのまま死んでくれ」

「あははは、ええぞ～！もっとやってまえ！」

祝勝会、という名目で、少しだけど酒を飲むことになった。

皆、愉しそうだ。ご主人様も、あんなに愉しそうに愛紗と戯れている。愛紗が殴る側で、ご主人様が殴られる側として、だけど。

……はぁ。アレを見る限りだと、別になんてことはないのに。

その、少しは気になってたんだ。

最初に遇った時に、あたしの為を思ってお母様を説得してくれたあの時から。

でも、今日のはちょっと卑怯だと思う。よく分からないけど、兎に角卑怯だ。

『……犬は餌で飼える。人は金で飼える。だが壬生の狼を飼う事は、

何人にも出来ん』

……あんな顔をするなんて。あんな顔で、あんな言葉を言うなんて。胸が痛かった。胸の、奥が。こう、グッっと、締め付けられた。あの顔と、言葉を思い出すだけで、切なくなる。

「翠、アンタ、何やってんだい」

「お、お母様」

「何を見てるのかと思って視線の先を見たら、ご主人様とはねぇ…惚れたのかい？」

「な、何言ってるんだよ、お母様！」

「全く。アンタの考えてることぐらい、お見通しなんだ。早いとこ素直にならないと、あの狼の周りにはもっともっと女が寄ってくるよ？琴を見な、翠。アレも、ご主人様に誑かされた女さ。ああやって、ご主人様はドンドン女を落としていくよ？」

？琴が？

でも琴は……

「……お母様、琴って、ご主人様を殺そうとしてたんだよな？だけど、目が醒めて、ご主人様の剣士としての在り方に惹かれて臣従したんじゃないのか？それがどうして誑かされたとかいう話になるんだ？」

「アンタ、本当に馬鹿だねぇ。殺意ってのは、人間の負の感情の中で最も強烈なものだ。それが、ご主人様を認めちまった訳だ。つまり、好意的になった。強烈な殺意の裏返しは、強烈な好意、つまり、愛情さね。本人が今どう思っているのかは知らないがね、行き着くところは間違いなく愛情さ。

臣下としての親愛の情から、女としての愛情に変わるのは時間の問題なのさ。何せ、ご主人様の人としての在り方に惹かれたんだから

ねぇ。立派な君主だからということもあるんだろうが、それ以前に一人の人間として好ましく思ったからこそ、ああも執拗に壬生狼になりたい、してほしいと言っていたんだろうさ」

「そんなものなのかな？」

「……翠、アンタ、ご主人様のこと、好きなんじゃないのかい？アンタが物心ついてから初めて、異性として気になっている男だろう？アレは」

愛紗に殴られ続けているご主人様を顎でしゃくる。

……なんというか、こう、シュールな光景だ。

少なくとも、アレじゃないと思うよ、お母様。私が気になっているのは。

「……よく、分からないよ」

「……ま、良いさ。あんたが思うようにすれば良い。ただまぁ、母親としてじゃなく、一人の女として、人生の先輩として助言してやるけどね、翠。女は、惚れた男と添い遂げるのが一番さ。それが叶うなら、そうした方が良いよ？そうしなかったことを一生後悔して生きていくことになるんだからねぇ」

一生、後悔する、か。

でも、まだ分からないんだ。あたしは本当にご主人様を好きなのか。

好き、だとは思う。

でも、ご主人様の周りには、星や愛紗を始め多くの女の子が居る。

情を交わす関係の、女の子が。

もう少しだけ、見極めたいんだ。お母様。

あたしは、ご主人様に情人＜いいひと＞が沢山いても、それでもご主人様のことを好きだって言えるのか。

それを、見極めたいんだ。

あの顔と、あの言葉を思い出す。

……あたしは、どうしたいんだろう。

そんなことを考えているあたしを、お母様がじっと見ながら、酒を飲み始める。

「翠、自分何やっとるんや？こっちきて皆と一緒に騒ごうや！」

「うむ。翠、この酒は美味いぞ？お前も飲んでみると良い」

ゆっくり、考えよう。

そう思って、あたしも祝勝会に巻き込まれに行った。

蝶の如く～６６～（前書き）

この妄想の世界では、歴史上の偉人達は全て女性という設定でお話を勧めさせて頂きます。
あしからず、ご承知置き下さい。

劉備には、この道を歩んで貰います。そうでないと、先のお話に説得力が持たせられないと判断しましたので。

蝶の如く～66～

～冥琳　Ｓｉｄｅ～

平家軍が虎牢関を放棄した。虎牢関に、炎を放って。
雪蓮が珍しく大人しくしていたので何かあるのだろうとは思っていたが、まさかあの様な罠を用意してあったとは思いも寄らなかった。

誰だってそうだろうと思う。
誰が、石造りの虎牢関が燃えると思うのだ。それも、関全体が、一斉に燃え上がったのだ。勢いよく。

我先に虎牢関を突破し、洛陽へ向かおうとせめぎ合っていた袁紹軍と袁術軍は、関内で身動きが取れずにその炎によって多くの兵を死なせることになった。曹操軍と公孫賛軍、袁紹軍本隊及び袁紹軍の将である劉備の隊は、これを見越してなのか動かず、難を逃れたようだ。

「冥琳。袁術、死んでくれないかしら？この炎に巻かれて」
「そう願いたいが、残念ながら簡単にはいかないだろう。まぁ、これで生き残ったところで全軍の７割以上の兵を死傷させている。誠にやりやすくしてくれたものだ、平教経は」
「そうね。ただ、これから大変なことになるわよ？冥琳。何せ、平教経は馬騰を臣従させて、たった一人で董卓に味方して、連合軍を向こうに回して勝って見せたのだから。きっと彼に従いたいと言う人間が増えると思うわ。……漢王朝を無視してでも、ね」
「……雪蓮。お前は彼が勝った、と言うが、何故そう思う？」
「……彼の目的は、董卓の救出でしょう。そうでないと、完勝できる戦を放棄して領地に還ったりしないと思うわ。それに、どのみち

あのまま戦っていたらわたし達は負けていた。違う？冥琳」

……違わない。

私も、彼が虎牢関だけでなく洛陽を放棄したと聞かされてそう思っていた。

これは、袁紹を満足させる為の撒き餌のようなものなのだろう、と。

どうやらあの男は、漢王朝に全く価値を見出していないようだ。そうでなければ、皇帝を連れ出したことだろう。だが、それに至上の価値を見出している袁紹にとっては、格好の餌となる。

皇帝の身柄。

これが手に入ることで、袁紹は満足するだろう。そう考えての、撒き餌。それにより、董卓と平教経に対し、執拗に追撃を掛けるような真似はしないだろう。当然、これから嫌がらせは受けると思うが。

「いや、違わない。私もそう思う。随分と手強い相手になりそうだな、平家は」

「ん～、どうかな～？平教経と話してみないと分からないけど、私達の理想と彼の理想は、互いに共存出来るモノだと思うのよね～」

「……また、勘か？」

「そうだけど、それだけじゃないわよ？

彼は、『義』を見て為せぬ糞共、と呼ばわったわ。そこに義を見いだせれば、その者を救う。そういった人間にとって、私達が抱いている理想は決して廃滅させるべきものとしてその瞳に映らないはずよ。わたし達としては、連合軍を相手に一歩も退かずこの結果を手繰り寄せた彼と敵対するよりは、友好的な関係を構築出来た方が良いわ。

わたし達は、失った領地を取り戻し、孫家の皆と民とが笑って暮らせる世の中を望んでいるだけ。孫家の血と、民の安寧が保証されるなら、天下統一には拘らないわ。彼が力による完全な統一を望まない限り、共存出来るはずよ」

……是非、そうあって貰いたいものだ。
私とて自分の才に自信はあるが、その力を目の当たりにした今、平家を向こうに回して完勝出来ると思うほど自惚れては居ない。

平家の兵は、剽悍だった。
雪蓮や祭殿が鍛えに鍛えてきた呉の兵を相手に、終に崩れることはなかった。それどころか、こちらの兵が押されていたのだ。

平家の将は、一流だった。
？水関撤退時も、山塞放棄時も、虎牢関防衛時も。その全てに勝ち続けて終に驕ることがなかった。私達が二つの関を陥落させ、洛陽まで占拠しているが、彼らこそが勝者なのだ。それでも、驕ることなく沈着に行動していた。並の将に出来ることではないだろう。事態が思惑通りに進めば、多少の驕りはあって然るべきなのだから。

それらを率いる平家の主は、類い希な器量を有していることだろう。

恐らくわざと？水関を抜かせ、連合軍が撤退を考えられぬように心理的に追い込み、流言を以て士気を下げた上でこれを程々に叩き、その目的とするところを為す為に兵を退く。連合軍の目的を果たさせながら、自分たちの目的も達成する。

誰が絵を描いたのか知らないが、良く人を知っている。開戦からここまでの、その全ての戦をその頭で描いている人間が平家軍にいる。
私達は、その掌の上で踊らされたに過ぎないのだから。
その者は、呉起のような才を有しているかも知れない。
生涯で７６戦し、終に一度も敗れることがなかった、不敗の名将。
戦だけでなく政にも通じ、配下に対して公平で能く人心を収攬し、率いる兵に彼女の為に死ぬことを厭わせなかった、稀代の名将。

……敵には回したくないものだ。

「……ああ、本当にそう願うよ」

万感の思いを込めて答える。

……この世界は、本当に広い。自分は、まだまだ不足している。
それが自分で確認出来たこと。それに因って私は更に成長出来る気がする。次は、こうはいかない。

なんにせよ、これから忙しくなる。
孫家の独立の為の策を講じなくてはな。

～桃香　Ｓｉｄｅ～

洛陽に到着した。

途中、虎牢関にとても酷い罠が仕掛けてあった。
虎牢関が、燃えた。もの凄い炎を上げて。
私は、一番乗りしたかった。けど、朱里ちゃんや雛里ちゃんに止められた。
二人が居なかったら、私は死んでいたと思う。
私は要領が悪いから、きっと逃げ遅れて死んでしまっただろう。
二人が居てくれて、本当に良かった。

それにしても、あんな酷いことをするなんて。
何人も、生きたまま焼かれて死んでしまった。
虎牢関を通過する時、人間が焼けた臭いを嗅いだ。気持ちが悪くなって、吐いてしまった。皆、苦悶の表情を浮かべて死んでいたのだ。
……本当に、酷い。あんな残忍なことをするなんて。

虎牢関にいたのは、平教経さん。
どうして。どうしてそんなに酷いことが出来るんだろう。
いつか戦場で対峙することがあったなら、聞いてみたい。
もしそれを楽しんでいるのなら、許せない。残念だけど、力尽くでも分かって貰うしかない。例え、彼が死んでしまったとしても、自業自得だと思う。悪いことをして反省しないのは、悪いことだから。

到着した洛陽の街は、がらんとして、寂しい感じの街だった。
聞いてみると、住民の殆どは董卓さんに連れられて長安へ移動したのだそうだ。
……無理矢理に、連れて行ったのかも知れない。

その人達を、連れ戻してあげないと。
袁紹さんに話をする為に移動していると前から袁紹軍の中隊長が歩いてきた。
中隊長にその事を伝えると、きっと自分たちが助け出してみせる、

と言って１５００名ほど引き連れて洛陽を慌ただしく出発した。

心強い。良いことをした後は、気分が良いなぁ。

そう思って街を見ると、略奪行為をしている袁紹軍の兵隊さんが複数いた。

彼らを止めるように鈴々ちゃんにお願いをして、袁紹さんの元へ急ぐ。

袁紹さんは、きっと直ぐにやめさせてくれると思う。

私は、魔法の言葉を手に入れたのだから。

「袁紹さん、袁紹さんの兵隊さんが略奪をしているの。『華麗』じゃないから、やめさせた方が良いと思うんだけど、どうかな？」

袁紹さんに面会して、そう伝える。

「ぬぁんですってぇ～！？そんな醜い人達は要りませんわ！文醜さん、顔良さん、今すぐその華麗でない者達を処罰なさい！」

「……いや、姫？姫がその、好きなようにしろって言った奴らだと思うんだけど……」

「なにをぶつぶつと言っているのです？打ち首にしてしまうのですわ！さっさとなさ～い！」

「「あらほらさっさ～」」

「有り難う、袁紹さん。やっぱり袁紹さんは『華麗』だね」

「あら、劉備さん？今頃そんなことに気が付きましたの？まぁ、私を褒め称えさせてあげますわ。お～ほっほっほ。お～ほっほっほ」

『華麗』な袁紹さん。

そう言うだけで、袁紹さんは私の言うことを聞いてくれる。最初は、顔良さんに言われてそう言っていただけだった。でも、私は気が付

いたの。袁紹さんは、『華麗』な事が好きで、『華麗』だと言って貰いたい人なんだって。そう言ってあげれば、言うことを聞いてくれる人だって。

……袁紹さんにこうやってお願いをしていけば、もしかしたら私は王様になんて成らなくても済むかも知れない。悪逆な董卓さんも、平教経さんも、きっと袁紹さんがやっつけてくれると思う。もし袁紹さんが、道を誤りそうになったら、私や猪々子さんや斗詩さんで袁紹さんとお話をすれば大丈夫だと思う。今までもそうやって上手くやってきたんだし、これからもきっと上手く行くに違いない。

そうすれば、私は王様になんて成らなくても、いいんじゃないかな？

でも、朱里ちゃんや雛里ちゃんは、私を王様にしたいみたいだった。

……私に仕えてくれている二人。二人に申し訳ない気がする。

だから、もう少し頑張ってみようと思ってるんだけど。

……どうしても無理そうなら、袁紹さんと一緒に理想を実現しよう。ちょっとずるい気もするけど。口に出して言うことは、二人に申し訳なくてまだ出来ないけど。

袁紹さんも、猪々子さんも斗詩さんもいい人だ。

特に、袁紹さんは、人から馬鹿だと言われているけど、『華麗』であることに拘っているだけで本当の馬鹿じゃないと思う。そんなことを言ったら、私だってトロくて馬鹿だってよく言われてた。本当の馬鹿だったら、今回みたいにいろんな人達を纏めて世の為人の為に董卓さんを許す訳には行かない、なんて言わないと思う。

袁紹さんが天下を統一したなら、きっと私達で上手くやっていけると思う。

私の理想を、袁紹さんを通して実現する事が出来ると思う。
袁紹さんを利用することになるけど、その方が近道だ。私が今から力を付けるより、袁紹さんが今持つ力をより大きくすることで天下を統一させ、その後で私の理想を実現する。袁紹さんを、上手く誘導して。

これは、良い考えなんじゃないかな。
きっと二人も、理解してくれる。
その方が、早いに決まっているんだから。

～華琳　Ｓｉｄｅ～

洛陽で、麗羽と袁術の兵が略奪を行っていた。
貴女たち、本当に救いようがない馬鹿ね。
今この洛陽に残っている民達は、董卓や教経に付いて行くことよりも貴女たちを受け入れることを選択した民達だというのに。貴女たちは、早速その民達を裏切っていることに気が付いていない。その事で、更に名声を落とすことになるのに。

国というものは、国があるから人が集まってくるものではないのよ？人が集まってくるから、国が出来るの。そんなことも理解出来ないのかしら。本当に馬鹿ね。これが味方だなんて、おぞましくて、汚らわしくて、とても不快だわ。いっそ、教経と一緒に連合を叩けば良かったかしらね。

戯れにそう考えて、愕然とした。

……その方が、良かったかも知れない。

名声という点では、これ以上無いものが得られたはずだ。一時的に不明の君主と言われたとしても、教経の策によって全てが明らかにされれば、罵られた分より高い令名を馳せる事が出来たかも知れないのに。いや、確実に令名を馳せる事が出来ただろう。

それから、教経を屈服させる為に袂を分かっても良かったのに。

でも、もう結果は出てしまっている。

死んでしまった子の年齢を数えるような真似はやめましょう。今後のことを考えて置かないと。

……恐らく麗羽が司隷州を手中に収めることになるでしょう。

この連合で利益を得たのは麗羽だけ。

私などの一部の人間を除いて、参加した諸侯はそう感じることでしょうね。

それらの諸侯を利用し、麗羽を奔命に疲れさせ、決戦して一気に河北を手中に収める。その為の準備をしなければならない。

……先ずは、公孫賛ね。麗羽はきっと馬鹿なことを言い出すでしょう。自分の都合の良い人間を皇帝に据えようと。そしてその人間から禅譲を受け、袁王朝の樹立を目指すでしょう。公孫賛は、そんな麗羽に反感を抱くでしょうね。あれはそういう人間に見えるわ。先

ずは、彼女に麗羽と戦って貰おうかしら。
ただ、彼女だけでは麗羽に対抗することは出来ない。麗羽と事を構えようと思わせるには、豊かな兵力が必要ね。麗羽と領土を接している諸侯は、今回の遠征でその力を随分と落としている。公孫賛と連合をさせたとしても、その助力にはさほど期待は出来ない。であれば、どうするか。

……この際、賊でも利用しようかしらね。
『黒山賊』。常山を根城にして暴れ回っている彼らを、麗羽達は持て余している。彼らに、踊って貰おうかしら。私の掌で。麗羽は、総勢１０万を超えると言われている黒山賊を押さえられるかしら。

……なんにしても。

麗羽、貴女とは良い友人だったけれど、死んでくれるかしら。私の為に。
友人の夢の為の礎になれるなんて、貴女本当に幸せな人間ね。
……馬鹿な貴女では、この乱世は終わらせることは出来ない。
貴女が悪い訳じゃ無いの。でも、貴女は旧時代を代表する家に生まれてしまった。

恨むなら、自分の生まれを恨んで頂戴。
旧時代の終焉と新時代の幕開けを世界に知らしめる為に、貴女には死んで貰うわ。
私の夢の為にね。

～雪蓮　Ｓｉｄｅ～

「策殿！大変じゃ！」
「はいはい。祭、どうしたのよ。何が大変なの？」

洛陽に入って暫く後、ゆっくりしているとそう言って祭が駆けてくる。

「こ、これを見て下され！」

そう言ってその手を差し出してくる。
その掌の中には、印璽があった。

「……これは！祭、貴女、これをどこで手に入れたのかしら」
「井戸の中が光っているという報告を受けて取り上げてみたところ、コレが出てきたんじゃ」

伝国璽。

何故こんなものが井戸の中にあったのか、それは定かではない。
でも、これは役に立つわ。
何となく、だけど。

「祭、コレを取り上げた際、誰かに見られたりしなかったかしら」
「ふむ。周囲に儂の手勢を展開させて居ったので、誰も見ることは出来なんだと思うがの」
「そう。それならいいのよ。祭、直ぐに還るわよ」
「ん？」
「長居する訳にはいかないでしょ？噂に上った時に、袁紹達と面語出来る環境に居たくないのよ」
「ふむ。それが宜しいでしょうな」
「じゃ、宜しくね？」
「はっ」

天はわたしを、わたしの夢を祝福してくれているのかしらね。
これで、事態が大きく進む。そういう確信がある。それも、わたし達にとって良い方に。……これからどうするかは、冥琳に全部任せちゃいましょう。わたしはそんな面倒くさいことしたくないの。頑張ってね、冥琳。

自軍宿舎へ急ぎながら、わたしは冥琳に全部丸投げすることに決めたのだった。

蝶の如く～67～

～教経　Ｓｉｄｅ～

反董卓連合軍との戦から、一月近く経とうとしている。
終戦直後、諸侯に余力がなかった為か目に付くような動きをしている諸侯は一部を除いて居なかったが、漸く大本命の大馬鹿が動き始めた。

袁紹が、皇帝の挿げ替えを実行しようとしている。稟と風、そして詠からも、そう報告を受けた。
劉虞を皇帝にしようと言うのだ。
俺の知る史実とは違って、どうやら劉虞は乗り気らしい。

……本当に阿呆だねぇ。
袁紹が望んでいるのは、袁王朝の樹立だろうに。
お前さんは、用済みになったら死ぬことになる。自然死、という形で殺されるだろう。禅譲を断っても、当然死ぬ。死しか先に待っていない道を、我から望んで歩もうとはねぇ。
分限を弁えない奴は死ぬ。想像力のない奴は死ぬ。その両方を兼ね備えた、類い希なる自殺志願者らしいな、劉虞って奴は。完全自殺マニュアルでも贈ってやろうか？この際、劉愚って改名してみたらどうかね？その方がお前さんにはお似合いだ。愚者から大馬鹿者への禅譲。とんだ笑劇だ。

ちなみに平家の軍師様達は、皆それぞれ別の諜報網を用いているらしい。風曰く、『その方が、より物事を多角的に見ることが出来るのですよ、お兄さん』。まぁ、確かにそうだろう。使っている人間に何を見てくるように要求するかはそれを使役する人間次第だ。当

然、得られる情報は諜報網を使う人間の嗜好が色濃く反映されたモノになる。

稟は、軍事面を重視した諜報活動を行う。兵糧の動き、金の流れ、人の移動。そういった情報から、この先何が起こり得るのかを分析し、確率が高いもののいくつかに対して策を講じ、備える。備えるだけでなく、軍事活動が制約されるように幾重にも策を張り巡らせてその行動選択の自由を奪う。例えば、烏丸などの異民族を煽動して国境に兵を集結させ、軍事行動を軽々しく取れない状況を現出させている。遠征など、とても出来たものではないだろう。

風は、政治面を重視した諜報活動を行う。領内への布告、社会インフラ整備事業の内容、税率。そういった情報から、その治世に綻びがないかどうかを鑑み、この先手強い相手になるかどうかを分析する。その上で、手強い相手になり得ると感じた者には、離間、流言、煽動、破壊活動を仕掛け、その治世を積極的に揺さぶっていく。特に地方の小領主で傲慢で貪婪な者に目を付けては、それを助長させて圧政を行わせることで治世を揺るがしたり、それが国境の者であるならば兵の小競り合いを現出させて他国との軋轢を発生させたりして、真っ当に政を行う事が出来ない状況を創り出している。

詠は、各家の政争に重視した諜報活動を行う。皇帝の膝元で政と宮廷を取り仕切っていたのは伊達ではない。魑魅魍魎の巣窟である宮廷の権力抗争の中、董卓を押し上げてきたその手腕で、諸侯の家の中における政争に積極的に関わっているようだ。より低能な者に、より有能な者を陥れる為の策をあらゆる手段を使って伝えさせ、実行させ、それが成るようにある程度助力する。低能な者を助力しながらも、大勢がある程度決した時点で有能な者にその陰謀を通知し、対策を講じさせ、より酷い政争となるように仕組んでいる。より多くの有能で忠烈な士が死ぬように。詠が凄いのは、自分が全く表に

出ないところだろう。その国の人間を使って、全ての策を施している。自分から直接伝えたりはせず、何人もの人間を経由させて情報や策を与えているのだ。傍目的には、自国内の人間だけで壮大な陰謀劇が繰り広げられているように見える。だが、陥れる側にも、陥れられる側にも、詠の影が見え隠れする。

俺は、経済戦争に関して積極的に策を考案している。稟が、それを理解した上でより効果が上がるように策を構築して行っているようだ。まぁ、風も詠も、同じように此処には関わってくる。お互いに張り合って。その才の全てを傾けるような勢いで。……相手には災難なことだ。

俺は経済。稟は軍事。風は治世。詠は権力闘争。
この四人で、それぞれが思う最良の策をそれぞれの分野で実施する。時に全員で顔を突き合わせて今後の策の展望を話し合い、互いが行おうとしている策に有効に絡めることが出来る策があれば、併せてそれを行う事でより一層の効果を出せるように全体の絵図を描いていく。

余所でも、コレと変わらない事をしているンだろうが、ねぇ。
相手が、悪いと思うンだよねぇ。

郭嘉。程？。賈駆。

勝てる奴が居るのかね？コレに。一人で全てをやっている訳じゃあ無いンだ。それぞれ専門とする分野を持っている。専門家に対抗するには、専門家が必要だ。諸葛亮は、全てを自分でこなす。その才も、対抗するに能うモノだろう。だが、惜しむらくはアレは一人しかいないということだ。
俺たちに対抗する為には、四人必要だ。演義における諸葛亮レベル

の天才でも、三人は必要だろう。そうでないと、手が回らないに違いないのだからなぁ。経済面に関しては、はっきり言ってこの時代の人間は子供以下のレベルだ。なぜモノの価格がこうなるのか、市場の原理とはどう働くものなのか。それらを学術的に学んできた俺と、感覚でモノにしている人間とが争えば、俺が勝つのは目に見えている。よしんば対抗手段を講じることが出来たとしても、それを徹底させることが出来る立場には居ない。この時代、商人の地位は低く、蔑まれているが、国家戦略に縛られることは全くなく、自由なのだ。仕掛ける側の方が、仕掛けられる側よりも優位な状況で戦を始めることになる。最初から存在しているこの差を埋めることは出来やしない。

それは兎も角、愚者と大馬鹿がどんな絵を描いているのか。
それを知ることが先決だろう。
もし、俺たちを目の敵にして追討令を発したら。
その事について、話し合っておく必要があるだろう。

～稟　Ｓｉｄｅ～

教経殿から、平家軍の軍師が招集を受けた。
教経殿の部屋に全員が集まって話をする。

「袁紹が追討令を発したら、ですか？」
「そうだ。そうなった時、政治的に全く揺らがないという訳には行かないし、純軍事的に考えても対抗する手段を用意しておく必要がある」
「お兄さん、お兄さんは政治的な大義名分を欲しているのですか？」
「いンや。そんなモノはどうでも良い。漢王朝など、只のガラクタだ。もう既にな」
「ちょっと待ちなさいよ。只のガラクタと言うにはまだ早いわよ？権威もあるし、その命令にはある程度の拘束力を持たせることが出来る状況だと思うんだけど？」
「そんなことを歯牙にも掛けない、最強の台詞を教えてやる。『それがどうした』。
王室の命令がない状況で軍事を催す事が出来た。その事実は、漢王朝は既に死んだも同然であることを世に示すものだ。それになぁ、漢王朝の元で善政を布いていた董卓を討伐しに来た馬鹿共に対し、それをやめるように勅命を以て制止しなかった時点で漢王朝はお終いなんだよ。己が為に尽くしてくれた忠臣であり能臣である董卓を討伐されるままに放置する。年若であろうとなんであろうと、そんなことは理由には成らないんだよ」
「しかし、教経殿。致し方ない部分もあるのではないかと思いますが。勅命を以て連合軍を制止しようと思いつける程の余裕があったとは思えません。陛下自身にも、周囲の者達にも。詠にしてからが、それを思いついて居なかったのです。
陛下にとって、董卓殿を殺されるのは、己の手足をもぎ取られる程

に辛いことでありましょう。それでも、抵抗する手段を思いつかなかったのです。涙を飲んで、時勢に流されるより他にないと思っていたに違いありません」

「……泣いて馬謖を斬る、か。ふん。自分が犠牲にならずにすむなら、いくらだってうれし涙がでようってものだろうねぇ」

そう、吐き捨てるように言った。

「……馬謖？」

「あ～、まぁ、置いとけ。どちらにしても、斬り捨てられる手足からすれば、どんな涙を流そうとそれは自己陶酔、自己憐憫の極みに過ぎんよ。そんなに哀しいなら命を投げ捨ててでも手足を護ってやればいい。それをしていないんだ。弁護する余地はないぜ？」

……教経殿の言は正しい。

だが、教経殿のように、己の意志や理想を貫ける者ばかりではないのだ。

教経殿の様な人以外、誰も陛下を責められないのではないか。そう思ってしまう。

「話がずれちまったが、そういう訳で俺は漢王朝なんてモノは認めない。認めないどころか、それはもうとっくの昔に滅んじまってるモノだ。俺の中ではな」

「では、お兄さんは……」

「ん？」

「……お兄さんは、平王朝を樹立する。それを目的としているのですか？」

「……言ったろう？天下を統一する。それが俺の夢を実現する為に必要な手段だ。平王朝なんて形を考えていた訳じゃ無いが、それしかないのならそうするさ。だが、それ自体が目的じゃない。そいつ

は、手段に過ぎんよ。他に手段があるなら、別にそれでも構わんよ。あるのなら、な」

平王朝が必要なら、それを樹ててやる。
平然とそう言い放つ。

「……全く。物騒なことこの上ないわね。いい？それ、ボク達平家の人間以外に、今はまだ公言しちゃ駄目だからね？」
「分かってるさ。しやしないよ。『今はまだ』、な」
「分かってるなら、それでいいのよ」
「……追討令が出された場合、政治的に領民が揺らぎ、反乱を起こす可能性はある？風」
「……余程巧妙に煽動されれば、あるとは思うのです。でも、限りなく低いと思うのですよ」
「何でそう思うのよ」
「今回の戦の正義は、お兄さんにあった。それは、流言によって事の顛末を流布したことによって領内だけでなく既に全国に伝わっていることなのです。その状況で、お兄さんを討伐せよ、という命令を出す。風に言わせれば、自殺行為にしか思えないのです。自分たちは、義に厚いお兄さんが生きていては困る存在だ、と全国に触れを出して廻るに等しい行為なのですから」
「……いつの間にそんな流言飛ばしたンだ」
「お兄さんから策を聞いた時点で、手筈は整えておいたのです。利用出来るものは、全て利用する。その必要がある限りにおいて、どんなものでも利用すべきなのですよ、お兄さん。利益をもたらすと思われるもの、その可能性を持つ策については全てこれを行っておくに越したことはないのです。お兄さんの矜持が傷つかない限りにおいて、ですが」

こういった方面のことは、勿論私でも思いつくが、風の方が少し早

く思いついて居ることが多い。風には敵わない、と思わせられる。

「成る程。では、政治的にはさほどに問題にならない、と考えている訳ですね？風は」

「稟ちゃんはそう思わないのですか～？」

「いえ、同じ意見です。貴女の言う通りになるでしょう。ならないなら、そうすれば良いだけのことです」

「そうね。それで良いんじゃない？ボク達が居れば大概の事は出来ると思うから、予測が外れた時にどうするのかが大まかに決まっていれば問題無いわ」

詠がそういいながら、眼鏡を押し上げている。

教経殿は、詠に夢中になりつつあるようだ。

負けませんよ？詠。

私も対抗して眼鏡をこう、クイクイと押し上げる。

「……やばいんだねぇ……二人とも誘ってやがるのか……俺は眼鏡属性持ちなんだよねぇ……麦茶が好きなんだよねぇ……」

「お兄さん、へぶん状態なのはいいのですが、まだお話は終わっていませんよ？」

風がそういいながら、座っている教経殿の正面から跨って抱きつく。

「ちょ、ちょっと！アンタなにやってんのよ！」

「風に夢中にさせるのですよ。稟ちゃん達ばかりずるいのです」

「風！貴女って人は……！」

しれっと答えた風に、私も詠も噛みつく。

抜け駆けは、許しませんよ、風？

「……四人で集まると、毎回こうなってる気がするんだねぇ……」

教経殿は、そういって遠くを眺めていた。

～風　Ｓｉｄｅ～

……三人で張り合って、結局お兄さんと致したのです。

毎回、こんな感じなのです。

稟ちゃんも、詠ちゃんも、期待していたに違いないのですよ。

「で、純軍事的にどうするのか、なんだが」

寝台で寝転がりながら、お兄さんがそう語りかけてきます。

……寝物語に策を語る。
普通にあり得ないことですが、風達にはこれが普通です。

「どうするのよ。アンタのことだから、何か考えているんでしょ？」
「まぁ、ね」
「何をお考えになっておられるのですか？教経殿は」
「……益州の一部と荊州の一部を手中に収める。具体的には、魏興郡、新城郡、巴東郡、宕渠郡、巴西郡、梓潼郡、武都郡、ムン（さんずいに文）山郡を。これで、俺たちを攻めてくる相手を防ぎやすくなるだろう。長安の裏を突くことが出来る新城郡と巴蜀から侵攻する際に通るであろう梓潼郡、巴西郡。これで蓋をする。そうした上で力を蓄えたい」

益州の一部、荊州の一部。
これを奪うことで力を付け、かつ守るに易い環境を作り上げる。
……お兄さんの頭の中はどうなっているのでしょうか。
攻めつつ守る。守りつつ攻める。それを叶える為には恐らくこれ以上の策はないのです。

「……思うんだけどさ、アンタに軍師って必要な訳？」
「必要だ。俺は、そうしたいってだけなンだよ。そうなったら楽が出来るだろうと思っているだけなンだ。それを具体的にどうやって実現するか、という部分がすっぽりと抜けちまってるンだよ。お前さん達が居なかったら、俺は何にも出来ないンだから。頼りにしてるよ、詠。稟。風」
「う……た、頼りにされてやるわよ」

詠ちゃんは嬉しそうにお兄さんに抱きついていますね～。

「ではお兄さん、いつまでに、それを行う必要があるでしょうか」

風も抱きつきながら、お兄さんにそう尋ねます。

「……それが分からん。今すぐ、は無理だ。どう考えてもね。兵の士気にも関わるし、連戦するのは避けないとな。民からも、戦馬鹿だと思われかねないしねぇ」

「来秋、実りを収穫した後で、と考えていて良いでしょうか」

稟ちゃんが、真正面からお兄さんの上に覆い被さるように抱きつきます。

……風が、そこに行けば良かったのです。

詠ちゃんも、そんな顔をしています。恥ずかしそうですが。

「……状況次第だろうねぇ。今年豊作だったからと言って来年もそうとは限らない。今軍事的に余力があるからと言って将来もそうだとは限らない。予断を持って事に当たるのは怪我の元だ。その時に考えればいいと思うんだが、どうかね？」

「それでは、来秋、実りを収穫した時に考えましょうか、お兄さん」

「まぁ、そうなるかな。ただ、覚えておいてくれよ？俺がそう思っているって事を、ねぇ」

「分かってるわよ。情報収集もしておくし、攻めた時に上手い具合に混乱してくれるように流言を飛ばしておけばいいでしょ」

「そうですね。今はそれで十分だと思います」

お話は、これでお終いなのです。

「……では、お兄さんの準備も十分なようですし」

「そ、そうね」

「教経殿……」

「……俺はいつか死ぬんじゃないかね？こう、目の前が黄色くなっ

て……」

「自業自得なのです」

「自業自得よ」

「自業自得だと思います」

……平等にしなければならないのですよ、お兄さん。

蝶の如く～６８～（前書き）

今日も一日引きこもりだぁ～

蝶の如く～６８～

～麗羽　Ｓｉｄｅ～

私は、洛陽に一番乗りを果たしたのですわ。
この洛陽を、董卓と平教経の二人から奪ってやったのですわ。

小生意気な平教経。大した功も無いあの男を、并州牧に任じて袁家に従う機会を与えてあげましたのに、あの男は私に跪拝することをしなかった。本当に、生まれの卑しいものはこれだから駄目なのですわ。その上、今回の戦で寛大な私が折角董卓の小娘を殺して天下を手に入れようという戦に誘って差し上げましたのに、私への助力を断ったどころか董卓に助力をするなんて、本当にお馬鹿なのですわ。
私の元に集まった諸侯の生まれが卑しく、『華麗』でなかった為に苦戦したようですが、結局のところ私達袁家を中心とした『華麗』なる連合軍の、『華麗』で勇ましい進軍の前に脆くも崩れ去り、しっぽを巻いて領地へ逃げ帰ったのですわ。卑しい男に相応しい、無様な敗北だったのですわ。お～ほっほっほ。お～ほっほっほ。

その平教経を雍州に放逐してやった後、并州牧を兼ねようとしていた私の邪魔をした董卓の小娘。ほんっとうに、憎らしい！殺しても殺しても飽き足らない女のなのですわ。もし洛陽で死んで埋葬されていたなら、死体を引き摺り出して何度鞭打ってやっても足りない程に憎かったのですわ。
その董卓も洛陽を捨てて、無様な平教経に縋って長安へ落ち延びていったのですわ。あの淫売は、平教経と寝たに違いありませんわ。命を助けて貰う為に。そして平教経はそれを受けいれた屑に違いないのです。そうでないと、この『名族袁家の袁紹』に従わないはず

など無いではありませんか！

全く。売女と情夫に相応しい、みっともない敗北ですわ。お～ほっほっほ。お～ほっほっほ。
でも、もう良いのですわ。
あんなお馬鹿さん達には、用はないんですの。

皇帝陛下の身柄はこの私が握っているのですわ。
これはつまり、袁王朝を樹立せよ、という天命なのですわ～。お～ほっほっほ。お～ほっほっほ。
今私は機嫌が良いのですわ。貴女たち二人のような、取るに足りないウジ虫に関わっている暇はないんですの。

機嫌の良い私に、卑しい生まれの雑兵たちを取り纏めている、袁家の肥だめ掃除係のような部隊長が、洛陽で好きに振る舞っても良いか、と聞いてきたので、好きになさいと言ってやったのですわ！お～ほっほっほ。お～ほっほっほ。

これからの袁家のことを、しっかりと考えないといけませんわね。
それを考えようとしていた私に、劉備さんが話しかけて来ましたわ。

最近、漸く劉備さんが私の偉大さに気が付いて、私のことを華麗だと言うようになりましたわ。
……全く。時間が掛かりすぎているのですわ。
一目見れば、私が高貴な生まれであることに気付いて跪拝するのが当然ではありませんか。貴方、そうは思わなくて？

そろそろ、お友達として認めてあげても良いかもしれませんわね。
？水関でも虎牢関でも、私の為によく頑張っていたようですし。

そう考えている私に、劉備さんは略奪をしている兵達に、略奪をやめさせた方が良い、と言ったのですわ。『華麗』ではなくなってしまうから、と。

それは、『名族袁家の袁紹』としては、許してはならないことですわね。

そういえば、斗詩さんが何か言っていたような気もしますが、まぁ、そんなことはどうでも良いでしょう。斗詩さんは袁家の顔良なのですから、私が話を聞こうと聞くまいと、私の勝手なのですわ。お～ほっほっほ。お～ほっほっほ。

兎に角、文醜さんと顔良さんに、その兵達を殺しておくように伝えたのですわ。

全く。私の、『名族袁家の袁紹』の兵ならば、例え生まれが卑しくとも『華麗』でありなさいな。

もう少しで、この私が『華麗』でなくなるところだったではありませんか！

本当に忌々しい！

……劉備さんには、感謝しても良いのですわ。

これからも、私が『華麗』であるために頑張ると良いのですわ。

この私、『名族袁家の華麗なる袁紹』の為に、『華麗』に。

お～ほっほっほ。お～ほっほっほ。

～斗詩　Ｓｉｄｅ～

洛陽に入ってから、軍の一部が暴走し、略奪や殺戮、強姦行為を専らにしていた。
私も文ちゃんも、麗羽様に止めるようにお願いをしたが、麗羽様は放っておけの一言で済ませてしまい、一顧だにしてくれなかった。

……はぁ……このままじゃ、麗羽様の名声が墜ちるんだけど……
でも、言うことを聞いてくれない麗羽様に、何を言っても無駄だ。
そう思っていた時に、桃香さんが麗羽様を説得していた。私が教えた通り、『華麗』という言葉を使って。

……きっと無駄ですよ、桃香さん。私がさっきやりましたから。

しかし、麗羽様は桃香さんの言葉に耳を傾け、直ぐに略奪行為をやめさせるように命令した。私達が何を言っても言うことを聞いてくれなかった麗羽様が、桃香さんの言葉には素直に、直ぐに従った。

相性、というものかもしれない。
でも、私にしてからが、桃香さんのお願いを無碍に突っぱねること

が出来なくなってきている。特に桃香さんに従いたいとは思わないし、桃香さんに仕えたいとも思わない。でも、桃香さんのお願いを聞かない、という選択を、ここ最近私はしたことがない。彼女が言うと、他の人が言ったら間違いなく怒るであろう事でも笑って聞き流せる。恐らく、これは人徳というものなのだろう。

……この人、ひょっとしたら。

この人なら、誰も出来なかった麗羽様のお目付役になれるかも知れない。普段ぽわぽわして居て、馬鹿なんじゃないかと思うことがある。文ちゃんは、麗羽様と同じ馬鹿だって大きな声で言ってたけれど……あ、あははは……文ちゃん、そういうことを言う時は、周囲をよく見た方が良いよ……

以前、朱里ちゃんが言っていた。桃香さんには、夢がある、と。桃香さんは、麗羽様を使ってその夢を実現させようと考えているのではないか。そうでないと、ああやって麗羽様を諫言しようとは思わないのではないか。

勿論、桃香さんが心から麗羽様と袁家の将来の事を考えてそう言ってくれた可能性もある。だけど、常識的に考えて、それはない。朱里ちゃんも雛里ちゃんも、麗羽様と桃香さんが仲良くすることを余り好んでいないように見えるから。だから、今まで積極的に桃香さんが麗羽様に献言したことはなかった。やったことは、精々麗羽様が民のことを考えて政を行っているのか、と聞いたぐらいで。それが、麗羽様の為になるような諫言を行った。

真意を、確認する必要がある。

そう思って、桃香さんと話をすべく、桃香さんを訪ねた。

「あ、桃香さん。ちょっとお話があるんですが」
「？どうしたの、斗詩さん」

麗羽様に天下を取らせて、ああやってお願いを繰り返すことで、自分自身の夢を成し遂げるつもりなのかも知れない。それは、正直な話、別に構わないと思う。麗羽様は、私が言うのも何なんだけど、その、昔と違って頭がちょっとアレな感じで。最近文ちゃんがそういっているんだけど。誰に教わったのかな、こんな迂遠な言い方。兎に角、その夢が、麗羽様と袁家の為になる限りにおいて、私はそれでも構わないと思う。
だから、本人に真意を確認したい。

「……単刀直入に聞きますね。桃香さんは、麗羽様を利用してご自分の夢を実現しようとされていませんか？」
「……どうしてそう思うの？」

否定しなかった。つまり、そういうことなんですね？

「……麗羽様に、諫言をして下さいました。あのままでは、麗羽様は天下の信望を失ってしまっていた可能性があります。それを、止

めて下さいました。本来であれば、袁家がその力を失うことは、桃香さんにとって望ましいことだと思います。麗羽様や私に良いように使われて、面白いはずがありませんから。居なければいいのに、と思うことはあっても、居て貰わないと困る、とは思わないはずです」

「……」

「それが諫言をして下さる。それは、麗羽様の利益がご自身の利益に直結する場合以外にはあり得ないことなのです。今日のあのやり口から見て、お願いを繰り返す事でご自身の夢を麗羽様を通じて実現しようとされているのではないか、と思ったんです」

「……うん、そうだよ」

「やはり、そうですか」

「でもね、斗詩さん。私は」

「いえ、別に構わないと思いますよ？私は。ただ、その夢の内容を教えて頂かないことには、このまま放っておく訳にもいかないんです。ですから、それを教えて頂けないかな～、と思いまして」

「……私の夢は、戦争が無くなって皆が笑って、仲良く手を取り合って生きていける世界を作ることなの」

「……」

「その夢を実現させる為に、袁紹さんに天下を取って貰って、その上でお願いを繰り返そうと思ってるの」

その夢の実現は、麗羽様の利益となるか、それとも不利益となるかを考えてみる。

……よく考えてみるまでもなく、利益になるに決まっている。

民のことを考えて政をする、ということに他ならない。それなら、その姿勢を創り出しているのが例え麗羽様でなくとも、その政を行っているのが麗羽様である以上麗羽様の利益になる。

これは、この人と手を結ぶべきではないか。

この人と手を結べば、麗羽様を天下人に出来るかも知れない。
私一人では絶対に無理だと諦めていた。でも、この人が居れば。この人が麗羽様の側に居れば、麗羽様は天下を獲れるかも知れない。
今日のあの遣り取りを見る限り、この人を通して献策したり諫言したりすれば、麗羽様は素直に聞いて下さるだろうから。

一度は、諦めた、私の夢。
麗羽様と、文ちゃんと。
一緒に天下を統一して、ご先祖様に胸を張って誇れるような政を、麗羽様と一緒になって行う。その夢が、今また目の前に蘇ってくる。
あの頃は、純真無垢だった。麗羽様も、今とは違って素直な人だった。だから、それが出来ると思い、そして成長するにつれて麗羽様が麗羽様ではなく『名族袁家の袁紹』であろうとして虚勢を張るようになり、自分を貫くことと他人の意見を聞かないことが同じであると勘違いをして、人の諫言の一切を受け付けないようになってしまってから、私の前から姿を消してしまっていた、私の夢。その夢が、今、手が届くものとして私の目の前にある。

……叶えたい。
この夢を、叶えたい。
私は、どこまで行っても袁家の顔良でしかないのだから。
麗羽様の為に生まれたのだと言われて育ち、麗羽様と一緒に、ずっと一緒に育ってきたんだから。だから、麗羽様と一緒に天下を統一したい。統一して、人から尊敬される麗羽様になって欲しい。そういう麗羽様に、成って欲しい。私が、してあげたい。

私だけでは、叶えられない、私の夢。

「……わかりました。桃香さん、私と一緒に、麗羽様を助けてあげて下さい」

「……えっ」

「貴女の夢を麗羽様を通じて実現しましょう。それは、麗羽様の為になります。その為なら、私は協力を惜しむつもりはありません」

「……うん。わかったよ、斗詩さん。ありがとう。本当なら、怒られても仕方がないことなのに」

「いいえ。貴女が袁家にこうやって客将として居なかったら、麗羽様はいずれ滅ぼされていたかも知れませんから。麗羽様自身の性格やああいった態度のせいで、今まで多くの家臣達が麗羽様の元を去っていきました。あの麗羽様を見て、それでも麗羽様に天下を獲らせようと考えてくれる貴女の方が、彼らなどより余程信用出来ます。私の方こそ、お礼を申し上げます。桃香さん、本当に有り難う御座います。

……麗羽様を、見捨てないであげて下さい。麗羽様は、本当は心優しい、素直な人なんです。袁家に生まれ、『名族袁家の袁紹』として生きていく為に、ああやって虚勢を張って生きていかなければならない人なんです。そうでないと、本当の自分が傷ついてしまう、そんな弱い人なんです」

「大丈夫だよ、斗詩さん。私も居るし、斗詩さんも居る。猪々子さんも居るし、鈴々ちゃんも、朱里ちゃんも雛里ちゃんも居る。きっと、大丈夫だよ。袁紹さんを、皆で天下人にしよう？」

「そうですね」

この人が一緒なら、きっと叶えられる、私の夢。

……私は、今もう一度、この世界に生まれたんだ。

袁家の顔良ではなく、麗羽様の為に生きる、顔良として。

蝶の如く～６９～（前書き）

銀河英雄伝説を読んでいた人が多そうなので、多分ＯＶＡを見てた人も多いと思います。
そこで、ちょいとトラウマを抉ってあげようかなと。
先に誤って（↓謝って　２／１９修正ｗ）おきます。フヒヒ。サーセン。

その時、一つの星が銀河の中で瞬いて消えた・・・
その時、一つの時代が終わりを告げた・・・
次回、銀河英雄伝説第８２話　「魔術師、還らず」
銀河の歴史が、また一ページ。

ねぇ、どんな気持ち？
今どんな気持ち？
（ＡＡ略）

蝶の如く～69～

～星　Ｓｉｄｅ～

長安へ帰ってから一月程経過したある日、主に呼び出されて広間に向かった。
寝所でなく、広間ということは、何か表向きの話があるのだろう。
……寝所に呼んで下さればよいものを。
最近、軍師を集めて軍議ばかりしているようだ。
偶には私や愛紗と共に鍛錬をして下されば良いのに。
そう思いつつ、広間に入る。

「ただ今参上致しました。主、話というのは何でしょうか」
「ん～、俺からじゃないんだよねぇ」
「はぁ」

見れば、稟、風、愛紗、碧、翠、琴と揃っている。
その向かい側に、董卓軍の将が。詠、霞、呂布、陳宮と並んでいた。
中央の椅子に、主が座っており、階の下に董卓が立っている。その董卓の後に、華雄が跪いて控えている。

「あの、済みません、趙雲さん……私から皆さんに、どうしてもお話がしたかったのでこうして集まって頂いたんです」
「いや、別に構いません。気にされることもありますまい」
歩きながらそう言って、稟の隣、平家軍の列で一番の上座、つまり

主に一番近い側へ立つ。

『ここは、星の場所な』。

主がそう言ってくれた、私の居場所。平家軍で一番の上座。そこに私を指名して立たせてくれた事が、嬉しい。それと同時に、この場所に恥じぬような女であらねばならないという、使命感というか、緊張感が湧き上がる。

……何となく、関係を持った順番に並んでいるような気がしますが？主。

まぁ、それでも嬉しいことには違いない。

異論を差し挟んで、此処と違う場所に立つなど私は嫌だ。

「じゃぁ、董卓。話ってのをどうぞ」

「は、はい……」

董卓は緊張しているようで、子鹿のように震えている。

「……緊張するこたぁ無い。想像が付いている、って顔をしている奴が何人か居るし、これまでそんな感じでやってきたんだ。其れを改めて宣言するだけなんだし、な。もっと気楽に考えて良い」

「……はい」

意を決して、董卓が話し始める。

「……皆さん、私は、董仲穎は、平教経様に……ご主人様にお仕えしようと思います」

……成る程、『これまでもそんな感じで』、とはこういうことですか。

「月、それでええんか？月は、董卓軍の主として、経ちゃんと対等とはいかんやろうけど、臣従する諸侯の一人として立つことも可能やと思うで？」

「……今回のことで分かったんです。私は、この乱世には向いていません。私は、私の為に死んで欲しい、なんて、言えません。この世の中をより良いものに変えたいと思うけど、その為に誰かに死んで下さいとお願いすることは出来ません。そう言う、覚悟がありません」

「……」

「……でも、ご主人様は違います。私を救う為に、『義』を打ち立てる為に、共に戦って死ね、と。そうはっきりと言える人です。それは、覚悟の違いです。私は、今のこのままの私でこの乱世で諸侯として立つことが、多くの人に迷惑を掛けるものだと思うんです」

「……そんなことない。月は、立派。恋にはできないこと」

「ねねも、そう思うのです」

「……ありがとう、恋さん、ねねちゃん。……でも、覚悟のない私の命令で、多くの人が死ぬのには耐えられないんです……耐えられそうにありません。ここまで皆さんに良くして貰っておいて……それでいて逃げるような真似をして……本当に卑怯だと思うけど、私はご主人様に全てを托してこの世界をご主人様が思う理想の世の中に変えて貰いたい……そう思うんです」

「……」

「だから、私にこれまで従ってくれた皆さんには、ご主人様の力になって上げて欲しいんです……お願い、できないでしょうか……」

「……月様、月様は、どうなさるのです？」

「……私は、ご主人様から政の面で支えて欲しいと言われています。ですから、ご主人様のお力になれるように、努めたいと思います」

「それであれば何の問題もありません。私は、平に仕える月様にお仕え致します。何度か申し上げております通り、私の主君は月様只

一人です。例え月様が市井の一少女に成られたとしても、この身を削ってでも困窮することが無きようにお仕え致します。それが、この華雄の生き様というものです。誰になんと言われようと、この生き方を変えることは最早出来そうにありません」

そう、はっきりと華雄が言う。

……華雄は、本当に変わったな。

あれから随分立つが、全く以て芯がブレていない。見ていてすがすがしい気持ちになる。

「……恋も、そうする。月と一緒にいる」

「恋殿とねねは一緒なのです。だから、ねねも一緒なのですぞ」

「有り難う御座います」

「ボクは……」

「詠ちゃん」

悩んでいる詠に、董卓が話しかける。

「詠ちゃんは、ずっと私の為だけにこれまで生きてきてくれた。でも、私はもう大丈夫だよ、詠ちゃん。華雄さんが居るし、ご主人様もいるから。私は、きっと大丈夫だよ。だから、詠ちゃんにはご主人様にお仕えして欲しいの。……詠ちゃん、ご主人様のこと、好きだよね？」

「……う、うん」

「……ふふっ。詠ちゃん、随分変わったんだよ？詠ちゃんは。ご主人様と一緒に居るととても幸せそうで。ご主人様の話をしているととても愉しそうで。だから、詠ちゃん。詠ちゃんは、ご主人様と一緒に歩んでいった方が良いと思うの。ううん、私がそうして欲しいの。詠ちゃんには、自分の幸せの為に生きていって欲しい。今までずっと私の幸せの為だけに生きてきてくれたんだから。これからは、

自分の為に、ね？」
「ゆ、月……」
詠が、その目に涙をためて董卓を見つめている。
そんな詠と董卓を見ていると、なんというか、こう、目頭が熱くなる。
董卓は、やはり人主足る器を有していると思う。
良い友人が欲しいと思う人間はこの世の中に腐るほど居るが、それより先に、誰かにとって良い友人でありたいと願う人間はそう居ない。董卓は、そういう人間だ。まず、友人の幸せを願う。出来そうで出来ないことだと、そう思う。詠は、良き友と主君を持っていたものだ。主に負けぬほどに、その在り方は美しい。
この董卓を救った主の見識は、誠に正しいものであったと言える。
このような人間、死なせてなるものか。そう思わせるだけのものを、董卓は持っている。そうであればこそ、洛陽に駐屯していた官軍の悉くが彼女に従ったのだろうが。
「……分かったわ。ボクはコイツに仕える。コイツに、責任取って貰わなきゃ、だしね」
詠がおちゃらけた口調で、そう答える。
……詠よ、それを言うなら、もう４人程居るがな？主に責任を取って貰わねばならぬ人間が。
「……ウチも、経ちゃんに仕えるで」
「……霞？」
「ウチは、月の願いを受けたる。経ちゃんの力になったるよ。それで、月は、月の望みは叶うんやろ？そしたら、ウチが叶えたる。ウチがしてやれることはそれくらいやから」
「……有り難う御座います、霞さん」

「董卓軍の意見が纏まったところで、平家軍の人間に聞くがね。……月が俺に臣従することに、反対する奴、納得がいかない奴はいるかね？」

そう主が問いかける。

横を見ると、皆が私の顔を見ていた。

……断る理由がどこにあるのだ。あれか、琴の件で何かそういうことに反対するのは私だと思われているのか？心外な。このような人間が仕えることに、反対する訳がないではないか。見損なって貰っては困る。この趙子龍。そのような腸の腐った女ではない。

「反対するはずもありません。董卓殿には、太原から長安へ移動する際にこの上ないほどに世話になったのです。その為人も、その思想も、我らが同僚として相応しい、誠、素晴らしい人物です。むしろこちらからお願いしたいほどで。董卓殿、これから宜しくお願い致します」

「私の真名は、月です、趙雲さん。これから、宜しくお願い致します」

「月、私の真名は、星だ。さっきも言ったが、こちらこそ、宜しく」

私がそう言ったのを皮切りに、皆が次々に真名を交換している。

それを月の後から、華雄が眺めている。少し、羨ましそうな顔をして。

……そう言えば、華雄には字も真名もなかったのだったな。こういう時、居心地が悪いことだろう。だが、私にはどうしてやることも出来ない。

「……あぁ、そうだ。そういえば俺からも言うことがあった」

そう思っていると、主が唐突にそう言い始めた。

また何かを思いついたのか。アレは、何かを思いついた顔だ。

「華雄、月が、お前さんに真名を呉れて遣るそうだ。『朔』という。お前さんに丁度良い真名だ。俺に仕える事に決まった時に、俺から授けてやって欲しいと言われてな、今まで預かっていたンだ。だが本当に俺から貰ったと思われても困るからな。月からそう頼まれた、と正直に白状するさ」

「……『朔』？」

「そうだ。月が天に輝く日と重なって見えなくなる状態を、天の言葉でそう言うのさ。お前さんの人生は月と共にある。月の人生にぴったりと重なって、お前さんは生きていく。人はお前さんを見ることは出来ないンだ。お前さんは月の影だから。普段は月の後で、月の影として月に隠されて生きていく。だが月の身に危険が迫れば、日のように月の前に立ちはだかり、月を隠してこれを守り通す。だから、『朔』だ。月も中々良い真名を考えてくれた物だと思わんか、華雄」

……月は、驚いた顔をした後、泣きそうな顔をして主の顔を見つめていた。

主、独断先行しましたな？そうでなければ月がこのように驚き、泣いてまで喜ぶはずはないではありませんか。誠に、細やかな心遣いをされる人だ。

周囲を見ると、皆同じように主を見て、微笑んでいる。

誰よりも武を知り、誰よりも智を知り。そして誰よりも、人を、人の心を知る。

本当に素晴らしい主を得たものだ。

「……『朔』。月様、有り難う御座います。このような素晴らしい真名を、この私に授けて下さって。月様、改めて名乗ります。私は、

姓は華、名は雄。字はありません。真名を『朔』と申します」
「……私は、姓を董、名を卓、字を仲穎。真名を月と申します。これから宜しくお願いしますね、朔さん」

そう言って、華雄が先ず月と真名を交換する。

「さて、次は私の番かな？」
「いやいや、星、ここはウチからやろ？」
「阿呆め、俺に決まっているだろうが」
「教経殿は、交換する真名を持っていないはずですが？」
「いやいやいや、俺だけ除け者にするってのは、頂けないんだねぇ。……そうだな、じゃあ字を攻爵、真名をパピヨンにでもしとくか？蝶的に考えて。蝶！格好良い！」
「教経様、お巫山戯時間をこのような時に迎えなくとも」
「説教時間か……だが断る！」
「まぁ、何にせよ目出度いこっちゃ。華雄が生まれ変わった日なんやからなぁ」
「……二度目の誕生日、というものですか？」
「中々洒落たことを言うじゃないか、琴」

そんな会話をしながら、我が我がと華雄の前に並ぶ。
華雄は、感極まって泣いてしまった。
霞は華雄と肩を組んで一緒に泣いている。華雄の辛さを、分かって居たからだろう。
愛紗など、それを見てもらい泣きをしている。見れば、琴も泣いているようだ。
碧は、無いことに柔らかく微笑みながら、優しい目で華雄を見ている。
呂布や陳宮も、華雄と真名を交換した後、皆と真名を交換している。

この人が天下を獲れば、きっと、皆幸せになれるだろう。
皆、今の私達のように、微笑んで生きていけるだろう。

この人が、天下を獲れば。
いや、この人に、天下を獲らせるのだ。私達が、力を合わせて。

蝶の如く～７０～（前書き）

ネタ回です。

蝶の如く～70～

～教経　Ｓｉｄｅ～

一日完全オフッ！の日。
愛紗が、街に買い物に行きたい、と言いだした。
最近、日中に愛紗と一緒に居る時は、練兵とか鍛錬とか警邏とか、兎に角仕事絡みしかなかった気がする。
その愛紗からの誘いを断るってのは、出来ないよねぇ。

「……その、やはり、駄目でしょうか……？」

そう言って、上目遣いで俺を殺そうとしてくる。
今目の前に居る萌え型決戦兵器を喜ばせてあげないとねぇ。

「誰が駄目だって言ったよ。最近一緒に昼飯喰ったりさえしてないからな。今日一日、一緒に居ようか、愛紗」

言うと、嬉しそうに、しかし恥ずかしそうにこちらを見て顔を綻ばせていた。

「で、では、参りましょう」
「よっしゃ。で、愛紗。腕、組まなくて良いのかね？」
「……失礼します」

少し照れているようだけど、ねぇ。
可愛いモンだ。これが練兵している時は『鉄の女』に戻るからねぇ。
近衛の人間が中々辛いとぼやいていた。
……一般兵は、死にそうだったが。

「どこに行きたい？」
「そうですね……先ず、服を買いたいのですが……あと、その、下着も……」
……下着買いに行くのに俺が付いて行くのか……
いいねぇ！覗き放題って事だ！これで俺もＴＩＭＥの表紙を飾れる！
「……教経様？」
「いや、なんでもないさ。行こうか、愛紗」
愉しみなンだねぇ。
「教経様、この服はどうでしょうか」
服屋で、そう言いながら自分の体に服を当てて俺に意見を求めてくる。
何でもよく似合うと思うけどねぇ。素材が良いンだから。改めてじ

っくりと見ると、愛紗って本当に良い体してるよね。

……良い乳、良い尻、良いふとももも。では皆さん、ご一緒にどうぞ。

乳、尻、ふとももも～～～～！！！！！

けど、その服は……

「ん～、今のと意匠が余り変わらんぜ？それだと」

そういえば、愛紗はいつも同じような意匠の服を着ていた気がする。

「その、こういったことに今まで興味を持てなかったので、この意匠の服が欲しい、とか、そういうことがないものでして」

「そりゃまた勿体ないねぇ。愛紗、お前さんは綺麗なんだから、着飾ればもっと綺麗になれると思うぜ？」

「の、教経様！」

「恥ずかしがるこたぁ無いだろうが。前も言った気がするが、俺が言ってるのは事実だ。俺ぁ綺麗でも可愛くもない女に惚れるほど物好きじゃないンだ。他の人間がそうじゃないと言ったところで俺がそう感じてるンだ、俺にとってはそれが全てさ」

「……あ、ありがとう、ございます……」

……なンだこの最終兵器彼女は。一撃でＩフィールドぶち抜かれただと！？ええい、平家の愛紗は化け物か！？

「仲の良いご夫婦ですね」

「はぁ？」

振り向くと、禿げたおっさんが立っていた。

頭の貫禄から言って、店主か？

「あれ、違いますか？」
「ち、違います！」
「あぁ、わかるかね？」
「のの、教経様！？」
「いやぁ、コイツは素材が良いのに自分が可愛くないなどと思っているみたいでねぇ。お前さんからも、何か言ってやってくれないかね？困ってるンだ」
「そうですか、それをウチの嫁が聞いたら烈火の如く怒りそうですな。ウチの嫁なんて、いつ屠殺場に連れて行かれてもおかしくない程のものなのに！本当にうらやましいですなぁ。このように美しい女性を伴侶とされているなんて！」
「う、美しいなどと……」

愛紗はもじもじしている。
ところで店主……今お前さんの後に、ドドリアさんが居るように見えるんだが……

「……アンタ？」
「うひぃっ！」
「ちょっと、ＯＨＡＮＡＳＨＩ、しようか？」
「いやいや、わかってるだろう！？今私は、ほれ、こちらのお客様を接客中でだな……」
「店主、気にしなくても構わん。逝ってこい」
「ほら、アンタ。逝くよ？……お客様は、ご自由にご覧になっていて下さいな。オホホホホ」
「うへぇ……恨みますよ、お客さん……」

店主は、ドドリアさんに連れて行かれた。
多分ナメック星でお猿たちと戦うんだろう。ガンガレ。蝶ガンガレ。

男って、ああなったらお終いだよね。本当に。

……ん？あれ？何故だ！？私にも、私にも見える！同じ光景が見える！これは……ゼロシステム……！怖いんだね……？死ぬのが。だったら戦わなければいいんだよぉぉぉっ！

……何か砂漠の王子様的存在になりそうなのでこのチャンネルは斬ってしまおう。あ、切ってしまおう。

「教経様、どうされましたか？」
「いンや、何でも無いさ。それより愛紗、こっちの服はどうだ？」
「……そのようなひらひらした可愛らしい服が私に似合うでしょうか……」
「似合うさ。それとも、俺の見立てた服を着てみるのは嫌かね？」
「そ、そんなことはありません！」
「じゃぁ、着て見せてくれるかね？」
「は、はい」

俺が見立てた服を手にとって、更衣室へ入る愛紗。
フハハハハ！ここからがショータイムだ！
覗こうとカーテンを少し開けて中を見る。
……目の前に、目が見える？

「……教経様？何をなさっておられるのですか？」
「……フッ。認めたくないものだな。若さ故の過ちというものを」

愛紗の後に背後霊が見える。専門用語だと幽波紋っていうんだねぇ。
無駄！無駄ぁ！俺は逃げる！
スピードワゴンは華麗に去るぜ？

走り出そうとした俺の足首を、何者かが掴む。
……て、店主、貴様！生きていたのか！

「オ……レは……もう……ダメだ……だが・・きさま……も……道連れ……だ……！」

クロノクル・アシャーだと！？貴様、何処でそのネタを手に入れた！？

いや、今はそんなことはどうでも良い！誰か！Ｖ２でコイツぶった切って殺してくれ！上半身と下半身を分断するように、こう、ズバッっと！何ならモトラッド艦隊で踏みつぶしてやれ！コイツだけ！

クロノクルに構っていたら、後からもの凄いプレッシャーを感じた。
……ケツの穴にツララを突っ込まれた気分だ……
今……このままここにいたら確実に一人ずつ殺られる！！

「教経様！反省して下さい！」
「ヘブッ」

グ……グレートですよ、こいつはァ……

「ん……」
「あ、教経様、目が醒めましたか？」
……此処はどこだ？
寝ちまってたのか、俺ぁ。
目の前で、愛紗が俺をのぞき込んでいる。
「……愛紗、済まんな。寝ちまってたみたいだ」
「い、いえ」
心が広いねぇ。折角のデートだってのに寝ちまった俺を許してくれるなんてねぇ。
顔が滅茶苦茶痛いが、どっかでぶつけたのか？
「で、此処何処だっけ？」
「お茶屋さんです」
言われて、周囲を確認する。
……おいおい、お茶屋さんというか、喫茶店じゃねぇか。
テラス席で、膝枕されて寝ちまってたのか、俺ぁ。
よくよく見ると、愛紗は俺の見立てた服を着ている。
「……よく似合ってるじゃないか、愛紗」
「あ、有り難う御座います」
言いながら体を起こそうとして、やめた。
愛紗が、ちょっと名残惜しそうな顔をしたから。
「愛紗、もうちっとこのままで構わんかね？」

「……はい、教経様」

嬉しそうに笑う愛紗。

ゆっくりと、時間が流れていく。

「愛紗、結構変わったよな」

「そうですか？」

「変わったさ。人前で、膝枕なんて絶対にさせなかったンじゃないかね？昔なら」

「かもしれませんね」

「どういう心境の変化があったンだか」

「恥ずかしがっていても仕方がないですから。私は、少し自分の気持ちに素直になることに決めたのです。教経様とこうして一緒に過ごす時くらいは、ありのままの私を見て欲しいですから」

……本当に、可愛いねぇ。

「……天下を統一して戦が無くなったら、毎日こうやってのんびり過ごしたいモンだ」

「そうですね」

「そしたら、愛紗も普通の女の子に成れるモンな？俺と一緒にぶらぶらして、一緒に飯喰って、俺に抱かれて、一緒に寝て。それを繰り返すだけの、平凡な人生を送る、普通の何処にでもいる女の子に」

「……そうなれるでしょうか」

「なれるかどうかじゃないんだよ。そうなるのさ。そうなる為に、終わらせるンだよ。この糞みたいな戦乱をなぁ」

「はい」

夕日に照らされた愛紗の顔は、美しかった。

こういう日が、ずっと続けばいい。
長安に住む奴らだけじゃなく、この国に生きる全ての人間が、憂い無く暮らせる世の中で。それぞれがそれぞれの生を謳歌して、それぞれに相応しい死を迎える。あり得べき形で、何の波乱もなく、人の想像の範疇を飛び出さない平凡な人生を送る。

そんな世の中に、してやりたいモンだ。

「……愛紗、今日は、お前さんの番だったっけ？」
「は、はい」
「ちっと早いけど、飯喰って帰ろうか。ゆっくりするとしよう。二人きりで、ね」
「はい、教経様」

まだ、道は遠い。
だが、いつか、きっと。

愛紗の手を取って、俺たちの家へ向かって歩き出す。
前に進むだけだ。こうやって、皆と一緒にね。

蝶の如く～71～（前書き）

琴のお話。

もげろ

蝶の如く～71～

～琴　Ｓｉｄｅ～

お屋形様にお仕えするようになってから、一月が経過した。
その間、私の仕えぶりを見た星から、認めてやらんこともない、と言われて真名を交換した。お屋形様のことを本当に大切に思っているからこそのあの態度だったのだということは私にも分かる。星は、素直ではないから、私に対してああいう態度を取った為に少し引っ込みが付かなくて、それであああいう言い方をしたのだ、ということも。

お屋形様に仕える事になってから、まず最初にお屋形様から衣装を戴いた。
浅葱色にダンダラ模様の、お屋形様と同じ意匠の羽織。

「お屋形様、これは？」
「壬生狼になるんだろ？それなら、それは必須だ。誇り高き壬生狼達の隊服だからな」
「これが、隊服……」
「そうだ。それと、背中を見ると良い」
「背中？」

お屋形様に言われて羽織の背中を見る。
首の付け根辺りに一文字だけ、文字が書いてあった。
『誠』。
これは、どういう意味だろうか？

「お屋形様、これは？」

「一時期、誠忠浪士組、と呼ばれていた時の名残だと言われているがね。尽忠報国の誠、ということさ」
「尽忠報国の誠……」
「そうだ。皆それぞれにその胸に譲れぬ理想を抱いて、それを目指して剣を振るっていたのさ。ちなみに浅葱色は、武士が切腹するときに着用する袴の色だ。『例え死すとも尽忠報国の誠を尽くす』。それがその隊服が持つ意味合いだ」

例え死すとも、国に報いる為にその忠を尽くすこと。その偽りなき決意を表している、ということなのか。この羽織と『誠』の文字で。それでお屋形様は、あの晩もこれを着込んでいらっしゃったのか。

「よく、分かりました」
「ふむ。分かったなら良い。……琴、『悪・即・斬』を貫く為には、己の目を養わんとならん。お前さんは、袁紹の掲げた戯けた嘘を見抜けなかった」
「……はい」
「……まぁ、自分の掲げる理想がはっきりした今のお前さんなら、もうあの馬鹿には騙されないと思うがな。但し、悪とは何かを考えて置くことだ。お前さんがその信念とする『悪・即・斬』においては、悪を斬り捨てることそのものも正義に含まれる。だからお前さんは、悪について考えろ。あの晩に話をしたように、悪もまたそれを取り扱う人間によって変わってくるものだろうからな」
「お屋形様、悪を斬り捨てるだけで、正義を為せるのでしょうか。今の私は、悪というものはこういうものである、と漠然と考えていますが、それを斬り捨ててどのような正義を打ち立てるべきなのか、よく分かりません」
「はは、お前さん、自分一人だけで自分一人が考える義を為そうなんて考えているんじゃないのかね？善とするところはその個人に拠るが、義とは、個人に拠るものではない。義とは社会共同体、つま

りこの世界に生きる人間全てにとって正しいこと、望ましいこと、良いこと、ということだ。
あの晩、俺の正義をお前さんに語ったはずだ。お前さんが俺に仕える以上、お前さんの義は俺の義と同義だ。俺が、お前さんに義を呉れて遣る。お前さんがそれを正義だと思えるなら、それを実現する為にその剣を振るって欲しい。この俺の為に」

お屋形様の、正義。
平凡な世の中を創り出したいという夢を我欲によって阻もうとする者達を斬り捨てること。我欲に拠らずその思うところの正義を以て阻もうとする者達をも斬り捨てること。斬り捨てて、越えられぬ苦しみのない、ありふれた世界を創り出すこと。
正義だと思える。お屋形様が抱いている夢を実現させることは、正義を実現させることだと思える。

「お屋形様。この琴は、お屋形様の夢の為に、お屋形様に、この剣を捧げます」
「そうかね。……もし俺が道を踏み外したその時は、お前さんが俺を斬り捨てろ。良いな？宣言通り、『悪・即・斬』、死ぬまで貫いてみせろ」
「御意」

誇り高き狼。
お屋形様を形容するにこれ程相応しい言葉はないだろう。
私は、良き主君を得た。そう思う。

「で、何でいきなり真剣抜きはなってるンだね、琴」
「稽古を付けて頂けないかと思いまして」
「稽古、ねぇ。立ち合いはしないぜ？……とりあえず木刀持ってこい」
「はぁ」

久し振りにお屋形様がお暇になったと聞いた私は、お屋形様に稽古を付けて戴こうと参上した。
のだが。お疲れのようで、立ち合いはしない、と言われてしまった。
立ち合って貰えないのは残念だが、何やら手ほどきをして頂けるようだ。
そう言われて木刀を持ってくる。
この木刀は、お屋形様が樫の木を削って作ったものらしい。

ちなみに、私はあれからずっとこの羽織を着ている。
私の服装はお屋形様が普段着ていた着物と良く似ていたので、この羽織を私が着ても違和感が全くなかった。まるで最初からこれを着ていたかのように似合ってやがるな、とはお屋形様の言だ。

「……まぁ、これでいいだろ。壬生狼がどう悪を斬り捨てるのか、

見せてやるよ」

お屋形様はそう言って、中庭にある木の前に立つ。
木刀で、あれを斬るというのだろうか。

「……刀争の術というものは、その太刀ゆきの疾さで全てが決する。疾い太刀ゆきは弛み無い鍛錬によってもたらされるモンだ。その太刀ゆきの疾さを極めた時、例え太刀を持たずとも人を斬ることが出来るようになる……こんな風にな」

お屋形様が木刀を振る。立ち合った際にも感じたが、尋常ではない。目で追えるギリギリの疾さだ。その木刀を横一文字に振るう。
……木の幹が裂けている。いや、『斬れて』いる。このようなことが、ありえるのか。いや、目の前で起きているのだから、あるのだ。
……私の師でもこれ程の腕は持ち合わせていなかった。やはり、お屋形様は最高の剣士だと思う。

「……ふぅ。……ちゃんと見えたか？」
「……はい」
「見える、ということは、お前さんの剣速もかなりのモノだって事だ。自分が生息する疾さの範疇にあるものしか、見えないモノだからな。その内お前さんにもこれが出来るようになるだろう」
「……これが、壬生狼の太刀筋、ということですか」
「……そっちはこれからだ」

そういって、お屋形様が木刀を左手に持ち替えて横に寝かせる。
地面に刃が水平になるように。
右手を寝かせた剣の切っ先に宛がい、先程斬りつけた木に向ける。
突きを放つような格好で。

「コイツは小野派一刀流の業じゃないンだ。元は天然理心流の業を、溝口派一刀流の人間がこういう業に昇華させたのさ。この突きを例え躱しても、横薙ぎに変化することで隙を無くした必殺の突きだ。まぁ、大概変化することもなく相手は死ぬがね。……よく、見ておけ。
おおおおお！」

お屋形様が駆ける。賊共を一瞬で斬り殺した時のように。

「死にさらせ！！！」

突きを放った。
鈍い音と共に、木の後ろから木片が飛び散った。
……木刀が、木を貫いている。

アレを、人に放てば間違いなく死ぬだろう。正しく、『必殺』の剣。

「……チッ、引きちぎって倒してやろうと思ってたのにねぇ」
「お屋形様、今のは……」
「『牙突』さ」
「『牙突』？」
「そうだ。『悪・即・斬』を貫こうってお前さんに、とっておきを呉れて遣るよ。そいつを貫くなら、この業を以て貫くが良い。それこそが相応しいンだからねぇ……斉藤的に考えて。……ち、この木刀、もう駄目だな」
「これで、貫く……」
「そうだ。突きで貫くのさ。敵も、悪も、『悪・即・斬』の信念も、な。洒落てるだろ？」

そういって、ニヤリと嗤う。

お屋形様は、私に貫くべき信念を与えてくれた人だ。
『悪・即・斬』の理を。
今また、それを貫く為の手段を私に与えてくれようとしている。
『牙突』という牙を。
……私はこの人に何かを返す事が出来るのだろうか。

「どうした？琴。ちょっと人外過ぎたか？」
「お屋形様、私は、お屋形様に何かをお返しすることが出来るのでしょうか」

そう言った私に、お屋形様は苦笑しながら話しかける。

「……阿呆め。この俺に助けられていると感じたならお前さんも誰かを助けてやればいい。俺から何かを貰ったと感じるなら、お前さんも誰かに何かを授けてやればいい。人間ってのは、社会ってのはそういうモンだ。そうやって人間は生きていくンだよ。
俺がお前さんの世話を焼いたのも、こうやって業を教えるのも、俺がかつて糞爺から様々な業を、心構えを、剣士としての生き様を教えて貰ったからだ。それをお前さんに、俺が授かったのと丁度同じように授けてやろうというだけのことだ。俺に何かを返す必要なんて無いンだよ、琴。お前さんが受け取った何かを、また別の誰かに授けてやれば良いンだ。そうやって誰かに何かを残してやれる、そんな人生を送れば良いンだ」

そう言ったお屋形様の顔は、凛々しかった。
この人は、私とそう年齢が変わらないのに。余程、その糞爺と呼んだ方が厳しく仕込んできたのだろう。糞爺と良いながらも、その言葉にはあらゆる感情が込められている様に見える。
言葉通りの憎しみも、それを上回る親愛の情も、懐かしさも、寂し

さも、何もかも。

「……有り難う御座います。必ず、その牙をものにして見せます」

「その意気だ」

お屋形様から手取り足取り、構えから突きを放つまでの体の動きを矯正された。

「これを、毎日繰り返すことだ。繰り返してその身に染み込ませることだ。危急の時にその身を救うのは日々の弛まぬ鍛錬の結果身につけたモノだけだ。それ以外のモノは只の飾りに過ぎんのだからな」

そう言って、お屋形様は立ち去った。

……私は、お屋形様のご高恩に、私の全てを捧げて報いてみせる。

私の全てを捧げて。

蝶の如く～72～（前書き）

どうしても貼りたかったので、一番最後にＡＡ貼ってしまっております。
イメージ画像です。
携帯の読者の方には読みにくいかも知れませんが、あとからＰＣでご覧になってくだしあ。

それでは皆さんご一緒に。

パピ☆ヨン☆
もっと愛を込めて！

蝶の如く～72～

～星　Ｓｉｄｅ～

反董卓連合軍を撃退し、長安へ帰還した。
我々が出発時よりも多くの兵を連れて帰ってきたことで、長安の民達は安堵しているようだ。
だが、これからが問題になるのだが。

これから、主と董卓殿を目の敵にして諸侯が攻め込んでくるような事態が発生しうるのだから。まぁ、平家の軍師達が対策を万全にするだろうとは思うが。流石に、稟や風、それに詠の三人を向こうに回して完勝出来るほどの器量を持った人間は居ないだろう。主ですら、俺は絶対に稟に敵わない、と言っていたのだから。その他に風と詠がいる現状で、そこらの有象無象に後れを取るとは思わない。

長安の街を警備していた者達の報告書に目を通す。
やはり、兵達が大量に出陣したことで、風紀が乱れているようだ。窃盗だけならまだしも、強盗、殺人、付け火など、平常であれば考えられないような事件が不在の間に多発している。何かしらの対策が必要だろう。警邏の兵を増やしても良いが、民に必要以上に圧迫感を与えるような真似を主は好まない。主の意に沿いながら、かつこの現状を急速に改善する妙手を考え出さねばならないだろう。

その事について悩んでいたある日、警邏中に古物商が広げている品物を何気なく眺めていると、蝶の仮面を売っていた。その美しさに、思わず目を奪われた。これは、欲しい。何としても、欲しい。これを作り上げた職人の魂がこれに凝縮されている。それ程のものだった。

「お、いらっしゃいませ。お客様、何かお気に召すモノはありましたかな？」
「……ふむ。この仮面、少々高いな」
「と、申されますと……あぁ、これですか。これはですね、有名な芸術家である……」

古物商が何やらぶつくさと説明をしているようだがそんなことはどうでも良い。
この仮面を手にとって分かった。
私は、この仮面と出遭うべくこの世に生を受けたに違いないのだ。
どうしても、この仮面が欲しい。

「商人、これを、貰おうか」
「へい。ありやとやんした～」

商人に代金を投げつけるように渡して、仮面をひったくる。
これは、素晴らしいモノだ。
早くこれを付けてみたいが、このような往来でこれを付けて歩くなど、頭の具合を疑われること間違い無しだ。だが、人に見せつけたい。これを装着した私を見せつけたいのだ。何か良い案はないモノだろうか。

「キャー！助けて～！」
「て、テメェら、近寄ってくるんじゃねえ！こ、この女ぶっ殺すぞ！」

警邏中に、女を人質として立て籠もった強盗がいると聞き、現場に駆けつけた。
……強盗は興奮しており、このままでは人質の命も危うい。
往来には人が屯し、どうなることかと経緯を見守っている。
騒ぎの中に飛び込んで一突きで殺しても良いが、私が平家の趙子龍だとあまり知られたくないものだ。そうなれば、気軽に買い物など出来ないではないか。往来を歩くにも苦労しそうだ。

……ふむ。これは、良い機会なのではないか？
そう思って、懐をまさぐる。
蝶の仮面。
これを身につければ、私だとは分からないだろう。
これを身につけてこの美しい仮面を付けた美しい私を、長安の民に披露出来る。
それは、私にとって甘美な誘惑だった。

「何をしている！」
「か、関羽様！」

愛紗が駆けつけたようだ。
生真面目なことだ。今日の警邏は確か琴の担当だったはずなのに。

まぁ、そんなことはどうでも良い。

今の目下の問題は、私がこの仮面を付けるという誘惑に従うのか抗うのか、ということだ。主でもあるまいし、あんな乳に構っている暇はないのだ。

……この誘惑に、抗う理由は……ない！

私は、今日、この時、この瞬間に生まれ変わるのだ！

「でゅわ！」

「待て！悪人よ！」

「な、誰だ！？」

「可憐な花に誘われて、美々しき蝶が今、舞い降りる！

我が名は華蝶仮面！　混沌の都に美と愛をもたらす、正義の化身なり！」

「怪しい奴め！そこで何をしている！」

ふ、愛紗。この美しさが分からぬとは……哀れ。

「ふっ……」

「き、貴様！その怪しい仮面を取って素顔を見せるが良い！」

「ふっ……この美しき仮面を奪おうなどと、この都には美を解す輩は居らぬと見える！」

「なにを！」

ふむ、愛紗よ。その後の強盗、この私の余りの美しさに唖然として居るようだぞ？
まぁ、仕方があるまい。美しいことは罪なことだな……フッ。

「それっ！」
「な、何！？」

手に取った礫で、強盗の頭を強く打つ。

「ぐはっ！」
「き、貴様、何者だ！」
「やれやれ、物覚えの悪い奴だ。私は、華蝶仮面！この混沌の都に舞い降りた、美しき救世主だ！」
「何を言っている！貴様のような怪しい奴が、治安を乱しているのだ！」
「ははははは！問答は無用だ！悪は滅びた。私の役目は終わりと言うことだ！さらば！」
「ま、待て！逃げるつもりか！」
「さらばだ！また遇うこともあるだろう！」

そう言って、屋根から屋根へ飛んでゆく。宛ら蝶が舞うように。

全く、愛紗め。この私の美しさを理解出来ぬとは。
しかし、愛紗が分からぬのだ。きっと誰にもばれることはないはずだ。
今日から、私は華蝶仮面として、この街の治安向上に貢献するのだ！

「あ～はっはっは！あ～はっはっは！」

私の笑い声が、長安の街に響き渡っていた。

私が正義の使者、華蝶仮面となるべくこの世に生を受けたことに気が付いてから早半月が経過した。

あれから4件の事件を華麗に解決した私は、今長安の話題を独り占めしている。思惑通り、治安も向上しているし、私はあの美しい仮面を付けて美しい私を皆に見せつけることが出来ている。我ながら、誠に名案を思いついたものだ。

今日も今日とて、事件を求めて街を歩いている。

……ふふっ。早速事件が起こっているようだな。

今日は少し様子見をしてみよう。

最近、愛紗と琴、翠が私を目の敵にしている様で、その追及が激しさを増しているのだ。

きっと、現場には既に三人が駆けつけて、私が来るのを今か今かと待ち受けているに違いない。流石にあの三人を一度に相手取るのは無理だ。

ちなみに、主は二回目に遭遇し、私の仮面を褒めてくれた上で、仮面を何処で手に入れたのかを執拗に聞いてきた。私は華蝶仮面ではない、と言ったのだが、主が仮面を買った場所を教えないと今日は私を抱かないなどと卑怯な脅迫をしてきた為に、仕方がないから教えてあげると、主は喜び勇んで飛び出ていった。『パピ☆ヨン☆！もっと愛を込めて！』などと叫びながら。

……あれは、恐らく、買っただろう。あの興奮具合はちょっと理解出来ない。

しかし、流石は、我が主。それでこそ、私の伴侶となるべき人だ。この美しさを理解出来ぬものと同衾するなどあり得ないからな。

「む、星！良く来てくれた。私達三人と、華蝶仮面なる不逞の輩を捕らえよう！」

「そうだ！星、協力してくれ！」

「星、お願いします。お屋形様のお膝元で、あの様な怪しい輩をのさばらせる訳には参りません」

ふふふ。今お前達の目の前に居るがな？華蝶仮面は。

「ふむ。まぁ、考えてやっても良いぞ」

「よし！これで百人力だ！」

「ええ、今日こそ華蝶仮面を掴まえましょう！」

「ああ！」

目の前には、殺人の罪を犯したものが三人いる。興奮しているようで、周囲の人間を威嚇し、今にも傷つけそうな勢いだ。人質が二人。二人とも、子供だ。……何という卑劣漢。これは、華蝶仮面が許さんぞ？悪党共！

「どけ！俺たちを逃がせ！そうしないと、この辺りにいる人間を皆殺しにするぞ！」
「殺すぞ！近寄るんじゃねぇ！」
「うわぁ～ん、お母さぁ～ん」
「うるせぇぞ！糞ガキ！」
「なっ！」

子供を殴り倒した。
これは最早我慢できん！

そう思い、飛び出そうとしたその瞬間！

「待てぇい！」
「な、何処だ？何処から声がしているのだ？」
「羞恥心と世間体に囚われたウジ虫共よ！我が姿を見るが良い！
一条の絹さえ纏わぬ、鍛え上げられた逆三角形。
人、それを全裸という……！」
「な、何者だ貴様！」
「貴様らに見せる裸は、ない！」

そう言って、屋根の上にいた男が天高く舞う。
蝶の仮面を付けている。
間違いない。あれは主だろう。
これは、運命の出会いか。

「死ねぇい！流星・ブラボー脚！」
「ブベッ！」

凄まじい高さからの蹴りを放ち、早速暴漢の一人を伸した。
流石は我が主。

「……あ、今のキャプテンじゃん……おい屑、貴様ら、子供に手を出したな。さてこの不快感どうしてくれよう」
「な、何だテメェは！巫山戯てんのか、その格好！」
「フザける？何が？このまま舞踏会に駆けつけられる程素敵な一張羅じゃないか！」

確かに、あの衣装も美しいものだ。

「テメェは、何モンだ！」
「俺か？俺の名は蝶野攻爵……いや、蝶人・パピヨン！」
「ぱ、ぱぴよん？」
「チッチッ。『パピ☆ヨン☆』もっと愛を込めて」
「どうでもいい！テメェをぶっ殺してやる！」
「五月蠅いな。悪党は悪党らしく、さっさとやられちまえば良いンだよ！ゴッドハンドスマッシュ！」
「アガッ！」

主が力一杯に殴りつけたのだ。
断空我宜しく空に飛んでいくのは当然だろう。

「……また間違えた……でも登場シーンはロム兄さんだから許容範囲だ……でもあれだな、ニアデスハピネスやるならもっとこう火薬がないと駄目なんだが……殺傷能力無くても派手に飛び散るような奴を開発しておく必要があるな……」

……お巫山戯時間を迎えたようだ。

「ひぃっ！この変態め！それ以上近づいたら、このガキ殺すぞ！」
「変態だと！？どうやら本当に俺を怒らせたようだな！貴様もいっ

ぺん死に臨んでみろ！意外と恍惚で病みつきだぞ！？」

……主、怒るべきは子供を殺すと言ったところであるべきであって、『変態』という言葉に対してではありますまい。しかも……瞬動を使っている……何をやっておられるのですか主……本気でやったら死んでしまいますぞ？

主はそのままその男の目の前に移動し、その腕を子供から引き剥がした上で殴り続けている。

「粉砕ブラボラッシュ！」

粉砕も何も、既にその男は主の拳と壁の間を行ったり来たりしているのですが……

「成敗！」

殴るのをやめた瞬間に、男が倒れた。それは、そうだろう。もう随分前から意識がなかった。

周囲の民達が歓声を上げる。

その歓声を受け、主が嬉しそうに叫んだ。

「蝶・サイコー！」

その主に、愛紗が話しかける。

「貴様、蝶野攻爵と言ったな」

「オレを蝶野攻爵と呼ぶんじゃない！

その名で呼んでいいのは武藤カズキだけだ！」

「す、すまん……じゃない！貴様、なんて格好をしているんだ！」

「セクシャルバイオレットなオシャレで気に入っているんだが？」

「せくしゃる……？」
「と、兎に角お前、その格好はなんだよ！あたし、お前みたいな変態初めて見たぞ！」
「五月蠅い娘だ。喰らえ！悩殺！ブラボキッス！」

主の破綻ぶりに、琴は大混乱だ。
翠は主の身振り手振りが恥ずかしかったのか、わたわたしている。
愛紗も呆気にとられているようだ。

……というか、全員気が付いていないのか。

「では諸君、さらばだ」
「まて、変態！」
「まだこのスタイルの魅力がわからんとは。貴様はつくづく可哀想なヤツだな」
「な、なにを！」
「そこにいる美しき女性を見習うべきだね。さらば！また逢うこともあるだろう！」

そう言って主は瞬動で離脱していった。
……こういうところに全力を傾けるのが主の主たる所以だ。

しかし、これで主と共に夫婦仮面としてやって行けそうだ。
いや、素晴らしいものだった。

「はぁ……長安は、どうなるのだ……」
「あ、頭が痛いです……」
「……」

三人を見ると、頭を抱えていた。

あの美しさが理解出来ぬとは。
まだまだ、精進が足りんぞ?

蝶の如く～73～（前書き）

例によってネタです。

蝶の如く～73～

～翠　Ｓｉｄｅ～

珍しく、今日ご主人様は朝から執務室で政務に明け暮れている。
脱走しないように、稟と風と詠が揃ってご主人様を取り囲み、決裁が必要な書類を次々とその前に差し出して、決裁を仰いでいる・・・
いや、決裁させている。

以前から脱走癖があったご主人様だけど、最近は特に脱走する回数が多い。
脱走して街に出て行っているのは間違いない。部屋にいないのだから。
それは、断空我にも確認してある。
でも、ご主人様を街で見かけたという人間は居ない。
・・・なにか、おかしい気がする。
ご主人様は、何か隠しているんじゃないのか？あたし達に。

「教経殿。次はこの件について、決裁をお願い致します」
「・・・ん、あぁ」
「・・・？お兄さん？」
「・・・大丈夫だ。で、何だっけ？」
「長安を最近騒がせている、華蝶仮面と蝶人・ぱぴよんなる者達を捕らえる為に、警備兵を増やして貰いたい、との嘆願書です」

あたしが出した嘆願書だ。
以前は華蝶仮面だけだったのに、最近頻繁に変態が街に現れてお茶屋でお茶を飲んでいたり、服屋に服を作らせたりしているようだ。
余談だけど、服屋の主人は『黒乃駆流・阿紗』というらしい。変態

がそう呼びかけていた。珍しい名前だ。最近は、『パピ☆ヨン☆』様御用達、という看板を掲げて大いに繁盛しているようだ。聞けば、題字は変態自身が書いたのだという。無駄に達筆だ。

兎に角、変態が出た、という報告を受けては捕まえる為に出動しているのに、一向に捕まえることが出来ない。もの凄い疾さで逃走するんだ、あの変態は。『パピ☆ヨン☆』とか『蝶・サイコー！』とか『オレはこの未完成の体を脱ぎ捨てて、更なる高みを目指して翔ぶ！！』とか叫びながら。

昨日なんか、雨が降っている中半日以上追跡したにも関わらず、遂に取り逃してしまった。城の中で、見失ってしまったんだ。ご主人様の命を狙う刺客かもしれない、と思い当たってご主人様の寝所へ駆け込んだら、その、ご主人様は素っ裸で・・・あ～！もう！そんなことはどうでも良いだろ！兎に角、無事だったんだ！けどご主人様に、『へ、変態だぁ～！』と叫ばれた。

・・・それもこれも、全部あの変態のせいだ。

「・・・稟。『パピ☆ヨン☆』、な。もっと愛を込めて・・・」
「・・・教経殿？」

そのまま、ご主人様は机につっぷして意識を失ってしまった。

「お、お兄さん！？」
「ちょ、ちょっとアンタ！？どうしたのよ！・・・って、凄い熱じゃない！」
「翠！先生を呼んできて下さい！
風！風は教経殿の寝所を整えておいて下さい！
詠！私と一緒に教経殿を寝所まで運びますよ！？」

「わ、わかった！」
「了解なのです」
「わかったわよ！」

稟が矢継ぎ早に指示を出す。稟の指示は、いつも的確だ。
・・・そんなことより、早く先生を連れてこないと。
指示された任を果たすべく、先生の元へ駆けだした。

「・・・風邪だろうな。疲労も溜まっているようだし、養生させることだ」
「・・・良かった。・・・先生、お忙しいところ、有り難う御座いました。それで、どの位休んでおけばよいでしょうか？」
「そうだな、先ず十日程は安静にさせることだ。熱が下がったら動こうとするだろうが、しっかりと休ませておけ。お前さん方でしっかりと寝かしつけておくことだ。縛り付けてでも何をしてでもな」
「分かったのです」
「相も変わらず、愛されていることだねえ・・・私は帰るぞ」

そう言って先生が助手の小さな女の子を連れて帰っていった。
偉そうな物言いの医者だが、先生はご主人様が見つけてきた凄腕の医者だ。

黒男というらしい。
琴が、ご主人様がやっていた鍛錬をやってみようと思ったらしく、ご主人様立ち会いの下で太刀の上を歩こうとして、失敗した。左足の小指が落ちてしまった。
その時ご主人様があの先生のところに琴を連れて行って、『ブラックジャック先生！主治医になって下さい！』とか『い、いいですとも！一生かかってもどんなことをしても払います！きっと払いますとも！』等と言っていた。そのご主人様に、『それが聞きたかった』と言って先生は琴の主治医になった。どうやったのかは分からないけど、琴の左足の小指は元通りに動くようになっていた。そのまま、今では平家の主治医という立場に収まっている。

・・・怪我から復帰した琴が星達に、『お屋形様にキズモノにされました』、と言った為、入れ替わりでご主人様が先生の世話になることになったけど。

「今日から、交代で教経殿を看病しましょう」
「それはいいけど、コイツが本気で動き出そうとした時に押さえられる人間じゃないと駄目なんじゃない？ボク達じゃ絶対押さえられないわよ？」
「星ちゃん、愛紗ちゃん、碧さん、翠ちゃん、琴ちゃん。５人いるのですよ。二日ずつ看病すれば、丁度十日なのです」
「なるほど。でもその間の仕事はどうすればいいんだ？」
「そんなものは放っておけばよいのですよ、翠ちゃん。お兄さんが元気になることが一番大事なのです」
「その間は、ボク達三人で政務を滞らせないようにしないとね」
「それはそうです。教経殿が快復した時に政務が滞っていた、など、この郭奉孝の誇りが許しません」
「そんなこと言ったらボクだって！」
「まぁまぁ、二人とも。そうやって女同士の劣情を育むのも良いで

すが、静かにしておかなければなりませんよ？お兄さんは病人なのですから」
「風！」
「シーッ」
「う・・・ボクだけ怒鳴れないのはどうなのよ・・・」
「一番最後の妾さんから仕方ないのですよ」
「誰が妾なのよ！誰が！」
「シーッ」
「ほら、ご主人様が苦しそうな顔をしているんだし、もうちょっと静かにしようよ、な？」

ほんと、ご主人様のことになると見境が無くなるんだからなぁ。皆。

～教経　Ｓｉｄｅ～

不覚にも風邪をひいて倒れてから、もう八日経過している。
はっきり言おう。
暇だ。

早く蝶人に変身して、長安の街を闊歩したい。
クロノクルに頼んでおいた新作のスーツが出来上がっているはずだ。
それを早く着込んで、蝶・サイコーな俺を見せつけてやりたい。
のだが。

「ん～・・・・」

・・・OK、落ち着くンだ。まだ慌てるような時間じゃない。状況を把握しよう。
何時だ?・・・今は朝だろう。私の記憶が確かならば。鹿賀丈史的に考えて。
ここは?・・・俺の、俺による、俺の為の部屋だ。リンカーン的に考えて。
今俺は?・・・寝台で寝ている。
横には?・・・何故か、翠が添い寝している。

わかったぞ!犯人はヤスだ!
・・・あれバラされた時、バラした奴を本気で殴ったなぁ・・・

まぁ、そんなセピアならぬポートピア色の思い出はこの際どうでも良い。
問題は、何故、翠が、俺の横で、添い寝しているのか、だ。
・・・人生を、甘く、見ること!

いや、もういい、電波は十分だ。

「んぅ・・・ご主人様・・・」

・・・こいつ、どんな夢見てるんだろうか。
いつもポニーテールにしている翠の髪留めを、ちょいと取ってみる。

髪を下ろした翠は、親子だからだろうが、碧に似ている。
碧よりも、柔らかい印象を受けるが。

可愛いモンだねぇ。
寝ちまって無防備な女の子ってのは、こう、そそるものがあるねぇ。
といっても、手を出したいとかそういうことじゃなく、鑑賞してたいってことだけど。

翠の頭を撫でながら、寝顔を見ている。
外はまだ寒いとは言え、部屋にいて、日が差し込んでくれば暖かい。
布団もあるし。このまま俺ももうちょっと寝ちまおうか。
そう思ってたんだが、翠が抱きついて来た。

・・・よせよ、苦しいじゃないかね。
頭を抱き抱えられて、翠の胸に顔を押しつけられる。
フフ、この風、この肌触りこそ戦争よ！
いや、まぁ、まだ一度も此処を戦場にしたことはありませんが。

良い香りがするねぇ。もしこれが野郎だと、『こいつはくせえッー！ゲロ以下のにおいがプンプンするぜッーーーッ！！』とか叫ぶんだが。

折角なのでこのままでいようと思ったら、翠が身じろぎした。
・・・起きるのか？
抱き抱えていた腕から解放されたので頭を上げてみると、目の前に翠の顔があった。寝ぼけているようだ。目の焦点が合ってない。
・・・アホの娘みたいだな。
そう思ったのが悪かったのだろう。ツボに入ってしまって吹き出しそうになり、それを我慢して思わず笑い顔になってしまった。微笑みかけられたと勘違いしたのだろう、翠が嬉しそうに微笑んでいる。

・・・その笑顔は、ちょっと卑怯じゃないかね?美少女が柔らかく微笑みかけてくるってのは、かなりポイントが高いと思うンだよねぇ。寝ぼけているからだろうが、普段より眼光も柔らかいし、顔が近寄ってくるし・・・って!ちょ、ちょっと待て・・・お前さん、何を・・・

「んっ・・・」

・・・翠に口づけをされた。思いっきり。

「・・・はぁ」

・・・満足そうな顔してるがねお前さん、これはちょっと・・・その、不意打ち過ぎるだろうが。

言葉もなく、何と話しかけて良いかも分からず、呆然としていると、翠が覚醒したようだ。

「・・・あれ、ご主人様?・・・え?これ、夢じゃ・・・」

「・・・無いンだねぇ」

「★■※@▼∀っ!?」

俺の寝台で大暴れだ。

「ななな、何するんだよ!」

「いや、俺はされた方。貴女した方。ドゥー・ユー・アンダスタン?」

「どぅー・・・?そ、そんなことはどうだっていいんだ!何で避けないんだよ!あたしみたいな奴に、その、口づけなんてされても迷惑だろ!?」

「・・・ご謙遜を?」

「謙遜なんかしてないよ！」
「迷惑じゃないぜ？むしろ嬉しい？」
「何で疑問系なんだよ！」
「そらお前さん、俺だって人間だ。不意を打たれた訳だから当然ドギマギしてるからねぇ。照れ隠しくらいするさ」
「嘘吐け！」
「嘘じゃねぇよ、ほれ」

そういって、翠の頭を抱き抱える。

「ななな、何するんだ！」
「俺の心音、聞こえるだろ？」
「あ・・・」
「早鐘を撞くみたいに、早いだろうが」
「・・・うん」
「・・・まぁ、だから、照れ隠しだ」
「・・・嫌じゃ、なかったのか？ご主人様は」
「何で嫌だと思うンだ？」
「そりゃ、あたしみたいな女に」
「あ～、その『あたしみたいな女』ってのは、いい女ってことか？」
「ちちち違うよ。なんでそうなるんだよ」
「いや、見たまんまだと思うが」
「何処が！」
「全部が」
「★■※@▼∀っ！？」

初心だねぇ。
まぁ、そこが翠の良いところだろう。

「と、とにかく、今のことは忘れること！」

「忘れられる訳無いだろうが」
「な、何言ってるんだよご主人様！」
「普通に無理だと思うぜ？可愛い女の子に口づけされるなんて、忘れられる訳無いだろう」
「うるさい！うるさい！うるさい！兎に角、忘れてくれ！」
「だが断る！」
「忘れろ！」
「ふむ。」
「・・・分かってくれたのか？ご主人様」
「あぁ、翠が恥ずかしいから忘れて欲しいってのはよく分かったよ・・・だが断る！」
「あ～！もう！あたしは知らないからな！」

翠はそう言って、走って俺の部屋から出て行った。
・・・やれやれだぜ。俺を監視してろってブラックジャック先生に言われたんじゃないのかね？まぁ、大人しくしているさ。『パピ☆ヨン☆』スタイルで往来を闊歩する気にもなれないし、ね。

～翠　Ｓｉｄｅ～

あの雰囲気に居たたまれなくなって、ご主人様の部屋から逃げ出してしまった。
ご主人様が悪いんだ。あんな事を言って、忘れないなんて言うから。
・・・でも、あたし・・・ご、ご主人様と口づけを・・・
「・・・翠、アンタ何やってるんだい！？」
「うわっ！お、お母様！」
「折角良い雰囲気になりそうだったのに、アンタ何逃げ出してるんだい！」
「なななんでお母様がそんなこと知ってるんだよ！」
「決まってるだろう！アンタが寝ているご主人様の顔を見ながら『あの時は凛々しかった』だの『こうやってみると可愛い』だのと言った後、何だかんだと理由を付けて添い寝するところまで全部見ていたのさ！」
「お母様！趣味が悪いぞ！」
「こういうのは良い趣味してるって言うのさ」
「それを目の前で暴露されているあたしの気持ちも考えてくれよ！」
「アンタの気持ち、ねぇ・・・翠。アンタ、ご主人様のこと、やっぱり好きなんじゃないか。自分から口づけするなんてねぇ。アンタが」
「ちちち違う！あれは！」
「翠。アンタ、素直にならないと本当に後悔することになるよ？ご主人様の周りに他の女がいるから諦めよう、なんて考えているんだろうけど、そんなものは関係ないよ。ご主人様とお前の気持ちが大切なのさ。
ご主人様は、アンタに口づけされて、嬉しいと言っていたじゃないか。照れくさそうにしていたのは、アンタに好意を持っているからだと思って良いと思うんだがねぇ。あとは、アンタの気持ちだけだと思うよ？私は」

「あたしの、気持ち・・・？」

「そうさ。アンタはご主人様に情人がいることを口実にして、自分の感情を露わにすることから逃げているだけに過ぎない。情人がいなかったら、どうしたいのかを考えな。それがアンタの本心なんだろうからねぇ」

お母様は、用は済んだ、とばかりに歩き去っていった。

あたしの本心。

・・・あたしはご主人様を・・・

・・・あたしは・・・

・・・あたし・・・

その日は、そうやってご主人様と自分の感情について考えながら、ずっと過ごしていた。

蝶の如く～７４～

～朱里　Ｓｉｄｅ～

反董卓連合を解散する。
そう、斗詩さんから伝えられた。

……これで漸く袁紹さんから独立して、桃香様ご自身の夢を追いかける事が出来るようになる。

そう思い、密かに連合解散を喜んでいた。雛里ちゃんも喜んでいたと思う。
これから、何処を拠点としてどう立ち回っていくのか。その為に必要となる兵や物資を如何にして用意するのか。それについては既に腹案があった。

袁紹さんから、搾り取れるだけ搾り取った上で、并州を拠点として独立する。并州は、平教経さんの領地だった。それが大きく影響しており、未だ袁家に馴染みを見せない土地だ。此処を拠点にする。平教経さんと連携をする、と宣言すれば領民は私達を選んでくれると思うし、実際にそうすれば私達は二つのものを手に入れる事が出来る。私達を慕い反乱など起こさない領民と、強力な同盟者を。

終戦後、洛陽の民達から平教経さんの為人についての情報を集めた。彼は并州から雍州への移動の際に董卓さんに借りを作っていた。その借りを返す事と、善政を布いている董卓さんを救い、この世に『義』を打ち立てる事。それだけを目的として、連合を敵に回したようだ。
今後の事を考えれば、連合に参加して名声を得れば良かったのだ。

丁度良い売名になったに違いないのだから。私は桃香様が独立勢力であったとしても、連合に参加する事をお勧めしたと思う。だが、彼はそれをしなかった。それは、何故なのか。

その疑問を、機会があって話をした際に、黄巾賊討伐の際に多少交流があったと思われる曹操さんにぶつけてみた。すると曹操さんは少し考えた上で、こう言った。

『……まぁ、アレはきっとこう思ったのよ。『見義不為、無勇也』、とね。あの状況で、本当に馬鹿な男だとは思うけれど。でもそれだからこそあの男にはこの時代の英傑たる資格があるのでしょう』、と。その言葉に、同席していた周瑜さんが得心がいったかのように頷いていた。

『見義不為、無勇也』。

これが、力なき夢想家の言う事であるなら、関わらずに放っておけばいい。間違いなく、敗亡する事になるのだから。だが、彼には力がある。連合を向こうに回して、完勝することが叶うほどの力が。決して簡単な事ではないけど、同盟者として認められる事になればその同盟を彼が破る事はないだろう。危急の際には必ず助けてくれるだろう。そういう同盟者となることは、疑いようがない。実際に、彼はやって見せたのだから。同盟者でもない董卓を、その思うところの『義』に拠って救う事で。

後は、如何に彼と繋がりを作って連携をしていくのか。それだけが問題になる。

その為の方策を考えていた。それが全て無駄になるとも知らずに。

ある日、桃香様から呼び出され、大切な話がある、と言われた。

そう言った桃香様の横に、何故、斗詩さんがいるのか。

……私が思い描いていた様な、良い話ではない。そうでなければ、このように言いにくそうに、申し訳なさそうな顔をするはずはないのだから。隣にいる雛里ちゃんを見ると、雛里ちゃんは沈痛な面持ちで次の言葉を待っていた。良い話ではなく、それでいて斗詩さんに関わりがある話。……もしかしたら。だが、それは無いだろう。そうあって貰いたくない。そんなはずはない。一瞬思い浮かんだその事を追い払うように頭を振った。

「どうしたの？朱里ちゃん」

「いえ、なんでもありません。それで、桃香様、お話とは何でしょうか」

「あのね、朱里ちゃん、雛里ちゃん。……私は、袁紹さんを天下人にして、袁紹さんを上手く誘導する事で自分の理想を実現しようと思うの。だから、その為に力を貸して貰いたいの」

……最悪の想像が、目の前にある。その言葉は、それだけは、聞きたくなかった。

しかもそれを、斗詩さんの前で言うなんて、桃香様はどうかしてい

る。

「……斗詩さん、斗詩さんは、それで構わない、ということなのでしょうか……？」

「……私だって、本音を言えば麗羽様を利用するような真似はして貰いたくないですよ？でも、麗羽様はああいう人になってしまったんです。このまま行けば、麗羽様は諸侯から疎まれて討伐されてしまうかもしれない。丁度麗羽様がそうしたように、麗羽様を標的として討伐の為に連合を組む事だって考えられる。

でも、もし麗羽様が、人から敬って貰えるようなしっかりとした理想を抱いて、それに基づいて行動するなら、そんな事にはならないと思うんです。ただ、残念ながら、麗羽様は『名族袁家の袁紹』としての自分を演じる事をやめる事が出来そうにありません。でも麗羽様は、桃香さんの言う事なら、何故か素直に聞いて下さる。そして桃香さんの抱いている理想は、本当に好ましいものだと思うんです。

私達袁家には人を惹き付けて已まない夢や理想、そしてそれを掲げ実践する君主が欠けています。そして、桃香さん達にはその夢を実現させる為の兵や資金が不足している。私達は、お互いを利用し合う事でこの世の中をより良い形にする事が出来ると思うんです。だから、『構わない』のではなく、そうして欲しいんです」

「……」

桃香様を戴いて、桃香様の理想を、この世の中に顕現させたかった。

それが私の夢だった。

でも、それはどうやら叶わないらしい。

出奔。一瞬、その思いが胸に去来する。

……でも、駄目だ。私は、桃香様に命を救われた。その理想に、自分の才を捧げることを誓った。桃香様の元を出奔することは、考えられない。この人が居なければ、私はもうこの世に居ないはずだっ

たのだから。

……それが叶わないなら。

桃香様を頂点に戴いて独自の途を歩む事も出奔する事も叶わないのなら、せめて、桃香様が抱いた夢だけでも。その夢を顕現させる事で、世の人が桃香様が思い抱く生活を送れるようにしたい。

「……わかりました」

「朱里ちゃん？」

「桃香様の思い、承りました。この上は、桃香様の夢を実現させる為に、微力を尽くさせて頂きます」

そう言って、雛里ちゃんを見る。

雛里ちゃんは、まだ納得していないようだけど、私を見て頷いてくれた。

「……ありがとう、朱里ちゃん、雛里ちゃん」

桃香様が、そう仰る。

私の夢は、死んでしまった。

それならば、せめて、その夢の一部だけでも実現させよう。いや、させてみせる。全てを、桃香様さえも利用して。

～白蓮　Ｓｉｄｅ～

私は、姓は公孫、名は賛、字を伯珪。真名は白蓮。幽州・北平の太守だ。

「殿、袁紹殿から書状が参っております」
「麗羽から？……何なんだ、一体」

反董卓連合軍が解散して、早一月が過ぎた。
その間、不穏な雰囲気に包まれていた民や兵達を、時に宥め、時にすかし、時に討伐して、領内を掌握することに奔走させられていた。

やっかいな相手を敵に回していたのだ。私達は。

天の御使い、平教経。
并州牧として并州内の賊徒を討伐し、黄巾の乱を終熄せしめた男。
その後、雍州に半ば流刑のような扱いで赴任していったが、反董卓連合に対して馬騰を臣従させて親董卓連合とも言える勢力を作り上げ、？水関・虎牢関で連合軍を策と奇計で散々に打ち破り、董卓を

洛陽から救い出してみせた、文武に優れた男。
その男が虎牢関で対峙中に施したであろう策によって、連合軍に参加した諸侯の領地は未だその落ち着きを取り戻せないでいる。それどころか、また新たな流言を飛ばしているようだ。曰く、『漢の忠臣であり良臣である董卓と平教経を、無道にも討伐しようとした君主にこのまま従っていても良いのか？』。
決起せよ、とも、味方になれ、とも言っていない。唯々民に問いかけているだけだ。だが、その問いの、何と心を揺さぶる事か。激高しての言葉でも涙ながらの言葉でもない、平坦な感情で発せられる言葉。その調子が、より一層民衆を煽る。

私は、自分の領地経営にはそれなりに自信があった。
その私の領地にして、この有様なのだ。その他の諸侯の領地がどのような状況であるかは想像に難くない。そのように大変な状況の中、態々私に書状を出してくるなんて。麗羽の奴、今度は一体何を言ってきたんだ？

書状を確認して、唖然とした。

『劉虞を皇帝として推戴する。ついては、これに賛同する諸侯の一人として名を連ねて貰いたい。これを断るなら敵対するものとみなし、それなりの対応をさせて貰う』

相変わらず、人に物を頼む態度ではない。後半の言辞など、無礼に過ぎる。だが、問題はそんなところではない。

……『劉虞』。
私にとって、奴は決して受け入れることが出来ない最低の男だ。
奴が幽州の州牧となった際、北平の太守であった私は挨拶に赴いた。
皇帝の血類である劉虞に誼を通じておく事は、利をもたらす事はあ

っても害をもたらす事はないだろうと思ったからだ。代へ赴いて挨拶を行った私に、劉虞は、あの男はこう言ってきたのだ。

『中々いい女じゃないか。どうだ、皇帝の血に連なるこの俺様が、貴様を抱いてやろうじゃないか。……なんだ?断るつもりか?俺の女になるなら、中央へ口を利いてやっても良いのだぞ?まぁ、貴様の態度次第だがなあ……良い思いがしたければ、先ず俺に良い思いをさせろ……そら、服を脱いで、この俺に尽くして見せろ。今、ここでだ』

初対面の人間に、あの様な事を言われた事は初めてだし、今後もあんな事を言われる事はないだろう。余りの言い様に、劉虞をぶん殴って北平へ帰還した。『貴様を必ず犯してやる』、という言葉を背にしながら。

あんな卑劣漢が。

あんな屑が、皇帝になると言うのか。

あの屑を皇帝に推戴しようなどという麗羽の神経が知れない。

そんな馬鹿な事の片棒を担ぐ事などお断りだ。

麗羽に対して、断りを入れるべく書状を認める。

……これを麗羽に送りつければ、麗羽は間違いなく北平に攻め込んでくるだろう。けど、劉虞は、あの屑だけは認める訳には行かない。推戴しても碌な事にならないのは目に見えている。あの時のように、今度は皇帝という絶対的な存在として、その絶対的な権力を以て私を陵辱しようとするに決まっている。

賛同しても拒否しても碌な事にならないのであれば、自分の思う通りにした方がいい。そうであれば、例え悪い結果になったとしても後悔する事だけはないと思うから。

～雛里　Ｓｉｄｅ～

「桃香様、何故黙っていらっしゃったのですか？」
「……御免、朱里ちゃん。でも、袁紹さんはどうしても袁王朝を樹てることを諦めないと思ったの。漢王朝から禅譲によってその正当性を主張できることが出来る。そう斗詩さんや猪々子さん、審配さんに言われて……言えばきっと反対される。そう言われたから、黙ってたの。ごめんなさい」

劉虞を皇帝に付け、それから禅譲を受ける形で袁王朝の樹立を宣言する。
その企画を、朱里ちゃんも私も知らされていなかった。
絶対に、反対したと思う。朱里ちゃんも、多分反対したと思う。
どう考えても、反発しか招かない。今上陛下に落ち度がある訳ではないし、何より皇族としてあまり評判の芳しくない劉虞を皇帝に付

けるなど、愚策だと思う。その男から、禅譲をさせる。あからさますぎて、鼻白んでしまう。

けれど、既に賽は投げられた。

『劉虞を皇帝に付けることに賛同しろ、さもなければ討伐することも辞さない』。

そう諸侯に対して書状を発してしまったのだ。

公孫賛さんに、依頼という名の脅しを掛けて突っぱねられたことで、公孫賛さんを討伐すると袁紹さんが言い出した。その時初めて、私達はこの企画を知らされた。他の誰からでもない、私達自身の調べによって。

「桃香様、理想を実現する事は大切な事です。その為に利用出来るものを全て利用する事も必要な事です。ですが、利用の仕方を誤ってはいけません。劉虞などは、増長させて非道を行わせた上でこれを斬り捨てる事によって、天下に広く袁家の姿勢というものを示す事に利用出来たはずです。そういう利用法こそが、彼には相応しかったと思います」

あの話の後から、朱里ちゃんは少し変わった。

桃香様の為ではなく、桃香様の理想を顕現させる為だけに自分の才を使い切る。

そう考えているのがよく分かる。

私も、そう思っていた。

けれど、自分を信頼してくれない人を君主として戴くなんて、私には出来そうにない。先ず人として、こう有れかしと思うような人に、私の主君であって欲しい。私は、朱里ちゃんのように割り切れない。

「……ごめんなさい、朱里ちゃん」

「……二度と、このような事はしないで下さい。今後は私も必ず含めて頂きます。それが叶わないなら、私もこうやってお仕えする訳には行きません。愚かな味方に足下を掬われて、理想を顕現させることなく死にたくはありませんから」

「……うん、二度と、しないよ。……ごめんなさい」

「……分かって頂ければ、宜しいのです。田豊さんや沮授さんが投獄されたのは、これに反対したからなのですね？今すぐ、彼らを解き放って私のところへ連れてきて下さい。協力するように、私が説得しますから」

説得して、利用する。

そう考えていると思う。

朱里ちゃん。

朱里ちゃんは、無理しているようにしか見えないよ。

私は、どこか無機質な感じのする朱里ちゃんの顔を見ながら、朱里ちゃんをこう変えてしまった桃香様のことを、少しだけ、憎いと感じ始めていた。

この人さえ、朱里ちゃんの想いを裏切らなかったら。朱里ちゃんが、こんな風になる事はなかったのに。理想という名の泥沼に胸まで浸かりながら、汚辱に塗れんとすることはなかったのに。

どうやって朱里ちゃんをその沼から掬い上げるのか。その後の桃香様の話など聞かず、その事だけをずっと考えていた。

蝶の如く～７５～（前書き）

いつの間にか２５０万アクセスを越えてました。吃驚しました。
更新のあった日のユニーク参照者数が５５００を越えてました。

このような妄想を、最初のぐだぐだと読みにくい箇所から読み進めて、それでも猶読んで下さり、誠に有り難う御座います。これからも完結に向けて頑張って参ります。

蝶の如く～75～

～雪蓮　Ｓｉｄｅ～

反董卓連合が洛陽で解散してから、それぞれ領地へ戻った。
わたし達も、領地に帰ってきている。まぁ、わたし達の領地ではなく、忌々しい袁術の領地なんだけど。

その領内は、大混乱だ。
元々領地経営に力を入れていた訳ではなく、我が儘放題に、思いつくがままに税率を変更して民を苦しめてきた袁術だから、こうなるのはわかりきった事だと思うわ。わたし達にとって望ましいことだけど。
圧政を布き義を見失っている袁術を、正義を掲げて討伐する。
そうなれば、袁術が治めている領地を、丸ごとわたし達が頂く事が出来るだろう。そう思っているんだけど、冥琳はそれでは不十分だと考えているみたいね。
ま、あの冥琳が『任せておいて貰おう』って言ってたんだから、愉しみに待っていればいいわね。

冥琳が何を考えて、どう戦略を組み立てるのか。
それが非常に愉しみだ。

「策殿、袁術から呼び出しが掛かっておりますが」
「……嫌よ。わたしは行かないわよ？」
「……駄々を捏ねなさるな……嫌と言ってどうにかなる物ではない事ぐらい、分かっておられるであろうに」
「それでも、言いたいのよ。言わないとやってられないわよ。ったく」

「まあ、諦められる事ですな。冥琳が何やら画策して居るようですし、辛抱もあと僅か、というところまで来ておるのでしょう。穏も亞莎も忙しそうにしておりましたからな」

穏。姓を陸、名を遜、字を伯言。
亞莎。姓を呂、名を蒙、字を子明。
二人とも、冥琳が目を掛けている、次代の孫家を担う軍師になると言われている娘だ。その二人が忙しくしているということは、祭の言うように本格的に冥琳が動き始めた、と思って良いみたいね。

「早くしてくれないと、袁術、殺しちゃうわよ？わたし」
「冥琳によく言っておく事ですな」
「はいはい。それじゃ、祭。行ってくるから後はお願いね」
「はっ」

全く、何の用なのよ。あの馬鹿は。

「はぁ。兵と糧食をかき集めてこいって言うの？」
「そうなのじゃ。またすぐに戦になるのじゃ」

……懲りもせず、董卓と平教経を討伐しようって言うの？馬鹿じゃないかしら。ああ、馬鹿だったわね。

「……袁術ちゃん、貴女、懲りてないの？ついこの間まで戦をして、散々に打ち破られたじゃない。それなのに、まだあの二人を討伐するって言うの？」

「違うのじゃ！これを見るのじゃ！」

そう言って、袁術がわたしに書状を投げてくる。

……朕がなってないわね、この馬鹿は。

書状を拾い上げ、内容を確認する。

『劉虞を皇帝として推戴する。ついては、これに賛同する諸侯の一人として名を連ねて貰いたい。これを断るなら敵対するものとみなし、それなりの対応をさせて貰う』

馬鹿から馬鹿への馬鹿な手紙。そういう感想しか湧いてこない。

「で、どうして兵と糧食が必要になるの？袁紹を討伐する訳？」

「そうじゃ！麗羽が、あの妾＜めかけ＞の子が皇帝になるなんて生意気なのじゃ！妾＜わらわ＞は麗羽の言う事なぞ聞きたくないのじゃ！」

「だから、戦をする、と？」

「当たり前じゃ！書状に従わないなら討伐すると書いてあるではないか！」

「そうだそうだ～。袁紹なんてやっちゃえば良いと思いま～す」

「そうじゃろ？そうじゃろ？」

……普段お馬鹿なのに、袁紹の馬鹿からの手紙の裏側についてだけは分かるのね。驚きだわ。

でも、好都合じゃないかしら。
袁術の許可を得て、大っぴらに募兵が出来る。かき集めてかき集めて、その兵と糧食で袁術を討伐すれば、兵力と糧食を膨大に抱えたまま、名声と領地まで手に入れる事が出来るわ。ただ、劉虞を皇帝にすることに反対している袁術を討伐するのに、尤もらしい大義名分が必要になってくる。そうでないと、全ての人間を納得させる事が出来ないでしょうからね。さて、どうすればいいかしら。

そう考えていると申し継ぎの者が息急き切って駆け込んでくる。

「申し上げます！」
「どうしたんですか？今美羽様はお忙しいんですよ？」
「それが、その、農民が袁術様に献上したい物がある、と言って来ているのですが、その、持ってきた物が物でして！」
「そんなに興奮する物なの？それ」
「は、はい」
「ふぅ～ん……ねぇ、袁術ちゃん。此処に持ってこさせてみれば？わたしも見てみたいし」
「では、此処に持ってくるのじゃ！」
「は、ははっ」

そういって駆け出ていった彼が再び戻ってきた時、その手に金印を持っていた。それを、袁術に膝行して捧げた。
……冥琳、そういうことね。増長させるだけ増長させて梁から縄を垂らしておけば、自分で首に縄を掛けて、勝手に梁から飛び降りてくれるって寸法ね。

「これは、なんじゃ？金ぴかで麗羽みたいで嫌なのじゃ」
「美羽様。これは伝国璽ですよ」
「でんこくじ？」

「……天下を治める証のようなモノで、歴代王朝の皇帝に受け継がれてきたって言われてるわ」
「なんじゃと!?つまり、妾は皇帝に選ばれたという事じゃな!?」
……いきなりの大正解＜私が望む答え＞。何処をどうやったらそういう結論が出るのか分からないんだけど。わたしが背中を押すまでもなく、進んで首括ってくれるなんて。馬鹿で良かったわ。
「そうですよ～美羽様。美羽様は皇帝なんですよ～」
「おお!やはりそうか!七乃、妾は皇帝になるぞ!」
「流石は美羽様～!」
……ここまで順調に行くと、こんなにも不安になるのね……
「じゃ、わたしは行くわよ?かき集められるだけかき集めてあげる」
「よし!良いのじゃ!頑張ってくるのじゃ。妾の為に!」
「ええ、分かってるわ」
貴女の為に集めて、貴女を殺してあげるわ。貴女の為に、ね。

～華琳　Ｓｉｄｅ～

「麗羽は本当に馬鹿ね。付ける薬もないほどに」
「はっ。しかし華琳様、認めないと返事をすれば面倒な事になると思いますが」
「ええ、そうね。だからこう言ってやりなさい。『名を連ねる事は構わないが、今は時期尚早だと思う。華麗なる麗羽には分かって貰えると思うけど。だから、機が熟したら参加するわ』とね」
「……認めるでしょうか」
「……認めるでしょう。だからアレは馬鹿なのよ。真面目に考えるだけ無駄よ」
「は、はぁ」

反董卓連合解散後、まだ一月しか経っていない。
そんな中、麗羽から書状が届いて曰く、『劉虞を皇帝として推戴する。ついては、これに賛同する諸侯の一人として名を連ねて貰いたい。これを断るなら敵対するものとみなし、それなりの対応をさせて貰う』。

私の領内は落ち着きを見せているが、麗羽や袁術はそうはいかない。その中で、従わなければ討伐するなどと言う。恐らく本当にやるつもりなのでしょうけれど、貴女、正気なのかしら。
軍事を専らにするのは、敗亡への道よ。古代の大帝国の衰退は、その大体が軍事を専らにした事が原因の一つとして挙げられる。剣とは所詮禍事をもたらすものなのだ。禍事に塗れれば当然自分もその国も禍事から逃れられない。古代の偉人達から何も学んでいない貴

女は本当に度し難い低能だわ。

教経を見なさい、教経を。程よく勝つ。それが国にとっても自分にとっても最大の利益をもたらしてくれると知っている。君主たる者は、あの行蔵を見倣うべきなのよ。勝ちを貪らず、戦を愉しまず。私と共に学んだ孫子にも書いてあったじゃない。『百戦百勝は善の善なるものにあらざるなり』。勝ち続ける事が最終的に勝者となる事を保証する事ではないのよ。楚の項羽を見なさい。勝ち続けて勝ち続けて勝ち続けた結果、彼の周りから人が離れ、恨みや妬みを買い、そして最後の一戦で敗れて全てを失った。勝ちすぎれば、疎まれ恨まれて必ず害を被る事になる。類い希なる幸運により、例え自分の代で問題が起きなくとも、将来に必ず禍根を残す事になるのだから。

「ところで桂花。公孫賛に対する工作はどうなっているの」
「はっ。公孫賛はこちらが煽るまでもなく、この件に対して断りの返答を誰よりも早くしておりますので袁紹とぶつかるのは必定です。また、既に危機感を抱いている様で、募兵を行い、糧食を買い求めているようです」
「そう。では、桂花。黒山賊と連携するということが考えつけるようにしてあげなさい。黒山賊への工作は私が直々に行うわ。秋蘭、エン州の糧食の余剰を流してやりなさい。簡単に倒れられては困るの」
「はい！華琳様！」
「畏まりました、華琳様」

これから、どうするか。
今回の功績とやらでエン州牧の地位に着いたわけだから、当然エン州を掌握する必要がある。それが、第一にすべきこと。その先、この天下がどういう経緯を辿るのか。

麗羽、教経、孫策。この三者に、私を含めた四者が最終的に覇権を争う事になるでしょう。最も手強いのは教経だけど、流れとしては彼と対峙する人間が誰なのかを先ず争う事になるのでしょうね。地理的に考えて。雍州や涼州を喉から手が出るほどに欲する人間は居ないでしょう。人が少ないわけだから大した利益にはならない。そうなれば、やはりエン州は危険ね。此処は人口が多いもの。麗羽は間違いなくエン州を併呑しようとするでしょう。それまでに、対抗策を考えて置く必要がある。

まず、孫策。為人をもっと調べる必要があるわ。天下に野心を持っているのか、それともある程度で満足し、臣従しても構わないと思う質なのか。それによって、対処を考える必要がある。後者であれば不可侵の会盟を行う必要があるかも知れない。腹背に孫策が居る状態で、麗羽はまだしも教経と対峙するなどあり得ない。前者であるなら、早い内に攻め滅ぼしておく必要がある。力を付けないうちに。麗羽などより、余程手強い。そういう印象を私に持たせるだけの家臣が居るのだ、孫策には。周公瑾。アレはかなり出来るわ。それこそ、教経のところの郭嘉や程?に匹敵する程の女。だから、早い内に叩く必要がある。

次に麗羽。麗羽自身は低能。文醜は武に優れているが頭が弱すぎる。顔良は武に優れているだけでなく、ある程度の学がある。性格も沈着な方だ。しかし、やはり思考には武人としての傾向が色濃く反映されるようだ。客将となっている劉備は、袁紹と同じで低能。その義妹である張飛の武は、春蘭に匹敵するものがあるかも知れない。少なくとも、虎牢関で見かけた際の武勇は際だったものだった。油断は出来ないだろう。だが、それらはどうにでもなる。

問題は、劉備の知嚢となって居た、二人の少女。アレは、何としても欲しい人材だ。二人共に切れるはずだ。私が直接面語したのは諸葛亮だけだが、敏い女だった。それが共に仕えようと誘ったのがホ

ウ統だというのだ。凡才であるはずがない。最低で良才、もしかすると偉才。もし麗羽と事を構えるなら、劉備達を独立した勢力としておく必要があるわね。

「桂花に、麗羽の客将である劉備を独立させるべく策を施すように言っておきなさい。あと、今回の麗羽の行動に対して、批判的な考えを持っている家臣を洗い出し、徹底的に揺さぶるように、と」

「はっ、畏まりました」

そう言って、官吏が駆けていく。

打てる手は全て打っておくのよ。そうやって勝ち目を増やしておいてから戦をするの。貴女のように、気分でやるものではないわ、麗羽。少なくとも、連合参加によって消費した人的・物的資源を元の水準まで戻す必要があるのだから、今は休むべき時なの。

しかしまぁ、何とも面倒な策を施してくれたものね、教経は。お陰でエン州を取り纏めるのに予想以上に時間が掛かっているのだから。戦場で有効な策を考えつくだけなら誰にでも出来る事だけれど、政にまで影響を及ぼす程の策を思いついて実行する辺りは、流石ね。まあ、陳留に関しては全く揺るがなかったけれど。

……見ていなさい、教経。

麗羽を滅ぼし力を付けた後、貴方の首に縄を付けに行ってあげるわ。

この私、曹孟徳が、ね。

蝶の如く～７６～

～教経　Ｓｉｄｅ～

「……愚者を皇帝にしようっていう賛同者になれ、ねぇ」

「……はい」

季節が春を迎える頃、大馬鹿者から使者が来た。

良くもまぁ、この俺に使者などを送ってくるつもりになったモンだ。

何を言うのか聞いてみたいという誘惑に負け、引見した。

その使者が俺に提示したのが、『劉虞を皇帝に据えるのに賛同する諸侯の一人として名を連ねろ』、だった。俺も月も、呆気にとられた。

前々から、馬鹿だと知っていた。大馬鹿者だと思い、そう呼んでいた。だが、此処まで馬鹿だとは思っていなかった。この俺に、矛を交えた俺に対して、賛同しろと言ってくるとは思っても見なかった。断るに決まっているだろうに、何をトチ狂った真似をやっているんだね？

お前さんは度し難い馬鹿だ。そんなものは俺を討伐する為の兵を起こす大義名分にならない。見え透いている分、世間からは失笑を、ものの役に立つであろう人間からは失望を買うだけの事だ。その程度の事も分からんのか、あの大馬鹿者は。

そう思って書状を見る。

……だが、おかしくはないか？本当に馬鹿なら、諸侯に対して呼びかけを行っていた時に同時に来るはずだ。それが今になって、遅れてやってきている。既に公孫賛が反対を表明し、軍備を整えていることは知っている。その穴埋めに、というつもりがあるとしても、

もっと早くに来るはずだ。反董卓連合との戦から、もう三ヶ月は経過しているのだ。

何故、俺に、遅れて、書状を送ったのか。
断られる事は分かって居るはずだ。少なくとも、周囲の人間は。
では、断られる事を前提として敢えて使者を出し、態々俺に断られたという結果を出さなければならない理由とは何だ？

……俺には、分からない。分かりそうにないねぇ、コレは。
こういう時は、軍師様にお伺いを立てるに限るンだねぇ。

「仕方がない、軍師様を呼んできてくれ。全員、な」

取り敢えず使者に返答はせず、後日必ず返書を送ると約して返した。

「コレを送る必要性がないと思うんだが、何でこの書状が送られてきたと思うね？」

稟、風、詠の三人を前にして、そう問いかける。
三人とも、よくよく考えているようだ。

「……普通に考えれば、ですが。やはり戦を仕掛けるのに大義名分が必要だから、ではないでしょうか」

そう稟が言う。

「風としても、そう思いますね。ただ、袁紹さんがお兄さんに戦を仕掛ける為の大義名分として、それなりに効果のあるものを得る為だと思います」

「……それは、勅命、ですね？風」

「そうなのです。お兄さんは劉虞さんが皇帝になる事に反対した。勅命を以てこれを討伐すべしと言わせる為に、お兄さんに断られたという実績が欲しい。だから態々送ってきたのではないでしょうか」

「純軍事的に考えて、現状反対している公孫賛殿には自力で勝てると思っているのでしょうが、教経殿に勝つには余程周到な準備をする必要があります。その為に必要な手段の一つとして考えているのではないかと」

「世間からの風当たりを考えても、多少の効果しかありませんが勅命を受けている、というのは意味があると思うのです。出兵する際に、勅命であるから仕方が無く、と言えば、そんなこともあるかなと思う民も多くいるでしょうね～。また、負けてしまっても、勅命であるから仕方が無く、と言えるのですから。貰っておいて損はないものであることは間違いないのですよ」

「ふむ……詠は、どう思う？さっきから会話に参加していないようだが」

稟と風が思うところを述べている間、詠はずっと黙っていた。

何か、別の事を考えているのかも知れないねぇ。

「……ボクも、二人が言っている事が正しいんじゃないかとは思うわよ？でも、ちょっとね……本格的に調べてみないと何とも言えないんだけど、袁家って一枚岩じゃないかも知れないわね」

「と、言うと？」

「だから、調べてみないと何とも言えないのよ。けど、こういう企

みがあるってことをこちらに知らせたかっただけで、この書状を送らせる為に掛かった時間の分だけ遅れた、と考える事は出来ないかしら。勿論、ボクが穿った見方をしている可能性の方が高いって事は間違いないわ。

でも、それでも……ちょっと引っかかるのよ。

極端な事を言うけど、勅命なんて脅して取得すればいいのよ。大事なのは、劉虞が皇帝になったとして、彼が勅命を袁紹に授ける、その儀式が滞りなく行われるのが衆目に晒される事であって、別に自発的にやってくれなくても良い訳よ。それなのに、それを態々自発的にさせる為にこういう手順を踏むなんて思えない。これは、そういう意図があるって事をこっちに知らせようとしてくれているんじゃないかって、そう思っちゃうのよね」

……全くそんな事は考えていなかった。

稟と風を見ると、再び思索の海へ乗り出している。

「……詠ちゃんは、何か掴んでいるのですか？」

「田豊と沮授が、投獄されたって聞いたわ。直ぐに釈放されているけれど、反対する人間が居るって事には違いないわ」

「……その為人は、どのようなものでしょうか」

「二人とも、袁家の為になることを行おうとする人間よ」

「……普通であれば詠の見方は穿った物の見方だと断言出来ますが、今回は詠の方が正しいかも知れません」

「何でそう思うンだ？稟」

「断って欲しいだけなら、諸侯に送った時に一緒に送ってくるはずです」

「成る程。簡潔だが納得のいく回答だ」

「……稟ちゃん、現状袁紹さんの領地にいる稟ちゃんのところの細作と風のところの細作で腕が良い人達を、詠ちゃんに使ってみて貰ってはどうでしょうか。袁家の官吏として内部に入り込んでいる者

が多数居ますし、きっと詠ちゃんの役に立つと思うのです」
「それが良いでしょうね。詠、連絡の取り方を教えますから、好きに使って下さい」
「……分かったわ。ボクとしても、はっきりしないまま放置したくないから、徹底的に洗ってみることにする」

この三人の頭ン中は、一体どうなってるンだろうねぇ。
袁家に対する諜報活動について熱く語り合っている三人を見ながら、これから始まるであろう群雄割拠の時代に思いを馳せる。

袁紹、華琳、孫策。ひょっとしたら、劉備。
これらと戦わなければならない。

まぁ、そこを考える前に、漢中の張魯と新城郡・魏興郡の孟達について考えておくべきだがねぇ。将来の事を見過ぎて足下の石に気が付かず、その石に蹴躓いて崖から真っ逆さま、なんてゾッとしない話だ。彼らが領有している全ての郡を俺が侵略することになる。当然、抵抗するだろう。

……正義と正義のぶつかり合い。
互いに、譲る事がない故に、その戦は激しいモノになるだろう。

かつて俺も琴のように絶対的な正義があると思っていた。
そして、それがあると糞爺に言った際、こう言われた。

『阿呆め。この世に絶対的な正義などは無い。『メギドの丘』などある訳があるまい。アレは頭の弱い宗教家が考え出した妄想だ。誰かが提示した正義が気に入ったら、それを受け入れる。気に入らなければ、それを斬り捨てるまでのことだ。時には、それを主張する人間ごとな。この世界には義と善が溢れかえっているのだ。定員を

超えているから、それをふるいに掛けているに過ぎん。定期的にな。
それが戦争だ。
そうやって人は生きてきた。今更それが変わるわけがなかろう。何せ人類は２０００年を超える歴史を経て猶殺し合っているのだ。此処まで来ればそれは最早本質だと言って過言ではあるまい。人は己が理解出来ぬモノを理解する為にどうしても殺し合わなければならぬ生き物だ。殺し合って始めて生まれる理解がある以上、それは真理だとさえ言える。
正義とはな、正しいものが正義なのではない。正しいと思えるものが正義なのだ。それを履き違えるな。己が正義を相手に認めさせる為には、力が必要だ。己が正義を貫きたいなら先ず力を付ける事だ。力こそ全てと言うつもりはないが、力のない正義がこの世で広く認められた試しはない。良く覚えておく事だ、小童』
……極論ではあるだろう。だが、それ程的を外したモノでもないと今は思っている。
俺の夢や理想をこの世界に住む人間に認めさせなければならない。その為に必要な力を蓄える為に、張魯達の死が必要ならば死んで貰う。
俺の事績が後世どう評価されるのかは、後世の無責任な学者共に任せておけば良い。
俺は、そいつらの為に理想を掲げて戦う訳じゃない。
今を生きる平家の郎党共の為に、死んでいった郎党共の為に、そして何より俺自身の為に戦うンだ。
袁紹だろうと華琳だろうと孫策だろうと劉備だろうと。
誰にも、邪魔はさせない。誰にも、ね。

～詠　Ｓｉｄｅ～

袁家に対する諜報活動について話し合っていたボク達は、教経が何も話さなくなった事に気が付いて話をやめた。
また、何か考え事をしているのだろう。

「相変わらず、お兄さんはこういう顔をするのです」
「……なんか非難してるように聞こえるわよ？」
「それはそうなのです。お兄さんはこの顔でもう5人も釣り上げているのです。つり吉　教平なのです」
「……風、なんですかそれは？」
「知らないのです」
「相変わらずね……」
「まだ帰ってこないみたいなので、この際はっきりさせておきまし

ょうか」
「何をよ？」
「お兄さんに興味を持っている人間、懸想している人間が何人いるのか、についてなのです」
「……風、そんなことが何故分かるのですか？」
「稟ちゃん、何故諜報員があんなに沢山居ると思っているのですか。あれだけの諜報員が居てお兄さんやお兄さんに興味を持って居るであろうメス豚たちを監視しないという事があるでしょうか。いや、ないのです」
「……勝手に問いかけて勝手に完結していますよ、風」
「そんな事はどうでも良いのです」
「要するに、コイツの周辺に寄ってきそうな人間に目星を付けてあるってことね？」
「約二名。既に宣言されているのですよ」
「はぁ？何をよ。そして誰によ」
「じゃぶろーを強襲すると宣言したのは碧さんで、二人というのはあの親娘なのです」
「……それはなんとなく察していましたが。蛇武楼とは一体なんですか？」
「知らないのです」

まぁ、碧は自分で『誑かされた』って言っていたものね。

「……その二人だけって事は……まぁ、無いわね。琴が居るものね……」
「そうなのです。懸想している人間は、この三人で確定なのです。しかし興味を持っている人間、という話になるともう少し増えるのです。神速の痴女もいますし、月ちゃんも居ます」
「月も！？」
「……朔さんの真名云々の時の顔、見ましたか？きちんと」

「……なんとなくわかったからいいわ」
「それから、これは少し違った意味での興味になりますが、何故か平家以外の人間が興味を持っているのです。それも、太原にいる頃から」
「誰よ」
「曹操さんです」
「はぁ！？」
「……あぁ」
「稟ちゃんは、意外ではないようですね」
「まぁ、あの人は有能な人間には目がないでしょうから」
「それだけではないのですよ。自分と対等な存在で在る事が出来る唯一の人間と言っていたそうです」
「……何が変な訳？」
「あのちっさいのは自尊心が強いのです。自分と対等な存在がこの世界に存在する、などと、自分で言い出す事はないと思えるほどに。稟ちゃん、覚えていますよね？曹操さんがお兄さんと初めて逢った時のことを」
「……ええ。自分を見て意外な顔をした教経殿に反発していましたね。馬鹿にされたと思って頭に来たのでしょう」
「まぁ、そんな風に他人より自分の方が優れている、という自負が強いのです。その曹操さんが、お兄さんに関しては非常に高い評価を下しているのですよ。ひょっとすると、まだ他にもいるかも知れません」
「……まぁ、連合軍を相手に五分以上の戦いを繰り広げた訳だから、分かる気もするけど」
「そんな連中に、こんな顔を見せたら、間違いなくまた釣り上げるのです。丁度詠ちゃんが一瞬で釣り上げられたように」
「う、五月蠅いわね！」
「兎に角、お兄さんが浮気しないように、しっかりとつなぎ止めておく必要があるのですよ」

「それは分かりますが……」
「なので、今日も三人で頑張るのです」
「……最近、自分が節操なしに思えるわ……」
「詠ちゃんは嫌なようですから、風と稟ちゃんだけd」
「い、嫌だとは言ってないでしょ！？」

……全く。
コイツもコイツよ。ボク達がどれだけ好きなのか、分かって居る癖に。
浮気しようなんて思えないほどに、骨抜きにしてやるんだから。

ボクに、夢中にさせてやるわ。
絶対に、そうしてやるんだから。

……四人で居ると、いつもこうなっている気がするのは、気のせいよね……

蝶の如く～77～（前書き）

身内で不幸があった為、週末更新が滞ります・・・

蝶の如く～77～

～教経　Ｓｉｄｅ～

袁術が、皇帝を僭称した。国号は『仲』。国都を寿春とし、兵と兵糧をかき集めている。

「お兄さん、袁術さんからお手紙なのです」

その袁術から、俺宛に書状が届いた。
領地を接している訳だし、何を考えているのかを知っておく必要はあるだろうねぇ。知ることこそ、全てに勝る力を得ることと同義なンだから。

それにしても『お手紙』って……風、ラジオか何かじゃないんだから。
そう思って書状を見る。

ＯＫ？じゃ、行きます。

は～い、始まりました～『ビシビシバシバシアンアンれぃでぃお』～！
俺はＤＪ　教経です。今日も宜しくお願いしま～っす。

リスナーからお手紙を頂いているようなので、早速そちらから参りたいと思います。
ラジオネーム、袁術さんからのお手紙。

初めましてなのじゃ、平教経。
はい、初めまして。なのじゃ？
妾は名族である袁家の袁術なのじゃ。
俺は歴史上最も有名な負け組、平家の教経なのじゃ。
……なンだ？この既視感は。再放送かね？
この度、妾は皇帝であることが分かったのじゃ！
要するにアレか、ユンケル的な？
ギンギラギンでもさりげなくもなく、ギンギンなわけですね。
わかります。
じゃから、お前は私に従うが良いのじゃ！
じゃぁ～から貴様は阿呆なのだぁ～！
分かったら、今すぐ妾の為に寿春に来るのじゃ！
分かった。貴女にはこの言葉を贈ります。
よろしい　ならば戦争だ。
袁術
教経
はい、カーット！
「……風、俺は寝る」
「ぐぅ」
「何という様式美！そこに痺れる！憧れるぅ！
じゃなくて、風。起きやがれ！」
「おぉ！世紀末覇者に誘われて～」

「……風、その人はラジオのＤＪなんかしないから。そして何故貴様がそれを知っている！」
「それでは、袁術さんからのリクエスト曲で、さだまさしの『秋桜』なのです」
「淡紅の～秋桜が～秋の日の～……似てない！
……貴様ッ、見ているな！？」
「知らないのです」

今日も平壌運転、もとい、平常運転だ。

「この一族は呪われた血筋か何かで、成長するにつれ頭がちょいとアレな感じになっちまう可哀相な一族なのか？」
「間違いないのです」
「ふむ。……折角のお誘いだが秋まで軍事行動は控えるって決めたんだよねぇ。お断りのお手紙代わりに、『秋桜』の歌詞を書き付けて送ってやってくれ」
「分かったのです」
「分かるのかよ」

いつもの事だが、風は面白い娘だね、うん。
可愛いから何でも良いんだねぇ。

「で、風。真面目な話、コレ、どうなると思う？」
「多分ですが、孫策さんに討伐されると思うのです」

やっぱり、そうなるかね。

「稟ちゃん、孫策さんの動向はどうですか？」
「兵と糧食をこれでもかとかき集めていますね。表向きは新皇帝への馳走の為ですが、その実討伐のためであることは誰の目にも明ら

かでしょう」
「誰の目にも明らかなのに、誰も袁術に教えないところが凄いな」
「領民からは既に見放されていますね」
「ついでに言うと、家臣からも見放されてるわよ」
「知らぬは本人ばかり、かね？」
「そうね。ああなったらお終いよ」
「そうなると、孫策が袁術の領地を奪って勢力となるか」
「かなり、手強いわよ？ボクの方じゃ、辺境領主に反乱を起こさせるくらいしか出来そうにないわ」
「風の方も似たようなものになると思いますね～。元々治めていた領地では慕われていますし、これから手に入れる領地では袁術さんが袁術さんでしたから、余程の失策をしない限りは暫く煽動など出来そうにないのです」
「軍事的にも袁術殿を討伐したところで矛を収めると思いますし、付け入ろうにも周辺諸侯の力が弱すぎてどうにもならないと思います」
「……一応保険を掛けておく必要はあるだろうな。風、星と愛紗に５万程度の軍勢をいつでも動かせるように準備しておくように伝えておいてくれ」
「分かったのです」
「詠、詠は糧食を集めておいてくれ」
「前の残りが十分にあるから、集めるまでもないわよ」
「そうかね。じゃぁ、取り敢えずは安心だねぇ。稟、目端の利くものに、孫策達の戦ぶりをよく見ておくように伝えておいてくれ」
「既に伝えてあります」
「……流石は稟だねぇ。頼りにしてるよ」
「……はい」
照れちまって、可愛いねぇ。

皆、孫策が勝つ事を疑っていないようだ。まぁ、俺もそうだがねぇ。
孫策は、天下を望むのか。望むとして、その思い描く天下はどんなものなのか。

機会があれば、話をしてみたいモンだねぇ。

～冥琳　Ｓｉｄｅ～

袁術が、伝国璽をその拠り所として、皇帝を僭称した。
国号を『仲』とし、諸侯に対して臣従するように書状を送りつけて

いるようだ。

雪蓮は、袁術から兵と糧食をかき集めてくるように命令されたのを良い事に、至る所に顔を出しては新皇帝の為に馳走をすべし、と説いて廻って兵と糧食を集めている。当然裏では、皇帝を僭称した袁術に鉄槌を下す為に合力しろ、と説いて。

兵は既に3万を数えている。糧食も、その兵達が半年は行動出来るだけのものを集めている。

先代・孫堅様が亡くなってから、孫家は袁術に良いように使われ続けてきた。戦に政に、まるで飼い犬であるかのような扱いを受けながらもそれを耐えてこれたのは、偏に雪蓮の器量による。

『雪蓮が、秋を得れば』。

皆そう思い、耐えてきた。祭殿を始めとする武官も、私を筆頭とする文官も、皆そう思えばこそこれまで耐えてくる事が出来たのだ。

そして遂に、その『秋』が来たのだ。

「穏。糧食の貯蔵は十分か？」

「十分ですよ～。今雪蓮様が集めている兵に孫家の兵を加えても、半年の軍事行動が可能ですね～」

「そうか。亞莎、豪族達の動向はどうだ？」

「皆、雪蓮様に臣従する事を肯んじています。後は、その号令を待つばかりです」

「いよいよ、か。思えばこれまで長かったが、漸くにして雪蓮が天下にその名を揚げる時が来た。袁術のような生まれが良いだけの駄馬とは違う、本物の駿馬が思うがままに駆ける、その時が」

二人は、黙って頷いている。

そろそろ、始めるとしよう。

……私が描き出してみせる。

雪蓮が思い描く、理想の世の中を。

この、周公瑾が。

「雪蓮、調子はどうだ」

「あぁ、冥琳。絶好調よ。今日は戦をするのに良い日和ね」

雨が降りしきる中、城壁の上でそう言い放つ。

城壁前に集結しつつある兵達を目にし、雪蓮は武者震いを一つした。

「漸く、ね。漸く孫家の宿願を果たす事が出来るわ」

「そうだな。だが、これで終わりではないぞ？雪蓮」

「分かってるわよ。……冥琳、これからも宜しくね？」

「フッ……任されよう」

「策殿、準備が整いましたぞ」

「そう。じゃ、行ってくるわ」

集った兵達に孫家の主として言葉を掛けるべく、雪蓮が城壁の上に用意された舞台の上に立つ。

「皆、良く集まってくれたわ。わたしは孫策。知っていると思うけれど、一応自己紹介、しておくわね？」

雪蓮らしい言葉に、兵達が笑う。

意図せず、人の心を掴む。これは天性のものだ。

湧き起こった笑いが収まるのを見計らって、話を続ける。

「こうやって改まって集まって貰ったのには理由があるわ。以前から言ってきたと思うけど、今日がその時なのよ。しっかり聞いて頂戴。

……わたし達はこれより袁術を討ち滅ぼす為に挙兵する。

此処まで来るのに、随分長い時間が掛かった気がするわ。それでも、わたし達はこの機会を遂にこの手に掴む事が出来た。後は、袁術を倒すだけよ。

今わたしの目の前に集った貴方たちは、これから自分自身の手で、その手で己が未来をつかみ取るの！これは、袁術によってもたらされた苦難の終わりであると共に、貴方たち自身の手でその未来をより良きものに変えていく事が出来る、そんな時代の幕を開ける為の第一歩なのよ！

その手に武器を持って立ち上がりなさい！孫家と共に、貴方たち自身の未来を切り開くのよ！わたし達が犬ではなく、虎である事を！誇りと夢とをその胸に抱いた、誇り高き虎である事を、今こそ袁術に思い知らせてやるのよ！」

聞いていて胸が熱くなる。

雪蓮。普段はあんなにおちゃらけているのに。

今の雪蓮は、主君としての威厳に満ち溢れている。

「……目を閉じれば、お母様の笑貌が目の前に思い浮かぶわ。今は

もう死んでしまっている、お母様だけれど。こうして目を閉じれば、直ぐそこに、いつもお母様が居る。
貴方たちも、目を閉じればそこに見えるはずよ。今はもう死んでしまった、父や、母や、親しかった人達が。彼らに恥じぬ生き方をしましょう！人として、彼らに、そして自分に恥じぬ生を謳歌する為に！今こそわたしと共に立ち上がって、共に袁術を倒しましょう！わたし達が敬愛して止まなかった、大切な人達の為に！そして何より、私達自身の為に！袁術を、共に打ち倒しましょう！」

兵達が、雄叫びを上げる。
泣いているものが殆どだ。皆、大切な人間を袁術の圧政で失ってきたのだろう。

この戦は、勝ちだ。
兵力も士気も勢いも、そして時流も。
全てが雪蓮に味方している。
これで負けるなら私達は余程無能なのだろう。

演説を終えた雪蓮が、こちらに向かって歩いてくる。
覇気と自信に満ちた笑顔で。

虎は、遂にその牙を手に入れた。
後はこの檻を破るだけだ。
破って、共にこの天下を駆け巡るのだ。自由に、奔放に、力の限りに。

蝶の如く～７８～（前書き）

再び蝶々の妄想を掲げる為に！　星の屑成就のために！
ソロモンよ！私は帰ってきた！！

蝶の如く～７８～

～雪蓮　Ｓｉｄｅ～

兵達を率いて寿春を目指すわたし達に、次々と豪族達が合流してくる。
総勢３０，０００を超える軍勢となったわたし達は、寿春郊外で袁術の軍と対峙した。袁術軍は１５，０００弱。良く寿春から出てきたものだ。

寿春に篭もられたら、手を焼くだろう。
そう思って、明命をあらかじめ寿春に潜入させていたのだけれど。

明命。姓は周、名は泰、字は幼平。
特に隠密に長けている、破壊工作の専門家。

彼女を寿春に潜伏させておいて、ここぞという時に門を開かせようと考えていたのに、その用意が無駄になってしまった。まぁ、相変わらずの馬鹿っぷりをここで発揮するとは思っていなかったからなんだけど、ね。

「態々寿春から出てきてくれるとはな。おかげでやりやすくなった」

冥琳はやる気満々だ。
祭も亞莎も穏も、皆手勢を意気揚々と率いている。
負ける事など考えられない。それ程に、士気が充溢している。

「で、冥琳。やりやすくなったのは良いけど、どうするのよ」
「知れた事を。大軍に区々たる用兵は必要ない。ひたすら前進し攻

撃する。得意だろう？雪蓮」
「さっすが冥琳。よく分かってるじゃない」
「それはそうだ。何年付き合っていると思っている。だが、油断はするなよ？雪蓮。孫堅様のこともある。これからお前は、今付き従っている全ての人間の主としてこの乱世を生きていかなければならないのだから」
「はいはい、分かっているわよ」
「……祭殿、雪蓮から目を離さぬように、お願い致します」
「ははは。そのような心配は無用じゃろう。が……分かっておるわ、冥琳。お前に言われずとも、な」
「本当は軍の先頭に立って戦うなど、して貰いたくはないのだがな」
「でも、止めないのね？」
「どうせ言っても止めないのだからな。私は無駄な事をするつもりはない。それ程時間が余っている訳でもないしな」
「ぶ～ぶ～。それじゃわたしが戦闘狂みたいじゃない」
「何だ、自覚がなかったのか、雪蓮」
「そうはっきり言われると嫌なものでしょ？冥琳」
「ははは。堅殿もそうじゃった。策殿は、堅殿に良く似ておられるわ」

そりゃそうでしょ。わたしはお母様の娘なんだから。

「じゃ、わたしが虎の娘だってこと、袁術に思い知って貰う事にしようかしら？」
「フッ……存分に思い知らせてやれば良い。この戦は、勝つ事は決まっている。大事なのは、どう勝つか、ということだけだ」
「冥琳がそういうなら、間違いないんでしょうね。ま、精々頑張りましょうか」
「御意。……伝令！全軍に前進し、攻撃を開始せよと伝えよ！押して押して押しまくってやるのだ！それが先代から続く孫家の戦ぶり

である事を思い出させてやるぞ！」

自分の隊へ戻りながら、祭がそう指示を出す。

「じゃ、冥琳。わたしもちょっとご挨拶に行ってくるわ」
「あぁ、気をつけてな。私は此処で全軍を指揮しておく」
「宜しくね、冥琳」
「任せておけ、雪蓮」

ホント、冥琳が居て助かるわ。

……袁術。今までお世話になったお礼を届けに行ってあげるから、待っていなさい。

～冥琳　Ｓｉｄｅ～

「戦況の報告を」

「は……はい。雪蓮様が率いる本隊は、祭様が率いる弓隊の効率的な援護射撃の元、既に敵の前線に躍り込んでおられます。穏様の隊は敵右翼を戦場の中側へ押し込むように半包囲陣を保ちながら締め上げ続けているようです。これによって雪蓮様率いる本隊と左翼によって敵軍の7割を包囲下に置いている状況です。

基本的に雪蓮様の隊が敵を叩く為に戦場を走り回っており、祭様の隊は孫策隊と共に行動しておりますが、弓で援護する、という姿勢を崩しておられません。それはそのまま有事の際の予備兵力としての役割を担うことを念頭においているものと思われます。

穏様の隊は、敵軍を包囲下から逃さない事に主眼をおいて戦闘行動を行っているようで、大きな戦果を挙げているわけではありませんが大きな被害もまた受けていない状況です。兵数の差から言って、穏様が思い通りの戦をしていると考えていて宜しいかと存じます。残り3割の敵については、現在冥琳様と私の隊で完全に対処出来ております。殲滅まで、後一刻もあれば十分かと」

「そうか」

亞莎は、よくやる。

戦況を説明しろ、と言った私に対し、期待以上の答えを返してくれた。

穏といい、亞莎といい、次代の孫家を担う人材が育ってきている。

その事を嬉しく思うと同時に、彼女達の師として、そして雪蓮の軍師として負ける事は出来ないという対抗心のようなものが湧き上がってくるのを自覚する。

「私も負けていられないな」

「は……？」

「フッ……いやいい、こちらの話だ。それにしても亞莎、よく見えるようになったな。特に祭殿についての洞察は、的を射たものだろう。良く見抜いたものだ」

「祭様は、本当の意味で百戦錬磨と呼ぶに値する武将だと思っております。弓隊で援護をすることを重視した行動は、現状ではさほど必要とされないと思います。ですので、敢えてそれを行っているのは、不測の事態が起こった際に疲労が少なく戦う事に飢えている状況にある隊が一つあった方が良いだろうという思惑あっての事と思ったのです」

「そうやってものが見えるようになってくると世界が変わってくる。この世に溢れる全ての事象を眺める目が変わってくるのだ。全ての事象には裏がある、などと気違いのような事を言うつもりはない。事象は事象さ。そのもの自体には裏はない。その事象を引き起こした人間の意図を読み取るか読み取らないかというだけの事だ。多くの人間がそれを読み取らない。だから裏だ等と戯けた事を言っているだけでな。お前は、どうやらそれをきちんと読む事が出来る人間だ。そしてそれこそが、軍師として必要とされる才能だ。……これからも精進して、孫家に尽くしてくれよ、亞莎。雪蓮の為に」

「は、はい」

周瑜隊と呂蒙隊が相手にしている兵を見る。

統率が執れず、烏合の衆以外の何物でもない状況だ。

それでも当初旺盛にあった戦意によって何とか戦線を維持してきたようだが、それも最早限界だろう。

「そろそろ終わらせてやるとしようか、亞莎。どうする？」

「あ、はい。中央部分に敵を集めて弓で射殺し、残った敵を長柄の槍隊で叩き続けようかと」

「それでいいだろう、やってみせろ」

「はいっ！」

これでこちらは片が付く。

片付けた後、雪蓮の元へ駆けつけても構わないが、我々が合流する事で却って混乱しては困る。
といって、このまま私と亞莎の隊を遊ばせておく訳にもいかないだろう。

「亞莎。お前は雪蓮の隊の後方を遠巻きにして付いて行き、効率よく敵軍を蹂躙出来るように助力しろ」
「冥琳様はどうなされるのですか？」
「私か？私は周瑜隊を率いて寿春へ入城するように動く。恐らく、敵軍の更なる動揺を誘う事が出来るだろう。そして、それで終いだ。雪蓮と祭殿が見逃すはずが無かろう」
「な、成る程。勉強になります」

寿春に入って、出来れば袁術を殺しておきたい。
それが終わったら、廬江郡や南陽郡、南郷郡などの各郡に将を派遣して確実に孫家の支配下としておきたい。特に、南陽郡と南郷郡。口数を考えれば、此処を得る事で雪蓮は更に力を手に入れる事が出来る。
それから、呉郡の豪族達には孫堅様から受けた恩を忘れて袁術に自分から頭を垂れてしっぽを振った腑抜け共がいる。これらについて、処断する必要があるだろう。
それから……。

やりたい事が次々と湧き出てくる。
取らぬ狸の皮算用とやらにならぬように、手を打っておかなければならない。

何はともあれ、寿春を取ってからだ。
全ては、それから始まるのだ。

「周瑜隊！寿春に向けて進発するぞ！」
「呂蒙隊は雪蓮様、祭様を後方から支援します！ついてきて下さい！」

眼前の敵を壊走させ、それぞれの役目を果たす為に進発する。
あと少しで、古い時代が終わる。
あと少しで、新しい時代が始まる。

雪蓮を戴いた、新しい孫呉の時代が。

～雪蓮　Ｓｉｄｅ～

「全軍、寿春に突入して袁術を捕らえなさい！生死は問わないけど、出来れば生きてわたしの目の前に連れてきなさい！それから、寿春の民達に危害を加えない事！この指示に従わなかったものは例外なく死罪！容赦はしないから良く覚えておきなさい！」

寿春郊外での戦いは、わたし達の圧勝に終わった。
そのままの勢いで寿春に突入し、袁術を捕らえようと寿春を駆け回っているけど、見つからない。戦場には、確かに『袁』の旗があった。そして寿春に逃げ込んでいったのだ。だから寿春に居ると思っているのだけれど。

「雪蓮、どうやら袁術は袁紹の元へ逃げ出してしまった後のようだ」
「……逃げ足が速いわね」
「どうやら、最初から戦場には居なかったらしい。何人もそう証言している」
「兵や家臣を捨てて逃げ出したって言うの？」
「そうだ。寿春郊外に展開した兵達は、全て捨て駒だったらしい。戦が始まる前に、袁術軍の中でも信頼の出来る２，０００程の兵と共に逃げ出したそうだ」
「自分たちが捨て駒だって分かっていて抵抗したってわけね」
「そのようだ。敵将は、誰だったのだ？雪蓮」
「紀霊よ」
「そうか。で、その紀霊は？」
「とっくに死んでるわよ」

自分が死ぬ事で、袁術を生かす事が出来る。
そう考えていたのでしょうね。
袁術がこれまで勢力としてやってこれたのは、そういった気骨のある人間を能力なりの地位に就かせていたからでしょう。ただ、その者達の忠言を聞き入れるだけの器量がなかった。だからこそ、袁術は敗亡する事になった。

他山の石としておかないとね。
あそこまでの馬鹿になるつもりはないけれど、心しておかなければ国は滅びる。折角取り戻した孫家の未来を、私の代で終わらせる訳

にはいかないもの。

「で、冥琳。これからどうするわけ？」

「先ず一気に南郷郡を攻略したい。その後、南陽郡と攻略していこう。それとは別に、呉郡から廬江郡、汝陰郡、汝南郡と攻略する隊も必要だ」

「全軍一緒に行動したら時間が掛かりすぎるものね」

「そうだ。祭殿、穏が呉郡で蓮華様と合流して汝陰郡まで平定し、私と雪蓮で南郷郡から汝南郡までを平定しよう。この一帯は明命と亞莎に任せておけば問題無い」

「南郷郡の先は、京兆府ね」

「……ひょっとすると、平家が出てくる可能性がある。南郷郡と南陽郡の口数は魅力的だろう」

「そう……でもきっと大丈夫よ」

「……また、勘か？」

「ええ。ま、気楽に行きましょう？冥琳」

根拠はないけれど、きっと大丈夫。

こういう時は、順調に行くって決まってるのよね。まぁ、勘でしかないから冥琳は心配なんでしょうけど。

平教経に逢える。そんな気がするのよね～。

あの時の事をきちんと謝った上で、少し話をしてみたい。

彼は、この世界をどう思っているのか。

この世界で、何を望んでいるのかを。

好ましいものでなかったその時は、孫呉の力を挙げて彼を討伐する必要がある。

きっとそんな事はないと思うけれど、ね。

蝶の如く～79～（前書き）

Ｆｉｓｈｅｒｍａｎ'ｓ　Ｈｏｒｉｚｏｎよりお送りします。

蝶の如く～79～

～風　Ｓｉｄｅ～

風達の予測通り、孫策さんが袁術さん討伐の為に挙兵し、一戦してこれを破りました。孫策さんは軍勢を二つに分け、東と西から袁術さんの旧領を併呑する為に動いているようです。京兆府と隣接している南郷郡を併呑する為に、孫策さん自身が兵を率いてやってきている。細作がその知らせを持って長安の街に駆け込んできました。その知らせを受けたお兄さんは、平家の将を全員集め軍議を開いています。

司会は、いつも通り稟ちゃん。風はその補佐です。

「今回の袁術殿と孫策殿の争いについては、予測通り孫策殿が勝利しました。その孫策殿が、隣接する南郷郡に侵攻しようとしているようです。これに対し、私達平家は如何なる方針を以てどのような対応をするのか。それがこの軍議の主題になります」

「稟、孫策は教経様を敵と見做して函谷関に攻め寄せるだろうか？」

「可能性は低いと思いますが、完全に否定出来るほどの情報はありません」

「主。それで保険として兵を集めておけ、と仰ったのですな」

「そいつはそうだろう。函谷関に兵を込めておかずに突破された場合、長安を一気に突かれることになる。民に余計な負担を強いる事になるし、対処法が状況に因らず変わらないのなら事前に対処しておいた方が良いに決まっているンだからねぇ」

お兄さんは、その辺りの判断がしっかりと出来る人なのです。

将来の不安について今考えても仕方がない。その時に考えれば良い。

そう判断すべき時と、今対処をしておくべき事だから即座に対処す

る、と判断すべき時。それを過たずに判断出来る。
こういう時に良く思いますが、お兄さんの傅育者は大人物であると思うのです。理想家にして現実家。対処を誤れば身を滅ぼしかねない、危険な二面性。それを見事に判断してのけるお兄さんは、分かっていた事ですが、名君と呼ぶに相応しい人です。

「じゃあご主人様。ご主人様は函谷関へ兵を籠めようと思ってるのか？」
「あぁ。転ばぬ先の杖だ。必要だろう」
「お屋形様。それで対応は決まったとして、孫策軍に対してどのような方針でこれに臨むのでしょうか」
「基本的には不戦、だな」
「基本的には、ですか」
「そりゃそうだ。相手が望んでいる事が俺たちと同じ事だった場合戦う必要はないだろう」
「同じ、とは」
「平凡な世の中を望む。それが奴らの望みなら、戦う必要性を見いだせない。勿論、奴らが俺の上に立ってそれを成し遂げたい、というのならそれは認めない。俺は俺の天下を描きたい。誰かの下に付くなんて真っ平だ。最低でも対等な関係。望みは俺に臣従してくれる事だ」
「対等な関係じゃ、満足出来ないってのかい？ご主人様は」
「孫策の為人が分からん。よくわからない奴を対等の友人として扱うなんてあり得ないンじゃないかね？それが分かるまでは、結論は出せないねぇ。
大体、俺は勢力として奴らを越える力を有しているという自負がある。無条件に対等になってやろうとは思わないし、対等であることを望むなら先ず俺と対等に付き合う事が出来るだけの器量と力を有している、ということを奴ら自身が証明してからだ。
……力なき理想は有害なンだ。理想を描くに足る力を有していると

いうことを証明しない限り、俺は奴らの理想など認めない。例えそれが寸分違わず俺と同じ夢であったとしても、だ。俺たちと同格の勢力としてその手に理想を勝ち取りたいなら、その資格がある事を示して貰おうじゃないかね。それが礼儀というモンだろう。俺と同じ夢を抱くのなら尚更に、ねぇ」

苛烈な考え方だとは思いますが、『覇者』とはこうあるべきなのです。

楚の荘王は当然ですが、斉の桓公でさえ諸侯に頭を垂れたりはしませんでした。盟主として、諸侯を従わせているのです。同じ理想を抱いているからといって諸侯を同格として扱った事は一度もありません。

従わなかったものを討伐し、その類い希な気宇と器量、そして武力によって諸侯を従わせたのが荘王で、従わないものを従わせる為に徳を積み、管仲や鮑叔の如き良臣の策謀によって遂にこれを従わせたのが桓公だ、という違いがあるだけに過ぎないのですから。

「アンタがどう考えているのかは分かったわ。具体的な話をした方が良いと思うんだけど」

「当然俺が兵を率いて行く。領内の政を滞らせる訳にはいかないから、月に留守を任せようと思う。当然、朔達には月を守って居て欲しい」

「頼まれるまでもない。が、ご主人様。私にしても恋にしても、政には全く向いていない人間だ。ねねに関して言えば、戦向きであって政に向いているとは思えない。私達だけで切り盛りするのは無理があろう」

朔さんを始めとする、月ちゃんに仕えている人達は、お兄さんの事を月ちゃんと同じようにご主人様と呼ぶ事に決めたのです。それが決まった時、愛紗ちゃんがその迸る愛情をお兄さんの顔面にぶつけ

ていました。ぶらっくじゃっく？先生が呆れたような顔で治療していましたが。

「そいつは分かっているさ。だから伴う軍師は一人にするし、将も三人だけ連れて行く」

「ならば私は何も言うまい。私達はお前の決定に従う月様に従うだけだ」

「教経殿。軍師は、誰を伴いますか？」

さて、お兄さんは誰を連れて行くのでしょうか。

「ん～……詠、頼めるか」

「いいけど、何でボクを選んだのか、その理由を教えなさいよね」

「孫家の内情を一番よく知っているのはお前さんだろう？だから、お前さんを連れて行く」

「……一緒に居たいから、くらい言いなさいよ……」

「何か言ったか？詠？」

「別に何も言ってないわよ！」

「何怒ってやがるよ……」

お兄さん、そろそろ女心というものをきちんと理解しておくべきなのですよ。その内に刺されますよ？稟ちゃんか愛紗ちゃんか詠ちゃんに。それから、詠ちゃん。この場でそんな事を言われたら風も稟ちゃんも収まりが付きませんし、何より将の三人を選ぶ際に間違いなく修羅場になってしまうのですよ。

「ではお屋形様。将からは誰をお連れになるのでしょうか」

「残る軍師との相性を考えて、星は稟と、愛紗は風と組んで貰わないと困る。だから、それ以外だな」

「経ちゃん、ウチは連れてってくれるんやろ？」

「お屋形様、私を連れて行って下さらないと困ります」
「あ、あたしだってご主人様に付いて行きたい！」
「……仕方がないから私が残ってやるよ、ご主人様」

翠ちゃんが自分から『付いて行きたい』と言った事に驚きを禁じ得ません。……どうやら、釣り上げられたようなのです。お兄さんはどんな女でも釣り上げる、稀代の太公望なのです。
碧さんは、風の方を見てニヤニヤしています。じゃぶろー襲撃まであと僅か。そういう事なのでしょう。

「じゃぁ、これで決まりだな。軍師は詠。将として、霞、琴、翠。率いて行く兵は３０，０００で良いだろう。残りは長安で待機させておく事にしよう」
「あの、ご主人様……長安に２０，０００もの兵が必要でしょうか……？」
「月。いつの時代にも空き巣泥棒ってのは居るモンだ。狙ってくる奴が居るかも知れないだろう？もし居たら丁度良い機会だから教えてやるのさ。俺を向こうに回して非道を行えば、只では済まないってことをねぇ。その為の２０，０００だ」
「……ご主人様が、正しい」
「恋殿が正しいのですぞ」
「……分かりました。何が起きても長安が動揺しないように、努めます」
「あぁ、頼むよ、月」

そう言ってお兄さんが月ちゃんの頭を撫でます。

「……へぅ……ご主人様、恥ずかしいです……」
「ん？あぁ、済まんな」
「では、教経殿が仰る通りに致しましょう」

「あぁ。皆、宜しく頼むぜ？」
「御意」

皆で答えると、お兄さんはむず痒そうな顔をします。
いい加減慣れて貰いたいものです。
いずれ、全ての人間がそう言うようになるのですから。

～翠　Ｓｉｄｅ～

ご主人様に従って、函谷関にやってきた。司隷州と接している函谷関も立派なものだったけど、荊州と接している函谷関もまた立派なものだ。これを抜くことは難しいだろう。しかも、これを守って居るのはご主人様自身だ。余程の事がない限り、負ける事は考えられない。

孫策軍はまだ南郷郡には到着していないようで、ご主人様は昼寝でもさせて貰うか、と言ってのんびりと過ごしているようだ。相変わらず剛胆な人だと思うけど、そのご主人様の様子を見て兵達は皆緊張する事もなく過ごせていると思う。

詠は細作を放ってしきりに孫策軍の動向を窺わせ、入手した情報を元に戦になった場合の策を考えているようだ。霞と琴は手勢の装備を点検し、関外で演習を繰り返している。あたしは、と言えば、出発前にお母様から言われた事が気になってそれどころじゃない。

『翠。あの手の男にはね、『ご主人様、翠を抱いて下さい』、と直截的な表現で迫るのが一番だよ』

ご主人様と添い寝をして、その、寝ぼけて口づけをしてしまった後、結局あたしはご主人様の事が好きで、他に情人が居ようとその気持ちに変わりがないだろうって思える様になった。それは誰にも言っていないのに、何故かお母様には全部分かるようで。そう言ってあたしをけしかけてきた。

……機会は、今しかないと思う。長安にいる限り、ご主人様は毎日誰かと一緒に居るから想いを伝えるも何もあったものじゃない。今日は詠も忙しいようで、ご主人様は自分に割り当てられた部屋に居るだろう。

行くしか、無いと思う。あたしは待ってるのは性に合わない。『欲しいものは自分で奪いな。それが馬家の女ってもんさね』。そうお母様も言っていた。だから、今日、夜になったらご主人様を訪ねてみよう。

夜。意を決して、ご主人様を部屋に訪ねた。扉を叩いて、声を掛けてみる。

「ご主人様、いるか……？」
「……」
「入るからな？」

扉を開けて部屋に入る。
ご主人様は、席を外しているみたいだ。
うぅ……こういう時、どうしたら良いんだよ、お母様。

『困った事があったら、これを見な』
そう言ってお母様は書状を私に持たせてくれた。早速これを見る事になるなんて思わなかったけど。取り敢えず、何が書いてあるのかを見てみよう。
え～、何々？

『日中、ご主人様の部屋に忍び込んで夜まで寝台に裸で寝てな、馬鹿。これ位自分で思いつけってんだ』

……ははは裸で寝てるなんて出来る訳無いだろ！
他！他の書状を見てみれば良いんだ！
そう思って他の書状を見てみる。

『まだ決心が付かないのかい、この馬鹿娘。とっとと裸になって寝台で寝てな！』

『いい加減に覚悟しなよ、この馬鹿娘。ご主人様が帰ってきて、寝台に寝転んだらそこに裸のお前が居る。その上であの台詞だ、耐えられる訳がないだろう』

『なにこの書状まで見てるんだい！とっととおし！４０秒で支度しな！』

『これが最期の書状だ。はっきり言ってやる！アンタ、涼州魂持ってないのかい！？涼州の女が一度決めた事だ、曲げる事は決してないんだよ！』

４０秒ってのがなんなのか、あたしには分からないよ、お母様。けど、涼州魂、か。

……そうだよな、涼州の女が一度決めた事なんだ。これを貫き通さなきゃ涼州魂が廃る！

あたしも女だ、腹を決めた！

服を脱いで、ご主人様の寝台でご主人様を待つ！

それで、あの台詞を言ってやるんだ！此処まで来たらやるしかないんだ！

～教経　Ｓｉｄｅ～

今日一日、函谷関の天辺でずっと昼寝をしていた。
もう暖かい季節とは言え、流石に夜までぐっすり寝るとは思わなかった。
途中で誰かが俺の様子を見に来ていたようだが余り覚えていない。

「やれやれだ。誰か起こしてくれても良いだろうが」

まぁ、まさか天辺で寝てるなんて思っても見なかったのかも知れないが。
もう今日は寝た方が良いだろう。明日にも孫策軍が来た、という連絡があるかも知れない訳だしな。
そう思って寝台に向かい、布団の中に入り込む。

……暖かいな。んで、良い臭いもする。
現実逃避気味なのは、布団に入り込んだ俺に抱きついてくる人間が居たからだ。感触からすると、全裸で。ぴょこぴょこと揺れ動くポニーテール。サイドテールじゃないから、琴じゃない。そうなると、翠しかいない。

「……翠。お前さん、どうしたんだ？」

そう声を掛ける。

「……ご主人様、その、あたし……あたしを、抱いて欲しいんだ……」

頬を真っ赤に染めながら、翠がそう言ってきた。

『抱いて欲しい』。
その直截的な表現に、面食らってしまう。
俺の事を本当に好きなのか、とか、そんな無粋な事を聞くつもりはない。前に口づけされた時から、きっちり勘づいてはいたから。けどな、その、唐突すぎないかね。口づけもそうだったが。
何と声を掛けたものか悩んでいると、翠が話し始めた。

「……その、ご主人様には情人が沢山居るのは分かってるんだ。あたしみたいに可愛く無い奴に、こんなこと言われても迷惑かも知れない。けど、あたしは、それでもご主人様の事が好きなんだ。
初対面の時、あたしの事を考えてお母様に説教してくれて嬉しかった。
反董卓連合と戦う前、兵達に語りかけるご主人様は本当に凛々しかった。
お母様を犯そうとしていた奴らを殺した時、嘯いていたご主人様を見て切なかった。
口づけした時、凄く、もの凄く嬉しかった。
あたしは、ご主人様の事が好き。一晩だけでも、一度だけでも構わないんだ。
ご主人様。あたし……あたしを、その、抱いて欲しいんだ」

可愛くない奴、か。
馬鹿だな翠。お前さんは可愛いのに。
何も俺に惚れる事なんて無かろうに。
そんな風に思い詰めて、俺に言い寄って来るなんて。

……駄目だな、これ。こんな可愛い娘に、こんなストレートに言い寄られたら、愛しくなっちまう。しかも、裸で待ってるなんて。我慢出来なくなるだろうが。

「……翠、一つ言っておいてやるよ。お前さんは可愛い」
「う、嘘だ！」
「嘘な訳ないだろうが。そうでなきゃ、こんなになってないだろ？」
「こんなに……？って！？★■※@▼∀っ！？」
「分かったか？翠。お前さんは魅力的な女の子なんだよ。他の奴にとってそうでなくても、俺にとってはそうなんだ。それは、分かるだろ？」
「……う、うん」
「……抱く前に、言っておくからな、翠」
「……な、何を？」
「俺もな、お前さんの事、愛しいと思うよ。
今、お前さんが言い寄ってきたからかも知れないけど。それでも、こう思っちまった以上、もう変わらないと思う。だから、お前さんを抱く。
お前さんが抱いてくれって言ってきたからじゃない。俺が抱きたいから、翠を抱く。
……わかったか？翠」
「……うん。分かったよ、ご主人様……」

後でどうなるか、分からない。
けど、翠を抱くのに、他の事を考えるなんて事はしたくない。

「ご主人様、その、あたし」
「翠、顔こっち向けろ」
「え……んっ……」

翠に口づけをする。俺から。

「はぁ……嬉しい……ご主人様……」

「……翠、こっち来い」
「……うん」
そっと答えて、翠は俺に抱きついてきた。
結果から言うと、翠は素晴らしく可愛かった。
髪を下ろした翠は、美少女以外の何物でもなかった。
俺の腕の中で、何度も身悶えしていた翠は、本当に可愛らしかった。
そう言うと、いつも通り暴れ始めたけど、抱きしめたら恥ずかしそうに、でも嬉しそうにして、抱きついてきた。駄目だな、嵌りそうだ。
翠と一緒に寝台で寝転がりながら、自分の気の多さに少し呆れ、翠の気持ちを嬉しく思い、これからの事を考えてちょっと頭を抱えて。
そうやって、朝を迎えた。翠と抱き合って。

蝶の如く～８０～（前書き）

意外に早く帰って来られたので、更新しますよと。

蝶の如く～８０～

～琴　Ｓｉｄｅ～

函谷関に到着した私達は、孫策軍が函谷関突破を目論んだ時後れを取らぬように準備に明け暮れていた。翠は、ぼんやりとしていたり急に頭を振ったりして少し様子がおかしかったけど。

反董卓連合の時にも思ったが、お屋形様は剛胆な人だ。やたら『眠い』と繰り返して、終いには何処かに行ってしまった。恐らく、だが、函谷関の一番高い場所で寝ているのではないか。？水関防衛時、お屋形様は寝ていたわけで。仕方のない人だと思うが、それで良いのだろうとも思う。兵達が、そんなお屋形様を見て、今回も大丈夫だ等と言っているのを聞いた。意図して、ああしているのだと思う。

霞との合同訓練を終え、少し時間に余裕が出来たのでお屋形様を捜して函谷関の一番高い場所へ向かった。ちょっと、話がしたかったから。牙突をものにしてからは、お屋形様と話をする機会がそうなかったから。

関の上に出て、お屋形様を捜す。

……いた。一番上。お姿を確認出来ないが、足が見えている。あんなところで眠りこけて、落ちてしまったらどうするつもりなのだろうか。

兎に角、お屋形様の元へ移動した。

近寄っても全く気が付かないようだ。良く眠っている。しかし床が堅く、寝苦しいのか寝返りを打ったりしきりに頭を持ち上げて後頭部を掻いたり腕の上に頭を置き直したりしている。

……可愛い。

お屋形様の寝顔も、その仕草も、普段のお屋形様とは違って可愛らしい。愛嬌があるというか、なんというか。そんなものがあるかどうか分からないけど、母性をくすぐられるというか。

少し顔をしかめているのは、寝苦しさ故のものだろう。

お屋形様が心地よく眠れるように、膝枕をして差し上げる。無意識だからだろうが、私の太股に頬を擦りつけるような仕草をした後、そのままぴくりとも動かずに寝始めた。少し恥ずかしいが、周りには誰もいないのだし、気にする事もないだろう。

お屋形様を膝枕して、その髪の毛を撫で梳きながら、幸福感に包まれている自分を見出している。

……やっぱり私はお屋形様をお慕い申し上げているのだ。

お屋形様に手取り足取り牙突を教えて頂いた時の事を思い出す。

私は、ドギマギしていたのだ。お屋形様の息が私の耳に掛かったり、私の足や太股、二の腕を力強く掴んだり。たったそれだけの事で、私は緊張して身を固くしてしまった。お屋形様は、私の事を弟子か手の掛かる妹弟子くらいにしか思っていらっしゃらないかもしれない。そうでないと、あんなに大っぴらに私の体を触ったりしないだろう。それならそれで構わない。そう思っていた。

けど……駄目みたい。弟子や妹弟子では、満足出来そうにない。

「お屋形様、お屋形様は、私の事をどう思っていらっしゃるのでしょうか……私の事を、男として、女と意識して下さっているのでしょうか」

お屋形様は、眠っていて答えて下さらない。

少し意地悪がしたくなって膝を揺すってみると、お屋形様はうっす

らと目を開けてこちらをじっと見つめてきた。

……寝惚けていらっしゃるのですね、お屋形様。

「お屋形様？私は、お屋形様の事を、一人の男性としてお慕い申し上げております」

「……ん……？」

「お屋形様は私の事を、女として好ましく思って下さっていらっしゃいますか？」

そう問いかけると、お屋形様は微笑んで頷いて下さった。

「……本当に、そうですか？」

「……ん……」

まだ寝惚けていらっしゃる様だが、何度か頷いている。

……本当にそうであれば。その、口づけするくらいは許して頂けるだろう。

お屋形様の周りには多くの女性が居るが、私はそれでも一向に構わない。

お屋形様と男女の仲の事として共に歩む事が出来るなら、お屋形様がお屋形様である限り、何があろうとも問題にはならないから。星達5人だけで、お屋形様の寵を受けるなんて、ずるい。私だって、お屋形様をお慕い申し上げているのだ。そこに、私も入り込みたい。

「んっ……」

「……んぅ……」

お屋形様に、口づけをする。それで離れようとしたが、お屋形様に舌を吸われていて……

「……ちゅ……はぁ」

口づけするだけしておいて、お屋形様がまた寝始める。

……手慣れているのですね、お屋形様は……私は、今日は眠れそうにありません……

「お屋形様、お目覚めになってもきっと覚えていらっしゃらないと思いますが……」

お覚悟を、して頂きますから。

この思いはきっと成就させて見せます。

太史子義の、私の女の意地に掛けて。

お屋形様を抱きしめてもう一度口づけをしながら、そう決意したのだった。

～詠　Ｓｉｄｅ～

孫策が軍を率いて南郷郡を平定して廻っている。
流石に南陽郡と並んで袁術がずっと支配してきた地域だけあって、恩を返そうと抵抗するだけの気骨ある臣下が多くいるようね。まぁ、易々と平定させないようにボクがそう仕向けたんだけど。

アイツが示した方針は『不戦』だった。ボクはまさかそう言うとは思っていなかったから、孫策軍を叩けるように南郷郡の豪族達に書状を送ってたのよね。
平家に臣従するならばその身上は保証してやろう。ただ、旧主に対する義理も尽くせぬような人間は平家には必要ない。先ず、義理を尽くして見せろ。そういう書状を。

その結果として、各地で孫策軍に対する抵抗運動が繰り広げられている。当然、義理を尽くして戦い敗れ、逃れてきた者達は平家に受け入れる。それが、信義を明らかにするという事だと思うから。
……孫策にはちょっと悪い事しちゃったかな。でも、まだ味方じゃない人間に手加減するなんてあり得ない。ボクは月の件で理解したのよ。油断は大敵だ、想定しうる最悪の状況は常に頭に思い描いておくべきだ、とね。だから、出来る事は全てさせて貰う。敵対する可能性が少しでもあるなら、それに対してその力を削ぐための策謀は行う。
ボクは月を天下人にする事は出来なかった。けど……コイツなら。コイツなら間違いなく天下を獲れると思う。コイツとコイツの理想の為に、そしてなによりボク自身の夢の為に、コイツに仕えることに決めたのだから。

「孫策達が南郷郡の平定を始めたわ」
「へぇ。ご苦労なこって」
「余裕綽々じゃない。南郷郡や南陽郡を取られて悔しい、とか思わない訳？」
「思わないねぇ。孫策が何処を本拠とするつもりなのかは知らないが、奴さんが押さえようとしている領地は横に広すぎる。領有する殆ど全ての郡が他勢力と接しているわけだ。兵を満遍なく配置すれば、その分兵力が薄くなる。領土を分断されて各個撃破されるのが落ちだ。と言って数カ所に集中させれば、やはり兵が薄い箇所から侵攻され、領土が分断される。それを毎度毎度取り返すために遠征を繰り返し、結果国力を著しく低下させる事になるだろう。
要するに、奴さん達は無理をしてるってことさ。大きく飛躍するために必要な事なんだろうが、少し欲張りすぎだな。孫策達が将来それを保持する事が叶うだけの器量を有しているとしても、それは飽くまで将来の事だ。今この現時点で獲得した領地を保持するだけの力がない。
うちを考えてみろ。結局核となるのは俺が居る長安なンだ。俺の目と手が届く範囲にしか敵が攻めてこないから、治世が安定しているわけだ。孫策が呉郡にいれば、南陽郡周辺は遠すぎる。逆に南陽郡に本拠を置けば、呉郡は遠すぎる。奔命に疲れさせられる事は間違いない。踊り疲れて衰弱死しなきゃいいがねぇ。
まぁ、そういう訳で放っておけばいいのさ。俺が手に入れる事が出来る時機が来れば、自然とそういう形に落ち着くだろう」
……相変わらずね。コイツの見識の高さと見通しの確かさには驚かされる。
コイツの言う通りだと思う。孫策達は無理をしている。膨張を続ける袋は、裂けるしかない。でも、だから放っておけばいい、という判断を下せる人間は中々居ないと思う。手を伸ばせば、届くところ

に玉が落ちているのだから。手に入れたくなるのが人の性というものだ。

「孫策達が敗亡への道をひた走るのは良いけど、同じ事を考えている人間が居て横からかっさらおうとするかも知れないわよ？」

「同じ事を考えるのは、華琳ぐらいのモンだろう。袁紹のところに諸葛亮がいるが、俺が知る通りの諸葛亮なら、アレは冒険が出来ない質だ。少しずつ、じわりじわりと領土を広げようとする。それでは一進一退にしかならないし、時間が掛かりすぎるということに気付かないままにねぇ。それが奴さんの限界だ」

「……ねぇ。それ、誰の真名よ」

「ん？……あぁ、曹操だ」

いつの間に真名を預けられてんのよ、この女誑しは！

「アンタ、まさかとは思うけど曹操まで……」

「……あ～、何考えてるかはよく分かるけど、そんな事はないから。アイツ、同性愛好者なんだろ？お前さんが調べて報告したんじゃないかね」

「まあそうだけど」

油断も隙もあったものじゃない。

全く。直ぐに女を誑し込むんだから。

「兎に角、例え華琳が横から掠っていったとしても問題無い。アレはいずれ袁紹とぶつかり合うだろうからな。その時に利子を付けて返して貰えば良いんだからねぇ」

「袁紹と対峙中に後背である南郷郡と南陽郡に攻め込んで、嫌がらせをする、ということ？」

「表現が露骨に過ぎるな。最善を尽くす努力を惜しまない、とでも

言っておこうか」
「……何にせよ今回は様子見をする、ということね？」
「あぁ。だが勿論、函谷関にまで攻め寄せてくれれば話は別だぜ？これを撃退し、奴らの撤退に乗じて一気に南郷郡と南陽郡を頂戴するつもりなンだよねぇ。まぁ、そんなに先が見えていない事もないだろうさ。
だから俺と一緒にのんびりしていればいいンだよ、詠。少なくとも、夜くらいはねぇ」

そう言ってボクを抱き寄せる。

「さ、盛ってるんじゃないわよ！」
「と、言いつつも目を潤ませて何かを期待している詠なのでした、と」
「何を……んむ……」

顔を両手で挟まれて、口づけをされる。
最近、ずっと軍師連中三人で一緒にそういうことになっていたから、こうやってコイツを独占出来る事なんてしばらく無かった気がする。
二人きりなのも、久し振りな気がして。
……口づけが、口吸いに変わる。
場の雰囲気に流されてる気がするけど、こうやって口を吸ってくれるのは嬉しい。

「……ご満足頂けましたかね？ツンデレラ」
「……もの凄くむかつくこと言われてる気がするけど、この際それは置いておくわ。……もっと、しっかり抱きしめなさいよ」
「素直な方が可愛いぜ？」
「……う、うるさい。良いから抱きしめなさいよ」
「素直な詠が見たいなぁ？素直な詠のお願いなら、何でも聞くのに

な？」
「……抱きしめて欲しいから、ボクを抱きしめてよ」
「分かった……素直になったら破壊力抜群だな、このボクっ娘は。今一瞬イきかけたぞこの野郎……」

何かぶつぶつ言ってるけど、ボクをしっかりと抱きしめてくれた。やっぱり、こうやって体を抱かれている時が一番安心出来て、一番幸せだ。

ボクの夢のために、コイツには天下を獲って貰う。
コイツとボクと、その、子供と一緒に、平和に暮らしたい。
のんびりダラダラ過ごすコイツを見て、呆れながら文句を言いつつも幸福な、コイツが言う所の『平凡な』毎日を過ごしていたい。

その夢を実現させるために。
ボクはボクの出来る事をするのよ。

～雪蓮　Ｓｉｄｅ～

冥琳と二人で南郷郡の平定を進めている。
袁術が早くから治めていた地域だけにそれなりに抵抗があるとは思ってたけど、これ程抵抗されるとは思っていなかった。だが、それもこれで最期だ。南郷郡の有力者数人が合流し徹底抗戦の構えを見せていたが、先程の会戦でその兵を打ち破った。彼らは函谷関を目指して敗走しているみたいね。

「雪蓮、どうする？奴らを逃がせば禍根を残す事になるが、軍勢を率いて函谷関へ押し寄せれば、平家が出張ってくる事は間違いないだろう。報告に拠れば、平家軍は３０，０００。平教経自身がその帥将を務めている、精鋭中の精鋭とのことだ。配下に、張遼、馬超、太史慈。軍師は賈駆だそうだ」
「ん～、ま、このまま追撃しましょう。いきなり軍勢のぶつかり合いにはならないと思うしね。出てきたら、話をしてみたいのよ。今後の事も含めてね。
それより、平家の軍師が賈駆とはね。董卓のところの軍師だったんじゃなかった？彼女」
「そうだ。董卓は正式に平教経に臣従する事にしたらしいな。その際、張遼と賈駆が董卓軍から平家へ仕える事になったそうだ」
「董卓軍？董卓軍なんて、まだ存在してる訳？」
「それがどうやらしているらしい。無論董卓は平教経に完全に臣従する。だが、董卓に従うことを望む人間の居場所を用意してやるために、態々董卓軍という組織を残しているらしい。
調べたところでは華雄を近衛の長とし、呂布が兵を纏め、軍師を陳宮としている。その上に、董卓が立つ、という形のようだ。規模は

小さく１０，０００にも満たないが、華雄と呂布そして陳宮が完全に掌握出来る兵数に絞り込み、これを徹底的に鍛え上げる事で非常に精強な軍兵となっている。あと、平家とは独立した意志の下で行動することが認められているらしい。その行動について、掣肘するつもりがない、と平教経は周囲のものに言っていたようだ。完全に董卓の意志で自由に動かす事が出来る軍勢らしい」

「裏切られたらどうするつもりなのかしら」

「周囲のものが当然そう諫言したようだが、問題にしなかったらしい」

「どうせ冥琳の事だから、きちんと調べてるんでしょ？その理由まで」

「ふむ……信じた人間に裏切られて死ぬならそれは彼の器量の問題なのだそうだ」

「はぁ？」

「信じた人間に裏切られて死ぬ程度の人間で、この天下を統一など出来るはずがないだろう、とさ。

それと、平家の郎党というのは、彼にとっては家族も同然なのだそうだ。どうせ統一出来ない程度の器しかないのなら、家族を疑って疑って疑い続けて長生きするより、信じて裏切られて死んだ方が遙かにマシな生き様だろう、と。まあ、易々と殺されてやるつもりもないらしいがな」

「……従うものは皆家族、か。私達孫呉の価値観に良く似ているわね」

「私もそう思う。反董卓連合の際、お前が言っていたように共存出来るかもしれないな」

本当に、そう願うわよ。

「ところで冥琳。南郷郡、南陽郡を領有するのは良いけど、保持出来るの？」

「フッ……出来るだろう、と私は思っているがな。
雪蓮、私達の強みは、お前の他にもう一人頭を張れる人間が居る、というところにある。つまり、蓮華様だ。蓮華様が揚州を受け持ち、お前がこの辺り一帯を押さえる。汝南郡などを奪われて分断されたとしても、もし平家と連携出来れば意に介する必要はない。地力を付けてから、ゆっくり取り戻せばいいのだからな。平家と連携出来なかった場合、敵がその平家になるだろうから厳しいと思うが。
幸いにして軍師も育ってきているし、二面作戦出来るだけの将と軍師は揃っている、と私は思っている。分断された状態でも、孫家の方針というものは変わらないのだからどちらが動いてもその意図を読み取る事はたやすいはずだ。なにより、姉妹なのだからな。裏切りもなにも二人とも孫家なのだからこれ程安心して領地を任せられる人間は居ないだろう。だから一時期領地を分断される事になっても何も心配する事はないと思っている」
「さっすが冥琳ね。ま、そんな面倒くさい事を考えるのは全部冥琳に任せるわ」
「はぁ……まあ、任されよう。が、平家との連携についてはお前に任せるからな。例え気に入らなくても、地力を付けるまでは我慢して貰う必要がある。分かっているな？雪蓮」
「分かってる。そっちは任せて貰うわ。じゃ、追撃しましょうか、冥琳」
「分かった。……伝令。全軍に伝達。敗走する敵を追うぞ！」

平教経。間違いなく、逢える。わたしの勘がそう告げている。
そこで貴方の真意を確認させて貰うわ。
願わくば、私が気に入る人間であった欲しいものね。

蝶の如く～８１～

～教経　Ｓｉｄｅ～

孫策軍が函谷関まであと１０里の地点まで迫っている。詠から、そう報告を受けた。
函谷関にまで寄せてくる事はない。そう思っていたが、どうやら俺の見込み違いだったらしい。
欲を掻いて、長安でも陥落させに来たのかね？
それとも、飽くまで董卓とこの俺は不倶戴天の敵であるとでも言うのかね？
まぁどちらでも構わない。自分たちの行動に相応しい報いを受けて貰うだけのことだからねぇ。

「ご主人様、どうするんだ？」
「どうするもこうするもない。先ず関外で一当てして退く。後は、？水関や虎牢関での甘酸っぱい思い出でも思い出させてやればいい。孫策が撤退する時全兵力を以てこれを追撃し、一気に南郷郡と南陽郡を貰うとしようか。誰にちょっかいを掛けたのか、思い知って貰う必要があるからねぇ」
「ま、経ちゃんがそう言うならそうなるんやろ。騎馬が１５，０００もおる時点で、関に篭もりっぱなしで終わるつもりがない事ぐらいは分かっとったしな」
「そういうことだ。引っ掻き回してやれ、夢に見るほどにな」
「分かっとる。経ちゃんに仕えることになってから初めての戦や。ウチの実力をしっかり認めて貰わんとな」
「何言ってやがる。霞、お前さんの実力は、しっかり認めてるつも

りだぜ？お前さんは騎兵を指揮させれば、この国で一、二を争う将だと思ってるンだからねぇ」

「……そ、そか。ほなら、その評価が間違っとらんことを証明して見せたるわ」

嬉しそうにしてるねぇ。格好は痴女だが、意外に純情だな、霞。まぁ、純愛物語読むくらいだもんなぁ。

「あぁ、期待してる」

「将の配置は、如何なさいますか？お屋形様」

「霞が右翼で７，５００。翠は左翼で７，５００。俺と琴で中央の１５，０００を受け持つ。詠も中央だ。

陣形は鶴翼。包囲殲滅するように見せて叩いてやる。

先ず中央が突出して敵に当たる。その後に退いて引き摺り込もうとしているそぶりを見せつつ、右翼と左翼から騎馬隊を突入させる。

但し、二度に分けてな。一度目は５，０００。二度目が２，５００。

一度目は止められるだろうが、止められた時機に中央を反転させて敵陣に一気に圧力を掛ける。敵の主力が前面に集中した時に、第二陣として２，５００の騎兵を突入させる。恐らく、兵数からして耐えられないだろう。

これで叩いたら、函谷関にとって返す。付いてくれば予定通り関で抗戦し、付いてこず撤退するならそのまま追撃戦だ。これで勝てるだろうさ」

「……戦場での采配に関しては、アンタには軍師は要らないわ」

「阿呆め。俺が見落としている事や思いつかない事、俺の策を相手がどのように見るのか等を提示してくれる人間が必要だろうが。

どんなに完全に見える人間でも、人間である以上完璧では居られない。璧でさえ珍しいから秦の昭襄王はそれを欲したンだ。人においては、絶対に存在しない。俺はそう思ってる。そもそも、死ぬだろうが。完璧な存在ってのは、死すら超越した存在だ。あり得ないん

だよ。
だからそんな事を言わずに、俺に意見してくれよ？詠」
「分かってるわよ。どちらにしても今回はボクの意見が必要だと思えないけどね。アンタの策で間違いないと思うから」

詠がそう言うなら、問題無いだろう。
某魔術師と常識家のオッサンの関係か？俺と軍師様達の関係は。
……まぁ、某魔術師を名乗るには少々性格が悪い気がするがね、俺の方が。奇跡も起こせそうにないしねぇ。『ミラクル・経』とか『経・ザ・マジシャン』とか言いにくい事この上ない。特に後者。プロレスラーとしか思えないンだねぇ。

「ま、気負わず適当にやろうかね」
「御意」

……いつまで経っても慣れそうにないねぇ。
言われる度にあの音楽が流れ始めるから吹きそうになるんだよねぇ……

～冥琳　Ｓｉｄｅ～

函谷関まであと5里の地点まで来たところで、前方の平家軍が現れた。
我々を確認すると左右に大きく軍を展開した。鶴翼の構えだ。
その軍の展開速度と展開の仕方は、見事としか言いようがない。
現状率いている孫呉の兵では勝つ事は覚束ない。

「雪蓮、出てきたぞ。平教経だ」

敵中央に林立する平家の赤旗を従える、『揚羽蝶』の旗。
平教経。此処でも、先陣を切ろうというのか。

「じゃ、冥琳。話し合いに行きましょうか」
「まあ待て。こちらが話し合いをしたい旨、伝令を向かわせる。可能性は低いがいきなり襲いかかってくる事も考えられるからな」
「そんな事しないと思うけど。ま、冥琳に任せるわよ」

話し合いをしたい。
そう、伝令に書状をもたせて向かわせる。
さて、応じてくるだろうか。

話し合いに応じよう。平教経からそう返答があった。
いきなりぶつかり合いにならなくて良かった。見れば見るほど、あの軍勢は危険だと思えてくる。何の気負いも怯えもなく、唯々そこにいる。孫家の兵の気勢に反応もせず、静かにこちらを見つめている。アレは異常だ。反董卓連合の際、あの軍兵が見せた戦いぶりは驚嘆に値するものだった。ぶつかれば、南陽郡攻略どころかこの場で全滅してもおかしくないのだから。

互いの軍勢から離れ、中間地点で話をしよう。
主君と軍師。それぞれ二人ずつで。
その提案を受け入れる事を返答し、雪蓮と共に会談の地へ向かった。

「ようこそ、京兆府へ。早速だが、何を望んで剣を持って訪いを入れてきたのかね？」

平教経がそう問いかけてくる。
いつか見た時と同じ、浅葱色にダンダラ模様の羽織を着ている。
……こだわりでもあるのだろうか？

「南郷郡の豪族達を追って此処まで来たんだけど、それは口実でしかないのよね。本当は、貴方に会いに来たのよ、平教経」
「態々訪ねてきてくれた事には礼を言うがね、俺とお前さんは戦場で殺し合った仲で、親しく訪いを入れるような仲では無かったと記憶しているんだが？」
「殺し合う事ほどお互いを理解するのに手っ取り早い手段はないと思うんだけど？」

「ま、賛同しておいてやるさ。その点についてはな。で、何の用だね、孫策」

「……先ず、先日の事を詫びさせて頂戴。ごめんなさい、平教経。わたしは一騎打ちだと思っていたし、貴方もそう思っていたと思うけど、そう宣言せずに戦ってしまった。そのせいで、私の配下が貴方に弓を射掛けてしまった。水を差すような真似をさせたのは、偏にわたしのせいだわ。ごめんなさい」

「……そういえばそんな事もあったかね？俺はあの程度じゃ殺せないし、別に気にする事はない。一騎打ちだと思っていたのは否定しないが、宣言していなかった事には気付いていたからな。自分の主君が命を落とすという局面で、ああも迅速に動けたお前さんの配下を褒める事はあっても非難しようとは思わんさ」

「そう言って貰えると有り難いわ」

「で、先ずは、と言ったンだ。他にもあるンだろう？」

「ええ。平、貴方が天下統一を目指している事は知っているわ。率直に聞くけれど、貴方はどんな天下を目指しているのかしら」

「そんな事に興味があるのかね？それを聞いてどうするつもりかね」

「……貴方次第では、わたし達孫家は貴方に従っても良いわ」

「……周瑜、お前さん、それを肯んじるのか？」

「軍師というものは主君の意を汲んで策を立てるものだ。従いたくもない主君の下に長々と居るほど私は気が長くないつもりだ」

「ふむ」

「平、答えてくれるかしら？貴方は、この天下で何を望み、何を為そうというのかしら」

平教経は雪蓮の問いかけに少し考えてから話し始めた。

「俺が望むのは、誰もが『平凡な人生』を送る事が出来る世の中だ。越えられぬ苦しみが存在しない、ありふれた人生を皆が送る事が出来る世の中。それを現出するために天下を統一したい。それが俺の

望みであり、為すべき事だと思ってるンだ」
「それをもたらす為に、多くの人間を殺してでも？」
「あぁ、そうだ。……まさかとは思うが、孫策。お前さん、誰も傷つかずに皆が幸福になれる世界があるとでも思っているのかね？」
「……もしそうだったら？」
「ハッ。誰も傷つかない世界だと？おかしな事を言うもんだねぇ。誰も傷つかずに幸福を保つ世界などない。『人間』とはな、犠牲がなくては生を謳歌できぬ獣の名だ。それが些末なものであろうと、必ず犠牲というものは存在する。その犠牲の上に幸福が成り立っている事を認識すべきだな。平等という奇麗事は、人の闇を直視できぬ弱者の戯言にすぎない。孫策、お前さんがいうその世界は、まやかしだ。『誰も傷つかずに幸福になれる』など、人間の醜悪さを覆い隠す為の綺羅布にすぎん。どんなに綺麗な布で覆い隠そうとも、その裏側にある醜悪で鼻が曲がりそうな汚らしさは消えて無くなるモノではない。
俺はそんなものは認めない。醜悪な現実を直視する覚悟無き者に時代を統べる資格はない。この世界が、人間という存在がそのように糞に塗れた汚れたものである事を知って猶、人を愛し共に糞に塗れながらも出来るだけ多くの人間の幸福を希求する者だけが時代を統べる資格を有しているンだ。
俺はそうやって俺の理想を実現してやるンだ。邪魔をする、覚悟無き者共を亡き者にしてな。俺は自分が絶対的な正義を掲げているとは思わない。同程度に正しいと思える正義はきっと他にもあるだろうさ。だが、俺の掲げる正義を否定するなら、力を以てそれを否定して見せろ。それがどんなに美しくとも力を伴わない理想や正義は、只多くの人間を巻き込んで殺すだけの、論ずるに値しないゴミ屑だ。それでもその理想を抱えて生きていくというのなら、理想を抱いて溺死しろ。それだけの覚悟を示して見せろ」
……理想家で現実家。理想を実現させる為に、現実的な手法を用い

る。
現実を知って猶、理想を掲げて天下を駆けるというのか、この男は。
人の汚さを知った上で猶、人を愛するというのか。

夢と現。
理想と現実。

一歩間違えれば、身の破滅を招く事くらい分かって居るだろう。
だからこそ人は妥協し、夢と現実の折り合いを付ける。
だがこの男は。
飽くまで理想を貫き通すというのか。

「あははははっ。貴方、気に入ったわ」

雪蓮が心底愉しそうに笑う。
平教経が本当に気に入ったようだ。

「……何が気に入ったのかね？」
「何がって……全部よ、全部。わたしの夢は、旧領を治めることが出来て、孫家の血と従ってくれる民達が笑って暮らせる世の中を創り出す事よ。貴方のように、この天下に住まう全ての人間の幸福を希求しようとは私は思わなかったわ。従ってくれる民達だけで十分だと思っているもの。
わたしは、天下が孫家の下に統一されている必要はないと思っているのよ。わたしの夢を保証してくれるなら従っても構わない、そう思っているのよ」
「……孫策、一つ言っておくが、俺は今のお前さん達を対等な同盟者だとは認めないぜ？俺に従う諸侯の一人として俺の理想をこの世に顕現させる為に尽力する。そういう形でなら受け入れられると思うがね」

「分かってるわよ。董卓もそのつもりで貴方に従ったんでしょうしね。でもその董卓に、絶対的な服従を要求していないらしいじゃない、貴方。独自に動かせる軍勢とそれを自由に動かす事が出来る権限を与えるなんて、どうかしてるわ」

「大事なのは、俺に従う事じゃ無いンだよ。俺の理想とする世の中を顕現させる事だ。月には俺の目が届かない箇所に目を配って貰う。是正すべき事を見つけた時、力でしかそれを為し得ないと判断した際に振るう事が出来る力を彼女に与えているに過ぎないンだよ。もしその是正すべき対象がこの俺自身なら、彼女に与えた力で俺の目を醒ますべくその力を振るえばいい。掲げた理想から外れ、我が身の保身だけを考えて生きるようになったら俺はお終いなンだ。結果として俺が斃れる事になろうとも俺が理想とした世の中が顕現されるなら構わないンだよ」

「……もしわたし達が貴方に従ったとしたら、わたしの夢を尊重して貰えるのかしら？」

「お前さんが俺にその理想を貫き通すだけの器量と力がある事を証明して見せたらな」

「そう。それなら話は早いわね。

……貴方が天下を統一した暁には、揚州の自治権を頂戴。当然、貴方の示す方針には絶対に従うわ。ただ、それをなす方策についてはわたし達が考え出してわたし達なりのやり方でやらせて貰う。孫家が揚州を治めることを認めてくれるなら、わたし達は貴方に従うわ」

雪蓮の考えている事は分かる。この男が作り出す天下で、謂わば呉王として揚州を統治することを目指すのだろう。

雪蓮の夢を叶えるには、こういう男には従っておいた方が良い。

主君として希有な器量を有する、恐らく名君と呼びうる男だ。彼に従っている家臣から考えて才能もそれなりにあるのだろうし、信義に厚い事は反董卓連合時に確認済みだ。その行蔵にブレはない。彼の保証は天に日が昇るのと同じように確実なものであるだろう。

今日の軍の展開の仕方を見る限り、余程有能な臣が付いているのは間違いない。他にも数多くいるのだ。虎牢関にいた将で此処にいるのは一人だけなのだから。軍事的に見ても今一番天下で充実している勢力である事は間違いない。これと敵対するよりは、従った方が良い。雪蓮の誇りが保たれる限りにおいて。

「……従うには早いだろう。この先俺がお前さん達に対して優位を保ち続けるとは限らない。お前さん達が優位に立つ可能性も十分にあると思うがね。今この時点で俺に臣従する必要性をお前さん達は持ち合わせていないと思うが」

「……これはわたしの勘だけど、少なくとも貴方を凌駕するだけの力をわたし達が身につける事はないと思うわ。

地理的な条件で考えて、わたし達は周辺を諸侯に囲まれた状態。勢力を伸張させようにも、必ず周辺諸侯に対して備えた上でないと軍旅を催す事は出来ない。対する貴方は、伸張する方向を決めるだけでいくらでも伸張出来る国力を備えている。後背に敵を抱えている訳ではないし、調べた限り異民族との関係は極めて良好だから後方を扼そうにも扼せるだけの勢力が存在しない。

その治世は殆どの民を満足させ、その軍兵はちょっとした反乱程度なら即座に鎮圧してみせるだけの練度がある。それを率いる将も有能で、策を考え出す軍師にも困らない。金穀も豊富にあるようだし。こうやって改めて言葉にしてみて分かるけど、現時点で穴がないのよ、貴方たちには。

ちょっと悔しいけど、物の考え方といい領国経営の手腕といい軍兵の練度と士気の高さといい、現状でわたし達が上回っている点はないわ。この現状から、わたし達が貴方を上回る勢力を築き上げる事が出来るとは思えない。

幸いにも貴方の夢や理想はわたし達が思い描いているものをより広範にしたものであることを確認出来た。そしてそれを実現させるために、綺麗事だけでなく血にまみれても構わないという覚悟を持っ

ている事も確認出来た。此処で従わなかった場合、いずれ貴方はわたしを屈服させるために軍旅を催すのでしょう?そして恐らく、わたし達は絶望的な戦いに身を投じる事になる。それであれば、今この時点で臣従しておいて、天下統一後に揚州を任せて貰う方が得策だわ。

抵抗して敗れた後でも、多分貴方はわたし達に揚州の自治権を認めてくれると思う。それを認めて貰うだけの力を貴方に見せる事は出来ると思うから。ま、これも勘なんだけどね。どうせ結果が変わらないなら、より血を流さずに済む方法で同じ結果を出した方が良いもの。その方が、貴方の心証も良くなるでしょうしね」

「……周瑜、お前さんのところの主君は、勘で全てを決めるのかね?俺ぁお前さんの意見を聞いてみるべきだと思うんだがね。俺が言うのも変なンだが」

「……言いたい事は分かるが、これが雪蓮という人間でな。もうとうに諦めている。しかもその決定が誤っていた事がないのだから、軍師としてはこれ程やっていられないことはない。そうやってわたしが斬り捨てた未練を思い出させるような事を言わないでくれ」

「……二人とも、気に入らない言い方ね……」

それならば勘で策を上回る結果を出さないでくれ、雪蓮。

「……俺はお前さんは従わないと思っていたンだがね。少なくとも、一度戦って白黒付けるまでは。誇り高き虎だけに」

「虎も故あれば従うわ。さっきも言ったけど、どうせ同じ結論が出るなら人が死なない方が良いのよ。従っても、わたし達は虎としての誇りや牙を失う事はない。そう思えばこそこう言っているのよ」

「……詠、どうすべきだと思う」

「……孫策が言っている事は嘘じゃないと思うわ。従う、と言うのも本気だと思う。天下統一後、全てを領地をアンタの直轄地としようとは思ってないんでしょ?」

「あぁ。そんな面倒な事は願い下げだ」
「なら、ボクは受け入れた方が良いと思うわ。この時点で孫策達が平家に従ってくれるなら、戦略的に大きな自由を得る事が出来るもの。どれだけ孫策達が領地を広げようと、最終的に揚州しか望まないと言っているのだし、受け入れて良いと思うわよ？勿論、将来にわたってずっとそう思っているとは限らないけど、その時は思い知らせてやれば良いだけだしね。アンタに戦で勝てる人間がこの世に居ると思えないもの」
「ふむ……話が急すぎて判断出来ん。後日、改めて臣従云々については話すとしよう。さしあたり俺に従う意志がある、ということが確認出来た訳だからこの場はこれで良いだろう」
「それでいいわけ？」
「お前さんに従ってきた人間がいきなり俺に従える訳がないだろうが。後日互いに落ち着いた時に改めて話をすべきだろう。大体、俺たちは一度殺り合ってるンだぞ？」
「だから言ってるじゃない。殺し合い程互いを理解出来る方法はないって」
「それが理解出来るのは、お前さんみたいな戦闘狂だけだ」
「あら、賛同した貴方も戦闘狂ってことになるわね」
「俺は違うぞ、そこまでイカれてない……じゃぁまぁ、袁術の旧領を平定したら長安に顔を出してくれ。今後の展望についても話をしておきたいしな。そうだな……一月もあれば十分だろ？」
「力を示せ、ということか？」
「そう受け取ってくれて構わんよ。力なき者に揚州を預けるなんて出来ないだろう？それに相応しい実力がある事を示してくれ。ま、天下に名高い美周嬢の軍略を見せて貰うとするさ」

『美周嬢』。
コイツは、何を言っているのだ。
……まぁ、悪い気はしないが。

この程度が出来なければ、力を持つ諸侯として臣従する事は許さない。
気宇の大きな事だ。楚の荘王が男であったなら、こんな男であったのかも知れないな。

「ふ～ん」
「なンだ？」
「べっつに～。冥琳、行くわよ？とっとと平定して長安に行きましょう」
「あぁ」

雪蓮の言う通り、早々に終わらせて長安に行くとしようか。
孫家の力をしかとその目に焼き付けてやるのだ。
私達にその驥尾に付すだけの資格がある事を示してみせるさ。

蝶の如く～８２～（前書き）

ネタです。
教経の軽いノリと雪蓮の軽いノリが似てる気がする。

あと、ちょっと一言。

ちょっと見てみたらＰＶが３，２００，０００越えてました。
この間２，５００，０００だったような・・・

今後とも、皆様にお楽しみ頂けるような話を書いていきたいと思います。

蝶の如く～82～

～教経　Ｓｉｄｅ～

あの会談の後、長安に帰還した俺を待っていたのは査問会だった。
被告は俺。査問官は、星、風、稟、愛紗、詠。

「お兄さん。聞きたい事があるのですが」
「ん？何だ？風」
「お兄さん、お兄さんは翠ちゃんを抱きましたね？」
「ブーッ」

松田優作ばりにお茶を吹いた。
翠が五人の後でもじもじしている。
……可愛いねぇ。

「教経殿、汚いですよ。全く」

そう言いながら、稟が甲斐甲斐しく俺の口元と机の上を拭く。
……あれ？怒ってないのか？

「……怒ってないのか？皆は」
「主、何度も何度も言わせないで頂きましょう。華に集うのは蝶の勝手なのです」
「仕方がないもの、と諦めています」
「英雄は色に狂うものなのです」
「教経殿が真剣に寄せられた想いを無碍にするような人だとは思っておりませんから」
「気が付かなかったボクが悪かったのよ。まさか戦陣の中でそうな

るなんて」

こう言ってくれてるが、ねぇ。とてもじゃないが、儲けたとは思えない。

「……済まんな。なんというか、申し訳ない」

「お兄さん、それが問題なのではないのです」

……嫌な予感がするんだねぇ。

「問題なのは、お兄さんが翠ちゃんとどのように致したのか、何度致したのか、なのです」

「ななな何言ってるんだよ、風！」

「翠、そのように恥ずかしがる事はない。風や稟、詠は三人で主の相手を務めた事が何度もあるのだ。誰がどのように主に抱かれたのか、ということなど、別に隠し立てするような事ではない」

いや、星？隠そうな。それは隠しておこうな？

しかしこれは……

「……今までまさかと思ってたンだが、風、お前さん達が皆同じような要求をしてくるのは……」

「当然、情報交換した結果なのです」

「だぁ～！お前ら！何やってるンだよ！こういうのはその、アレだろ！？二人だけの秘密、的な！そんなモンじゃないのかよ！？」

「教経様、皆平等にして頂かなくては困るのです」

「……まさか愛紗、愛紗まで積極的に情報交換を？」

「……その、恥ずかしいですが、負ける訳にはいかないですから」

お前さん、それは間違いなく風に誘導された結果だと思うんだが。

そう思って風を見ると、ニヤリと嗤っていた。
……風！恐ろしい娘！

「主が服を着せたままで愛紗と致したのが判明したので、その日から皆服を着たまま致したはずですが？」

そういえばそのような。
……アレか、俺にプライベートタイムはないのか？

「ライアンならあるのですよ」
「……風、俺の頭ン中覗くのはいい加減止めような？あと、名前だけだと『王宮の戦士達』とかいう第一章が始まってしまうから止めような」
「自然と見えるのですよ。むむむ、宝？、お兄さんが宇宙の塵と化したのです！ぜろしすてむなのです！」
「見える！見えるぞ！お前が死んでいく姿までもなぁ！……わかる奴居るのか？」
「さぁ。風には分からないのです」

最早様式美だな。いつもお勤めご苦労様です。

「教経殿。私達は教経殿のご要望に応えるために日夜努力をしているのです」
「……いや、稟？鼻血を垂れ流しながら言っても説得力がないというか。好きだから話を聞いて廻っているようにしか見えないんだが」
「わ、私はそのような破廉恥な女ではありません！」
「そうなのです。『超時空淫乱郭嘉』なのです」
「『アレ、おぼえていますか』とか『私の彼は平家の頭領』とか歌うのか」
「それは古いのです。時代はふろんてぃあなのです」

「……いつも思うがその電波はどこから……テレ東か？テレ東受信出来るのか？そのアンテナ」
「何を言っているのか全く分からないのです」
「と、兎に角！アンタが翠に何をして、その、何度したのか、全部話して貰うわよ！」

……それから先の羞恥プレイは言いたくないんだねぇ。
洗い浚い話を聞かれて、俺の羞恥心は大爆発だ。

……あとな、一つだけ言わせて欲しいンだ。
６人同時とか絶対に無理だから。
いや、だから無理だって言ってるだろ！？
引っ張るな！押し倒すんじゃない！誰か、助けてくれ！

だ、ダンクーガ！丁度良いところに！早く俺を助けやがれ！
テメェ！首振ってどっか行こうとするんじゃねぇ！
ちょっと待て、待ってて、ちょ、待っｔ

～雪蓮　Ｓｉｄｅ～

袁術の旧領を平定した。平教経が期限を切った、一月以内に。
これで、平家と連携できる。孫家の血の保存と旧領の統治を、より確実な形で後世に残す事が出来ると思う。わたし達が独立自尊の道を歩む事も考えないではないけど、彼の器はわたしより大きな気がするのよね。

「しかし雪蓮、いきなり臣従するなどと言い出すとは思っても見なかったぞ？」
「そう？平家との連携はわたしに任せるって言ってたじゃない。てっきりそうなると見越してそう言ったのだと思ったんだけど、違ったの？」
「一時期従う事は必要だろうとは思ったが、ずっと従うつもりがあるとは思っていなかったさ」
「逢う前は当然そんな事考えてなかったわよ。でも、彼の思想を聞いたら従うのが一番孫家のためになると思ったのよ。多分だけど、お母様も従うと思うわよ？」
「まあ話し合った結果お前がそう思ったのなら私に異存はないがな」
「そんなこと言って、冥琳だって彼の事気に入ったんでしょ？」

『美周嬢』って言われた時、冥琳にしては珍しく面白い顔をしていたのよね～。

「……まぁ、彼の器量は時代に冠たるものだろう。『覇者』と呼ぶに相応しい器量を有している。時代に望まれてこの世に顕れたとし

か思えない程の、な」
「はぐらかされた気がするんだけど？ま、いいわ。わたしの器量も優れたものだと思ってるけど、わたし個人としてはそれは飽くまでも孫家の主としてのものであって時代の覇者として彼を越えるものではないと思うのよね～。勿論、わたしにだって覇者となるだけの器量があると思っているけど、ちょっと敵いそうにないかな。素直に認めてしまっているのが悔しいけどね」
「だが雪蓮、皆が居ないところで話を進めるのは感心しないな。特に、蓮華様に関しては肯んじるとは思えないのだが」
「ま、何とかなると思うわよ？あの娘が彼に何と言ったところで、その全てに対して明確な回答をしてくるでしょうしね。彼の覚悟に基づいた回答を、受け入れられぬものとして斬り捨てるだけの器量があの娘にはないわ。斬り捨てるようなものにもならないでしょうしね。
……ところで冥琳、頼んでいた事、きちんと調べてくれたの？」
「……調べはしたが、何のためにこれを調べさせたのだ」

あの後、平教経の身辺について、冥琳に調べて貰った。
女の影が見え隠れする。あの時あの場にいた賈駆。あれは間違いなく彼の女でしょうね。それ以外にも、複数の女が彼の周囲にいる。
そんな気がするのよね。

「何のためにって、彼と縁戚になれば孫家の血は安泰でしょ？」
「はぁ……碌な事を考えないな、お前は」
「でも策としては最上のものでしょ？生まれてくる子が孫家だけでなく平家も継ぐ事だって考えられるのだから」
「そこまで考えての臣従か」
「あの場ではそこまで考えてないわよ。でも良い案でしょ？」
「それは認めるがな、蓮華様が彼に靡くとは思えないぞ？雪蓮」
「ばっかね～冥琳。誰も蓮華を番わせるとは言ってないじゃない」

「……まさか、お前自身がか、雪蓮」
「私だけじゃないわよ。冥琳も勘定に入ってるわよ？」
「……何を言っているのだ、お前は」
「冥琳。彼は天の御使いなのよ？その才能や器量が大きいから殆どの人間が忘れていると思うけど。その神聖性というか神秘性というかを孫家に取り入れる事が出来れば、きっと国破れる事があっても孫家は重宝されると思うのよね」
「……勘か？」
「勘よ？」
「……相変わらず、勘だけで思考の森を突き抜けて真実の門の前に至るのが得意だな……」
「なにやさぐれてるのよ冥琳。冥琳にも、頑張って貰わなきゃならないんだからね？彼、『美周嬢』って言ってたじゃない。この際、一族の人間じゃなくても良いのよ。彼の血を継ぐものが孫家の中にいる事が重要なんだから。彼にしても、自分の血が繋がる人間が居る家を廃滅させようとは思わないでしょうしね」
「それは、今考えた後付の理由だろう、雪蓮」
「当たり前じゃない。どうして勘でそれが良いと思ったのかは後で考えるんだから」
「はぁ……まぁ、これが雪蓮か。仕方がないことだ」

いつも思うけど、冥琳って失礼よね。
でも冥琳、言質は取ったわよ？

「『仕方がない』、と言ったわね？冥琳」
「……諦めるさ。お前に仕えたのが私の運の尽きだろう」
「じゃ、早速籠絡してよね。良い体してるんだから、冥琳は」
「そう簡単にはいかないと思うがな。ほら、調査結果だ」

何々？

平教経とそういう関係にある人間は6人。趙雲、郭嘉、程?、関羽、賈駆、馬超。
平教経に懸想をしていると思われる人間は2人。馬騰、太史慈。

8人って……。
ただ、誰でも良いという訳ではないらしい。互いが好意を持った上でしか、そういう関係にはならない。調査結果にはそう書かれている。

「……ねぇ、冥琳。これ、どうやって調べたの?」
「……それがな、これを調べている事を程?に勘付かれ、細作が身柄を拘束されたらしいのだ」
「げ」
「何が『げ』だ、何が。……まぁ、その際にあらかじめ口を割っても良いと言っておいたから、洗い浚い話したら、程?がその辺りの情報を全て寄越してくれたらしい。ついでに、その程?から伝言がある」
「……何考えてるのよ、程?は」
「私には分からん……。程?の伝言、聞くか?私は聞いて頭が痛くなった」
「是非聞きたいわね、それ」
「知らんぞ私は……。
『お兄さんに興味を持って女性関係を調べるなんて、とんだメス豚なのです。
お兄さんに対する単純な憧れや、政治的な打算によってお兄さんを籠絡しようなど、風達が絶対にさせないのですよ。お兄さんの事を一人の女として、本当に愛するようになったのなら、お兄さんを共有する仲間にしてあげても良いのです。まぁ、もしそうなったら風が正妻で貴女達は妾なのですが。
そうでないのに誘惑したりする事は許さないのですよ、メス豚。分

かったら諦めるのです。お兄さんは変態なので、貴女達のような無駄な脂肪を胸にぶら下げているような女はお呼びではないのです。愛紗ちゃんで間に合っているのですよ』
だそうだ」

……面白いじゃない。

「これは私に対する挑戦ね、冥琳」
「……雪蓮、私にはお前が言っている事が全く理解出来ない」
「好きになれば、やっちゃって良いわけでしょ？」
「雪蓮、それだとやっちゃうのが目的で好きになるのが手段になるのだが」
「細かい事は気にしないの」
「いや、細かい事じゃないと思うぞ？私は」
「そんな事どうでも良いのよ。これは私に対する挑戦なの。これから逃げるなんて、孫家の女として出来る訳無いでしょ？それにね、どうせ男を迎えて子を為すのなら、自分が認めた男が良いに決まってるじゃない」
「……それも後付だろうが」
「そうだけど、何か問題ある？」

冥琳が頭を振りながらこめかみを押さえている。

「兎に角長安へ行きましょう、冥琳。彼が待ってると思うから」
「はぁ……頭が痛い」

ま、英雄色を好むって言うし、問題無いでしょ。
冥琳、ちゃんと化粧して行きなさいよ？
わたし？わたしはこのままで綺麗だから大丈夫よ。

「ほう……少し話をする必要があるようだな？雪蓮」

あ、あはは。冗談、そう、冗談じゃない、冥琳。

ね、ね、冥琳はそのままで綺麗だけど、より一層綺麗になって平教経を籠絡して貰わないと困るのよ、ね、そういう意味で言ったのよ。

本当よ、本当。うんうん、本当だから。ほんｔ

蝶の如く～８３～（前書き）

別にもう一話うｐしてしまっても構わないのだろう？
ということで、行きます。

蝶の如く～８３～

～稟　Ｓｉｄｅ～

袁術殿の旧領を平定した孫策殿達が長安にやってきた。
『平家に臣従しても良い』。
詠によれば、孫策殿はそう言ったらしい。詠の目から見て嘘を言っているようには見えなかったそうだが、私は自分の目で確認したい。
その機会があるのだから。

孫策殿達を広間に迎えて、教経殿と孫策殿が話を始める。
私の目から見る孫策殿は、自由な人に見える。教経殿にもああいうところがあると思う。その後に控えている周瑜殿は、かなりの切れ者に見える。
実際、切れ者なのだろう。袁術殿の旧領を平定するに当たって彼女が果たした役割は非常に大きい。私が掴んだところでは煽動や離間、虚報を用いて戦力を分散させ、それらを次々に破っていったのだ。

「流石は孫策と周瑜だ。一月以内で平定するとはね」
「あら、それが出来ないと思っていたの？」
「俺が思っている通りの人間なら出来ると思っていたのさ。想像通りの器量があるようで何よりだ」
「そう。じゃ、わたし達が貴方に臣従し、天下統一の暁には揚州を任せて貰うっていう提案を受け入れて貰える訳ね？」
「まぁ、そう焦る事はないだろう」
「……どういう事？約束を違えると言うの？」
「……そういう事じゃない。お前さん、あれから家臣共にちゃんと相談したか？」
「してないわよ？」

……していないのか……

「そりゃ拙いだろう。お前さんの決定を不服とする人間は出てくると思うぜ？」

「不服があっても従うと思うわよ？わたしは孫家の血を保存するための最良の選択をしたと思っているもの。孫家の主としてね。」

「それ以上に良い案があるかを家臣達に事前に聞いておけば良いんじゃないのかね？ということさ。盟約を交わせば、覆す事は出来ないんだからねぇ」

「あはは、無理無理。現状で一番確率が高そうな案はこれなのよ。わたしの勘がそう言っているの。わたしの勘以上の策を考えつけるのは、此処にいる冥琳だけよ。その冥琳がそれで構わないと言っている訳。わたしと冥琳の意見が一致している状態で、それに反対するような人間は孫家には居ないのよ」

「ふむ……まぁ、そうなるとこれは孫家の問題ってことになるねぇ。俺はこれ以上は言わないさ。お前さんが良いように後でしっかり帳尻を合わせてくれればそれで構わないさ」

「そうして貰えると助かるわ。で、約束は守って貰うわよ？」

「まぁ、お前さんがそうまで乗り気な理由が全く分からんがね。俺に異存はない。俺の軍師様達も、異論はないそうだしな」

こちらを見てきた教経殿に頷いて賛同の意を示す。

「そ。なら早速盟いましょうか」

互いの血を啜り併せて、盟約を交わす。

盟約が為ったことを天帝に報告し、孫策殿達が平家に従うことになった。

「改めて自己紹介でもさせて貰うか。姓は平、名を教経。字も真名もない。好きに呼ぶと良い。別に敬語でなくても構わない」
「そ。じゃ、わたしは教経って呼ぶ事にするわ。わたしは、姓は孫、名は策、字を伯符。真名は雪蓮よ」
「では私も教経、と。私は、姓は周、名を瑜、字は公瑾。真名は冥琳だ」
「分かったよ、雪蓮、冥琳。これから宜しく頼む」
「こちらこそ、宜しくね、教経」
「宜しく頼む、教経」
「じゃぁ、早速だが、今後について話をしておきたい。雪蓮、先ず言っておくが、俺は揚州について完全に押さえることは出来ないかも知れないと考えている。今は、だがね」
「あら、どうして？私の妹の蓮華も居るし、祭や穏もいるわ。十分に確保出来ると思うのだけれど」
「お前さん達がどう考えているか分からんが、長安から遠すぎるんだよ。勿論、何事もなければ問題無いと思っているぜ？だが、例えば大馬鹿者、あぁ袁紹のことだが、アイツが１０万以上の兵でいきなり寄せてきたら、救援に向かうのは難しい。今放棄しろとは言わないが、死守する必要性を認めない。そういうことだ」
「それは別に良いわ。最終的に孫家のものになるなら、文句は言わないわ」
「そう言ってくれると助かるね。死守するなら、多くの人間を死なせることになるだろうから」
「教経殿、少し聞きたいのですが宜しいでしょうか？」
「構わんよ、稟。聞いてくれ」
「では。教経殿、教経殿は平家が死守すべき領地として、どこから譲れないと考えていらっしゃるのでしょうか」
「極めて狭い範囲になるねぇ。現状では。京兆府、南陽郡。取り敢えず、此処は間違いなく死守しないとならンだろうねぇ。問題は、汝南郡から東及び南の郡だ。南陽郡までは軍を展開して大いに厚み

のある兵の配置をすることが出来ると思うが、それより向こう側に兵を展開するとなると汝南にかなりの数の兵を籠めておく必要がある。現状平家の軍兵は１２０，０００程度だ。それに孫策達を加えても１６０，０００弱だ。京兆府に６０，０００おいたとして、残りが１００，０００。南陽郡と汝南郡が、孫策達が今領有している領土と繋がっておくのに必須となる郡だから、此処に４０，０００ずつおいたとして、残りが２０，０００になる。どうだね、どう考えても兵が足りないと思わんかね？

だから、汝南郡くらいまでが限界だろうと思っている。汝南郡まで領有したとして、予備兵力が２０，０００。南陽郡までなら、予備兵力が６０，０００になる。軍旅を催す際は、その余剰分の兵力を以てすることを基本方針として考えている俺としては、南陽郡までを確保して後は奪われるに任せたいのさ。孫策達を目の前にしてこういうことを言うのはどうかと思うがね。新しい家族に嘘を言っても始まらないから正直に言うんだが」

教経殿は、国取りを兵数の厚みによって為そうとされる。兵の厚みがあれば、侵攻にしろ防衛にしろ楽になるから。そう仰っていた。

だからこそ、荊州と益州の一部を望んでいるのだと思うが。蓋を容易にすることが出来るということは、余剰兵力を多く確保出来るという事だから。

「ま、わたしは現時点で揚州を確保することには拘らないわ。さっきいった通りにね。でも、住民達を見捨てる事はしたくないのよ」

「漢王朝は既に死んだンだ。離民させたところで非難される謂われはない。馬鹿がそれを口実として攻めてくるかも知れないが、いずれ奴さん達とはやり合わなきゃならないンだ。時期が早くなるか遅くなるかの違いしかない。だから、お前さんを慕って居る人間をとっとと南陽郡なり南郷郡に移動させちまえよ。その為の糧食は用意

するぜ？」
「膨大な糧食が必要になると思うが、本当にそれを確保出来るのか？」
「あぁ。今年もまた馬鹿に嫌がらせをしてやるつもりだからなぁ。稟、見込みだと、どの程度糧食に余剰が出来る？」
「今秋の収穫に現在孫策殿達が領有している郡のものも含めて考えると、投機のやり方にもよりますが先ず５０万の民衆が３ヶ月移動する程度の糧食は確保出来るでしょう。現状抱えている余剰も含めると、７０万～８０万程度は移動してこれると思います」
「……貴方達、本当に金穀に余剰があるわね」
「そりゃそうだ。先立つものが無ければ力を十二分に振るえないのだからな。そう思って、并州時代からせっせと利殖に励んで溜め込んできたんだからねぇ」
「それにしても、折角領有したものをあっさり手放そうとはな」
「不服か？周ｙ……冥琳？」
「いや、不服はない。それを手放してしまおう、と簡単に言ってそれを実行しようとしているお前の器量に驚かされただけだ」
当然です。教経殿は先ず生き残るために最も可能性が高い選択肢を選択することに長けているお方ですから。
「そうかね。執着する人間は必ず何かを失うものだぜ？それが大したものでなければ良いがこの場合失うのは自分を含めた平家の人間の命だからねぇ。それらと領地を天秤に掛けた時、領地に固執するような人間じゃないんだよ、俺はな。あぁ、ついでに言っておくが、南郷郡と南陽郡はお前さん達に預けるからな？お前さん達が自由に治めてくれて構わない」
「最前線だな」
「そうだ。期待してるぜ？当然、攻め込まれたら直ぐに駆けつけるつもりだがね」

「まぁ、期待には応えてみせるわよ」
「じゃ、今後の平家の方針についてだ。俺たちは、この秋に軍旅を催すつもりで居るンだ。まぁ、状況次第ではあるがね」
「目的は？」
「荊州の一部と益州の一部を併呑する。新城郡と梓潼郡、巴西郡までだ」
「……成る程な。防衛するに容易くした上で、お前の言う余剰兵力を確保しよう、という訳だな」
「流石『美周嬢』は察しが早くて助かるねぇ。その通りだ。そうやって防衛に最低限の力を割きつつ、力を蓄えようと思っているンだよ。ついでに言うと、その時期に異民族の懐柔をやってしまおうと思っているンだ」
「主、懐柔して如何為されるのです？」
「星、彼らの勢力は侮れないぜ？俺が知る歴史では、五胡と呼ばれる五つの異民族はこの国を分割統治するだけの力を有しているんだからねぇ。その力を俺たちに貸すとは行かないまでも絶対に敵対しないようにさせたいのさ」

いつか教経殿が言っていた、五胡十六国時代のことだろう。
信じられないことだが、異民族に漢は蹂躙されてしまうらしい。教経殿がいう事だから正しいのだとは思うけど。それだけの力を有する異民族を、取り込んでしまおうというのだ。この人は何処まで先を見据えているのだろうか。

「信じられませぬが、主がそう言うならそうなのでしょうな。で、どう懐柔するのです」
「匈奴と鮮卑については、交易でまず繋がりを作ろうかと思っている。彼らが冬の間必要とする乾燥した秣を俺たちが用意する代わりに、家畜や馬を分けて貰えないかと話を持ちかけるのさ。勿論、真っ当な価格より少し安めにして彼らに利便を図る。胃袋を押さえる

のが一番の攻略方だ。人間じゃなく家畜の胃袋だが、彼らの生活に不可欠な物資であることは間違いないからな。これで間違いなく悪感情を持たれることはないだろうよ。

羯については、并州牧時代に分け隔て無く接してきたつもりだ。公募した仕事に就く際の給金に差を付けたことはないし、街に住む際に場所を隔離したりしたことは一度もない。太原時代から平家の郎党として従ってくれている兵達の中には、多くの羯族の人間がいる。恐らく、現時点で悪感情は持たれていないと思う。彼らの生活が立ちゆくように、不足のものを真っ当な価格で提供してやるだけでこの関係は継続可能だろう。

テイについてはこれからの話になるが、漢中攻略戦で大いに役に立って貰うつもりだ。その上で、その働きに対して正当な報酬を支払う。俺に絶対の服従を誓わせるのではなく、飽くまで領地に住まう人間として、守って貰うべき最低限度の約束事を守ってくれ、と言ってやるつもりだ。差別は許さん。それを行う人間は見せしめとして必ず殺して晒し首にしてやる。俺が殺すと言った以上、そいつの死は絶対だ。

羌については、全く問題ない。碧と翠がいるからな。碧に言って、涼州には馬一族の人間を残してあるし、反董卓連合の際に使用したアレを集める際に尽力して貰ったりするような仲だ。心配するだけ無駄だろうさ。

まぁ、いずれの異民族に対しても、一個の人間としてきちんと扱ってやればいいのさ。立場の差は勿論あるが、人間として犯すべからざる尊厳というものを尊重したつきあい方をすればいいンだ。そうすればいつかきっと従ってくれるだろう。今まで人として扱われなかった人間達だ。それを人として扱う俺たちを好ましい存在と思いこそすれ疎ましいとは思わねぇだろう。危急の際救いを求めたら助けてくれる程度の関係にはなっておきたいものだねぇ」

そう語る教経殿を、孫策殿と周瑜殿はじっと見ていた。

「……貴方に従うという結論を出した自分を褒めてあげたいわ」
「……今回ばかりは、雪蓮の勘の鋭さに素直に感謝したいな。これを敵に回すなどあり得ない」
「ま、そういうわけだ。戦に調略に政に、力を貸して貰うことになる。宜しく頼む」

そう言って教経殿が頭を下げた。
二人はその教経殿の態度に驚いているようだが、これが教経殿の良いところだろう。決して強要はしない。その態度が、自分の意志で教経殿を助けようと思わせる。私を始めとして、皆そういう教経殿だからこそ従っていると思うから。

孫策殿達は、心底教経殿に従うようだ。
それが確認出来たことで、今後の策も構築しやすくなるだろう。

孫策殿と周瑜殿と、真名を交換しながらそう思った。

蝶の如く～８４～（前書き）

連続更新祭りはこれで終了で御座います。
後は週末をお待ち下さいませ。

多分、ネタです。

蝶の如く～８４～

～教経　Ｓｉｄｅ～

雪蓮達と話をした後、気になっていることがあったので冥琳だけ呼び出した。
気になっていることが何かって？
それは勿論、彼女の『眼鏡』に決まっているだろうが！
『眼鏡』こそ至上！『眼鏡』こそ最強！
体の部位を超えた純粋なフェチそれが『眼鏡』だ！！

……１００％中の１００％状態になりそうだったのでこのチャンネルは切ってしまおう。

「どうしたのだ、教経？私だけを呼び出して」
「いや、気になっていることがあってねぇ。お前さん、体調が悪かったりしないかね？こう、目眩がするとか、咳が止まらないとか」
「……そんなことがあるわけがないだろう」
「有るンだな？」
「……ない」
「意地張るんじゃねぇよ。良い医者が居るんだ。見て貰うと良いと思う」
「私には必要ない。それに、どうやっても治らないと言われたのだ」
「諦めてんじゃねぇよ。俺はお前さんを失うなんて真っ平御免だ。お前さんがいない将来なんて御免被りたい。何としても生きていて貰わないと困るンだよ」

才能的に考えて。諸葛亮なんかより間違いなく優秀だったんだからねぇ、史実では。

「な、何を言っているのだ、お前は」

何やら頬を赤くしているが、まぁそれは良いだろう。

……周公瑾と言えば早逝だ。

ワンセットで覚えられている位、有名だからな。

折角平家の郎党になったンだ。出来れば、長生きして欲しい。

そう思って、ブラックジャック先生の所に連れて行ったンだが。

「……教経、私は外科医だぜ？お前さんの期待には応えられそうにないね」

「先生よ、そう言わずに何とか診断だけでもして貰えンかね」

「そうは言ってもな……原因が分かったとしても、私では対処のしようが……ん？」

押し問答をしていると、ブラックジャック先生は何やら思い当たったようだ。

「先生、もしかして、冥琳の病気が分かったのか？」

「いや、それは分からん。が、私の他に良い医者が居るのを思い出してな。お前さんの要望に応えることが出来そうな医者だ。腕は、私が保証しよう」

おお！ブラックジャック先生が腕を保証する先生だって！誰だ！？

本間先生か！？

「今から奴の診療所に行こうか」

「あぁ、頼むぜ先生。冥琳、行こうか」

「あ、あぁ」

冥琳、頬が赤いが、大丈夫か？

「此処だ。此処にいる」

そこは普通の一軒家を改装した診療所だった。
こんな所に診療所なんて有ったか？
怪訝そうな顔をしていたのに気が付いたのだろう。ブラックジャック先生が説明してくれた。

「これは、ついこの間作ったばかりの診療所だ。私が金を出してやったんだよ」
「先生が金出してやるなんて、珍しいな」
「妃乃子が世話になったのでな。私は恩を忘れるような人間ではない。お互い様なのさ」

ピノコねぇ……。

「おい、居ないのか？」
「誰だ？……あぁ、黒男か。どうしたんだ一体」
「私の患者がな、私の力を借りないとどうにもならないような病気に罹っているかも知れないと言って病人を連れてきたのだが、診察

しようにも内科の領分でな。お前さんの力を借りに来たのだ」

中から出てきたのは、赤髪の兄ちゃんだった。

「教経、紹介しよう。鍼師の琵琶丸だ」

「おい！黒男！俺は琵琶丸じゃないって何度言えば分かるんだ！俺の名前は華佗だ！華佗！」

「全く、五月蠅い奴だな。俺は切る、お前さんは刺す。そうやって患者を救うだけの存在だ。名前などどうでも良いだろうに」

「む。それは確かに……」

いやいやいや。ブラックジャック先生がぶっ飛んでるだけだ。ついでに、先生よ。琵琶丸は盲目のオッサンで有ってこんなイケメンじゃない。

……華佗？今、華佗っていったのか？あの、神医の？

「おお！琵琶丸先生！患者を診てやって下さい！」

「だから俺は琵琶丸じゃ……ん？患者というのは、そこの女性だな？」

「琵琶丸、分かるのか？」

「……この際呼び名はどうでも良い。直ぐに治療しよう。病魔が膏肓に入る前に、撃退しなければならない。これは、緊急性が高いぞ」

「琵琶丸先生よ、助かるのか？冥琳は」

「任せろ！まだ何とかなるだろう！直ぐに治療だ！」

暑苦しい奴だな、この琵琶丸は。ダンクーガと良い勝負だ。

「行くぞ！うおおおおおおお！全力全快！必察必治癒！五斗米道ぉぉぉぉぉぉぉっ！」

体が薄く発光している……これ見たことある気がするな……勇者王的に考えて。

……まさかと思うが、お前さん、光にするつもりじゃ……

「げ・ん・き・に・なれぇぇぇぇぇぇぇっ！」

叫び声と共に、鍼を冥琳に突き刺した。

……これで治ったら奇跡だろうが……そして、暑苦しい……

……獅子王凱以外の何者でもないだろうが……

「……琵琶丸、どうだ」

「うむ。手応えアリ」

そっちの台詞も万全かよ……どうなってんだこの世界はよ……

「冥琳、体調はどうだ？」

「……よく分からないが、軽くなった気がするよ」

「それはそうだろう。病魔は退散した。命の危険は去ったと言って良いだろう」

どうやってそうなったのか全く理解出来ないが、兎に角良かった。

「そうか……良かった、冥琳」

「……あ、有り難う、教経」

「いや、当然のことだ。気にしないでも良いさ」

まぁ、本当に良かった。

これで周瑜が早逝することはなくなったンだからな。

フッ……フラグブレイカーとでも呼んでくれ給え！

「じゃな、冥琳。体、気をつけろよ？」
「あ、ああ……」
まだ調子が悪いのか？頬が赤いンだが。
「……先生よ、大丈夫なのか？まだ病気なんじゃないのか？」
「……アレはな、不治の病だ。私では直せない。まぁ、死んだりすることがない病気でな、しかもこの場合、間違いなくその病気によって幸せになるだろうよ。お前さんがお前さんだからねぇ。私はこの病気には関わりたくないな」
何言ってるのか全く分からん。
「……兎に角、死んだりしないんだな？」
「それは保証してやる。絶対に死なないさ。琵琶丸、お前もそう思うだろう？」
「あぁ、そう思う」
「……なら、いいか。先生よ、今日の礼は必ずさせて貰う。俺は平教経だ。教経と呼んでくれ」
「俺は華佗だ」
「分かったよ、凱。じゃ、また今度な」
「お、おい！俺の名前は……」
「まぁいいじゃないか、琵琶丸」
「……お前ら、俺の名前を何だと思ってるんだ……」
後で凱が何やら言っていたが、そんなことはどうでも良いやね。
冥琳の病気が治って良かった良かった。

～碧　Ｓｉｄｅ～

孫策達がご主人様に従うことになった。
だが、私の興味はあんな小娘達にはない。今最も私が興味があるのは、いつご主人様を襲ってやるか、ということだけだ。風には既に宣言してあるんだし、何時にしようかねぇ。

どうヤるのか、については、既に策を講じてあるのさ。
馬鹿娘がご主人様と寝る事になっている日に、馬鹿娘を拘束して衣装棚の中にでも放置し、馬鹿娘の振りをしてご主人様を襲う。完璧な策に、我ながら惚れ惚れしちまうよ。私が髪を翠のように留めて居た時、ご主人様は間違えて声を掛けてきたからねぇ。ついでにそのまま襲ってくれれば良かったものを。

問題は、馬鹿娘とご主人様が寝るのは何時なのか、ということだ。
流石に、それは風も教えてはくれないだろうねぇ。その程度の障害は越えて見せろ、というに決まっているのさ、あの娘は。ああ見えてかなり嫉妬深いのは分かってるんだ。絶対に私には教えないだろう。だが、障害があればあるほど燃えるってことを計算していないのかねぇ、あの娘。必ずものにしてみせるよ、この馬寿成がね。

しかし翠の奴、最近本当に女らしくなって来やがった。
仕草の一つ一つに匂うような女の色気を感じさせる様になってきている。女として、充実した生活を送っているからああなるんだろうねぇ。まだまだ私には敵わないが、いい女になったと言える。あれなら馬家の頭領として十分にやっていけるだろう。

「翠、ちょっと来な」
「なんだよ、お母様」

呼びかけると、翠はぶっきらぼうに答えた。
ん？何かそわそわしてるね、この娘は。これは……鎌を掛けてみる必要があるね。

「アンタ、何そわそわしてるんだい。ご主人様に今日抱いて貰うのに体を洗ってないとかそういうことかい？」
「ななな何言ってるんだよお母様！そりゃ、確かに湯浴みしないと

拙いけど……」

……フッ、翠。今日はどうやらお前の厄日だよ。
それにしても、こうも簡単に引っかかるとは。まだまだ修行が足りないねぇ。

「まぁ、別に良いけどねぇ。あ、噂をすればご主人様だよ」
「えっ、どこ？」

この馬寿成に背中を見せたのがお前の運の尽きさ！翠！

「はっ！」
「うっ……お、お母様、計ったな……」

私の手刀を首筋に受けて、翠は昏倒したようだねぇ。
この馬寿成、故あれば裏切るのさ！恨むならお前の生まれを恨むが良い。
……ちょっと尋常でない音がしたような気がしないでもないが、まぁ大丈夫だろう……大丈夫かな……大丈夫だと思いたい。
それは兎も角、この馬鹿娘を後手に縛って……と。これで馬鹿娘への備えは万端だろう。後はコイツの服をかっぱらって、髪留めも頂いて……と。よしよし、何処からどう見ても翠だろう。
風が言う所の、じゃぶろー襲撃は今日に決定した。たった今。

フフフ……
いくよご主人様――――種の貯蔵は十分かい？

～教経　Ｓｉｄｅ～

「ブルルルルッ」
「？主、どうしたのですか？」
「いや、何かこう、急に寒気がしてな？嫌な予感というか何というか」
「どうせまた変なこと考えてたんじゃないの？」

何を仰いますか、ツンデレラ。そんなことはありませんよ。
失礼なツンデレだな。

「……何かむかつくのよね。こういう時、間違いなくアンタは失礼なことを考えているのよね」
「詠、その手に持っている『１００ｔ』って書いてある鎚は流石にやばいと思うんだよねぇ」

香ちゃんハンマーはやばいって。

「やばいのはアンタの頭の中であって私じゃないわよ」
「人をガイキチさんのようにいうのは感心しないな、詠」

言いながら尻を撫でてみる。こうするのが礼儀だろう。新宿の種馬的に考えて。
おぉ、意外に良い尻してるな！安産型か？

「……このっ……馬鹿！飛んでけ！」
「へブッ」
「主、聞こえていないかも知れませんが、今日は早いところお休みになった方が宜しいと思いますぞ？翠にもそう伝えておきますから、早々に部屋に戻って養生されることですな」

き、聞こえてはいるんだけどな……取り敢えず、部屋に運んで貰っても良いかね……
翠がこっちに近づいてきているのが視界に映ったのを最期に、俺は意識を手放した。

「……ん……？」
「んっ……ちゅ……」

目を醒ますと、誰かが一生懸命に俺に口づけしていた。
今日は確か、翠の番だ。
そう思ってみると、いつも通りポニーテールを揺らしながら俺に口づけして来ている翠が居た。

……いつもと違って、本当に積極的だな。
俺が意識がないと思ってるからこうも積極的なんだろうが、これはこれでアリだな。
驚かせてやろうと、翠の舌を吸ってやる。

「！んぅ……んっ……」
「ちゅ……ぷは。……翠、俺が寝てると思って好き勝手やってくれt」

……おい、碧じゃねぇか！

「碧！お前何やってんだ！？」
「へ？……まさかもう気付いたってのかい？」
「いや、普通に気が付くだろ。お前さんの方が良い体してるし、色気的にもこの妖しい色気はお前さんのモンだって事は分かる。何より、どんなに似てても碧は碧なンだ。間違えるはずがないだろうが」
「翠を基準にして違和感を覚えたんじゃなく、私だってちゃんと気付いてくれたのが嬉しいよ、ご主人様」

そういって、口づけをしてくる。

「ちゅ……はぁ……」
「……お前さん、それ以上やったら俺だって自制出来ないぜ？」
「自制なんてしなくて良いよ。あたしは、アンタに抱かれに来たんだから」
「何故」
「アンタに惚れたから、じゃ理由にならないのか？」
「そんなことはないが、いつ惚れたんだよ、いつ」
「最初にアンタに逢って、アンタの理想を聞いた時だよ。決定的になったのは、あたしを助けに来てくれた時かな。……嬉しかった」

……何か普段と違って、綺麗じゃなくて可愛いって思っちまうねぇ。

「なぁ、碧。お前さん、言葉遣いが変わってないか？自分のことを『あたし』って、まるで翠みたいだが」

「……こ、これがあたしの地だよ。……おかしいかな？」

そう言って、ちょっと首をかしげて、潤んだ目で俺を見上げてくる。

馬鹿野郎、俺を殺す気か。何だこのギャップは！これがＧＡＰ、もといギャップ萌えか！

「普段の碧と違って、新鮮で驚いていただけだ。……可愛いよ、碧」

そう言いながら、抱きしめる。

お前さん、既に服脱いでるのな。そう言えば俺も全裸っぽい。脱がされたのか。

「ば、馬鹿」

恥ずかしそうに顔を背けながらも、しっかりと抱き返してくる。

あぁ、駄目だ。絶対無理だ。

普段あれだけ気が強くてしっかりしてて大人な雰囲気の碧が、こんなになるなんてなぁ。想像出来ねぇだろこれぁよ。

「碧、こっち来い」

「ん……」

「もういいや。駄目だ。抵抗はしない。このままで良い。俺は、もうこのまま抱いちまうことにする」

「う、うん」

いちいち可愛いじゃないかね。
もうどうにでもな～れってこんな状況なんだろう。

「髪、解いてくれ。翠じゃなくて、碧を抱くんだから」
「ん……嬉しいよ、ご主人様」

翠や他の子供を産んでいるのに、初々しいというか、何というか。
そう言うと、アンタと寝るのは初めてなんだから、恥ずかしいだろ、と。
そう返してきた。

それでいて、主導権を握ろうとするんだよねぇ。碧は。
返り討ちにした時、悔しい、とか、気をやって恥ずかしいから見るな、とか。
兎に角、可愛らしい。

「風達に何と説明したものかなぁ」

事が終わって、腕枕をしてやりながらそう呟く俺に、碧が答えて言った。

「風達には宣言してあるから気にしなくて良いよ、ご主人様」

……公認だってのにも驚いたけど、風に許可を取る辺りは流石だな。
亀の甲より年の功ってやつか？
そう思っていると、凄い顔で睨まれた。……年のことは口にしたら殺されそうだから気をつけようかね。
暫くそのままゆっくりして落ち着いた頃、碧がもう一度口づけしてきた。

「ご主人様、まさか一度だけって事はないよな？」

そう言って。

その後何度したのか覚えていない。

取り敢えず、太陽は黄色かった。

風達に報告したらしく、それから6日間、酷い目に遭った。いや、極楽だとは思うけど。死にそうだ、と思ってＢＪ先生に強精剤を貰ったのは秘密だ。

そう、秘密なんだ。そうじゃないと、風達に飲まされて……ねぇ。

凄いことになりそうだから。

蝶の如く～85～（前書き）

この二日間で行けるところまで行きます。
来週、更新が絶望的なので・・・

蝶の如く～85～

～冥琳　Ｓｉｄｅ～

教経に連れられていった診療所で治療を受けた後、私の体調はすこぶる良好だ。かなり強引に連れて行かれたのだが、ああもはっきりと私を想ってくれているのを宣言されると逆らう気にもなれなかった。結果として、逆らわなくて本当に良かったと思える。

『俺はお前さんを失うなんて真っ平御免だ。お前さんがいない将来なんて御免被りたい。何としても生きていて貰わないと困るンだよ』

……思い出すと、恥ずかしくなる。あれは熱烈な求愛ではなかったか。

まあ、それはいずれゆっくりと考えれば良い。

今日は平家の軍師達の実力を知りたいと思い、先ず先日戦場で対峙した際に平家の軍師として従軍していた詠に話を聞くべく訪いを入れたのだからな。

「もしあの時ボク達が戦う事になっていたら？」

「そうだ。どういう形で戦を進めようと考えていたのだ？」

私とて自分の軍略の才には自信がある。あのまま戦になっていたとしても、無様な戦にはならなかったと思っている。

勿論勝つ事は出来なかったと思うが、一時的にでも優位に立つことは出来たのではないかと思っているのだ。だからこそ、聞きたかった。どう軍を展開するつもりであったのか、を。

「鶴翼の陣を敷いていたでしょ？」

「ああ。包囲殲滅するつもりだったのか？」
「そうじゃないわ。先ず中央の１５，０００で一当てして後退し、アンタ達を引き摺り込むように動こうとしていたのよ」
包囲殲滅しようとして居るではないか。
「……流石にその誘いに乗るほど馬鹿ではないぞ？」
「だから、分かってるってば。そうやって引き摺り込むと見せかけて、次に両翼からそれぞれ７，５００の騎馬の内５，０００で左右から吶喊する予定だったわ」
「ほう……だが、それに対して備えない私ではない。長柄の槍隊で馬を叩いてその勢いを殺し、膠着状態に持ち込むことが出来たと思うがな」
「でしょうね。でもその時機を見計らって、中央が反転して攻勢に出るわ」
「……それに対しては本陣の精兵を以て食い止めただろう」
「それも、織り込み済みよ。そうやった上で、両翼から残りの騎馬を先に５，０００が突っ込んだ箇所より更に後側から迂回させて本陣に向けて突っ込ませる予定だったのよ。……これに対応出来るかしら」
……兵が、足りないな。
せめてあと５，０００、いや、３，０００でもいい。手元にあれば何とか凌げたと思うが。
「……いや、対応出来なかっただろう」
「ま、そうでしょうね。兵数が二倍近く有った訳だしね。ボク達はそうやって勝とうと思っていたのよ。此処までをかなり時間を掛けて行えば、兵数から言って全滅させることも出来ると思うんだけど」
「悔しいがそうだろうな。……どうやら平家の軍師は優秀なようだ

な、詠」

これが味方になるというのだから、これ程心強いことはない。

「……これを考えたのは全部アイツなんだけどね」

「……は？」

教経が、か？

「この策は、前々から検討されていたのか？」

「そんな訳無いじゃない。アンタ達を目前にしてその場で考え出したみたいだったわ」

短期間で、これだけの策を考えられるのか、教経は。

「ひょっとして、反董卓連合に対する戦略を練ったのも教経なのか？」

「ええ、そうよ。その策全てがアイツの頭の中から出てきたものらしいわ。勿論、実行段階における詳細は稟や風が煮詰めたみたいだけど、大枠は全てアイツが考えたことよ。馬騰との連携も諸侯の国元での流言も火牛の計も洛陽放棄も。ついでに言うと、曹操との密約も。全てアイツが描いたのよ」

……桁外れの才だ。今挙げた内のいくつかを思いつくことは出来ると思うが、その全てを思いつくことは難しいだろう。

「……教経は一体何なのだ？人主として類い希な器量を有するだけでなく、その軍略も一流だと言わざるを得ない」

「ついでに言うけど、武人としても超一流よ」

「そう言えばそうだったな」

雪蓮と祭殿。二人を相手に子供扱いしたのだからな。

「……ボクは、アイツは『覇者』となるべくこの世に生を受けた人間だと思っているわ。それも、時代に望まれて、ね。戦も上手いけど政についてもしっかりとした意見を持っている。かつて多くの覇者が居たけれど、その誰よりもアイツは優れた器量を持った覇者になれると思う。状況に応じて最良の選択をすることが出来る、希有な存在だと思うわ。

もし呉起が男で、人主として望みうる最高の器を有していたら、きっとアイツのような人間になると思う。政に関しても、それこそ伊尹の如き人だしね。それは、異民族に対する考えを聞いているから冥琳も分かって居ると思うけど」

伊尹。商の湯王に『阿衡』と呼ばれた、その渾名に相応しく物事の釣り合いを取ることに長けた名宰相。それ程の男だというのか。

「呉起と伊尹を合わせたような人、か」

「飽くまでも、ボクの主観よ」

その後稟や風にも話を聞き、詠の主観を伝えると諸手を挙げて賛同していた。挙げた名前はそれぞれ違っていたが、いずれ劣らぬ名君・名将・名宰相の名を挙げていた。

旗揚げ前から彼に従っていた彼女達から、教経に関して様々に話を聞いた。

器量に優れ才に恵まれていたのは出遭った当初からそうだったらしい。だが、内面は未熟で、他人の心情を忖度することが少し苦手であり、戦で兵が死ぬ度に涙を流しているような男だったそうだ。それが、風達に支えられ、精神的に成長して終にはああいう男になっ

たのだ。

『揚羽蝶』が羽化し、とうとう世の人間にその真価を知らしめるべく飛び立ったのだ。

教経は必ず天下に静謐をもたらす事が出来る人間だ。

教経は天下万民の為を思ってより良い選択が出来る人間だ。

教経の器量はこの漢という国だけには収まらないかも知れない。

この国を覆って猶余りあるほどの器量を教経は有している。

他人の痛みや苦しみを想って心を痛めることが出来る優しさと、その感傷を斬り捨ててでも己が掲げる理想を貫き通す強さと、そして非情になりきれぬ甘さとを抱えたままで、そのままの教経で居て貰いたい。

二人ともそう言っていた。

詠を始めとした優秀な女達を惹き付けて已まぬ、器量に優れた男が居たのだ。この女性優位の世の中に。

……そしてどうやらその男は、私のことを想ってくれているようだ。

教経を籠絡しろ、と雪蓮は言った。聞いた当初は、馬鹿なことを言うものだと思っていた。雪蓮には悪いが、私は男を媚を売るような安い女になるつもりはなかった。求めてくれれば仕方がないから応じてやろう、という程度に考えていたのだ。飽くまでも、孫家の為にだ。その為に、仕方がないから子を為してやろうと考えていた。

自分が教経を籠絡することを、主体性を以て行うことを考え始めていることに少し驚いて、どうやら籠絡されたのは私の方だと気付くのに、そう時間は掛からなかった。

～華琳　Ｓｉｄｅ～

麗羽が献帝を廃して劉虞を皇帝に据えた。昭武帝。麗羽はそう呼んでいるらしいわね。

美諡で飾り、名君であると海内に宣言しようとしているらしいけれどね、麗羽。諡は、死人に贈るものよ？まぁ、劉虞は既に死んだも同然だから気を利かせて先に諡号を贈ったのかも知れないけれど。

反董卓連合に参加していた諸侯の内、劉虞を皇帝に据えることに最初に、そして唯一反対の意を表明した公孫賛に麗羽が宣戦を布告し彼女が治める幽州・北平へ兵を入れた、との報告を受けた。

「桂花、公孫賛と黒山賊の連携は上手く行っているのかしら」

「はっ。やはり袁紹が黒山賊の頭目であった張牛角を殺している、というのが決定的だったようです。公孫賛に全面的に協力し共に戦う為に、頭目である張燕が４０，０００の兵を率いて既に北平に入っているようです。現状、袁紹は５０，０００の兵を動員して北平に攻め寄せていますが、初戦に敗れることは間違いないと思われます」

「そう。ご苦労様。出来ればその後兵を逐次投入して泥沼と化してくれれば良いのだけれど」

公孫賛がどう頑張っても敗戦は免れないでしょうが、徹底抗戦すれば麗羽にかなりの痛手を与えることが出来るだけの兵力を得ることは出来たはず。私から見た公孫賛は、突出した長所がない代わりに目立った短所もない人間だ。それは凡人という意味ではなく、まず優秀と言って良い程度で才能の均整が取れているという意味での評価。つまり、穴がないということ。こういう人間に徹底抗戦されるとそう易々とは勝てないはずよ。

「で、桂花。袁術を逐った後、孫策がその領地をそっくりそのまま頂戴しようと兵を動かしていたようだけど、どうなったのかしら」

今の孫策達には、袁術の旧領全てを押さえる事は出来ても維持するだけの兵力はない。彼女達が袁術の旧領をを押さえ、一息入れたところに横槍を入れて、予州を手中に収めたい。

「それがその……」

歯切れが悪いわね、桂花。

「どうしたの？孫策が横死でもしたのかしら？」

「華琳様、その、孫策ですが、平教経に臣従したようです」

「……今、『臣従』と言ったの？桂花。『同盟』では無いの？」

「『臣従』です、華琳様。孫策が長安を訪れ、臣従する旨血盟を交わしたようです」

正直な話、想定外だ。

この乱世において飛躍するために、反董卓連合に参加して名声を求

めたのではなかったか。それが一戦もせずに教経に従うなんて。

……これは拙いわね。これで私は麗羽と教経の二大勢力に完全に挟み込まれた形になってしまった。孫策達が相手であればこそ予州に侵攻しようと思っていたのに。

だが相手が教経となると話は別だ。アレは、范睢の様な男なのだ。どのような些細な恩にも必ず報い、どのような些細な恨みでも必ず報ずる。今この時点で教経との関係を決定的なものにしてしまうのは自殺行為に等しいでしょう。

「その教経はどうしているの」

「平教経は軍兵を長安に集めています。函谷関にある程度の兵を籠めていることから考えて、どうやら荊州か益州、若しくはその両方に侵攻することを考えているようです」

「……順序が逆になるけれど仕方がないわね。麗羽が公孫賛と争っている間に司隷州と并州を併呑するわよ。春蘭、兵の準備は出来ているでしょうね？」

「はい華琳様！予州侵攻の為、準備は万端でしたので問題有りません！」

「桂花、糧食の準備は？」

「万全です。出陣の号令を受ければいつでも出立出来るよう準備してあります」

「そう。二人とも、よくやってくれたわ」

「か、華琳さまぁ～」

「華琳様～」

ここが勝負の分かれ道でしょうね。教経が反董卓連合を向こうに回して勝利をその手にし、大きく飛躍する契機を掴んだように、私も麗羽を相手に勝利を収めて大きく飛躍してみせる。

「出征するわよ。『征』というその字の如く、行ってこの世を正す為の基を築くのよ」

「御意」

春蘭と桂花が慌ただしく駆けていく。

この乱世に曹孟徳の理想を打ち立てる為の戦。

必ず勝ってみせる。勝って覇権争いに名乗りを上げてみせるわ。

蝶の如く～８６～（前書き）

腹が減ったので手作り料理を食べさせて貰いに行ってきます！
実は手料理を作って貰える身分なんですよ、私。
フヒヒ、サーセン。

じゃ、オリジンに行ってきます。
顔で笑って心で泣いて～

ロイエンタールの大馬鹿野郎！

蝶の如く～８６～

～白蓮　Ｓｉｄｅ～

北平に攻め寄せてきた麗羽達を、叩きのめして領外へ追いやった。
麗羽達は私が黒山賊の張燕と連携していることは掴んでいたようだが、張燕が兵を率いて北平まで出張ってきていることに気が付いて居なかったようだ。

とうとう始まったのだ。先のないことが分かっている戦が。
戦が始まる前、麗羽からの宣戦を告げる書状と共に桃香からも書状が来ていた。

『麗羽ちゃんを皇帝にして、皆が手を取り合って笑って暮らせる世の中を作り上げたいの。だから白蓮ちゃん、一時の屈辱を受けることになっても、協力して欲しいの』

皆が手を取り合って？私の手を一方的に払っているのは麗羽の方じゃないか。
一時の屈辱？劉虞の性奴として扱われるのが一時の屈辱だと？

……ふざけるんじゃない。昔から甘い奴だと思っていた。だが、同時にそんな桃香の在り方を好ましいものと感じても居た。けど、どうやらその甘さは他人に対してだけではなく自分についても同様だったみたいだ。私は、絶対に認めない。麗羽も、それを戴いて自力に拠らず理想を為そうとし、己の行いが己が理想と矛盾していることに全く気付かないでこんな事を言ってくる桃香も。

「殿。袁紹軍が再び国境を越えてきましたぞ」

「……そうか。率いている者は？」
「袁紹自らが兵を率いてやってきた模様です。総勢７０，０００。主立った武将を全て引き連れてきているようです。その中には劉備殿の姿もあったようです」
「余計なことだ」
「……殿、劉備殿の縁を頼りに袁紹殿に従うことは出来ませんかな」
「そして私は劉虞の性奴として一生を過ごすのか？そんなのは御免だ。そうなるくらいなら私は死んだ方がマシだ。従ってくれているお前達には本当に申し訳ないと思うけど、これだけは絶対に譲れないんだ」
「……わかりました、我々も覚悟を決めましょう。主君が腹を割ったら、後は家臣が命を賭けるだけです。最期まで殿の思う通りにやりなされ。公孫賛としての生を全うなさるが宜しいのです」

私の我が儘で、皆が死ぬ。
だが、これだけは、どうしても譲れないんだ。
済まない。本当に申し訳ない。皆、死にたく等無いだろうに。

「殿、何というお顔をなさっておられるのです。これから戦ですぞ？もっと不敵に、楽しそうに嗤うものです。それが戦人の心意気というものでありましょう」

目の前の老臣は笑っている。
思えば、私が物心ついてからずっとこうやって私を諭し支えてくれていた。

「死ぬことが怖くないのか？お前は」
「無論恐ろしゅう御座いますが、もっと怖いのは自分が自分でなくなることでしてな。ここで死にたくないからと逃げ出せば、その時点で私など生きるに値しないつまらない人間になってしまうのです

よ。
男というものは誠度し難いものでしてな。下らぬ見栄や世間体というものに拘るものなのです。私には勇気など有りませぬが、男にとっての見栄や世間体は立派に勇気の代替となり得るのだ、ということをこの戦で殿に証明して見せましょうかな。
袁紹殿には精々思い知って貰うことに致しましょう。我らを力で屈服させることが如何に難しいのか、ということを、その身を以て」

そう言って、不敵に嗤った。
私は家臣に恵まれた。心からそう思える。彼らとなら共に死すとも悔いはない。

「ああ、そうしてやる。思い知らせてやるんだ」
「……それで宜しいのです」

麗羽。桃香。
お前達には思い知って貰う。
私達の覚悟の程を。

～雛里　Ｓｉｄｅ～

「一体いつまでかかっているのです！さっさと白蓮さんを引き摺って来るのですわ！」
「麗羽ちゃん、そう苛々しないで。白蓮ちゃんも本当は戦いたくないに違いないよ。麗羽ちゃんの『華麗』さに気が付いて、きっと従ってくれるよ」
「……まぁ、桃香さんがそう言うなら、もう少しだけ我慢して差し上げますわ」
「流石、『華麗』な麗羽ちゃんだね」
「当たり前ですわ。お～ほっほっほ。お～ほっほっほ。もっと褒めても構わなくてよ」

桃香様は、いつの間にか袁紹さんから真名を預けられるような間柄になっていた。
その袁紹さんが公孫賛さんに宣戦を布告する使者を送った際、桃香様は降伏するように書状で説得したようだが公孫賛さんは肯んじなかった。こうなることは分かっていただろうに、従わなかったのだ。

『非道の君でもない今上陛下を廃して劉虞のような愚物を戴くなど出来るはずはない。どのような天下を描こうとも、愚物を戴いて描く天下が美しいものになるとは思えない。自分の矜持と民の為に、従う訳にはいかない』
そう返書があった。
それを聞いた袁紹さんは烈火の如く怒り、自身で兵を率いて公孫賛さんを討伐しに行こうとしたが朱里ちゃんがそれを止めた。先ずは、

『華麗』でない者共を送り込んで様子を見てはどうだろうか、と。

『華麗』でない者同士、気が合うだろうし実力を計るには丁度良いだろう、と。

それを聞いた袁紹さんは我が意を得たりとばかりに麹義さんと田豊さんに５０，０００の兵を率いさせて侵攻させた。進発前、朱里ちゃんが田豊さんを呼び出して出来るだけ被害を押さえて負けるように、と言っていたのを私は知っている。油断して敵地に乗り込むことがないように、初戦で負けておくつもりなのだ。そう言うと、田豊さんは頷いていた。

その思惑通り、４０，０００の兵を残して麹義さんと田豊さんが負けて帰って来た際、あらかじめ伝えられていた桃香様が二人を庇って袁紹さんを説得し、敗戦については不問とすることにした。そして、今度は油断無きように、と袁紹さんに念を押した上で侵攻を開始したのだ。

朱里ちゃんの描く戦には、外連味が全くない。想定外の事態を引き起こさない為に、万全の準備をしてから戦を行うからどうしても外連味のないものになるからだけど。このまま順調に行けば、幽州全土を袁家の支配下に置くことが出来る。そうなれば、南下して曹操さんを討ち滅ぼし、荊州と揚州を手中に収める。そこまで行けば平教経さんがどれ程優秀であろうとも袁家の勝ちは揺るがないだろう。そして袁家は天下を手中に収める。

そうなれば、朱里ちゃんは桃香様の理想をいかなる手段を使ってでも実現する。邪魔になると判断すれば袁紹さんや桃香様を謀殺してでもそれを成し遂げるだろう。そしてその後、朱里ちゃんは死ぬだろう。己の手を汚しすぎた朱里ちゃんが生きて余生を送ろうと考えるとは思えない。己の行いの報いを、己の手で己自身に与えるだろう。朱里ちゃんは、そういう人だから。

どうにかして、それだけは避けないと。
例え一時朱里ちゃんと袂を分かつことになってしまったとしても、
絶対に朱里ちゃんにそんな辛くて哀しい人生を歩ませない。

私が、『鳳雛』と渾名される私の才能全てを、私の命を掛けてでも、
何をしてでも絶対にそんなことはさせない。内向的に過ぎ、人と碌
に話が出来なかった私に初めて出来たお友達。親友と言っても過言
ではない程の、大切な人。

私が救い出してみせる。
朱里ちゃんが嵌り込んでいるその泥沼から。
それが、親友である私が朱里ちゃんにしてあげられることだと思う
から。

～華琳　Ｓｉｄｅ～

「華琳様。姉者が洛陽占拠に成功した模様です。凪、真桜、沙和も
河内を占拠致しました」
「そう。これで残りは河東と并州だけね」

「はっ」

河南郡に侵攻し、支配下に置いた私に秋蘭がそう報告してくる。
皆、良くやってくれている。

凪。姓は楽、名を進、字を文謙。
真桜。姓は李、名を典、字を曼成。
沙和。姓は于、名を禁、字を文則。

三羽烏とでも言うべき三人。
三人寄れば文殊の知恵ではないが、集まれば本当にバランスの取れた軍になる。
期待通りの働きを見せてくれたようね。

麗羽は公孫賛討伐の為、司隷州と并州から兵を引き抜いて北平へ向かわせた。
冀州を侵されない限り危機感を抱かないだろうという私の予測は当たり、司隷州全域を押さえるのに後僅か、という所まで来ている。
まあ、直ぐに河東を落としたという報告が来るでしょう。桂花の下には流々もいるのだし、河東を攻めるに懸念事項はなかったのだから。

流々。姓は典、名を韋、字はない。
武勇に優れ、季衣と互角に打ち合う膂力を持つ貴重な将だ。また、彼女の作る料理は、この私の舌を満足させてくれる。
その意味でも、彼女は貴重な存在だ。

「それで秋蘭。公孫賛と麗羽はどうなっているのかしら」
「はっ。一度５０，０００の兵で北平に侵攻致しましたが敢え無く撃退されたようです。その為、今度は７０，０００の兵を集め、再

度侵攻する模様です」
「そう。こちらの状況が麗羽に伝わるまで、どの程度時間が掛かるかしら」
「……一月以内には伝わるでしょうが、公孫賛が早期に敗退することはあり得ぬと思いますので後背を突かれる懸念はないでしょう」
「あら、なぜかしら」
「張燕は賊の頭目ではありますが、袁紹軍はその張燕に散々煮え湯を飲まされております。袁紹が低能であることもありますが、張燕に見所があったからということもあるでしょう。その張燕に、これといった欠点のない公孫賛殿が合力して袁紹に当たっております。これを打ち破るのは少々骨かと」
そうでしょうね。そうなるように仕向けたのだから期待通りに時間を稼いでくれないと困るのよ。
「それにしても、弘農に侵攻した際に平家も侵攻してくる可能性が有ると思っていたのだけれど、どうやら出てこなかったようね、教経は」
「はい。平教経は軍を従えて漢中へ侵攻したようです。また、別働隊として孫策を帥将とした軍勢が荊州北部へ侵攻しております」
……羨ましいわね。
教経の下には、優秀な将と軍師がそれこそ綺羅星の如く集まっている。
馬騰、孫策、趙雲、関羽。軍師に、郭嘉、程?、賈駆。
兵数さえ揃えれば、２面作戦でも３面作戦でも可能でしょう。
「教経が漢中を押さえるのは間違いないわね」
「そう思います。率いる兵は平教経が４０，０００、孫策が２０，０００。軍師として、平教経に周瑜が。孫策には郭嘉が付いている

ようです」
「早速配下の将を混成して軍を編成するなんて、やるじゃない。手を焼くような相手は居ないでしょうし、互いの実力を認めることでより早く家中を一つに纏めようということね」
「そのようです。また、函谷関には董卓が入っており、我が軍に対して備えている模様です。軍師に陳宮が付いており、将として呂布と華雄が付き従っております」
「……董卓軍じゃない」
「……はい」
「懐が深いというか警戒心が足りないというか。まぁ、教経らしいけれど」

あの男のことだから、裏切られないという確信有ってのことでしょうけどね。

「……華琳様、どうやら河東も落ちたようです」
「そのようね」

伝令が走ってこちらに向かって来ている。
その表情の明るさからして、先ず間違いないでしょう。

「申し上げます！荀?様、典韋様、河東郡の攻略に成功致しました！」
「これで司隷州から袁紹軍を叩き出したことになりますね、華琳様」
「ええ。でも、まだ并州が残っているわ。気を抜かないで行きましょう、秋蘭」
「御意」

并州を併呑してまだ麗羽と公孫賛が争っているようなら、後背を突いてあげるわ、麗羽。公孫賛諸共に飲み込んであげる。この私がね。

蝶の如く～87～（前書き）

三勢力書いていくと時系列がどうしても前後する……
ご容赦下さいませ。

蝶の如く～87～

～愛紗　Ｓｉｄｅ～

秋の実りを収穫し、投機によって利殖を行った結果呉郡から雪蓮の妹が民達を吸収しながら南陽郡まで移動するだけの糧食が確保出来た、と稟が教経様に報告している。

「さて、これから忙しくなるぞ？分かっているだろうな、皆？」

教経様はそう言って皆を見渡す。

そう、これから忙しくなるのだ。

袁紹が公孫賛を討ち滅ぼす為に兵を差し向けた。

曹操が司隷州に侵攻し、恐らくその先の并州までも併呑しようとしている。

そんな中、教経様は軍を三分割し、益州北部と荊州北部を併呑しようと目論んでいる。前年、状況が許す限りにおいて軍旅を催すと宣言していらっしゃったが、その方針に変更はないようだ。

三分割した兵の内、一つは教経様が率いて益州北部へ遠征し、一つは雪蓮が率いて荊州北部へ遠征する。残りの一つは南郷郡に待機し、不測の事態に備える。南郷郡であれば京兆府へも近く、また南陽郡が危急の際も救援に駆けつけることが出来る。

また、月が董卓軍を率いて函谷関へ篭もることも決まっている。他でもない月自身がそれを望んだのだ。その月に朔と恋、ねねが従う。恋の武勇を証明しようと暴走する嫌いがあるねねも、朔が居ればまず大丈夫だろう。朔がああ変わってから、ねねは朔の言う事に逆らえないようだ。まあ、そうだろう。唯々月の為だけを思っている朔

の言動を見せられると、己の至らなさばかりが目について思わず恥ずかしくなるだろうから。人に仕えるとはこういう事だ、という理想の在り方の一つを体現している。私でも学ぶところが多くある。恋に惚れ込んで仕えているねねにしてみれば、それこそ身につまされていることだろう。

だが、問題はそこではない。

教経様が一体誰を伴って征かれるのか。それが一番の問題だ。出来れば、私を伴って欲しい。

「主、忙しくなるのは分かっております。これから天下を統一しようという、その先駆けとなる戦を始めるのですからな。それで、どのような陣容で戦に向かうのです」

「まぁ待てよ、星。先ずは孫家と民達の移動について話をしよう。雪蓮、孫権達に移動するように言ってくれ。要所要所に糧食を纏めてあるからそれを消費しながら移動させてくれ。後れを取ることはないと思うが、糧食を狙って賊共が襲ってくることも考えられる。俺たちが并州から雍州へ移動した時のように諸侯が動かないという保証もない。出来うる限り迅速にな」

「分かったわ。伝令を走らせておくから安心して。例え諸侯が動いてもあの辺りにいる有象無象に負けるような娘じゃないし、祭も付いているから任せてくれていいわ」

「あぁ、任せる。戦の陣容については、稟から説明してくれ」

「畏まりました。既に承知していることもあるでしょうが、改めて説明しておきます。

……先ず平家の兵を三分割します。第一軍として兵４０，０００。教経殿がこれを率います。軍師は冥琳。益州北部の攻略を目的とします。第二軍として兵２０，０００。雪蓮がこれを率います。軍師は私。こちらは荊州北部の攻略を目的とします。第三軍として兵４０，０００。碧がこれを率います。軍師は詠。この軍は遊軍として

他勢力からの侵攻に備えます。
また、風は長安から諜報と謀略の総指揮を執って下さい。統一された意思の下で行った方が効果が高いでしょう。以前教経様が仰っておられたように、テイ族への工作をお願い致します。仕込みは完了しており、約定が守られるなら協力しても良い、という返答を得ておりますので有効に活用して下さい。
第一軍は益州北部を西から東へ。第二軍は荊州北部を東から西へ攻略していき、合流するように動いて下さい。どちらかの侵攻が止まっても、もう一方が攻略していけば問題有りません」
「ねえ、質問があるんだけど良いかしら」
「なんですか、雪蓮」
「両方とも止められるってことはないの？」
「可能性としてはありますが、少ないと思います。平家は、軍師もそうですが将も優秀です。この国で最も充実している勢力は私達だと自信を持って言えます。油断はなりませんが、警戒する必要がない程度の人間しか居ません。それに時間が掛かっても問題ありません。曹操殿に対しては碧が備えて居ますし、その背後に袁紹が居る以上碧と詠の予想を超える形で積極的に攻勢を掛けてくる可能性は低いでしょう」
「そう。それならいいのよ」

いつものことだが、稟の説明は理路整然としている。これで納得出来ない人間は居ないだろう、と思えるほどに。まぁ、件の袁紹などは理解出来そうにもないが。

「では、将の配置について話をします」
「稟、ちょっといいかい」
「なんでしょうか」
「私の姪っ子なんだが、呼び寄せても構わないかい？将として、それなりに有能だと思うんだよ、あれは。ご主人様の役に立つと思う

んだけどねぇ」
「それは構いませんが、涼州の押さえをやっていたのでは？」
「押さえているのは私の子供がやっているさ。だから大丈夫だよ」
「それであれば問題無いと思いますが、教経殿、宜しいですか？」
「碧の良いようにしてくれればいいさ。俺に文句はないンだからねぇ」
「有り難うよ、ご主人様」
「……改めて、将の配置について話をします」
「ああ、済まなかったね、稟」
「いえ、構いません。教経様の為になることであれば」

最近、稟の教経様への傾倒ぶりが激しい。
教経様の為であれば、本当に何でもやるだろう。
その、夜の行為も相当に凄いことをしているのだから。口でなんて私にはとても……いや、でも負ける訳には……

「教経様に付き従う将は、星と琴。雪蓮に付き従う将は愛紗と霞。碧に付き従う将は、翠。あと、涼州から来る姪っ子も合流して早々ですが碧の下で将になって貰いましょう。これで、攻略を開始します」

……教経様と一緒ではないのか。一緒に征くことになった星を見る。心底嬉しそうだ。
羨ましい。そう思うが、稟が勝手に全てを決めた訳ではない。教経様もそれが良いと考えてこうしたに違いないのだから。そうであれば、私はその考えが正しいことを証明して差し上げるだけだ。

「教経様、出立はいつになるでしょうか」
「そうだねぇ。五日後にしようか」
「？準備にそのように時間が掛かるでしょうか？必要な物資も全て

揃っており、後は兵を集結させるだけだと思うのですが」
「……愛紗、理由については後で私から説明してあげます」
「？分かった」
「ま、そういう訳で出立は五日後な。皆そのつもりで準備しておいてくれ」
「御意」

後で稟から理由を聞かされた。
四日後が、私の番だった。私と一緒に居てから、戦に征くと言っていたらしい。

『愛紗と一緒に征けないから、せめて愛紗と一緒に過ごしてから出征したい』

そう言っていたそうだ。
稟が、少し妬けますが、と言って微妙に機嫌が悪かった事から考えて、本当のことなのだろう。

……憎い人だ。
出立前日ですが、この想いはきちんと受け止めて貰いますからね、教経様。

～星　Ｓｉｄｅ～

主と共に益州北部を攻略し始めて既に一月経とうとしている。
破竹の勢いで武都郡とムン山郡を既に攻略し、梓潼郡攻略に取りかかっているのだが、中々どうして敵もやるものだ。敵将は張任というらしい。強固な陣を構築し、我々を此処で食い止めんという構えだ。そして実際、此処でもう7日経っている。
何度か攻撃を仕掛けているがその悉くを跳ね返し、敵陣は未だ健在だ。

「さて、これで大体奴さんの質というものがわかったな、冥琳」
「フッ……策を用意しているようだが想像を越えるものではなかったしな」
「だねぇ。全面攻勢に備えて罠を用意しているのは良いが、巧妙に隠しすぎだな。素直な良い子だ。違う言い方をすれば阿呆しか相手にしたことがない可哀相な奴だ」
「まあそう言ってやるな、教経。想像出来ぬのだろう。自分を越える才を有する人間と今正に対峙しているということをな」
「えげつない罠を見えるようにして警戒させつつも、見せていること自体が策で何もないのではないかとか悩ませておいて、別の策を以て一気にやっちまうのが一番だろうに。思い付かんものかねぇ」
「頭が廻る奴と戦をしたことがないのだろう。精々思い知らせてやれば良い」
「そうだな」

どうやら二人にとってこの状況は想定通りに戦を行っているに過ぎないらしい。
主に関しては相変わらずだが、冥琳も優秀なようだな。

「……お屋形様、お屋形様は様子見をしていたのですか？」
「あぁ。だから無理しなくていいって言ってたろ？相手の力量を計らぬうちにいきなりぶつかっていくってのは危険だ。勿論、状況次第だがね」
「では主、力量を計り終わった今、どのように攻めようと思っておられるのですか？」
「おいおい、そういう時は先ず軍師様の意見を伺うのが一番じゃないかね？」

ふむ。冥琳に、か。詠が優秀だ、と言っていた程だからな。今わたしが実感しているより遙かに優秀だという事か。

「では冥琳、どうすべきだと思う」
「陣から引き摺り出す」
「……それが簡単に出来れば苦労はしない。相手はあの陣を以て死守しようとしているのだぞ？」
「一芝居打てば良かろう」
「芝居？」
「そうだ。果敢に攻め掛かって居る最中に、長安方面から伝令役が馬に乗ってやってくる。そしてその後本陣が旗を大きく振り、各隊が攻撃を止めて慌ただしく撤退をしていったら、張任はどう思うのだろうな」
「追撃の誘惑に耐えられなくなる、ということですか？」
「恐らくそうなるだろうと私は思っているがな。
張任は我々が様子見をしながら攻め掛かって居るとは思わずに防戦しているはずだ。それなりに危うい場面を現出しているのだからな。

彼にしてみれば、中央で争乱を起こしている勢力はそれなりにやるが大した事がない、という認識を持つに至っているだろう。その認識を持たせるに十分な時間と実績を彼は経験しているのだ。経験から来る思考を否定することは出来ん。それが出来るのは、真の英雄と呼べる人間だけだ」

「……そいつは少しばかり違うだろうよ、冥琳。英雄と雖も自我から解放されることはあり得ない。人である限りにおいてはな。ただ、優秀な人間を登用することに長け、己の思いを前提とせずその進言に耳を傾け真贋を見抜く目をもつ人だけが道を過たずに過ごすことが出来るンだよ」

「フッ……流石は教経だな。私も言葉が不足していたようだ。兎も角、張任は英雄足り得ぬ。英雄を相手にしているなら、これ程糧食に余裕を持って行軍することはあり得ないだろう。私でさえ、補給路を閉塞することを考える。それを行っていない時点で、張任は戦場のことしか見通すことが出来ぬ人間だろう。要するに、軍人の枠を出ることがない。軍人として考えれば、二度とこの地を侵そうと思えぬように強かに叩いてやろうと思うのではないか？星？」

ふむ……確かに、そういうものかも知れぬ。

「……確かにそうかも知れぬな」

「で有ればこそ、この策は成功する。そう思っているのだ、私はな」

「主、主も冥琳と同じですかな？」

「同じじゃないが、冥琳が正しいだろうよ。俺ぁ自分が一旦信頼した人間を疑うような真似はしないンだよ。冥琳の才には全幅の信頼を置いてる。その冥琳が言う事だ、正しいと思ったのなら従うのが俺のすべきことだろうよ。それが君臣の在り方というものだろうさ」

主がそう言うと、冥琳は少し頬を赤らめていた。

……主、いつの間に冥琳を……琴も琴で私に協力してくれと言って

きたし、これはどうやら国取りではなく嫁取りの為の遠征だったようだな……まあ、大いに結構なことだ。私が惚れている男の魅力がそれ程までに高いという事なのだからな。

ただな、二人とも。私が正夫人だからな？それは譲れんのだ。

「では、そのように動くべく準備を致しますかな」

「あぁ、そうしてくれ。琴も頼むぞ」

「はい、お屋形様」

「さっさと終わらせて先に進むとしますかな、主。我らはこのようなところで足止めされている訳にはいかないのですから」

「だねぇ。天下を手中に収めるンだ。張任如きに手間取る訳にはいかねぇンだよ」

そう言って不敵に嗤う。その主に皆頷いている。

「御意」

侮る訳ではないが、さっさと終わらせて貰おうか。

主を敵に回していること自体が大いなる不幸なのだ。それを実感して貰うとしよう。

蝶の如く～８８～（前書き）

はぁ……教経死なねぇかな……羨ましい……

塗り潰せ　もう一度
殺意で　オレを全部
塗り潰すんだ……！

もげろ！

蝶の如く～８８～

～琴　Ｓｉｄｅ～

お屋形様に対する思いを如何にして遂げるか。
最近、私はその事をずっと考え続けている。

函谷関から長安に帰って直ぐに、そのことを星に相談した。
星は驚いていたようだが、直ぐに納得したような表情を見せていた。

「またか」

そう言って。
どうやって思いを遂げるのか。それについては助力するつもりはない、とはっきり言われた。けれど同時に、次の出征で私がお屋形様と共に出征出来るように稟に言っておいてやる、とも言ってくれた。要するに、機会は作ってやるから自力で想いを遂げて見せろ、ということなんだろう。
そう訊くと、その程度の事が出来ないで主の寵を受けようなどと思って貰っては困る、と真面目な顔をして言われた。勝手なことを、と思うが同時にそういうものだろうな、とも思ってしまう。私が星の立場なら同じ事を思うと思うから。

兎に角励むが良いさ。
そう言ってくれた。星が良い、と言ってくれるという事は、稟達も認めてくれるということだと思って良いだろう。お屋形様の女性関係については、星と風が主導権を握っているように見えるから。取り敢えず、本丸に攻め込むにそれを阻んでいた堀に、梯子を駆けることは出来たみたいだ。

後は、私次第。
……誘惑なんて、私に出来る訳はない。私は、剣しか知らないから。
だから、素直にぶつけてみるしかないと思う。その機会をこの出征中につかめると良いんだけど。

武都郡の攻略を終えた。
テイ族の協力により、あっという間に武都郡を攻略したのだ。城内から門を開いたり、流言を飛ばしたりするのに大きく貢献してくれたようだ。それだけでなく軍に参加してくる者達が多くいた。併せて5，０００程度のテイ族が軍に参加している。

お屋形様は、約束した褒賞については事前に全てを与えていらっしゃった。
事前に全て与えることに関して、冥琳だけでなくテイ族の族長も驚いていた。

『次にいつ会えるかなんて分からないだろうが。俺が死ぬかも知れんし、アンタが死ぬかも知れないンだ。俺が約束をしたのは今目の前に居るアンタだ。確実に約定を履行する事を考えるなら、今此処でアンタに与えるのが正しいやり方だろうさ。また後で、なんて、こんな時代じゃ当てにならないンだよ』

約定を履行しないという可能性についてはどうするのか、とテイ族の族長自身が訊いていたがお屋形様は歯牙にも掛けなかった。その程度の一族なら合力して貰う必要もない、交わした約定を守れない恥知らずな一族だと言ってやるだけのことだ。そう仰って。

そのお屋形様に、テイ族の族長は約定以上の馳走をしよう、と言い出したのだ。

訊けば、お屋形様の考え方は彼らの契約に関する考え方と同じなのだという。移動を繰り返す民である以上、次いつ会えるかが分からない。だから一旦交わした約束は絶対で、かつ褒賞があるのなら全額前払いが原則。それを自分から言い出した中華の君主は初めて見た。変わった人間だが、大いに気に入った。だから馳走をしてやるのだ、と言っていた。

その馳走が、５，０００名近く軍に参加して戦っているテイ族達だ。私達だけでなく、新城郡攻略に向かっている雪蓮達の軍にも参陣させたようだ。

お屋形様はやはり凄い人だ。全てを飲み込んでいく。

現在、兵達に交代で休息が与えられている。将にも同様に休息が与えられており、自分に割り当てられて陣屋で一息ついていると星が声を掛けてきた。

「琴、ちょっと良いか」

「？星、どうかしたのですか？」

何か問題でもあったのだろうか。

「……今晩、主は暇だ。私が主を誘っても良いのだが、お前が何やら言っていたのを思い出してな」

「……そ、そうですか。」

いきなり言われても。

まだ、私は何も考えていない。どういう言葉で、どういう流れで話をするのか、全く考えていない。

「……どうしよう……」

「はぁ……何故私が助言しなければならぬのか……良いか琴、主はな、人主として優れ、必要なら己の感傷をばっさりと斬り捨てる事が出来る人だが重大な欠点がある人でな?こと男女の仲に関して、自分が憎からず思っている人間から寄せられる好意を断ることが出来ぬ人だ。お前が本当に主のことを好いていて、それが主にたどたどしくも伝わったなら、断るという選択をどうやっても出来ぬだろうよ」

「……そうでしょうか」

「そうでなくてどうして翠が想いを遂げることが出来るのだ。主は翠を憎からず思っていたのは間違いないが、男女の仲として好いていた訳では決してあるまい。好意を寄せられて、その想いに触れて初めてアレに好意を抱くに至ったに違いないのだ。だから、お前もそうすれば良いではないか。言いたくはないが、抱かれた者勝ちだよ、こと主に関してはな」

星がそう言って苦笑いをする。

「……分かりました。その、星。有り難う」

「……ふん。気に入らないがお前の想いは認めてやる。あと、お前の分の仕事は私がやっておいてやる。但し!後日必ず報いて貰うからな?」

「分かってます。必ず」

何だかんだで星は優しいと思う。この気遣いを無駄にしない様にしないと。

「お屋形様、宜しいでしょうか」
「琴か。珍しいな？」
「は、はい……お忙しいでしょうか」
「いンや、暇だったから構わんよ。まぁ適当に掛けてくれ。水でも出すからさ」
「はい」

お屋形様に割り当てられた陣屋は質素なものだ。こういうところも好ましく思える。君主として整えなければならない最低限の体裁は整えるがそれ以上のものは要らない、と言っていた。食事に関してはかなり五月蠅いようだけど。

「で、どうしたんだね？昼間なら、剣の稽古を付けてくれということなんだろうが」

どう言えばいいのか。
私はお屋形様のことが好きで、最初は殺そうとしていたけど過ちに気付かせてくれて、信念も牙もお屋形様に頂いて、お巫山戯が過ぎるところがあるけど真面目な時のお顔は凛々しくて、朔さんの件のように何より人の心を大切にして、救えるものは全部救おうとして

いて、そんなお屋形様だから私は好きになって、だから……

「だ、抱いて下さい」
「ブーッ」
「きゃっ」

お屋形様が水を吹きだした。水を飲もうとしていた私も、吃驚して水を零してしまった。
……私の羽織が水浸しだ。

「す、済まん……いきなりだったから吃驚したンだ……」
「い、いえ」

取り敢えず、羽織を脱がないと。
そう思い、羽織を脱いでお屋形様の羽織掛けの空きを使わせて貰う。
羽織を掛けてお屋形様と再び向かい合った。
お屋形様は、私をじっと見つめて何も仰らない。

「……その、駄目でしょうか……」

何とかそれだけを絞り出して、お屋形様の反応を待つ。
どうなるんだろう。

～教経　Ｓｉｄｅ～

目の前に、羽織を脱いだ琴が居る。
その、ねぇ。お前さん、サラシ巻いてないのか?純和装だからさ、その、ピンクのポッチがね、まぁ、その、うん、透けて見えるんだよねぇ……誘ってるのか!?あっちの世界でも絶対に見られない、年頃の女の子が和装して水に濡れて、体のラインやら胸のポッチやらを見せられるとこう、望郷の念と共に股間が……駄目でしょうかって言われてもだな……いじらしいねぇ。可愛い。
駄目だ、結構混乱してるな。仕切り直さないと。勢いでやっちまうなんてあり得ない。

「……琴、その、いきなり抱いてくれ、じゃよく分からんから質問しても良いか?」
「は、はい」
「その、俺の事が好きだってことでいいのか」
「は、はい。お慕い申し上げております……」

そう言って頬を染めてもじもじしている。
……やべぇ、可愛い。

「いつ、好きだって思ったンだ?」
「牙突を教えて頂いている時にお屋形様が私の体に触れた時、その、胸が高鳴ると言いますか、恥ずかしいけど嬉しかったと言いますか……はっきりしたのは、函谷関で寝ているお屋形様を膝枕している

時です」

誰か様子を見に来た感じがしてたのは、間違いじゃなかったってこ
とか。

「確かに誰か様子を見に来た気がしてたンだが、琴だったのか」
「はい……お屋形様は覚えていらっしゃらないようですが、その、
寝ているお屋形様に口づけさせて頂きました」
「……なんて言って良いか分からんが、その、結構大胆だな、琴は」
「……お屋形様の方が、大胆だったと思います。その、私、舌を吸
われました」

激鎚オンスロートならぬ激吸ディープスロートだったって……琴を
ピヨらせるのに成功したってか？
何やってるんだよ俺。何で覚えてないんだよ俺。

「その時に、お屋形様に訊いたんです。お屋形様は私のことを女と
して見てくれていますか？と」
「……まぁ、見てると思う。牙突教える時、こっちも結構大変だっ
たから」
「本当ですか？」
「本当だよ」
「そ、そうですか……嬉しいです……私は、ああ言って貰えるまで
弟子か妹弟子程度にしか思われていないのかと思っていましたから」

そう言って心底嬉しそうに微笑む。
……ホント、いじらしくて可愛い。
でな、琴、そろそろその慎ましいけど綺麗な形をした胸とか隠した
方が良いと思うンだよねぇ。

「あ～、琴？前、隠した方が良い」
「え？」
「だからその、な。お前さん、白い服着てるんだぜ？サラシも巻いてないし……隠してくれないとさ、その……分かるだろ？」
「……お屋形様、その、私の体に欲情して下さっているのですか？」
欲情して下さっているとか感謝的な意味合いで言われるのは初めてだなオイ。
「……下さっているも何もないだろうが。兎に角、これで隠せ」
俺の羽織を脱いで、琴に着せてやろうと近寄った時、琴に抱きつかれた。
「こ、琴」
「……お嫌でしょうか？私はその、愛紗や雪蓮のように胸も大きくありませんし、星や風のように融通も利きませんが、お屋形様の寵を受けたいのです……」
俺の胸板のやや下辺りにこう、ふにふにした感触がある。もの凄く柔らかいねぇ……最近、我慢出来るラインが以前より低い気がする。まぁこの堤防、常に決壊してるからなぁ……俺は何なんだろうな本当に……はぁ……
「……駄目だなぁ俺ぁ」
「……駄目、ですか……」
琴が、泣き出しそうになった。
「いやいや、そういう意味じゃないんだって！その、自分の気の多

さに呆れたというか何というか」
「……どういう、意味ですか？はっきり言って欲しいです……」

……どういう意味って、降参だよ、降参。
俺は無理だ。これ断るなんて無理だよ。
琴を寝台まで引っ張って行ってそのまま押し倒す。

「お、お屋形様……」
「……恥ずかしいから一回だけな。……俺は琴のこと、好きだよ。一人の女の子としてさ。可愛いと思う」
「……私も、好きですよ、お屋形様……私を、抱いて下さい……そうして欲しいです……」
「……そのつもりだから、さ」
「は、はい」

胸が小さいとか、お尻が小さいとか、色々言って恥ずかしそうにしてたけど、もの凄く相性が良かった。というか、剣やってるからなのか？その、もの凄く早かったンだが。耐えられなくて。自信が無くなりそうだ。

「……ん……お屋形様……」

疲れ果てて寝ちまった琴は、俺の腕の中で寝ている。
まぁ、こうなったんだから責任は取らないとなぁ……詠宜しく、そう言われたしねぇ。

『責任、取って下さい……ね？』
そう、上目遣いに、おずおずと抱きついてきながら言ってきた琴。
可愛すぎて、思わず口吸ってそのまま雪崩れ込んじまったンだよねぇ……

……俺も今日はちっと……疲れたし……このまま寝よう……か……ね……

蝶の如く～89～（前書き）

爺無双。
長すぎるので分割します。
続きは今日中にうpします。

蝶の如く～８９～

～白蓮　Ｓｉｄｅ～

「殿、右翼左翼共に敵の圧力が強く身動きが取れません！下手に動かせば戦線が崩壊しますぞ！」
「分かっている！白馬義従を出すぞ！遠目から騎射によって援護して攪乱してやれ！」
「御意！」
「攪乱に成功したら兵を再編して劉虞に差し向けるぞ！」
「はっ！」

麗羽達を相手に二度目の会戦が始まった。
こちらは５０，０００強、あちらは７０，０００。地の利はこちらにあるし、今回も大丈夫だろう。そう思っていた。だが、その考えは甘かった。劉虞が、あの愚物が代から態々兵を率いてやってきたのだ。その数２０，０００。烏丸の中でも特に悪質な略奪行為を行う部族を従えて突入してきた。

当初予測していた陣では、対応出来ない。
その為に兵を再編していくらか振り分けようとした丁度その時機に袁紹軍が全面攻勢を掛けてきたのだ。戦線を支える為に、兵の再編などしていられる状況ではなくなってしまった。

安全な場所などこの戦場にはない。本陣と雖も、例外ではないのだ。
私自らが剣を振るわなければならない状況にはなっていないが、そう遠い未来のことではないはずだ。

「殿、敵がやって参りましたぞ！」

「かっかっか。腕が鳴りますのぅ！」

関靖と田楷。

私が生まれてからずっと私の面倒を見てくれていた老臣だ。

二人とも、個人の武勇はそれ程でもないはずだ。私に稽古を付けてくれていた田楷は兎も角、関靖はそれ程でもないという程度ですらないかもしれない。もう、歳なのだから。

「二人とも、無理をするな。もう歳なのだから」

「なんの。まだまだ小僧共には遅れは取りませぬわい」

「よう言うた。その通りじゃ。我ら老いたるとは言え戦人よ。心ゆくまで暴れ回ってやろうぞ！」

その声に、本陣の兵が気勢を上げる。

二人が配下の兵を従えて前線に飛び出していく。配下の兵はいずれも壮年から老境に差し掛かろうとする者達で構成されており膂力や速度は落ちるが、経験に裏打ちされた技と冷静さで次々に敵を屠っていく。

……自ら志願して再び戦場に出てくるだけのことはある。

「そら！小僧共！この儂を討ち取ってみせんか！」

「危なかろうが、阿呆！突出しすぎじゃ！歳を取っても馬鹿は馬鹿のままか！」

「なにを！貴様こそ後から小僧が迫っておるのに気が付いておらぬではないか！」

「貴様ほど耄碌しておらんわ！」

「何じゃと！この頭でっかちの糞爺めが！」

「頭の中がすっからかんの貴様より遙かにマシじゃわい！」

「テメェ！ぶっ殺してやるぞ！」

「やってみせろ！口調だけ若い頃に戻したところで今はひからびた

只の爺じゃろうが！」
「テメェも同じだろうが！」
「儂は貴様より三月遅く生まれておるわ！儂の方が若いわい！」
「口が減らない糞爺め！」
「儂が糞爺なら貴様などとうに棺桶に入っておる死体じゃろうが！」
「なんじゃと～！」

……いつものことだが、仲がよいのか悪いのか全く分からない。だが、あれで居てお互いの死角に入っている敵を次々に屠っている。自分で死角を確認することはしていない。信頼しているのだ、あれは。そう思いたい。

二人の率いている部隊のおかげか、何とか戦線は維持出来たようだ。本陣に寄せてきた敵は、一旦後退している。それから暫く前線で様子を見ていたようだが、再度攻め掛かってこない事を確認してから二人が帰ってくる。

「二人とも、良くやってくれた。これで暫くは持つだろう」
「殿、些か腑に落ちませぬぞ」
「？何がだ？」
「奴ら、何が何でも突破しようという気概が見えませなんだ」
「それは儂も感じた。儂ら二人は確かにそれなりの武勇があるが、それなりでしかない。本気で殺り合うつもりなら、もっと大勢で取り囲むか腕の立つ奴が出てきて直ぐに殺そうとするはずじゃて」
「何か、策があるかもしれないということか……」
「ですな」
「まぁ、策があっても咬み破ってやれば宜しい」
「兵力差を考えんか」
「なんじゃ、怖じ気づいたのか。それとも、漏らしたのかの」
「貴様ほどではないわい」

「なんじゃと！」
「漏らしておったろうが！」
「それは貴様じゃ！」
「いや、貴様じゃ！」
「いやいや、貴様じゃ！」
「もういい！止めろ！」

周囲の兵が笑っている。本陣に関しては、悲壮感など全くない。
これも二人の思惑通りなのだろうか。

「兎に角、警戒しておくとしよう。二人は一旦休んでくれ」
「「御意」」

白馬義従の攪乱により、右翼の自由が確保された。
此処と本陣から兵を引き抜いて、劉虞に当てる。そのまま白馬義従を左翼にも先向けて、兵を再編して右翼と左翼に均等な厚みを持たせないといけない。再編が終われば、勝機はまだある。張燕が常山から更に増援を呼んでいるのだ。

……もし増援が間に合わず負けるにしても、只では負けないからな、麗羽。。

～朱里　Ｓｉｄｅ～

公孫賛が前線の兵を引き抜いて再編し、劉虞へ差し向けた。引き抜いた兵を補充する為に、本陣と左翼から兵を引き抜いて右翼へ回したようだ。
戦闘中に兵を引き抜いて再編するなんて芸当を出来るなんて、やはり公孫賛は有能だと思う。でも、本陣から兵を引き抜いたのは失敗だ。

「桃香様、公孫賛は劉虞様の方へ兵を割きました。これによって敵本陣の兵は開戦時の６割程度まで減少しております。今この時に本陣に対して突入すべきです」
「朱里ちゃん、誰が行けばいいと思う？」
「鈴々ちゃんと張コウさん、麹義さんが良いと思います」
「じゃぁ、麗羽ちゃんにお願いしてくるね」
「はい、お願いします」

今までの戦闘では、将が兵を率いて直截敵陣に乗り込んだりはしていなかった。だから、耐えられたのだ。それを兵の質も将の質も互角であると勘違いしているからこそ、兵を引き抜いたのだろう。でも、それが間違いであるという事を彼女は知ることになる。知った時が、彼女の最期になるだろうけど。

「報告致します！」
「なんでしょうか」
「ホウ統様が敵左翼の動きを封じる為に再度全面攻勢を掛けることを許可して頂きたいとのことです」

流石に雛里ちゃんは私が考えていることが分かっているようだ。

「許可します。また、左翼にも同様に再度全面攻勢を掛けることを伝達して下さい」

「畏まりました！」

劉虞様の兵など放っておけばよいものを。

あれは只の飾りに過ぎないのだから。皇帝自ら討伐に赴くということは、高祖皇帝や光武帝と同様の事績として後世に語り継がれるでありましょう、などと絆されてやってきただけで、戦場で自ら刀を振るえるような人間ではないと思う。覚悟が、足りないから。

兵数を見れば脅威だけど、虎の群れと雖もそれを率いているのが牛では何の脅威にもならない。戦場で、午睡を貪っているに過ぎないのだから。

「朱里ちゃん、麗羽ちゃんから伝言だよ。『やぁ～っておしまいなさぁ～い』だって」

「……分かりました。では、三将軍に伝えて下さい。敵陣を突破して下さい、と。但し、追撃はしてはなりません。易京に籠城するならそれで構わないのです。易京に篭もった際の攻略方法は既に考えてあります。今後のことを考えると、此処で多くの命を無駄に消費する訳にはいかないですから。追撃をした場合は死罪。そう伝えて下さい。軍師たる私の命に従えない将軍は必要有りません」

「わ、わかったよ、朱里ちゃん。必ずそう伝えるから」

「それと、三将軍には田豊さんと沮授さんに付いて貰います。二人が追撃を止めるように伝達をしたら、必ず従って下さい。二人の命は私の命と同様のものと考えて貰います」

「それも、伝えるね」

「はい、お願いします」

陣屋に控えている田豊さんと沮授さんを見る。

「……孔明殿、お任せ頂こう。必ず、企画に沿うように致します」

「……お願いします」

この二人は良くやってくれている。偶に私を気遣ってくれているが、そんなものは不要だ。

私は、桃香様の理想を実現するだけだ。その過程でどんな過酷な命令をすることになろうとも後悔しない。全てが終わるまで、私は立ち止まる訳にはいかないから。だから、皆には死んで貰う。要不要に関わらず、私が望む理想の世の中を顕現させる為に。

～関靖　Ｓｉｄｅ～

「何じゃいあ奴らは。しつこすぎるぞい」

「どうやら本格的に殿の命を縮め参らせようとしておる様だの」

「ハッ、儂らがそれをさせると思うてか」
「……その通りじゃ！武勇も知略も大した役には立たぬが殿を守る為に命を投げ出すぐらいのことは出来るわい」
「元よりそのつもりよ。やはり戦は愉しいモンじゃのう」
「ふん。負け戦じゃと格別にの」
「そうとも！勝ち戦で暴れ回るなど、そんな無粋な真似は出来ぬからのぉ」
「そろそろ、前線が崩されるぞ？」
「腕が鳴るわい！」
「田楷よ」
「……皆まで言うな！分かっておるわい。儂の想いも貴様と同じじゃわ。生きたいだけ生きてきた。心残りはあるが、悔いはない。此処で見事死に花咲かせてくれようぞ」

戦になる前から、分かっておった。
これが、最期の戦じゃ。間違いなく、殿は、我らの殿は死ぬるじゃろう。我らと同じようにそれが耐えられなんだ、既に退役した戦の理を知った古兵共が開戦前に我らの元に集まってきおった。どうせ死ぬるなら、殿の盾になって死にたい。儂らは戦人じゃ、家族に囲まれて安穏として死んでいきとうない。戦場で、殿の目の前で華と散りたい。そういう、戦に魅入られた阿呆共じゃった。
戦で死にたいのも本心じゃろうが、それなら余所で士官すれば良いのじゃ。それを態々公孫家に再度仕官するなど、見え透いておる。貴様らも我らと同じで、殿が孫のように思えて仕方がないのじゃろうが。

これから、死戦となる。文字通りに、死ぬる為の戦じゃ。
田楷は先に逝く。儂は少し遅れて逝くことになっておる。
この攻勢を掛けられる前の事を思い出す。

「関靖、殿はどうされるおつもりか」
「易京に逃げても、死ぬるだけじゃと。皆と共に死ぬるつもりじゃそうじゃわい」
「……何とかならぬのか。殿だけでも何とか逃げることは出来ぬか」
「……難しかろうが、交渉しておる。劉備殿の所の、ホウ統殿に使者を送ってあるわい」
「ホ、ようやるわい」
「当たり前じゃ。何とか殿だけでも助けて貰いたいからの」
「じゃが、殿が生きておることが知れれば追っ手が掛かるぞい？」
「それは問題ないわい。儂の孫娘を身代わりにするわ」
「……関靖、お主」
「言うな田楷。我らの孫娘は殿一人で十分じゃろう。アレもそう言っておったわい」
「……あたら若い命をの……」
「……言うな、言うてくれるな……」
「申し上げます！」
「なんじゃい」
「袁紹軍のホウ統殿より密使が参っております」
「此処へ通せ」
「いえ、この書状を見て頂くように、と言って直ぐに立ち去られました」

成る程、秘密を知るものは少ない方が良いからの。

「田楷、共に見るとしようか」

「おうさ」

「何々？……共に逃げる、と言うておるの。ホウ統殿は袁家を抜けるのか」

「……なんぞあったのかの？」

「分からぬわい。じゃが、あの嬢は戦の天才じゃろう。黄巾共をぶちのめしてやった時の策の冴えはすんばらしいものがあったからの。あの嬢が逃げる、と言う以上それは成功する可能性が高いぞい」

「……信用出来るかの」

「田楷、賭けるしかないじゃろう。殿を何としても生かさねばならん。生きて公孫家を再興して貰わんとならんのじゃ。……まぁ、公孫家再興に関してはどうでも良いがの」

「相変わらず格好付けるだけ付けておいて締まらん事じゃわい」

「放っておけ」

「で、段取りは？」

「本陣に袁家の精兵が突入する予定じゃそうじゃ。その際に左翼側にあるあの森の中で待っているとあるの。ちなみにじゃが、本陣を破った後儂らが敗走したら、追撃はせぬらしい」

「森にの……。しかしまた阿呆な事じゃて。叩ける時に叩いておかねばとんだしっぺい返しを喰らうぞい？」

「儂もそう思うが、そう言う方針なのじゃそうじゃ。従わぬものは死罪。そう言っておるそうじゃ」

「まぁ、勝ちに乗じた追撃戦など面白うも無いからの」

「儂らと同じ思いで禁じた訳ではあるまいが、これで目処が立ったの」

「うむ。お主が此処で死ぬるのは止めじゃ。殿をあの嬢に引き渡して、お主の孫娘を奉じて易京に立て籠もるがよかろう」

「そうじゃな。それで公孫賛は一度死ぬることになる。嬢が何を考

えておるにせよ、時間は稼げることじゃろうて」

田楷、儂が気付かぬと思うておるのか。
貴様、此処で死ぬるつもりではないか。
それを言おうと向き合うが、奴は只嗤いおった。

誰かが、此処で死なねばならぬ。そうでなければ、奉じて行く公孫賛が身代わりであることを見抜く奴が出てくるかも知れぬ。

「思えば貴様とは長いつきあいじゃったの」
「そうじゃの。我ら両名が先代から殿の面倒を見ろと言われてからずっとじゃ。腐れ縁じゃというのに、一向に腐り落ちぬ事よ」
「殿のおかげで、あぶれものじゃったわれらも随分人らしくなった気がするわい」
「まぁ、儂らは一匹狼を気取っておった只の偏屈じゃったからの」
「その腐れ縁がこれで漸く腐り落ちると思えば清々するわ」
「儂とて同じよ。……関靖、先に逝っておる。必ず策を為し果せたとの知らせを持ってこい」
「愉しみにしておれ、必ず、届けてやるわい。孫娘と一緒にな」
「それは楽しみじゃわい。孫娘に酌をさせながら一杯飲むとしようかの」
「今回だけは認めてやるわい」

そう言って、杯に酒を注いで渡してやる。

「本当なら殿から貰うのが良かろうがの、勘付かれても困るで。儂からで我慢せい」
「臭そうな酒じゃの……関靖、愉しかったぞい」

阿呆め、そのようなこと、言わずとも良いわ。

儂とて、愉しかった。貴様と共に殿を戴いて戦場を駆けたあの日々は、儂にとって掛け替えのない、色あせぬ青春なのじゃから。

「何を泣いておるのじゃ、戯けめ。戦人として戦場に臨むこの儂の門出を汚すまいぞ」
「貴様とて泣いておるではないか」
「泣いておらぬわ」
「いや、泣いておる」
「泣いておらぬ！」
「泣いて……まぁ、よいわ。最期まで貴様らしいことだわい」
「当たり前じゃ。死ぬるからと言って儂という人間の中身が変わる訳もない」

そう言って、田楷が酒を飲み干した。
これが、最期の口喧嘩じゃ。これが、貴様が飲む最期の酒じゃ。

「関靖、後は、皆うぬに任せるぞい」
「分かっておる」
「皆、儂と共に殿の為に死ねぃ！此処で戦人の死に花を咲かせ、洟垂れ共に戦の流儀を教えてやろうぞ！」
「「「「「「「おー！！！！！！！」」」」」」」

田楷、任せておけ。
殿は必ずこの儂が嬢の元へ届けてみせるからの。
先に逝って、良い桃の木でも捜しておけ。その下で、また酒盛りでもしようぞ。

蝶の如く～９０～（前書き）

爺達の落日編で御座います。

蝶の如く～９０～

～白蓮　Ｓｉｄｅ～

本陣前で激戦が繰り広げられている。いよいよ、最期の時が来たんだ。
関靖と田楷と共に出撃する為に、本陣へ行くと、関靖が居た。関靖だけが。

「関靖！田楷はどうした！」
「殿、田楷は先に敵を叩きに出ております」
「田楷だけ行かせたのか」
「殿を待っておりましたが、待ちきれなんだ様でしてな。田楷から、杯を預かっております。田楷が注いだ返杯です。飲み干してやって下され」

田楷め。勝手に死にに行くなんて。
そう思いながら、一気に飲み干した。

「……馬鹿め、田楷。直ぐに私もそっちに行くからな」
「……」
「……どうした、関靖」
「私は殿から末期の酒を頂く為に待っておったのですが」
「そうだったな。済まない」

気が動転していたようだな。
関靖の杯に酒を満たしてやる。

「……ほら、末期の酒だ」

「有り難く、頂戴致します」

そう言って関靖が一気に酒を飲み干した。
返杯の為酒を注いでいる関靖が話しかけてくる。

「殿、生まれ変わったら、また易京の桃の木の下で三人で飲みたいものですな」
「……あぁ、そうだな」
「目を閉じれば、易京の桃の花が今でも目に浮かびましょう」

言われて、思わず目を閉じて想像してしまう。
きっと、美味い酒だろう。

「さて殿、返杯で御座います」
「あぁ……」

そう言って、また一気に飲み干した。

「さて、逝くとしようか、関靖」
「ええ、生きましょう、殿」

関靖、お前何を……

「殿、この関靖も田楷も、殿のことを孫娘と思うて生きて参りました。……殿、この先何があろうとも、目覚めた時どうなっていようとも、今からいう事を決して忘れないで下され。
絶対に生きることを諦めないで頂きたい。何としても、公孫賛として生き抜くことを諦めないで頂きたい。その為に、我ら両名を始め多くの者達は死に申す。殿、『生きること』。只それだけを、お忘れ召さるな」

「か、関靖……何か、盛ったな……」

眠気が酷い。耐えられない。
目を見開いているが、関靖の姿が歪んで見える。

「殿、田楷も盛っておりますよ。我らのこと、出来れば、お忘れ召され。殿が我らにまみえるのが、遠い未来のことであることを祈っております。殿、天から殿のことをずっと見ておりますからな」

馬鹿、忘れられる……訳が無いじゃないか……私も連れて行……け、関靖……田……楷……

～雛里　Ｓｉｄｅ～

公孫賛軍の関靖さんから、書状が来た。

『何とか殿を助けて頂きたい』
それだけを書いた書状。そこに籠められた想いを感じられた。

朱里ちゃんを止めるには、内部からでは無理だ。止めようとすれば、私でも殺されてしまうかも知れない。今の朱里ちゃんは、そういう

人になっている。

……だから、袁家を抜ける。抜けて外から朱里ちゃんを一度打ちのめす必要がある。歪んだ理想を掲げていることに、気付いて貰う為に。

ただ、問題はいつ、誰の所に逃げるのか、だった。曹操さんか、平教経さん。二人とも覇道を歩んでいる様に見えるが、そのどちらかしか選択しようがない。より好ましいのは、平教経さんだろう。甘いところがある。その甘さは、考えの甘さではなく人としての優しさから来る甘さだと思う。多分でしかないのがもどかしいけど。

そういう時に、書状が来た。

……公孫賛さんは、反董卓連合に参加した諸侯の中で唯一劉虞の皇帝即位に反対した人だ。天下の心ある人達は公孫賛さんを義侠の人だと言っていることを私は知っている。彼女と共に逃げて、勢力を作り上げる事が出来ないか。公孫賛さんは、今回のことで国を失う代わりに大きなものを得た。『義侠の人』という名声は、間違いなく大きな力になる。得ようと思っても得られないほどの名声を、負けることを承知で臨んだこの戦で得たのだ。

一時期公孫賛さんにお世話になっていた時に、彼女の為人は知っている。あの人が、覚悟を以て事に臨んだ。私が知っている公孫賛さんでは、あり得ないことだと思う。彼女は、覚悟を持つに至ったのではないか。この乱世でどう生きていくのかについての覚悟を。もし、そうであれば。

逃げるには策が必要だが、それは思いついて居る。揚州に不穏な気配がある。そういう噂を流せば。そしてそれに備える為に、先ず私だけでも向かうことにすれば朱里ちゃんは賛成するだろう。私以上に信頼出来る人間が居ないはずだから。

そこから、国境を越えて一気に荊州南部と益州を攻略する。揚州は、人が少ない。平教経さんに臣従した孫家に付き従って移動し始めて

いるという事を聞いている。だから、荊州南部と益州。戦火が及んでいないこの地域には多くの人達が避難している。そこを領有することが出来れば、大きな力を得ることが出来るだろう。

公孫賛さんを戴く事は出来ないだろうか。今の彼女なら、戴くに値する人ではないだろうか。

だがそれでも問題が在る。隠し果せるのか、という所と、私達が荊州攻略に乗り出している最中に後背を突かれはしないかというところだ。

これを解決しないことには、この策は万全とは言い難い。何か、無いのだろうか。それともやはり、平教経さんの所に逃げ込むのが良いのだろうか。

「此処におられたか。嬢、お久しぶりで御座いますな」

「あ……お久しぶりでしゅ……あわわ……」

「敵同士ではありますが、此処では関係有りますまい。殿を救おうという嬢に仇為そうとは思っておりませぬ故ご安心召され」

そんなことは思っていません。関靖さんがどういう人かは、分かっているつもりですから。

「……あ、あの……」

「殿をこれへ」

「はっ」

関靖さんが慌ただしく声を掛けると、公孫賛さんが担がれて来た。

……寝ているようだ。

「関靖さん、これは……」

「嬢、殿の身柄を、嬢に預け申す。公孫家からは、誰も付き添いま

せぬ。嬢に、全てを托します」
「……関靖さん、関靖さんはどうするのですか？」
「儂には、やることがありますでな。それに今更殿にこの老体は必要有りますまい。嬢、嬢が何を考えておるのか、儂は余り頭がよい方ではないから分かりませぬが、殿が命を長らえる事が出来るなら、どのようなことをして頂いても結構で御座る。ただ、殿の矜持を傷つけるような真似だけはしないで頂きたい。この通り、お願い申し上げる」

頭を上げた関靖さんの目を見る。
……この人は、死ぬつもりだ。

「関靖さん、関靖さんも一緒に行きましょう」
「駄目ですな。それでは時間が稼げない」
「時間を稼ぐ？」
「左様。嬢、嬢は逃げるのでありましょう？それであれば、易京に影武者を立てて立て籠もり見事公孫賛を殺して見せ申す。これであれば、時間が稼げましょうが」

確かに、時間が稼げる。影武者も用意するなら、公孫賛さんを隠し通すことも容易だ。
これなら、上手く行く。絶対に上手く行くだろう。この人達は、間違いなく最期まで抵抗するに違いないのだから。

「……分かりました。お預かり致します。必ず、公孫賛さんを生き長らえさせて見せます」
「……嬢が言うと、説得力がありますなぁ。委細お任せ致す。では、我らはこれで」
「……公孫賛さんと、お別れをしなくても良いのですか？」
「嬢、別れは済ませております。時間を掛ければ事が露見する危険

も高まりましょう。それに少々強めの薬を飲んで頂いておりましてな、１０日程度は目覚めますまい。儂や田楷で試した事がありますが、その程度は寝ており申した故。

……もし殿が目覚めて我らのことを口にし死地へ戻ろうとしたらば、この剣をお渡し下され。某と田楷からの形見分けじゃ、と。我らの想いを無駄にせんで下され、と」

そう言って、二振りの剣を渡された。

重い。剣自体は、軽い。でも、これに籠められた二人の想いは本当に重い。

「……死地へ戻ろうとしなくても渡します」

「いや、それは駄目で御座る。我らのことを忘れるようにお願い致しましたのでな。もし覚えておったらば、ということにして貰いたい。覚えていて身も蓋もなく悲しんでくれたらば、で」

この人達は、どういうつもりなのだろうか。何故、こんな死に方を、別れ方をしなければならないのだろうか。桃香様の理想を掲げるなら、まず最初に手を差し伸べるべきなのに、何故こういう死に方を強要しているのだろうか。

哀しい。兎に角哀しい。

「嬢、嬢が泣くことはありますまい」

「……でも……でも……」

「……嬢がどういう人間かが分かった。これで、安心して逝けるというものです。有り難う御座る。

……さらばで御座る、殿」

そう言って、寝ている公孫賛さんの足下に平伏して、顔を背けるようにして急いで森から出ていった。きっと、泣き顔を見せるのを嫌

ったのだ。

あの人達に誓って、私は彼女を生き長らえさせて見せる。
いや、そうしなければならない。それが私に出来ると信じればこそ、
あの人は安心して死ねると言ったのだから。

～田楷　Ｓｉｄｅ～

敵兵が多い。一人一人の力量も高い。
関靖が嬢から貰った情報通り、精兵を以て攻めてきたらしいの。

「やれ、貴様ら、まだ生きておるかの」
「……生きておりますぞ……」
「……まだまだ小僧共には負けはせぬよ……」

皆、元気なようで何よりじゃわ。
皆足下から声が聞こえてきておる気がするがのぉ。

「見ろ！公孫賛が逃げるぞ！」

関靖よ、策が成ったのかの？

まぁ、そんなことはどうでも良い。儂はの、貴様が嫌いじゃが貴様ならやり果せると思っておる。信頼はせん。貴様がやると言ったのだから意地でもやって見せい。

「爺！投降すれば命は助けてやるぞ！」

「小童共よ、吼える前に剣を振らんから死ぬことになるのだ」

そう言って、小童共を斬り捨てる。

斬り捨てられたものの同僚が、怒りを露わにして槍を突いてくる。

躱すことが出来るほど、体力が残っておらぬでな。受けさせて貰うかの。

腹を突き刺されたが、その槍をたぐって小童を引き寄せ、首を掻き斬ってやる。

「じ……爺……」

「なんじゃい。儂は貴様など知らん。貴様の爺はとうに死んでおるのではないかの」

槍を避けようともせず喰らった上で小童を殺した儂を、どうやら恐れて近づいてこぬようだ。

最近の小僧共は戦人の心意気というものさえないらしい。この儂がまだ剣を振るえる内に、この儂を討ち取って立派な死に花を咲かせてやろうという戦人はおらぬらしい。

つまらん世の中になったものだわい。

今までの人生が、頭の中を駆け巡る。

ほほぉ、これが走馬燈というものかの。中々乙なものじゃわい。

字も真名もなく、人から蔑まれ続けた。
関靖も、同じような人生を歩んでおった。
じゃが儂らは互いの傷をなめ合うには少々頑なに過ぎた。
事ある毎に反発し合い、周囲ともめ事を起こし、鼻つまみ者になっていった。
そんな儂らを見て、先代が殿の世話をするように、と仰ったのだ。
これは命令だ、拒否は許さん。そう言っての。今にして思えば、何を考えておったのじゃと思うのぉ。あの時の儂らに殿を預けようとは思わぬよ。この儂自身がそう思うわい。

本当に生まれたばかりじゃったからの。おしめも替えたし、随分泣かれて子守歌を教えて貰いに街へ出て教えて貰ったりしておったよ。
儂が武芸の稽古。関靖が学問。それぞれ、殿が都に出るまで教えておった。
殿は、儂らにとって孫娘のようなもんじゃ。
酔っぱらった関靖が、一度そう言うておった。儂も全く同感じゃったわい。

殿は、生まれてこの方周囲を恨み認めさせる為に戦の事しか考えておらなんだ儂をずいぶんとまぁ人間らしくしてくれたものじゃ。じゃがな……やっぱり死ぬ時ぁ一人、前のめりってのがいい。関靖の阿呆と出遭ったあの頃のようにのぉ。

「誰ぞ。儂の前に立つ勇気があるものはおらぬか！」

そう言っても、近寄ってこない。
仕方があるまいの。

「来ぬなら、儂から征くまでよ！この儂を殺したとて、この儂の心まで殺すことは叶わぬわ！小童共、戦人の死に様をしかとその目に焼き付けるが良い！」

小童共の中に飛び込んで目の前の敵を斬り、そして己が膾に切り刻まれていくのを感じる。

殿。儂は、先に逝っております。出来れば、来ないで頂きたいものじゃ。

だが関靖。貴様は駄目じゃ。早う来い。早う来て、儂と酒でも飲もうぞ。殿を天から見ながらの。

今度は……仲良うして……やっても……良い……が……の……

～関靖　Ｓｉｄｅ～

「関靖様！」

「どうしたのじゃ」

「城内の地面に突然穴が開きました！」
「征け！征って奴らがここに来るまでの時間を稼げ！」
「分かりました！……関靖様、殿を頼みます」
「分かっておる。公孫家の主として相応しい最期を迎えさせてみせる」
「……さらば！」

漸く、この時が来たわい。
易京で、二ヶ月。二ヶ月頑張った。
田楷は、派手な死に方をしたらしい。嬢がその死に様について、態々知らせを入れてくれた。首にされたが、笑っておったらしい。
……阿呆め。阿呆め。乱戦の中、生きて落ち延びて殿を守り参らせることを、一度も考えなかったのだろうな。貴様は、阿呆だから。思いつかなかったのだろう、馬鹿めが。言うてやっておけば良かった。

嬢達は、既に荊州に入っている頃だろう。
手紙は合肥から来ていたのだ。
殿からの便りも有った。もう焼き捨ててしまったから読み返すことは出来ないがの。

馬鹿だの、阿呆だの、許さぬだの、色々と書いてあった。
赤子の頃のように、泣き廻っておったのだろう。文字が涙で歪んでおった。
じゃが、一番聞きたかったことが書いてあったから、一応及第点という所ですかな。

『私は、公孫賛としての生を全うしてみせる』
そう、書いてあった。学問を見なくなってから随分経つが、あの様に綺麗な文字を書くようになっておったのだな。よく間違えては叱

られて泣いておったものを。

執務室へ走りながら、昔のことを思い出しておった。歳は取りたくないものじゃの。

執務室の前まで来ると、儂の隊の古兵共が屯しておった。

「関靖殿、殿は既に自害なさった」

「そうか……立派であったか？」

「……立派に、役目を果たされた……立派にな……本当に、立派であったよ……誇りに思われよ」

「……そうか……」

「顔は、既にそぎ落としてある。衣服と、髪留めと、剣は既に脇に置いてある。後は、火を掛けるだけじゃ」

「……そうか。では、儂が中に入って火を掛ける。お主らは……」

「……誰も殉死せぬでは疑われましょう。最初に言ってあった通り、皆殿の御前で、見事華と散ってみせるつもりで御座る」

「そうか。最早何も言うまいぞ」

「では、先に逝かれよ。我らも後を追い申す」

「うむ。……さらばじゃ」

そう言って、部屋に入って中から鍵を閉め、火を放つ。

孫娘が、死んでおった。

よう、死んでくれた。辛かったろう。苦しかったろう。

安心せい、儂も直ぐに逝く。じゃがあの世に行ったら、田楷めに酌をさせてやると約束してしまっておっての。申し訳ないが、一度だけ我慢してやってくれい。

火が強くなる。外から、油を掛けているようだ。

闘争の音も聞こえてくる。皆抵抗しているのだろう。その方が、真

実味が増すだろう。そう言って、配下の古兵共は全員死ぬことを主張したのだ。あ奴らも、阿呆だ。儂も阿呆だがな。公孫家は、どうやら阿呆の巣窟だったらしいの、田楷。お前が一番の阿呆じゃと思うがの。

……じゃがの、田楷。

喜べ。

殿は、生きてゆく、と。そう言っておられるわ。

我らの死は無駄ではないのだ。

我らは、守り果せたのだ。やり遂げてやったのだ。

……殿、儂も田楷も、幸せでありましたよ。

炎に巻かれながら、我知らず、笑っていた。

～雛里　Ｓｉｄｅ～

荊州南部を移動し、益州まであと僅かの所まで来ている。
今頃、北平では関靖さん達が死んでいるだろう。

白蓮様が最初に目を醒ました時、関靖さんが言っていたように直ぐに戻ろうとした。一緒に死ぬんだと、そう言って。でも、関靖さんから托された剣を二振り渡した時、それを押し抱いてずっと泣いていた。その場から動かすことが出来ぬような、身も蓋もない様な哀しみ方だった。
聞けば、もし関靖さん達が死ぬことになったら、それぞれが持っていた、かつて白蓮様が欲しいと言って駄々を捏ねた宝剣を差し上げる約束をしていたのだそうだ。あんな昔のこと、覚えているなんて。
そう言ってずっと泣いていた。

落ち着いてから、私の想いを話してみた。
私はどうしても朱里ちゃんを助けたい。その為に、白蓮様を戴いて、その名声を利用して勢力となり、朱里ちゃんを打ちのめすことでその過ちを正したい。

そう正直に言うと、白蓮様は自分も独力で関靖さん達の仇を取りたいと言った。どんなに苦しい思いをしても良い。今すぐには名前を出すことも出来ないだろう。でも、必ず、公孫賛として袁紹を討ち滅ぼして仇を取ってやりたい、と。

「ホウ統、私は、姓は公孫、名は賛、字を伯珪。真名を白蓮という」
「……白蓮様。私は、姓はホウ、名は統、字を士元。真名を雛里と言います」
「多分、私はお前に苦労ばかり掛けると思う。これと言った長所もないし、名声もお前が思っているほどにはない」
「……そんなことはありません。白蓮様、今世間の人が貴女のこと

をどう呼んでいるか、知っていますか？」
「……寝ていたから知らないよ」
「『義侠の人』。そう呼ばれていますよ。誰も知らぬものがおらぬ程に有名です」
「まさか」
「敗残兵の様なりをした人間がこれだけ大ぴらに行軍しているのに、公孫家の旗を掲げると皆道を開けてくれます。物資を献じてくれる人も多くいます。追っ手が来たり調査をするために細作が居たりするのでしょうが、そういった人達を煙に巻いてくれています。それは、白蓮様に皆が期待しているからです。白蓮様の名声は、ご自身が思っているよりも遙かに大きなものとなっています」
「……それもこれも、関靖や田楷達のお陰か」
「……そうです。私は、関靖さんから白蓮様が生き長らえるように取りはからって欲しいと頼まれました。全身全霊を賭けてお仕え致します、白蓮様。私を信じてくれた関靖さんと田楷さんに誓って、そう致します。この身を犠牲にしてでも生き長らえることが出来るように致します」
「……自分を、犠牲にしては駄目だ、雛里。私は絶対に認めないからな。自分が死なないなら、それでいい。今までならきっとそうやって流されるところだろう。だが、もう真っ平だ。私とお前は運命共同体だ。お前が死ぬなら私も死ぬ。だから、いいな？絶対に自分を犠牲にすることは、それだけは許さないからな」
やはり、白蓮様はあの頃とは違う。優柔不断から来る甘さや適当さが無くなっている。この人は、この時代の群雄として立つに値する器量を持っていた。そして今、この時代の中で一勢力を築くだけの器量を身につけた。そう思える。関靖さんと田楷さんのお陰で。私は一生敵いそうにない。田楷さんは、笑って死んでいた。愉しそうに。きっと、関靖さんもそうだろう。私も、そういう死を迎えたいものだ。

「で、雛里、どうするんだ？」
「先ずは荊州と益州の境から始めましょう。その辺りに、有力な豪族が居るという情報を得ています。彼らに協力を要請し、その上で勢力を築きましょう」
「分かった。お前に任せる。良いようにしてくれれば構わない」

新しい天地で、新しい人生を。
私も、白蓮様も。
それぞれの宿願を胸に、必ずそれを成し遂げてみせると思いながら行軍を続けた。

蝶の如く～９１～

～教経　Ｓｉｄｅ～

長安を発ってから既に二月が経過している。
梓潼郡の攻略にそれなりに時間が掛かったが今のところ順調と言って良いだろう。

今は宕渠郡を攻略中だ。
益州は豪族が力を有している。奴さん達は劉璋という御輿をそれ程積極的には担いでいないようだ。勿論、風達が行った流言や調略に拠るところも大きいンだろうが、地方分権的な色合いが強いからこそそういった策が大きな効果をもたらす事が出来るンだろう。要するに、劉璋は連合君主と言った存在で、確固たる地位を確立している訳ではないってことだ。張任にしてからが死ぬまで戦おうとはしなかったのだから。三国志的に考えれば、主君の為に死ぬまで戦うと思ってたンだけどねぇ。どうやら勝手が違うらしい。

「主、何を考えておられるのですか？」
「益州ってのは纏まっているようで纏まっていないンだなぁと思ってたンだよ」
「確かにそうですな。張任のように徹底的に抗戦する者がいる一方で、容易く我らに従うと言った者が多くおりますからな」

梓潼では張任を策によって誘い出し、散々に打ち破ってやった。
だが、攻勢を掛けてきた時は大した事がなかったのに、守勢に回った時の粘り強さには見るべき所があったと思う。張任は、防戦に向いているのだろう。あんまりにも時間が掛かっていたから自ら前線に出て行こうとしたが、冥琳に止められた。

このまま戦っても負けることは分かっているはずだ。早い内に撤退をした方が良いに決まっている。そして、撤退する為の道は開けてある。だが、それでも兵を減らしながら此処に留まっているには理由があるだろう。攻勢にある際に多くの弓を射掛けてきていたが、現状その弓兵の姿が見えない。お前を誘い出して射殺そうとする策かも知れないだろう？だから、前線に出ては駄目だ。お前を、その、死なせる訳にはいかないのだ。

そう言いながら、眼鏡をツイと押し上げた。頬を染めながら。

……萌えたねぇ。知的美人が眼鏡を掛けていて、黒髪ロングが眼鏡を掛けていて、エロい体した女が眼鏡を掛けていて……

『眼鏡』こそ至上！『眼鏡』こそ最強！体の部位を超えた純粋なフェチそれが『眼鏡』だ！！『眼鏡』の為に１２０％の力が出せる……それが俺の強さ……

んんっ……兎に角言う事を聞いて大人しくしていると、冥琳が『揚羽蝶』の旗だけを前線に向かわせた。すると、一斉に弓を斉射してきたのだ。『揚羽蝶』の旗はハリネズミの様になってしまっていた。それを掲げていた奴らは鉄盾を掲げていたから無事だったが、もし何の用意もせずに前線に赴いていたら、大怪我をしたかも知れない。致命傷を負うことはないと思うが、あれだけの矢を全て躱すことは出来なかっただろう。

流石は、周公瑾だ。冥琳のお陰で危険を避けることが出来た。

そう思って礼を言うと、『べ、別にお前の為という訳ではない。皆に主君を失わせる訳にはいかんだろう』と言って、顔をふいっと背けた。顔が朱に染まっていたが。ツンデレとはやるな！

それから直ぐに張任は撤退していった。狙いは、冥琳の言う通り俺の命だったんだろうねぇ。

……しかし、俺はいつの間に冥琳にフラグを立てたンだ？身に覚えがないンだがね。

「主、女子の事を考えておられませぬかな？」

鋭いねぇ星は。まぁ、俺と一番つきあいが長いからなぁ。

「んなこたぁない」

「……頬を染めた冥琳は可愛いものでしたなぁ」

「だねぇ。俺も可愛いと思うンだよねぇ。こう、グッと来るものがあるねぇ」

「……お屋形様、全部漏れてますよ……」

しまった！これは孔明の罠だ！もとい、星の罠だ！

「か、可愛いなどと……」

げぇ！冥琳！

「いけませぬなぁ主。冥琳を妄想で汚すとは」

「お屋形様、私では妄想して下さらないのですか……？」

星ェ……許さないんだってばよ？

……琴、妄想のネタになりたいとか言う女の子を俺は初めて見る気がするンだぜ？

「教経、その、私が可愛いというのは……ほ、本当か？いや、別に気にはしていないが、少しだけ興味があるというか……今まで綺麗だと言われたことはあっても可愛いなどと言われたことは無くてな……だから気になっているだけだ……そう、そうなんだ」

……冥琳、気にしてないって言ったのに最終的に気になっているっ

て言ってるぞ、お前さん。

「お屋形様？」
「教経？」
「主？」
「だぁ～！お前ら迫ってくるな！
琴、お前さんで既に何度か妄想してるから迫ってくるな！
冥琳、お前さんは綺麗かもしれんが、俺は可愛いと思うぞ？
星、覚えてろよこの野郎！」
「お、お屋形様……」
「か、可愛い……」
「ククッ、主、男冥利に尽きますなぁ？」

……何やら口走ってはいけないことを口走った気がする。特に、琴に対して。
糞！覚えてろよ！戦略的撤退だよこの野郎！
マッカーサー、言葉を拝借するぜ？アイルビーバック！……なんか違う気がするンだねぇ……まぁ、いい。

スピードワゴンはクールに去るぜ？

～稟　Ｓｉｄｅ～

「郭嘉様、孟達が城に火を放った模様です」
「そうですか。被害が拡大しないように城に近い家屋を壊しておいて下さい。孟達を逃がさぬように、引き続き警戒しておく様に雪蓮と霞に伝えて下さい」
「はっ」

漸く孟達を下し、魏興郡を攻略した。当初の２０，０００では少しきつかったかも知れない。

新城郡を攻略している最中に、テイ族達が次々に私達に合流してきた。テイ族の族長から命を受けて参戦しに来たのだという。当初の構想では、敵が籠城した場合に内応して貰ったり、流言が広まるように協力して貰う程度の助力を依頼していたはずだ。

どういう事かと訊いてみると、教経殿の約定についての考え方が彼らの考え方と似ているからなのだそうだ。それだけでは漠然としすぎていて分からなかったが、重ねて訊いてみて分かった。教経殿は協力の代償として与えると言っていた恩賞を、事前に全て与えたらしかった。信頼していることを示すのにこれ程良いやり方はないだろう。誠意を示して見せた教経殿に、彼らも誠意を見せようという話になったのだろう。

彼らが兵として加わってくれたお陰で、殊の外攻略が楽になった。数で言えば１０，０００も兵が増えた。そして何より、山岳での彼らの機動力は脅威的なものだった。山から山へ移動して暮らしている彼らにとってこの辺りの山は庭のようなものであるらしく、彼ら

が山間を移動して敵の後背を突いたことで容易く勝利を手に入れる事が出来た。全てが順調に行く時は、こんなものなのだろう。天の時、地の利、人の和。その全てが揃っている状況で負けることはあり得ない。それを現出して見せた教経殿は、やはり非凡な人であるだろう。

「稟、これからどうするんや？」

「教経殿に合流します」

「巴東に侵攻するんと違うんか？」

「いいえ。宕渠郡で合流しようと思います。その上で、巴東郡を攻略しようかと」

「ねぇ、稟。わたし達、結構時間を費やしてると思うんだけど」

「冥琳と連絡は取り合っています。あちらも梓潼郡攻略に時間を費やしたそうです。周辺の状況を考えると、これ以上時間を浪費する訳にはいきません。合流し、圧倒的な兵力を持って一気に侵攻した方が良いと思いますから」

「ま、稟がそう言うなら間違いないんやろな。ウチは稟に従うで」

「私は戦が出来るなら何でも良いわよ」

「はぁ……雪蓮、危ない真似をさせるな、と冥琳から丁寧にお願いされているのです。自重して下さい」

「冥琳が居ないから好き勝手出来ると思ってたのに……お陰で欲求不満よ？」

「宕渠郡で教経殿と合流した後なら、いくらでも暴れて構いませんよ」

「……冥琳が居るじゃない」

そう言って拗ねたような態度を取る。

これで君主だったのだ。少し意外だけど、愛嬌があり何となく許せてしまう。彼女も、教経殿とは異なるながら勢力の主として十分な器量を有していると思う。

只、軍師泣かせだ。
今回孟達を早く下せたのはテイ族の協力が有ったことも大きいが、孟達が準備していた罠や計略を悉く看破出来たことも大きい。それは大体が雪蓮の勘によるものだ。
『ちょっと気持ちが悪いからあっちから行きましょう』とか『孟達が素直に従うなんてあり得ないと思うのよねぇ～。だからいきなり斬りつけてやろうと思うのだけど』とか。
結果として、罠を回避し、一度は従うと使者を寄越した孟達に馬脚を表させた。ご丁寧に、教経殿を歓待する名目で毒殺しようとしていたことまで独白させて。

……軍師が必要なのだろうか。雪蓮に。冥琳がこめかみを押さえながら、納得いかなくても雪蓮の勘には従った方が良いと言っていた理由がよく分かった。本当に、頭が痛くなるでしょうね。

「まぁ、いいわ。教経も居るんだし、退屈することはなさそうだしね」

愉しそうに笑いながらそう言う。

「なんや雪蓮。自分も経ちゃんに墜とされた口かいな」

霞、何を言っているのですか。
止めさせようとは思うが、実は興味があったりします。そのまま続けて下さい。

「別に墜とされては居ないわよ？ただ、興味があるのよねぇ～。教経ってわたしと同じような理想を掲げている訳だし。わたしが純粋に器量で敵わないと感じた初めての人間で、しかも男なんだから。

興味が沸くでしょ？生い立ちとか、今までのこととか、知りたいと思うじゃない」

「……それを墜とされるっちゅうねん」

「そんなこと言ったら、霞、貴女こそそうじゃない。教経と仕合ったこととか反董卓連合の時の話とか朔の真名の話とか、愉しそうに話してたわよ？『経ちゃんは強かったで』とか『ホンマ、人の心をよう分かっとる男やで』とか」

「う、ウチは別にそういうつもりやあらへん」

「じゃ、どういうつもりなのかしら」

……はぁ。また、好敵手が増えそうだ。

「二人とも、その辺りで止めておきましょう。まだ、戦は終わっていないのですよ？」

「またまたそんなこと言って。一刻も早く教経に逢いたいっていうのが本心じゃないの？」

「そうや。稟は最近経ちゃんにぞっこんやからなぁ。寝ても覚めても経ちゃん経ちゃん言うとるんやし」

「な、何か問題が在りますか？」

「……おぉ～、認めるとは思わんかったで。ま、それだけ経ちゃんも愛されとるってことやろうな」

「……冥琳、これは結構大変かも知れないわよ……」

「兎に角、戦後処理が一段落したら進発しますよ？」

「へいへい。了解や」

「分かったわよ」

雪蓮がぼそぼそ言っていたことが気になる。

……教経殿、まさかとは思いますが、冥琳の眼鏡に夢中になっていたりはしませんよね？

蝶の如く～92～（前書き）

4，200，000アクセス突破してました。
週間ユニークアクセスが一位になってました。
テンション上がりました……有り難う御座います。

期待されているかどうか分かりませんが、何とか1話書きましたのでうpします。

今後とも、拙作を宜しくお願い致します。

蝶の如く～９２～

～朱里　Ｓｉｄｅ～

「孔明殿、申し上げます」
「何ですか」
「士元殿が出奔なさいました」
「……えっ？」
「……士元殿が出奔なさいました。徐州から揚州へ。それに付き従っていた兵の内約１０，０００が共に出奔した模様です。……如何致しましょうか」
「……追う必要はありません。田豊さんは引き続き易京の包囲をお願いします」
「……宜しいのですか？孔明殿」
「構いません」
「……孔明殿が良いと仰るならば何も言いますまい。では、私はこれで」
「……ご苦労様でした」

雛里ちゃんが出奔した。
最近雛里ちゃんの様子がおかしかった事には気が付いて居たけど、桃香様のことで悩んでいるだけだと思っていた。雛里ちゃんは、自分が仕える主の理想だけに従うことは辛うじて我慢出来るようだったが、信頼されていないことには耐えられない様子だったから。
それでも、まさか出奔するなんて思ってもみなかった。

……でも、それで良かったのかも知れない。元々私が桃香様にお仕えすることを決めた際に、お願いして雛里ちゃんに来て貰ったのだから。命を救って頂いた桃香様にお仕えするしかない私とは違って、

雛里ちゃんには桃香様に対して尽くすべき義理というものがないのだから。雛里ちゃんまで私と同じ道を歩むことはない。この道は茨の道なのだから。歩ききった先には死が待って居るであろう、茨の道なのだから。

……もし、桃香様が独立自尊の途を歩んでいらっしゃったら。

今となっては最早意味をなさない自問だけど、それを考えるのを止める気にはならない。諦めきれない未練のようなものだけど。

もし桃香様が独立自尊の道を歩んでいらっしゃったら、きっと苦労をしただろうが今よりも遙かに充実した日々を送っていたことだろうと思う。雛里ちゃんと一緒に、策を考えて。一緒に泣いて、一緒に苦労をして、一緒に笑って。雛里ちゃんが出奔したことで、望むことさえ出来なくなったけれど。

これで、いいんだ。

せめて雛里ちゃんだけでも、自由になって欲しい。

私は、絡め取られてしまってもうここから抜け出すことは出来ないから。

「元気でね、雛里ちゃん」

口に出すと、わたし達が違えた道がもう二度と交わることがない気がして。

寂しくて、一人で泣いた。

一人で。

～田豊　Ｓｉｄｅ～

士元殿が出奔した。
その報告を孔明殿にした際の、孔明殿の顔が目に焼き付いて離れない。

私と沮授は、孔明殿に命を救われた。
郭図や辛毘から讒言され、処刑されるところだったのだ。
その我らを助けた上で、袁家の天下を描き出す為に我らの才と命が欲しい、と。そう仰った。我らは元よりその為に命を捨てることを厭わないつもりだった。我らに否やのあろうはずがなかった。

これまで孔明殿を見てきたが、孔明殿は無理をしている。体力的にではなく精神的にだ。本当は、袁家の天下など描きたくもないに違いないのだ。
それが従っているのは、偏に劉備殿が麗羽様に従っているからであろう。

だがあの顔は。
孔明殿は、我らには決して頼らない。弱みを見せたくないという事もあるのだろうがそれ以上に、余計な感情を持たないようにしなければならないと考えている節がある。恐らくだが、気を許してしま

った人間に死ぬことが分かっている策を実行させることが辛いからだろう。辛い思いをせぬように、気を許さないように心がけているように見える。

その孔明殿が頼ることが出来る唯一人が士元殿であった。その士元殿を失った孔明殿はそれでも気丈に振る舞っていたが、人はそのように強いものではないだろう。そう思って陣屋の前で中の様子を窺っていたが、案の定泣いておられるようだ。

……私は袁家の家臣だ。だが、孔明殿から受けた恩は計り知れぬものがある。

只命を救われただけではない。劉備殿に知恵を付け、その劉備殿から麗羽様を説くことによって袁家をより望ましい方向へ導くことが出来るということを示して下さった。そのことで、私も沮授も再び夢を描くことが出来るようになったのだ。孔明殿が認めた人間ということで、劉備殿は格別に目をかけてくれている。お陰でわたし達が思い描いていた策のいくつかを現実のものと出来た。それもこれも、孔明殿のお陰だ。

袁家の為に尽くす事も重要だが、この恩に報いることはそれ以上に重要だろう。私という人間が私の夢を失わず私としてこの乱世で生きていけるのは、間違いなく孔明殿のお陰なのだから。

そう、この恩には必ず報いなければならない。

いずれ、孔明殿とわたし達は道を違えることになるだろう。確信はないが、漠然とそう感じる。孔明殿は本来麗羽様などに仕えるような人ではないのだから。孔明殿が一度選んだこの道を歩むことに悩む日がもしも来たならば、たった一度だけ。たった一度だけだが、袁家より孔明殿を優先しよう。

孔明殿の陣屋の前で人払いをしながら、そう心に決めた。

きっと沮授も賛成してくれるだろう。

～華琳　Ｓｉｄｅ～

当初の予定通り并州を併呑した。
春蘭を総大将、桂花を軍師とし、将に三羽烏を付けて并州攻略を行わせたが、思いの外上手くいった。やはり麗羽では教経を慕う并州を従わせることが出来ていなかったようね。教経と同じように統治することは出来ないと思うけど、今よりはマシな政を行う自信がある。もし私を信じて貰えるなら、協力して貰えないかしら。そう言ってやると、領民達が并州各地で一斉に蜂起したのだ。後は、約定を守るだけである程度の落ち着きを見せるでしょう。麗羽が馬鹿だったお陰で、戦も統治も随分と楽になる。何せ、麗羽を下回らなければ良いのだから。これ程楽なことはないわ。

その麗羽はまだ易京を落とせていない。細作を密に放って戦況の把握に努めているけれど、袁紹軍の総軍師とも言うべき存在である諸葛亮は易京を力攻めにするようなことをせず、地下を掘り進めて城内に一気に兵を送り込むことを考えているようね。工事自体は捗っている様だけれど、そもそもその企画を為す為にはかなりの時間を

必要とするでしょう。易京を囲んで一月半程度経過しているが、まだもう少し時間が掛かると見て良いでしょうね。

後背を突くべきか。

それとも、来るべき麗羽との雌雄を決する戦に向けて兵を休息させ、新しく募兵し、訓練を施したり兵糧を集めたりする時間に充てた方が良いのかしら。

個人的には後背を突きたい。突いて一気に麗羽の領地を併呑したい。しかし北平に攻め入った兵とは別に、領内にはまだ１００，０００近くの兵がいる。細作によれば、冀州には沮授が残って不測の事態に備えているのだ。易京攻略に時間を掛けているのは、私を誘っているのかも知れない。麗羽だけであればその可能性を否定出来るのだけれど、諸葛亮の存在が麗羽達の戦略というものを見えにくくしている。

今結論を出さずに暫く様子を見る、という結論は最悪のものね。時間は平等に過ぎてゆくもの。私が足踏みをしている間に、易京が落ちるかも知れないのだから。真意が分からず後背を突きかねている現状を考えれば、残されている時間を将来の準備に充てた方が良いでしょうね。

「秋蘭、募兵を行うように天和達に伝えて貰えるかしら」

「畏まりました、華琳様。……しかし、今から練兵して間に合うでしょうか」

「別に募兵した兵を前線で使わなければならない等という決まりはないのよ？秋蘭。募兵して練度が不足している兵を国元の警備に当て、練度の高い兵を全て前線に連れて行ける状況を作れれば御の字だと思っているわ」

「成る程、そうでしたか」

今から兵をかき集めても、５０，０００が限界でしょうね。
けれど条件は麗羽も同じ。領民全てを兵にする訳にはいかないのだから、今回と同じで総勢１４０，０００程度でしかないでしょう。公孫賛が随分抵抗したお陰で、即動ける兵となると１１０，０００前後になる。
そして、麗羽達は幽州を手に入れてしまった。戦禍に呑まれ動揺の激しい幽州を烏丸や鮮卑が放っておくとは思えない。劉虞と彼らの関係も一部を除いて険悪なものだし、侵攻は免れない状況でしょう。彼らにも備えなければならない事を考えると、更に投入出来る兵は減るはず。

……これなら勝てそうね。
エン州と冀州の境、東郡で麗羽を迎え撃つ。河水を盾に防衛線を張れば、渡河中の袁紹軍を叩けるし守りやすいでしょうからね。

「秋蘭、烏丸と鮮卑に金穀を与え、幽州で暴れてくれるように依頼して貰えるかしら。実際に幽州で暴れるかどうかは、気が向いたら、という程度に考えて貰って構わない、と。但し、幽州に攻め込まなくても構わないが、国境で兵を集結させることだけは行って欲しいと」
「御意」

麗羽だけが相手であれば、これで大丈夫でしょう。

だが一番の問題が残っている。
教経。
麗羽が攻め寄せて来た際に教経が後背から襲ってきた場合、絶対に耐えられない。現在教経は漢中と荊州北部を攻略し、益州北部をあと僅かで攻略し終える所まで来ている。何とか、教経を押さえることは出来ないか。

……劉季玉と劉景升。二人とも新皇帝劉虞の親類だ。
荊州を治める劉表はまだ教経と戈を交えては居ないが、劉璋については既に教経と派手にやり合っている。そして益州北部を今正に奪われんとしている。そして結局奪われてしまうだろう。
劉璋を劉虞に泣きつかせ、劉虞から劉表に対して教経討伐の詔を出させれば。連合して教経を討伐するように、との詔を出させれば、教経を領地に縛り付けることが出来るのではないかしら。

その策をどうやって為すのか、桂花と話をする必要があるでしょう。私が宮廷に持っている伝手だけでなく桂花が持っている伝手も使って、劉璋から訴えがあった際に劉表と連合させて教経を討伐しようと思わせることが出来るように前もって仕込みを行っておく必要があるでしょうからね。

そうなると、その策を仕込む時間を稼ぐ必要がある。仕込みが完了する前に麗羽が攻めてきたのでは意味がない。
やはり、黒山賊を使うしかないのでしょうね。私と連携を行うことで、麗羽に徹底抗戦しようと思わせる必要がある。しかし、そう上手く踊ってくれるかしら。今回公孫賛と連携して敗戦したことで、抗戦の意志を無くしてしまっていては意味がないわ。
……諸葛亮を追い落としたい人間で、己の才を高く評価しすぎている人間。その周囲にいる強欲なものに金品を与えて黒山賊を討伐するように進言させ、黒山賊を戦うしか途が残されていない状況に追い込めば黒山賊も戦わざるを得なくなる。そうなれば時間を稼げるでしょう。
その進言者は多ければ多いほど良い。郭図、審配、逢紀、辛評、辛毘。この五人の周囲にいる者達に積極的に働きかけ、公孫賛攻めに功績を挙げた諸葛亮に対抗する為には、長年悩ませ続けられている黒山賊を討伐して功績を挙げる必要があると思わせる。

それと同時に公孫賛攻めの最中に出奔したホウ統と親友であることを理由に挙げ、彼女を監視させて暫く自由に動くことが出来ないように行動を制約する必要があるという事も進言させる。若しくは、徐州か幽州に内政官として左遷させ、来るべき戦に参加出来ないようにしてしまう、ということを進言させても良いかも知れない。あの娘がその辣腕を私との戦に振るえぬような状況に追い込めれば、より容易く麗羽に勝てることでしょう。全く違うことを考えている過程で、意外な名案を思いつくことが出来たわ。

……万全を期す必要があるわね。桂花に劉虞・劉璋・劉表に対する策を行わせる以上、私が直接それを行うべきでしょう。

これだけを、一月以内に実現させる。
それ以上の時間を与えられるとは思えないから。
もし全てが上手くいったら、教経と期限付きで不可侵の約定を交わすことが出来るかも知れない。私が麗羽に勝つ。彼が劉璋と劉表に勝つ。その両方が為されるまで、互いに互いを攻めない。そういう約定を結ぶことも不可能ではないだろう。もし策が成れば、教経は私を気にしながら益州と荊州での戦に乗り出すことになる。その状況であれば、可能かもしれない。

兎に角、此処を乗り越えれば私が登っている山の頂が漸く見えてくるだろう。

……早く頂に登って、そこから見える景色を眺めたいものだわ。
家臣達に忙しく指示を出しながら、未だ見えぬ頂を想っていた。

蝶の如く～９３～

～雪蓮　Ｓｉｄｅ～

宕渠郡で教経達と合流して巴東郡へ雪崩れ込んだ。
大した抵抗もなく巴東郡を手中に収めたのは良かったのだけど、先の戦でちょっと問題が発生した。荊州攻略の際に最前線で戦いたかったのに、冥琳に言い含められていたらしい稟に悉く止められて欲求不満だったわたしは、その旨を教経に伝えて最前線で戦わせてくれるようにお願いした。
戦闘狂だの何だのと失礼なことを言っていたけど、教経がそれを認めてくれたことで最前線に出て行って自ら剣を振るうことが出来た。
そこまでは良かったのだけど。

いつもの悪い癖が出た。欲求不満だったこともあり、とてもではないが抑えられそうにない。冥琳と抱き合って、この火照りを鎮めないと。

そう思い、冥琳を捜して本陣を訪れた私の目に、暢気に歩いている教経の姿が飛び込んできた。
……教経で、抑えが利く。
教経ならこの体の火照りを鎮めることが出来ると感じる。
今何処にいるか分からない冥琳を闇雲に探し続けるより、教経を捕まえて教経に鎮めて貰おう。それが良い。

そう思って一直線に教経に向かっていったわたしに横からぶつかってくる影があった。
払いのけようとして、それが冥琳であることに気が付いた。

「雪蓮、落ち着け」
「……冥琳、悪いけどちょっと退けてくれる？わたし、教経に鎮めて貰おうと思うのよ」
「……駄目だ、雪蓮。それは、認められない」
……冥琳、今、貴女、なんて言ったの？
「もう一度言って貰えるかしら」
「何度でも言うぞ、雪蓮。駄目だ。私は認めることは出来ない」
繰り返した冥琳の顔をじっと見つめる。
冥琳は大真面目だ。冗談で言っている訳ではないらしい。
冥琳がこんな顔をして駄目だと言っているのだから、絶対に退かないだろう。
「……まぁいいわ、冥琳。いつも通り付き合って貰えるかしら」
「分かっている。雪蓮の陣屋に行こう」
そう答えた冥琳の腕を掴んで、私の陣屋へ急いだ。
……冥琳、私の邪魔をした理由、落ち着いたらきっちり話して貰うわよ？
「で、冥琳。一体どうして邪魔したの？嫉妬でもしたの？教経に」

落ち着いてから、冥琳の真意を問い糺すべく質問する。

「そんなことはない」

そんなことはないって顔してないわよ?冥琳。

「冥琳、正直に言って貰わないと、困るんだけどな~。そんなにわたしが教経と寝るのが嫌だったの?」

「……」

いつもなら、『フッ……そうだな』とか言って流すのに。

どうにも歯切れが悪い。

「ねぇ冥琳、どうしたのよ?孫家に御遣いの血を入れる良い機会だと思ったのに」

「雪蓮。教経とそういう関係になるなら、きちんと手順を踏んで貰いたい」

そう言って、真正面からわたしを見据えてくる。

……冥琳、貴女ひょっとして。

「……籠絡するつもりが、籠絡された、ということ?冥琳」

「……そのようだ。認めない訳にはいかないだろう」

「驚いたわ。一体いつの間に?まさか、一目惚れというやつ?」

「それこそまさかだ。私はお前から教経に抱かれて子を為せと言われた時、自分からは動かぬと決めていたのだぞ?」

「じゃ、どうしてそこまで惚れちゃってるのよ。ただ単に好いているって感じじゃないわよ?冥琳」

そう言った私に、冥琳が話をしてくれた。

……実は、冥琳は不治の病に冒されていたという事。
長安を訪れた際、教経がそれを見抜いて医者を捜してくれたこと。
冥琳が居ない将来など思い描けない、と熱烈な求愛の言葉を贈られたこと。
必死になって捜し当てた医者によって、病が治ったこと。
そのことを、本当に喜んでくれていたこと。

それらのことを、嬉しそうに話してくれた。本当に、嬉しそうに。
……ちょっと妬けるわね。

「『私と』教経が寝るのが嫌なんじゃなくて『教経が』私と寝るのが嫌だなんて。冥琳がこんなに可愛らしくなるなんてね～」
「べ、別に嫌だという訳ではないぞ。ただ、好いても居ないのに体の火照りを鎮める為だけに教経を利用しようというのが気に入らなかっただけだ」

あらあら。冥琳、貴女本格的に恋する乙女じゃない。

「へぇ～」
「……なんだ、そのニヤけた面は」
「べっつに～。冥琳って意外に乙女なのね～」
「悪かったな、どうせ私には似合わないよ」
「拗ねちゃって。可愛いんだ～、冥琳」
「と、兎に角。好いても居ないのに教経に言い寄るのは止めろ、雪蓮」
「ん～。好きかも知れないな～とは思ってるのよ？」
「一目惚れか？」
「違うわよ。でも、教経なら火照りを鎮めることが出来るって思ったのよ、わたし。冥琳、知ってるでしょ？この癖、誰でも良いって

訳じゃ無いのよ」

そう。あの時、冥琳を捜していたわたしは、教経に鎮めて貰うのが良い、と思ったのだ。通常ならあり得ない選択だ。でもわたしは教経が選択肢の一つであることを、当たり前のこととして受け入れていた。

「……にしても、教経の気持ちというものがあるだろう」

「教経が好きな相手なら、仕方ないって受け入れる訳？」

「……受け入れるも何も、私はまだ教経とはそういう関係ではないよ、雪蓮」

「そうなりたいとは思ってるわけだ、冥琳は」

「生まれて初めて好きになった男だ。そうなりたいと思うのが当たり前だと思うがな」

「何で好きになった訳？」

「さて、な。平家の主だから好きになった訳でも無いしな」

「要するに、教経だから好き、という訳ね。でも冥琳、結構手強いと思うわよ？」

稟の教経への傾倒ぶりは、それはもう凄いものだったんだから。その事を話すと、冥琳は笑った。

「雪蓮。教経が稟だけを相手にしているなら、確かに手強いだろう。だが、教経には情人が幾人もいる。星もそうだし、琴もどうやら想いを遂げたらしいしな。教経は自分が憎からず思っている相手から寄せられる好意を受け取らないという選択が出来ない人間らしい。私にも十分に入り込む余地がある。そう思っているがな」

「……やる気満々じゃない」

「それはそうだ。戦に勝つ事に喜びを感じるのが軍師の性というものだ。それが例え恋戦であろうと負けるつもりは毛頭無い」

「ま、良いわよ。私も冥琳が言うところの手順を踏んでさっさと襲っちゃおっと」
「雪蓮！」
「手順を踏むって言ったでしょ？それなら文句ないわよね？」

自分の気持ちは、ある程度分かったのよね。少なくとも、あの時に相手として選ぶ程に想っていることは分かった。要するに、そういうことなんでしょう。後ははっきりさせるだけよね。

「……手順とは、何だと思っているのだ、雪蓮」
「好きだってはっきりわかったら、それを本人に宣言するだけじゃないの？後は襲えばいいんでしょ？」
「……襲うことが前提の時点で間違っているとは思わないのか……」
「ま、大丈夫よ。わたしだって無理に襲おうとは思っていないもの。冥琳が教経の子供、産みそうだしね」
「ふん……まぁ、そうなれば良いがな」

冥琳を骨抜きにしてくれちゃって、本当に憎らしいんだから。
……でも覚悟はしておいてね？わたし、結構我が儘なのよね。もしどうしても欲しいって思ったら絶対に手に入れるんだから。

～雛里　Ｓｉｄｅ～

今私達は長沙郡にいる。
水鏡先生に、誇りに思える主を連れて荊州へ帰って来たことを手紙で知らせた。
その水鏡先生から、白蓮様を主と決めて仕える事にした私に祝いをやろう、と長沙の有力者に宛てた紹介状を頂いた。水鏡先生の紹介状を持ってきた人自身も、水鏡先生の紹介状を持っていた。
珍しい風貌をしている。整った顔立ちをしているが、眉毛が白い。

「お初にお目にかかります。私は姓は馬、名は良、字は季常と申します」

噂には聞いたことがある。『馬氏の五常』。優秀な姉妹で、その中でも四女の季常が最も優秀である、と。『馬氏の五常、白眉最も良し』。その馬良が、この人なのか。

「こちらこそお初にお目に掛かる。私は姓は公孫、名は賛、字を伯珪という。幽州で敗れ、家臣を死なせ、家臣のお陰で生き長らえた敗軍の将だ」
「……そう御自身を卑下されたものでもありますまい。貴女の名声は荊州でも日に日に高まっておりますよ。『義侠の人』としてね」

少し皮肉っぽい言い方をした。
この人は、白蓮様が何故皇帝即位に反対したのか、その理由をはっきり知っているに違いない。野にあってそれを知ることが出来るだ

けの才覚がある、というのは尋常ではない。

「……私は世間が思っているような人間ではないよ、馬良。私は、新皇帝となった劉虞にこの身を玩弄されたくないが故に抵抗した、というのが本当のところなんだ。そんなご大層な人間じゃないよ」

「そうはっきりと勘違いだと仰ることは中々出来ぬものでしてな。それが高い名声を得た人間であれば尚更に。……どうやら、ホウ統殿の目に誤りはないようですね」

馬良さんは白蓮様の器量の程を計っているようだ。

水鏡先生からの紹介状にも、馬良さんが白蓮様に仕えたいと思っているとは書いていなかった。唯一言、『好々』とだけ書いてあったのだ。……先生は相変わらずだった。

「だが、その我意を通して家臣の殆どを死なせることになった。皆、私が至らぬせいだ」

「死んでいった家臣の数は、家臣をしてその命擲ってまで従おうと思わせるだけの器量をお持ちであることの証ではありませんか」

「……そんな証明、して貰いたくなかったよ。生きていて欲しかった。どんな形でも良い、生きていて欲しかったよ」

そう言いながら、腰に下げた二振りの剣を眺めていらっしゃった。

「失礼ながら公孫賛殿。貴女はこれから何を望んで生きてゆかれるのです？死んでいった者達に引き摺られ、過去を見て生きてゆかれるのですかな？」

「過去を引き摺るつもりはないが、過去を忘れるつもりもない。私は彼らのお陰で今こうして生きている。彼らの望みはただ一つ、私が『公孫賛』としての生を全うすることだけだった。私は、彼らの為に私自身としてこの乱世を生ききってみせる。私の器量を精一杯

に使ってな。
それが、それだけが、私が彼らにしてやれることだ。いつか私が死んで彼らに見えることがあった時、彼らに恥じることがないような生を全うすること。そうあることが出来るように生きていくつもりだ」
「何を目的として生きて行かれます？」
「生きていく上で誰かの命を犠牲にしてしか生きていく事が出来ぬような、このやりきれない世の中を正す為に。正して人が皆手を取り合って、その命を犠牲として求められるようなことがない世の中を創り出す為に。
その為に私は生きていこうと思う。その為であれば、道半ばで斃れたとしても悔いはない。胸を張って皆に逢いに行ける」

馬良さんは、目を閉じて薄く笑っているようだ。

「……公孫賛殿。是非お仕えさせて頂きたい。私にもその手伝いをさせて頂きたいものです」
「……私の真名は白蓮だよ、馬良」
「私の真名は珂瑛＜カエイ＞と申します、白蓮様」
「『白い瑪瑙の玉』、か」
「こういう眉ですから」
「良いじゃないか。名は体を表すものだよ、珂瑛」
「私の真名は、雛里です。宜しくお願いします」
「私の真名は珂瑛です。こちらこそ宜しくお願いしますね、雛里」
「はい、珂瑛」
「早速だけど、この紹介状を持って臨湘に行けば良いのか？」
「そのつもりで先生は紹介状を珂瑛に持たせたのだと思いますが」
「臨湘と言えば、黄忠という武将がおります。武芸も人柄も一流と言って差し支えないと存じます。恐らく、その黄忠に宛てた紹介状だと思いますが」

「そうか。助力して貰えぬかな」
「白蓮様、その為に先生は紹介状をくれたのだと思います」
「そうか、そうだな。では、逢いに行ってみようか」
「はい」

これからきっと人が集まり始める。珂瑛のように、白蓮様の理想を慕って。
白蓮様は、その胸に抱いている理想を貫き通すだろう。
決して他人の手をいきなり払ったりすることなく、手を差し出して共に行こうと言うだろう。

こう有れかしと思える主君が欲しかった。
そして私は、そういう主君を戴く事が出来たのではないか。

白馬に揺られている白蓮様の背中を見ながら、そう思っていた。

蝶の如く～９４～

～教経　Ｓｉｄｅ～

荊州北部、そして益州北部を手中に収めたことで戦略目的を達成した俺たちは長安へ帰還した。
不在の間溜まった案件を処理し、新しい領地の経営をどうしていくのか、今後の戦略を那辺に定めて政を行うのか、その事を話し合おうと思っていたンだが。

溜まった案件を処理しようと本格的に政務をしようとしたその時に、宛に帰還した雪蓮から孫権を始めとした孫家の人間が面会を望んで居ると連絡を受けた。孫権達は俺が外征を行っている間に無事南陽郡に到着したらしい。
……雪蓮。お前さん、まさか孫家が平家に臣従するということについて、俺と直接話し合わせることで一人一人を説得する面倒を避けたんじゃないかね？

恐らく間違いないとは思うが、会いたくないなんて言う訳にも行かないだろう。のっけから俺の器量を疑われかねない。それに、孫権という人間には興味がある。耄碌するまでは魏を相手に臣従したり反抗したりして、孫呉の主体性を失わずに領地を保持した英傑だ。雪蓮と話をした際に、雪蓮は妹が居るから揚州を確保出来るのではないか、と言ったのだ。袁紹のように、史実とかけ離れた馬鹿であるはずはない。その器量を自分の目で確かめてみたい。

面会を望んで居る人間に会うことを了承する旨雪蓮に連絡した。
都合が付けば、長安に来るだろう。今からその時が愉しみだ。

で、溜まった案件を処理しようと机に向かった訳だが。

「……風、何処で何をしているのかな？風は」
「お兄さんの執務室で、猫を観察しているのですよ」
「猫を観察ねぇ」

まぁ確かに、猫を観察している。置物でも泥棒猫でもない、普通の猫が俺の執務室の片隅で寝ている。そしてその猫と意思疎通を図るべくにゃ～にゃ～言いながら反応を確かめては何ぞぶつぶつ言っている。それは認めようじゃないか。
だがね、お前さん。四つん這いになってお尻をこっちに向けているのは良くないと思うんだよねぇ。先刻からチラチラチラチラと下着が見えそうになっていてだね。お兄さんは弘道お兄さんみたいに紳士じゃないのでくそみちお兄さんになってしまいますよ？……おっと、俺はノンケだ。喰っちまわないンだぜ？

「お兄さん。お兄さんは何処を見ているのですか？……お兄さんはいやらしいのです」
「……風、ワザと見せようとしているんじゃないのかね？」
「何を、ですか？」
「下着を、だねぇ」
「見たいなら見せて欲しいと言ってくれれば良いのです」

前々から分かっていることだが、風は色恋沙汰に関して肝心なところで自分の気持ちをはぐらかす娘だ。その事を理解出来ている俺から見て、風のこの態度が何を意味しているのかは分かっているつもりだ。

「……風、長い間離れていたから寂しかったのか？」
「別にそんなことはないのですよ」

そう言いつつも、少し嬉しそうな表情をした。まぁ、そんな気がするだけなンだがね。
周囲の人間は、風の表情からその感情を読み取ることが難しいらしい。確かにぼ～っとしていたり寝ていたり突然電波を発信したりで、何を考えているのか分からないところはあるが、何となく分からないものかねぇ。
俺が風の感情に気付いたことが嬉しかったのだろう。そう思う。

構って欲しい癖に構ってくれと言わない。
女の意地ってのか？
俺にはよく分からないが、風には風で思うところがあっての態度だろう。
……全く、仕方がない娘だ。

「お、お兄さん、まだお昼なのです」
「分かってる」
「分かっているのに昼間から風に抱きついてくるなんて、お兄さんはとんだ性欲魔人なのです」
「性欲魔人でも何でも良いさ。兎に角、風をこうやって抱っこしたいと思ったンだよ」
「……仕方がないから抱っこされてあげるのです」

抱っこされてあげる、ね。
しっかり抱きついてきてるのは気のせいかねぇ？

「なぁ風。こうやって二人でゆっくりするのは久し振りだな」
「今気付いたのですか？全くお兄さんは女心というものが分かって居ないのです」
「……やっぱり寂しかったんだろ？」

「そんなことを言うのは詠ちゃんや翠ちゃんに任せておけば良いのですよ」
「素直じゃないねぇ、風は」
「風は素直なので……んん」

口答えしようとする風の口を塞いでやる。
最初は俺に為されるがままだったが、直ぐに自分から積極的に口を吸ってきた。

「んっ……ちゅ……んぅ……」
「……はぁ。……風？偶には素直になって欲しいな。風のこと、ちゃんと分かってるつもりだけど、それでも不安になるモンだぜ？一緒に居れなくて、寂しく思ってくれてたンじゃないのか？もしそうだったンなら、今日の政務を早めに切り上げて風と一緒に居ようと思うんだけどな？」
「……ちょっとだけ寂しかったのです。でも、本当にちょっとだけなのです」

……可愛いねぇ。

「そうか……じゃぁ、風と一緒に居ないとな？寂しい思いをさせたんだし、埋め合わせはしておかないとなぁ」
「お兄さん、頑張って早く政務を終わらせないと駄目なのですよ？」
「分かってるよ、風」

そう言うと、風は俺にもう一度口づけをして、執務室の外に出て行った。
風も自分の仕事を早めに切り上げるべく仕事に戻ったのだろう。

……さて、早めに切り上げる為に一丁集中してやりますかね。

期待に応えるのが名優の条件だしねぇ。
風にとっての名優でありたいモンだ。主君としても、男としても、
ね。

～翠　Ｓｉｄｅ～

「知っていると思うが一応自己紹介しておこう。ばかばかしいとは思うが、こういうのは形式が必要だからな。俺は姓を平、名を教経。字も真名もない。好きに呼ぶと良い」
「姓は馬、名は岱。真名はたんぽぽだよ、ご主人様」

蒲公英が将としてご主人様に仕える為、涼州からやってきた。
久し振りに会った蒲公英はいつも通りだった。ご主人様にきちんと挨拶が出来るかどうか心配してたんだけど、どうやらあたしの心配が過ぎたようだ。少し言葉遣いがアレだとは思うけど。

「時間が経って落ち着いたかも知れんが、いきなり俺に臣従することになってたわけだし何か質問があれば答えるが。何かあるかね？」
「んっとね～、ご主人様はどんな感じの女の子が好きなのかな～って。お姉様とかどう？ご主人様」

「た、蒲公英！」
「翠、まぁそう怒ってやるなよ。そういうのが気になるお年頃なんだろうさ。
蒲公英、俺が好きな女性はどんな感じか？だったな。俺は特にこうでないと駄目だ、というこだわりはない。良い体しているから好きになる訳じゃ無いし、俺の言う事を聞くから好きになる訳でもない。その人だから好きになるンであってねぇ。だから、こういう感じの女が好きだ、とはっきり言えるような型はない。出来れば、眼鏡を……んんっ！
で、翠はどうか？という問いに関してだが……」

ご主人様はそう言いながら、あたしを見つめてくる。
頭の先から足の先まで、じっくりとなめ回すように見てくる。
……そんなに見られると恥ずかしいよ、ご主人様。

「可愛いと思う。最近女らしくなってたり、積極的になって来たりと多少変わってきてはいるけど、その変化込みで翠のことが好きだ」

そう言って、あたしの目を見て笑いかけてくる。
ご主人様……は、恥ずかしいからそんなこと言うなよ……でも嬉しいかも……

「……あれ？お姉様？いつもなら『★■※@▼∀っ！？』ってなるところなのに」
「からかってたのかよ」
「蒲公英、甘いねぇ。この娘はもうその程度じゃ動じなくなっちまったのさ。ご主人様と宜しく致してるんだからねぇ。ご主人様じゃないが、『土別れて三日、即ち更に刮目して相待すべし』、さ」
「……碧、お前さん、良いことを言ってやったって面してるがね、ちっと違う気がするンだよねぇ……」

「え～！お姉様、ご主人様とそういう関係なの！？」

蒲公英が素っ頓狂な声を上げて驚いている。
あたしをからかおうと思ってたんだろうけど、想定外の事実だったみたいだ。……まあそうだろうな。あたしが逆の立場でも驚くと思う。こんな短期間にそういう関係になってる訳だから。

「蒲公英、私もそうだよ？」
「え～！叔母様も！？」
「蒲公英、うるさい。ご主人様の前なんだからちょっと静かにしてろ」
「そんなの無理だよ～。涼州にいる時のお姉様からじゃ想像出来ないじゃん。『あたしはあたしより弱い男になんか興味ないね』とか言ってた癖に」
「まぁ、そんな翠にも春が来たってことさね」
「……叔母様にも？」
「そうさねぇ。私も良いようにされちまってるからねぇ」
「……お姉様達ばっかりずるい！蒲公英もそういう事したいな～」
「ななな何言ってるんだよ！たんぽぽにはまだ早いだろ！」
「え～、だってたんぽぽ、もう子供産めるよ？」
「そういう問題じゃない！……お母様、は何となく不正解な気がするから、ご主人様！何とか言ってやってくれよ！」
「ここで俺！？」
「そうでないと収拾付かないだろ！？」
「マジかよ……」
「ねぇご主人様、良いでしょ～？たんぽぽ、ご主人様にいろんな事してあげるよ？」
「駄目だ」
「え～！どうして？たんぽぽがしたいって言ってるんだからすればいいのに」

「……あのな、そういうことは好き合ってる男女がするモンであって出遭って誘われてホイホイとするモンじゃないンだよ、蒲公英」
「……意外にしっかりしてるんだ～」
「……意外にって言葉が引っかかるが、そういうモンだよ」
「ふ～ん」

たんぽぽはニヤニヤ笑いながらそう言った。
……絶対に善からぬ事を考えている。

「じゃ、ご主人様？もっとたんぽぽのこと知ってね？たんぽぽもご主人様のこと一杯知るようにするから」
「……碧、この娘、一体どういうつもりなンだよ」
「まぁ、それだけアンタが興味を引く存在だってことさ。喜んでればいいじゃないか」
「……お前さんと同じで、肉食獣に目を付けられた気分だ」
「おや、ご主人様？食べられちまいたいのかい？」
「んなことぁ一言も言っちゃ居ないだろうが」
「そうかい？そう聞こえたんだけどねぇ」
「駄目だぞ！お母様！順番はちゃんと守らないと！」
「うるさい娘だねぇ。別に良いじゃないか。他に迷惑掛ける訳でも無し」
「あたしに迷惑が掛かるだろ！」
「アンタは私の娘なんだから我慢すればいいじゃないか」
「駄目だ！」
「親娘で修羅場って凄いね、ご主人様。愛されてるんだ～」
「……昼間っから盛り上がる二人もそれを見て楽しめるお前さんもどっかずれてるよ……馬一族ってのはどうなってるンだ……」
「そんな二人を好きなご主人様が一番ずれてるとたんぽぽは思うけどな～」
「放っておけ。自覚はあるンだよ」

ご主人様とたんぽぽが何か言っているようだけど、そんなことはどうでも良いんだ。
お母様。今日はあたしの番なんだ。絶対に譲らないからな。

蝶の如く～９５～（前書き）

朝仕事から帰ってきて投稿した後感想を待っていたら、１５時を廻っていた。な、なにを（ｒｙ

取り敢えず残り投下しますよと。

神速の痴女のお話。

蝶の如く～95～

～霞　Ｓｉｄｅ～

久し振りに平家の将が集まって、鍛錬をしている。
経ちゃんを筆頭として、平家の武人は皆腕が立つ。
星、愛紗、碧、翠、琴、そしてウチ。全員、戦うことが好きなんやと思う。仕合っとる時、ホンマにええ顔をしとるから。此処にはおらんけど、恋と朔、雪蓮も入れると、ようこれだけの人物が揃っとると思うでホンマに。ちょっと余所じゃ考えられへん位充実しとると思う。

実力やと、やっぱり経ちゃんと恋が頭一つ抜け出しとる。
恋と立ち合った時、あの恋が一方的に押されとった。一回目、瞬動を使ったとは言え恋に勝ったんやから。二回目は負けとったけど。悔しそうやったけど、ホンマ愉しそうに笑っとった。『追いかける立場にあるってのは本当に愉しいモンだねぇ』っちゅうて。……まだ満足してへんのか、アンタは。
恋も愉しそうやった。まあ、アイツは負けたことなんか無かったやろうしなぁ。

碧も強い。経ちゃんには及ばんけど、格が違うと言うか。
……勝率は三割程度。なかなか勝たれへんけど、経ちゃんとやる時より打ち合えるから愉しい。経ちゃんは躱しまくるからなぁ……当たらへんから欲求不満になんねん。
雪蓮も強い。勘で全部避けよる。アイツはどうなっとるんや。後で聞いたら、何となく嫌な予感がしたから、という全く納得いかへん理由で躱されとったことが判明した。まぁ、それでも戦績は何とか五分五分ちゅうてもええ位やけど。ちょっと負け越しとるけど次に

勝つから五分五分や。覚えとれよ雪蓮。

そのほかで言うと、経ちゃんとずっと鍛錬しとった星と愛紗がちょっとだけウチより強いかも知れへん。ウチも恋とやりあったから互角に渡り合えとるし戦績も五分五分やけど、瞬動に反応出来る点を考えたらそうなる。

琴には勝ち越しとる。

ただ、経ちゃんに拠ればまだまだ伸び代があるらしい。経ちゃんが教えてやった『牙突』っちゅう業に、初見の際にやられてしもたことを考えても、そうやろうなと思う。しっかしアレはえぐい業やで。突きから薙ぎに変化してきよるから、半端な腕じゃ対応出来へんやろ。突き自体の疾さやキレが増したら、躱すんで精一杯やろうしな。

朔については、董卓軍の時からの通算やと勝ち越しとるけど、最近引き分けばっかりや。

無理に攻めようとせず、ウチの攻撃を悉く防いでくる。月の身辺警護をするようになってから、攻めることより守ることを重視した戦い方になっとる。今までの経験、特に恋に毎日ぶっ飛ばされとったのが大きく影響しとるようで、その防御は正に鉄壁や。朔の防御を抜くことが出来へん。守ることに関しては、平家で一番かも知れへん程の腕になっとると思う。星も愛紗も、朔とは引き分ける。元々体力があることもあって、全くバテへんからなぁ……。

最近平家の将になった蒲公英は、まだまだ実力不足や。

けどそれは、この面子を相手に五分にやり合うにはっちゅう意味であって、並の将など問題にしないくらい強い。馬一族っちゅうのは、皆こんなもんなんやろか。一族揃ってこれ程の武技を身につけとるんなら、尋常や無い一族やで。

皆最初はばらばらで鍛錬しとったんやけど、経ちゃんと鍛錬したがって収拾が付かへんから１０日に一度の割合で全員集まってやるようにした。で、月に一度、鍛錬の成果を確認する意味で勝ち抜き戦をやる。経ちゃんと恋は不参加やけどな。あの二人は人外やから、人間のお祭りには参加したらアカンと思う。
ちなみに、勝ち抜き戦は皆本気でやる。当然武器は刃を潰してあるけど、それでも怪我をする。そやけど、平家には優秀なお抱え医師がおる。黒男と凱っちゅうらしい。凱は最近お抱えになった。なんでも、冥琳の病を治した凄腕の鍼師らしい。経ちゃんや黒男の話し方からすると、姓名が琵琶丸で、真名が凱っちゅうらしい。兎に角、二人がおるお陰でちょっとした怪我なら直ぐに治る。本気でやりあうことができるっちゅうのはホンマにええことやで。

「じゃぁ、籤引きするぞ。一人ずつ籤を引いていけ」
「では私からですな。……『1』、ですな」
「私は『2』です」
「ほう、琴が私の相手か」
「相手に不足はありません。お屋形様の前で鍛錬の成果を発揮して見せます」
「……いいだろう。泣かしてやるぞ？琴よ」
「そう易々とは行きませんよ？星」

経ちゃんの前でやるから、皆気合いが入っとる。個別に鍛錬しとる時に立ち合うけど、その時よりも勝ち抜き戦の時の方が遙かに強い。恋する乙女っちゅうのは凄いモンやで。まぁ、皆が目の色変えるんには理由もあるけどな。
皆次々に籤を引いていく。

「経ちゃん、ウチは7や」
「へぇ、霞がシードか」

「しーど？」
「いや、人数が奇数だからな。一回戦でどうしても一人余るだろ？」
「うん」
「だから、霞は二回戦から参戦ってことになるのさ」
「へぇ～。ウチは一回戦からやりたかったのに」
「ま、籤は絶対だ。最初の取り決めだからな。変更は無しだぜ？」
「分かっとるよ」

籤を引いた結果、組み合わせはこうなった。

一回戦。
星と琴。
碧と愛紗。
翠と蒲公英。

二回戦。
星と琴の勝者と、碧と愛紗の勝者が戦う。
翠と蒲公英の勝者と、ウチが戦う。

最期に、それぞれの勝者が決勝で戦う。

あっちは誰が出てきてもおかしくないと思う。
実力的には碧やろうけど、碧は愛紗とやった後で星か琴とやることになる。かなり辛いだろう。
それを考えると、こっちは多少楽だ。といっても、翠が居るけどな。

「霞、負けないからな」
「お姉様、たんぽぽ、負けるつもり無いんだけどな～」
「たんぽぽに負ける程腑抜けてないよ、あたしは」
「あ～！絶対に後悔させてやるんだから！たんぽぽ、優勝してご主

人様に色々して貰うんだ～」

皆が目の色を変える理由。

それは、優勝者は経ちゃんに言うことを聞いて貰えることになっとるから。

星や愛紗達はその日一日一緒に居るっちゅう願いを叶えて貰うつもりらしい。まあ、蒲公英や雪蓮はあっち側へ参戦することを希望しとるみたいやけど。

……ウチはようわからへんから保留や。好ましいとは思っとるけど、それは戦友としてやと思うしなぁ。

「絶対に負けないからな、たんぽぽ。……場合によっては死んで貰う」

「ちょっと!?お姉様!?」

「……まぁ、今のは自分が悪いと思うで、蒲公英」

稟といい翠といい、ホンマ罪作りな男やで、経ちゃんは。

何で皆こないに夢中になるんやろうな。

「やっぱりアンタが勝ち上がってきたんだねぇ、霞」

「そらそうやで。翠ならまだしも、蒲公英に乱されるようなウチやないで」

蒲公英に勝って決勝に進むことになったウチに、碧がそう話しかけてきた。

翠は、蒲公英にあっけなく負けた。閨での睦言を実況されていつも通り一杯一杯になった翠を、蒲公英は簡単に打ち据えて勝ち上がった。……経ちゃん、凄いことしてんねんな、アンタら。『私の愛馬は凶暴です』ってどういう意味や?経ちゃんの愛馬の『兎論辺』は大人しいええ子やと思うで?

「じゃぁ、少し時間をおいてから決勝だ。二人とも体を休めておくと良い」

「必要無いで?経ちゃん」

「そういう訳にもいかんだろう。出来るだけ平等にな。そうでないと楽しめないだろ?」

そう言って紙の束を取り出した。

決勝は一部の兵や民にも開放される。希望者から抽選で観客を選び、その前で戦う事になっとる。

そこで、経ちゃんが胴元になって賭をやっとるんや。収益にもなるし、兵や民達の憂さ晴らしにもなるし、良いこと尽くめだろうが、と言っていた。まあ、酒代稼ぎに丁度ええから決勝に行かれへんかった時はウチも毎回賭けとるけどな。応援にも熱が入るし、ええ考えやとは思う。

「じゃ、また後でね、霞」

「ああ、ほなまた後でな」

控え室に戻る碧を見送りながら、経ちゃんに賭の具合を聞いてみる。

「賭けはどんな具合なん？」
「碧と霞で８：２位の賭けになってるな」
「……さよか。まあしゃーないかも知れへんけど」
「そうふて腐れるなよ、霞」
「将の間ではどうなっとるんや？」

どうせ皆碧に賭けとるんやろなぁ。ここんとこウチは碧に負けっ放しやし。

「５：１で碧だな」
「……１って……そら最近の戦績なら仕方ないかも知れへんけども……」

テンション下がるわ。

「なンだなンだ、霞。お前さん、戦う前から負けてるじゃねぇか」
「そらそんな賭け率聞かされたら嫌になっても仕方ないやろ？」
「かもしれんが、期待してる人間だって居る訳だ。その期待に応えるのが名優の条件だぜ？」
「はぁ……まあ、その期待しとる奴の為に頑張ってみるけども……」
「そうそう。折角霞に賭けたンだ。勝って貰わなきゃ困るぜ？霞」

経ちゃんが片眼を瞑りながらウチの肩を叩く。

「なンや。経ちゃん、ウチに賭けたんかいな」
「そらそうだろうが」
「……勝ったら旨味があるもんなあ」
「それもあるが、そろそろ霞の本領発揮だろ？負けっ放しで終わるほど諦めがいい女じゃないンだからねぇ。張文遠の実力はこんなモ

ンじゃないはずなんだから」
「ウチの実力、か。でも、碧に勝てる程強ないと思うで？」
「そりゃぁお前さんが勝利に執着していないからだろうよ」
「執着？」
「そ。勝っても負けても楽しめれば、と思ってないかね？」
「……まあ、否定はせえへんよ」
「それじゃ困るンだよ、霞。戦ン時にそれじゃ困る。負ければ死ぬンだ。楽しむのは良いが、死んじゃ元も子もない。戦って戦って戦って戦って戦って戦って戦って戦って。そうやって戦って最期まで生き延びるのが真の戦好きさ。だから、ここぞという時は執着するモンだぜ？『勝つ』ことにねぇ」
「今がその時や、ちゅうんか？」
「そうだな。応援しているのが俺だけなンだ、配当はでかい。これで美味い酒が飲めそうだしな。……少々見くびってくれている皆に目にもの見せてやれ、霞。俺ぁお前さんを信じてるよ。俺の目が正しいってこと、証明して見せてくれよ」

経ちゃんはそう言って主催者席へ戻っていった。
勝てへんかも、とか考えとったの見抜いとったんやろな。ホンマ、よう気を遣う男やで。でもまぁ、折角経ちゃんが応援してくれとるんやし。

「一丁やったろやないかい」

今度こそ勝たせて貰うで、碧。

中庭中央で、碧と対峙する。

「碧、今日は勝たせて貰うで？」

「……エラくやる気になってるじゃないか、霞」

「経ちゃんだけがウチに賭けてくれとるみたいでな。信頼、裏切る訳にはいかんやろ？」

「……私に賭けないなんて、ご主人様、勝ったらお仕置きが必要だね」

こちらを見ていた経ちゃんが引きつった笑顔を浮かべていた。

おもろい顔するな、経ちゃんは。

勝負の判定をする役目を言い渡された愛紗が開始を宣言する。

「行くよ！霞！」

「掛かって来ぃ！」

いきなり剣で鳩尾を突いてくる。

そやけどそれは予測済みや。体の重心からして、前に突っ込んでくるつもりやな。後に躱すのは追い詰められるだけや。

「ほれっ！」

左へ避けながら体を捌いて偃月刀を碧の背後から頸目掛けて振り下ろす。
さて、避けてくれるか？

「……ちぃっ、危ないね！」

碧は身を屈めて躱した。狙い通りや。
往った偃月刀を再び返す。今度は、足下を狙って。
その偃月刀を飛び上がって躱した碧に体当たりをかまして碧を吹っ飛ばす。

「ぐっ……やってくれるじゃないか、霞」

体勢を直ぐに立て直し、碧が再び突っ込んでくる。
偃月刀を連続で薙ぐ。懐にはそう簡単には入らせへん。
薙ぎから突きへ。突きから薙ぎへ。思うがままに変化させて碧を攻める。致命傷は与えらてへんけど、しっかり碧の体力を奪っとる感触がある。

「このまま勝たせて貰うで！」

動きが鈍くなったからか、碧の持つ剣を跳ね上げる事が出来た。そこから碧に向かって突きを繰り出した。これで、勝てる。

「そうはいかないんだよ！霞！」

偃月刀の刃の付け根をしっかりと掴んで引き込まれる。剣を跳ね上げることが出来たのは、誘っとったからや。がら空きになった体を目の前にして、手っ取り早く勝負を付ける為に薙ぎではなく突きを選択したが、それすら碧の思い通りに誘導されただけや。それに気

付かされた。刃が潰してあるから躊躇いなく出来たんやろうけど、それも全部計算に入れとったんやろう。

ここで偃月刀を離せばそれで終わりになってまう。抵抗せずに飛び込んだ方が得策やろ。剣は跳ね上げられとる状態のままや。それ程の痛手は受けんはずや。

そう思って懐に進んで飛び込んだんやけど。

「！」

……甘かった。剣の鞘で思いっきり鳩尾を突かれた。剣だけしか意識しとらんかった。

自分から飛び込んだ勢いも相まって、もの凄い衝撃が鳩尾に加わる。余りの衝撃に一瞬目の前が暗くなるが、どうにか耐えた。けど、ウチはそのまま投げ飛ばされたようや。景色が廻って、浮遊感に包まれとる。そのまま、地面に叩き付けられた。

「かはっ」

息が詰まるが直ぐに横に転がる。さっきまでウチが寝取った地面に、剣が突きささっとった。

「……危ないやろ、碧。死んでまうで？」

「お返しだよ、霞」

碧が不敵に嗤う。

こりゃ、分が悪い。

「良いぞ碧！そのまま一気に決めてしまえ！」

会場は盛り上がっているようだ。
碧に賭けている星達が一層熱を入れて碧を応援している。
今回はここまで、かなぁ。結構ええ所まで行ったと思うんやけどなぁ。
そう思っとったウチの耳に、経ちゃんの声が飛び込んでくる。

「霞！諦めてンじゃねぇ！俺の為に勝て！勝ってお前さんの実力を見せつけてやるンだ！……碧のお仕置きは御免なんだよ……」

……無茶言ってくれるで、ホンマ。

「……霞、ご主人様はああいっているけど、どうするんだい？」
「期待、裏切る訳にはいかんやろ？最期までやってみんと分からへんからな」
「まあ、これで終わりだと思うけどね……！」

そう言って剣を振り下ろしてくる。
でもな、碧。剣筋が素直すぎるで？アンタがウチの思い込みを利用したように、ウチもアンタの思い込みを利用させて貰うで。
碧が振り下ろす剣を、左腕で防ぐ。

「なっ！」
「……甘かったなぁ、碧！お返しや！」

偃月刀を短く持って思いっきり碧の脇腹目掛けて薙ぐ。

「がっ……くっ……」

十分な手応えがあった。そのまま偃月刀を振り抜く。
碧は、膝を着いて動けないようだ。

「碧、ウチの勝ちやな」
「まさか、腕で防ぐなんてね。実戦なら死んでるよ？アンタ」
「でも、これは実戦や無いからな」
「……一本とったつもりがとられてた、か。ふふ。やるじゃないか霞」
「当然や」

近づかへんで？碧。

「……ちっ、油断してないか。愛紗、降参だ」
「……勝者、霞！」

最期まで降参と言わず、逆転しようと狙っていた。
成る程、アレが勝利への執念ちゅうやつやな。

「やったじゃねぇか！霞！」

そう言って経ちゃんが走ってくる。満面の笑みを浮かべて。

「見とったか、経ちゃん！やってやったで！」

そう答えながら、嬉しくて経ちゃんに抱きついた。

「ちょちょっ、霞！？」
「ウチ、頑張ったやろ？」
「……あぁ、頑張ったと思うよ、霞。腕、大丈夫か？」
「ん？……まぁ、痛いけど何とかなるやろ」

「後でしっかり凱に見て貰っとけよ、霞」
「分かっとる」
「んんっ！霞？教経様？いつまでそうやっているのですか？」
「へ？」

そう言えば、ウチずっと抱きついとったんか。

「ああ、悪かったな愛紗。そう怒らんでもええやんか」
「人前だ、ということを忘れていませんか？霞」

そう琴に言われて、兵や民の前やったことに気が付いた。

「〜〜〜〜！」
「お、霞でも照れるんだな。なかなか可愛いモンだぜ？霞」

恥ずかしくなって急いで離れたウチに、経ちゃんがそう言った。

「う、うるさいわ！アンタは何で平気やねん！」
「……平気じゃないが、皆自重しないからなぁ……」
「……ああ、星とか風とか、言葉だけなら賈駆っちもよう自爆するしな……」
「失礼な。主、私は時も場所も弁えておりますぞ？……お望みなら自重するのを止めますが？」
「自重してくれ。頼むから」
「そうですな、今日主が一緒に居てくれる、ということで頼まれましょう」
「なっ……！お屋形様！私も自重しません！お望みなら此処でお屋形様と何でもして見せます！」
「教経様。その、私も自重するのを止めましょうか？」
「ご主人様、あたしだって自重するの止めるぞ！」

「……頼むよお前ら落ち着け……特に琴、暴走しすぎだ……頭が痛い……」
「ご主人様、私が慰めて上げるよ」
「あ～叔母様だけずるい！たんぽぽも一緒に慰めて上げる！良いでしょ？」

あ～、経ちゃんがプルプルしとるで。こりゃ爆発するな。

「お前ら兎に角落ち着けぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

流石は経ちゃん。怒気というか殺気が尋常でない。
が、星は平然としとる。

「やれやれ、冗談の分からぬ主ですな」
「じょ！？……そうです、冗談ですよ、お屋形様」
「そうですね、冗談です」
「う、うんうんそうそう、冗談だよ」
「全く、冗談が分からない男は嫌われるよ？」
「だよね、叔母様」
「……俺か？俺が悪いのか？」

完全に良いようにされてるなぁ、経ちゃんは。
まぁ、それがおもろいんやけどな？

「……自業自得ではあると思うで、ウチは」

ホンマ、見とって飽きひんなぁ、経ちゃんは。

「そう言えば、霞。霞は主に何をお願いするのだ？」
「そうですね、気になります」

「う～ん、何にしよか」
「霞、遠慮せずに言った方が良いと思うぞ？私は」
「何か無いのか？欲しくて気になってるものがあるとかさ」
気になってるもの、ねぇ。
「……強いて言うなら……」
「言うなら？」
「……何で皆経ちゃんに夢中になるんか気になるなぁ」
「はぁ？」
「そや！経ちゃん、今度一日休日の時に、ウチのこと情人やと思って一日一緒に過ごして貰おか。そしたら分かるかも知れへんからな」
「霞、お前さん、それ爆弾発言な」
「爆弾？」
「あ～、上手く説明できん。兎に角、それはちょっと……」
「経ちゃんともあろう者が約束反故にするんか？」
「いや、しかしだな、俺の命って１２個有る訳じゃ無くてだな？」
「主、別に良いではありませんか」
「星？」
「一日だけ、主のことを好いている女子と思うて過ごしてやりなされ。それで霞も主の魅力が分かろうというものです」
「……星、何を考えているのだ？……」
「……愛紗、霞は初心なのだ。きっとああやって言うのが精一杯なのではないかと思ってな……」
「……な、成る程。それはまたいじらしい……」
「……機会を作ってやっても良いだろう。そう思えぬか？……」
「……今回は見逃すことにしようか……」
「……よし、それでこそ、だ……」
「お前さん達、何をぼそぼそと話し合っているのかね？」

「主、良い女には秘密というものがあるのですぞ？」
「……さいですか」
「？ほな、ええんやな？」
「ああ、構わないぞ、霞」
「……俺の意志は……俺の意向は……？」
「在ってないようなものですからな、この場合」

よう分からんかったけど、兎に角今度の休みで一緒に過ごしてみることに決まった。まあこれで分かるやろ。皆が夢中になる理由も、ウチが経ちゃんのこと戦友として好きなだけかどうかも、な。

蝶の如く～９６～

～珂瑛　Ｓｉｄｅ～

白蓮様に仕える事を決めた私は、今臨湘に来ている。水鏡先生の紹介状を持って黄忠殿に会いに来たのだ。話に聞いていた白蓮様とは違い、実際の白蓮様は素晴らしい人だった。現実を踏まえた上で、それでも出来る限り人を救ってやりたい、耐えがたい苦しみを強要されるこの世の中を変えていきたいと言い切った。例え死ぬことになっても、この道を歩む限り悔いはない、胸を張って死ねる、と。

このような人は中々に居ないだろう。希有な存在だと思う。そして、才能も十分に有している人だ。これまで領主としての仕事は一人で殆ど全てのことをやっていたようで、飛び抜けた才能はないが全てに対して適正を見せる。先ず有能と言って良い適正を。

良い主を戴いた。私は幸運だろう。

その主を輔弼する雛里は、知らぬものが居ないほど有名な鳳の雛だ。政務についても高い才があるが、その軍略の才は正に天才としか言いようがないものだ。ここ何日か、軍略について語り合って私は何度も敵わないと思わされた。

良き主に、良き軍師。

自分で言うのも何だが、私は軍師としても政務官としても有能だと自負している。

後不足しているものは良き将だろう。

「此処が長沙の郡都、臨湘か。大きな町だな」

「……それはそうです。荊南で一番栄えている町ですから……」
「雛里、はぐれるから馬に乗れって」
「でも、白蓮様も馬から下りているのに私だけ……」
「……もう2度、はぐれたではないですか、雛里」
「……うぅ」

ここ臨湘にやってきたのは、黄忠という人物に会う為だ。
聞けば、彼女は良将と言って良い器量を有しているようだ。采配も理に適ったものであり、個人の武勇も優れていると聞いている。特に弓の腕は国一番だろうとまで噂されているのだ。誇張があるとしても、取るに足りぬものではないだろう。

「ほら、雛里。馬に乗って下さい」
「……ごめんなさい」
「あはは。雛里、安心したよ。私からみたお前は、完璧超人だったからさ」
「そんなことはありません」
「ああ、それが分かった。だから気に病む必要はないんだよ、雛里」
「……うぅ……」

軍略を語っている時とは違い、可愛らしいものだ。
そう思って馬によじ登る雛里の手伝いをしている私に、声を掛けてくるものがあった。

「姉上！漸くいらっしゃったのですね」
「瑛、頼んでおいたこと、どうなりましたか？」

瑛。姓は馬、名は謖、字を幼常。私達の末の妹。私から見て、かなり優秀だと思う可愛い妹だ。

「既に調べてあります。先方には姉上の名前で訪いを入れてあります」
「そう。良くやってくれたわ」
「珂瑛、彼女は？」
「失礼致しました。私の妹で、馬謖と申します。……瑛、白蓮様にご挨拶を」
「お初にお目にかかります。私は、姓は馬、名は謖、字を幼常。真名を瑛と申します。姉上の紹介通り、姉上達の末の妹で御座います」
「……いきなり真名を預けられるとは思わなかったよ。私は、姓は公孫、名は賛、字を伯珪。真名を預けてくれる、ということは、私に仕えてくれるという事で良いのか？」
「はい。姉上が選んだ主です。間違いがあろうはずもありません」
「……そうか。私の真名は白蓮だ。宜しく頼む、瑛」
「はっ」

流石に瑛ね。しっかりしている。

「で、瑛？」
「あ、そうでした。白蓮様、実は姉上から先行して黄忠殿の居所を探し当てておくように言われておりまして、既に探し当てております。また、姉上の名前で訪いを入れてありますので、会いたいと言えば直ぐにでも会えるかと存じます」
「白蓮様、どうなさいますか？」
「う～ん。じゃぁ、逢いに行ってみようか。いきなりで少し不躾な気もするけど」
「畏まりました。直ぐに人をやって訪いを入れさせます。白蓮様がお連れになっている兵の皆さんの宿舎も実は確保してあります。……宿舎と言っても唯の宿なのですが」
「いや、有り難いよ、瑛。早速だけど、兵達には休息を与えたい」
「では、そちらの手配もして参ります」

瑛はそう言って人に指図を与えるべくその場を離れた。

「……珂瑛、お前の妹は凄いな」

「有り難う御座います。あれは自慢の妹なのです」

「……珂瑛、瑛ですが、すこし才走り過ぎる気がしますね」

「……どういう意味ですか？雛里」

「才気煥発ですが、少し才に自惚れているところがある気がします。何となく、ですけど……」

雛里は、嫌がらせをする為にこのようなことを言う人間ではない。瑛の将来を本当に心配してくれているのだと思う。主従揃って、人によく気を遣う人達だ。

「有り難う、雛里。出来れば、雛里が教えてやって下さい。私達では結局甘くなってしまうのです」

「……分かりました。出来るだけのことはしてみます」

「ええ、お願いします」

この時代に冠たる軍師であろう雛里と話をすれば、瑛も思うところが多くあるに違いないのだ。そこから、何かを得てくれれば。そう思う。

「では、黄忠殿の所でご案内します」

「宜しく頼みます」

さて、黄忠殿はどういう人だろうか。

「ようこそいらっしゃいましたわ、馬良さん」

出てきたのは妙齢の、大きな胸をした女性だった。思わず自分の胸を見てしまった。……ちょっと哀しい。本当にちょっとだけです。別に悔しいとかそういうことはありません。女の価値は胸で全てが決まる訳ではありません。きっとこんな私でも好きだと言ってくれる殿方が居るはずです……そう、いるはず……いるのかな……いて欲しいな……。

白蓮様と雛里を見ると、二人とも同じような顔をしていた。自分の胸を見て。

気を取り直して会話を始める。

「いきなり訪問することになってしまい、誠に申し訳ありません」

「あらあら、お友達もいらっしゃったのですね」

「お友達ではありませんが、詳しい話は中で致しましょう」

「そうですわね。このようなところで足止めをしてしまって申し訳ありません。では、こちらへ」

黄忠殿に付いて行った部屋には、もう二人人が居た。

「馬良さん、申し訳ありません。私もお友達が来ておりまして」

「いえ、構いません。こちらが突然訪問させて頂いたのですから」
「紫苑、そちらは？」
「こちらは馬良さんよ。さっき話をしていたでしょう？」
「ほう、本当に眉が白いのだな」
「馬良さん、こちらは私の親友で巴で城主をしている厳顔と申します。で、あちらが……」
「桔梗様の護衛の魏延だ」
「そうですか。私は馬良と申します。で、こちらが……」
「……公孫賛殿とホウ統殿、ですね」
「……どこで、それを？」
「これまで誰にも仕官せず、この動乱の世の中に全く興味を見せなかった馬良さんが突然私のような武侠に訪いを入れる。……誰かに仕え、私を引き入れよう、と考えているのではないかと思ったのですよ。これでも私は荊南で一番の武将であると自負しているのです。その私に丁寧な訪いを入れる目的を考えれば、仕官を勧めに、ではないかと思うのが普通でしょう？
そして、荊州では最近公孫賛様を見かけたという噂が立ち上っています。この荊州を足がかりとして、その義を天下に明らかにする為に再び立ち上がるのではないか、と。そしてその輔弼として、鳳雛として名高いホウ統殿が付いている、とも聞いています。馬良さんがお仕えしようと思える人間がいて、今荊州に『義侠の人』が居るという噂を聞けば、仕えようと思ったのが公孫賛様で、一緒に来ているのが本人だろうと思ったのです」

思った以上の人物のようだ。しかも、良い感触だ。分かっていて会うにも関わらず捕らえて袁紹軍に引き渡そうとしていないことがその証明足り得るだろう。屋敷の周囲には兵が居ないことは瑛に確認させてある。本当に歓待しようとしてくれていると考えて良いでしょう。

「成る程、お見それしました」
「今見抜かれた通り、私は公孫賛だ。で、こっちは軍師のホウ統」
「……よ、宜しくお願いしましゅ！」
「あらあら、可愛いわね」
「ふむ。公孫賛殿、邪魔でなければわしらも話を聞かせて貰いたいのだがな」
「ああ、構わないよ」
「白蓮様」
「いいじゃないか。別に聞かれて困るような話をする訳じゃ無いんだ。それに、二人は親友だって言ってたじゃないか。いきなり現れた得体の知れない人間の中に一人だけ残して帰るような、友達甲斐のない真似はしないんじゃないか？普通」
「はっはっは。気に入りましたわ。御自身でそれを口に為される以上、信頼すべきでありましょうな。ご無礼を致した。この通り、お詫び申し上げる」
「いや、厳顔、止めてくれよ。私はそういうつもりで言ったんじゃないんだって」
「……非礼は非礼で御座いますからな。こうせねばわしの気が収まりませんので」
「分かった、分かったよ。だからもう頭を上げてくれ。今の私は唯の公孫賛なんだ。そう堅苦しい真似はしないで欲しいな」
「中々変わったお方だ」
「さて、公孫賛様。私に何のご用でしょうか？」
「……まず、こちらを」
「あら、水鏡先生からの紹介状ね」
「はい。……意味のある言葉が書いてあるかどうか、疑問ですが」
「……まぁ、見てみましょう」

黄忠殿が紹介状を見て、少し驚いた顔をして白蓮様を見、また書状に目を戻した。読み終わった後、厳顔殿に紹介状を渡した。厳顔殿

も、その後の魏延殿も、黄忠殿と同じ反応を示した。

「……何と書いてありましたか？」

「『鳳の雛は遂に凰を得て鳳凰と成れり』、と。水鏡先生は、公孫賛殿を凰と評価しているようですね。二人で鳳凰だ、と」

「私にそういう才があるとは思えないけど、雛里と二人で一人っていうのには同感かな。雛里が死んだら、私も死ぬ。そう決めているからな。鳳凰になったのなら、鳳が欠けたからと言って凰に戻ることは出来ない。一緒に死ぬしかないんだからな」

「白蓮様……」

「これは、絶対だ。例外は認めないよ、雛里」

厳しい目をしていらっしゃる。多くの臣下を死なせたこと。その事がどれ程大きな傷をその心に残したのか分からないが、それによって凰たる資格を得たのだろう。

「……公孫賛様、貴女は一体この私に何を望んでおられますか」

「出来れば、私を助けて欲しい。私でなくても、私の夢を助けて欲しい」

「貴女の夢とは？」

「生きていくのに誰かの命を犠牲としなければならない世の中を正すこと。正して皆が手を取り合って生きていく事が出来る世の中を作り上げること。それが、私の夢だ」

「戦に負けた癖に、まだ戦うのか？」

「焔耶！」

「いや、良いよ厳顔。本当のことだから。

魏延って言ったか？私は戦に負ける前は、自分が死なない範囲で領民の暮らしを向上させてやれば良いくらいにしか思ってなかったんだよ。今民達が私のことを『義侠の人』と呼んでいることも、勘違いだ。私は、抵抗しなければ新皇帝劉虞に玩弄されると思ったんだ。

それが嫌で反対したんだ。それだけの、つまらない人間なんだよ」
「じゃあ、何で今更夢を実現する為に戦うんだ?折角拾った命なんだから、どっかこの世の隅っこで細々と生きていけばいいじゃないか」

黄忠殿も厳顔殿も黙って話を聞いている。
魏延殿との会話を通して白蓮様の器量を計っているのだろう。私のように。

「……それは出来ない。私を生かす為に、多くの人間が死んでいった。その中には、私が生まれてからずっと私の面倒を見てくれていた老臣が二人いる。彼らの願いは、『私が公孫賛としての生を全うすること』だった。彼らの主として、彼らの願いだけは叶えてやりたい。そうでないと、彼らは無駄死にしたことになる。そんなことは出来ないんだ」
「自分の主の負担になるような死に方をしたのか。不心得者だな」

瞬間、白蓮様の雰囲気が変わった。
……その二人の老臣。その二人の死が、白蓮様を大きく変えたのだろう。

「……魏延、今すぐにその発言を取り消せ。私の器量が不足しているのは事実だ。私の名声が虚構に過ぎないことも事実だ。負け犬であることもまた、事実だ。だが、彼らが不心得者というのは断じて違う。
……貴様に貶されるような人間じゃない。二人とも、私の自慢の家臣で私の大切な家族だった。あの二人を、絶対に誰にも貶させはしない……!今すぐ取り消して貰おうか。取り消さぬというなら、私にも覚悟というものがある」

いきなり二振りの宝剣を抜き放ち、魏延殿の首筋に添えた。
……武勇は、それ程ではないと聞いていたが。二振りの宝剣を抜きはなった際の動作はとてもそうは見えない。黄忠殿も厳顔殿も、その疾さに驚いているようだが武器を手にしようとはしてない。

「……取り消さぬなら、例えこの場で殺されることになろうと貴様だけは殺す」
「な、なにを……」

流石に刃傷沙汰は拙いが、白蓮様は絶対に譲らないだろう。見ただけで、そう分かる。
そう思っていると、厳顔殿が溜息を一つ吐いた後発言した。

「……焔耶、お主の方が不心得者だ。武士の心の分からぬ、誠につまらぬ人間だ」
「き、桔梗様！」
「阿呆なお主の為に例え話をしてやるわ……そうだな。例えばわしが平教経に攻められ、攻め殺されようとしておる時に、お主ならどうする」
「当然、桔梗様を守って戦い抜きます！」
「どうあっても、全滅するしかないことが分かって居る時、お主はどうする」
「何としてでも、桔梗様だけでもそのお命を長らえ……あっ」
「気付いたか、戯け……焔耶、お主は自分の発言を振り返って、公孫賛殿に何か言わねばならぬことがあるのではないか？」

長い沈黙の後、魏延殿が声を絞り出すように発した。

「……公孫賛殿、その、ワタシが、間違っていた……その二人の臣は、家臣の鑑とすべき人達だろう……前言は、取り消させて下さい

……本当に申し訳ありません」
「……取り消して貰えれば、それでいいんだ、私は。済まなかったな、こんな雰囲気にしてしまって」
「なに、構いますまい。焔耶にも良い薬になったことでしょうしな」
「そうね。それにしても、武勇に優れていらっしゃいますね」
「いや、私は大した武勇は持ち合わせていないけど」

そんなことはないだろう。私は全く反応出来なかった。黄忠殿も厳顔殿も、反応出来ていなかったのだ。武人として名を馳せる人間が反応出来ない腕前を持っているのだから。

「……双剣を抜きはなった際の手際と言い疾さと言い、大した武勇だと思いますが」

私がそういうと、白蓮様は苦く笑った。

「……小さい頃にな、二人が死んだら宝剣を二振り貰える、と無邪気に喜んでいた時期があって。その時に、二本同時に剣を振るう為に柄にもなく血反吐を吐くような鍛錬をしたんだ」
「……形見の宝剣、ですか」
「そうだ。二人の思い出は、もうこれしか残ってない。だからこの二振りの宝剣と一緒に私は自分の夢を追うことにしたんだ。いつもと変わらず三人で、ずっと一緒に居るような気がするから。だから、双剣で戦っていく」
「……よろしいか」
「何だ？厳顔」
「公孫賛としての生、と仰ったがそれはどのようなものだとお考えで？」
「……一つの勢力として、自分が思い描く理想の世の中を実現する為に自分の信念を貫いて生きていくこと、かな。公孫家のことなど

考えなくても良い、と関靖だったら説教し始めるんだろうけど、あ、関靖っていうのは二人の老臣の内の一人なんだ。口五月蠅い爺で……兎に角、公孫家のことを考えている訳じゃないんだ。

私は、あの二人が死んだ時一緒に死んでやりたかった。それ位辛かった。二人を理不尽に殺された、そう感じてる。納得出来ないんだ。私が生きていく為にどうしても必要な犠牲だったんだろうとは思うよ。でも、それは頭で理解出来ているだけであって私の心はその理由で納得することを拒否しているんだ。

……私は、私みたいな想いをする人間はもう他に居なくて良いと思うんだ。生きていく上で、全ての人間が何の犠牲も払わずに、犠牲にならずに生きていける世界なんて無いと思う。でも、その犠牲が命を失うという形でもたらされるような世の中は嫌だ。

……だから戦うんだ、世の中と。

正すんだ、この世の中を。

どうしても、私はそういう世の中にしたいんだ。そういう世の中を作り上げることが出来たら、二人のお陰なんだってそう思えると思うんだ。至らない私を教導する為に、その為に二人は命を賭けてくれたんだ。そう思えると思うから。だから、そうするんだ。そうやって生きていくんだ。

付いてきてくれる人間には、申し訳ないと思うけど。でも、そういう世の中を作る為に、一緒に戦って欲しいんだ。その命は、絶対に無駄にしないから」

……本当に、お優しい方だと思う。自分の身に起きた不幸を、他者には味わわせてやりたくない。その為に、再びこの乱世に立とうと言うのだから。

「……紫苑、先の話だが、わしは賛成だ」

「あら、桔梗。貴女反対してたじゃない」

「為人がわからぬ奴を主として戴くことなど出来ぬ、と言うただけ

だ。為人も器量も確認させて貰った。申し分ないどころか、乞うて主になって貰うわ」
「じゃあ、私と同じね」
「……お二人とも、一体何を話されていらっしゃるのですか……？」
「あら、ごめんなさいね。実は私達は、今荊州にいると言われている『義侠の人』公孫賛様を戴いてこの乱世に平穏をもたらす為に乗り出すかどうかについて話し合いをして居たの」
「まぁ、こうして目の前にしておるから都合が良かったという訳だ」
「では……？」
「ええ、私達二人、公孫賛様にお仕え致しましょう」
「……私も、桔梗様に従います」
「焔耶、嫌ならば別に良いぞ？」
「いえ、お供致します！」
「……え？え？」

白蓮様はまだ状況が把握出来ないようだ。

「白蓮様、お三方とも、白蓮様にお仕えする、と。そう言っておられるのです」
「……何でだ？私は確かに仕えて欲しいとお願いするつもりで来たけど、まだその話はちゃんとしてないと思うんだけど」
「はっはっは。お館様、もう十分にお館様の理想や信念は聞かせて頂いたつもりです」
「そうね。……公孫賛様。私は、姓は黄、名を忠、字を漢升。真名は紫苑と申します」
「わしは、姓は厳、名は顔。真名を桔梗と申します」
「ワタシは、姓は魏、名は延、字は文長。真名を焔耶と申します」
「私は、姓は公孫、名は賛、字を伯珪。真名を白蓮という。……これから、宜しくな、紫苑、桔梗、焔耶」
「「「はっ」」」

黄忠殿だけでなく、益州に確かな地盤を持つ厳顔殿まで従うとは思っても見なかった。

だが、これも偏に白蓮様の人徳というものだろう。

やはり私は主に恵まれたのだ。

白蓮様という、大徳の君に。

蝶の如く～97～

～霞　Ｓｉｄｅ～

勝ち抜き戦から暫く後。
経ちゃんの完全休養日を迎えた。今日は、二人で過ごすと決まっている日だ。
寝台から身を起こして服を着込む。
……ウチ、経ちゃん起こしに行った方がええんやろか？
そう思っとると、部屋の扉を叩く音がする。

「霞、起きてるか？」
「ああ、経ちゃんか。おはようさん」

扉を開けてそう挨拶をする。

「どうしたんや？こんな早くに起きとるなんて、珍しいな、自分」
「……あのな、今日一日、デートするんだろ？」
「でぇと？」
「あ～、つまり、恋人宜しく一緒に居るんだろ？」

……自分で言うとってなんやけど、結構恥ずかしいな。

「……う、うん」
「……照れてンのか？霞」
「うるさいわ。悪いんか？」
「いや、悪くないぜ？可愛いよ、霞」
「あ、阿呆！何を言うとるんや！」

「恋人なら、普通だろ？」

何や調子狂うわ。

星や愛紗はようこんなん耐えられるな。

「んじゃ、先ず朝飯でも食うか」

「そやな。食堂行くんか？」

「いンや。取り敢えず、簡単なものを俺が作ってみようかと思って早起きしたんだよねぇ」

「何でや？」

「……恋人だから？」

「……恋人やったら飯作るんかい」

「作るんじゃないかね？多分」

「星や愛紗にも作ってやったんか？」

「俺は今霞と居るんだぜ？他の女のことを話すのは野暮ってモンだろうが」

「それでも気になるやんか」

「ったく……作ったことはないよ」

「ほな、何でウチに作ってくれるん？」

「作ってやりたいと思ったから、じゃ駄目かね？」

直截的な表現にも程がある。

……そらまぁ、嬉しいけど……

「ほ、ほな作って貰おか」

「よっしゃ。実は材料とか全部集めてあるんだよねぇ」

「……ウチが作らんでええ、て言うたらどうするつもりやったんや」

「？無理矢理に食べさせる？」

「はぁ……聞いたウチが阿呆やったよ」

「だねぇ」

「そこは同意する所とちゃうやろ？」
「どこが？」
「……もうええよ」
「まぁそう言うなよ霞。飯、作ってくるからさ。髪梳かしとけよ？綺麗な髪してるんだから」
「うるさいわ！さっさと行きぃ！」
「ホイホイっと」

全く。
……何作ってくるつもりやろか。結構楽しみやな。

「で、これなんだが」
「ただの米か、これ」
「だな」
「……なにを作るって？」
「簡単な料理」
「米やん。炊いただけやん」
「これからだよ、これから」
「はぁ？ここでか？」
「そうそう。これを掛ける……！」

そう言って取り出した右手の掌に……卵？

「何するつもりや、卵で」
「こうするんだねぇ」

そう言って卵を割り、米の上に掛けた。

「なんやこれ、気持ち悪い」
「まぁ外人はみんなそう言うんだけど、結局最期には丼物文化にどっぷり浸かって故郷に帰り、『あぁ、日本に帰って牛丼とかカツ丼とかカレーが喰いたい』とか言うって相場は決まってるんだよねぇ。宗教捨てる奴まで居るんだから」
「外人？日本？」
「まぁまぁ。黄身を割ってしっかり混ぜて、昆布と鰹の削り節の中にぶち込んで煮詰めた塩を掛けて、ごま油を掛けて……」

なんや、結構ええ臭いがするな。

「完成！教経特性卵かけご飯だ！」
「見た目かなりえぐいな、これ」
「ま、騙されたと思って食べてみやがれ」

ちょっと怖いけど、まぁ経ちゃんが作ってくれたんやし、断るのも悪いしなぁ……
……覚悟、完了！

「ほな、頂きます……」
「……どんだけ俺は信用ないんだよ……」

一口、口に入れる。

「……なんやこれ！？美味い！」

「どれどれ、俺も一口貰おうか」

経ちゃん、それ、今ウチが使うた箸……

「おぉ！美味い！う～ま～い～ぞ～！！！！！」

「……朝からエラい興奮やな。血管切れて死ぬで？」

躊躇いなくウチが使うた箸使いなや。

気にしたウチが阿呆みたいやんか。

「あ、味噌汁忘れてた」

「味噌汁？」

「いやぁ～味噌捜すのに苦労したんだって。ほれ、飲んでみ」

またエラい色しとるな、このお湯は。

なんや変な臭いもするけど。

「さぁ、グッといこか、霞」

「えぇい、乗りかかった船や、最期まで付きおうたる！」

「いよっ！大統領！中華一！」

「……どういう意味や？」

「……アンタが大将！的な？」

ホンマ、こういう時の経ちゃんはよう分からんわ。

味噌汁？を啜ってみる。

「……塩気が利いてて美味しいな、これ」

「だろうねぇ。それ作るのに何度も味見したからなぁ」

結構一生懸命作ってくれたんやな。

「そかそか。有り難うな、経ちゃん」
「いえいえ。どう致しまして、霞」
「……こういうのもええな。戦乱の世の中やって忘れそうになるわ」
「皆がこういう平凡な日常を死ぬまで送ることが出来る世の中を創り出す為に、俺たちは戦っているンだ。次代に課題ではなく平和な世の中を残してやる為にねぇ」
「そうやな」
「そうさ。そうでないと死んでいった奴らが浮かばれないだろ？……ま、飯喰おうぜ霞」

普段滅茶苦茶ふざけとる癖にこういうところは締めるよなぁ、経ちゃんは。
次代に平和な世の中を残してやる為に、か。
分かっとったことやけど、ホンマに心底そう思っとるんやなぁ。
経ちゃんが作ってくれた朝飯を食べながら、そう思っとった。

「で、飯を食べ終わった訳だが」
「何やの？」

「何で中庭でいきなり酒呑んでるんだ?霞」
「ええやんか。今日はええ天気やし、外で酒呑んだら気持ちええやろな~と思てな」
「……まぁいいか。霞がそうしたいならそうするさ」

そう言って、ウチの横に胡座をかいて座った。
目をしばたかせとる。そう思って見とると、欠伸をした。

「ふぁ~あ……」
「寝とってええで?」
「そういう訳にもいかねぇだろうが」
「そうか?ウチは気にせぇへんよ?経ちゃん、実は結構早起きしとるやろ?」
「……まぁ、それなりに、な」
「せやからちょっと寝たらええよ。一日は長いんやしな」
「……一刻ほどしたら起こしてくれ」
「……何処で寝ようとしとるんや」
「……霞の膝枕で、だけど何か?」
「はぁ……ま、今日はそういう設定やったな」
「そうそう。諦めて膝貸してくれ」
「……ほれ、ここで寝たらええよ」
「んじゃ失礼しま~す」

素っ頓狂な声を上げて、経ちゃんがウチの膝枕で寝始める。
……なんかホンマに恋人同士みたいやな。
暫くすると、寝息が聞こえてきた。
安心しきった顔をして、気持ち良さそうに寝とる。

「ホンマ、こうやっとると何処にでもおるような男なんやけどな」

黄巾賊討伐で主力として活躍し、反董卓連合を退け、雪蓮達を従わせ、益・荊州の北部を一気に領有して。とてもやないけど、ただの男には出来へんと思う。

『俺は越えられない苦しみのない、平凡な世界を作りたい』

この荒れた時代で夢みたいな事考えて、それを実現しようっちゅう変わった人間。けど星や稟、風が言うには色々とあったらしい。自分に付いてきてくれる人間が死んでいくことに思い悩んどったこともあった。そう言うとった。それを乗り越えて今の経ちゃんになった。

『平家の頭領として、郎党共が誇りに思える人間でありたい』

その為に月を助けた。例えこれで自分が死ぬことになったとしても、悔いはない。誇りを持って死んでいける。だから、俺を頼れ。そう賈駆っちに言ったらしい。その言葉を聞いて、賈駆っちは完全に経ちゃんにイカれてしもた。まぁ、あの状況でそんなこと言われたら惚れへん方がどうかしとると思うわ。

『犠牲のない世界など存在しない。現実を直視しない奴に時代を担う資格はない』

雪蓮と話し合いを持った際に経ちゃんはそう言うとったらしい。稟も、雪蓮自身もそう言うとった。

現実を直視しろって言っている癖に、自分は飽くまでも理想を貫こうっていうんだから。変わってるわよ、教経は。でもそういうところは好ましいかな。そう雪蓮が言うとった。ウチも、そう思う。ちょっと危なっかしい所があって、支えてやらなアカンと思わせるところが経ちゃんにはある。

抱いている夢は儚く美しい。

乱世を生き抜くのに必要な覚悟も持っとる。

武人としての力量も高い。
主君としての器の大きさも申し分ない。

でもそれよりなにより、経ちゃん自身に魅力がある。

いつも阿呆なことを言っている癖に、真面目な時はホンマに真面目や。

『めんどくさい』ばっかり言うとるけど、やらなアカン事だけは絶対にやる。

俺の夢の為に死ね、と平然と言う癖に、実際に死んだ人間を見て辛そうな顔をする。

現実を直視しろ、と言う癖に、理想を抱いて溺死しそうな所がある。

矛盾しとるけど、人間らしい。ブレとるようで、ブレとらんと思う。

自分がその時どう感じ、何をしたいんか。それをそのまま、ありのままに表現しとるだけや。『思うままに望むがままに生きる』。それが経ちゃんらしい。ウチらには絶対にああいう生き方は出来ひん。

経ちゃんは天に愛されとる。ちょっと不公平やと思う。

真名が無かった朔の為に、真名を考えてやったのは経ちゃんやった。

後で月からそう聞かされた。真名交換をする機会があると予想して、前々から考えとったに違いない。そうでないとあんなに朔に相応しい真名を考えつく訳がないやないか。そう言うたら、そんなことはない、俺は知らんと繰り返すだけ繰り返して逃げて行きよったけど。

ウチが勝てへんと思うとる時にやれるんやと励ましてくれたのは経ちゃんやった。

ウチのことを信じとる、と。そう言いよった。諦めそうになったけど、経ちゃんの声を聞いて負けられへんのやと思うた。勝ってホンマに嬉しかった。勝てたことでなく、経ちゃんの信頼に応えられた

ことが嬉しかった。

……あぁ、なんや。ウチは、経ちゃんのことが好きなんやないか。戦友としてやなく、一人の人間として経ちゃんのことを好ましく思うとるんやないか。優勝して嬉しゅうて経ちゃんに抱きついた。人の目がある事に気が付いて恥ずかしゅうなって急いで離れたけど、ウチが何とも思うとらんのやったら恥ずかしいとは思わんかったはずや。ただの友達やったら、別に普通のことやと思うから。

丸々一日は必要無かったかもなぁ。

でもまぁ、折角経ちゃんを独占出来とるんやし。今日はこのまま一緒に居させて貰おか。……それにしてもよう寝とるな経ちゃん……ちょっとやそっとじゃ起きそうにない……起きひんよな？……

～教経　Ｓｉｄｅ～

「霞、そろそろ移動するぞ」

「何処へ行くねんな経ちゃん」

「付いてくりゃわかるから付いてこい」
「へいへい」

朝飯を食った後、霞の膝枕で寝た。寝心地は最高だった。
目を醒ました時若干霞が慌てていたが、ありゃ何だったんだろうな？鏡を見たが、見る限りおでこに『肉』とか『中』とか『米』とか書かれてなかったからまぁ良いンだがねぇ。

起きた後、町に繰り出してクロノクルの店で服見たり、何故か存在する現代風のネックレスを恐喝されたりした。クロノクルの店では酷い目に遭った。俺が見立てた服を着てみる、と言うから、ついつい冒険の書を新しく作っちまった。『再びＴＩＭＥの表紙を飾る為に！星の屑成就の為に！更衣室よ！私は帰ってきたぁ～！』とか叫んだのが拙かったのだろう。フルボッコにされて、次に気が付いたらアクセサリを見てた。お詫び代わりに買うてくれるんやんな？とか言われてネックレスを恐喝されたんだねぇ。

まぁ、そうやって日が沈むまで時間を潰し、一日の締めをしようと城壁の上へ移動している。

「よっしゃ、到着だ」
「……」

城壁の上から眺める長安の街は、赤々と燃え上がっているようだった。
この為に各家に蝋燭を配って、日が落ちたら家の外で灯してくれ、と頼んでたンだからねぇ。出火したら洒落にならないから、手当を出してぼや騒ぎが起きないように人を配しているけども。

「どうだ、霞。中々乙なモンだろう」

「……すごいな、これ。どうしたんや？」
「霞の為に用意したんだぜ？」
「ウチの為？」
「そ。天じゃ恋人達は二人で夜景を楽しむんだよ。今日一日だけだが恋人って設定だし、こういうのも悪くないと思ってな」
「……そか」

喜んでくれるか、と思っていたンだが。
反応が悪いね。失敗したか。

「……気に入らなかったか」
「ち、ちゃうちゃう。そんなことあらへんよ。その、嬉しいで？」
「まぁ、そう思ってくれたンなら色々準備した甲斐があったってモンさ」
「……なぁ、経ちゃん。天の恋人達は夜景を見ながら何を話すん？」
「そうだねぇ。歯の浮くような、愛を囁く奴ばかりだと思うが生憎俺には経験が無くてね」
「例えばどんな感じなん？」

……流石に純愛物語読むだけあって興味があるみたいだねぇ。

「……夜景も綺麗だけど、霞も綺麗だよ」
「……ホンマに？ホンマにそう思う？」

顔が赤く染めて、そう聞き返してくる。
……冗談とかノリで言ってる訳じゃ無い、のか？ひょっとして。
霞が綺麗かどうか、か。
まぁ、綺麗だろうさ。特に頬を染めた霞は夜景なんぞよりも余程に、ねぇ。

「……あぁ。綺麗だよ、霞」
「……そ、そか……」

恥ずかしそうにしている霞は、普段とは違ってこう、女の子って感じだ。

「なぁ経ちゃん、今日、有り難うな」
「別に礼を言われるようなことでもないだろう。俺も愉しかったさ」
「……ウチからも経ちゃんにあげたいものがあるんや」
「へぇ。そいつは愉しみだねぇ」
「……ホンマ？」
「あぁ、愉しみだ」
「……ほな、目ぇ瞑ってくれるか？」
「あぁ、良いよ……ほれ」

何をくれるつもりなんだ？
そう思っていると、霞が近づいてくる。気配で分かる。
そのまま俺に近づいて、目の前で止まり。

「んっ……」

口づけされた。
目を開けると、霞の顔が目の前にあった。

「……霞」
「……吃驚した？」
「吃驚するだろ、普通」
「……今日一日、恋人やんな？」
「まぁ、そういうことになってるな」
「ほな恋人らしゅう、して欲しい。……経ちゃんから、ウチに口づ

けして欲しい」
「……霞」
「……アカン？」

そう言って目を潤ませて上目遣いに俺を見つめてくる霞。
町の灯に照らされた顔が綺麗だった。
霞を抱きしめながら、口づけをした。

「……ちゅ……ちゅ……」
「……ん……んふ……つ、経ちゃん」
「……何だ？霞」
「経ちゃんからしてくれたのは、経ちゃんもウチのこと想ってくれとる。そう思ってもええ？」

霞も、乙女なんだねぇ。
本当に可愛いモンだ。

「……あぁ、いいよ」
「……今日一日だけの恋人じゃなくてこれから先もそういうことでええ？」
「そのつもりだよ、霞。俺は欲張りなんだよ。だから、霞も俺のものにする」
「……ん……ええよ、経ちゃん……」

もう一度、口づけを交わした。

「……なぁ、経ちゃん」
「……ん？」
「……その、な。ウチの部屋に来ぉへん？」
「……ん、お邪魔するよ」

「……うん」

霞の肩を抱いて城壁を後にし、霞の部屋でその後一緒に過ごした。

『ウチ、嵌ってまいそうや』。

事が終わった後、霞はそう言っていた。

何に嵌りそうなんだね？と聞いたら、俺の耳元でそっと囁いた。

『経ちゃんにや』、と。

蝶の如く～９８～（前書き）

今日はこれだけ。では、仕事に行ってきます。

蝶の如く～９８～

～蓮華　Ｓｉｄｅ～

「……この度は態々時間を割いて頂き有り難う御座います。私は姓は孫、名は権、字は仲謀と申します」

「遠くから御苦労様。俺が平教経だ」

孫家が漸く袁術の支配から独立した。

袁術の旧領の殆どと呉郡を手中に収め、これから揚州全域をその支配下に収めようというまさにその時に、平家に臣従する事になっていた。姉様と冥琳が実際に平教経に逢ってそう決めたようだ。

姉様と冥琳が二人揃ってそうすると言っている以上、その決定は絶対だ。これまで姉様の勘と冥琳の知謀が同じ結論を出す時、その決定に誤りはなかった。だから今回も誤りではないのだろうと頭では理解出来る。

平教経とその一党。

黄巾賊を寡兵を以て廃滅させ、反董卓連合に敗れたとはいえほぼ互角に渡り合った。姉様に言わせると予定通りの撤退であって実情は反董卓連合の完敗だったらしいけど。いずれにせよ、独立したばかりの私達では歯が立たない相手だったことには違いない。

ただ……一戦もせず降るなんて。私達以上に力があるとしても、戦いもせずに降るなんてどうかしていると思う。姉様は言い出すと聞かない人だし、何より遠く離れていた為に諫めることは出来なかったが。

「で、俺に何を訊きたいんだね？」

「……はっ」

「遠慮無しに、思っていることをそのまま訊くと良い。訊かずにわだかまりを抱えているより、暴言を吐こうと罵ろうと最終的に納得出来た方が良いンだからねぇ」

「では……なぜ揚州から引き上げるように命令したのですか？十分に保持出来ると思うのですが」

私の質問に、思春が頷いている。姓は甘、名は寧、字を興覇。私に仕えてくれている、信頼の置ける武人だ。今回随行しているのは、思春、稷、亞莎、明命。祭は、態々面語する必要はない、と随行してこなかった。その器量の程は分かって居るつもりじゃ、と言って。

独立戦が一段落した後、揚州から南陽郡へ移動するように、という連絡を受けた。

折角手に入れた揚州を手放す様な真似をすることに納得が行かなかった。もし他勢力に攻め込まれ、敵わないと判断したらば降伏して構わない、と言ってやった上で移動してこいと言ってきたのだ。

私達は孫家の旧領を回復することを悲願としてこれまで耐えてきたのではなかったのか。そう姉様に書状で問い詰めたが、姉様の答えは変わらなかった。『兎に角、移動して来なさい。教経がそう言っている以上、それに従うべき立場にあるのよ、私達は』。そう返答が来ただけだった。

「……雪蓮、お前さん、本当に何も説明してないのかよ……よくそれで従うな……」

「存念を承りたいのですが」

「……俺たちはまだ体力のない子供のようなものだ。確かに手足はあるが、思いのままに動かせるほど成長している訳じゃ無い。足目掛けて食器が落ちてきてもそれを己の手で払うことは叶わない。まだそれだけの力が備わっていないンだからねぇ。もし足に痛手を負

うことを避けようとするなら、足をその手で保護出来るように体に力を入れ続け、いつでもその手で払えるようにずっと緊張しているか、足を安全な場所に退避させるしかないとは思わんかね？」

「そこまで無力ではないと思いますが」

「そうかね？兵力を各地に分散している状況で呉郡に袁紹の馬鹿が１０万の大軍で寄せてきたら、援軍が到着する前にやられちまう事になると思うンだが、そうは思わないかね？」

「実際にそうなっていないではありませんか」

「それは結果論に過ぎんよ。雪蓮が俺に従ったあの時点では北と南のどちらに寄せるか、予想は出来なかった。幸いにも定石通り北から攻略して後顧の憂いを無くすことを優先したようだが、戦に勝てるのなら揚州にいきなり攻め込むのは上策だ。俺たちを奔命に疲れさせることが出来る。常時軍を展開していないと成らない状況に追い込むことが出来るんだよ。

あの時は司隷州はまだ袁紹が領有していた。その袁紹軍に備える為に、どうしても函谷関に兵を籠める必要があった。それも、余裕を持たせてな。その上で呉郡を始めとする揚州も確保するとなると、１０万から１５万の軍勢を広く薄く配すか何箇所か拠点を定めてそこに重点的に兵を籠めておくことになる。容易に領土を分断されることが嫌だったこともあるが、一番嫌だったのはそれだけの軍勢を常時展開しておかなければならなくなる点だ。

それに暫く耐えられるだけの金穀は蓄えてあったが、蓄えがなければ絶対に叶わない程の物資を消費するだろう。物資だけでなく、精神的にもきつい。いずれ衰弱死することは間違いない。

それに民達に間違いなく不満が蓄積していくだろう。いつ戦になるか分からないという緊張感に耐え続けることが出来る程、人間は強くない。先ず心から荒み、いずれ行動に現れることになる。暴動なり反乱なりといった形でな。そういう状況を避ける為の決定だ」

「では、教経さんは袁紹軍が攻めてきた場合、一戦もせずに揚州を放棄するということですか～？」

「そうだ。……お前さんは誰だね？」
「失礼しました～。わたしは、姓は陸、名は遜、字を伯言。真名は穏と申します～」
「……いきなり真名を預けるのかね」
「冥琳様が見込んでいる人ですから～」
「……俺は、姓は平、名は教経。字も真名もない。好きに呼んでくれれば良い。先に全員に言っておく」
「わかりました～。……一戦もせずに放棄する理由は何でしょうか～」

穏は相変わらずのんびりとした口調だが、しっかりと器量を計ろうとしているようだ。

「さっきも言った通り、状況からして俺たちが揚州までの領土を確保することは難しい。余裕を持って領有する事が出来るのは汝南郡くらいまでだ。余程のことがない限り、それを保持し続けることは難しいのだよ。いずれ失うことになると分かって居るものに執着して、無駄に郎党共を死なせる訳にはいかないだろう。死なせるなら、それを納得して死んでいけるだけの理由ってのを呉れて遣りたい。それが人を死なせに行かせる俺が心掛けておくべき事だろうと思う。……揚州を取り敢えず確保する為に死ぬことを納得させることは出来ない。いずれ失うことを覚悟しているのだから。そう判断したのさ。だから最初から無いものとして考えるのさ。敵わないと判断したら降伏しろと言っているのも、無駄死にさせたくないからだ」
「なるほど～、よく分かりました～」

付き従う者達を無駄死にさせたくない、か。
領地よりも付き従う者達の命の方が大切だ、ということらしい。
移動してくる際民達に与える糧食を準備していたことから考えても、民を慈しむ心は持っている。呉郡を始めとした揚州を放棄するよう

な真似をしたのも、決して弱気や平家のみが良ければそれで良いという考えから来たのではなく、戦略的な視点から見て現実的ではないという判断をしたからということが分かった。

この話題については、これで十分だろう。

～教経　Ｓｉｄｅ～

質問に答えると、孫権は何か考えているようだった。
まぁ、絶対に訊いてくると思っていたからねぇ。しっかりと考えておいたンだねぇ。

しかし、陸遜って。時代が違うだろうに。
それより何より、あの胸はどうなってンだ？でかすぎるだろう。だが、申し訳程度に乗っている眼鏡は……まぁ、アリか？アリかな……うん、アリだ。あの乳とセットなら許容しようじゃないか。俺は眼鏡愛好者の神だ！全ての眼鏡を受け入れてみせようじゃないか！

「教経様、私は姓は呂、名は蒙、字は子明。真名を亞莎と申します。質問、宜しいでしょうか……？」
「あぁ、構わんよ」

呂蒙、ね。大人しそうな娘だな。視線がきっついけど。
そりゃそうだろうねぇ。気に入らないには違いないンだから。
しかし片眼鏡とは。やるねぇ。俺はどんな眼鏡でも構わないで喰っちまうんだぜ？
……いい男になりそうだからこれ以上考えるのは止めとこう。

「人主として、そして一人の人間として、そのお心掛けを簡潔に表現して貰えないでしょうか」
「心掛けを簡潔に、かね？」
「はい。是非、伺ってみたいのです」

ふむ。何と答えようか考えている俺の目に、今日俺の護衛に当たっている琴が入ってくる。
……そういえば、『お屋形様ぁ～！』『幸村ぁ～！』のオッサンが良いこと言ってるな。

「……先ず人主としては、だ」
「はい」
「『人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、仇は敵なり』、かな」
「……どういう意味でしょうか」
「どれだけ城を堅固にしても人の心が離れてしまったら世を治めることはできない。情けは人を繋ぎ止め結果として国を栄えさせるが、仇を増やせば国は滅びる。そういう意味さ」
「……では、人としては」
「『悪・即・斬』。これに尽きる」

「『悪・即・斬』……」
「そうだ。それがただ一つの正義だとは言わんがな」
「……成る程。有り難う御座いました」
「……あの、済みません。私は姓は周、名を泰、字を幼平。真名を明命と申します。教経様、教経様は類い希なる武勇をお持ちだと雪蓮様から伺っております。その、尋常でなく早く動けるとのことですが、どの程度のものなのでしょうか」

……背中に背負ってるのは、日本刀か？
格好からすると忍者っぽいな。早く動けるとのこと、つまり、瞬動に興味津々だ、と。そういうことか。好奇心に溢れたつぶらな瞳をしている。純真なんだろうねぇ、きっと。期待に応えるのが名優ってモンだ。応えられる期待には応えようじゃないかね。

「ふむ……先に言っておく。絶対に動くなよ？」
「え？」

瞬動を行う。明命の目前まで顔を寄せ、直ぐに横から背後に回り込む。後ろに立ち、首筋に刀を突きつけて。

「！」
「わっ、はわっ」
「……この程度のものだ」
「す、凄いです！尊敬します！」

糞爺、良かったな。尊敬して貰えるそうだぜ？

「そうかね。そいつは重畳だ」
「はいっ！」

……素直な娘だな、この娘は。琴みたいだ。

「お屋形様、刀を突きつけるのはちょっと……」

「……まぁ、そういうモンだろ、こういうのは」

「はぁ……」

まぁ、一瞬孫権の後に控えている褌が反応しそうになっていたがね。先にああ言っておいて良かった。殺すつもりはないってことは分かるだろうからな。

「……もう、良いかね？まだ訊きたい事があるなら今訊いておいてくれ」

「……最期に、訊かせて貰えるでしょうか。貴方はこの乱世で、何を望んで戦うのです」

そう褌が言ってくる。

「俺は越えられぬ苦しみのない、皆が『平凡な人生』を送れる世の中を作りたい。俺が望むのはそれだけだ。その為に、必要なら戦う。非情にでもなってみせるさ」

「『平凡な人生』とは？」

「ありふれた日常に満ちあふれた人生だ。過分な幸福がない代わりに、耐えがたい苦難もない。これ程有り難いことはないだろう。非常な人生を送らざるを得ない民達に、平穏で平凡な人生を送らせてやりたい。今を生きる者の一人として、次代を担う餓鬼共にそんな世界を残してやりたい。そう思ってるンだよ」

「……成る程。私は、姓は甘、名は寧、字を興覇。真名を思春と申します、教経様」

「思春」

孫権が驚いた顔をして思春の顔を見ている。
驚かざるを得ないほど反感を持っていたのだろう。

「……他に、何かあるかね？」
「……私の真名は蓮華と申します、教経様」
「……雪蓮と同じで、呼び捨てで構わんよ、蓮華。孫呉の未来を担うのは蓮華。そう言っていたからな、雪蓮は。言葉遣いも、対等にしてくれて構わない」
「……ではそうさせて貰うわ、教経」
「それでいい。その方がらしいぜ？蓮華」
「と、兎に角、期待以上の答えは頂いた。後は貴方の思うその世の中を顕現させる為に微力を尽くさせて貰うことにするわ」

照れながら不良中年みたいな事を言うな、お前さんは。
『永遠成らざる平和の為に』、が抜けてるぜ？

「まぁ、これから宜しく頼むよ、皆」
「ええ」
「御意」

何とか、なったかな。
家中はこれで纏まりを見せるだろう。
これからどうするのか。皆を一度集めて話をする必要があるな。

蝶の如く～９９～（前書き）

節目の１００話目前にして５，０００，０００ｈｉｔ突破してました。
最近、カウンタ上がるのが早い気がします。

このような妄想を此処まで読んで頂き、有り難う御座います。

蝶の如く～９９～

～亞莎　Ｓｉｄｅ～

「これより軍議を始めます」

司会役の稟様がそう宣言し、平家の軍議が始まる。
平家の皆さんと真名を交換した私達に対して、教経様はこのまま滞在して軍議に参加していくように、と仰った。平家の軍議がどのようなものであるか興味があったようで、蓮華様は二つ返事でそれを了承し軍議に参加している。

「先ず諸侯の状況について、それぞれ説明をします。
先ず最初は袁紹殿について。……詠、説明をお願いします」
「分かったわ。
……袁紹についてだけど、公孫賛を滅ぼして後顧の憂いを無くし、南下の兆しを見せているわ。ただ、今年も教経の指示通り糧食を買い漁ってやったからその糧食は決して潤沢とは言えないわね。更に今年からは鉄や塩、馬の買い占めも行っているから軍備を整える事にも影響が出てくるはずよ。
あと、南下しようにもその後背を烏丸と鮮卑が狙っているようで、国境に兵を集結させているわ。その為、思い切って南下することが出来ない状況になっているわね。
それからこれは家中の話だけど、雪蓮達に国を追われた袁術と張勲が袁紹の家臣として仕える事になったみたいよ。それと、諸葛亮と仲の良かったホウ統が出奔したらしいわ」
「へぇ。そいつは重畳」
「教経殿？」
「ホウ統ってのは、鳳の雛と言われる程の軍師だ。軍才なら諸葛亮

を超える。そう言われている人間なんだよ。……詠、ホウ統がどこに行ったか分からないか。もし寄る辺がないようなら、平家に迎えたいンだが」

「……可愛い女の子だから？」

「……逢ったこともないのに可愛いかどうかなんて分からないだろうが」

「ふん、どうだか……残念ながら、ホウ統の行方は不明よ。ただ、最期に確認されたのは合肥だったらしいから、揚州にいるかもね」

「そうか……詠」

「分かってるわよ。一応捜索させるわ。……ったく、どうしてボクはコイツに……」

「済まんな、詠」

平家は変わっています。主君にああいう口を利く事が許されていて、教経様もそれを当たり前のこととして受け入れています。臣従した雪蓮様や蓮華様に呼び捨てにされることを問題視しない人なので不思議ではないですが。これも教経様の器量というものだと思います。

「で、詠。袁紹軍が領内の兵を尽くして攻めてきた場合、最大でどの程度の兵力があると思う？無理をしてかき集めたら、という想定で答えて欲しい」

「無理をしてかき集めたら、ね。補給とかは無視して良いのね？」

「あぁ」

「……３０万乃至３５万程度かな」

「……とんでもない数だな」

「でもこれ位の動員力はあると思うわよ？何せこの国で最も口数が多いであろう地域を押さえているし、幽州、冀州、青州、徐州の４州を支配下に置いているんだから」

「やっかいなことだな」

「だが、我らとて負けておりますまい。主」

「無理をすれば、な。だが無理は禁物だぜ？星。どうしても仕方がない時以外は民に負担を掛けるつもりはない」
「分かっておりますとも」
「袁紹の状況については、こんな所ね」
「そうですか。では、次に参りましょう。……風、お願いします」
「風からは曹操さんの状況を説明させて頂きます。
現在曹操さんはエン州、司隷州、并州を領有しています。袁紹さんが公孫賛さんと争っている時に司隷州、并州を攻略して版図を広げたのです。その為、袁紹さんが南下する際に最初に標的とするのは風達ではなく曹操さんだと思います。まぁ、油断は禁物なのですが。曹操さんの方でもそれは理解出来ているようで、現在募兵と練兵に明け暮れているようです。また、個別に新皇帝の劉虞さんに接触しているようで、何やら画策していると思われるのです。烏丸と鮮卑に金穀を遣わして袁紹さんの後背を扼しているのが曹操さんであることを確認出来たのですよ。その事から考えて、新皇帝に対する働きかけは風達に対して何らかの策を施す為のものであると思われます。
領内の統治については流石と思わせるもので、付け入る隙が中々ありません。時間が経てば経つほど勢力としての地力が増すことは間違いないのです」
「風。風は華琳の策がなんであるか、予想出来るかね？」
「申し訳ないのですが、分からないのですよ」
「まぁ、策を巡らせようとしている、ということが分かっただけ良しとしようか」
「はい～」
「で、華琳の所の最大兵数はどの程度だと思う？」
「今すぐ動員出来る数、という話なら６万が精々だと思うのです。今領有している領土が落ち着きを見せ、統治が上手く行ったという仮定の下であれば、１２万程度になるのではないかと思うのですよ。袁紹さんの時と同じように無理をするという前提なら２０万程度は

可能かと」
「やはりエン州と司隷州を押さえているのが大きいか。并州だと４万が精々だろうしな」
「その通りなのです。曹操さんの状況に関しては、以上なのです」
「では、最期に私からその他の諸侯の動向について、気になっていることを説明します。
まず青州の孔融殿ですが、袁紹殿に従うのを止めようとしておられます。が、明確にその意志を表示すれば、公孫賛殿同様攻め滅ぼされることは確実でしょう。難しい舵取りをすることになると思います」
「……稟、孔融様はどうなると思いますか？」
「……はっきり言えば敗亡する事になると思います。諸葛亮殿は既に孔融殿の動きを察知しているようで青州を完全に袁家の支配下に置く為に軍旅を催そうとされています。
また、徐州の陶謙は公孫賛殿に呼応する形で袁紹殿を圧迫しようとしていたようですが、冀州に沮授殿が兵を以て備えて居た為にそれが敵いませんでした。一時的とはいえ敵対的行為を取ろうとしたことを諸葛亮殿は問題視しているようで、袁家に対する忠義を示させる為に孔融殿の討伐を命令しているようです」
「……そうですか……」
「琴、孔融殿については成り行きを見守ることしかできないと思います」
「……分かって居ます。母上が長安に来られていることだけで満足すべきなのでしょうね」
「琴、恐らくだが孔融を殺しはしないだろうよ」
「何故でしょうか、お屋形様」
「孔融は孔子の子孫だろうが。領地を確保する為に攻めることは仕方がないと世人に思って貰えるかも知れんが、殺したとなると仕方がないとは思わんだろうよ。まぁ、孔融が反乱でも起こせば別だろうがな」

「そう願います、本当に」
「……他で気になるのは、荊州の劉表です。最近頻りに練兵を行っており、軍事行動を起こすのは間違いないでしょう」
「稟、練兵することは別に不思議ではないと思うが」
「頻度が増えているのですよ。事なかれ主義の劉表が突然練兵を繰り返す。おかしいとは思いませんか？愛紗」
「ふむ……確かに、きな臭いな」
「ええ。狙いは分かりませんが、私達平家を相手に軍事行動を起こそうとしているのではないかと思います」
「その根拠はなんだい？稟」
「荊州は今まで周辺諸侯と何とか折り合いを付けて戦乱らしい戦乱を経験することなく此処までやってきました。そのこれまでの実績から考えて、私達以外の勢力とは戈を交える必要はないはずです。先ず交渉し、それが決裂してから剣を取る。そういう流れになるはずです。が、今回周辺諸侯に対して何らかの通達や交渉を行った形跡はありません。であれば、今まで交流の無かった周辺諸侯に対していきなり剣を用いようと画策しているのでしょう。周辺諸侯で今まで交流がなかったのは、私達だけですから」
「成る程、私達に喧嘩を吹っ掛けてくる、という訳だ。……阿呆だねぇ、劉景升は」
「私もそう思いますが、隣人が器量に優れていないことは歓迎すべきでしょう。既に一人、時代の寵児とも言うべき人が居るのですから。これ以上は御免被りたいものです」
「稟の言う通りだろうよ。華琳の他にもう一人、有能な人間を敵対する隣人として抱えるのはゾッとしないからな」
「はい。それから、益州の劉璋ですが、先の教経殿の益州侵攻で嫌気がさしているようです」
「嫌気？」
「はい。攻め滅ぼされるくらいなら何処かで富豪宜しく隠居したい。そう考えているようですね」

「……どうやってそんなことを知るんだね？」
「それは色々、としか申し上げられませんね、ここでは」
「じゃぁ、後でゆっくり聞くさ、稟」
「……はい」

稟様は嬉しそうに微笑んでいますが、どうしたのでしょうか。

「……以上が、現状私達が把握して居る周辺諸侯の状況です。これに対し、私達平家がこれから先どう立ち回るかについて教経殿の存念を承りたいと思います」

皆が教経様を見る。よく見えないけれど、教経様は笑っているような感じだ。

「前々から言っている通り、俺たちはこれから力を蓄える為に内政に励むことになる。梓潼郡、巴西郡、新城郡、南郷郡、南陽郡、そして京兆府。ここに兵を籠めておいてそこから内側で安定した治世を現出し国力を高める。戦に巻き込まれない地域を創り出すことで、そこを目指して逃げてくる人間も増えるだろう。そうやって人口増加と経済力の向上を目指す。
同時に異民族の懐柔を行い、純粋な国力以外の力も得ようと思う。彼らの有している力は大きい。束ねることが出来れば更に大きな力にすることが出来るだろう。匈奴と鮮卑、烏丸については月に任せてある。月なら信頼を得られるだろう」
「成る程。元々接触があった訳ですから適材適所と言えるでしょうね」
「そういうことだ。その他は俺自身が対応する」
「教経様御自身が、ですか？」
「そうだ。友好関係を結びたいなら、先ず誠意を見せるべきだろうからねぇ。だから俺自身がやる」

「畏まりました」
「それから領内の道の整備を大々的にやるぞ」
「と、言いますと？」
「これまで棒道とも言うべき直線的な道を作って来たがそれを繋いでより大きな道に拡張する」
「経ちゃん、それはちょっと拙いと思うで。そんな事したら攻め込まれた時一気に踏み込まれる」
「攻め込まれた時、棒道が布いてある所まで攻め込まれている時点で負けだと思うがね。稟や風、詠のように警戒してくれる有能な軍師やお前さん達のように優秀な家臣がいる。更に、俺が善政を布いている限り、そこに至るまでに必ず民達が一報を入れてくれることだろう。その双方を欠いた時、あっという間に滅亡することになるだけだ。却って好都合だとは思わんかね？有能で忠義の心に富んだ家臣を登用出来ず、民から疎まれるような家は滅んでしまうが良いンだからねぇ。
それなら、滅びやすい国にしてやっておいたほうが良いだろうよ。俺自身がそうならぬように気をつければ良いし、もし俺が平王朝を開き、子が出来て家を継いで行くなら尚更にだ。平家の頭領たるべき器量のない屑が、ただ平家の御曹司であるからといって俺の持つ権力を世襲するなど許さん。
この世でもっとも醜悪で卑劣なことはな、実力も才能もないくせに相続によって政治権力を手にすることだ。それにくらべれば、簒奪は一万倍もマシな行為だ。少なくとも、権力を手に入れるための努力はしているし、本来それが自分のものでないことも知っているのだからな。だから奪いやすいように用意してやっておくが良いのさ。滅びたくなければ有能な家臣を集めて善政を布け。それが出来ぬ奴に天下を統べる資格はない」

……教経様は、何という誇り高い人なのでしょうか。
人の上に立つに値しない人間が権力を持つことは、例えそれが御自

身の子孫であっても許さない。簒奪させた方がマシだ、とは。有能な人間が世を治めた方が良いに決まっているが、それでも自分の子孫は可愛いものだと思う。それを、世の為に斬り捨てようというのだから。

横を見ると、蓮華様も穏様も思春様も明命も、じっと教経様を見つめている。強烈な自負心に打たれ、言葉もないようで。『覇者』の威厳とは、こういうものなのでしょうか。

「今のは俺の偽らざる本心だ。だから、問題無いんだよ、霞」

「……それならええんや、経ちゃん」

驚いている私達とは異なり、元より平家の将であった皆さんは頷いている人が大半だ。そうでない人は嬉しそうに微笑んでいるか、私達と同様にじっと教経様を見つめているようだ。

「政はそれくらいだ。後は、謀略だな」

「誰に何を仕掛けましょうか、教経殿」

「袁紹に対してだな。……風、幽州の民を煽動しろ。公孫賛はそれなりに善政を布いていたと聞く。その家風に染まった人間も多くいるだろう。不穏な雰囲気が立ち上る程度に煽動し、反乱に備える為に兵を割かざるを得ない状況を現出してくれ」

「分かったのです」

「教経殿、曹操殿は放っておくのでしょうか？」

「いンや。稟、エン州と司隷州で糧食を買い集めてくれ。少々値が張っても構わん」

「成る程。そちらで嫌がらせをしようという訳ですね」

「そうだ。奴さんとて俺に策謀を仕掛けてきているんだろうからねぇ」

「ボクには何もない訳？」

「あるぜ？……袁家の家中で文官共が権勢を競い合っているらしい

じゃないか」
「……分かったわ」
「……分かるかね？」
「ええ……ホント、アンタって良い性格してるわよね」
「まぁな。……狙いは、分かってるよな？」
「ええ……諸葛亮、田豊、沮授、でしょ？」
「ま、そういうことだな」
「やり方はボクに任せて貰うわよ？」
「あぁ。信頼してるよ、詠」
「……ふん」
「教経様。軍は動かさない、ということで宜しいのですね？」
「あぁ、それで構わん。が、いつでも動けるように準備だけはしておいてくれ」
「はっ」
「差し当たって、こんな所だろう。何か他に良いことを思いついたなら、俺に直接言って来てくれ。課題がある場合も同様だ。皆、頼むぞ」
「御意」

軍議は終了しました。
広間を立ち去る教経様に、稟様が付き従って共に下がります。

雪蓮様も素晴らしい主君だと思いますが、教経様も素晴らしいお方です。雪蓮様が従おうと思ったのも良く理解出来ました。

……ただ、まだお顔がよく分からないのですが。
眼鏡を変えないと、駄目かも知れません。

今度、眼鏡を買いに行こう。
軍議に出て、教経様の器量に圧倒されて、出した結論が眼鏡を買う

というのはちょっと変かも知れないですけど。兎に角、眼鏡を買いに行きます。一度、きちんと拝見したいですから、ね。

蝶の如く～１００～（前書き）

節目の１００話を迎えました。

今後とも、拙作を宜しくお願い致します。

蝶の如く～１００～

～教経　Ｓｉｄｅ～

蓮華達と会見し、今後の方針も定まった。一段落したと言っても良いだろう。
一日の仕事を終えて繰り出した長安の街は、相変わらず活気に溢れていた。
茶を飲みながら町を眺め、この活気をもたらす事が出来ている現状に一人満足している。

「……おい、教経。お前は何故いつも診療所に来ては我が物顔で茶を飲んでいるのだ」

いつも通り、凱の診療所で寛いでいると凱が何やら文句のようなことを言ってきた。

「まぁそう堅いことを言うなよ。此処は俺の国だ。だからこの診療所も俺の診療所だ。ここまでは大丈夫か？」
「……その時点で大丈夫じゃない」
「……凱、お前さん、意外に可哀相な頭をしているんだな……」
「失礼なことを言うな！おかしいのはお前の頭であって俺の頭じゃない！」
「基地外は皆そう言うんだ……大丈夫だ、凱。俺はいつでもお前の味方だ……！」
「教経……思わず『有り難う』と答えそうになった自分を殺してやりたい」
「そうか。自殺は良くないぞ、凱」
「うるさい、黙れ」

「やれやれだぜ」
「……苛つくな、その身振りは」
全く。凱は鍼師としての腕は良いンだが、ちょいと頭がアレな感じなんだよねぇ。
「あらん。どうしたの華佗ちゃん。そんなところで話し込んじゃって」
ぶるぁぁぁぁぁ！
「ばばばばば」
「ば？」
「バケモノだぁぁぁぁぁぁぁ！」
「あらぁ～ん。だぁぁれが怪しいと書いて怪物、妖しいと書いて妖物、化けると書いて化物の三つまとめて愉快なバケモノ三昧ですってぇぇ！」
「貂蝉、落ち着け」
「ほう。イイオノコの香りがすると思って来てみれば、だぁりんの他にイイオノコがおるではないか」
見よ！東方は、紅く燃えているぅ～！！
「あばばばばば」
「あば？」
「化け物だぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「むぅ。その言葉、いくら何でも聞き捨てならんぞ」
誰がどう見てもバケモノだろうが！

「黙れ、バケモノめ！この長安で悪事を働こうなどと、そうはさせんぞ！……凱、少しだけこの場を頼む！直ぐに彼が助けに来るからな！」
「あ、おい！教経！」

急いで診療所の一室に飛び込み、仮面と衣装を取り出した。
こんな事もあろうかと、ブラックジャック先生と凱の診療所に予備を用意しておいて良かった。備えあれば憂い無しだな！

見ていろよ化け物共め！
完全体となったこの俺が、格の違いを思い知らせてやろうではないか！

「だぁりん、何じゃあの失礼なオノコは」
「あれは平家の主、平教経だ」
「……あらぁん。あれがこの外史の天の御使いね」
「？何だ？」
「いいのよぉん華佗ちゃん。こっちの話よぉん」
「ならいいが」

「そんなことより華佗ちゃん、今日も相変わらずのいい男ねぇん」
「貂蝉、抜け駆けは無しだと言っただろう」
「ちょ、二人とも何をやっているんだ！」

バケモノ共は凱をアッーしようとにじり寄っている。
……このまま新世界の扉を切り開き、ニュータイプならぬνハーフになるのを見ても構わんが、流石にそれだと診療を受けたくなくなるから助けようじゃないか！

「待てぇい！」
「ぬおっ！？なんじゃ？」
「プロテインとワセリンに塗れたアニキ共よ！我が肉体を見るが良い！
一切の妥協もドリンクを飲むことも無く作り上げた肉体美。
人、それをボ帝＜ボテイ＞と呼ぶ……！」
「な、何者なのぉん？貴方は！？」
「貴様らに見せるポーズィングは、ない！」

ふっ……決まった……

「とう！」
「ぬぅ……やりおるわ！分かっておるではないか！」
「美味しいところを全部持って行っちゃうなんて、欲張りバリバリ伝説ちゃんねぇん。貴方、平……」
「違うぞ！俺の名は蝶野攻爵！超人・パピヨンだ！」
「パピヨン？」
「チッチッ。『パピ☆ヨン☆』。もっと愛を込めて！」
「……その名前といい服装といい、なかなかイカしているじゃないの」
「……へぇ。この美しさが分かるとは、中々やるじゃないか」

「それはそうよん。漢女は美しいものに目がないものなのよぉん」
「そうじゃ。わたし達、漢女道を極めんと欲する者は常に美しくなければならぬのだからな」

どうやら、俺の早とちりだったようだな。
このスタイルを理解出来る者に悪事を行うものは居ない……！
構わん、凱をヤってしまうがいい。

「……どうやら俺が誤解していたようだな。我ら、求める道は異なれども求める姿は同じ！」
「おぉ！」
「そうねぇん！」
「……ちなみにこの服と仮面はクロノクルの店で買えるぞ」
「……貂蝉！」
「……えぇ、分かって居るわよん！」
「え？」
「だぁりん、直ぐに戻る！」
「行って来るわぁん、華佗ちゃん」
「は？」

呆然としている凱を置いて、二人の漢女は出て行った。

「蝶野攻爵と言ったな」
「オレを蝶野攻爵と呼ぶんじゃない！
その名で呼んでいいのは武藤カズキだけだ！」
「す、済まない。……パピヨン、教経を見なかったか？」

発音が良いじゃないか、凱。

「……彼なら少し用事があると言って出ていった。なに、直ぐに戻

ってくるだろう」
「そうか」

許せ凱。俺は素性を明かす訳にはいかないのだ

「一先ずさらばだ！」
「あ、待て！何故診療所の中へ！？」

凱が何やら言っているがそんなことはどうでもいい。
先程の部屋に飛び込んで急いで着替える。そして窓から外へ出て、
何事もなかったかのように再び診療所の門をくぐる。

「凱、どうしたんだ？」
「あぁ、教経か。何処へ行っていたんだ」
「何、少し買い物にな」
「華佗ちゃん、今帰ったわよ」
「だぁりん、わたし達が居ない間、寂しくて溜まらなかったのではないか？」
「いや、特には」
「相変わらず連れないだぁりん……だが、それが良い！」
「ＡＡ略だな」
「それは基本だ」
「で、買ってきたのか？」
「おおよ！貂蝉も買っておるぞ」
「当然よね。漢女の必須アイテムになりそうだもの」
「……凱、二人にお茶を出してやってくれないか」
「？まあ良いが」

そう言って凱に席を外させた。
これでここはホムンクルスを越えた第三の存在達のしゃべり場にな

った。

「それを身につけた時のお前さん達に相応しい名前を付けてやろうじゃないか」

「ほぅ。それはどういうことかな」

「認めたって事かな。俺は平教経。あの時の名は、本名を蝶野攻爵。蝶人・パピヨンを名乗っている」

「ほほぅ。私は卑弥呼だ」

「あらん。私は貂蝉、しがない踊り子よん」

「卑弥呼、お前さんのあの時の名は、本名を蝶野爆爵。アドンを名乗ると良いだろう」

「おぉ。よく分からんがそれが一番しっくり来る気がしてきたぞ」

「貂蝉、お前さんのあの時の名は、本名を蝶野刺爵。サムソンを名乗るが良い」

「黙れ下衆！」

「……貴様ッ、見ているな！？」

「アポカリプス　ナウ」

風と同じで電波を受信出来るようだな、貂蝉は。

「まぁいい。兎に角、長安の治安を乱す悪党共を俺たち三人＋１で懲らしめてやろう」

「望むところだ！」

「良いわねぇん……＋１って何なの？」

「星……趙雲という平家の将なんだが、蝶の仮面を付け、華蝶仮面を名乗っている」

「成る程、その者も求める姿は同じということだな」

「そうだ。これで俺たちは種族の違いを超えた同士となったわけだ」

「……失礼なことを言われている気がするが、まぁ同士であることには違いない」

「各自で登場時の台詞はアドリブかましてくれ。決め台詞も、好きなものにしよう」
「教経ちゃん、貴方は決め台詞を持っているの？」
「あぁ、サイコーにエレガントな奴をな」
「わたしも思いついたぞ、貂蝉よ」
「あら、わたしもよん」
「……んじゃ、全員で一度やってみるか？」
「……よかろう」
「……準備は良いわん」

では、行くぞ！

「蝶・サイコー！」
「見よ！東方は、紅く燃えているぅ～！！」
「ぶるぁぁぁぁぁぁ！」

素晴らしい一体感だな！

「「「俺たちに（アレ以外に）着れる服無し！」」」
「……決まったな」
「……うむ」
「……最高ね」

次に悪党共が出てくるのが愉しみだ。
厄災を届けてやるぜぇ？

～思春　Ｓｉｄｅ～

軍議の翌日、中庭で教経様と蓮華様が話をしている。

実際にこの目にするまで、気に入らぬ奴だと思っていた。孫家の、そして蓮華様の悲願である旧領回復を成し遂げた私達にそれを放棄させるような真似をさせた男。我が身の為に良かるべしとて孫家に旧領を放棄させたのではないか。そう思っていた。

だが実物を目の前にして、そのような思いは霧消した。
教経様は間違いなく尤物、いや、傑物だろう。その器量は私が今まで見てきたどんな人間よりも大きく見えた。
蓮華様も同じようで、教経様と話をしてみたいことがある、と言って態々訪いを入れたのだ。

「教経、貴方は平家の頭領として周囲の者からの期待を負担に思ったことはないの？」
「期待、ねぇ……俺ぁ爺共に駄目だ不足だと言われて育ったからなぁ。アレが期待の裏返しだって気が付いた時には、もう既に平家の頭領として振る舞うことが当たり前になっていたからねぇ。負担だとは感じたことはないな。ただ俺には家長としての責任があるのだ、ということを常に意識していただけでねぇ」
「……貴方が駄目なら私はどうなるのよ」
「別にどうにも成らないんじゃないかね？」
「どうにかなりそうよ。母様も姉様も、孫家の主として立派な人だと思う。私は、その後を継げ、と姉様に言われているのよ」

「それは知っているがね」
「私が母様や姉様のように成れるはずがないじゃない。そう思わない？教経は」
「そう思うぜ？」

……少しは気を遣って貰いたい。
蓮華様は、御自身に劣等感を抱かれている。比較する対象が孫堅様や雪蓮様であるから、致し方のない点もあるとは思うが。

「……やはり、そう思うのね」
「……なンで深刻な面をしているのか分からんがね、蓮華。お前さんはお前さんにしかなれんよ。それは当たり前のことで別に不思議なことでも何でも無いだろう」
「比べられる身にもなって欲しいわ」
「成る程、劣等感を抱いているのか、蓮華」
「……当たり前でしょう？母様も姉様も、孫家の主として立派な人間よ。その跡を継ぐ私は、当然母様や姉様のような人間でなければならないじゃない」
「その前提が間違っているンじゃないかね？」
「間違い？」
「そ。思春に聞いてみれば分かるんじゃないかね」

教経様はそう言いながら私の方へ向き直る。

「……教経様、私に、何か」
「思春。お前さん、蓮華が孫家の次期当主として相応しいから蓮華に仕えているのかね？」
「それは勿論そうです」
「……あ～、訊き方が悪かった。お前さんは、蓮華が孫家の当主としての器があるから仕えているのか、それとも蓮華自身の器に惹か

れて仕えているのか、どちらだね？」

……成る程、そういうことか。

「勿論、蓮華様自身の器量を見込んで、です」

「じゃぁ思春。蓮華は雪蓮のようにあらねばならぬと思うかね？」

「いいえ。蓮華様は蓮華様として生きて行かれるのが良いと思います」

「ほら、な」

「……思春は私に気を遣ってくれているだけよ」

「頑なだねぇ。もっと肩の力を抜いた方が可愛いぜ？蓮華」

「な、何を言っているの貴方は……」

こういうことに慣れていらっしゃらないからか、蓮華様は恥ずかしそうになさっている。

「……なぁ蓮華。蓮華は思春のことを信じて居ないのかね？」

「そんなことがあるはずないでしょう？私は思春を信頼しているわ」

「蓮華様……」

「では、その信頼する思春が言うことを言葉通りに信じてやらないのは何故かね？」

「そ、それは……」

「思春は、お前さん自身の器量を見込んでいる、と言っているじゃないか。お前さんが孫家の人間であろうと無かろうと、出遭えばきっと思春はお前さんに仕えてくれたことだろう。謙遜するのは良い。だが、自分の器量を不当に低く見積もるってのは、お前さんを信じる思春を裏切ることになるンじゃないかね？」

「う……」

「それになぁ蓮華。この国に一体どれ程の人間が居ると思っているンだ？お前さん、知っているかね？」

「……いや、知らない」
「実は俺も詳しくは知らない」
「……なにそれ……ふふっ」
「お、気持ちに余裕が出てきたみたいだな。……でもなぁ蓮華、沢山の人が居るって事は分かるだろ？」
「それは分かるわ」
「それだけ沢山の、数え切れないほどの人間が居るのに、全く同じ人間は一人として居ないんだぜ？蓮華。雪蓮は雪蓮だし、蓮華は蓮華、思春は思春だ。孫家の人間が全員雪蓮みたいだったらエラい事になるだろうが。『もっとお互いのことを知る為に、殺し合いましょう？』とか言って殺し合いかねんぞ？」
「……否定出来ないのがもどかしいわね」
「ははっ。まぁ兎に角だ。蓮華が孫家の主になるとしても、孫堅や雪蓮のようになる必要はないだろうよ。お前さんはお前さん自身としてお前さんの人生を楽しめばいいんだからねぇ。誰かとどんなに似ているところがあったとしても、蓮華は蓮華なんだよ。蓮華が蓮華として生きていく事が、どれ程尊いことか。蓮華、お前さんは孫堅でも雪蓮でもない。蓮華は、蓮華で良いンだよ。いや、蓮華でなくては駄目なンだ。それが『生きる』ということだと思うよ、蓮華」
「『生きる』……」
「そうさ。雪蓮のようになろうとして雪蓮になりきったとしても、それは本来蓮華が歩むべき人生じゃない。蓮華は、蓮華らしくあればいいンだ。そこに優劣はない。等しく尊いものなんだよ、蓮華。だから、そのままで良いのさ」

そう言われて、蓮華様は暫く押し黙っていた。

「……有り難う、教経。少し楽になった気がするわ」
「まぁ、役に立てたのなら何よりだ。雪蓮のようになった蓮華なん

て想像したくもないからねぇ」

そう言って、二人は笑いあっていた。

蓮華様の屈託のない笑貌を見ながら、教経様に従ったことは間違いではなかったのだと、そう思った。

蝶の如く～１０１～（前書き）

仕事仕事仕事～。
今日明日に、仕事が入りました。

何とか理由を付けてこのお話を書くだけの時間を確保しましたが、
次の更新を明日の夜に出来るかどうか微妙です……

蝶の如く～１０１～

～朱里　Ｓｉｄｅ～

「孔明殿、何処へ行かれるのですかな？」
「……書庫へ行って書物を取ってこようと思っているのですが」
「そうですか。仰って頂ければ、私が持って参りますので孔明殿は自室にてゆっくりお休みになっていて下さい。余り自由に動かれますと、私にも与えられた役目というものがありまして、互いに良い結果をもたらさない事になると思いますので。不自由なことと思いますが、ここはこの沮授の言に従って頂けませんか」
「……分かりました。それでは『戦国策』を」
「畏まりました。併せて『呂氏春秋』もお持ち致しましょう」
「お願いします」

私は現在徐州にいる。
青州で袁家の軛から抜け出そうとしていた孔融を陶謙に討伐させた。
孔融を首にするなど戦功著しかった陶謙に重賞を授け、改めて袁家に剣を向けた罪と孔融を殺した罪を問うてこれを処断した。陶謙が慮外に馬鹿で助かった。陶謙が孔融を殺したことで、袁家が受けるべき怨嗟の声を全て引き受けてくれた。これを処断することで、旧孔融領の領民達は袁家にさほど反発心を抱いていないようだ。徐州についても、元々陶謙が傲岸不遜で周囲の人間をおもんばかることが出来ない人間であった為、豪族達は袁家の支配をすんなりと受け入れている。冀州と徐州を奪い、孔融と陶謙を殺したことで危機感を頂いた鮑信は軍勢を引き連れてエン州へ逃げ込んだ。これで、袁家は幽州・冀州・青州・徐州を治める事になった。

次は曹操。鮑信を受け入れたことで開戦の良い口実が出来た。

そう思っていたのに、そうなっていない。
袁紹さんからの通達として長年領内を荒らし回ってきた黒山賊の討伐を行う事が宣言された。黒山賊などと争っている時間はないのに。黒山賊などは虫垂のようなもので別にそれがあるからと言って命に別状はない。だが曹操は違う。悪性の腫瘍のようなものだ。手遅れにならないうちに取り除いておかないと、いつか袁家を殺すことになる。放っておいて何処かで勝手にしていてくれるならまだしも、今回の場合は間違いなく取り殺そうとしてくるに違いない。

戦勝につぐ戦勝に領内は沸き立っているようだが、それは結果だけのことだ。私達を取り巻く状況は、刻一刻と悪化している。策によって、兵力を分散させられている。そう思う。
幽州との国境に、鮮卑や烏丸が兵を率いて現れている。袁家に全くと言って良いほど靡かない幽州の現状を見て、好きに出来ると考えているに違いない。これに備える為に兵を割かねばならない。
その状況下で、青州と徐州を完全な支配下に置く為の軍事行動を行った。暫く軍旅を催す事を控えて地力を取り戻し、その上で曹操と対峙するのが最上の策であろうものを、続けて黒山賊を討伐するなど愚策もいいところだ。練度の高い兵や金穀が無限に、即時に湧いて出てくるものだと勘違いしているのではないか。しかも黒山賊を討伐している最中に曹操が攻め掛かってきた場合、兵力分散の愚を犯すことになる。
袁家の強みは、その領地の口数の多さから来る経済力と兵数にある。だがその一方で、弱点も存在する。それは、驍将と言うべき将がおらず豊富な兵力を分散して方面軍として行動させることが出来ない点にある。私ならそれを努めることは出来ると思うが、残念ながら忠誠心という点で方面軍を任せるに足る人間ではない。桃香様と私を方面軍として配すことが出来れば問題無いが、それだと袁紹さんを制御出来る人間が居なくなってしまう。だからこそ、兵力を一極集中させてこれを効率よく運用する必要がある。その為には、二面

作戦を避け得ない状況を回避する為に策を施し、常に一面で戦う事を心掛け、敵を圧倒的な兵力を以て飲み込んでいく戦いをしなければならない。袁家と敵対すれば圧倒的な兵力を以て飲み込まれるしかないのだ、という強迫観念を世人に強く認識させ、二面作戦をとられれば脆いということに目を向けさせないようにしなければならない。

加えて、糧食が心許ない。黒山賊討伐に十分な糧食は用意しているが、それが終わって短い休息で次の軍旅を催す事が出来るほどの糧食は残されていないだろう。それでも、恐らく曹操を討伐する為に即座に行動を起こそうとするに決まっている。短期決戦すれば問題無いと思っているのだろうが、曹操とは短期決戦すべきではない。大軍同士による短期決戦は予測が及ばない危うさに溢れている。そうでなく、時間を掛けてじわじわと、真綿でその首を締め上げるようにゆっくりとその力を削り取って勝利を確実なものにしなければならない。その為には潤沢な糧食が必要だ。商人達から購入しようにも糧食自体がなければ購入出来ない。鉄も馬も不足気味で価格が高騰しているのだ。これを行っているのは、曹操か平教経。それは間違いない。純粋な武力で決着を付けるのではなく、国を疲弊させることによって武力を弱めてこれを撃つ。これだけの企画が出来る人間となると、極めて限定される。その器量がある人間は、その二人以外にはあり得ないのだから。

私達が袁家に仕えるようになるまで袁家の軍師の座を争っていた人間達は、どうやら曹操を取り除くことよりも自分たちの権勢を強めることしか念頭にないようだ。袁家あっての自分たちであるということに気が付いて居ない。本末転倒ではないか。袁家での出世を望んでいるのに、袁家が倒れるような振る舞いをしようとしている。

彼らの妄動を止めさせる為に桃香様と共に袁紹さんを説こうとした

が、何としても逢うことが出来なかった。それだけでなく、雛里ちゃんが出奔したことを口実として徐州に赴任させられ、政を見るように、と言われた。それも、監視付きで。まぁ、監視と知っても沮授さんだから不快な思いをすることはないのだけれど。実情は、二人してやっかい払いされたということだろう。

私は、一体何をやっているのだろうか。

桃香様の理想を袁家を通して顕現させる為に最良と思われることを為してきた。それなのにそれがもたらした結果は、疎まれ遠ざけられるというものでしかなかった。

だが私は立ち止まる訳にはいかない。

黒山賊討伐中に曹操が攻め込んできた場合、徐州からどのように対処するのか。それを考えておく必要がある。傍目的には、私は徐州で蟄居させられており、一歩も動けぬよう監視させていることになっている。だが、沮授さんは目に付かない限り自由にして貰いたい、と言ってくれている。恐らく、彼もこの現状が何を意味し、最悪の場合何をもたらす事になるのかをきっちり見通しているのだろう。

……もし、曹操が来たりなば。

策は、既にある。それを実行するだけの兵力もある。準備も、沮授さんにやって貰う。

曹操。攻め込んできた時、貴女を打ち据えるだけの力があることを証明してみせる。袁家になくとも、この私にそれを為させるだけの企謀があることを。

～雛里　Ｓｉｄｅ～

白蓮様と巴郡で練兵に励んでいる。
桔梗さんの居城に落ち着いた白蓮様は、公孫賛の生存を宣言した。
最初は誰も信じなかった。そうなることは分かって居たが、それでも少しムッとしてしまった。こんなに素晴らしい人が公孫賛でない訳はないのに、それを受け入れることをしようとしない人達に腹が立ってしまった。

難しい顔をしていたのだろう。白蓮様は私に声を掛けて下さった。
『関靖は天で苦笑いをしているだろうな。田楷はその関靖をなじっているだろう。貴様がやり過ぎたのだ、いや貴様だ、とか言いながら、仲良く喧嘩しているに違いないよ、雛里。あははは。
偽物だ、と言われても良いじゃないか。世の人達が私を見てどう判断するかは、その人自身に拠るんだから。その心までも自分の思い通りにしてやろうとは思わないよ。私を見て、私の噂を聞いて、いつか私が公孫賛に違いないことを認めざるを得ないようにしてやれば良いだけなんだから』
そう言って闊達に笑った。

きっとそうだろう。あの人達は、そういう人達だった。いつも仲良

く喧嘩していたのだから。その情景を思い浮かべて、思わず笑ってしまった。

桔梗さんと親交のあった蜀の武将達は、その悉くが白蓮様と面語してこれに付き従うことを宣言した。その中でも、張任さんと李厳さんは尤物だと思う。将が不足気味の私達にとって、心強い存在だ。紫苑さんは、長沙郡で募兵・挙兵し、白蓮様に付き従うことを宣言した。その軍師として、珂瑛が付いている。武将として、？艾さんという非常に有能な人が従ってくれることになった、と珂瑛からの書状にあった。珂瑛が、『非常に』優秀と表現したのだ。瑛に対してさえ、『優秀』止まりだった珂瑛が。きっとその言葉通り、非常に優秀なのだろうと思う。そして何より心強いのが、吉里が付いてくれていることだ。

吉里。姓は徐、名は庶、字を元直。水鏡先生の教えを共に受けた学友だ。私とは親友とまでは行かないけれど、朱里ちゃんとは非常に仲が良かったから私との仲も良好だった。良く三人で、机上で模擬戦をやったものだ。天下国家の規模で戦を考えた時に負けることはなかったが、ことを戦場に限定した時には何度か負けたことがある。その吉里が白蓮様に仕えてくれた。水鏡先生からの紹介状を持って、訪ねて来てくれたのだ。

……相変わらず紹介状には『好々』としか書かれてなかった……先生、もうちょっと考えた方が良いと思います……確かに、それだけで分かりますけど……

白蓮様と話をした吉里は、白蓮様に仕えましょう、と言ってくれた。『鳳の雛が凰を得て鳳凰になった』、と先生から聞かされたけど、どうやらそれは誇張でも何でも無くただの事実だったようね。そう言って。

紫苑さんは、その吉里の企謀に基づいて荊南を一気に攻略しようとしているようだ。武陵、零陵、桂陽、臨賀。紫苑さんに珂瑛。？艾

さんに吉里。募兵した約3万の軍勢で二手に分かれて攻略を進めている。白蓮様に付き従う、ということで領民達から糧食の提供を受けたり、軍旅に合流してきたり、城門を進んで開ける人間が居たりと順調に事は進んでいるようだ。

益州は、劉璋さんから乱世に嫌気がさしたから白蓮様に後を托して隠居したい、との意思表示があったことで、手荒な真似をせずにこれを領有することが出来た。唯一、東広漢で世子の劉循が抗戦しているが、これを下すのは時間の問題だろう。焔耶と瑛が攻略に当たっている。托す代わりに、一生困らないだけの財貨を提供することを条件に出してきたが、それは問題無く支払えた。その申し出があった時、張任さんが白蓮様に面会を求めてきて、出来れば武力に拠らず平和的に解決して頂きたい、と言った。

「私が武力によって劉璋殿を討伐する、と思うのか？張任は」
「……この儂は愚昧にして、白蓮様の為人を完全に把握して居る訳では御座いませぬ。ご不快に思われたならば、この皺首を差し上げましょう。ですが、劉璋様だけはその生を全うすることが叶うように取りはからって頂きたい」
「……劉璋殿の為に、その命を捨てる、というのだな」
「御意」
「何故そうするのだ？残される劉璋殿の気持ちを考えたことがあるのか？」

……きっと白蓮様は関靖さんと田楷さんのことを想ったに違いない。その風貌もあって、張任さんと二人が重なって見えたに違いないのだ。私でさえ、一瞬二人のように見えたのだから。
その白蓮様に苦笑いをしながら、張任さんが答える。

「……白蓮様。劉璋様はこの儂が死んでも痛痒にも感じられぬでし

ょう。劉璋様はそういうお方なのです」
「では尚更にお前が命を捨てる必要が無いじゃないか」
「そうは参りません。劉璋様は生まれてこの方この儂が傅育参らせたお方で御座います。言うなれば我が孫のような存在。どんなに愚鈍であろうと、孫は可愛いものでありましょう。それを護る為に命を捨てるのに、躊躇いは覚えませぬ。儂の傅育が不十分であったことが原因でありますし、儂はもう十分に生きて参りましたでな」
「……お前の想いは分かった。劉璋殿にはその生を全うして貰う。なんとしてもだ。最初に言ったように、私は誰かが生きていくのに誰かの命を犠牲にしなければならない世の中を正す為に再び起ったんだ。避けられないならまだしも、避けられるなら絶対に避けたいからな。
劉璋殿の為に死ぬことは許さない。それが出来ないようにしてやる。それが私を不快にさせた罰だ、とでも思って貰おうかな」

張任さんはそう言って笑った白蓮様を眩しそうに、目をしばたかせながら見つめた後、白蓮様のご高恩に例えこの身が朽ちようとも必ず報いるでありましょう、と言った。

「……張任、私の為にも死ぬことは許さない。避けられる限り、自ら進んで死ぬことは許さない。これは命令だ、張任。『生きよ』。生きて私の為に働け。死んで働くことは許さない。絶対、絶対にだ」

そう、強い口調で言い放つ白蓮様に、張任さんは平伏して深々と頭を下げた。
後で言葉を交わした際、張任さんはこう言っていた。

『我、終に終生の主を得たり』、と。

蝶の如く～１０２～（前書き）

ネタ・ネタ・ネタで御座います。
一部で根強い？人気があるかも知れない断空我が久方ぶりに出てきますよ、と。異名が付くかも知れないですね。さて、どんな異名でしょうか。答えが分かる奇特な人は、感想へどうぞ。

蝶の如く～１０２～

～冥琳　Ｓｉｄｅ～

南郷郡の馴致を終えて、教経に面会しに行った蓮華様達と入れ替わるように長安へ入った。入れ替わるように、と言っても穏と明命だけが南郷郡へ帰ったのだが。蓮華様は長安で教経の政について見聞したいと希望しており、暫くは留まるようだ。元より戦より政に向いている訳だから、これは良い機会かも知れない。

だが、南郷郡は曹操と劉表に接している為軍事的にも政治的にも危険が高い。ここを崩されると困る、ということで碧と風が軍勢を率いて南郷郡に入ってくれた。あの二人が居れば大丈夫だろう。特に、碧が居るのは大きい。雪蓮より腕が立ち、騎馬を運用することにおいて霞と同等かそれ以上の力量があるだろうと教経が言っていたのだ。孫家には騎馬を有効に運用出来る将が居ないことが弱点と言えば弱点だったが、これで問題無くなった。領内の引き締めについても、風が居れば問題無いだろう。というより、風はそういった方面の専門家だ。他家からの煽動や工作を無力化していくことだろう。私でも、一歩譲るかも知れない。

長安に到着し、教経に挨拶をしようと訪いを入れたのだが、生憎と不在だった。

……私が来る、ということは前もって書状で知らせておいたのだが。

まぁ、あれは忙しい男だ。仕方がないのだろう。

今日は教経と周囲を取り巻く状況について話をしたかったのだが、居ないというのであれば仕方がないだろう。町へ繰り出して、長安の現状を把握した方が良いかも知れない。

そう思って町を歩いている。
これ程の活気に溢れた町は、この大陸には他にないだろう。商売をするに当たって、売り上げに対する税さえ納めれば店を出すことに問題はない。勿論、どこででも店を構えて良い訳ではない。
教経は、商店をその扱う商品の種類毎に区画を分けて配している。あちらの区画は衣類、こちらの区画は飲食。何処に行けばどの系統の店があるかが直ぐに分かる。また、類似した商品を売っているので、商人達が価格を抑えて競争し、結果として民達はより良いものをより安く手に入れる事が出来るようになっている。

以前長安にいる時に話を聞いた時、教経はこう言っていた。
『価格ってのは国が決めても良いことは何一つ無い。糧食が不足しているにも関わらず必ずこの値段で売れ、と安い価格で売ることを強要すれば、商人は寄りつかなくなる。逃げ出すことが出来ない商人は利益を出すどころか損害しか無くなる為、店をたたむしか無くなる。その結果、経済力が落ちる事になるンだからねぇ。
それよりは、自由に価格を決めて構わない、ということにすればいいのさ。隣の店で同じようなものが安く売っていたら、それよりも高い値段では売りにくい。必然的に、価格は抑えられる。勿論、談合は許さない。やった奴は死罪。但し、民の生活の為に安く抑えよう、といったものに関しては逆に助成してやるから言ってこいと言ってある。
全ては、按配というものが大切なのさ。こうすれば、モノの価格は民達の需要が決めてくれる。需要と、欲している物資の総量の割合に応じた価格というモノに自然と落ち着くモノだ。天の見えざる手によってねぇ』

聞いた当初は、そのようなことがあるのだろうか、と思ったものだ。だが、実際にそうなっているのを目にすれば、教経が正しいことを

認めざるを得ない。塩などの生きていく為に必須となる物資については、教経が積極的に余所から買ってきては溜め込み、不足していれば蔵を開いて供給し、溢れていれば買い上げてまた溜め込む、という形で総量をしっかりと管理している為に価格が一定となっている。

良くこのようなことを思い付くものだ。主君としての器量も武人としての力量も策士としての知謀も、そして政治家としての手腕も一流。自分が好いている男がそういう男であることが誇らしい。

……教経について、穏が興奮気味に身をくねらせながら話をしていたのが少し心配だが。雪蓮は孫家の人間に対して、教経を籠絡して子を為すように、と宣言した。やめろと言ったのに止められなかった。蓮華様達に渡すように言われた書状にも、きっと同じ事が書かれているのだろう。焼き捨ててやろうかとも思ったが、流石にそれは拙いだろう。

こうなれば、私が先手を打つしかないのだ。

誰かに先を越される、というのは御免被りたい。少なくとも、孫家の中では教経が一番好意を寄せてくれているのは私だという自信がある。自惚れに近いものだとは思うが、あれ程熱烈な愛を囁いてくれたのだ。間違いはないだろう。

町を一回りして城に戻ろうとした私の前に、人だかりが出来ていた。何事かと思い覗いてみれば、どうやら黄巾の残党共が民家に押し入り、狼藉を働いて出てきたところを官兵が囲んでいるようだ。制圧しようにも人質が居るようで、官兵のとりまとめをしている男も迂闊に手出し出来ないと判断しているようだ。膠着状況に陥っている。

……私も平家の軍師なのだ。知恵を貸してやった方が良いだろう。

「どういう状況なのだ？」

近寄ってそう話しかけると、男が振り向いて私を見、少し驚いた顔をしている。

……たしか、断空我、と言ったか。

「……あぁ、アンタか。黄巾の馬鹿共が押し込み強盗を働きやがったからぶっ飛ばしてやろうと親衛隊連れて来たんだが、どうやら人質がいるみたいなんだよ。子供を人質にしていて、近づいたら殺す、と言っていやぁがる。いつも俺をフルボッコにしてくれる餓鬼共だ。そのこと自体は胸くそ悪いんだが、アイツらが死んじまったら寝覚めが悪すぎるだろうが。なんとか、助けてやりたいんだが……俺は頭が悪いから良い案が思い浮かばないんだ。……なんかないかな。アイツらが死ななくて、糞共をぶっ飛ばしてやれる、妙案はないか？」

言葉遣いがなっていないな、この男は。

だが、民の子供だから死んでも構わない、と考えず、何とか助けてやりたい、と考える所は好ましい。黄巾の残党共を殺さずに罪に服させることを考えている点もまた同様だ。

流石に教経に見込まれて親衛隊の隊長を務めるだけのことはある。

頭がちょいとアレな感じだ、と教経は言っていたが、頭が悪かろうと物事の本質を漠然とでもつかめる人間はそういないものだ。この場合に必要とされる対処についてしっかりと把握して居るこの男の器量は、中々のものだと言わざるを得ない。

だが……

「……妙案、と言ってもな。そう簡単にはいかぬのではないか？注意を子供から逸らすことが出来れば良いが、自分たちの命が掛かって居る状況で余所見をするほど間の抜けた奴らではあるまい」

「……糞ッ！何か無いのかよ！」

手詰まり、という奴だ。
賊共は道を開けろ、と言っている。追っ手を差し向けなければ子供は解放してやろうと言っているが、果たして約束を守るような人間がこのような狼藉を働かなければならぬ身分にまで落ちぶれるだろうか。

「待てぇい！」
「な、何だ！？」

この声は、教経か？
そう思っていると、周囲から『パピ☆ヨン☆様だ！』という声が上がっている。
……なんだそれは。

「無法の嵐が吹き荒れようと、くじけぬ心あるならば、
いつか嵐は凪となり、静けさが戻る。
災いは必ず去るもの……
人、それを禍福という……！」
「き、貴様、何者だ！？」
「貴様らに名乗る名前は、ないっ！」

そういって屋根の上から飛び降りてくる。
……教経、お前は何という格好を……
そのまま、賊の一人に蹴りを入れて子供を一人確保する。
その格好と登場に呆気にとられていた賊共は、全く動けないようだ。

「ヌハハハハ！」
「な、何だ！？まだ変態が居るのか！？」

今度は何だ?

「屑共、そこをどけぇい!この儂、蝶野爆爵が、マスターアジアが貴様らの心に巣くう悪を討ち滅ぼしてやろうと言うのだ!……む、間違えたか……まぁ良いわ!そりゃぁッ!」

そう言って、教経同様屋根から飛び降りてくる。

「酔舞!再現江湖デッドリーウェイブ!!」

何という気だ。身のこなしからして、相当な武術の達人であろう。

「ばぁくはつ!」

子供を人質に取っていた賊を一撃でのした。

……爆発?

まぁ、良い。兎に角、子供は解放されたのだ。だが、後二人いる。それはどうするのか。正気に戻る前に、もう二人を救わねばならない。その内の一人には、剣が突きつけられているのだ。

「下がれ下衆!」

……まだ、何か来るのか……

「アァイテムなぞぉつかってんじゃぁぁNEEEE!!」

いきなり宙を舞い、剣を突きつけていた賊の後ろに回って羽交い締めにし、そのまま後へ放り投げた。賊は、壁にめり込んでいる。

……子供は無事なようだ。

「あっはっはっは！あっはっはっは！」
「こ、今度は何だ！？まだ増えるのか！？」
「可憐な花に誘われて、美々しき蝶が今、舞い降りる！
我が名は華蝶仮面！混沌の都に美と愛をもたらす、正義の化身なり！」

……星、お前もか……

「悪人よ、悔い改めよ！」

これまた同様に屋根から飛び上がり、賊に槍を突き出した。
……星よ、手加減しないと賊が死ぬぞ……

「グフィ！」

……よく分からない声を発して賊が倒れる。
子供は全員解放されたようだ。

「テメェ！何モンだ！」
「……むっ、その槍、サンライトハートか！？」
「はぁ？大将みたいなこと言ってんじゃねぇ！」
「……俺の名前は蝶野攻爵！いや、蝶人・パピヨン！見ての通り、善良な一市民だ！」
「怪しさ爆発じゃねぇか！」

断空我と教経がいつも通りの遣り取りをしている内に、賊共が正気を取り戻したようだ。

「て、テメェら！なんて格好をしてやがる！この変態が！」

「ぬぁんですってぇ～！」
「この美しさが理解出来ないとは、貴様らには相応の報いというモノが必要なようだな……」
「フハッ！だぁ～から貴様らはアホなのだぁ～！」
「パピヨンよ！一気に決めてやろう！」
「了解だ！行くぞ！必殺技だ！」

だから、殺しては拙いだろう……

「行くぞ華蝶仮面！」
「任せよ！」
「石破！ラぁぁぁブラブ！天驚ぉぉぉぉけぇぇぇぇぇぇぇん！！」

……何だこの桃色空間は……むかむかするな……

「ぬぅ、合体技とは美味しいところを持っていくつもりじゃな！？こちらも負けておれん！行くぞサムソン！ぬおりゃぁぁぁぁぁぁ！！」
「夫婦仮面に負ける訳にはいかないわねん！行くわよアドン！！はいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！」
「撃てぇい！サムソン！」
「はいッ！師匠！」
「超級ッ！！覇王ッ！！」
「「でんッえいッだーんッ！！」」

あぁ……町が……長安が……
賊共は全て気絶している。どうやら、手加減はしたようだ。
見物していた長安の民達は大歓声をあげている。

「「蝶・サイコー！」」

「見よ！東方は、紅く燃えているぅぅぅぅ！！」
「ぶるぁぁぁぁぁぁぁ！」

勝ち名乗り、なのだろうか。
奇声を上げて喜ぶ四人を目の前にして、目眩がして来た。
雪蓮、お前を越える頭痛の種が出てきたようだ……コレに、私が惚れているなんて……何かの、そう、何かの間違いだ。コレはきっと夢なんだ、そうに違いない……！

「では、さらばだ！皆の者！」
「待ちやがれ！蝶野攻爵！」
「……なんだ、武藤カズキ」
「……俺の名前は武藤カズキじゃない！」
「……なんだ、武藤カズキ」
「……テメェ、なんて格好をしてやがる！長安の治安を乱すテメェを俺が倒す！」
「……フン。俺を倒してどうする？ホムンクルスになった俺は元には戻れないし、この活動を止めるつもりもない。さぁ、お前は俺をどうする？」
「すまない、蝶野攻爵」
「……嗚呼――俺の名前……謝るなよ　偽善者」
「おらぁぁぁぁぁ！」

断空我が槍を持って教経に突っ込むが、教経はそれを躱して断空我を殴りつけた。

「ブベッ」
「人間・武藤カズキを蝶・サイコーの俺が斃す。これが俺の望む決着だ」

最早何を言っているのか全く分からん。

「では、さらばだ！武藤カズキ！次に逢う時までに、もう少し力を蓄えておけ！」

そういって教経と星、変態二人は去っていった。

「糞ッ！糞ッ！オレは多くの人を、みんなを守りたい。そう思って戦の鬼になったのに！
天帝も照覧あれ！必ず！いつか必ず貴様の首をこの手にしてやるからな！だが、今は駄目だ。俺と奴との力の差がありすぎる。だが、いつか必ずこの手にしてみせる……！」

……もう、いい。放っておいてくれないか。
頭が痛い……はぁ、アレが教経の悪い病気か……断空我よ、そのノリでついて行けるからこそお前は親衛隊長に成れたのかも知れないな……理由は存外そんなものかも知れない……

忘れよう。
今日は、良い日だった。何もなかったのだ。
そうだ。そうしよう。それが良いんだ。それが良いに決まっている。

そう思って、用意された自室に戻って寝ることにした。

兎に角、何もなかったのだ。うん。
教経の政を改めてこの目で確認出来た、本当に良い日だった。

……その日、私は悪夢にうなされた……

蝶の如く～１０３～（前書き）

もげろ☆

蝶の如く～１０３～

～教経　Ｓｉｄｅ～

冥琳が南郷郡からやってきた。俺たちが置かれている現状について、少し話をしたいということだったので、逢うことにした。まぁ、情勢が激しく動き出しそうな感じだからねぇ。冥琳の希望で、余人を交えず話をしたいとのことだったから、俺の部屋で話をすることにした。

「教経、久し振りだな」
「あぁ。それ程長い間離れていた訳じゃ無いと思うが、随分と離れていた気がするよ……体調、大丈夫だろうな？冥琳」
「あぁ、大丈夫だ。変わりないさ」
「それなら良いンだ。お前さんだけが気掛かりだったからねぇ」

体調的に考えて。

「そ、そうか……気を遣ってくれるのは嬉しいものだ」

クールな冥琳が照れながら眼鏡をツイと押し上げる。
……やるねぇ。流石は周公瑾。俺の弱点を的確に突いて来やがるッ……！そこに痺れる！憧れるぅ！

「教経。今お前は周辺諸侯の動きについて、どれだけ把握して居る？」

ヘブン状態だった俺に、真面目に話しかけてくる。
しっかり切り替えないとなぁ、おい。愛想尽かされちまうぜ？

「先ずは公孫賛か。奴さん、生きていたんだねぇ」
「あぁ。私も最初聞いた時は名を騙る偽物だと思っていたのだがな」
「偽物にしては手際が良い。急速に勢力を広げていることから考えて、本人と見て間違いないだろう。ちょっと意外なほどにその成長が早い気がするがねぇ」
「有能な軍師が付いているそうだ。聞いたか？」
「あぁ。ホウ統が付いているらしいじゃないか。袁家を出奔して何処にいるかと捜していたが、まさか公孫賛に付いているとはねぇ…コイツは侮れないぜ？」
「『鳳の雛』、だろう？教経」
「あぁ、そうだ。油断すれば足下を掬われる可能性が高いからねぇ」
「漢中に攻め込んでくることも考えて置かなければならないだろう。大丈夫か？」
「ハッ。漢中には愛紗と稟がいる。稟が知恵比べで負ける、というのは考え難いねぇ。冥琳、お前さんが相手ならまだ分からんがホウ統なら稟の方に分があると思うぜ？」
「ほう。何故そう思う」
「稟はこれまでずっと平家の軍師として従軍して策を立て続けてきたンだ。才能的には互角だとしても、踏んで来た場数が違うだろうよ。経験ってのは、才能を凌駕することが多々あるモンだ。稟ほどの才能がある人間が経験を積んでいたら、そうそう足下を掬われることはないだろう。ホウ統がいつから戦に身を投じたのかは知らんが、稟ほどの経験は積んでいないだろうよ。もし積んでいるならば、既に天下にその名を轟かせているだろうからねぇ。『鳳の雛』ではなく、『鳳』としてな。
愛紗にはその配下として翠と蒲公英も付いているし、心配する必要はない。攻め込まれても十分に戦線を維持出来るだけの人材は揃っている。救援に駆けつけて、一気に屠ってやればいいのさ。
第一、急速に勢力を伸張させたところでその配下の兵数が劇的に変

化する訳じゃ無いだろう。変化したとしたら、練度が低いと思うべきだ。練度が変わらなくとも、軍として連携して戦う事は出来ないだろうさ。そういう軍を恐れる程腰抜けじゃないんだよ、俺ぁな」

「そういう見通しが立っているなら問題はないか」

「まぁな。……次に大馬鹿者ンとこだな。青州と徐州を直轄領とすることに成功したらしいじゃないかね」

「そうだ。これで袁紹は後背を気にせず曹操か私達と事を構えることが出来るようになる。直轄領としたことで裏切りなど気にせず、安心して補給が出来るだろうからな」

「だろうねぇ。冥琳、お前さんはあの馬鹿共は次に誰を標的にしていると思う？」

「私達、と言いたいところだが、曹操だろうな」

「へぇ。何故そう思うんだね？」

「それはそうだろう。私達と曹操。どちらを先に相手にした方が良いか、わかりきって居るではないか。私達を相手にすれば、長期化は避けられない。長期化する戦の中で、曹操が指を咥えてみているはずもない。私達は幸いにも将に恵まれているから、曹操に備えることは出来る。が、袁紹はそうはいかないだろう。勿論、将は居るし軍師も居るが、曹操を押さえるに足る程の者が居ない。であれば、先ず曹操を相手にしてこれを滅ぼした方が良い。平家の兵は揚州には殆ど居ない訳だし、気にせずに曹操だけを相手に出来るのだからな。曹操を滅ぼしたその後で平家を相手取った方が良いに決まっている」

「まぁ、普通ならそうだろうな。だが、奴さん達は普通じゃなくてねぇ。どうやら第三の道を見つけたみたいだぜ？」

「第三の道、だと？」

「あぁ。領内の黒山賊共を討伐するンだそうだ。素晴らしい考えだねぇ。既に討伐の為に軍旅を催し、絶賛戦闘中だそうだ」

「……この機会を曹操が逃すはずもない。袁家は滅亡するぞ」

「それがそうとも言い切れなくてねぇ」

「何故だ？良いように兵力を分散させられ、糧食も潤沢ではない。物事の優先順位が理解出来ない小物しか揃っていないことも証明された。正直、滅びるに十分な要素が出揃っていると思うが」
「……袁家には諸葛亮が居る。アレがただ黙って滅びるに任せるはずもない。必ず、起死回生の策を打ってくるはずだ。それが何なのかは、分からないがね」

そうなのだ。
――諸葛亮。
アレがもし演義並みの天才であるなら、間違いなく何らかの手を打ってくるはずだ。油断は出来ない。慢心も禁物だ。詠の調べでは、幽州に軟禁されているらしいが、そこからでも何かしてくる可能性が有る。

「諸葛亮、か。確かに何やら画策しているようだな。教経、今諸葛亮が何をしているか知っているか？」
「幽州で軟禁されている、と聞いているが」
「……私が調べたところでは、青州にいる、という情報も、徐州にいる、という情報もある。これだけ情報が錯綜すること自体、おかしいとは思わないか」

それは今初めて聞いた。

「幽州にいて、青州にいて、徐州にいる。三つ子だった、とかいう落ちはないよな？」
「……実はそれと同じ事を雪蓮が言い出したので真面目に調べてみたが、諸葛亮は諸葛家の次女だった。当然、双子でも三つ子でもなかったよ」
「調べたのかよ……まぁ、その辺りが冥琳が冥琳たる所以なんだろうけどな」

「どういう意味だ？」
「頼りになる美人さんって事さ。だがこうなると……」
「巫山戯たことを……あぁ、何処にいるかが全く分からないな」
「……それは問題にならンだろうねぇ。問題は、所在を隠したいという意図があり、そして隠すことが出来ているということだろう。これで確信出来たよ。間違いなく、諸葛亮は何かを企んでいやぁがる」
「行方を眩ましてまで私達に備えなければならない理由はない。となると……」
「あぁ。華琳はちっと痛い目に遭うかも知れンねぇ」
「少しで済むかな？」

済むに決まっているだろうが。
曹操は袁紹に勝つんだぜ？官渡の戦いでねぇ。

「済むだろうよ。華琳はそういう人間だ。アレを嘗めてかかると痛い目に遭うぜ？曹孟徳は伊達じゃない。その器量は、天下を覆うほどのモノなンだからねぇ」
「だが、曹操はこの情報を手に入れていない可能性が高い。今のところ戦乱に巻き込まれていない為に余裕がある私達が入念に調べた結果こういう事実が明らかになったのだ。一番最初に耳に入ってきた、幽州に軟禁されている、という情報を信じて策を構築するのではないか？」
「例えそうであったとしても、華琳が負けるってのはちょっと想像出来ないな。大馬鹿者が負ける、というのは想像するに容易いンだが」
「そこまで評価しているのか、曹操を」
「あぁ。アレは正しく英傑と呼ぶに相応しい女だ。余人は知らず、俺はそう信じてるよ」
「……まるで恋人のようだな、教経」

少し怒ったような顔をして、そう冥琳が言ってくる。
……オイオイ、あり得ない想像に嫉妬したのか？冥琳。それに器量で言うなら、冥琳だって負けちゃい無いだろうが。もし周公瑾が長命で、孫策の配下でなかったら、『覇者　周公瑾』が生まれてもおかしくないほどの器量があったと俺は思っているンだぜ？

「……冥琳、そう嫉妬するなよ。冥琳の器量も同じくらい凄いモンだって思ってるぜ？」
「……どうだか」

嫉妬するな、という言葉に反論しないのな、冥琳。

「冥琳、機嫌直せって」
「……私のことをどれ程に想っているのか、それを聞かせて貰おうか、教経」

やれやれ。今日はやたら愚図るな、冥琳は。
どれ程の器量を持つ人間だと思っているのか、か。

「そうだねぇ。この天下に二人と居ない女だ、と思っているよ、冥琳」
「……教経……」
「？……冥り、んっ……」

あ、ありのままに（ｒｙ
冥琳が近づいてきたと思ったら、いきなり唇を奪われた。
……最近、俺はこういうのが多い気がするンだねぇ……

「……冥琳」

「……いきなりすぎたか？だが、別に問題はないだろう？お前は私のことをそれ程好いていてくれている訳だし、私はその気持ちに応えただけなのだから」

……ＯＫ、いつの間にか俺の迸る熱いパトスが冥琳をノックアウトしていた、ということで宜しいか？

どうやら俺の眼鏡愛は言葉という壁を越えて感応する事が出来るモノらしい。

流石は眼鏡神！そこに痺れる！憧れるぅ！

「そりゃ、問題はないがね」

「では他に何かあるのか？」

「ん～」

「……稟達に悪い、と思っているのだろう？教経」

「……そうだ」

「そう言うと思ったよ」

冥琳は苦笑すると、懐から書状を取り出した。

懐って言うか、冥琳、今胸の間から出さなかったか？その書状。

「……これは？」

「風からの書状だ。軍師組の中では風が元締めなのだろう？教経」

「なンで分かるンだね？」

「どうして分からないと思っているのだ？」

「……そんなに分かりやすいかよ」

「分かりやすかったぞ？」

そう言って、ニヤリと笑った。

様になってるじゃないか、冥琳。眼鏡美人ってのは何やっても様になるねぇ。

そう思って手紙を開く。

『風の立派な旦那様であるお兄さんへ。
お兄さん、これを見るような状況になった、ということですね？
後でお仕置きなのです。
まぁ、冥琳は真面目にお兄さんのことを好いているので、今日の所は受け入れて上げればよいのです。
ですが！
お兄さんの本妻は風だということを忘れてはいけないのですよ。
胸に付いた余計な脂肪に誑かされているようなら、ただではおかないのですよ、お兄さん。
風ェより』

……風、確かにお前さんには、その、胸が……ムッ！何か見える！？これは……フルボッコ……！これ以上考えれば命はない……！なんという風・・さん・・的存在！俺は操作系だ。強化系とは相性が悪い。ここは、思考停止するんだぜ？
あと風ェって何だよ、ェって……毎回思うが俺の頭の中覗きすぎだろうがよ、お前さんはよ。

「……教経、その、嫌……なのか？」

冥琳が不安そうに俺の顔を覗き込んでくる。
……この野郎！俺を殺す気か！
クールビューティーが眼鏡を掛けて、黒髪ロングが眼鏡を掛けて、自重しないボディが眼鏡を掛けて、俺を覗き込んで来るとは……！
『眼鏡』こそ至上！『眼鏡』こそ最強！体の部位（ｒｙ

……それより不安そうにしている冥琳にちゃんと応えないとねぇ。

「嫌な訳無いだろうが」
「本当か？」
「本当さ。それをしっかり証明してやるさ」

冥琳と寝台へ移動する。

「最初に言っておいた方が良いだろう……教経、私は処女ではない」

……そうか。まぁ、そうだろうな。冥琳が綺麗だし、過去にそういう相手が居たとしても不思議じゃない。むしろ、今までが異常だっただけだ。あれだけ可愛い娘達が皆処女だった、ということ自体があり得ないことだろうからねぇ。

「……へぇ」
「……『面白くない』、という顔をして居るぞ？教経」
「……そうかね？」
「ああ。……独占欲が強いんだな、教経は」
「……悪かったな」
「いや、嬉しいよ、教経。……その、私は処女ではないが、男とそういうことをするのは、初めてだ」

……え？
それはそのつまり、ユリシーズ的な？

「あ～、教経。誤解の無いように言っておくが、決してそういう気がある訳じゃ無い。いずれ、お前にも分かる時が来るからさわりだけ言っておくが、雪蓮の悪い癖が原因だ」
「雪蓮の悪い癖？」
「そうだ。……だが、私の口からそれを言うつもりはない」

「別に良いさ。冥琳の初めての男は、俺なんだろ？」
「何だ、現金な奴だな……愛しているよ、教経。狂おしいほどに」
ストレートに言われると、グッと来るねぇ。
「……冥琳」
「何だ、言ってくれないのか？教経は」
こう見えて、意外に漢女、もとい、乙女なんだよねぇ。
アブねぇ……吐きそうになった……
愛している、か。
「冥琳、俺も、愛しているよ……」
「……んっ……」
何度も何度も、冥琳を抱いた。
最初、冥琳は俺が外で果てるのを許してはくれなかった。
『私は、お前の子が欲しいんだ、教経』
そう言って、その瞬間に腰に足を巻き付けられて逃げられないようにされた。まぁ、その一回だけだったが。
……いきなり父親になる覚悟をさせられた訳だ。
妊娠していても別に構わないが、出来れば戦が終わってからにして貰いたいモンだねぇ。戦が終わったら、子作りに励むさ。……腎虚で死ぬことになりそうな悪寒がするがね……
「教経。私の夫になるのだから、しっかり妻のご機嫌は取らなければならないぞ？分かっているだろうな？」
「……へいへい。努めさせて頂きますよ」

そう言うと冥琳は抱きついてきた。
断空我じゃないが、いつか俺は刺されて死にそうだな。
まぁ、冥琳を始めあれだけの器量好しを侍らせてたらそうなるのが当たり前かも知れんが。
出来れば、平和的に死にたいモンだ。

……風のお仕置きって、何なんだろうねぇ……

蝶の如く～１０４～

～華琳　Ｓｉｄｅ～

麗羽が黒山賊討伐の為に軍旅を催した。

青州と徐州をその直轄領とした際の手際は見事なものだったわ。領民に慕われている孔融を、陶謙を使って殺し、その陶謙を孔融を殺した罪に問うて殺す。非情だがこれ程効率の良い事はないでしょう。麗羽にこれが出来るとは思えない。諸葛亮。アレがこの絵図を描いたのでしょうね。

全く以て厄介な存在だが、彼女は幽州に軟禁状態にある。私が施した策によって、その行動を制限することに成功したのだ。これで、楽に勝てる。麗羽を下した後諸葛亮を幕下に引き入れることが出来れば、現状私と桂花のみに掛かって居る負担を軽減することが出来るでしょう。そうなれば、教経との戦いが随分と楽になるに違いない。

皇帝劉虞から同族である劉璋を助けるように、との書状を受け取った劉表も、南郷郡へ攻め込んだ。当初練兵に時間が掛かっているから、と言って平家に対する明確な敵対行動を取ることを控えていた劉表も、練兵があらかた終わった状況では攻め込まざるを得なかったのだろう。

劉璋は公孫賛にその領地を譲り渡していち早くこの乱世から脱落したようだけど、その公孫賛の軍の一部が漢中に歩を進め、平家と戦闘を開始したという情報もある。こちらについては確度の低い情報だが、いずれ詳細が判明するでしょう。何を思って平家に軍を向けたのかしらね。まあ、いずれにしても当初の予定通り教経を縛り付

けることに成功したわ。

それにしても。劉表に公孫賛。貴女達は不幸ね。
教経が自分に剣を向けた人間を許すとは思えない。間違いなく報復行動に出るだろう。それも、迅速に。
教経ほどの者であれば、この事態にも完全に対応してみせるはず。その領内における政も、麗羽や私に仕掛けている物資面での戦も、教経の企謀に拠るものであることは調べによって判明している。特に後者については本当に厄介ね。今のところ、これに対抗する手段が思いつかないのだから。まさか商人達に平家を相手に取引をするな、とも言えないし、言ったところでなんら効果を上げることはないでしょう。私の狭量さを世に知らしめるだけになってしまう事は間違いないのだから、そのようなことはすべきではないわ。

……戦は、算多き者が勝つ。平時から策を用いて敵に備えて居る教経が算少なかろうはずもない。戦の行く末は目に見えているじゃない。劉虞などという愚物の言うことを聞くから。理由は分からないけれど、教経の器量を計ることもせず平家に剣を向けるから。だから貴女達は敗亡するのよ。

でもそのお陰で教経は二面作戦を執らざるを得ない状況に陥った。此処で私までも敵に回そうとは思わないはず。この状況ならば、教経と会盟することが出来るかも知れない。
『私が麗羽を下すまで』『教経が二人を下すまで』
この条件で、密約を結ぶことが出来るかも知れない。反董卓連合の時に交わした二人の約定。それと同じような形で、確約を取り付けることが出来れば。教経は潜在的には敵だが、その約定は信頼出来る。私も交わした約定は絶対に守る。それを、教経は掛け値無しで信じてくれる気がする。

「秋蘭」
「はっ、華琳様」
「教経に書状を出すから書いて届けて頂戴」
「はっ、文面は如何致しましょうか」
「そうね……『貴方と二人きりで逢いたい』、とだけ書いてやりなさい、秋蘭。いつかのお返しよ」
「はっ……さぞや周囲の女達に非難されることでしょうな、平教経は」

ふふっ。きっとそうでしょうね。
全く。そんなに女を侍らせているのが悪いのよ？教経。女などに現を抜かさず、私との対決だけを考えていれば別に酷い目にはあわなかったものを。
教経が責められているのを想像すると、愉しくなってくる。

「ええ、そうでしょうね。頼むわね、秋蘭」
「はっ」

さて、教経？当然応じてくれるのでしょう？
今度は私が貴方の器量を試して上げるわ。そして貴方と会盟を為すことが出来たなら、麗羽を打ち破る。貴方と決戦する為にね。

～教経　Ｓｉｄｅ～

「教経、大変よ！」

寝台で寝ていると、詠がドアを突き破るような勢いでブチ開けて飛び込んできた。

……ったく、気持ちよく寝ていたのに、目が醒めちまったじゃねぇか……

「あぁ？どうしたンだ？断空我がヴェクター化でもしたのか？」

「べくた……？そんなこと言ってる場合じゃないのよ！この馬鹿！……って、教経！？アンタ、誰を連れ込んでるのよ！？」

「はぁ？」

誰を連れ込んでるって言われてもだね。誰も連れ込んでいないンだよねぇ。

そう思って寝台に腕を突く。

……右手に、こう、ふにふにとした、弾力とハリのある感じの……

「……んっ……」……ん？

「……教経、私が愛おしいのは分かるが、その、人前では困るぞ？……まぁ、その、お前がどうしても、と言うのなら私としては我慢

しないではないというかだな……」

冥琳が頬を上気させて体を起こし、俺の耳元でそっと囁くように話しかけてくる。シーツで胸を隠しながら、しかし自分の腕では押さえずに俺の背中に押し当ててずれないようにしているだけで。……当ててんのか？当ててるンだろうねぇ……

……冥琳と、致したのをすっかり忘れていたンだねぇ。

そして冥琳。いきなりアブノーマルな妄想が大・爆・発しているンだねぇ。アレか？琴と言い冥琳と言い、ちょっとアレな趣味の？……自慢じゃないが俺のマグナムは人目にさらせるほど立派なモノじゃないんだよねぇ……自分で言っていて涙が出てきた……だって、男の子だもん☆

「ちょっと教経！どういう事よ！」

香ちゃん、ちょっとそのハンマーはしまおうか。

「いや、どういう事と言われてもだな、詠」

「そういうことだ、詠」

抱きつきながら、俺の頬に手をやって自分の方に寄せようとする。冥琳、話がややこしくなるだろうが。

「……へぇ。でも、コイツはボクのことが好きなんだから」

「……私に愛していると言ってくれたが？」

「ちょっと教経！ボクにはそんなこと一度も言ってくれたこと無いじゃない！」

「いや、詠？Ｓｉｄｅが当たっていないだけで何度も言っている気がするンだがね？」

「は？Ｓｉｄｅ？……そんなことはどうでも良いのよ！今言いなさい！直ぐ言いなさい！兎に角言いなさーい！」

おぉ、何という三段活用。

「……詠、愛してる」

「……ぼ、ボクも愛してるわよ……」

「……教経、私の前で他の女に愛を囁くなど、どういう了見なのか説明して貰おうか」

……あぁ……刻の涙が見える……

「別に良いじゃない！」

「良いはずがない！」

「良いのよ！」

「良くない！」

「なぁ、二人ともちょっと落ち着けよ」

「アンタは黙ってなさい！」

「教経は黙っていて貰おう！」

「はい喜んでぇ～！」

じゃなくて。

「……なぁ詠。大変だって何が大変なンだ？」

「アンタが浮気してたことよ！……って、そうじゃないわよ！劉表が南郷郡に攻め込んできたのよ！それと時を同じくして公孫賛が漢中に攻め込んできたわ！」

なンだと！？

「そりゃ一大事じゃねぇか！」
「だからそう言ってるじゃない！……って、なにやってんのよ！」
あ、すっぽんぽんだったのね。勢いよく立ち上がってちょいとご挨拶をしちまったンだねぇ。まぁ、結構長安から出払っていて実質メインユーザー的な存在な訳だから、いつもご愛顧有り難う御座います的な挨拶をしたがっても不思議じゃないということでここは一つご理解頂けませんでしょうかねぇ？
……おいちょっと待て！ハンマーは駄目だって言っただろうが！

「この、馬鹿ぁ～！」

顔を真っ赤にして恥じらいっている詠。
……良いねぇ。萌えてくるんだねぇ。ハンマーが近づいてきているが、それどころじゃないんだねぇ。俺は眼鏡属性持ちｎ

「へブッ」
「……自業自得かな、教経」
「ふんっ」

……冥琳、お前さんのせいでもあると思うンだがねぇ……

「……で、詠。状況はどうなっている？」

取り敢えず何とか復活出来た。水をぶっかけられて復活するとか、俺はシーモンキーか何かか？
そんなことを考えている俺を尻目に、軍師様達が二人して真面目に話し合っている。

「漢中は問題無いわ。稟が居るし、愛紗と翠、蒲公英も居る。あれだけ揃っているんだから抜かれることは先ず無いと思う。稟は蜀の状況を把握する為に細作を放っていたし、攻め込まれた時の為に蜀の桟道の出口付近にいつでも軍勢を展開出来るように準備していたみたいだから」
「成る程。蜀の桟道から出てくる兵を出口で半包囲して叩くことで数的な優位を常に保った形で戦を行う、というわけか」
「そうよ。そこに愛紗達が居る訳だから先ず大丈夫だと思うわ。テイ族もコイツのお陰で協力してくれるでしょうしね」
「では、劉表が問題だ、というのか？」
「そうね。雪蓮も居るし碧も居るけど、曹操に備えなければならない状況が何とかならない限りはかなり厳しい戦いになると思うわ。後背を常に気にしながら戦う、というのは見えない敵と向かい合っているようなものだから。いつ襲いかかってくるかも分からない状況だし、精神的な疲労も大きいと思うのよ。何より、兵力を分散しておいて危険に対する保険を掛けておかなければならないし」
「ふむ。どうにかならないものかな」
「現状じゃどうにも。長安を空ける訳にも行かないし、正直追加で兵を送っても規模が大きくなるだけで状況には全く変化がない訳だから」

華琳の存在がでかいな。
袁紹と向かい合っているとはいえ、どう動くかが読み切れない所があるからねぇ。
そう思っていると、星がやってきた。

「主。雪蓮と愛紗から早馬が……冥琳？」
「む、星か」
「……ほう。少しお話をする必要がありそうですな？主」
あぁ……冥琳……お前さんが服を着ないでそのままで話し込んでいるから……
「さっき十分に詠にお話された所なンだ。勘弁してくれ……で、二人から早馬だって？」
「……まぁ、宜しいでしょう。壁を見れば何があったかは分かりますからな」
そう言いながら、書状を差し出してくる。
……双方共に、暫くは大丈夫だ、と言ってきている。
が、そう悠長に構えても居られないだろう。
「……これから対応策を講じる為に軍議を開く。長安にいる将を全員集めてくれ」
「はっ」
ちっ。どうするかねぇ。
流石に三面同時作戦なんて無謀な真似は出来ない。
一つ破綻すれば国を失いかねないからなぁ。

あれから三日経つが、これといった善後策を講じることが出来ないで居る。
現状で俺が執れる方策は三つある。

一つめは、函谷関の防備を月に任せて漢中の救援に行くこと。
二つめは、これまた函谷関の防備を月に任せて南郷郡の救援に行くこと。
三つめは、華琳を攻めて膠着状態を創り出し、その軍事行動を制限した上で各地に援軍を送って各個撃破すること。

どれもこれも、リスクを含んでいる。
一つめと二つめは後背を華琳に突かれるリスク。
三つめは動員可能な兵力全てを以て当たることになる為、不測の事態が生じた場合もう打つ手が存在しないというリスク。不測の事態とは袁紹軍の全面攻勢。俺と華琳が争っているのを脇から現れて双方を討つ。これ位のことは現状袁紹軍を指図している小物でも思いつくだろうからな。

どのリスクも、それが現実のものとなった時の脅威は大きい。といって、現状維持は最悪の選択だろう。無駄に兵を死なせることになる。どんなものであれ、選択をしなければならない。リスクなしで利益だけを得ることはどうやら出来なさそうだ。

「さて、どうしたモンかねぇ」

広間に皆を集めて話をしているが、やはり今日も結論は出そうにない。
と、そこへ、断空我がやってきた。

「大将、書状が届いてる。大将に渡してくれ、と曹操の使いの者から言われたんだが」
「華琳からだと？……こっち持ってこい」
「あいよ」

断空我から書状を受け取って内容を確認する。
……『貴方と二人きりで逢いたい』、ねぇ。場所は函谷関の近く、か。
要するに、俺を試している。俺がかつてそうやったように、『自分を信じて話をしに来るのか？』、と。そういうことだな？華琳。

……上等じゃねぇか。

「教経、何と書いてあるのだ？」

そう言って冥琳が書状を取り上げて内容を確認する。
あ、冥琳、それは……

「……教経、いつの間に曹操まで誑かしたのだ？」

本当にイイ笑顔だ。
イイ笑顔を浮かべながら、星達に書状を渡す。

「……教経、どういうことなの？」
「……お屋形様、これは、どういう意味ですか？」

星、星なら分かるよな？
これ、反董卓連合の時の意趣返しだぜ？

「主、どういうことか説明が必要でしょうなぁ」

そう言ってニヤニヤ笑っている。
糞！コイツは裏切り者だ！

「「教経？」」
「お屋形様？」

それから後のことは余り覚えていない。
あっちゃこっちゃから引っ張られ、なじられまくった。
そんな俺を見て、星はずっとニヤニヤ笑っていた。
何とか説明をして理解して貰えたが、それまでにハンマーでぶん殴られるわ泣かれるわでエラい目に遭った。

……華琳、覚えてやがれよ？

蝶の如く～１０５～

～華琳　Ｓｉｄｅ～

「久し振りね、教経」
「あぁ、本当に久し振りだな、華琳」

函谷関近くの丘で、教経と逢い引きしている。
そういう言い方をしているだけで、決して甘い一時を過ごしている訳ではないのだけれど。

二人きりで逢いたい、と言った私に教経は了承する旨返事をしてきた。前回同様護衛は居るが、彼らは私達を遠巻きに取り囲んで警護に当たっている。私達の言葉を耳に出来るのは、私達だけ。そういう絶妙な距離感を保って警護している。その辺りは、流石秋蘭と言った所なのでしょうね。

「意趣返し、有り難うよ華琳。おかげさんで随分愉しませて貰った」
「そう。お役に立てたようで光栄だわ」

そう言うと教経は忌々しそうな顔をして舌打ちをした。
自業自得ね、教経。

「で、どうしたンだね？お前さんから俺に逢いたいと言ってくるなんて。俺に従う気にでもなったのかね？」
「あら。貴方こそどうして素直に逢いに来たの？私に従うつもりがあってのことじゃ無いのかしら」
「……ハッ。互いにそんなつもりは更々無いってことかね」
「……ええ、そうでしょうね」

互いの間に緊張が走る。この緊張感は本当に心地良い。
他の誰と話をしていても絶対に味わうことが出来ない感覚。自分と対等の器量を有するであろう存在と、こうやって向かい合って互いの胆を探り合うのは本当に愉しいわね。
そう思って教経を見れば、教経も愉しそうだ。

「教経。私達は似ているのかも知れないわね」
「似ている？何処が？」
「自分と互角に渡り合えそうな人間を前にして嬉しそうにするところが、よ。
存外、他にも似ているところがあるかも知れないわね。例えば……」
「……互いの理想もそれを実現する方法も異なるが、己の信じるところを貫いて自分が自分のまま自分らしく生きていこうとする姿勢とか、かね」

そう言ってニヤリと嗤う。
貴方は本当に得難い人間だわ、教経。口にしようとした言葉は違うけれど、言いたいことはそういうことだった。私の考えていることを言い当てた、というよりは、自分が思っていることをそのまま口にした、という感じだった。こんな人間がこの世に二人と居るはずもない。教経は私の好敵手にして、私の一番の理解者。私は教経の好敵手にして、教経の一番の理解者。敵として向かい合えばこそ互いのことが理解出来たのでしょう。

「貴方は本当に気持ちが悪いわね、教経」
「ひでぇ言いぐさだな、華琳。その割には随分と嬉しそうにしているがね。……お前さんだって気持ち悪いぜ？」
「ふふっ。まあ、いいわ。……私が貴方を此処に呼び出した理由、

予測出来ているのでしょう？」
「……俺と不可侵の会盟でもするつもりなンじゃないかね？」
「流石に見るべき所は見ているようね」
「まぁな。お前さんに見事に踊らされている気もするがねぇ……劉表に公孫賛。お前さんが踊らせたんじゃないかね？」
「劉表はそうだけど、公孫賛は違うわ」
「ッたく、面倒臭ぇことしやがって」
「貴方だって、私の領内で糧食を買い占めたでしょう？お互い様じゃない」
「お前さんも見るべき所は見ているじゃないか」
「当然でしょう？私達は似ているのよ。さっき自分が言ったことをもう忘れているのかしら。その態で老化の兆しが見えているのかしらね。ちょっと女に現を抜かしすぎているんじゃないの？」
「放っておけ。俺は人よりちっと欲張りなだけなンだよ」
「少し、とは思えないわね」
「じゃぁ、かなり、と言い直すことにするさ」
「口が減らないわね、貴方」
「お前さんも負けず劣らずだろうがよ。さっきの言葉、そっくりそのまま返してやるよ。俺たちは似ているんだぜ？」
「貴方と話をしていると、本当に愉しいわね。いつまでもこうして話をしていたいけれど、そうも言ってられないの。先ずは用件を済ませないとね」
「お互いに、な」

ええ、その通りよ、教経。

「貴方が劉表と公孫賛に勝ち、私が麗羽に勝つまで。それまで、不可侵の約定を結ばないかしら」
「『勝つまで』、で良いんだよな？華琳」
「ええ、『勝つまで』、よ」

流石は教経ね。私の言葉が意味しているところを正確に把握している。
教経は少し考えていたが、意を決したような表情で私に向き直った。

「……良いだろう。その申し出を承けようじゃないか、華琳」
「そう。……正直助かったわ」
「……それもお互い様だろうさ」

互いの血を啜りあい、会盟を行う。

「……教経、私以外の人間に足下を掬われるなんて醜態、晒さないでね？」
「それはこっちの台詞だろうよ。……華琳、俺以外の人間に負けるなんて真似、やらかすんじゃねぇぞ？」

盟約が成ったことを天帝に報告した後、互いに似たような言葉を相手に掛ける。
何と言ってやろうかと考えていた私に、教経が続けて語りかけてきた。

「俺がお前さんの初めての男になってやるよ。愉しみに待っているんだな、華琳」
「なっ！」

いきなり何を言っているのよ。
まさか貴方、私のことを……？
でも残念ね教経。別の形で出遭っていたなら、そうなったかも知れないけれど。敵とそういう関係になるなんてあり得ないわ。
でも、そこまで私に執着しているなんて、ね。

全く。本当に仕方がないわね。

～教経　Ｓｉｄｅ～

「俺がお前さんの初めての男になってやるよ。愉しみに待っているんだな、華琳」
「なっ！」

そう言った俺に、華琳は返す言葉もなく絶句している。
……意趣返し、きっちりさせて貰ったぜぇ？華琳。華琳が絶句して面白い顔をしているが、これはなかなかレアな光景なんだろうねぇ。普段からしっかりしていそうだからねぇ。

「俺がお前さんを屈服させる初めての男になってやるってことさ」
「良いわ。私を屈服させて見せなさい、教経。但し、私はそう簡単には屈しないわよ？」

間髪入れずに答えやがった。華琳もちっと恥ずかしかった、ということか？

まだ少し調子がおかしいが、相当に効果があったみたいだな。
少々恥ずかしかったが、やってやった甲斐があるってぇモンだ。

「そいつは俺も同じだ。前に言った通り、ね」
「それにしても、私に対してそんなことを言うなんて本当に良い度胸をしているわね」
「そいつはどうも」
「今の発言、貴方の周囲の耳に入るように伝えたら……」

そいつはヤヴァイがそう言う訳にもいかん。

「さて、どうなるかね」
「教経、顔色が悪いわよ？どうかしたの？」
「そうかね？普段と変わらないンだがねぇ」
「ふふっ。まあ、今回は許して上げるわ」
「……そいつはどうも」

見事にやり返された、か。

「次に逢うのはいつになるのかしらね、教経」
「さてな。そいつはお互いの当面の敵さん達にお伺いを立ててみないとわからんよ」
「意外に早いかも知れないわよ？」
「そうなるかも知れんし、そうならないかも知れん」
「全ては天のみぞ知る、という事かしら」
「……そういう言い方は好きじゃないな。俺の決定は俺のモノだ。そこから派生する全ての結果は俺の決断によって生じたモノで天とやらに決めて頂いたモノじゃない。
お前さんと俺がいつ何処で戦うのか。それはお前さんと俺の意志決定の下生じるモノであって、既に誰かに決めて頂いているモノじゃ

ない。俺たちが、俺たち自身の責任において、それを選択した結果もたらされるモノであるべきなンだよ」
「あら、天の御使いがそんなことを言うのね」
「当たり前だ。天の御使いなンぞ関係あるか。これは俺の問題だっつっただろうが」
「まぁ貴方らしいわよ、教経」
華琳が笑う。
「……まぁ、こっちは意外に早く片が付くだろう、と思ってるがね」
「そうかしら。劉表は兎も角公孫賛はそれなりにやると思うわよ？」
「それなりどころかかなりやると思うがね。が、敗北するだろうな」
「是非その理由を聞きたい所ね」
「お前さんだって分かっているだろうに」
「それでも貴方の口から聞きたいのよ、教経」
「……まぁ、それ位は良いか」
「そうよ。仮初めとは言え一応不可侵の約定を交わした相手でしょう？親交を暖めれば、降ってくれるかも知れないじゃない」
「ハッ、よく言うぜ。そのつもりは更々無い癖に。
……公孫賛が敗れるに三つの原因がある。
一つ。奴さん達は急に膨張した。その膨張ぶりには目を見張るモノがあるが、一度立ち止まって自分たちと周囲との力関係をしっかり把握するべきだった。奴さん達には俺たち平家のことを詳細に調べる時間はなかったはずだ。敵を知らぬ者が勝ちを掴むことは難しい。戦うべき時と相手を弁えぬ者は敗れる他ない。奴さん達より俺たちの方が兵が多い。俺たちは将も民も皆心を一つに国を守ろうとするが、奴さん達はそうではないだろう。俺たちはこれあるを見越して準備をしてきた。漢中も南郷郡も、防戦に当たって参戦する事はあっても後から行って現地で将達が決めた戦術に口を出すつもりはない。奴らは己を知る時間を設けなかった。戦う毎に必ず殆ういわけ

だ」

「……『勝を知るに五あり。戦うべきと戦うべからざるとを知る者は勝つ。衆寡の用を識る者は勝つ。上下の欲を同じうする者は勝つ。虞を以て不虞を待つ者は勝つ。将の能にして君の御せざる者は勝つ。この五者は勝を知るの道なり。故に曰わく、彼れを知りて己を知れば、百戦して殆うからず。彼れを知らずして己を知れば、一勝一負す。彼れを知らず己を知らざれば、戦う毎に必らず殆うし』、ね」

「そうだ。流石だな、華琳。注釈書を書くだけのことはある。二つ。決断が軽率すぎる。『怒りはまた喜ぶべく、慍りはまた悦ぶべきも、亡国はもってまた存すべからず、死者はもってまた生くべからず』。これを踏まえた上での決断とは思えないねぇ。そうでないと、よく知りもしないでこの俺に戦を仕掛けては来ないだろう。俺の器量は反董卓連合時にある程度知れたはずだ。敵対すれば敗亡することを覚悟せざるをえない程度には、ねぇ。それでも軽率に突っかかって来たンだ。戦っていく中で勝利を目指そうというのかも知れんが、それもまた敗因となるだろう。『勝兵は先ず勝ちて而る後に戦いを求め、敗兵は先ず戦いて而る後に勝ちを求む』、さ」

「貴方も中々造詣が深いじゃない。その意味するところを理解した上ですらすらと諳んじる事が出来る者はそう居ないわよ？」

「有り難うよ。まぁ、爺共にきっちり仕込まれたからな。三つ。これが一番の原因だ。奴さん達はこの俺を見誤った。治世に市井の一市民として生まれたのならいざ知らず、この乱世に一勢力の長として存在するこの俺の真価は戦にある。無論治世においてもものの役に立つ人間ではあるだろうが、性格的に荒事にこそ本領を発揮する類の人間だ。軍略にも武勇にも自信がある。決して過信などでは無くな。奴さん達は思い知ることになるだろう。平家の頭領というものがどういう者であるのかということを、骨身に染みて、ね」

「大したものね。貴方の言葉をそのまま返すわ。流石ね、教経」

「まぁ、お前さんだって似たようなことを考えていたンだろうが」

「ええ。……その貴方の目から見て、私は麗羽に勝てるかしら？」
「勝てるさ。お前さんほどの人間が負けるはずもない。なンなら勝因を挙げてやろうか？」
「興味があるわね。やってみて頂戴」
「はぁ。面倒臭いから一言だけな。お前さんと馬鹿とを比べれば、お前さんの方が水だということはわかりきったことだ。孫子に造詣が深いお前さんなら俺が言いたいことは分かるだろう？」
「ええ、十分よ教経。……ふふっ。本当に愉しいわね。教経、南方を平らげてきなさい。私は北方を平らげるわ。そうしたら、決戦しましょう？天下を賭けて」
「その方が結果として民の被害が減る、か？……良いだろう。打ち破ってみせるさ」
「愉しみにしているわ、教経」
「互いに死力を尽くすとしようかね、華琳」
「……貴方、前も同じ事を言って立ち去ったのよ？」
「良く覚えているものだな」
「それはそうでしょう。貴方ほど私の心を捉えて離さない人間は他にいないのだから」
「それはお互い様だろうねぇ。お前さんほど俺が気に掛ける人間は居ないンだから」

互いにニヤリと嗤った。

「じゃあ、ね。教経」
「あぁ、華琳」
「「また逢う日まで、壮健で」」

期せずして互いに同じ言葉を発し互いの顔を再び見合わせた後、笑って踵を返した。
……愉しいねぇ。先が愉しみでしょうがない。

まぁその前に、きつく灸を据えてやるべき奴らが居るがね。
後顧の憂いはなくなった。動かせる全軍を以て粉砕してやる。

『動くこと雷の震うが如く』、な。

蝶の如く～１０６～（前書き）

仕事終わって帰宅しました。
明日はいつも通り更新出来ると思います。
さて、何話更新出来るかな……

今日はとりあえずこの１話だけだと思います。

蝶の如く～１０６～

～雛里　Ｓｉｄｅ～

荊州南部の攻略に当たっていた吉里から、その全域を制圧したとの報告を書状にて受けた。思っていたよりも早い。白蓮様と私、珂瑛、紫苑さん。この四人の風評が高かった事が大きく影響し、殆どの町が戦うことなく従ってくれた。元々荊南を治めていた豪族達が軍勢を率いて抵抗してきたけど、その悉くを打ち破ったのだ。

流石は吉里、そして珂瑛といったところだろう。荊南については周辺に強敵が居ないこともあり、領内を取り纏める間にまだ白蓮様に拝謁したことがない？艾さんをこちらに寄越すそうだ。『知勇兼備の名将なり。以て上将に任ずべし』。吉里はそう言っている。逢うのが非常に愉しみだ。

これで後は東広漢を残すのみ、ということになった。

その東広漢の攻略に向かったのは焔耶と瑛。この二人であれば、間違いなく攻略出来るはず。益州南部を手中に収めるのも、時間の問題だと思う。

……でも問題はここからだ。

勢力を順調に伸張させてきたのは良いが、その速度が急速に過ぎる。東広漢を攻略した時点で一度矛を収め、私達の現状について把握する必要があるだろう。私達は隣国に強者を抱えることになるのだから。

平教経さん。

彼は益州北部と荊州北部をあっという間に攻略してみせた。私達とは違い徹底的に抵抗された上で、それを排除するのにさほど時間を

掛けなかった。反董卓連合の時に感じた通り、彼は軍事の天才である可能性が高い。勿論彼に付き従って居る軍師が有能である事もあるのだろうが、調べて貰った限りでは彼が大枠を提示して実務における詳細を軍師達が煮詰めていく、という形で戦略及び戦術の決定を行っているようだ。また、彼も彼らが提示する策を理解した上でそれを承認している節がある。本人に軍才がある事は間違いないだろう。反董卓連合の際の企謀の大きさから考えて、その軍才は計り知れぬ深みと広さを持ったものだろう。

今までの彼の戦歴を見ると、益州北部と荊州北部を攻略する戦以前の戦ではその殆どにおいて寡兵を以て多勢を撃破している。己の才能に慢心しても良い所だと思うが、彼はそれが兵法の常道から外れたものであることを理解しているようだ。だからこそ、敵である劉璋さんや孟達さんより多くの兵を揃えた上で侵攻したのだろう。

その領内は纏まりを見せており、漢中と南郷郡に必要最小限の軍勢を展開して不慮の事態に備えている。また、袁家を外から眺めて初めて分かった事だけど、袁家に物資面での戦を仕掛けているのは彼だ。糧食、鉄、馬、塩。いずれも欠かせないものだと思うが、それの値段をつり上げて国力を疲弊させようというのだ。将は有能で、任せられる仕事は丸ごと放り投げているようだ。こう言うと褒められた姿勢ではないように感じるが、有能な家臣に仕事を任せて決して口出しをしないということに他ならない。

要するに、彼は勝ちに至る五の道を知りそれを実践している者だ。『孟徳新書』という注釈書を書いた曹操さんと同様に、孫子について造詣が深いに違いない。ただ文字を覚えているのではなく、その内容を理解しているに違いないのだ。今の私達から見れば巨人と呼ぶに相応しい、非常に有能な君主とその勢力。それを隣人として抱え、接して行かなければならない。

どう付き合って行くのか、については白蓮様に方針を伺っておく必要がある。友好的な関係を築くべく交流を求めるのか？それとも、敵対するのか？

前者であれば良し。だが後者であれば敗亡を覚悟する必要がある。反董卓連合の折、彼の目的は反董卓連合軍を戦場で打ち破ることにはなく、董卓さんを救い出すことにあった。そうであればこそ、連合に参加した諸侯の多くがその命を戦場に散らすことが無かった。もし董卓さんを救い出すことが目的でなかったら、何人の諸侯が命を落とすことになっていたか分からないのだから。

「平教経と敵対するのか、だって？」

「はい。白蓮様はどうするおつもりでしょうか」

「私の方には積極的に平教経と敵対する理由はない。彼が攻めてくるなら兎も角、私から事を荒立てようとは思わない。彼の為人や平家の力というものもよく分からないし、先ずそれを調べる為の時間が必要だと思う」

ある日白蓮様を捕まえて話をする機会が出来たので、率直に伺ってみた。

『平教経さんと敵対することを考えていらっしゃいますか』、と。

その私に対し、白蓮様は考え考え答えて下さっている。

「雛里、どうしたんだ？いきなりそんなことを聞いてくるなんて」

「白蓮様が彼と事を構えることをお考えになっておられるなら、それなりの準備と覚悟が必要だ、とお伝えするつもりでした」
「理由もなく事を構えるような真似はしないよ。為人を調べて話が出来るようなら話をしようと思う」
「何の話をされます？」
「さあ。それは彼の為人次第だろうな。彼がどういう世の中を作ろうとしているのか。それに拠るよ。ただ、例え相容れぬ考え方をしていたとしても、時間を稼ぐ必要があるだろうな。私達はまだ起ったばかりで足元を固めていない。何をするにせよ、しっかりとした地盤を持たないことには話にならない。足下を気にしなければならない状況で空を眺めるような真似はしないものだ。鳥を射ようとして弓を引き絞ったは良いが、鳥ばかりを見て池に落ちてしまったのでは目も当てられないのだから」
「『螳螂蟬を窺い黄雀後に在り』、ですか」
「そうだ。地盤がしっかりしていれば、不測の事態があっても対応出来るとは思うが、それにしても周囲と私達が置かれている状況を把握していないと難しいだろう。稼いだ時間で周囲を窺い、最低でも後背を脅かされることがないことを確認した上で事を構えるべきだ。今よりも力を蓄えることが出来れば猶望ましいけど」
「稼いだ時間で実力を蓄えることも出来たとして、勝てますか？」
「……言っておいて何だけど、まずそこまでの実力を蓄えることが出来るとは思えないけどな。そこまで甘い男ではないと思う。私が敵対する、と思ったら私の力を削ぐことを考えてそれを行ってくるだろう。反董卓連合参加後の諸侯の国元で彼が行った事を考えれば、私が力を蓄えることを指を咥えてみているような人間だとは思えないから」
「では、勝てない、と」
「勝てると思える要素が終ぞ見あたらないじゃないか。私は自分の器量の程は弁えているつもりだ。いつか勝てるようになるかも知れないが、それは遠い未来のことだろうさ。この先数年で彼と敵対す

るのは望ましくないだろう」
「成る程」
「いずれにしても、彼と事を構えるような事態になれば、の話だ。董卓を救って見せた男だし、決して相容れぬ思想を抱く男とは思えないけどな、平教経は」

白蓮様がそういうつもりで居るならば問題はない。平教経さんに使者を送り、面語したい旨を伝えるべきだ。下手に接触してきた人間を無碍に扱うことはしないだろうから。

「申し上げます！」
「なんでしょうか？」
「魏延様、馬謖様、東広漢を攻略なさいました！」
「そうですか」
「良くやってくれたな」
「それで、焔耶と瑛は今どうしていますか？」
「東広漢から逃げ出した劉循を追撃中です。劉循はどうやら梓潼郡へ逃げようとしている模様です」
「……何としても東広漢の郡内で劉循さんを補足して下さい。もし梓潼郡へ逃げ込まれたら必ず追撃を中止すること、と伝えて下さい」
「はっ」

これで益州南部は私達のものになった。
念のため焔耶と瑛が劉循を捕らえる為に梓潼郡まで攻め入らないように通達を出したが、瑛ならちゃんと分かっているだろう。戦略上の目的は達成したのだ。これ以上は蛇足というものだ。それをきちんと見極めて自制することが出来ることこそが名将の条件なのだということを、何度も口にして教えたのだから。

「これからが正念場だな。平教経とどうなるかが分からないが、必

ず麗羽に思い知らせてやる。私の無念さを、死んでいった家族に対する想いがどれ程のものであるのかを、な」

厳しい目をして、白蓮様が仰る。

……朱里ちゃん。私が、目を醒ませてあげるよ。

～愛紗　Ｓｉｄｅ～

教経様から命を受け、稟と共に漢中で公孫賛に備えている。

教経様は公孫賛が益州南部を攻略した勢いそのままに攻め掛かってくることはないだろうと言っていたが、状況が少し変わったようだ。

東広漢を攻略した公孫賛軍が、尋常でない速度で梓潼郡を目指している旨細作から連絡を受けた。最後まで公孫賛に抵抗を続けていた劉循が梓潼郡目指して敗走しており、それを逃すまいと軍を進めて来ているようだ。

「稟、念の為に国境に軍を展開させておく必要があると思うのだが」
「そうですね。桟道出口に軍を展開して半包囲陣を布きましょう」
「……攻め掛かってきた場合、敵を領内に引き摺り込んで完全に包囲した方が良いのではないか？その方が確実に敵を殲滅出来ると思うのだが」
「いえ。この状況でそれは悪手です。『囲師には必らず闕き、窮寇には迫ること勿かれ』、と言いますからね」
「孫子の兵法に書いてあった気がするが、どういう意味だ？」
「『囲師には必らず闕き、窮寇には迫ること勿かれ』とは、包囲している敵には必ず逃げ道を空けておき、窮鼠と化した敵と対峙してはならない。そういう意味です。兵数に劣る相手を地の利がある領内に引き摺り込み、これを重厚な陣を布いて包囲する。兵法の常道に則った必勝の形だと思いますが、それだけに相手も必死に戦うでしょう。勝利は疑いありませんが痛手を被る可能性が高いです。桟道出口で待ち構えて出てくる敵を半包囲するに止め、相手に逃げ道を残しておくことで必死に攻め掛かってくることがない心理状況を創り出す。公孫賛と天下を争っていてこれが最後の決戦という状況ならばまだしも、今は降りかかる火の粉を最小限の労力で払うことを考えるべきです。これから先のことを考えると、此処で多くの兵を喪う訳にはいかないのです。それは教経殿が天下をその手中に収める時期を遠ざけるだけですから」
「成る程な。流石は稟だ」
「それ程でもありません。教経殿に比べれば、まだまだ不足でしょう。孫子についての理解において負けているとは思いませんが、相手を思うがままに行動させる、その一点において教経殿ほど長けた

人を私は他に知りません。人の心の働きを論理を以て説明する教経殿ならではという策を、理解出来ても思いつくことが中々出来ないですから」

「そう卑下したものではないだろう。現に今、敵の心理を慮って策を考えたではないか」

「それは教経殿と話をした経験が大きいと思いますね。あの人と話をしていると本当に為になりますよ」

稟はそう言って微笑んだ。

教経様を想う心で負けるつもりはないが、稟のこういう在り方は微笑ましいと思う。最近、教経様が望むことが正しいかどうかを気にすることなく、その望むところを何とか叶えて差し上げたいと考える自分が居ることに気が付いた。教経様が人主として、人として好ましいから従っているというよりは、教経様だからこそ従っているという形になっている。教経様で在れば、何をしようと許せるだろう。例え他の人間が同じ事をすれば斬り捨てるであろうような事をしたとしても、教経様がそれをするのであれば悩みつつも結局受け入れるであろう自分が想像出来る。こういうのを、愛情というのであろうと思う。私も稟も、教経様をただ好いているのではなく愛しているのだ。

「稟。教経様の事、一体いつからそのように想うようになったのだ？星や風から、稟は一番最後に教経様に付き従うことを決めた、と聞いているのだが。その器量に惹かれての決定で、男女の仲としての感情はそれ程でもなかったはずだ、と言っていたし」

「さあ。私にも分かりません。気が付いたら、教経殿が居ない世界で生きる私が想像出来なくなっていたのです。あの人と共に在ることが出来るなら、私は何だってして見せます。あの人が例え変質してしまったとしても、私はあの人と共に生きて行きます。勿論、ただ変質するに任せるつもりはありませんが。こう有れかし、と思う

教経殿で居て貰う為に、私は私の出来ることをしますよ。でもそれでもし変わってしまったとしても、出奔することはないでしょうね。愛紗だって、同じ想いで居るのでしょう？」

「ああ。そうだ。今更教経様と道を違えることなど思いも寄らないことだ。私の人生はあの人と共に在る。それ以外の人生など願い下げだ」

「多分、星も風もそう言うと思いますよ」

そうだろうな。私より教経様と共に在った時間が長い三人は、皆そう言うだろう。

「だが稟、負けないからな？」

「それは私の台詞ですよ、愛紗。もう既に負けるも何もない関係になっている気がしますけどね。教経殿は皆の教経殿。本当に、言葉だけでなくそうなっている気がしますから。誰か一人が格別に愛されることは無いでしょう。それが少し寂しい気もしますが、逆に言えば皆を分け隔て無く愛して下さっていることに他なりませんから。……まあ、この場にいない憎い人のことは置いておいて、この先起こるかも知れない事態に備えておくことにしましょう」

「そうだな」

教経様が誰を好きになろうと、誰とそういう関係になろうと。私を愛して下さっている限りそれは大した問題ではない。皆、そう思っているのだろうな。

公孫賛軍がどう動くのか。それは分からないがそれに備えることにしよう。

他でもない、教経様の為に。

～瑛　Ｓｉｄｅ～

梓潼郡へ逃げ込もうとする劉循を猛追している。
このまま行けば、国境で何とか補足出来そうだ。

「馬謖様！」
「分かっています。ですが、今後に禍根を残す訳にはいかないのです。一時平家に誤解を受けようとも、こちらから戦端を開くような真似をしなければ大丈夫でしょう」
「そうだ！瑛の言う通りだ！ワタシも居るのだし、例え戦闘になっても問題はない！劉循を今此処で討ち果たすことこそ肝要だ」

劉循を捕捉すべく猛追しているが、この行軍を平家が脅威と見なして国境で軍を展開させる可能性が有る。いや、きっと準備をしているだろう。関雲長が抑えとして漢中に入っているとの情報は得ている。私達に対する備えであることは明白だ。

「急ぎなさい！劉循を何としても捉えるのです！生死は問いません！」

兵を叱咤して蜀の桟道を掛ける。細い足場に足を滑らせて谷へ転落する人間も居るが、こういう場所だけに劉循の行軍も捗らないでいるだろう。ここで差を詰めて何とか捕捉するのだ。無駄に兵を死なせることになるが、劉循を討ち果たすことが出来ればその死は無駄ではないだろう。

蜀の桟道を抜けるかどうかというところで劉循を捕捉した。
あと少しだが、その向こうに平家の軍兵が見える。あそこに駆け込まれたら、私達にはもう手を出すことが出来ない。それは避けたい。平家に真意を伝えている時間的な猶予があるとは思えない。少々無茶が過ぎる気がするが、一気に寄せて劉循の首を取ったほうが良いだろう。

「焔耶、何としても劉循の首を」
「分かっている！落とさず矛を収めるつもりはない！」

焔耶が先頭に立って劉循に追いすがる。
平家の軍が劉循を収容する為に道を開けているが、劉循に追いすがった焔耶が軍兵と共にそこに飛び込んで劉循を討とうとしている。
平家は劉循を援護しようと動いている。

「兵を左右に展開し、劉循の収容を援護しようとしている平家の兵を抑えて下さい」
「馬謖様！既に梓潼郡に踏み込んでいるのです！これだけでもホウ

統様の命令を無視していることになるのですぞ!?その上平家と直接戈を交えるなど、もってのほかです!」

「黙っていて下さい。孫子に曰く、『君命に受けざる所あり』。また、大夫は国外に出たら、国の利益の為に独断専行を行っても良い、と春秋にもあります。王平、貴方が言っていることは分かりますが、ここは国家の為に劉循を除くことを優先させるべきです」

「仰っていることは分かりますが、ホウ統様は梓潼郡へ攻め込んではならない、と仰ったのです。それはつまり、劉循の命を取ることより平家と敵対しないことを重視しているからに他なりません!お考え直し下さい!」

確かにそうかもしれない。

だが、雛里様は平家を過大評価しているとしか思えない。白蓮様、紫苑様、桔梗様。雛里様、姉上、焔耶、そして私。才在る人間ばかりが集結して公孫家を盛り立てようとしている。益州・荊州で加わった新たな人材も、皆粒ぞろいだ。平家には確かに優秀な将が居るだろうが、これ程に優秀な人間ばかり集まっている訳でもないだろう。巨大な勢力だが、巨大であるだけにその全ての力を一点に集結させることは難しい。腹背に袁紹と曹操を抱える彼らが私達に集中することは出来るはずがないのだ。

王平が言っていることは分かるが、彼は原則に拘りすぎている。ここは、劉循を討ち果たすことを優先させるべきなのだ。

「こういうやり方は余り好きになれませんが、致し方在りません。……王平、軍権を与えられているのは私と焔耶です。その二人がそうすると言っているのですから、それにしたがって貰います。いいですね?」

「……分かりました。微力を尽くします」

まだ納得はしていないようだが、従うことを明言した。

学がないのが欠点だが、この男は手堅い用兵をする。彼に右翼を指揮させ、私が左翼を指揮する。それによって平家の軍兵を押し止め、その間に焔耶が劉循を討つ。これ以上の策はないだろう。

左翼を指揮し、平家の兵にぶつかる。

勢いよく攻め掛かると、前線が多少混乱して少し後退した。

何とも手応えの無い敵だ。私達を牽制することだけを目的として行軍していたのだろうか。牽制するなら、攻め掛かられることも念頭に置いておくものだ。右翼側を見ると、右翼も平家を抑えることに成功したようだ。これで、焔耶が劉循を討ち取れるだろう。

「敵将、劉循！この魏文長が討ち取ったり！」

戦場に名乗りが響き渡る。名乗りを上げならが焔耶が引き上げてくる。それに併せて、こちらも一旦桟道の出口付近に軍を集結させる。退いていく私達を執拗に追いかけるでもなく、ただ退くに任せている。

……平家も、存外大した事がないのかも知れない。私であれば事前に桟道の口を塞いで退路を断ち、包囲した上で殲滅するだろう。

整然と隊列を組んでゆっくりと迫ってきているが、それ程の威圧感は感じない。中央で覇権を争っている勢力の軍兵も、この程度のものであれば恐れるに値しない。

「瑛！やったぞ！」

「焔耶、お疲れ様でした。後は兵を退くだけですが、どうやら先程一当てされたことを根に持っているようで、簡単には退かせてくれないようです」

「そう言う割には余裕があるじゃないか、瑛」

「そう見えますか？」

「ああ。まあ、ワタシの方でも少々拍子抜けした感じだ。平家の兵は強いと聞いていたが、ワタシが撃ち掛かると算を乱して逃げ出したからな。噂など当てにならないものだ」
「そう思いますね」
「どうする？」
「一戦して公孫家の強さを思い知らせるのが良いでしょう。兵数的にはこちらが少ないですが、別に問題無いでしょう」
「そうだな。ワタシの強さを思い知らせてやるとしよう」

私の才も、ね。
ここで功績を立てれば、雛里様も私を認めて下さるだろう。

傍らで不満そうな顔をしている王平も、私の才がどれ程のものかが分かればそのような顔はしなくなるに違いないのだ。姉上と比較され、常に後一歩及ばないと言われてきたが、此処で勝てば漸くその呪縛から解放されるだろう。『馬家の五常』の一人として評価されるのではなく、馬幼常として評価して貰えるだろう。

平家には、その為の踏み台になって貰おう。

蝶の如く～１０７～（前書き）

ＰＶ６，０００，０００越えてました。
読んで頂きまして、有り難う御座います。

？艾の真名は、花言葉です。本当は車百合にしたかったのですが、長すぎますし語呂も悪いので。
花言葉としては、有名ではない意味を持たせてあります。ネタ晴らしは感想でやります。気になる方、分かった方は感想へどうぞ。訊いてくれないとネタ晴らしも出来ないというｗ

今日中に、後１話は確実に。もう１話は、作者次第です。

ではどうぞ。

蝶の如く～１０７～

～雛里　Ｓｉｄｅ～

「荊州から良く来てくれたな、？艾、？忠」
「「はっ」」

？艾さんが荊州からやってきた。
白蓮様と拝謁する前に面語したが、彼女は確かに得難い将だと思う。
今後の展望について聞いた際に平家に対する対応を訊くと、ただ一言『不戦』と答えたのだ。
言葉数が異常に少ないところが変わっているが、その目は確かな知性を宿したものだった。一軍を預かる将として十分な器量を有しているだろう。？忠さんは？艾さんの弟で、？艾さんの言葉を補って話をしてくれる。何故分かるのかが不思議だが、姉弟だから、と笑って答えるだけだった。だが、？艾さんの言葉を補って話が出来ると言うことは、彼自身もかなりの器量を有しているということになるだろう。理解が及ばないものを補足出来るはずはないのだから。

「知っていると思うが私は公孫賛。字は伯珪、真名は白蓮だ」
「……？艾、士載、百合です」
「私は？艾、字は士載、真名は百合です、白蓮様。宜しくお願い致します、と姉貴は言ってます。俺は？忠といいまして、姉貴の弟です。字も真名もありませんから、そのまま？忠とお呼び下さい」
「分かった。これから宜しく頼むよ。百合、？忠」
「「はっ」」

？艾姉弟の目通りが終わり歓待の為の宴を行おうとしていると、申し継ぎのものが慌てて駆け込んできた。……その足音は不吉を孕ん

でいるように聞こえる。

「申し上げます！魏延様、馬謖様、梓潼郡にて平家軍と激突致しました！」

「何だって！？」

「どういうことですか」

「その、王平様から使わされた伝令はそれだけ伝えると意識を失ってしまったので詳細は不明です。が、錯乱していた訳でもありませんし、言っていることに誤りはないと思われます」

そんな馬鹿な。

瑛には、ちゃんと言い聞かせてきたのに。

最悪な時に、最悪な相手を選んで独断専行するなんて。

「……見捨てる訳にはいかない。私に仕えてくれているんだ。家臣の不始末は私の責任だろう。雛里、出陣しよう。責めるにせよ叱るにせよ、生きていればこそだ。行って焔耶と瑛を叱って、それから平家と話をしよう」

「白蓮様、話をすると仰いますが、聞いてくれるとは思えません。どちらから仕掛けたにせよ、難しいでしょう。あちらから仕掛けてきたのであれば、戦をする理由があちらにはあることになります。戦は避けられないでしょう。こちらから仕掛けたのであれば、今更何の話をするのだ、と言われるのが関の山です。これも同様に、戦は避けられないと思います」

「だが、何もしないという訳にはいかない。どうやっても戦が避けられないのなら、焔耶達を助けに行こう。彼女達がそうしたのは、彼女達を向かわせた私の責任だろうから」

「……行きます」

「私もお供致します、と姉貴は言っています。……俺が言うのも何ですが、姉貴が居れば目も当てられないような敗北はしないと思い

ます。姉貴は、戦に掛けては天才的ですから」
「百合さん、？忠さん。兵1万を率いて先行して貰えますか。白蓮様は私と共に兵を率いてその後を付いていきましょう。桔梗さん達には、残って民の動揺を鎮めて貰います」
「それがしもお供致しましょう。防戦には自信がありますでな」
「しかしだな張任。お前がおらぬでは民が言うことを大人しく聞くか？」
「桔梗よ、しかしも糞もあるまい。言う事を聞かせてみせい。否応なく戦になる。国元には最小限の将が残っておれば良い。今大切なのは、出来たばかりのこの勢力を如何にして保つか、ということであって先のことを考えて民を慰撫しておる場合ではない。投入出来る戦力を限界まで投入すべきなのじゃ」
「ふむ……まぁ、お主が正しかろうが、それでは私が行くべきではないのか？」
「益州の将で最初に殿に従うことを決めたのはお主じゃ。そのお主がおらぬでは困ろう。それにお主は攻めに向いておる将であって、防戦には向かぬ。此処は儂が適任じゃろうて」
「……まあ、仕方あるまい」
「では張任、頼む」
「御意に御座います」

戦をするに、梓潼郡で戦うなどあり得ない。東広漢の桟道入り口で抑えきることが出来るかどうか。それで勝敗が決まるだろう。もし抑えきる事が出来れば、和議に持ち込むことが出来るかもしれない。抑えられなければ、白蓮様は再び領地を失うことになる。私の望みも叶えられなくなる。

「では出陣するぞ。基本方針は専守防衛だ」
「御意」

４万の兵で何処まで出来るか分からないが、最善を尽くそう。
私達の未来の為に。

～翠　Ｓｉｄｅ～

蜀の桟道付近に展開していた愛紗と稟から、公孫賛軍と交戦した旨連絡を受けて現地に急行した。蒲公英と付近を巡回していて良かった。これが武都郡などを巡回していたのであれば、駆けつけるまでにかなりの時間を要しただろうから。

「翠、早かったな」
「当たり前だろ？あたし達は騎馬隊率いてるんだからあの程度の距

離なら直ぐに駆けつけられるよ」
「これで万全の態勢を整えられましたね」
「稟、状況は？」
「平家に庇護を求めてきた劉循を討ち取ったことで満足して帰還するかと思ったのですが、どうやら初戦で積極的に叩かなかったことが却って徒となったようです。平家恐るるに足らず、ということでしょう。兵数に勝る私達に対して攻勢を掛ける為に態勢を整えている所ですね」

これから本格的な戦になる、ということか。
それにしては稟も愛紗も余裕があるな。

「稟、あたしの目には余裕綽々に見えるんだけど。何か必勝の策でもあるのか？」
「必勝の策がある、というよりは、悲観する要素が全くないのです」
「どういうこと？」
「敵の帥将は掲げている旗から見て、魏延と馬謖でしょう。それなりに有能だとは思いますが、それなりでしかないことが証明されましたからね。私の予測を超えるような策を施してくる人間であったり、私の予測越えた武勇の持ち主であったりすることはないでしょうから」
「ねぇねぇ。どうしてそう言い切れるのかなぁ～って蒲公英には不思議なんだけど？」
「そうですね、きちんと説明しましょうか。
彼女達の戦略的な目標は劉循を討ち取ることであったはずです。その過程で平家と戈を交えることになりましたが、平家の兵もあちらの兵も損害は微弱です。それは、あちらの戦略目的が那辺にあるのかを私達が洞察しており、互いに引っ込みが付かなくなるような状況を回避する為にこちらから積極的に撃ち掛からなかったから、という理由に因ります。それを見抜くことが出来ていない点が、先ず

彼女達の器量が底の知れたものであることを表している、と言えるでしょう。

次に、戦略目的を果たしたにも関わらず兵を退かないこと。これが彼女達の器量が大した事ではないと断ずる最大の理由です。翠、反董卓連合と対峙した時の教経殿を思い出して下さい。決戦すれば必ず勝つ、という状況を捨ててまで、戦略目的を果たす為に動いたのです。あれこそが名将の決断というものです。あの時の教経殿に比べれば、今彼女達の目の前にぶら下げられている餌は殆ど魅力的には見えないものです。魅力的に見えないどころが、破滅への可能性を大いに孕んだ危険な罠のようなものです。戦って勝ったとしても、大して意味がないのですから。まあ確かに、不敗の軍である平家に勝ったという風評は得がたいものでしょうが、その風評を得る為に、また得たが為に国を喪うことになったのでは目も当てられません。その辺りを考えて、戦略目的を果たした後直ぐに撤退すれば良いものを、そうしないのですからね。高が知れている、というものです」

「成る程～、蒲公英でも分かることが分からないなんて、向こうは馬鹿なんだね」

「有り体に言ってしまえば、そう言うことになりますか」

蒲公英の言葉に、愛紗も稟も苦笑を浮かべている。

けど、あたしも同感だ。

目の前にご主人様が居て、それを討ち果たせる状況なら分かるけど、そうでないのだから目的を果たしたら撤退すべきなのに。

「まあ、そういう訳で我々の負けはないだろう。私達には、援軍も来るしな」

「え？」

「教経様に既に使者を出してある。暫くは持ちます、と。このままでも十分だとは思うが、教経様は確実を期す為に必ず援軍を差し向けて下さるだろう。あの方はそういう人だ。それが平家を不敗たら

しめているのだから」
「そっか。ご主人様自身が援軍に来るなら、絶対に勝てるって気がするもんな」
「ご主人様の前で頑張って、蒲公英、可愛がって貰うんだ～♪」
「こら、蒲公英！何言ってるんだよ！」
「ニシシ。お姉様だってそう思ってる癖に～」
「う、うるさいぞ！」
「いっ……たぁ～い！お姉様、蒲公英が馬鹿になったらどうするのよ！」
「もう馬鹿なんだから変わらないよ！」
「あ～！絶対に許さないんだから！」
「やるか！？」
「ふふっ」
「ん？」
「翠、蒲公英。お前達も余裕綽々に見えるぞ？」
「それはご主人様が援軍に来てくれるって思ったらさ……ああ、そういうことか」
「まあ、そういうことですね」

何だ。結局皆ご主人様が来てくれるだろうからこんなに気持ちに余裕があるのか。
巫山戯ている時はアレだけど、真面目な時は本当に頼りになるからなぁ……

「翠？」
「あ、駄目だよ。お姉様はこうなったら全く話を聞いてないんだから。ご主人様のこと、本当に好きなんだな～ってちょっと感心しちゃう位なんだから」
「稟と同じか」
「私はこうは成らないと思いますが」

「妄想している時はもっと酷いし結果も酷いぞ」
「……」

ご主人様、早く来ないかな。
でもその前に、突っかかって来てくれた公孫賛軍にお礼しなきゃ。
お陰でご主人様に会えるんだし、ね。

～焔耶　Ｓｉｄｅ～

瑛の策に基づいて、平家の兵を相手にしている。
桟道の出口付近から先の開けた場所へは絶対に行かないこと。瑛はそう言っていた。そんなことはワタシでも分かる。兵数が異なるのだ。将の質で勝っているとは言え、多数を相手に立ち回るのは危険を伴う。だからこそ、この出口付近で戦っているのだが。

「隊の状況は？」
「既に3割を失っております！魏延様、これでは……」
「弱音を吐くな！そんな暇があったら敵を屠ってやれ！」
「は、はっ！」

周辺から寄せてくる平家の兵が突然強くなった。何処かに精兵を隠していたようだ。軽く捻ってやるつもりで平家の兵の群れに躍り込んだワタシ達を次々に屠っている。当初こちらに油断があったとは言え、数度の交戦で此処までの損害を出すとは思ってもいなかった。卑怯にも敵は3人で一人を相手にするように動いている。ワタシ程の武人ならばまだしも、雑兵では太刀打ち出来ない。

「糞！王平は何をやっているんだ！」
「王平殿は敵本隊を足止めしておられます！寡兵を以て大軍を押し止めるべく奮闘されておられるようです」
「そうか、そうだったな。では、瑛は？」
「敵右翼に攻め掛かっておられましたが、その勢いは既にありません」
「……そうか」

兵の質に劣る平家を、ワタシと瑛とで左右から撃破し、中央で本隊を押し止めている王平と合流して一気にこれを破る。そう考えていたが、左翼を破るどころか押し返されそうになっている。
これは、敵を見誤ったのではないか。
桔梗様からよく言われていた。慢心しすぎだ、敵を侮るな、と。

「……一旦戦線を縮小しよう。桟道の中で戦うべきだ。相手にする兵を少しでも減らしたい」
「撤退出来るでしょうか？」
「大丈夫だ。なに、ワタシが殿を務めよう」

「魏延様、伝令です！馬謖様、王平様、共に戦線維持が困難と判断し桟道内に後退する、とのことです。魏延様も共に後退されたし、とのことです」
「分かった。我が隊も撤退するぞ」

副官に兵の指揮を預けて前線へ出向く。
左右に飛び出してきた雑兵を鈍砕骨でぶん殴る。

「どうした！平家の力はこんなものか！」

そう言った私の前に雑兵が次々に群がってくるが、所詮雑兵だ。その全てを鈍砕骨で粉砕し、更に名乗りを上げる。これで、時間を稼ぐのだ。

「誰か！ワタシを殺せる奴は居ないか！」
「ここにいるぞ～！」

そう言って、いきなり後から斬りつけてきた奴が居た。
かなりきわどかったが、何とか躱せた。もし相手が声を上げなかったら、ワタシは死んでいたかも知れない。

「ちぇっ。お馬鹿をやっつけてご主人様に褒めて貰いたかったのになぁ～」
「馬鹿とは誰だ、馬鹿とは！」
「アンタ以外にいると思ってるの？あ、馬鹿だからそんなことも分からないんだ～」
「貴様～！」
「えい！」
「うわっ」

話をしている最中にいきなり槍を繰り出してきた。
速い。かなり槍を使うようだ。中々の将が出てきたじゃないか。これが関羽か？腕は確かだが卑怯だ。

「卑怯者め！武人としての矜持もないのか！」
「獣と向かい合っているのに矜持も糞もある訳がないじゃん。アンタは猪相手に武人だ何だとか言う訳？あ、ケダモノ同士だから話が出来るのか～」
「何だと～！」
「とりゃ！」
「ぐっ」

ぶん殴ってやろうと近づいたワタシに、またしても不意打ちをしてくる。
……コイツは嫌いだ。

「馬鹿に出来るのも今のうちだ！身の程を思い知るが良い！」

鈍砕骨を横に薙ぐ。この間合いでは、後には躱せまい。
そのか細い槍で防ぐことは不可能だ。これを防ぐことは出来るのは、桔梗様と張任様だけだったのだからな。

「ほいっと」
「なっ」

必殺の一撃だったはずだ。それを地面に伏せることで躱しながら、すぐさま反撃してくる。

「死んじゃえ♪」
「うわっ」

死ね、という言葉と共に槍を繰り出してきたから、胴を突いてくると思っていたのに。
いきなり足を払われてこけてしまった。

「ばっかなんだ～♪蒲公英がそんな素直に突く訳ないじゃん」
「～～～～！」

屈辱だ。
こんな小娘に良いようにあしらわれているなんて。
直ぐに立ち上がって構える。
認めようじゃないか、コイツは態度は悪いが強敵だ。

「……ワタシは、魏延。魏文長だ。貴様は？」
「蒲公英はね、馬岱って言うんだよ？あとちょっとだけの人生だけど、覚えておかなくても良いからね？」
「抜かせ！」

関羽ではなかったようだが、今はその事は関係ない。
馬岱に向けて鈍砕骨を振り回すが、全く捉えることが出来ない。確かに、鈍砕骨を振るう度にだんだんと馬岱の体に近づいてはいるが、全く表情を変えない。変えないどころか余裕のある顔付きに変わりつつあった。
……それが、癇に障る。

「……それなりの武人だって言ってたけど、それなりどころでもないかな～」
「何だと！？」
「これでお終いっと」

ワタシが鈍砕骨を突いた瞬間、それを交わしてワタシの腕の付け根を突いてきた。前身が前のめりになっていたワタシは慌てて躱そうとして足を滑らせ、汚泥の中に顔から突っ込んでしまった。

「あらら、外れちゃった。でもまあ、これで終わりだよね♪」

慌てて身を起こしたが、既に馬岱が目の前に居た。

……尋常に勝負をすれば、こんな小娘に負けるはずはないものを。

槍を繰り出す馬岱に対して何とか対応しようとするが、とっさのことで体が動かない。目を瞑ってしまったワタシの頭に、衝撃が走った。槍の柄で、思いっきり殴られたようだ。

「あははっ♪目を瞑っちゃって。面白いんだ～。ご主人様が来たみたいだから、ご主人様の前でアンタをやっつけることにするんだ～。ちゃんとご主人様の前で蒲公英に突っかかって来てよね、猪」

「き、貴様、ワタシを侮辱するつもりか！？」

「？生かして貰えるのに喜ばないの？ま、いっか。兎に角蒲公英はご主人様の前でアンタ戦おうと思ってるの。ワザとやられそうになったら、ご主人様助けてくれるかなぁ～？協力してよね」

「ま、待て！」

「じゃ～ね～。ちゃんと蒲公英目指して来ないと駄目なんだからね？」

馬岱はワタシを置き去りにして立ち去った。

……巫山戯るな。ワタシを、ダシにしようというのか。引き立て役としか考えていないのか。

貴様を必ず後悔させてやる。必ずだ。

耐え難い屈辱に塗れながら、桟道の中へ帰還した。

蝶の如く～１０８～（前書き）

何となく後一話行ける気がする。
そんな日曜の午後。

蝶の如く～１０８～

～教経　Ｓｉｄｅ～

長安を月に任せ3万の兵を率いて長安を出立した俺たちは、蜀の桟道付近で愛紗達と合流した。
付き従うのは冥琳、蓮華、思春の三名。星と詠、琴には南郷郡へ兵2万を率いて向かって貰った。詠と風が居れば、劉表如き何ほどでもないだろう。

「教経様、お待ちしておりました」
「愛紗、久し振りだな。相変わらず綺麗なモンだ」
「の、教経様！」
「ははっ、まぁそう照れるなよ、愛紗」
「教経殿、援軍有り難う御座います。これで完勝する目処が立ちました」
「稟、嘘は良くないなぁ。……俺が居なくても、完勝するつもりだったろうに」
「可能性がより高まる事に越したことはありませんからね」
「お前さんらしいよ」

言いながら、愛紗と稟を両手で軽く抱擁した。
二人とも、嬉しそうだ。

「ご主人様、あたしだって頑張ったんだからな？」
「分かってるよ、翠。ご苦労様」

そう言って腰を抱いてやる。

「ばばば馬鹿！こんな所で何するんだよ！」
「可愛かったからさ、こうしたいと思ったンだよ。嫌だったかね？」
「べ、べつに嫌じゃないけどさ……」
「あ～！ご主人様！蒲公英も頑張ったんだよ？」
「だが蒲公英、お前は駄目だ！」
「え～！」

やれやれ。皆普段通りで変わりがないことだねぇ。まぁ、わたわたとされても困るがね。

「教経、人前でいちゃいちゃするのは止めて貰えないかしら」
「ん？あぁ、済まんな蓮華」
「やれやれ……仕方のない男だな、お前は。ほら、羽織の襟が返って居るぞ？」
「あ？……おぉ、済まんな冥琳」
「構わないさ」

冥琳が甲斐甲斐しく俺の襟を直してくれた。
良い嫁さんになるだろうねぇ、冥琳は。

「……教経殿に訊きたい事が出来ましたが、今はおいておきましょうか」

……あぁ、そう言えばまだ知らないんだっけか。ヤヴァイねぇ。最近、稟の愛情が凄いことになってるのは分かってるンだよねぇ。刺されるんじゃないか？俺。そう思っていると、稟が眼鏡をクイクイしていた。
……良いねぇ。萌えてきたんだねぇ。俺は眼鏡属性持ちなんだよねぇ。そして麦茶が好きなんだよねぇ。

「……ふ～ん」
「？なンだ？蒲公英」
「な～んでもないよ、ご主人様♪」

やたらニヤニヤしているが、まぁ別に良いか。蒲公英がこうなのは今に始まった事じゃないしな。

「で、状況は？」
「既に何度か戈を交えていますが、全く問題ありません。敵兵は１万強、細作の情報では、後詰めとして？艾と？忠の姉弟が１万率いて桟道を梓潼に向かって行軍してきているようです。公孫賛率いる本隊は、東広漢側の桟道出口で布陣している模様です」
「良くそんなに速く情報を集められるな、稟」
「教経殿がテイ族を恭順させたお陰です。山の民である彼らの脚力を持ってすれば、何ほどのこともありません」
「成る程な。情報を制するものが戦を制する。彼らをそう活用することを思いついた時点で我らの勝ちは決まったようなものだな」
「ええ。そう思いますよ、冥琳」

？艾、ねぇ。？忠って、子供じゃなかったか？
まぁ、今更この世界の人物の性別とか関係に難癖を付けようとは思わないが。

「敵将は？」
「魏延に馬謖、王平という者達です」
「へぇ。で、向こうから戦端を開いたンだよな？」
「はい。劉循を首にした時点で撤退するかと思っていたのですが、どうやら痛手を受けなかったことで勘違いをしたようですね」

史実とは違うが、独断専行したのかね？

泣いて馬謖を斬る、ということになるのかねぇ。まぁ、和議を結ぶなら間違いなく俺はそれを要求するがね。もしそれを飲むようなら、その場では許してやってもいい。後で難癖付けて攻めさせて貰うがね。テメェの家臣のケツはテメェがぬぐってやるモンだ。そうすればこそ、人の上に立つ資格があるンだからねぇ。配下の者の失敗をその者自身の責任にするような上司は不要だ。根こそぎぶった切ってやるよ。

「稟、策なり陣なり、決めているのか？」

「いえ。教経殿が来られる事は分かっておりましたから、教経殿に一任致します」

宜しくお願いします、ってか？可愛げがあるじゃないか。主君に甘えるのが上手いねぇ、稟は。まぁ、そうやって俺の器量を推し量っているってのもあるンだろうがね。

「んじゃまぁ、一任されるとするかね。こいつはちょっとしたお仕置きだ。誰に喧嘩を売ったのか、骨身に染みて分かって貰わないとなぁ？」

「御意」

さて、魏延に馬謖に王平か。

どの程度のモンか、しっかり計らせて貰うとしようか。

～？忠　Ｓｉｄｅ～

姉貴と共に１万の兵を率いて梓潼郡へ向かっている。
なんて足場が悪いんだよ、この桟道ってやつは。これじゃ戦場に到着するまでに多くの兵を喪いかねないじゃないか。そう思って姉貴を見ると、姉貴は頷いて親指を立て、後をクイクイと指さした。流石は姉貴だ。

「全軍、ゆっくりと足場を確認しながら進め！戦場に到着して疲労困憊、なんて格好が付かないからな！」

そう言って全軍の進軍速度を落とさせる。これ位の速度であれば、足下を気遣いながら進軍出来るはずだ。
……にしても。
魏延と馬謖ってのは、一体何を考えて居やがるんだ。俺も人のことを言えた義理じゃないが、姉貴の言うことに背いたことは一度もない。雛里や白蓮様の態度からすれば、平家と事を構えてはいけない、というような事を言われていたに違いないはずだ。

「……？忠、覚悟をしろ」
「分かってるよ、姉貴。俺たちが殿だ。何とか生きて帰してやりたいからな」

そう言うと姉貴は頷いた。
肉親のひいき目かも知れないが、姉貴は軍事の天才だと思う。その姉貴が、覚悟をしろ、と言うのだ。間違いなく平家の将ってのは非凡な敵なんだろう。それを束ねる平家の大将ってのは、俺なんかには理解出来ないほどの器量を有しているに違いない。仕えて早々、難敵にぶつかることになるとはねぇ。しかも、命の危険がてんこ盛りと来たもんだ。
……姉貴だけは、逃がさないとなぁ。姉貴は、俺の生き甲斐だから。
涼しい顔で進む姉貴を横目に見ながら、そう思っていた。

「？忠様、前方が開け始めました。お味方の旗が見えます」
「あぁ、見えてるよ。姉貴、到着したみたいだぜ？」
「……伝令」
「あいよ。伝令！白蓮様の本隊の先遣部隊として、？艾・？忠姉弟がやってきたと伝えてくれ！」
「はっ」
「……姉貴、どうするんだ？見たところ激しく戦闘が行われている様子じゃないけど」
「……掌握」
「姉貴、素直にいう事を聞く奴らだと思うか？」
「……やる」

姉貴も、彼らの為人に不安を抱いているみたいだな。
ッたく。白蓮様から全権を与えられた将であることを示す斧鉞を貰っておいて良かったぜ。

「行こうか、姉貴。最終的には斧鉞を持ち出せば良い」
「……うん」

姉貴と共に馬を進める。頼むからいう事を聞いてくれよなぁ。

「なんだと!?退けと言うのか!?」
「……当然」
「当たり前じゃないか、と姉貴は言ってます。戦略上の目的を果たしたにも関わらず、平家に対して兵を差し向けて徒に戦闘を継続するのは良くないことだ、と」
「そんなことが今更出来るはずはないだろう!」
「……遅滞、全滅する」
「此処で決断しなければ、全滅の憂き目にあうことは明白だ、と姉貴は言ってます。損害を被ることを覚悟の上で、撤退するのも勇気を示す道であろう、と」
「しかし!」
「……斧鉞」
「この?艾は畏れ多くも白蓮様から全権を委任された身。その私の言には従って貰わなければ困る。そうでなければ、この斧鉞で首を刈らなければならなくなるのだから、と姉貴は言ってます。斧鉞をその首に受ければその汚名は晴らされることはありません。生きてこそ汚名を雪ぐことが出来るのではありませんか、と」
「……分かりました。焔耶、退きましょう」
「瑛!何を言っているのだ、お前は!」
「戦端を開いた以上、平家は間違いなく私達を追撃し、益州南部を

一気に攻略しようとしてくる可能性が高いでしょう。それを避ける為に、東広漢で備えて居る白蓮様と雛里様に合流するのが良いと思います。悔しいですが、私達の見通しが甘かったのです。こんなはずでは、なかったのですが」

「くぅ……」

「焔耶」

「……分かっている！糞！退けば良いんだろう、退けば！」

「……殿」

「殿は、この？艾と？忠が務めます、と姉貴は言ってます。皆様には先に撤退して頂きたい、と」

「分かった。……済まん、死ぬなよ」

「……無用」

「心配無用だ、と姉貴は言ってます。速く後退なされるが宜しいでしょう、と」

「瑛、全軍に撤退命令を。私達は退くぞ」

「ええ」

「……私は、残ってお二方を補佐致しましょう。この辺りの地理に詳しいですから」

「……王平、また後で。きちんと貴方には謝っておかなければならないから。生きて帰って来なさい」

「……ええ、そう願いたいものです」

俺たちと王平を残して、二人は撤退していく。

それを見た平家の軍がこちらに迫って来ている。

先頭には、『揚羽蝶』の旗が舞っている。

「……平教経」

「あぁ、来たな。姉貴、策は？」

「……三段、交互に退く」

「……了解。全軍三段に構えろ！ぶつかって戦線を押し止めたら一

番前の段は一番後ろへ回れ。そうやって徐々に退いていくぞ！第二陣と第三陣に位置する隊は弓を間断なく射掛けてやれ！そうやって前線を援護するんだ！」

「私の隊で、今山上に落石計を仕掛けようとしています。石を落とせば、時間を稼げるはずです」

「……何処に？」

「桟道が丁度狭まるところです。さほど出血を強いる事は出来ないでしょうが、人が多く入り込めない場所ですから岩を退けるのに多大な時間を消費するはずです」

「……桟道」

「？」

「桟道を破壊するように設置し直せないか、と姉貴は言ってます。その方がより多くの時間を稼ぐことが出来るであろうから、と」

「成る程。では、そのように手配致します。……よくお分かりになられますな？」

「年の功というやつですよ。姉貴とは生まれてこの方ずっと一緒ですから」

「そういうものですかな。……では、一先ず私はこれで」

「ええ。宜しく頼みます」

「はっ」

王平ってのは、非凡ではないが優秀な将校だな。きっと良い軍人になるに違いない。この困難な状況で最善を尽くそうとしている。得がたい人材だろう。

まぁ、そんなことは生き残ってから考えれば良い。今は、生き残ることだ。

～教経　Ｓｉｄｅ～

魏延達と一戦交えようと準備して、さぁこれから、という時に奴らが撤退を始めた。援軍として？艾と？忠が到着したのを先刻確認したばかりだ。力を得て、懲りずに突っかかって来るかと思っていたンだが、どうやらそれ程阿呆ではなかったらしいな。いや、？艾が止めたのかも知れないがね。俺の知る？艾は、彼が生きていた当時で恐らく最高の将だったはずだ。姜維とは違い、国力を換算した上で戦が出来る名将だったはずだからねぇ。撤退するにしては時機を逸しすぎている気がするが、撤退しないことに比べれば遙かにマシだろう。この決断が出来るだけでも、？艾の器量は優れていると見るべきだ。

「教経、どうするの？」

「あぁ？追撃するに決まっているだろうが。策を巡らす時間もなかっただろうし、このまま付いていくさ。奴さん達が東広漢で待っている本隊に合流するのなら、一緒に雪崩れ込んでやる。それでお終いだろうさ」

「……貴方、話し方が少し変わっているわよ？」

「済まんねぇ。戦んなるとどうしても乱暴な口の利き方になっちまってなぁ？」
「はぁ。姉様が貴方に惹かれる理由がよく分かる気がするわ」
「……失礼なことを言いなさんな。俺は戦闘狂じゃないンだからねぇ」
「私は今理由は述べていないわよ？自覚、あるんじゃない？」
「放っておけ。……思春」
「はっ」
「蓮華のこと、言うまでもないと思うが頼んだぜ？大事な大事な人なんだからねぇ」
お客さん的な意味で。
「ちょ、ちょっと」
「御意」
「し、思春！？」
慌ててるな、蓮華？可愛いモンだ。
「教経、策は？」
「車懸かりの陣で征く」
「車懸かり？」
「そうだ。隊を少数に分けて、左から吶喊したら敵を抉って直ぐに右に移動して戻る。それを、多数の隊で順番に次々に行って敵の防御陣を確実に削り取ってやるのさ。この狭い場所で馬でやることは出来ないかも知れないが、徒でもそれは出来るだろう。平家の軍兵の練度、舐めて貰っては困るぜ？」
「ほう。それは中々良い案だな。今、思いついたのか？」
「思いついた、というより、天の世界に昔居た戦馬鹿が考え出した陣だよ」

「面白いものだな。それをこの戦で再現しようというのだな？」
「あぁ。稟、冥琳。兵の指揮は任せる。稟が正軍師、冥琳が副軍師、な」
「「御意」」
「ちょっと教経、貴方先頭に立つつもりなの？」
「当たり前だ。俺の為に死んでいく兵が出るんだからな。俺も等しく危険を共有してやる。戦場においては、俺も皆も変わらない、ただ一匹の戦の鬼なんだからねぇ。他家は知らず、平家においては頭領は常に戦場に立つ。それだけは譲れないんだよ」
「有能な家臣が居るなら任せておけば良いじゃない」
「そうやって主君は貴族化していくのかね？それじゃぁ駄目なんだよ、蓮華。俺の一族は一度そうやって滅亡したンだからねぇ。平家の頭領たる者、それが戦であれ政であれ、常に最前線に立たねばならない。そうでないと、いつか家を滅ぼすことになるンだよ。貴族の称号を得るのは良いが心構えまで貴族になってしまったら駄目だ。貴族ってのは制度化された豚の集合体に過ぎんのだからな」
「大将、準備出来たぜ！」
「よし、ンじゃ征くとするかね。ダンクーガ、気合い入れろ？この戦は先陣を切る俺たち次第でその戦果が大きく変わってくると思え」
「いよっしゃぁ！やぁぁぁぁってやるぜ！」
「……教経様、彼はいつもこんな調子で？」
「……思春、コイツは頭がちょいとアレな感じなんだよ」
「……成る程」
「……テメェら、俺の事をそんな目で見るんじゃねぇ！」

ダンクーガが馬鹿でかい槍を手に、そう抗議の声を上げる。
パピ☆ヨン☆にやられたのが余程に悔しかったらしく、あの馬鹿でかい槍を完全に使いこなせるように鍛錬を続けている。俺が鍛冶屋に頼んで、武藤カズキ状態のダンクーガの為にサンライトハート的なものを作ってやったら喜んでそれを振り回していた。武装練金だ、

と言って渡してやったら頭に？を浮かべていたが。
……アレをいきなりぶん回せるってのは、ちょっとどうかと思う。
俺に付き合っている内に、お前も立派に人外の仲間入りをしてたんだな、ダンクーガ。めちゃ重かったぜ？アレ。

「ダンクーガ。お前さんも鍛錬の成果を見せつけてやれ」
「たりめぇだ！」

相変わらず口の利きか方なっていない奴だな。

「よし、吶喊するかね」
「オラァ！親衛隊！歯ぁ食いしばって大将に付いていくぞコラァ！やぁぁぁってやるぜ！」
「「「

まぁ、いいさ。そんなフラグがあったとしても、へし折ってやるだけだからねぇ。

蝶の如く～１０９～（前書き）

今作者はヘブン状態です。
ティッシュ使いまくってますよ！

……こう書くと、いやらしい感じがするでしょう？
ただの花粉症です、はい。

蝶の如く～１０９～

～？忠　Ｓｉｄｅ～

「ひぃっ！バケモノだ！」
「下がるな！落ち着け！言った通りにすればそう被害は出ないはずだぞ！」
「誰がバケモノだコラァ！」

平家の軍兵が少数だがひとまとまりになって一気に突っ込んできた。先頭には浅葱色にダンダラ模様の羽織を着た男がいる。あれが、平教経だろう。

「ほら、貴様ら。俺の領地にちょっかい掛けに来たんなら当然命掛けてきたんだよなぁ？」
「ちっ、取り囲んで動きを止めろ！」
「ハッ、遅い遅い。お前さん方には力も疾さも練度も足りない！そして何より……危機感が足りない！」

一瞬で周囲にいた兵を切り伏せた。
俺の目がおかしくなったのではなければ、一瞬消えた様に見えたんだが。

「怯むな！ここで一旦敵を抑えなければ全軍崩壊だぞ！」
「オラァ！突き破れ！オレの武装錬金！！」

その平教経の横にいる男。あれも異常だ。
馬鹿でかい槍を振り回して、一薙ぎで三人の命を一度に奪っていく。
付き従って居る兵も皆同じような武器を手にして突っ込んできてい

る。こちらの損害ばかりで、あちらは今の所全く損害を受けていないように見える。

……なんて兵だ。あんな、ちょっとした将が勤まるくらいの武勇を持った奴らが全員兵卒だと？それを率いて乗り込んできたあの五月蠅い男も手強そうだが、平教経はその更に上を行くってのか？

……全く以て冗談じゃない。こんなのを相手にしていたら、姉貴の命を守りきれないぜ？

槍を構え直し、平教経に向かおうとする。

が。

「良し！一旦退くぞ！」

「おうよ！テメェら！退くぞ！」

「「「

～蓮華　Ｓｉｄｅ～

教経の策に従って、車懸かりの陣を布き戦闘を行っている。一番最初に突っ込んだ教経の隊は、軽く負傷したものは居たが重傷者・死者共にいなかった。教経も、ダンダラの羽織を着て不敵に嗤っていた。

「次！翠の隊を前へ！愛紗の隊は後退して休息を！」
「補給部隊、何をやっているか！疾く負傷兵を手当てする為の物資を回せ！」

稟と冥琳は大忙しだ。
基本的に稟が軍に指令を出し、冥琳が補給などその他の面を補うように指示を出している。

翠の隊が敵に突っ込む。それを機に、愛紗の隊が退いていく。次は、私と思春の隊。その後で蒲公英の隊。そしてその後はまた教経の隊。
これを繰り返すことになっている。
一体誰がこんな事を思いつくのか。確かに効果的だろうが、徒でこ

れを行う為にはそれこそ血のにじむような調練を積まなければならないだろう。突っ込む時機、退く時機。それを掴み、その時に機敏に行動出来なければ意味がない。それを顔色一つ変えずに行う平家の軍兵の凄みというものを実感させられている。

「蓮華、顔色が悪いな。緊張しているのか？」
「私は別に緊張などしていない！」
「そう肩に力を入れるなよ、蓮華。怪我するぜ？」

そういって私の方をポンポンと叩く。

「馬鹿にしないで。これでも孫家の女よ？」
「……分かり合う為に、殺し合いましょう？ってか？」
「……前言撤回するわ。私は怖じ気づいたりしないわ」
「ははっ。まぁそう毛嫌いすることもないだろうが。お前さんも後数年すれば、ああなるンだろう？」
「ならないわよ！」
「あははははっ」

全く！

「……何が面白いのよ」
「まぁそう拗ねるなよ、蓮華。……でかい声出したから、肩の力抜けたみたいだな？」

そういえばそのような。

「……教経様、有り難う御座います」
「思春、礼を言われるような事じゃないだろうさ。……蓮華、別に気張る必要はない。お前さんが不足しているところは全部思春が補

ってくれる。丁度俺が不足しているところを、稟と冥琳が補ってくれているようにね。皆で結果を出せばいいのさ。お前さん一人の肩に全てが掛かっている訳じゃ無い。……分かったかね？」

「……ええ。分かったわ。……その、教経。あ、ありがとう」

「……」

「な、なによ」

「……いや、素直になると可愛いモンだと思ってな」

「の、教経！」

「ははは！思春、後は頼むぜ？」

「はっ」

「ちょ、ちょっと思春！」

教経は軽口を叩いて自陣へ帰って行った。

……思春、最近貴女、教経の言うことを優先していないかしら？

「……蓮華様の主君ですので」

見透かしたようなことを言わないで頂戴。

全く。仕方ないんだから。

「思春、そろそろ私達の出番よ？孫家の代表として、恥ずかしい真似は出来ないわ」

「はっ。教経様にも見せつけてやりましょう。孫家の勇猛さを」

「ええ」

「次！蓮華・思春の隊は前へ！翠の隊は後退して下さい！」

「補給部隊は一体何をやっているのだ！この辺りはもう危険がないから前線まで移動してこいと伝令を出せ！何？山上に不穏な動きがあるのならテイ族に協力して貰ってその危険とやらを排除してこい！テイ族には丁重に頼めよ！彼らにはこの戦に積極的に関わらなければならぬ理由はないのだということを努々忘れるな！」

皆、自分の役割を果たすべく懸命に戦っている。
私も皆に恥じることがないような働きをしてみせる。

「行くわよ、思春！孫家の将が劣るものではないという事を皆に見せるのよ！」
「はっ」

思春と共に、戦場を駆けて戦場に向かう。
その私を教経が嗤って見送ってくれている。

「蓮華！しっかり見せつけてやれ！王の器というものをなぁ！」

……王の器。教経は私にそう言った。
それが私にあるのかは分からないけれど、その期待には応えたい。

「見ていなさい、教経」
「その意気です、蓮華様」

横を見ると、思春が微笑んでいる。
……やってみせるわよ、必ずね。
兵と共に、敵陣に吶喊しながらそう思った。

～?忠　Ｓｉｄｅ～

開戦からもう１０回目の突撃を受けている。
率いてくる将率いてくる将全てが優秀だ。遮二無二突っ込んでくる奴から、手堅く攻めてくる奴、意表を突いた攻めをしてくる奴。いろんな人間が居やがる。しかも、それぞれが有能だと来てやがる。こっちも交代しつつ後退しているが、出している被害が尋常じゃない。
途中から溜まらず姉貴も前線に出るようにしたが、それでここまで徹底的にやられるとは思わなかった。俺の見積もりも甘かったって事なんだろう。まさか、こうまで叩かれるとは。

平家ってのは本当に大したもんだ。これを向こうに回して戦うなんて正気の沙汰じゃない。早いとこ桟道まで行って落石計を発動させ、敵を分断してとっとと逃げたいのだが、それを許してくれそうにない。相手は、次の隊が突っ込んできたら退くようにしている。最初に平教経がいきなり退いたのは、俺たちを釣り出す為だったに違いない。

「姉貴、そろそろ拙いぜ」
「……」

姉貴は、悔しそうにしている。姉貴にとっては初めての負け戦にな

る。悔しくて当たり前だろう。

「姉貴。先に行っててくれるか？俺が殿を務める」
「……駄目だ」
「姉貴！誰かが残らなきゃ逃げられないんだよ！」
「……残るなら私」
「……分かったよ姉貴。二人で最後まで踏ん張ろう」
「……うん」

俺の姉貴は生まれついての吃音だった。
そのせいで酷く虐められて、今のように無口になった。その事を知っているのは、この世にもう俺だけだがね。その姉貴に、軍才があることに気が付いたのは近所の餓鬼共を集めて戦の真似事をしていた時だった。どうやっても、誰も姉貴に勝てなかった。決定的になったのは、黄巾の糞共が略奪しに来た時だ。姉貴は義勇兵を率いて黄巾共を片端から撃破していった。お陰でうちの村には黄巾共は来なくなった。
姉貴は、俺の自慢だ。この自慢の姉貴を、死なせる訳には行かない。その時は力尽くでも、姉貴だけ撤退させる。元より、死は覚悟の上だ。

「申し上げます！」
「どうした！？」
「桟道に仕掛けた落石計を平家に見破られ無効化する為に迫られた際、兵が誤って落石計を発動させました！」
「何だと！？」
「……退路なし」

何とか、ならないのか。これじゃ全滅だ。姉貴だけでも逃がそうと思っていたのに。それさえも叶わないのか。

「……姉貴、俺に任せてくれるか？次に平教経が突っ込んでくるはずだ。その時に、奴と話をする」
「……私が話す」
「……分かったよ。なら、この突撃は防ぎきらないとな？」
「……奮闘」
「よしっ！全軍、奮闘せよ！これを最後と思い定めて戦え！」

兵を一つに纏めて敵に叩き付ける。
いきなり圧力が増したことに、どうやら敵は驚いているようだ。ここで、叩けるだけ叩く。俺たちを追い詰めたら、ただでは済まない。そう思わせることが出来れば、何とか姉貴だけでも助けて貰えるかも知れない。有能だと知れば、姉貴だけでも登用したいと思わせることが出来るかも知れない。

頼むぜ、平家の大将。俺の姉貴を殺さないでくれ。俺の生き甲斐なんだから。

～教経　Ｓｉｄｅ～

「大将！敵が大規模な反撃かましてるみたいだ！」
「やるな。相手の動きに慣れたこの時機に兵を纏めて叩き付ける、か。……非凡じゃないかね、この姉弟は」
「感心してる場合か！蒲公英の嬢ちゃんがやられちまうぞ！」
「分かってるさ……征くぞ、ダンクーガ！」
「やぁぁぁぁぁってやるぜ！」
「「「「「「「「「「ＯＫ！忍！」」」」」」」」」」

じりじりと後退を続けていた？艾達がいきなり兵を叩き付けてきたには理由があるだろう。先刻冥琳から落石計を企画していることを聞かされたばかりだ。そしてそれを発動させないように動くということも。……発動してしまったのか？この時機で。それなら、退路が無くなったことになる。必死に抵抗し始めたことも納得が出来る。

このまま続けていれば間違いなく全滅させることが出来るとは思うが、それは余りに惜しいだろう。
たった１０，０００。たったの１０，０００で６０，０００からの兵を相手に此処まで継戦して撤退し続けてきたのだ。俺が戦ってきた限り、奴らの兵の質は高いとは言い難い。その兵を率いて、此処まで粘り強く戦い続けてきたこと自体が驚嘆に値する。流石は？艾という所だろう。

蒲公英の所へ急ぐ。蒲公英の周囲に、敵兵が溢れている。

「ダンクーガ、何人か連れて蒲公英の所へ行け！」
「大将！それじゃ大将が一人になるだろうが！」
「俺の事ぁ良い！護衛が必要に見えるのか！？この俺に！？」
「……チッ。分かったよ大将！」
「俺たちはこのまま敵にぶつかるぞ！」
「はっ」

ダンクーガが蒲公英と合流し、撤退させるまでの時間を稼ぐ必要がある。窮鼠となった相手とまともにぶつかり合った蒲公英の隊は、混乱してしまっていてどうにもならない。奴らを落ち着かせて俺の隊に組み入れ、再編して戦わなければならないだろう。それも、優秀な将を目の前にして、だ。中々に困難なことだが、やるしかない。

「蒲公英の隊の人間を補助して正気に返らせろ！三人一組で戦えば何のことはないことを思い出させてやるンだ！いいな！？」
「「「「「お～！」」」」」

突っ込め。
そう命令しようとしたが、敵兵が一斉に退いた。その中から、女と男が一人ずつ出てきた。あれが、？艾・？忠だろう。……ここしかない、という絶妙なタイミングだった。あそこより早ければ逆撃を喰らっただろうし、あそこより遅ければ、俺が突っ込んでいたはずだ。
……やるじゃないか。

「……話をしようってことかね」
「ど、どうなさいますか？」
「どうするもこうするもない。話したい、というなら話には応じてやるさ。あいつらには俺と話すだけの資格があるンだからねぇ」

「はぁ」
「ま、いいや。お前、ダンクーガ呼んでこい。それから会見だな」
「はっ」

さて、何のお話かね？俺に降る……しかないと思うが。一応用心しておく必要があるだろうな。まぁ、その為のダンクーガだ。

～百合　Ｓｉｄｅ～

平教経と話をすべく兵を一旦退いて敵前に歩み出た私達に対して、平家軍から平教経と護衛らしき男が一人出てきた。

「待たせて悪かったな。俺が平教経だ」
「俺は親衛隊長の「ダンクーガだ」……テメェ！」

「おいダンクーガ、敵さんの前だぜ？」
「……糞！」
「というわけだが、お前さん方は？」

……ちょっと面白かった。

「……？艾、士載」
「私の名前は？艾、字を士載と申します、と姉貴は言ってます。俺は？忠。字はありません」
「へぇ。俺も字はないぜ。ついでに真名もな」

名乗った忠にそう語りかける。
安穏とした話し口だが、全く隙がない。これが、平家の頭領か。

「……兵のい命、とひ、引き替えに」
「兵の命と引き替えに、俺の命を」
「あぁ、端から皆殺しにするつもりなんて無い。ついでに、お前さん方も死ぬ必要はない」

兵の命と引き替えに、私と？忠の命を呉れて遣る。それで、何とか兵達を見逃して貰えないか。そう言うつもりだった。私は、吃音だ。だから上手く伝えられないと思いながらも、きちんと言うつもりだった。忠が勝手に自分だけ死のうとするのは目に見えていた。だから一緒に死ぬつもりだった。それなのに、たったあれだけで分かったのだろうか。

「……アンタ、姉貴の言うことが分かるのか？」
「はぁ？分からんのか？さっき言い間違えていたようだが」
「いや、普通は分からねぇ……ないと思うんですが」
「……無理しなくても構わんぞ？俺は口調なンぞ気にしないからな。

ダンクーガ見てりゃわかるだろう？」
「大将、そりゃどういう意味だ？」
「テメェの口の利き方がなっちゃいないって事さ」
「成る程……って、それじゃ俺が失礼極まりない奴みたいだろうが！」
「誰がどう見てもそう見えるに決まっているだろうが！」
「何だと！」
「やんのかコラァ！」
「やぁぁぁぁってやるぜ！」
「ぷっ」
「あ、姉貴！？」

……久し振りに、笑った気がする。もう何年も笑ったことがなかったのに。

「……失礼したな」
「……面白かった」
「……そいつは重畳だ。で、？艾、？忠。お前さん達の話ってのは、自分たちの命と引き替えに兵を国へ帰してやって欲しい、ということなんだな？」

そう言った平教経に、頷く。

「ふむ……お前さん方、一体何の為に梓潼郡へ攻め入ってきたンだ？」
「……撤退」
「あぁ、訊き方が悪かったな。なンで魏延と馬謖は平家に攻撃を加えたのかね？何か知っていることがあれば、教えてくれないかね？」

それは、私には分からない。が、予測は出来る。

「……勲功、魏延、馬謖、認められる」
「成る程、俺をダシにして『魏文長』『馬幼常』として周囲に認めて貰いたかった、ということかね」
また、頷く。
「……なぁ、大将。どうして？艾が言うことが分かるんだ？」
「はぁ？わかりやすいじゃないか。？艾が吃音だって事は知ってる。事情があってこういう話し方になったんだろうが、要点だけは伝えてきているし後は目とか顔の表情とか、雰囲気で大体のことは分かるだろう」
……私が吃音だって、知っている？どうして知っているのか。もう誰も、それは知らないはずなのに。
「……どうして姉貴が吃音だって知ってるんだ？」
「……俺は天の御使いだ。だから知ってるんだよ。ま、俺自身いつも忘れてるんだけどな。偶に思い出すくらいで」
「忘れてるのかよ！」
「忘れてるな。どうだって良いことだしねぇ。俺は俺さ。？艾が？艾であるのと同じでな。どんな評価を周囲が下そうと、吃音だろうとそんなことは大した問題じゃないだろう。問題になるのは、いつも自分自身の人間性なンだから」
この人は面白い人だ。私が吃音と知っても蔑んだり哀れんだりするような顔を見せない。？士載という人間を、そのままに見てくれている気がする。彼にとっては、吃音だのなんだのということは本当に些末なことなのかも知れない。

「公孫賛やホウ統は、俺と戦うつもりがあるのか？」
「……うん」
「そうか。何の為にだね？」
「……家臣、家族」
「そう思ってるってか」
「……多分」
「馬謖と魏延を斬れ、と言ってやったらどうすると思うか、公孫賛をその目で見たお前さん達の意見を聞かせて欲しいな……？忠はどう思う？」
「……斬ったことにして匿うんじゃないか、と思うけどな俺は」
「？艾は？」
「……死戦」
「死ぬまで戦って守り抜こうとする、と言うのかね？」
「……うん」
「……もし公孫賛がお前さん達の言う通りの人間であったら、お前さん達を解放してやるよ」
「は？」

いつもこういう場で気を張っている忠が間抜けな声を上げた。

「お前さん達は俺が個人的に獲得した捕虜だ、ということにするさ。それなら俺の自由に出来るからな」
「……どういうこと？」
「もし公孫賛がお前さんが言うような人間で詫びを入れてくるなら、俺に付き従うことを明言し盟約する限りにおいて受け入れてやっても良い。お前さんのような人間が付き従って居る以上、俺にその理想を認めさせるだけの力があることは認めてやっても良い。まぁ、もう一度、直接戦って証明して貰うけどな。それで無残に敗れ去るようなら終わりだ。が、生き残るようなら考えても良い」
「……何故？」

「天下は広いんだ。俺一人が全ての土地を直接統治する何ざ面倒臭いことは御免なんだよ。今でさえ忙しくて遊べないのにこれ以上広がった過労死しちまうぜ？だから俺に付き従うと言う人間で有能な奴がいて、一国の主になりたいと言うのなら任せてやっても良いと思ってるンだよ。まぁ、ある程度だけどな。

だがなぁ、何の犠牲も存在しない世界があるだのとただ理想を述べるだけの屑は必要無い。力なき理想は有害だ。人に夢を見せるだけ見せておいて、それを夢見た人間の命を次々に奪っていく。俺は認めない。自分がやっていることの無残さ、むごたらしさを自覚しないままに人を死地に追いやって平然と良かったなんて言っているような奴らを、ね。だから、自分がそうではないということを証明して貰う必要がある。犠牲を払ってでも成し遂げたい夢がある。そういう人間なら受け入れてやっても良い」

「……夢が相容れない？」

「その時は全力で叩き潰すだけだ。が、まぁ家臣を家族だと言い切って死戦するような人間であるならば、そいつが抱く理想ってのは俺の抱く夢と共存可能だろうさ」

「……貴方の夢は」

「俺の夢は、誰もが越えられぬ苦しみのない『平凡な人生』を送ることが出来る世の中を創ることだ。『平凡な人生』を、全ての人間が、ね」

『平凡な人生』。

この言葉に、どれだけの想いが込められているのだろう。

「まぁ兎に角、俺の捕虜になって貰おうか」

「……分かった」

この人はお人好しなのだろう。本来なら、私も忠も殺された当たり前なのだから。

甘い。甘すぎる。
でも、反吐が出るような甘さじゃない。何となく、納得させられる。きっとこの人はこうあるべき人なのだ。それが自然なのだと、自然に納得させられる。

「大将、良いのかよ」
「まぁ、問題無いだろう。有能な人間は手元に置いておくに限るぜ？それが敵なら尚更になぁ。
……さぁ、公孫賛がどういう人間か、しっかり証明して貰いに征こうじゃないか。もし俺と相容れない思想を持っていてそれが反吐が出るようなモノならその場で斬り捨ててやる。『悪・即・斬』の下に、決して飼い慣らせぬ壬生狼の一人としてなぁ？」

そう言って不敵に嗤う。
この狼は、人に優しすぎる癖に戦を嗜む。二面性。普通なら、吐き気がすると思うけど。何処か一本、筋が通っている気がする。それが何なのかは分からないけれど。

「……姉貴、平家の頭領ってのは、変わり者だな」
「……不思議な人」

自分が捕虜になったことも忘れて、ぼんやりとそう答えていた。

蝶の如く～１１０～

～雛里　Ｓｉｄｅ～

独断専行した焔耶と瑛の軍が桟道の出口から出てきている。酷い有様だ。だが、散々に打ち破られた、という感じではない。？艾・？忠の二人が残って殿を務めてくれているのだろう。

……死ななければ良いのだけれど。

白蓮様は、家臣を死なせることを肯んじないだろう。もし、平教経さんとの戦で彼女達が命を落とすようなことがあれば、きっと戦って仇を討ってやろうとするだろう。分限も弁えずに、家臣が死んだ程度で見苦しい。そう言う人も居るだろうが、私は白蓮様はそれで良いのだと思う。白蓮様が今の白蓮様になったのは、あの二人を喪ったからなのだから。もう二度と、喪わない為に。それを強いられる世の中で無くなるように。その為に戦っているのだから。

敗兵を収容し、焔耶と瑛から報告を受ける為に軍議を開いた。

「焔耶、瑛、無事で何よりだ」

「……はっ」

「……申し訳ありません」

「……瑛、何故平家とぶつかったのです。私は、言いましたよね？」

「……返す言葉も御座いません。全ては、私の独断に拠ります。王平は反対しました」

「ワタシにも責があります。瑛だけではなく、このワタシも敵を侮って与しやすいと考えて」

「……白蓮様、この二人を許せば軍紀を正す事が出来ません。処断することをお考え下さい」

これは、誰かが言わなければならないことだ。それなら、私が言うべきだろう。
そう思って処断することを口にした私に、張任さんが話しかけてくる。

「嬢。それはどうかと思うがの。今、この時に処断する必要はあるまい？これから、平家の鬼共が桟道からわらわらと出てくるに違いないのだからのぉ。士気が却って下がるじゃろう。それでは防戦は覚束ぬよ。それに、こ奴らは過ちを犯したが有能じゃ。得難い才を持っておるじゃろう。今回の事、大きな財産となるはずじゃ。喪った兵は多いが、喪って得たものがある。その得たものまで捨て去るような真似をするのは感心できぬ。
若いということは、愚かだということだ。その愚かさを生きていく上で掴んだ何かで研磨することでマシな人間になっていくものだ。人が一人前に使えるようになるまでに２０年は必要だ。それが有能な人間であるならば、より一層の時間が必要になるじゃろうな。死んでいった者達を無駄にせぬ為に、こ奴らを生かして活かす必要がある。儂はそう思うがの」

よく、言ってくれた。
益州閥の長である張任さんがそう言ってくれれば、その他の家臣達は従ってくれるだろう。その辺りも分かった上での発言だろう。私の顔を見て、頷いていたのだから。

「焔耶、瑛。処罰は追って沙汰する。それまでは、今までと変わらぬ形で動いてくれ」
「御意」

これで成長してくれれば良いのだけれど。そうでないと、死んでいった者達は本当に犬死にしたことになるのだから。

「雛里、これからどうなると思う」
「正直に申し上げれば、現状は極めて厳しいと言わざるを得ません。平家の将はこの国で一、二を争うほど充実しています。またその兵の練度は、非常に高いと思われます。軍師として名を連ねている人間も一流です。そして何より、主君である平教経さんの器量の底はまだ知れていません。これを向こうに回して戦う、というのは無謀であるとしか思えません。
しかし、彼らを打ち破るのではなく共存する為に臣従しても構わない、というのであればまだ光明はあると思います。孫策が一戦もせずに平家に臣従した際、彼は理想を掲げるに足る力を有していることを示せば自分に付き従う一国の主として認めてやる、と言ったそうです。勿論、掲げる理想が彼の理想とかけ離れていない物であれば、という前提があると思いますが、白蓮様が抱いている理想は、彼が抱いている理想と相反する物ではないと思います。董卓さんを助けた所を見ても、彼の心根は義や仁といったものに根ざしていると思われますから。
義や仁という思想と矛盾しているようですが、一戦して力を示すことで私達が彼に付き従うに相応しい力量を有している事を示すことが出来れば、誇りを喪うことなく私達の勢力を存続させることが出来ると思います」
「そう上手く行くものかの？」
「上手く行かせるのです。それが最低限、私達に求められることでしょうから」
「やれやれ、戦はどうあっても避けられそうにないの……じゃが相手に不足はない。存分に働いてくれようぞ。過日の借りも返さねばならぬしの」
「では、このままここで陣を布いて平家を待ち受ける。？艾達も運が良ければ合流出来るだろう」
「御意」

次の戦で、私達の命運が決まる。
……絶対に負けられない。死力を尽くすしかないのだ。

～桃香　Ｓｉｄｅ～

朱里ちゃんが徐州へ内政官として赴いた後、郭図さんや審配さんを中心に冀州内で猛威を振るっていた黒山賊を討伐する為に軍旅を催した。朱里ちゃんは、そんな賊など放っておいて曹操さんを討ち滅ぼすべきだ、と言っていた。確かに曹操さんは脅威かも知れないけれど、民を苦しめる黒山賊を討伐するのは決して間違いではないと思う。郭図さん達と朱里ちゃんでは、ただその優先順位が異なるだけだ。

黒山賊と言えば、白蓮ちゃんと戦った際に幽州にもいた。その白蓮ちゃんは遠く益州で勢力を広げているらしい。生きていて、本当に良かった。一時敵対することになってしまったけれど、きっと白蓮ちゃんもいつか分かってくれるだろう。仕方がなかったのだ。最初から従ってくれていれば、あんな事にはならなかったのに。

「麗羽ちゃん、黒山賊討伐、上手く行きそう？」
「上手く行くに決まって居るではありませんか！」
「そっか、そうだよね」
「ええ。当たり前ですわ」

麗羽ちゃんは自信満々でそう言った。
けど、現地に行かなくてもいいのかな？戦争では何が起こるか分からない。此処にこうして居るだけでは、変化する情勢に対応出来なくなるかも知れない。まぁ、全部先生の受け売りなんだけど。

「申し上げます！」
「はいはい、なんですかぁ～？」

申し継ぎの人にのんびりとした口調で答えたのは、七乃さん。姓は張、名を勲。美羽ちゃんの懐刀的な存在だ。美羽ちゃんは、姓は袁、名は術、字を公路。麗羽ちゃんの従妹だ。麗羽ちゃんと美羽ちゃんは本当に仲が良い。いつも一緒に居るし。

「曹操殿が黒山賊討伐中の部隊の後背を襲いました！」
「え？」
「なんですって！？」

曹操さんが、賊徒と結びついている？

……民のことを全く考えていない。賊に苦しめられている民が沢山居るのに。何故、その賊を助けるような事をするのか。

「麗羽ちゃん、曹操さんを討伐しないと。皆が苦しんでいる賊に荷担するような人を、野放しには出来ないよ」

「その通りですわ！顔良さん！田豊さん！今すぐ軍旅を催しなさい！」

「麗羽様、これから更に兵を集めて戦をするなんて危険です」

「何を言っているのですか！こちらには桃香さんも居ますし、美羽さんもいるのですよ？負けるはずがないではありませんか！」

「……一応伺っておきますけど、その理由は？」

「名門袁家の二人と、皇帝の血に連なる桃香さんがいるのですよ！？正しく高貴連合と呼ぶに相応しい、華麗な陣容ではありませんか！これで負けるなどあり得ませんわ！」

「はぁ……」

「な、なんですの？」

斗詩さんがこちらを向いている。

うぅ……何か言ってくれっていうのは分かるんだよ？でもね……

「桃香さん？桃香さんならこの連合の華麗なる勝利、疑う訳は御座いませんわよね？」

……これを諭すのはいくら何でも無理だよ斗詩さん……自分で華麗なるとか言っちゃってるんだし……

「あ～、きっと勝てるんじゃないかな～とは思うけど、条件が一つだけあるの」

「それは何かしら？」

「田豊さんの策を受け入れれば、勝利間違いないと思うの」

「まぁ。田豊さん、本当かしら？」

田豊さんはもの凄く困った顔をしている。

「……田豊さん、なんですのその面白い顔は？」

「はぁ」

「ほら、何とか言ってみなさいな」

「……麗羽様が勝てるよう、微力を尽くします」

「ただ勝つだけでは駄目ですわよ？私は『華麗な勝利』を目指しているのですから」

「あ、あはははは……」

「あ、あはははは……」

「は、は、はははは……」

「お～ほっほっほ。お～ほっほっほ」

「のう、七乃？ひょっとして妾達はとんでもない所へ逃げてきたのではないかの？」

「……美羽様、今頃……？」

兎に角、麗羽ちゃんが方針を決めてしまったのだからそのように動かなければならない。

……朱里ちゃんに、手紙を出しておかなきゃ。状況が大きく動きそうな時は、必ず手紙を下さい。そう言って朱里ちゃんは徐州へ旅立ったのだから。朱里ちゃんの為に、今の私が出来る唯一のことだから。今日のお話の内容を全て書き留めて送ってあげることにした。

これで、朱里ちゃんが何か策を考えてくれたら良いんだけど。

～華琳　Ｓｉｄｅ～

「騎馬隊を。敵の後背を一気に突かせなさい」
「伝令！騎馬隊に敵後背に襲いかかるように伝えろ！」
「はっ」

黒山賊討伐中の袁紹軍を、後背から不意打ちした。
この私を全く警戒していないなんて。巫山戯るのもいい加減にして貰いたいものだわ。まあ、そのお陰でこの初戦の勝利は確約されたような物になったのだけれど。
田豊を麗羽と切り離せなかったのが心残りだけれど、諸葛亮と沮授は幽州に居て身動きが取れない。残っている軍師も、田豊だけを警戒しておけば問題無いことは桂花から聞いた袁家の軍師の情報からして間違いないでしょう。郭図、審配などの軍師では、この私の敵足り得ないのよ。

教経と不可侵の約定を結んだことで、戦線に投入出来る兵の数が飛躍的に増えた。教経も、自由に動かせる兵を得たことで梓潼郡と南郷郡へ援軍を増派した。
……ここからよ。これからが教経との勝負になる。不可侵の約定は、

お互いがお互いの敵に勝つまで。その状況が現出した瞬間に、不可侵の約定は失効する。早めに当面の敵を討ち滅ぼしたら、後背を突くべく準備することも出来る。その可能性は、低いとは思うけれど、ね。

教経と、最後に交わした会話を思い出す。

私は北を。教経は南を。それぞれ平定して、その上で決戦しよう。

そう言った私に、教経は不敵に嗤って了承する旨伝えてきた。

麗羽を打ち倒して、教経と天下を賭けて決戦する。

これ程に愉快なことはない。

「華琳様、敵は急な襲撃に混乱しているようです」

「そう。それじゃ、一気に決めるわ。春蘭、秋蘭」

「「はっ」」

「二人はそれぞれ兵１０，０００を率いて敵を殲滅してきなさい」

「「御意」」

「凪、真桜、沙和」

「「「はっ」」」

「貴女達は兵１５，０００を率いて各隊の連動が上手く行くように動いて頂戴」

「「「御意」」」

これで、初戦は勝てるでしょう。

問題はこの後ね。麗羽は、全軍を以て私を討とうとするかも知れない。普通の神経をしていれば、至る所から兵を引き抜いて再編したりはしないと思うけれど、麗羽は普通ではない。それだけに、常軌を逸したことをやらかすことがある。それが麗羽にとって破滅への道を約束してくれるような選択であれば良いけれど、あれで居て麗羽は今までその手の選択が悪い面に出たことがない。

「桂花、この後はどうしようかしら」
「……袁紹軍を引き付けつつ、防衛陣地が構築してある官渡でこれを迎え撃ちます」
「そうね。それがいいでしょうね」

官渡。周辺を河に囲まれたこの地に防衛拠点を構築してある。城周辺はただの平地だけれど、そこ以外は沼地の様になっていて足場が非常に悪い。もし官渡を囲むなら、麗羽達は孫子の兵法で戒められている沼地へ陣を構築することになるでしょう。そうなれば、私の勝機が更に高まるというものだわ。

戦場を見れば、既に敵は敗走に移っている。
脆いわね。このまま逃がしてあげても良いのだけれど、どうせ国元に帰った後官渡に攻め寄せてくるのでしょう？それであれば、ここで叩けるだけ叩いておいた方が得策ね。

「桂花、春蘭と秋蘭に伝令を」
「はっ」
「5里、思うがままに追撃しなさい、と。そう伝えなさい。それが終わったら、戻ってくること。暫くこの辺りに留まって黒山賊達の兵を吸収した後、官渡へ移動するわ」
「御意」

……教経。私の方は順調よ？貴方はどうかしら。まぁ、負けるなんて思えないけれど、ね。
麗羽を下したらその所領を掌中に収めて……それから教経と決戦して教経を屈服させる。

『俺がお前さんの初めての男になってやるよ。愉しみに待っているんだな、華琳』

そう言った後何か言っていたようだけれど、そんなことはどうでも良い。教経、待っていなさい。私が屈服させてあげる。その上でなら、考えてあげても良いわよ？それ程までに私に恋い焦がれているのなら、ね。

蝶の如く～１１１～

～朱里　Ｓｉｄｅ～

徐州で来たるべき曹操との戦いに向けて準備を行っている。
周到な準備を行う為に、私と沮授さんの行方を意図的に眩ませた。
情報を漏らさぬようにするのではなく、情報を過度に与えることによって。幽州、青州、徐州。この三州の何れかに私と沮授さんがいる事になっている。噂に曰く、『諸葛亮は軟禁されているらしい』。
これを、三州でまことしやかに噂させている。但し、噂をする人間の数と範囲をそれぞれの州で異なる様にして。

幽州では、易京にいる官吏の間でのみ密やかに噂させている。
青州では、郷里の長たちを含む、州の実力者の間でのみ噂させている。
徐州では、町を歩いているのを見たという噂が立っている。

……これらの噂の内、どれがより真実に近いと思うか。
幽州での噂は、信憑性が高いと感じるだろう。秘密というものは知るものを限定しておかなければならない。知るものが増えれば増えるほど、それが漏れる可能性が高くなる。その意味で、噂をしている人間が非常に限られている幽州での噂の信憑性は極めて高い。
青州での噂も、それなりに信憑性がある。軟禁されているとしても、州の実力者と会って動向を把握しておく必要があるからだ。何故なら、名目上は内政官として派遣されていることになっているのだから。臨シを訪れたことのある者だけが噂している点で、信憑性を持っていると言える。
徐州の噂については、私が実際に町を歩いて立てさせた。だが、これについては論外だろう。軟禁されている人間が町を自由に歩き回

れるはずはない。通常、監視者がそれを許すはずがない。それでは軟禁していることにはならない。

こうしておけば、例え幽州や青州にいないことを掴んだとしても、徐州にいる、という真相にたどり着くまでに多大な時間を費やさせることが出来る。そして恐らく、曹操にはその真相にたどり着くまでの時間的猶予はないはずだ。国内に黒山賊という反袁家の勢力が存在すればこそ、対峙する兵数を限定することが出来る。もし袁家が黒山賊を討伐するようなことがあれば、袁家の兵を集中して叩き付けられることは目に見えている。だから黒山賊討伐が完了する前に、袁家と事を構える必要がある。

「孔明殿、宜しいでしょうか」
「なんでしょうか」
「仰せつかっていた物資と兵を揃えました。それと、兵を率いる将として幽州から麹義殿に来て頂いております。これで孔明殿の企謀を為す為の最低限の準備は整った、と思います」
「そうですか。御苦労様でした。兵は言いつけ通りにしてくれましたか？」
「はっ。仰せつかった通り、農民の態をさせて国境付近の農村に散らばらせて農耕をさせております」
「……麹義さんは何をしていますか？」
「……共に田畑を耕して苦労を共にしてやるのが将たる者の勤めであろう、と申して共に農民に扮して農耕をしているようです」
「軍令を無視することが多い人ですが……麹義さんを選んで正解だったようですね」
「……はっ」
「曹操の兵力は今どの程度ですか？」
「６０，０００程度でしょう。司隷州と并州を確保するなら、戦闘に投入できる兵は３０，０００程度でしょう。司隷州だけ確保出来

ればよい、と考えるならば、５０，０００は投入出来るかと」
「何故６０，０００の内から５０，０００も投入出来ると思うのです？背後には平教経がいますが」
「……その平教経は、漢中を侵した公孫賛軍と対峙する為に長安を出立した模様です。曹操に対する備えとして、長安に董卓軍と武将の張遼を残していったようですが、念の為、という程度のものであって函谷関に篭もって守ることは出来ても打って出ることはないと思います。それを考えれば、曹操が思い切って５０，０００の兵を投入してきても不思議では無かろうかと」
「成る程……きっとそうなるでしょう」
「はい」
「対して集めた兵数は？」
「……２０，０００。これ以上は各郡から守備兵を抜いたことが明らかになってしまうと思いましたので、これだけ集めるに止めました」
「良くやってくれました。沮授さんの言う通りでしょう。それ以上は事が露見する恐れがありますから」

私の策の準備は整った。後は獲物が罠に掛かってくれるのを待つだけだ。さぞや美味しそうな餌がぶら下がっているように見えているに違いない。袁紹さんも桃香様も、曹操さんについて楽観しすぎているきらいがある。その配下で軍師を担おうと狙っている人達も、そう大した知恵を持っている人間は居ない。強いて言えば田豊さんがいるが、彼には既に私の企謀は明かしてある。より曹操を油断せしめるように、桃香様達を誘導してくれるはずだ。
……君主を餌として、害を取り除くのだ。人は私のことを悪し様に罵るだろうが、そんなことは痛痒にも感じない。必要なのは結果であってそれを導き出す過程など顧みる必要もないのだから。

「申し上げます！」

「何だ！」
「曹操軍が黒山賊討伐中の我が軍を襲撃した模様です！抗戦したようですが何しろ突然の事でありましたので奮戦虚しくお味方は後退した模様です！」
「……孔明殿」
「わかっています。伝令、御苦労様でした」
「はっ」

とうとう始まった。が、まだ私が出張るには早いだろう。

……袁家を滅亡させるべくその背中を見せた、その時。
全てを賭けて勝負を挑む。全ては、抱いた夢の為に。

～教経　Ｓｉｄｅ～

落石計により桟道を破壊された為、桟道の修復作業を行っている。
訊けば、？艾がこれを考えたのだそうだ。当初は桟道に落とすのではなく地面に落とす事を考えていたそうだが、桟道に落とした方が

時間が稼げるということで変更させたらしい。ッたく。面倒くさい事をしてくれたモンだ。

そう思って横に立っている？艾を見る。

「……？」

「何でも無い。気にしなくていいさ」

「……変」

「いや、俺は別に変じゃないだろうが」

「……変」

「……どこが変なんだね？」

「……処罰ない」

？艾と？忠を捕虜とした時、稟も冥琳も斬刑に処すべきだ、と言って聞かなかった。これ程有能な人間が再度敵対する可能性が有る状況で生かしておくなどあり得ない、と。それを聞いた？忠がなりふり構わず助命を行った事と、俺の個人的な捕虜なんだから俺の好きにさせてくれ、と俺が希望した事で一先ず保留ということに落ち着かせることが出来た。

「処罰して欲しかったのか？」

そう訊くと、顔を横に振る。

「俺たちを殺さない理由ってのは何です？その辺りが姉貴も理解出来ないんだと思いますが」

「……うん」

「理由ねぇ……お前さん達を殺すより、生かしておいた方がこの国の為になるだろうと思ったから、かねぇ。天で伝えられている？艾ってのは、軍事にも優れているが何よりも先ず民政の手腕に長けて

いた人だ。民の為になる政を行える。その一点だけでもお前さん達の命を救う価値があると思うがね」
「確かに姉貴は政にも非凡なものを見せると思うけど」
「……敵？」
「そりゃ敵だが、俺がいつまでも生きている訳も無し、天下統一の事業の中でいつ命を落としてもおかしくはないだろう。俺達が戦に負けて皆死んじまった時に、後に残されているのが民のことを考えることも出来ない屑ばかりでは困るンだよ。お前さん達みたいなのが残っていれば、死んだ時に心残りはあるだろうがそれから先の世の中を悲観して死ぬことだけはないだろうよ」
「……やっぱり変」
？艾はそう言って笑っている。
「そんなに変わっているかねぇ」
「変わっていると思いますよ。大体、俺たちの武器を取り上げていないし、その俺たちを伴って工事の進捗を見に来るなんてのは不用心に過ぎると思うんですがね」
「……うん」
「ハッ。こちとら個人の武勇じゃ負けるとは思ってないンだよ。更々なぁ」
瞬動を行って、？艾の後ろに回って首筋に清麿を宛がう。
「……疾い」
「……それ、最初に突撃してきた時にもしてましたがね。失礼ながら人間ですか？」
「残念ながら人間だよ。刺されれば死ぬし、病に罹っても死ぬただの人間だ」
「そうは思えないから聞いてみたんですが」

「自分で目にした事実を否定するなんてのは阿呆のすることだぜ？？忠」
「……恥ずかしい」
む。後から密着している態勢だったからな。
少し配慮が足りなかった、な。

「済まんな、？艾。俺の配慮が足りなかったようだ。お前さんは女の子だもんなぁ」
「……うん」
「大将、気をつけて下さいよ？姉貴はそういうのに慣れてないんだから」
「だから、悪かったよ。もう二度とせんさ」
「……なら良いんですがね」
慣れてない、ねぇ。こんなに可愛いのに。勿体ないモンだ。

「……何？」
「可愛いのに勿体ないモンだ、と思ってな」
「～～～～」
そう言うと、？艾は頬を赤く染めて俯いた。
……萌えるねぇ。

「……まあ、程々にお願いしますよ」
「程々なら良いのかよ」
「良しとしますよ」
「はぁ。まぁ、これで免疫付くならってことか」
「そういうことです。こんな姉貴を見るのは初めてでしてね。こっちも結構楽しめてるんですよ」

そう言って？忠はニヤニヤ笑いやがった。
良い性格してるぜ、お前さんは。

「それにしても、問題無いんですか？」
「何が？」
「俺たちとこうやって愉しげに話をしていて問題ないのかってことです」

はぁ？

「何処に問題が在るんだね？」
「いや、普通敵とこうやって愉しげに話すなんてしないと思うんですが」
「……うん」

お、？艾が復活した。
？忠のケツを抓ってるみたいだ。？忠の顔が歪んでいる。
……自業自得だな、？忠。

「それとこれとは話が別だろうねぇ。敵でも好きな奴ぁ好きでいいンだよ。敵だから憎まなければならないなんて訳はないンだから。尊敬出来る、好敵手みたいな奴だって居るだろうが。それとは逆に、味方でも憎らしくて堪らないって奴もいるだろう。人に拠るのさ。そんなことをいちいち気に掛けるほど暇じゃないんだよ、俺ぁな」
「……変わってる」
「……変わってると思いますよ、大将」

失礼な姉弟だな。

「ま、もうちょっとで桟道の修復作業は終わる。そうしたらお前さん達が戴いた公孫賛がどんな人間であるかを確かめさせて貰うとするさ」

「……戦う？」

「あぁ。どうしても必要なことだ。前に言った通り、己の主張を認めて貰いたいなら先ずその力を示せ。話を聞いてやっても良いと思わせることすら出来ない奴に用はない。俺がお前さん達を捕虜にして殺させなかったのだって、それが一番の理由なンだからねぇ。お前さん達は力があることを示して見せた。それと同じだ。君主だろうと武将だろうと、俺が望むことはただ一つ。『理想を追うに相応しい力量を示せ』。ただそれだけだ」

「……うん」

「ご納得頂けた様で何よりだ」

しっかり語り合おうじゃないかね？

……戦という、最も凄惨な手段によって、ね。

蝶の如く～１１２～（前書き）

思ったより話が進まない……
そして忙しくて更新出来ない……

のりたま、もげちまえ

蝶の如く～１１２～

～瑛　Ｓｉｄｅ～

一先ず処罰が先延ばしになった私達は、東広漢側の桟道出口に布陣している。？艾も？忠も王平も、誰一人帰って来ていない。

……私が、独断専行なんてしなければ。

こうなって初めて、雛里様が何を思い描いていたのか、その全貌に思いを致すことが出来るようになった。東広漢を攻略したら、今と同じように桟道出口にいつでも軍勢を展開出来るように細作を密に放って平家の侵攻に備える。それと同時に、会談を申し込んで時間を稼ぎ、国内を掌握する。その後は白蓮様次第だが、戦になったとしても今のように後一戦で滅亡、という所までいきなり追い詰められることはなかったはずだ。ある程度力を蓄えた状態で平家と戦い、地の利を活かして抗戦することで戦線を膠着させ、和睦を行う事だって出来たはずだ。

それを、私がフイにしてしまったのだ。全ての企謀を。幾通りもあったはずの未来図を。

それだけではなく、？艾達を失うことになってしまった。これだけ待っても桟道から逃げ出してこないということは、要するにそういうことだろう。この戦の原因を作った私が生き残って、それに巻き込まれた人間が死んだ。しかも、私が生きているのは彼らに逃がして貰ったからなのだ。厚顔無恥も此処まで来れば立派な物だろう。特に王平は、私を何度も止めた。それを悉く無視した私を逃がす為に殿を買って出た？姉弟の案内役として残って共に戦う、と言って残ったのだ。

本当に、申し訳のしようもない。

「瑛！栈道内から兵が出てきたぞ！」

焔耶に言われて見てみれば、戦塵に汚れた鎧を纏った一団がこちらに向かって駆けている。旗印は、『王』。……王平だ。

「焔耶、敵が追尾して来ている可能性が有ります。軍を展開し、中央部を開けて王平達を通過させた後暫く此処に留まって様子を見ましょう。追尾して来ているならこれを迎え撃ちつつゆっくりと後退し、張任様が率いる左翼と挟み込めるように動いて敵の警戒心を喚起してその攻勢を弱めます」

「分かった。此処まで生きて逃げてきた王平達を死なせる訳には行かない。……例え、ワタシ達が死ぬことになろうとも、だ」

「ええ」

「魏延隊、前に出るぞ！王平達を援護する！」

「馬謖隊も前に出ます。魏延隊と連動していつでも戦闘行動に移れるように用意を」

隊を前に進める。

王平隊の後には敵兵はまだ見えないが油断は出来ない。道を通ってこちらに来るとは限らない。林間を縫って襲いかかってくることも視野に入れた布陣をしておく必要がある。

「中央部を開けろ！王平達をそのまま通過させるんだ！前方の警戒を緩めるな！」

「同じく中央部を開けておいて下さい。私達は左右の林に対して警戒を」

開かれた中央部を王平隊の兵が駆けていく。その中には、王平の姿もあった。

……良かった。これで王平を死なせたのでは、申し訳なくて生きていることなど出来そうになかったから。

「全軍此処で待機しておけ！王平達が本陣に駆け込むまではこのまま此処で警戒を続けるぞ！」

王平達が通過した中央部をすぐさま埋めて兵を再編する。ぴったり追尾して来ている兵は居なかったが、今この時機に攻め掛かられたら戦線維持が出来ないだろう。兎に角、早く兵を再編して布陣することだ。

「方円陣を！何処から攻め掛かられても対応出来るようにしておくのです！」

兵も機敏に行動している。皆、共に梓潼から逃げてきた。王平達のお陰で死なずに済んだのだ。ここで怖じ気づいて碌に行動出来ないような情けない真似を晒す訳にはいかないのだ。命を捨てて助けた甲斐があった。そう思って貰える人間であらなければならない。実際は違っていようとも、せめて彼らの前でだけでは。

そのままの陣形で様子を見る。
桟道から敵兵が出てくる気配はないようだ。

「……瑛、どう思う」
「……油断は禁物、でしょう。特に、それで失敗している私達は」
「そうだな。……このまま此処で待機して平家の兵が来るのを待ち受けてこれを叩き、しかる後に後退する、というのはどうだろうか。油断無く備えておけばあれ程無様に負けるようなことはないと思うのだが」

私達は桟道入り口前に突出している形となっている。焔耶の案も普通であれば妥当だと思うが今は普通の状態ではない。あちらの兵が多く、こちらが少ない。その上私達の兵は一度平家に打ち破られている為士気も奮わない。万が一私達が打ち破られて混乱した兵達が本陣に雪崩れ込むようなことがあれば、そのまま全軍崩壊に繋がりかねない。

……王平達の後退を支援する、という当初の目的は達成したのだ。目的を達した以上、後退すべきだろう。蛇足を描くような真似は二度としてはならないのだから。

「……左翼の張任様がやや前に出てきていらっしゃる様です。恐らく、私達が後退する際にその後背に平家の兵が到着した場合のことを考えて、それに対応出来るようにする為だと思います。

焔耶、私は張任様が備えてくれているこの機会に後退するのが良いと思います。徐々に後退することを考えないでもありませんが、時間が過ぎれば過ぎるほど平家の兵が桟道から飛び出してくる可能性が高まるのです。王平の後退を支援するという目的を達した今、一端後退した方が良いでしょう。もし後を取られるようなことがあっても、張任様が備えてくれているのですから心配は要りません」

「……」

「焔耶」

「……よし、分かった。瑛が正しいと思う。魏延隊、後退せよ！」

「馬謖隊も同時に後退します！」

後退を始めた私達を援護するように、張任様が指揮する左翼が歩を進める。いつでも反転出来るように後方に注意を払っているが、平家の兵は見えない。

……そのまま、自陣へ帰還出来た。終わってみると独り相撲を取ったような形になったが、これはこれで良い。最悪の事態を想定して軍を動かすべきなのだ。学んだことは二度と忘れてはならない。

「瑛、白蓮様が王平を引見するだろう。私達も行こう」
「ええ。兵に指示を与えたら私も直ぐに行きます」

栈道内に斥候を放っておくべきだろう。敵を発見したら早く戻ってくることが出来るように、開けた場所まで馬で行かせた方が良いだろう。そうするように指示を出して斥候を複数放ち、本陣へ向かった。
?艾達はどうしたのだろうか。

本陣に行くと雛里様と焔耶が白蓮様の脇に立ち、王平を迎えていた。丁度白蓮様が質問をするところだったようだ。場を乱さぬように注意しながら、焔耶の横に立った。
……王平はやつれて見える。肉体的にも精神的にも疲れ果てているように見受けられた。

「王平、良く無事に戻ってきてくれた」
「……はっ」
「それで、百合達は今どうしている?」
「……申し訳ありません。私の策が破れた事で?艾様達を死地へ追いやってしまいました。それだけでなく多くの兵も喪ってしまいました」

どういう事か、と訊くと王平が用意していた落石計を平家に見破られ、罠を無力化しようと迫ってきた平家軍に動転した兵が落石計を発動し、桟道を破壊してしまったという。

「……王平、？艾達は……死んだのか……？」

「……桟道を破壊してしまった後山上に暫く踏み止まって様子を窺っておりましたが、？艾様達は兵を纏めて平家軍に向かって逆撃を掛けられました。退路が無い以上、残されていた選択肢は二つしかありませんでした」

「『降伏か死か』、か」

「……はっ。？艾様達は強かに平家軍を叩かれた後兵を収めて降伏されたようです」

「生きているのだな？」

「……おそらくは。見せしめとして殺したのなら、それを喧伝してみせるでありましょう。その報せが届いていない以上、生きておられるのではないかと思います」

「……そうか。生きているのであれば良い。お前も良く生きて戻ってくれた」

「……有り難いお言葉ながら、？艾様達が敵に囚われる契機を作ったのは私です。私には労いの言葉ではなく罰をお与えになるべきです」

「ちょっと待った！白蓮様、王平が罰を受けるなら先ずワタシが先に受けるべきでしょう！」

「それを言うなら私もです。白蓮様、そもそもこの事態を招いたのは私達二人が独断専行したことに因ります。王平はそれを諫める側であり続け、主将の権限によってその口を封じられるまで事ある毎に追撃を中止して帰還するように言っていた者です。謂わば彼は私達に巻き込まれた被害者の一人に過ぎず、彼に非はありません。彼は自分が置かれた立場と状況で常に最善を尽くしたのです。その努

力が実らなかったのは偏にその献言に耳を傾けなかった主将たる私達にあります。彼の献言に従っていれば、？艾達を失うような事態にはならなかったのです。

彼が賞せられるべき人間で、私達が罰せられるべき人間であることは明白です。彼の様な人間を罰することは白蓮様にとって無益であるばかりか有害であるとさえ言えます。彼を罰せぬよう、お願い致します」

「瑛の言う通りです。ワタシ達こそが罰せられるべきなのです」

そういった私達に、白蓮様は一つ頷いて雛里様に声を掛けた。

「雛里。王平は罰せず賞することにしようと思う」

「それが宜しいでしょう。彼のような人間は得がたいものです。きっと社稷を支える臣となってくれるでしょう」

「ああ、私もそう思う。焔耶と瑛も、そうなるだけの器があると信じて居る。二人が犯した過ちは取り戻すことは出来ない。だが、過ちを犯さぬ人など居ない。大切なのは二度と同じ過ちを犯さぬ事だ。焔耶、瑛、努めよ。いや、私と共に努めよう。己の才や器量といった物に満足して歩みを止め、驕ることがないように。謙虚に歩み続ければ愚かな私達でもきっといつか蒙を啓く時が来るに違いないのだから」

その言葉に、焔耶も私も王平も平伏した。

白蓮様が愚かなはずもない。この方は、蒙を啓けばこそ再びこの戦乱の世に起ったのだ。それを私達と共に努めると仰るのだ。まだ、不足だと。愚かだと。そう仰るのだ。

もし次の戦を生き長らえてその機会を得られたならば、きっと努めてみせる。いつか、この方のような考え方が出来る人間になってみせる。

「……焔耶、瑛。貴女達への罰は白蓮様と共に在り続け、歩み続けることとします。いついかなる時も白蓮様に背くことは許しません。勝手に死ぬことすら、許しません。それを罰とするのだ、と白蓮様から言われていますから。

こう言うと簡単なことだと思うかも知れませんが、白蓮様と共に歩み、勝手に死ぬことも許されないということは決して簡単なことではありません。どのような状況であっても、死なずに白蓮様の下へ戻ってこなければなりません。どのような困難を目の前にしても、心折られることなくその困難に向かって行かなければなりません。もしそれを貴女達が忘れるようなら、こういう言い方はしたくありませんが、私が貴女達を『処分』します。それを肝に銘じておいて下さい。白蓮様の為にならないと判断したら、私が必ず貴女達を除きます。

……本当は厳罰を与えるつもりでしたが、白蓮様たっての願いです。白蓮様を主に戴く果報に感謝することです」

その言葉を聞きながら決意する。

焔耶を見る。焔耶も私を見ている。どちらからとも無く頷きあう。

私達は、必ず報いてみせる。必ず応えてみせる。

この主の恩に。この主の期待に。

……そして、必ず守ってみせる。

この素晴らしい主の命とその理想を。

～翠　Ｓｉｄｅ～

桟道の修復を終え、東広漢へ到着したところで眼前に軍が展開していた。その数は２５，０００程度。対する私達が率いる兵は５０，０００。２倍の兵数を有している。それを率いているのがご主人様である以上、あたし達に負けはないだろう。恐らく、開戦は明日になる。こちらもあちらも様子を見ているようだから。

ご主人様とあたしの陣屋で一緒に居る。今日は、あたしの番だった。……戦にならなくて良かった。

事が終わった後、寝台でご主人様と横になっている。ご主人様の腕を枕に、向かい合って裸で抱きついている。ご主人様はそんなあたしの髪を撫でながら、優しく包み込んでくれている。あたしは、この時間が一番好きだ。そのままご主人様と話をしている。

「ご主人様、一気に片を付けるのか？」

そう訊いたあたしに、ご主人様は笑って答える。

「一気に片が付くほど楽な相手じゃないだろうよ」

「そうかな？梓潼じゃ話にならなかったけど。稟も『高が知れてい

る』って言ってたんだぞ、ご主人様」
「『高が知れている』のは魏延と馬謖だろうに。ホウ統と張任が居る。公孫賛だって無能じゃない。それにな、翠。朔は高が知れていたはずなんだがねぇ」

あ～、そういうことか。
先の失敗をきちんと反省出来ていたら、どう変わっているか分かったもんじゃない。しかもこの場合は良い方向への変化しかあり得ないだろうし。油断して居れば足下を掬われてしまうかも知れないんだ。

「気をつけるよ、ご主人様」
「そうしてくれ。それで怪我したり死んだりしたら嫌だ」
「嫌だって……子供じゃあるまいし」
「嫌なモンは嫌なンだよ。翠、お前さんが居なくなるなんてのは御免だ。理屈じゃないんだよ」

そう言ってあたしを抱き寄せる。
他に沢山可愛い娘がいるけど、ご主人様はあたしのことを大切に思ってくれている。それを実感出来る。愛おしくなって、胸板に口を付ける。

「……翠？」

そのまま、強く吸う。
……以前、首筋が紅くなっていたことがあった。ご主人様に訊くと、お母様に付けられた、と言っていた。強く吸われて跡が付いたのだ、と。後日お母様に訊いたら、これは私のものだって証を残してやったのさ、と軽く笑いながら言われた。
吸うのを止めて口を離す。見れば、あの時と同じように紅くなって

いた。

「……俺はお前さんの物だ、ってか？」

ご主人様は苦笑している。

「その、駄目だった？」

「んな顔されて駄目だったなんて言える訳無いだろうが。……俺に執着してくれるのは嬉しく感じてるよ、翠」

「……そっか」

腕に力を込めて抱きつくと、ご主人様も抱き返してくれた。

「なあ、ご主人様」

「ん？」

「公孫賛、どうするつもりなんだ？」

「さて、な。奴さん達次第だろう。何を思って再び戦いに身を投じようとしているのか。先ずはそれを確認することだな。その後力を示して貰う。俺に勝てば良し、勝てなくとも力があるなら認めても良い。俺と異なる理想を抱いてこの世に存在する事をね。但し、その理想が俺の価値観を通してみた時に廃滅させるべきモノだと思わない限りにおいて、だがね」

ご主人様は誇り高い人間が好きだ。自分がそういう人間であるからだろうけど、何か譲れない想いのような物を抱いている人間を好む。？姉弟を助けてやったのだって、姉は兎も角弟の姉に対する愛情を見ての事に違いないんだ。

そのご主人様を納得させるだけの人間であるかどうか。それは分からない。

「まぁ何にせよ、明日から戦だ。頼りにしてるよ、翠」
「分かってるよご主人様。ただ……」
「……んっ……もう一度、か？」
「……うん」
「……おいで、翠」

明日から、頑張ろう。あたしのご主人様の為に。
ご主人様に抱かれながら、そう思った。

蝶の如く～113～（前書き）

今週も来週も週末に予定がある為いつも通りの連続投稿が出来そうにありません。

蝶の如く～１１３～

～思春　Ｓｉｄｅ～

５０，０００の兵を率いて蜀の桟道を抜け東広漢へ至った私達の目の前に公孫賛軍が布陣している。斥候の報告に拠れば、その兵数は２５，０００。益州北部攻略戦で敗れた張任が左翼、先の梓潼側で行われた戦闘に敗れた魏延と馬謖が右翼を纏め、本陣を公孫賛自身が率いている。

夜が明ける前、教経様から翠と蒲公英以外の将全員に対して本陣に集うように命令があった。恐らく、最終確認の意味で軍議を開き、その意図するところを共有しようというのだろう。翠は公孫賛軍に対する保険として前線で警戒の任に就いている。

「夜も明けぬ内から済まんな」
「それは構わん。策を披露しようと言うのだろう？教経」
「そうだ。方針を共有して一貫した行動が出来るようにしておくべきだろうからねぇ」
「教経殿、宜しいでしょうか」
「あぁ」
「では、軍議を始めたいと思います」

稟が宣言する。

「先ず敵の布陣について、思春の調べた内容を報告して下さい」
「……はっ。現状私達は桟道の入り口に布陣しており、その先の開けた平地に公孫賛軍が布陣しております。その数は２５，０００。左翼に張任、右翼に魏延、馬謖。本陣に公孫賛という布陣となって

おります。兵数は左翼・右翼共に8，０００、本陣に9，０００。その兵の構成ですが、騎馬が全軍併せて8，０００存在しているようです。本陣に4，０００、左翼に2，０００、右翼に2，０００配置されております。掴めた敵情は以上です」

「この情報を元に、どう戦術を構築するかについて話をしたいと思います。教経殿から話をして頂き、それについて各々が意見を述べる形で進めたいと思います」

その稟の言葉を受けて、教経様が話し始めた。

「……軍を進めるに当たって、暫くは馬鹿正直に右翼、左翼、本陣の三方へ広がるように進んで行くことにしようと思っている。同時に戦線に投入できる兵は少ないがその分こちらの陣には厚みを持たせることが出来る。その圧力を受けて崩れてくれればそれで良し。崩れないなら崩れないで構わない。先ずは、小手調べだ」

「小手調べ、ですか？教経様」

「あぁ。兵力差を考えれば奇を衒う必要はない。一人一殺してもまだ２５，０００の兵が居ることになる。ただ前進して攻撃を加える、というのは何の工夫もないが一番やられると嫌なやり方だろうよ。真正面から愚直にぶつかってくる相手に奇策は通用しないだろうからねぇ」

「そう言い切れる物かしら……冥琳、貴女はどう思う？」

「ふむ……何らかの策を以て数的優位に対抗する必要がありますが、倍する敵を殲滅するだけの策を考えつき、かつ相手がその策に踊ってくれなければ数で押し切られてしまうでしょう。近い内に援軍が見込めない現状で彼女らが考案する策の方向性としては、二通り考えられます。

一つは、我らを死地へ誘い込んでこれを殲滅する策。周囲を山に囲まれた窪地や足場の悪い沼地などに我らを引き摺り込んで機動力を奪い、四方八方から攻勢を仕掛けることでこれを殲滅することを目

的とします。私であれば山に引き込んでこれを包囲し、火計を以て数的優位を失わせしめるか小さくした上で決戦します。
もう一つは、敵将、この場合教経になりますが、敵将をその率いる兵から引き離してこれを討ち取る策。どうやって教経を兵から引き離すかが問題になりますが、教経は基本的に前線に立つ訳ですから引き離すことは容易であると思うでしょう。佯敗して誘い込み、精兵を以て後続の兵との間に打ち込む楔とし、孤立させて一気に討ち取る。この程度の事は考えていることでしょう」
「公孫賛軍がもしそうしたとして、教経はどうするつもり？」
「桟道出口で抑えている現状では冥琳があげた二つの方策のいずれも実行することは難しいだろう。此処は道であるから多くの人間が踏み固めてきた土地であり、足場が悪い場所ではない。何より山に誘い込んで火計を行うつもりであれば最初から山上に陣を取るだろう。まぁ、もしそうしていたら３０，０００の兵で取り囲んで置いてこれを無力化し、その間に蜀の地を征服してやっただろうがね。今から山へ退いたとしても、火計の可能性が有ることが分かった現時点で山に退いた敵を追撃することはあり得ない。やはり同じように兵で囲んで無力化し、蜀攻略を進めることになる。ホウ統ならそれくらいの事は分かって居るだろう。
俺が逆の立場なら、佯敗して誘い込む策を採用するだろう」
既に想定済みであった、ということか。
では、その場合どうするのか。それに興味を惹かれ、訊ねる。
「……敵が佯敗した場合教経様はどう為されるおつもりでしょうか？」
「全軍崩壊の契機としてやるべく攻勢を掛ける。こちらにも少ないながらに騎馬を用意してある。たったの４，０００だがこの４，０００は蜀の桟道を通過してきた、恐れを知らぬ馬だ。これに俺の近衛を乗せる。佯敗した時機でこれを率いて突出し、後続と切り離す

為に兵を俺の隊の後ろに回した時点で手薄となった敵本陣を打ち破る。俺が討ち取られるのが早いかそれとも公孫賛を討ち取るのが早いかの競争だねぇ」

そう言って嗤う。恐れを知らぬ馬に親衛隊が乗るのだ。尋常ではない突破力を有しているだろう。それを考慮すれば、佯敗する策はかなりの危険を伴うことになるだろう。

「教経殿。私達に勝つ事を考えれば冥琳が言うような策を考えていると思いますが、負けぬ事だけを考えているならば話は違ってくると思います。このまま私達をここに釘付けにしておいて援軍を待ち、私達が撤退するのを根気よく待つということも考えられますが。相手の軍師は有能で有名なホウ統殿です。破綻無く押し合いを続けることは可能であると思います」

「先ずは小手調べ、と言ったはずだぜ？稟。

……三日。三日の間先に述べた方策で戦闘を行う。が、四日目は違う。騎馬を率いて一気に本陣へ殺到してやる。気付いて本陣の援護に向かおうとするだろうが、それを後続の兵で追えば良い。両翼が俺を追いかける兵と後続を押し止める兵とに分かれるだろうが、後続の兵は左翼から受ける損害を無視して右翼に全て叩き付けてやれば良い。三日間で受けた圧力を基礎にモノを考えてしまっている可能性が高いだろうからな。左翼を無視して殺到してくるとは思わないだろう。予測していたとしても、それを支えきるだけの兵力はないンじゃないかね？

そうして右翼を突破すれば、後は兵力差で押し切れるはずだ」

「敵本陣を襲撃した教経様が左翼と本陣に囲まれて孤立する可能性が有りますが」

「それは心配要らないよ、愛紗。敵が佯敗した場合とは違って、馬鹿正直に敵本陣を襲撃するつもりはないんだよねぇ。途中で敵右翼の後背を突いてやるべく方向転換して右翼に吶喊するさ」

「数に劣る敵を更に分断する、と言うのだな？」
「そういうこと。そうしたら残った敵を更に半分ずつに分断し、一方を包囲。これを殲滅する。最後に本陣を包囲して殲滅してやる。公孫賛軍の全軍を相手に押し合いをするのは最初だけだ」
「相手が佯敗した場合とこちらから本陣を突く場合で、そこまで展開の差はないと思うのだけど。相手が佯敗した場合に突出した貴方が大丈夫だという理由は何なのかしら」
「心配してくれているのか？蓮華」
「そ、それはそうでしょう。貴方は私達の旗印なのだから」
「ははっ。まぁ、大丈夫だ。
先ず佯敗する場合は、その目的は俺を突出させることを主目的にしている。突出したら右翼・左翼・本陣の兵に取り囲まれることが必至である、という状況で飛び出す奴は中々居ない。であれば、今本陣を突けば右翼と左翼の兵がたどり着く前に本陣を蹂躙出来るかもしれない、という餌を俺の目の前にぶら下げる必要がある。だが、俺がそれなりに有能だって事は反董卓連合時に分かって居るはずだ。であれば、その俺を突出させる為に奴さん達はそれなりの危険を背負った状況を作り出す必要がある。有能な人間が、行ける、と思う程度の危険な状況をねぇ。詰まるところ、簡単に前後から挟撃することが出来るような態勢を整えておくことは出来ないンだよ。策の性質上な。
それから、佯敗すること自体がかなりの危険を伴っている。佯敗によって生じる間隙を突かれ、徹底的に叩かれたとしよう。そうすると佯敗ではなく敗走になってしまう可能性がある。突出した俺に続く兵の勢いは何としても押し止める必要があるンだ。自分たちが後退して空いた間隙に勢いよく突撃してくるであろう兵を押し止めるには、やはり両翼の全兵力を以て対応させなければならないと思う。そうでないと、そのまま敗北、という事態に直結する可能性が高いからねぇ。
要するに、自発的に俺を誘うからこそ右翼や左翼との効率的な連携

によって俺を討ち取ることを考えることは許されないンだよ、蓮華」
「良くそこまで考えられるわね」
「俺ならどうするか、を考えているだけだ。自分の思い通りに相手を動かそうとするならば、相手にその欲するところが達せられると思わせることが必要だ。この場合は、俺の隊だけで突出して本陣を蹂躙してみせること。それが達せられると思わせる必要があるンだからねぇ」
「……先の益北制圧といい今回といい、良くも此処まで策を思い付くものだな」
「それが教経殿ですから。私達の役割は教経殿が気付いていない危険性や、知恵者がどう思ってそれに対処するかを提示して教経殿の策の完成度をより高めることですよ、冥琳」
「常勝不敗の所以が分かった気がするよ」
「俺個人、それにこだわる積もりはないがね。戦う前に勝つ事を考えてきた結果そうなっているだけのことだ」

これだけ知恵が回る上に、面会した時に見せた武芸の腕がある。嫉妬しても良いようなものだが、此処まで来るといっそすがすがしい。

「何か他にあるかね？」
「あ～、大将。平家の軍議にどうして俺と姉貴が参加しているのかが疑問なんですが」
「それは簡単だ。お前さん達の身柄を拘束させて貰うことを宣言する為だ」
「ここに来てですか？」
「ここに来ればこそだ。自由にさせておく訳には行かないンだよ」
「……内部から崩壊させるべく画策する、とでも？」
「俺はそうは思わんが他人はそうはいかないだろう。不安要素は除いてやっておくものだ」

「……問題無い」
「まぁ、姉貴は大人しくしておくみたいだから別に構いませんがね」
「一朝事あった時に一突きで殺されても困るだろうから腕は自由にしておいてやるさ。お前さん達を信頼しておく。世話を焼く為に兵を残しておくから不自由があれば言うが良い。公孫賛軍に合流したい、とか言わない限りは対応するように言ってある。
……あぁ、勿論俺の信頼を裏切ってくれても構わないがね？」
「……で、大将に殺されるって訳ですか」
「まぁ、そうなるだろうねぇ」
「そいつは御免被りたいですね。折角拾った命ですから」
「……大丈夫」
「それならいいさ。大人しくしておいてくれれば悪いようにはしない」
「……うん」
「他にはあるか？無いようならこれで軍議は終わりだ。思うのと違った展開になった時は改めて話し合うことにしよう」
「はい、教経殿」
「そろそろ夜が明けますね、教経様」
「あぁ……では、勝たせて貰いに行くとしようか」
「御意」

教経様に皆が拝礼する。拝礼せずには居られない。それ程の自信と覇気だった。

～瑛　Ｓｉｄｅ～

「退くな！敵はその兵力を生かし切れていない！この場においては我らの方が数が多いのだ！押せ！押し返してやれ！」
「焔耶、後方から一斉に矢を放ちますからその機に逆撃を」
「分かった。ワタシも前線に出るぞ」
「兵の指揮は私の方で執っても？」
「ああ、頼む」

焔耶が前線に出て行く。

「弓兵！一斉に矢を放つのだ！」
「はっ！矢を放て！」

一斉に矢を放って敵の後続の兵の勢いを殺す。

「今だ！ワタシ達の力を此処で発揮して見せろ！塗れた恥辱を振り払う為に死力を尽くせ！」
「「「「お～！」」」」

前線に焔耶が躍り込んで敵を押し止める。押し止めるだけでなく、押し返そうとしている。
これで戦線は落ち着くだろう。

「焔耶達が引き返してくる際に援護の為に騎馬を敵に突っ込ませます。その用意をしておいて下さい」
「はっ」

今回私達に要求されているのは、戦線を如何に膠着させるか、だ。白蓮様が専守防衛と仰った以上、益州内で兵をかき集めて居るであろう桔梗様や李厳の到着を待つ可能性が高いだろう。後で焔耶と話し合った際、二人でそう結論付けた。であれば、突出して戦線崩壊させるような危険を冒す訳にはいかない。互いにそう戒めあった。左翼、本陣共に敵と当たっているが、一度に当たる兵が少ない為ある程度の余力を持って対応出来ている様に見える。

「馬謖様、敵前線の兵が交代するようです。『揚羽蝶』の旗が前線に来ます！」
「怯んではなりません。此処が好機だと思いなさい。が、無理をしてはなりません。隊伍をしっかりと組み直して対応するのです。矢も間断なく射掛けて下さい」
「はっ」

平教経。遮二無二突進してくる。再び押され始めるが、何とか踏み止まることが出来たようだ。
……こんなものではないはずだ。噂に拠れば、その武勇は家中でも随一と言って良い程のものだというのだ。様子見をしている、ということだろう。綻びを少しでも見せれば、そこを突かれるに違いない。

「油断してはなりません。気を引き締めなさい。これで終わりではないはずです。隙を見せればそこを突かれるのは目に見えています」

焔耶の率いる前線の兵の動きが鈍くなりつつある。ここで騎馬を投入して敵を一旦押し返し、焔耶達を引き上げさせるべきだ。

「騎馬隊を突撃させます。焔耶と騎馬隊に連絡を」

「はっ」

伝令が走ってゆく。

……焔耶はちゃんと後退するだろうか。

騎馬隊が前線に向かって移動する。土煙を上げて近づいて来る兵を見て、敵兵が騎馬隊であることに気が付いたようだ。その攻勢が一旦弱まったその時に、焔耶は兵を纏めて後方に退こうとしている。縦列で進む騎馬と入れ替わるように後退し、騎馬隊はそのまま敵に突入した。

「……瑛、助かった。あのままだとこちらの兵が多く討たれていただろう。そうなればワタシは頭に血を上らせてしまっていたかも知れないからな。取り返しが付かなくなる前に対処してくれて助かった」

「いえ。指揮を預けられましたからね。この程度の事は私でも出来るようです」

「謙遜をするな。大したものではないか」

「大したものではありませんよ。私も焔耶もそれは実感したはずです」

「まぁ、そうか」

自分の身の程を知って初めて冷静になれた気がする。今までの私であれば、私達の兵で勝利を確実なものとする為に色々と無茶なことをやったに違いない。自分の都合の良いように敵を推し量って。だが、もう二度とそのような真似はしない。敵は私達よりも優れた才

を有する人間であることは間違いない。雛里様があれ程警戒していたのだから。

「騎馬隊を後方へ退避させます。空いた場所を敵に取られぬよう、再度兵を前に押し上げますよ、焔耶」

「分かった。先ず矢を射掛けて勢いを殺しておいてぶつかる、でいいな？」

「ええ」

今のところは大丈夫だ。そしてこれからも大丈夫だろう。相手を抑えられる、ということではなく、私達が身の程を弁えて暴走しないで居られる、という意味で。

「皆、疲れているでしょうがもう少しで日が暮れ始めます。あと少し耐えましょう。張任様も白蓮様も、きっと同じように耐えていらっしゃるのです。私達だけがここで音を上げる訳にはいきません」

「「「「「お～！」」」」」

平家の兵を相手にして、何とか負けぬ戦いが出来ている。

これで、ある程度兵の士気も揚がるだろう。私達は負けっ放しだったのだから。その相手に何とか食らいつくことが出来たことは明日以降の戦いに良い影響を与えてくれるだろう。

前線から騎馬隊が離脱を始める。

「今です！押し返して下さい！」

焔耶と共に右翼全体を前進させる。

今日敵に押されて後退した分を何とか取り返すことは出来そうだ。

明日以降も同じように耐えて見せる。

白蓮様と雛里様が勝てないまでも負けぬ方策を考えて下さるに違いないのだ。
私達はそれを信じて命じられたことを淡々とこなせばいい。
それが私達の役目なのだから。

蝶の如く～１１４～

～雛里　Ｓｉｄｅ～

平家と東広漢側桟道付近でぶつかってから二日目の戦が終わった。
日が暮れるまで押し合いを続けて居た各部隊から報告を受けている。
こちらが兵を退く時機に平家軍は追撃して来ず、本陣が退くのとほぼ同時に後方へ退いていった。
気味が悪かった。本陣が退く時機が分かった、ということだろう。
今回はその機に我が軍と同様に後退したが、次もそうとは限らない。
一気に突撃してくる事も考えられる。

右翼、左翼、本陣。その全ての兵で押し合いをすることで平家軍を此処に釘付けにして戦線を一旦膠着させる。その後、佯敗して見せて平教経さんを誘い込み、これを捕らえる。討ち取ってはならない。討ち取れば、その配下の将が復讐の為に全兵力を以て雪崩れ込んでくる可能性が高い。そうなれば間違いなく蹂躙されることになる。
それでは白蓮様も私も大願を果たすことが出来ない。だから討ち取るのではなく、彼を捕らえた上で今回の事について正式に謝罪をし、その上で友好的な関係を築きたい旨伝える。同盟か、不可侵の約定。
それを取り付けることが目標だ。
そういう絵図を描いていた。
初日の戦いぶりを見て、佯敗せずともこのまま押さえ込むことが出来るかもしれないと思ったりもしたが、あれを見せられるとそれは望み薄だと思わざるを得ない。開戦前に私が考えていた通りに撃破されてしまうかも知れない。

開戦前、私が平家の軍師ならどうするかを考えてみた。兵力差を考えれば、あちらは損害をある程度無視出来るだけの余力があるはず

だ。ある程度敵の軍勢を減らした時点で本陣と左翼を無視して一旦全軍を右翼に振り向けてこれを叩くことを考える。再編されたとは言え梓潼で為す術無く打ち破られた兵達だ。脇目もふらず自分たちを目指してくる平家軍を前にして、平静では居られないだろう。それに、現状のようにずっと均等に兵を分けて前進しようとして居たものが突然右翼に集中すれば、予想を遙かに越えた圧力を受けて痛手を被り、戦線が混乱する可能性が有る。そこを突いて右翼を突破しようと考える。

勿論、それをさせまいとして本陣と左翼の兵を差し向けるだろうが、そちらに最低限の兵だけ差し向けて時間を稼ぎ、右翼を兎に角撃破してしまえば良いのだ。一時的に後続と分断されてしまっても、右翼を壊滅させれば半包囲陣形が崩れることになる。そこまでにかなりの損害を出すことになるかも知れないが、それでも私達を上回る兵力を保持して居るであろうことは容易に想像出来る。そこから兵力を活かした戦をすれば負けることはないだろう。これが、私が考えた平家軍が採れる最上の策だった。

平教経さんは、それをもっと効率的にやろうというのではないか。もし本陣が後退した時機にそれを突き崩すべく突出してきたら、右翼も左翼もその突出してきた部隊に対処することを第一に考えてしまうだろう。若しくは、兵を二分してその内の一つを本陣の救援に向かわせるかも知れない。どう対処するにせよ、一時的に混乱が生じる事になるだろう。その状況で右翼か左翼に残りの全兵力をぶつければ。いや、双方にぶつけても良いかもしれない。私が考えたように整然と隊伍を組んでいる相手に策を仕掛けるより遙かに容易く打ち破ることが出来るだろう。損害もより少ないもので済むに違いない。

平教経さんは兵を無駄死にさせることを嫌う。その為人について、そういう報告があった。だから、彼はそうしようとしているのではないか。そうすれば兵が多く死ななくても済むから。

……かなりの危険を伴うが。
やはり当初の予定通り佯敗して彼だけを誘い込み、虜囚とすることを考えた方が良いだろう。このまま戦が推移すれば、予想通りに打ち破られてしまう可能性が高い。

「将の皆さんを呼んできて下さい。別件を頼んでいる王平さんも呼んで下さい」
「はっ」
「雛里、どうしたんだ？」
「当初の予定通り、策を実行します」
「順調に行っているじゃないか。このまま押さえ込むことだって出来るかも知れない、と私は思っていたんだけどな。それとも、現状のまま行くことは出来ない、ということか？」
「そうです」
「……分かったよ。私よりお前の方が先を見通しているに違いない。そもそもこの戦の段取りを考えたのはお前なんだ。最後までお前に任せるよ」
「有り難う御座います」

白蓮様と言葉を交わしている内に、将達が集まってきている。焔耶、瑛、張任さん。最後に王平さんがやってきた。足が泥にまみれている所を見ると、どうやら私の言った通りにしてくれているらしい。

「ホウ統殿、皆を集められて何の話でしょうかな？」
「明日の戦についてお話があります」
「明日の？……では当初の予定通り？」
「はい。佯敗し、平教経さんを誘引します。右翼・左翼共本陣と連携することは考えず、眼前の敵を押し止めることだけを考えて下さい」

「……雛里様、宜しいでしょうか」
「何ですか、瑛」
「危険ではないでしょうか。私も焔耶も梓潼で平家の兵と戦って敗れましたが、その際彼らの強さは身に染みております。現状の彼らの攻勢は、らしくなく目に映っているのです。彼らの強さはこのようなものではありません。誘引したは良いが、食い破られてしまうのではないでしょうか」

よく見ている。己の才に慢心することはなくなったようだ。

「その懸念は尤もです。ですから、備えをしてあります」
「備え、ですか？」
「ええ。
……王平さん、白蓮様が後退し、平家軍を迎え撃つ地点に構築するようにお願いしておいた陣の出来はどうですか？」
「仰せの通りのものが出来上がったと思います」
「そうですか。御苦労様でした」
「雛里？」
「実は事前に王平さんに頼んでおいたのです。周囲を山に囲まれたすり鉢状の盆地に、柵を立てた陣を構築してあります」
「……果たしてそれで平家軍を押し止めることが出来ましょうかな。恥ずかしながらこの張任めも痛い目を見ておりましてな。一筋縄ではいかぬと思いますが」
「分かっています。これだけではありません。近くの山から湧き水を引いて、一部を除いて足場が悪くなるようにしてあります」
「成る程。死地を創り出そうというのですな」
「ええ」
「……よくこの短期間に準備出来たな、王平？」
「ホウ統様が既に用意されていらっしゃいましたので、我々はただ工事するだけでした」

「ともあれ、私達が佯敗することを見抜いているとしても、逃げ込んだ先で人の手で死地を創り出しているとは予想しては居ないでしょう。これに、勝負を賭けます」
「……賭け、か」
「天と人とが争うのであればいざ知らず、私達は人でしか在りません。そこに完璧を求めることは出来ません。人が人に打ち勝とうというのですから。ましてや私達の形勢は不利なのです。賭けるしかないでしょう」

一度目を瞑った白蓮様が再び目を見開く。

「それで行こう」
「白蓮様」
「雛里が考え出した、最も勝つ可能性が高い策なんだ。私はそれを信じるだけだ」
「……白蓮様がそう決められたのであれば、儂などに口出しする余地はありませぬ。与えられた役目を果たすべく死力を尽くすのみです」

焔耶も瑛も悩んで居たようだが、最終的には全面的に策に従うことを了承した。

「話はこれで終わりです。皆、明日に備えておいて下さい」
「「「はっ」」」

打てる手は全て打った。後は、明日を待つばかりだ。

「雛里、勝てるかな？私達は」
「最後の瞬間まで勝とうとしなければ勝てぬものですよ、白蓮様」
「……そうだな。勝つ為に足掻くとしよう。最後まで」

白蓮様に言った言葉は、自分に向けた言葉でもある。
人事を尽くした上で勝つべく努力を惜しまぬものにしか勝利はもたらされない。

諦めずに足掻くのだ。
勝利を信じて。

～教経　Ｓｉｄｅ～

「大将、敵本陣が後退を始めたぜ！右翼も左翼も同時に後退し始めた！俺たちの勝ちだ！」
「落ち着けよダンクーガ。まだそうと決まった訳じゃ無い」

三日目、公孫賛軍が後退を始めた。確かに一日目、二日目よりも強めに兵をぶつけた。それによって奴さん達を随分と押してやったし、

前線が混乱しているように見受けられる。早めに見切って再起を図る事に決めた、と見ることも出来るが、相手はホウ統だ。予想通り、佯敗しているンだろうねぇ。

「どうしてだ大将！奴らは俺たちに押されて混乱しているじゃないか！」

「良いから落ち着け。これから敵さんのお誘いに乗って本陣強襲するンだ。冷静さを保て。思わぬ所で思わぬ事態を迎えた時に対処出来ないぜ？」

「何でそんなに冷静でいられるんだよ」

「冷静さを欠けば死あるのみ、だ。死にたいのか？ダンクーガ」

「嫌だね。アンタを殴りつけるまでは死なないって決めてるんだ」

「じゃぁ、お前さんはずっと死ねないねぇ」

「言ってろ！いつかぶっ飛ばしてやるからな！」

「普段通りのお前さんに戻れたみたいじゃないか」

「あぁ！？」

「自覚無しかよ……まぁ、何よりだ」

「で、どうするんだよ大将」

「予定通りさ。騎馬４，０００で追撃する。兎に角本陣に追いすがって捕捉する。敵大将を討ち取れば俺たちの勝ち。俺たちが囲まれて討ち取られれば俺たちの負け。単純で分かりやすいだろうが」

「よっしゃぁ！テメェら、いつも通り気合い入れてけ！やぁぁぁぁってやるぜ！」

「「「「「「ＯＫ！忍！」」」」」」

ちゃんと説明していたはずだがねぇ。まぁ、お前らしいっちゃお前らしいがね。

「前を塞いでくる兵は最低限相手にしてやれ。追撃速度が落ちぬ程度にな。

……征くぞ！風の如く戦場を駆け抜けよ！」

馬を駆って勢いよく追撃を始める。敵の右翼、左翼共に反転して後続の兵を押し止めるべく動いているようだ。やはり見込み通り佯敗だったらしいな。追撃する俺たちの前には、本陣の兵の一部が足止めすべく立ちふさがっている。

槍をその手に持ってトロンベを突こうとしているが、コイツはその程度じゃどうにもならんよ。頭が良いのか馬としての能力が高いのか分からんが、何も言わなくても自分から躱すからねぇ。

オイタをかまそうとしてくれたお前さんにはご褒美が必要だろう……この日の為に鍛冶屋のオッサンと作り上げた斬艦刀が終に日の目を見る時が来た！準備してて良かった！斬艦刀のお陰で彼女が出来ました！気障な食通とも知り合いになれて今本当に幸せです！

「征くぞ友＜トロンベ＞よ！今が駆け抜ける時！
奥義！斬艦刀・逸騎刀閃！！」
「大将に！」
「断てぬ物無し！」

フッ……決まったな。ダンクーガに仕込んでおいて良かった……！

その場に踏み止まって抗戦する敵を騎馬で蹂躙し、敵本陣を追いかける。練金戦団と化した親衛隊の皆も後を付いて来ている。それ以外の兵も何とか遅れずに付いて来れているようだ。

目の前に敵陣が見えてくる。柵を巡らせているようだがねぇ。敵さんと一緒に雪崩れ込んでやれば問題無いだろう。逃げる敵はやや右から迂回して陣に駆け込もうとしている。一直線に進めば敵兵と共に陣内へ雪崩れ込むことが出来るだろう。

トロンベを駆る。あと少し。もう少しで敵陣に雪崩れ込める。
そう思っていた。突然トロンベの行き足が衰えて体勢を崩すまでは。

「っと!?何だ!?どうした、トロンベ!?」

トロンベを見ようと下を見ると地面がぬかるんでおり、それに足を捕られているようだ。

「のわっ!?」

ダンクーガが空を飛んだ。どうやらダンクーガの馬も足を捕られたらしい。トロンベよりも深く足を突っ込んだに違いない。後続の兵も同様で、ぬかるみに足を捕られて進めなくなったり足を折ったりする馬が続出した。

「落ち着け!馬から下りろ!今すぐにだ!」

そう声を張り上げて伝える。それと同時に、矢が風を切る音が聞こえてくる。

「矢に気をつけろ!致命傷を避けるんだ!」

言いながら飛んでくる矢を弾く。トロンベは馬鎧を着けているから無事だったようだ。兵達を見るが、かなり負傷者が出たようだ。
……読み違えた。死地に誘い出すか、佯敗するか。そのどちらかだと思っていた。
だが答えは両方だった。周辺の地理については稟と冥琳が調べ、死地たり得る場所は分かっていた。そこから外れたこの場所は安全だと思い込んでいたのが間違いだったということだ。まさか作り替え

るとは、ねぇ。

「大将！どうするんだ！？」

「当初の予定通りだ。罠があったが咬み破れば問題無い」

斬艦刀を肩に背負ってゆっくり敵陣に歩を進める。

こうなれば仕方がないだろう。どちらが強いのか。正面からぶつかり合って白黒付ける他に道はない。

「……いつも通りで安心したぜ。行くぞテメェら！やぁぁぁぁぁってやるぜ！」

「「「「「ＯＫ！忍！」」」」」

敵陣に向かって駆ける。間断なく矢を放ってくるが、俺が取り敢えず無事に柵に近づければその後は何とかなるだろう。俺が、柵をぶっ壊してやるよ。

「ご招待、ありがとう、よ！」

柵に近づいたところで斬艦刀を思いっきり投げつけてやる。目一杯に回転させて。

「うわぁ！」

柵の一部を破壊出来たようだ。清麿を抜きはなって敵陣に飛び込むべく駆け始める。

「オラァ！大将に負けてらんねぇぞ！」

「おう！」

「俺たちもやれるって所を見せてやるんだ！」

ダンクーガが威勢良く敵陣に飛び込んで次々に周囲の敵兵を薙ぎ払っていく。親衛隊の人間がそれに続いている。兵数にどの程度差があるのかは分からんが、兎に角殺して廻るしかない。
周囲に群がってくる敵兵を斬る。練度が低い。連携もして来ない。この分なら敵陣の一角を制圧出来るだろう。
左後方に殺気。振り向きざまに清麿を左上に斬り上げる。槍を切り飛ばした。
危ないねぇ。直ぐに斬り下げてそいつを殺す。その横にいる奴が繰り出してくる槍を躱して近寄って胸を蹴り付け、仰向けに転かして胸に清麿を突き立てて殺す。直ぐに引き抜いて前の敵の腹を突き、そのまま払って脇から清麿を抜くままに横にいた奴の首を飛ばす。

「どうしたンだね？俺の首を挙げたいならもっと頭を使って掛かってこい」
「ひぃっ！バケモノだ！」

失礼な奴らだ。算を乱して後退した奴らを追いかけず、一旦部隊を掌握する為に立ち止まる。

「ダンクーガ！状況は！？」
「親衛隊も何人かやられてるが、それ以外の奴らが問題だぜ大将！付いて来れた奴は少ないし、それ以外はまだどうして良いか分からないで居るみたいだ」
「……チッ。奴ら、戦が終わって生きてたら調練三昧な日々を送らせてやる」
「そうしてくれ！」

周辺から敵兵が退いたことで、再び矢を射掛けてきた。

「……糞が」
「大将！」

左肩に、矢が突き刺さった。矢を根本からへし折って、鏃は付けたままにしておく。抜いた瞬間に血が出ることはわかりきっている。このままやるしかないだろう。

周囲から敵兵が押し寄せてくる。
大体、４，０００位か？『公孫』の旗も向こうに見える。

「……征くぞ！この期に及んで後退はない！生中に死あり死中に生あり！死中に活を見出せ！いいか、必ず生きて帰れ！死には何の意味もない！目の前の敵を倒し、生き延びることだけ考えるンだ！見苦しかろうと何だろうと、生に執着して最後まで足掻けよ！」
「「「「「「お～！！！！！！」」」」」」
「俺に続けぇ！」

こちらに向かってくる敵兵の群れに向けて駆けて行く。
……良いねぇ。今俺は生きている。それが実感出来る。男子たる者一度はこういう状況で己の腕を存分に振るいたいモンだろう。男子の本懐ここに極まれり、だねぇ。

「周りは敵ばかりだ！どう槍を振るっても敵に当たるぞ！殺って殺って殺りまくれ！」

ダンクーガが俺の横で槍を振るっている。致命傷はないが怪我はしている。他の連中も似たり寄ったりの状況だ。早い内に公孫賛を討たなければ、そのうち疲労が限界を超えて討たれるに任せることになってしまうだろう。

この状況、何とかしなきゃならないんだがねぇ。
生憎俺の知恵の井戸は涸れちまったらしい。何の策も思い浮かばないんだからねぇ。

「退くことは出来ん。やれるだけやってみるさ」

皆と共に死中に活を見出す為に清麿を振るう。
俺たちだけでやってみせるさ。

俺たちだけで。

蝶の如く～115～

～蒲公英　Ｓｉｄｅ～

ご主人様が言っていた通り、右翼が反転して攻勢を掛けてきた。それをご主人様が見越して敢えて策に乗ったとは思っても居ないんじゃないかと思う。

「この猪！悔しかったら掛かって来なさいよ！」
「……クッ！ワタシは暴走する訳には行かないんだ！」

引き返してきた右翼に、あの猪が居た。猪を挑発して捕まえて、ご主人様の所へ早く行こうと思っているのに何度挑発しても挑発に乗ってこない。ちょっとは学習したみたい。

「ちぇっ、直ぐに片が付くと思ったのにな～」
「そう簡単にはやらせないぞ！」

飽くまでも冷静に武器を振るってくる。蒲公英も本気でやらないと、ちょっと拙いかも知れない。

「そりゃ！」
「なにを！」
「えい！」
「でやぁ！」

何度も槍を繰り出すが、その度に猪の得物と打ち合うことになっている。

「はっはっは！どうしたどうした！その程度か！」
「猪の癖に！生意気！」
「何だと！」
「お馬鹿な猪！蒲公英に負けたの、もう忘れちゃったんだ～？あ、馬鹿だから仕方ないよね？」
「ワタシを馬鹿にするなぁ～！」

頭に血が上って大振りしてくる。これで……！

「……とでもやると思ったのか！」
「うわっ」

小さく、鋭く得物を振ってきた。
危ない、危ない。

「ちょっとは賢くなったみたいじゃない」
「此処で全てを台無しにする訳にはいかないんだ！」

……あ～あ、ご主人様を助けに行くどころじゃなくなっちゃったみたい。

「じゃ、蒲公英が真面目に相手してあげるね、猪！」
「抜かせ！今回は前のようには行かないぞ！」

一撃の重さは猪。
手数は蒲公英。

何度打ち合っても猪はバテない。涼州から出てきたばかりの蒲公英だったら、負けてたかもね。
でも。

「お姉様達に比べるとまだまだだよね」
「余裕を見せていられるのも今の内だけだ！」
「どうかな～？」

二回突いたら横に薙ぐ。右から薙いだら次は左から。その悉くを跳ね返されているけど、問題無い。
暫く続けることでこれに慣れて貰うことにしよう。

～稟　Ｓｉｄｅ～

教経殿の思惑通り、敗走していた公孫賛軍が再びとって返して攻勢を掛けてきた。

無駄なことを。
そう思う。教経殿は彼らの策を見抜いていた。そしてそれを見事に逆手に取って策を構築したのだ。完璧と思われる策を。勝敗は既に決している。後はこの場で足止めをしている公孫賛軍を掃討するだけだ。

「各隊に伝令を。教経殿の策が図に当たりました。これより公孫賛軍を掃討します。翠と蒲公英は敵右翼へ。愛紗と冥琳は敵左翼へ向かって下さい。蓮華と思春、それに私の隊は教経殿を追いかけることにします」
「はっ！」

伝令が駆け出して行く。
伝令が到着する前に敵右翼と翠達がぶつかっているようだが、先ず予想通りに行くだろう。敵右翼は魏延と馬謖。梓潼郡で打ち破った二人。その器量は見切ったつもりだ。痛い目を見て良い方向に変化していたとしても、戦場では翠と蒲公英の敵ではないと思う。敵左翼は張任。守勢に強いということだが、一度戦って勝った冥琳が軍師として付いている。将は愛紗だ。負けるはずもない。これで両翼を完全に押さえ込むことが出来るだろう。その間を縫って追撃を掛ける。公孫賛は既に後退している。

全て順調に行っている。
そう思ったが、何かが引っかかった。こういう時は必ず何か見落としている。私は何を見落としているのか。

もう一度最初から考える。
教経殿がホウ統の策を見破った。
敵右翼の魏延、馬謖に対して翠と蒲公英が当たる。
敵左翼の張任には、愛紗と冥琳が。

公孫賛は既に後退し、それを教経殿が追っている。
私と蓮華、思春がそれを更に追いかける。

やはり何か、見落としている。
その時、本陣の？姉弟が居る陣屋が目の端に映った。
？姉弟は有能だった。たった一万で私達の攻勢を耐えて撤退戦を行ったのだ。退路が落石によって断たれなければ、きっと逃げ果せて手強い相手になったことだろう。？艾に拠れば、落石計を考案していたのは王平らしい。

……王平。王平が居ない！
何故今まで気が付かなかったのか。王平は無事に公孫賛に合流したはずだ。魏延と馬謖が将として戦っているところを見れば、当然王平もその地位は据え置かれたままにこの戦に参加しているはずだ。
それなのに、その王平をこの三日間一度も見ていない。

落石計は失敗に終わったが、着眼点は良かった。魏延と馬謖を叩く際に本陣の足止めをしていたのは王平だった。寡兵ながら良く攻勢に耐えていた。攻勢を掛けていたのが愛紗であることを考えると、将として有能であると言って良い力量があるだろう。その王平が、居ない。

有能であるはずの王平を戦線に投入しない。それは、王平自身が負傷しているか、若しくは戦線に投入出来ない事情を公孫賛軍が抱えている為だ。では、戦線に投入出来ない理由とは何か。
……教経殿が危ないのではないか。
ホウ統の策を逆手に取ったと思っていたが、それを更に逆手に取ることを考えたら。

「本陣は教経殿を急ぎ追いかけることとします！急いで下さい！」

「は、はっ」

私の考えすぎであればそれに越したことはない。取り越し苦労で終わるなら問題無い。だが、そうはならなそうな雰囲気だ。恐らく、裏をかいたつもりで裏をかかれたのだ。そうなれば、教経殿が。

……急がなければならない。

「無事でいて下さい、教経殿」

思わず口にしながら、兵を急がせた。あふれ出る不安を押さえつけながら。

～蓮華　Ｓｉｄｅ～

「思春、教経達を追うわよ！」
「はっ！」

右翼と左翼が引き返してきて、後続の兵を押し止めようと逆撃を掛けてきた。右翼に対しては翠と蒲公英が。左翼にたいしては愛紗と冥琳が対応している。私と思春は教経を追いかけるべく部隊を急いで前進させている。教経が騎馬で蹂躙していったお陰で、今のところ一所で時間を取られることもなく教経を追いかけることが出来ている。

「蓮華様、前方に敵本陣の兵が待ち構えているようです」
「数は？」
「およそ2，０００」
「遮二無二突っ込むわよ、思春。私達の方が兵数が多い。押し包んでこれを殲滅するより、一点突破した後私達の後背を突こうとする敵に対する備えを残してそのまま前進するわ」
「畏まりました。……全軍そのまま敵に突っ込め！突破したら3，０００は此処に踏み止まって敵を防げ！戦い方は各小隊長に一任する！」
「「「「「お～！！！！！」」」」」

部隊を一気に突入させる。
それなりに抵抗があったが敵陣を突破した。後方に備える為に残す兵を再編していると、本陣の一部の兵を率いて稟が駆け込んできた。表情に余裕が無く、慌てている様に見える。

「稟、どうしたの？貴女がそんなに慌てているなんて」
「蓮華、急いで下さい！教経殿が！」
「ちょ、ちょっと稟！？」

「早く、早く教経殿の元へ！」

稟が慌てていて、教経の身を案じている。

……まさか。罠にかけられたと言うのか。

「蓮華様、悠長に構えている時では無いようです。私が隊を率いて先行し、教経様の元へ急行致します」

「思春、急いで下さい！」

「分かりました」

思春が隊を率いて先行する。

思春の隊は斥候を務める者が多い関係で健脚な者が揃っている。あの疾さであれば直ぐに教経に追いつくことが出来るだろう。

「稟、一体どうしたというの？」

「蓮華、教経殿は裏をかいたつもりが裏をかかれた可能性が高いのです。私達も直ぐに追い掛けましょう。詳細は道中で話します」

「分かったわ。貴女がそう言うなら危急の時なのでしょう。……全軍、これから全力で駆けるぞ！教経に追いついて彼の安全を確保するのよ！」

一斉に兵が走り出す。並んで馬を走らせる稟からおおよその事情を聞いた。

自分であれば教経を誘引した先に死地を創り出してみせる。ホウ統が噂通りに有能であるならば、同じ事をするだろう。そうなった時、教経達は騎馬の利点を生かせず兵数的に不利な状況で戦いに臨まなければならなくなる。教経のことだから、退かないに違いない。それでは教経が死んでしまうかも知れない。

そこまでを一気にまくし立て、後は一心不乱に馬を追っている。馬

に乗り慣れていないからだろうが、空回りしっぱなしだ。が、必死になって馬を追っている稟を笑う気にはなれない。稟にとって、教経はそういう存在なのだろう。その稟を見て、私にも焦りのような感情が湧いてくる。もし、教経が死んでしまったら。

浮かんだその考えを振り払うように頭を振る。

……大丈夫。思春が急行しているのだから。きっと大丈夫よ。

馬を追う手に自然と力が篭もっているのに気が付かず、兵を急かし続けた。

～教経　Ｓｉｄｅ～

「大将、大丈夫か！？」

「誰に口きいてやがる。俺ぁ平教経だぜ？」

「ちぇっ。気を遣ってやったんだよ！」

「放っておけ。テメェの後の方がアブネェぞ、っと！」

「オラァ！」

戦場はむせかえるような血の臭いで溢れている。眼前には、敵、敵、敵、敵……公孫賛だけでなく王平も乱入してきているらしいな。

「ダンクーガ、親衛隊は！？」

「まだ８割生きてるぜ、大将」

「２割も死んだのか」

「そりゃ仕方ないだろう。あいつらだって大将のために死んだんだ、悔いはないはずだ」

「……ちっ。俺が不甲斐ないばかりにな」

話に割って入ってきた無粋な雑兵を俺とダンクーガが同時に斬り伏せる。

「やるじゃないか、ダンクーガ」

「たりめぇだ！アンタに何度ぶっ飛ばされたと思ってんだ！」

「……三度位か？」

「その十倍はかたいだろうが！」

「ハッ、忘れちまったよ！」

再び迫ってきた敵の腕を斬り飛ばす。

こっちは残り１，２００弱。あっちはざっと見て３，０００。流石の親衛隊でも数の前には不利は隠せない。徐々に数を減らされている。

負傷しているからだろう、左側から槍を付けてくる奴が増えてきている。馬鹿め。戦が終わってアドレナリンが分泌されなくなったら痛くて堪らんのだろうが今はドバドバなんだよ、糞が。左にいた奴らを斬り伏せる。その間、右側はダンクーガが相手をしている。親

衛隊は精鋭中の精鋭だ。まだ、持ち堪えることが出来るだろう。
今は全体的にまだ押している様だが、このままじゃジリ貧だ。

「おい、ダンクーガ」
「何だよ大将」
「親衛隊を纏めて王平に叩き付けるぞ」
「……了解。テメェら！集まりやがれ！」

周辺に散って戦っていた親衛隊が集結する。良く統制が取れている。

「大将と一緒に王平って奴の隊にぶっ込むぞ！やぁぁぁぁぁってやるぜ！」
「「「

親衛隊の兵が幾人か網に囚われ、思うように身動き出来ないでいる所を殺されていく。

「生まれ変わったら漁師にでもなるんだな！」

網に囚われている親衛隊の奴らを救うべく近寄っては網を斬り破って周囲の敵兵を殺しているが、如何せん敵兵が多い。間に合わず、多くの親衛隊が死んでいく。

「糞！このままじゃやばいぜ大将！」

これ以上戦闘を続けた場合、本当に後退することが出来なくなるだろう。知恵比べで負け、そして今正面からぶつかって負けようとしている。

……糞が。この際俺のプライドなんざどうでも良い。生き残った奴らを纏めて後退するしかないだろう。コイツらを巻き込んで死ぬ訳にも行かない。力戦したが、及ばなかった。俺の器量ってのもこの程度だって事か。

「た、大将！」

ダンクーガが声を上げる。

後方を見て居るようだが殺気は感じない。

「甘寧の姐さんが来たぜ、大将！」

「思春が？」

言われて見れば、確かに思春の旗が風に靡いている。率いているのは５００程度の兵だ。どうやら急行してきたらしいな。急に現れた増援に敵兵が動揺している様だ。これで、どうやら勝ち目が出てき

た、か。正直助かった。自力で勝てなかったのが少し釈然としないが、ねぇ。

「ダンクーガ、行けるな？」
「この程度でへばるような柔な訓練させてないんだよ！テメェら、行けるんだろうな！？」
「「「「「おうよ！！！！！」」」」」

……頼もしいこった。

「逆撃を掛けるぞ！このまま前進して公孫賛の兵を駆逐する！死力を尽くせ！」

そう声を掛けて、敵中に突進する。親衛隊もしっかり付いてきているようだ。
前に出てきた敵は全部殺す。今は、何も考えない。天下のことも、今後のことも。何も要らない。今は、この剣を振るうことだけ考えれば良いンだ。

ただ、剣を振るうことだけを。

～雛里　Ｓｉｄｅ～

平教経さんを後一歩という所まで追い詰めた。
ここで、彼を捕らえるべきだ。
そう進言し、白蓮様がそれを命じて彼を捕らえようとしたが彼は網を斬り破って尚も戦っている。宛ら修羅のようだ。返り血を前身に浴びて既に真っ赤になっているその相貌は、闘志に溢れている。

「まだ戦うというのか、あの男は」

白蓮様がそう独りごちる。
脅威的な体力と精神力だ。周囲に群がる兵を次々に屠っていく。その周囲にいる兵も剽悍で、とても一人では勝負にならないだろう。

だが、それもあと少しだ。いつまでも体力が続く訳はない。このまま寄せ続ければ、彼らの疲労は限界を超える。

「白蓮様、配下の全兵力で包囲して降伏勧告を致しましょう」
「……よし。では……」

白蓮様が号令を掛けようとしたその時、平家の増援が現れた。増援と言っても５００程度の兵だが、徒にしてはその進軍速度が速い。
それに気が付いたのか、平教経さん以下１，０００名程が遮二無二突進してきた。

「白蓮様！」

「なりふり構っていられない様だ。騎馬をぶつけるぞ、雛里」
「はい」

騎馬をぶつけられた平教経さんの隊はその勢いが衰えたが、それ程負傷者を出していないようだ。元々あの兵は異常に強かった。戦いの中でその数を減らしたが、今残っているのはその中でも優れた者ばかりなのだろう。皆落ち着いて騎馬に対処している。対騎馬の訓練も十分に行っているのだろう。ぶつけた騎馬隊の勢いを完全に殺されてしまった。

……まだだ。敵増援と合わせても、まだこちらが有利だ。まだ、勝機はある。

そう思っていた私の目に、二度平家の援軍が映り込む。
その数は3，０００。かなり急いでいるのが分かる。強行軍を行って3，０００がやってきたという事は、時間が経過すればするほど不利になるということだ。遅れた兵達が続々とやってくるに違いない。右翼も左翼も、どうやら破られたと思った方が良いようだ。

平家軍を押し止める為に陣形を組み直してぶつかる。敵が合流する前に何とか平教経さんを捕らえる為に包囲しようとするが、包囲出来ない。兵をこれ以上進めることが出来ない。王平さんも連携して動いているが、どうしても包囲する事が出来ないで居る。まるで岩にぶつかっているかのようだ。私達の攻勢を跳ね返し続けて居る。

「白蓮様、駄目です。どうしても包囲出来ません」
「そうか」
「このままでは皆死んでしまいます」
「……そうか」
「増援によって逆に包囲されてしまう可能性が高いです。今この時

点から後退することは出来そうにありません……白蓮様、申し訳ありません。ここから起死回生の策は……」

「……分かってる。どう扱われるか分からないけど、降伏しよう」

「……お供致します、白蓮様」

「……うん」

白旗を掲げさせて、軍使を送る。

私達の戦は終わった。人事を尽くし、諦めずに戦ってきたが勝利を掴むことは出来なかった。後は、天に全てを委ねるだけだ。

天の御使いに。

蝶の如く～１１６～（前書き）

ＰＶが７，０００，０００を越えてました。
いつも有り難う御座います。

ダンクーガの本名と、事後処理のお話です。
普段と違ってちょっと長いです。途中で切る事も考えたのですが、
それだと一向に話が進まないじゃないか、というご批判があると思
いましたのでこのまま投下します。
長くなった原因は、もげろ☆のせいです。

……今回のお話は、基本的に『もげろ☆』分で構成されております。
あしからずご了承下さい。

蝶の如く～116～

～教経　Ｓｉｄｅ～

「大将、敵が白旗掲げてこっちに来る」
「……機を見るに敏、だな」
「……どういう意味だ？」
「機会を掴むのが上手いってことさ。もう少し遅れていれば、本格的に蹂躙すべく攻勢を掛けるところだったんだからねぇ」

何とか、勝てた。
それがこの戦の結果だ。策を見抜いて裏をかいたつもりが裏をかかれ、正面からぶつかって咬み破ってやるつもりが咬み破ることも出来ず、是非も無い状況で後退することを考えていた所に家臣が駆けつけて何とか勝ちを拾った。

慢心していたつもりはない。侮っていたつもりもない。ただ、俺はこの状況を予測出来ていなかった。この教訓を次に活かす機会を得られただけ俺は恵まれているンだろう。

軍使を迎えて降伏を受け入れる旨を伝え、互いに軍を纏めてから公孫賛と会談を持つことにして一旦軍使を返した。会談自体は明日になるだろう。それだけ決めてから、援軍に駆けつけた思春の隊へ向かった。

「……教経様、ご無事でしたか」
「あぁ。お陰さんで、ね」

戦が終わってホッとしたんだろう。足から力が抜けてこけそうにな

る。

「教経様、大丈夫ですか？」
「……済まんな。流石に、疲れた」
「……いえ」

思春が脇で支えてくれたお陰でこけなくて済んだようだ。

「それにしても良く来てくれた。お前さん達が来なかったら、今頃敗走していただろう」
「稟様が教経様が危ない、と仰って本陣を急行させていたのです。詳細は伺いませんでしたが、兎に角教経様の後を急追してくれ、と言われましたので」

稟が、ねぇ。稟は途中で気が付いたってことか。流石は郭奉孝だ。曹操がその才を何度も惜しんだだけの事はある。その稟が向こうから走ってきている。

「教経殿！」

泣きそうな顔をして走ってきて、俺に抱きついてきた。
ちっと傷に響くがだからといって振り解こうとは思わない。あんな顔してたンだ。安心させてやるのが先だ。今の俺は血まみれだから深刻な怪我してるように見えるだろうし、ね。

「稟、大丈夫だ。俺ぁ生きてるよ。深刻な怪我もしてない。おかげさんで、ね」
「本当に良かった……本当に……」

そう言うと、肩を震わせて泣き始めてしまった。こんなに心配して

くれていたンだな。
蓮華がその後から歩いて来た。

「教経、貴方怪我は大丈夫なの？」
「あぁ。左肩がこれから死ぬほど痛くなるンだろうがね。……蓮華、お前さんにも助けられたみたいだな。有り難うよ」
「別に礼を言われるようなことではないわ……兎に角、無事で良かった」

そう言ってホッと息を吐き出した。

「先に戻って兵を纏めておいてくれ、蓮華。各隊に通達を。戦は終わった、矛を収めろ、とね」
「私から？」
「あぁ。稟はこんなだしな」
「……教経殿が悪いのです」
「そうだな。今回は俺が悪かった」

言いながら涙をぬぐってやる。稟はちょっと目を瞑りながら、ぬぐい終わるとまた俺に抱きついてくる。多分、稟は正確に今回の事態を見通したのだろう。だから俺が死ぬことまで想像していたに違いない。そうでないと人前でこんな風に俺に抱きついたりはしないだろう。

「……私も戻って伝令を出しておきます」
「そうか。じゃぁ、頼む」
「はっ」

蓮華と思春が伝令に指示を与えるべく去っていく。
空気を読んだってやつか。

「稟。落ち着いたか？」
「……まだです」
「そうかね。まだ抱きついているかね？」
「……はい」
「……そうか」

稟を抱きしめる。

「稟のお陰で俺は死なずに済んだらしいな。稟、何かして欲しいことあるか？」
「……口づけして下さい」
「今此処で、かね？」
「……はい」

甘えてくる稟が可愛い。

「……んっ……」

そっと唇を重ねる。短いような、長いような。そんな口づけだった。

「……これでいいかね？」

そう訊くと何も言わずに頷いてもう一度抱きついてくる。

「……あ～、大将。そろそろ準備した方が良いんじゃないか？」

そっぽを向いて頭を掻きながらそう言ってくる。
ダンクーガめ、空気くらい読めよ。

「分かってるさ。けど今はそれより稟の方が大事でな？」
「……はぁ。程々にしとかねぇと関羽の姐さんやら馬超の姐さんやらにぶっ飛ばされるぞ？大将」
「暫くはこうさせとけ。後できちんとするさ」

片手で稟の頭を撫でながら、もう一方の手で稟を抱きしめる。
暫くすると、稟は落ち着いたようだ。

「……もう、大丈夫です。取り乱してしまい、申し訳ありませんでした」
「可愛かったよ、稟」
「教経殿！」
「それと、嬉しかった」
「……教経殿」
「取り敢えず、皆の所へ行くかね。兵を取り纏めたら、公孫賛と会談だ。稟も来るだろ？」
「はい」

稟の肩を抱いて歩き出す。
左肩が疼き始めている。傷は結構深い。まぁ、矢が刺さったままでかなり無茶したからな。他は問題なさそうだ。

先ずは軍を取り纏めて、明日の会談に向けて休んでおかないとな。

「教経様、お体は大丈夫なのですか！？」
「ご主人様、血が！？」
「教経、無事か！？」
「……大丈夫だから一度に迫ってくるなよ、対処に困る。幸いにも俺は無事だよ。手傷は負ったがね」

陣屋をはって傷の手当を受けていると、愛紗、翠、冥琳が揃って陣屋にやってきた。三人とも随分心配してくれていたようだ。心配ないことが分かったのか、三人とも張り詰めた表情が緩んだ。

「教経様、もう二度と危ない真似はしないで下さい」
「そうだよご主人様。これからはあたし達がやるからさ」
「愛紗達の言う通りだぞ、教経。もう少し君主としての自覚を持って行動して貰わなければ困る」

……いきなりの説教タイムだ。
けどなぁ、お前さん達。俺はそれを受け入れるつもりはないんだよねぇ。

「……悪いがそれは出来ん」
「どうしてですか！」
「なんでだよ！」
「何を考えているのだお前は！」

ウホッ。凄い剣幕だねぇ。

「俺はな、自分の手で天下を掴みたいンだよ。郎党共を死地に赴か

せておいて自分だけのうのうと安全な場所で過ごすなんざ真っ平御免だ。

……一緒に戦ってやりたいのさ。俺に付き従ってくれる人間を死なせることを自分に納得させる為にどうしても必要なンだよ。だから俺は前線に立ち続けるぜ？」

「……教経様、前線に立つことが出来れば、良いのですね？」

「愛紗！？何を言ってるんだ！」

「翠、良いから黙っていろ。……教経様、どうですか？」

「……あぁ、前線に立つことが出来れば良い」

「それであれば、今後は断空我の他に必ずあと一人伴って頂きます」

「おいおい、ちょっと待てよ。それじゃ軍を指揮する人間がだな……」

「別に問題無いと思うがな、教経。他家はいざ知らず、平家には有能な将が多くいるのだ。その中から一人お前の側に付いたからといって軍の指揮に差し障るとは思えないが？」

「そりゃそうかもしれないが」

「それなら特に問題はないではないか」

「……まぁ、いいか」

そう言うと、愛紗も翠も喜んでいるようだ。これで一緒に居られる時間が増えるとか愛紗が言っているような気がするが、まぁ触れないでおいた方が良いンだろうねぇ。

「ご主人様、もうちょっと待っててくれたら猪討伐してたのに！」

「残念だったな、蒲公英」

「『残念だったな、蒲公英』、じゃないよ～ご主人様！」

相変わらず元気なことだ。

「まぁそう言うなよ蒲公英の嬢ちゃん。こっちはこっちで大変だっ

たんだぜ？」

同じく怪我の治療を受けていたダンクーガが蒲公英にそう言う。

「五月蠅いな～、コージュンは黙っててよ」

？コージュン？皇潤か？ヒアルロン酸飲んでも意味はないんだぜ？詳細は割愛するが、全部消化酵素に分解されるんだよ。注射で注入したり直接塗りつけない限り効果は出ないんだよねぇ。

「……蒲公英。誰だそれは？」

「俺だよ！俺！」

「いや、お前はダンクーガだ。エバーライフ的なものじゃない」

「えばー……？兎に角合ってるんだよ！」

……皇潤、ねぇ。こっちじゃなくてやっぱりあっちなんだろうけど、ねぇ。

「ダンクーガ。ちょっと今まで置いておいたが、お前さんの本名を聞こうか？」

「ちょっとじゃねぇだろうが！」

「ちょっとだ。ほんの3年ちょっと」

「名前名乗るのに3年かかるとかおかしいだろうが！」

「いや、ダンクーガには良くあることだから。黒騎士的に考えて」

「……俺の名前はな」

あ、無視しやがったなこの糞が。

「姓は高、名は順、字も真名もない」

「嘘付け」

「何で嘘付かなきゃいけないんだよ！」
「お前が高順な訳ないだろうが！大体テメェの真名は忍に決まってるだろうが！」
「何だと！」
「やんのかコラァ！」
「やぁぁぁぁってやるぜ！」
「二人とも静かにしなさい！怪我をしているのですよ！？」
「「はいっ！」」

愛紗に怒られちまっただろうが。
よくよく思い返してみる。太原の町でででっかい丸太を南門まで運ばせた。コイツはそれを持って移動しやがったんだったな。それなりに膂力はあった、ということだろう。けど、それなりでしかなかった。まぁ、今のコイツの実力を考えれば、何となく納得出来る気もするんだが。認めたくない。
高順ってのはさぁ、対峙した敵の陣を悉く陥とした、『陥陣営』と呼ばれた猛将だったはずだ。ついでに言うとどんなに呂布に冷遇されても忠義を尽くした人格者だ。それがこんな頭がちょいとアレな感じな人間だなんて信じられるわけがないだろうが。まぁ確かに、親衛隊を練金戦団化したのはコイツだし先の戦を見る限り統率力もそれなりにあるとは思うし気性的に猛将タイプだとは思うけど……まさかとは思うが、俺に関わってこんなになったとか言わないだろうな？……いや、それはあり得ないだろう。俺はこんなにナイスガイなのに。俺に関わった人間が皆頭がちょいとアレな感じになるなら、今頃平家は滅んでるぜ？

「おいダンクーガ」
「……やっぱり大将はそう呼ぶよなぁ……」
「教経様だけではないと思いますが」
「いや、そこはちゃんと呼んでくれ、関羽の姐さんよ」

「断空我は断空我で良いじゃないか」
「だからそれは違うって言ってるじゃねぇか！」
「この際改名しちまえ、うん」
「先祖代々受け継いできた大切な姓と親から貰った大切な名だろうが！」
「断空我の方がしっくりくるのだが？」
「だろ？冥琳」
「うむ」
「……もう良いよ」
「高順、強く生きなきゃね」
「嬢ちゃんだけかよ結局は」
「とりあえずそんなことはおいておこうか」
「……」

……冥琳、結構きっついよね、お前さん。
今のは流石に、ちょっと可哀相だった。ダンクーガは涙目だ。

「教経、公孫賛と話をするのだな？」
「あぁ」
「何の話をするつもりだ」
「この先の話を、だねぇ。奴さん達の力は見せて貰った。どちらかというと、思い知らされた感じだが。力は認めてやっても良い。後はその思想と為人だな」
「どうやってそれを量るつもりだ？」
「まぁ、俺に考えがあるから任せて貰おうか」
「ふむ。……魏延と馬謖、か？」
「……まぁ、皆まで言いなさんな」
「分かった。お前に任せることにしよう」
「任されるさ。取り敢えず、今日はもう店じまいだが、ね」

少し眠いんだよねぇ。血を流したからってのもあるんだろうが、兎に角疲れた。

「ところでダンクーガ、お前さん、いつの間に蒲公英から真名を預かってたんだ？」

「あ～、そのだな。嬢ちゃんが大将の部屋に忍び込もうとしてたのを暗殺者でも来たのかと思って何度も打ち合ってる内にいつの間にかそういうことに」

「そういうこと～♪結構強いんだよ？高順。何度やっても互角だったんだから」

「蒲公英！お前なにやってるんだよ！」

「お姉様も叔母様もご主人様と宜しくやってるんだから蒲公英だって良いじゃん！」

「駄目だ！」

「二人とも落ち着け。教経様は疲れているようだし、今日の所は休ませて差し上げた方が良い」

「ちぇ～」

「ったく。行くぞ蒲公英」

「え～」

「え～じゃない！」

蒲公英の首根っこをひっつかんで翠が陣屋を出て行く。その後を皆付いて出ていった。

冥琳を残して。

「さて、教経？」

「……なんだね、冥琳」

「今日は私の番なのだがな」

「……愛紗は休ませてやれ、と言っていたはずだがねぇ」

「あぁ、休ませてやるぞ？私の腕の中で、だがな」

俺の頭を抱えるように抱き寄せる。

「……あまり心配させるな、教経」

「……あぁ」

「私がどれ程心配したか、分かっているのか？」

「冥琳も気が付いて居た、ということか」

「当たり前だ。私を誰だと思っている」

「美周嬢、だねぇ。……俺が死ぬ、と思ったのか。稟と同じように」

「死ぬかも知れない、と思ったさ。失うことになるかも知れないと。それがどれ程私を不安にさせたか、分かっているのか？」

「済まなかったな。だが、俺はこうして生きているじゃないか。ちゃんと生きて冥琳の腕の中にいるだろう？」

「馬鹿め……」

そう言って口づけしてくる。

「……俺が生きてるってこと、実感させてやるさ、冥琳」

「……馬鹿め」

二度呟いて、そのまま体を預けてくる冥琳をしっかり抱き留めて。寝台に横になる。

「教経。出来るだけ無茶はしないようにな」

「あぁ。分かってるさ。……これからちょっと無茶をするかも知れないがね」

「何を馬鹿なことを……ちょ、ちょっと教経!?疲れているのだろう!?」

「言ったろ？生きてるって事、実感させてやるさ」

冥琳を抱き寄せて、何度も口づけをして。
致した後、そのまま二人で寝た。
冥琳は俺の体を気遣ってくれていたが、俺の方は何故だか妙に元気が良かったんだよねぇ……

明日は、公孫賛との会談だ。どんな奴なのか。まぁ、楽しみだよ。
俺の試しに対する回答込みで、ね。

～雛里　Ｓｉｄｅ～

「良く来たな。改めて自己紹介をしよう。俺が平教経だ。一応、天の御使いをやってる」
「私は公孫賛だ。字は伯珪。今は雛里達の主をやっている」

「……平家の軍師を務めている郭嘉と申します」
「……ほ、ホウ統です」

戦の翌日、平教経さんと白蓮様が会談することになった。
ここに来るまでに陣中の様子を窺ったが、戦が終わったというのに兵達は皆気を緩めることなく体を休めているようだった。よく、この軍勢を相手に此処までこぎ着けることが出来たと思う。

「さて、公孫賛。お前さんは俺に降伏すると言ったわけだが、偽りは無かろうな？」
「あぁ。降伏するよ」
「降伏するに当たって、何か俺に訊きたいことはあるかね？」
「……？姉弟は無事か？」
「あぁ。俺の個人的な虜囚になって貰ってる。不自由だろうが、つつがなく過ごしているとは思うぜ？」
「……そうか。良かったよ」

そう言った白蓮様を見て、平教経さんは眼を細めた。
白蓮様の人物を推し量っているのだろう。助命するに値するか否かを。

「他に訊きたい事はあるか？」
「いや、他にはないよ」
「そうかね……では、降伏したお前さんの処遇を決める前に俺から質問がいくつかあってな。それに答えて貰おうか」
「あぁ」
「お前さんは幽州で死んだ、と思っていたが、どうやって生き延びたンだね？」
「……老臣達が私の影武者を立てて、易京で抗戦したんだ。私を眠らせて、そこにいるホウ統に身柄を預けて。彼らのお陰で私は生き

延びることが出来たんだ」
「へぇ。余程上手くやったらしいな」
「みたいだな。益州でも荊州でも、私が偽者だろうという人間が結構居たしな」
「その老臣達に命を救われたお前さんが再びこの乱世に起ったのは何の為だね？」
「私のような想いをする人間を出さない為に、かな」
「と、言うと？」
「さっき話に出た老臣達は私にとって家族のような存在だったんだ。それを理不尽に奪われてしまった。私が生き延びる為に必要な犠牲だったのは分かるけど、納得は出来ない。生きていく上で、誰かの命を犠牲にしなければならないような世の中を正したかったんだ。そういう犠牲を必要としない世の中を創りたかった。その為にもう一度起ったんだ」
「復讐のため、ではなくかね？」
「……勿論、復讐はする。必ずだ。でも、それは私個人の想いだ。それだけを目的として居たなら、こうやって誰かの主として国を治めたりしようとはしないよ。膝元に忍び込んで確実に殺せる機会を待って殺せばいいんだから。それよりも、誰かの命を犠牲として要求するこの腐った時代を正す方が先だ。そう思ったんだよ」

そう言った白蓮様を平教経さんはじっと見つめている。

「理想も為人も申し分ないようだな。次だ。何故梓潼郡に踏み込んで戦を仕掛けてきたのかね？」
「そうならないように因果を含めて送り出したが、徹底させることが出来なかった。それは、私の責任だ」
「ふむ……まぁ、それは良いだろう。が、きっちり責任は取って貰う必要がある」
「……」

「そうだな……馬謖達を斬って貰おうか」
「……それは……」
「……断れる立場にあるとでも？」
「……駄目だ。彼女達がああいう行動をとったのは、私の責任だと言ったはずだ」
「それは監督責任であって直接戦端を開いた責は別にある。もっと言えば、お前さんがこうやって俺に降伏することになった原因は全てその二人にある。
その二人を斬り捨てるなら、俺と並び立つ諸侯として認めてやっても良いぜ？孫策や董卓より上の扱いをしてやっても良い。どうだ？斬り捨てる気になったか？国の為だ。奴らには確かに罪がある。斬刑に処されても仕方がない様な罪がな。であればこれを処断して俺の歓心を買い、諸侯として並び立てばいいじゃないか」
「そうやってまた誰かを犠牲にして私は生きてゆくのか？そんなのは御免だ。私はそんな世の中を正す為に起ったんだ。その私が率先して誰かを犠牲にしてのうのうと生き延びることをするわけがないじゃないか。
……私は、殺されても構わない。だから私に従っている者達は全員助けてやって欲しい」
「本気で言っているのか？」
「本気だ」

暫く黙って睨み合うような感じになっていたが、平教経さんがフッと笑みをこぼした。
……恐らく、試していたのだろう。

「良いじゃないか。抱いた理想に殉じるだけの覚悟をきちんと有している、か」
「……どういうことだ？」
「認めてやる、と言っているんだよ。俺はお前さんを試したのさ」

「……もし、私が二人を斬刑に処すことを受け入れた場合、どうするつもりだったんだ？」

「それが当たり前のことだから、という感じで処断したのなら何もしないさ。だが『泣いて』馬謖達を斬る様な真似をしたならば、この場では言った通りに認めておいて、後から難癖を付けて攻め滅ぼしただろうねぇ」

「何故」

「お前さんが言った通りだ。奴さん達があいった行動をしたのは、偏にお前さん自身に責任がある。確かに奴さん達を罰することは必要だが、『泣いて』馬謖達を斬るような真似をしやがるならその思い上がった自己陶酔ぶりをぶっ壊してやろうと思っていたンだよ。信賞必罰は武門の拠って立つところだ。それを執り行うのは結構だが『泣いて』行う必要はない。正しいと思っているなら泣くなってことだ。泣くほど辛いなら斬刑以外で罪を償わせることが出来ないか、百官を集めて審議に掛ければ良いンだ。それをせずしてただ涙を流し、処分をする自分も辛いのだ、等と内外に印象づけるような真似をする奴は俺ぁ嫌いだ。『俺が嫌い』ってのは、俺にとって十分に攻め滅ぼすだけの理由になるンだよ。醜悪だと感じればこそ嫌うんだからねぇ」

醜悪だから攻め滅ぼす。

単純明快だ。あえて物事を単純に割り切ったような物言いをしているのだろうと思う。

「で、二人にはどんな罰を与えたんだね？」

「……特に罰しては居ないし、罰するつもりもない」

「……俺の聞き間違いか？今、罰しない、と聞こえたンだが？」

「聞き間違いじゃない。罰するつもりがない、と言ったんだ」

平教経さんの気配が剣呑な物に変わる。

「俺が言ったことが理解出来ていないみたいだな？奴さん達は斬刑に処されるべき罪を得たンだ。それを罰しないというのは、いずれ国を誤らせる基になりかねないモンだぜ？」
「だからといって彼らを処分することは私には出来ない。私は、自分が生きていく為にもう誰も犠牲にしたくないんだ」
「戯けたことを。お前さんが俺と争ったが為に戦場で死んでいった人間は、正しくお前さんが生きていく為に犠牲になったんじゃないか。何を言って居やぁがる。自分が直接関わる、近しい人間が犠牲になるのは嫌だが、そう親しくない人間が死ぬのは構わないとでも抜かすつもりか！」

そう、怒号をあげる。

「そうじゃない！」
「そうじゃないだと？何処が違うって言うンだ？奴らの非を鳴らし、その罪に相応しい罰に服させないってのは近しきに依怙の沙汰を下すことと同義だろうが！」
「……」
「俺に降伏した以上、俺の言うことには従って貰うぞ、公孫賛。……奴らを処罰しろ。分かったな？」
「……嫌だ」

白蓮様はどうやら平教経さんが言っていることを少し誤解しているようだ。差し出がましいけれど、ここで発言しておかないと取り返しが付かないことになるかも知れない。

「……貴様、いい加減に……」
「教経殿、少し、宜しいでしょうか？」
「……まぁ、良いだろう」

私が発言を求める前に郭嘉さんが発言を求め、平教経さんはそれに許可を与えた。
郭嘉さんを見ると、私の方を向いて頷いてくれた。
多分、私が言おうと思ったことと同じ事を言ってくれるだろう。

「公孫賛殿、教経殿が仰っていることが理解出来ないのでしょうか」
「……理解は出来るよ。でも」
「少し、聞いていて下さい。
確かに教経殿は最初斬刑に処せと仰いましたし、その罪に相応しい罰は斬刑であると仰いましたが、何が何でも斬刑に処せ、とは仰っておりません。それに、気が付いて居ますか？」
「え？」
「『泣くほど辛いなら斬刑以外で罪を償わせることが出来ないか、百官を集めて審議に掛ければ良い』。そう仰いましたが、聞いていらっしゃらなかったのですか？」
「あ……」

どうやら、白蓮様も気が付いたみたいだ。

「……後は、教経殿にお任せします」
「……成る程、そこで食い違ってたからああまで頑なに処罰を拒否してたのか」
「そういうことです」
「……稟、有り難うよ。もう少しで誤った判断を下すところだった」
「いえ。それを正すのも軍師の役目ですから」

少々、耳が痛い言葉だった。
本来であれば、私が言わなければならなかったことだ。それを平教経さんと郭嘉さんにさせてしまっている。私自身、話を聞くまで処

罰と斬刑が同じ物だと思い込んでいたからだけど。

「さて、公孫賛。俺が言いたかったのは、『処罰は必須』ってことであって、『斬刑は必須』という事じゃないってことだ。それは、理解出来たな？」

「……ああ」

「では、どうしても斬刑に処すことが出来ないなら今から百官を集めて奴らの罪に相応しい罰を与えてやれ。きっちり罰を与えたなら、俺の方で言うことはない。が、斬刑こそ相応しい罪だ、と思っていることだけは忘れるなよ？忘れて甘すぎる罰を与えたなら、その時は俺自身がお前さん含めて処断を下す。

……分かったかね？」

「……分かったよ」

「ご理解頂けたようで重畳だ。じゃぁ、お前さんの処遇について結論を出そう。

今のお前さんに、月や雪蓮と同じような、一勢力の主としての権限を与えてやることは出来ない。全面降伏し、俺の手足として働いて貰う。家臣団も一旦解体し、平家に組み込んだ上でお前さんの配下に幾人か付けてやる程度にする。……異存はあるか？」

「……それだけなのか？」

「あぁ？」

「いや、私はもっと酷いことを想像していたんだが」

「例えば？」

「その、私を慰み者として囲い込むとか……」

「馬鹿め。俺はお前さんの体に興味はない。興味があるのは中身だけだ。

お前さんが信賞必罰をしっかり行えていたなら、月達と同じように俺の下で勢力を保ったまま付き従うことを誓約してくれれば良いと思っていたンだがねぇ。残念ながら落第したんだよ、お前さんはね」

「……そうか」

「そうだ。
……勢力の主として、最後の務めを果たしてくるが良い。それが、『責任を取る』って事だ」
「分かったよ」
「全てが終わったら報告しに来るが良い。その時点から、お前さん達は平家の郎党だ。その時改めて真名を預かろう。それまでは公孫家の主として、またその家臣として恥ずかしくない行蔵を示せ。あぁ、それから？姉弟は解放して一旦お前さん達の所へ返す。百官を集めて話をする以上、重要参考人になりうる二人が居ないんじゃ話にならンだろうからねぇ。
……会談は以上だ。ご苦労だったな」

会談は終わった。勢力としての公孫家は無くなった。けれど、白蓮様は生きている。
……良かった。関靖さんや田楷さんに、顔向け出来ないようなことにならなくて。

平家に組み込まれることになるけれど、私だけでも白蓮様と共に居られるようにお願いだけはしてみよう。白蓮様の死は許されない。白蓮様が死ねば私も死ぬのだ。私と共に死ぬと白蓮様が仰ったあの時に、そう決めたのだから。そう、誓ったのだから。

焔耶と瑛に下す処罰を検討する為に皆に招集を掛ける。それなりに厳しい罰を受けて貰う事になるが、あれ以降の二人の様子だと進んでそれを受けるだろう。これで今回の戦は、本当に終わることになる。

それから後は、私の大願を果たせるかどうかが重要だ。
……一度、平教経さんと話してみよう。歪んでしまった朱里ちゃんを救い出す為に、私は朱里ちゃんと道を違えたのだから。それだけ

は、どうしても叶えたいから。

～愛紗　Ｓｉｄｅ～

教経様が公孫賛との会談を終えて陣に帰ってきた。少しご機嫌斜めに見えるけれど、何かあったのだろうか。そう思って稟を見ると、稟は少し困ったような顔をしていた。

「教経様、お帰りなさいませ」
「……あぁ、ただいま、愛紗」
「愛紗、教経殿のことは頼みますね。私はこれから軍を再編しなければならないので」
「あぁ、分かった」
「……ふぅ」
「お疲れになっておられますね。どうなさったのですか？」

「……実力は確かだった。為人も理想も申し分なかった。が、器量がちょっと、ねぇ……楽が出来ると思ってたンだが、そうは問屋が卸さないらしい」

「教経様のお眼鏡には、適いませんでしたか」

「ちょっとな。信賞必罰が為ってない時点で一国を任せるとかあり得ないだろうよ」

成る程。器量が十分なら益州南部と荊州南部を任せて御自身は北部に専念しよう、という腹づもりであったらしい。

「面倒臭い、ですか？お得意の」

「うるさいねぇ。面倒臭いのは確かだろうが。俺ぁその手のことに関わるのは嫌なンだよ」

様々な経験をして色々と成長されたが、此処はあの頃と変わらないらしい。

仕方がない人だ。

「そう言っていつも稟や風を困らせているではありませんか」

「最近は文官連中も増えてきたことだし、そう困らせた覚えはないんだがねぇ。太原にいた頃ならいざ知らず、今じゃ二人とも平家の重鎮で配下をこき使える身分なンだ。良いようにしてくれればいい物を」

「それでも教経様にご採決頂かなければならないこともあるでしょうに」

「分かってるから面倒臭いながらに政務に励んでいるんじゃないか」

「言ってもやることが変わらないなら、黙ってやった方が良いと思いますよ？」

「放っておけ。その事で人が俺をどう評価しようと知ったことか。面倒臭い物は面倒臭いンだよ。人間楽をしたいって考えを捨てちま

ったら技術は進歩しないぜ？」
「楽をしたいと思うのとサボりたいと思うのは別だと思います。我田引水も程々に、ですね」
「……俺を虐めて愉しいかね」
「はい、とても」
「……はぁ～。嫌だ嫌だ。公孫賛が存外に期待はずれで落胆している所を慰めて貰おうと思っていたのにこんな風に虐められるなんてなぁ……辛いから今日は余所で慰めて貰うとするよ」
「の、教経様！？」
「……なンだ？愛紗は俺を虐めて愉しいんだろう？いいさ。俺は他で慰めて貰うからさ」
「ひ、卑怯です！」
「何が卑怯なんだね？」
「そ、それは……教経様の普段の行いが悪いからではありませんか！」
「あ～、更に傷ついたなぁ～？」
「うぅ……ど、どうすれば良いのですか！」
「膝枕して貰いたいなぁ～」
「……ここで、ですか？」
「そ、ここで」
「陣屋の中でならば……」
「こ・こ・で」
「～～～～」

周囲には兵が居るのだ。その前で、教経様に膝枕をするなんて……

「あぁ、無理なら良いんだよ？俺は他に」
「……どういう噂が流れても知りませんからね！」
「おわ」

教経様を引っ張りながら座り込み、膝枕をして差し上げる。

「……強引だねぇ、愛紗」

「教経様が悪いのです。今日は、私の番なのに……他に行くなどと仰るから」

「分かってて言ったンだけどな」

「知っています。教経様は本当にお人が悪い」

「その人が悪い人間に抱かれる訳だがね？」

「……それとこれとは、話が別ですから」

「やれやれだぜ」

「なんですかそれは？」

「まぁ、気にしなさんな」

「はあ」

二人でゆっくりと過ごしている。こうして居ると、いつかお茶屋の軒先で教経様を膝枕していたことを思い出す。教経様も、同じだったようだ。

「……なぁ、愛紗。あの服、普段着てないよな。余り気に入らなかったか？」

「いえ。そんなことはありません」

「んじゃ、なンで着ないンだ？」

「その、一緒に買い物に行って、教経様に見立てて頂いて買った服ですから。大事にしようと思って……」

そう言った私にちょっと意外そうな顔をした後、嬉しそうに笑っていた。

「馬鹿だな愛紗。言ってくれればまた見立ててやるし、今度は俺が買ってやるさ」

「……お誘い、ですか？」
「そうだよ。愛紗、落ち着いたらまたクロノクルん所で服を買ったり、一緒に飯喰ったりしてゆっくりしようぜ？ンで、普段の愛紗とは違う、ちょっと素直な可愛い愛紗を見せてくれよ」
「か、可愛いなどと」
「可愛いよ、愛紗」

真面目な顔をしてそう仰る。

「あ、ありがとう、ございます」

そう言って俯いてしまった私の頬を両手で挟んで、前に向かせた教経様は、いつの間にか起き上がっていて。
そのまま私に口づけして下さった。

「……んっ……」
「……名残惜しそうだな、愛紗」
「そ、それはその……」
「……人前、だぜ？」
「あ」

忘れていた。

「教経様！」
「はいはい。……陣屋に入るか、愛紗」
「最初からそうして下さい！」
「虐めてくれた意趣返しさ」

共に陣屋に入って、それからずっと二人で過ごした。途中で、？姉弟が挨拶に来たけれど。？艾は何やら少し不機嫌だった。その？艾

を見た？忠はニヤついていたが。

「片が付いたら、次は劉表だな」

「そうですね」

「今回ほど苦労するとは思わないが、用心していくことにしよう」

「皆から散々言われたとは思いますが、私からも言っておきますね。教経様、ご無理をなさっては駄目ですからね？」

「あぁ。分かったよ。今回得た教訓は次に活かしてみせるさ」

「それなら、宜しいのです」

劉表に報いを呉れて遣ったら、めぼしい勢力は曹操と袁紹だけだ。あと少し。あと少しで、教経様が思い描く理想の世の中を顕現させる事が出来るようになる。その世の中で、私はどんな人生を歩むのだろう。教経様が言っていたように生きていけるのだろうか。

「どうしたンだね、愛紗」

「いえ、何でもありません」

「……まぁいいがね。寝るとしようか、愛紗」

「……はい、教経様」

今は、先のことを考えるのは止めよう。そうなった時に改めて考えれば良い。

教経様に抱かれながら、そう思った。

蝶の如く～１１７～（前書き）

人から言われて初めて気がつきましたが、ランキングってあるんですね。
皆様のおかげをもちまして、月間、四半期ランキングでそれぞれ５位と２位になっておりました。言われて見て、吃驚しました。

有り難う御座います。作者として嬉しく思います。

今後とも、拙作を宜しくお願い致します。

蝶の如く～１１７～

～華琳　Ｓｉｄｅ～

黒山賊の兵を吸収した後、予てより定めていた通り官渡へ移動している。現在、黄河を渡渉し延津を通過した辺りだ。順調に行けば五日ほどで官渡に到着するでしょう。昼夜兼行で駆け続けさせれば二日で到着することも可能だけれど、追撃してこないようだし通常の行軍速度で良いでしょう。

黒山賊を吸収したことで軍勢は６０，０００を越えた。これだけの兵があれば、例え麗羽が１００，０００を越える兵を率いてやってきたとしても勝利することが叶うでしょう。

官渡周辺は、私が学んできた兵法の知識を全て注いで作り替えたのだから。官渡の城を取り囲む相手が常に死地にあるように、元々あった沼地を大きくして足場が悪い土地を広げてやった。それ以外の場所は、陣を張るに不適切になるように作り替えた。

周辺に木を植えて見通しを悪くした。また、岩を設置して地面に埋め、軍を展開出来ぬようにしてやった。無論、軍を展開する際に大きな支障と為らない場所に、それでも全軍を展開させるに当たっては少々手狭になるように。そしてそれを除けたら、水が流れ込んで足場を更に悪くするように。除けようと除けまいと、私にとっては好都合となるように置いておいたのだ。

「華琳様。平教経が梓潼で公孫賛とぶつかったようです」

「そう。教経の敵ではないでしょうね」

「はっ」

「麗羽は今どの辺りにいるのかしら」

「我らを討伐すべく途中で兵を吸収しながらこちらへ向かって来ているようです。現在、白馬辺りにいるとのことです」

「……随分遅いわね。同数の兵を先行させて私達をここに釘付けにしておき、後から援軍として合流させた方が良いと思うのだけれど。私達が何らかの意図を持って後退していることは分かっているでしょうし、自領内で地の利を得て戦う事を考えついても良さそうなものなのにね」

「先行させた部隊が我々に打ち破られるかも知れない、と考えているのかも知れません」

「そんなことを考えるような人間じゃないわよ、麗羽は。自分の都合が良いようにしか物事を見てこなかったからこそああなって居るんじゃない」

「……確かにそうかも知れませんね」

「心にもないことを口にする物ではないわよ？秋蘭」

「はい、華琳様」

私達を急追しないのは、兵力を以て覆滅せしめることを意図しているからでしょう。どのような罠を仕掛けて待ち受けていようとも、大兵力を以て罠ごと呑み込めば問題無い。急追して捕捉し同数の兵で策を競い合うより、純粋な力によって圧倒しようというのでしょうね。

考えとしては間違っていない。けれど、大兵力を活かすことが出来なければその策自体が破綻することになる。我が領内で戦うのなら、その辺りに考えが及んでいるべきだと思うのだけれど。

「まぁ、いいわ。ゆっくりとやってくると言うのならそれでも構わない。但し、私があちらの思惑通りに官渡で逼塞して到着を待ってあげる必要もないわ」

「華琳様、では……？」

「延津で一度麗羽達を襲撃しましょう。更に兵数を減らした上で決戦するのが良いでしょう。桂花、凪達を官渡へ先行させ、吸収した

黒山賊達を再編して我が軍に組み込みなさい。私達は途中で道を外れて引き返し、南阪で埋伏する。延津に入る為に黄河を渡渉し始めたら、北上してこれを叩くわ」

「はっ」

「春蘭、秋蘭。貴女達も私と共に来なさい」

「「はっ」」

流石に警戒して行軍はしているでしょうからね。一旦全軍で官渡を目指して目を眩ませ、南阪で麗羽達を待つ。渡渉を始め、全軍の半分が河に入ったところでこれを叩けばかなりの損害を与えることが出来るでしょう。先の戦と合わせれば、これでかなり兵力差を縮めることが出来る。兵達の指揮高揚にも繋がるわ。

戦略的には何とか五分に持ち込むことが出来ているはず。

あとは、戦術的な勝利を積み重ねることで戦略的な勝利を掴み取るだけよ。

～田豊　Ｓｉｄｅ～

「田豊さん、これからどうすればいいの？」
「素直に渡渉出来るとは思えません。此処は文醜殿と顔良殿の隊を先に渡渉させ、渡渉中の安全を確保させてから渡渉するのが宜しいかと」
「そっか。渡渉してる最中に襲われちゃったら危ないもんね」
「その通りです。ですから……」
「うん。麗羽ちゃんにそうお願いしてくるね」
「宜しくお願い致します、劉備殿」
「も～、私のことは桃香で良いって言ったでしょ？」
「……はぁ。まだ慣れぬものでして」
「ま、いっか。直に慣れるよね？じゃ、行ってくるね」

劉備殿はそう言って麗羽様に進言する為に陣屋を出て行かれた。彼女に言わせれば、進言ではなくお願いらしいが。何にしても、私の進言が採用される様になってから生きるハリのような物を感じている。

劉備殿の背中を見ながらこれからの戦に思いを致す。
孔明殿が徐州へ赴任していく際に交わした遣り取りを思い出しながら。

「曹操との戦で我々が負ける、と仰るのですか」
「はい」

「何故」
「貴方も分かっているのではありませんか？」
「……袁家の戦略が予断を含みすぎているからですか」
「その通りです。しかもその予断は、曹操を甘く見ていることに由来しています。君主としても策士としても一流である彼女を侮ることは敗因としかなり得ません」
「しかし如何に策を弄そうとも、そもそもの兵力差が大きすぎるでありましょう。平教経を相手取るならまだしも、現時点の曹操が相手であるならば兵力差に物をいわせて押し切る戦が出来るのではないでしょうか」
「今の袁家の認識の甘さという物が貴方の言葉から滲み出ている様ですね。
兵の数では袁家が勝っています。軍師の器量でも私がいる以上互角にしてみせます。しかし兵の質、将の質、将の数、家中の和、そして何より戴いている主君の器量。その全てにおいて袁家は劣っています。局地戦ならいざ知らず命運を賭けた大戦において勝てるはずはありません。
局地戦においては偶発的な事象によって勝敗が決することは多々あります。ですが国家の命運を賭けた大戦においては、一戦場において勝つ事は重要ではありません。無論、その戦場で敵の主将を討ち取ることが出来れば話は別ですが。最終的な勝利を手に掴む為には、戦全体を見通し相手に対して常に優位に立っていることが重要になるのです。僥倖を端から望むような戦略を立てているようでは負けは確定しているようなものです」
「僥倖を望むような戦略は立てていないつもりですが」
「……では訊きましょう。
田豊さん、貴方は曹操が大軍の利点を生かせぬよう策を巡らせ、両軍の兵数に大した差が無くなってしまった状態で曹操と対峙することを考えたことがありますか？
兵数差を保って戦場に到着した時に、その戦場で全ての兵を展開さ

せることが出来ないことに思いを致したことがありますか？
優勢に戦を進めることが出来たとして、不和によって最良の策を退けるような真似をされたり思わぬ負傷によって主攻を担う将が離脱したりすることを考えたことがありますか？
そもそも曹操が国内の兵を尽くして戦に臨んでくることを考えたことがありますか？
曹操と平教経が同盟して先ず袁家を滅ぼさんとする可能性については？
曹操と対峙中に幽州で大規模な反乱が発生する可能性は？
荊州南部に逃げ込んだ公孫賛が兵を糾合し揚州を通過して徐州に攻め寄せる可能性は？
平教経が曹操と袁家諸共に呑み込もうとその配下の全将兵を引き連れて戦場に乗り込んでくる可能性は？」
「……いくつかは。しかし、それら以外は想像もしておりませんでした」
「それは全て、『こんな事が起こるはずもない』『こうあって欲しい』という予断を持っているから想像出来なかったのです。予断を持たずに起こりうる事象を全て想定し、それらが起こる可能性を一つずつ検証し、発生した場合の危険性を鑑みて発生しないように策を弄したり発生した場合の対処方法を考え、想定外の事態が起きた時でも対処出来るよう余力を持った状態で眼前の敵と向かい合っておく必要があるのです。それを行えない者に軍師たる資格はありません。
私が挙げた事態がどれ一つ現実の物にならないとしても、それは僥倖に過ぎないのです。その可能性の芽を摘んだ結果そうなったのではなく、ただ偶然その結果が得られただけでしかないのですから。
だから、今貴方が思い描いている戦略は僥倖を端から望んで建てられたものに過ぎないのです。
今回の戦については、既に私の方で粗方検討を済ませ、いくつかの危険な要素についてはそれを押さえ込むべく策を施してありますが、

今後もこのようでは困ります。貴方の知らないところで私が手を打って居たから上手く行った、というのも、貴方にとっては僥倖でしかないのですから」

言っていることが正しい事は理解出来る。だがそれを徹底して行える人間が果たして何人いるだろうか。孔明殿には出来るのだろう。孔明殿が高く評価している曹操と平教経もそれが出来るに違いない。

「……根拠のない優越感は醒めたようですね」

「はっ。申し訳ありません」

「貴方はこれで問題ないでしょうがその他の人はそう簡単に目を醒ますことは無いでしょう。先に挙げた様々な状況を想像さえしないで戦を行えば、袁家は苦汁を舐める事になります。その後、攻め滅ぼされることは自明です」

「……」

「しかしそれを座して待つ私ではありません。私は徐州へ内政官として厄介払いされるようですが、策は考えてあります」

「それはどのような？」

「……袁紹さんと桃香様が率いるであろう本隊には、そのまま苦汁を舐めて頂くことにします」

「……それは」

「戦に負けて敗走する袁紹さんと桃香様を必ず追撃するでしょう。その後背を私が徐州から長駆して突きます。その兵を率いる将については目星を付けてあります」

「少し、お待ち下さい。本隊が負けることが分かっていて、何故それを防ぐ為の策をお考えにならないのです」

「無駄だから、です」

「無駄ですと？」

「はい。そもそも私が徐州に遣られるのは、袁家における権勢を競うことにしか意識を働かせることが出来ない蒙昧の輩がいて、その

意見に袁紹さんが重きを置いている為です。彼らは戦場においてさえ己の権勢を高める為に互いを牽制しあうことでしょう。家中の和が保たれているならば他にやりようがありますが、それを望むことが出来ない現状では手の打ちようがありません。

勝つ為に最上と思われる策を献策したとしても、袁紹さんはそれを受け入れないでしょう。なぜなら、その周囲にいる者達が私や田豊さんに手柄を立てさせまいと妨害するであろう事が間違いなく、また袁紹さんが彼らの意見を採用するであろう事が確かであるからです」

「そうとも言い切れますまい」

「田豊さんが納得出来ないのであれば、本隊が負けることを回避する為に最善を尽くされるが良いでしょう。但し、もし何を言っても事態が好転しないであろう、と感じた場合は私の策に則って時機を待って欲しいのです。しつこく献策や諫言を繰り返し、軍兵を掌握する事が出来ない状態になることだけは避けて下さい」

「……分かりました。必ずそのように致します。孔明殿の策についても了解致しました。しかし、それだけで勝てるでしょうか。それに、孔明殿が仰るように苦汁を舐める事になったとしても、負け様という物がありましょう」

「田豊さんに頼みたいのはその事です。貴方が今言ったように、敗戦すると言っても配下の兵を悉く喪うような敗戦になってしまったのでは、例え曹操に勝てたとしても平教経に攻め込まれることになるでしょう。それでは拙いのです」

「壊滅するような負け方をしないようにしろ、と仰るのですか」

「そうです。そうなりそうになった時の為に桃香様への書状を認めておきます。それを田豊さんに預けておきますから、桃香様へ見せると良いでしょう。ただ、貴方にやって頂きたいことはそれだけではありません。私は長駆して後背を突きますが、そのこと自体を陽動とするつもりです。恐らく曹操は敗走する本隊を捨て置いて、後背に迫る軍を討とうとするでしょう。その曹操の後背を突く軍が必

要です。張コウさんにも既に話をしてあります。彼と貴方で軍勢を隠し、温存し、その時に備えておいて欲しいのです」

「張コウ殿にも」

「ええ。このことを知っているのは、私、沮授さん、田豊さん、張コウさん。あと、正式に決まったらになりますが、麹義さん。この五人だけになります。

……田豊さん、此処が袁家が迎える最初の山になります。私達5人だけですが、この5人の和によってこの山を越えるしかないのです」

「……微力を尽くします」

そう言うと孔明殿は頷いた。それから直ぐに孔明殿は徐州へ内政官として赴いていった。

『後は任せます』。

そう言って。

「田豊殿」

「……張コウ殿か」

「何やら考え事をしていたようだが、後にしようか？」

「いや、孔明殿の仰ったことを思い返していただけだ。首尾は？」

「……白馬周辺に１５，０００の兵を埋伏させた。意図を気取られないようにするのは骨が折れたがな」

「郭図達は何か言っていたか？」

「『白馬を突かれると思っているのか、阿呆め』と言って笑っておったわ。言い様には腹が立ったが、後のことを思えば何も知らぬ奴らが憐れで仕方が無くなってな。適当に流しておいた」

「そうか。……無駄になってくれれば良いのだがな」

「さて、あの様子ではそれは望めまいよ。まあ、保険を掛けておいたと思っておけば良かろう」

「うむ」

「それで、どう黄河を渡渉する？」
「文醜殿と顔良殿に先行して貰う」
「……妥当だろうな」
「自分が行きたい、と言うかと思ったが」
「馬鹿なことを。孔明殿から、来るべき時こそが俺の戦の始まりとなるのだ、と聞かされている。この俺は大事を控える身だ。前哨戦でつまらぬ意地を張って負傷したのでは顔向け出来ん」
「ならば良い」
「しかし来るかな？既に官渡に到着して我らに備えている、と郭図達から聞いたが」
「分からんが、あり得そうにないことでも考えて置くべきだ。この場合は、あり得そうなことであるから尚更に、だな」
「孔明殿の受け売りか？」
「何故そう思う？」
「同じ事を俺も言われたからさ」
「私でもこの程度の事は考える。まあ、予断を持つなと叱責されたことは認めるが」
「ははっ、俺と変わりが無いじゃないか。……どうやら渡渉することに決めたようだな」

騎馬隊が2隊、それぞれ5，０００程渡渉し始めている。旗は『顔』に『文』。私の献策を採用させる事が出来たようだ。

「では俺たちは後からゆるゆると付き従わせて貰おうか」
「それが良いだろうな」

騎馬隊は対岸まで渡りきり、周辺を警戒しているようだ。後続の辛毘の隊が隊伍を崩し、緊張感のかけらもない様子で渡渉を始める。曹操はきっと何処かでこの様子を見ているに違いない。そう考えて警戒し、いつ襲われても落ち着いて行動出来るように用意しておく

べきなのだが、余り言い過ぎると不興を被りかねない。ここは、騎馬隊で周囲を警戒させることが出来ただけで満足すべきだろう。

……味方を警戒しなければならないとはな。それも、己が主を。

釈然としない想いで渡渉の順番を待っていた。

～華琳　Ｓｉｄｅ～

南阪で埋伏して麗羽達の動向を窺っていると、情報収集に当たっていた桂花が待っていた報せをもたらしてくれた。読み通り、延津の対岸から渡渉するようだ。

「華琳様、袁紹軍は騎馬隊１０，０００を二手に分けて警戒しているようです」
「そう。良くやってくれたわ、桂花」
「か、華琳様～」
待ちに待った報せをもたらした桂花を褒めると、桂花は恍惚とした表情を浮かべた。
「桂花、まだ策が成ったわけではないのよ？」
「は、はいっ、華琳様」
「ふふっ、可愛いわよ、桂花。今晩可愛がってあげるから頑張りなさい？」
「はいっ！」
「それで華琳様、如何致しましょうか」
「分かっているでしょう秋蘭。私達は渡渉中の敵を襲う為に此処に埋伏し、そして警戒しているとは言え予測通りの場所で渡渉し始めたのよ？……後は為すのみよ」
「畏まりました」
「桂花、敵軍はどの程度居るの？」
「延津対岸に集結している袁紹軍は、およそ１２０，０００。かなり無理をして集めたのでしょうが、これだけ時間を掛けても想定より２０，０００多い程度しか引き連れる事が出来なかったようです」
「そう。それで時間が掛かっていたのかも知れないわね。春蘭は敵右翼側を警戒している隊に当たりなさい。秋蘭は左翼側へ。私がその間隙を縫って敵を叩く。渡渉を終えた敵が４０，０００を超えた時点で撤退するわ」
「お任せ下さい華琳様！邪魔する敵を薙ぎ倒して直ぐに駆けつけて見せます！」
「姉者、私の配下の兵から３，０００程姉者に預けよう」
「ん？何でだ？」

「その方が早く華琳様の所へ行けるだろう？」
「成る程！……秋蘭はどうするのだ？」
「私は救援に向かうであろう左翼を防ぐだけになりそうだからな。姉者、私の分まで頼むぞ？」
「任せておけ！季衣、征くぞ！」
「は～い」
「では私達も征くとしようか、流琉」
「はい、秋蘭様」
「桂花、準備は良いかしら？」
「いつでも出陣出来ます！」
「では征きましょう。勝利を掴む為に」

「全軍、矢を射掛けなさい！後方に注意を払う必要はないわ！思う存分におやりなさい！」

号令一下、一斉に矢を放つ。敵の半渡を捉えることが出来た。これでこの場の勝利は確定したわね。渡渉する袁紹軍は身動きを満足にすることが出来ぬ状況で斉射を受けたことにより混乱しているようだ。その場に居すくんでいる隊もあれば、後退しようとする隊までである。

……馬鹿ね。遮二無二突進してくるより他にはないと言うのに。一

度決めた方針は途中で曲げない物よ？

「敵は混乱している！間断なく矢を射掛けて殺してやりなさい！死にたいと言っているのだからその望みを叶えてやるのが慈悲というものだわ！」

兵達が気勢を上げ、嵩に掛かって矢を射掛け続ける。この分なら、かなりの損害を与えることが出来るでしょう。対岸で警戒していた敵右翼を、春蘭達が蹂躙している。こちらへ来させぬように右翼部隊の左側から圧力を掛けて川岸へ押し込んで行っている。敵左翼も事態に気が付いてこちらへ進出してこようとしているけれど、秋蘭に良いように勢いを殺されて進めないで居る。

「そろそろ敵が上陸してくるわ。槍隊の用意を」

「はっ」

「それから秋蘭たちが居る側に上陸しそうな隊があるわ。騎馬隊を差し向けて時間を稼がせなさい」

「畏まりました」

「華琳様！春蘭ただ今参りました！」

「随分早かったわね、春蘭」

「秋蘭のお陰です！兵数で敵を圧倒してやりました！」

「そう。春蘭は一旦待機して居なさい。上陸した敵に先ず槍隊をぶつけるから、その槍隊が後退する時機に春蘭が代わってあげて頂戴」

「お任せ下さい！おい！部隊に一旦休息を与えろ！」

「はっ」

春蘭が来たのであれば、本陣から秋蘭達の後背を付ける位置に上陸しそうな隊を叩く為にいくら寡兵を割いても問題無いでしょう。

「桂花、春蘭の隊が前線に投入された時点で秋蘭の側へ兵を増派す

るわ。選別しておきなさい」
「畏まりました」

敵はまだ一人として渡渉出来ていない。思惑通りの展開ね。こうも順調だと張り合いがないわ。

「敵後続部隊が横一線に並んで渡渉してきます」
「遅いわ。今までにどれだけの兵を喪っていると思っているのかしら」
「それでも変じないよりはマシでしょう」
「そうね。それは認めてあげるわ」

押し包まれる前に撤退すれば問題無い。それまでに、出来るだけ敵兵を削っておくのよ。
上陸し始めた敵兵と槍隊がぶつかる。あちらの足場は悪く、衣服が濡れて動きが制限される。こちらの優位は揺るがないわね。

秋蘭の隊を見れば、兵を交互に退かせて敵に突破出来る可能性を見せることで引きつけ続けて居る。敵よりも多くの兵を有しているが、突破させない為にあえて負けぬ戦いをしているのでしょう。
前線では既に春蘭が敵兵の中に飛び込み、これでもかと叩き続けて居る。……槍隊が後退する時機に、と言ったはずなのだけれど。まあ、敵兵が続々と上陸している中、槍隊が孤立することになりかねなかったし、春蘭としても黙ってみていることが出来なかったのでしょう。
春蘭が敵に突っ込んだのを見た桂花が直ぐに秋蘭側へ兵を増派したようだ。この辺りは流石ね。

「桂花、状況は？」
「はっ。敵軍が一斉に寄せてきた関係で、既に３５，０００程が上

陸に成功したようです」
「そう。そろそろ退くわよ、桂花」
「まだ４０，０００を越えておりませんが？」
「あれを見なさい、桂花」

そう言って指で敵後方を指し示す。
前方で戦闘になり、矢がさほど多く飛来しない状況であっても兵に木盾を持たせて前進してくる部隊がある。その隊の先頭は長柄の槍を持っている。上陸後直ぐに襲撃されることを想定して用意しているに違いない。

「あの隊が上陸してきたら、こちらの損害が大きくなるでしょう。これはまだ前哨戦に過ぎないのよ、桂花」
「はっ。各隊を撤退させます」
「それが良いでしょうね。秋蘭の隊に季衣を合流させ、これを殿としなさい。撤退時の先頭は春蘭。先行して安全を確保させなさい。その後に私が続くわ」
「ではそのように」
「ええ」

全軍を撤退させる。秋蘭なら上手く殿を務めるでしょう。
そのまま、想定外の事態もなく撤退に成功した。

「桂花、我が方の損害は？」
「１，０００に満たない数です」
「そう。それで袁紹軍に与えた損害は？」
「１０，０００以上２０，０００未満、と言ったところでしょうか。先ず大勝と言って良い戦果かと」
「上出来だわ」

これで当初の予定よりも兵力差を詰めた状況で対峙することが出来る。こちらは６０，０００、あちらは１００，０００。攻城戦を行うにはちょっと兵力が不足しているわね、麗羽。

あとは糧食の問題になるが、それはあちらとて同じ事。攻勢を防ぎきって後退を誘い、その後背を突いて一気に冀州を制圧する。その後はじわじわと締め上げてやれば自ずと立ち枯れることになるでしょう。

まぁ、言うほど簡単にはいかないのでしょうけれどね。

蝶の如く～118～（前書き）

皆様如何お過ごしでしょうか。
地震及び原発の状況が気になって気になって仕方がありません。

被害に遭われた方々にこれ以上の災難が降りかからないよう、祈念致します。

蝶の如く～118～

～斗詩　Ｓｉｄｅ～

黄河を渡渉する私達を曹操さんが襲撃してきた。先行して渡渉して警戒していた私と文ちゃんの隊は完全に抑えられ、半渡にあった本隊に襲いかかって来た。被害を出したが、事前に田豊さんから言われていたからこの程度で済んだ。もし郭図さん達が言うように何の確認もせずに一気に渡渉した場合、最悪麗羽様を討ち取られていた可能性だってあるんだから。

「田豊さんの言ったとおりにしておいて良かったですね、麗羽様」

「斗詩さん、何を言っているのです！被害が出たではありませんか！とんだ役立たずですわ！」

「なぁ～姫～。もし田豊のオッサンの言う通りにしてなかったら、姫の本陣に曹操が突っ込んできて姫を殺したかも知れなかったんですよ～？」

「華琳さんなど私一人で十分だったのですわ！……まあ、役立たずは言い過ぎでしたわ」

「え……」

そういった麗羽様に、文ちゃんは驚きの余り固まっている。正直私も信じられなかった。あの麗羽様が自分の過ちを認めるようなことを言うなんて。

「……どうしましたの？」

「麗羽様、明日も行軍するんだし今日は早めに休んでおいた方が良いんじゃないかな」

どうやら文ちゃんは麗羽様の体調が悪いという結論を出したみたい。
……私もそう思うけれど。

「私もそう思います」
「？おかしな猪々子さんに斗詩さんですわね。まあ良いですわ。それなら今日はこれで休ませて頂きますわ」
「はいはい、どうぞどうぞ。こゆっくり～」
「もう、文ちゃん！麗羽様、お休みなさいませ」

麗羽様はご自分の陣屋に入って行った。

「……斗詩、吃驚したよな」
「……うん」
「にしてもさ～、郭図のバカ共は何を考えてるんだ？損害が出たのは田豊のせいで被害を抑えることが出来たのは自分たちのお陰とか言ってるみたいだけど」
「いきなり後退した人が言う台詞じゃないと思うよね」
「そうそう。それに比べたら田豊と張コウは良くやったよ。岸から見る限り、あれが上陸したら間違いなく痛手を与えてやれるって感じだったからな～」
「まあ、曹操さんの方でもそう思ったからこそいきなり撤退したんだと思うけど」

その辺りは流石の一言に尽きると思う。

「惜しかったよな～」
「終わったことを言っても仕方がないよ文ちゃん。今は官渡に着いてからの事を考えないと」
「分かってるけどさ～。あたいは郭図みたいな奴を見るとイライラするんだよな～。こう、ガツンとぶん殴ってやりたくなる」

「……文ちゃん、やっちゃダメだからね？」
「やっぱりダメかな～」
「ダメに決まってるでしょ！」
「怒るなよ斗詩～。欲求不満なのか？だったらあたいが」
「違います。ほら、文ちゃん。明日には官渡に到着するんだから」
「ちぇ。ちょっとくらい良いじゃんか～」
「ダメです。文ちゃんも早く休んだ方が良いよ？」
「分かったよ～、斗詩のいけず」

文ちゃんは何やらぶつぶつと呟きながら自分の陣屋に向かった。

「申し上げます」
「何ですか？」
「官渡での布陣についてお話があると、田豊様がおいでになりましたが」
「直ぐに通して下さい」
「はっ」

官渡での布陣について、か。
今回の戦で不安なのは、朱里ちゃんが居ないこと。朱里ちゃんが居れば、安心して居られるのに。私は、雛里ちゃんが出奔する際に一緒に行かなかった時点でもっと信用しても良いのだと思った。けど、周囲は違ったみたいで裏切り者の親友だから信用出来ないなどと騒ぎ立て、朱里ちゃんを徐州に遣ってしまった。
……ホントに碌な事をしないんだから。そもそも黒山賊を攻める必要だって無かった。自分たちの手柄を立てる為に戦をするなんて、郭図さん達はどうかしている。

「夜分に失礼致します」
「いえ。今日は御苦労様でした」

「それは顔良殿の方で御座いましょう。私などは別段何もしておりませんから」
「そんなことはないですよ。……それで、官渡での布陣についてお話があるとのことですが」
「はっ。実は官渡周辺の地理について、細作に調べさせました」
「もう調べたのですか」
「はい。官渡城の周辺は元々沼地が多かったのですが、どうやらその沼地を拡張してあるようです。また所々に岩が置いてあり、その岩をどかさないと全軍を無駄なく展開することが難しい感じです」
「成る程。そんな感じになっているのですね。岩は、退かしてしまえばよいのでは？」
「それがどうもそういう訳には行かないようでして。細作に言わせると、その岩があるから水に浸らなくて済んでいる土地が多いように思われるらしいのです」
「どういうことですか？」
「要するに、岩を退かせば水が流れ込んで足場が悪くなるし布陣出来る土地が狭くなるだけだ、ということです」
「……厄介ですね」
「相当周到に準備してきた物と思われますな」
「どうしましょうか」
「退けない方が良いでしょう。退けなければ、少々手狭になるだけです。場所によっては岩を防禦として有効に活用出来るでしょう。退ければ布陣場所がより狭くなることになりますからな。まあ何よりも、足場が悪くなることが痛いからですが」
「はあ……田豊さん、朱里ちゃんから何か聞いていませんか？」
朱里ちゃんなら、もっと前に掴んでいたはず。それであれば、腹心的な立場に収まっている田豊さんに何か策を授けている可能性が有る。

「さて、何でしょうかな？」
「田豊さん、朱里ちゃんがこの大戦をどう描いているのか、それを貴方は知っているのではないですか？もしそうであれば、朱里ちゃんが何を考えているのかを教えて欲しいんです」
「……私の口からは、何か申し上げることは出来ません」
「……言うことがないのではなくて、出来ないのですか？」
「……察して頂ければ、と思いますが」

やっぱり。朱里ちゃんは間違いなく田豊さんに策を授けている。けれど、それは際どい物なのだろう。それを知る人間が増えれば不都合が起こるような。特に郭図さん達がそれを知れば、間違いなく妨害しようとするだろう。これ以上朱里ちゃんと田豊さんに手柄を立てさせない為に。それを避けたい。そういうことだと納得する。

「分かりました。策の内容については訊きません。ただ一つだけ訊かせて下さい。信じても良いんですよね？」
「それは勿論。私は袁家の臣です」
「分かりました。信じて何も問わないことにします」
「有り難う御座います、顔良殿」
「いえ。では、私も明日に備えて休むことにします」
「それでは、私もこれで失礼致します」

田豊さんに見送られ、自分の陣屋に向かう。
朱里ちゃんが何か策を施していることが確認出来ただけでも良かった。味方にすら知らせることが出来ないと判断したのは仕方がない。何せ、疎まれて徐州に遣られ、軟禁されているのだから。監視者が沮授さんになったので厳密には軟禁という形にはならないと思うけど。沮授さんも田豊さんと同じで、朱里ちゃんに命を救われて恩を感じているようだから、朱里ちゃんの為に色々と便宜を図ってくれるだろう。それがこの際は有り難いと思う。遠く徐州にあっても、

朱里ちゃんが策を施すことが出来れば心強い。沮授さんは、袁家の為になる限りにおいて積極的に協力するだろうから。

明日から始まる戦について、多少の安心感を得られた。

今日はゆっくり休むことが出来ると思う。精神的に、だけど。

～秋蘭　Ｓｉｄｅ～

対岸に展開し始めた袁紹軍を見て、華琳様が不敵に嗤っている。

敵部隊のいくつかが、岩を除けたのだ。そうかと思えば、岩を除けずにそれを効率的に盾と出来る様に布陣する隊もあった。どうやら、敵は指示を徹底させることが出来ないような状況らしい。

「見なさい秋蘭。あれらは皆馬鹿なのよ。家中における権勢争いを戦場に持ち込むなんてね。国事を前に私事を優先させる蒙昧な輩が多くて助かるわ。相手側にとっては不幸でしょうが、それはそのまま私の幸福に繋がる。これで勝ったわね」

「華琳様、まだ勝ったわけではありませんが」

「あら、そうかしら。家中に和がない相手に負ける程私は低能ではないわよ？」
「しかし油断は禁物です」
「ふふっ。分かっているわよ秋蘭。私は油断しているわけではないのよ？客観的に見た事実を述べているに過ぎないのだから。指示を徹底出来ない軍が意思統一された軍に勝てるはずがないのよ。思惑がそれぞれ異なっている軍が勝利した例はあるけれど、指示が徹底出来ない軍が勝った例は古来より一度もないわ。破れた例ならいくらでもあるけれどね」
「油断されていないのであれば構わないのです」
「ええ。……諫言には感謝するわ、秋蘭。これからも支えて頂戴」
「はっ」

流石は華琳様だ。油断も慢心もせず、眼前の敵と向かい合っている。私の余計な諫言にも嫌な顔一つされず、むしろそれを喜んで下さった。正しく王の器であろう。

「桂花、袁紹軍の構成を報告しなさい」
「はっ。現在袁紹軍は大きく三つに分けることが出来ます。郭図と淳于瓊を頂点とする派閥と、審配と逢紀を頂点とする派閥、そして袁紹直属である劉備の派閥。この三つです。
郭図と淳于瓊の下に辛評・辛毘が、審配と逢紀の下に高覧がそれぞれ付いております。劉備の下には田豊と張コウが付き従っているようです。
田豊が提案したと思われる布陣の仕方について、他の二派閥はそれを無視して布陣を行ったようです」
「成る程。潁川派閥と冀州派閥、劉備派閥に分かれて争っている、というわけね。布陣時の件と言い、この私を前にして権勢争いをするなんて舐められたものね」
「ですがそのお陰で敵の攻勢は連動を欠くことでしょう。我が軍に

とって望ましい状況だと思います」
「そうね。精々思い知って貰う事にしましょう。春蘭、秋蘭。折角我が領内に来てくれたのだからしっかりおもてなしをしなければならないわ」
「華琳様！必ず奴らに思い知らせてやります！」
「姉者の申すとおりです。奴らに報いを呉れて遣りましょう」
「頼もしいわ。……真桜、例のものは？」
「準備出来とるで～」
「恐らく麗羽達は物見櫓を作って城内の様子を探ってくるでしょう。それを優先的に破壊しなさい」
「了解」
「秋蘭は弓兵を率いて官渡城を守備しなさい。凪と沙和は秋蘭を補佐しなさい。桂花も城から戦況を確認し、必要な手を打ちなさい。春蘭、季衣、流琉は私と共に城外から秋蘭たちと連動して敵に対応するわよ」
「御意」

このことあるを見越して用意してきた華琳様が負けるはずもない。あとは我らが期待通りの活躍をすれば自ずと勝利は華琳様のものとなるだろう。此処が死力を尽くすところだ。此処を乗り切れば、華琳様が終に天下にその手を掛けることになるのだから。

～田豊　Ｓｉｄｅ～

官渡に到着した兵は１１０，０００弱。現在、郭図と審配の献策により、官渡城と城外に居る曹操軍へそれぞれ攻撃を仕掛けている。劉備殿を始め、その与党と見なされている我々は後詰めとして後方へやられている。それは構わないが、何故馬鹿正直に正面から攻めているのか。それが理解出来ない。

……曹操が十二分に準備をしているのを実感したばかりであろうに。

布陣の際、あらかじめ伝達しておいたにも関わらず、岩を退けた。その結果布陣できる土地が減ってしまったばかりか辺り一帯の足場が悪くなってしまった。その事もあって意固地になっているのだろう。遊撃の為に敵左翼側へ向かうことを提言したのだが、全く聞く耳を持たなかったのだから。

「田豊のおじちゃん」
「……なんでしょう」

一向に進捗のあがらない戦場を見つめていると、張飛殿が話しかけ

てきた。
……我ながら、おじちゃん、という言葉がこれ程堪えるとは思わなかったが。

「何で皆馬鹿みたいに真っ正面から掛かって行っているの？敵が待っているところにそのまま突っ込んでいくのは馬鹿のすることなのだ」
「私もそう思いますよ。けれど、そう思わない人も居るということです」
「ふ～ん。ただの馬鹿なのだ」

身も蓋もない言い方だが、全く以て同感だ。張飛殿でも理解していることを、分からないと言うならまだしも分かっていて敢えてやっているところが度し難い。
城内の様子を窺うべく物見櫓を立てているが、城内から巨石が飛んできて破壊されていく。当然、櫓だけでなく城に殺到する兵の群れの中に落下し、前線は混乱している。そこを城外に展開している曹操軍に良いように蹂躙され、見かねて後続の兵が突出する。その後続の兵の後側へ逃げ込んで再度隊伍を組み直して戦線に参加する時機を待っている。先程からずっとそれを繰り返しているように見える。

「田豊さん、郭図さん達が麗羽ちゃんの周りに居ないみたいだから、献策するなら今の内だと思うの。何か無いかな」
「……時間を掛けずに一気に決戦するというのは望めません。相手は籠城しているのですからな。であれば、こちらもじっくりと腰を据えてやるべきなのです。櫓についても、何も城の直ぐ側に立てる必要はありますまい。離れていても城の様子は窺えるのです。櫓自体を動かせるように工夫してあることですし、徐々に前進するのが宜しいかと存じます。

しっかりとした足場を少しずつ前進しながら確保して拠点とし、確保した拠点と拠点を繋いで線とし、その線を少しずつ押し上げるように軍を展開して面を創り出すのです。こうすれば前進出来る距離は微々たるものでしょうが、一旦確保した土地は易々と奪い返される事はないでしょう。

これを全軍を以て行うのです。糧食の警備をする兵以外の全ての兵を投入し、行うのが良いと思います。派閥に分かれて対立している現状を考えると、三方向から各派閥で行う、という形を敢えて取ることで競争意識を持たせて行うのが良いでしょう。ひとまとめにしておいても連動するわけがないのですからな。どうせ連動しないなら切り離して運用し、効率化を図った方が良いのです。

また、こちらもあちらも糧食が不足してくることは間違いありません。現状通り烏巣に集積しておけば良いでしょうが、警備は現状よりも厳しくしておくべきですな。曹操軍が城外に展開している以上、ありそうにないことでもその痛手を考えれば対処しておくべきでしょう」

「う～ん……難しくって覚えられないや」

「……紙に認めておきますから持って行かれるが良いでしょう」

「有り難う、田豊さん」

献策を紙に書き付けて、それを劉備殿に渡す。劉備殿はそれを持って献策に行かれた。

前線は何度も城に押し寄せているが、その度に城側から強力な抵抗を受けて乗り込めないで居る。数的優位を活かせる形で戦をしない限り、袁家に勝利はあり得ない。先の延津での戦に続き、緒戦も曹操のものになったと言って良いだろう。

だが、兵力差はまだ十分にある。孔明殿の策は最後の手段だ。そこまでは私が劉備殿を通して麗羽様に献策を続け、より良き方向へ向かわせる必要がある。

……せめて家中の和だけでも成し遂げられていれば。それならば、孔明殿を頂点として最上の策の元に戦に臨むことが出来たはずなのに。言っても始まらないことが分かっていても、どうしてもそう思ってしまう。

まあ、やるしかないのだ。孔明殿の策があるだけまだマシなのだから。

～華琳　Ｓｉｄｅ～

「私達は北側の敵に対応するわ。東、及び南からの敵については春蘭だけで大丈夫でしょう。緒戦で負けた負け犬の力量は分かっているでしょう？」

「はっ！お任せ下さい！」

「任せたわ、春蘭。敵を撃退したら城内へ帰還しなさい。季衣と流琉は私と共に北側へ。良いわね？」

「「「御意」」」

袁紹軍の攻め方が変わった。策もなく遮二無二正面から城を落とすべく寄せるだけだったものが、北、東、南から同時に、着実に兵を進めて来た。

東と南に関しては、先日来負かし続けて来た郭図や審配達であるからこちらの予測を超えるような動きをしてくることはないでしょう。しかし、北に関しては違う。劉備が漸く前線に出てきた。その配下には張飛、張コウという武将がおり、軍師として田豊が付いている。張飛の武勇は反董卓連合時に確認しているが、春蘭並の力があるでしょう。張コウと田豊については、黄河を渡渉する際の隊伍の組み方から見て先ず有能と言って良い才を有しているに違いない。これを侮ることは出来ない。

桂花や秋蘭も恐らく気が付いて居るとは思うけれど、万全を期す必要がある。まかり間違って城門を突破されるようなことがあれば、我が軍は負けてしまう可能性が有るのだから。

北側へ兵を駆けさせる。

城門前で凪が敵を食い止めるべく張コウと戦っているが、どうやら押されていた様だ。私の判断で間違っていなかったようね。季衣と流琉に敵軍へ突入させるべく指示を出して、直属の兵を引き連れて凪の元へ駆けつける。張コウは寄せてきた私を確認し、形勢不利と見て兵を後退させていった。しっかりとした状況判断が出来る様ね。

「凪、随分押し込まれていたようね？」

「申し訳ありません。敵軍が渡渉して北側からやってくるのを確認し、迎え撃つべく防禦陣を構築して迎え撃ったのですが突破されてしまいました」

「そう。でも必要以上に気にしなくても良いわ。戦が終わったわけ

ではない。最初劣勢にあったけれど、ここから挽回して貴女は勝つ事になるのだから。このまま押し返すわよ」

「はいっ！」

凪を励まして寄せてきていた張コウの兵を追撃する。向こう側では季衣と流琉が思い思いに敵軍を攻撃して押し返そうとしている。

「凪、季衣達を連動して敵を挟み込むように動きなさい」

「はっ！」

これで挟み込むことが出来れば、厄介な相手の力を大きく削ぐことが出来る。

そう思っていたのだけれど、やはりこちらの意図は読み取っていたようで直ぐに兵を纏めて後退し始める。張コウと言い張飛と言い、能く兵を掌握し退くべき時というものを理解出来ているようだ。

「このまま追撃してある程度敵を削ったら直ぐに城内へ帰還するわ。各隊に連絡しておきなさい」

「はっ！」

追撃を掛ける。季衣達も突っ込んでいるが、勢いをいなしながら後退しているようだ。

「弓兵を。敵後方に向かって射掛け続けさせなさい。敵はこちらの勢いを殺す為に密集しているからいくらでも当たるわよ」

「畏まりました！……弓兵！矢を敵後方に向かって射掛け続けよ！敵後尾ではないぞ、敵後方、進行方向側奥へ射掛けるんだ！」

密集している所へ弓を射掛けさせる。これで敵は後退速度が遅くなる上に多少混乱することになるでしょう。それを見逃さずに季衣と

流琉、凪が敵に掛かって行っている。このまま追い掛け続ければ殲滅出来る可能性もあるが、城から離れつつある。これ以上離されるのは拙いでしょう。

「各隊に伝令を。撤退するわ。殿は流琉。損害の一番大きい凪から撤退させなさい。私達は流琉と合流して共に殿として城に帰還する」

「はっ」

兵を纏め、城へ帰還する。北側でかなりの損害を受けたようだけれど、壊滅したわけでない。相手にもそれなりに損害を与えている。東側や南側がどうなったのかは分からないけれど、春蘭が痛手を被ることはないでしょう。兎に角、一度城に帰って状況を確認する事ね。

「桂花、状況を」

「はい。先ず我が軍ですが、ここ１０日ばかりの戦闘で残り４５，０００程度となっております」

「そう。思ったよりやられているわね。それで敵軍は？」

「城壁から確認した限りでは、６５，０００弱です」

「……おかしいわね。そこまで削った覚えはないのだけれど」

「私の方でも不審に思い、斥候を放ちました。その結果、烏巣にて糧食を守備している兵が１０，０００いる事を確認致しました」

「……糧食を、ね」

「はい」

「こちらの糧食は後どれくらい持ちそうかしら」
「残り一月程度しか残っておりませんが、それは相手も同じ条件だと思います」
返事をして、私の目をじっと見つめてくる。
……よく分かっているじゃないの、桂花。
「敵を官渡城に引きつけた上で別働隊で烏巣を襲って糧食を焼き払いましょう。春蘭、秋蘭。貴女達二人で配下の兵を指揮して、官渡城に敵を引きつけて抗戦しなさい。季衣と流琉は二人の補佐を。桂花はこれまで通り城兵を指揮なさい。真桜は発石車を運用して敵を抑える手助けをしなさい。岩は残り少なくなってきているから効率的にね。
凪と沙和は私と共に烏巣の敵糧食を焼き払いに行くわよ」
「華琳様、華琳様御自身で烏巣の糧食を焼き払いに征かれる必要はありますまい。ここは私か姉者にお任せ下さい」
「秋蘭、言っていることは分かるけれど、これは私自身の手でやらなければダメなのよ。自分の運を天に問う戦なのよ。他人に代理で問わせるなんて出来るわけがないでしょう？ここは、私が行くわ」
「……そこまで固い決意を為されているのであれば、最早何も言いますまい。凪、沙和。華琳様を頼むぞ」
「はっ！」
「了解なの～。沙和達にお任せなの」
「明日の戦闘後、兵１０，０００を率いて烏巣を襲撃すべく移動を開始するわ。皆で勝利を掴みましょう」
「御意」
これで麗羽を打ち破ることが出来るでしょう。
……教経、貴方は既に公孫賛に勝っているのでしょうね。ひょっとすると、劉表も下しているかも知れない。早く麗羽を降して領国を

取り纏め、力を蓄えて教経と決戦出来るだけの用意を整えなければならない。

こんな所でこんな相手に躓いているわけにはいかないのよ。こんな相手に。

蝶の如く～１１８～（後書き）

次は、荊州北部攻略戦と言う名前のもげろ☆回になると思います。
今日中（３／１３）にうｐ予定です。

蝶の如く～１１９～（前書き）

もいでやりたい。

蝶の如く～１１９～

～霞　Ｓｉｄｅ～

万が一を考えて長安に待機することを命じられとったウチに、経ちゃんから書状が来た。経ちゃんは公孫賛を降し、これから続けて荊州北部へ侵攻するらしい。荊州北部は広い平野になっとるから、騎馬隊で蹂躙してやりたい、その為にウチの力が必要や、と書いてあった。

何でウチを長安に残したんか、やっと分かった気がする。雪蓮達が既に軍を発して義陽郡を攻略したことは知っとる。経ちゃんが合流地点に指定してきたのは、宜都郡。これを攻略するのに新城郡から雪崩れ込めっちゅうことやろう。現状、劉表は雪蓮達にきっちり対応出来とっても、ウチが騎馬を率いて出てくることまでは予測出来んやろうからな。

「霞様、お呼びでしょうか」

「あぁ、よう来てくれたな。経ちゃんから書状が来とって、ウチらに出陣せぇ言うとるんや。亞莎を軍師として宜都郡で合流しようっちゅうとる。三日後に出陣するけど、準備出来とるか？」

「は、はい。大丈夫です」

「そか。ほんなら出陣は三日後や。率いる兵は１０，０００。全部騎馬やで。まぁ、ウチが騎馬隊の運用の仕方っちゅうんを教えたるよ」

「お願い致します、霞様」

「その、霞様っちゅうんはどうにかならんか？なんやむずむずするんやけど。呼び捨てでも構わへんで？」

「そんな！呼び捨てにするなんてとんでもありません！」

ホンマ、この娘は真面目やで。経ちゃんも詠も軍師としての素質が高いっちゅうとったから、才能については全く文句は無いんやけど、こう真面目にやられると何や調子が狂うわ。

「分かった分かった。ほな好きに呼んだらええよ」
「はい、霞様」

……経ちゃんに真名預けた時に経ちゃんがどう感じ取ったかがちょっと分かった気がする。

「三日後っちゅうて直ぐになんやけど、準備ができとるんやったら明後日でも行けるか？」
「明後日ではまだ準備が出来て居ませんので、出来れば予定通りお願いしたいのですが」
「……そうなん？」
「はい。実は眼鏡を新調しておりまして。これで教経様のお顔もはっきり見えると思います」

あ～、経ちゃん。アンタ勘違いしとるみたいや。睨まれとった、ちゅうとったけど、それ多分よう見えんかったからやと思うわ。現在進行形でウチも睨まれとる気がしとるもん。

「ほな、予定通り三日後や」
「はい」

これで経ちゃんに逢える。
出発前、経ちゃんはウチに暫く逢えへんから、ちゅうて結構恥ずかしい格好で助平なことを要求してきた。思い出したら恥ずかしいけど、ようあんな事出来たと思うで。その、胸で、なぁ。上着も着たまま前だけはだけさせて欲しいとか、かなり凝った趣味をしとるで。

ホンマ、経ちゃんは何であんなことを考えつくんやろか。まぁその、嬉しそうにしてくれとったし、その後もうアカンっちゅう位に愛してくれたからウチとしては何でもエエんやけど。

それにしても、ちょっと経ちゃんと離れとっただけやけど、なんや寂しゅうてかなわんわ。早う経ちゃんと合流して、しっかり可愛がって貰わんとアカン。

ウチは経ちゃんに完全に嵌ってもうたんやなぁと思う。周りにようさん女が居るけど、後悔はしとらん。経ちゃんは皆のモンやって星も言うとったしな。

早う合流して、経ちゃんに褒めて貰うで。

～教経　Ｓｉｄｅ～

白蓮から、魏延と馬謖に対する処罰について報告を受けている。笞刑を与えた上で、それぞれただの将校に降格させる、ということだった。笞刑は、魏延は１５０回、馬謖は８０回。武官である魏延と文官である馬謖の回数が違うのは当たり前だろう。魏延も馬謖も、それぞれ死にそうになっているから挨拶は遅れるが、許してやって欲しい、と言われた。

「公孫賛、俺がそれ位で怒るかよ。刑罰は皆納得の上で決まったンだろうな？お前さんが土下座なり何なりかまして軽減して貰った訳じゃ無いよな？」

「それについては問題ありますまい。わしも張任も李厳も、集まることが出来たもの全てが納得した結果で御座いますれば」

「そうかね。それなら俺から言うことはない。死にそうになっているなら、医者を遣わしてやるから見て貰うが良い。本当に死んでしまったり使い物にならなくなったのでは困るからな。勿論、苦痛の軽減はしないぜ？それじゃ意味がないからねぇ」

「まあ、そうでしょうな」

で、このおっぱい星人は誰だ？

俺の不審そうな顔を見て、公孫賛が口を開く。

「では、これから一人ずつ挨拶をする……します。私は公孫賛、字は伯珪。真名は白蓮です」

「俺は姓は平、名は教経、字も真名もないから好きに呼んでくれれ

ば良い。あと、言葉遣いは別に気にしなくても良いから好きにしろ。丁寧に話そうとして訳の分からん違和感を感じるくらいなら、気を使わずに話してくれた方が良い」

「……分かったよ。でも、いいのか？」

「……勢力の長としては失格したが、実力は高く買っているンだ。それ位は認めるさ」

そのまま、皆から真名を預けられた。

ホウ統の真名は、雛里。……異名のまんまじゃねえか。ちょっと気が弱そうだな。先に俺と話をした際はそんなことはなかったと思うんだが。張り詰めていたものがなくなって、素の自分に戻ったってところか？

おっぱい星人は厳顔だった。真名は桔梗。手に持ってる武器がちょっとアレだが、パイルバンカーってのか？分の悪い賭けが好きそうな武器を持ちやがって。

爺は張任。その横の若いのが李厳らしい。

「……？艾、士載。百合」

「私は、姓は？、名は艾、真名を」

「俺は分かるんだよ、？忠。知ってるだろうが。……百合、宜しくな」

「……うん」

「……そう言えばそうでしたね。んじゃ、俺の方を改めて。俺は姓は？、名は忠。字も真名もありません。ですから大将の好きに呼んでくれれば良いです」

「お前さんも真名がないのかね」

「ええ。宜しくお願いしますよ、大将」

「まぁ、宜しくしてやるよ。貴重な男性陣だからねぇ」

ダンクーガに、張任に、李厳に、？忠。

……4人か。ブラックジャック先生と凱とアドンとサムソン入れても8人しかいない。本当にどうなってやがるよ、この世界はよ。

「で、早速だがね。俺たちはこれから劉表のカスにお仕置きをしに行くンだ。蜀の地は今まで通り蜀の人間に任せようと思う。その方が上手く行くだろうからねぇ。但し、度量衡については従って貰うし、法についても平家の法に従って貰う。……質問があるかね？」

「私はどうすれば良いんだ？」

「お前さんと雛里については従軍して貰う。百合と？忠もだ」

「分かった」

「か、畏まりましゅた……うぅ」

……カミカミのょぅじょってどういう需要があるンだ？可愛いのは否定しないが。こう、父性愛的なものが溢れてくるんだよねぇ。

「……うん」

「了解ですよ」

百合は心なしか嬉しそうだな。まぁ、あれだけの器量があるんだし、戦で自己表現するタイプの天才だろうからねぇ。やりがいがある。そういうことかね。

「用意した糧食的には、ギリギリって所だろう。ギリギリと言ってもある程度余裕を見積もった上でのものだがね。だがそれでもここで無駄にするわけにはいかないンだよねぇ。劉表が思っている以上にやる相手なら、そこで余剰を吐き出す必要がある」

「……急ぐ？」

「兵は拙速を尊ぶ、さ。今はそれが当てはまるだろうよ」

「……分かった」

「分かったところで出発するぞ。お前さん達は兵を連れてこないで

構わん。連動出来んだろうからな。向こうに着いたらそれぞれの下に兵を付けるからそのつもりで居てくれ」

「御意」

これで後は劉表のカスだけだ。誰にちょっかい掛けてくれたのか、しっかり分からせてやらんとなぁ。まぁ、既に雪蓮に思い知らされているのかも知れんがね。

～？忠　Ｓｉｄｅ～

大将について荊州北部、宜都郡を攻略すべく軍を進めている。大将は姉貴と俺に兵５，０００を預けてくれた。指揮して分かるが平家

の兵ってのは尋常じゃない。命令に対する反応速度が速い。白蓮様には悪いけど、俺や姉貴にとってはこっちの方がやりがいがある。自分が思い描くとおりに兵が動くってのは本当に気持ちがいいもんだ。

まぁ、姉貴にとっては別の意味で良かったと思うけど。

「ふむ。ならここは……こうするかねぇ」

「……甘い」

「チッ。流石に読んでたみたいだねぇ……と見せかけて実は～、こう！」

「……ん……」

「……どうだ？残された手はあると思うぜ？」

「……罠」

「そうだねぇ。そこまで見えるってのは中々居ないと思うがね。……立派に軍師が勤まるんじゃないのか、百合」

「……ん」

「照れてるのか？……可愛いねぇ」

「～～～～」

「ははっ。より一層可愛くなったぜ？」

そう言って大将が姉貴の頭を撫でている。姉貴は照れて俯いているが、嬉しそうにしている。

大将は、何故か姉貴が言いたいことが全部分かる。姉貴にとって、俺以外に自分が言うことを全て理解出来る人間がいるのは初めての経験だ。こうやって盤上で模擬戦をやっては二人で仲良く戯れているのを見ると、微笑ましい気持ちになる。

虜囚の身から解放されることが決まったとき、大将に挨拶に行った姉貴は不機嫌だった。不機嫌な原因は、大将の横に寄り添うようにいた関羽の姐さんの存在だろう。どう見ても男女の仲だったからな。

姉貴は自分の感情を持て余しているようだった。

まあ、それはそうだろう。今までずっと姉貴と一緒だったが、あんな姉貴は生まれてこの方初めて見た。あの姉貴の不機嫌さを目の当たりにして、姉貴が大将に恋している事に気が付いた。唐突すぎるし敵なのに、とは思ったが少し考えて当たり前だと思った。姉貴の発する短い言葉だけで言いたいことを理解出来る人間は、今まで俺しか居なかった。それが俺の他に居て、突然目の前に現れたんだから。しかも異性であり、その器量は申し分なく、話した限り何よりも民のことを考えているような人間性を有している。姉貴が惚れても不思議じゃない。顔はまあ、俺の方がいい男だと思うけどね。

兎に角まあ、その感情が嫉妬だなんて思いも寄らなかったのだろう。後で姉貴と話をした時、姉貴は大将に恋していて、嫉妬したんだよ、と言ってやると顔を真っ赤にして槍で突き殺そうとしてきた。何とか躱して無事だから今こうして居る訳だけどな。姉貴、照れるのは可愛かったけどちょっと考えてくれ。俺じゃなかったら間違いなく死んでたぜ？

大将の周囲からは冷たい視線が大将に向けられているが、姉貴に対しては許容して貰っている。……こうなるまでが一苦労だった。胃が痛かった……大将、何人相手が居るんだよアンタには……。

最初、姉貴が大将と話したそうにしていたから、適当に理由を付けて大将と話せる場を創り出した。それを見た関羽の姐さんや郭嘉の姐さん達がもの凄い目で姉貴を睨んでた。姉貴の生い立ちを説明し、姉貴にとって大将が人生で初めて出遭った自分を理解してくれそうな人であり、出来れば姉貴の好きにさせてやって欲しいと胃に穴が空きそうな思いで伝えると、皆溜息を吐きながら『仕方がない』だの『一番は私です』だの言ってくれた。

姐さん達は、大将が姉貴を気に入るだろうと言っていた。外見は申し分ないし、可愛らしく、これまでの事を考えるといじらしくて保護欲が湧くだろうから、と。弟の俺が言うのもおかしいが、姉貴は綺麗だ。百人見て百人が綺麗だと言うだろうし、そう言わない奴には何が何でもそう言わせるから間違いない。

姉貴がどう想っているかは分かる。どう表現して良いかが分かっていないようだがね。

……全く、我が姉ながら手の掛かることだ。

「姉貴、そういう時は大将に抱きつけば良いんだよ」

「〜〜〜〜」

照れながら俺のケツを思いっきり抓ってくる。かなり痛いが、こうやって照れる姉貴は可愛い。こういう姉貴を見るのは新鮮で、からかうのは止められそうにない。

「?忠、お前さんも中々分かってるじゃないか」

大将もニヤニヤしながら姉貴の顔を見ている。同好の士ってのはこういうことを言うんだろうねえ。

「でしょう?そういう訳で大将、抱き抱えてやって下さいよ。こう、両手で姉貴を抱えるように」

「ふむ。何やら寒いからやってみるかね。抱えていれば暖まるだろうしねぇ」

大将はこういうところでノリが良いから乗ってくるとは思っていたが、周囲からの視線を寒い気がするで済ますのは正直どうかと思う。まあ、苦労するのは俺じゃないし姉貴の恋を成就させてやるのが俺の役割であって、その結果大将がどうなるかなんて興味はないから

どうでもいいけどね。

「よっ……と。百合、やっぱり女の子なんだねぇ。軽いし、何より柔らかい」

「～～～～」

姉貴はばたばたと手足を動かしているが、そんな姉貴も可愛い。ああ、最高だよ姉貴。

関羽の姐さん達は頭を抱えて溜息を吐きながら陣屋から出て行った。気を利かせてくれたって言うよりは、見続けていると大将をぶっ飛ばしそうになるから席を外したんだろう。大将、後で痛い目を見るんだろうけど、まあ、自業自得って事でここは一つ殴られておいてくれ。

「姉貴、そんな暴れると危ないから大人しくしようか」

「そうそう。危ないぜ？百合」

二人にそう言われても暫くばたつかせていたが、だんだんと動きが小さくなっていき、最終的には諦めたのか大将の胸に両手を添えて、頬を染めた顔も大将の胸に埋めて恥ずかしそうに、でも幸せそうにしていた。

「……おい？忠。なんだこの最終兵器は」

「俺の自慢の姉貴ですよ。最強でしょ？」

「これはグッと来るねぇ」

「もっとグッと感じる事が出来る方法がありますよ、大将」

「……なにやら嵌められている気がするが、毒を食らわば皿までと言うしねぇ。突っ走ってやろうじゃないか」

「流石平家の頭領ですね」

「まぁな。……で、その方法とは？」

「姉貴を思いつく限りの言葉で褒めてやって下さい。但し、本当に思っていること以外は言わないで下さいよ、大将。それは嘘になるんですから」
「了解だ」
そういうと大将は姉貴の顔を覗きこんで、話しかけ始めた。
「百合、お前さん、こういうことには慣れてないんだな？」
「……うん」
「こんなに可愛いのに、周囲の男共は見る目がなかったんだな」
そう言われて、姉貴はイヤイヤと頭を大将の胸に押しつけて左右に振った。
……萌えるぜ、姉貴。
大将を見ると、大将は惚けた顔をしていた。何ともだらしのない笑みを浮かべているが、恐らく俺自身もそんな顔をしているだろうからそこには触れない。
「？忠ェ……お前は俺を殺す気か？」
「俺も死にそうですが」
「「……だが、それがいい！」」
満面の笑みで大将と向かい合い、頷きあった。大将に仕える事になったのは大正解だぜ。
「大将、姉貴をどう想っているか、まだそんなものじゃないでしょう？思っていることを全部伝えてやって下さいよ」
「任せておけ。……百合、お前さん、柔らかい体してるよな。こうしてると良い香りもするし、本当にいい女だと思うよ」
「そうでしょう、大将。俺は弟として姉貴の伴侶には俺が認められ

るような男じゃないと困るって思ってるんですよ。大将なら器量は十分だし、いっそ姉貴を貰ってやってくれませんかね。そうすれば俺も恋に生きることが出来ると思うんですよねぇ」

「そうかね。百合が嫌じゃなきゃそれでも良いがねぇ。こんな可愛らしい女の子なら大歓迎だぜ？」

姉貴はずっと恥ずかしそうに頭を振り続けている。その姉貴を見て、大将はご満悦だが。

……大将、引っかかりましたね？俺は、『思っていないことは言ってはいけない』と言ったはずですよ？それは分かってはいるんでしょうが、飽くまでも姉貴を恥ずかしがらせるのが目的で俺がそう言っていて、それに乗っただけだとか思っているんでしょうけどねえ。あんな状態でも姉貴はちゃんと正気を保っているわけで、大将が言った言葉は大将が本当に思っていることだって姉貴は理解するわけですよ、大将。

現に姉貴は恥ずかしそうにはしているものの、さっきとはちょっと違うわけで。まだつきあいが短い大将には流石にこの違いは分からないでしょうが、姉貴はただ恥ずかしがっている訳じゃ無いと思うんですよねえ。多分、いや、きっと大将と自分がそういう関係になることを想像して、頬を上気させているに違いないんですから。何せさっきまで大将の胸に添えられているだけだった姉貴の腕は、大将の背中に回されていて、姉貴は大将に抱きついている訳ですから。まだ、気が付いて居ないみたいですがね。

それからも一通り姉貴を褒めまくった後、いい加減外からの殺気が凄いことになっていたので適当に打ち切って大将の陣屋を後にした。後にした陣屋から、断末魔の声が聞こえてきた気もするけど問題無いだろう。

俺の方は、姉貴にぶっ飛ばされた。首の骨が折れるかと思うくらいの衝撃だったが、何とか首の骨を折る程度の致命傷に止めることが出来たようだ。
遠退く意識の中で、姉貴が呟くのを耳にした。

「……忠、ありがと」

はは、姉貴。俺は姉貴の弟なんだから当然なんだぜ？
出来れば、大将の所の琵琶丸とか言う医者を呼んでくれたら有り難いんだけどさ……あれ、何処に行くの姉貴。医者、医者を頼むよ……

次に目が醒めたとき、寝台に寝かされていた。横には、包帯で巻かれた大将が寝ていた。
『ひでぇ目にあった』。
そう言っていた。アンタは良い思いしたからいいじゃないか。

姉貴が嫁に行ったら、俺も相手捜そうかな。

蝶の如く～119～（後書き）

前書きに書くとアレだと思ったので後書きに書きますが。

百合の外見はシグナム姐さんで妄想しておいて下さい。

……もいでやりたくなるでしょう？

それでは、悶々とした殺意を抱いて次回をお待ち下さい。

蝶の如く～１２０～（前書き）

死ね！死ね！死ねぇぇぇぇぇ！
チクショー！

蝶の如く～１２０～

～教経　Ｓｉｄｅ～

ひでぇ目に遭った。まぁ、自業自得なんだろうが。

百合を抱えて萌えまくった後、愛紗達が陣屋に入ってきた。形相こそ笑ってにこやかにしているもののその背後には仁王様のスタンドが見えていたンだよねぇ。大事なことだから言っておくが、専門用語では幽波紋って言うんだぜ？身の危険を感じて逃げだそうとしてあっけなく周囲を取り囲まれ、冥琳に足蹴にされた以外の記憶が全くない。倒れ込む俺を踏みつけた冥琳……アリだな、アリ。結構萌えた。眼鏡は偉大だ。

目を醒ました俺は致命的な怪我をしていなかったが、横で寝ていた？忠は首の骨が折れていたらしい。何で生きているのか分からんが、その辺は凱が元気にしたらしいから問題無いんだろう。まぁ、ギャグパートだったしな。

宜都郡に侵攻した俺たちは、早々に霞達と合流して攻略を進めた。たったの１０日で全域を制圧してやったが、抵抗してくる奴が連動していなかったから当然だろう。俺、愛紗、翠、霞、白蓮がそれぞれ分かれて一気に制圧した。俺には稟、愛紗には冥琳、翠にはホウ統、霞には亞莎、白蓮には百合がそれぞれ軍師として付いて行動した。これだけの人材で侵攻出来るのは俺たち以外にはあり得ないだろう。

特に霞の戦果が凄まじい。元々戦好きな上に、待機させられていた鬱憤と、自惚れでなければ逢って早々俺と致した事で気力が汪溢していた事もあって、蹂躙という言葉が相応しい戦果を挙げている。

勿論、関係のない民を蹂躙するような真似はしていないが、止めるべく立ちはだかった敵をあっという間に打ち破って見せたようだ。軍師として従軍した亞莎が驚いていた。まあ、霞は戦をする為に生まれてきたような女だからねぇ。勢いに乗ったときは止められんだろうさ。

現在襄陽郡に攻め寄せているが、流石に劉表が居を構えている郡だけあって中々の抵抗を見せている。今のところ、中々の抵抗という程度でしかないが、ね。油断は禁物だ。今までの戦闘が油断を誘う為の罠だって事も考えられる。襄陽から軍が進発したという情報もあるし、先の戦のような醜態を晒す訳にはいかないンだ。

「教経、さっさと劉表を殺っちゃいましょう？」

殺気をまき散らしながら雪蓮が言う。

襄陽を攻める際に、雪蓮達も合流した。兵は２０，０００。孫呉の兵はお馬鹿と華琳がどう出るかが分からない為、南陽郡と南郷郡にそれぞれ待機させているらしい。星から華琳は心配ない旨伝えたらしいが、何が起こるか分からないし最悪な事態を想定すると兵を全て南下させるのは望ましくない、と風が主張してそうなったようだ。まぁ、風らしいがね。星と風、碧、黄蓋、明命が残っているようだ。こっちに来たのは雪蓮と穏、琴だけらしい。

「雪蓮、そう焦るなよ。軍を率いている奴が誰なのか、従軍してきた奴らが誰なのか。その辺りを調べてからじゃないと策も立てられんだろう？」

「あら。これだけの将と軍師が揃っていて負ける訳が無いじゃない」

「負ける訳がないのは当たり前だ。勝つべくして勝ちに来ているんだからねぇ。だが、勝ち様というものがあるだろう。完膚無きまでに叩きのめしてやるつもりで居るが、無駄に兵を損じるわけにはい

かないンだよ。相手がカスだと思えばこそ、なぁ」
「滓、ね。まあ、劉表には相応しい言葉だと思うわ」

そう苦々しく吐き捨てる。そう言えば、孫堅は襄陽を攻めて戦死したんだっけか。

「お前さんの母親が殺されたんだったか、雪蓮」
「そうよ。母様は劉表に殺された。死んだ後も汚されたのよ」
「……どういうことだ」
「……死んだ母様の遺体を犯したのよ。そうと知っていれば、黄祖の奴を生かして返す事はなかったのに」

……死姦、ね。相当にアブノーマルなご趣味を有しておられるようだねぇ。

「……済まなかったな。嫌なことを思い出させちまって」
「良いわよ。貴方が悪い訳じゃ無い。劉表を捕らえて嬲り殺してやれば良いんだから」
「生きて捕らえたら必ずそうさせてやるよ」
「ええ。お願いするわ」

雪蓮は目をギラつかせてそう答えた。許せるわけがないだろうからな。世の中にゃ墓を掘り返して死体を鞭打つ奴だっているンだ。出来れば、生きている奴を捕らえて雪蓮に好きなようにさせてやりたい。

「まぁ、お願いされるまでもないンだよ。そういうカスが俺と同じ時を生きていること自体が耐え難い苦痛なンだからねぇ。出来ることなら俺がぶっ殺してやりたいがそれじゃ意味がないだろうからな。お前さんに呉れて遣るさ。一寸刻みに切り刻んで殺してやると良い。

他人はきっと『そんな惨いことをするモンじゃない』とか言いやがるンだろうがね。俺は惨いとは思わない。人非人にはそれに相応しい死に様ってのがあるはずなンだよ。聞いた限り、劉表は人非人のドカスだ。何度惨殺されても不足だろうさ。精々惨たらしく殺してやれ、雪蓮。犯した罪に相応しく、な」

そう言ってやると、雪蓮は不敵に嗤った。

「教経。貴方のそういうところ、好きよ？」
「へいへい。ありあとやんした～」
「あら、わたし、本気なんだけどな～？」
「分かった分かった。また今度聞いてやるよ」
「そう。じゃ、また今度ね。約束したからね？教経」
「はいはい」

全く。こんな時まで人をからかうなんてねぇ。雪蓮らしいが。
取り敢えずは、情報収集だな。

～琴　Ｓｉｄｅ～

雪蓮達と一緒に、襄陽郡へ来た。お屋形様に逢うのは久し振りな気がする。

お屋形様は公孫賛を降してこちらに来た。きっといつも通り、凛々しく勇ましく『悪・即・斬』を貫かれたのだろう。そう思って断空我殿から話を詳しく聞いてみた。

お屋形様は敵の策の裏をかいたつもりが裏をかかれ、思わぬ窮地に陥ったらしい。断空我殿が日頃鍛え抜いた親衛隊も、随分その数を減らしたようだ。連れているのが親衛隊で無ければお屋形様は死んでいたかも知れない。そう言っていた。

「断空我殿、親衛隊の数を増やすわけにはいかないのでしょうか」

「……それを考えないでもないけど、俺の手に余るんだよ。俺が直接面倒見れるのは２，０００までだろう。それ以上はちょっと無理だ」

成る程。前々から、私はお屋形様のお側に何とかいる事が出来ないか、その口実を捜していた。……これは、良い機会なのかも知れない。親衛隊とは別に、隊を新設する。その構想を温めてきたのだ。

「けどまあ、今後大将の側には姐さん方の中から必ず誰か一人が付くことになったから大丈夫だと思うけどな。……っておい、太史慈の姐さん、アンタ、俺の話聞いてんのか？」

断空我殿が何か言っている気がするが、そんなことはどうでも良い。お屋形様に提言して、認めて頂かなくてはならない。

「……何なんだよ、全く。俺は忙しいからもう行くからな？」

「あ、断空我殿、有り難う御座いました」

お屋形様を捜さなくては。

お屋形様を捜したが、何処にもいらっしゃらなかった。一体、どこにいらっしゃるのか。水を飲もうと一旦自分の陣屋に帰ってみると、お屋形様がいらっしゃった。

……お屋形様が、私の陣屋に。なにか、ご用なのだろうか。

「お、琴。やっと帰って来たのか」

「お屋形様、どうなさったのですか？」

「どうなさったもこうなさったも無いだろう。今日はお前さんの番なんだよ」

……忘れていた。

領地が広くなった為にお屋形様と一緒に居られなくなることが増えることが明白になったとき、皆で話し合って約束事を取り決めたの

だった。

『お屋形様と逢えなかった人間の所へお屋形様が行く、若しくはお屋形様に逢いに来た場合、その時は逢えなかった人間が優先される』それを忘れて、私はお屋形様を探し回っていた。……覚えておけば、もっとお屋形様と一緒に居られたはずなのに……我ながら情けなくて泣きそうになる。

「お、おい、琴。どうしたンだよ。何で泣いてるンだ」

「い、いえ。忘れていた自分が情けなくて……」

「焦らせないでくれよ。……琴、久し振りだな」

そう言って、お屋形様が私を抱きしめてくれる。……嬉しい。私はお屋形様に抱かれているときが一番幸せだ。その、そういうことをしているときも勿論幸せだけど。

「お久しぶりです、お屋形様。あの、お願いがあるのですが」

「口でも吸って貰いたいのかね？」

「いえ、違います。……あ、違いません！」

「……どっちだ。ははっ」

言い直してお屋形様にしがみついた私をお屋形様は笑って。

……私に口づけし、そのまま口を吸ってくれた。

「……ちゅ……ぷはっ」

「……ご満足頂けましたか？お姫様？」

「は、はい……それであの、お願いがあるんです」

「ん？何だね？」

お屋形様に抱き抱えられたまま、話をする。

「その、公孫賛との戦で、お屋形様がお命を落としそうになったと伺いました」
「あぁ。危なかったな」
「それで、親衛隊を増やしてはどうか、と断空我殿に訊いて見たのですが、断空我殿では2，000名が限界だと仰っておりました」
「そうか、断空我がねぇ」
「はい」
「で、琴は俺にどうしろと言うんだね？」
「隊を新設して貰いたいのです」
「……ふむ。それは構わんが、どういう名目で？」
「お屋形様と共に『悪・即・斬』を貫く為に。新撰組、でしたでしょうか。それを結成したいのです。要は親衛隊とは別に、お屋形様と共に在る隊を創設したいのです」
「それはまた何というか……どえらいことを考える物だな」
お屋形様は、ちょっと呆れたような顔をなさっておられた。……一緒に居たいから、という思いを見透かされて、呆れられてしまったのだろうか。
「駄目……でしょうか？」
お屋形様の顔を恐る恐る見上げると、お屋形様は苦笑していた。
「駄目じゃないさ。俺を心配してくれてのことだろうし、ね。で、敢えて訊くが、その新撰組の局長は誰だね？」
「局長？」
「あぁ。新撰組じゃ頭を張る人間のことをそう呼んでたんだよ。ついでに言うと、その下が副長。更にその下に1番隊組長、2番隊組長、という形で続く」
「では、局長はお屋形様ですね」

「おいおい。ンじゃ俺の呼び方変えるか？」
「……ちょっとしっくり来ないです」
「んじゃ、却下な。誰を局長にするンだ？」
「……僭越ながら私が務めます」
「副長は？」
「……当てがありません」
「まぁ、そこまで焦ることはないか。取り敢えずお前さんが局長ってことにして、厳しい人間を副長にしないとな。副長ってのは『鬼の』って言葉が枕詞になるンだからねぇ」
「そうなのですか？それなら愛紗が……」
「……そのまま伝えようか？」
「いえっ、止めて下さい」
「はははははっ」

お屋形様は愉快そうに笑った。

「……意地が悪いのですね、お屋形様は」
「琴が可愛いからちょっと虐めたくなっただけだよ。そう拗ねるな」

顔を逸らしていた私の顎を掴んで、また口づけされた。

「……これで機嫌を直す、と？」
「甘いかね？」
「甘いです。……もっとしっかり抱きしめて下さい」
「……甘えんぼだねぇ」
「……今頃気が付かれたのですか？」
「いや、そんなことはないがね。悪い気はしないさ」

そのままお屋形様に抱きしめられて、寝台へ移動して。
お屋形様に服を脱がされた。一枚ずつ。凄く恥ずかしかったけど、

綺麗だとか、可愛いとか仰りながら私の体を触っていて。我慢出来なくて、その、お願いをさせられた。

恥ずかしくて泣きそうになって、『お願いします』としか、言えなかったけど。
ちゃんとしてくれたから、あれで良かったのかなと思う。

お屋形様は、ちょっと意地悪だけど、私のことをちゃんと好きでいてくれている。ちゃんと言ってくれたから。

『愛しているよ、琴』って。
恥ずかしくてその時は言えなかったけど。

私も、愛していますよ、お屋形様。

蝶の如く～１２１～

～田豊　Ｓｉｄｅ～

「だから何度も言っているだろう！曹操が眼前に展開する我らを無視して烏巣を襲うなどあり得ぬ！」

「こちらも繰り言になるが、襲われて糧食を焼き払われた際の痛手を思えばより厳重にこれを警備しておく必要があるだろう。その事が分からぬ卿らではあるまい？」

「例え烏巣を襲って来たとて、この私が烏巣を守備して居るのだぞ！？まさかこの私が曹操に後れを取るなどと戯けたことを申すのではあるまいな！？」

「別に後れを取るなどとは申しては居らぬ。万全を期す為、もう少し兵をそちらに振り分けておくべきではないか、と言っているだけではないか。何故そこまで頑なに問題無いと言い張るのだ。別にこの提言によって曹操を撃退せしめたとて、その功績は私ではなく卿に帰するものであろうに」

「そんなことは当たり前だ！」

「……田豊、貴様、よもや決戦を前にして曹操に臆しているのではあるまいな？いや、そうか。臆しているのだな？それで起こるはずもない烏巣襲撃などを言い立てておるのだろうが？

麗羽様！このような惰弱者の言うことを聞く必要はありませぬ！今こそ、いつも通り我らにお命じ下さい！『華麗に勝て』と！」

「良く言いましたわ辛毘さん。私があのちんちくりんに負けるはずなど無いのです！」

「麗羽様、お待ち下さい。もし曹操が烏巣を襲って来た場合、淳于瓊殿が率いる１０，０００を下回る兵を率いてやってくることはありますまい。曹操の出鼻をへし折ってやる為にも、ここは密かに兵を増派しておいて曹操軍を待ち受け、これを叩くことこそ肝要と存

じます」
「……田豊さん？貴方、同数の兵では勝てないと言うのですか？華麗なる袁家の兵が？」
「いえ、そうは言っておりません。確実な勝利を掴む為に準備を致しましょう、と言っているだけです」
「同じ事ではありませんか！貴方は後方で黙って見ていれば良いのですわ！」
「麗羽様！」
「お黙りなさい！」
「流石は麗羽様。明日は官渡城を必ず落として見せましょう！」
「当然ですわ！お～ほっほっほ。お～ほっほっほ」

官渡城周辺での戦闘により、全軍合わせて７０，０００強まで数を減らされたことで雲行きが怪しくなってきた。いや、怪しくなってきたどころの話ではなく、負けの目が出かけている。兵力の差は２５，０００。当初４０，０００程度あったはずの優位を此処まで縮められてしまった。
この状況で我が軍が糧食を失うことになれば、撤退せざるを得ないだろう。兵力差がある状況であれば例え糧食を失おうとも、追い込まれた状況を危機感に変え全軍で一気に官渡城へ押し寄せてこれを陥落させることも出来たかも知れないが、現状の兵力差ではその望みは薄い。
撤退するような事態を避けるべく糧食を集積している烏巣の守備を固め、時間を掛けて官渡攻略を行う為に献策したのだが。麗羽様のお気には召さなかったようだ。

曹操が袁家の内情を完璧に掴んでいるとは思わないが、それでも不和があることは分かっているはずだ。私が我慢比べとも言える状況に持ち込んで、勢力としての体力の差によって勝つ事を考えていることも知られていることだろう。

……もし私が曹操軍の軍師であれば。それをさせぬ為に烏巣を襲撃した上で糧食を焼き払う。郭図達短期決戦論者が後のない博打に打って出、官渡に攻め寄せるのを手ぐすね引いて待つだろう。そして現状、正にそうなろうとしている。それでは駄目だ。駄目なのだ。待っている曹操軍に攻撃を仕掛けて痛い目を見たではないか。何故その事が分からないのか。

麗羽様は仕方がない。麗羽様は生まれついてのご令嬢だ。こう育ってしまったことには我々家臣にも責任の一端があるだろう。だが、貴様らは分かっているのではないのか。危険を冒しても成功させれば問題無いなどと甘いことを考えているのではないのか。主家を危機に晒して平然としているとは何事だ。

ここで黙って引き下がるわけにはいかぬ。

そう思って更に抗弁しようとした私の腕を張コウ殿が引っ張り、私を陣屋から連れ出そうとした。腕を振り払おうとしたが振り払うことは出来ず、そのまま陣屋の外へ出てしまった。

「張コウ殿、離して貰おうか」

「止めておけ。二度忠言して分からぬ相手に三度忠言することはあるまい。英明な人は一度の忠言で改める。凡庸でも二度目の忠言で改める。三度目の忠言は、それを為す者を、そして受ける者をも不幸にするだけだ」

「しかし……！」

「まあ、この場は我慢した方が良い。軍権を剥奪されるぞ？今のところ優位に戦を進めることが出来たのは我らのみだ。余程のことがない限り軍権を剥奪されることはないだろう。だが此処で麗羽様の機嫌を損ねれば間違いなく剥奪される。……孔明殿の策、よもや忘れたわけではあるまいな？」

「忘れたわけではないが」

「では己の策を諦めることだ。俺の目から見て、田豊殿の策でも勝

つのは難しかろう。戦は勝たねば意味がない。孔明殿の策を用いるのが最良であろうよ。どちら付かずで居ると全てを失うぞ？」

「……是非も無し、か」

「……我らは我らの役割を果たすのみだ。いずれ撤退することになる。備えておいた方が良いだろう」

「分かった」

撤退時の備え、か。

懐をまさぐった手に書状が触れる。どうしても麗羽様が撤退することを肯んじなかった時。その時に、この書状を劉備殿に渡す。それで撤退することになるでしょう。孔明殿はそう言っていたが、果たして本当にそうなるのだろうか。

～秋蘭　Ｓｉｄｅ～

袁紹軍がほぼ全軍を挙げて官渡城に寄せてきた。昨日は烏巣を襲撃する華琳様達が城外へ出ていることを不審に思わせないために敢えて城外でぶつかり合ったが今日からは違う。城壁を盾にして抗戦し、

敵を此処へ引きつけ続けてやるのだ。

「秋蘭、私は城外へ出るぞ！」

「姉者、城壁を立てに抗戦した方が良いだろう。その方が時間を稼げる」

「いや、私の隊くらいは外に出た方が良いだろう。昨日は外で迎撃したのに今日は一切出てこない、となれば勘付かれる可能性が出てくる。華琳様が率いて行った兵は１０，０００だ。あちらが２０，０００で迎え撃った場合、勿論華琳様が負けるとは思わないが、相当に苦戦されることになるだろう。それをさせぬ為に、今日も外で抗戦するのだ」

「しかしな姉者」

「……南側から寄せてくる敵だけ相手にするなら構わないわ」

「桂花？」

「但し、出来るだけ退路を確保しているように軍を動かしなさい。我が軍で一番の武勇を誇るアンタがそうしているのを目の当たりにすれば、華琳様が撤退を考えていると思わせることが出来るかも知れないわ。もしそう結論付けなくとも、相手を惑わせて時間を稼ぐことが出来る。

それで稼ぐことが出来た時間がごく僅かだとしても、その時間が得られるならばやる価値があるわ」

「……分かった。姉者、桂花の言ったように南側を頼む」

「あぁ、任せておけ」

姉者は勇んで部下の元へ歩いて行った。

「さて、では我らは予定通りに抗戦するぞ。兵の配置や移動については全て桂花がやってくれ。私達は桂花が立てた策の下行動する。桂花の命令に対して反抗することは許さない。いいな？」

「了解やで」

「分かりました」
「春蘭様大丈夫かな～」
「季衣」
「あ、分かりました」

精々官渡を落城させることにしがみつくが良い。華琳様が烏巣を陥落させ、撤退せざるを得なくなったらしっかり領国に送り届けてやる。行き過ぎて天に送り届けることになるかも知れぬが、この際それは許して貰おうか。

「弓隊、二列に分かれて矢を射掛け続けてやれ！真桜、まだか？」
「行けるで！」
「良し、撃て！」
「了解！」

巨石が空を飛び、門へ殺到していた袁紹軍へ降りかかる。押し潰され、血が周囲の飛び散る。周囲の者達は明らかに怖じ気付いている。

「敵は動けていないぞ！このまま弓を射掛け続けさせろ！私は兵を率いて敵を押し戻してくる！間違えて私達を射貫くなよ？」
「はっ！」

城門前に行くと、季衣が既に兵を取り纏めて待っていた。

「桂花から一旦外に出て蹴散らして来いって言われたんだけど」
「よし、私と共に城外へ一旦出て敵を蹴散らした後直ぐに戻るぞ」
「は～い」

城門が開く。こちらから開くとは思って居なかったらしく、どうして良いか分からないようだ。

「騎馬隊を先頭に一気に駆け抜けるぞ！敵を押し戻してやるのだ！」

騎馬隊が一列縦隊で敵中を駆け抜ける。その後を徒が付いて行き、傷口をより大きく広げてやる。……少し脆すぎるな。寄せ手は顔良か。擬態と見た方が良いだろう。

「季衣、直ぐに戻るぞ」

「どうしたんですか、秋蘭様」

「誘いの罠だ。釣られて突出すれば退路を失うぞ？」

「じゃあ、適当に蹴散らしたら直ぐに帰りましょう」

「ああ、そうしよう」

顔良の隊に騎馬隊をぶつけ、前線を混乱させた上で兵を突入させる。そのまま大きく弧を描いて城門へ。その際に再度騎馬隊を縦列で突っ込ませて逆側へ弧を描いて抜けさせ、城門前で合流した。顔良の隊は大きく混乱はしていないが、こちらを追撃するだけの余裕もまた無くしているようだ。

そのまま入城して、一旦部隊を解散させる。

このままの調子で敵を引きつけ続けることが出来るだろう。

後は、華琳様次第だ。

～張コウ　Ｓｉｄｅ～

「申し上げます！」
「何か」
「烏巣、烏巣が燃えて糧食が襲撃されました！」

伝令が混乱して全く意味の通らない事をまくし立てている。
……正気に戻すために、頬桁を張る。少々、力を込めて。

「落ち着け。滅茶苦茶な報告になって居るぞ」
「し、失礼しました！」
「烏巣が燃えたのは分かったが淳于瓊はどうしている？」
「討ち死になさった模様です」
「馬鹿めが。大言壮語して失敗しているようでは器が知れるぞ。……まあ、知れた上で殺されたのだから妥当か。ご苦労だった」
「はっ！」

漸く、始まったな。
孔明殿から言われた俺の戦の幕が漸く上がる。

「おい、誰か居ないのか」
「はっ」
「田豊殿の所へ行ってこい。麗羽様の陣屋に一緒に文句を垂れに行くぞ、とな」
「は、はぁ」
「さっさと行け」
「は、はっ！」

これで撤退しなければ袁家はお終いだ。どうせ郭図などがなんのかのと文句を付けてくるのだろうが、流石に麗羽様は負け犬の上に予測まで外した奴らの言うことを聞く程馬鹿ではないだろう。辛毘なり辛評なりが嵩に掛かってこちらを罵ったときに、『誤って』斬り殺してやれば黙るに違いない。最初からそうやって黙らせておけば良かったのだが、田豊殿では思いつかぬだろう。
ここまでは孔明殿の見通し通りの展開だ。偶々こうなったと言うよりは、田豊殿がどう動くかまで計算した上でこうなると見通していたのだろう。事前に、しかもこの場にいないでこうまで状況を正確に言い当てるとは。この俺を見込んで仲間に引き入れてくれたことに感謝したいものだ。

麗羽様の陣屋の前で田豊殿が待っていた。

「いよいよ始まったな」
「うむ。撤退して下さればよいが」
「仕込みは終えられたのか？」
「仕込みとは？」
「麗羽様が俺たちの話を聞いて下さるはずはない。劉備殿から何か言わせるのだろう？」
「……そうだ。内容は私にも分からぬが、孔明殿からの書状を渡し

てある。恐らく、上手く行くだろう」
「順調に事を運ぶためにも、先ず環境を整えないとならんだろうがな」
「……物騒なことをしようというのではないだろうな？」
「ああ。そんなことはしない。不幸な事故が起こるだけだ」
「……はあ。そういうところがなければ、もっと麗羽様は貴殿を重用なされるであろうに」
「さて、仮定の話をしても仕方があるまい」

話をしながら陣屋に入ると、負け犬共が威勢良く吼えていた。

「麗羽様、烏巣が焼き討ちされたようですがまだ我が軍には不屈の闘志を持った華麗なる兵が多く残されております！今こそ官渡城を落とすときです！」
「その通りです！麗羽様、ご命令を！」

今こそ、ね。この間も同じ事を言っていた気がするが。
相も変わらず阿呆な事ばかりを抜かしている奴らに、田豊殿が話しかける。言葉で理解させようというのだろう。無駄だと思うがね。

「待たれよ。現状兵力差はほぼ無くなったと言っても良い状況だ。この状況で官渡城を落とすのは無理だ。一旦領国へ帰還して捲土重来を図った方が良いだろう」
「黙れ！大体貴様達が敵を殲滅して居ればこんな事にはならなかったのだ！」
「そうだ！貴様らは自分たちが大した戦働きもして居らぬ癖に何を抜かしているのだ！」

流石に田豊殿もあんぐりと口を開けて返す言葉もないようだ。
それはそうだろう。敵を殲滅する機会を与えなかったのは奴らなの

だから。戦働きが出来ぬように後方に回したのも奴らだ。まあ、奴らは一度死んでみないと分からぬ輩だったということだろう。田豊殿には悪いが、俺のやり方で収拾した方が話が早い。この際、時間は翡翠よりも貴重だからな。手早く済ますとしよう。

「おい、負け犬共」

「な、何だと！貴様、張コウ！誰のことを言っているのだ！」

「此処にいる田豊殿と張飛殿、劉備殿に俺以外の将全てのことだが、卿らには自覚がないと見える」

「き、貴様ぁ～！」

郭図、辛毘、辛評が激発しそうだ。それに引き替え、審配と逢紀は俯いている。やつらは、目が醒めたということなのだろう。

「貴様とて負け犬ではないか！貴様は人のことを言えるような立場ではないだろう！下がれ！」

「麗羽様を負け犬扱いするとは！麗羽様！こ奴に処罰を！」

そう言い募ってまだ何か言おうとしているが、見るに堪えないし聞くに堪えない。ご退場願おうか。

「おい」

「何だ！」

辛毘と辛評を一呼吸で斬り殺す。辛毘の首筋から血が飛び散り、麗羽様の顔に付着している。突然のことに麗羽様は呆然としているようだ。顔良殿と文醜殿はそれぞれ得物に手を掛けてこちらを見るが、麗羽様に対する害意がないことを感じ取ったのか直ぐにその手を離した。

「き、貴様、張コウ、自分が何をやったのか、分かっているのか？」
「ん？たった今目の前を蠅が飛んでいてな。それが余りに五月蠅かったので斬り殺しただけだ。その際、余りにも俺に近付いていた為に巻き込まれてムシが二匹死んでしまうという不幸があったようだがな。
郭図殿、ひょっとして卿はそれ以外の何かを目撃したのか？もし目撃しているのなら洗い浚い此処で話して貰おうか。その内容次第で卿の寿命が変わる、そんな予感が俺にはあるのだ。これはきっと卿の人生に関わる重大事に違いない。俺が相談に乗ってやろう。さあ、遠慮無く話してくれ」

そう言ってやると顔面蒼白になりながら、何も見ていないと一言言い残して陣屋を出て行った。審配と逢紀は残っているが口出しするつもりはないようだ。
これで、やりやすくなっただろう。

「……あれ？どうしたの？今郭図さんが出ていったけど？」
「何。敗戦の責任を感じた辛毘と辛評が自殺したのです」
「え？……きゃあ！」
「おい！誰か遺体を丁重に葬ってやれ！」
「はっ！」

引き摺られていく辛毘と辛評の面を眺めながら、笑いがこみ上げてくる。これから俺の戦が始まると思えば愉快で仕方がない。

「劉備殿、劉備殿はこれからどうすべきだと思われますかな？」

早速田豊殿が話を振る。俺に何か言いたそうな顔をしていたが、兎に角さっさと済ませてしまおうというのだろう。それが得策だ。

「え？……あ～、そっか。麗羽ちゃん、撤退した方が良いよ」

劉備殿が話しかけると、麗羽様も正気を取り戻したようだ。

……本当にこの二人は相性が良いのだろうな。

「……桃香さん。貴女までもが撤退しろと言うのですか？」

「うん。麗羽ちゃん。このままだと、名族袁家を麗羽ちゃんが滅亡させることになるよ？」

「袁家を、滅亡させる……？」

「そう。麗羽ちゃんが袁家を滅亡させる」

そういわれた麗羽様は、わなわなと体を震わせている。

怒ったのかと思ったが、どうやら違うらしい。

「わ、私が、袁家を滅亡させる……」

「そうだよ。袁家が無くなるの。ご先祖様から代々伝わってきた由緒正しき袁家が、この地上から消え失せるの。麗羽ちゃんのせいで」

文醜殿が劉備殿に反論しようとしたが、顔良殿がそれを止めた。ある程度察しているのだろう。

「こうなったのは、全て私が至らなかったせいだ、と？」

「そうだよ、麗羽ちゃん。麗羽ちゃんが至らないせいで名門袁家が無くなるの」

「そ、そんな……私は、どうすれば……」

自分のせいで袁家が無くなるということについて、漸く実感が湧いたらしい。震えていたのはどうやら恐怖感からのようだ。遅すぎるが、まあ気が付かぬままに死んだ淳于瓊達に比べれば遙かにマシだろう。

「田豊さんの策に従って、撤退するのが良いと思うよ、麗羽ちゃん。きっと田豊さんが良いようにしてくれるから」
「……田豊さんが……？」
「お任せ下さい、麗羽様。殿を顔良殿と張飛殿に務めて頂ければ無事に撤退出来るはずです。その後のことは、全てこの田豊と張コウ殿にお任せ下さい。必ずやご期待に応えて見せます」
「……袁家が滅亡すること、回避出来ますか？」
「必ず」

田豊殿がそう言いきる。

「……分かりました。全て、貴方達に任せましょう。顔良さんは田豊さんの策に従って行動なさい。私は文醜さんと共に、兵を纏めて撤退します」
「それが宜しいでしょう。劉備殿、劉備殿も麗羽様の側に。張飛殿は拝借致します」
「うん。朱里ちゃんからの手紙にもそう書いてあったから。気をつけてね」
「はっ」
「……田豊殿、我らも田豊殿に従おう。何なりと命じて貰いたい」
「審配殿と逢紀殿には、麗羽様の側でその身の安全を図って頂きたい。それと、領国に帰還したら兎に角糧食と兵を集めておいて貰いたい」
「……何のために、と聞きたいが、それはやめておいた方が良いのだろうな」

審配が俺の方を見ながらそう言う。その審配に笑って頷き返してやる。

「……分かった。兎に角、生きて再会出来たらば改めて話をさせて貰いたい。これまでのことと、これからのことについて」
「それはこちらも望むところ。……宜しくお願い致しますぞ」
「任せて貰おう。身命を賭してやらせて貰う」

話をしている間に、麗羽様と劉備殿、文醜殿が陣屋を出て行った。
あの分なら、直ぐに撤退を始めるだろう。その後を審配と逢紀が追い掛けていくように出ていった。

「さて、田豊さん。策を聞かせて頂けますか？朱里ちゃんの策を」
「はっ。顔良殿と張飛殿には、普通に撤退戦を行って貰いたいのです。困難な戦になるでしょうが、全てお任せします」
「任せる？その間、田豊さんと張コウさんはどうしているのですか？」
「俺たちは先に撤退致します。但し、白馬へ」
「白馬？」
「そこに１５，０００の兵を伏せてあるのです。それを率いて決戦します」
「決戦と言っても、１５，０００程度では曹操軍を相手取るには不足でしょう」
「顔良殿。実は徐州から孔明殿と沮授、麹義殿が２０，０００の兵を率いてやってきます」
「朱里ちゃんが？」
「はい。我らが撤退している際に、曹操軍の後背を突くのです。曹操はそうはさせじと撤退していく本隊を捨て置いて、徐州からの軍に対応しようとするでしょう。その後背を私と張コウ殿で突きます」
「……成る程。では私達は朱里ちゃんが後背を突いたときに、本隊は捨て置いても問題無いと思わせる程度に負けておく必要がある訳ですね？」
「そうです。それを、お願いしたい」

「分かりました。恐らく普通に撤退してもそうなるでしょうから間違いなく上手く行くでしょう」

「宜しくお願い致します」

俺たちの兵は行軍の疲労があるだけで、曹操軍は心身共に疲労があるだろう。兵数がほぼ同数であれば、この差は大きいはずだ。

……これからが本当の戦だ。

蝶の如く～１２２～（前書き）

時間が空いてしまいましたが、続きを投下します。
今週も一身上の都合によってどうなるか分かりませんが、出来るだけ滞らないようにしたいと思います。

それではどうぞ。

蝶の如く～１２２～

～教経　Ｓｉｄｅ～

襄陽から平家軍を迎え撃つべく出立した軍の詳細が判明した。率いている兵は４０，０００。主将は蔡瑁。副将として張允と張繍が付いているらしい。他に俺が知っている将として、胡車児と呂公が従軍している。

兵数はそれなりにあるが、恐らく寄せ集めで練度も低いだろう。黄祖が従軍していないってのは、江夏の兵を連れて来ていないということだろうからねぇ。恐らく荊州にいる兵で最も戦を経験して居るであろう兵を連れて来ていない。兵の質は推して知るべし、だろう。

将については、張繍と胡車児が居るってのがよく分からない。何の関係があって劉表の下にいるのか。まぁ詠が月の親友で月の下から離れるつもりがなかった時点で、董卓系列の将の人間関係については俺の知る歴史は全く当てにならないって事で間違いないが。

「……皆集まったようですね。軍議を始めます」

いつも通り、稟が司会進行役を務める。補佐に亞莎が付いているのがいつもとは違う点だ。。

亞莎と言えば、霞と合流した際俺の顔を見るなり顔を背けられた。此処まで嫌われれば立派なモンだと思い、そうまで嫌う理由が気になって聞いてみると、そういうことではなかったらしい。何やら俺の顔が眩しいとか言っていたが。この上なく眼鏡を愛する俺は、眼鏡っ娘から見ると後光が差して見えるのかと思って稟と冥琳に訊いて見たが、そんなこともないらしい。まぁ、どうでも良いンだが。

「現在、襄陽を出立した劉表軍が我が軍の進路上に展開しておりま

す。その数は４０，０００。将帥は蔡瑁。副将に張允と張繍が付いています。兵の編成は、騎馬１０，０００、徒３０，０００。それに対する我が軍の兵は７０，０００。騎馬２５，０００、徒４５，０００で構成されております。

出陣してきた劉表軍の目的は、当然我が軍の侵攻を食い止めることでしょう。その目的を達するため、進行方向にある山に布陣して我が軍を待ち受けているようです。この敵を如何にして打ち破るのか。それが議題となります」

そう言った稟に、霞が応じて話し始める。

「出来ればやけど、そいつら平野に引き摺り出して騎馬で決戦したいな。こっちの騎馬は２５，０００もおるんや。押し包まれることもないし、馬の質も兵の練度でも上回っとる自信がある。騎馬を有効に活用することを考えて貰いたいんや」

「それは分かるけれど、態々布陣した山から降りてくるかしら。こちらの兵が多く、また騎馬の数で勝っていることは当然把握して居るでしょう。それと分かっていて地の利を捨てるとは思えないけれど」

蓮華の発言を受け、琴が冥琳に話しかける。

「冥琳、梓潼で張任殿と戦った際のように、策で釣り出すことは出来ませんか？」

「簡単なことだ。山に布陣した劉表軍を３０，０００の兵で牽制しておき、残った４０，０００を襄陽方面へ進発させればいい。それを見て行動を起こさないということはないだろう」

「どうしてだ？あたしからすると、態々地の利を捨てるとは思えないんだけど」

「その辺りは攻められた側の心理というものが大いに関係あるだろ

う。雛里、お前はどう思う？」
「あわわ……えっと、彼らは侵攻を食い止めるために出陣したのですから、襄陽が攻められるという状況を防ぐために動かなければならない状況にあります。だから４０，０００の軍を追って交戦せざるを得ず、そこを３０，０００の兵で後背から襲うのが良いのではないかと」
「……牽制した３０，０００を襲うことも考えられますが、その辺りについては？」
「確かに思春さんの言う通りですが、４０，０００で３０，０００を襲って無傷で済むと思うような馬鹿ではないと思います。平家軍が完膚無きまでに負けたとしても率いている兵の質から考えて半数の兵を喪うことは覚悟しなければなりません。残った２０，０００程度で襄陽を囲む４０，０００に勝てるという勝算があれば別だと思いますが……」
「あり得ないことね」
「はい」
「蓮華様は何故そうお考えになるのです？」
「平家の兵を相手に寡兵で勝てる策を考えられる軍師が劉表軍にいるならば有名になっているでしょう。それに何より、此処まで相手にしてきた劉表軍の兵の質はもっと高いものになっているはずよ。そうでない以上、私達にとって都合の悪い予測は現実になり難いでしょう」
「成る程。言われて見ればその通りです」
「……動かない」
「相手は頭が足りないから動かないかも知れない、と姉貴は言ってます。優柔不断で決断が出来ないような将が率いている以上、そちらの可能性の方が大きいのではないか、と」
頭が足りないってのはお前さんの意見だろうが、？忠。百合は一言もそんなこと言ってないと思うンだがねぇ。うさんくさそうに？忠

を見ると、笑って片眼を瞑りやがった。キメェんだよ、糞が。どうせなら百合にそれやらせてくれ。

「ではそのまま襄陽を囲んでやれば良いではないか。何の心配も要らぬ」

「愛紗さん、もし襄陽に江夏の兵が合流して籠城した場合、４０，０００の兵だとこれを落とす事が出来ないかも知れませんよ～？」

「む……確かに」

穏の意見を聞いて、愛紗は考え込んでいるようだ。他に手を挙げて発言を求める奴は居ない。意見は出尽くした、ということだろう。

「……他に意見はないようですね。では、今までの話を聞いて頂いた上での教経殿の意見を伺いたいと思います」

「そうね。教経、貴方はどう考えているのかしら」

雪蓮は面白そうな顔をして俺の面を眺めている。お手並み拝見、という感じだな。他の皆も俺を見て言葉を待っている。

……まあ、策ならあるンだよねぇ。誘い出すから問題なンであって、ね。

「どう考えているのか、と言われてもな。取り敢えず最初は冥琳が言った策で問題無いだろう。が、それで動かなかった場合は、策で平野に押し出してこれを叩こうと思う」

「……教経様、敵を釣り出す事が出来るのでしょうか」

「亞莎。俺は『釣り出す』とは一言も言ってないぜ？『押し出す』と言ったのさ。ここは啄木鳥に倣うことにしようと思って居るンだ」

「啄木鳥、ですか？」

亞莎が小首をかしげて俺にそう問いかけてくる。

……萌えるねぇ。眼鏡のために１２０％の力が出せる。それが俺の強みなんだよねぇ。

「そうだ、啄木鳥だ。啄木鳥ってのは木に潜む虫を喰らう際、馬鹿正直に穴にくちばしを突っ込んで喰らう訳じゃ無い。先ず虫が潜む穴の反対側をくちばしでつつき、それに驚いて穴から出てきた虫を喰らうのさ」

「成る程」

「稟はどうやら分かったようだねぇ。

山で布陣している奴らが追撃しなかった場合、動くつもりが無いことは分かっている。だから山を降りざるを得ないようにしてやるンだ。

……全軍を二手に分けて戦に臨む。先ず襄陽に向かわせる兵は徒ばかりの４０，０００とする。劉表軍が動かなかった場合、払暁にその後背から奇襲を仕掛けて奴さん達を平野に押し出してやるのさ。丁度啄木鳥が穴の反対側をそのくちばしでつつくようにねぇ。そして押し出されて山を降りて来た敵を、騎馬２５，０００と徒５，０００の３０，０００で殲滅する。勿論、奇襲部隊と挟み込んだ上で、だ。

勿論動いた場合は雛里や冥琳が言った通りに殲滅してやる。３０，０００の方を襲おうと４０，０００の方を襲おうとねぇ」

「あの、教経様。今お考えになったのですか？」

「あぁ。これなら勝てるだろうと思っているンだがね」

「凄いです」

「そうかね。有り難うよ、亞莎」

「い、いえ」

皆の顔を眺めると、冥琳が何やら呆れたような顔をしていた。……約一名、ハァハァ言ってクネクネしているのが居たがそれはスルーしておく。

「相変わらず、雪蓮とは違った意味で軍師泣かせなことだな、教経」
「どういう意味かしら？冥琳」
「そのままだ。良くもまぁ次から次へと思い付くものだな」
「何言っていやぁがる。お前さんだってこれ位思いついただろう？敵を策で平野に『誘い出す』ことが出来るかどうかを聞かれたからああ答えただけだろうが」
「フッ……」
「嬉しそうだな？」
「それはそうだろう。お前が私のことをちゃんと理解してくれている、ということが分かったのだからな」
「……そうか」

全く。可愛らしいことを言ってくれるモンだ。
冥琳の目を見る。冥琳も俺の目を見つめ返していた。

「……わたしを無視して二人の世界に入るのは止めて貰っても良いかしら？」
「雪蓮。邪魔をしないで貰おうか？」
「冥琳。最近わたしの扱いが雑だと思うんだけどな～？」

にこやかに会話をしているが、全く笑えないんだよねぇ。

「二人とも。まだ軍議の最中ですよ」
「他に何か話すことがあるの？」
「……ん」

百合が挙手して発言を求めた。

「何かありますか？百合」

「……地図」
「地図なら事前に手に入れましたが」
「……書いた」

成る程ねぇ。？艾のライフワークは確か地図の作成だったはずだ。自分でも赴いて気が付いた点を書き加えたりしていた、とかいう話もあった。兵法に通じた人間が作成した地図。かなり貴重なモノなンじゃないか？重機を持ち出して山を削ったり出来ない以上、大して地形は変わっていないはずだからねぇ。

「稟、百合は荊州の出身だ。ついでに言うと、地図作って地形を把握するのが癖みたいなモンらしい。手元の地図と見比べてみると良いンじゃないかね？」
「教経殿がそういうなら。百合、少し見せて頂いても宜しいですか？」
「……うん」

百合から受け取った地図を眺めていた稟は、最初普通に眺めていたがだんだんと食い入るような感じで地図を見るようになっていった。

「これを自分で書いたのですか？」
「……うん」
「……軍師を務めることが出来ますよ、百合」
「……ん」
「稟、役に立ちそうか？」
「はい。この地図があれば、教経殿が考えた策を行うのに最も大切な奇襲を成功させる事が出来ると思います」
「その辺は頼む。俺は大方針しか出せないからねぇ」
「はい。……それ以外に何か意見のある人は居ますか？」

誰も手を挙げない。

「じゃぁ、これで軍議は終わりだな。誰がどちらに参加するかについては後で軍師から通達があるだろうからそれに従ってくれ」

「御意」

山本勘助宜しく策を見抜かれる可能性もあるがね。残念ながら相手は『闘争は愉悦』とか言うような人間じゃないだろう。もし相手が上杉謙信だったとしても、平地に騎馬２５，０００を用意してあるンだ。打ち破ってみせるさ。

～雪蓮　Ｓｉｄｅ～

山に拠って布陣した劉表軍に対し、平家軍も本格的に動き始めた。４０，０００の兵を率いて進発する際、教経から林の向こうを移動し、姿を見られないようにしながら、しかし土煙はちゃんと立てるように移動しろ、と言われた。気付いて山から降りてきてくれた方

が楽で良いだろうからな、と言っていたけど。

「冥琳。劉表軍、食いついてくるかしら」

「さあ。まあどちらでも構わん」

「結果は変わらない、か」

「そういうことだ。尤も、此処まで来て後方に見えない時点で動かないで居るのだろうがな」

「そっか。ま、何でも良いわ。劉表の奴を殺せるのなら、ね」

「意気込むのは構わないが、先走るなよ？」

「分かってるわよ。ここに劉表が居る訳じゃ無いんだし、心配要らないってば」

「ならいいがな。教経といい雪蓮といい、前線に立ちたがる主君ばかりで困る」

「はいはい。わたしの分まで教経に言っておいてね」

「雪蓮！」

「まあまあ、落ち着けって冥琳。きっと雪蓮だって分かってるはずなんだから。お前が信じてやらなくて誰が信じてやるんだよ」

「そうそう。良いこと言うじゃない、白蓮」

「……いや、それを自分で言っちゃ駄目だと思うんだけどな……」

「あわわ……あ、あの、済みません。りゅ、劉表軍の動向について報告があります」

「冥琳、先ず報告を聞いた方が良いんじゃない？」

「チッ……雛里、報告を聞こうか」

「は、はい。劉表軍ですが、どうやら山から動いていないようです。蔡瑁という人は頭はそこそこに回り戦ぶりも悪くありません。襄陽を目指す私達の動きを察知しているに違いありません。が、保身や我欲に基づいて行動する人ですから、この動きが誘いであった場合に包囲殲滅される可能性を前にして居すくんでいる、というところだと思います」

「成る程。荊州に詳しい雛里がそう言うのなら間違いないだろう。

となると……」
「はい。奇襲を掛ける為にこれから移動します」
「どう移動する？」
「思い切って１，０００単位で４０組に分けて分散させようかと。思い思いの場所で身を隠させ、刻を定めて集結すれば良いでしょう」
「敵に発見されたとき危険ではないか？」
「それも考えましたが、恐らくは大丈夫かと。私達を追い掛けてこなかった時点で後方へ気を配ることは無いと思います」
「穏はどう思う？」
「そうですね～、麓に本隊として集結するのは２０，０００程度にして、後は敵陣を臨める場所に最初から移動させておいた方が良いと思いますね～。百合ちゃんから貰った地図を見る限り、身を隠すに適している場所が結構ある様に見えますから」

冥琳に、穏に、雛里。
この三人が話し合って出す結論以上のものはないでしょうね。わたしの勘も任せとけば良い結果が出るって言ってるわけだし。
とっとと片づけて、劉表を殺しに行かなきゃね。

「そろそろ時間ね」
「ああ。……行けそうか？」
「わたしは大丈夫よ。白蓮達の方が心配なんだけど？」
「私も大丈夫だ。平家を相手にしていた時と比べれば何てことはない」
「そ。期待させて貰うわよ」
「ああ。やれるだけはやらせて貰うさ」
「姉様、そろそろ」
「ええ。行くわよ。気勢を上げて付いてきなさい！」
「あ、ちょっと姉様！」

気勢を上げながら敵本陣に突っかけていく。直ぐ後を蓮華と思春が駆けているみたいね。劉表軍も流石に気が付いて居るようだけどもう遅いのよ。

目の前に飛び出してきた雑兵がこちらを向いて固まっている。きっとあり得ないとでも思って居るんでしょうけどね。此処は戦場なのよ？

「邪魔よ！」

一太刀で斬り捨てる。
その左右に飛び出してきた雑兵を、蓮華と思春がそれぞれ斬り捨てた。

「やるじゃない、蓮華」
「姉様！先頭を走っていくなんて危ないことをしないで下さい！」
「蓮華、此処は戦場よ？先頭を走ろうと後にいようと死ぬ時は死ぬのよ。どうせ死ぬなら先頭に立って死んだ方が遙かにマシよ。わたしは後で我が身の安全を図った挙げ句に死ぬなんて御免なのよ」

山の木々の間から、次々に兵が出て来ている。本隊として集まっていた２０，０００だけでなく、山中で息を潜めていた兵達が一斉に、それこそ至る所から湧いて出るかのように劉表軍に襲いかかっている。

「で、ですが！」

「蓮華。蓮華は蓮華、わたしはわたし。この言葉を貴女がどう思うか分からないけれど、それは事実なのよ。わたしはわたしらしくわたしのやりたいようにやるの。誰の指図も受けないわ」

「雪蓮、何やってるんだ！行くぞ！私達で追い落としてやるんだ！」

「分かってるわよ、白蓮。どんな感じ？」

「劉表軍の奴らは皆浮き足立ってる！それどころか我先に逃げだそうとしているんだ！さっさと決定的にしてやろう！」

「いいわね。それじゃ行くわよ！」

白蓮と並んで駆け出す。前に立ちふさがる雑兵を、二刀で次々に斬り伏せている。

「中々やるじゃない！」

「まあ、これだけは、ね」

「後でお手合わせ願おうかしら、ね！」

左右から剣を振り下ろしてきた兵を二本の剣で同時に斬る。その白蓮の横からやってくる雑兵をわたしが斬り捨てる。不意を突いたのは確かだけど、それにしてもちょっとね。

「随分向かってくる兵が少ないわね」

「殆ど逃げ出したんだじゃないか？馬もその辺りに結構放ってあるし、状況の把握が出来ずに逃げ出したんだろう。あと少しって所じ

ゃないかな」
「あら、後に下がるの？」
「ああ。取り敢えず現状を把握しないとな。それに雛里は戦う術は持ってないんだ。側に居て守ってやらないとな」
「そう。じゃ、わたしはこのまま行くわ。あ、あと言っておくけど雛里は大丈夫だと思うわよ？冥琳も穏もそこらの雑兵なんて問題にしないくらい強いから」
「そうか。でもまあ私は戻るよ……って、聞いちゃ居ない」

ここでの戦闘はもうそろそろ終わりね。それでもまあ、出来るだけ死んで貰わないとね。私が殺してあげるわ。殺せるだけ、ね。

～百合　Ｓｉｄｅ～

「……ご主人様」

「あぁ。ワラワラとおいでになったようだねぇ。？忠、伝令出せ。右翼、左翼ともに出し惜しみせずに一気に蹂躙してやれ、とね。采配はいつも通り稟が取る。稟から通達があるまでは自由にして構わんが、通達があった場合は絶対に従え、とな。まぁ、通達が出るとすれば戦闘終了のものだろうがね」

「了解ですよ」

「ダンクーガ、親衛隊の連中に半弓を用意しておけと言っておけ」

「……大将、アレをやるのか？」

「そうだ。取り敢えず親衛隊１，０００名だけだが、どれ程役に立つかを見せてやることにしよう」

「了解！」

「百合と？忠は残りの４，０００の騎馬を率いて俺の護衛だ。まぁ、約束させられたからな」

「……分かった」

「よし、行くぞ！」

ご主人様が親衛隊を率いて前線に向かう。その前を、翠と蒲公英が率いる右翼と霞と亞莎が率いる左翼が縦列で駆けている。劉表軍は迎撃の為に陣を構えているが、全体的に浮き足立っている様に見える。

「姉貴、大将は何をするつもりなんだ？」

「……胡服騎射」

「胡服騎射？」

「……馬上で矢を射る」

「出来るのかよそんなこと」

そう問いかけてきた忠に頷く。

多分出来ると思う。親衛隊の兵の練度は私も忠も身を以て知っている。あれだけの力量がある兵がその訓練をしていたのであれば問題

無くやってのけるだろう。

「……護衛」

「分かってるって。よし！大将の護衛として付いていくぞ！」

ご主人様の後を駆けていく。

「おいおい、敵さん総崩れになるんじゃないかこれ」

「……間違いない」

右翼の翠と蒲公英が一列縦隊で敵陣中央目掛けて突っ込んでいく。霞達左翼は途中で５列縦隊で２，０００程の兵に分かれて、順番に敵に突っ込んでいる。車懸かりの陣。私がどうにも出来なかった陣は、本来騎馬で行うものだと言っていた。それをやろうと言うのだ。徒の兵でさえあの圧力だった。騎馬であれば一溜まりもないだろう。

「ダンクーガ、やれ！」

「よっしゃぁ！テメェら、今回は一方的に蹂躙してやるぞ！やぁぁぁぁってやるぜ！」

「「「「「ＯＫ！忍！」」」」」

親衛隊は一斉に馬を駆って敵の近くまで接近し、そのまま弓を射掛けて外周を走り続ける。グルグルと敵の周りを回りながら、組織立った抵抗をしている箇所へ駆けていっては弓を射掛け、敵が近寄ってきたら駆け去る。近寄ってきた敵は、近くに誰もいなければ私と忠が側面に突っ込んで混乱させ、右翼や左翼、本隊がいる場合は彼らがその間隙に付け込んで傷口を開いていく。

「ハッ。大将！気持ちいいな！」

「だろうが！一方的な戦ってのは気持ちが良いモンだ！このまま押

して押して押しまくるぞ！」
「了解！」

相手からすればたまったものではないだろう。一方的に殴られ続けて居るのと同じような状況だ。もし私が劉表軍を率いて居たらどうするかを考えるけど、ここまで一方的な状況になってしまったら手の打ちようがないと思う。
劉表軍は、山に布陣するべきではなかった。隊を細かく分けて近隣の村に分散させ、襲撃するときに集結して昼夜を問わず襲撃し、また分散して人の中に隠れる。これを繰り返して侵攻速度を遅らせ、その間に襄陽の防備を固める。襄陽の防備が固まった時点で襄陽に帰還して共に籠城すると見せかけ、城外から城内と連携して防ぐか、暫く放置しておいて城外からの奇襲がないと油断させた上で一気に本陣を突く。そういう絵を描くべきだったと思う。

「姉貴。勝ち戦ってのはやっぱり気持ちが良いね」
「……まだ勝ってない」
「っと。そうだったな。じゃあ、気を引き締めて行きますか」
「……うん」

ご主人様が頭上で刀を回している。
今まで遠巻きに矢を射掛けているだけだった親衛隊が、吶喊しようというのだろう。効果的だと思う。突っ込んでくるとは思っていないと思うから。

「……忠。突撃」
「了解！全軍、突撃するぞ！良いところ全部大将達に持って行かれたら俺たちはこの戦で大した働きもせず終わりって事になる！それは本意ではないだろう！？」

騎馬兵は皆頷いている。これまで見てきた限り、彼らもかなり厳しい訓練を受けているはずだ。きっと戦いたいに違いない。忠は相変わらず兵を鼓舞するのが上手いと思う。

「その意気や良し！大将に付いていって、一番美味しいところを横からかっさらってやるんだ！行くぞ！」

親衛隊が切り開いた敵陣に間髪入れずに突っ込んでいく。ぶつかった時の抵抗は殆ど感じられない。このまま切り崩して行けるだろう。

「姉貴、あの辺りに敵将が固まって居るみたいだ！」

「……包囲、殲滅」

「了解！お前ら、お手柄が目の前に居るぞ！奴さん達は逃げられない！後も横も味方しか居ないんだからな！俺たちが突っかかっていって首を挙げるんだ！」

配下の騎兵達が馬首を返して突撃を開始する。流石に抵抗が強いようだけど、後から雪蓮達が徒で切り込みを掛けているようだ。側面からも霞や翠が選りすぐったであろう隊で突撃している。崩壊は時間の問題。あとは、死ぬまで抵抗するのか降伏するのかの選択しかない。

「百合。戦は終わったくさいな」

「……うん」

「最前線に立てなかったが、親衛隊の働きが期待以上だったからまぁトントンってところだろう」

「……白旗」

「……降伏、か。少し確認したいこともあるし、受け入れてやるか。まぁ、確認した結果次第で死んで貰うことになるがねぇ」

ご主人様が私に噛いかける。
何を確認するつもりなのか分からないけど、何かろくでもないことを彼らがしているのではないか。この人は訳もなく人を殺す人ではないと思うから。

「どうしたンだ？ぼーっとして」
「……何でも無い」
「？まぁいいがね。気を抜くなよ？まだ戦場だぜ？」
「……うん」
「ならいい。不意を突かれて怪我なんてするなよ、百合。折角綺麗に生まれてきたンだから」
「～～～」
「……良いねぇ。可愛いねぇ」

……こういう時、どう答えて良いか分からない。ご主人様は、機会があれば私に綺麗だとか可愛いとか言ってくれるけど、本当にそう思ってくれているんだろうか。私は吃音だし、やっぱり魅力はないんだろうか。もし魅力があれば、愛紗や稟達のように、閨に呼んで貰えるんじゃないか。

「姉貴、何か考えているのは分かるけど、後でな」
「……ん」
「ダンクーガ、奴らの武装解除しとけ。親衛隊でやれ。同じ様な槍持って同じ様な格好してる人間がぞろぞろ来たら吃驚するだろう。その間に将の武器を回収して後手に縛っとけ。それから……」
「兵は武装解除して一所に纏めておけ、だろ？」
「そうだ。頼んだぜ」
「あいよ」

終わってみればあっけなく、私達の完勝に終わった。失った兵は5，

０００にも満たないだろう。策を二段階で構築した時点で、勝ちは確実だった。

「今回は思い通りに戦が出来たな。張り合いがないが、毎回こうであって貰いたいことだ」

「そうですか？俺はもっと骨がある奴を相手にしたいですがね」

「馬鹿め。楽に勝てるに越したことはないンだよ。どうやったって人が死ぬンだからねぇ。出来れば、人死にが少ない方が良いのさ。味方も敵も、ね」

「敵も、ですか？」

「そりゃそうさ。戦に勝ったら征服した土地は俺たちの領地になるンだ。そこに住む人間は当然領民になるわけだ。禍根になるような真似はしない方が良いンだよ。

白起が死を賜ったとき、何て言ったか知ってるか？『自分は長平で四十万もの人間を生き埋めにして殺している。元より死すべきなのだ』と言ったのさ。因果も業も巡り巡って返ってくる事に思いを致すべきなンだよ」

「己の為、というわけですか」

「そうだ。俺の為さ」

忠との話を聞いていて思う。

こういう人が人の上に立つべきだ。自分の為だと言っているけど、それは結局民の為にもなる。良い人に巡り会えたと思う。

忠は私がご主人様に恋をしていると言っていた。多分そうなんだと思うけど、私のことをどう思っているのかは分からない。どうやって確認すれば良いかも分からない。

ご主人様が私のことをどう思っているのか。それが、一番気になっていた。

蝶の如く～１２３～

～教経　Ｓｉｄｅ～

降伏してきた蔡瑁達にどうやって口を割らせるかを陣を歩きながら考えていた。ひょっとすると、劉表の他にも死姦した奴が居るかも知れない。そいつら全てを明らかにして、雪蓮に引き渡してやりたい。だが、ダンクーガに聞いたところだと死姦ってのはやっぱりこの世界でもドン引きの対象になるらしい。ダンクーガの奴は引きつった顔で、俺の趣味がそうなのかを訊いてきやがったからな。事情を説明してやると安堵していたが、同時に劉表のことを糞野郎呼ばわりしていた。

そうなると、サラリと口を割らせるには細工が必要になるだろう。『死姦が好きか？』と聞いてはいそうですとは答えないだろうからな。口を割らせる為の案はあるが、胸糞が悪くなるから出来ればそれはしたくないンだが。

先程から続々と将が帰還してきている。白蓮が歩いているところを見ると、奇襲組も還ってきているらしい。今回も誰も欠けることなく勝利出来た。

「教経、何をしているのだ？」

「冥琳か。皆無事で還ってきて良かったな、と思ってたンだよ」

「流石に負けることはないだろうし、前線に出て行く将は皆腕に覚えのあるものばかりだ。それも一流の、な。劉表軍の将などに後れは取らぬだろう」

「まぁそうかも知れんが、心配なものは心配なンだよ」

冥琳と話をしていると、雪蓮が向こうからやってきた。雪蓮は奇襲

を仕掛けて敵を山から追い落とし、そのままの勢いで後背に食らい付いて殺しまくっていたらしい。恨みがあるから尚更に憎かったのだろう。

「雪蓮も還ってきたみたいだな。怪我もなさそうだし、無事で何よりだ」

「……いや、あれは無事とは言わないだろうな」

無事に還ってきた、と言った俺に、冥琳は無事ではないと言った。どう見ても怪我をしているようには見えないし、無事だと思うンだが。

「怪我してるようには見えないぜ？」

「そういう意味ではないのだ。まあ、直ぐに分かるだろう」

「はぁ？」

「……雪蓮が来たぞ」

前を見ると、冥琳の言った通り雪蓮がやってきた。

「……教経、此処に居たのね」

「あぁ。ご苦労さん、雪蓮。おかげで想定通り勝つ事が出来た」

「……」

いつもの雪蓮なら当たり前だと言う所だと思うが、何も返事をしなかった。

「……付いてきて」

そう言って俺の腕をひっつかんで陣屋に向かおうとする。

「……教経、雪蓮を頼むぞ」
「はぁ？」

何が何やらさっぱり分からないが、返答する前に雪蓮にぐいぐい引っ張られてその場を離れた。

「おい、雪蓮。どうしたんだよ」
「……良いから黙って付いてきて」

普段と違って切羽詰まったような、そんな感じだ。此処は黙って付いていくことにするかね。

雪蓮に宛がわれた陣屋に文字通り連れ込まれた。雪蓮の様子は相変わらずおかしい。

「おい雪蓮。どうしたンだよ」
「……ねぇ、教経。わたしのこと嫌い？」
「……なンだ突然」
「良いから答えて。わたしのこと、嫌い？」

雪蓮のことが嫌いか、と言われてもねぇ。

「嫌いなわけ無いだろうが。嫌いな奴と一緒に居るほど酔狂じゃないンだよ」
「……そう。良かった」
「何が良かったン……！」

言いかけた俺に、雪蓮が抱きついてきた。
それにも驚いたが、体が異常に熱い。

「……雪蓮、お前さん、熱があるんじゃないのか」
「……ええ、多分ね。でも病気じゃないのよ。……病気と言えば病気かも知れないけどね」

そう言いながら首筋に唇を宛がって、そのまま何度も口付けをしてくる。一体どうしたンだ。そう思って居ると、チカッと痛みが走る。
……雪蓮が俺の首筋の皮膚を少し咬み破ったらしい。

「どうしちまったンだ、雪蓮」

ゆっくり抱きしめてやると、少し落ち着いたようだ。熱があるからか、潤んだ目で俺を見上げて来た雪蓮は、そのまま顔を寄せてきてキスしてきた。

「……んん……ちゅ……」
「ん……しぇ、雪蓮、お前さん……」
「……ごめんね、教経。わたしを助けて欲しいの」
「助けるって、どういうことだよ」
「体が熱いの。火照って仕方がないの。鎮めるのを手伝って」
「手伝うのと今の口付けと何か関係あるのか？」
「あるわよ」

「そりゃどういう……って！」

雪蓮に寝台に押し倒された。体が火照って仕方がないと言うし、雰囲気的には欲情している感じに見える。……冥琳のやつ、雪蓮を頼むってのはこうなることが分かってたな？雪蓮の悪い癖ってのはひょっとしてこれか。

「……教経、本当にごめんね。でも、今日だけで良いから付き合って」

「んん……ちゅ……ぴちゃ……」

雪蓮が上に乗って積極的に口を吸ってくる。流石にこうされ続けると反応してくるわけで。

「……ぷはっ。雪蓮、流石にこうまでされると我慢が出来なくなりそうなンだが？」

「我慢しないでいいの。わたしももう限界だから。……ね、お願い。私を助けて」

……助けて、か。縋り付くような目で俺を見ながらそう言ってくる。俺自身の状況もあるし、拒否出来そうにない。

「……分かったよ。抱けば良いンだな？」

「そうよ。抱いて欲しいの。思いきり抱いて、教経」

始めは雪蓮に犯されたような格好で、雪蓮を抱いた。というより、抱かれたのかも知れないが。まだ収まらないから、ということで、二回目を。その後はやられっぱなしでは収まらないから、という極めて個人的な理由で俺から抱いた。

雪蓮は普段と全く違って女の子らしかった。気の強さはなりを潜めて、最後の方はひたむきに俺に尽くしてくれていた。普段と声色まで違っていた。エロいというか、可愛らしいというか。兎に角普段と何もかも違ってた。何度も何度も気をやって、切なそうに声を上げていた。

怒濤のような時間が過ぎ去って、雪蓮も落ち着いたようだ。落ち着いたと言っても、息も絶え絶えだが。俺の方は全く問題無い。……普段からお勤めしていたからだろうが、これは自慢になるのか？
寝台から起き上がって、水差しから水を碗に注いで飲み干した。もう一度水を注いで雪蓮にも渡してやる。

「……ん、ありがと」
「で、どうしたってンだ？」
「……やっぱり気になるよね？」
「気になるが、言いたくなきゃ言わなくても良い。けどまぁ、言ってくれた方が嬉しいけどな」
「……そっか。わたしね、戦で人を殺したりして興奮しすぎると、ああいう状態になるの。体が熱くてどうしようもなくなって。その熱さっていうのに一番近いのが、多分性欲。それを鎮める為に、そういうことをするわけ。でも、誰でも良いって訳じゃ無いのよ？私が大切だと思って居る人じゃないと駄目なの。だから普段は冥琳に

お願いしてたんだけど、今日は教経のことしか考えられなくて。それでその、こういうことに」
「成る程」
「……ごめんね。気持ち悪いよね」
「気持ち悪いとは思わなかったし今も思わないさ。切羽詰まってるなぁとは思ったがね」
「……本当？」
「あぁ、本当だ。それより、大切だと思ってるってのは大胆な発言だと思うンだがねぇ」
「情を交わしておいて今更大胆も何もないと思うんだけど？」
「ははは。そりゃそうだな」
「……でも、ありがとう。もう、しないようにするから。ごめんね。本当はちゃんとしっかりしている時に、好きだって言って抱かれようと思ってたんだけど、こんなになっちゃった」
……ちょっと泣きそうだな、雪蓮。抱かれているときのアレが地の雪蓮なのかも知れない。
「別に気にしなくても良いンじゃないかね？色々な形があると思うが」
「でも」
「良いンだよ。雪蓮が俺の事を好きだって言ってたのが本気だとは思ってなかったけどな」
「本気だって言ったじゃない」
「まぁそうだがねぇ」
雪蓮とこういうことになって、『良かったね、じゃぁさようなら』、という訳にもいかないだろう。抱いたからだろうが、情というものが湧いてきているわけで、ねぇ。

「……今俺が雪蓮のことをどう思っているか、気にならないか？」
「……なるけど、別に良いのよ。わたしが好きでこうしたんだから」
別に良い、とか言いながらもやっぱり気になって仕方がないって感じだな。
「……正直に言うと抱いたからだと思うけどな。好きになったと思うよ、雪蓮のこと」
「……へ？」
「だから、好きになったと思うよ。尽くしてくれてる雪蓮は可愛かった」
「本当に？」
「あぁ」
そう答えると、嬉しそうに抱きついてきた。
「教経！」
「ちょ、ちょっと待て雪蓮。落ち着こうか？」
「あれだけ抱き合ったんだから今更照れることないじゃない」
「ったく……調子を取り戻したみたいだな？」
「そうかも。教経に嫌われてないって分かっただけじゃなくてわたしのことが好きだって言って貰えたからかな？」
「現金なことで」
「教経だってそうじゃない。抱いたから、好きになったんでしょ？」
「……本当に嫌だったら多分流されないんだよ、俺は。好ましく思ってない限りは、ね」
「な～んだ。最初から相思相愛だったって事ね」
「どう解釈したらそうなるンだよ」
そう言った俺に、雪蓮が笑い返してくる。

「……全く。仕方のない姫さんだな」
「そうよ。だからしっかり相手してね？教経」
「へいへい。こうなったらまた相手するさ」
「……こうなったときだけ？」
「……普段も抱くよ、雪蓮」
「当然よね。……もうちょっとこうしてて良い？」
「……あぁ、構わないさ」

雪蓮は幸せそうに俺に抱きついている。
……雪蓮とこうなるなんてなぁ。我ながら気の多さに複雑な思いがする。しかしこれ、どうやって説明すれば良いンだ？犯された？ってのもちょっと違う気がするしねぇ。

～高順　Ｓｉｄｅ～

終にこの日が来た……！この俺にＳｉｄｅが当たるその日が……！
あぁん？メタ発言？いいじゃねぇか！この感動がお前らに分かるのか！？三年だぞ！？三年！
……まぁいいや。今、大将から招集を受けて将が皆集まっている。
この招集を掛ける前、大将は？忠と俺を呼び出して、この後で投降してきた奴らと話をする際にとんでもないことを言うが、大将が何を言っても下卑た笑いを浮かべておくように、と言われた。

「さて、蔡瑁。投降してきたお前さん達に俺から直々に訊きたい事があってな？」
「はっ。何なりとお尋ね下さい」
「……直ぐに訊きたいのは山々なンだが女性陣にはちょっと聞かせられない話なンだよねぇ。悪いンだが女性陣は席を外して貰っても良いかね？」

大将がそう言うと関羽の姐さん達が騒ぎ始めたが、孫策の姐さんが宥めて全員連れて席を外した。一体何を訊こうって言うんだ？

「じゃぁ、改めて話をしようか。……なぁ蔡瑁。死姦ってのは気持ち良いのか？」
「……お尋ねになっていることがよく分かりませんが」
「だからなぁ、死姦ってのは気持ちが良いのかって訊いているンだよ」
「何故そのようなことをお訊きになるのです？」
「実はなぁ、気が付いたとは思うが、さっきまで此処に居た女共はほぼ皆俺の愛人のようなモンでなぁ？色々な女を抱いているが、最近マンネリ化してきたンだよ。そうしたらお前、劉表は死姦したことがあるって言うじゃねぇか。もしそれが気持ちが良いのなら、試

しに一人女を殺して死姦してみようかと思ってなぁ」

大将は大層下卑た笑みを浮かべて蔡瑁に話しかけている。

……大将、アンタ何言ってるんだ。冗談じゃないぜ。

そう思って大将を見ると、大将は厳しい目で俺を見ていた。？忠が小声で俺にささやきかける。下卑た笑みを浮かべて。

「おい、高順。下卑た笑いを浮かべておけって言われただろうが」

……そうだったな。

「分かってるよ」

「じゃあ笑おうや。こう、下衆な感じで」

言われて無理矢理にいやらしい笑みを浮かべる。蔡瑁とその横にいるチビが俺たちの顔を窺っている。もう少し遅かったら拙いことになっていたな。

「……胸糞悪くなってくるな」

「……こうやって笑ってるが俺だって胸糞悪いんだよ」

大将は俺たちが下衆な笑いを顔に貼り付けているのを満足そうに見て、蔡瑁達に話を続けた。

「どうなンだ？気持ち良いのか悪いのか答えられる奴は居ないのか？」

「……劉表様から伺った限りでは中々に良いものである、と聞いておりますが」

「……なンだ。お前達の中で経験してる奴は居ないのか。何の参考にもならないじゃないかね？

……興味が失せた。おい、ダンクーガ。コイツら軍法に照らし合わせて首にして劉表に届けてやれ。俺が利用するだけの価値もない屑だ」

「ちょ、ちょっとお待ち下さい！」

「……テメェは誰だ、糞チビ。禿げ散らかしてンじゃねぇぞ？屑」

「ちょ、張允と申します、平教経様。

……本当に心底死姦なさりたい、と思っておられるのですかな？貴方様は義に篤く王の道を征く稀代の名君であらせられると言われておりますが？」

「そういう皮を被った方がいい女が抱けるだろうが。俺好みのいい女を組み伏せ、破瓜の血を流させてやる楽しみを思えばそういう反吐の出るような奴を演じても釣りが来る。そう思って居るから被ってるンだよ、包茎小僧宛らになぁ」

……いやぁ、大将。アンタ間違いなく役者の道で喰っていけるわ。偽善の皮を見抜けないで騙されている蔡瑁達を見るのが愉しくて仕方がない、といった面持ちでニヤついている大将は文句の付けようがない程下衆野郎に見える。まぁ、その横で同じように下衆に笑っている俺と？忠も相当な屑に見えているだろうが。

「だが生娘を仕込む喜びって奴にも慣れちまってなぁ？ここらでそろそろ本性を剥き出しにしてやろうと思って居るンだよ。幸いにして抱いた女はもう俺無しじゃ生きていけない程、その体に女としての悦びを覚え込ませてやっているンだ。一人くらい殺して死姦したぐらいじゃ俺からは離れられないンだよ。

だから死姦ってのが気持ち良いのかどうか訊きたかったンだが、テメェらがわからねぇってンだから仕方がない。襄陽に行って劉表から直接聞くからいい。お前らは不要だ。役に立たない奴は皆殺しだ。余程の別嬪さんなら強姦して楽しめるが、テメェらみたいなむさ苦しい男は不要なンだよ」

大将の言葉を受けて、蔡瑁達が顔を見合わせて頷きあっている。

「……平教経様。謀ったことをお許し下さい。まさか貴方様が我らの同好の士となり得る方であるとは思わなかった為にあえて嘘を言わせて頂きました」

「……あぁん？テメェら、適当抜かしてんじゃねぇ。助かりたいからってそうはいかねぇンだよ」

「いいえ。我ら五名、皆孫堅を死姦し尽くした、世間から見れば生粋の屑、貴方様にとっては決して他では得られぬ同好の士で御座います」

「……本当だろうな？嘘だったら貴様らを殺すぞ？」

「本当で御座いますとも。平教経様。死姦というものは最高で御座いますぞ？相手が自分たちに屈さなかった女であれば尚更に滾るもので御座います。何としても屈さなかった女が自分たちに組み伏せられ、好きに精を放たれ続けて居る様など、それはもう最高のもので御座いますとも。

お望みであれば、殺した後死姦するに適した肉人形を如何にして作り上げるか、という技法について我ら五人それぞれが独自に編み出した、秘伝とも言うべき法を伝授して差し上げても宜しいのですぞ？」

「……それを教えろ」

「それには先ず、我らの身の安全を保証して頂かなければなりませんな。後出来ればですが、あの美女共を死姦して存分に楽しまれた後、その肉人形に飽きましたらば我らに下げ渡して下さいませ。それで契約は成立で御座います。我らの持つ秘法、伝授して差し上げます」

「……貴様らの他に死姦好きでその秘伝を有している奴はいねぇのか？」

「……孫堅を死姦したのは我ら6名のみですしな。秘密というもの

は秘匿されるからこそ秘密たり得るのです。劉表様でさえ、何故あの様にあの肉人形の膣が柔らかく気持ちの良いままであったのかをご存じありませぬ。我ら五名が揃ってその秘法を行えばこそ、全身があの様に生きているときと変わらぬようなみずみずしさを保っていられるのです」

その言葉を聞いた瞬間、大将が真顔に戻った。

……この言葉を聞きたかった、ということか。誰が人の道を踏み外しているのか。それを知りたかった、ということだろう。奴らは間違いなく、死姦している。話している最中の蔡瑁の顔は、かつて目にした光景を思い出し、またその感触を思い出して恍惚としている者のそれだった。

「……ダンクーガ、？忠。聞いたな？」

「……あぁ、聞いたぜ、大将」

「……えぇ。聞きましたよ、大将」

「蔡瑁、お前さん達の提案は非常に魅力的なモノなンだろう。が、それはどうやら劉表にとってであって俺には必要無いもののようだねぇ」

「き、貴様！謀ったのか！？」

「普通気が付くだろうが。唐突に死姦したいなんて言い出す人非人が何処にいるんだよ、糞が。雪蓮！入ってきて良いぞ！」

言われて姐さん達が入ってくる。

「有り難う教経。まさか引っかかるとは思わなかったけどね。

……この下衆共、殺させてくれるんでしょう？」

「あぁ、ぶっ殺してやると良い」

「……お屋形様。私にも殺させて下さい。この屑共は『悪』以外の何物でもありません。『悪・即・斬』を掲げる私達にとって、斬り

捨てるべき存在以外の何物でもありません」
「教経、当然私にも殺させて貰うわよ？母様を殺された上に汚されて腸が煮えくり返るような思いをしたのは姉様だけではないのだから」

皆、好き勝手言ってるな。

「……蔡瑁。素直に自白してくれた貴様らに機会をやろうじゃないか。こっちから5人、お前さん達と尋常に立ち合おうじゃないか。もし勝つ事が出来れば、お前さん達の命を保証してやっても良い。勝てれば、だがね」

大将が嗤う。負けることはない、と思って居る様だ。まあ、確かに孫策の姐さんや太史慈の姐さん達が後れを取るとは思えない。大将のことだから身動き取れないようにして嬲り殺すなんて事はしないだろうとは思って居たが。

「上等だ！我らを謀りおって！思い知らせてやるぞ！」
「さて、俺が己の思い上がりを思い知るのか、それとも貴様らが己の罪の重さを思い知るのか。そのどちらだろうな？……ダンクーガ、準備しろ。こっちは俺、雪蓮、琴、蓮華、お前だ」
「……俺も良いのか？」
「……逆に聞くが、お前は同じ男として殺してやりたいとは思わんのか？」

いいや、指名してくれて有り難てぇよ、大将。

「是非殺ってやりたいね」
「んじゃそうしとけ」

その後、こちらから相手を指名して殺りあうことになった。それぞれが指名していった結果、組み合わせはこんな感じになった。

太史慈の姐さんと張繍。
孫権の姐さんと呂公。
俺と張允。
大将と胡車児。
孫策の姐さんと蔡瑁。

大将と蒲公英の嬢ちゃん以外と立ち合うこと自体が初めてだが、流石に大将を越える奴は居ないだろう。俺が今世間一般の中でどの程度の実力があるのか。物差しになって貰うことにしよう。どうせ屑なんだ。此処で役に立って貰おうじゃないか。

蝶の如く～１２４～（前書き）

クォボレーが好きです。でも親分の方がもっと好きです。

蝶の如く～１２４～

～教経　Ｓｉｄｅ～

「じゃぁ始めようか。琴、前へ出ろ。先陣切るのはお前さんだ」
「はい。お任せ下さい。必ず斬ってみせます」
「あぁ。『貫いて』やるが良い」
「……はい」

琴と張繍が向かい合う。

「平教経！勝てば身の安全を保証する、というのは本当だろうな！？」
「あぁ。約束してやる。琴に勝てるという夢を見ながら死ななければ、だがね」
「抜かせ！」
「……屑。お屋形様と話す前に、目の前の敵に集中すべきだろう。お屋形様の剣であるこの私が貴様を殺してやる」
「小娘が！殺してやるわ！」
「我が名は太史慈。太史子義。私はお屋形様の剣！悪を断つ剣なり！」
「我が名は張繍！貴様を殺す男だ！覚えておくが良い！」

気負って名乗りを上げる張繍に対し、琴は気合いが乗っているだけの状態だ。まぁ、そうでなくても勝敗の行方は見えている。張繍からは何の脅威も感じないし、琴の所作には隙が見受けられない。

「やれ」

俺の言葉を合図に張繍が剣を抜く。
琴は手加減も出し惜しみもするつもりが無いようで、いきなり抜刀斬りをかました。張繍はある程度予測していたようだが反応が遅れ、後ろに下がって躱そうとしたが腹部を浅く斬られていた。

「いきなり斬りつけてくるとは、この卑怯者め！」
「……死姦愛好者に比べれば卑怯者の方が遙かにマシだろう。話している暇があったらさっさと掛かってこい」
「死ねぇ！」

張繍が剣を突き出した。中々に早いし重心もブレていない。そこそこには使えるようだが、相手が悪すぎる。誰が琴に剣を仕込んでいると思って居るンだ？この俺が糞爺から課された鍛錬に歯を食いしばって付いてくる人間に、貴様程度の人間が勝てるわけがないだろうが。琴は完全に見切って一寸で躱す。

「……どうした。私を突き殺すのではないのか？それとも貴様が出来るのは、下半身の粗末なモノで死体を突くことだけか？」
「舐めるなぁ！」

完全に見切られたことに気が付いて居ないのか？張繍は連続して突きを放っている。いつ横薙ぎに変化するのかと待っていたが、一向に変化する気配がない。そのうちに突き疲れたのか、一旦後方に下がって剣を構え、息を整えている。

「はぁ、はぁ……避けてばかり居てはこの私を倒せないぞ！」
「……貴様の言う通りだな。では次は私から行こう。突くからしっかりと躱してみろ」

琴が剣を水平に構え、右手を切っ先に宛がう。

……様になってるじゃないか、琴。弛まぬ修練の成果って奴を見せて貰おうか。

「馬鹿にするな！突きが来ると分かっていて躱せぬ私ではないわ！」

「そうか。……行くぞ！」

琴が一直線に走り込む。疾い、と言って良いだろう。張繍は全く反応出来ていない。後は琴がしっかり貫くことが出来るかどうかだ。壬生狼として、『悪・即・斬』を、その牙で。

「死に絶えろ！」

全身のバネを使い、凄まじい突きを繰り出した。一連の動きに無駄はない。そのしなやかな体躯から生み出される力は、その全てが無駄なく牙に伝えられている。

「ガッ」

琴が放った牙突が張繍の喉に吸い込まれると、張繍は声にならない声を上げた。……中々えぐいねぇ。首がちぎれ飛びそうになっている。これが三番隊組長なら上半身ごと引きちぎったのかね？

「そこまでだな。？忠、首取って死体は葬ってやれ。長江に投げ捨ててな。……琴、良くやった。鍛錬の成果、確と見せて貰った」

「……はい、お屋形様」

頭を撫で、その手を琴の頬に当てる。

琴は目を瞑って頭を撫でられ、頬に当てられた手に自分の手を重ねた。抱き寄せてやりたくなるほど可愛いが、それは後だな。

「名残惜しいが次だな。……蓮華、呂公。出ろ」
「孫権か……母親と同じように殺されたいのか？」
「……黙れ」
「貴様の母親はそれは名器だったぞ？今まで犯してきた女の中で最高だったわ。思わず3度も膣内に精を放ってしまって大変だったのだ」
「貴様ぁッ！」

蓮華を逆上させて隙を創り出そう、ということなンだろうがそうはいかないンだよねぇ。
今にも呂公に斬り掛かりそうな蓮華の腕を掴んで引っ張り、抱き寄せる。

「の、教経！？」
「……蓮華、落ち着け。お前さんがすべきことは呂公を殺すことであって、母親を犯した呂公に激高することじゃない。そうだろう？」
「え、ええ」
「なら、落ち着くことだ。お前さんならやれるさ。気負いも余計な感情も今は必要無い。呂公を殺してから後にいくらでも、思う存分感情を爆発させればいいンだよ。……分かったかね？」
「……ええ。有り難う、教経」
「何、お安いご用だ」
「貴様！立会に入り込んでくるとは卑怯だぞ！」
「何が？俺はまだ開始を告げてないぜ？何ならテメェの手足縛った上で嬲り殺しても良かったンだ。この場の支配者が誰なのか、もっとよく考えて発言することだな、屑」
「何だと！？」
「あぁ、済まんな。屑じゃなくてカスだった。いや、それも違うな……ドカスか？」
「き、貴様ぁ！」

良い感じに逆上しやがったな、馬鹿めが。

「やれ」

逆上していた呂公は蓮華に向かって槍を碌に構えもせずに繰り出した。槍ってのはな、腰で突くんだよ。そんな態じゃ槍の柄から切り落とされるぜ？

「舐めるな！」

「なっ……！」

蓮華はちゃんと落ち着いて槍の穂を柄から切り落とした。思春といつも鍛錬をしているンだ。これ位のことはやれるだろう。

「お、おい！換えの槍を寄越せ！」

「……馬鹿め。戦場のど真ン中でそんなことを言うのか？言わないだろうが」

「糞！巫山戯るな！」

「……巫山戯ているのはお前だ、呂公。余所見をするなど阿呆のすることだ」

蓮華が剣を振るう。右上から左下へ、しっかり踏み込んで上段から斬り下ろす。

「こ、こんな馬鹿な話があるか……」

左の首筋から右脇腹にかけて、一目で致命傷と分かる傷が刻み込まれ傷口から血が大量にあふれ出している。

「蓮華、それで足りるのか？」
「……ええ。これで足りるわ」

俺の問いかけに対し、蓮華は剣を横に振るいながらそう答えた。呂公の首が飛び、まるで水が湧き出るように胴から血が零れ出す。まぁ、確かにそれなら満足だろう。流石は雪蓮の妹だ。素質は十分にあると思うねぇ。

「それは何よりだ。？忠、これも同じように処理しておいてくれ」
「了解ですよ、大将」
「次だな。……ダンクーガと張允、前へ」

一番心配だった蓮華がかなり余裕を持って勝った。後はテメェだな、ダンクーガ。
俺の親衛隊長務めてンだ。醜態晒すんじゃねぇぞ？

～高順　Ｓｉｄｅ～

此処まで順当勝ちだな。まあ孫権の姐さんについては大将がちょっかい掛けてより確実に勝てるようにしてたから勝って当たり前なんだろうけど。

「次だな。……ダンクーガと張允、前へ」

「よっしゃぁ！」

「……断空我などという将は聞いたこともないわ。儂を舐めているのか？」

何だ？一丁前に挑発してるのか、このチビは。

……馬鹿が。俺は大将と口喧嘩しまくってるんだよ。その程度の安い挑発に乗るわけ無いだろうが。いつもは大将が相手だから乱されるが、テメェ程度に心乱されやしないんだよ。

「うるせぇよチビ。張允なんて名前、生まれてこの方一度も聞いたこたぁねぇよ。お互い様だろうが」

「口だけは達者だな、孺子」

「髪の毛もテメェよりは豊かにあるだろうが。チビで髪が薄いだけじゃなく、目も見えねぇのか？隠居しちまえよ」

「……どうやら死にたいようだな、雑兵が」

「生意気言ってんじゃねぇ。真っ二つにするぞ？この下衆野郎が」

「やれるものならやってみろ！」

「殺ぁぁぁぁぁってやるぜ！」

最早お約束になっている掛け声で気勢を上げると、禿げはちっとびびってるみたいだ。どうしたんだ？平家の将で俺の気勢で気後れするような人間は一人も居ないんだぜ？

「始めろ！」

大将の合図と同時に、禿げは後に下がりやがった。

「……オイ、やる気があるのか？」

「だ、黙れ！これは高度な戦略よ！」

「戦術、の間違いじゃねぇのか？」

「黙れ！」

張允が斬りつけてくる。……こんな遅いのか？いや、何か企んでる可能性もあるな。剣の振り方が素直すぎる。蒲公英の嬢ちゃんも、真っ直ぐ付くと見せかけて途中で変化して来やがったしな。しっかり見極めて防ぐことが大事だろう。

斬りつけてくる剣をしっかり見る。まだ変化しないようだ。此処まで来て変化しないってのは、要するに何の変化もないってことか？頭に振り下ろされてきた剣をある程度余裕を持って躱す。

「何とか躱したようだが、そう続けてかわせると思うなよ！」

「……まさかとは思うが、ひょっとして今のが全力か？」

「負け惜しみを！死ね！」

今度はしっかり踏み込んできて、横に剣を振るってくる。その剣速は相変わらず遅い。……ひょっとしてコイツ、力が凄まじいとかそういうことか？華雄の姐さんとかは馬鹿みたいな力してやがったか

らな。何にしても、大将から貰ったサンライトハートがあれば問題無いだろう。何せ華雄の姐さんと打ち合って折れなかったからな。……丁度良いから力試しがてら力一杯ぶつからせて貰おうか！

「オラァ！」

「なっ！」

奴の剣と俺の槍がぶつかると、簡単にはじき飛ばせた。

張允が飛ばされた剣の元へ走って再び剣をその手に取る。

「くっ。力だけはあるようだな！」

張允の奴は負け惜しみを言っているように見える。が、計算かも知れない。

「……ダンクーガ。テメェの思っている様な相手じゃねぇ。そいつが弱いンじゃない。テメェが強いンだよ」

「俺が強い？」

「そうだ。チビの体をみやがれ。萎縮しちまってもうどうにもならねぇよ」

そうだったな。表情や雰囲気でなく、相手の体の状態、特に筋肉の状態をしっかり見ておけ、と大将に良く言われてたっけ。……最初見抜けなくてぶっ飛ばされまくったが。

もう一度張允をよく見てみる。剣を持つ腕だけでなく、足の筋肉も張り詰めた状態だ。馬鹿なのか？張り詰めた筋肉じゃ、生み出した力はそのままの力でしかないぜ？地の力を、筋肉に瞬間的に力を込める事で増幅して叩き付けるのが全ての基本。張り詰めた風船は突かれて弾けるしかない。どんなときも張り詰めるな。精神的にも肉体的にも。そう大将から教わった。

それが分かってない時点でコイツは雑魚って事か。

「さっさと終わらせやがれ。……テメェは俺の親衛隊長だろうが。ビッとしたところ見せろ」

「……了解」

俺の親衛隊長、か。

そうだ。俺は平家の頭領の親衛隊を束ねる男だ。この誇りにかけて、目の前に居る様な人間の屑を屠るのに時間を掛けるわけにはいかない。

「……チビ、有り難うよ。おかげで俺がどの程度の人間かってのは分かった気がするぜ」

「何を言っている！」

「礼を言っているんだよ。今から死にゆくお前に、な。……行くぜぇ！俺は高順！大将の剣にして盾なり！」

大将がちょっと吃驚した顔をしているな。だが大将、俺はずっとそう思ってきたんだ。親衛隊長になったあの日から、ずっとな。

「吼えろッ！サンライトハート！」

大将に向かっていくつもりで、全力で駆ける。大将ほど疾く走れないが、それでも関羽の姐さん達程度には疾いはずだ。この疾さから生まれる力をそのまま槍に乗せて叩き付け、宣言通りに真っ二つにしてやるッ……！

「うぉぉぉぉおおおお！」

そのままそこを動くんじゃねぇぞ……ッ！

「一刀！両断ッ！！」

チビの体幹を上から下まで真っ二つにしながら駆け抜けた。俺の手にはチビの体を十分に斬った感触が残っている。
後で何かが地面に落ちる音がした。振り返ると、チビが真っ二つになって倒れていた。

「……やれば出来るじゃないか、ダンクーガ。今のは良い業だった。宛ら雷光の様だったな」
「雷光か」
「雷光斬り、とでも名付けておけ。？忠、処分しろ」
「はいはい」

どうやら俺はそれなりに強くなっているらしい。大将も認めてくれたって所だろう。後は、大将と孫策の姐さんだ。

～?忠　Ｓｉｄｅ～

前二人に続いて、高順の奴もきっちり勝ちやがった。初見の時から手強いだろうとは思っていたが、まさかあれ程の業を持っていると は思っていなかった。アレで一番将の中では弱いって言ってたが、平家ってのはバケモノの巣窟だね。

「さて、次は俺か」
「は?大将がトリを務めるんじゃないんですか?」
「それは雪蓮に譲るさ。……胡車児、来い」

胡車児が大将に呼ばれて前に出る。コイツは今まで出てきた奴とは違って、手強そうな奴だ。まあ、大将は歯牙にも掛けていない感じだが。大将の得物は、いつもの清麿じゃなくて斬艦刀と呼んでいた馬鹿でかい剣だった。

「ふん。一勢力の大将ともあろう者が望んで死にに来るとはな」
「なンだ?此処に立っているだけで死ぬのか?そいつは怖いな」
「……この俺が殺してやると言っているんだよ」
「……お前には出来ないかも知れないがね。やってみるかね?」
「抜かせ!」

胡車児は斧を振り上げて大将に斬り掛かっていく。

「でぇぇぇぇい!」

大将に近付いて叩き付けるのかと思っていたが、胡車児は斧の範囲

に大将を捕らえる前に凄まじい勢いで斧を地面に叩き付け、もの凄い土埃をあげた。大将は後方に飛び下がっていたが、大剣を盾にするような格好を取った。……大剣が何かを弾いたようだ。

「ハッ。匕首を投げつけてくるとはな」
「良く避けたな」
「弾いたンだよ。見てなかったのかね？」
「見ていたさ。貴様はまだその大剣を使いこなせていないようだな！少々ぎこちなかったぞ！」

斧を振り下ろして何度も大将に叩き付けるが、大将は大剣を振るうのではなく、先程と同じように寝かせて盾にするようにして防いでいた。

「どうした！この程度の攻撃に手も足も出ぬようではこの俺に勝つ事など出来んぞ！」
「チッ……調子に乗ってンじゃねぇ！」

大将が剣を振るって斧を弾き上げる。今の剣の振りっぷりから考えて、あの大剣をどの程度使えるのかを確認していたと言うよりは、あの大剣がどの程度のものなのかを確かめていたようだ。だが胡車児も中々やるようで、直ぐに後方に下がって追撃を許さない。

「……『その武はこの世に冠たるものである』と聞いていたが、大した事は無いじゃないか」
「言ってくれるねぇ。まぁ、その認識は誤っているから別に何とも思わんがね。この世に冠たる武を有しているのは俺の師匠だからな」
「ハッ。どうせその師匠とやらも大した事はないのだろう」
「あっ」
「あ～」

「あちゃ～」
「……やっちまったな」

？何だ？関羽の姐さん達が、高順が言った通り『やっちまった』って顔をしている。

「おい、高順」
「……なんだよ」
「やっちまったってどういうことだ？」
「俺も見たことはないが、大将は師匠を馬鹿にされると人が変わるらしい。こう、全力で殺しに掛かるらしいんだよ。華雄の姐さんが殺されるかと思ったって言ってた」
「何でそれをお前が知ってるんだ？」
「良く大将と口喧嘩するからな。絶対に言っては駄目だ、と教えてくれたんだよ」
「そういうことか」

大将を見ると、さっきまでの不敵な表情は既に無く、透き通った表情をしている。怒りが大きすぎると人はああいった顔になるが。

「……お前、今なンて言った……？」
「何だ？悔しかったのか？何度でも言ってやる！貴様の師匠も貴様同様大した事のない愚図だろうと言ったんだよ！」

ここぞとばかりに胡車児が挑発する。冷静さを失わせようというのだろう。

「……成る程、どうしても死にたい。そういうことか。……ドカスに相応しい死を呉れて遣る」
「貴様を殺して貴様も貴様の師も屑だということを証明してやろう

じゃないか！」
「黙れッ！」

大将が一気に殺気を開放した。……その雰囲気に気圧される。人は、これ程の殺意を内包出来るものなのか。胡車児もどうやら今自分が目の前にしている人間がとんでもない存在であることに気が付いて居すくんでいるようだ。

「そして、聞けッ！」

足を肩幅ほどに開き、見るからに重そうな斬艦刀を右腕一本で横に薙ぐ。

「我が名は教経！平教経！！我こそは悪を断つ剣なり！！」

斬艦刀を振り下ろした反動を利用して、天高く翔んだ。跳んだんじゃなく、正に翔んだと表現するのが相応しいほどに高く跳躍した。

「ぬおおおおおッ！」

そこから胡車児目掛けて斬艦刀を振り下ろすつもりなのだろう。大きく体をのけ反らせて斬艦刀を振り上げる。

「チェストォォォォォォォォォオ！」

胡車児は斧を頭上に構えて防ごうとしていたが、その斧が目に入っていないかのように斬艦刀を胡車児に向かって振り下ろした。斧が斬れ、胡車児の足下が大きく抉れて土石が周囲に飛び散る。
暫くその場に立っていた胡車児の右半身と左半身が、互いに永遠の別れを告げた。

「我が斬艦刀に！断てぬもの無しッ！」

……大将が本気で怒ったら洒落にならないな。良く覚えておこう。

「……とんでもないわね、教経は」

「……凄まじい武でした。気当たりして動けぬ相手を全力で斬りつける。必殺の剣と言って良いかと」

「……凄い」

「……教経を怒らせないように気を付けよっと」

「……蒲公英も気を付けよっと」

「……流石にああなったら私は止められそうにないな」

「……教経様、凄いです」

「とんでもないですね～」

大将がああなるって事を知らなかった臭い面子は皆呆気にとられているみたいだ。そりゃそうだろう。あんな馬鹿でかい大剣持ってあれだけ翔んで、一刀両断するなんて。肉体のそもそもの作りが違うんじゃないのか？

「お屋形様……素敵でした」

「教経様。お見事でした」

「ご主人様、凄かったよ」

「相変わらず大したもんやで」

「……あぁ。で、なンで四人とも俺に抱きついているンだね？」

「勿論、お屋形様を普段通りのお屋形様に戻す為、です」

「そういうことです」

「べ、別に抱きつきたかった訳じゃ無いからな！」

「減るもんや無いんやし、別にええやんか」

さっきまで命の遣り取りしてたのにもういちゃついている。そしてそれを姉貴がちょっと悲しそうに見ていた。……仕方がない。俺が姉貴の為に機会を作ってやるしかないだろう。姉貴にあんな顔をさせておく訳には行かない。姉貴に関しては関羽の姐さんも郭嘉の姐さんもほぼ公認だから、頼み込めば姉貴に想いを遂げる機会を作ってやることが出来るに違いない。あれだけ綺麗な姉貴が言い寄るんだ。我慢出来る奴はこの世に存在しないはずだからな。

「最後だ。雪蓮、蔡瑁。前へ」

大将自身の都合でちょっと間が空いたが、これで最後だ。孫策の姐さんは瞳孔が開きっぱなしに見える。

「……母様が受けた屈辱をきっちり返させて貰うわ」

「小娘が。そう簡単にいくと思うなよ？」

自分の腕に自信があるような物言いをしているが、俺でも余裕で勝てそうだ。

「……やれ」

開始を告げられたと同時に孫策の姐さんが前に飛び出して剣を振るう。剣は蔡瑁の胴を左下から右上に斬り上げようとしていたが、蔡瑁は体を捻って胴を剣で斬られるのを回避した。

「どうした！まだ儂は生きて居るぞ！？」

確かに生きているが、ね。本当に気が付いて居ないのか？

「そうね。まだ生かしているのだから当たり前じゃない」

「何を言っている！……ん？」

斬り上げられ、空に切り離された蔡瑁の左腕が地面に落ち、その音に気が付いた蔡瑁が地面を見やる。

「なっ……儂の左腕……！あぁぁぁぁぁ！！痛い！痛いぃぃぃぃ！」

「そう。良かったわ、ねっ！」

孫策の姐さんが剣を振るったのは、蔡瑁の右足、膝の辺り。膝から下が斬り飛ばされて転がってくる。汚ねぇ足だな。蹴飛ばして余所にやる。

「あ、足が！儂の足がぁ！」

「そのままじゃ据わりが悪いでしょう？直ぐに据わりが良くなるようになるわ」

続けて左足も同じように斬り飛ばした。地面に落ちて身動きが出来なくなった蔡瑁に姐さんが近付いていく。

「ひぃっ！来るな！来るな！」

残された右腕で剣を振り回している。

「その右腕も邪魔よね」

にっこりと笑って右腕も切り飛ばした。

「あがが……」

蔡瑁はそのまま気を失った。

「ちょっと、起きなさいよ。意識がないうちに楽に死ぬなんて許さないわ」

姐さんは太股を突き刺したり頬に突き刺したりして何とか起こそうとしているが、蔡瑁は目を醒まさなかった。

「雪蓮、多分血を失いすぎて死にかけてるンだよ」

「……楽に死ぬなんて許されないのに」

「ふむ……先生！凱！ちょっと来てくれ！」

大将は何か思いついたようで、黒男と凱を呼んだ。

「何だ教経。私は死体には興味はない」

「いや、黒男。まだ生きているようだぞ」

「ふん。どうせ１０日もしないうちに死ぬ」

「なぁ先生。１０日程度生き延びさせることは出来るのか？」

「私が手術をして、凱が治療を施せば多分な。だが恐らく意識は戻らんぞ？」

「そうかね……なぁ、雪蓮。蔡瑁の奴をぶっ殺すのを我慢出来るか？」

「……どういうこと？」

「いやな。コイツをこの状態で劉表に送ってやったらどうなるのかと考えてなぁ。テメェもこうしてやるっていう書状と呂公と張允の

首を添えて送ってやったら面白いことになるんじゃないかと思ってな」

……碌でもない事を考え出したな、大将。だがかなり効果があるだろう。劉表自身も、蔡瑁を見た兵達も、平家と事を構えることに強い恐怖感を抱くに違いない。

「教経殿。それでは教経殿の風評も悪いものになると思いますが」
「別に劉表に直接届けてやる訳じゃない。市場に放置してやればいいンだよ。その時、『この者共は死姦せし者なり。その罪許すべからず』とでも書き付けた竹簡なり紙なりを添えておけば良いだろう」
「……それならば宜しいでしょう」
「どうせ１０日程度で死ぬンだ。そうやって役に立って貰おうかと思うンだが、雪蓮はどう思う？」
「……教経がそう言うならそれでいいわ」
「……提案しておいて何だが本当に良いのか？俺は何としても自分で殺すと言うと思っていたンだが」
「我慢してあげるわよ。旦那様の言葉だしね？」
「……一体いつの間に……相変わらず手が早いな、大将」
「うるせぇよダンクーガ。……雪蓮が納得してくれるなら、そうするかね。先生、凱。宜しく頼む」
「やれやれ。まあ聞く限り人間の出来損ないのようだから同情はしないがね」
「……気が進まないな。人の命は貴賤の別なく尊重されるべきものだ。助けられる者は悪人でも助けてやるべきだし、救えないならせめて楽に死なせてやるべきだろう。そういう使い方をすることに、俺は賛同しかねる」

そう言った琵琶丸に大将が話しかける。

「凱。この世には生きるべき人間と死ぬべき人間が居るって事をお前さんは理解すべきだ。地位の貴賤によって命そのものの価値が左右されることはない、ということには賛同出来るがねぇ、人間性そのものの社会適合性が低く、そいつが生きているだけで他者の命を奪っていくような、生きる価値のない屑ってやつは確かに存在する」

「む……」

「お前さんがそいつを助けるのは独善でしかない。お前さんの行為によってそいつが救われた結果、我欲によって殺される人間が増えることに思いを致すべきだ。そしてこの場合、目の前に居る屑は生きる価値のない人間だろう。今奴が手足を付けて助けてやれる状況にあったとして、もし助けてやったとしたらきっとまた死姦するに違いない。生じる結果だけを見れば、お前さんは死姦される人間を増やしたいと言っているのと同じなんだよ。

コイツに恩義があったり、金を貰って最善を尽くすべく契約を結んでいたりするなら話は別だがねぇ。そうでないならむしろ積極的にそういう利用方法を考えてやるべきだ。生きていても役に立たない屑を、多くの善良な人間の為に利用しようって言ってるンだよ。躊躇う必要が何処にある？」

「……完全に納得出来た訳じゃ無いが、コイツに関しては生きる価値のない屑だということは認めよう」

「……話は纏まったようだな。琵琶丸、治療に移るぞ」

「ああ」

二人が蔡瑁を連れて陣屋へ入っていった。

蔡瑁を治療したら、襄陽の市場に放置させる。その結果、劉表がどういう反応を示すか。恐慌を来して襄陽に籠城せずに野外で決戦に臨むとかしてくれれば楽なんだが。まあそんなことにはならないだろうけどね。多分、襄陽に引き籠もるだろう。亀のようにね。

そうなった時どう対処するのか、しっかり勉強させて貰いますか。

蝶の如く～１２５～（前書き）

うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！

今回は、
もげろ☆
死ね！
のりたまって何で刺客に襲われないの？
の三本でお送りします。

蝶の如く～125～

～蓮華　Ｓｉｄｅ～

教経から招集を掛けられて陣屋に赴き、蔡瑁達と話をし始めて直ぐ、女性陣には聞かせられない話があると言われて外に出された。愛紗達が抗議しようとしたが、姉様が何か囁くと不承不承ながらに陣屋の外に出た。教経が何を話すのか興味があった私は、声が聞こえる場所を捜して陣屋の周りを移動し、遂にその場所を見つけた。

そのまま陣屋の外で話を聞いていたとき、中から信じられないような話が聞こえてきた。怒りに体が震えた。教経にうまうまと騙されたと思った。裏切られた気持ちだった。

いつの間にか後に居た姉様を見ると、姉様は笑っていた。心底愉しそうに。声を上げて詰問しようとした私の口を手で押さえて、少し離れた場所に連れて行かれた。

「姉様！教経も鬼畜であることが分かったのに、何故平然としていられるのです！」

手が口から離れた瞬間、姉様に強い口調で詰め寄ると、一瞬吃驚したような顔をした後笑い始めた。

「何が可笑しいのです！」

「あははっ。だって蓮華、もの凄くキツい顔してるんだもの、あははっ。アレはね、演技よ、演技」

「とてもそうは聞こえません！」

「間違いなく演技よ。だって私にそう言ったんだもの。

『引っかからないかも知れないが、やってみる価値があるだろう。

雪蓮達の仇が誰で、何人いるのか。それを出来れば明らかにしたいンだ』って。教経は私達の為にやってくれてるのよ？蓮華」

教経がそんなことを。私達のことを考えて、敢えてあんな卑劣漢を演じているのだとすると、少し申し訳ない気持ちになる。教経が私が思っていた通りの人間なら、反吐が出るような思いをしているに違いないのだから。

「……いつそんな話をしたのです」

「ん？教経に抱かれた後だけど？」

……え？

「ね、姉様。今、何と？」

「教経に抱かれた後だけど？」

「……姉様と教経が、そういう関係だったなんて……」

「あ、さっきそうなったばかりだから蓮華が知らないのは当然なのよ」

「さっきって……」

「つい2刻ほど前。教経はわたしのこと、好きだって言ってくれたわよ？我ながら不思議な感覚だけど、嬉しかったわ。こう、居ても立ってもいられないような、誰かに言いたくて堪らないような充足感があって」

冥琳が教経とそういう関係になったのは分かっていたけど、まさか姉様までそんな関係になるとは思いもしなかった。

「ま、蓮華も抱かれればいいじゃない。気になってるんでしょ？教経のこと」

「わ、私は別に！」

「そ。じゃ、思春、頑張ってね」
「は、はあ……」
「否定しないんだ？」
「……それがご命令であれば、子を為して見せます」
「ふぅん。ま、いいわ。話の続きを聞きましょうか」

再び元の場所に戻って話を聞いていると、蔡瑁達5人が5人共に母様を汚した人間であり、劉表を含めた6人が恐らく復讐すべき相手であることが判明した。その時点で教経に呼び返された姉様に付いて陣屋に入る。
……目の前に居るこの卑劣漢共を、何としてもこの手で殺してやりたい。
私や姉様のその気持ちを察してだろう。教経は、生き延びる権利を自身の手で掴む機会を呉れて遣る、と言って立ち合いを行うように取りはからってくれた。何としても、この手で殺してやる。その罪に相応しい罰というものを与えてやるのだ。

立ち合いの結果から言うと、私も姉様も仇を自らの手で討つことが出来た。姉様は兎も角、私の方は危なかったかもしれない。
呂公に母様を犯した時の事を得意げに語られ、我を忘れて斬り掛かるところだった。もし教経が止めてくれなかったら、そして呂公を挑発して冷静でいられなくしてくれていなかったら、あれ程楽に殺すことは出来なかっただろう。

立ち合いが終わり、夜まではまだ時間が余っていたので教経を陣屋

に誘って話をしてみる。

「教経、有り難う。おかげでこの手で母様の仇を討てたわ」
「まだ終わってないだろうに。劉表が残っているンだから」
「ええ、そうね」
「……我を忘れて突出するなよ？蓮華」
「……そう言えば、あの時何故私を助けてくれたの？立ち合いだから黙ってみているものだと思っていたのだけれど」
「ハッ。俺ぁ尋常に立ち合ってやるとは一言も言ってないぜ？俺は俺が好ましいと思う人間が目の前で殺されるなんて御免被りたいンだ。だからちょっかいを掛けたし、ブラックジャック先生と凱に待機して貰っていたンだからねぇ。
俺が望む世界にとって害をもたらす、ああいった屑は全て排除する。直接手を下すか、法によって捌くのかが違うだけでねぇ。今回はどうしても蓮華や雪蓮に仇を討たせてやりたかったからこうしただけだ。俺が制御出来る範囲内でなら、安心して居られるからな」
「そうだとしても、私を抱きしめて止めることはないと思うのだけど」

公衆の面前で、ああいう事をするのはちょっとどうかと思う。別に嫌な訳ではないけれど、その、恥ずかしいのだから。

「まぁ別に良いじゃないか。あれで正気に戻れただろう？」
「それはそうだけど、もうちょっと考えて欲しいわ」
「……口付けとかの方が良かったか？」
「の、教経！」
「ははははっ。冗談だよ、悪かったな」

私の顔は、今真っ赤になっているだろう。昼間姉様から教経に抱かれれば良いじゃない、と言われたこともあって、教経のことを男性

として意識してしまっている。

「何だ蓮華。照れてるのか？」

「う、うるさい！」

「ま、そういうお年頃だからな。ちょっと俺が無神経に過ぎたか」

「そうよ！他に人が居たのだから、もっと気を使ってくれるべきだったわ」

「……今の言葉を深読みするとだな、他に人が居なければ別に良かったって事になるンだがね？」

あ。

「わ、私がそうして欲しい訳ないでしょう！？」

「はいはい、分かってるさ。言ってみただけだからそうムキにならなくても良いだろうに」

「全く」

言ってみただけ、と言っているけど、教経は私と抱き合いたかったのだろうか。

……駄目だ。真面目に考えるとどうしても恥ずかしくなって、何かを殴りつけたくなると言うか、寝台に潜って奇声をあげたくなると言うか。兎に角、平静では居られそうにない。

「……蓮華、また頬が朱くなってるが」

「放っておいて！」

「やれやれだぜ。

……蔡瑁が宅配された頃に軍を動かすから、準備はしておいてくれよ、蓮華」

「分かったわ」

「じゃ、な。蓮華。お休み」

「……ええ、お休みなさい、教経」

教経は羽織の中、懐に両腕を収めて私の陣屋を出て行った。

……私は、姉様の言う通り教経のことが気になっている。それは認めざるを得ない。教経も私も、『家』というものを無条件に背負わされる星の下に生まれてきた。私にとってそれは重圧以外の何物でもなかったけれど、既に平家を背負って立っている教経と話をすることで随分と楽になった気がする。

『蓮華は蓮華のままで良いンだ』

この言葉にどれ程救われたか分からない。今日にしても、教経が落ち着かせてくれなければ私は死んでいたかも知れない。教経が居れば、私は私のままで居られる気がする。

……『抱かれればいいじゃない』、か。

～教経　Ｓｉｄｅ～

蔡瑁を襄陽に宅配するように頼んで二日経った。そろそろ襄陽にダルマが登場した頃だろう。一応ピザーラの店員っぽい服を着せて送ることになったから張繍と呂公の首をトッピングしてやったンだが、アシュラマン的な存在になっちまった。あれを見てどういう反応をするのかねぇ。？忠の奴は引き籠もるだろうって言ってたが、さてどうなるかね。

「教経殿、そろそろ襄陽に向かって進発しようかと思うのですが」
「そうだな。俺もそれが良いと思う。愛紗、雪蓮。兵の再編状況は？」
「全て完了しております、教経様」
「こっちも終わってるわ。後は号令をかけるだけよ」
「よし。進発する。目標は襄陽。目的は劉表の首だ」
「はっ」

伝令が走って各将に進発を伝える。
さて、最後に残った屑を掃除に行こうかね。

軍を発してから3日、明日には襄陽の城壁を眺めることになるだろう、というところまで来た。百合に頼んで城の地図を持ってきて貰い、それを前にして様々な状況を想定して話をしている。

「城門は立派なモンなのか？」
「……うん」
「そうなると籠城された場合、どうやって門を開くか、が問題になるな。劉表の性格は？」
「……臆病だと思う」
「臆病、ね。……こりゃ引き籠もられたら簡単にはいかないか。水は何処から？」
「……それはこっち」

百合はまた違う地図を出し、俺に示してくる。

「水路があるな。ここから城内へ入れないか」
「大将、それは無理ですよ。そもそも人が入れるような広さがない」
「……力押ししかないのか」
「俺はそう思いますがね」
「……坑を掘れば？」
「時間が掛かりすぎる。糧食が持つかどうかが分からないンだ。途中で岩盤にぶち当たって必要とする時間が延びることを考えると、十分だと言えるかどうか」
「……長沙」
「ん？」
「ああ、そうか。大将、長沙には紫苑様と吉里、珂瑛が居ますよ」
「いざというときはそこから、という訳か」
「……うん」
「……それ以外に手立ては無さそうだな。一応そういうことがあるかも知れないと知らせておいて貰えるかね」
「了解ですよ」
「これで何とか目処は立ったか」
「……うん」
「じゃあ大将、俺は使者を用意しに行ってきます。姉貴と二人っき

りでいちゃいちゃしてて下さい」
「そうかね。何となく物言いに不穏なものを感じるが、そうさせて貰うさ」
「……姉貴、多分ここから先暫くこういう機会は無いからな？上手くやりなよ？……」
「～～～～」

？忠が百合に何やら耳打ちをすると、百合の顔が真っ赤になった。
……相変わらず萌えるねぇ。これでもし眼鏡掛けてたら某七つの傷を持つ男のように服が破れる感じになるところだ。
？忠が出て行った後も、百合は頬を染めてモジモジしていた。

「百合、どうしたンだ？」
「……わ、私……」
「どうした？」

俯いている百合の肩を片手で抱えながら、下から顔を覗き込んだ。

「……うぅ……」

もの凄く照れているねぇ。おずおずとこっちを見て、目が一瞬合うと恥ずかしそうに俯いて視線を外す。それを繰り返している。……萌えるぜ。
それは置いておいて、話があるみたいだな。

「百合、話があるんだろ？言ってみてくれ」
「……質問」
「何だね？答えられる限り答えるが」
「……そ、その、あれ、本当……？」

あれ？あれってなンだ？

「あれ？」

「……その……お、お嫁さん……」

もの凄く小さい声で、それこそ囁くように一言言った。

……あ～、あの時の話か。

面と向かって訊かれるとかなり照れるな。しかも、『お、お嫁さんにしてくれるって本当？』って訊いてくるんだぜ？出川じゃないが、やばいぜ？可愛すぎる。なンだこの最終兵器は。

遇った時から相性の良さってのは感じてたし、まぁその、百合に関して感じてたことは自惚れじゃなかったって事なんだろう。？忠がやたら百合と絡ませようとしてきたのも、そういうことなんだろうしな。ッたく、あの重度のシスコンは。

「……本当だよ、百合」

「……あ……う、ん……」

正面から百合を優しく抱きしめると、身を固くして遠慮がちに俺の背に腕を回してきた。

「……でも、吃音……」

……よっぽど酷い目に遭ってきたらしいな。これだけの器量好しだから、当然周囲からやっかみもあっただろう。吃音ってのはそいつらが百合を口汚く罵るに格好の材料だったに違いない。

「……怒るぜ？百合。それは個性みたいなモンだ。今まで生きてきた中で他の連中がお前さんに何を言ってきたのか、ある程度予想は

付くがね。俺は気にならないし、そんな物はどうでも良いンだよ」
「……うん……」
百合は泣いていた。
こんなコンプレックス感じるようになる程叩きまくったってことだろう。そう思うと口汚く罵ったであろう奴らを叩っ斬りたくなってくる。それと同時に、百合が可愛くて、いじらしくて、守ってやりたいって気持ちが強くなる。
「百合。他の連中がどう言おうと、俺はお前さんは綺麗で可愛いと思うぜ？吃音ってのはその綺麗さや可愛さを損なわせるモンじゃない」
「……本当……？」
「本当だとも。現に俺は今お前さんのことが愛おしくて堪らないんだぜ？」
「……ん……」
目を閉じて、こちらに唇を向けて。
証明して欲しいって事なんだろう。……悪いな、皆。俺はどうしても百合は守ってやりたいンだ。
「……んん！……ぴちゃ……ちゅ……ん……」
いきなり深い奴から行ったから吃驚したンだろうが、直ぐに受け入れて夢中で口を吸ってきた。
「……分かったかね？」
「……う、うん……」
さっきまでと違って、しっかり俺に抱きついて来る。前々から思っ

てたけど、かなり胸大きいよね、百合は。しっかり抱きつかれて分かったけど、弾力があるのにもの凄く柔らかいンだよねぇ。……それを考えたのが悪かった。その、下半身が、ねぇ。１００％中の１００％！って感じになっちまったンだよねぇ。

「……あ……」

百合に気付かれた。

「あ～、その、何だ……」

「……嬉しい」

「……は？」

「……私、魅力あったから」

「……最初っから言ってるだろう。お前さんは綺麗で可愛いンだよ。女性としての魅力に溢れてるンだ。周囲の口さがない奴らはそれを妬んで色々言ってたに過ぎないンだよ、きっとな」

「……あ、あの……ね……？」

「うん？」

「……その、そういうこと、して欲しい……」

……する前に、ちゃんと言っておかないとな。

「……なぁ百合。俺には他にも情を交わす女の子が居るし、百合を嫁さんに貰うにしても全部片が付いてからのことになる。それでも俺で構わないと思うなら、俺と一緒に居て欲しい」

「……うん……嬉しい……」

それから後は、まぁ、ご想像にお任せするが。

百合は初めてだったのに、全く痛くなかったみたいだ。むしろ気持ち良過ぎたみたいで、声を上げないように必死に堪えていた。百合

の声は可愛いンだから聞かせて欲しいって言ったら、顔を真っ赤にして、良い声で啼いてくれた。

あれだけ胸が大きいのに、全く垂れてなかったのにも感動した。普通寝っ転がったらかなり潰れると思うンだが、美巨乳ってのか？多少は潰れたが、ツンと上を向いて自己主張してた。その胸で、本で色々知っては居たみたいで、奉仕すると言って色々とやってくれた。ぎこちなかったけどそれがまた一層可愛らしくて。

何度か健康的に汗を流した後、百合を抱きながら寝台に寝そべっている。

「……百合、気持ち良かったか？」
「……うぅ……」
「初めてだったのに、百合はちょっとエッチな娘なのかな？」
「～～～～」

こういうことになったのに、やっぱり恥ずかしいものは恥ずかしいらしい。

「……好きだよ、百合」
「……ん……」

その日何度目かの口付けを交わしていると、？忠が陣屋の中に入ってきた。
おいおい、ダンクーガは何やってやがるよ。

「あ～！？姉貴の純潔を大将が！？これは責任を取って貰わないと困るなぁ～！？」

……何だよそのいかにも用意してましたって感じの台詞は。
百合は吃驚して慌てて布団を被り、俺に抱きついて顔を真っ赤にした上で『う～う～』言っている。……良いねぇ。これ俺の嫁さんになるのか？最高じゃないか。

「……色々言いたいことはあるが取り敢えずどうやって入ってきた」
「高順に『大将に、姉貴について話があるからそこを退けろ』って笑顔で話したら後ずさって道を開けてくれましたが？」

あぁ、スーパーシスコン人になってる訳か。ダンクーガじゃ手も足も出ないだろうな。

「で、大将。姉貴をどうするんです？返答次第じゃ大将と雖も……」

大暴走中じゃねぇか、このシスコンは。

「……はぁ。百合は俺の嫁さんになるンだよ」
「……姉貴、本当か？」
「……う、うん……」

百合が返答すると、スーパーシスコン人はただのシスコン人に戻った。

「……それなら良いんですよ。ちょっと寂しいけど、そろそろ姉貴も弟離れをすべきでしょうからね」
「……誰がどう見てもテメェが姉離れすべきだと言うと思うンだが」
「まさか。そんなことある訳無いじゃないですか。な、姉貴」
「……忠、姉離れ」
「そ、そんな……あんなに素直だった姉貴が兄貴に抱かれただけでこんな事に……」

あぁ？今なンか変なこと言いやがったな、このシスコンは。

「……誰が兄貴だ、誰が」

「へ？だって姉貴と結婚するでしょ？だったら俺の兄貴になるって事じゃないですか」

「姉貴が兄貴に抱かれるとか言うと背徳的だろうが」

「……でもそれが良いんでしょ？」

「……分かってるじゃねぇか」

「でしょ。いい義弟だと思いますよ、俺は。義弟の鏡ですよ」

「そうか。ならさっさと出ていけ。これ以上邪魔したら、テメェの大事な姉貴に嫌われちまうぞ？」

「まさか。姉貴が俺を邪険に扱うはずが無いじゃないですか」

「……忠、邪魔」

「ば、馬鹿な……」

？忠はがっくりと項垂れて陣屋から出て行った。

……学習しないンだな、シスコンって。

ところで、俺ぁ戦に出かける度にこっちの方でも戦果を上げてないか？いや、別に良いンだがちょっと気になって……そのうちに戦に出かけたら女が増える奇跡の男とか言われないかな～とか思って、さ。

「ちゅ……」

碌でもない事を考えていた俺の頬に、百合が口付けしてくる。

……まぁいいか。これだけ可愛い女の子が俺の事を慕ってくれるってのは正直嬉しいし、な。

「どうした？」
「……ん……好、き……」
……ッたく。これじゃ収まり付かないだろうに。もう少しだけ、良いよな？
百合を抱き寄せてそう囁くと、頬を朱に染めて頷いてくれた。

～？忠　Ｓｉｄｅ～

大将が兄貴になった明くる日、俺たちは襄陽に入城した。
劉表はどうやら心底肝を冷やしたらしく、全部投げ捨てて逃げ出し

たらしい。ちょっと脅しすぎた、ということだろう。だが、ただ逃げ出しただけじゃない。劉表は江夏の兵も纏めて連れて行き、揚州を荒らし回っているらしい。兄貴に聞いた限りでは揚州には大して兵が居なかったみたいだから、そこを奪ってやろうということなんだろう。

「糞が。逃げ出した上に揚州に攻め入るとはねぇ」

兄貴は苦虫を噛みつぶしたような顔をしている。

ちなみに、兄貴の頬桁は腫れてご丁寧に鼻血まで出た跡が付いている。将が集まった時点で姉貴とそうなったことを姐さん方に認識して貰う為に、敢えて大将を『兄貴』と呼ぶと、ちょっとお話が、とか何とか言われながら陣屋から連れ出され、外から鈍い音とくぐもった声が聞こえてきた。

いやぁ、良かったね兄貴。俺が兄貴の言葉として、『もし百合とそうなったとしたら、何だかんだ言って裏切った気持ちがして仕方がないだろう。一人一発ずつ殴って貰いたい』って言ってたって伝えておいたから、一発で済んだんだよね。つくづく俺って義弟の鏡だと思うよ。決して昨日姉貴に邪険に扱われたからじゃないんだ。そこの所は理解して頂ければ幸いですよ。

「で、教経。どうするの？」

「どうするもこうするもあるか。劉表の屑は櫓櫂の及ぶ限り追い掛けて殺す。霞、翠。騎馬隊の進発準備を。出来る限り早く追いついて殺すぞ？」

「了解や」

「分かったよ、ご主人様」

こういう時の兄貴は、見ていて気分が高揚してくるものがある。

「で、兄貴。誰を連れて追い掛けるんです？」
「……しれっとした顔しやがって……後で覚えてやがれよ……
先行する将は霞、翠、蒲公英、雪蓮、白蓮、俺、ダンクーガ。軍師は稟と雛里だ」
「……何というか、豪勢ですね」
「雪蓮以外は皆騎馬の指揮に長けている。軍師に関しても、速戦と奇計じゃこの国一番だろう。これで確実に劉表を殺してやるンだよ、？忠」
「あ、俺を呼ぶときは忠でいいですよ、兄貴」
「……ッたく。後で百合に言いつけてやるからな」
「兄貴の護衛は誰が務めるんです？」
「私が務めますよ、？忠」
「……太史慈の姐さんなら大丈夫か」
「あ、あと百合も借ります」
「それはまた何でです？」
「百合は剣が得意なそうですね？丁度良いので新撰組に入って貰おうかと」
「新鮮組？野菜栽培か何かするんですか？」
「新撰組です。お屋形様に願い出て、親衛隊とは別にもう一組、お屋形様の剣として『悪・即・斬』を貫く為の隊を新設するのです。……次に巫山戯たことを言ったら牙突ですよ、？忠。分かりましたか？」
「……はい」

おっかねぇ。前から思ってたけど太史慈の姐さんは兄貴のことになるとちょっと、いや、かなりぶっ飛んだ人になる。……怖いねぇ。俺はもっとおしとやかな人が良いね。兄貴の番は皆別嬪さんだけど、気が強いのが多すぎだと思うぜ。

「……琴、その、新撰組というものには空きはないのか？出来れば

私も……」
「……愛紗、駄目だろ。愛紗には俺が居ない際の全軍の指揮を執ってもらわないと駄目なんだから」
「う……し、しかし琴ばかりずるいです！」
「あ～、ちょっと待て。落ち着こうか。この話は後ですれば良いだろう？今は劉表に追いつくことが先決なンだからね」
「……帰ってきたら一番に私の所に来てくれますか？」
「分かってるよ、愛紗。必ずそうするから」
「……そ、それなら宜しいのです」
「あ、あと？忠は親衛隊の副長やって貰うから」
「はぁ！？」
「いや、ダンクーガは頭がほら、アレだろうが」
「……ああ、成る程」
「……ちょっと待てテメェら。大将、俺だってちっとは勉強してるんだよ！？忠！テメェ何納得してやがる」
「いや、ねぇ。琵琶丸に鍼打ち込んで貰ったら改善するかもよ？」
「そうかな……じゃねぇよ！大体何処に鍼打ったら頭が良くなるんだよ！」
「こめかみ？」
「死ぬだろうが！」
「そこはほら、高順だから」
「……どうやら先にテメェを教育する必要があるみてぇだな」
「悪いな高順。俺にはそっちの気はないんだ。諦めてくれ」
「テメェ！やぁぁぁぁってやるぜ！」
「だから俺にはそっちの気はないんだって！」
「テメェらいい加減にしやがれ！とっとと準備して来い！」
「チッ……？忠、後で覚えてろ」
「だから俺には……」
「忠！もう良いから行ってこい」
「了解ですよ、兄貴」

高順と肘で互いを小突き合いながら陣屋を出ようとしたところに、伝令が駆け込んでくる。

「申し上げます！宛の馬騰様より使者が参っております」
「碧から？……直ぐに通せ」
「はっ」

南陽郡の抑えとして残されていた馬騰からの使者、か。一体何だろうな。

「ダンクーガ、忠。お前らもちょっと残ってろ」
「分かったよ大将」
「了解ですよ」

元いた場所に戻ると、使者が陣屋に入ってきた。

「明命か。久し振りだな」
「はいっ。お久しぶりです、教経様」
「で、どうしたンだ？」
「官渡の戦いに決着が付きました」

……曹操と袁紹の争いか。

「そいつはまた厄介な時機に終わりやがったな。でもまぁ大丈夫だろう。華琳とは約定を結んである。俺が南を、華琳が北を斬り従えてから決戦しようって事になっているンだからねぇ」

用意周到だねぇ、兄貴。だが、余裕さえ見せている兄貴に対して、使者が何か言いたそうにしている。

「それがその……」
「ん？まさか華琳が宛に攻め込んできたのか？」
「いえっ、そうではありません」
「どうしたンだ？」
「……官渡の戦いで、袁紹が曹操を破りました」
「……今、何て言った……？」
「袁紹が官渡の戦いに勝ちました」
「……馬鹿な……」

兄貴が愕然としている。全く予測していなかったってことなんだろうが、それにしても動揺が激しいな。……兄貴、アンタひょっとして曹操の事気に入ってるのか？何故だか真名を預けられて居るみたいだし。

「ちょ、ちょっと待て。麗羽が曹操に勝ったって言うのか？」
「そうです」
「……ねえ明命。その情報に訂正の余地はないのね？」
「はい、雪蓮様」
「……教経、いつまで惚けているの？」
「……あぁ、済まない。ちょっと信じられなくてな」
「で？」
「とは？」
「このまま劉表を追い掛けるの？」
「……済まん雪蓮。無理だ。一旦兵を纏めて情報収集しなきゃ話にならない」
「でしょうね。このまま先に行ったら碌な事にならないって勘が言ってるわ。今回は此処まで。次に持ち越しましょう」

孫策の姐さんは無念そうな顔をしたが、直ぐに気持ちを切り替えた

みたいだ。こういうところは流石だね。名将ってのはそうでなきゃいけない。

「教経殿。兵を纏めると言っても荊州の抑えが必要でしょう。誰に委ねるのです？」

「……蓮華、白蓮。お前さん達二人に任せたい」

「二人だけで務まるとは思えないんだが。私と蓮華である程度は馴致出来るけど、荊州は広いんだ。軍事的にも政治的にも人手が足りないぞ？」

「その辺りは配下を付ける。白蓮には徐庶と馬良をつける。蓮華には雛里を。将は黄忠を白蓮に付ける。蓮華には思春と明命を。差し当たってこれで問題無いだろう。落ち着いたら益州から張任と厳願を荊州に移しても良いし、星や愛紗達を行かせてもいい。差し当たって二月三月はこれで何とか耐えてくれ。

兵は３０，０００残していく。荊南にいる兵と合わせれば６０，０００近くにはなるだろう。数だけだろうが３０，０００を核にして軍を構成すればそこらの軍には負けないはずだ。それから、蓮華と白蓮では蓮華が上位とする。いいな？」

「私に文句はないよ。蓮華を補佐すれば良いんだろ？」

「あぁ、頼む」

「任されるよ」

「……教経、私で大丈夫なのかしら」

「蓮華。大丈夫だ。お前さんを長安からずっと見続けてきて、きっと務まると思ったから托すンだ。暫く、頼む」

「……分かったわ。貴方の言葉だもの、信じてみるわ」

「あぁ。……直ぐに出立するぞ。稟、冥琳。残していく兵を選別しておいてくれ。雛里は稟の補佐をして、俺たちが撤退する際に引き継ぎを。慌ただしいが解散だ。直ぐに用意しろ」

やたら慌ただしくなって来やがったな。

横に立っている高順を見ると、高順は直ぐに親衛隊を呼びつけて指示を出していた。慌ただしく準備をしている最中のごたごたに紛れて、兄貴の命を奪おうとしてくる可能性が有る。何があっても不逞な輩に指一本触れさせてはならない。厳しい目でそう言い、３００ずつの小勢に分けて兄貴が動き回るであろう周辺を徹底的に草刈りを行うことを命じた。

「おい高順、警戒しすぎなんじゃないか？」

「……今までに3度、大将の命を狙って刺客が紛れ込んでいたことがある」

「……そんな話は聞いてないぜ？」

「そりゃそうだ。大将は知らなくて良い。大将は大将の理想を邪魔する奴を排除する事だけを考えてくれていればいい。俺はその大将を排除しようとする奴を排除してやる。差し違えてでも、だ。？忠。親衛隊ってのはそういう人間だけが選ばれて、血反吐を吐くまで鍛錬し、大将の前に立ちはだかって盾になる為だけに自分が生まれてきたんだって思える奴だけが集まる隊だ。お前に務まるのか？」

「馬鹿にしてんじゃねぇよ。兄貴には俺の大切な姉貴の旦那になって貰わなきゃ困るんだよ。何が何でもな。それを邪魔しに来る奴は皆殺しだ」

「なら良い。お前に５０、配下を付ける。太原からずっと一緒に大将と戦ってきた、一番信頼出来る奴らだ。俺たちが５０ずつ率いて交代で大将を常に警護する。大将の目に付かないように、しかし大将を必ず護れるように、だ。いいな？」

「任せとけよ。姉貴を泣かそうとする奴はどんな奴でもぶっ殺してやる」

その言葉に高順は頷いて歩いていった。早速警護を始めるのだろう。……ちょっと見くびってたかな。心構えってもんが違う。俺はどう

やらアイツに敵わないらしい。だが、俺にだって意地がある。幼い日に立てた、姉貴の幸せを護ってやるって誓いを必ず守る。

兄貴の命を狙う奴がもし居たら、高順と俺で必ず殺してやる。必ずな。

蝶の如く～１２６～（前書き）

いつの間にやらＰＶが９００，０００になってました。
目を通して頂いて有り難う御座います。

あと６０話前後でこのお話も終わると思います。
今後とも、宜しくお付き合い下さい。

蝶の如く～１２６～

～華琳　Ｓｉｄｅ～

袁紹軍の糧食を纏めて管理していた烏巣を襲撃し、その糧食を焼き払う事に成功した。何らかの対策を立てている可能性が有り、苦戦することまで考えていたのに。拍子抜けね。これで私の勝ちは揺るがないものになったわ。

「凪！沙和！直ぐに兵を纏めて城へ戻るわよ！」

「はっ！」

「騎馬を先頭にして帰路に居る敵兵を蹴散らした後を徒が進む。騎馬隊はある程度まで掃討したら戻ってきて後背に迫る敵にぶつかってまた前方へ。これを繰り返しなさい！騎馬は沙和、徒は凪がそれぞれ指揮しなさい！」

「了解なの～」

城に戻ったら兵を再編し、逆上して城に攻め掛かって来るであろう袁紹軍の猛攻を凌げるようにしておかなければならないわね。麗羽のことだから逆上して突っかかって来るでしょう。その時が貴女の最期になるかも知れないわね、麗羽。

「華琳様！袁紹軍が撤退を始めております！」

官渡の城に戻った私達は一旦兵に休息を与え、来るべき袁紹軍の全

面攻勢に備えていた。まさか撤退するとは思わなかったけれど、攻守が入れ替わるだけで特に問題はない。残念ながら麗羽を此処で討ち果たすことは出来そうにないけれど、麗羽を逃がす為に多くの兵を殿に回すことでしょう。その殿を徹底的に叩いて暫く軍事行動が起こせぬように痛手を与え、その間に私がその回復力を上回る速度で領内を慰撫して廻れば立場は逆転することになるでしょう。

「そう。皆出陣の用意をしなさい。態々エン州まで死にに来てくれたのにあれ程多くの人間がまだ生きているという結果に落胆していることでしょう。ここで彼らを手ぶらで帰したのではこの曹孟徳の器量が疑われるというものだわ。

……今から追撃戦を行う。前に立ちふさがるものは全て斬り捨てなさい。助命する必要はないわ。戦が終わるまでは、前に立つものは全て排除なさい」

「御意！」

「桂花、状況は？」

「春蘭、秋蘭の両翼が敵を中央部に押し込んでいるところです。後は本隊でこれを叩いてやれば勝ちは華琳様の手の内に自ずと転がり込んでくると思われます」

「そうね。敵将も中々やるものだけれど、相手が悪かったわね」

張飛と顔良が殿を務めているけれど、私の敵ではないわ。身の程というものを弁えなさい？貴女達程度が私と対等に渡り合おうなど思い上がりも甚だしい。

「敵が密集している中央部に向かって矢を立て続けに3本放ちなさい！放った後、敵に吶喊する！」
「矢を番えなさい！……放て！」

兵達が次々に矢を放っている。一本目、二本目、三本目。矢を射るごとに敵兵を減らしていく。それだけでなく、敵の隊伍を乱していく。

「行くわよ！続きなさい！」

兵を従えて敵中に切り込む。周囲にいる雑兵が私に向かって剣や槍を繰り出してくるけれど、そんなものは無駄なのよ。絶で全ての攻撃をいなし、いなした時に生じる勢いを利用してそのまま相手を薙ぎ払う。

「ぎゃぁ」
「あら、素敵な断末魔の声ね。容赦なく殺しなさい！敵は怯んでいるわよ！」

本隊が突っ込んだことで敵の圧力がこちらに集中して来ている。けれどそれも私の思惑通り。

「華琳様の目の前で醜態を晒す訳には行かんぞ！突っ込め！敵を討ち取って名を上げる機会を得よ！」
「姉者の隊に後れを取る訳にはいかぬぞ！夏侯淵隊、突撃せよ！」

前面に集中したことで薄くなった側面から、春蘭と秋蘭がここぞとばかりに攻め掛かる。敵は甚大な被害を目の当たりにして後退しようとしているが、それを許すはずがないでしょう？貴女達には私に

降るか、此処で死んで貰うかするわ。

「申し上げます！」

「何事か」

「ち、陳留が袁紹軍に落とされました！」

何ですって？

「今何と言ったのかしら」

「は、はい。陳留が袁紹軍に落とされました。敵兵は２０，０００。敵将は麹義に沮授とのことです！」

やってくれるわね。幽閉されている諸葛亮が沮授に策を授けたと見て良いでしょう。

「華琳様、如何なさいますか？」

「……前面の敵を撤退させてやりましょう。ある程度手心を加えてやりなさい。その上で全軍を反転させて陳留へ向かうわ。一応、後背に注意しておきなさい。諸葛亮が絵を描いたのであれば、陳留攻略の軍それ自体がおとりだという事も考えられるのだから。本命は後ろから来る可能性が有るわ」

「はっ。了解致しました」

思わぬ所で邪魔が入ったけれど、私の裏をかこうなんて少し甘いんじゃないかしら。私は曹孟徳。貴女達に関わっているような暇は無いのよ。

～沮授　Ｓｉｄｅ～

「沮授。どうやら曹操軍が来たようだ」
「そのようですね。麹義殿、分かって居ると思いますが……」
「心配無用。諸葛亮殿の采配であればそれに必ず従おう。この私を完全に使いこなせるのは私ではなくあの方らしい。それを知って猶自儘に振る舞おうとは思わん」
「……安心致しました」
「ふん。貴様に心配される程阿呆ではないわ。
……貴様ら！陳留の城壁に拠って戦線を膠着させるぞ！それ以外のことを考えるな！打って出ることは許さん！民に狼藉を働くことも許さん！破ったものは例外なく死罪！分かったか！」

麹義殿の呼びかけに兵が気勢を上げて応じる。これならば持ち堪えることが出来るだろう。

「来ました。先陣は夏侯惇のようです」
「ほう。では矢を馳走してやろうではないか」

「麹義殿、余り前に出られますと、思わぬ怪我をなさいますぞ？」
「大丈夫だ。その辺りは心得ているつもりだ。私が不幸にも射られてしまうのか、それとも夏侯惇が不幸にも私に射られてしまうのか。これだけでこの戦を占うことが出来よう」
「それでは私もお供しましょう」
「卿までやられてしまったら困るが？」
「麹義殿がやられてしまったら策自体が崩壊しますから同じ事です。崩壊するなら味方が此処に集まる前に、策破れたことが判明した方が良いのです。それなら被害は此処に居る２０，０００で終わります」
「……言うものだわ。好きにするが良い」

麹義殿と話している間にも、曹操軍が城門に攻撃を加えて来る。前に出て馬上で指揮を執っているのが夏侯惇だろう。

「さて、私と貴様とどちらが天に愛されているのかな？」

麹義殿が弓を引き絞る。矢が麹義殿に降りかかるが、それが全く見えていないようだ。

「……貰った！」

麹義殿が発した矢は、馬上に在った夏侯惇を貫いた。顔に刺さった様に見えたが、どうやら目に刺さっているようだ。後退して治療を受けるかと思っていたが、その場で矢を引き抜いて眼球を喰らい、そのまま前線に留まって指揮を執り続ける。
……何という精神力だ。曹操軍の士気がこの上なく揚がっている。

「……アレは化け物か何かか？」
「そのようですな」

「まあ良い。運試しには勝ったのだ。この戦、私達の勝ちだろう。引き続いて抗戦してやるのみよ」
「では私は反対側へ向かいます」
「そうしてくれ。恐らく搦め手から攻めて来るであろうからな。あちら側の兵の指揮については卿に全権を委ねる」
「宜しいのですか？」
「私は此処に居て戦場の全てを見通せる程の人間ではない。現場のことは現場の人間が最もよく分かって居るものだ。低能であったり無能であったりすれば困るが、どうやら卿は総身に知恵が回りかねているような輩とは違うようだし、性根も据わっていることは分かった。信頼しておいてやる」
「……有り難う御座います。では、私はこれで」
「ああ。……死ぬなよ。卿らの本領は戦の後だろう。それを果たさずして死ぬような馬鹿な真似はするな」
「元より承知の上です」

麹義殿と分かれて、西側の城門を守備する為に移動する。
遅くなったが、袁家は一つに纏まりそうになっているのではないか。これであれば、天下争覇に乗り出せる。但し、この戦に勝利することが出来れば、だが。

～朱里　Ｓｉｄｅ～

「申し上げます！」
「何でしょうか」
「張コウ殿、田豊殿が曹操軍の後背を突きました！」
「そうですか。御苦労様です」
「はっ！」

陳留を落とした麹義さんと沮授さんが頑強に抵抗している内に、張コウさんと田豊さんが率いる１５，０００の兵が曹操軍の後背を突いた。尤も、それを予測していたのであろう。いつの間にか構築されていた柵によって上手く兵の勢いを殺されてしまった為、後背を突いて一気に瓦解させるという当初の策は破られた形だ。
麹義さん、沮授さん、張コウさん、田豊さん。この四人は今必死に戦っているはずだ。袁家の行く末を決めるこの戦に参加しているのは、私を含めて５人しかいない。私は常々彼らにそう言ってきたのだから。そして曹操は彼らの必死さを肌で感じているはずだ。増援があったとしても、僅かなもの。そう思っているに違いない。

「申し上げます！張飛殿が兵２，０００を率いて後方から出現し、敵後背に攻撃を開始しました！」
「敵本隊は後方の友軍に対する攻勢を強めていますか？」
「はっ！敵本隊は陳留攻めを一旦中止して後方の友軍を殲滅せんと

している模様です！」
「そうですか。下がって構いません」
「失礼致しますっ！」

此処までは全て計算通りに来ている。
麹義さん達には悪いが、私は彼らに伝えた策が私の企謀の全てであると言った覚えはない。彼らは皆、それが全てだと思っていたようだけど。敵を欺かんと欲すれば先ず味方から。秘匿すべき策というものは、私だけがその全貌を知っておくことで成立する。

彼らにこの策を話した後、鈴々ちゃんを呼び出してあらかじめそうしてくれるように話をしてあった。桃香様の為にどうしても必要だ、というと、鈴々ちゃんは一も二もなく策に従うことを約束してくれた。その結果として、鈴々ちゃんが兵を再び返して此処に居るのだ。

しかし曹操軍はそれでも崩れる気配を見せない。城内の友軍を押さえ込みつつ、後背の田豊さん達を殲滅すべく攻勢を強めている。やはり曹孟徳は有能で、そして危険だ。並の将であれば張コウさんと田豊さんが後背を突いた時点でこれを防ぐことが出来ずに壊走しているはずなのだから。
それが今現れた鈴々ちゃんの軍までも押さえ込んで見せている。最初から後背を突かれることを織り込んで策を立てていたのだろう。こうでなくてはならない。それでこそ、曹孟徳。乱世の梟雄と呼ぶに相応しい才幹の持ち主だ。

だが、曹操軍はこれで行動限界を迎えるはずだ。
……例えば、ここでもう一つ。もう一つ新しい力が加わればもう耐えられないだろう。そしてそのもう一つの新しい力を私は有している。

「七乃さん、用意をお願いします」
「やっと出番ですか～。何も言わずに兵を纏めて此処で待機しておけ、と言われて連れてこられた戦場で、まさか私がこういう役目を担うとは思っていませんでしたよ～？」
「はい。そうでしょうね。誰にも言っていないのですから」
「まあ、私はお嬢様が無事なら何でも良いんですけどね。此処にお嬢様が居ればな～」
「危険ですよ。余計な遊びを行えば、その綻びを突かれて逆にこちらが負けることになるのです」

これが、私の最後の切り札。
七乃さんには旧領である汝南郡で美羽ちゃんの旧臣を募って貰った。その数は８，０００。もう少し少ないかと思っていたけど、意外に毛嫌いされては居なかったようだ。この８，０００を含め、世間では既に袁術という人を長とする家がかつてあったことなど気にも留めていないだろう。だが、名門である袁家に付き従ってきた長い年月というものは、その長さに相応しい心理的束縛を郎党に与えるものだ。
曹操や平教経は、袁術など歯牙にも掛けていないだろう。だからこそ、計算から外れているはずなのだ。飛び抜けて優れた人間が居なくとも、敵に対して常に衆で在り続け、和を保って共通の目的に沿って行動すれば勝てるのだということを彼らは分かっていない。いや、分かってはいるだろうが、袁術という存在を頭の片隅においておく程自分の才能に不安を感じていないだろう。
理由のない万能感というものが自分の身を滅ぼすのだ、ということを彼らも知るべきだ。平教経には、曹操が滅びることによって。そして曹操には、自身が滅びることによって。

「全軍で一気に側面を突きます。曹操軍を壊滅させるのです」
「は～い♪」

全軍、側面を突いて下さい。先ず騎馬1，０００で突っ込んだら、そこにねじ込みますよ～？一つ崩せば城側か後背が崩れるはずです。暫く耐えているだけで勝利することが出来るんですよ～。分かりましたか？では、突撃～♪」

兵が丘陵を越え、気勢を上げて曹操軍に掛かって行く。予測していなかった方向からの攻撃に、兵を差し向けようとしているけど。もう、間に合わない。

「これで勝ちましたね。後は平教経が攻め込んでくるのを防ぐ為に戦捷の余勢を駆って、国境で待機するだけです。襄陽に留まり続けるなら、汝南から侵攻して本拠である長安との連絡を断ちます。南陽郡に戻った場合は暫く対峙して耐えていれば直ぐに実りの季節ですから、それで余力を養うことが出来るはずです」

「ひゅ～ひゅ～、腹黒いですね～朱里ちゃん」

「七乃さん程ではありません」

「あらら。そう言われちゃうと落ち込んじゃいますよ～？」

「……そんな人ではないでしょう。さあ、行きましょう」

「はい～♪」

エン州を手に入れ、并州も併呑する。司隷州はそれから落とせば良い。司隷州の後は揚州だが、平教経が指を咥えてみているはずもない。

……出来れば、送った刺客に殺されてくれれば良いのだけれど。平家の強みはその当主の類い希なる才に拠るところが大きい。それは同時に弱点でもある。当主さえ居なくなれば、あの優秀な家臣団は求心力を失って瓦解するだろう。跡取りが居ればそれを奉じて国を維持することは可能だろうが、跡取りが居ない今彼を喪えば間違いなく平家は瓦解する。

袁家が平家に打ち勝つ為の絶対条件は、彼が死ぬこと。それが為し得ない場合、天下は終に平家のものとなるだろうことは想像に難くない。今回の刺客が仕留めることが出来なかったら、戦で彼を殺すしかない。最早袁家を慕い、その恩に報いようという、専諸の如き侠骨の士は存在しないのだから。

……私は彼の死を切実に願っている。私の夢を叶える為に。

死んで欲しいのだ。

～華琳　Ｓｉｄｅ～

陳留攻略を行っている私達の後背を、予想通り袁紹軍が襲ってきた。あらかじめこれあるを想定しておいた私は、柵をこしらえて敵の勢いを削ぐことが出来る様に陣を構築しておいた。但し、柵が見えぬように柵を中心に布陣しておいたのだ。後方から襲いかかってくる袁紹軍には柵は見えていないはず。

……城の兵は春蘭に任せておけば問題無いでしょう。先ずは、この

援軍を全力で叩く。

「秋蘭に兵を返すように伝令を。但し、麾下の3割で良いわ。残りは流琉と共に城攻めを続けるように」

「はっ」

「凪、真桜、沙和。後方にいる兵を前方へ移動させ、柵を挟んで敵と対峙するように布陣し直しなさい。敵は私達に襲いかかる必要がある。私達にはその必要はないわ。待っていれば向こうから勝手にやってくる。弓を射掛け、槍で突き殺してやりなさい」

「はっ！」

袁紹軍の将は、張コウと田豊のようね。流石にその勢いには侮れないものがある。彼らの攻勢は後のことを考えないものに感じられる。ここで、何としても私を討ち果たす。その為に死力を尽くしている様に見える。やはり想像通り、彼らが本命であったと考えて良いでしょう。そして、彼ら以外に援軍が来たとしても大した数ではないのでしょうね。

「申し上げます！更に敵増援が参りました！」

「見えているわ。下がりなさい」

「はっ！」

前方に『張』の旗。殿を務めていた張飛でしょう。でもこちらにも増援が駆けつけたわ。

「華琳様！」

「秋蘭、良く来てくれたわね。見ての通り、後背から袁紹軍がやってきたわ。敵将は張飛。その数は約2，０００といったところかしら。駆けてきたところを申し訳ないけれど、私と共に張飛を叩きに出て貰うわ」

「望むところです」
「そう。それでは行くわよ。城外の敵を一掃し、しかる後に陳留を取り戻す」
「御意」

城内の敵を押さえている間に城外の敵を叩く。城内の敵は、城外の敵を掃除してからで構わない。援軍の無い籠城軍など、干上がるだけなのだから。城外の敵兵を討ち、自分たちが陸の孤島に取り残された漂流者であることを自覚させてやれば、その士気は目に見えて落ちるでしょう。そうなってから、ゆっくりと料理してやれば良いのだから。

張飛の軍とぶつかる。小勢にしては中々の手応えを感じるけれど、こちらの方が数が多いのよ?秋蘭が騎馬を巧みに敵後背に回し、退路を断とうとする。その動きに動揺した敵軍を少しずつ、だが確実に数を減らしていく。

「も、申し上げます!」
「落ち着きなさい。どうしたと言うの?」
「右手後方の丘陵から、敵が接近してきます!その数、およそ8,000!」
「右手後方ですって!?」

袁紹軍の方を向いている私達の右手後方。そちらは我が領地のはず。

「率いて居るのは誰なの?」
「旗印は『張』!その装備から判断するに、旧袁術軍と思われます!」

……張勲!袁術のことなどすっかり頭から除外していた。孫策に国

を逐われ、袁紹の庇護を受けながら、これまで全く表舞台に立つことがなかった。袁術という人間は、その役目を終えて歴史に埋没したまま死ぬだろう。そう思っていた。それが此処で私の後背を張勲に突かせている。

「華琳様！」

「桂花、兵をいくらか割いて時間を稼ぎなさい！」

「だ、駄目です華琳様！騎馬が突っ込んできます！間に合いません！」

私達の後背に騎馬隊が楔のように打ち込まれる。全く想定していなかった方向からの攻撃に、兵達は混乱している。いや、混乱の極みにある。

「……桂花、貴女はどうすべきだと思うのかしら？」

「……撤退すべきです、華琳様。此処で配下の兵を全て喪うようなことになれば、再起は叶いません」

この私が負けたというの？麗羽に、この私が？

「まだ勝敗は決していないわよ？桂花」

「華琳様……」

「どうしたの桂花！私達はこの戦に勝って河北を平定しなければならないのよ！？」

「華琳様！落ち着いて良くお考え下さい！最早我が軍には余力はありません！司隷州に落ち延びて再起を図るべきです！華琳様もお分かりになって居られるはずです！」

あと僅かで勝利を掴もうかという所まで来たのに。此処まで来たと言うのに……！

「……それでも……」
「華琳様！」
「それでも負ける訳には行かないのよ！私はこの戦に勝たなければならないの！教経にそう宣言したのよ！負ける訳には行かないの！」
「……華琳様。桂花の言う通りです。此処は退きましょう。命あればこそ浮かぶ瀬もあろうというものです。それとも此処で御自身の拘りの為に多くの者達を無為に死なせるおつもりですか？」
「……くっ……」
「華琳様！」
「……撤退するわ。……桂花、秋蘭。有り難う」
「……いえ。華琳様に対し、不遜な物言いを致しました。申し訳ありません」
「いいえ。私が間違っていたわ。秋蘭、殿を務めなさい。桂花、伝令を。春蘭と季衣、流琉に司隷州までの露払いをなさい、と伝えて。凪達には秋蘭と共に殿を務めるようにと」
「はっ！」
「私達はこれから逃げるわ。？水関まで駆け続ける。……秋蘭。死んでは駄目よ？貴女は私のものなのだから。？水関で貴女達を待っているわ。必ず生きて帰ってきなさい。いいわね？」
「……必ず」

馬に乗り、？水関に向かって逃げ始める。
……この屈辱は忘れない。忘れようがない。その機会が得られたなら、必ず雪辱させて貰うわ。

蝶の如く～１２７～

～麗羽　Ｓｉｄｅ～

官渡から猪々子さんと桃香さん、審配さんに逢紀さんと共に逃げ帰った。逃げている最中、桃香さんから言われた事がずっと頭から離れなかった。

『袁家が、無くなってしまうかも知れない』

他の誰でもない、私のせいで。

こうなって初めて、袁家という家が永遠に続くものではなく、それを束ねている私如何で繁栄も衰退もするものであることに思い至ったのです。袁家は名門であり、それを周囲の者は崇めてくれている。そのこと自体当たり前であると思い、またこれから先もずっと変わらぬものであると考えていました。

ですが、それは間違っていたのです。周囲の者達は私に何も言ってくれませんでした。いえ、疎ましく思っていた田豊さんと沮授さんは、遠回しにそういうことを言っていたかも知れません。猪々子さんと斗詩さんも、今思えば私に対してそれを考えさせようとしていた時期があったかも知れません。審配さん達にしても、私が言うことに忠実であろうとしていただけで、私がそうあることを決して望ましくは思っていなかったのかも知れません。

周囲の者に『名門袁家の袁紹』としての私を期待され、それを演じているうちにそういう人間に成り変わっていた。こうなることを思いもしなかった。このまま私のせいで袁家が無くなってしまっては、ご先祖様に申し訳が立たない。ですが私にはもう何も出来ないのです。斗詩さんと田豊さん、張コウさん、鈴々さんが何とかしてくれ

るのをただ待っている事しかできない。
待っている間、私は自分が針のむしろの上に座しているかのような、そんな居たたまれなさを感じ続けています。『お前が名門袁家を滅ぼしたのだ』。周囲の者達が私に向ける視線が、私にそう言っているように感じられて仕方がありません。

「申し上げます！」
「……何ですの」
「陳留にて我が軍が曹操軍を破りました！」
「そ、それは本当ですの！？」
「はっ！たった今諸葛亮様から使者が！」

朱里さんから？

「麗羽ちゃん、朱里ちゃんは袁家の為に策を考えてくれていたみたいだね」
「桃香さん」
「……朱里ちゃんは独断専行したけど、許してあげて欲しいの。麗羽ちゃんの事を思ってそうしたんだと思うから」
「……許すも何も、もし朱里さんが居なければ私は桃香さんが言う通り袁家を滅ぼしていたでしょう。今回朱里さんが行った独断専行については全て不問とした上で、改めて賞することにしますわ」
「そうして貰えると嬉しいな」
「……麗羽様。まだ終わった訳ではありません。田豊から言われた通りに、兵と糧食を集めましょう」
「審配さん、逢紀さん。出来ますか？」
「民には耐えて貰うしかありません。ですが、この秋の収穫まであと僅かです。それまで、何とか耐えて貰うしかありません」
「……そうですか。田豊さんの言った通りになさい」
「はっ」

「麗羽様。あたいは残っている兵を再編します」
「ええ。『頼みます』」

そう言うと、猪々子さんは目を見開いて驚いていた。
思えば、誰かに何かを頼んだことは無かった気がする。私は名族袁家の袁紹。だから人は私の言うことを聞いて当たり前。そう考えて命ずることしかしてこなかった。

それでは、駄目なのです。これまでと同じ事をやっていたのでは、私はいずれ袁家を滅ぼしてしまうに決まっているのですわ。『名族袁家の袁紹』では、袁家を滅ぼしてしまうのです。それであれば、私は私として、袁本初として生きていかなければならないのです。それに気が付いて改める機会をこうして得ることが出来たのですから、今からでも改めるべきなのです。

「麗羽ちゃん。皆麗羽ちゃんの為に一生懸命にやってくれてる。大変だと思うけど、きっと大丈夫だよ」

桃香さんが私にそう笑いかける。
もし桃香さんが私にああいってくれなければ、私は撤退することはなかったでしょう。桃香さんが居なかったら。もし桃香さんが私と友達でなかったら。私は『名門袁家の袁紹』として袁家を滅ぼしていたでしょう。それを思うとゾッとします。

「……桃香さん、感謝致しますわ」
「え？」
「よく、私を見捨てずに友人で居てくれました。よく、私にああ言ってくれました」
「見捨てるわけないよ、麗羽ちゃん。私は麗羽ちゃんとお友達だもん。

その、あの言葉はね、朱里ちゃんからああ言うように言われたから言っただけなんだ。でも、もしあそこで撤退しないって言うような、多分違う言葉になったと思うけど絶対に諫めたと思うの。田豊さんや張コウさんが一生懸命麗羽ちゃんのことを考えて居たのは分かっていたし、あの人達は自分が麗羽ちゃんの下で出世したいって思って動いている訳じゃ無かったから。

……自分で考えて、ああ言ったんだったら良かったんだけど、ね」

そう言って桃香さんは笑った。

「……桃香さん、これからも私と友達で居てくれますか？」

「当たり前じゃない。私は絶対に麗羽ちゃんを見捨てたりしないよ」

「……有り難う、桃香さん」

「も～、湿っぽいのはこれで終わり！いつも通り、笑い飛ばすと良いと思うよ、麗羽ちゃん。ちゃんと分かった上で、ね」

「……お～ほっほっほ」

「小さいんじゃないかな～？」

「お～ほっほっほ！お～ほっほっほ！」

「そうそう。その調子その調子」

笑い出した私に猪々子さんも審配さんも逢紀さんも驚いていましたが、直ぐに柔らかい表情になってこちらを見ていました。

……私は彼らに支えられている。それを今まで全く考えて来ませんでしたが、それでもこうして私について来て、私を支え続けてくれようとしています。

『名門袁家の袁紹』ではない私に何が出来るかは分かりませんが。

せめて、彼らを裏切るような真似をしないようにしようと思うのです。私は彼らに支えられてこその私であることを忘れないようにしようと思うのです。

『袁本初』として。

～田豊　Ｓｉｄｅ～

軍を再編して司隷州へ撤退して行く曹操軍を追撃しているが、殿を務めている夏侯淵に手を焼いている。この苦境にあって大崩れすることなく後退していく。よくこの軍勢に勝ったものだと思う。

「孔明殿。此度はどのように致しましょうか」
「次に彼らが時間を稼ぐべく攻勢に出てきた際、退路を断つべく兵を動かします」
「包囲出来ますかな」
「包囲する必要はありません。多くの兵を逃がす為に敵将は長く戦場に留まることを決意するでしょう。それこそが狙いです」
「成る程。それによってあわよくば夏侯淵を討ち、曹操の力を更に

減らしておこう、という訳ですか」
「そうです。右翼を張コウさん、左翼を田豊さん。本隊を私が率いて殲滅します」
「……その後は如何なさいます」
「河南郡に入るところまでは曹操を追います。河南郡と陳留郡の州境に至ったら一旦進軍を止めるつもりです」

恐らくは、平家を警戒してのことだろう。

「……平家、ですか」
「そうです。もし平教経が宛へ兵を返すようであればそれに備える必要があります」
「止められますかな、彼を」
「恐らくは」
「何故そう言えるのです？曹操に勝ったとは言え、袁家も無傷ではありません。それどころか今５０，０００程度の兵を率いて来られたら、それに対抗する為の兵を十分に用意出来ない我らは負けると思うのですが」
「ええ。そうかも知れません。来たりなば、ですが」
「孔明殿。では孔明殿は平家は出兵して来ない、と考えておられるので？」
「はい」
「そこが今ひとつ理解出来ません。攻め掛かれば勝てると漠然であろうとも分かっていて猶攻め掛からぬ理由があるでしょうか」
「……平教経という人は兵法に明るい人です。彼は急速に自勢力を伸張させましたが、新しく勢力に組み入れた領地を把握出来ていないことを自覚しているはずです。先ず己を知ろうとすることは間違いありません。その上で、曹操が負け、袁家が勝ったことによってそれぞれの家や領地にどういう変化があったのかを知ることに努めるでしょう。

己が置かれている状況を把握せずに兵を起こしても碌な事がありません。必ず彼は一度立ち止まって領地の慰撫と情報収集を行うはずです。漠然とした情報や己の勘を頼りに攻め寄せるような愚かな真似はしないでしょう。そういう人間であればこそ、彼は手強い相手なのです」

「情報収集の結果、こちらに対抗するだけの兵力がないことが判明した場合、攻め寄せてくると思いますが」

「そうでしょうか。国元で出来る限りの兵と糧食を集めて貰っているはずですが、そうするように伝えなかったのですか？」

「いえ。伝えました」

「それであれば大丈夫でしょう。袁家の余力というものを今ここで全て吐き出してでも、平教経に付け入る隙を与えずに曹操を滅ぼしておく必要があります。その為に兵を集めて貰うのです。袁家が兵をかき集めている、という情報を得た平教経が、直ぐに攻め入ってくることはないでしょう。今までの彼を見る限り、彼は連戦を嫌うようです。それに、益州と荊州を平定するに足る糧食を用意していたのでしょうが、そこから更に袁家を相手に戦をすることを想定した量を集めては居ないはずです。平家の存亡を賭けた戦でもないのに無理をするとは思えません」

「……立ち止まると考えておられるのであれば、このまま追撃していても良いのでは？」

そう言った張コウ殿に、静かに頭を振りながら答える。

「こちらに備えがない、となれば瀬踏みをしてくるに違いありません。備えていればこそ、立ち止まって状況を把握しようと考えるはずなのです」

今回の戦を描ききった孔明殿がそういうのであれば、それで間違いないのだろう。手強い相手、というのもその言葉通りであるに違い

ない。どの程度手強いのかが今ひとつ実感出来ないが。

「手強い、とのことでしたが、曹操と比べてどちらが手強いでしょうか」

「君主の才で考えれば、両者は拮抗しているでしょう。が、その臣下の質と量を考えれば、平教経の方が遙かに手強い相手であるのは間違いありません。彼らに対して対応を誤れば、僅かな綻びさえも滅亡に繋がりかねません」

「それ程に危険ですか、平教経は」

「ええ。一応刺客を放ってありますが、今回失敗したら後は戦で決着を付けるしかありません」

「既に手を打っておられたのですか」

「当然です。将来萌芽するであろう危険に対して、事前に手を打てるのであれば打っておくべきです。しかもこの場合、平教経が袁家にとって障壁となって立ちはだかることは目に見えているのですから。その障壁を事前に取り除こうと考えるのはごく自然なことです」

「成る程」

「……そろそろ敵が攻勢を掛けてくるでしょう。先程話した通り、包囲するように見せかけてこれを殲滅します」

これが成功すれば曹操は暫く身動きが取れなくなるだろう。そして恐らく成功するだろう。

あれだけの練度の兵を失えば、再び同等の力を得るにはかなり時間を有するはずだ。その間に袁家を立て直す。平家がどう動くかが分からないが、孔明殿が居る限りそこまで酷い状況にはならないだろう。恐らく、その事も見通しているに違いないのだから。

～教経　Ｓｉｄｅ～

襄陽から昼夜兼行して宛に入った。宛で防備に当たっていた碧達に状況を確認すべく招集を掛け、遠征に参加していた将を交えて話をしている。

「じゃあ麗羽自身は負けたのか？」

「戦場を官渡だけに限れば曹操さんが勝利している訳ですし、そう考えて良いと思うのです。現状から考えて、勝ったのは諸葛亮なのですよ。もし彼女が居なければ、今頃は曹操さんが河北を併呑していたに違いないのです」

「その勝利した状態から、一体どうやって負けたンだね？風から見て勝利したように見えたンだろう？お前さんがそう断じた状況から負けることは難しいと思うンだが」

「今情報を集めているのですが、詳細がよく分からないのです。兎に角突然陳留を袁紹軍が占拠したのです。それを取り返すべく行動していたのは間違いないと思いますが」

「碧。どう思う？」

「……まあ、油断していたというよりは、純粋に数に負けたんだと

思うよ」

「数ならほぼ互角の状況まで持ち込んでいたようだが？」

「官渡ではね。全体で見れば、戦に投入した兵は袁紹の方が遙かに多かったんだろうさ。それに本拠である陳留の留守を預けることが出来る将が居なかったのが大きいだろうね」

「……将、ねぇ」

『将』について言及されて初めて、稟と風、霞が俺に仕えているという事実に思い当たった。郭嘉、程？、張遼。本来であれば、三人とも華琳に仕えていたはずの人間だ。それぞれが対袁紹戦において重要な役割を担っていたはずだったのだ。優秀な三人を欠いたことが、この結果をもたらしたのかも知れない。

「主。主はどうするおつもりなのです？」

「どうする、とはどういう意味だ？星」

「どういう意味も何もそのままです。エン州と司隷州の州境に展開している袁紹軍を駆逐すべく兵を動かすのですかな？」

「袁紹軍の数は？」

「斥候に拠れば、約３０，０００だそうですが」

「ふむ……稟。稟はどう思う？」

「……曹操殿を打ち破る程の才覚を持つ人間が、私達より遙かに劣る兵数であるにも関わらず迎え撃つべく用意をしている。こう言うと何か企んでいるような気もしますが、あからさますぎるので何の策もなく陣を構えているだけ、という可能性もあります」

「将が偵察に赴くしかない、か」

「それが一番確実だと思います。その上で対応を考えるのが上策かと。思わぬ所で足下を掬われる可能性がありますから」

流石にこの状況で俺が行く訳には行かないだろう。何が起こるか分からない。万全に備えておく為には、宛で報告を待っていなければ

ならないだろう。

「星、お前さんから見て……」
「お任せあれ」

俺の言葉を途中で切って笑っている。
星から見て、誰を偵察に派遣するのが良いと思うか？と聞くつもりだったが、どうやら星は最初から自分自身で偵察することを考えて居たようだ。

「……分かった。星に任せるさ」
「はい、主」
「星だけで大丈夫か？」
「そうですな……出来れば稟か冥琳に同行して貰いたいですが」
「ならば私が同行しよう」
「……良いのか？冥琳」
「ああ、構わない。私自身、この目で確かめたいからな」
「そうか。宜しく頼む」
「では主。我々はこれで」
「あぁ。二人とも気を付けて、な」
「分かっておりますとも」

星達が帰ってくるまでに、軍を再編しておいた方が良いだろう。どうなるか分からないからねぇ。

「あ、あの！」

一先ず解散を命じようと思っていたところに、亞莎が発言を求めた。
……珍しい事があるモンだ。亞莎は自分から積極的に発言したことは今まで無かったが。

「どうしたンだ、亞莎」
「あ、あの、教経様。星様達とは別に、袁紹が今何をしているのかを把握する必要があるのではないでしょうか」
「袁紹が何をしているか？」
「正確には、袁家が何をしているのか、になるのですが。一旦矛を収めて内政に専念しようとしているのか、それとも引き続いて曹操、若しくは教経様と戦う為に準備をしているのか。それを確認しては如何でしょうか」
「ふむ……確かに必要な情報だろう。稟、風。調べておいてくれ」
「はい。畏まりました」
「分かったのですよ」
「二人とは別に、亞莎も調べてくれ」
「わ、私がですか？」
「あぁ。亞莎の提案だし、孫家も独自に諜報網を持っているンだろう？」
「ええ。冥琳が纏めているものがね。袁紹の所にも潜り込ませているわ」
「ンじゃ、調べておいてくれ。出来るだけ多角的に、より多くの情報を得た方が良いだろう。洗う時は徹底的に洗わないとな。たった一つの情報を逃した為に負けることなどざらにあるだろうからねぇ」
「で、でも私にそのような役目が務まるのでしょうか」
袖で顔を隠すようにして、自信なさげにそう言った。
少し自分のことを過小評価しすぎなンじゃないか？霞から聞いた限りじゃ、頭の回転が速くて着眼点も秀逸らしい。俺が言った通り、立派に軍師が務まると思う。そう言っていたンだが、本人はそうは思っていないらしい。
「……亞莎。いきなり完璧にやってみせろ、とは言わないさ。亞莎

は亞莎として精一杯務めてくれればそれで良い。俺が亞莎なら出来ると思ったからこそ亞莎に命じるンだ。亞莎は俺が言うことが信じられないかね？」

「い、いいえ。教経様のこと、信じています！」

力強くそう宣言されると結構恥ずかしいンだねぇ。

「亞莎、自分を過信しないことは良いことだが、自分を信じないのは良くないことだ。どうしても自分が信じられないなら、亞莎を信じる俺を信じろ」

「教経様を……」

「そうだ。俺を信じてやってみろ。きっとやれるだろうから」

「……わ、分かりました。やってみます」

「ん」

亞莎に頷いてみせる。亞莎の顔は相変わらず下半分が袖で隠されているが、目が潤んでいるように見える。

「教経、公衆の面前で亞莎を口説くのは止めて貰いたいんだけど？」

「……今のをどう見たら口説いているように見えるんだよ、雪蓮」

「流石は一流の女誑しさね。寝ても覚めても口説いて廻るんだから」

「失礼なことを言うんじゃねぇよ。俺がいつ口説いたってンだ」

「……自覚なしに口説くんだな、兄貴って。姉貴のこと、早まったかなぁ」

「ま、それが大将だから仕方ない。刺されて死ねば良いのに不思議と刺されないんだよ、これが。一流ってのはそういうモンらしい」

……テメェらは後で教育してやる。

「兎に角、そういうことにする。解散だ！」

ッたく。まぁ兎に角、結果待ちだな。

宛に臨時に確保して貰った執務室で、軍の再編について風から報告を受けている時、申し継ぎの者がやって来て風に何やら耳打ちをした。

「御苦労様、なのです」
「はっ」
「何かあったのか？風」
「お兄さん、星ちゃんが帰って来たのですよ」
「早いな。何かあった、か」
「はい。お兄さん、ぶらっくじゃっく先生と琵琶丸を呼び出して欲しいのです」
「……おい、風ッ！」
「違うのですよ、お兄さん。星ちゃんも冥琳ちゃんも無事なのです」
「……そうか」

一瞬、星か冥琳が怪我をしたのかと思った。それも、重傷と言える程の。そうでなければ先生と凱を呼び出せ、なんて言わないだろうからねぇ。

「で、どうしたンだ？」
「詳しい話は星ちゃんから聞くと良いのですよ、お兄さん」

「ふむ……分かった。で、星は何処に？」
「診療所にいるようです」
「ンじゃ行ってくるわ」
「はい。行ってらっしゃい、なのです。お兄さん、日が落ちるまでに帰ってくるのですよ？」
「……何処の幼児だよ、俺ぁ」
「……今日は風の番なのです」
「……ちゃんと分かってるよ、風。日が落ちるまでに帰るから」
「それなら良いのですよ」

ちょっと頬を朱に染めて、そっぽを向いて歩いていった。
やれやれ。でもまぁ、可愛いから良しとしよう、うん。

「あ、主」
「星、お疲れさん。で、何だってンだ？言われた通り先生達を連れてきたが」
「先ず治療を。その間に話しますから」
「ふむ……先生、頼むぜ」
「む……これは酷い刀傷だな。琵琶丸、どう見える」
「もう暫くは持ちそうだが、一度俺が気を送り込んで活性化させてから黒男が治療した方が良いだろう。その後で再度俺が鍼を打つ」

二人とも患者を前にして即座に治療を始めた。

「で、星。一体何処の誰を連れて帰ってきたンだ？戦に巻き込まれて死にそうになった民でも居たのか？」
「……主。私が見つけたのは夏侯淵です」
「……何処にいた？」
「ここから北へ２０里ほど行った、小川の側にある茂みの中で倒れておりました」
「良く見つけたな」
「冥琳が気付いたのです。野犬が集まっており、様子を窺っておりましたので何かあるのだろう、と兵で包囲して確認すると、彼女が倒れていた訳でして」
「……夏侯淵から話が聞けるかも知れないな」
「そう思ったので一先ず引き返してきたのです。傷が深かった為、引き連れて共に偵察などしている猶予がない様でしたので、応急処置を施して戻ってきたのです」
「そんなに酷かったのか」
「酷いという言葉では少し簡潔に過ぎる、そう思える程の負傷ですな」

夏侯淵が瀕死の重傷を負う程の相手が居た、ということか。それとも、袁紹軍の兵がそれ程多かったということだろうか。何にしても、宛近辺で見つかったことから考えて、夏侯淵が殿を務めたのかも知れない。司隷州ではなく、荊州側へ敵を誘導すればそれだけ華琳の安全が確保出来るだろうからな。

「我が金鍼に全ての力、賦して相成るこの一撃！俺たちの全ての勇気、この一撃に全てを賭ける！もっと輝けぇぇっ！賦相成・五斗米道ォォォォォッ！」

凱が暑苦しい台詞を叫びながら、鍼を打ち込む。

「げ・ん・き・に・なれぇぇぇぇぇぇぇっ！」

室内が光に溢れ、やがてその光が収束していった。

……これの原理ってどうなってるンだろうな？深く突っ込んだら負けなのは分かるンだが、突っ込まずには居られない。

「……これで大丈夫だろう。2、3日もすれば意識を取り戻すはずだ」

「琵琶丸、やったな」

「あぁ。お前の治療が良いからだろう。俺が一人で鍼を打ち込んだ時よりも遙かに患者の生命力が高まるのを感じた」

「お前さんも私も、その道の医者としては超一流だ。その二人が揃っているのだから、この結果がもたらされるのは必然だろうさ」

「……先生、凱。ご苦労さん」

「あぁ。暫く休ませてやった方が良いだろう」

「分かってるさ。医者の言うことは素直に聞くモンだからな」

「目覚めた時に滋養があるものを取らせてやってくれ」

「そいつも了解だ。蜂蜜なりを呉れて遣るさ」

「うむ。では私はこれで失礼するぞ。負傷した兵の治療がまだ終わっていないからな」

「俺も同じく、だ」

「あぁ。忙しいところを済まなかった」

夏侯淵が意識を取り戻したら話を聞くことにして、診療所を後にした。

彼女の話と、稟達が調べた結果を合わせれば大体の事は把握出来るだろう。

蝶の如く～128～（前書き）

あ、ありのままに（ｒｙ
『まだ1時だと思って色々考えて居たら7時を廻っていた』
な、何を（ｒｙ

蝶の如く～１２８～

～教経　Ｓｉｄｅ～

夏侯淵が目を醒ますのを待っている間、宛で軍を待機させている。
袁紹軍の状態次第ではこちらから攻め掛かってやろうと思い、兎に角糧食を集めさせている。普段からそれ程税として納めさせているわけではないから、各集落には糧食がそこそこに蓄えられているようだ。それを購入し、外征出来るだけの糧食を集めようとしている。

星からその進捗状況を聞いていると、ダンクーガが部屋の外から声を掛けてきた。

「大将」
「なンだ？」
「長安から賈駆の姐さんが匈奴の族長を連れて来たってよ」
「匈奴？」
「ああ。目通りしたいって言ってるらしい」
「……ふむ。謁見するから広間に通しておいてくれ」
「分かった」

匈奴、ねぇ。俺に何の話だろうか。まぁ詠がいるし、詠から説明があるだろう。

「主。もう行かれるのですか？」
「仕方がないだろ？お仕事の時間だ」
「もう少しこうして居てくれても良いと思うのですが」
「そうしていたいが、それだといつまで経っても行けそうにないからな」

「折角こうして二人で居るというのに、主はつれないですな」

俺は星から進捗状況を聞いていた。寝台の上で。……要するに、そういうことだ。

星と久し振りにこうして居るから名残惜しいが、国事に優先させる訳にはいかないだろう。

「星、分かってるだろ？」

「……それでも言いたいのですよ、主」

「……星、明日は星の番だろ？それまで待っててくれ」

「……仕方ありませぬ。が、主？主がこの星のことをどう想っているのか、それを聞かせて頂きたいものです。言って頂ければ、私も我慢出来るのですが」

いつも通りの星を装っているが、ね。

不安なんだろう。そりゃそうだ。自分の男が帰ってきたら、新しく女を連れてました、という訳だし。碧にも風にも散々言われたが、二人とも自分に対して俺の興味が失せていたりしないか、と不安に思っていた。星だって当然不安に思っているだろう。

星をしっかり抱きしめて、耳元で愛を囁く。

「……星。俺は気が多い男だが、だからといって移り気な訳じゃ無い。俺は星のことを変わらず愛しているよ」

「……主……」

「こういう時は、教経様って呼ぶんじゃなかったか？」

「……覚えておられたのですか」

「当たり前だ。大切な人がそう言っていたんだから。忘れるわけがないじゃないか」

「……教経様、私も、愛しておりますよ」

星と口付けをして、ゆっくりと体を離す。

「……じゃぁ、行ってくる」

「……はい。行ってらっしゃいませ、主」

星が優しく微笑む。

……綺麗じゃないか、星。見とれちまったのがちょっと悔しいから口にはしないがね。

「良く来てくれたな。俺が平教経だ」

広間に行くと、軍師達が既に集まっていた。

詠と見知らぬオッサンが俺の座の前で跪拝している。

「はっ。この度は突然訪問したにも関わらずお目通りをお許し頂き有り難う御座います」

「そう堅苦しい挨拶はしなくていい。最低限の礼を守ってくれればね」

「はあ」

「で、詠。どうしたンだ？」

「匈奴の長がアンタに逢って話がしたいって言ったから連れてきたのよ。悪い話じゃないと思うけど、月やボクじゃ責任のある回答が出来そうになかったから連れてきたってわけ」

責任のある回答が出来ない、ねぇ。
どんな話を持ちかけてきたんだ？

「どんな話を持ってきたんだね？」
「……我ら匈奴の戦士を平家軍に参加させても構わない、という話です」
「へぇ。……それの見返りは何だね？」
「董卓殿が言う通り、流石に平家の頭領は話が早くて助かる。
現在平家と我々匈奴とは、我らが必要とする秣を提供して貰う替わりに馬などの家畜を融通する、良い関係を築けていると思う。が、来年以降いつも通りに家畜を融通することが少々困難になったのです。大陸の東側で居心地が悪くなりつつあり、一族が涼州近辺に集まりつつある。少なくとも平家の人間は我らを人として対等に扱ってくれる。その話を知った者達が続々とこちら側へ移ってきている。つまり、人口が増えた事によって融通出来る家畜が少なくなってしまったのです。
といって、交換出来る家畜が少なくなったから邑で略奪しようとは思わない。折角築けたこの関係を自ら放棄してまで得ようとは思わん。幸いにして貴方は我々のことを人として見てくれている。であれば話が通じるだろうと思ったのです」
「……戦働きをする替わりに、今まで通りの秣を寄越せ、ということか」
「有り体に言えばそうですな」

ふむ。ただで寄越せというのであれば困るが、対価を支払うというのであれば問題無いだろう。
軍師は皆賛成らしい。目が合うと皆頷いていた。

「対価を支払う、というのであればこちらに異存はない。が、爺だけじゃ困るぜ？」

「無論、戦働きが出来る者を参加させます」
「……それなら構わない。参加してきた奴らには、他の兵と同額とは言わないまでも給金を支給してやる」
「ほう。宜しいので？」
「その代わり、常駐して貰うぜ？軍属として5年働いて貰う。一年に3，０００人程度送って貰おう。５年経過したら、匈奴に帰る。５年で１５，０００の匈奴軍が出来る、という訳だ。それ以上は増やさない。そちらにとって負担になるだろうからな。その条件で、秣を必要とするだけ供給しよう」
「こちらにも異存はありませぬ。いや、話が出来て良かった」
「それはこちらも、だねぇ」

馬と共に育ってきた匈奴の戦士が加わればかなりの戦力になる。敢えて平家の郎党の中に混ぜ込まずに匈奴の戦士だけを纏めて運用することで、彼らの長所を生かす事が出来るだろう。類い希なる機動性と剽悍さを兼ね備えた飛び道具として、ね。

「話はそれだけかね？」
「ええ。それだけです」
「そうかね。宛でも長安でも見物していくと良い。お前さんを見て物珍しそうにしたり吃驚したりする奴が居るかも知れないが、少なくとも謂われのない差別をする奴は居ないはずだ。というより、居ないかどうかを確かめる為にも見物していってくれ。もし居るようなら俺に知らせて欲しい」
「ではそうさせて頂きますかな」
「あぁ。宛で良ければ宿舎はこちらで用意しよう」
「宜しくお願い致します」
「良し。冥琳、用意してやってくれないか」
「分かった。穏、案内を」
「は～い」

匈奴の長を穏が案内して行く。

「思ったより良い話だったな」
「まあ月が慰撫しているんだから当然よね」
「そうかね。……久し振りだな、詠」

階を降りて詠に近寄って、片手に抱く。

「こ、この馬鹿！人前で何してんのよ！」
「抱いてる」
「そういう事じゃないわよ！」
「じゃ、どういうことだよ」
「どういう事って……恥ずかしいじゃない！」
「……その割には離れようとしないよな、詠」
「……何よ。離れろって言うわけ？」
「いンや。抱きついてろ、詠」
「ふ、ふんっ。仕方がないから抱きついてやるわよ」

相変わらずのツンデレラだ。可愛いねぇ。久し振りにボクっ娘に逢ってる気がするな。

「……詠、後で教経殿と一緒に居られるのですからその辺りで」
「わ、分かってるわよ」

稟がちょっと嫉妬してるみたいだ。俺も自重しないとな。

「じゃな、詠。また後で、な」
「……う、うん。また後で」
「頬が朱いぜ？」

「……うっさい！さっさと行きなさい！」
「へいへい」
やれやれだぜ。怖いから夜までダンクーガでもいじって遊ぶとするか。

～？忠　Ｓｉｄｅ～

荊州から宛に入ってから数日経った。相変わらず、高順は兄貴の身辺警護を抜かりなくやっている。勿論俺もやっているけど、身辺警護より身元調査に忙しかった。

高順を含めた親衛隊全員の身辺調査を徹底的にやった。これをすることで足元を固め、親衛隊だけは何があっても大丈夫だという確証を得ることが先だと思ったからだ。高順の奴は信じて居るが、俺は新参者だ。俺だからこそ出来ることだろうし、やっていたと知れて

もそんなものだろうで終わることが出来る。姉貴から郭嘉の姐さんや程?の姐さんに話をして貰い、諜報網を使って調べて貰った。その中で、幾人か身元について怪しい人間がいた。

先ず高順。まぁ、コイツは除外だろう。平家の人間全てが、アレは兄貴の股肱の臣であることを認めている。……本人は股肱の臣という言葉の意味を知らなかったが。アレが隊長で大丈夫か?親衛隊の人間が色々といっちゃってるのはコイツのせいだと思うんだが。それから俺。殺しかねないって意味じゃ一番怪しい人間だ。何せ俺は姉貴優先だから。もし姉貴を捨てるような真似をしたら、当然報いを受けて貰おうとするだろう。まぁ、現状だと除外だな、除外。最近、姉貴が俺にのろけ話を聞かせてくれるようになった。曰く、『兄貴は姉貴のことをなんでも分かってくれる』。曰く、『兄貴は姉貴の全てを愛しいと言ったくれた』。上手くいっているか?と聞いた時にそう切り返してくれた。……兄貴、今から殺しに行ってもいいか?……おお、要注意人物だな。今後も注目が必要だ。次に魏越。太原から付き従っている人間だが、出自がよく分からない。しかし、高順に拠れば太原で兄貴や高順と共に戦った人間であり、その為人も人の良いオッサンの枠を出ない人物らしい。酒を飲んだ時に前後不覚になるが、その時に必ず太原での兄貴の戦いぶりについて熱く語り、『酒を飲ませると一番質が悪いオッサン』の地位を不動のものにしている。その心酔ぶりから考えて、ありえない。最期に、牽招。コイツが一番臭い。冀州安平郡の出身で、袁家の世話になっていたらしい。兄貴が并州から逐われた時に共に移動することを志願して軍へ。その後、働きを認められて親衛隊に所属した。警護をするときに態々俺の下に付けて様子を窺っていたが、恐らくコイツで間違い無いと思う。

根拠はある。

俺たち親衛隊は、兄貴に害を為さんとする人間を捜すために常に周

囲に目を配っている。だが奴は兄貴の様子を窺っていたことが多々ある。俺は親衛隊員に目を配っていたから気が付いたんだが。高順はコイツのことを高く買っているらしい。だからこそ、危険だと思うんだがねえ。

その事について話をする為に、高順と牽招を呼び出した。

「何の話だ、？忠」
「高順か。牽招はどうした」
「分からん。一応お前が呼んでるって伝えといたんだが」
「そうか」

まぁ、大丈夫だろう。今兄貴は趙雲の姐さんと一緒に居るはずだ。余程のことがない限り、牽招に後れを取ることはない。趙雲の姐さんは俺を含めた高順以外の親衛隊員について、全幅の信頼を置いていないみたいだからな。信頼を置いていないというよりは、万が一のことを考えて居る、ということなんだろうけどさ。

「で、何だってんだ。大将の警護から外れてでも来い、というのは穏やかじゃないだろうが」
「……多分だが、刺客が分かった」
「何だと！？誰だそいつは！」
「高順、落ち着いて聞けよ？……牽招だ」
「何を馬鹿なことを言っていやがる！アイツが刺客のはずがないだろうが！親衛隊員になったときに誰よりも喜んでいたんだぞ！？親衛隊員として大将を護ることが出来ることに誇りを持っていると、そう言っていたんだぞ！？」
「さてね。それを問い糾すためにお前と一緒に呼んだんだよ、俺はね」
「根拠はあるんだろうな！？」

「当然。聞きたいか？」
「聞かせろ！」

高順に、根拠を説明してやる。
最初出自について話をした時に、そんなことは関係ないだろうが！と息巻いていたが、警護の時の態度について話をすると、思うところがあったのか黙り込んでしまった。兄貴の身辺で長く警護をしてきた高順にしてみれば、やはり牽招の態度は怪しく思えたのだろう。

「……その事を誰かに話したか？」
「……いや。まだ誰にも話をしてない」
「……そうか。それが賢明だろうな。アイツは什長やってるんだ。動揺するに決まってる」
「で、どうするんだ？まだ来ないみたいだが」
「俺たちで直接訊くしかないだろう。牽招の部屋に行くぞ」

高順について、牽招の部屋に向かう。大人しく自白してくれれば良いんだが。

「牽招、中にいるんだろう？入っても良いか？」

部屋の前まで来て高順が中にそう問いかけるが、返事がない。中から物音がしない。

「……おいおい、まさかとは思うが、見破られたと察知して兄貴を殺しに行ったんじゃないだろうな」
「おい！牽招！いるんだろう！？扉を開けろ！」

高順が扉を叩くが中からは相変わらず返事がない。

「糞！ぶち破って中に入るぞ！」
「お、おい高順」
「オラァ！」

高順が扉をぶっ壊して中に飛び込んだ。

「なっ！」
「どうしたんだよ、高じゅ……」

……部屋の中で、牽招が死んでいた。自分の腹を支給されている槍で突き刺して。

兄貴を呼び出して、事の経緯を説明した。
刺客が送られていると考えて警護していたこと。
その中で、牽招が怪しいと思って調べようとしていたこと。
そして、その牽招が遺書を残して死んだ事。

俺が兄貴に説明する間、高順はずっと俯いていた。

「……で、牽招は何で死んだンだ」
「……最初は、顔良に言われて兄貴の下に付いたらしい。平家の内情を掴む為に潜り込んでおいて欲しい。そう言われていたみたいだ」
「……それで？」
「益州討伐が決まる前、兄貴を殺すようにと書状が来たらしい。その時点で、牽招は兄貴と高順に心酔していたようだ。けど、牽招は

袁家に恩ある身であり、この指示を受けないという結論を出すことが出来なかったんだと。
でも、どうしても兄貴を殺す気になれなかった。いや、正確に言えば、兄貴の為にと自分を信頼して兄貴の側に置いてくれている高順を裏切ることが出来なかった。役目も果たせず、兄貴と高順を裏切るような真似をしようとした自分に残された道は、自害しかない。
そう書いてあるよ」
「……そうか。他に何か書いてあったか」
「……今まで良くしてくれて有り難う御座いました、と高順に宛てた詫びがこれでもかと書いてあったよ」
「……馬鹿野郎が」
拳を握りしめて、高順が声を絞り出すようにそう言った。
「……そうか」
「……大将、俺を降格してくれ。後釜には？忠が座ればいい」
「……何故そうして欲しいんだね？」
「俺は見抜けなかったよ。？忠は見抜いてた」
「……高順。それは違うだろう。俺は後から入ってきた新参者だ。だからこそ、先ず親衛隊員全員を疑って掛かったんだ。それにな、俺は一番上に立つってのは無理だ。姉貴の補佐をずっとやってた関係上、俺は補佐に向いて居るんだよ。そこに特化しているんだから。大体、自分の配下を完全に信頼せずに身辺調査を徹底的にやらかす人間が頂点に立てるはずがないだろう。上に立つには、素質が必要なんだよ。丁度兄貴が信頼した人間に裏切られて死んでも悔いはないと言っているように、親衛隊員は全員家族だと言い切れるお前のような人間じゃないと、誰も命を捨てようとは思わないだろう。
逆に言えば、お前がそうだからこそ牽招は自害したんだ。俺が親衛隊長だったら、躊躇いなく兄貴を殺しに行ってたに違いないんだから」

「……」

「……忠が正しいだろう。ダンクーガ、お前は降格しない。理由は今忠が言った通りだ。それから、神葬祭の用意をしろ」

「……何で？」

「牽招は、俺の命を狙って親衛隊にまで入り込んでいた刺客を見事に討ち果たしたンだ。その刺客が自分の中にいたから、自分を突き刺して殺してやったンだよ。立派に親衛隊員として死んでいったンだ。刺客を道ずれにして。何処に出しても恥ずかしくない、立派な親衛隊員としてな。

それを平家の頭領たるこの俺が送ってやらないでどうする。平家の郎党が死んだら、神葬祭を執り行う。これは太原からずっと俺がやってきたことだろうが。コイツには俺に送られる資格がある。お前はそう思わないのか」

「……そうか、そうだよな。牽招は刺客を討ち取ったんだよな」

「そうだ。……俺はコイツがどういう奴だったのか知らん。お前が一番知っているだろう。奉呈する弔辞を用意しておけ」

「……分かったよ、大将」

……流石は兄貴だ。俺の兄貴はこうでなきゃならない。まあ、こういう人だからこそ姉貴も惚れてるんだろうけどね。

日没後、兄貴が神葬祭を執り行った。親衛隊の皆には、事情を全て説明してある。親衛隊員であることに誇りを持っていたこと。だが受けた恩義との板挟みにあった結果、自害せざるを得なかったこと。遺書で高順に何度も詫びていたこと。誰一人、牽招を罵る奴は居なかった。奴を知っている人間は、その心情を思って涙を流していた。

兄貴が高順の書いた弔辞を奉呈した。高順が、恐らく一番牽招に言いたかったこと。それを兄貴が詠み上げた時、啜り泣く声がした。

それは、こういう言葉だった。

『俺の大切な家族』

夜の帳が下りる中に、そう詠み上げる兄貴の声が響き渡っていた。

～詠　Ｓｉｄｅ～

教経の命を狙う刺客を殺すために、親衛隊員が一人死んだ。そいつの為に神葬祭を執り行った教経は、疲れた顔をしてボクの部屋に入ってきた。事情は？忠から聞いた。断空我もかなり衝撃を受けていたみたいね。

教経は基本的に甘い人間だ。特に、身内には。事情を聞いた限りでは、教経にも袁家にも義理立てをする為に死なざるを得なかったとしか思えない。義理堅い人間だったのだろう。

教経はそういう人間を好む。そしてそういう人間が謂わば自分の為

に死んだことを悼んでいるに違いない。

「教経、割り切れないの？」

「……いや。どちらかというと、やりきれないな」

「やりきれない？」

「あぁ。聞いて廻った限りじゃ、死ぬしかなかったンだろうけどな。本人の性格的に考えて。それは分かる。だが何となくこう、もやもやするンだよ。これが悩んだ末に俺の前に刺客として立ちはだかったンだったらこんな気持ちにはならないだろう。悼みはするが、いつも通り割り切れただろうさ。何て言えばいいか分からないけど、兎に角やりきれない」

教経は寝台に腰掛けて目を瞑っている。

「嫌になったわけ？」

「……この乱世が嫌になったのは随分昔からそうだ。だからこそ終わらせようとしているンだよ」

「平家の主として人を死なせることに飽いた？」

「……人を死なせることにはとうに飽いているさ。だがそれでも俺は歩みを止めるつもりはない。それをすれば、今まで死んでいった奴らが無駄死にしたことになるンだからな」

「……それなら良いんだけど」

後からそっと抱きしめたボクの腕を教経が軽く掴む。そのまま二人で密着している。

「ねぇ、教経」

「なンだよ、詠」

さっきから不敵で不遜な物言いをしているけど、ボクの前では普通

でいて欲しい。

「……ボクの前でぐらい強がるのは止めなさいよ。今此処にはボク達二人しか居ないんだから」

教経の頭を抱えながら、そう言う。

「……分かったよ」

「教経。アンタのおかげでボクも月も生きている。アンタはそうやって沢山の人を助けてきたのよ。確かにアンタは万能かも知れないけど、全能じゃない。アンタに出来ることなんて、高が知れているのよ。分かってるでしょ？」

「それは分かるさ。この件に関しては、俺は何もしてやることは出来なかっただろう。分かった上で、何ともやりきれないっていうだけなんだよ。別にもう平家の主として戦をしたくないだの、昔みたいに強くなきゃならないから自分の感情を殺すんだだのと言ってる訳じゃ無い。無力感に苛まれている訳でも何でも無いんだ。自害しなきゃならないところまで追い込まれていた奴の事を思うと、哀れだと思うんだよ。それだけだ。だからどうこうしようって訳じゃないんだよ。哀れだ、と。ただそう思っているだけなんだよ」

仕方がないのかも知れない。割り切るべきだと分かっているけど、そして割り切ってはいるんだろうけど。教経の中に死んだ人を悼む思いがあるのは間違いない。ああいう死に方をした人間のことを悼めない人間よりは遙かにマシだと思う。それで立ち止まろうとしている訳じゃない。ただ、悼んでいるだけ。それの何処が悪いのか、と思う。

それにコイツはボクの前だからこんな風に話をして、自分をさらけ出してくれているんだと思う。

「……こっち向きなさい」

目を開けて顔をこちらに向けた教経に口付けする。

「……ン……んぅ……ちゅ……ちゅ……」

「……ん……詠」

「仕方がないから今日だけボクが甘えさせてあげるわよ。明日からきちんとしなきゃ駄目なんだからね？」

そう言うと、教経は軽く笑ってこちらに向き直った。

「ふっ……」

「な、何よ」

「いや、『明日からきちんとする』って言葉にちょっと聞き覚えがあってな？」

「う、うるさいわね！」

「……有り難うな、詠」

「ふんっ……しっかりしなさいよね」

「分かってるさ」

その日は汗を流した後、教経はボクの胸の中で眠りについた。

教経はこのままで良い。こういう奴だからボクはこいつが好きなんだと思うから。

「……ん……詠……」

……しょうがないんだから。

蝶の如く～129～（前書き）

久々の一日2話更新だぜ～！

……と思ったら日付が変わっていた件について。

蝶の如く～129～

～華琳　Ｓｉｄｅ～

無事に？水関まで撤退した私は、春蘭と桂花を洛陽に還していずれ来るであろう袁紹軍に対する備えを行わせている。？水関に留まって殿を務めた秋蘭を待っていた私の前に、凪達が兵を纏めて還ってきた。

……秋蘭の旗が見えない。

その事に嫌な予感を覚える。まさか……いえ、秋蘭に限ってそんなことはないでしょう。

広間にて凪達を待っていると、三人が入ってきた。その足取りは重い。疲労もあるのだろうが、それだけではないことを思わせるような、そんな足取りだった。

「凪、真桜、沙和。御苦労様」

「はっ」

「秋蘭はどうしたのかしら」

「……はっ」

「凪。秋蘭はどうしたの？」

「……秋蘭様は……我々を逃す為に直属の兵と共に敵中に残られて……」

「……それで？」

「……申し訳ありません。それ以上は分かりませんが、恐らくは……」

「凪。秋蘭が死ぬところを見たの？」

「……いえ。見ておりません」

「そう。それなら十分だわ。秋蘭は死んでなどいない。私はそう信じることにするわ」

秋蘭が私との約束を破るはずはない。秋蘭が死ぬところを誰も見ていないのであれば、そして秋蘭を討ち取ったと袁紹軍が喧伝していないのであれば、私はそう信じておけばいい。例え、もう二度と会えないのだとしても、秋蘭には秋蘭の事情があって私に会いに来ることが出来なくなっただけだと、そう思えばいいのだから。秋蘭は死んでいない。

「……華琳様」

「余計な気遣いは無用よ。三人とも、御苦労様。洛陽に戻って体を休めた後、兵を再編しなさい。麗羽達が攻めてくるでしょうからね。負けっ放しで終わるつもりはないのよ、私はね」

「……はっ」

どうすればいいのかしらね。独力では最早麗羽には敵わないでしょう。エン州を保持出来ていればまた違った展開を見せていたと思うけれど、それを失ってしまった今彼我の国力差は歴然。一矢報いることが出来るくらいで、勝利することなど出来そうにない。

……駄目ね。戦う前からそんな弱気では勝てる戦も勝てはしない。何か、策を考えなければならない。私が生き残る為に必要な手立て。それを考えなければならない。

国元で騒擾を起こさせれば。……警備の兵だけで押さえつけられてしまうかも知れないわね。それでも、やらないよりはマシでしょう。後は、異民族の助力を取り付ける事が出来ないかしら。こちらから金穀を遣わす代わりに軍兵を借り受けることが出来ないか。調整してみる価値はあるでしょう。勿論、現状の私に助力する利益が彼らにはないことは分かるけれど、やってみなければ分からない。最後まで足掻き続ければ、事態が好転する可能性が有るかも知れない。

丁度麗羽が私に勝ったように、私が麗羽に勝つ事も出来るはずよ。

そこまで考えて、また先の戦のことを思い出していた。
河北を手に入れるところまで、後一歩だった。そうなれば、教経と雌雄を決するべく対峙することになったのに。目を閉じれば、教経とあの日交わした会話が蘇ってくる。

『教経、南方を平らげてきなさい。私は北方を平らげるわ。そうしたら、決戦しましょう？天下を賭けて』
『その方が結果として民の被害が減る、か？……良いだろう。打ち破ってみせるさ』

教経との約定。
例え司隷州に侵攻してきた麗羽に勝ったとしても、私は河北を手に入れる事が出来そうにない。どう思い描いても、司隷州を保持することさえ難しい状況にある。１０度思い描いて１０度負ける。そういう状況にある。教経のことだから南方の平定は上手くいっていることでしょう。
……ご免なさいね、教経。私は、貴方との約定を守れそうにないわ。

他にも様々な事が頭に思い浮かんでは消えていく。
……考えが方々に飛んで、纏まらない。
こういう時に秋蘭が居てくれれば。それなら私も落ち着いて考えることが出来るのにね。

秋蘭さえ、居てくれれば。

～沮授　Ｓｉｄｅ～

孔明殿から指示を受けて、麹義殿と私で南皮に戻った。かき集めた兵と糧食を前線に届ける為だ。先ずは麹義殿が。収穫後に私がそれぞれ兵と糧食を以て遠征する。孔明殿はそう言っていた。

南皮に帰還した私を待っていたのは、大いなる驚きだった。

……麗羽様が、我らに対して謝辞を述べたのだ。

麹義殿も私も、自分の目の前で起こったことが信じられなかった。

今まで、このようなことはなかったのだから。

帰還の報告を終えた私の元に、審配と逢紀がやってきた。

「沮授、いや、沮授殿。無事のご帰還、お喜び申し上げる」

「審配殿、一体どうされたのです。そのような言葉遣いは無用に願います」

「そういう訳には行かぬ。我らは我らの事情を優先させた結果、国を滅ぼそうとしていたのだ。最後の最後に気がつけたから良かったものの、今日のこの困窮を招いた責は偏に我らにあるだろう。その我らが、それを防がんとして奔走した貴殿に対して不遜な口を利くなど許されるはずがない」

目が醒めた、ということか。どんな荒療治をしたのだ。

「そうは言っても今までと余りに違えば違和感しか残りますまい。これまで通りで構いませぬからそのようにして頂きたい。それで、この私に何か？」

「そう言われるのであれば、今まで通りの口調で失礼しましょう……んんっ……実は少し相談があるのだ」

「何ですかな？」

「……我らが麗羽様から言われて、劉虞に対して禅譲を迫って居ったのは知っていたか？」

「まあ、それなりには」

「やはりそうか。実はその事で相談があるのだ。我らは、禅譲について認めさせることが出来れば麗羽様の我らへの覚えが良くなる、そう思って事を進めて来た。動機がそうであったから、此処に至ってそれは拙いのではないか、と思うようになったのだ。麗羽様の為にならぬのではないか。そう思えてきた。それで卿の意見を聞きたくなったのだ」

「ふむ」

「どうだろうか。私としては確かに民達に対して一定の効果があるとは思うが、今諸侯に疎まれていきなり攻め込まれるのは拙いのではないかと思うのだが」

「……恐らくは大丈夫でしょう。孔明殿に言われて兵を糧食を集めて頂いているとは思いますが、それを先ず麹義殿が率いてエン州へ入ります。それによって平教経の行動を制約しようというのです」

「平教経はそれでも構わないだろうが、その他はどうなる」

「……最早天下は我々袁家と平家、そしてあるとすれば曹家。この3家によって争われるであろう事は疑いありませぬ。曹家は今すぐには動けますまい。要するに、諸侯と言っても現状で気に掛けねばならないのは平家ただ一つです。彼らが従うことはない以上、皇帝

になって疎まれたとしても結果は変わらない。そう思いますが」
「そうであろうか」
「禅譲であれば、ですぞ？」
「元よりそのつもりだ。そうでなければ正統性を主張出来ぬからな」
「それであれば問題無いのではないか、と私は思いますが」
「そうか。沮授殿にそう言って貰えるのであれば、大きく道を誤ることは無いのだろう」
「ところで、兵はいかほど集められたのです」
「ひとまずは無理のない形で、と思い、各県から警備兵を半分程度引き抜いた。その後には、新規に徴発した者達を充ててある。これで、３万を超える兵は確保出来た」
「成る程。では直ぐに麹義殿に率いて移動して貰いましょう」
「うむ。それが良いだろう。この場合は早ければ早い程良い」
「糧食や装備の点検については私に任せて貰おう。麹義殿と沮授殿は一先ず休まれよ。後は先に逃げ帰って安全な場所でのうのうとしておった我らにやらせれば良いのだ」

それにしても。
袁家の雰囲気というものが随分変わってきている。麗羽様といい、この二人といい。皆現状に危機感を覚えた結果こうなっているのだろうが、この状態が長く続くのであれば、袁家の天下も夢ではないかも知れない。

～教経　Ｓｉｄｅ～

朝目覚めると、そこには柔らかい小山が二つあったとさ。
ちょっとつまんだり美味しく頂いたりしてみたら、ハンマーでぶん殴られたンだねぇ。いいじゃねぇか。減るモンじゃないンだし。そうやってイチャイチャしていると、断空我が外から声を掛けて来る。

「大将、趙雲の姐さんが診療所に来てくれってよ」
「了解だ」
「……何？」
「多分夏侯淵が目を醒ましたんだろう」
「そう。ほら、早く行きなさいよ」
「あぁ。……詠」
「何よ」
「有り難うな」
「……ふんっ」

ツンデレめ。朝っぱらから萌えて来るじゃないか。
取り敢えず外に出て診療所に向かう。

「ダンクーガ、気持ちの整理は付いたのか」
「あぁ。付いた」

「で？」
「俺は大将を護る。ちょっと複雑だけど、兎に角俺は大将を護るんだ。それが一番アイツがしたかったことだと思うから」
「……そうか。なら良い」
「……何だよ大将、心配してくれたのか？」
「別にお前のことなんか心配してないんだよ」
「兄貴、それって兄貴が言ってた『つんでれ』ってやつだろ？」
「断じて違う」
「またまた」
「黙ってろ、忠」
「了解ですよ」

そう言いながらも笑っていやがる……百合に言いつけてやるからな、忠。

「お前らはここで待ってろ」
「了解」
「了解ですよ」

診療所の中に入ると、夏侯淵が体を起こして寝台に座っていた。その脇には、星とブラックジャック先生がいる。

「おい、無理するな」
「それ程無理をしている訳ではない。貴方が来る、と趙雲から聞いてな。寝たままで迎えるのは失礼だろう」
「失礼も糞もあるか。良いから寝ていろ」
「大丈夫だ……先ずは私の命を救ってくれたことに感謝する。自分でも信じられないがな。あの傷では助からないものだと思っていたのだが」
「運が良かったンだろうさ。偶々偵察に出た星がお前さんを見つけ

て連れ帰り、偶々此処に腕の良い医者が居た。お前さんの運が良かった以外の結論は出せないな」
「それで？私に訊きたい事があるのだろう？」
「あぁ……単刀直入に訊くぞ。華琳は何で負けたンだ」
「……信じられない、か？」
「当たり前だ。俺は華琳が勝つと思っていたンだ。官渡では勝った。そう聞いている。そこから陳留を奪い返しに征ったこともまた聞いている。だがそれでも負けるとは思えない。例え相手が諸葛亮だったとしても、だ」
「……驚いたな。そこまで知っているのか」
「この程度の事は調べれば分かるだろうが。戦勝ってのは広く喧伝してこそ意味があるンだから」
「それもそうか」

夏侯淵は薄く笑った後、戦のあらましを説明してくれた。

「袁術、ね」
「そうだ。華琳様は全く考慮していらっしゃらなかった。貴方であればまた違った結果が出たのかも知れないがな」
「それは買い被りだな。同じ兵力、同じ配下しか居なかったなら、恐らく同じ結果になっただろうさ」
「そうかな。華琳様は貴方を高く評価している。『自分に打ち克てる才を持つのは、教経しかいない』と常々言っておられたのだが？」

……エラい評価されているな。

「華琳に比べてそれ程優れているとは思わない。大した差はないと思うがね。拮抗する相手だと思えばこそ、俺も華琳も互いに拘るンだろうしねぇ」
「……そうか。そうかもしれないな。それが理由ではないかも知れ

ないが」

顔色が悪いな。無理はさせるべきじゃない。

「夏侯淵、もう休め。今お前さんに必要なのは体をゆっくりと休めることだ。滋養のある食べ物も届けさせる。食べることが出来ないものはあるか？」

「いや、特にはない。それよりも、私をどうするつもりなのだ？まだ私はその事について一切聞いていないのだが」

あぁ。当たり前すぎて忘れていた。

「済まん、忘れていた。ひとまずは体を治して貰おう。治ったら、華琳の所へ還るが良いさ」

「いつ、治る」

「さぁ。お前さんが焦って躰を動かしたりしない限りは、それなりの期間で復帰出来ると思うがね」

「悠長に療養している時間はない。少々無理をしてでも復帰しなければならない」

「……そして華琳の前で死ぬのかね？体さえ万全であれば死ぬことはなかった。私の為に無理をさせてしまったが故に殺してしまった。そう華琳に思わせて負担を掛けるのかね？」

「そ、それは……」

「良いから言うことを聞いておけ。悪いようにはせん。お前さんの傷が治ったら、華琳の所にきっちり送り届けてやるさ」

暫く考えて居たようだが、どうやらこちらの言うことに従うことにしたようだ、な。

「……信用しよう。華琳様は貴方のことを信用しているようだから

な」
「ま、信用されとこう。ゆっくり休め、夏侯淵」
「……分かった」
夏侯淵はそういって体を横たえた。
「先生、ちょっといいか」
「ああ。構わん」
先生と連れだって外に出る。
「……かなり辛そうだったが、本当に大丈夫なのか、夏侯淵は」
「私には体を自力で引き起こしたこと自体が信じられないがね」
「相当に悪いみたいだな？」
「それはそうだ。私でなかったら左足は切断だっただろう。右腕に関しても肘から下は切断でもおかしくない状況だった。あれを元に戻すには相当に苦労すると思うがね。果たして回復する為に行う訓練に耐えられるかどうか」
「……無茶をしてどの位で復帰出来る？というか、元通りに動くようになるのか？」
「元通りには動くようになるさ。私を誰だと思っている。私は手術の腕じゃ世界で一番だと自負をしているんだ。元通りに戻すのには、無茶な予定に必死になって食らい付いてきたとして、三ヶ月は必要だろう」
「三ヶ月、か」
それだと冬になるな。
もし現状袁家が俺たちに備えていたら、迂闊に袁紹を攻めることは出来ない。夏侯淵の話を聞いた限り、相当周到に用意してきているはずだ。肥沃で口数の多い冀州を領有し、今またそれに匹敵するだ

けの口数を誇るエン州を領有することになる袁紹は、収穫が落ち着いたら即座に華琳を滅ぼそうとするだろう。そこまでに間に合わせてやることは出来ないかも知れない。

「どうかしたのか」

「いや、何でも無いさ。先生よ、その方向で予定を考えておいてくれ」

「それは構わんが本人次第だろう」

「本人はきっとやると言い、そしてやり遂げてみせるだろう。己の主君の為にそこまで傷ついて戦い続けた人間がだ、その程度の苦痛に屈するとはどうしても思えないからねぇ」

「ふむ……では期待させて貰おう。私は必死になって治そうとする患者が好きでな。だが、何にせよ先ず体力を戻してからだ」

「あぁ。一応凱にも治療を頼んでおいた。気力が汪溢すれば、治癒力は高まる。そう言っていたしな」

「ほう。琵琶丸も治療するならかなり早く復帰出来るかも知れんな」

「というと？」

「訓練前に鍼を打たせるのさ。それで随分変わってくるだろう」

「どれ位前倒せる？」

「一月程度だな」

「そうか。まぁ、何にせよあの患者は先生に任せる。宜しく頼む」

「まあ任せておけ」

そう言って先生は再び部屋に戻った。

袁紹が何を考えて居るのか。そして諸葛亮がどう動くつもりなのか。そろそろ、判明する頃だろう。

もし、袁紹達が備えていなかったなら。兵を率いて蹂躙してやる。華琳とは不可侵条約を結んでいるが、貴様らとは結んだ覚えはないからな。もし備えていたとしても、いずれ、遠くない将来に必ず思

い知らせてやる。

俺と華琳が決戦するのを邪魔したことがどれ程高く付くのか、ということをな。

蝶の如く～１３０～（前書き）

推敲不足ですが睡眠不足なのでこれでいいや、と。

蝶の如く～１３０～

～亞莎　Ｓｉｄｅ～

教経様から命じられた、袁家の動向についての調査が終わりました。
稟様も風様も既に調査を終えられているとのことでした。私は一人遅れてしまっていたみたいです。今日、私の方の調査が終わったことを稟様に報告すると、三人で教経様に報告にあがることになりました。

広間に入ると、既に教経様は椅子に座って居られました。
その前まで行って跪拝します。

「教経殿。命じられていた袁家の調査、終了致しました」
「ご苦労さん。で、どうだった？」
「それよりも先ずお兄さんに報告しなければならないことがあるのですよ」
「？何だ？」
「漢王朝が滅亡したのです」

そうです。漢王朝は最後の皇帝である劉虞が袁紹に禅譲を行った事により、滅亡しました。袁紹さんは国号を『麗』と定め、初代皇帝となることを宣言したのです。

「ふぅん。で？」
「……お兄さん、驚かないのですか？」
「いやいや。前から言ってたじゃないか。袁紹の目的は禅譲だってねぇ。ちっと遅すぎるくらいだ。俺は官渡の戦い以前にやるべきだと思っていたンだからねぇ。華琳に負けるに違いないと思っていた

から、せめて皇帝として無様な死を迎えて貰いたかったンだが。……後は用済みの搾り滓を処理するだけだろう。生かしておいても碌な事はしない。強欲な奴は与えられた条件に慣れて『もっともっと』と強請ってくるンだから。直ぐに処理されるに違いないさ」

当たり前のことを言っている、という表情でそう仰います。

「それにだ。言ったろう？董卓を助けようとしなかった時点で漢王朝は終わりだ。そんなゴミ屑に払う敬意は持ち合わせていないンだよ。生ゴミを有り難がって頭から被るような真似を良くするな、あの馬鹿は。

『私が神聖生ゴミ王国の皇帝で御座いますわよ！あ～ほっほっほ！あ～ほっほっほ！』とでも言っているンじゃないかね？」

「それがそのようなこともないようです、教経殿」

「と言うと？」

「袁紹殿は周囲の人間の忠言に一切耳を貸さない愚昧を形にしたような人でしたが、最近、というより官渡の戦いで撤退して以降、周囲の人間の意見に耳を傾けるようになっているようなのです」

「そんなことがあるかよ。影武者か何かじゃないのかね？世良田次郎三郎的に考えて」

「せらだ……？」

「いや、こっちの話だ」

「お兄さん、本当に変わっているようなのですよ。今まで幾ら献策しても通らなかった領内の交通網整備案が袁紹さん自身の判断によって採用されたらしいのです。周囲の人間にその有用性を説明して貰わなければならなかったようですが、それでも自分で採用したのです。変わっているに違いないのですよ。さらだ2乗3乗的に考えて」

「……風。俺が言ったのは『世良田次郎三郎』な。それだと腹一杯サラダ食える様になるだけだから」

「風にはよく分からないのです」
「またかよ」

教経様と風様は偶によく分からない会話をなされます。

「……官渡の敗戦で人生観でも変わったか？劇的に」
「そうとしか思えません」
「ふむ……俺の注意を喚起したってことは、要するに袁紹軍は俺たちに備えている、ということか」
「はい。私の方で確認した限り、陳留攻略軍の指揮官であった麹義殿が兵３０，０００を率いて諸葛亮殿に合流した模様です。これでエン州に６０，０００の袁紹軍がいる事になります」
「……蹂躙出来ない数じゃない気がするがね。大体糧食の問題は解決していないだろう」
「袁家は先帝を隠居所に移動させました。元々先帝が治めていた代には随分と糧食と財が溜め込まれていたようです。それら全てを接収した模様です」
「……成る程。劉虞の強欲さが俺の邪魔をしてくれる訳だ」
「そうなりますね」
「有り難くて涙が出てくるねぇ……糞が」

そう忌々しそうに吐き捨てられました。確かに、もしそうでなければエン州に攻め込んでこれを奪うことくらいは出来たと思います。

「……風の方はどうだ？」
「袁家の国力の変化について調べてきたのです。今秋の収穫高は、前年比で１．４倍程度になると思われます。口数については１．５倍になると予測しているのですよ」
「１．４倍ってのは本当か？華琳が治めていたエン州は兎も角冀州は結構荒廃していると思うンだが」

「お兄さんは冀州がどれ程豊かか分かっていないのです。冀州はこの国で一番の物成があるのです。軍に徴発する兵で言えば、冀州だけで３０万から３５万が見込めます。当然それを養うだけの糧食を得ることが出来るからそれを見込めるのです。荒廃しているのと、お兄さんが色々と仕掛けた為に２０万程度養う量しか収穫できなかっただけなのですよ」

「２０万でも大した数だがね。経済戦争仕掛けたらどの程度減らせる？」

「１７万が限度、という程度には制限出来ると思いますね～」

「それでも１７万か」

「お兄さん、今年は１．４倍になるので袁紹さんは２８万養えるだけの糧食を得ることが出来るはずなのですよ。１１万も外征出来ない状況に出来るだけ、お兄さんの策は秀逸なのです。１１万もあればもう１軍作れるのですから」

「……それもそうか」

「はい」

「ンじゃ、亞莎の方はどうかね？」

……私の番が来ました。私が調べてきたことに教経様が満足して下さると良いのですが。

「わ、私は諸葛亮について調べてきました」

「へぇ。何か分かったかね？」

「済みません。分かった事はさほどありません。布陣している場所で多くの書状を書き付け、それを孟獲と士燮、そして劉表に送っていること位しか分かっていません」

「ふむ……亞莎はそれをどう見る」

「私は、これは牽制の為の準備だと思います」

「何の牽制だね？」

「……恐らく、曹操を滅ぼすべく司隷州に向けて軍を進発させた際

に、教経様にその後背を突かせたり本国に攻め入って来させぬ様にする為の牽制です。南蛮、交阯、揚州から兵を発することによって身動きを取れぬようにしておいて、一気に曹操を滅ぼすつもりだと思います」

「……」

私の答えを聞いて、教経様は目を瞑って黙っていらっしゃいました。……やっぱり、私には稟様達のような才能は……

「……亞莎」

「……は、はい……」

「お前さん、やっぱりやれば出来るンじゃないか」

「え？」

「恐らくお前さんの言う通りだろう。諸葛亮の奴が俺を野放しにしておくはずがないンだからねぇ。自分で言うのも何だが、華琳に対して軍旅を催そうと思えば先ず俺を封じ込めておくことを考えるべきなのさ。だからお前さんが調べてそう思ったのは間違いじゃない。……南蛮に、交阯に、揚州、ねぇ。これでこの国で平家に属していない勢力の内、華琳以外の全てが俺の敵に回る訳だ」

そう言って、教経様はカラカラと笑い始めた。

「ははは……面白いじゃないか。俺は俺に刃を向けてくる奴に対して容赦をしようとは思わない。もし奴らが諸葛亮の思惑通りに攻めて来るなら、奴らにはそれ相応の報いを呉れて遣る」

「の、教経様。同時に攻められた場合、如何為されるのでしょうか」

「幸いにも亞莎のおかげで奴さん達の動きは読めたわけだ。それと知っているのに態々奴らが行動を始めるのを待って対処をすることもあるまい？今の内から奴らに備え、強烈なしっぺ返しをくらわせてやる。

益州に碧と翠と稟、荊州に愛紗と祭と蒲公英をそれぞれ移動させる。
益州に5万、荊州に7万。これだけの兵で待ち構えておいてやれば十分だろう。三方から攻めれば勝てると思うなら攻めてくるが良いのさ。遠交近攻大いに結構。だが袁紹の馬鹿と連携するには些か遠いンだよねぇ。認識が甘いって事を、身を以て思い知らせてやる」

稟様と風様を見ると、お二人とも教経様を見て頷いて居ました。
私も、教経様のご期待に応えることが出来たと思います。安心したのは勿論ですが、教経様から言われた言葉がとても嬉しかったのです。

『やっぱりやれば出来るンじゃないか』

私も、これで少しは自信が持てると思います。
そう思わせてくれた教経様にお礼を述べようとお顔を見ると、何とも言えない気持ちになって直ぐに俯いてしまいました。動悸が激しくなって、お顔をまともに見ることが出来ません。

「今回は袁紹を攻めることは見送ることにする。残念だがね。袁紹だけでなく、攻めてきそうな3勢力についても情報を集めておいてくれ。攻めて来ることが分かった時点から、皆忙しく動くことになる。それまでは足元をしっかり固めることにしよう。いずれ駆け出すその時の為に、な」

拝礼をしつつ、教経様のお顔を改めて見ます。前からそうでしたが、より一層眩しく見えます。
それが何故なのか。その理由を知るのには、もう少し時間が掛かったのです。

～秋蘭　Ｓｉｄｅ～

「どうした、夏侯淵。その程度か？」

「くっ……」

平家に保護されてから、既に一月が経過している。

最初、黒男とかいう医者と琵琶丸なる鍼師が付きっきりで私の訓練に付き合ってくれていたが、ある時点から平教経が付き合ってくれるようになった。

体の回復を早める為には、先ず己の体が如何なるモノかを知る必要がある。そう言った黒男に対して、彼がそれを教えよう、と言ったのだ。

今私は覚束なくも立ち上がり、そして歩こうとしている。その私の足、怪我をしていない右足を平教経はいきなり払い、私に何度も地面を舐めさせてくれている。

「何度言ったら分かる。きちんと自分の体を意識しろ。今までのように、意識せずとも動くモノではない。何故、立っている事が出来るのか。何故、足は動くのか。何故、腕を振るうことが出来るのか。それら全ては生まれた時から物心つくまでに自得しているモノであり、人は皆その経験の上にあぐらを掻いて生きているに過ぎん。お前さんはそれでは駄目だ。己の体がどういうモノなのか。それをもう一度、今度は理性を通して獲得しなければならん。そうでなければ例え復帰したとしても万全とは言い難い」

「分かっているッ……！」

「そうか。その割には全く進歩がないな。諦めてしまった方が良いンじゃないかね？別に生きていくだけなら、何とでも成るだろうに。お前さん程の器量があれば、どんな男も思いのままだぜ？何なら俺が囲ってやっても良いンだ。諦めろ。その方が楽だ」

「……巫山戯るな。私は華琳様の為に再びお役に立たねばならんのだ。このような処で貴様に囲われるなど願い下げだ」

「それならば早く立て。時間は誰にでも平等に過ぎていくものだ。こうして居る間にも袁紹が華琳を攻め滅ぼすべく画策をしている。お前さんは何の役にも立たないただの木偶で終わるつもりか」

「ぐっ……」

「……ふん。立てるじゃないか。立てるなら勿体振らずに早く立て。早く先生の所まで歩いて行って見せろ」

私の訓練に付き合うことになった時、血反吐を吐くが早く回復する道と、それなりの苦労を伴うだけで済むが回復にそれなりの時間を要する道といずれを選択するか迫られた。私は当然前者を選び、そして『血反吐を吐く』とは言葉通りの意味であって『血反吐を吐くような思い』をするのではないことを最初に思い知らされた。

今日のようにいきなり足を払われた時、私は思わず彼を罵ってしまったが、彼が何をしようとしてくれているのかが分かってからは文

句どころか感謝の念さえ湧いてくる。こうして訓練をしている最中は、その態度にむかっ腹が立つし、『貴様』などと言ってしまうのだが。

彼が訓練に付き合うようになってから最初の二日間は、紛れもない殺意を抱いていたものだ。だが、見かねた趙雲が私に色々と教えてくれた。趙雲は、平教経に何故このような事をさせるのかを問い糺し、それを私に教えてくれたのだ。

聞けば、彼自身がその剣の師から様々な事をさせられていたらしい。関節を外した状態から己の体の状態を把握して元に戻す。特殊な薬によって五感を狂わせ、また体の一部が痺れた状態で普段と何ら変わらぬように剣を振るう。足一本、腕一本、偶にその両方。それを縛り上げられて師と剣を持って向かい合う。

その訓練は、己の体が如何なるモノで如何に使うべきであるかをしっかり認識させてくれた。今私の体、左足と右腕については思い通りに動かすことが出来ないが、もし自分の躰を動かすということをしっかりと理解した上で出来る様になれば、今までと同じどころか遙かに効率良く体を使うことが出来るだろう。だから、これと同じような事をやるのだ。そう言っていたそうだ。

それにこの男は、無闇やたらに私の足を払っている訳ではない。この訓練を始めてから、既に何歩かは足を払われることなく歩いたことがあるのだ。要するに、平教経は私が躰を動かす際に、どう動かすか、どう動くのかを意識せず、ただ漫然と動かそうとした時に足を払うのだろう。だが……

「一体何処を見て足を払うか否かを判断しているのか」

思わずそう口に出していた私に、平教経が少し考えてから話し始める。

「……そろそろ何となく分かってくる頃だろうから言葉で伝えておいてやる。
上手く意識して動かせている場合、体幹は常に均衡が取れている。
前後左右に大きく揺れ動くことはない。重心の移動は水が流れるが如く為される。意識する、というのは、常に注意を払っておくということだが、それに拠ってある一点の筋肉を強ばらせたり余計な箇所に力を入れることがあってはならない。
己を俯瞰しろ。体は己の意志で動かすモノだが、しかし意志のみで動いている訳ではない。全ての事象に因果があるように、体の動きも須く因果から逃れることは出来ない。己が思うままに因果を生じせしめろ。その理を理解しろ。そして己に従わせて見せろ。
分かったらさっさと歩け。もう日が暮れるぞ？」
「分かっているさ。だからこうやって歩いているッ……！」

再び歩き出した私の足を、平教経は払ってこなかった。
己の体がどう動いているのかを意識し、体幹がブレぬことだけに集中して歩いた。そして気付けば、所定の位置まで歩ききっていた。

「……ある程度掴めてきたみたいだな」
「……はぁ、はぁ……」
「凱、頼む」
「任せておけ」

琵琶丸が私に鍼を打つ。これで、今日の訓練は終わりだ。
琵琶丸が私に鍼を打つことで回復力を高め、寝て目覚めた時に疲労が回復しているようにしてくれているのだ。その代わりに、疲労が

一気に吹きだして来るような感覚に襲われ、抗いがたい睡魔に敗れて意識を失うのが、最早日課となっている。

……平教経は、どうやら私が華琳様の大事に間に合うように、出来る限りのことをしてくれているのだろう。恐らくは、華琳様の為に。

平教経と接するようになってから、この男が華琳様と良く似ていることに驚かされる事が多い。どちらも誇り高く、醜悪なものを憎む。どちらも人に求めるところが高い。どちらも少々独善的である。どちらも素直ではない。どちらも、実は心優しい。そしてどちらも、満たされぬ孤独感を抱えている。華琳様はその孤独を埋める為に姉者や私などと閨を共にしている面がある。平教経も、その孤独を埋める為に女と閨を共にする面があるのではないかと思う。

はっきりとは気が付いていらっしゃらないようだが、華琳様は平教経に単なる興味以上の感情を抱いている。恋、というようなものでもない。まるで喪われた自分自身の半身を求めるかのような切実さを感じる。そして恐らく、平教経も華琳様に己自身を見出しているのだろう。

残念ながら姉者や私ですら、華琳様の全てを理解することは叶わない。だが、この男なら華琳様の全てを理解してみせるかも知れない。そして華琳様も、この男の全てを理解してみせるかも知れない。

この男が華琳様と共に在ったなら。

華琳様がこの男と共に在ったなら。

それを思いながら、意識を手放した。

～華琳　Ｓｉｄｅ～

「華琳様、烏丸と鮮卑に向かわせた使者が帰ってきました」
「そう。それで首尾は？」
「……申し訳ありません。協力を取り付けることは叶いませんでした」
「……そう。仕方がないわね。もう良いわ。下がって休みなさい、桂花」
「……はい、華琳様」

陳留での敗戦から3ヶ月。収穫を終えるまでに、打てる手は全て打った。けれど、何一つ上手く行かなかった。冀州で煽動を行ったが、小火程度の騒ぎで鎮圧されてしまった。異民族との連携を行おうとしたが、全て断られた。それだけでなく、軍兵が少しずつ逃げ始めていた。元々私に従っていた者達は、最後まで付いて来てくれる様だけれど。

落ち目の時というのは、こういうものかも知れないわね。高みに登

っていればいる程、足を踏み外した時に落ちる幅は大きくなる。今まで上手く行っていただけに、上手く行かなくなった時の動揺は大きい。春蘭達でさえ動揺はしているでしょう。それが兵であれば、尚のこと動揺しているでしょう。そして、それに耐えられる程強くもないでしょう。

調べたところでは、麗羽がいよいよ私を討ち果たさんと軍旅を催そうとしている。それと同時に南蛮、交阯、揚州に働きかけて教経の動きを封じようとしている。今までの麗羽であれば、数に物を言わせるだけでそのように複数の策を巡らせるような真似はしなかったでしょう。

我が軍は２０，０００程度しか戦力として計算出来ない。対する袁紹軍は６０，０００。教経に備えつつ用意出来る限界の兵力を投入してくるとの情報を得ている。主将は麹義。軍師に沮授。将として蒋奇と孟岱が従軍している。

将の質でも軍師の質でも私達が勝っている。ただ兵数のみで劣っており、そして覆せそうにない。？水関で防戦することを考えているけれど、？水関が抜かれれば後はない。虎牢関は反董卓連合時に教経が火を掛けたことによって木材部分は全て焼け落ちており、また麗羽と袁術が忌々しい思い出しかないから、と言って壁を破壊した後修復されていないのだから。

？水関で防戦している最中に河が凍れば、当然渡渉してくるでしょう。そうなれば、？水関に篭もったまま洛陽を落とされることになる。それは敵中に孤立することを意味している。といって、後退してもこの兵力差を覆す事が出来そうな、防戦に適した場所が存在しない。

……覚悟をしておいた方が良いかも知れないわね。

「華琳様！敵が河を渡渉しようとしている模様です！」」
「……春蘭、一旦洛陽まで後退するわよ」
「……華琳様」

？水関に寄せてきた袁紹軍は、事前の調べ通り６０，０００を越える程度だった。？水関を盾にして迎え撃っていたけれど、当初の危惧通り河が凍ってしまい、敵に簡単に渡渉を許してしまう状況に陥った。

今私の目の前に見えている道は二つ。
援軍の見込みのない？水関に篭もって戦ってじわじわと死んでいくか。
それとも、後退して兵を再編し、最期の決戦に臨んで死ぬか。
いずれの道も、もたらされる結果は変わらない。

「まだ終わった訳ではないわ。洛陽で兵を再編し、弘農へ退く。そこで最期の決戦に臨むわよ、春蘭」
「はっ！」」
「桂花、兵達の様子は？」
「此処まで残っている兵に動揺はありません。皆、覚悟は決めております。最期の最期まで華琳様に付いていく、と申しております」
「……そう」

次が最期になる。それはあちらも承知の上でしょう。
……でもね、楽に勝たせてはあげないわ。最期の一兵になるまで戦う。諦めれば、そこで全てが終わるのだから。

袁紹軍と激しくぶつかり合う。皆、これが最期の戦いになるのは分かっている。一人でも多くの敵兵を殺す。その先に待っているのは自分の死以外にはないことを知りながら、それでも皆戦っている。

本陣も例外ではなく、既に何度も敵兵に進入されている。
右翼を務める凪達と左翼を務める春蘭達、そして本隊を率いて居る私。その中間に敵兵は橋頭堡を確保してそれぞれを分断している。

「敵大将曹操見参！大人しくその首を寄越せ！」
「欲しければ実力で奪って見せなさい。そう易々とあげるつもりはないわ」

何度目かの乱入者を、絶で斬り殺す。

「流石は曹操殿。やるようですがそれも此処まで。この私の出世の糧となって頂きましょう」
「躾がなっていないわね。そういう時は先ず名乗るものよ？」
「これは失礼。私は蒋奇。貴方を殺して出世する、次代の袁家を担う者です」
「貴方には出来ないかも知れないわよ？試してみるかしら？」
「試させて頂きましょう。但し、尋常な勝負は致しませんがね！」

敵の将と思われる男が配下の兵に命じて次々に私に襲いかからせる。
私の体力を奪い、確実に仕留めることが出来る様になるまで弱らせようと考えて居るのでしょう。

突き出された槍を絡め取って横にいる敵兵の腹に突き刺す。それと同時に、絶を一閃させて正面で槍を構えていた雑兵の腹を切り裂く。もう数え切れない程敵を斬り捨てた。それでも猶、敵の攻勢は弱まりそうにない。

「しつこいわよ！」

目の前に迫ってきた敵将を斬り殺すべく、絶を振るった。確かに斬り殺すことが出来た。……彼が盾とした雑兵を。そのまま前進して来て、抱えていた雑兵をこちらに投げつけてくる。それを避けた先には、血溜まりがあった。

血溜まりを踏んで足を滑らせた私の前に、蒋奇が立っている。

「曹操！その首、頂戴する！」

とっさに絶を構えて防いだが、絶をはじき飛ばされてしまった。

「……今度こそ、最期だな」

蒋奇が剣を振り上げる。

これで、私は終わり、ね。足下を血に掬われるなんて不運に見舞われること自体、終わりを意味している気がするしね。
今際の際にはそれまでの人生が走馬燈のように巡ると言うけれど、本当なのね。

旗揚げをして、鉅鹿で黄巾賊を討伐した。
反董卓連合では、危うく全軍崩壊するところだった。
官渡の戦の前に、教経と決戦することを約束した。

そして、官渡の戦いに負けた。

駆け巡った走馬燈。その殆どに教経が関わっているなんてね。
振り上げた剣を振り下ろしてくるのを目にし、目を瞑って痛みに備える。一瞬で死ねると良いのだけれど。

……秋蘭の声が聞こえた気がする。
秋蘭、やっぱり貴女、生きていたのね？出来れば春蘭達を纏めて、何処かへ落ち延びなさい。もし誰かに仕えるというのなら、教経に仕えなさい。教経なら、きっと貴女達を厚遇してくれるでしょう。

……教経。
叶うならもう一度貴方に逢って話をしたかったのだけれど、それも叶いそうにはない。
貴方は、私の分まで頑張りなさい？きっと貴方が思い描く理想は、私と良く似たようなものでしょうからね。なにせ、私達は似ているのだから。

「……教経」
「呼んだか？華琳」

あり得ない人の声を耳にして目を開くと、目の前に、居るはずのない人が背を向けて立っていた。

逢いたいと、最期に願ったその人が。

蝶の如く～１３１～（前書き）

難産だった……

蝶の如く～131～

～教経　Ｓｉｄｅ～

華琳目掛けて振り下ろされた剣をはね除け、男と華琳の間に立つ。
……際どいところだったな。実際、俺が瞬動出来なかったら華琳は死んでいただろう。

「……教経……なの？」
「あぁ。俺の他にこんな格好した知り合いが居るのかね？」
「あ、貴方、此処で何をやっているの！？」
「何を、ねぇ……まぁ散歩じゃないことは間違いないが、話は後だな。華琳、下がっていろ」

取り敢えず、今は目の前の敵を駆逐することだ。

「……いつどうやって目の前に飛び出してきたのか分かりませんが、状況は変わりませんよ？私の方がまだ有利です。まだまだ兵は居るのですからねぇ」
「蒋奇！何をモタモタとして居るのだ！」
「ああ、孟岱。丁度良いところに来ましたね。曹操をあと僅かで首に出来たものを、横槍を入れて来た無粋な奴が居ましてね」

お前さんは不細工な奴だがな。

「無粋な奴？……その格好、平教経だな！？」
「……だったらどうする？」
「その首、頂戴する！」
「ハッ……お前さん達には出来ないかも知れないがね。やってみる

かね？」

「曹操と似たような口を！此処は二人で確実に仕留めに行きますよ！孟岱！」

「良し……皆でやるぞ！邪魔が入らぬように後続の敵兵を止めろ！」

……何処が『二人で』だ、何処が。

「俺の目には二人には見えないがね」

「此処は戦場だ！！勝てば良いのだ、勝てば！」

二人は俺たちを挟み込むように左右に分かれる。先ず雑兵を突っ込ませた後で、左右から俺と華琳を狙って来るつもりだろう。俺は兎も角、華琳は得物を持っていない状況だ。一気に来られた場合、華琳を護れない可能性が有る。先ずは、得物を回収しておこうか。

「曹操を護りながら我々二人を同時に相手取るなど不可能！」

「己一人で飛び込んできた代償を払って貰いましょうか！」

「教経！私のことは良いから退きなさい！」

「お断りだ。危地にある綺麗な女ン子を助けるのは、いい漢の絶対条件だぜ？」

勿論、ノンケの方の、だ。

瞬動し、華琳の得物の周囲にいた雑兵を斬り殺す。

「何！？」

「それになぁ、華琳？」

デスサイズ的な得物を持って再び瞬動で華琳の側へ。

「お前さんは俺のモノだ。誰にも渡さない」

お前さんを屈服させるのは、俺であるべきだ。俺以外の人間に屈服するなど、あってはならないンだよ。

「……バカ」

「馬鹿で上等……行けるな？」

俺が差し出した鎌をその手に受け取り、一振りした。

「……ええ。抗ってみせるわ」

「それでこそ、だ」

互いを見やって不敵に嗤い合う。

「たった二人で何が出来る！殺れ！」

雑兵共が指示を受け、俺たちを殺すべく突っ込んでくる。

「ハッ……俺たちはたった二人だがなぁ！」

瞬動で雑兵共の間を駆け抜けながら、斬り捨てる。

「私達なら二人で十分なのよ！」

相手の力を利用しながら、斬り捨てる。

「何をしている！さっさと殺すんだ！」

「コイツは良い！右も左も敵だらけだ！よりどりみどりって奴だなぁ！？片っ端から斬りまくってやらぁ！死にたい奴から前に出やがれッ！」

「私達二人の命をこの程度で購えると思っているのかしら？出直してきなさいッ！」
「ぎゃあ！」

華琳を後から襲おうとしていた雑兵の首を撥ね飛ばした。
その俺の後ろに向けて、華琳が得物を振るう。

「華琳、背中がお留守だったぜ？」
「あら、貴方を信頼してあげていたのよ？それに貴方も背中がお留守だったようだけれどね？教経？」
「俺もお前さんを信頼してやっていたンだよ」
「ふふっ。期待には応えてあげるわ」
「ハッ。その言葉はそのまま返してやるさ」

俺と華琳を中心にして、次々に敵が死んでいく。まるで、ぶつかれば必ず死ぬ、目に見えぬ壁のようなものがそこにあるかのように。
やや遠巻きに囲んでいた兵が倒れた。その眉間には、矢が深々と刺さっている。
……漸くおいでになった、か。

「華琳様！」
「お屋形様を護り参らせよ！穿つのだ、我らの牙で！」
「……退け！」
「テメェら！命を捨てろ！死んでも大将を護るんだ！」
「俺の姉貴を泣かそうとするやつは皆殺しだ！」

皆、追いついてきたみたいだな。これで楽になるだろう。

「くっ……またもあと僅かという所で！」

「蒋奇！退くぞ！」
「何を馬鹿なことを言っているのです！ここで討ち果たして名を上げるのです！」
「……意見の相違ってやつは早々に調整して溝を埋めておいた方が良いぜ？まぁ、時間ならたっぷり出来る。これからあの世って処に行くンだからねぇ」
俺達の接近に気が付かないってのは致命的だったな。
「な……貴様！」
後から声を掛けた俺に反応した孟岱とやらが、俺に剣を突き出してくる。その剣を清麿で巻き込んで上へ跳ね上げ、そのまま斬り下げる。
「な、何が……？」
「……信じられない、という顔をしているな？分限を弁えない奴は死ぬしかないンだぜ？」
「孟岱！……貴様ぁ！」
「あら、貴方の相手は私よ？」
「死ねぇ！」
綺麗に相手の力を受け流して、そのままその勢いに自分の力を乗せて大上段から斬り下げた。
「勘違いしないで。万全ならば、私は貴方程度がどうにか出来る程安い女じゃないのよ？」
怖いねぇ。
壊走を始めた敵前衛を追って、琴達が追撃を掛ける。

俺と華琳の側には、夏侯淵とダンクーガ達がやって来た。

「華琳様！ご無事ですか！？」

「秋蘭……よく戻ってきてくれたわ。貴女も無事で何よりね」

「はっ……」

言葉通り、血反吐を吐いて再び華琳の元に返ることが出来た夏侯淵は、跪拝したまま泣いている様だ。華琳にしても、結構キてるみたいだし、な。水を差す程野暮じゃない。

「……ダンクーガ、忠に親衛隊半分率いさせて敵を押し戻させろ。予定通り、敵本隊が後退したらこちらも退く。深追いは避けろ。分かっているな？」

「了解だ」

「秋蘭、こちらも教経に連動して動くよう伝えて」

「はっ」

いきなり俺たちが乱入した為、敵に動揺が走っている。親衛隊と琴達がそれぞれ敵に吶喊している。新設した新撰組は、親衛隊に比べればまだまだ練度も力量も落ちる。しかし、琴と百合の指揮で優位に戦えているようだ。全員が俺と同じダンダラ模様の羽織を軽鎧の上から着込んでいる。良い風景だな。

加えて、この戦には月が付いて来ている。危険だからと言ってはみたが、どうしても付いて来ると言って聞かなかった。絶対に前線には出ないこと、そして朔が常に側に居ることを条件に承諾せざるを得ない頑なさだった。その月が率いる１０，０００の兵は、恋と朔が鍛えに鍛えてきた兵だ。恋が主攻、朔が防衛。その間を、詠とねねが取り持って連動させて動かしている。敵としてあの軍勢と向き合ったなら、同数でぶつかるのは絶対に避けたいところだ。手ひど

い目に遭うのは間違いない、そう思わせるだけの精強な軍だ。

更に後方からは匈奴の戦士が3，０００やってきている。前もって言っておいた通り、木の枝を引き摺りながら移動してきている。土煙だけ見れば、大軍が悠然と寄せてきているようにしか見えない。平家には多くの兵がいる事を奴らは知っているはずだ。大軍を投入してきたと思い、一旦後退するだろう。とんだイカサマだが、イカサマってのは引っ掛かった奴が悪いンだよ。

戦が終わった後は華琳と話をするだけだ。俺に従ってくれると良いんだが。楽が出来そうだし、な。

～華琳　Ｓｉｄｅ～

袁紹軍を退けることが出来た私達は、現在弘農で兵を再編をしている。皆疲れていたけれど、直ぐにまた攻め寄せてくるかも知れない

ことを考えて準備をして貰っているのだ。こういう時に秋蘭が居てくれるのは本当に助かる。

私は、といえば、自室として割り当てられた部屋で教経と話をしている。

「先ずはお礼を述べるのが筋なのでしょうけれど、質問から良いかしら？」

「あぁ。何となく予測が付くがね」

「どうして私を助けに来たのかしら？」

「まぁそう来るよなぁ……戦の最中に言った気がするがね」

戦の最中に教経が言ったこと。

『お前さんは俺のモノだ。誰にも渡さない』

言ったときの雰囲気から分かっては居たけれど、やはりあれは本気だったのね。

私をモノ扱いするかのような言動なのに、あの時私は怒るより先に嬉しいと感じていた。

「そ、そう……そこまで想って居るなんてね」

「当たり前だろうが。お前さんだってそう思っている筈だぜ？」

「……そうね。そうかも知れない。でも、よくそれで周囲の女達が許したわね？」

「……しっかり説教済みだよ。エラい目に遭ったが、最終的には皆納得してくれたさ。それもこれも、お前さんのせいだぜ？華琳？こうなった以上、俺の望みを叶えて貰わないと困るンだよねぇ」

「……いいでしょう。そもそも約束していたしね」

「……俺の望みって奴を聞かなくても良いのかね？」

「ええ。分かっているつもりよ」

『俺がお前さんの初めての男になってやるよ』

そう言っていたものね。正直な話、私は最期に教経に逢いたくて仕方がなかった。

あの状況で、私を助ける為に自分の身の危険を顧みずやって来た。

私を救う為に、単身敵中にまで乗り込んで。

そして、ああ言って私にその思いの丈を伝えてきてくれた。

まさか、私が力で屈服させられるのではなく、心を屈服させられてしまうなんて思っても見なかったけれど、ね。でも、もう私は教経と生死を賭けて戦う事なんて出来ないでしょう。教経を殺してしまう可能性が有るのに教経と戦うことを、私の心は拒むでしょうから。手に入れられないならば、殺してしまったとしても仕方がない。ぶつかり合った結果、教経が死んでしまっても仕方がない。そう思い切ることは、もう出来そうにない。

「そうかね。だが、改めて言葉にする必要があるだろうな。……華琳。俺の側に居て、俺に手を貸してくれ。お前さんが居れば、俺は俺が想う理想の世の中をより確実に創り出すことが出来るだろうから」

「……民に非常な世の中で生きていく事を強いる事がない世の中を？」

「そして全ての人間が、平凡な人生を送ることが出来る世の中を」

抱いている理想は、想像通り私とさほど変わらないもの。

「……教経。今の誘いの言葉、どういう意味か分かっているのよね？」

「あぁ。分かってるつもりだ」

そう。『私と共に生きていきたい』、なんてね。

「し、仕方がないから一緒に歩んであげるわ。この乱世を、そしてそれを終わらせた後も、ずっとね」

「あぁ……これから宜しくな、華琳」

「ええ……宜しくしてあげる、教経」

それは、誓いの言葉。

私達二人だけの、誓いの言葉。

仕方がないから貴方を支えてあげるわ、教経。

仕方がないから。

～教経　Ｓｉｄｅ～

弘農で袁紹軍を撃退した後華琳と話をし、華琳が俺に従ってくれることになった。
その後華琳と他愛のない昔話をしていた。

鉅鹿で最初に遇ったときの話。
最初の印象が最悪だったらしい。自分の身長を見て、馬鹿にされたと思った。最後には認めてあげたのよ？とか。ツンデレか？微妙に違う気もするな。
反董卓連合の時の話。
負けることはないと思っていたが、見事に負けた。その時点で、華琳にとって俺の存在は自分と対等なものになったらしい。対等になれる可能性が有るのではなく、対等か自分が劣っているかも知れない存在だ、と。まぁ、覇王様に見込まれるってのは悪い気はしない。
華琳に呼び出されて逢った時の話。
俺が華琳のことをどれ程想っているかはその時に気が付いたわ、と。どれ程想っていたんだろうな？まぁ、華琳を倒すなら俺以外にあり得ないし認めない、とは思っていたからな。残念ながら、華琳と決戦するってのは望めなくなったが。ただ、華琳が死んで二度と話が出来ないって訳じゃ無いから、この手に掴んだ結果には満足してる。
そして、今日の話。
助けに来てくれなくても良かったのよ。でも……嬉しかったわ。た、唯、ほんのちょっとだけよ？こういうことになったからと言って、調子に乗らないでね？と言っていた。生粋のツンデレか。こういうことになったって、どういうことになったんだよ。

そうやって話をしていた。
そして、気付いたら華琳に口付けされていた。

「ん……ちゅ……」

「……か、華琳」
「……何？私が口付けしてあげているのよ？もっと嬉しそうにしなさい？それとも、嬉しくないのかしら」
「……そりゃまぁ綺麗な女ン子に迫られるのは嬉しいがね」
「そう。なら良いじゃない」

何でこんな事になってるんだ？
……まぁ、嫌じゃない。あまり驚いていない事から考えて、こうなるかも知れないってのは無意識に分かっていたのかも知れない。
俺と華琳は似ている気がする。華琳が側に居ることは自然な気がする。俺は華琳の中に自分を見出していたんだろう。だから華琳が袁紹如きに負けることに耐えられなかった。自分の中からあふれ出た、もう一人の自分がそこにいるような気がして。それを、自分のモノにすることを望んで居た気がする。

「華琳……ちょっ……んぅ……」
「……ちゅ……ちゅ……はぁ……。何よ。私の初めての男になるのでしょう？」

……そう言えばそんなことを言ったな。
まさか言葉通りの意味で捉えてそうしようとするとは思っていなかったけど。

「華琳？」
「……私の初めての男にしてあげるわよ」
「……いや、お前さん、それでいいのかよ」
「いいわ。貴方がそう望んで居るのだから」
「一方通行でするものじゃないだろうが」
「……バカ」
「は？」

「……私も、それで良いと……そうしたいと思ってるわよ……？」

あの華琳が、こんな風になるんだな。

「華琳、大丈夫か？」

「……もの凄く痛かったわ」

「……その、済まんな」

「……別に良いわよ。これ、本当に痛くなくなるの？」

「……みたいだぜ？俺は女じゃないから分からないが」

「……役に立たないわね」

「そりゃ悪う御座いましたね」

「本当よ……ちゅ……」

華琳が口付けをしてくる。

「……華琳」

「教経。貴方が私を助けに来たとき、私が何を考えて居たか分かるかしら？」

「さぁ……生憎と俺は人の頭の中を覗けるような人間じゃなくてね」

「当てる事が出来たら、もう一度抱いても良いわよ？」

「外したら？」

「そうね……罰として口付けして貰おうかしら。私からしかしていない気がするしね」

「どっちに転んでも役得だねぇ」

「……で。私は何を考えて居たと思うの？」

「晩飯のことだろ？常識的に考えて」

「ハズレ……ん……ちゅ……」
「……外したか。惜しかったんじゃないか？」
「さぁ……どうかしらね」
「ん～……酒が飲みたい、かな？」
「ハズレ……んん！……」
「……なンだ、違ったのか？」
「……そんなにわたしに口付けしたいの？」
「あぁ。したい」
「ん……んん！……」
「……柔らかいな。綺麗な唇してる」
「……綺麗なのは、唇だけかしら？」
「……全部綺麗だと思うよ。一部残念だと思うけど」
「死にたいのかしら？」

イイ笑顔だな、華琳。真っ黒黒助な感じだが。

「……だが一番綺麗なのは、心、かな」
「……バカ」

華琳が寝台の中で抱きついて来る。

「なぁ華琳。俺は当てられそうにないんだが。それだと華琳は抱けないな？」
「う……意地が悪いのね、教経は」
「いやいや、お前さんが言い始めたことだろうに」
「……仕方がないから抱かれてあげるわよ」
「……素直じゃないな、華琳」
「……うるさい。しっかり抱きしめなさい？」
「はいはい……我が儘なことだ」

華琳があの時何を思っていたのか。
華琳は、事が終わった後教えてくれた。

『最期に、俺に逢いたい』

そう思って居たと言っていた。
期待を裏切れて良かった、と言った俺に、首を傾げて怪訝そうな顔をして。暫く考えた後言葉の意味をちゃんと汲み取り、薄く笑った。

「……そうね。最期にはならなかったのだから」

蝶の如く～131～（後書き）

言ったことについて。
のりたまは馬鹿なので、自分が華琳を下す唯一の存在であるべきであって、自分以外の人間に屈するべきではないと思っていることを言ったと思っております。華琳様にとっては『馬鹿』ではなくて『……バカ』のようですが。
二人して死ねば良いと思うよ☆

エラい目について。
起爆スイッチは以下の通り。
「それでお兄さん？そうやって助けてまた釣り上げるのですか？」

それにしても、難産でした……ネタが５パターン思いつくとかどんだけ……

次回は、ネタになると思います、はい。

蝶の如く～132～

～華琳　Ｓｉｄｅ～

曹家は平家に協力することになった。無論、その配下として。
私が教経の下に付く事を皆に話をすると、桂花や春蘭は反対していたけれど、秋蘭は反対しなかった。何故反対しないのか、と聞くと、私が教経のことを想っているから、と答えた。秋蘭は私の感情に以前から気が付いて居たようで、教経とああなった後話をした際に『複雑ですがお慶び申し上げます』と言っていた。その、恥ずかしいからあまり言って貰いたくはなかったのだけれど。

教経から、私の処遇について話があるから広間に居てくれ、と言われて移動した先には、今回の戦に付き従って来た賈駆、太史慈、？艾の三人がいた。丁度良い機会だからと、私が教経と『そう』なったことを宣言した。
ちゃんと調べはついているのよ、教経。全く。遠征の度に女を増やすなんてね。私も貴方の戦果になってしまったのだけれど、ね。

「……はぁ。結局風の言った通りになった訳ね」
「……誰？それは」
「ああ。程？よ、程？。……全く！遠征する度に女を増やすんだから！」
「……平家の中でも皆そう思ってるのね」
「……？艾。士載。百合」
「そう。私は曹操。字は孟徳。真名は華琳よ。宜しくね、百合」
「……うん」
「知ってると思うけど、ボクは賈駆。字は文和。真名は詠よ」
「私は、姓は太史、名は慈、字は子義。真名を琴と申します」

「詠、琴。宜しくね」
「まぁ宜しくしてあげるわよ、華琳。そうでないと困るから」
「宜しくお願いしますね、華琳」
「……中々慣れないわね」
「それはそうでしょうけど、ボク達は教経の中じゃ同列だと思うわ。それがちょっと悔しいような、ホッとするような、複雑な感じだけど」
「あら、そうかしら。前に逢った時、教経は私の初めての男になるんだと言っていたのよ？それ程までに私を欲してくれていたのだから、当然私を一番愛してくれているに違いないわ」
「……後で風や稟に言いつけておかないとね……教経はボクのことを愛しているって言ってくれたわ。それに、ボクの方が女性としての魅力に勝っていると思うんだけど？」

賈駆がそう言って、私の胸を見てくる。
……賈駆はまだしも、百合のこの体はどういうことよ。琴は……良い友人になれそうね。

「詠？私に喧嘩を売っていませんか？後華琳、私を見る視線が何やらムカつくのですが？」
「……私、勝った」
「む……私は負けていませんよ？」

百合と琴が睨み合っている。

「女の価値は胸の大きさで決まるモノではないわよ？」
「……華琳、気が合いますね。私もそう思って居ます」
「有った方が良いに決まってるじゃない。ボクだって威張れるものじゃないけど、華琳よりは……ねえ」
「……胸好き。良く触るもん」

……官渡の戦いも弘農での戦いも話にならない。それらとは比べものにならない、濃厚な死臭漂う戦場が此処にはある。でもね、私は曹孟徳よ？この戦には必ず勝利してみせるわ。どんな手を使っても、ね。教経の好みについて、曹家の諜者の殆どを注ぎ込んででも調べる必要があるわね。

「はぁ……おい、姐さん方。大将がそろそろ来るからちゃんとしてくれよ？嫉妬するのは良いけど、喧嘩してると嫌われちまうぞ？」

私達が言い争っていると、高順と？忠が入ってきた。
親衛隊を束ねる二人。『二人ともちょいとアレな所があるが、まぁ有能だよ』。教経からはそう紹介された。

「そういうところも全部ひっくるめてボクのことが好きだって言ってくれてるのよ！」
「黙って居て下さいね、高順、？忠。でないと牙突ですよ？」
「ちょ、ちょっと琴！ずるいわよ自分だけ良い娘ぶろうとするなんて！」
「……紫電一閃」
「百合も！？」
「貴方達、黙ってなさい。社会的に抹殺するわよ？」
「……ボクのことも黙ってなさい！」
「……毎回疲れる……というか社会的に抹殺って何だよ……またエラいの釣り上げたな大将は……」
「何か文句があるのかしら？」
「……いえ、御座いません」
「そう。それなら良いのよ」
「チッ……久々に姉貴の剣技が見れると思ったのに」
「テメェは黙ってろ！大体一遍見たことあるが、あれ喰らったら死

ぬだろうが！」
「俺は姉貴の剣技が見れる。姉貴は口封じが出来る。一石二鳥じゃないか！」
「……うん。忠、天才」
「そうだろ姉貴！……くぅ～、久し振りに姉貴に褒められた気がするッ……！」
「俺に利益がないだろうが！」
「感動してるとこ邪魔するなよ……仕方がない。高順、肉まん供えてやるよ、気が向いたら。それで勘弁な」
「……前々から思ってたが、テメェの態度は上司に対するモノじゃねぇな？」
「……いや、それだと高順の兄貴に対する態度も問題にならないか……？」
「何だ！？漢ならはっきり言いやがれ！」
「……自覚無しかよ……質が悪い……」
「……なンだ？エラく賑やかだな」

高順と？忠が漫才をしていると、教経がやってきた。

「皆で早速交流していたのか？」
「そ、そうよ。華琳と話をしていたのよ」
「ええ。中々有意義だったわ」
「ふむ……仲が良いのは良いことだねぇ」
「いや、大将……」
「あら。何かしら高順？」
「……生まれたときから仲が良いなぁと思ってました」
「そう。当然ね」
「それでお屋形様。皆を集めてどうなさったのですか？」
「何。華琳をどう扱うかについて、少し話をしておきたくてな」
「……アンタはどうするつもりなのよ」

「華琳には月や雪蓮と同じような処遇が相応しいと思うンだが」
「理由を聞いても宜しいでしょうか」
「理由は簡単だ。華琳の器量は、もう一人俺が居るようなモンだ。それも、勤勉な。一家臣にするなんてのは勿体ない。その器量に相応しい地位ってのがあるだろう？」
「有能なのは認めるけど、いきなり月や雪蓮と同じっていうのはちょっと、ね」
「教経、私も詠の意見に賛成よ」
「……自分で言うのかよ」
「ええ。だってそうでしょう？この間まで敵として決戦しようと言っていた人間にいきなり自由裁量を与えるなんて、それこそあり得ない話よ。此処は暫く手元に置いて、その赤心に裏がないことを周囲に認めさせる必要があると思うのだけれど。そうでないと、家臣団に不信の種が植えられることになるわ。
その種は水を得なければ芽吹かないものかも知れないけれど、この場合それを芽吹かそうと画策する人間が居るのは分かっているでしょう？」
「……諸葛亮、か」
「そうよ。流石によく見ているわね」
「ふむ……仕方がない、か。じゃぁ華琳達には長安に来て貰おうか。そこで様子を見る、ということで良いだろう？詠？」
「それでいいんじゃない？ボクはそうした方が良いと思うわ」
「ならそうして貰おうか。……楽が出来ると思ったんだがなぁ……」
「ええ。楽はさせてあげるわよ、教経。私は元より、春蘭達も優秀なのだから」
「……なら決まりだな。華琳、お前さんの下にいる奴らについてはお前さんに一任するからな。俺は面倒は嫌いだ」
「ええ。分かったわ。ただ、お願いすることがあると思うけれど、ね」
「まぁ良いだろう。基本的にそっちで話を付けてくれれば多少の面

倒は仕方ない。
……ダンクーガ、？忠。飯食いに行くぞ」
「了解」
「了解ですよ」

これで私の思惑通り、教経と一緒に居られるわね。
思わず笑いが込み上げてくる。

「ふふっ」
「……あっ！華琳、アンタもしかして……！」
「ご愁傷様。一度決定されたものは覆さないものよ？それに、私が言ったことは事実。これが教経にとっても私にとっても一番の答えなのよ」
「う……ボク一人じゃ分が悪いわね……風達と話をして対策を……」

なにやら詠が言っているようだけれど、ね。
この天下に覇を唱えることを諦めたのだから、せめて教経に関してくらいは私の望みを叶えたい。これについては譲るつもりはないのよ。絶対に、ね。

～秋蘭　Ｓｉｄｅ～

「姉者、まだ納得いかないのか？」
「納得出来るはずがないではないか。従うのは良い。だが、華琳様があの男に抱かれていると思うと……」
「はぁ……姉者。華琳様が望んでそうしているのだ。華琳様の望みを我らが妨げる訳にはいかないではないか」

華琳様が平教経に抱かれた。
その事を私から聞かされて、姉者は華琳様にその真偽を問い糾した。
華琳様はそれを否定しなかったばかりか、華琳様は平教経が望んだ通り、平教経のものにされたのだ、と仰った。悔しいけれど、と仰っていたが、悔しそうではなかった。それどころか、今まで見てきたどの華琳様よりも幸せそうに見えた。その事が悔しく、それをもたらしたのが私達ではなく平教経であることをどうしても認めたくないのだろう。

「平教経に華琳様を抱く器量があるとは思えん！」
「姉者……どうすれば納得が行くというのだ？」
「華琳様に相応しい男であるかどうか、証明して貰う！そうだ、それが良い！」
「あ、姉者！」
「……秋蘭、無駄じゃない？貴女が何を言っても納得しないわよ、あの猪は」
「そう言うがな桂花……もし姉者が平教経を傷つけるようなことになれば、ただでは済まないぞ？そもそも華琳様が許さないだろう」

「それが分かっていれば、私みたいに華琳様の言う事を聞くわよ。分からないからああなんじゃない」
「はぁ……大事にならなければ良いのだがな」
「それより、貴女も手伝いなさいよ。先の戦の後始末、私にだけさせるなんて不公平でしょ」
「凪達は？」
「弘農の町を巡回しているわ」
「私としては止めに行きたいのだが」
「……本当に華琳様が従うに相応しい器量があるなら、春蘭も大人しくなるんじゃない？」
「要は姉者を通して器量を確認したい、ということか」
「……さぁ？兎に角手伝いなさいよ」

まあ、大丈夫だろう。体の回復具合を量る為に幾度か立ち合いをさせて貰ったが、その全てで軽くあしらわれてしまったのだから。姉者については、実力で納得させて貰うしかない。それは呑んで貰おう。華琳様の主となるならば、それ位のことは期待させて貰っても良いだろうしな。

「秋蘭様！大変です！」
「どうしたのだ、流琉」
「春蘭様が！」
「……教経様と立ち合っている、か？」
「え？どうして分かるんですか？」
「そうなると思っていたからな。華琳様は知っているのか？」
「あ、はい。華琳様が立会人になっておられます」

それならば問題無いだろう。華琳様も姉者の心情を思った上で、教経様に立ち合ってくれるように頼んだに違いないのだから。

「桂花、後は任せても構わないか？」
「……まあいいわ。後は私一人でも何とかなるでしょう」
「では頼む。流琉、案内してくれ」
「あ、はい」

流琉について行った先で私が最初に目にしたものは、教経様に散々に打ち据えられている姉者だった。

「……どうした、夏侯惇。俺に勝ってみせるんじゃなかったのか？」
「だ、黙れ！」
「……」
「まだ私は負けた訳ではない！貴様が華琳様の主となる器量があると言うのなら、私を打ち倒してそれを証明して見せろ！」
「……」
「何とか言ったらどうだ！」
「黙れと言ったり何か言えと言ったり、忙しいことだ。後な、剣で勝ったから器量があるって訳じゃ無いと思うぜ？」
「ええい！貴様がどう思おうと関係ない！私はお前を打ち倒すだけだ！」
「……お前さんには出来ないかも知れないがね。やってみるかね？」
「私を馬鹿にするなぁ～！」

斬りつける為に大きく踏み込んだ姉者と交差するように、教経様が駆け抜ける。すれ違った刹那に、姉者の胴を薙いだのを辛うじて確認出来た。

「動作が大きすぎる。無駄な動作を省くことだ」
「ぬ……ぐ……」
「そこまで！『膝を屈した方が負け』。そう言って始めたのだから、貴女の負けよ、春蘭」
「くっ……わかりました」
「ふぅ……これで何とかなった、か？」
「ええ。有り難う、教経。これで春蘭も納得してくれるでしょう」
「……平教経、一つ聞かせて貰おうか」
「……なンだね？」
「貴様は華琳様をどう思っているのだ」
「しゅ、春蘭？貴女何を」
「華琳様は黙って居て下さい。……平教経、答えて貰おうか。貴様にとって華琳様は何だ」
「一つ、と言ったのに二つ質問をしている気がするんだがねぇ。……まぁいいさ、答えてやる。
華琳をどう思っているか、だがな。人主として、勢力の主としての華琳を、全部ひっくるめて尊敬している。同盟を組まず、此処まで独力でやって来たことに感嘆せざるを得ない。他人から苛烈だとか冷酷だとか言われた事もあるだろうが、己の理想とする世の中を顕現させる為に自分を貫き通すその姿勢は美しい。そういう華琳を尊敬しているよ、俺は。
女としての華琳をどう思っているのか、という話なら、愛おしく思っている、としか言えない。その言葉にどの程度の想いが込められているのかは、お前に判断して貰うものじゃないし、お前達部外者に口出しはさせん。大した事がないなどと決めつけるようなら、思い知らせてやる。その命を以て購うことでな。
俺にとっての華琳が何か、という問いに対する答えは、だ。失うべからざるモノ。もう一人の俺自身のようなモノ。そういう答えになるだろうな」
「の、教経……」

「……なンだ、照れてンのか？華琳」
「……別に照れてなんか居ないわ」
「頬を朱に染めて言う言葉じゃないな、それは」
「う、五月蠅いわね」
「……今の言葉に偽りはないな？」
「あぁ」
「……ならば良い。但し、華琳様を不幸にする事は許さない」
「好いている女を望んで不幸にしようとは思わん」
「……そうか」
「あ、姉者！」

姉者はそれだけを言って倒れ込んだ。

「……少々きつく打ち据えすぎたか」
「手加減出来なかった、ということでしょうか？」
「あぁ。済まないな、夏侯淵。手加減しようとは思っていたンだが」
「いえ、構いません。それと、私のことは以後秋蘭と」
「……分かった。俺の事は好きに呼べばいい」
「はっ」

姉者が目を醒ましたとき、姉者はすっきりとした顔をしていた。
きっと教経様なら華琳様を幸せに出来るだろう。私はそれを壊そうとする者を排除すれば良い。そう思えるようになったと言っていた。
私も同じ想いでいる事を伝えると、姉者は笑ってこう言った。

今まで通り、二人で華琳様を支えていこう、と。

姉者、言われるまでもないさ。私達二人が居れば、きっと支えることが出来るのだから。

蝶の如く～１３３～（前書き）

２話うｐ……完了……

あ、ネタですのであしからずご了承下さい。

蝶の如く～１３３～

～教経　Ｓｉｄｅ～

弘農を月達に任せ、一旦長安へ帰還した。こちらから率いて行った兵は全て月の指揮下に置き、親衛隊、新撰組だけ率いて帰ってきた。匈奴の兵達は、月の傘下で戦う事に全く抵抗を覚えていないようだった。それどころか、喜んでいる奴らさえ居た。『可憐な美少女サイッコー！』とかいう奇声が気になったが、朔が居るから大丈夫だろう。余程上手く馴致したのだろう。まぁ、月が誠心誠意対応してくれたら大体ああなるとは思うがね。また、華琳の兵も月に預けることになった。まぁ、これは一時的なものになるだろうけどな。

長安に帰還した俺を待っていたのは、風の電波と星の嘘泣きによる虐待だった。

「お兄さん。幾ら風のような体型の女の子が好きだからと言って、他に新しく連れてくるなんてもってのほかなのです。これでは風の希少価値が薄まってしまうのですよ。そんなお兄さんには、電球をケツに突っ込んでバットでアッー！してあげるのです」

「主……主は、やはりこの星に興味を失ってしまったのですね……」

「……風、電球でアッー！ってお前何処でそんなネタ拾ってくるんだよ。というかこの時代には電球なんて無いだろうが。あと星、口元隠せ。笑ってるのが丸わかりだ」

「知らないのです」

「ふむ。面白みのないお方ですな」

いやいや、お前さん達がおかしいだけだから。

「で？」
「とは？」
「からの～？」
「……風、まだ電波受信中なのか」
「来るぅ～！なのです」
「……気に入ってるとこ悪いがな、真似してたらそのうちケツアゴになるぞ？」
「……それは嫌なのです。止めるのですよ」
「で、お前さん達が此処に居るのは何故だね？」
「状況が変わったからなのです」
「状況が変わった？」
「はい。先ずこちらの書状を、主」

星から渡された書状を見る。

「……へぇ。交阯は平家に従う、か。本気か？」
「恐らく本気なのです。士燮自身がやってきているのですよ」
「ほう。自身が刺客としてやって来た、という可能性は？」
「恐らく大丈夫なのです」
「何故だね？」
「星ちゃんと冥琳ちゃんがちょっと脅したのです。雪蓮ちゃんも、大丈夫だと言っていたのですよ」

碌でもないことをしでかした予感がする。

「……脅したってのは何をしたんだ？」
「はあ。冥琳が偽の書状を作り上げて目の前に投げつけ、証拠は挙がっているのだ、と。で、私がちょっと手を滑らせて槍を投げつけたのです」

ちょっとで済ませられるレベルじゃねぇ。
まぁ、史上最高のニュータイプがそう言っているんなら大丈夫だろう。

「……そいつはまた災難だったな。で、士燮は何処にいるんだ？」
「長安で監禁しているのです」
「監禁ってお前さん……」
「冗談なのですよ。ちゃんとお客様として遇していますから」
「……風、何気に怒ってるのな？」
「当たり前なのです。お兄さんは直ぐに浮気をするのです。風を肉奴隷にしておきながら、まだ新しく増やそうと言うのですから」
「その言いっぷりだと俺はとんだ鬼畜さんになる訳だが」
「まぁまぁ、主。別に的外れなことを言っている訳ではありますまい」
「いやいや、星？それだとお前さんの思い人は鬼畜ってことになるぜ？」
「仕方がないのですよ、主。私もしっかり調教されてしまったのですから。死姦したくらいでは離れられぬように、主無しでは生きて行けぬようにされてしまったのです」
「……誰だよ、コイツにそれ漏らしたのは」
「……私」
「……百合か。次から気を付けような？」
「……うん。分かった」
「お屋形様。私はどんなお屋形様でも受け入れて見せますよ？」
「いや、そこは全力で拒絶しような、琴」
「……教経？まさか貴方、そういう趣味があったの？」
「ある訳無いだろうが！分かってて後ずさるのは止めろ！」
「あら。面白いからやってみたのに」

星と風と華琳が組んだりしたらエラく疲れそうだな。

「はぁ……士燮呼んで来てくれ。話を聞こう」
「仕方がないから呼んできてあげるのです」
「はいはい。宜しく」

何で士燮は俺に従うと決めたのかねぇ。

「お初にお目にかかります。交阯太守、士燮と申します」

俺の前に出てきたのは、良い年をした爺さんだった。

「ふむ。俺が平家の当主、平教経だ。早速だがな、士燮。何故お前さんは俺に敵対しない事にしたんだ？漢王朝の正統は麗王朝の方だぜ？来るところを間違えたんじゃないのか？」
「卦にそう出ましたからな」
「卦？」
「そうです。要は占った結果、敵対すれば碌な事にならない、という卦が出たからなのですよ」
「ふぅん。占いなンぞで出た結果に従うのか？」
「これで私の占いは良く当たりますでな。それに貴方様のように占いなぞに頼らず、己の理性のみを頼みとしてこの乱世で己が生を貫かんとする人は希有なものです。我々のような人間は、その拠り所として占いなどを当てにして居るのですよ」
「そうかね？少なくとも華琳はそうではないと思うが」
「まあそうね。自分の運命、等というものに従うなんて馬鹿らしいわ。それは従わせるものであって従うものではないのだから」

「曹操殿、ですな。お二人のような人間ばかりであれば、あなた方二人が英傑と呼ばれることはなかったでしょうな。そうでない人間ばかりであればこそ、あなた方が際だった存在となっておるのです」
「まぁ、物は言い様だな。で？本当のところは？ただ卦に出たからといって、それに従うような低能でもあるまい？態々やってきて、何を見ようというのかね？」
「……さすれば、平家の命運を」
「ハッ。で、お前さんの目にはどう見える？」
「貴方様自身の星は、危ういもので御座いますな」
「ほう。のたれ死ぬ、ということかね？」
「戦で死んだり暗殺されたりする星ですな」
「だが生憎俺はまだ生きているぜ？」
「そうですな。貴方様の周りにある星がそれを全て防いでおるようです。お心当たりは御座いますかな？」
「有りすぎて困るな。暗殺についてはダンクーガ辺りが始末しているンだろう。戦で死ぬ件については皆のおかげなんだろうさ。俺一人ならとっくの昔に死んでるだろう。何度か死んでもおかしくない、危うい橋を渡ってきたことだしな」
「成る程。此処まで来れたのは己の力だけではない、と？」
「何を当たり前のことを言っていやがる。国という形を取る以上、俺一人で全てが出来る訳ではない。勿論俺自身の器量ってのは有るだろうが、俺は皆が纏まる為の御輿のようなものなンだよ。これまで皆が俺を支えてくれたから今の平家がある。そしてこれからもそうだろうさ。それに気付かず、感謝出来ないようになったらお終いだよ。いや、無くなっちまった方が良い。そんな奴が一国の主になれば、どうせ碌な事になりはしないンだからな」
「……やはり間違いはないようですな」
「はぁ？」
「貴方様の星自体は、いつ消えてもおかしくないものなのですよ。その輝きは力強く、また気高い。が、同時にまた危うさも秘めてい

る。それはそこにいる程?殿も感じておられるようですが。
ですが平家の命運となると話は別で御座いましてな。実は最初は袁紹殿が天下を掴む機会を与えられておりました。まだ并州牧であった貴方様を討伐し、その後来るべき曹操殿との戦の前で一度立ち止まって内政を充実させれば良かったのです。それだけで天下を掴めたのに、そうしなかった。与えられた機会を掴まなかったものは、今度は逆に大いなる災いを得るのです。
そして今回、貴方はその機会を掴まれた。そこにいる曹操殿を救ったことで貴方は終に天をも掴むことになるでしょう。貴方様自身の星の危うさは、その周囲にある星の光が消し去るのです。恐らくその星として最良の星を貴方様は得られたのです」
「俺は星占い師の戯言を聞きたい訳じゃ無い。人間・士燮が見た俺の評価を聞かせろ」
「そうですな……史上に名を残す類い希なる名君になられるでしょう」
「……何故そう思う」
「管夷吾や鮑叔牙、藺相如の如き賢臣と、廉頗や王翦、楽毅の如き名将、そして申包胥や程嬰、公孫杵臼の如き忠臣。これら全てをその懐に抱えて居ながら慢心することがなく、これを能く御し、己の欲の為ではなく民の為に天下一統を望む。史上これ程の家臣と器量を有する君主は居りますまい。それ故に、そう思うのです」
「少々褒めすぎだな。俺はそんなご大層な人間じゃない」
「いえいえ。お兄さんはご大層な人間なのですよ。風もそう思っているのですから」
「……精々暴君として終わらないように用心しておくさ」
「そういうところで御座いますかな。人は変わるものです。それを念頭に置いて、悪い方向へ変わらぬように留意出来る人が果たしてこの世に幾人居ることか。態々長安まで出てきた甲斐がありました。貴方様に従うことにしたのは間違いではなかったようですからな」
「まあいいだろう。悪いようにはしない。裏切らない限り、な」

「それについては信じて頂くより他にありませんな」
「信じてやるさ。ただ、全てが今まで通りという訳にはいかないだろうがね」
「それは致し方ありますまい。臣従を決めたときにある程度は覚悟をしてきておりますからな」
「ならば良い。度量衡については全てこちらが指定したものに合わせて貰うぞ？軍制についてもだ。俺に任じられた地方領主になる訳だが、異存はあるかね？」
「御座いません。むしろ宜しいのですかな？領地替えくらいはされると思っておりましたが」
「その土地のことを知っている人間が統治するのが望ましいだろう。無論、領民が従わなければお前さんをその器量無しとして処断することも織り込み済みの決定だ。……民の為に努めろ」
「はっ」

これで荊州が二方向から攻められることはなくなった、な。
果たして諸葛亮の心中は如何様なものかねぇ。華琳を俺にかっ攫われ、今また交阯も戦わずして俺の手に渡った。もうお前さんが俺に勝つ目はないと思うンだがね。
……いや、一つだけ有るか。戦場で俺を討ち果たすこと。それさえ出来れば奴さんの勝ちだ。
それさえ出来れば、な。

～高順　Ｓｉｄｅ～

「なぁ大将。本当にこの辺りにいるのか？」
「そう聞いたんだがな。兎に角捜せ。卑弥呼と貂蝉が付いてるとは言え、危ないことには違いない。まぁ、違う意味でも危ないんだが」
「はぁ？」
「まぁいいから捜せ」
「了解」
「了解ですよ」

俺たちは今弘農のとある集落近くの山に来ている。平家お抱えの医者である凱が、治療の為に立ち寄った集落で女達を掠っていく山賊の話を聞き、助けてやろうとお供の筋肉二人を連れて山に入ったらしい。大将はお供の二人から書状を受けてこれを知り、奴らを助ける為に親衛隊を率いてやって来た。

「ったく。良くこんな山に入ろうと思ったな。罠だらけじゃねぇか」
「琵琶丸も良くやるよ。俺ならさっさと兄貴に言いつけてのんびりしているけどな」
「しょうがないだろう。勇者王だからな」
「勇者王？」
「何でも無いさ。忘れておけ」
「はぁ」

こんな時でもいつも通りの大将だ。

「おい高順！」

「何だよオッサン」

「儂の下に付いている奴がな、この先の森の中で火を見たと言っとるんだ。怪しいと思わんか」

「魏越のオッサンはどう思う？」

「怪しすぎだろう。と言うか？忠。お前さんにまでオッサン呼ばわりされる筋合いはないぞ！」

「暑苦しいオッサンだな」

「御遣い様！御遣い様までそのようなことを！」

「……未だに御遣い様って呼ぶのはオッサンとその組下だけだぜ？」

「事実だから良いではありませんか！思い起こせば太原で……」

「分かった分かった。また今度聞いてやるから後でな」

「本当で御座いましょうな！？」

「あぁ、死ぬまでに一度だけ聞いてやるよ」

「そんな！」

「……大将、そこに行ってみる、で良いか？」

「あぁ、宜しいンじゃない？」

「ぬぅ……」

そのまま森の奥に移動すると、オッサンが言った通り、確かに火が見えてきた。

「どうやら間違いなさそうだな。揉めてるらしい」

「凱達は無事か？」

「『ぬふぅ～ん』とか気味が悪い声が響いてるが……？」

「なら無事だな」

「とっとと片付けようぜ、高順」

「よっしゃ！突っ込むぞ！」
「あぁ、ダンクーガ」
「何だよ」
「『誰だ！』とか聞かれたら、ちゃんと教えてやった通りに名乗りをするからな？」
「分かってるよ」

ったく。まぁ格好良いし親衛隊員も皆口々に『イカス！』とか言ってたから問題無いんだろうけどな。

「良し。なら行くぞ！」
「三人一組で敵に当たれ！こんなくだらない奴らに怪我何かするんじゃないぞ！」
「オラァ！行くぞ！」
「ガハハハッ！思い知らせてやるぞ！」

一斉に親衛隊が山賊共に掛かって行く。

「死ねよやぁ！」
「邪魔だ！」
「おぉ、親衛隊ではないか」
「ということは、教経ちゃんもいるのねぇん」
「教経か！？」

どうやら三人とも無事なようだな。一安心だ。凱には親衛隊員が皆世話になっているんだ。その恩を返す前に死なれちゃ困るんだよ。

「ちぃっ！何だ貴様らは！」
「フッ……教えてやろうじゃないか！ダンクーガ、やるぞ！」
「了解」

親衛隊員達は皆戦いながらも期待した目で時折こちらを見ている。
……やぁぁぁぁってやるぜ！

「闇の中こそ正義が光る！」
「僅かな灯、勇気にくべて」
「燃やせ男の、大☆往☆生！」

大将、ノリノリだな。

「正義ときっく、勇気とぱんちが、あみーごだ！」
「みんなのために帰ってきたぞ！」
「受けよ無敵のこのぱわー！」
「鉄拳！制裁！エルドラ、ソウル！！」

……決まったな。大将、俺、？忠、オッサンの四人で織りなす最高に格好良い名乗り。
親衛隊員から一斉に『イカス！』と声が上がった。山賊共は余りの格好良さに呆気にとられているようだ。

「そら！やっちまえ！」
「て、テメェら頭イカレてんのか！」
「何だとコラァ！格好良いだろうが！ぶっ飛ばしてやるぜぇ？エル・インフェルノ・イ・シエロ！」

大将が両手を合わせて瞬動しながら山賊共の頭っぽい奴を正面からブン殴る。

「アーーーーーディオス、アッミーーーーーーゴ！」

山賊共の頭はもの凄い勢いで上空に舞い、そして墜ちてきた。
丁度良いから俺も追撃させて貰おう。

「万有引力ありがとう＜フリーフォールグラッチェ＞！」

思いっきり踏んづけてやると、蛙を潰したときのような声がした。
……勝ったな。

「教経、済まないな」
「まぁ気にするな。礼なら卑弥呼と貂蝉にするんだな。二人が俺に知らせてくれたンだからねぇ」
「そうか。二人とも、有り難う」
「良いのよぉん、華佗ちゃん」
「だぁりんの為だからのぅ」
「所で教経、さっきの名乗りは？」
「……フッ……流石は勇者王。気になるようだな？」
「勇者王？……よく分からんが、兎に角あれを見るとこう、何か思い出しそうな気がして……」
「……ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフォ……」
「……ウィータ！」
「どうしたんだ、琵琶丸」
「いや、よく分からないが言わないと駄目な気がして……」

流石は大将の知り合いだな。ちょっとおかしい奴が多い。

「ンじゃ帰るぞ。俺は満足した」
「了解」
「了解ですよ」
「ラーサ！」
「……オッサン、それは？」

「よく分からんが御遣い様が『分かりました』という代わりにこう言えと」

「……まぁいいや。帰るぞ！」

親衛隊はどんどんおかしくなって行くな。まともなのは俺だけ、か。

俺がしっかりしないとな。

蝶の如く～１３４～（前書き）

初の予約投稿。どうなるんだろうか。
募集した需要に供給してみます。

もげろ☆

蝶の如く～１３４～

～風　Ｓｉｄｅ～

お兄さんが弘農へ出陣して華琳ちゃんを助けて来ました。風の予測通り、お兄さんは華琳ちゃんまでも釣り上げて見せたのです。太公望の面目躍如と言ったところなのです。

風が見たところに拠れば、華琳ちゃんはお兄さんと良く似た思考をし、お兄さんと良く似た理想を抱き、お兄さんと良く似た価値観を有しているのです。士燮さんが言っていましたが、華琳ちゃんはお兄さんにとって最も大きな支えとなり得る存在なのです。

まあ、お兄さんはその存在自体は特別視しているようですが、女性としては風達と同じように扱っていると思うのです。それが分かるから皆色々なことを言いつつも受け入れているのだと思うのですが。

今日は日頃風のことを放置しているお兄さんが、その埋め合わせをどうしてもしたいと言わｓ……言ってくれたので仕方が無くお兄さんに埋め合わせをさせてあげているのです。

「で、風。これは？」

「膝枕なのです。お兄さん、気持ち良いですか？」

「そりゃ気持ち良いがね。ついでに言うと風の良い香りもする」

「それは当然なのです。風は身だしなみをきちんとする女の子なのですよ」

「成る程。昨日風呂に入っていたのは俺の為だった訳だ」

「……ぐぅ」

「……久し振りだな。だが断るッ！」

「ひゃあ！お、お兄さん、何をするのですか」

「いや、胸のポッチをこう、テイテイッって感じで突いてみたんで

すが。人差し指で」
「……やっぱりお兄さんは変態なのです」
「褒め言葉として取っておこう」
「褒めては居ませんよ？」
「……でも怒っても居ない、と」
「……お兄さんが変態なのは今に始まったことではないのですよ」
「変態、ねぇ……」

そう言ったきり黙ってしまい、再び膝枕されるお兄さん。
……膝枕されているので、怒っては居ないと思うのですが。

「……お兄さん？」
「ん～？」
「その、ちょっとだけ風も言いすぎたと思うのです」
「……気にしてないよ、風。風がどういう女ン子かってのは分かってるつもりだからさ」

お兄さんは膝枕されたまま、風の左頬を左手で撫でて笑っていました。
お兄さんとそういう関係になったのに、まだドキリとさせられることがあるのです。このお兄さんが抱いている風への好意が、女の子が増えることで薄まったりしたら嫌なのです。そんな事はないと思いつつも、そうなってしまうかも知れないという思いもまたあるのです。
風は、お兄さん以外にこんな感情を抱けそうにはありません。でもお兄さんは風をどう思ってくれているのかは分からないのです。好きだ、とは言ってくれるのですが。それでも不安になるのです。

「……ずるいのです」
「何が？」

「風ばかりがお兄さんの事が好きみたいで、不安になるのですよ」
「……風」

お兄さんは体を起こして真っ直ぐ風を見つめてきます。

「……しょうがない娘だな。ちょっと付いて来ようか、風」
「何処へ行くのですか？」
「まぁまぁ。それを言ったらつまらないだろう？」
「ちょ、お兄さん」

お兄さんは何やら思いついたようで、ちょっと笑いながら風の手を握って引っ張って行くのです。風の手を引っ張って行った先は……執務室？

「ほい、到着っと」
「……お兄さん、お仕事をするのですか？」
「いやいや。今の流れでいきなり仕事するとかあり得ないだろうに」
「では何をするのですか～？」
「まぁちょっと待っててくれよ」

お兄さんはそう言って、硯と筆、紙を取り出して何やら書き始めました。

「よ……っと」
「……お、お兄さん、それ……」
「前のはさ、風がそう書かせたものだろう？だから俺が自発的に書いてみようかな、と思ってねぇ」

『我愛風』
そう書いた紙を、丁寧に折って風に差し出してきます。

「風、受け取ってくれるかね？」
「……仕方がないから受け取ってあげるのです」
「そうかね。せっつくようで悪いンだけどな、風。返事、聞かせてくれよ」

以前お兄さんが書いたものは、ちゃんと大切に保管してあるのです。
いつかお兄さんが自分で書いてくれたら嬉しいと思っていたのですが、恋文を貰う前に風からお兄さんを襲ったので全くそんな事にはならなかったのです。
まさか、今こうやってちゃんと自分で書いたものを風にくれるなんて、思っても見なかったのです。

「……風もお兄さんのこと……」
「ん～？聞こえんなぁ～？」
「……知らないのです」
「……ははっ。風らしい。素直じゃないな。でもな、風？」

お兄さんが顔を寄せてきて、風の耳元で囁きます。

「……俺はそういうところも含めて、風のことを愛しているよ……」

嬉しくて、お兄さんに抱きついて。
そのまま口付けをして。
執務室なのに、お兄さんと致してしまったのです。

事が終わってお兄さんの頭を抱えながら、ちゃんと返事をしてあげたのです。今日はお兄さんが風に恋文を書いてくれたから、特別に返事をしてあげたのですよ。

『風も、お兄さんのこと、愛しているのですよ』

お兄さんはそう言った風にちょっと目を見開いた後、薄く笑って優しく抱きしめてくれました。

……本当に仕方がない女誑しなのです。

～星　Ｓｉｄｅ～

「主。こうして主と二人で居るのは１２日と８刻ぶりですな」

「……何処のノインだよ」

「のいん？」

「いやいい。こっちの話だ」

「恒例のお巫山戯時間ですか」

「ま、久し振りだろ？」

「まぁそうですな」

「で、星？寝起きを襲撃してくれたのは一体どういう訳だね？」
「さぁ、私に甘えたまえ」
「……分かってやってるのか？そうなのか？」
「何がですか？」
「……いや、いいさ」

不思議なことを言う主だ。折角私が甘えさせてあげようと思っていたのに。何を分かっているというのであろうか。主のことであれば、分かっているつもりですぞ？

「で、本当のところは？」
「最近主が華琳にばかりかまけているような気がしましてな？此処で一つ、この星の魅力というものを再確認させて差し上げようかと思いまして」
「再確認、ねぇ」
「何ですかな？」
「現在進行形で再確認はしてると思うンだが」
「そうですか？」
「……ったく。寝起きに同衾して服をはだけさせて、体押しつけてくるからこんなになっちまってるだろうが」
「ふむ。どうやら主はケダモノ並みのようですな」
「ケッ。星、こうなった責任はきっちり取って貰うぜぇ？」

主が少々強引に私を抱き寄せ、そのまま組み伏せる。

「おぉ、主。荒々しいですな……んっ」
「……荒々しいのは怖いか？」
「……怖くはありませぬ」
「嘘吐け……ちょっとは加減するが、それ程押さえられるとは思えないから覚悟はしといてくれ」

「あ、主ぃ……」
「お前さんが可愛らしいのが悪いんだよ、星。下着も付けずに同衾するなんざ邪道だぜ？まぁ、それにまんまとのっかちまってる俺が言えた義理じゃないが、ね」

主は荒々しく、何度も私を抱いた。最初は少し怖かったが、何とか自分を抑えようとしている主を見て安心出来た。これが体だけが目当てなら、とっくに乱暴にされていただろう。玩具のように扱うのではなく、気遣いながら、しかしそれでも押さえられない、といった風情の主を見ると、主が私をどう思っているのか、言葉には出来ないがちゃんと伝わってくる気がする。

しかし、自分から誘いを掛けてそう仕向けたとは言え、こうも反応してくれるとは思っても見なかった。
やはり主に関しては、それ程心配はしなくても良いのかも知れない。
この主が、私から離れて行ってしまうとは思えないから。

「で、星。誘惑したのは俺が星に興味を無くすとか思ったからなのか？」
「いえいえ。主はそんな事はないと言ってくれていたではありませんか」
「ンじゃ何でだ？」
「体だけが目当てになっては居ないか、と思いまして」
「……ちょっとショックだな」
「しょっく？」
「あ～、なンだ、その、そう思われていたことが衝撃的で落ち込み

そう?的な意味だよ」
「しかしそう思われても仕方がないと思うのですが」
「そうかも知れないけどなぁ。でも星にそう思われるってのはやっぱり俺に問題が在るのかもな」
「そうですな。そう思いますぞ?」

出来れば顔を合わせる度に愛を囁いて貰いたいものだ。

「……ならこれから暫く、一緒に過ごすが抱きはしない、という事にしようか」
「……は?」
「いや、だから一緒に居ても抱かないようにしようかなと。皆を」
「それだと逆効果になりませんかな?」
「そうか?」
「自分に興味を無くしたのではないか、と思い詰めると思いますが。稟などは特に」
「ンじゃ稟は抱く」
「……他にもそういう娘はいると思いますが?」
「なら直接訊いて不安に思ってる奴は抱かないようにするさ」

むぅ。まさかそういう結論を出すとは思っても見なかった。
私としては愛を囁いて欲しかっただけなのだが、話が此処まで進んでは退くことが出来ない。

「……ならばそう為されるが宜しいかと」
「差し当たっては星、だな。今日から暫くはさ、抱かないように努力するから」

……自業自得とは言え、これは少し酷いのではないか。
他の女に訊けば、皆抱いて貰わないと困ると言うに決まって居るで

はないか。私だって主に抱いて貰いたい。

「……星？何で不機嫌になってるンだよ」

「知りませぬ」

「？まぁいいか」

良くはありませぬ。

「取り敢えず起き出して飯でも食いに行こうか、星。もう昼だから」

主はそう言うとそそくさと服を着始めた。

……はぁ。これは失敗した。まさかこんな事になるなんて。

あれから主と昼食を取り、買い物をしたり服を見たりしていた。

黒乃駆流の店で試着をする際に、必ずといって良い程覗こうとしてきたはずの主は覗いてこなかった。自制のために覗かないようにしているのだろう。覗いてきたら、扇情的な光景を目の当たりにさせて挑発しようと思っていたのだが、覗いてこなければ意味がない。

私の部屋に二人して帰って来ても、気分は晴れなかった。

「……はぁ」

「……なぁ星。一緒に居て愉しくないか？」

「い、いえ。そのようなことは」

「にしては溜息吐きっぱなしなんだがね。ちょっと自信なくなってくるな……」

これは不味い。私が主として楽しめないなどと思われては堪らない。
全てが裏目裏目に出ている。
……正直泣いてしまいそうだ。

「あ、主。その、愉しくないことはないのです」
「しかしそう溜息を吐かれる身になってみてくれよ。そう思っても仕方ないだろう？」
「そ、それはそうですが」
「……はぁ。今日はこれでお開きにしようか。体調が悪いのかも知れないしな」

私の部屋を出て行こうとした主の裾を思わず掴んで引き止めた。

「……嫌です」
「星？」
「……私は、ただ主に愛を囁いて貰いたかっただけなのです。抱かれないというのは、嫌です。私だって主に抱かれたい」
「……星……」
「……私だけ抱かれないなんて、嫌です……」

自分が悪いのは分かっているけれど、どうしても嫌だった。このまま主が出て行ってしまったら、本当に主は暫く私を抱いては下さらないだろう。それは、嫌だ。
そう思って、恥を忍んで主に真意を告げるのは恥ずかしかった。情けなくて、ちょっと泣いてしまった。

「……馬鹿だなぁ、星」

主は私を引き寄せて、抱きしめてくれた。

「俺は星のこと、好きだって何度も言ってるじゃないか。それは変わらないよ」
「うぅ……」
「……ちゃんと気付いてあげられれば良かったのにな。御免な、星」
「……いえ。主は悪くないのです。私が素直にそう言わず、意地を張って主にそうして欲しくないと言わなかったから……」
「いいや。星は悪くないよ？俺がちゃんと気付いてあげられれば良かったンだから」
「ですが」
「ですがも糞もないの。自分が好きな女の子の事くらい、ちゃんと分かってあげなきゃいけないんだよ。星がどういう娘か、俺は分かってる筈なんだから。ちょっと意地っ張りで、ちょっと天の邪鬼で、ちょっと見栄っ張りで。そんな星だって分かってるンだから、俺が気付いてあげなきゃいけないんだよ」
「主……」
「何となく分かるから言っておくけどな。こんな事じゃ愛想尽かしたりしないからな？というか、最後の最後にちゃんと言いだしてくれる星が、可愛くてより一層愛しくなったよ、星」

その言葉に、恥ずかしくなって俯いてしまう。

「……ということはさ、星。抱いても良いんだよな？」
「……はい、主」
「良かったよ。我慢出来そうになかったからさ」

本当はそんな事もないだろうに、自分が我慢出来ないから、と。そう言ってくれた。
寝台に押し倒され、寄せてくる快楽の波に身を委ねながら、この人で良かったと、そう思った。

蝶の如く～１３４～（後書き）

死ねば良いのにね☆

蝶の如く～１３５～（前書き）

死ねば良いと思うよ☆

そう言えばいつの間にか１０００万アクセス突破してました。
今後とも、拙作を宜しくお願い致します。

蝶の如く～135～

～華琳　Ｓｉｄｅ～

教経と共に歩む。

そう決めた私は、兎に角教経の側に居ようと画策し、長安にやってきた。

教経とそういう関係にある女は、私を含めて１３人。奥向きのことを取り仕切っている星と風に拠れば、一日交替で当番制になっているらしい。今此処に居ない女達については、彼女達が教経に逢う機会が出来たら優先的に当番に割って入る、ということになっているらしい。本当に良く考えられている。教経を皆で共有する、という思想の元でこういう取り決めが為されているようだ。

私と教経がこうなったことについて、春蘭も秋蘭も納得してくれたようだけれど、最近少し問題が在る。

「華琳様！何をのんびりとされているのです！こうして居る間にもあの男は他の女を口説いて抱いているのです！ご命令頂ければ、今すぐその首捕まえて此処に連れて参ります！」

……春蘭の言動に。

教経が私に相応しい男であることは認めましょう、と言ってくれたのは良いのだけれど、教経が他の女と共に過ごすということは思っていなかったらしく。こうして教経を連れてくる、と言って聞かない。

「はぁ……春蘭。それをすれば、私は教経に嫌われてしまうわよ？

それでは意味がないのではないかしら？」
「し、しかし華琳様！あの男は華琳様のものではありませんか！」
「……どうしてそういう結論にたどり着いたのかしら……」
「……恐らくですが、教経様が戦場で華琳様に行った口説を、華琳様が嬉しそうに話していたからかと」
「……どういうこと？」
「姉者の中では、『華琳様は教経様のもの』ということが即ち『教経様は華琳様のもの』という結論に直結しているのではないかと思うのですが」
「……何処をどうやったらそうなるのよ」
「それを私に言われましても何とも……」
「華琳様！兎に角あの浮気者を連れて参ります！」
「こら！待ちなさい！春蘭！」
「あ、姉者！それは流石に不味いぞ！」
春蘭が部屋の扉を蹴倒してもの凄い勢いで走っていった。
……これは止めるのはもう無理ね……ご免なさいね、教経。

「よう、華琳。元気そうだな」
「ええ。貴方も元気そうで何よりね、教経」
「あぁ。おかげさんでな。で、説明してくれるンだよな？この状況」
春蘭が教経の首裏をひっつかんでもの凄い勢いで、しかも何故だか得意満面で戻ってきた。まるで鞠を口にくわえて帰ってきた犬のように。
教経は夕食を取っていたようで、茶碗と箸を持ったまま春蘭に掴ま

れ、ぶら下げられている状態だった。
……不謹慎だとは思うけれど、ちょっと面白いじゃない。

「……ご免なさい、教経」
「……なンで笑ってるンだよ華琳」
「だって仕方ないでしょう!?貴方、今の自分の様子を客観的に想像してみなさいよ!」
「仕方なくないンだよ!こっちは愉しい愉しい夕食の一時を過ごしてたってのに、いきなり部屋の扉ぶち破って入って来やがって!味噌汁吹き出しちまっただろうが!ダンクーガと?忠がはね飛ばされて壁に埋もれてたぞ!あいつらを苦もなくぶっ飛ばすとか、一体どうなってるンだよこの暴走機関車は!」

いつも部屋の前で警護している高順と?忠が、春蘭にはね飛ばされた?

「本当なの?春蘭」
「は?」
「だから、高順と?忠をはね飛ばしたというのは本当なの?」
「分かりません!」

満面の笑みでそう答える。

「……姉者、高順は知っているな?」
「?ああ。あのいつも暑苦しい男だろう?」
「……いや、お前さんの方が暑苦しいと思うンだがね……」
「何だ?何か言ったのか?」
「いンや、別に」
「?」
「それで、だ。姉者。教経様を連れ出す際に、何かにぶつかったり

しなかったか？」
「秋蘭、私を何だと思っているのだ！確かに扉は開きっぱなしになってしまったが、それ以外は別におかしな事にはなっていないぞ！」
「……開きっぱなしになってしまったじゃなくてだな、扉自体無くなっちまったンだが」
「ええい！華琳様の伴侶となる男なら、小さな事をうだうだと言うな！」
「……要するに、無意識にぶつかってはね飛ばしたということかしら」
「……どうやらそのようですが」
「……あいつらトラウマにならンだろうな」
「虎馬とは何だ！」
「何でも無いよ」
「むぅ……私を馬鹿にしているのか！」
「落ち着きなさい、春蘭」
「で、ですが華琳様！」
「春蘭？」
「か、華琳様～」

はぁ……仕方ないわね春蘭は。

「兎に角教経、悪かったわね」
「まぁ良いけどな。今日は誰とも一緒に居ない日だったから」
「あら、そうだったかしら」
「あぁ。偶々な。これが他の人間、風や詠と居る日だったら……いや、碧や雪蓮と居る日だったら間違いなく命の遣り取りだぞ、華琳」
「そうでしょうね。容易に想像出来るもの。だからこそ、止めようとしていたのだけれど」
「良く言って聞かせておいてくれ」
「ええ。ただね、教経。今日一人で居る日であるなら事前にそう言

って貰いたいのだけれど」
「……言ったら押しかけてくるだろう？お前さんは」
「当たり前ね」
「はぁ……だから言わないんじゃないかね」
「あら。私が行ってあげるというのに喜びもしないなんて。ちょっと調子に乗っているのかしらね」
「そうじゃなくて、体が持たないんだよ」
「分かってるわよ」
「なら言わせるなよ」
「まあ良いじゃない。ところで教経、夕食、まだなんでしょう？」
「あぁ。途中で引っ張ってこられたからな」
「そう。それなら私が何か作ってあげるわ」
「……消し炭が出てきて、『さぁ、食べなさい』とか笑顔で言わないだろうな？」
「……貴方ね。私がそんなもの作る訳がないでしょう？ちゃんとしたものを食べさせてあげるわよ」
「……なら楽しみに待たせて貰うさ」
「そう。ならそうなさい。秋蘭。料理してくるから、その間教経のことお願いね。親衛隊が居ない間、きちんと警護しておいて」
「はっ」
「か、華琳様！私は……？」
「貴女は私の警護をするのでしょう？」
「はいっ！華琳様！」

消し炭が出てくる、なんて。失礼極まりないわね。貴方を驚かせてみせるわよ、教経。腕によりをかけて、絶対に美味しいと言わせてみせるんだから。

「……凄いな、これは」
「そう？この位大した事はないわ」
「いやいや、大したものだろう。味は分からんが見た目は大したモンだよ」
「一言多いわね」

全く。貴方に初めて食べさせるものなのだから、ちゃんと味見もしてあるし自信のあるものを作ってきたのよ。

「冗談じゃないかね」
「冗談でも言うものではないわよ？」
「分かったって。悪かったさ。ちょっと感動してたンだよ」
「それはそうでしょう。これだけの料理を目の前にしているのだから」
「そうじゃなくて、華琳がこれを俺の為に作ってくれたって事にさ」
「べ、別に貴方の為というわけではないわ。私達もまだ夕食を食べていなかったからよ」
「いつも自分でこれだけのものを作ってるってことかね？」
「あ、当たり前じゃない」
「華琳様、華琳様の手料理なんて久し振りです！」

……春蘭。貴女ね……

「いやぁ～、俺の為にこんな立派な料理を作ってくれたなんてな～？」
「う、五月蠅いわね。偶々気が向いたからよ、偶々」
「はいはい」
「良いから食べなさいよ」

「ふむ……あ～ん」

教経が馬鹿みたいに口を開けている。

「……何？」

「……いや、食べさせてくれるんじゃないのか？」

「……何を考えて居るのよ、貴方は」

「いや、そう言われてもな。そういうモンじゃないのか？これ」

「はぁ……食べさせてあげるから口開けなさい」

「あ～ん」

教経の口元に料理を掬って差し出す。そのまま教経は一口で食べた。

……味見は十分にしたけれど、教経の好みに合うのかしら。

「……」

「……何よ。何とか言ったらどうなの？」

「……ぃ」

「は？」

「うーーーまーーーいーーーぞーーーー！！！！」

「五月蠅い！」

「……ってぇな華琳！何しやがる！」

「五月蠅いのよ！」

「仕方ないだろうが！美味いモン喰ったらこうするのがお約束なンだよ！

「そんなに美味しかったの？」

「いやぁ～、正直想像以上だわこれ。こんな美味いとは思っても見なかった。味付けも丁度良い感じだし、正しく俺好みって感じでさ」

「そ、そう。良かったわね」

……頑張った甲斐があったわね。

「あぁ。ほら、次食べさせてくれよ」
「し、仕方ないわね。口開けなさい」
「あ～ん」

そうやって教経に料理を食べさせた。教経はかなりの健啖家のようで、あっという間に食べきってしまった。勿論、その間私達も自分の分を食べていたのだけれど。

「美味かったよ、華琳。お見それしました」
「お粗末様でした」
「お前さん、良い嫁さんになるぜ？華琳」
「……そ、そうかしら」
「あぁ……どうしたンだ？」
「……教経様。華琳様が嫁ぐ先など一つしか無いではありませんか」

秋蘭がそう言うと、教経も自分の発言の意味に気が付いたようで、少し照れていた。

「あ～、その、まあ、なンだ。兎に角そういうことで。ごっそさん」

そう言ってそそくさと部屋を後にした。

「華琳様、良かったですね」
「……な、何がかしら？」
「ふふっ。さて、私には分かりかねますが」
「秋蘭！」

そうやって照れ隠しに怒っては見たものの、照れ隠しであることは秋蘭にはお見通しである訳で。

全く。教経のせいでこんな思いをさせられているのよ！

……『良い嫁さんになる』、か。

べ、別に何とも思っていないわよ？二人の生活を想像して嬉しくなったとかそういうことはないのよ？

……何よ？だ、黙ってなさい秋蘭。

蝶の如く～136～

～田豊　Ｓｉｄｅ～

曹操を下すべく麹義殿を総大将とした軍を河南に派遣し、潁川で平家を牽制する為に滞陣していた我々の元に、派遣した麹義殿からの使者がやって来た。少し早い気もするが、麹義殿の軍才は袁家でも一、二を争うものだ。この期間で曹操を下すことも有りうる。

これで残すは平教経のみ。劉表からは新皇帝である麗羽様へ臣従する旨使者がやってきている。大小様々の群雄がしのぎを削ったこの乱世で、終に袁家と平家の２つを残すのみとなった。

「孔明殿、麹義殿から使者が来たとのことでしたが」
「はい。これから引見するところです。人を呼びにやらせようと思っていたところです」
「丁度良かったようですな」
「はい。もうじき此処にやってくるでしょう」

暫く孔明殿と当たり障りのない会話をしていると、使者がやって来た。

……その使者の顔は、戦勝に沸く者のそれではなかった。

「ご報告申し上げます。我が軍は洛陽を陥落させました」
「そうですか。それは大慶です」

孔明殿も恐らく使者の顔や挙措から何かしらを感じておられるのだろう。いつも冷静沈着でいらっしゃるが、今日はより一層そうあろうと心掛けておられるように見える。

「……それで、何があったのですか？」
「……はっ。弘農にて曹操を追い詰めましたが、後一歩という所で平家に邪魔をされ、目標を達することが出来ませんでした」
「……それだけではそのように重苦しい空気を身に纏うことはないでしょう。もう一度訊きます。何があったのですか？」
「……追い詰めた曹操を平教経が救い出し、これを傘下に収めました」
「どういう事だ？曹操が平家に降ったと言うのか？」
「はっ。曹操が平教経と共に長安へ移動したことから、間違いないものと思われます」

馬鹿な。曹操は誇り高い女だ。そうであればこそ、これまで誰とも同盟を組まずに独力でやって来たのだ。その彼女が誰かに従うなど、信じられない。

「御苦労様でした。麹義さんには引き続き洛陽に駐屯して膠着状態を維持しつつ、国元の審配さん、逢紀さんと連携して并州を押さえるように、と伝えて下さい」
「はっ」

使者が出ていった後も、残って孔明殿と話をする。

「孔明殿。私は信じられぬのですが」
「そうですか。確かに、予測していた事態の内で最もあり得ない事態になりましたが」
「予測されていた、のですか？これを？」
「はい。ですが、最もあり得ないこととして考えて居ました。平教経が滅ばんとする曹操に味方する理由がありませんし、もしそれがあったとしても曹操が平教経に従う理由がありません。これまでの

事績から考えても、この二人は好敵手になり得ても主従にはなり得ないのです」

「……曹操が一時的に平教経に従っているだけ、という可能性もありますな」

「はい。そう思います。彼女程の人間が平教経に救われたからという理由で臣下として彼に仕えるなど考えられませんから」

「成る程。それであれば話は簡単ですな。曹操の動向を探り、平教経が国元を空けたその時に彼を裏切るべく活動するように仕向け、来るべき平家との決戦に備えましょう」

「ええ。そうするつもりです。曹操に対する調略と南蛮、揚州への調略。この3つを同時に進めることで平教経の動きを封じ、袁家の力を回復させる時を稼ぎ出します。それにより、平家と決戦出来るだけの力を持つことが出来るでしょう」

「孔明殿。交阯からは既に断りの書状が参っているとのことでしたが、やはり事実であったのですか？」

「はい。ですが問題はありません。平教経は益州と荊州に軍を駐留させています。一度分散した軍を再度集結させて再編し、侵攻して来るには時間が必要です。

調略をかけている人間がどう動こうと、いえ、そもそも調略が失敗しようと成功しようと、そんなことはどうでも良いのです。平教経に兵を分散させ、袁家を攻めることが出来ないように仕向けること。そうすることで時間を稼ぎ出し、その間に袁家を立て直すこと。それさえ出来れば良いのですから」

調略すること。そしてそれに備えさせること。

調略を仕掛けていることを知れば、それに備えるのは当然のことだ。だからこそ、孔明殿のこの策は必ず成功するだろう。仕掛けた策で平家に痛手を与えられれば儲けもの。その程度にしか考えて居ない。他勢力を戦力として当てにするのではなく、飽くまで袁家単独で平家と天下を争う前提で考え、その為に必要となる時間を稼ぎ出す為

に利用することを最初から考えて居たのだ。そもそもの目的が時間を稼ぎ出すことであるから、仕掛けた策がどう破られようと問題にはならない。備えた時点で、策は既に成っているのだ。

他勢力を端から当てにするようでは勝つ事など覚束ない。そう思って居たが、やはり孔明殿は私の想像の遙か上を行く。まさか戦力として当てにしていないとは思っていなかった。状況的にはまだまだ予断を許さないが、一先ず何とかなったと言っても良い状況を作り出すことに成功している。

このまま時間が経過すれば。

勿論、平家にとっても利があることは分かるが、袁家が得ることが出来る利は平家が得ることが出来るそれを遙かに越えているだろう。この状態で、あと2年。あと2年得ることが出来れば、袁家はその力を取り戻すことが出来る。その時点で平家と決戦するのだ。その時が、平家の最期となるだろう。

「2年程時間が欲しいところですな。そうすれば我らの勝利も見えてこようというものです」

「……今のままの勢力図で有れば、ですが」

「どういう事でしょうか」

「もし平家が揚州をその支配下に置いた場合、潜在的な動員兵数に差が無くなってしまいます。そうなれば時間が経過すればする程、あちらに有利な状況となるでしょう。袁紹さんと平教経を比べても、袁家の将と平家の将を比べても、平家の方が質・量共に上回っているのですから。それを避ける為に、私達は平家が揚州を得ることを阻止しなければなりません」

「麗羽様が他人の意見に耳を傾けるようになった、と沮授から報告がありましたが」

「耳を傾ければ器量が増すという訳ではありません。平教経と比べ

れば、見劣りすることは間違いないでしょう。それとも、田豊さんは袁紹さんの方が優れた器量である、と思っているのですか？」

「……いえ、流石にそこまでは。しかし麗羽様が変わられたことで、袁家の先行きは明るいものになったのではないか、と思っております」

「……まあ兎に角、揚州を渡さぬように注意しておきましょう」

「はっ」

揚州を獲られれば袁家は負ける、と孔明殿は思っておられるようだ。だが裏を返せば、揚州さえ確保出来ていれば袁家は勝てる、ということでもあるだろう。それを信じて策を講じ、時間を稼ぐしかない。

～教経　Ｓｉｄｅ～

俺自身の我が儘で華琳を助け出し、華琳は俺に臣従してくれた。それにより覇権を争う勢力は、俺たち平家と袁紹達袁家の２つに絞り

込まれた。状況としては俺たちの方が有利だろう。袁家はその兵力を大きく減らしており、外征など出来はしない。俺たちはさほど兵力を失っている訳ではなく、また元々徴兵については積極的には行ってこなかった為まだまだ余力を残している状況だ。

これから、俺たちはどう動くべきか。それについて軍議を開いている。

「お兄さん、始めても良いですか？」

「あぁ」

「では始めるのですよ……天下の覇権は平家と袁家、この二つの家のどちらかの手に渡ることは間違いないという所まで来たのです。此処で一旦現状を確認して、風達が置かれている状況を把握する必要があると思うのですよ。その上で来たるべき決戦に向けて何をどう準備するのか、について話し合おうと思うのです」

「じゃあ、先ずはボクから他勢力の動向について把握している限りのことを報告するわね。

まず袁家についてだけど、これ以上外征することは無理な状況にあると言って良いと思うわ。華琳を攻める際に用意した兵はその数を大きく減らしていて、弘農で備えている月達を相手に勝てる数じゃない。洛陽と陳留に軍を駐屯させて居るけれど、こちらを攻める為ではなくむしろ攻められないようにする為のものよ。糧食も不足しているし、この状況で外征をしても得るものがないまま徒に糧食を消費するだけの徒労に終わることは先ず間違いないわ。だから外征をすることは考えられないのよね」

まぁそうだろうな。此処で無理をしたからと言って俺たちをどうこう出来る可能性はほぼ無いんだから。あと一息で俺を殺せる、という状況ならまだしも、下手を打たなくても負ける様な状況で無理をすることはないだろう。

「その袁家と連携して動きそうな劉表については、攻めてくることは絶対に無いわ。揚州に侵攻して掠め取っていった形だけど、領民が全く懐いていないし煽動もしたい放題に出来る。加えて山越族との関係も良くない、というよりは、今まで接触がなかった分領内の不穏分子程度にしか思っていないから、これに後背を突かせることも出来るわ。ボク達が劉表と向かい合った場合、百戦して百勝することは疑いない状況よ。

もう一方の南蛮の王、孟獲についてはよく分かっていないわ。此処に目を付けたのは正直驚きだけど、良い手だと思う。ボク達は何の情報も集めていないし、それを集めようとすれば時間が掛かることは間違いないしね」

「ふむ……稟からは何も言ってこないのか？」

「ええ。まだ何も」

「……正直な話、あまり時間を掛けたくないンだがな」

「敵を知らずして戦を仕掛けるなんて、低能のすることよ？教経」

「チッ……それが分かってるからもどかしいンだろうが、華琳」

「分かって居るなら良いのよ」

「南蛮の情報については、追々分かると思うわ。ボクの方でも細作を放ってあるし、風もそうでしょうしね。いつも通り、ボクたち三人で丸裸にしてやるつもりよ。

……他勢力についてはこの程度ね」

「では風からは風達自身の状況について話したいと思います。

先ず現在風達が無理なく動員出来る兵数は２５万程度なのです。現状、荊州に７万、益州に５万、弘農に３万、宛に８万、遊軍として２万。計２５万となります。

領内の民の雰囲気は良好です。漢王朝が倒れ、その後継としての正統性は袁家が有することを細作を使って広めようとしていますが、皆相手にしていないのですよ。むしろお兄さんに対し、平王朝とも言うべき政治体制を打ち樹てることを望む人が殆どなのです。これ

については風も真剣に検討して貰いたいと思っているのです。
また、お兄さんが予てより整備していた棒道の拡張も行っており、長安から宛まで迅速に移動することが可能になっています。現在は襄陽付近までこれを拡張しようとしているところです。
異民族に対する懐柔ですが、こちらの方はほぼ完了していると言っても良いと思います。羌、テイ、匈奴に加えて羯、鮮卑から早期の并州開放を求めるとの書状が来ているのです。特に羯族は、お兄さんが出兵するなら全氏族を挙げて協力すると言ってきているのですよ」
「全氏族を挙げて、かね？」
「はい。やはりお兄さんが一番善政を布いた期間が長かった為でしょう。華琳ちゃんは完全に掌握する前にこういう事になりましたし、お兄さんから并州を奪い、そして今また華琳ちゃんから奪い返した袁家に対しては端から反感しか抱いていないようですから」
……馬鹿共は前途多難だな。まぁ、自業自得なンだろうがねぇ。

「風達の状況については、こんな感じなのです。これらを踏まえた上で、どのような戦略を建てるのか。それを話し合いたいと思うのです」
「その前にちょっと良いかしら」
「何ですか？華琳ちゃん」
「私に従ってくれている桂花達に発言権はあるのかしら」
「何言ってやがる。発言するのに権利も糞もあるか。俺に従う以上は俺の家族だ。これは謂わば家族会議みたいなものなンだよ。拙かろうと何だろうと、思ったことは言って貰った方が良い」
「まあ、お兄さんが今言った通りなのですよ」
「そう。では桂花。ついこの間まで敵として平家を分析していた貴女には、何か意見があるかしら」

桂花。この猫耳フードが苟？だってンだから驚きだよなぁ。
……絶倫白濁男だのとスペルマン的な扱いされたのがちょいとどうかと思うがね。絶対に俺に真名は預けない、と言っていたが、華琳が無理矢理俺に預けさせた。『貴女は私のものなのだから言うことを聞くのは当たり前でしょう、桂花？それとも、此処で私に踏まれたいのかしら』とか言いながら。その際ちょっと恍惚とした表情で『か、華琳様ぁ～』とか言ってたが……うん、『☆ＭＡ☆ＺＯ☆』なんだね？真性の。俺は言葉で虐めるタイプであるからちょっと付いて行けないんだよねぇ……そして華琳は両刀だと……圓明流の遣い手とは恐れ入るねぇ。

「はっ。この男が築いてきた勢力は忌々しいことに強大なものであり、またしっかりとした地盤があってのものです。これを内部から崩すのは残念ながら至難のことでしょう。私が袁家で全権を振るえる立場にあるのなら、まず華琳様や孫策、公孫賛に対して独立するように働きかけた上で戦端を開き、兵数を以て戦線を膠着させ、その後背を襲う機会を創り出します。孫策や公孫賛はまだしも、華琳様がいつまでもこの男に従っている訳は無いのですから、上手く働きかければきっとこの憎らしい男を戦場の華と散らしてやることが出来ると思います」

……所々気に入らないが、まぁこの際許しておいてやろうじゃないか、☆ＭＡ☆ＺＯ☆。どうせ突っ込んだとしても、『今のは袁家の人間がどう考えているかを演じたものなのであなってしまっただけです』と言い抜けるだろうからねぇ。

「桂花。私は教経を裏切るつもりはないわ。ずっと一緒に歩んでいくと約束したのだから」
「それは華琳様とこの男にしか分からないことです。端から見ているだけならば、華琳様とこの男が主従の関係になるというのは想像

出来ません。良くて同盟者、普通であれば好敵手。そういう関係しかあり得ないものと思うに違いありません」

「だが現にこうして主従の関係になっちまってるぜ？」

「……主従と言っても実情は夫婦のようなものでしょう。気に入らないけど。けれど、それは外から眺めて居ては分からない。だから華琳様に対しては、調略の手を伸ばしてくるに違いありません」

「当然だ！華琳様は素晴らしいお方だからな！」

「春蘭ちゃん、少し静かにしておくと良いのですよ」

春蘭が話に乱入して来て収拾が付かなくなる前に、すかさず割って入って春蘭を押さえるとは。風、やるな。

「もし桂花の言う通り、麗羽が私に調略を仕掛けてきたとたら、貴方は私を信じていてくれるのかしら？」

「あぁ。お前さんが背くなら、自分の意志に拠ってのことだろうからな。他人に唆され、お膳立てをして貰った、謂わば『用意された反逆者』になどならンだろう。お前さんの誇りがそれを許さないさ。背くなら故あってのことであって、背いたら成功する状況が目の前にあるから、ではないだろう。そもそも、俺に決別をはっきりと告げてからのはずだからねぇ」

「ふふっ。よく分かってるじゃない」

「まぁな」

「ただね。私が裏切るかも知れない、と考えて居ることは気に入らないわね」

「……俺が理想も責任も何もかも放棄するような真似をしたら、お前さんは俺を俺のままで死なせてやろうと考えるンじゃないかね？」

「……もしそうなれば、ね。でもそれは裏切った訳じゃ無いでしょう？貴方を理解していればこそ、貴方として死なせてあげようと言うのだから」

「フン。まぁいいさ。そういうお前さんだからこそ、俺は惹かれて

いるんだろうからな。出来ればそのままで居てくれ。お前さんがそうであれば、俺は道を誤ることなく歩むことが出来そうだからねぇ」
「ええ。共に歩んであげると言ったでしょう？道を外れる事なんて許すはずが無いじゃない。もし外れたとしても、私が必ず首根っこをひっつかまえて道に戻して上げるわ。安心して居なさい？」
……やれやれ。怖い女だねぇ。

「……兎に角、華琳様に対する調略が行われ、華琳様が裏切らぬ事が分かればこれを疑わせしめて処断するように仕向けると思います」
「……教経様と華琳様の会話を聞く限りでは、全くの無駄なのだろうがな」

恐らくそれを周囲の人間に悟らせることこそがこの話題を口にした桂花の目的なンだろうがね。華琳のことが一番で俺が二番ってのがちょいと問題だが、やはり優秀じゃないか。『王佐の才』があるってのは良く理解出来た。
華琳が裏切らなければ華琳の株が上がり、華琳が裏切るなら今皆が抱いている認識によって対応が遅れ、それが結果として華琳を利することになる。どう転んでも華琳の利益にしかならない。そういう状況を作り出したことが、桂花の才が非凡なものであることを示しているだろう。

「華琳に対する調略の可能性が有る、というのは分かった。で、俺たちがこれからどうすべきかについて、何か意見はあるかね？」
「主。今この時点で徴兵を行い、来るべき袁紹との決戦に向けてしっかりと調練する時間を確保しておくべきではないでしょうか」
「ふむ……星の意見について、他はどう思う？」
「私も星に賛成です。現状でお屋形様が領有している地域にはまだまだ余力があるはずです。実際に徴兵を行えば、後２０万程は兵を

増やせると思うのですが」
「私もどちらかと言えば徴兵をしておいた方が良いと思うわ。兵の質だけではどうにもならないということを、ついこの間思い知らされた身としては、ね。２０万とは言わないけれど、状況から考えて許される数を徴兵しておいた方が良いでしょうね」
「……短期、良い。長期、無理」
「風も百合ちゃんに賛成なのです。余力がない状態でずっと過ごすのは無理なのです」
「ボクもそっちに賛成。戦っていうのは国力と国力の比較が基本になるのよ。軍が充実すればそれで良いというものじゃないわ。国力が低下しないで済む範囲内で徴兵を行うべきで、各職業で中核を担うべき人間が全て軍に採られた為に国力が低下しました、なんて馬鹿なことはしたくないのよね」
「秋蘭はどう思う？」
「……徴兵するならば、１０万未満に止めて徴兵すれば良いのではないか、と思いますが」
「だから、その１０万の内訳が問題になるんだってば」
やれやれ。収拾が付かなそうだな。
「ダンクーガ、お前はどう思う？」
戯れにそう訊いてみる。さて、コイツはなんて答えるかな？
「……いいのか？俺が此処で発言しても」
「構わん、言ってみろ」
「……なら遠慮無く。徴兵するのは構わないけど、大将の為に死んでも良いと思えない人間が増えても大して意味はないと思う。訓練していく過程でみんな脱落していくんじゃないか？
何名徴兵するか知らないけど、例えば徴兵枠３万に対して２万人が

兵になりたいと言ってきたら、全員兵になるんだろ？その、職業とか何とかいうのは無しにして。もしそいつら全部がどうにも使いようがない奴らでも、２万は２万だよな？そんな２万なら要らないと思うんだよ。採用枠に対して１０倍程度の人間が集まって、その中からやる気も体力も秀でている人間を引っ張ってきた方が良いと思う。

そう出来ないのなら要らないよ。そいつらと一緒に居るせいで親衛隊の人間が死ぬなんて俺は嫌だ。俺たちはそういう奴らに足引っ張られて死ぬ為に血反吐吐きながら鍛錬してる訳じゃ無い。誤解されるかも知れないけど、無駄死にはしたくないし、させたくないんだ」

……滅茶苦茶なようで意外に筋が通っている気もするな。

「……教経、どうするのよ？このままじゃ収拾付かないわよ？アンタが旗振らなきゃ皆納得出来ないだろうし、いつも通り方針を示してよね」

「はいはい、分かっていますとも、ツンデレラ。

……取り敢えず、兵を増やすという方針自体には賛成だ。が、兵となる人間を選別する必要がある、という詠の意見も採用するべきだろうな。例えばだが、鉄器の鋳造に携わっている熟練の職人が兵に採られると結局戦でも不自由することになる。それは避けたい。だから徴兵する数は５万と限って徴兵を行う。だが問題は、ダンクーガが言った通り主体的な積極性を以て応募してくるような奴じゃないと平家の訓練には耐えられないだろうって所だな。現状自発的に参加してきている奴だらけだが、これ以上増やすならそうでない人間を如何にその気にさせるかが問題になるだろう。その解決法は、残念ながら俺には捻り出せそうにない」

「……それなら解決法を提示出来ると思うわ」

「マジで言ってンのか？華琳」

「まじ？」

「本気で言ってるのかってことさ」
「冗談で言う訳無いでしょう？貴方でもあるまいし。
……貴方、私が黄巾の乱の際に何故貴方に対して借りを作ることになったのか、忘れていないかしら？」

……成る程、そう言えばそんな人間が居たっけな。

「使えるのか？張角は」
「貴方の忠告通り名前を捨てさせてあるから、今言った人間はもう死んでいるわよ？」
「そうか。そいつはご愁傷様だったな。で、そいつらは使えそうか？」
「使えそうも何も、随分と役に立ってくれたわよ」
「……どの程度かね？程度に拠るんだが」
「……私が兵になりたいと言っている人間を選別しなければならない程集まった、では回答にならないかしら」
「それ程集まるなら確かに役に立ちそうだな」
「どうする？使ってみるの？使うなら貴方に貸して上げるわよ？無期限で」
「……そうだな、借りようか。劇薬クサいがこの際使えるものは使っちまおう」
「なら明日にでも挨拶に来るように言っておくわね」
「あぁ。頼むわ、華琳。これで徴兵については出来そうだな。展開的なものでこうした方が良いという意見はないのか？」

それぞれ挙手して様々な事を話し始める。
内政のこと、南蛮への斥候のこと、袁家への妨害工作のこと。春蘭を始めとする、旧曹家の人間も積極的に意見を述べているようだ。
皆優秀で何よりだ。

「……ボクから意見があるんだけど、いい？」
「あぁ。言ってみてくれ」
「多分だけど、アンタは南蛮を攻略してから揚州、そして徐州・并州へ同時に侵攻する形で先の戦略を練っているんじゃない？」
「そうだ」
「それを少し変えて貰いたいのよ。先ず揚州、次に南蛮が良いと思う」
「どういうことだ？」
「多分だけど、華琳も桂花も稟も風も、そして諸葛亮も田豊も沮授も、皆そうなると想って居ると思うのよ。だから袁家から考えると、平家が南蛮を攻略したという知らせが入ってから揚州を支援する態勢を整えればいいと思っているんじゃないかと思うのよね。
平家が揚州を落とすと、潜在的な兵数も口数も袁家と同等の存在になるわ。そうなったら、君主と家臣の質の差というものが大きく物を言うことになってしまう。諸葛亮は当然その事に気が付いて居るはずよ。だからこそ、ボク達が南蛮を落としたら揚州を陥落させないように手段を尽くしてくるでしょう。
でも、もし今いきなり揚州攻略に乗り出したら、向こうには対抗する手段がないわ。兵を揚州に派遣すれば、宛から平家軍８万が雪崩を打って攻め込んでくるわけだし。そもそも外征出来るような状況にはないわ。だから、今此処でいきなり揚州攻略に取りかかるべきだと思う。
主攻軍を陸路ではなく、水路を使って一気に南下させる。これをすることで兵の疲労もある程度押さえられるでしょうし、敵の喉元にいきなり剣を突きつけてやることが出来るしね。そこから先は簡単な陣取り合戦よ。陸路からも、荊州と交阯からそれぞれ侵攻させる。

兵力分散することになるけれど、これを行っても後れを取るとは思えないし、ボク達平家の特性である将の質の高さを一番生かせる策だと思う。
主攻軍は教経が帥将の2万。この2万は遊軍として待機しているものを使うわ。荊州と交阯から攻める軍は、荊州から蓮華の4万、交阯から白蓮の3万。手薄になった宛や弘農に逆に袁家が攻めてくる可能性もあるけど、さっき話のあった徴兵について、徴兵した兵達の調練を宛付近でやるならそれを抑止出来ると思うわ。
……これで、どうかしら」

……確かに、対応出来ないだろう。少なくとも、俺は南蛮から落とす事しか考えていなかった。先ず後背の敵を討つ。それは兵法の常道だ。それを敢えて揚州からやろうと言っている。一応、5万もの兵が益州にいるから後背を無視するという暴挙を犯している訳じゃ無い。定石といえば定石通りだ。
各個撃破される可能性が有るが、残念ながら劉表軍では平家の敵になり得ない。例え俺の主攻軍が5万の劉表軍とぶつかったとしても、完勝出来る自信がある。意表を突くことで得たアドバンテージを埋められる程、劉表もその兵も優秀じゃない。

「よし。それで行こう」
「ちょっと待ちなさい教経。貴方、主攻軍は2万でしかないのよ？しかも今の詠の言い方からすると、貴方の軍は味方と離れて先ず敵中に上陸することになるわ。そんな危険を冒す必要はないと思うのだけれど？」
「それは進め方次第だろうさ。先ず陸路から侵攻させ、そちらに対して備えが出来た後で一気に俺が防衛線の後側へ出る。そうすれば問題無いンじゃないかね」
「む……確かにそうかも知れないけれど」
「風と桂花はどう思う？」

「問題無いと思うのですよ」
「……残念ながら死なないと思います。残念ながら」
大切なことだから二回言ったのか？
「と、言う訳だ。華琳に宛を任せることになるだろう。雪蓮はどうしても劉表の屑を殺さなければならない理由を抱えているしな。頼むぜ？華琳」
「……私にいきなり宛を預けるというのはどうかと思うわよ？」
「だが皆さっきの会話でお前さんが裏切ることはないと思っているだろう。それに、袁家がお前さんに調略をしてくるなら、この機会を逃す筈がない。それを行わせることで、こちらに対して思い切った攻勢に出ることを防ぐことが出来ると思うンだがな。調略して上手く行くならそれに越したことはないのだから」
「……仕方ないわね。精々上手く踊り子を演じて上げるわ」
「あぁ。全部お前さんに任せるからな？」
「任されてあげるけど、還ってきたらちゃんと代償は払って貰うわよ？良いわね？」
「高く付きそうだねぇ……まぁいいだろう。埋め合わせはするよ、華琳」
「なら良いわ」
「ンじゃ詠、準備宜しく。華琳、徴兵するからやつらを頼む。引き連れていく将については風と百合で話し合ってくれ。星達武将は徴兵後の兵の選別・調練と、長安周辺の治安維持に努めるように。では、今日の所は解散だ」
天下統一。
言葉にすればたったこれだけの事だが、漸くその端緒に取りかかることになる。

俺がそれをなし得るのか、はたまた高転びに転ぶことになるのか。いずれになるかは分からないが、兎に角結果を出しに征こうじゃないか。

蝶の如く～１３７～（前書き）

ヘイ、ネタだくだく一丁！

蝶の如く～137～

～教経　Ｓｉｄｅ～

「で、華琳。彼女達が？」
「ええ、そうよ。右から、天和、地和、人和。三姉妹よ」

軍議の翌日華琳から連絡があり、張角達三姉妹と面会することになった。この辺りのフットワークの軽さってのは流石だな。早ければ早い程良いからねぇ。

「初めまして、ということで良いンだろうな。俺が平教経だ。平家の頭領をやらせて貰ってる」
「わたしは天和だよー」
「ちぃは地和」
「人和です」
「今日は俺から依頼があって来て貰ったンだ。態々来て貰って悪かったな」
「……私達にどのような依頼があってのお召しでしょうか？」

お召し、ねぇ。人和が眼鏡をツイと押し上げながら話しかけてくる。右手の定位置が眼鏡ってのはどういう事だ？これは日々信仰してきた眼鏡神様からの、俺に対するご褒美って事で良いのか？
……良いねぇ。俺は眼鏡属性持ちなんだよねぇ。そして麦茶が好きなんだよねぇ。

「単刀直入に言うと、徴兵に協力して貰いたい」
「良いよー」
「ちょ、ちょっと姉さん！？」

……天和ってのは、天然か？ほわほわした感じの話し方をするが。
これ狙ってやってるんだとするとかなり計算高い奴だな。

「だって最近大きな舞台なかったじゃない。ちぃちゃんは大きな舞台で歌いたくないの？」
「それはちぃだって歌いたいけど」
「……済まんがちょっと良いかね？」
「何でしょうか」
「『大きな舞台』ってのはどういう事だね？」
「曹操さまからそう伺ったのですが」
「あ～、済まん。そうじゃない。俺は徴兵に協力してくれ、と言ったんだが、『舞台』ってのに一体どう繋がるンだね？」
「それについては私から説明しましょう。
教経、彼女達は舞台で歌を歌うのよ。彼女達の信奉者、分かりやすく言えば嘗ての黄巾賊の様な、彼女達の為ならば命も惜しまないという人間がその歌を聴く為に集まる。その舞台で、『平家の為に戦って欲しい』、と一言言わせるだけでかなりの数が平家の郎党となるべく参じるでしょう。戦う意欲に満ちあふれた、良い兵になれる気概を持つ者達が。
その為に、先ず大きな舞台を用意する必要があるのよ。それがあることも広く布告して、ね」
「成る程。そういうことか」
「それで、大きな舞台を用意して頂けるのでしょうか」
「……いいだろう。ただ、やるからには立派なモンにしたい。舞台をどう造るのか、舞台そのものの造りから演目まで、企画が出来たら目を通させて貰おうか。こちらで資材や資金を出す以上、報告して貰いたいねぇ」
「分かりました。企画を今から練りますので出来上がったらご報告にあがります。それで宜しいでしょうか？」

風と詠を横目に見やると、二人とも頷いて居た。どれくらい金を使うことになるか分からないが、使う以上はしっかり管理したいってことだろう。

「あぁ。それで宜しいンじゃない？」

敏腕プロデューサー・『のりP』としてちょいと口出しさせて貰おうかね。

……新曲が『白いクスリ』とかになりそうだな。蒼いウサギ的に考えて。

舞台の建設については、真桜に頼めば面白いモノが出来るだろう。華琳とそういうことになった後、その配下とは一通り面会した。その際に真名も預けて貰った。許褚、典韋、楽進、李典、于禁。全員俺の固定観念を見事にぶっ壊してくれた。

真桜ってのは、李典のことだ。知的な副官のイメージが強かったが、関西弁のイケイケ姉ちゃんだったからなぁ……。趣味は絡繰り。何か面白いモノを造るかも知れないと思って、俺の時代の物品について色々話してやった。まだ失敗作ばっかりや、と言っていたが、そのうちにその努力が実を結ぶに違いない。

「しかしお前さんはしっかりしてるな。長女が天真爛漫、次女がちょいと小悪魔的な妹のような感じ。それをしっかり者の三女が上手く纏めてるって感じか。それぞれに固定支持層が付きそうだし、いい按配に見える」

「ちょっと話しただけなのに、そんな事まで分かるんだねー。意外に人を見る目があるんだー」

「『小悪魔的な妹』って中々良い響きね……」

「……意外って何だよ……まぁ、お前さん達は揃いも揃って可愛い

し、単品でも人はそれなりに集まるんだろうがね」
「えー、やだぁ～。本当のこと言われたら照れちゃうよー」
「ちぃの魅力って罪よね。逢った男を片端から虜にしてしまうんだから」
「そ、それ程でもない」
……上二人はちょっとアレだな。疲れそうな感じだな、うん。
眼鏡っ娘は自分の外見をそれ程評価していないようだが、可愛いと思うンだよねぇ……眼鏡を常に押し上げているその仕草なんかもう最高じゃないかね!?
「まぁ宜しく頼む。話はこれだけだ。下がってくれ」
「では、またご報告に挙がります」
そう言って三人は下がっていった。
「……お兄さん？風というものが在りながら、まだ釣り上げようと言うのですか？お兄さんにはちょっとお仕置きが必要なのです」
「……アンタって本当に見境がないわよね」
「……教経。私の目の前で他の女にちょっかい掛けるなんて、本当に良い度胸をしているわね？」
うわぁおぅ！後から魔闘気的なものが漂ってきているンだねぇ。
「……風？詠？華琳？……弁解の余地は？」
「無いのですよ」
「ある訳無いじゃない」
「在ると思うのかしら？」
……その笑顔が恐ろしい。今風の後に見えているのは間違いなく星

の白金＜スタープラチナ＞ッ……！こんなの相手にしてられるかよッ！
スピードワゴンはクールに去るぜ？
と、思ったが。
「……おいダンクーガ。忠。なにやってる？」
「……済まないな、大将。此処で大将逃がしたら俺たちが殺られちまう気がして」
「……兄貴。そろそろ兄貴は自重ってもんを知る必要があると思うんですよ。主に姉貴の為に」
「誰か！誰か居ないのか！」
「御遣い様！一体何が……って、痴話喧嘩か。心配して損した」
「ブルータスッ！お前もか！？」
「儂は魏越です、御遣い様」
うん、知ってる。言ってみたかっただけなんだよ。
「……さてお兄さん？命の貯蔵は十分ですか？」
「ま、待て風！話せば！話せば分かる！」
「風、思いっきりやっちゃいなさいよ？本当ならボクの『こんぺいとう』でぶっとばしてやる所なんだからね？」
「貴女に任せるわ、風。教経には少しお灸を据える必要があるのよ。キツめに、ね？」
「分かっているのです。任されるのですよ」
おいおい。一番容赦が無さそうな風に任せちゃ駄目だろうが。まぁこの場合誰でも同じような結果になっちまう気がするが。そして、詠。何でお前さんは『こんぺいとう』なんて持ってるンだよ。１３７号って書いてあるな。何なんだよその数字はよ。

「右の拳で殴るか、左の拳で殴るか、当ててみるのですよ、お兄さん」

これはどうやっても逃げられそうにないンだねぇ。ダービー弟的に考えて。

「……ひと思いに右で……やってくれ」
「ＮＯ！ＮＯ！ＮＯ！、なのです」
「ひ……左？」
「ＮＯ！ＮＯ！ＮＯ！、なのです」
「り……りょうほーですかあああ～」
「ＹＥＳ！ＹＥＳ！ＹＥＳ！、なのです」
「もしかしてオラオラですかーーッ！？」
「ＹＥＳ！ＹＥＳ！　”ＯＨ　ＭＹ　ＧＯＤ”」
「あばばばばばばばば　へブッ！」
「お兄さん……お兄さんの敗因はたった一つ……たった一つのシンプルな理由なのです……お兄さんは風を怒らせたのですよ」

……今日も元気に電波受信御苦労様です……

～人和　Ｓｉｄｅ～

「すっごい舞台だねーれんほーちゃん」

舞台建設の見学にやって来た私達の目の前に、未だ嘗て見たことがない程立派な舞台が建設されている。その規模もさることながら、床が沈み込んだり空中から釣り上げることが出来る様な仕掛けが施されていたりと、今までに思っても見なかった新しい趣向を凝らした舞台だ。

「これ、全部人和が考えたの？」

「違う。教経さまよ」

「へぇ～、あの男がね～。ちょっと意外よね。下男みたいな顔してる癖に」

「そうかなー。お姉ちゃんは、ちょっと可愛いかなーって思うけど」

「え～？姉さん、あんなのが好みなの？それならアイツの横にいた奴の方が遙かに良いじゃない」

「二人居たけど、どっち？」

「格好良い方」

「暑苦しそうじゃない方かー」

「二人とも、そこまでにして。教経さまが視察に来たみたいだから」

「はーい」

教経さまが護衛の二人と共に、建設中の舞台を眺めて談笑しながら歩いてくる。

「大将、あれ何だ？」
「どれだよ」
「あれだよ、あの上から垂れてる紐」
「アレはお前、まぁ見てのお楽しみって奴だろう」
「何だよ。さっきからそればっかりじゃないか」
「いやいや。答えを知っていたら驚きも半減するだろう？こういうのは愉しんだ者勝ちだぜ？ダンクーガ」
「そうそう。高順はこれだから」
「何だよ？忠。テメェは気にならないってのか？」
「なるけど楽しみにとっておいた方が良いだろ？先が分からないから愉しめるんじゃないか」
「俺ははっきりしないのは嫌なんだよ」
「やれやれだぜ」
「……その仕草は何かムカつくな」

……こうして見ていると、とても君主とその護衛には見えない。仲の良い友人同士が談笑しているだけに見える。

「お疲れ様です、教経さま」
「お、お疲れ。準備は順調みたいだな？」
「はい。おかげさまで良い公演になりそうです」
「良い公演になるかどうかはお前さん達次第だけどな。で、振り付けは覚えたかね？」
「はい。まだ完璧とは言えませんが」

そう。今までもある程度動きを考えて歌を歌っていたけれど、三人とも思い思いにやっていただけだった。それを、三人で連動した動きをしながら歌った方が盛り上がるからそうしろ、と言って、私達の曲に合わせて振り付けを考えてくれたのだ。

「そうか。まぁ精進してくれ」
「れんほーちゃんが考えたんじゃなかったんだー」
「基本は俺が考えたが、細かいところは人和が調整したモンだよ」
「ふ～ん」
「……何だね？」
「何でも無いもーん♪」
「はぁ？……まぁ天然だからこんなモンなのか」
「で、何しに来たのよ……じゃなくて、来たんですか？」
「……無理に丁寧語なんか使うなよ、腹黒次女」
「誰が腹黒よ！」
「お前さん以外には居ないと思うンだが」
「……はは～ん。そうやってちぃの気を惹こうって作戦ね？」
「自意識過剰は何とかした方が良いぜ？痛いから」
「何なのよアンタは！」
「俺って何なンだ？一言ずつどうぞ」
「さぁ？大将は大将だし。大将なんじゃないか？」
「兄貴だな。姉貴の大切な、兄貴の中の兄貴。謂わば超兄貴だ」
「……それだとワセリン塗れだろうが……？忠、テメェは後で折檻な……だそうですが？」
「そういうこと言ってるんじゃないわよ！」
「じゃ、どういうこと言ってるンだよ」
「もう良いわよ！」
「はいはい、お後が宜しいようで」
「はぁ……ちぃ姉さん、落ち着いて。教経さまもちぃ姉さんをからかって遊ばないで下さい」
「ははっ、済まん済まん。面白くてついな」
「何がついよ、何が！」
「おろ、大将。此処で何やっとるんや」
「真桜か。舞台を見学に来たンだよ。順調そうで何よりだ」
「ま、そらそうやで。ウチが一所懸命にやっとるんやさかい」

「間に合いそうか？」
「この調子なら間に合うやろ。しっかし大将もおもろいモン考えるなぁ」
「それを作れるのが凄いと思うがね」
「いややわぁ～大将。ウチまで手込めにしようっちゅうんか？」
「……真桜。もしそれを華琳とかの前で言ったら滅俸な」
「そんな殺生な！」
「言わなきゃ良いだけだろうが、言わなきゃ」
「ぶーぶー」

家臣にこういう口を利かれても全く気にしていないらしい。
……よく分からない人だ。

「ちーちゃんの質問にまだ答えてないよー？」
「お前さん達の様子見と、ちょっとしたお知らせがあってね」
「ちょっとしたお知らせ、ですか？」
「そう。先ずお前さん達のユニット名だ」
「ゆにっと？」
「あ～、団体名、かな？『役萬姉妹』でもいいが、ちょっと受ける印象が薄い。もっと印象深い名前なら、お前さん達はもっと有名になると思うンだよ」
「で、どんな名前を考えてきてくれたのかなー？」
「……数え役萬☆姉妹＜シスターズ＞、さ」
「しすたーず？」
「姉妹って意味の、天の言葉だ。聞き覚えが無くて耳に残ると思うンだが、どうかね？」
「中々良い案かも知れません」
「で、追っかけの連中と掛け合い的なことをすれば、一体感も増してより盛り上がれると思う」
「どういうこと？」

「例えば……」

教経さまは右手を顎にあて、私達三人を見やりながら何やら考えて居るようだ。

「そうだな。天和が『みんな大好き』と観客に呼びかけたら、『てんほーちゃん』と観客に叫ばせる。

地和なら、『みんなの妹』と呼びかけたら、『ちーほーちゃん』と叫ばせる。

人和なら、『とっても可愛い』と呼びかけて、『れんほーちゃん』と叫ばせる。

これならかなり盛り上げれるんじゃないかね？」

「そんなので本当に盛り上がるかなー？」

「多分な。良い公演ってのは、勿論お前さん達が作り上げる訳だが、お前さん達だけで作り上げるモノよりも観客も一緒になって作り上げた方がより良いモノになると思うぜ？一体感も出るし、そこで楽しめた人間はずっとお前さん達を応援してくれるだろうし、何より他の人間に楽しさ、すばらしさってのを伝えてくれる筈さ。頼んでも居ないのに、な。勝手に広報までしてくれるンだ。

今俺が言ったことは、大した労力も使わないで済むものだ。たったそれだけでそういう利益が出る可能性が有るなら、やってみても損はないだろう？何より、公演ってのは観客の為にやるモンだ。奴らを愉しませることをお前さん達が愉しめばいいのさ。それだけで、奴らはずっとお前さん達の追っかけで居てくれるだろうよ」

「そんな事分かってるわよ」

「なら良いけどな。精々愉しませてやってくれ。俺も愉しみにしてるから、さ。じゃぁな。本番で緊張して失敗なんかするんじゃねぇぞ？」

「何を！……って、行っちゃった。全く、何しに来たのよ」

様子を見に来た、か。
君主なんだから他人に任せて放っておけばいいのに。口は悪いけど、面倒見の良い人なのかも知れない。

「ほわぁぁぁぁほっ、ほっ、ほっわぁぁぁぁぁぁっ！」
「みんなー！ありがとー！」
「中・黄・太・乙！中・黄・太・乙！中・黄・太・乙！中・黄・太・乙！」

今までにない大規模な公演。５日間に及ぶ公演に、延べ１５万人はやって来た。この四日間で、『役萬姉妹』から『数え役萬☆姉妹』に名前を変えて、新しい始まりを迎えた私達を多くの人が見に来てくれた。かつて無い仕掛け溢れる公演に興奮した追い掛けの人達は、公演の興奮冷めやらぬ内に帰路に用意された私達三人の揮毫などを次々に購入してくれ、売り上げも順調だった。

五日目の今日は、今まで以上の盛り上がりを見せている。

「みんなー！今日はこれで終わりだけど、また次の公演に来てねー！」
「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉお！」
「てんほーちゃーーーーーん！」
「ちーほーちゃーーーーーん！」
「れんほーちゃーーーーん！」

演目が終わって最期の挨拶。今回の公演は、本当に愉しかった。今

まで一番愉しかった。
それは観客も同じだったみたいで、皆興奮冷めやらぬようで、ずっと私達三人を呼んでいる。もの凄い熱気だ。
……ちょっと異常かも知れない。
そう思っていると、警備の人を押しのけてこちらに向かってこようとしてきた。興奮が過ぎてしまったのかも知れない。

「姉さん、直ぐに逃げて！」
「え？何？」
「どうしたのよ人和」
「良いから早く！」
「おいっ！こっちだ！早くこっちに来い！」

教経さまと一緒に私達の様子を見に来ていた二人が、私達にあちらに行くように声を上げている。

「早くしろ！兄貴が言うには観客が暴走するって！」
「姉さん、早く！」
「う、うん。わかったよー」
「ちょ、ちょっと冗談じゃないわよ！」

姉さん達は急いで舞台裏に向かって走っていく。その一角は、親衛隊で警護をしていて、観客が押し寄せても全くびくともしていない。選りすぐりの精鋭なんだろう。武器を持っていないとは言え、これだけの人数を相手に全く引けを取っていない。

「人和！早く来なさいよ！」
「あ、うん。今……」

駆け出そうとした私の靴がぬげ、転んでしまった。

「れんほーちゃーーーーん！」
「お、おい！」
「やばい！」
「きゃぁ！」

立ち上がった私の目に移ったのは、もうそこまで迫っている群衆だった。
……怖い。体が竦んでしまって動けない。

「あらよっと！」
「え？」

立ち竦んでしまい、群衆に今にも襲われるというその時に、私の体が宙に舞った。
……私を、誰かが抱えているみたい。
見ると、教経さまが私達を宙吊りにする仕掛けの紐にぶら下がっていた。向こう側の高所から紐にぶら下がって私を助けに来てくれたんだろう。

「ハッ。こんなこともあろうかと、というやつだな。上手くいって何よりだ」

舞台上方の足場にたどり着いた教経さまは、私をゆっくりと下ろしてくれた。

「おっと。腰が抜けたか？」

ふらついた私の方を抱き抱えて、そう気遣ってくれた。

「……そんなことない」
「強がりも良いが、此処は狭いから程々にな。無理して転落したら死ぬぞ？」
「……分かりました」
「まぁ、無事で良かったな。お前さん達をちょっと甘く見すぎてた。まさかこんなに暴走するとはねぇ」
「あ、ね、姉さん達は！？」
「大丈夫だよ。親衛隊が素人に後れを取るかよ。……後れを取ったら死ぬ程キツい鍛錬追加してやる」

下を見る。姉さん達を中心にして、親衛隊の人達が群衆をはね除け続けて居る。

「テメェら！素人相手に後れを取ったら許さねぇからな！？この程度の相手をはね除けられないで大将を護る事なんて出来ねぇ！良い訓練だと思ってぶっ飛ばしてやれ！」
「高順の言う通りだ！俺たちは兄貴を護る為にあれだけ苦しい鍛錬を続けて居るだろうが！何が何でも負けるんじゃない！」
「儂らの御遣い様を護るつもりで護らんかい！儂らの武器は、勇気、正義、闘志！お楽しみはこれからじゃい！」
「行くぞテメェらァ！！やぁぁぁぁぁぁってやるぜ！！！」
「「「

「？」

暫くすると曹操さま達が軍を率いてやって来て、観客を沈静化していった。完全武装の兵に囲まれれば、流石に冷静になるようだ。

「やれやれ。災難だったな、人和」

「あの、有り難う御座いました。もし助けて貰えなかったら、私……」

「いや。俺の予想が甘かったンだよ。これからはお前さん達の公演にはもっと多くの兵を警備員として配置しておかないとな」

「これからも、公演させて頂けるのですか？」

「いいぜ？兵の慰安や士気高揚にも使えそうだし、何より歌っているときのお前さん達は本当に愉しそうだった。その楽しみを奪おうなんて思わんさ。それに、俺が天下を統一したら平和な世の中になるンだ。民達にとっても良い娯楽が必要だし、その意味じゃお前さん達は最高の娯楽だろうからねぇ」

「天下統一、ですか」

「そう。お前さん達も出来るンじゃないか？歌で天下を獲るのさ。応援してやるよ、俺が、な」

教経さまはそう言って笑った。

「あ、有り難う御座います」

「なンだ？照れてンのか？」

「そ、そんなことない……ありません」

「ははっ。別に気にしなくて良い。出るところに出たときはちゃんとして貰わなきゃ困るが、普段は気にしなくても構わないさ」

「は、はあ」

「そろそろ下りようぜ？寒くなってきたしな」

「下りるって、どうやって？」

「来たときと同じだよ。ほれ、こっち来い」
「え？あっ」
「行くぜ？しっかり捕まってろよ？」
「え？え？」
「そらぁ！」
「きゃー！」
「ははははははっ！」

心底愉しそうに、私を抱き抱えたまま紐にぶら下がって下に飛び降りた。
下についても暫く教経さまから離れられなかった。ちょっと怖かったのと、抱き抱えられているのが少し心地よくて。その後で、姉さん達と互いの無事を喜び合って。護衛を何人か付けて貰って家に帰ることになった。

教経さまは、曹操さま達と何やら話をして難しい顔をしていた。難しいというか、困った顔というか。暫く話をしていた教経さまは突然走り出し、その後を詠と呼ばれていた女性が鎚を持って追い掛けている。『１３７ｔ』と書いてある鎚を持って。

「だぁ～から誤解なんだって！俺は別にやましいことは何もしてないっての！」
「何が誤解よ！それなら逃げなくても良いでしょ！？」
「逃げなかったらブン殴られるだろうが！」
「逃げてもブン殴られるんだから大人しく殴られときなさいよ！」

鎚で叩かれて舞台に埋もれた教経さまを見て、皆笑っていた。
……『天の御使い』平教経、か。

蝶の如く～１３８～（前書き）

ネタは仕込まない。そう思っていた時期が、私にもありました……

蝶の如く～１３８～

～教経　Ｓｉｄｅ～

天和達三姉妹のライブを終え、現在志願してきた人間を徴兵するか否か、選別を行っている。ライブに動員していた観客１５万を超える人数が志願してきたようだ。最終日のごたごたを敢えて瓦版で流布し、天和達を護った親衛隊の活躍ぶりを伝えさせた。その事によって、自分も護りたいと考えた人間や無いことに親衛隊に憧れて志願してきた人間が多数出てきたらしい。まぁ、この辺りは計算通りだな。

徴兵の調整が最終段階になったある日、益州からお客さんが来た。魏延と馬謖だ。死にかけていた、というのは伊達でなく、また先生も凱も俺が引き連れていったから回復が遅れていたらしい。同じく死にかけていた秋蘭が３ヶ月で元通り、本人曰く元以上になった事を考えると、先生と凱の存在が如何にデタラメかよく分かる気がするねぇ。

「初めて御意を得ます、教経様。ワタシは姓は魏、名を延、字を文長。真名を焔耶と申します」

「同じく初めて御意を得ます。私は姓は馬、名を謖、字を幼常。真名を瑛と申します、教経様」

「焔耶。瑛。良く来たな。俺は平教経だ。字も真名もない。好きに呼んでくれれば良い」

「「……はっ」」

二人とも、恐縮しっぱなしだ。まぁ、他に致し方ないのだろう。俺が斬刑が相応しい、と言ったことは伝わっているだろうし、自分た

ちが暴走して俺と事を構えることになっちまった訳だしな。
……『良く来たな』って声かけたのがちょっと不味かったか？誤解しようがない言葉を掛けてやるべきだったかも知れない。これだと『良く俺の目の前に出て来れたな？』と言っているようにも受け取れる。

「あ、あの……申し訳ありませんでした」
「それを言うなら『お見それしました』とかじゃないかね？俺に申し訳ないとか言う義理はないだろうさ。あの時点ではお前さん達は白蓮の配下であって俺の配下じゃないんだから、俺に申し開きする必要はないさ。綺麗さっぱり忘れちまえとは言わんが、その過去に縛られて生きるような真似はするな」
「し、しかしワタシ達は」
「ワタシもたわしもあるかよ。答刑を受けて死にかけた上で、一将校からやり直すって言ってンだ。罰は既に受けている。後はしっかり務めを果たすことだけ考えて居ろ。お前さん達は強かに頭を打ち付けて、自分の身の程って奴を思い知っただろう？」
「……はい」
「ンじゃもう今後こんな事にはならないだろうさ。人生失敗無しで上手く行くなんて事はないンだよ。誰だって絶対に失敗はする。人ってのがそこから何かを学んで成長していく生き物である以上、失敗ってのは避けられない。そうでないと成長なんてしないからねぇ。反省しなきゃ成長はないから反省することは必要だが、必要以上に己の至らなさを責める必要はない。
……わかったかね？」
「……教経様も失敗なされたことがあるのでしょうか。益州でこれまでの教経様の事績を詳細になぞってみましたが、一度も戦に負けていらっしゃいませんし失敗らしい失敗はなさっておられないように思われるのですが」
「阿呆め。失敗しまくってるよ。こっちに来てからも結構失敗して

るしな。小便臭い孺子宜しく愛紗を斬り殺そうとしたり、華琳が袁紹の馬鹿に負けると予想出来ずに備えてなかったりしたし。失敗とはちょっと違うと思ってるが、雛里に裏をかかれて死にかけたり、劉表を逃がしてしまったりしたしな。

皆俺を完璧超人か何かと勘違いして居るみたいだが、俺はそんなご大層な人間じゃない。俺の才能自体は兎も角、内面的には何処にでも居る普通の人間、いや、ひょっとすると普通以下の人間だった。色々在ってマシにはなったと思うがね。才能が優れている人間を内面的にも欠陥がない人間のようによく勘違いする奴が居るが、そんなことはないのさ。普通の人間なンだよ」

「は、はあ」

「ま、丁度良いときに復帰したな。これから戦になるが、お前さん達にはそれぞれ役に立って貰う。まぁ、国元で、だが」

「はっ」

「何なりと」

「焔耶。蒲公英から聞く限り、お前さんは猪武者のきらいがある。それを矯正する為に、嘗てこの国一番の猪武者だった朔、華雄の下で少し働いてこい。お前さんにとって、その経験は大きな財産になるだろう。己の武は何の為にあるのか。その一つの、そして恐らく究極の答えがそこにはある。

瑛。お前さんは自分の才というものをもっと知る必要がある。どの程度のもので、何が出来るのか、ということについてね。華琳の下に付いてしごいて貰え。コイツは人の際を見抜くことに掛けては天才的だ。俺は天の御使いとしての知識があるから人の才の程度を『知っている』のであって、『見抜いている』訳ではないからな。華琳ならお前さんの才に相応しい仕事を与え、そしてそれを伸ばしていってくれるだろうさ」

「私が面倒を見るの？教経」

「あぁ。お前さん以上に適任者は居ないと思っているンだが。華琳じゃなくても良いかもしれんが、俺は華琳が一番だと思うンだよ」

「……『私が一番』だと思っているのね？」

……なんか微妙な言い方をするね、お前さんは。まぁ良いけどねぇ。

「あぁ。そう思っているよ、華琳」

「そ、そう。仕方がないから引き受けて上げるわ。

馬謖、と言ったかしら。私は曹操。字は孟徳、真名は華琳よ。私が貴女を徹底的にしごいて、そしてその才を伸ばして上げるわ。途中で嫌になったり満足したりして歩みを止める事は許さない。教経が見込む人間なのだから、それに相応しい人間になって貰うわ。何としてもね。それが出来ないなら死んで貰うからそのつもりで居なさい？」

ンな言い方したら……

「……私の真名は瑛と申します、華琳様」

あ～あ。萎縮しちまってるじゃねぇか。まぁ、華琳が瑛のことを思ってそう言っているのは理解出来るがね。言葉にしてやらないと、理解出来ないぜ？このツンデレめ。

「おいおい華琳。物騒だな？」

そう水を向けると、華琳も瑛の状態に気が付いていたんだろう。説明をし始めた。以心伝心って奴か？

「あら。そうかしら？己の才を知らず、その才を活かすことも出来ずに生きていくなんて、死んでいるも同然よ。大体その娘がやらかしたことは全ての人間が知っているのでしょう？それなら死ぬ気で務めなければ人は認めてくれないわ。人と同じように懸命に務めて

もそのままには評価して貰えないのよ。
これから平家で家臣として貴方に仕えていくことを考えれば、その位の気概を持って務めなければ誰にも認めて貰えないのよ。だから私は厳しくするの。これから先、瑛が瑛として生き、そして死んでいく為にね」
「最初っからそう言ってやれよ、ったく。だからお前さんは誤解されるンだよ。本当は優しい癖に、それを素直に表現しないから」
「う、五月蠅いわね。貴方だって似たようなものでしょう！？」

今日もツンデレご馳走様です。

「……教経様、有り難う御座います。華琳様の下で自分を鍛え直してみようと思います」
「そうか。まぁお前さんは優秀と言って良い人間なんだ。自分の才を恃む様な真似をせず、信じてやってみることだ。華琳が与える課題は、きっとこなせるものだろうからな」
「はっ」
「最後になるが、お前さん達に一言言っておいてやる。
……努めよ。己の周りに居る人間の言葉に耳を傾け、良いと思ったことをやり、悪いと思った所は直せ。気に入らない奴からの言葉であろうとも、事実は事実だ。それが正しいと思うなら正せ。別に素直に礼を言えとは言わん。反発して喧嘩をしても構わんが、それと正す事とは別物だ。やりたいこととやらなければならないことの区別くらいは付けろ。それが大人になるって事だ。
それが出来ない人間に進歩はない。己の至らなさを知った上で猶努めるが良い。そうすれば、明日には今日の自分よりいくらかマシに思える自分になれる」
「「はっ」」
「遠路ご苦労だった。今日はもう休むが良い」

しっかり見極めてからだが、きっと一角の人物に成れるだけの才はあるだろう。一方は一国の重鎮として名を残した人間で、一方はいけ好かない諸葛亮が自分の後継者として見込んだ程の才がある人間なんだから。

「中々良い言葉を贈ったわね、教経」
「フン。糞爺、俺の師匠に同じ事を言われたんだよ。今よりも遙かに至らぬ時分に、な」
「ふふっ。ちょっと想像出来ないけれどね。あの娘達、それなりに才能はあるようだけれど、社稷の臣になり得るのかしらね？」
「ハッ。社稷を支えるのに才能の高なんて問題じゃないだろうが。先ず求められるのは、そして一番大事なのは此処さ。気持ちなんだよ。あいつらが社稷の臣になってくれることを切に願うよ。俺が楽をする為にねぇ」
「貴方らしいわね」

まぁ、なるようになるのさ。落ち着くべき所に落ち着くンだよ。須く、ね。

～雪蓮　Ｓｉｄｅ～

無事５万もの兵を徴兵した教経が長安から宛に帰ってきた。詠の進言に従い、兵として徴発する人の職業や果たしている役割に応じて採用していったらしい。流石は詠よね。冥琳も詠のやり方を随分と褒めていた。国を安んじるものはそうでなければならぬ、と最高級の賛辞を送っていたのだから。

ただ、教経が帰ってきた際に横にいた華琳はちょっと気に入らないのよね。

宛に入って直ぐに曹家の面々と顔合わせをし、真名を交換した。同じ教経に仕える人間なのだから、ということで。その際、反董卓連合の時以来久し振りにあった華琳は、私と冥琳に対して『教経は渡さないからそのつもりで居てね？』と挑発してきたのよね。

教経も随分と華琳と親しくしていたみたいだし。そもそも華琳を助け出したその日の内に男女の仲になっただなんて。まぁ、それだけ教経が魅力的だってことなんでしょうけど、教経も手が早すぎるのよ。

「冥琳、遠征に連れて行く人間の選別は終わったかね？」

「ああ。選別するまでもない気もするがな」

「誰を連れて行く？」

「雪蓮と私は確定だな。後は親衛隊に新撰組も当然同行する。軍師からは詠。後は華琳の所から何人か、というところだろうな」

「華琳の所から？」

「そうだ。我ら孫呉が降ったときと同様に、平家軍の中に混ぜ込んで早く馴染ませた方が良いだろう。その為には、平家の武将筆頭で

ある星と次席軍師である風が宛に残り、華琳の所からも遠征に参加させる必要がある。霞についても、宛に残っていた方が良いだろう。あの騎馬隊は脅威だから、袁紹軍の良い抑えになるだろうさ。お前と華琳の関係からして彼女が裏切るのは絶対にあり得ないと思うが、周囲の人間はそうは思わないだろう。早い内にそれを一笑に付す事が出来るだけの実績を作ってやっておいた方が良いだろうからな」

「……言い切るねぇ、冥琳。『絶対』なんてあり得ないぜ？」

「……残念ながらこの場合は絶対のようだがな、教経」

「何でまた」

「雪蓮がそう言っているし、何よりお前自身、絶対に裏切らないと思っているだろう？心にもないことを言うのはやめておいて欲しいな」

「……やれやれ。お見通しって訳だ、冥琳は」

「それはそうだろう。自分の好いている男の事が理解出来ない様な女ではないぞ？私は」

「冥琳……」

「教経……」

「はいはーい。そこまでよ、二人とも。わたしがいるって事、いい加減ちゃんと認識して貰わないと困るのよね。毎回毎回二人で良い雰囲気になっちゃうんだから」

「私は雪蓮が居ることはちゃんと分かっているぞ？分かっていて、しっかり差を見せつけようと思っているだけなのだから」

「……本っ当、冥琳って性格悪いわよね？」

「……なに、お前程ではないさ、雪蓮」

「私の為に争うのは止めて！あぁ、私はなんて罪な男なのかしらん！」

……ちょっとカチンと来たわ。

「……冥琳」
「……ああ」
「……はれ？どったの二人とも？」
「……教経？そもそも貴方が女を次々に増やしたりしなければこんな事にはならないと思うんだけどなー？わたし」
「私までで満足してくれていれば良かったものを、飽きたらずに次から次へと口説いて廻るお前に問題が在ると思うのだが？教経」
「……あれ？選択肢的なものを間違えてバッドエンド一直線か？……お二人さん、ちょっと落ち着こうか。な？な？」
「これが落ち着いていられる訳ないじゃない！この節操なし！」
「落ち着ける訳がないだろう！この女誑し！」
「へブッ！」

ったく誰のせいでイライラしてると思ってるのよ！

「……良い拳だったぜ……俺と一緒に世界を目指してみないか……」

はぁ……。普段はこんななのに、決めるときは決めるのよねぇ……優しいし、わたしのことちゃんと受け入れてくれたし。これで女誑しじゃなきゃ文句ないんだけどなぁ。ま、そんなの求めるだけ無駄なんでしょうけど。

「……で、華琳の所から誰を連れて行くンだ？」
「さて。それは華琳に選んで貰うのが良いと思うぞ？宛の守備に誰を残すか、という事に直結しているからな」
「雪蓮はどう思う？」

「わたしはどうでも良いわよ。劉表のドカスさえ殺せれば、ね」
「ドカスって……お前さん、その言葉気に入ったのな？」
「ええ、気に入ったわ。人非人とか屑とか言うよりはドカスの方が言葉の響き的に好きだし、その意味合いも何となく分かるし。わたしはこっちの方が好みよ」
「まさかそんなに気に入るとはねぇ……」
「で、その劉表、どう攻めるつもりだ？教経」
「まぁまずは皆で長沙まで行くさ。襄陽にいる蓮華とも合流してな。その上で、長沙から蓮華の率いる４万、交阯から白蓮が率いる３万を侵攻させる。で、俺たちは長江の流れに乗って一気に建業こんにちはっと行きたいねぇ」
「ちょっと教経。それだと読まれて備えられていたらそれなりに危ない目に遭うんじゃないの？」
「だからちょいとした小細工をしていくのさ」
「小細工？」
「そう。長沙から進発する蓮華の４万を、二つに分ける。２万ずつにね。先を進む２万と共に蓮華には進んで貰う。そうなると、長沙には４万の兵が残るな？」
「ええ」
「で、その後で２万、蓮華の後を追って進発したとして、それは蓮華の隊と思うか？それとも俺が率いる本隊の先陣だと思うか？」
「……教経が率いる本隊だと思うんじゃない？」
「だろうな。蓮華様が先に進んでいる訳だし、そちらの方が納得が行くだろう」
「とすると、俺も蓮華と同じ道を進む、と思うんじゃないかね？」
「あ、そうかも」
「そうしておいてあちらが蓮華に備えた頃を見計らい、俺たちは２万だけで長江を下るのさ。まさか本隊が一番少数だとは思わんはずだ。これで不意を突けるだろう」
「……そして散々に叩いて態勢を回復する暇は与えない、か？」

「そういうこと。最初っから最後まで、一方的に殴り続けてやる。俺が、全力で、心ゆくまで、な。これで勝てるんじゃないかね？」

良くこんな事思いつくわね。相手がどう思うかを常に考えて居る教経らしい策だけど。一方的に殴り続けてやる、か。

「全く容赦するつもりが無いのね、教経は」

「当たり前だ」

「あら、どうして？」

「……愛しい女が仇を討ちたいって言ってるンだ。徹底的にやってやるに決まってるだろうが。俺にしてやれることは何だってしてやるさ。お前さんの為なら、な」

……いきなりそういうこと言うのは卑怯じゃない？……嬉しいこと言ってくれるんだから。

「教経！」

「おわっ」

「わたし、貴方のそういうところ、好きよ？」

「分かった。分かったから離れろって」

「どうして？今日はわたしの番じゃない。遠慮すること無いわよ？」

「いや、まだ昼だろうに」

「雪蓮。今日は私の番でも良いと思うが？順番的に考えても、な」

仕方ないなー冥琳は。嫉妬しちゃって。

一旦教経から離れて、冥琳の耳に顔を近づけて囁く。

「……冥琳。今日と明日、わたしと二人で教経と一緒に居ればいいじゃない。そうすれば教経と二日一緒に居られる訳だし、わたしと冥琳の仲なら今更裸がどうとかいう関係じゃないんだし……」

「……ふむ。二日一緒に居られるというのは中々……いやしかし二人きりというのも……」
「……お前さん達、何か恐ろしいこと考えて居やがるな？」
「ちょっと良いこと思いついたのよねー♪」
「……仕方がないな、雪蓮。今回はそれで行こうか」
「さっすが冥琳」
「ちょ、ちょっと待て。お前さん達、どうして二人して俺ににじり寄ってくるんだね？今日はどちらかで揉めてたんじゃ……？」
「揉める訳無いじゃない。教経は共有するものなんだから、ね」
「そういうことだ。差し当たって今回は共有しようと思ってな？二人で」
「……そいつは要するにこの二日間は二人が相手って事か……？」
「そうよ？何か文句あるの？」
「いや、文句はないが体がもたないンじゃないかね？」
「もたせて貰いたいものだな、教経。そもそも、お前が私達をこうしたのだぞ？責任の取り様というものがあるだろう？」
「……自業自得って奴かね……」
「そういうこと♪」
「では雪蓮」
「ええ。取り敢えずこれからちょっと三人でお話ししましょうか」
「ちょ、ちょっと待て！夜まで待てって！」
「待たなーい♪」

何だかんだと言いながら、結局教経は私達二人を相手に主導権を握りっぱなしだった。ホント、そこまで飢えてた訳じゃないんだけどなー。こんなに乱れるなんて思っても見なかったわ。やっぱり相手が教経だから、かな？冥琳もかなり甘えていたしね。

……華琳。絶対に渡さないわよ？
暢気に眠りこけている教経に、口付けをする。

わたしが我が儘だって事、ちゃんと分かってるわよね？教経？

～教経　Ｓｉｄｅ～

「華琳、この三人か？」
「ええ。きっと貴方の役に立つと思うわ。大軍を指揮するにはまだ少し不足しているし、一人になったら物足りないかも知れないけれど、三人で少数の兵を指揮するなら文句の付けようがないはずよ？」
「へぇ。褒めるじゃないか、華琳」
「事実を述べているだけよ。褒めている訳ではないわ」
「はいはい。なら期待させて貰おうか」

曹操軍から主攻軍に参加する将を何人か出して欲しい、と言った俺に、華琳は凪、真桜、沙和の三人を推挙してきた。春蘭や秋蘭を連れて行くにしては兵が少ないし、華琳が『文句の付けようがない』

と言うからには期待して良さそうだ。

「ご期待に応えて見せます！」
「期待しとってええで～大将」
「頑張ってみるの」

……こうやってみると、不思議だよねぇ。三人とも仲が良さそうだ。楽進と李典って、仲悪かったんじゃなかったか？まぁ、今更なんだが。

「凪、そう肩肘張らずに頑張ってくれ。気負いは怪我に繋がるぜ？」
「は、はい」
「取り敢えず出発までは新兵の訓練をして貰う事になると思うからそのつもりで居てくれ。練兵の様子は見せて貰う。上手くやれ、とは言わないが失望はさせてくれるなよ？」
「お任せ下さい！」
「ま～なるようになるやろ」
「うぅ」

？沙和の様子が変だな。ちょっと自信なさげに俯いている。
……悄げる眼鏡っ娘……良いねぇ。萌えるねぇ。俺は眼鏡属性持ちなんだよねぇ。そして麦茶が好きなんだよねぇ。

「それじゃぁそれぞれ準備に練兵にと精を出してくれ。下がって良いよ、態々済まなかった」
「はっ！」

三人が下がってから、華琳に話しかける。

「なぁ華琳。練兵の件で沙和の様子がおかしくなったが、あれはど

うしたンだ？」
「……あらかじめ言っておくと、沙和は練兵に全く向いて居ないわ」
「はぁ？」
「本人の性格と声がちょっと可愛らしすぎるのよ。威厳がないと言えばいいのかしらね。ある程度練兵してある兵なら言うことを聞くからしっかり練兵出来るのだけれど、新兵となると少し厳しいのではないかしら」
「……それであの反応か」
「でしょうね。ただ、指揮官としては優秀だと思うわよ？堅実で外連味のない用兵が出来るわ。後は大軍を率いたときに同じように出来れば良いのだけれどね」
「どうしても駄目なようなら何とかしてみるさ」
「そう。まああの三人は貴方に任せるわ」
準備が整うまでは練兵して、それから一気に揚州攻略、だな。

新兵の練兵具合が気になって覗きに行った。
星や霞、雪蓮や春蘭達は全く問題がない。というよりも、流石に一流の将だ。それぞれ異なる方法ではあるが、しっかり新兵達を掌握してしごきにしごきまくっていた。春蘭とダンクーガの訓練はちょっとアレだったが。

凪と真桜もそれぞれ新兵訓練を行っていたが、まぁ中々のものだった。凪は正論で兵達を教え諭すタイプ。真桜は脅し、宥め、賺し、最後に飴をぶら下げて上手いことコントロールするタイプ。二人のキャラクターにも合っている気がするし、まぁこれで問題無いだろ

う。

が。

「沙和」

「教経様……」

華琳が言っていた通り、沙和は上手くできて居なかった。

エラく騒がしい一角があると思ってそこに行ってみると、新兵達がダラダラとくっちゃべっていた。危うく清麿抜きはなって怒声と殺気を浴びせそうになったが、ひょっとして沙和の担当じゃないかと思って周囲を捜すと、地面にしょんぼりと座っている沙和を発見した。

「此処で何やってるんだ？お前さんの担当する筈の新兵達はダラダラとくっちゃべっていたが」

「……うぅ……沙和の言うこと全然聞いてくれないの」

「……沙和、どうやったのかを見せてみろ」

「うん……」

華琳は可愛いらしすぎるから駄目だと言っていたが、どうやったらああなるンだ？

「さあっ、みんなー！！沙和お姉さんの新兵訓練の始まりだよーっ！！

強くなりたい君も、町の人を護りたいアナタも、みんな一緒にめいっぱい頑張るぞなのー！！」

……ちょっと待てコラ……犬ＨＫ教育じゃあるまいに……『沙和お姉さん』ってなンだよ……くそみちお兄さん的なアレか？まぁ、俺

的にはアリなんだが。

「……そりゃ駄目だ」

「へ？」

「迫力がない」

「うそっ」

「迫力が無いどころか、可愛い」

「それはそうなのー。沙和は常日頃から、可愛くあるための努力を惜しまないの」

「いや、こういう場面で可愛くあっても仕方がないだろうに」

「……沙和的には、最大限に格好良く、強く見えるように頑張ってみたつもりだったの」

「……はぁ。一緒に解決方法を考えてやるからそう落ち込みなさんな」

「えっ、本当!?」

「本当本当」

「……教経様、有り難う」

「ああ」

やれやれだぜ。どうすりゃいいんだよこれ。

暫く悩んで居ると、魏越のオッサンが担当している新兵の連中が走って脇を通って行く。

……オッサンよ。ちょっとイイか？なンでテメェは『ファミコンウォーズ』のＣＭ的な歌歌わせてるんだよ！歌詞は……『御遣いさ～まと行～くぞ～』とか……何処へ行くんだよ何処へ。

だがオッサンよ、オッサンのおかげで良いのを思いだしたぜ。

此処はやはり、先任軍曹しかないだろう。

「よし、沙和。今から俺が色々と教えてやるから、その通りに新兵

共を訓練してみろ」
「あ、うん。お願いしますなの」
「先ずはな……で……そこで……言葉は……」
「うん……うん……なるほどぉ～……沙和、早速やってみるの！」
沙和はすくっっと立ち上がって新兵達の下へ走っていった。
「ぺちゃくちゃしゃべるな！このウジ虫どもー！」
ダラダラとくっちゃべっていた新兵達が少し驚いた顔をして沙和を見ている。
掴みは上々だな。
「沙和が貴様らの担当教官の于禁文則なの！貴様らウジ虫は沙和が許可したとき以外に無駄口を叩くことは許されないの！分かったら返事をしろ！このクソったれ共！！」
「は、はっ！」
「ちっがーう！口からクソ垂れる前と後に、必ず『さー』を付けるのだー！分かったかウジ虫共！」
「さー？」
「さーいえっさーだ！！」
「さ、さーいえっさー！」
「もっと大きな声を出せ！股間にぶら下げているその粗末なマイタケ切り落として口に突っ込むぞー！！」
「さーいえっさー！」
「いいか！貴様らは今のままじゃ、戦場では屁の役にも立たない、ただ飯喰ってクソ垂れるだけの汚物製造器だ！沙和の訓練に耐えきったとき、初めて貴様らは人間になれる！その日まではウジ虫だ！地上で一番最下等の生物なの！貴様らには両生動物のクソをかき集めた値打ちしかないの！

分かったか！クソったれ共！」
「さーいえっさー！」

……流石世界の警察官の中でも厳しいと言われる海兵隊の訓練方式だな。新兵共は沙和の声と言葉とのギャップに吃驚しているようだ。

「貴様らは厳しい沙和を嫌う！だが憎めばそれだけ学ぶことになるの！沙和は厳しいが公平なの！差別は許さないの！雍州豚も涼州豚も荊州豚もテイ豚も羌豚も、沙和は見下さないの！全て平等に価値がないの！
沙和の使命は役立たずを刈り取ることだなの！愛する平家の害虫を！分かったか！ウジ虫共！」
「さ、さーいえっさー！」
「そこのお前ー！」
「さ、さーいえっさー！」
「何をニヤニヤしているのなの！沙和の顔はそんなに面白いのかーっ！？」
「……あ、いえ……かわいいなと……」
「クソ垂れる前後にさーを付けろと言ったばかりなのー！大体貴様みたいな糞野郎に言われても、ちっとも濡れねえんだよ！分かったらさっさとそのにやけ面を引っ込めろなの！」
「さ、さーいえっさー！」
「さあ、このメス豚共！腹に力を込めて、大きな声を出せ！！沙和を濡れ濡れにして見せろなの！」
「さーいえっさー！」
「もうお昼なのに寝ているのかなの！マスかきを止めてさっさと起きるの！」
「さーいえっさー！」
「そこの二人は何をやっている！メス豚なのか！？」
「さー違いますさー！」

「違うとは何だなの！違うならのーと答えるの！」
「さ、さーのーさー！」
「ならでかい声張り上げて答えてみろなの！」
「さーいえっさー！」
「お前！なにぼーっと突っ立て居るの！まるでそびえ立つクソなの！」
「さーいえっさー！」
「これから号令するからさっさと沙和の指示に従うの！分かったか！」
「さーいえっさー！」
「右向け右ー！」
「さーいえっさー！」
「遅ーい！何をやっているのなの！じじいのふぁっくの方がまだ気合いが入っているの！」
「さ、さーふぁっくとは何でありますかさー！」
「房事のことなの！そんな事も分からないのか豚娘！」
「さ、さー済みませんさー！」

基本的な言葉は全部教えておいたからな。後で罵詈雑言辞典でも作って贈ってやるか、うん。
まぁ、これなら一人でもやれそうだな。

……新兵の連中の表情が、だんだんと恍惚とした物に変わっていって居るのは気のせいだよな……気のせいだと言ってくれ……平家の郎党が変態だなんて勘弁してくれよ？

蝶の如く～138～（後書き）

一応誤解がないように書いておきますが、世界の警察官＝アメリカ軍です。

蝶の如く～１３９～（前書き）

またネタが入ってるんだけど……ちょっと頭ん中掃除しないとシリアスオンリーは無理っぽい。

蝶の如く～１３９～

～亞莎　Ｓｉｄｅ～

先に伝令で知らされていた通り、教経様が２万の兵を率いて襄陽にいらっしゃいました。久し振りに逢った教経様は、相変わらず眩しいお顔をなさっておられました。

これから私達は揚州を取り戻す為に軍を発します。敵は劉表。先代である孫堅様を殺し、辱めた憎い敵です。彼を孫家ゆかりの土地である揚州で討ち果たす事に、不思議な気持ちがします。図らずしてこうなったことは分かっていますが、元々こうなることが決まっていたかのような、そんな気がするのです。亡き孫堅様がそう導いて下さったのかも知れない。そんなことも考えてしまいます。

雪蓮様も蓮華様も同じように感じていらっしゃる様で、感慨深いお顔をなさっておられました。お二人とも、漸く仇が討てるのです。

「漸く劉表のドカスを殺すことが出来るわね」
「……姉様、その、『ドカス』というのは教経の？」
「そ。良い言葉よね。わたし、気に入っているのよ」
「はあ……まあ姉様と教経は気が合うだろうとは思います」
「あら。蓮華とも合うんじゃない？」
「……戦の時の教経は、姉様のようですが」
「蓮華はもうちょっと素直になった方が良いわよ？」
「わ、私は別に教経のことは何とも思っていません！」
「ふ～ん？わたし、『教経をどう思っているの？』とか一言も言ってないんだけどなー？」
「ね、姉様！」

「あはははっ」

雪蓮様や冥琳様だけでなく、蓮華様までも教経様を。

……胸が、少し痛いような。少しムカムカするような。そんな感じがする。

「どうしたの？亞莎」

「いえ、何でもありません。遠征の準備がありますので、これで失礼致します」

「亞莎？」

何故か居たたまれなくなって、雪蓮様達の御前から下がってしまった。

私は、どうしたのでしょうか。

「やっほー亞莎」

「あ、雪蓮様」

「今ちょっと良いかしら？」

「はい」

部屋で一人兵学の勉強をしていると、雪蓮様が態々私を訪ねていらっしゃった。

「ね、亞莎。さっきの事なんだけど」

「はい？」

「ほら、わたしと蓮華が教経の話をしていた時のこと」

「……はい」
「どうしたの？亞莎。暗い顔というか、怖い顔をしていたけど」
「怖い顔、ですか？」
「そうよ。自分で気が付かなかったみたいだけど」
「……申し訳ありません」
「別に良いわよ。わたしも蓮華も気にしないから。それより、貴女のことが気になるのよ、亞莎。一体どうしたの？」
「……胸が、少し痛いような。少しムカムカするような。そんな感じがしたのです」
「……そっか」
「雪蓮様。これは一体何なのでしょうか」

そう言った私に、雪蓮様は苦笑いをしていた。

「……それはね、亞莎。貴女が教経のことを好きだから、よ」
「え？」
「自覚がなかったみたいだけど、教経のことが好きなんじゃない？貴女」
「好き……ですか？」
「そう。教経のことを考えると嬉しくなったり、でも切なかったり。教経が周囲から際立って見えたり。そんな事はないかしら」
「あ、はい。教経様はいつも眩しいです」
「……それ、恋してるからだと思うわよ？」
「こ、恋……」
「あはは。照れちゃって。可愛いんだー、亞莎」
「そ、そんな、私なんて……」
「自信持って良いと思うんだけど？教経だって亞莎のこと口説いてた訳だし。亞莎を見る目も家臣と言うよりは、女の子を見る目だったしね」
「そ、そうでしょうか」

「そうよ。教経にちゃんと話をしてみたら？きっと受け止めてくれると思うけど。貴女の想いを」
「で、でも雪蓮様や冥琳様に……」
「……申し訳ない、とか言わないでね？亞莎。教経を籠絡しろって言ったのはわたしだし。まあこの場合は籠絡された訳だけど。どちらにしても、教経の子を為してくれれば良いのよ。そうすれば孫呉は平家の天下においてもそれ以降においても、蔑ろにされることはないでしょうからね」
「……」
「だから遠慮する事なんて無いのよ、亞莎。貴女がやりたいようにやりなさい」
「……はい、雪蓮様」
「……うん。気持ちに整理が付いたみたいね？」
「はい。有り難う御座いました」

お礼を述べたわたしに対して、ひらひらと手を振りながら雪蓮様は部屋を出て行かれた。
……機会を作って、教経様にお願いしてみよう。教経様がどう思っているのか分からないけど。

～朱里　Ｓｉｄｅ～

「平家軍が動いた、と言うのですか？荊州に？」
「はっ。南蛮を攻めるなら直接益州へ向かうと思うのですが、平教経自らを将帥とする部隊が襄陽に向かったとの情報があります。既に益州で備えている軍とは別に、交阯辺りから南蛮へ攻め込むつもりなのでしょうか」
「……まさか、揚州に……」
「は？何でしょうか？」
「平家軍は揚州を攻略しようというのでしょう」
「まさか。後背に位置する南蛮を手堅く攻略するのではありませんか？」
「平教経自身はそう考えると思いますが、その配下には多くの軍師が居ます。彼女達はいずれも一流の軍師です。特に、郭嘉、賈駆、周瑜、そして雛里ちゃんは軍略において非凡なものを有して居ます。彼女達の誰かが、この時機に揚州を攻略することを献策しても不思議ではありません。そしてその軍師の意見を聞き入れるだけの器量が平教経にはあります。襄陽に向かったとすれば、間違いなく狙いは揚州にあるでしょう」
「で、では直ぐにでも兵を揚州に派遣しなければ」
「……それは無理です。糧食が不足していますし、何よりも私達が動くことを彼が考えないはずがありません。私が掴んだところでは、平家は新たに徴兵を行ったようです。その数は５万。練度はまだまだでしょうが、その意気は天を衝くものであるとの報告を受けています」
「この短期間にどうやってそれを為し得たのでしょうか」

「それは分かりません。が、彼はここまで徴兵を積極的に行ってきませんでした。その領地にはかなりの余力があったはずです。その余力の内のいくらかを此処で切り崩した、ということでしょう。それだけの兵があればこれを留守の兵力とし、現在宛付近に展開している平家軍８万と弘農に駐屯している３万、計１１万の精兵を以て攻め掛かってくることは疑いありません」

「しかしそうと決まった訳では」

「……田豊さん、私は言ったはずです。『予断を持って事に当たってはならない』と」

現実から目を逸らせばその現実を回避出来るのであれば、私だって目を背けたかった。でもそうではないからこそ、今私がこうして袁家で、袁家を利用して、未練がましくも夢を追い掛けている。私にそれを強いた貴方達が、現実から目を逸らすなんて絶対に許さない。

「……申し訳ありません。先に見た光に、少し拘りすぎていたようです」

「いえ。私こそキツい言い方だったかも知れません」

「孔明殿。現状で我らが出来ることといえば、最早調略のみということですな？」

「そうです。手筈は整えてあります」

「な、なんと」

「当たり前のことです。策を口にした時点で、それを如何にして為すかを想定していないような人間はものの役に立ちません。貴方にしても、策を口にするときは漠然と道筋は描けているはずですよ？」

「た、確かにそうですが、孔明殿程明確に道筋を描き、そして迅速に用意出来そうにはありません」

「大した事はありません」

「策は、どのように？」

「陳留を本拠としていた商人が居ます。彼を利用することを考えて

居ます。私達袁家に対して従う旨、誓書を入れてきました。但し、内密に、です。そのようにさせたのです。表向きは曹操を慕い、陰に日向に袁家に抵抗をしているように見せかけています。その方が陳留で商売をするには都合が良いのです。まだまだ袁家に靡こうとはしませんからね。彼を引き込むのには中々骨が折れましたが、やはり家族の身の安全には換えられなかったようですね。

……彼から、資金と情報を提供させます。必要であれば人数も集めさせましょう。決起に向けて、準備は整っている、という状況を目の前にぶら下げてやれば良いのではないかと思います。

揚州に間をおかずに攻め込まれ私達は不意を突かれている状況ですが、それはつまり曹操が降ってから時間が殆ど経っていないということでもあります。この短期間に曹操軍の将兵を掌握することなど不可能でしょう。私達はそこを突きます。まだ天下への野心も失っていないでしょうし、この話の裏に何か感じたとしても、敢えてそれに乗ってくるだけの自信を己の才覚に持っているでしょうから。

『平教経の後背を襲い、エン州を回復して再び天下を目指して頂きたい。我らは曹操様の下でしか生きることを望まぬ者で御座います』とでも言わせれば良いでしょう。それなりに時間は掛かると思いますが、まさか揚州全土を攻略するに一月で、という訳にもいかないでしょう。その時間で曹操を焚きつけて独立させることが出来れば、袁家はまだ天下第一の兵数を誇る、第一勢力足り得るでしょう」

「……よくぞこの短期間にそこまでの用意をなさいましたな。それを為すだけの時間は無かったように思われるのですが」

「時間がなければ創り出せばよいのです。目的を果たす為に邪魔なモノは全て排除すれば問題ありません。それが自分の睡眠時間なら、それを排除するだけのことです」

「……孔明殿。睡眠をとらねば思考が硬直する、と申しますし、何より激務続きでありましょう。この田豊や沮授を、それこそ小間使いのように使って頂きたい。策の全貌を知らせる必要はありません。我らの才で叶うであろう事については、我らに投げて報告させれば

宜しいではありませんか。全てを御自身一人で為されるには、敵が大きすぎます。孔明殿がこの先をどのように思い描いていらっしゃるのか分かりませんが、それを描ききる為にもご自愛下さい。今孔明殿が倒れられることは、袁家が倒れることと同義でありましょう」

「……」

そうは言っても彼らと私とは目指すところが異なる。おいそれと関わる訳にはいかないのだ。私が思い描いていることを、彼らが察知して危険視する可能性は高いのだから。

「……最終的に目指すところが異なっていようとも、その道が重なっている内は良いように利用なされば宜しいではありませんか。私にしても沮授にしても、上手く利用すれば孔明殿が望む結果が得られる程度には有能でありましょう。

利用なされよ、孔明殿。それこそが、貴女がなされるべき事だ。己が夢を実現させる為に、利用出来るものは全て利用なされよ。敵味方の区別無く」

……この人は、気が付いて居るのか。私が袁家を利用して夢を実現し、もしそれを妨げるようであればその障害はどのような手を用いてでも排除することを考えて居ることを。例えそれが、彼らの主であろうとも排除しようと考えて居ることを。

互いの目をじっと見つめる。目を背けることもなく、さりとて私の心を覗き込もうとしている訳でもなく、ただじっと私に『見つめられている』。

……何も裏がないように見える。心底そう思っているのか、この人は。

「……分かりました。考えておきましょう」

「……では、私はこれで」
「ええ。御苦労様でした」
執務室から出て行こうとした田豊さんが、一度立ち止まり、前を向いたままもう一度言った。
『……利用なされよ、孔明殿』、と。

～教経　Ｓｉｄｅ～

襄陽に到着した俺は、蓮華達に今後の方針について説明した。
蓮華にしても思春にしても、俺が主攻軍２万を率いて敵中に攻め入ることを危険視し、それをせぬようにと諫めてきた。俺は自殺志願者じゃないからちゃんと策は考えてある、と説明したが、それでも納得が行かないようだ。

「そこまで心配してくれるのは有り難いが、一番効率が良いやり方を採ろうってだけだ。第一、劉表如きに後れを取る俺かよ。雪蓮も冥琳もいるし、親衛隊も新撰組も付いてくる。益州でのことが頭に残っているンだろうが、今回は大丈夫だ。俺たちが何処に上陸するかってのは、俺たちが決める。向こうが決めることではない以上、雛里がやって見せたような芸当は無理だ。心配することはないンだよ」

「教経様、少し宜しいですか～？」

「ああ。どうしたンだ？」

蓮華達に説明した俺に、穏が声を掛けてくる。穏は穏で気になっていることがあるって事だろう。

……しかし相変わらずでかいな、この乳は。魔乳か？

「あのですね～、水上でなら待ち受けることは可能だと思うのですが、その辺りについてはどうお考えですか～？」

「……呉の水軍には、面白い艨衝があるって冥琳から聞いたんだが？」

「……先に巨大な鉄針を付けた艨衝ですか～？」

「そう、それだ。その舳先を切り離せるよう改造するように真桜に言ってある」

「切り離す……」

「そう。俺が何を考えて居るか、お前なら分かるだろう？穏」

何せ三度の飯より放火が好きな陸遜様だもンなぁ？

「……『火』、ですかぁ」

流石放火魔。『諸葛亮先生！』とか言いながら容赦なく放火して廻るだけあるわ。

「ご名答」
「はぁ～ん、良くそんな事を思いつかれますね～」
思いついた訳じゃ無く、史実で冥琳がかましたからねぇ。
見よ！赤壁は、赤く燃えているぅ～～～～～！！
……ん？『はぁ～ん』？
「やっぱり教経様は凄いですね～♪」
「……おい、穏。ちょいと近すぎると思うンだが？」
「そんなことはないですよ～」
穏が俺ににじり寄ってきている。どころか、腕を取られてその胸に挟まれている。この魔乳眼鏡め！俺を誑かすつもりだろうがそうはい神崎ィィィィッ！
……良いねぇ。俺は眼鏡が好きなんだよねぇ。そして麦茶属性持ちなンだよねぇ。
「麦茶を前にすると萌えて萌えて……って違うわぁ！」
「？どうしたんですかぁ～？」
余りにデカくてやぁらかい乳に、アイデンティティが崩壊しかけただろうが。
「……穏。貴女、何をしているのかしら？」
「……穏、教経様から離れて貰おうか？」
「……の、穏様？どうなさったんですか？」
「……あ、あの、穏様。まだお昼ですから……」

蓮華と思春、明命はまぁ、良しとしよう。
亞莎？問題なのはお昼だからじゃないんだよ？分かるかね？

「やぁ～だぁ～。困ってる教経様も可愛いですぅ～」
「……明命。容赦なく頼むわ」
「は、はいっ」
「あふ～」

ゴッっという音共に、穏が崩れ落ちる。
……やばかった。堤防決壊して襲いかかるところだったンだぜ？

「と、兎に角そういう訳だから心配しなくても良い」
「……分かったわ」
「出立の準備、しておいてくれよ？軍を発したら、一気に屠ってやるつもりでいるンだから」
「御意」

……二月。二月で終わらせてやるよ、ドカス。
それまで精々恐れ戦いているが良い。今まで散々好き勝手やってきたんだろ？だから今度はお前さんが好き勝手される番だ。

因果は、巡るのさ。

蝶の如く～１４０～（前書き）

久々に来たぜ？三話更新だッ……！

あ、多分濃厚なもげろ☆回になっております。

多分。

蝶の如く～１４０～

～麗羽　Ｓｉｄｅ～

劉虞さんから禅譲を受けて、新たに皇帝に即位した私は、国号を『麗』と定めて新しい国の運営に忙しくしているのですわ。朱里さんも田豊さんも沮授さんもギョウには居ませんが、皆それぞれの役割を戦地で果たしてくれているのです。

ここギョウでは、并州を再度平定して戻ってきた審配さんと逢紀さんが重大な案件を選別した上で私の判断を仰いでくるようになりました。私では判断が付かない案件については、斗詩さんと桃香さんが一緒になって事の是非を考えてくれているのです。

今までの私は全て斗詩さん達に丸投げをしてきましたが、たったこれだけのことでこんなに大変な思いをするとは思っても見ませんでした。私の所にやってくるのは重大な案件だけで、その他のことは全て審配さん達が文官に指示を与えてそれをこなしているのですから、彼らの苦労は推して知るべし、というものでしょう。我ながら今まで袁家の統治がよく上手くいっていたと思いますわ。斗詩さんや桃香さんが言う通り、多くの人が居ることが袁家の強みであるのでしょう。

「麗羽様、張コウ殿が練兵の報告をしたい、と申しておりますが」
「そうですか。通して下さいな」
「はっ」

現在陳留に駐屯している朱里さんから、猪々子さんと張コウさんを交替させ、その際に前線にいる負傷兵と後方の壮健な兵を入れ替え

てくれるように言ってきたのです。負傷兵をいつまでも戦陣に止めておくことは、出征している軍の補給物資を無駄に消費することになるからそうした方が良い、と審配さんが言っていました。桃香さんも、負傷兵を早く後方に戻して治療をしっかりしてあげた方が良い、と言ったので、恐らくそれで間違いなかったと思うのです。審配さんは政として、桃香さんは人として。それぞれの観点で献策をしてくれているのだと思うのですわ。

還ってきた張コウさんは、それは精力的に徴兵したり練兵したりと動いてくれています。以前は私に対する態度が気に入らなかったのですが、私が『名門袁家の袁紹』を止めてから、随分と尽くしてくれるようになったと思います。その献言も、言葉遣いは悪いですが、私の為を思ってのものであることはきちんと感じられたのです。

「練兵の報告がある、と聞きましたが」
「はあ。まあそうですな」
「聞かせて頂けますか？」
「先ず申し上げれば、新たに徴兵した兵がしっかりとした兵になるには半年程度は必要でしょうな。半年、というのは、異民族討伐という名目で出征して戦を経験させることまで考えて、ですが。戦を経験しないで兵は兵にはなり得ませんからな。
軍全体の練度については、随分マシになった、という程度のものでしょう。麗羽様がお好きな、『華麗な』兵にはほど遠いですな。あれならまだ公孫家の爺共の方が遙かに使えるでしょう。誠に残念ですが、麗羽様の軍は爺にも劣る、という訳ですな」
「皮肉はおやめなさい。平家に対抗するには、やはり数が必要だ、ということですわね？」
「……中々どうして、きちんと理解されていらっしゃる様ですな。どこかに頭をぶつけられましたかな？」
「官渡の戦い直前くらいから、斗詩さんや田豊さん、沮授さんにそ

う言われ続けて居ましたから。それを覚えていただけのことですわ」
「成る程。記憶力は人並みにあったようで何よりですな」

この人は本当に口が悪いのですわ。官渡の陣屋での人傷沙汰と良い、物騒なことこの上ありません。ですが、今では言葉裏にある、彼なりの気遣いというものが何となく分かる気がするのです。

「心配してくれなくても、私は元には、『名門袁家の袁紹』を演じる私には戻りませんわ」
「……別にそのような心配はしておりませんがね」
「……一つ、良いでしょうか」
「……何ですかな？」
「このまま袁家と平家との間で、一種の膠着状態が作り出せるのではないか、と審配さんや逢紀さんが言っていましたが、それは可能だと思いますか？」
「さて、そのような国家の大事、この武辺には全く分かりませんな」
「何を馬鹿なことを。田豊さんの書状では、貴方こそ国家の大事を考えて軍を動かせる随一の、そして袁家においては唯一の将である、と書いてありました。田豊さんにこれ程見込まれている貴方が、何の見通しもないなどということはないのではありませんこと？」
「……田豊殿め、余計な事をしてくれたな……」
「どうなのです？」
「……まあ、無理でしょうな」
「何故そう思うのです？」
「……もし平家がその余力溢れる領土で全ての卒たり得る人間を徴兵した場合、その兵力は５０万を超えるだろう、と孔明殿は言っておられました。そしてその将兵の士気は高く、また中核を担う兵の練度は今の袁家の兵共には想像も付かぬものでしょう。平家軍の兵一人で軽く袁家の兵三人を殺してのける。麹義殿から聞いた限りでは、彼我の差はそれ程にある訳ですな。

当然奴らはその優位性を認識しているでしょう。訓練も碌にしていない状況では、膠着させることなど出来ますまい。出来るとすれば、それこそ国中の兵を尽くした場合のみ。そしてそれを行うときは、正に袁家が滅ばんとするとき以外にはないでしょう。国中の兵を尽くすということは即ち、領内から働き盛りである青～壮年の人間が居なくなるということですからな。因って無理だと、そう申し上げたのです」

「……そうですか」

袁家は、滅んでしまうのかも知れないですわね。もっと早くに、私が己の愚かしさに気がつけていれば。きっとこのような状況にはなっていなかったでしょう。今は、事態が好転することを信じてやっていくほかありませんわね。

「……遅蒔きながらに気がついて良かったではありませんか」

「そうでしょうか。私にはそうは思えませんが、張コウさんは何故そう思うのです」

「武運拙く死ぬことになったとしても、気付かぬままの愚かな自分で死んでいくよりは、遙かにマシだとは思いませんか。『名門袁家の袁紹』として死ぬのではなく、『袁本初』として死んでいくだけマシだと」

「……しかし皆を巻き込んでしまいますわ。張コウさん、貴方はそれで宜しいのかしら?私のこと、見限っていたのではありませんか?」

「……それとこれとは別問題でしてな。俺には俺の事情というものが在るのですよ」

「それは何ですの?」

「……いずれその時が来ればお話し致しますよ。では、俺はこれで」

意味深な言葉を残していくものですわね。

……私に出来ることは、袁家を纏めて皆の力が発揮出来る環境を整えること。沮授さんも桃香さんもそう言っていました。
特に桃香さんは『どんなに辛いことでも、皆で一緒に頑張れば乗り越えられるんだって信じて頑張ろう？』と言ってくれたのですわ。それを信じて、やるしかないのでしょう。まだ見捨てずに力を尽くしてくれている、皆のためにも。皆と一緒に。

～愛紗　Ｓｉｄｅ～

襄陽から長沙に移動してきた教経様の前で、侵攻前の最後の軍議を行った。
教経様が建てられた策は、確度の高いものだと思う。先ず長沙から蓮華が侵攻する。その後、同時に長沙を発った白蓮が、その距離の差によって生まれる時間差を以て交阯より侵攻。最後に教経様御自身が兵を率いて建業近辺を強襲する。次々に、そして至る所から侵攻する軍に対応するには、劉表軍では荷が勝ちすぎると思う。

私と蒲公英は、将として白蓮を支えて欲しいという教経様達ての願いで交阯から侵攻する軍に属することになった。折角教経様と逢えたというのに、明日にはもう離れてしまう。最近太原時代から教経様に従っている私達が全て揃って教経様と一緒に居ることが殆ど無い。

それぞれが出世し、それぞれに責任ある地位が割り振られている以上、それは致し方のないことだというのは重々承知している。けれど、やはり寂しいと思ってしまう。私達は、それこそずっと一緒にやって来たのだ。どんなときも教経様と一緒に居たのだから。褒められたものではないと思うけれど、やはり太原時代が懐かしく、あの頃に戻りたいと思ってしまう自分が居る。教経様が手の届くところにずっと居て、断空我と馬鹿なことを為されたり、子供達相手に大人げなく本気で遊んだり、鍛冶屋で奇声を上げていたり、そして私達と共に夜を過ごしてくれていた、あの太原時代に。

「どうしたンだ？愛紗」

軍議の後、教経様に抱かれて物思いに耽っていた私に、教経様が声を掛ける。

「いえ。少し昔のことを思い出していたのです」
「……太原、か。何もかもが懐かしい」
「……どうして分かるのですか？」
「それはお前さん、あれだけ懐かしそうな顔をするなんて、太原以外には無いじゃないか。あそこから全部始まったンだから」
「そうですね。教経様の天下統一は、あそこから始まったのですから」
「……それだけじゃないだろ？愛紗。俺たちの関係が始まったのも、

太原からだよ」
「そ、そうですね」
「照れてンのか？……いつまでも可愛いねぇ、愛紗は」
「お、お戯れを」
「戯れてなんか居ないぜ？愛紗は可愛いんだよ。散々言っただろ？俺がそう感じているんだから……」
「……『俺にとってはそれが全てだ』、ですか？」
「そうそう。分かってるじゃないか、愛紗」
「それはそうです。教経様のことですから」
「ははっ。しかし愛紗に関しての想い出は、ただ単に懐かしいだけじゃなくてかなり恥ずかしいけどな」
「どういうことですか？」
「お前さん、忘れた訳じゃ無いだろ？俺ぁやらかしただろうに。お前さんとの立ち合いで」
「……そうですね。そんな事もありましたね」
「あの後愛紗に頭下げて、練兵して貰って」
「夢を語って私を誘って下さいましたね、教経様は」
「その前に色々説教されてたけどねぇ」
「それはそうです」
「太原の爺さんの家に探しに来て、結局お前さんも一緒に昼飯ご馳走になってたじゃないか。アレで俺だけ怒られるってのはちょっとおかしいと思うんだけどねぇ」
「あ、あれは教経様が長老に無理矢理ご飯を作らせたからではありませんか！」
「おぉ、怖い怖い」
「他にも問題行動は沢山ありましたよ？」
「そうかぁ？」

全く。都合の悪いことは忘れたふりをするのだから。

「今はその全てが親衛隊になった断空我の組下に、明らかに嘘と分かる掛け声を覚え込ませたりしたではありませんか。それも、丸一日掛けて、本当に愉しそうに」
「今じゃ親衛隊の『鉄の掟』らしいぜ？アレ」
「本当ですか？」
「あぁ。ダンクーガの奴、結構気に入ってるらしい。あと、『真名を本当に忍にしようかなぁ。折角大将がくれたんだし』とか言ってたのを？忠が聞いててな。俺にそう教えてくれたよ。
……それだけ気に入ってくれてるのは、実は結構嬉しいんだよ。本人には絶対に言わないけどな」

教経様が柔らかく笑っていらっしゃった。
この人の本当の顔は、きっとこの顔なのだろうと思う。そう言うと恥ずかしがって見せてくれない気がするから、本人には絶対に言わないですけどね、教経様。

「教経様らしいです」
「……本当に懐かしいねぇ。そういえば初めて愛紗を抱いた後にさ、夢を見たんだよ」

教経様はちょっと笑って天井を見上げていた。

「突然どうなさったのですか？」
「いや、まぁ思い出して、さ」
「どのような夢ですか？」
「お前さんが俺に嬉しそうに抱きついてきて、口付けしてくれる夢、だよ」

そ、それは夢ではないと……お、思います。

「その夢の中で、お前さんに言ったことを思い出してな。お前さんとこういう関係になるなんて、思っても居なかったって。そう言ったンだよ」
「私も思っていませんでしたよ？教経様」
「そうか。まぁそうだよなぁ。始まり考えたら碌でもない縁だモンなぁ」
「……でも、そんな縁でもあってくれて良かったと思います。そうでないと、私は今こうして教経様と共に在る幸せを手に入れる事は出来なかったと思いますから」
「……そっか。そう言ってくれると嬉しいよ、愛紗。俺もそう思うから」

教経様と、口付けする。

「……愛紗。あとちょっとで天下統一だ」
「……分かっていますよ、教経様。きっと私がその道を開いてみせます。私はその為にこの世に生を受けたに違いないのですから」
「違うね」
「えっ？」
「愛紗は、俺に愛される為にこの世に生を受けたのさ。そうに決まってるンだよ。それ以外の答えなんざお断りだ」
「の、教経様……」
「何だね？……っと！」

教経様の言葉が嬉しくて。教経様に抱きついて、長い間口を吸っていた。
……欲張りなのは分かっている。でも、私は全部手に入れたい。

教経様が夢に描いているその世界を。

そして、教経様を。

蝶の如く～１４１～

～教経　Ｓｉｄｅ～

揚州攻略に向かう、その当日。
荊州の留守を預ける事になっている、黄忠と馬良に逢った。前日には、徐庶に逢っている。

徐元直。真名は吉里。音だけなら、曹操の幼名と同じだな。華琳の幼名は知らん。
今後の展望について色々と訊ねてみたが、雛里の学友だけあって優秀だった。仇討ち手伝って名前変えたんだっけ？と訊くと、驚いた顔をしていた。まぁそうだろうね。だがこれで掴みは上々だった。
こういう人間は最初の印象が大切だからねぇ。ちゃんとお前さんのことは知っているよ、と伝えたつもりだ。
その際、「ふむ。僕のことを知っているのは、天の御使いだからかな？まあ、どうでも良いんだけどね」と言った事で、詠に続くボクッ娘が平家に参入したことが判明した。非常に俺得だ……一部残念だったが。

「お初にお目にかかります。私は姓は黄、名は忠、字は漢升。真名は紫苑と申します」
「あぁ、初めまして。俺は姓は平、名は教経。字も真名もない。好きに呼んでくれれば構わない」
「ではご主人様と」
「……まぁいい。俺が好きに呼べばいいって言ったんだしな。宜しく頼む」
「ええ」

そう言ってにっこり笑った。いい女、なんだろうね。柔らかい笑みと良い、ぶら下げているロケットと良い、良い仕事してますねぇ。実はこれで子持ちだって言うんだから吃驚だ。碧もかなり不思議な存在だが、紫苑もかなり不思議な存在だ。

……実は腹黒い、なんてことはないよな？ついでに言うと、アンタ年齢いくつなｎ

「ご主人様？余計なことを考えて居ると危険が一杯ですよ？」

俺の頬を矢がかすめた。俺が全く反応出来なかった、だと？ダンクーガも？忠も全く動けていない。もの凄いプレッシャーだねぇ。弓兵だけに固有結界か何か展開したのか？……あ、魏越のオッサンが泡吹いて倒れた。

「は、はは……分かってるさ」

「……それなら宜しいのですが」

「……は、初めまして。私は姓は馬、名は良、字は季常。真名は珂瑛と申します」

「『馬氏の五常、白眉最も良し』、だな」

「私のことをご存じなのですか？」

「まぁ、ねぇ。お前さんは有名だと思うンだが」

かなり優秀な人間だったことは間違いないンだからねぇ。

「そうでしょうか？」

「何にせよ、宜しく頼むよ、珂瑛」

「はい、ご主人様」

眉目秀麗と言って良いだろう。白い眉毛が幻想的な雰囲気を醸し出している。別嬪さんだねぇ。

……だが、やはり一部残念な感じだ。風に匹敵するものがあるな。風も……む……何だこの悪寒は……これ以上考えれば命はない……だと……。ええい、平家の風は化け物か！

「あの、ご主人様。少しお伺いしたいのですが、宜しいでしょうか」
「何だね？答えられる限りは答えよう」
「妹がご挨拶に伺ったと聞いたのですが、今彼女はどうしているでしょうか」

……あぁ、瑛のことか。やっぱり気になるよなぁ。

「華琳、曹操に預けてきた。華琳が瑛の才を伸ばしてくれるだろうさ。性根含めて、な」
「そうですか。厳しくやって頂いて構いません。宜しくお願い致します」
「……厳しい、という言葉の範疇で済めば良いけどねぇ」
「……え？」

華琳はドーサーでズーレーだからねぇ……。

「まぁ、それだけ厳しい環境だってことさ。ただ、決して無謀なことはさせないだろうし、人の才を見抜いてこれを育てることに掛けては国で一番かも知れん」
「そうですか。ご主人様がそこまで見込んでいる人が瑛に指導してくれるのであれば、安心して居られます。瑛もきっと新しい自分に目覚めることが出来ると思いますから」

……うん、確かに『新しい自分』に目覚めるかも知れないよね。素質があったら育て上げちゃうのが華琳だろうからねぇ……猫耳軍師的に考えて。素質がなければいいね。いや本当に。

まあお姉様がＯＫだってんだから、俺は知～らな～い。

「お前さん達二人に、荊州の留守を任せる。軍事と政務、その両方について宰領する権限を与えるから上手いことやってくれ。兵を連れて行くからかなり大変だとは思うが」

「ご主人様。ご主人様ならばどう致しますか？」

「そうだねぇ。まず各郡の警備兵から５００人ずつ兵を出させるかな。それで６，５００人は確保出来る。豫州と接している江夏郡と揚州攻略の補給を担う長沙郡の中間に展開させるとして、他領と接していない箇所の警備兵をギリギリまで減らす。で、減らしたそいつらを江夏と長沙に送れば良いだろう。そうすれば大体２０，０００程度にはなる。数だけだが、これで取り敢えずは凌げるはずだ」

「……成る程。何故そうせよ、と仰らなかったのですか？」

「『任せる』、と言ったろ。お前さん達なら結局同じ結論を出しただろうし」

「思いつかない場合もあるでしょう？」

「それで上手く行かなかったとしても、そいつはお前さん達だけの責任じゃなかろうよ。任じた俺の失態でもある。見込み違いをしたのは俺なんだから」

「……うふっ。面白いお方ですわ。ご主人様は」

口元に右手を当てて、紫苑が笑う。

よく分からんが、何故かエロスを感じるねぇ。

「ご期待に応えられるよう、精一杯努めますわ。ご主人様」

「まぁ程々に、な」

「それで、いつご出発なさいますか？」

「今夜半だな。船の準備次第だが」

「それやったらちゃんと出来とるで～大将」

「いや、お前さんの作業が終わってないとかいう意味じゃない。干

し草積んだりブチ撒ける油を積んだりで忙しくしているのさ」
「そういうことかいな」
「そういうこと。それぞれしっかり準備しておいてくれ」
「御意」

出来れば水上で待ち構えていて貰いたいねぇ。労力掛けずに殺せるだろうから。

～思春　Ｓｉｄｅ～

長沙を進発した私達は、豫章を攻略すべく軍を進めている。此処まで、全く抵抗がない。これは劉表軍の罠かも知れない。いくら何でも此処まで人が居ないというのはおかしいだろう。蓮華様も同じ事を感じたらしく一度祭殿に相談したが『穏と亞莎に訊いた方が早い』と言われて二人を呼び出した。
……祭殿は面倒だっただけだと思う。

「どうしたんですかぁ～蓮華様？」
「少しおかしいと思わない？これだけ侵攻しているのに、全く敵兵が見えないなんて」
「あ、それはですね～、おかしくないんですよぉ～？」
「……どういうことだ？」
「私は元々山越族との交渉を冥琳様に命じられて行っていましたから～」
「そ、それはつまり」
「はい。穏様は山越族を動かして敵軍をこの先の山岳地帯付近に引きつけておられます」
「お約束では、これから私達が助けに行ってあげることになっているんですよ～？」

……口調や雰囲気で穏を判断すると手ひどい目に遇う。今でさえその真名の通り安穏とした雰囲気を醸しているが、実行し披露した策の内容は安穏からはほど遠いものだ。

「貴女、いつの間に……」
「ほぇ？教経様に荊州に置いてけぼりにされてからずっとやっていたんですよ～。亞莎ちゃんも一緒にですよ～？」
「……全く。そうであるなら儂にも一言教えておいてくれればよいものを。亞莎もそう思わぬか」
「そ、その、『祭殿は酒の席で意味深なことを言うことがあるから秘事は漏らすな』と冥琳様が……」
「……ほう。冥琳め、そのようなことを……」

祭殿、事実であるので仕方がない部分があると思いますが。

「……なんじゃ思春。何か言いたそうじゃの？」

「……いえ」
「では、劉表軍はこの先にいるのね？」
「はい。そろそろ明命が還ってくると思うのですが」
「……噂をすれば、だな」

明命が還ってきたようだ。

「あれ？皆様お揃いです」
「明命、報告お願いします」
「あ、はい。劉表軍ですが、豫章郡とハ陽郡、会稽郡の三郡の境界辺りに展開しています」
「私達が攻め込んでいるというのに悠長なことね」
「簡単に撃破出来ると思っていたんでしょうね～。装備なども大した事はないし、糧食の備えもないだろうと思っていたに違いありません。が、前々からその辺りを融通していたので撃破出来ない状況ですね。
今こちらに軍を振り向ければ、山越族に後背を突かれますし。当初の予定に拘って死んでいくことになりますね～」
「あの、穏様。その……」
「？どうしたんですか？明命ちゃん」
「その、劉表軍ですが、まだ気が付いて居ないのではないかと……」
「面白い冗談ですね～。明命ちゃん、中々やりますね～」
「あの、冗談ではないです」
「明命、どうしてそう思うんですか？」
「陣の後背、わたし達の前方に糧食を集めていて、哨戒網も山越側にしか無かったからです」
「……」

穏が黙りこくっている。流石に呆れた、ということだろうか。
それにしても。

「……奴らは私達を舐めているのか」
「思春、そう息むな。都合が良いではないか。ある程度まで接近したら騎馬で強襲して糧食を全て頂くとしようではないか」
「そうですね。それで糧食が増えることになりますから」
「……それはどうですかね～」
「穏、貴女には何か懸念があるのかしら？」
「その前に明命ちゃん。前方に展開している劉表軍はどの程度の規模ですか？」
「あ、はい。５，０００程度でした」
「……少なすぎますね～。それで、明命ちゃん。用意されている糧食はどの程度でしたか？」
「３万程度の軍が一月は行軍出来るだけのものがあったと思います」
「おかしいですよね～。そんなに必要無いのにどうしてそれを持って移動しているんでしょうねぇ～？」

……そう言われれば確かにそうだ。山越族を簡単に討伐出来ると思っていたのであれば、尚更にその糧食の量は不自然だと言わざるを得ない。

「私が何をしても良い状況であれば、５，０００を捨て駒にして糧食を敵軍に接収して頂きますね～」
「何を言っているのじゃ、穏」
「……毒入りの♪」
「な！」
「此処は糧食を確保して、それは消費せずに機会を見て利用することを考えた方が良いでしょうね～」
「……何か腹案があるのかしら？」
「はい～。でも、教経様に報告すればきっと同じ事を思いつかれると思うんですよ～♪私達の相性を占うのに丁度良い試験だと思うん

ですぅ～。あぁ～ん、待ち遠しいですぅ～♪」

……前々から思っていたが、穏も、そして亞莎も教経様の事を気に入っているようだ。

穏を見る蓮華様の表情は硬い。先の事と言い、教経様のことになると少し蓮華様は雰囲気がおかしくなる。アレは、一体何なのだろうか？背筋が寒くなったりするのだが。

「……蓮華様。先ずは目の前の敵を駆逐致しましょう。教経様のことは後で宜しいかと」

「し、思春！わ、私は別に」

「はっはっは！蓮華様も乙女であったということですな！」

「さ、祭！」

「さて、怒られる前にさっさと出陣しようかの、思春」

「はっ。明命、蓮華様を頼む」

「あ、はいっ！」

「ちょ、二人とも！？」

「じゃあ亞莎ちゃん、祭様達に同行してしっかり軍師としての務めを果たして下さいね～」

「はい。最善を尽くします」

「私を無視しないで！」

「無視はしてないですよ～、蓮華様。ちょっとお一人で考える時間を作っているだけですから～」

「そ、そう……それ、無視しているって言わないかしら？」

「そうとも言いますね～」

「穏！」

以前の蓮華様なら、戦場でこのように自然体でいらっしゃる事は無かったに違いない。

教経様と出会ってから、蓮華様は本当に変わられたと思う。堅苦し

さというか、こうあらねばならないという呪縛から解き放たれたように見える。中々それを成し遂げることが出来なかった蓮華様に、蓮華様として生きることの大切さを説いた教経様も、きっと昔は悩んで居られたに違いない。

蓮華様は教経様に惹かれている。同じく家を背負うものとして。
そして何より女として。

……私も、きっと教経様に惹かれているのだろう。己の主の主君として。
そして何より、女として。

～凪　Ｓｉｄｅ～

「いやぁ～、中々壮観だねぇ」
「……大将、それ結構言ってるよな」

「別に問題無いだろうが」
「そりゃそうだけどさ」
「大体、目の前に広がってる光景は壮観以外に表現しようがないだろうが」
「……いや、他にもあると思うけどね、俺は」
「例えば？」
「悲惨だなぁとか熱そうだなぁとか」
「詩的感受性ゼロなのな、お前」
「大将も多分そうだよ」

長沙から船で長江を下る私達の前に、多くの艦船が停泊する基地があった。此処で私達を食い止めよう、という構えだった。まだ夜が明ける前であることもあり、船は水上に広く展開せず、岸付近に纏まっている様だった。
斥候によって事前にその情報を仕入れた教経様は、上流から全ての油を流し、そして敵陣中に十分に行き渡ったであろう時機を見計らって火箭を射掛けさせたのだ。

その結果が、目の前の、教経様曰く『壮観』な光景だ。長江が、燃えている。
損害を免れた船が岸に逃げようとするが、そこに真桜が改良した小型の船が突っ込んでいく。敵の船の腹に、その頭に付いている大きな鉄針で食らい付き、そしてそこに火を掛けて切り離して離脱する。
敵は何とか陸に上がって迎撃態勢を整えようともがいている。

「見よ！長江は、赤く燃えているぅーーーーー！」
「……師匠……？師匠……師匠……師ィィ匠ォォォォォォォォォ！！！！！」
「……はぁ。教経、断空我。お前達は一体何をやっているのだ……」
「いや、大将にこう言えって言われたから言ってみたんだけど」

「……兄貴、まさかと思うけど、それが言いたいが為にやった訳じゃ無いよな？」
「ぎっくぅ！は、はは……まさかそんな訳無いじゃないかね？」
「……図星？」
「百合、そんな事はないさ。百合は信じてくれるよね？」
「……急に男前な顔と声を作っても、姉貴は騙されないぜ？兄貴」
「……うん」
「姉貴！そこは信じちゃ駄目だって！」
「……忠、五月蠅い」
「あ、姉貴が……俺から遠退いていく……」
「はぁ……？艾の姐さんが好きなのは分かるが、実姉なんだから程々にしとかないとそろそろドン引きだぜ？？忠」
「うるせぇよ。誰にも迷惑掛けてないんだから問題無いだろうが！」
「……私、迷惑かも」
「あ、姉貴……」
「？忠が風雲再起不能になったところで残ったゴミ共お掃除するぞ？あ、オッサン。？忠殴ってやってくれや」
「ラーサ！」
「よっしゃぁ！親衛隊！上陸したら襲ってくる奴ぁ皆殺しだ！死姦が趣味の糞野郎の兵に押し負けるんじゃねぇぞコラァ！！殺ぁぁぁぁぁぁってやるぜ！！」
「「「「「ＯＫ！忍！」」」」」

……これが平家にとっては普通らしい。
教経様と言い親衛隊と言い、少しお遊びが過ぎると思うのだが。真桜や沙和は、そんな教経様達を見てケラケラと笑っている。

「いやぁ～、ウチとこの大将はホンマにオモロイなぁ～」
「だよねー。沙和、戦に来たのに大笑いしちゃったの」
「お前達！真面目にしろ！」

「そんなこと言っても大将がアレやし……」
「もう真面目にしていらっしゃるだろう！」
「あれ、本当なのー」

教経様は主攻軍の軍師を務められる冥琳様と話をしている。

「さて、教経。これからどうなるかな？」
「さぁねぇ。焼き払われたとは言え、きちんと備えることが出来るだけの頭を持っている奴が居たってのは驚きだね」
「フッ……驚いている奴の顔ではないが？」
「そうかね？俺は感情が表情に出ない人間だからねぇ」
「何を馬鹿なことを。で、どうするのだ？実際」
「ここから陸路で問題無いだろう。手持ちの兵力全部を俺の前に展開したとしても、たかだか５万だ。強引に徴兵したとしても、６万程度だろう。そのうちの１万は此処で死ぬ訳だし、２倍程度の劉表軍に後れを取る平家軍じゃないんだよ。あっちは雑役夫、こっちは兵だ。憂うべき何物もない」
「……ここが丹陽であることを考えると、建業までは１０日程度だな。途中で妨害があったとして、１５日という所か」
「……お前さんも鎧袖一触だと思ってるみたいだな？途中で待ち受けられていても３日で戦闘が終わる程度のモンだって考えてる訳だから」
「当然だ。お前と雪蓮が虎の群れを率いて居るのだぞ？豚が抗えるはずも無かろう」
「ははっ。言い得て妙だな。まぁ、きっちり耳を揃えて支払って貰わないとな。鬼畜にも劣る所行の代償って奴を、ね」

……劉表は、死姦愛好者。そして雪蓮様の母上様を死姦したらしい。その事を初めて聞かされたとき、余りの嫌悪感に吐き気を催した。教経様はそんな私を見て、軟弱だと仰るどころか背中をさすりなが

ら気遣って下さった。……後で真桜や沙和に冷やかされたが。

劉表をどうするのか、と訊いた私に、教経様はこう仰った。

『善人には善人に、悪人には悪人に、それぞれ相応しい死に様ってのがある。善人なら家族に囲まれて穏やかに死んでいくのが相応しいだろうし、悪人なら己の悪事を白日の下に晒されて罪を得て殺されるのが相応しい。それなら、外道には外道に相応しい死に様って奴があるだろう。

俺は奴が降伏しようと生かしておくつもりはない。俺が理想とする国を描くのに必要な人材はもう十分集まっているだろう。まぁ、そうでなくても奴のようなドカスを取り込もうとは思わん。一緒に居るだけで胸糞が悪くなってくるだろう。どうせ我慢出来ずに殺すことになるンだから、さっさと殺しておくに限る。前回まんまと取り逃がしてしまったからねぇ。今回は絶対に逃がさない。決して逃れられぬ死を呉れて遣るンだ。

……俺が殺すと言った以上、奴の死は絶対だ』

その際に放った殺気は、今までに感じたことがない程凄絶なものだった。

流石は華琳様が従うことを肯んじる人だ。戦場で華琳様と二人だけで敵の猛攻をしのぎ、そして敵将を討ち取った。その武技も、そして心根も立派な人だと思う。

「凪、真桜、沙和」

「は、はっ」

「何や大将」

「はいなのー」

「お前さん達は雪蓮と冥琳の配下として周辺を掃討して貰う。敵は本陣を襲ってくるだろうから、その後背から叩きまくってやれ」

「教経様、それは危険ではないでしょうか」
「危険？何処にあるンだ？あの程度の兵で俺を殺せる訳がないだろう。あの程度の兵で俺を殺したいなら８万は用意して貰いたいねぇ。ま、それでも五分かも知れないがね？心配してくれるのは嬉しいが、此処では無用だ。それに、お前さん達がより迅速に敵を屠っていってくれたらそれだけ俺の危険は減る訳だ。
……期待してるよ、凪」

私の頭を撫でながら、教経様はそう仰った。

「あれ～？な～ぎ～、アンタ何照れとるんや～？」
「凪ちゃん、お顔が真っ赤なの」
「う、うるさい！」
「ははっ。まぁ、気楽に行こう。そう長くはないがまだ先があるからな。三人とも、期待してるよ。
……ンじゃ行こうか。ドカスを殺しに」
「「「御意」」」

この戦いで、曹家の代表としてきっとお役に立ってみせる。
華琳様と、教経様の期待に応える為に。

蝶の如く～１４２～

～白蓮　Ｓｉｄｅ～

南海郡から会稽郡へ攻め込んだ私達は、散発的な抵抗を排除しながら呉郡、建業を目指している。今のところ、抵抗をしているのも賊でしかなく、劉表軍は影も形も見えない。

その事を不審に思うが、同時にまたそうだろうとも思う。長沙に一旦集結していた訳だから豫章やハ陽で備えるのは当たり前で、臆病な劉表の性格からするとその数も大した事はないだろう。自分の手元に大軍を置き、それに囲まれて安心感を得ようとするに違いない。

「白蓮。何を考えて居るのだ？」

「ああ。これから先の事だよ」

「先の事？」

「そう。教経が攻め寄せるであろう建業に劉表軍が集まっているんじゃないかと思ってね」

「な、何！？」

「これだけ侵攻しているのに、抵抗するのが賊だけってのもおかしいと思うし。多分それであってると思うんだけどさ。雛里はどう思う？」

「大凡は、白蓮様の仰る通りだと思います。きっと劉表さんはご主人様を大いに恐れていると思うのです。蔡瑁さんの死に様から考えて、自分も碌な殺され方をしないと思っているでしょうから。だからこそ、建業周辺に兵を集めている可能性はあります」

「では一刻も早く教経様に合流しなくては！」

「愛紗さん、大丈夫ですよ。私は大凡、と言ったのです。幾ら劉表さんが馬鹿でも、蓮華さんと白蓮様を足止めをしなければならない

ことは分かっているはずです。双方に1万程度の兵を割り振り、残りを建業付近に配しているに違いありません。少し目端の利く者がいれば、長江を下ってくる軍があることを予測してそこにも備えるでしょう」

「尚更教経様が危険ではないか！」

「いいえ。川を下ってくるのがご主人様であるとは思わないでしょう。幾ら戦いを嗜むとは言え、敵中に孤立しかねない部隊を自ら率いるなど、彼らの理解の外にあるはずです。そういった人物が居るということを想像出来ない人間に、それを察知することは出来ません。ですから、安心して居て良いと思います」

「雛里が言うことも分かるけどさ～、そもそもそんな風に分散するのかな？たんぽぽなら全部纏めて敵が少ない所から撃破して廻ると思うけど」

「僕達も最初はそう思ったけど、それはないだろうって結論付けたのよ」

「なんで？」

「そもそも先の荊州攻略時に、劉表自身が戦場に出てきていないでしょ？状況から考えると、今よりも前の方が遙かに守るに易い状況なワケ。それなのに配下の将に任せっきりにしてた。自分が戦場に出るなんて願い下げだってことじゃない？そもそも劉表は武将と言うよりは文官だしね。

そうなると、自分が信頼出来る人間に兵を預けてそれを行わせるって事になるワケ。でも雛里が言った通り、劉表は御遣い君を恐れているワケだから自分の手元に兵を置いておきたいと思うでしょ？そうなると劉表軍が取り得る戦略ってのは、来もしない袁紹軍の援軍を当てにして時間を稼ぎましょうってものになるワケ。だから雛里が言ったように、兵力を分散して時間を稼ごうとするでしょうね。

……この場合はそれだけじゃないと思ってるけど」

「『御遣い君』とは誰のことだ、誰の！」

「？『御遣い君』は『御遣い君』だけど？」

「ま～ま～。愛紗、落ち着きなよ～。どうせご主人様が『俺の事は好きに呼んで構わない』とか言ったんだから」
「そうそう。御遣い君、ちょっと格好付けながらそう言ってた」
「あはは。格好付けてる訳じゃ無いと思うけどな～。ご主人様は誰にでもそう言うから」
「ふぅん。誰にでも言うんだ」
「お前達、ちょっと気が緩みすぎじゃないか？」
「白蓮様の仰る通りです。少し気が緩んでいると思います」
「そんなことないよ～。たんぽぽ、結構気を張ってるよ？」
「僕だってそうだよ、雛里。見くびらないで貰いたいワケ」
「……で、このままの速度で進む、ということで良いのか、白蓮」
「ああ。ただ、行く先で困窮している人間が居たら、許せる限りの助力をしようと思う」
「そんな時間があるかな。僕は反対だね」
「吉里。そうは言っても揚州の人間は私達を通して教経を見ることになる。困窮している人間をそのままに放置して進むことを、決して快くは思わないだろう。それをすれば教経の評価が墜ちると分かっているのに敢えて為す理由はないだろう？」
「でもそれが向こうの思う壺なんじゃないかと思うんだけど？」
「どういう事だ？吉里」
「要するに、焦土作戦展開してるんじゃ無いかって事。行く村行く村糧食が無くて困ってるとか普通ならあり得ないワケ。劉表軍が無理矢理徴発したに違いないと思うんだよね」
「私達が施さない訳にはいかないということを見抜いて、か」
「そうそう。文官やってただけあって、陰湿な策を思いつくよね本当に」
……それならそれで構わないだろう。
「それならそれで構わない。それに乗っかろう」

「白蓮？」
「但し、私達は止まらない。足止めが１万程度という見込みなら、こちらは２５，０００居れば問題無い。２５，０００が余裕を持って建業までたどり着けるだけの糧食を準備してくれ。それ以外の糧食については、５，０００の兵を護衛に付けて私達の後を進ませればいい。そいつらが糧食を配る。何も全て一緒に行動することはないだろう」
「成る程。それならば行軍が遅れぬし、教経様の評判も墜ちないな」
「１万が僕達じゃなく５，０００の方を襲ったら？」
「そうさせない為に斥候を放つんだよ。雛里とお前が居て、捕捉出来ないなんてことはないだろう？」
「白蓮様……お任せ下さい。必ず捕捉して見せます」
「……上等じゃない。僕が絶対に捕捉してやるから」
まあ、この二人なら大丈夫だろう。私なんかより遙かに有能なんだから。

「白蓮、劉表軍が動き出したみたいだよ～」
「ああ。そうみたいだな。雛里、全軍に通達を。敵が愛紗たちに食らい付いたらその後背から突き崩して奴らを包囲殲滅せよ、とね」
「あわわ、分かりました、白蓮様」

あの後、劉表軍に対して敢えて情報を与えることで、私達が軍を二分したことを知らせ、多くの糧食を守備して居るのはたったの５，０００であることを認識させた。
その５，０００を捜して移動する劉表軍の前を、私達が２０，００

０の兵を率いて通過した。それを隠れてやり過ごし、今通過しようとしている後続の５，０００の部隊を襲おうというのだろう。

「……こんなに簡単に引っ掛かってくれると張り合いがないんだけどなぁ」

そう。これは雛里と吉里の罠だ。

私達は劉表軍が隠れていたことなど見通していた。その前を敢えて通過して、奴らの後背に埋伏したのだ。そして、後続の５，０００は愛紗が率いる精鋭中の精鋭。ご丁寧にダラダラと進む様な真似までしている。アレが運んでいるのがただの土塊だと知れば、敵はさぞかし悔しがるに違いない。

「まぁそう言うなよ、吉里。楽に勝てるだけマシじゃないか」

「まあね。『勝つべくして勝つ』のが最上の兵法だとは思うけど、やっぱり面白くはないワケで」

「そう言うな……どうやら始まったな」

劉表軍が一斉に立ち上がり、愛紗の指揮する５，０００に掛かって行く。愛紗の側でも擬態を脱ぎ捨て、気勢を上げて迎撃に出ている。

「行くぞ！再編した公孫家の白馬義従の力を思い知らせてやれ！」

「おぉ～！」

「突っ込め！」

完全に不意を突いている状況で、区々たる用兵など必要ない。当初の予定通り、散々に叩いてやればいいのだから。

白馬義従が一斉に弓を放ち、敵を更に混乱させる。

「雛里、白馬義従の指揮は任せた！」

「あ、ぱ、白蓮様！」

雛里に白馬義従の指揮を委ねて敵陣に切り込む。

「そこを退け、下衆！」

目の前で混乱している兵を、二刀で斬りつける。

右から突き出される剣を、右の、田楷の宝剣でいなし、その刃の上を滑らせながら体を捻り、左の、関靖の宝剣を鎧で覆われていない脇の下に宛がって斬りつける。

「どうした！私程度の将も討ち取ることも出来ぬのか！」

「こ、このアマ！ぶっ殺してやる！」

二人が私に向かって掛かってくるが……遅いよ。

二人が突き出した槍を前に出ることで躱して、そのままの勢いで二人の傍らを駆け抜ける。当然、宝剣を左右に振るって。

「白蓮、凄いじゃん！」

「私はまだまだだよ、蒲公英」

「謙遜しなくても良いのに。蒲公英より強いと思うよ？白蓮は」

「そうか？」

雛里がどうしているかを見る。

ちゃんと後に控えて白馬義従の指揮を執っているようだ。その前には、吉里。撃剣を使うことは知っていたが、かなりの遣い手みたいだな。あの様子なら大丈夫だろう。

「待て蔡中！その首おいていけ！」

愛紗がもの凄い勢いで敵中を突破している。……あれは規格外だな、やっぱり。私には真似出来そうにない。

「愛紗を援護しろ！」

「しょうがないから蒲公英が行く手を阻んであげよっと」

蒲公英が兵を率いて行く手に向かう。雛里も白馬義従を移動させているようだ。よく見ているな。

「死ｎ……」

「……危ないなぁ。余所見してたら死ぬよ？白蓮様」

「吉里がこっちに来たのには気が付いて居たからな。凄い撃剣の遣い手だって知ったから、安心してたよ」

「やれやれ。僕は試されたってワケ？」

「そういうことだな」

「僕がやれなかったらどうしたのさ？」

「まだ間に合ったよ。ギリギリで何とかするつもりだったから」

「ふぅ……もう危ない真似はしないこと。良いよね？」

「ああ、分かってる」

「なら良いけどさ。それより、そろそろ終わるみたいだよ？」

そうだろうな。愛紗がさっきから動いていないから。

「敵将、蔡中！教経様が臣、この関雲長が討ち取ったり！」

「吉里」

「はいはい。……敵を殲滅しなさい！容赦は無用！情けも不要！思い知らせてやりなさいよ！」

……意外に早く終わったな。やっぱり雛里も吉里も優秀だ。その上で愛紗と蒲公英が居たんだし、勝って当たり前だったんだろう。

宝剣を鞘に収めながら、思う。

これが終われば、漸く麗羽の奴と対峙出来る。あと少し。あと少しで、お前達の仇を討ってやれる。

関靖も田楷も、きっと復讐なんてしなくて良いと言うだろう。でも、お前達は分かってないよ。私がどれだけお前達を掛け替え無く思っていたかを。お前達を喪ったとき、どれだけ辛かったのかを。

「……仇を討ってやる。必ず、な」

覚悟をしておいて貰おうか、麗羽。

私は絶対に許さない。お前から、全部奪ってやるんだ。

全部。

蝶の如く～１４３～（前書き）

今週はこれで終わり臭い。後は週末になるかも知れないです。

蝶の如く～１４３～

～百合　Ｓｉｄｅ～

「百合、また来たようですよ？」
「……死守」
「それは当然です。皆、お屋形様の前で日頃の鍛錬の成果を見せるのです！」

私と琴は、新撰組を率いてご主人様を狙ってやってくる劉表軍をはね除け続けて居る。横の方では、親衛隊の魏越が突出して敵を叩いているようだ。見なくても声で分かる。特徴があるから。

「ガハハハッ！御遣い様に刃向かう奴は全部儂らがぶっ潰すんじゃ！」
「「「「「ラーサ！」」」」」
「ガハハハッ！」

笑い声を上げながら、鉄球を振り回して敵に叩き付けている。忠も貰っているあの槍は、背中に背負って居るみたい。
……何かが壊れている気がするけど、ちょっと怖いから放っておこうと思う。

新撰組は、集団での闘争にはあまり向いて居ない。けれど、少数での戦闘なら親衛隊以外には後れは取らないと思う。ご主人様を護る為に必要なのは、集団としての力よりも少数精鋭での護衛。敵中突破をする際に必要なのは、兵力よりも鋭さと勢いだ。だから、それを損なうことがない形で鍛錬を続けて来ている。皆軽鎧であるのも、疾さを求めた結果だ。琴にとっては、羽織が着れないから、という

理由が一番だったみたいだけど。

私も最初は同じ羽織を着ていたけど、ご主人様が黒乃駆流?さんに言いつけて作って貰った服を着ている。これを着た私を見たご主人様は、その、凄く興奮して……お、押し倒されて……と、兎に角、ご主人様は凄かった。

剣もご主人様が私にくれた。片刃の剣だけど、ご主人様や琴の剣とは違い、ちょっと肉厚だった。でも私にはこれが一番かも知れない。手に良く馴染むし。ご主人様がくれたものだから、一生懸命練習したのもあるけど。

そういえば長安でご主人様が剣を振る私を見て、『もっこりちゃ〜ん!』とか言いながら飛び上がって抱きついてきた。詠に『詠ちゃんすぺしゃる』と書いてある槌で頭を叩かれて何処かに連れて行かれていたけど。私は嬉しいから良いのに、というような事を何とか伝えると、詠は『これはね、お約束なのよ』と訳の分からないことを言っていた。何なんだろう?

「糞!この羽織共の中に平教経が居るかも知れないんだ!兎に角平教経を捜し出して殺せ!」

「……邪魔」

目の前でご主人様を殺せと言っていた雑兵を殺す。

ご主人様は、私のことを全部理解してくれる、恐らくただ一人の人だ。絶対に喪いたくない。

「姉貴!何やってるんだよこんな所で!」

「……そっちも」

「こっちは兄貴がケリ付けるぞって言うからさ。前に出てきたんだよ。そしたら姉貴が見えたからちょっとこっちに来たんだ」

「……ご主人様は?」

「直ぐそこにいるよ。五月蠅いのと一緒に」
忠が指さした先に、ご主人様が居た。
「やれやれ。毎度毎度飽きないことだな。もう何度目だ？」
「知らねぇよ大将。コイツらしつこすぎるだろうが」
「それも変わり映えのしない奴らばかりで飽きてきたんだよ、こっちは」
「俺だって飽きてるよ！っと」
「お、やるじゃんダンクーガ」
「大将！後！」
「ハッ。分かってるって、の！」
後からご主人様を斬りつけようとしていた雑兵を、振り向き態に斬り捨てた。その手にした剣諸共に。
「……今宵の清麿も血に飢えて居るわ！」
「……大将、変態みたいだぜ？」
「……言ってみて後悔してるんだから触れるなよ」
……うん、いつも通りのご主人様だ。
「百合、お屋形様に合流しますよ？」
「……うん」
「んじゃ俺も姉貴と一緒に行きますか」
敵を駆逐しながら、ご主人様と合流する。
「琴か。百合も居るな。元気そうで何よりだ」
「はい。お屋形様も」

「……うん」
「……百合、よく似合ってるよ、その服」
「……ん……」

恥ずかしいけど、嬉しい。

「むっ」
「琴も相変わらず似合ってるぜ？」
「あ、有り難う御座います……」

琴も、嬉しそうだ。

「はぁ……何で大将の周りはいつもこうなるんだ？」
「ちくしょぉぉぉぉぉお！イライラしてきた！テメェら付いて来い！」
「おい？忠、何処行くんだよ！」
「目の前に居る奴らにちょっと思い知らせてやるだけだよ！」
「……災難だな、あっちの奴らは」

ご主人様を護りながらその場に留まっているが、もう殆ど敵はやってこないみたいだ。忠が奇声をあげながら敵中を暴れ回っている。……私、ちょっと恥ずかしいから抑えて欲しい。その、『姉貴がぁ～！姉貴がぁ～！』とか叫ぶの。

「百合、？忠は大丈夫ですか？」
「……分かんない」
「大丈夫だろ。ああなった？忠の野郎に勝てる奴は親衛隊にも居ないんだから」
「琴が心配しているのはそっちじゃなくて頭の方だろうが。……ダンクーガでも負けンのか？」

「勝ち負けじゃなくて、やり合おうって気にならないよ」
「成る程。ま、シスコンだからな」
「……しすこん？」
「百合みたいな綺麗で可愛い女性の肉親に首ったけな、変態な兄もしくは弟、って意味」
「～～～～」
「……あぁ、？忠のことか」
「……？忠のことですね」
「そういうことさ。おいダンクーガ。今度？忠の組下の奴にだな……」
「あぁ？……はぁそりゃ良いけど……あ！テメェ俺の時と同じ事しようとしてるな！？」
「そうだが？何か問題でも？」
「いや、問題……ないのか？」
「だろ？お前とオッサンの組下だけじゃ片手落ちだろ？だからさぁ……」
「……プッ……マジでか……あぁ、そう言っておけば……成る程……」

ご主人様と高順は、本当に仲が良い。高順はご主人様が偶に使う不思議な言葉をある程度理解して、自分もそれを使えるみたいだ。私も今度ご主人様に教えて貰おうと思う。そうしたら、もっとご主人様のことが理解出来るし、もっと私のことを好きになって貰えるかも知れないから。

「教経、こっちは大体終わったわよ」

そうやっていると、雪蓮達も還ってきた。冥琳も凪達三人も、無事なようで何よりだ。

「雪蓮も御苦労様」
「ま、最初で勝ちは決まってたしね」
「教経。？忠と魏越なんだが」
「どうかしたのか？冥琳」
「いや、そろそろ止めてくれ。五月蠅くて仕方がない」
「やれやれだぜ……オイ？忠！百合がお前に話があるってさ！オッサン！太原での御遣い様のご活躍を凪達が是非聞きたいんだってさ！聞かせてやれよ！」
「姉貴ぃ～！やっぱｒブベッ！」
「……忠、落ち着く」
「……はい」
「おお！貴様らか！御遣い様の活躍を聞きたいという殊勝な心掛けをしている奴らは！良いぞ良いぞ！この儂が幾らでも聞かせてやろうではないか！いやぁ、このような殊勝なおなごなら、御遣い様の伴侶に相応しいとこの儂が推挙してやるわい！その権限はないがな！ガハハハッ！」
「え、いや、私は……」
「なんやかなり疲れそうなオッサンやで……」
「これ、大変そうなの」
「凪、適当なとこでブン殴って気絶させて構わん」
「あ、はい。分かりました」
「ンじゃ取り敢えず野営の準備だな」
「了解。親衛隊！さっさと野営の準備をしやがれ！」
「こちらもこちらで準備する必要があるだろうな」
「捕まってる奴らの分まで頼むわ」
「まぁしかたないだろう」
「野営の準備が整ったら、一旦休息を取ってそこから行軍再開だ」
「分かっているさ、教経」
「琴、新撰組の方は頼むぜ？」
「はい。お任せ下さい、お屋形様」

「……準備」
「いや、百合はこっち」
「あ、今日は百合の番でしたね。では百合の組はこちらで済ませておきますね」
「……ん……」
琴はそう言って新撰組が屯している辺りに向かった。

「百合、お疲れ様」
「……うん」
「取り敢えず夜が明けそうだし、河でも見に行ってみるか？」
「……うん」

ご主人様と一緒に、長江のほとりに行ってみる。

「まだ燃えてるな」

暫く見ていると、長江の上で炎上している船に日の光が当たり始める。朝靄の中で水面が光を反射して、とても幻想的な風景だった。

「……綺麗」
「……」
「……何？」
「……いや、百合の横顔が綺麗だなぁと思ってさ」
「〜〜〜〜」
「かぁいいねぇ……さて、さっさと戻って一緒に寝ようか、百合」
「……ん……」

ご主人様の隣を歩いて陣地に戻る。
歩いているご主人様の手をちょっと見る。

本当は、手を、繋ぎたいけど。でも恥ずかしいから……

「……ほれ」
「……？」
「手。繋ごうか、百合」
「……う、ん」

ご主人様は、ちゃんと気が付いてくれた。
ゆっくりご主人様の手を握ろうとすると、ご主人様が私の手を取って、しっかりと握ってくれた。

「……行こうか、百合」
「……うん」

ご主人様と一緒に、陣地に向かって歩いて戻る。

こうやってずっと一緒に歩いて行けたらいいな。
出来れば、手を繋いで。

～教経　Ｓｉｄｅ～

「で、状況は？」
「建業から西へ２０里ほどの渓谷で待ち構えているようだ。最も、劉表自身は建業に引き籠もっているようだがな」
「やる気があるのかしら」
「無いから引き籠もっているンだろうさ。で、渓谷で待ち構えてるって？」
「あぁ。私が調べた限りでは、だがな」
「なら間違いないってことだ」
「フッ……そうだな」

丹陽で上陸した俺たちは、一路建業を目指して行軍していた。
その俺たちの前に、漸く劉表軍が姿を現したらしい。もうちょっと早く出てくるかと思ったが、奴らも地の利を生かして戦える場所で戦いたかったということだろう。

「で、向こうの兵力は？」
「それがな教経。何と２０，０００だ」
「……はぁ？」
「２０，０００だ、教経」
「馬鹿にしてンのか？ドカスが」
「率いて居るのは黄祖らしいぞ？一応虎の子の元江夏軍を出してきたらしい」
「今更、だな」
「だが練度は今までの劉表軍よりは高いだろう。油断は禁物だ」

「油断？これは余裕ってモンだ」
「教経。その余裕、どこから来るのかしら？ちょっと説明して貰わないと、凪達は心配すると思うんだけどなー？」
「ふむ……冥琳、渓谷ってのは、窪地があって渓谷になっているのか、それとも両脇に山が聳えているから渓谷になっているのか、どちらだね？」
「後者だな」
「そいつらは渓谷の底にいるのか？それとも脇の山上にいるのか？」
「両方にいるぞ。平地にいるのが６，０００。両脇の山上にそれぞれ７，０００の兵が居る事は分かって居る。恐らくだが、落石計によって我らを持て成そうというのだろう」
「平地にいる奴らは、渓谷の建業側出口付近にいる、ということで良いンだよな？」
「あぁ。それで間違いない」
「山に草木は？」
「あるな」
「山全体にあるのか、一部なのか」
「全体を覆っている。山頂付近以外は茂っていると言って良い様子だ」
「それぞれの軍が連動して動けるような地形なのか？」
「それはどういう意味だ？」
「例えば落石計が無かったとして、中央に突進した場合に山上から一気にこちらの側面を突けるような地形かってことさ。要するに、人が簡単に陣から陣へ移動出来るのかってことが知りたい」
「いや、それは無理だろう」
「そうか。なら山に火を掛けるかね。渓谷だけに、風が山上に向かって吹いていることだしねぇ」
「それは構わんが、山上に居る軍は巻き込めないぞ？山頂付近には草木がないのだから」
「別に炎に巻いて全滅させたいって訳じゃ無いさ。炎に巻かれない

と言ったところで煙ってのは高所に向かうものだからねぇ。生木は燃えるのに時間が掛かるが煙を多く出す。濛々たる黒煙を受けて、何の異常もないって訳には行かないンだよ。良くても呼吸器が少々異常を来すし、悪けりゃ死ぬこともある。まぁ兎に角、そうやって一方の山を陥落させて落石計を発動させる。その後もう一方の山を攻略すれば良いだろう。向こうに付き合って馬鹿正直に中央を進んでやる必要はない。折角各個撃破して欲しいといっているのだから、各個撃破してやれば良いじゃないかね。

火を掛けるのは両脇に聳える山に対して同時にやる。渓谷入り口辺りに６，０００の兵を残して残りで敵左翼に攻め掛かるとしよう。火を掛ける以上、敵右翼はそう簡単に動けないだろうし、事態が収拾出来るまでは積極的に動こうとはしないはずだ。それだけの時間があれば、敵に倍する兵力を以て一方の山を攻略するのは簡単だろ？一方の山を陥落させ、しかる後に反転。もう一方の山を、今度は全軍を以て攻撃する。それを屠ったら敵中軍を撃破する。

敵は俺たちを待ち受けている以上、事前の準備段階で積極的に打って出て来はしないだろうから準備はし放題だろう。地の利を得る為にここで待っていたンだからねぇ。第一段階で敵に備える６，０００の為に、これが展開する渓谷入り口辺りに堅固な陣を構築する時間も得られる。まぁ、恐らく突っかかっては来ないと思うがね。即席にしては中々のモンだと思うが」

「……教経様。迂回する、という選択はないのでしょうか」

「確かにそれも考えないではないがね。劉表軍を背負って立っている宿将の、恐らくは死を賭しての挑戦だ。受けねば非礼に当たるだろう。他の奴ならいざ知らず俺と俺が率いる軍には、それだけで戦う理由は十分の筈だ」

「はっ！」

「……相変わらず戦いが好きだな、教経は」

「さて、それはどうかな。いい加減うんざりしてる部分はあるぜ？」

「それはそうだろうがな。お前が建てた策で基本的に問題はないだ

ろう。詳細は私の方で詰めて指示を出しておく、で良いか？」
「あぁ。頼むよ、冥琳」
「任せておけ。お前を勝たせてやるさ。今回も、な」

冥琳はそう言って微笑んだ。
……全く。絵になる女だよ、お前さんは。

「教経様。どうやら敵の反撃が止んだようです」
「損害は？」
「１０００に満たない数です。圧勝と言って良いと思います」
「凪。まだ勝った訳じゃ無い。三分の一終わっただけだ。まだ後三分の二がある」
「はっ」
「最後の瞬間まで勝ち続けていたいものだ」
「……きっと教経様は勝たれます」
「その期待に応えるべく、最善の努力を尽くすとしよう。百合、敵軍の様子は？」
「……不動」
「……こっちの様子に気が付いて居るだろうにな。退くか攻めるか何れかを選択した方が良いと思うがね。まぁいい。こちらは当初の予定通り、あちら側の山に攻め掛かるぞ」
「……御意」

戦前に描いた絵図通りに此処までは来ているが、歴戦の将である黄祖が全く動きを見せないのが気に入らない。何を考えて居やがる。だが、こちらもここから先に不安要素はない。こちらは再び軍を交

流させることになる。各個撃破の対象にはもうなり得ないのだから。

「やっと還ってきたわね」
「あぁ。待たせたみたいだな？」
「ええ。随分と待ったわよ」
「ま、これから敵右翼を撃破する。存分に暴れ回ってくればいいさ、雪蓮」
「そうさせて貰うつもりよ。私が先鋒で良いわよね？」
「構わんよ」
「じゃ、征ってくるわ」
「凪、真桜、沙和。雪蓮が孤立しないように補佐してやってくれ」
「はっ」
「任せときぃ～大将」
「分かってるの。沙和にお任せなのー」
「俺たちも順次雪蓮に続くからそのつもりでな」
「了解！」
「お屋形様」
「ん？」
「山上に『黄』の旗が」
「……確かに中軍にいたはずだが、移動してきたのか、黄祖は」
「そのようです。渓谷出口付近にいた敵は撤退を開始しています」

成る程。俺たちが次に右翼を攻めると知っていて、攻め掛かるのを待っていたということか。全軍崩壊させず、撤退するだけの時間を稼ぎ出そうという訳だ。

「性根が据わっているじゃないか、黄祖」
「そういった将が一人も居ないというのでは張り合いがありませんから」
「挨拶に行くとしようか、琴」

「山頂に到着するまでに生きているでしょうか」
「さて、それは雪蓮次第だな。黄祖のこういった姿勢を評価するかどうか、というところだろう」
俺の予想では、恐らく生かして捕らえると思うがね。

～凪　Ｓｉｄｅ～

山頂の戦で、敵軍の将帥であった黄祖を雪蓮様が捕らえた。
雪蓮様にとっては、憎い劉表の軍の将帥だ。殺すのだろうと思っていたが、教経様が面語したがるだろうから、と苦笑いをして彼を捕らえるに止めた。
そして現在、教経様が黄祖を引見している。
「お前さんが黄祖か。俺が平教経だ」

「……フン。儂は黄祖じゃ」
「貴様！」
不遜な口を利いた黄祖を責めようとした琴様を、教経様が片手を挙げて抑える。
「何故お前さんは劉表に従っているンだね？」
「荊州劉家の初めより付き従って来た劉表様を、形勢が悪くなったからと言って裏切るような真似が出来るか」
「いやいや。死姦するような主を何故見限らないのかね？」
「……貴様がそれを明らかにするまで、儂は知らなんだわ」
「……そうか。では形勢が悪いという理由ではなく、その理由で見限れば良いのではないかね？」
「今そうすれば、理由を幾ら声高に主張しようと結局人はこう言うだろう。『黄祖の爺は命が惜しくて平家に降ったらしい』、とな。儂はその汚名には耐えられん」
「飽くまでも劉表に従う、と？」
「……そうだ。どうせ荊州劉家は滅びることは目に見えている。それであれば、せめて名は美しいままで残したいものじゃ。命を惜しんで見苦しく命乞いをした人間としてではなく、最期まで劉表様に仕えた人間として死んでいった方が良かろう。
貴様がどう思っているかは分からぬが、荊州劉家は名家じゃ。確かに先帝の血を引く人間が作ったな。その家が滅ぶというその時に、誰一人己の意志で殉じる人間が居ない、というのは何とも寂しいではないか」
「『荊州劉家』に殉じる、と言うのかね？お前さんは」
「そうじゃ。貴様にしてみれば阿呆に思えるのかも知れんがな、これで儂にも意地というものが在る。『荊州劉家』の宿将としての意地がな。此処で儂を生かしたとしても貴様の役に立つどころか、貴様の邪魔ばかりをする厄介な人間にしかなり得ぬじゃろう。

それにじゃ。儂が宿将である以上、貴様の軍の士気を上げる為には儂の首を挙げるのが最も良く、かつまた建業に籠城している劉表様達の士気を殺ぐに最も効果のある首であるじゃろう」

「そうかもしれんが、お前さんを降らせても同じ効果は期待出来るぜ？」

「……今回の戦、そこにいる孫家の嬢ちゃんの仇討ちという色合いもまた濃くある戦じゃろう。そんな戦で嬢ちゃんの母親を殺した将の上司であったこの儂を、劉表軍の宿将を取り込むなどあり得ぬ。それは悪手じゃろう。此処で儂を殺すのが一番すっきりとした終わり方というものじゃ」

「しかしお前さんは、劉表の所行を知らなかったンだろう？」

「そんな事はどうでも良い。世間がどう判断するか、ということがこの際最も気に掛けるべきことじゃろう。儂を殺せば、劉表軍の士気を殺ぎ、また仇討ちに燃える孫家の人間の士気を鼓舞し、非道な行いをするものに従う者の末路というものを広く天下に知らしめることが出来る。

儂としても、最期まで劉表様に従ったということで儂が望む評価をしてくれる人間が幾ばくか出て来てくれるじゃろうし、『荊州劉家』にもその家の為に殉じてくれる人間が居たのだということを示すことが出来る。

……儂を殺せ。それが互いに望む結果が得られる最良の選択じゃ」

「……良いだろう。お前さんの望み通り、お前さんを殺す。首は無理だが、遺品は遺族に引き渡してやる。他に何か望みがあるか？」

「……出来ればじゃが、黄家の祭祀を絶やさぬようにして貰いたい」

「誰に継がせる？」

「不肖の息子じゃが、黄射めに」

「分かった。必ずそうしよう」

「……他人事ながらに言わせて貰うが、貴様は甘すぎるな」

「そうか。そうかも知れんな。が、俺がそうしたいと思うからそうするンだ。誰にも文句は言わせねぇよ」

「……感謝する」
「される謂われもないがな。
……さらばだ、黄祖。お前が望む結末を、この俺が呉れて遣る。貴様を殺したのは俺だ。俺を恨んで死んでいくが良い」
「違うな。儂は儂自身の愚かしさによって死ぬのさ。貴様が儂の死まで背負って生きていく事はない。……貴様は、優しすぎる。もっと非情に徹することじゃ。足下を掬われるぞ？」
「……フン」
「……さらばじゃ、平教経よ。繰り言になるが、この計らいに感謝する」
「……連れていけ」

そのまま外に引き出され、黄祖は首とされた。
首となった黄祖と再び対面した教経様は、少し哀しそうな顔をなさっておられた。

「……望み通り首になった訳だが、気分はどうかね？まぁ、良い物ではないンだろうが」
「お屋形様……」
「……馬鹿な奴だ。家の為に死ぬなんて、な。せめてこの爺がその為に死ぬことが出来る人が居れば、この爺も浮かばれたんだろうがな」

誰も、言葉を発しなかった。雪蓮様も冥琳様も、黄祖の死に様については立派だと思っているのかも知れない。私も立派だと思う。

教経様は暫く黄祖の首を眺めていた。
馬鹿め、と何度か口にしながら。

蝶の如く～１４４～

～華琳　Ｓｉｄｅ～

教経が兵を率いて揚州討伐に向かった後、まるで計ったかのように私に密かに接触してきた人間が居た。私にとって重要な報せを持ってきた、と言って、訪いを入れてきたのだ。

桂花が言っていた通り、これは麗羽の、いえ、諸葛亮の、私に対する調略でしょう。

「お初にお目にかかります。私は姓を石、名を苞、字を仲容と申しまして、陳留で商いを生業としている者で御座います」

「そう。私は曹操。字は孟徳よ。それで、私にとって重要な報せを持ってきた、ということだったけれど？」

「はっ」

返答をしながら、石苞が左右に控えている春蘭と秋蘭、桂花、瑛を見やる。

「この三人は貴方も恐らく知っている通り、私と此処まで苦難を共にしてきた信頼の置ける者達よ。もう一人は、謂わば私の弟子のような者。私の言うことに刃向かうことはない。此処で交わされる会話が外に漏れることはないわ」

「左様で御座いますか。それでは話をさせて頂きます。

……曹操様。貴女様は武運拙く袁紹に敗れ、陳留を逐われました。そして司隷州における戦で、平教経に救われた故に平家に臣従しておられる。私にはそれが悔しくてならないのです。私は一介の商人に過ぎませんが、モノを見る目には自信が御座います。

取引相手が信頼に値する者であるか、投資先に将来性があるか。商

いを生業にしております関係上、それらを見抜かなければならないからです」

「そう。それで？」

「単刀直入に申しますと、袁紹も平教経も、この乱世を統べる器量を持ち合わせてはおりません。私が見るところに拠れば、袁紹は怠惰で我が儘に過ぎ、平教経は甘すぎるのです。この乱世を統べ、後世に安寧をもたらす事が叶う器量を有しておられるのは、曹操様、貴女しか居られません。私は貴女様を支援したいのです」

良くもまぁぬけぬけとそんな事が言えるわね。

麗羽に対する洞察は良いとしても、教経に対する洞察は随分と浅いものだと思うわよ？確かに教経は甘い所がある男だわ。星や風達から聞いたこれまでの教経の事績を聞く限り、そして私を助けに来た事から考えても、それは間違いないことでしょう。

でもね。アレは己が為したいことと為さなければならないこととの区別が出来る男なのよ。ただ甘いだけの男に、この私が惹かれるはずがないじゃない。私を独立するように口説き落とそうと言うのならば、もっとしっかりと話を組み立てるべきだと思うわ。

もし私が教経とこういう関係になっていなかったとしても、この時点で諸葛亮の策に乗っかろうとは思わないでしょう。甘すぎる洞察を口にして誘いを掛けてくる者と共に行動するという選択を、私がするはずもない。

「『支援したい』、ね。漠然としすぎていて何の支援をしてくれるのか、私には全く分からないのだけど？」

「お戯れを。貴女様がその胸に抱いていた理想、野望。そういったものを全て捨て去る程、貴女様は平教経に心服していらっしゃらないのではないですか？」

残念だけれど、私は力で屈服させられたのではなく、心服させられ

たのよ。乱世に生きる君主として、という部分も少しはあるけれど、何よりも先ず女として、ね。まあ、他者から見た私と教経の関係は、とてもそういうものには思えないでしょうけど。しかしそれでも、何らかの要因があって私が教経に心服している可能性を検討し、そうであった場合に備えておくことが必要なのではないかしらね、諸葛亮。

私が教経に心服していない、という予断を持って策を建てているから上手く行かないのよ。策とは、予断を持って居ては練り上げることは出来ない。私はそれを麗羽との戦で思い知らされた。諸葛亮を押し込めることに成功したからこれを考慮する必要はない。袁家の名声など戦では役に立たない。陳留に寄せてきている敵は、もうこれだけしかいないはずだ。そういう予断を持って居ればこそ、私は負けたのよ。

私にそれを思い知らしめた貴女が、私と同じ過ちを犯していることに気が付いて居ないのかしら。

「……あら。私は従うつもりで居るのだけれど？」

「本気で仰っているとは思えません」

「私は本気で言っているのよ？貴方程度に我が心底が知れるはずがないでしょう。分限を弁えなさい、商人」

「……仕方がありません。先ず私から心底を明らかにさせて頂きましょう。

曹操様、私は貴女様に今一度この乱世に起って頂きたいのです。その為に必要な金穀、そして必要とされるのであれば兵さえ用意致しましょう。陳留の民達の為に、今一度天下を目指して頂きたいのです」

「……私に教経を裏切れ、と言っているのかしら？」

「端的に言えばそうです」

「秋蘭！この者を殺しなさい！その罪状は、教経への反逆を使嗾したことよ！」

「はっ！」

秋蘭が剣を抜き放ち、石苞の首に宛がう。
剣を突きつけられているにも拘わらず、一向に慌てるそぶりを見せない。例え見かけだけだとしても、大したものだと言って良いでしょう。使者の人選は誤らなかったようね。

「……何か言い残すことがあるかしら」
「残念ですな。このまま袁紹なり平教経なりが天下を統一しても、そう遠くない将来その治世に綻びを生じさせ、直ぐにまた戦乱の世がやってくることになるでしょう。国の行く末を案じる者の一人として居ても立っても居られず、悲惨な未来を回避しようとしたのですが、どうやら曹操様にはご理解頂けないらしい。貴女様も、所詮その程度の人であったということでしょう。それを見抜けなかった自分の蒙昧さが恨めしいだけです」
「……秋蘭、止めなさい」
「……はっ」
「石苞、と言ったかしら？」
「はっ」
「殺されるとは思わなかったのかしら？」
「殺されるならばそれまで、と考えておりました」
「……このことを知っている者は？」
「私以外には、後に控えております家宰のみで御座います」
「そう……少し時間を貰えるかしら。即断出来るものでは無いわ。私は勝ち目のないことはしないの」
「そう悠長にはしていられないとは思いますが、即断出来ないというのもまたよく理解出来ます。
……一月。一月後に再度お伺い致しますので、その時に返答を頂きたいと思います。出来れば、互いにとってより良い選択をして頂きたいものです」

「ええ。そう願うわ」
「では、本日はこれで失礼致します。……さあ、帰りましょう」
石苞が、後に控えていた家宰を急かして退出する。
「……華琳様。お疲れ様で御座いました」
「別に疲れては居ないわ。感情を表に出さないようにするのに少し苦労したけれどね。それより秋蘭、石苞が落とした書状をこちらへ持ってきて頂戴」
「はい、華琳様」
退出する際、家宰の後を付いて歩いていた石苞は、その懐から書状を態々『取り出して』落としていた。
秋蘭が拾って来たその書状は、私に独立を勧める使者となったならば、例え成功しなくともその家族の無事を保証する、という、諸葛亮が石苞に与えた書状の写しだった。
それを見た桂花は私の顔を一度だけ見やり、小さく頷いて部屋を出て行った。恐らく、諜報網を駆使して事実関係を洗おうというのでしょうね。
瑛はその書状を見て、少し考えて居る様子だ。この娘は私にとっては少々面白みのない弟子だ。教えたことをさほど苦労せず理解し、私の言葉の裏にある真意を汲み取って行動出来る。目に余る失敗をしてくれれば、虐めてあげるのに。毎日何かにつけて試しをしているけれど、今まで一度として私に不満を抱かせる回答をしたことはない。無論、その内容は別だ。少々物足りなく思うことはある。けれど、そういう時でも瑛は面白い表現をする。時に皮肉を混ぜて。時に比喩を用いて。
そういう遣り取りが好きな私にしてみれば、桂花程忙しくしている訳でもない瑛は格好の話相手だ。

「瑛。これを見た貴女はどう思うのかしら?貴女の存念を述べなさい」

「……華琳様を嗾けようとした石苞は、『不幸にも』最後の最後に馬脚を現した、ということではないでしょうか。目つきが鋭すぎ、身のこなしも市井の者とは思えない『家宰』の、その主に対する愛情に満ちあふれた目が届かぬ所で」

相変わらず、皮肉と、そして稚気に満ち溢れた、面白い表現をするものね。頭の回転が遅い人間は、その稚気を言葉遊びによって表すことなど出来ない。教経が見込んでいる通り、そして私がある程度認めてあげているように、この娘はモノになる娘でしょう。

……後は桂花のように偶に失敗をしてくれれば、本当に良くできた弟子なのに。

「……瑛」

「は、はい」

「その通りよ。貴女の見立てで間違いないでしょう。これに驕ることなく精進なさい。貴女は、『モノになる』わ」

「は、はい!」

要するに石苞は、これは諸葛亮の策略だから乗ってはいけない、ということを私に伝えたかったのでしょう。そして石苞が『家宰』として紹介してきた人間は、彼を監視している諸葛亮の手の者なのでしょう。

「秋蘭。この書状を、風に渡して貰えるかしら」

「渡すだけで宜しいのですか?」

「ええ、構わないわ。後は風が良いようにするでしょう」

「畏まりました」

諸葛亮。貴女の、人の才を見る目は確かなものなのでしょうね。石苞はその胆の太さと言い弁舌と言い、先ず優秀と言って良い才を持つ人間でしょう。でも貴女は才を見抜いているに過ぎなかった様ね。

人をして己が思う通りに動かすに、その人間が求めるところのものを与えることによって自ら進んで働く様に仕向けることを良しとする。その点では、貴女が採った方法は間違ってはいない。家族の身の危険が貴女によってもたらされたものであったとしても、彼は家族の安全を得る為に自ら進んで此処にやってきたのだから。

でもね、諸葛亮？

世の中には、己がこうと定めた生き方・考え方を貫き通すことに至上の価値の置く者達が居る。その為に不利益を被ることになろうとも、一向に構わないと思い切る事が出来る人間が。

家族の安全を得る為に働くことを承知した人間が、己を含めてその命を失いかねないことをしてのける。矛盾すること甚だしいけれど、石苞自身は何の矛盾も感じていないでしょう。彼にしてみれば、己を貫いているに過ぎないのだから。

『人』というものは完璧ではあり得ない。丁度石苞が、傍目には矛盾している様に。

……貴女の策が破れるのは、貴女が私を読み違えたことが主原因ではない。

人というものが持つ、ある種の不合理さ、もっと言えば、愚かしさのようなもの。

それを見抜いて計算することが出来なかったから、貴女の策は破れることになるのよ。

貴女もまた完璧ならぬ、『人』であるが故に。

蝶の如く～１４５～（前書き）

宣言通り、石苞さんはこれで退場です。

蝶の如く～１４５～

～朱里　Ｓｉｄｅ～

「孔明殿、例の件、どうやら接触に成功したようです」
「そうですか。それで、曹操はどのような様子でしたか？」
「最後まで旗幟を鮮明にしなかったようですが、先ず成功したと言って良い感触であったと報告がありました」
「……旗幟を鮮明にしないのは当然でしょうが、何を以て『良い感触であった』と言っているのでしょうか」
「はい。どうやら石苞は直截的な表現で平教経を裏切るように勧めたようです。それに対し曹操は石苞を殺すそぶりを見せましたが、石苞が全く動じていないことを確認して矛を収め、即断は出来ぬということで後日の再会を約したそうです」
「使者として彼を選んだのは正解であったようですね。それで、後日というとどの程度でしょうか」
「石苞は、一月後と言っておりました。考える時間が必要だとしても少々時間を与えすぎだとは思うのですが、それを待てないと言えばこの企謀自体が露見する可能性が有る為に受けざるを得なかった、と」

田豊さんの言っていることも尤もなことではあるが、ここは石苞の言うことが正しいだろう。曹操の決起を待ち、此処しかない、という機会をしっかり見極めて独立を勧めにやって来た人間が、今更一月程度待たされるぐらいで動じたりはしないものだ。この機を待つ事が出来たはずの者が殊更に早期の決断を迫るのは、その裏側にある謀を察知されることになりかねない。

それに、平教経はまだ揚州に攻め入っていない。彼が揚州に攻め込

み、引き返すことが容易に出来ない状況で兵を挙げることを考えて居るに違いない。若しくは石苞を完全に信用していないが故に、彼を調べる時間を確保したのかも知れない。他者から勧められ、与えられた状況を鵜呑みにして起つような女ではないのだから。

いずれにしても曹操の選択肢の中に、『独立する』という選択肢を紛れ込ませることには成功したようだ。

「劉表に書状を送って建業に籠城して援軍までの時間を稼ぐように、と言ってやって下さい。平教経を出来るだけ長い間揚州に引きつけておくことで、曹操が独立しやすい環境を整えましょう」

「孔明殿。果たしてそれで曹操が乗ってくるでしょうか。状況が良すぎる為に、却って何か裏があるとは思いませぬか」

「そうかもしれませんね」

「では何故？」

「裏があろうと無かろうと、これを逃せば彼女が独立勢力としてこの乱世に再び起ち、天下を窺う機会は失われてしまう可能性が高いのです。平教経ある限り、平家の治世が揺らぐことなど無いでしょう。そして袁家にも私が居ます。いずれの形で大勢が決したとしても、その時では既に遅いのです」

「しかし我らにとって望み通りに独立した曹操が、平教経ではなく先ず麗に対して攻め込んでくることはないでしょうか。先の戦の意趣を返す為に」

「それもないでしょう。公孫賛と劉表を見れば分かる通り、平教経は己に刃を向けた人間には必ず報復して居ます。曹操もそれは承知の筈です。曹操という人は現実家です。それも、徹底的な。だからこそ、独立直後の彼女が袁家に攻め入ってくることはないと思います。無論、その後は別ですが」

「……確かに、そうかも知れません」

この策が結実すれば、平教経は外征どころでは無くなる。
態勢を立て直すに十分な時間を稼ぎ出すことが出来るだろう。

「引き続き曹操への調略を行います。その配下の将達に対しても手を打っておき、曹操が悩んで居る際にその背中を独立に向けて後押しする必要があるでしょう。そちらは貴方に任せます、田豊さん」
「畏まりました。そちらへの調略はこの私にお任せ下さい」
「ええ。頼みます」

打てるだけの手は全て打つ。
此処まで周到に策を施して失敗するということはないだろう。

もし失敗するとすれば、それは運がなかったとしか言いようがないのだ。

～秋蘭　Ｓｉｄｅ～

石苞が教経様への反乱と独立を華琳様に対して勧めにやって来てから一月が経過した。

恐らくは諸葛亮の企画によるであろう誘いを受けて、華琳様は改めて私達を集めて教経様を裏切ることは絶対に無いと仰った。その際桂花が教経様のことを『孕ませ無責任男』と表現していたが、相変わらず口の悪いことだと思う。

が、華琳様はどうやらその言葉に引っかかりを覚えたらしく、暫く黙って居た。

「……桂花。教経は誰か女を孕ませたの？」

「は？」

「良いから答えなさい。誰か教経の子を授かったの？」

「い、いえ、華琳様。今のところあの男は誰も孕ませてはおりません」

「本当でしょうね？」

「は、はい」

「……華琳様、如何なさいましたか？」

「……別に何でも無いわ。それより桂花、最近貴女の所へ幾度か訪いを入れてきている女は何なの？」

「か、華琳様！誤解しないで下さい！私は華琳様ひと筋です！他の女には興味はありません！」

……誤解も何も、そういう意味で訊いた訳ではないと思うのだが。

「……誰がそんな事を訊いているのよ。あの女はどういった人間で、一体何を目的に貴女に接近しているのかしら？」

「し、失礼しました。あの女は石苞の商店の下女で、私に情報を提

供して呉れている女です。表向きは、ですが」
「どういう事かしら？」
「内実は、恐らく私から華琳様に反乱を勧めさせるべく諸葛亮に遣わされた、袁家の密偵だと思われます」
「そう。何故そう思うの？」
「毎回新しい情報を少しずつ持ってきます。聞いた限りでは何気ない日常の話であったりしますが、そこからは様々な情報を読み取ることが出来ます。例えば、最近揚州に実家がある店員の家族が大挙してやって来て大変そうだった、という話をしていましたが、それは裏を返せば揚州ではあの男がそれ程慕われていない、という事を意味しています。それを更に深く読ませれば、揚州は平家にそう簡単には靡かないのではないか、という考えを持たせることが出来るでしょう。無論、私は自分で諜報網を使って情報は手に入れておりますし、冥琳とある程度は話をしていますからそのような希望的観測を致しません。
兎に角、毎回持ってくる情報の中に私の思考を誘導出来るような情報が紛れ込んでいます。華琳様とあの男の関係を知らなければ、独立することが現実的なものであるように思えるような情報が。そして決起すれば独立が成功するだろう、と思うことが出来る様な情報が。それが毎回、というのは流石に出来すぎでしょう。私が幾らあの男を嫌っているとしても、それはあの男自身を嫌っているのであって、華琳様の主としてのあの男を殺してやりたいとは思いません。勿論、華琳様が許可して下さるならば直ぐにでも処分してしまいたいですが」
……はっきりと殺してやりたいと言っている気がするのは、私の気のせいなのだろうか……
「？要するに殺したいのか？」
「そんな事一言も言っていないじゃない！相変わらず頭が悪いわね

！」
「何を！私に喧嘩を売っているのか！」
「じゃあアンタに訊くけど、華琳様はどうすればいいか答えてみなさい！」
「そんな事も分からないのか！」
おお、姉者。ひょっとして名案を考えついているのか？
「教経様を華琳様『だけ』のものとする為に、華琳様は頑張られるのだ！」
「……は？」
「教経様を華琳様だけのものとするのだ！その為に我らも出来ることをするのだ！」
「貴女何を言っているのよ！誰もそんな話して無いじゃない！」
「いや、待て桂花」
「何よ秋蘭」
「少し姉者と話をしてみようと思ってな。姉者、少し良いか？」
「？」
「華琳様は、教経様から独立して再び乱世に起つべきだとは思わないのか？」
「？何故その必要があるのだ？華琳様はあの男と一緒に居たいが為に長安に着いて行ったのだし、華琳様の望みはあの男と共に在ることではないのか？
乱世に再び起つことではなく、あの男を独占することこそ華琳様の望みであろう。だから我らはその事だけ考えていれば良いのだ。我らは華琳様の家臣なのだからな」
成る程。華琳様にこうあって欲しいという我らの思いより、華琳様が教経様に抱いている想いこそが優先されるべきだ、ということか。

「？私は何かおかしいことを言ったのか？秋蘭。笑っているが」
「いや、流石は姉者だと思ってな」
「うむ！当然だ！」
「……さて、桂花。春蘭はこう言っている訳だけど、貴女はどう思うかしら？」
「……もし華琳様が望まれたとしても、独立することは現実的ではありません。もし全てが上手く行くことが約束されているのであれば、独立しても良いかも知れません。但し、この場合の『全てが上手く行く』というのは、華琳様があの男を下男として臣従させることも含みます。それを考えたとき、独立して再び争った際にあの男の配下、特に深い仲にある女を殺してしまった場合、それは絶対に叶わないことであることは間違いありません。あの男はその仇を討つべく死ぬまで戦い続ける、そんな姿しか思い描けません。春蘭も言っていましたが、華琳様が今一番望まれていることはあの男と共に歩むことでしょう。現状それが叶う立場にあると思いますが、独立した場合それが永遠に失われてしまう可能性が高いと考えます。ですから独立などは考えず、このまま平家の下に在って王としての地位を望み、華琳様が理想とされる国をそこに現出なされば良いと思います。
あの男は非常に気に入らない白濁種馬男ですが、君主として、また領主としての器量は忌々しいことに非常に優れていると思います。その理想とする世界は、華琳様の理想とそう大した違いはありません。それであればあの男に助力をし、あの男を通して理想を実現なさるのが最良の選択であろうと思います」
「そうすれば私の理想と、そして私の夢との両立が叶うと、そう言う訳ね？」
「はい」
華琳様の理想は、乱世を終熄させて全ての民に平穏な生活を保障してやること。

華琳様の夢は、教経様と共に平穏な日々を送ること。
それを読み取っている辺りは、流石に桂花といったところだな。

「私は良い家臣を持ったわ。これからもお願いするわね、春蘭、秋蘭、桂花」
「はっ」
「ではこれからどうすべきかしら？」
「華琳様もそう考えていらっしゃると思いますが、決起の用意をする、ということにして軍備を整えましょう。その資金を石苞から提供させ、袁家に備えると言って練兵を繰り返して新規に徴発した兵の練度を上げましょう。あちらからすれば、兵を新規に徴発する訳には行かない華琳様が、未だ十分に平家の郎党としての自覚がない兵を取り込む為に練兵しているように見えるでしょう。その実その言葉通りですし、先に石苞の書状の写しを渡している為、宛に残っている風達にも断りを入れて練兵を行う事が出来ます。私達だけで練兵することも簡単に受け入れてくれるでしょう。
こうすれば袁家の財を以て袁家に備えることが出来ます。武具や騎馬なども提供させれば猶宜しいかと。練兵によって２０日程度の時間を更に稼ぐことが可能でしょう。その上で、最終的な回答をしてやれば宜しいのです。
『私は平家を裏切る気など毛頭無い』、と」
「そうね。それが一番でしょう。では桂花、引き続き私を独立させるべく動く女から情報を提供されておきなさい。それに拠っていち早く揚州の教経の様子も分かるでしょうしね」
「御意」

諸葛亮は、最後の最後まで華琳様を踊らせることが出来ると思っているに違いない。
舐めないで欲しいものだ。

我らが主である華琳様は、一度苦杯を舐めさせられた相手に二度も後れを取るような真似はなさらない。華琳様を見誤ったことがどういう結果をもたらすか、しっかりと理解して貰う事になるだろう。

～華琳　Ｓｉｄｅ～

桂花の献策に基づいて、石苞から資金や武器、騎馬を提供させ、練兵を行う事で更に時間を稼いで麗羽に備えることが出来た。最後に受けた桂花からの報告では、教経は既に建業を取り囲んで落城寸前まで追い込んでいるということだったし、もう十分でしょうね。先の戦で見事に負けたことの意趣返しは出来たと思うわ。

決別を告げる為に石苞を呼び出すと、例によって『家宰』が付き従っていた。私が考えて居ることを実行するのに都合が良いわね。

「良く来てくれたわね、石苞」

「はい。曹操様にもご機嫌麗しく」
「平家が新規に徴発した兵の掌握も十分に出来たし、その練度も満足のいくものになったわ。私の言うことを良く聞いてくれることでしょう。貴方に提供して貰った資金を用いて冀州で兵糧を買い求めることが出来たし、武器も騎馬も十分にある。秋は到ったと言って良いでしょう」
「では平教経に対し、反旗を翻して決起為される訳ですか」
「いいえ」

石苞は相変わらずその感情を表情に出さない。無表情に私を眺めて居る。
だが、その後に控えている『家宰』はそうはいかなかったようで、驚愕の面持ちでこちらを愕然と見ている。

ふふっ。いい気味ね。

「私が教経を裏切るなんてあり得ないわ」
「……その理由をお伺いしたいものですな」
「家宰はどうか知らないけれど、貴方自身は知っているのではないかしら?石苞」
「さて、私にも分かりません。差し支えなければご教示願いたいものです」
「そう。ではそういうことにしておいてあげる。私が教経を裏切る訳がないのはね、私が教経の女であるからよ。教経は私を愛してくれている。そして私もまた教経を愛している。その私が教経に対して反逆するような真似をするなんて、在りうることではないでしょう?」

やはり、石苞はその感情を表情に出さない。とうに知っていた、と言うことでしょうね。一体どうやってそのようなことを知るのか分

からないけれど、市井にあってそれを知るというのはやはり尋常な人間ではない。教経が還ってきたら、この男を推挙しましょう。きっと役に立つでしょうからね。それにしても、陳留にこれだけの男が居たのであれば、私の目に止まっても良さそうなものだけれど。

家宰は、はっきり言えば失格ね。

演技が出来ない役者というもの程見苦しいものはない。家宰であれば主からその胸の内を打ち明けられているものであるのだから、主と同じ態度であるべきでしょうに。まあ後に控えているから仕方がないのかも知れないけれど、ね。

「成る程。では先程貴女様が仰った到った『秋』とは、とどのつまり袁家に己の考えを告げる秋、ということですか」

「ええ。そして貴方の身柄を拘束し、私を謀ろうとした罪をその身に得て貰う秋でもあるわ」

「そうですか」

「そうよ。そこの家宰、いえ、諸葛亮の手の者よ。諸葛亮に告げなさい。

『曹孟徳は同じ相手に二度負けることはない』、とね」

「な、何を仰っているのか分かりかねます」

「そう。それならそれで構わないわ。諸葛亮に曹孟徳から言伝がある、と言って伝えておきなさい。貴方は見逃してあげるわ。

……一日待ってあげる。それを過ぎたら貴方を殺しに刺客を放つからさっさと逃げなさい？」

そう言って微笑んでやると、家宰は蒼惶として立ち去っていった。

あの程度の者を使わざるを得ない所が袁家の内情がどういうものであるかを示しているわね。

「私を拘束して如何なさるおつもりですか？既にご存じでありまし

ょうが、私は家族の為に此処にやってきたのです。家族の身があちらの手の内にある以上、私としては陳留に還らざるを得ませんが」
「そうね。でもそれは諦めて貰うしかないわ。貴方には教経に仕えて貰う。貴方の家族の身柄については、私の方で何とかしましょう」
「その必要はないのですよ」

風がやって来ていた。いつも通りの様子で。

「風、貴女何を言っているのかしら」
「華琳ちゃん。この人が石苞さんですかー」
「そうよ」
「お初にお目に掛かります。風は程?と申します」

……私を無視して話を進めないで貰えるかしら。

「私は石苞と申しまして、陳留で商いを生業にしている者で御座います」
「嘘はいけませんねー」

風はそう言って飴を咥えて黙って石苞を見ている。

「……嘘、ではありますまい。少し説明が不足していただけのことで」
「その不足している説明を華琳ちゃんにしなければ、華琳ちゃんは分かりませんよ?」
「風、どういうことかしら?」
「それは石苞さんから直接聞くのが良いのですよ」
「……石苞、どういう事か説明してくれるかしら?」
「……要するに、私は郭嘉様に前々から遣わされていた密偵である、ということです。教経公が太原にあった頃に命じられて陳留に赴き、

そこでずっと郭嘉様の為に情報を収集しておりました」

郭嘉。鉅鹿で教経の側にあった、あの眼鏡の女ね。既にあの頃から、この男を陳留に派遣していたとは。私がこれだけの才在る人間を見出すことが出来なかった理由が分かったわ。

「風は知っていたのね？」

「はいー。稟ちゃんからお名前だけは良く聞いていましたからねー。稟ちゃんの諜報網の束ねをしているのですよ。風の方でもお世話になっています。まあこれでその任は解かれることになる訳ですが」

「……私の家族はどうなりますかな」

「その点は大丈夫なのです。風の方で使っている人間には、袁家の中にそれなりに権限を有する人間が居るのですよ。まあそれも知っていることでしょうが。彼らに、任を果たすことが出来なかった石苞の家族を生かしておく必要はない、ということで既に身柄を拘束して死んで貰って居るはずなのですよ」

「成る程。既に別人としてこちらに向かって来ている、という訳ですか」

「……流石ですねー。稟ちゃんが言っていた通り、有能な人なのです。やはり、貴方には死んで貰う必要がありますねー。そうでないと、この先困るのですよ」

「左様ですな。漸く教経公に直接仕える事が出来る訳ですし、そのように致しましょう」

「まあ元々石苞などという人は居ませんから、元に戻ってくれれば良いのですよ。かなり時間が掛かりましたが、漸く貴方の才と功績に相応しい役職に就いて貰う事になるのですよ」

「風、どういうことかしら？」

「この人は、石苞さんですが石苞さんではないのです。名を捨てて、石苞として今まで働いて貰っていたに過ぎないのですよ。あの頃、密偵の束ねを出来る有能な人間となると、他に人が居なかったので

す。既に石苞として陳留、つまり華琳ちゃんのお膝元で諜報活動をして貰っていましたが、全土から集まる情報が多すぎて風達では捌ききれなかったのです。ですから稟ちゃんは彼にお願いして集まる情報の一次的な切り分けをやって貰っていたのですが、稟ちゃんが思っていた以上に彼が有能で在った為、ずっとその役割を市井で果たして貰っていたのですよ。ある時からは直接彼がその場で密偵に指示を与えて諜報活動をするようにしていたのです。本来であれば優秀な間者が増えた時点で彼を召還すべきであったのですが、既に華琳ちゃんの膝元で完璧な諜報網を築き上げていましたから彼を戻す訳にはいかなかったのです。

今回石苞さんがあちらの目に止まってその存在が明るみに出たことで、漸くその任を解いて平家の中枢に迎え入れることが出来る様になったのです。なので、改めて仕えて貰う必要はないのですよ。既に仕えて貰っていますから」

「そういうことです、曹操様」

平家には本当に人が多いわね。これだけの人間を密偵として使っていたなんて。まあ、風が言っていた通り、当初はそこまで有能な人間であるという認識を持っていなかったのでしょうけれど、ね。

「では貴方の本当の名前を聞かせて貰おうかしら。これから同僚となるのだから、知っておかなければ不自由でしょうしね」

「……私は、姓は司馬、名を懿、字を仲達と申します。真名はありません」

「知っているでしょうが、私は姓は曹、名は操、字は孟徳。真名は華琳よ」

「真名を授けて頂けるのですか？」

「ええ。貴方にはそれに相応しい才覚があるわ」

「では、華琳様、とお呼び致しましょう。これから宜しくお願い致します」

「宜しくね、仲達」
「仲達さん。風は、姓を程、名を?、字を仲徳。真名は風なのです。風のことを呼ぶときは、奥様でいいのですよ」
「……はあ。それは構いませぬが、色々と困るのではありませんか?」
「別に困らないのですよ。いつでも奥様と呼ぶと良いのです」
……風。貴女、何を考えて居るのかしら。私がそんな事を認めるはずがないでしょう?
「仲達。私のことも奥様と呼びなさい」
「……華琳ちゃん。一番最後にお兄さんの妾になったのですから、身の程を弁えた方が良いのですよ」
「……既成事実を作ろうとしてもそうはいかないのよ、風」
「……教経公は、公人としても私人としても、誠に大度な人であることだ。奥向きのことについては、関わらぬ方が身の為であろうな」
兎に角、これで麗羽と諸葛亮を出し抜くことは出来たはず。
これだけの時間を稼ぎ出せば、教経の方も建業を落とす事が出来ているでしょう。
この後は南蛮を攻略し、そして麗羽と天下を争うことになる。
それが終われば、漸くこの戦乱の世が終わることになる。
まあ、新しい戦いが勃発することは目に見えているけれど、それは仕方がないわね。
精々苦労するが良いわ、教経。
この件に関しては、誰にも譲る気がないでしょうから、ね。

蝶の如く～１４６～（前書き）

もげろ☆

蝶の如く～１４６～

～教経　Ｓｉｄｅ～

黄祖を殺した俺たちはそのまま行軍を続け、劉表が立て籠もっている建業を囲んでいる。あちらに届けてやった爺さんの首を見て恐れを抱いたのか、随分と警戒しているようだ。蓮華と白蓮も合流し、長沙を出発した全ての軍が建業に集結している。後は建業を落とすだけだ。

「教経。元気そうね」
「あぁ。お前さんも元気そうで何よりだ、蓮華。随分早かったな」
「まあね。途中で蔡和が道を阻んで来たけれど、思春があっという間に首にしたわ。あまりに手応えがなかったから何か在るかと思って慎重に軍を進めて来たのよ。だからこれでも時間は掛かった方だわ」
「へぇ。やるじゃないか、思春」
「……はっ」

相変わらず良い尻と良い褌だねぇ。

「で、そっちも早かったな、白蓮。お前さんの軍が一番行軍距離が長いはずなのに」
「こちらもそれなりに時間は掛かったけど、雛里と吉里が居たからな。苦労せずに此処まで来れたよ」
「あわわ、そ、そんな事はありません」
「僕が居るんだから当然でしょ」
「当然、ねぇ」
「……何？御遣い君には異存がある訳？」

「……その『御遣い君』ってのはどうにかならンのか」
「好きに呼べばいいって言ったのは御遣い君だよ？自業自得じゃない？」
「業って程大層なモンかよ」
「さぁ？僕に聞かれても分からないよ。御遣い君の事なんだしね」
斜に構えやがって、この僕っ娘め。

「で、教経。状況はどうなっているの？」
「見ての通り。亀宜しく逼塞してるよ。問題は、どうやって首を出させるか、だ」
「先着してからお屋形様と冥琳が色々と試してはいるのですが、全く反応がないのです」
「あ、あの、ご主人様。どのようなことをなさいましたか？」
「挑発もしたし、門前で酒盛りかましてやったりしたな」
「愉しかったわよね～、酒盛り」
「お前さんは飲み過ぎだ」
「そんな事無いわよ。全然しっかりしてたでしょ？教経だって『芸を見せてやる』とか言いながら弓で城壁の上の歩哨を射倒していたじゃない」
「俺は常識的な量しか呑んでない。お前さんとは違うんだよ。うわばみって言うんだ、お前さんみたいなのを」
「なら霞と星もね」
「策殿。そろそろ真面目になされよ……で、次はいつやるんじゃ？」
「あら、遅かったわね、祭。もうやっちゃ駄目なんだって」
「むぅ……蓮華様に付いてきたのは失敗じゃったか」
「……失敗、という言葉は頂けないわね、祭？」
「あ、いや。そういう訳では」
「無駄口叩いていないで策を考えるのが先でしょ。全く、御遣い君がもっとしっかりしないからこんな風にグダグダになるんだよ？そ

こんとこ分かってるワケ？」

『そこんとこヨロシク』って宇崎竜童だっけか？まぁどうでも良いが。

「はいはい。私が悪う御座いましたよ」

「気持ちが篭もってない！」

「そりゃ俺が悪い訳じゃ無いからなぁ」

「……なあ愛紗。教経っていつもこんな感じだよな」

「……まあそれが教経様だからあまりに酷くない限りは好きにして貰っているのだ、白蓮」

「教経。そろそろ軍議を真面目にしようか」

へいへい。分かっておりますとも、冥琳様。

「落ち着いたところで何か話しときたい事がある奴は居るか？」

「は～い♪」

「穏か。何だね？」

「実はですね～、劉表軍から糧食を奪ってきたんですよ～」

「へぇ。どれくらいだ？」

「3万の軍勢が一月行軍出来るだけの量ですよ～」

「そいつは結構な量だな。有り難いことだ」

「はい～。毒が入っている、という点で、確かに有り難い事だと思いますね～」

「……毒か」

「はい♪」

愉しそうだなこの娘は。

「それで～、教経様がこれをどうするのか、お伺いしたいんですよ～」

「毒ってのは、即死するような毒なのか？」

「亞莎ちゃんに調べて貰いましたが、即効性の痺れ毒であって致死毒ではないようですね～。ただ、痺れ毒といっても生半可なモノではなくて、二、三日身動きが取れなくなるような悪質なモノですけどね～」

「なら丁度良いかな。劉表に呉れて遣ろうじゃないか。態々用意してくれていたようだが、残念ながら俺たちには十分な糧食がある。あちらはそうではないだろうし、長期間籠城するにはどうしても必要だろうからねぇ」

俺がそういうと、穏は嬉しそうに笑って……太股を擦り合わせてクネクネしていた。

「流石は教経様ですね～。やっぱり私達の相性は最高だと思うんですよ～」

そりゃお前さんは眼鏡を掛けているから相性は良いと思うがね。

「穏、落ち着け。……で、教経。呉れて遣ると言っても、どうやって呉れて遣るつもりだ？」

「そうだな。門前で盛大に炊き出しでもやるか。一日目はそれなりに警戒しながら、俺たちが持ってきた糧食で飯を作って上手そうに喰らってやろう。二日目以降は警戒感がまるで無い感じで、劉表軍が呉れた糧食全てを門前に持って行った上で炊き出しをする。但し、喰らうのは普通の糧食な。糧食を奪いに来たら、算を乱して逃げ出

せば良いだろう」
「今すぐにそれをやるのか？」
「いいや。暫く放っておいて、糧食の蓄えが少なくなってからやろう。それまではこうして囲んでおけばいいだろう」
「ふむ。目安としてはあと１０日程度後、と言ったところか？」
「さぁ。雛里はどう思う？」
「わ、私もそれで良いと思います」

帽子を両手で引っ張りながらそう答える。
……かぁいいねぇ……こう、父性的なモノを感じるねぇ……

「んじゃ吉里は？」
「僕もそれで良いと思うよ」
「穏も亞莎も同じ、か？」
「はい～」
「は、はい」
「ならそれで行こうか。向こうが乗ってきてくれるかどうかは分からないが、事前の１０日間でもう一度挑発したり酒盛りかましたりすれば、その延長線上の行動だと思ってくれるだろう。油断が過ぎる、と襲いかかってきてくれれば御の字だ。皆そのつもりで居てくれ」
「それは良いけどさ。それが失敗したら時間を無駄にしただけって事になると思うんだけど。その辺はどう思ってるワケ？」
「あぁ、それは大丈夫だ。な？冥琳」
「ああ。既に向こうの森から地下を掘り進めている。その工事の音を隠す為に、声を張り上げて挑発を繰り返したり宴会をしたりしていた訳だからな。音を出すことを気にしなくても良いから、もう随分と進んでいる」
「へ～。流石は孫呉の知嚢だね」
「これは教経の案だがな」

「嘘でしょ。御遣い君がそんな事思いつくワケ？この顔で？」
「……失礼なペタだな」
「……御遣い君、今、何か言った？ちょっと話をする必要があるみたいだね？」
「いやぁ。別に必要ないと思うよ、うん」
話したところでペタが解消する訳じゃ無いしねぇ。

～亞莎　Ｓｉｄｅ～

全軍で建業を囲んでから４日が経ちました。その間、何度も挑発行為を繰り返していますが、相変わらず劉表軍は城から打って出てこようとはしません。夜間も変わらず工事を続ける為に、交替で城門まで寄せていって銅鑼を鳴らし続けたりしています。向こうからすれば、安眠を妨げようとしているようにしか思えないとは思いますが。

「あ、あの、教経様。今少しお時間宜しいでしょうか」
「あ～、良いよ。入ってきてくれ」

今晩は、教経様の所には誰もいない。
先程雪蓮様がいらっしゃって、私にそう教えてくれました。頑張りなさい、と笑っていらっしゃいましたが、私はそれからドキドキして、どうにも落ち着かなかったのです。

「し、失礼します」

教経様の陣屋に入ると、教経様は地図を眺めていらっしゃいました。

「どうした？亞莎。珍しいな。こんな時間にやってくるなんて」
「あ、はい。教経様、それは？」
「あぁ。百合が作ってくれた地図さ。黄祖の爺の陣立てを確認していたのさ」
「今、ですか？」
「そ。ちょっと簡単に勝てすぎた気がしてねぇ」
「雪蓮様から経緯は聞いていますが、そんなに楽に勝てたのですか？」
「あぁ。黄祖直属の兵以外には目立った抵抗もなかったし、あっという間に半数以上の兵が撤退したしな。恐らくだが、黄祖は最初から死ぬ為にやって来たんだろうさ。これだけ堅固な陣を構えていて、こっちの死者は５００程度の数だったンだ。本気で抵抗したら、２，０００程度は道ずれに出来ただろうさ」
「いつもこうやって戦のことを考えていらっしゃるのですか？」
「いつもじゃないさ。気が向いたらという程度だ。他にやりようがあったんじゃないかとか、相手はどう思ってこう動いたのかとかは、終わってから考えてみるとよく分かることが多いからな。そうやっ

て振り返ることで、自分の引き出しを増やしておくのさ」
「引き出し？」
「あぁ。『もし自分がこういう立場になったら』、と考えておくことは必要だと思わないか？それを考えておけば、自分がその状況に置かれた時に少なくとも一つだけは選択肢が用意できているわけだからねぇ。多少は慌てるンだろうが、身も蓋も開く慌てたり茫然自失って事にはならないはずだ。算多き者が勝つってのは正しいのさ」
「孫子ですね」
「流石によく知ってるじゃないか」
「あの、教経様は孫子を修めていらっしゃるのですか？」
「修めるって言う程のモノじゃないとは思うけどな。誰かについて伝授を受けた訳じゃ無い。まぁ、自分なりには消化出来ていると思うが」

孫子を自分なりに消化出来ている、と言えるのは凄い事だと思います。

「教経様が孫子の兵法で最も印象に残っているのはどの件ですか？」
「そうだな……『夫れ兵の形は水に象る。水の行は高きを避けて下きに趨く。兵の形は実を避けて虚を撃つ。水は地に因りて流れを制し、兵は敵に因りて勝を制す。故に兵に常勢なく、水に常形なし』、かな。先人である老子の思想をしっかりと踏襲しているような、そんな気もするからねぇ」
「老子ですか？」

何故此処で老子が出てくるのでしょうか。

「あぁ。老子に曰く、『上善は水のごとし。水は善く万物を利して争わず、衆人の悪む所に処る。故に道に幾し。居るは善く地、心は善く淵、与うるは善く仁、言は善く信、正すは善く治、事は善く能、

動くは善く時。夫れだた争わず、故に尤なし』。
最善のモノは水のようなモノだ。水は全てのモノに恩恵を与えて争うことがなく、皆が嫌う低きに下っていく。だから『道』のようなモノだ、とね。この場合の争うってのは、何かに固執してぶつかり合うことがないって意味だろうな。一所に留まらず、自己主張が激しく無く。だから角が立たないし無理がない。そんな意味だろう。俺はこれは真理を衝いている、と思う。全てのモノは須く落ち着くべき所に落ち着く、というのが俺の持論でね。その意味で、老子の思想ってのは面白い。そして恐らく、孫子はこの思想に影響を受けていると思うよ」
「……」
「どうした？亞莎」
「……教経様は凄いです」
「俺が凄いんじゃない。孫子や老子が凄いってだけだ。俺は彼らが残してくれた遺産の上に胡座を掻いているに過ぎないンだよ、亞莎。賞賛されるべきは彼らであって俺じゃない」
「それでも、凄いとも思います」
「……何か照れるな」

教経様はそう言って、顔を人差し指で掻いていらっしゃいました。

「で、亞莎。何か用があったんじゃないのか？」

教経様のお話に夢中になっていて、忘れていました。
その、どうしてここに来たのかを。

「あ、あの……」
「ん？」
「の、教経様。私……教経様のことが、その、好きみたいなんです」
「クスッ。好きみたい、か」

「あ、は、はい……」
「どうしてそう思うんだ？亞莎は」
「そ、その、教経様のお顔を見るといつも輝いて見えて、雪蓮様や冥琳様と一緒に愉しそうになさっているのを見ると、その、胸が痛くなって。教経様は皆の教経様だから、仕方がないと分かっているのに、でも私ともっとお話しして欲しいと思ったりして」
「……亞莎」
「この間、雪蓮様に私の様子がおかしいと言われてお話をしたときに、私が教経様に恋をしているのだ、と言われました。その時、あぁ、そうなんだって、そう思えたんです。だから間違いじゃないと思うんです」
「そうか」
「それで、その……」
「亞莎」
「は、はい」
「俺はさ、亞莎も知っての通りで他の女の子とそういう関係な訳だけど、その辺りはどう思う？」
「それはその、仕方ないことだと思います」
「仕方ないって……」
「教経様はご立派な方で、そんな教経様に他の女性が惹かれるのは当たり前だと思いますし、その、雪蓮様も私達孫呉の将には教経様の子を為せと仰っていますし……」
「……雪蓮。お前さん何言ってるンだよこんな純真な娘に……」
「だからその、構わないと思います。……私では、その、駄目でしょうか」
「……駄目なんて事はないよ、亞莎。亞莎は可愛いんだから」
「……本当ですか？」
「本当だよ。亞莎は可愛い」
教経様は私の側にいらっしゃって、私を優しく包み込んでくれた。

「あ、あの、の、教経様……」

教経様の腕の中から、教経様の顔を見上げると、教経様はちょっと変なお顔をなさった。

「どうかなさいましたか？」

「い、いや。別に何でも無いよ亞莎。ちょっと我慢が利かなくなりそうになっただけだからさ」

「？」

教経様に抱かれているのは少し恥ずかしい。けれど、教経様の鼓動も早鐘を打っているようだ。教経様は、私のことを女の子として意識して下さっているんでしょうか。

「教経様、その、私のこと、女の子として見てくれていますか？」

「あぁ。見てるよ」

「そ、そうですか」

恥ずかしくなって、ついいつものように顔を袖で隠してしまう。

「亞莎。それだと亞莎の顔がよく見えないから隠さないで貰いたいな」

「は、恥ずかしいです」

「かぁいいねぇ……亞莎。俺は亞莎の顔が見たいんだよ。見せて欲しいな。亞莎の、可愛い顔をさ」

「〜〜〜〜」

恥ずかしすぎて、耐えられなくなって、教経様の胸に顔を埋めて顔を隠してしまった。

「……亞莎。そんなに抱きつかれたら我慢出来なくなりそうなんだが」

そう言われて、教経様のその、状態に気が付いた。

「あ、あの、教経様。私、覚悟は……出来ていますから」

「覚悟って亞莎、お前さん……」

「その、お、お願い、します……」

「……分かったよ、亞莎。出来るだけ優しくするから、さ」

「は、はい……」

そこから先は、あまり覚えていません。

最初もの凄く痛かったと思うのですが、途中からそんな事はなくなって、むしろその、き、気持ちが良かったです。

全部終わって、教経様に抱かれながら寝台で一緒に寝ています。

「あの、教経様」

「うん？」

「……私とこうなったことを、後悔なさっていませんか？」

「……馬鹿だな、亞莎。するわけないだろ？」

「本当ですか？」

「あぁ。言ったろ？俺の持論はさ、『全てのモノは須く落ち着くべき所に落ち着く』ってものだって。亞莎と俺は、なるべくしてこうなったんじゃないかね？」

「落ち着くべき所、ですか」

「そ。互いに互いが落ち着くべき所だったからこうなってる訳で、ね」

「……はい」

「疲れたろう？もう寝ようか、亞莎」
「あ、はい。では……」

少し名残惜しいけど、教経様にご迷惑を掛ける訳にも行かない。そう思って起き出そうとした私を、教経様は引き止めた。

「ちょい待ち。何処に行くつもりだ？亞莎」
「？いえ、その、自分の陣屋に……」
「今日は亞莎は俺と一緒に此処で寝ることになってるんだよ」
「え？」
「だから、俺と一緒に寝るのさ。嫌かね？」
「い、いえ。そんな事ありません！」
「なら良かった。じゃぁ寝ようか、亞莎」
「……は、はい」

改めて教経様の腕に抱かれて、その日はそのまま一緒に眠りにつきました。
私は、幸せだと思います。
教経様とこうなれて、本当に幸せだと。

お休みなさい、教経様。

蝶の如く～１４７～

～？忠　Ｓｉｄｅ～

「兄貴、上手くいったな」
「あぁ。期待通りってヤツだ。これで奴さん達は負けるしか無くなった訳だ」

劉表軍が用意していた毒入りの糧食を、劉表軍に呉れて遣る。その策が成功した。酒を飲んでいるだけだと罠であった時の危険を考慮すると失うものが多すぎるという判断をしていたようだが、やはり目の前にぶら下げられたのが糧食となると話は別だったみたいだ。籠城をより長く続けるのに必要となる糧食を得ることが出来るかも知れない、というのは流石に罠を考慮しても打って出てみる価値があると判断したんだろう。

俺たちも襲いかかられたときに算を乱して思い思いに逃げ出したが、アレは面白かった。周瑜の姐さんは、『全く、ウチの兵達は逃げる演技ばかり上手くなって……』とぼやいていたが。そんな事はないと思うんだけどな。練度で言えば大陸一だと思うし。元々平家の郎党だった奴らは特にそうだ。人死にが少なかった分実戦経験も豊富だし、長い軍属生活で十分な訓練を積んでいる人間が多くいるからな。

「で、大将。どうなると思う？」
「そうだな。早速張り切って炊いてあった分を食べて、悶絶してくれることだろう。その時に、恐らく打って出てくる奴が居るはずだ」
「何でだ？」
「ダンクーガ。相手の身になって考えてみろ。お前さんが籠城して

いて、喰った糧食に毒があって痺れて動けないヤツが出たとする。
それも結構な数な。で、お前ならどうする？」
「どうするって……あぁ、そういうことか」
「そういうことだな」
「このままじゃジリ貧だから、まだ余力がある内にってことですかね。劉表を逃がす為に」
「多分そうなるだろう」
「面倒なことになりそうですなぁ」
「オッサン。籠城されっぱなしの方が面倒だろうが。矢は城壁をすり抜けて飛んでいくモンじゃないしな。それに、城内には民達も多くいるだろう。籠城が長引くのはあまり良くないンだよ」
「このような時まで民のことを考えておられるとは……流石は御遣い様！思い起こせば太原で……」

あ、始まりやがった。

「……よし、オッサンはほっといて余所に行こうか」
「……大将に同意」
「……撤退の決断が早いのは名将の条件だよな」
「……で、ありましたからなぁ。本当に御遣い様は……」

全て遠き理想郷に旅立ったオッサンをおいて、陣屋を後にした。

「教経」
「お、蓮華か。どうした？」
「冥琳達が軍議を、と言っているのだけれど」
「成る程。同じ事を考えていたのかな。一緒に行こうか、蓮華」
「ええ」

孫権の姐さんと連れだって歩いて行く。

「ねえ、教経」
「ん？」
「同じ事を考えていた、と言っていたけど、どういうこと？」
「多分だが、劉表軍が出てくるだろう、と思っているんじゃないかなと。そう思ったンだよ」
「そう。それならこれで終わり、ね」
「そうだな。これで終わりだ」
「戦が終わったら、話がしたいのだけど？」
「あぁ、良いぜ。戦が終わったら訪ねる事にする」
「え、ええ」

……また、かな？これは。そう思って高順を見ると、高順は肘で俺を小突いて前を顎でしゃくった。放っておけ、ということなんだろう。数日前の呂蒙ちゃんと言い、遠征の度に増やすよなぁ、兄貴は。俺の方が外見は遙かに良い筈なんだけど、この差はどこから来るんだ？
そんな事を考えていると、いつの間にか将が集まっている陣屋にやって来ていた。

「先日の戦闘で、思い描いていた通りに劉表軍に教経の言うところの『贈り物』を届けることが出来た訳だが、恐らく奴らは打って出てくるだろうという予測を全ての軍師が立てている。よって恐らくそうなると思うが、それに対してどう対処するか、教経の意見を聞きたいと思ってな」

司会役として、周瑜の姐さんが口火を切る。
それに対して、孫策の姐さんが挙手して発言を求めた。

「雪蓮、何か在るか？」

「私も出てくると感じているけど、やっぱり劉表を逃がす為にってこと？」
「まあそうだろうな」
「そう思う人間が残っているのか？私は居ないと思っているのだが」
「愛紗さん。そう決めつけるものでは無いと思います。ご主人様から伺った、黄祖さんの最後は見事なものだったと思います。そういう人の配下であった人に、一人として同じような思考をする者が居ない、と言えるでしょうか」
「……言えないかも知れないな」
「だから私達は出てくるだろうと考えて居るんですけどね～。教経様はどうお考えですか～？」
「俺の方でもそう考えてたからな。ここは突破は絶対に無理だってことを示す必要があるだろう。幸いにして兵は十分にある。全軍を２０，０００程度に分け、各門から出てくるであろう劉表軍に備える。東門は蓮華。西門を雪蓮。南門は白蓮。北門を俺。それぞれ分かれてやろう。凪達は雪蓮の配下として動いてくれ。それで将の割り振りもほぼ均等になるだろう。４分の１の数を突破出来ない、となれば脱出に絶望してくれるはずだ。そうすれば、こちらが無理をしなくても落城する可能性が高い」
「お屋形様。どういう事でしょうか」
「……内応」
「まぁ、そういうことになるだろう。こちらが望んでもいない商品を高く売りつけようとしてくる商魂たくましいヤツはいつの時代にも居るものだ。恥知らずにも得意げに、な」
「醜悪です」
「そうだ。だからそういう屑は斬り捨てる。『悪・即・斬』の下に、な」
「はい、お屋形様」
「俺の方針に問題点があるようなら指摘して貰いたいンだが？」
「無いと思います」

「……まあ無いだろうな」
「じゃぁ方針はこれで良いな？それぞれ備えておいてくれ。戦はこれが最後だろう。恐らくだがな」
「御意」

一番出てくる可能性が高いのは、北門だろうな。何せ直ぐ向こうは徐州だ。逃げるなら北からの方が良いに決まってるんだから。まあ、俺たちを相手に選ぶならきっちり相手をしてやるさ。親衛隊は伊達じゃないってのを教えてやる。

～吉里　Ｓｉｄｅ～

「白蓮様。ご主人様からの伝令です。劉表軍は北門から出て来たようですね」

劉表を逃す為に打って出てくると予想してそれに備えていた僕達に、

北門から突出してこれを突破しようと劉表軍が建業から打って出てきた、と報告を受けた。御遣い君からは『援軍には及ばない。こちらが囮という可能性を考慮して全軍待機しておくように』、との伝令が来たみたいだ。

格好付けちゃって。失敗したらどうするつもりなのかな？窮鼠と化した劉表軍に正面からぶつかることになる。油断していたら、痛い目を見ると思うんだけどね。

「そうか。それはまた災難だったな」
「はい」
「……どういうこと？僕はちょっと油断しすぎている気がするんだけど？」
「あはは。それは吉里が教経のことを知らないからだろうな」
「雛里。雛里も白蓮様と同じ意見なワケ？」
「うん」
「過信なんじゃない？たいしたことないと思うんだけど」
「フッ……教経様を見くびりすぎだな、お前は」

愛紗が余裕綽々に私を見て笑っている。ムカつくんだよね、その余裕の笑みは。

「そうかな。まぁ向こうには琴と百合が居るから心配要らないって事なんだろうけどさ」
「吉里。教経は万全なら恐らく平家で一番強いと思うぞ？」
「まさか」
「８，０００の兵で囲まれた１，０００の兵。壊滅させるのにどれくらい時間が掛かると思う？私が８，０００を指揮し、雛里が軍師として付いていたとして」
「１刻要らないんじゃない？」

「そうか。だけど教経は耐えきったよ」
「嘘でしょ？」
「それが嘘じゃないんだよ。なぁ、雛里」
「はい。ご主人様は私が立てた策に嵌ったのに、それを耐えきって後続を待ち、私達に負けを認めさせましたから」
「……そんなに凄いワケ？」
「吉里。私も星も霞も、教経様には勝ったことがない。勝ったことがあるのは唯一恋、あの『呂布』だけだ。そういう人間が、琴と百合、高順に？忠を率いて待ち受けている。私なら絶対に北門は選ばない。選ぶなら、西か南だな」
「蒲公英なら西かな～」
「私なら南一択だな」
「私は西です」
「で、でもそれは個人の武勇だよ？個人の武勇で戦の勝敗が決するなら、今頃董卓が天下を獲ってるよ？そうでないからこうなってるんでしょ？確かに平家の兵の練度は圧倒的だと思うけど、死兵を相手にして余裕を持って相手が出来るとは思えないんだけど？」
「それは私達が率いて居る郎党は、だな」
「そうそう。高順が纏めてる親衛隊はちょっとおかしいのが集まってるもんね～」
「おかしいって？頭がおかしいのは知ってるよ？」
「あははっ♪そうじゃないってば。そうだな～。吉里は愛紗の練兵見たことあるよね？」
「うん、あるよ」

あれはかなり厳しいものだと思う。練兵が終わった時、殆どの兵がその場から動けない程に疲弊していたから。だからこそ、平家の郎党は皆剽悍なんだろうけど。

「高順はね、アレが終わった後に親衛隊だけ連れて鍛錬続けるんだ

よ？」
「……は？あれが終わった後で？」
「そう。といっても一日交替で半分ずつだけどね。でも高順達親衛隊の上層部はずっとやってるんだから。たんぽぽはちょっと付き合いきれないかな～」
「あれだけの体力と武技を備えた人間達が、『一兵卒』として控えているのが親衛隊だ。並の兵なら１０人は軽く殺してみせるだろうな。余所に出せば、ちょっとした部隊の部隊長くらいは務まる人間ばかりだろう」
「実際に剣を交えた私達から見て、異常だったからな」
「騎馬を投入してもびくともしませんでしたから」
「あれで崩せないとは思わなかったからなぁ……」
「そ、そんなに強いワケ？」
「異常だ」
「異常だよね」
「異常だな」
「異常だと思います」

これだけの人間が異常だって口を揃えて言う以上、間違いなくおかしいんだろうね。

「だからまぁ災難だって言ったんだよ」
「申し上げます！」
「何だ？」
「周瑜様より伝令で、各方面から一人ずつ教経様の後詰めとして兵を送ろう、とのことです。突破されることは先ずあり得ないが、後学の為に見ておいた方が良いだろう、と」
「ご苦労様」
「はっ。失礼致します！」
「後学の為、ということなら、此処はたんぽぽだよね？」

「いや、私が行こう」
「愛紗は駄目だよ～。南門の主力なんだから」
「それを言ったらお前だってそうだろう」
「……じゃあ僕が行くね。此処には雛里が居れば十分だと思うし、君たちが言っていることが本当かどうか確かめてみたいし」
「そうだな。それが良いかもしれない。愛紗、たんぽぽ、そういうことで良いか？」
「え～」
「むぅ……まあ、仕方がない、か」
「という訳で、吉里。よく見てくると良いよ」
「じゃあ僕が行って来るね」

そんなに言う程凄いなら、見せて貰おうじゃない。

「あ、徐庶殿。お疲れ様です」
「吉里で良いってば。凪が来たんだね」
「はあ。見てこい、と言われたものですから」
「はわっ、凄いです」
「そっちは明命か」
「それにしても凄いですね、教経様は。あの辺りから全く敵が前に進めなくなっています」

凪が指を差した辺りにあったのは、『高』の旗。高順が率いる親衛隊の中でも最精鋭の部隊だ。此処に居ても声が聞こえてくるってどういう声してるのよ、アイツ。

「テメェらぁ！こっから先は親衛隊の面目に懸けても行かせるんじゃねぇ！俺たちを敵として選んだことを後悔させてやるんだ！やぁぁぁぁぁぁぁってやるぜ！」

「「「「「「「「「「ＯＫ！忍！」」」」」」」」」」

「……本っ当に暑苦しいね」

「そうか？私は凄いと思うが」

「皆さん強いですね」

さっきまで押し込まれていた筈なのに、あっという間に戦線を押し戻し、今や門に迫ろうという勢いだ。御遣い君は馬上でそれを悠然と眺めて居たけど、突然剣を抜いて頭上で回した。

「む。あれは？」

「さあ？どうするんでしょうか」

そのまま眺めて居ると、左右からダンダラ模様の羽織を着込んだ部隊が一斉に敵中に飛び込んでいく。その先頭には、琴と百合がそれぞれ居る様だ。剣を振るって道を開き、そこに次々に新撰組の人間が切り込んでいく。その勢いは鋭く、兵の動きは速い。

「流石は琴様です。思春殿みたいです」

「百合様も凄いですね。春蘭様が敵を斬り飛ばしているような感じです」

……白蓮様や雛里が言っていたことがよく分かったよ。これを向こうに回して戦うなんて、悪夢以外の何物でもないと思う。

「ガハハハッ！御遣い様の為に道を開きに行くぞい！儂に続けぇ！」

また特徴的な声が聞こえてくる。親衛隊の実質３番手と噂されてい

る、魏越とかいうオッサンね。副長をやっている?忠は、御遣い君の身辺を警護して居るみたいだ。

「あ、あれ?門が閉まっていきます!」
「馬鹿な!まだ味方が外にいるんだぞ!?」
「……劉表って屑だって聞いてたけど、その噂に違わぬ屑っぷりね」

門が閉まっていく。門近くにいた敵兵が我先に門へ殺到している。完全に閉じてしまわないように門扉を抑えていた敵兵を、城内にいる兵が斬り殺して門を閉めようとしている。

「何を考えて居るのだ!」
「酷すぎます」
「……反吐が出るわ」

外にいた兵を完全に見捨て、城門は無情にも閉められてしまった。外に残された敵兵は、２，０００に満たない程度だった。

「御遣い君の所に行きましょう。流石にあれを殺すっていうのはちょっとどうかと思うし」
「教経様がそうなさるとは思えないが」
「兎に角行きましょう」

城外に残っている人間をどう扱うのか。それで御遣い君の器量も知れるよね。

～教経　Ｓｉｄｅ～

北門を突破しようとして正しく奮闘していた敵兵の全てを見捨て、劉表は城門を再び閉めやがった。残された敵兵の顔には、『絶望』という名の仮面が貼り付けられている様に見える。

……ドカスが。何を考えて居やぁがる。テメェを逃がす為に命を懸けて戦っていた奴らを、見捨てるだと？しかも門を閉める際に、それを阻もうとしていた奴らを斬り殺しやがった。

「……兄貴、俺は心底劉表ってヤツが憎い」

「憎いなんて言葉じゃ表現しきれねぇよ。……ぶっ殺してやる」

「外にいる兵をぶっ殺すってワケ？御遣い君の器量もたいしたことないね」

？忠を話をしていると、いつの間にかやってきていた吉里が俺にそう声を掛けてきた。その後には、凪と明命も居る。

「馬鹿が。ぶっ殺してやるのは劉表のドカスだ。今目の前に居る奴らは黄祖の爺さんと同じような奴らだろう。己が主の為に命を懸け

て戦っていた、勇者と呼ぶに相応しい者達だ。俺は勇者の遇し方を知らない訳じゃ無い」

「言うに事欠いて馬鹿とは何よ！馬鹿とは！」

「……吉里、ちっと黙ってろ。俺ぁ今機嫌が悪いンだよ」

「吉里、ちょっと抑えろ」

「吉里さん、落ち着いて下さい」

「？忠」

「何だい、兄貴」

「前線に行く。敵将と話をしてみる」

「……降るかな」

「……さあ、な」

……黄祖の爺さんと同じなら、降ることはないんだろうな。

「お屋形様……」

「琴か。敵は？」

「抗戦の構えを見せていますが、隊士達は彼らと戦いたくないようです。私も、正直戦いたくありません」

「だろうな。俺だってそうだ。話をしてくるが、どうなるか分からないから備えておいてくれ」

「……大丈夫？」

「大丈夫だよ、百合。勇者は卑怯は行わないモンだ」

その言葉に、百合も、そして琴も頷いた。二人とも、彼らを敵ながら認めているのだろう。

「そっちの大将を出せ！俺は平教経だ！話がしたい！」

俺が呼びかけると、敵の中から一人将らしき人間が出て来た。

「貴方が平教経か。私は文聘。字は仲業だ」

「お前さんが文聘か」

「……私を知っているのか」

「……まあ、ね。俺は天の御使いだ。ある程度の人物は知っているつもりだ」

「そうか。それで、話とは何だ」

文聘が俺の目を見てくる。

……これは、駄目だ。コイツも死ぬつもりだ。自分を裏切った主に、忠義を尽くすというのか。あの屑には、その忠誠を捧げられる資格はない。何としても、止めさせなければならない。あんな屑の為に、死ぬ必要なんて無いんだから。

「文聘。お前さんは十分にその忠を尽くしたはずだ。劉表がお前さんを裏切ったことで、お前さんが劉表に忠を尽くさなければならない義理は無くなったはずだ。俺に降って仕えよとは言わん。命を惜しんで投降しろ。復讐するにせよ再起を図るにせよ、命あればこそだろう」

「そうは行かん。私は黄祖殿と約束をしたのだ」

「約束？」

「そうだ。黄祖殿は先に死ぬことで家に忠義を尽くす。私は生きて最期まで家に忠義を尽くしてから死ぬ。そう約束したのだ。死んだ人間と交わした約定を一方的に破り捨てることなど、私には出来ない。それでは不公平に過ぎる。黄祖殿は私に文句を言う事すら出来ないのだからな。死者と交わした約定は絶対だ。それを破るような屑に、私はなりたくない」

「黄祖もお前も、何故そう死に急ぐ。人は人に従うべきであって、家や思想に従って生きていくべきじゃない。そんな枠にはめることが出来る様な生き物じゃないンだよ。人間ってのは、基本的に感情で動く生き物だ。家や思想には感情は通わない。人であればこそ、お前さん達の想いが通うンだよ。あの屑にはその忠誠を捧げられる資格はない」

「貴方が言うことは分かる。だが私達にはこういう生き方しか許されなかったのだ。今更それに文句を言うつもりはないが、貴方に私達を憐れと思う気持ちがあるなら、私達の生き方を否定しないで貰いたい」

「今お前さんが言っているのは生き方じゃない。家の為に生きるのは良い。それは俺だってそういう面が多分にある。俺も平家を背負って生きている訳だからな。家の為に生きている部分は間違いなくあるンだよ。

だが、死に方となると話は別だ。お前さん達は、命を賭しても構わないと思う誰かの為に死ぬべきであって、家の為に死ぬべきじゃない。それが大丈夫の死に様というものだろうが」

「『大丈夫の死に様』、か。……黄祖殿の死に様は、立派であったか？」

「……立派な訳が無いだろうが。最期まで抗って抗って抗い続けてみせるのが『立派な死に様』だ。望んで死ぬような真似をしやがったあの爺の死に様を、俺は絶対に立派だなンて言ってやらない」

「フッ……」

「何が可笑しい」

「いや、黄祖殿が思い描いていた理想の敵手だと思ってな」

「どういうことだ？」

「黄祖殿は戦場で死にたがっていた。その最期の相手として、知勇を兼ね備えた、仁義に篤い人間が相手であればこれに勝る誉れはない、と言っていた。『儂の名は仁義に悖る者に荷担した愚者として残るだろうが、残せるだけの名があるだけマシというものじゃ』、

とな」

「何がマシなものかよ。さっきも言ったが、生きていればこそ浮かぶ瀬もある。ヤツは早々にそれを放棄した不心得者だ」

「そうか。では私もその不心得者になるらしいな」

「馬鹿な。今更死ぬ必要が何処にある。貴様を裏切ったんだぞ、あの屑は」

「確かに屑だろうな。だが、仕える主を選んだのはこの私だ。このような最期を迎えることになったのは、私自身が積み重ねてきた選択の結果に拠るものだ。誰を恨もうとも思わない」

「何を言っている。仕える側がその主を見抜けないのが悪だとしても、その主が極悪非道な振る舞いをした責任を臣下が全て背負うなどということがあって良いはずがないだろうが！

むしろその逆なんだよ。臣下の行いがもたらす結果は、全てその主の責任だ。その逆はあり得ない。あってはならないンだよ！」

「そう考えることが出来る人間だと、そう信じて居たんだがな。どうやらそうではなかったらしい、ということさ。それにさっきも言ったがな、黄祖殿が先に逝って待っている。私も逝かねばならぬだろう」

文聘はその剣を抜き放ち、己の首に宛がった。

「ま、待て文聘！まだ話は終わっていない！」

「私の方から話すことはもう何もない。これ以上貴方と話をしていたら、決意が揺らいでしまいそうだからな。

……最期に貴方と話が出来て良かった。私の生涯で、最も充実した会話であったろう。貴方にこの愚者を憐れむ気持ちが僅かでもあるのなら、我が愚息のことを宜しく頼む。父は立派に果てたと。そして強く生きよと。そう伝えて欲しい」

「待て！」

俺が制止するのも聞かず、文聘は自刎して果てた。
文聘に付き従って居た兵達も、次々に自刎して居る。

「止めろ！貴様らはもう十分戦い、忠義を尽くしたじゃないか！これ以上あの屑に従う必要なんてない！止めろ！死ぬ必要なぞ無いじゃないか！」

ダンクーガも？忠も魏越も、動かなかった。

「お前ら、何をやっている！今すぐ止めろ！」

それでも動かない奴らを放っておいて自ら止めに行こうとする俺に、琴と百合とが抱きついて止める。何で邪魔をするんだ。このままだと、あいつら全員死んでしまうだろうが。

「……大将。あいつらが選んだことなんだ。俺たちには止める資格はないよ。此処で止めても、きっとあいつらは死ぬ。大将だってそれは分かって居るんだろ？それなら此処で、主将と一緒に、立派に死なせてやった方が良い」

「馬鹿なことを言うな！死ぬことに立派も糞もあるか！死んだら皆同じなんだよ！」

「兄貴。此処で生き残った奴らは、きっと死んだまま生きていく事になるんだぜ？そんな人生を、兄貴は強要するってのか？」

「何だと？」

「あいつらは劉表の屑の為に死ぬんじゃない。文聘の為に死ぬんだ。それを止めて、生きながらにして死ねと、そう言うのか？兄貴は。俺たち親衛隊はあいつらの気持ちはよく分かるつもりだ。もし兄貴が同じようにして死んだなら、俺たちだって同じ死に様を選ぶだろう。兄貴はそれを理解してやれないってのか」

「……馬鹿め……馬鹿め！」

「……御遣い様……泣いておられるのですか」
「……泣く訳がないだろうが。馬鹿共の為に泣いてやろうとは思わん。
琴、百合。もう良い……もう、誰も生きていないから」

最期まで文聘に従っていた奴らは、皆自刎して果てた。こういう奴らがいるのに、その期待に応えてやらなかったばかりか盛大に裏切りやがった屑が憎い。頭がおかしくなりそうな程、あの屑が憎い。
コイツらは、犬死にじゃないか。何の為に生まれてきたってンだ。
あの屑に裏切られて死ぬ為に、生まれてきたってのか。

「あ、あの、教経様。彼らの遺体を収容して埋葬してやりたいのですが」
「……あぁ。そうしてくれ。全員の遺品を集めておいてくれ。家族に渡してやりたいから」
「わ、私も手伝います」
「俺たちも手伝おう」
「そうだな」
「そうするとしよう」

死んでいった奴らを収容している皆を見ていると、吉里が側にやってきた。
先刻、コイツに対して暴言を吐いちまったな、そう言えば。

「……さっきは済まなかったな。暴言だった」
「いいよ。僕の方も無神経だった」
「で、何だ？」
「あいつ、名を残したいと思って居たと思うけど、残させてやるの？愚者としてでもその名前を」
「……馬鹿め。誰が愚者としての名を残させてなどやるものか。誠

忠の士として祀り上げてやる。男児たる者かく生きるべし、とな。精々あの世で恥ずかしがるが良いさ。文句は言わせないし、言えないだろうよ。死んじまってるンだから。とっとと死んだあいつらが悪い。様を見ろってンだ」

「……そっか」

それがお前さん達にはお似合いだよ、黄祖、文聘。

蝶の如く～１４８～（前書き）

ソイヤッ！ソイヤッ！

蝶の如く～１４８～

～思春　Ｓｉｄｅ～

建業から脱出しようとした劉表を逃がす為に奮闘した将兵を、劉表が見殺しにした。後学の為に、と言われて見学に行った明命から、何があったかは聞いている。仕える主が屑でも、その臣下には立派な人間が居るものだと感心していた。そういった人間を有効に用いることが出来なかったからこそ、劉表は滅びることになるのだろう。彼らを裏切るような行為をした事で建業に立て籠もっている兵の士気は落ち、攻め込めば直ぐにでも落城させることが出来る状況になっている。

だが、教経様は城攻めの命令を出してこなかった。

明命から聞いた限り、教経様は泣いておられたようだった、ということだった。敵の為に涙を流すなど、柔弱すぎる。そう断ずることは容易いが、人として見事な生を生ききった、文聘のような人間の死を悼むことが出来ることは人として好ましいと思う。そういう心根の優しい人であればこそ、蓮華様の主に相応しいとも。

少し教経様と話をしてみよう。

そう思って教経様の陣屋に向かっていると、雪蓮様と冥琳様がいらっしゃった。

「あら、思春じゃない」

「……はっ」

「此処で何してるの？……ってこっちには教経の陣屋しかないから教経に逢いに行く途中だったって訳ね」

「は、はあ。まあそうです」
「ふむ……雪蓮。思春なら無碍に扱われることはないのではないか？」
「そうかもね」
「……どういうことでしょうか」
「わたし達も教経の様子が気になって訪ねたんだけど、大丈夫だから時間をくれの一点張りでさー。もの凄い殺気を撒き散らしていたし、物騒なことこの上ないわよ。流石にあの状態の教経とやり合いたいとは思わないしねー」
「……やり合うことを考えて居たお前がおかしいと思うのだが……。どうやら琴も百合もそう言われたらしい。愛紗でも駄目だったようだ。親しい人間と共に居るのに、殺気を撒き散らすような状態で居るのは申し訳ない、とでも思っているのだろう。陣屋の中に入る前に、断空我達に止められたからな」
「わたし達相手に話をしても十分に整理は付けられると思うんだけどね」
「まあ放っておいても明日には整理を付けて居るだろうがな。だがこういう時に我らを頼らない、というのは頂けない。どうせ落ち着いたら、我らに甘えたくなるに違いないというのに」
「あら、冥琳。甘えさせてあげるの？」
「当たり前だ。いつもでは困るが、こういう時は甘えてくる位が丁度良い。私に生の感情を剥き出しにしてぶつけてくれれば可愛いものを」
「あははっ。確かにねー。普段全然そんな事無いから、ちょっと位は脆いところを見せて貰いたいわよね」
「……教経様は、ご自分の気持ちに整理が付けられていない、ということですか？」
「そうみたいよ。まあ、哀しいってだけなら素直に私達に慰められたと思うけど、今回は殺してやりたいっていう感情がどうにもならないみたいだから」

「恐らくだが、自分が劉表を殺したら雪蓮達が仇を討てない、等と考えて居るのだろうさ。だからどうしても自分の殺意を押さえ込まなければならない、とな」
「そんな事気にしないで一緒に滅多切りにしてやりましょうって言う前に追い返すんだから。……本当、馬鹿なんだから」
「だから思春。お前からその事を教経に伝えてやってくれ。私達が教経を訪ねると、アイツは私達が心配してやってきてくれたのだとしか思わないだろう。だがお前が行けば、何か用事があってのことだと思うに違いないからな。普通ではないだろうが、直接面語出来るだろう」
「……分かりました」
「あ、それ伝えて教経が落ち着いたら、私達を呼びに来るのよ？」
「だな。今日の教経はきっと猛々しいことだろうよ」
「楽しみよねー♪」
「フッ……そうだな」
「……では、私はこれで」

お二人とも、軽口を叩く風情で話をしていたが、やはり心配なさっておられるようだ。
殺意が、抑えられない、か。

教経様の陣屋の前まで来る途中で、前方からかすかに殺気を感じた。
教経様の陣の前に来た今、それはかすかなものではなく、明確な、そして凄絶なものとして感じられる。普段のあの教経様からは想像も出来ないような、陰惨な、と表現するのが相応しい殺気だった。

「教経様。思春です」
「……どうした」
「少しご相談が。宜しいでしょうか」
「……入ってくれ」
「はっ」

陣屋の中に入って、驚く。教経様は諸肌脱いで清麿を抜き身でその手に取り、肩で息をしていらっしゃった。

「教経様……」
「どうしたンだ、思春。分かって居ると思うが、俺は随分機嫌が悪い。用件は手短にしてくれ」
「では。雪蓮様から伝言です。『わたし達の事は気にしないで一緒に劉表を滅多切りにしてやりましょう』とのことでした」

そう言った瞬間、教経様がピクリと肩を動かした。

「今何て言ったンだ？思春」
「雪蓮様達と一緒に、劉表を滅多切りにしてやりましょう、と」
「……馬鹿な。そんな事が許されるはずがない。雪蓮達は親を殺されている。俺はそうじゃない。唯々屑が憎くて殺してやりたくて仕方がないだけだ。同列に立つ資格など無い」

そう言って目を瞑る。

「教経様。教経様は劉表を殺してしまいそうな自分を嫌っているように見えますが」
「俺が嫌になりそうなのはそこじゃない。雪蓮や蓮華に呉れて遣るのではなく、この俺自身の手で惨たらしく殺してやりたいと考え、そしてそうしてしまいたいと思っている自分が気に入らないンだよ」

「何故そうなさらないのです」
「言ったはずだ。俺よりもその資格を遙かに有する人間が居る」
「その人間が構わないから共に殺そう、と言っているのに、何を躊躇う必要があるのです」
「俺の怒りは時間をおけば忘れることが出来る程度のものかも知れないだろうが」
「その程度の怒りでこうは成らないと思いますが」
「だが俺は俺が大切に思っている雪蓮や蓮華だけで仇を討つのが一番良いと思っているンだよ。それと分かっていてそうしないってのは、俺が思う平家の頭領じゃない。だからやらないんだよ」

……教経様と蓮華様は、存外似ているものだな。

「教経様。教経様は蓮華様に仰ったことをお忘れになったのでしょうか」
「……どういうことだ」
「『蓮華は蓮華で良いンだ』と。そう仰って居られました。それは、『こうあらねばならない』という枠を作ってそこに無理矢理自分を当てはめようとしていた蓮華様に対して、ありのままの自分で構わないのだ、ということを仰ったのではありませんか？」
「……」
「それにあの時にも申しましたが、私は蓮華様が孫家の当主としての器があるから仕えているのではありません。蓮華様御自身の器に惹かれてお仕えしているのです。それと同じように、教経様。私は貴方が平家の頭領だから従っている訳ではありません。貴方だから従っているのです」
「思春……」
「好きなようになされば宜しいではありませんか。それが駄目だという時は、我らが皆でお止め致します。今回は雪蓮様御自身がそれで構わないと仰っておられるのです。蓮華様もまた、同じ事を仰る

でしょう。貴方は貴方がなさりたいようになされるべきなのです。それが私が敬愛して已まない『平教経』という人であったはずです」

教経様は暫く黙ったまま目を瞑って居られたが、一つ息を吐き出して諸肌脱いでいた服を着込み始めた。

「……俺ぁ駄目だな」

「は？」

「感情的になると駄目だ。まるで餓鬼だ。自分が嫌になってくる」

「……」

「全く進歩してないなぁ……他人から言われないと気がつかないってのは正直どうかね」

「良い、と思いますが」

「いやぁ、駄目だろう。全く進歩がないってのは流石にねぇ」

「教経様は間違っておられると思いますが」

「そうか？」

「はい。完璧では居られないのが人というものでしょう。それが完璧でないからと言って非難を受ける謂われは無いと思いますが」

「だが俺は人の主だぜ？」

「それこそ教経様らしくない問いです。人が完璧でいられないからこそ、多くの人に支えられるのではありませんか。『皆で結果を出せばいい。お前さん一人の肩に全てが掛かっている訳じゃ無い』。蓮華様にそう仰ったのは教経様御自身です」

「……そうか。そうだったな」

「はい」

「……思春。有り難うな」

「……いえ」

「……照れてンのか？」

「……そのようなことはありません」

どうやら、教経様は自分の気持ちを整理出来たようだ。
私をからかう事が出来る様にはなったのだから。

「雪蓮達には悪いが、俺も参加させて貰う。……どうしても許せそうにないからな」
「……はっ」
「……さて、思春。雪蓮と冥琳呼んできてくれないか」

雪蓮様と冥琳様にその、慰めて貰おう、というのだろうか。

「……何故でしょうか」
「……まぁその、なンだ。怒りは一先ず治まったが、文聘の死がやりきれないって感情はまだあってな。というか、そもそもそれが発端であなってたンだが。だからまぁ、一緒に居たいなぁと。流石にさ、思春に頼む訳にも行かないだろう？」
「……構いません」
「だろ？だからさ、雪蓮と冥琳を……ん？今なんて言った？」
「……構いません。教経様が望まれるなら」
「へ？」
「……私では、不満ですか？」
「い、いや、不満なんて無い。その、思春は良いふんd……雰囲気してるからさ。凛々しくて格好良いのに、ちょっと可愛らしいところがあって。そういうところが好きだ」

……この人は、鈍いのか鋭いのかどちらかはっきりして欲しい。そのつもりが無さそうであったのに、しっかりと私のことを見ていて、しかも好きだと……こ、こんな事をはっきりと言われると、恥ずかしいではないか。

「……その、今の言葉は本当ですね？」

「本当だけど？」
「……分かりました」
「何が？」
「……今日は私が教経様の側に居ます」
「……思春。その、側に居るってもさ。ただ横にいるってだけじゃなくて……」
「……分かっています」
「あ～……」
「……私でも」
「ん？」
「……私でも、恥ずかしいと思うことはあります」
「……そうだな。ちゃんと応えてあげないってのは駄目だよな」
「……」
「思春。一緒に居てくれるか？」
「……今日だけでしょうか？」
「いや。これからずっと、だ……恥ずかしいなら訊くなよ、思春」
「……う、うるさい！……と、失礼しました」
「ははっ。今のが思春の素か」
「……う……す、済みません」
「誤る必要が何処にある？別にいいぜ？皆の前でちゃんとしてくれれば、俺は普通にしてて貰いたい。そういうことになるのなら尚更に、ね。思春がこういう俺で構わないと言ってくれているのと同じだよ。俺は思春が思春で居てくれる方が嬉しい」
「……は、はっ」
「はい、だろ？今は主従じゃないんだから」
「……はい」

雪蓮様と冥琳様が仰っていた通り、教経様は随分気が立っていた様で、かなり荒々しかったと思う。勿論、最初は気遣ってくれていたが。二度目、三度目、と回を重ねる内に、破瓜の痛みは無くなった。

その私を見て、『少し手荒くなるかも知れないが、良いか?』と訊いてきた教経様に、構わない、と答えた結果、怒濤のような性の快楽の中に放り込まれてしまった。

雪蓮様達が二人がかりで抑えようと思っていたところに、一人で挑んでしまったらしかった。
太刀打ちできそうにない。
まあ、最初から負けに来ているような部分があるが。

教経様は落ち着いた後、ずっと文聘について話をしていた。
こういう脆いところがあるのだ、この人にも。脆いという程に脆い訳でもないが、感傷に浸るような部分が。そういう関係になったからに違いないが、それがまた愛おしく思える。

冥琳様が、『甘えて欲しい』と言っていた気持ちが分かる気がする。
私が、この人を護ってあげている。そういう充足感がある。

……蓮華様に、どう言ったものだろうか。あの背筋が寒くなるような感覚に晒されてしまうのではないか、と思うと少し憂鬱だ。

～高順　Ｓｉｄｅ～

大荒れに荒れていた大将だったけど、甘寧の姐さんが大将に話がある、と言って陣屋に入って出てこなかった翌日には、元に戻っていた。何があったのかってのは、もう今更な気がする。親衛隊内の賭けだと、次は孫権の姐さんだと言われていたんだが。魏越のオッサン以外全員外してしまった。『お前には、らっきーはやらない！』とか言っていたが、また大将に変なことを教えられたらしいな。

「大将、落ち着いたみたいだな」
「まあな」
「……甘寧の姐さん、歩きにくそうだな」
「だな」
「……大将、いい加減にしとかないと、マジで刺されるぞ？」
「……かなぁ？」
「そりゃそうでしょ。兄貴の側には程？の姐さんとか曹操の姐さんとか、ヤバイのばっかり揃ってるんだから」
「……オッサン、今聞いたよな？」
「はい御遣い様。儂も聞きました」
「ちょ、兄貴！今のは言葉の綾ってヤツでしょ？」
「ンじゃ余計なことは言うな」
「きょ、脅迫じゃねぇか！」
「お願いってンだよ、こういうのは」
「……全く。貴方達、何やってるのよ」
「雪蓮か」
「おはよう教経。……落ち着いたみたいね？」

「あぁ。おかげさまで、な。劉表のこと、本当に良いのか？」
「良いわよ？分かち合えるものは分かち合った方が良いでしょ？二人の初めての共同作業ってねー」
「……共同作業なら定期的にやってると思うがね」
「あはは、わたしとはね。でも蓮華とは初めてでしょ？」
「はぁ……頭痛がしてきた」
「慰めてあげよっか？」
「大丈夫だよ」
「そっか。思春が居るものねー？」
「……昨日呼ばなかったのが気に入らなかったのか？」
「べっつにー」

孫策の姐さんは、大将との会話を楽しんで居るみたいだ。早速ぶっ刺しに来たのかと思った。真面目な話、大将が普段通りの大将に戻れたのか、それを量りに来たんだろう。

「で、教経。当然攻めるわよね？」
「あぁ。当たり前だ。終わらせる」
「この戦を？」
「……そしてドカスの人生をな」
「そ。じゃあ行きましょうか」
「ダンクーガ。全軍に通達。四方から攻め寄せろ、とな。オッサン、オッサンが先鋒だ。気合い入れてけ」
「了解」
「ガハハハッ！腕が鳴りますなぁ！」

色々あったけど、これで本当に終わりだろう。

「おいおい、本当かよ……兄貴の言った通りじゃねぇか」
「親衛隊、開いた城門から城内へ突入しろ！」
「……胸糞が悪いな、この戦は本当に」

城門付近まで寄せた俺たちの前で、城門が開いた。
……内応。大将が言っていたことが、現実になった。本当に胸糞が悪い。忠義を尽くす味方を裏切るヤツに、最期の最期になって主君を裏切るヤツ。その主君は、死姦が趣味の糞野郎。そんな糞の為に忠義を尽くして死んでいった奴らが、余りにも浮かばれない。こんな糞共に囲まれてさえ居なかったら、もっと気持ち良く生死を賭けて戦って、互いを称えながら殺し殺されしていたはずなのに。

「城内へ侵攻しろ。劉表は絶対に逃がすな。見つけても殺すんじゃない。必ず生かして俺の前に跪かせろ。それから黄射と、文聘の息子を捜し出して保護しろ。略奪も暴行も許さん。背いたものは例外なく死罪。良いな？」
「了解！」
「お屋形様、糧食を城内に持ち込んで、民衆に分け与えてやりたいのですが」
「良いだろう。百合、手筈を整えてくれ」
「……うん」
「高順、兄貴の身辺警護頼むわ。俺は前線に行ってくる」
「気を付けろよ」
「分かってるよ」

？忠が組下の者達を引き連れて前線に向かう。その前線では、門を閉じる為に寄せてきた劉表軍を相手にオッサンが大立ち回りを演じている。そのオッサンに追いついた？忠は、門を奪還すべく寄せて

きた部隊の将と何合か打ち合って生け捕った様だ。最後まで諦めず、門を奪還しようとしていたのを見る限り、その将もそれなりの人物であるのかもしれない。

「なあ大将」
「あぁ？」
「門開いて内応してきた奴ら、どうするんだ？」
「分かってるだろうが、ダンクーガ」

大将は心底気に入らないって顔をしている。

「劉表を裏切って俺に従うってンなら、もっと前に機会はあったはずだ。勝敗が完全に決してからの内応など認める訳がないだろうが」
「なら門を閉めようとして最後まで戦っていた奴らは？」
「投降するなら命は取らん。故郷に帰りたいというなら帰してやるさ」
「……大将らしいよ」
「誰だってそうするだろうよ。雪蓮も蓮華も白蓮も華琳も、きっとそうするだろう」
「申し上げます！」
「どうした？」
「甘寧様が劉表を捕らえたとのことです！周瑜様の命で戦闘停止を通達しております！」
「流石は冥琳だな。もうこれ以上人を殺す必要はないからねぇ。……行くぞ？ダンクーガ。畜生共を殺しに」
「……了解」

大将のここ二日間の不機嫌さは、太原から追い出された時に見たぐらいしか記憶にない。しかも太原の時よりも、もっとこう、暗くて重苦しい感じだ。碌な殺され方をしないのは間違いない。全く憐憫

の情が湧かないがね。

惨たらしく殺されるべきなんだよ、屑が。

～教経　Ｓｉｄｅ～

戦後処理、ということで、建業城内の広間で引見を行っている。粗方処遇は決まり、残すところはあと４名になった。今俺の目の前に居るのは、蘇飛。最後まで城門を閉めようと戦い、？忠に捕らえられた人間だ。せめてコイツくらいは死なせたくはなかった。

事前に冥琳から手渡された蘇飛の経歴を見る限り、何とか死なせずには済みそうだがね。

「良く来た蘇飛。俺が平教経だ」

「……はっ」

「いきなり質問で悪いが、お前さんは何故従わずに俺に刃を向けたンだ？」
「私は黄祖殿の配下ですから」
「質問の仕方が悪かったな。……黄祖から黄射のことを頼まれていたンだろうに、何故それに従わずに前線に出て来たのだ、という意味で訊いたんだよ」

黄射の名を口にした時、蘇飛は微かに反応した。

「……黄射殿をどうなさるおつもりですか」
「さて。殺してやろうか、と思っているんだが？」

そう言った俺に対して意見を述べようと口を開きかけた人間を制止する為に、右手を挙げる。少しだけ黙って居て貰おうか。コイツを死なせない為に、順を追って話を進めなきゃならない。その為の発言なんだから。

「……私の命と引き替えに、黄射殿だけは助けて頂けないだろうか」

良し。これなら上手いこと誘導できそうだな。

「……黄祖の息子とは言っても民間の学者でしかないから、かね？」
「……そうだ。だから私の命と引き替えに、彼を助けて欲しい」
「教経様、お願いがあります」

俺の前に跪いている蘇飛の横に、思春が出て来てそう言った。

「何だ、思春」
「この度私が上げた戦功全てと引き替えに、蘇飛殿の助命をお願い致したいのです」

「何故？」
「……私が嘗て黄祖殿の下に居た際に、随分と良くして下さいました。その恩に私はまだ報いることが出来ていません。どうか、どうかお願い致します！」
思春はそう言って平伏している。
……馬鹿だな、思春。俺がこういう人間を殺すわけがないだろうに。
「……甘寧、余計なことをしないで貰おう」
「し、しかし！」
「蘇飛。お前さんの命は、この俺が生殺与奪を握っている。此処までは良いな？」
「はっ」
「の、教経様！」
哀しそうな顔をする思春に、片頬を少しだけあげて微笑みかけてやる。
それを見た思春は、何も言わずに引き下がった。俺を信じて様子を見よう、ということだろう。その選択は正解だよ、思春。
「では、俺が下した結論に対して、異存を述べることなく従うな？」
「……黄射殿の命を保証して頂けるなら」
「ならば良し！黄射の命を保証してやろう。だからお前さんには俺の決定に絶対服従して貰う。良いな？」
「必ず従います」
「ではお前さんへの処分を申し渡す。
……内縁の夫である黄射と正式に結婚し、共に生きて黄家の祭祀を絶やさぬようにせよ。それが俺から貴様に与える罰だ」
「なっ……」

まさかこういう処分が下るとは思っても見なかったんだろうな。蘇飛は呆然としている様に見える。

「何故私を助命なさるのですか」

「俺は黄祖の爺さんに、黄射に家を継がせ、黄家の祭祀を絶やさぬようにすることを約束した。黄射にはまだ子がいないと聞く。それでは黄家の祭祀が絶えることはないと言いかねる。形を整えてさっさと子を為し、祭祀を絶やさぬようにせよ。その為に助命するのだ。でないと黄祖に対して俺が申し訳が立たん。

文聘ではないが、死んだ人間と交わした約定は絶対だ。理由もまた文聘が言った通りだがな。それから、文聘の子の文俶はまだ幼い。然るべき年齢になった時に文家を再興させるつもりで居るが、それまで面倒を見てやってくれ」

「……しかし」

「示しが付かない、か？だがお前は俺の言うことに絶対服従すると誓ったはずだ。だから従って貰う。俺はお前さんが出した条件を呑んだンだ。次はお前さんが俺の条件を呑む番だ。異論は認めない。……良いな？」

「……寛大な措置に感謝致します」

「感謝される謂われはない。俺は黄祖の爺さんとの約定を果たそうというだけだ。別にお前さんの為じゃないから恩を感じる必要はない。……以上だ。もう下がって良い」

蘇飛は思春に付き添われて、下がっていった。

「フッ……」

「……何だよ、冥琳」

「何。素直ではないと思ってな。祭祀を絶やさぬようにするだけなら、別に蘇飛が相手でなくとも良いだろうに。結局お前は蘇飛を助けてやりたかったのだろう？」

「……違うね。生きることの方が辛いから、そうさせただけだ。その方が罰として相応しいからな」
「そういうことにしておいてやるさ」

此処に居る全員が、俺を暖かい目で見て居やぁがる。何かにつけて俺に噛みついてくる吉里までもがそんな目をしている。
……糞。きっちり見通されてるってのは何かムカつくな。

たった今蘇飛が出ていった扉から、二人の男が連れ立ってこちらにやってくる。

カイ良にカイ越。
劉表が荊州に入ってからずっと劉表に従ってきた、劉表の知恵袋。
そして最後の最後に門を開放して内応してきた、裏切り者。

「平教経様。私はカイ良、字は子柔で御座います。拝謁が叶い、光栄で御座います」
「私はカイ越、字を異度と申します。ご戦勝をお慶び申し上げます」

二人は恭しく俺に頭を垂れている。
拝謁が叶い光栄だと？ご戦勝をお慶び申し上げますだと？
どの面を下げてこの俺に見えているのだ、貴様らは！

「……貴様らの為に割く時間は俺にとっては貴重過ぎる。ひとつ聞いておこう、貴様らが門を開いた時、貴様らの羞恥心はどちらの方向を向いていたのか？」
「た、平教経様。貴方様は、我々が恥知らずだと仰るのですか」
「それ以外のことを言ったように聞こえたのなら、俺の言い方が悪かったのであろうな」
「平教経様。貴方様のお側におられる公孫賛殿にしても、ついこの

間まで敵として刃を交えた間柄であったはず。ですが今は志を変えて貴方様にお仕えしておられます。であれば我々にも寛大なご処置を給わっても良いと思いますが」

「聞いたか白蓮。コイツらはお前さんと同類だと言っているぞ？」

「……誠に光栄の極み」

「……良いだろう。白蓮、俺の心もお前さんのそれに等しい。本来戦場の外で血を流すのはお前さんの本意ではあるまいが、特にお前さんに命じる。この薄汚い裏切り者共を処分して、せめて大陸の一隅だけでも清潔にしろ」

「御意」

「平教経様！お慈悲を！」

「最後まで己が主に忠誠を尽くして囚われたのであれば兎も角、勝敗が決してから内応して来るような奴に慈悲を与える程教経は甘くない。無駄な哀願はするな」

「……恥知らずが。死んで黄祖の爺さんと文聘に詫びを入れて来い」

これで残すは後一人、いや、屑が一匹だけだな。

～冥琳　Ｓｉｄｅ～

教経の前に引き出された最後の一人。
劉表。コイツを殺す為に、私達は此処までやって来た。元より救いようのない屑だと思っていたが、この戦を通して奴が行った事は、全く以てその屑の称号に相応しいものだった。

「屑。お前を殺す前に一つだけ訊きたい事があってな。こうしてきて貰った訳だ」
「儂に何の用じゃ、青二才」
「訊きたい事がある、と言ったろう？死姦ばかりしていると耳が遠くなるのか？」
「フン。人の趣味に口を出せる程ご大層な人間でもあるまい。貴様も女を侍らせて喜んでいるのであろうが」
「合意の上で、な。貴様のように抵抗どころか口答えすら出来ない様にして侍らせている訳じゃ無い。貴様にとっては些細な差だろうが、俺にとっては大きな差だ。無論、世間一般にとってもな」
「じゃが儂にとっては些細な差じゃ。そうである以上、この儂の目に移る世界でも些細な差じゃ。
……そこにいるのは孫堅の娘達か。どうであった、その肉の感触は。良いものであったじゃろう？儂は母親を、貴様は娘を思うがままに犯した、正に同志ではないか……ヒヒヒ」
「俺を挑発しているつもりか？屑。畜生が一丁前に哲理を口にするな。貴様の目に映る世界で些細であるということが、即ち真理であるとでも抜かすつもりか。俺はそこまで自惚れては居ないんだよ。この世界において、貴様は少数派に過ぎん。この世界が共有する価値観に背くような真似をしている時点で、貴様の居場所は地上にはない。貴様は先ずその事をしっかりと理解すべきだな」

「そのような説教をする為に儂をこのように縄で縛り上げて跪かせているのか。何と狭量な男じゃ」
「ハッ。貴様が何を言おうが所詮は負け犬の遠吠えに過ぎん。痛痒にも感じんよ。今からする質問に答えて貰おうか。……屑、何故文聘達を見捨てた?」
「何じゃと?」
「何故文聘達を見捨てて門を閉めた?」
「奴は儂を逃がすと口にしたにも拘わらず、戦で負けそうになって居った。何が『我が命に代えても道を開いて見せます』、じゃ。大言壮語するだけで何の役にも立たなかったわい。己の役目を果たせなかったからには、死ぬのは当然のこと。だがそれに儂が付き合ってやる義理は無かろう。じゃから門を閉めさせたのじゃ」
「貴様……」
「ほ。怒って居るのか。貴様が殺したも同然じゃろうが!貴様が攻めてこなければ、文聘は死なずに済んだであろうに。敵に同情して自己満足を計ろうというのか?とんだ偽善者じゃな、貴様は。何が『天の御使い』じゃ。狭量な上に偽善者とは、恐れ入ったわい」
「俺の事はどうでも良い。だが、文聘達は貴様の為に戦い、そして死んでいったンだよ。それに対して何も思わんのか、貴様は」
「……そうじゃのぉ。どうせなら自刎などせずに最期まで戦って一人でも多くの平家の郎党共を道連れにして逝って貰いたかったの。それであったなら、奴の妻を殺すこともなかっただろうに。残念ながら子は見つけることが出来なかったが、従子は殺してやったわい。……孫堅には劣るがの、奴の妻も中々の味であったぞ?」
「……この下衆がぁッ!」
教経が階を駆け下りて、劉表を足蹴にした。もの凄い勢いで。もの凄い強さで。そのまま劉表を蹴り続けて居た。暫く蹴り続けた教経は、多少落ち着いたのか蹴るのを止めて劉表を睨み付けている。肩で息をしながら。

「屑ッ！貴様のような屑を裏切ることもせず最後まで忠義を貫いた人間に、なんてことをしやがったッ！」
「……ほほ。化けの皮がはがれてきたの。貴様は抵抗できない人間に一方的に暴力を振るう、最低の人間じゃな。それで良く人が付いてくるものじゃて。周囲の者は皆お前の今の行動を快くは思わぬのではないかの」
「それで俺を見限るなら見限ればいい！俺は貴様の様な屑が大嫌いなンだよッ！」
「何とまぁ感情的な男じゃ。ただの餓鬼ではないか」
「それがどうした！屑よりは遙かにマシだろうが！これ以上貴様のような屑と話し合う事はない！今すぐ殺してやる！」
「ほほ。縄で縛り上げ、抵抗できない人間をか！大した男じゃな！ハハハハハハハハッ！」

狂ったように笑う劉表の背後に、雪蓮達が立っていた。

「……そうね劉表。でも貴様にはその死に様が相応しいわ！」

蓮華様が剣を抜きはなって、後からその背中を切りつける。

「な、何を……」
「……死になさい。貴様のような屑は死ぬより他ないのよ！」

続けて雪蓮が、その胴に向けて剣を一閃させる。

「き、貴様ら、恥というものを知れ！」
「恥知らずが何を言うか！」

蓮華様がその腕を切り落とす。

「む、無抵抗な人間を……」
「いい加減五月蠅いから死んで貰えないかしら」
雪蓮がその首を斬り飛ばす。
「……屑。テメェに抱いている、この胸糞が悪くなる程どうしようもない感情を、全部テメェに呉れて遣るよッ……！」
教経が清麿を抜き放ち、何度も何度もその胴を斬りつけている。いや、切り刻んでいる。
とてもではないが、私の目では追うことが出来ない。だが、劉表の体に付けられていく傷が、教経が剣で何度もその体を斬りつけていることを如実に示している。
「屑ッ！屑野郎ッ！このドカスがぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！」
首を刎ねられた劉表の体が倒れるまで、ずっと教経は斬り続けていた。劉表の体が床に倒れた時、その体は最早原形を留めぬ程に切り刻まれていた。
「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」
「……教経」
「はぁ、はぁ、っはぁ、はぁ、はぁ……ふぅー……大丈夫だ……悪かったな、雪蓮、蓮華。一人で盛り上がっちまった」
「良いわよ。見ていてすっきりしたし」
「気にしなくても構わないわ。仇を討つことは出来たのだから」
「……他の人間も済まんな。俺は縛り上げられた無抵抗な人間を斬り殺すような男だ。愛想が尽きたなら言ってくれ」
「教経様。誰一人そんな事は言わないと思います」

愛紗のその言葉に、皆頷く。私も当然頷いた。

「……済まんな。少し頭を冷やしてくるよ」

教経はそう言い残して広間を出ていった。

最後まで反吐が出そうな戦だったが、これで揚州は平家のものとなった。

後に残るは南蛮、そして麗。

諸葛亮が何を考えて居るかは知らぬが、平家が揚州を落としたことで彼我の立場は逆転することになる。これより先は、時間の経過は平家を利するのみとなる。時間をかけて居ては平家を討ち滅ぼすどころか、自分たちが滅ぼされてしまう。優位に戦を進めたければ、此処で勝負をかけてくるより他には途はないだろう。

これが教経相手でなければ、戦を優位に進めることに拘らず、時間をかけて兵馬を養った上で決戦に臨むが上策。だが、教経相手にそれは下策。教経は、多くの異民族と友好関係にある。ゆっくりと時間をかけて兵馬を養う事など出来はしないのだ。実際に戦をするに当たっても、平家軍だけでも手に余りそうであるのに匈奴や羌、テイ、そして羯に鮮卑が平家に合力する可能性は極めて高い。

彼らは弱肉強食の世界に生きる者達だ。その目から見た教経は、絶対的な強者としてこの世界に君臨しているように見えるだろう。自分たちに利益を与えて続けてくれる限り、強力な軍を率いる、強烈な君主である教経の心証は良くしておいた方が良い。彼らは教経が平家の主である限り、これに従うだろう。

……相手には運の悪いことだ。

天命は我らにこそある。あとはそれを逃さぬように、教経に天下を掴ませるだけだ。

私がその天下を描いて見せようではないか。

この周公瑾が知謀の全てを賭けて、な。

2017

蝶の如く～１４９～（前書き）

お久しぶりで御座います。
これからも時間が掛かるとは思いますが、最後まで頑張りたいと思います。

蝶の如く～１４９～

～蓮華　Ｓｉｄｅ～

終に母様の仇である劉表を、この手で殺すことが出来た。此処まで長い道のりだったけれど、漸く母様に報告することが出来る。劉表は、私が想像していた以上の屑だった。義に悖っているだけでなく、仁さえも欠いた、最低の人間だった。ああいう人間がこの地上から消え失せたというだけで、世界が綺麗になったのだと錯覚してしまう程に醜く、そして憎らしい存在だった。

劉表をこのように殺すことが出来たのは教経のおかげだ。冥琳や思春に聞いたところに拠れば、文聘達が自刎して果てたあの日の内に攻城の指示を出せなかったのは、姉様と私の為に、劉表を自分の手で殺してやりたいという感情をねじ伏せようと苦労していた為だったらしい。

主君であるのだから、自分に殺らせろ、と命じて私達を控えさせることも出来るでしょうに。結局劉表の首を刎ねたのは姉様で、教経は倒れていく劉表の体を何度も斬り付けたに過ぎない。やはり、私達を立ててくれたのだと思う。本当に良く気を使う男だ。

その教経は、劉表を処分した後広間を後にしていた。……戦が終わったら話をしよう、と言っていたのに、忘れてしまったのだろうか。城内を探してみたが居なかった為街まで出てみて捜してみたが、それでも教経を見つけられなかった。

どうしても今日、教経と話をする必要がある。それも、二人きりで。……亞莎に先を越されたのは正直意外だったが、まだ我慢できた。けれど、思春にまで先を越されたとあってはもう黙って居られない。

私の自惚れでなければ、教経は私のことを憎からず想ってくれていると思う。教経が再び宛に還ってしまう前に、はっきりさせておきたい。恐らく、私達は揚州の押さえとしてこの地に留め置かれるに違いないのだから。

日没まであと僅かというところまで探し続けた努力が徒労に終わり、諦めて帰途についた私の目に、城壁の上で景色を眺めて居る教経らしき人間の影が映った。

……やっと見つけたわ、教経。

「教経、此処で何をしているのかしら？」
「……蓮華か。蓮華こそどうしたンだ？」
「戦が終わったら話をしようと言っていたでしょう？忘れていたの？」
「……い、いや。忘れる訳が無いじゃないか」
「……今の微妙な間は何だったのかしら？」
「気のせいじゃないか？」
「そうかしら？」
「そうだ。大体俺は訪いを入れる、と言ったはずだぜ？」
「……まあいいわ。それで、此処で何をやっていたの？」
「文聘に従って死んだ奴らのことを考えていたンだよ」

私達の視線の先には、北門がある。きっと教経は、文聘達の最期の様子を思い返していたのだろう。現地に居た明命は、教経は目を逸らすことなく、逆にその目に焼き付けるかのようにずっと彼らを見

ていた、と言っていた。

教経の目には、彼らはどう映っていたのだろうか。

「……ねえ、教経」

「ん？」

「文聘達は、そうやって死んでいって満足だったのかしら。劉表が死姦が好きなだけの屑で、ただ単に恐ろしくて堪らなかったから門を閉めたのだとしたら。それなら彼らも仕えた君主が悪かっただけだと、そう思えたかも知れないのに。あれでは普段からあんな感じだったのでしょう。そんな奴だと分かっていて、それでも死を選んだ彼らは、あそこで死ぬことを納得して、満足して死んで行けたのかしら。

……私には、正直無駄死にをしたようにしか思えないのだけれど」

教経を見ると、教経はいつの間にか目を瞑って物思いに耽っているようだった。

何と答えるのだろうか。

「……無駄死に、か。

だがなぁ蓮華。あいつらは劉表の為に死んだンじゃない。俺が思うに、奴らは自分の矜持を汚さぬ為に、死を選ぶしかなかったンだろうよ。俺に許されて門前に馬を繋ぐような真似をすれば、奴らは自分の矜持を失うことになっただろう。荊州劉家の将としての矜持と、その将に従う兵としての矜持をねぇ。奴らは文字通り命を懸けて、それを護ったんだよ。奴らが決して譲れぬものとして思い定めていたのは、その命ではなくその矜持だったって事だ。主君があぁだった以上、今までその矜持を拠り所にして生きてきたンだろう。その矜持を失うってのを考えられない生き方をしてきたから、死ぬしかないと考えたに違いないンだよ。

確かに奴らは無駄死にかも知れないが、護りたかった矜持を護り通したンだから、未練は残っても悔いはなかっただろうさ。……俺としては生き長らえて貰いたかったがね。矜持も何もかも、命あればこそだと思うから」

肩をすくめながら、教経はそう答えた。

「……無駄死にだけど、彼らにとっては意義ある死だった、か」
「事実はどうか知らんがね。俺がそう思っている以上、それが俺にとっての真実だ」
「貴方にもそういう部分があるのかしら？」
「譲れないものか？」
「ええ」

教経にとって譲れないものとは、一体何なのだろうか。
平家の棟梁としての誇りだろうか。一箇の武人としての矜持だろうか。

「ん～……人との繋がり、かなぁ」
「人との繋がり？」
「あぁ。もし俺がこっちに来たばかりの時星達三人に出遭わなかったら、きっとこうは成っていないだろう。もし雪蓮が俺に従ってくれなかったら、もっと人死にが出ていたことだろう。今この現状があるのは、皆が居てくれたおかげだ。
縁があった。そう思う。俺はその縁を大事にしたいと思ってる。だからそれらを護る為なら、命を張っても良い」
「……姉様と冥琳だけじゃなく、亞莎と、そして思春にまで縁があったみたいだしね？教経」
「……ここでそう来ましたか」
「そう来ましたか、じゃないわよ」

「そういう意味で縁って言った訳じゃ無いんだよ」
「どうだか」
「俺が言った縁ってのは、当然蓮華との縁だって含んでるぜ？」
「でも姉様達との縁とは違って、そんなに深い縁じゃないわ」
「やたら拘るねぇ、お前さんも。何だ？妬いてるのか？」
「……」
「お、おい、蓮華？」

教経の言葉に詰まった私に、少し焦って声をかけてくる。

「……妬かれるのは、迷惑？」
「そんな事はないが……本当なのか？」
「嘘を言ってどうなるものでも無いじゃない！」
「そう興奮するなって。折角の美人が台無しだろうが」
「そ、そんな言葉に惑わされる私ではないわ」

び、美人。美人だなんて……

「……まぁ、何も言うまい」
「そ、そんな事より教経。迷惑でない、というのは本当？」
「本当だよ」
「……それなら、それを証明して見せてくれるかしら」

そう言った私に教経は『どうやって？』と聞き返すような野暮な真似はせず、こちらにスッと近付いてきて私を抱き寄せた。

「……これだけ？」
「……今は、な。雪蓮がニヤニヤしながらこっち見てやがるし」
「ど、どこ！？」
「ほれ。中庭にある、あの木の上の辺りをよく見てみろ。桃毛が揺

れてるだろうが」

顎をしゃくられた先を見ると、一瞬だけだが、確かに姉様らしき人物が居たのを確認できた。折角良い雰囲気になったと思ったのに、邪魔をするなんて。

……姉様？私達、少し話をする必要があるみたいだわ。

「……蓮華。落ち着け」

「私は落ち着いているわよ？」

「その割に剣呑すぎる雰囲気だが」

「教経の気のせいじゃないかしら」

「そうならどれだけ気が楽か……」

「問・題・無・い・わ・よ・ね？」

「はい！ありませんッ！」

にこやかにそう言うと、直立不動で問題無い旨回答してきた。

私は最初から落ち着いているというのに。おかしな教経ね。

「で、教経。私にはこれだけなのかしら？」

「……蓮華、その言葉の意味するところ、きっちり理解しているんだろうな？」

「意味するところ？」

「そりゃお前さん、俺に抱かれたいって言ったも同然なんだぜ？」

「……私では駄目かしら」

「むしろ俺で良いのかと訊きたいね。蓮華だって知ってるだろ？俺には……」

「他に何人も情を交わす女がいる、でしょ？そんな事は承知の上よ。それでも貴方が良いと思うわ。貴方と居れば、私は私らしく居られるから。ありのままの私で良いのだと、そう気付かせてくれた貴方だから貴方が良いのよ」

私がそう言うと、教経は言葉を継ごうとして口を開きかけて、直ぐに止めた。私が戯れにそう言っているのではないことを察してくれたのだろう。

「……はぁ。夜に部屋に訪いを入れるから、それまで待っててくれ。ちゃんと蓮華の気持ちに応えに行くからさ」

「本当？」

「本当だ」

「……じゃあ証明してみせて」

「……んっ……これでいいかね？」

「……え、ええ……」

「じゃぁまた後でな、蓮華」

思春や亞莎にまで先を越されて少し余裕が無くなっていたとは言え、少々はしたなかったかしら。けれど、教経は嫌がるような素振りは見せなかった……少し何かに怯えていたような素振りも見せていたが。だから多分、これで良かったのでしょう。

2025

夜。

教経は約束通り私を訪ねてきてくれて、そして私は教経に抱かれた。教経と確かに一つになっていることをしっかりと感じる事が出来、最後には私と教経とが一つに融け合うような、そんな錯覚さえ覚えた。

「……華。おい蓮華、大丈夫か？」

「……大丈夫よ」
「気ぃ失って大丈夫って言われてもな」
「大丈夫よ。心配してくれて有り難う、教経」
「本当に大丈夫なんだな？」
「ええ」
「……それなら良いンだが」

抱かれていたのは覚えているけれど最後の最後に失神してしまったらしく、気が付くと教経の腕の中に居た。

「蓮華、可愛かったぜ？」
「……恥ずかしいことを言わないで」
「どうして？可愛かったと言っているんだから良いじゃないか」
「そういう問題じゃないでしょう！」
「はいはい」

腕の中にいる私に優しく微笑みかけながら、頭を撫でてくれている。

「……確かに心地良いわね」
「何が？」
「こうやって頭を撫でて貰ったのがとても心地良かったと思春が言っていたわ。……この手管で姉様も冥琳も亞莎も皆自分のものにしたのね」
「手管って……酷い女誑しのように聞こえるな」
「……自分が酷い女誑しだという自覚が無いようなら問題だわ」
「……誑そうと思って誑してる訳じゃない」
「意図せずに誑し込む方が質が悪いわ」
「さいですか」
「……教経。誰か一人だけを贔屓になんてしては駄目よ？」
「……分かってるよ。皆それぞれに、同じように惹かれているんだ

から。自分でもちょっとどうかなとは思うけど、それでも良いと受け入れてくれているからこうなっているわけで。もし優先されたい、と思われても、それは諦めて貰うしかない。俺には出来そうにないから」

「それは良いわよ。出来るだけ機会が均等になるようにしているのは傍目からでも分かっていたことだし」

「そうか。それなら別に……」

「ただね？」

「んあ？」

「私も孫家の女よ。……我が儘なのよ？私だって、ね」

「雪蓮にも同じ事を言われた気がするなぁ……」

「それなら覚悟しておいてね？この件に関しては、貴方に責任があるのだから。我が儘、一杯言わせて貰うから」

「……それが蓮華の甘え方なら全部受け入れるさ。けど、要求を呑むかどうかは別だぜ？」

「なによそれ。少し酷くないかしら？」

「酷くはないだろう。どんな我が儘言われても、蓮華のことを好きでいられると思うよって言ったつもりなんだが。ありのままの蓮華を、全部ひっくるめて受け入れる、とねぇ」

「……本当？」

「冗談でこんな事言えるかよ」

「私のこと、好き？」

そう訊くと、少し照れくさそうに顔を背けて、『さっき言ったろう』とか言って明言しようとしなかった。

「ねぇ教経。ちゃんと聞かせて欲しいわ」

「……好きに決まってるだろうが。……言わせんなよ、恥ずかしい」

恥ずかしい、か。

結構可愛いところがあるわね、教経は。

「私も好きよ、教経」

その晩はずっと、教経に我が儘を言い続けていた。何だかんだと文句を言いながらも、ちゃんと私の我が儘には応えてくれた。

これからも、しっかりと私の我が儘には付き合って貰うから。普段私が周囲には見せることもない我が儘な部分は、貴方に。貴方だけにちゃんと受け止めて貰うから。

宜しくね？教経。

～教経　Ｓｉｄｅ～

「お帰りなさいませ、教経様。無事のご帰還、お慶び申し上げます」

「あぁ。想定通り順調に事が進んで楽だったよ」

揚州を平定後、雪蓮との約定通り揚州を雪蓮達孫家に任せることにした。色々と大変だろうが、きっと上手くやるだろう。兵も動員した内の７万は揚州に留めてある。揚州でどの程度人が集まるか分か

らないが、集まったら徐々に中央へ兵を戻させるつもりだ。

「……教経。戻ってきた中に詠が居ないようだけれど？」

「……気が付くのか、そこに」

「当然ね」

「……南蛮の情報を集めるのに、交阯まで出向いて情報収集に当たってるよ。もうじき還ってくるはずだ」

「成る程ね。交阯ならば物資の交流もあるでしょうし、南蛮の内情についてより現実に近い情報が得られることでしょう」

「……相変わらずしっかり読んでくれるねぇ」

「あら、読まれたくなかったのならもっと複雑に、わかりにくく動くものよ？」

「ケッ……で、どうしたンだ華琳。お前さんが態々出迎えに来たんだ。何かあったンだろう？」

「久々に貴方に会うのだから、出迎えくらいするわよ。まぁ、今回は貴方が言った通りで用があったからなのだけれどね」

「何だ、その用ってのは」

「それは風から説明するのですよ」

「ただいま、風」

「お帰りなさい、なのですよ。お兄さん」

「で、用って何だね？」

「紹介したい人が居るのです」

「紹介したい人？」

「付いてくれば分かるのですよ」

風はそう言って先を歩き始める。

「早く来なさい、教経」

風の後を付いて行きかねていると、これまた先に歩いていた華琳か

ら付いてくるようにと声をかけられた。
……一体誰だってンだ？俺は風呂に入って寝たいンだが。

風と華琳に連れて行かれた広間で待っていたのは、男だった。態々俺に紹介したいというのだから、優秀な人間なのだろう。
風と華琳からは、今回華琳を調略するべく諸葛亮が目を付けて送り込んできた人間だ、ということを聞いている。勿論、平家の諜報員として既に働いていた人間であるということも。諸葛亮にとっては二重スパイだった事になる訳か。

良くやってくれた、と言って姓名を訊いたところ、返ってきたのは想像以上の自己紹介だった。

「お初にお目に掛かります、教経公。私は姓を司馬、名を懿、字を仲達と申します」
「……司馬八達ね」
「……確かに周囲の者達はそう言っておりましたが、よくご存じですな」
「まぁそれなりにはな」

司馬懿が俺の下にずっと付いていた、なんてのは全くの予想外だ。聞けば、優秀すぎたから却って召還できなかったということらしい。
……司馬懿が仕えてくれていたのなら、最初から言って呉れれば良かったのに。そうすればもっと楽が出来たはずだ。

まぁ、今はそんな事は良いだろう。

「上手いことやったらしいが、家族は無事だったンだな?」
「それは大丈夫でした。風様が手を打って下さっておりましたので、妻子は無事です。その御礼をさせようと、本日は伴ってきております。もし宜しければ、目通りを許して頂ければと思いますが」
「ああ、目通りは構わない」
「有り難う御座います。それでは呼んで参りますのでしばらくお待ち下さい」

妻子を呼んでくる、か。
そういえば、張春華って鬼嫁ってイメージがあるけど、実際どうなンだろうな?実物を見るのが愉しみだわ。

「目通りをお許し頂きまして有り難う御座います。司馬懿の妻、張春華で御座います。この度は私達を保護して下さり、誠に有り難う御座いました」
「娘の司馬師です。助けてくれてありがとうございました」
「おなじくむすめのしばしょうです。ありがとうございました」

嫁さんの張春華は、まぁその、アレだ。綺麗だし、非常に人好きがする笑顔を浮かべて呉れているがね。目がその、アレだよ、碧とか華琳とか、そんな感じの目をしているんだよねぇ……これは苦労してるンだろうねぇ……。ちょいと横目に司馬懿を見ると、苦笑いをしていた。他人事に思えないのは何故だろうか。不思議だ。
で、娘と言ったかね?まぁ、娘なんだろうねぇ……可愛らしいもんねぇ……司馬師も司馬昭も、将来はきっと別嬪さんになるだろう。

司馬師は早逝するんだったか？先生なり凱なりに見せた方が良いだろうな。流石に伊陟に準えられるような逸材が死ぬってのは見過ごせない。司馬昭はまだちょっと幼い様だが歴史を考えればこれも逸材に違いない。二人が死ぬようなことにならなかったのは本当に良かったと思う。

「こちらこそお初にお目に掛かる。平家の頭領をやらせて貰ってる、平教経だ。礼に関してだが、俺は何もしていないから礼を言われる筋合いはないと思うが」

「教経公の家臣である程？様が救ってくれたのであれば、それは教経公がなさったも同然でしょう？」

「……それなら、家臣の家族を保護するのは主君として当たり前のことだろう。改まって礼を述べる必要など無い。むしろ俺の方から詫びるのが筋だろう。迷惑をかけて済まなかったな」

「……大事をなす為なら家臣の妻子など気にかけられるべきではないのでは？」

俺に対して、司馬師がそう言ってくる。

成る程、マキャベリズムに走りそうな娘だな。その思想は正しいが、その正しさ故に人を遠ざけることになるぜ？将来はまだしも、若い内はそんな事を考えないモンだよ。

「救えるなら救った方が良いだろう。人間ってのはそう簡単に自分の感情をねじ伏せられる生き物じゃない。例えそれが必要な犠牲だったとしても、最愛の家族が死んでしまったらその要因となった人間、この場合は俺だが、それを恨まずにいられる人間なんてそうはいない。ましてやそれが救えるのに斬り捨てたとなれば一層憎らしく思えるのではないかね？

お前さんの親父は史上に名を残す程の人間だ。そういった人間を我から進んで敵に回すなんてのは阿呆のすることだ。俺は自分を英明

だとは思わんが、阿呆ではないつもりだ。そして司馬懿の子供であるお前さん達が優秀なのは『知って』いる。生かしておいた方が良いに決まってる。それがこれだけ可愛らしい娘なら尚更に、ね」

「……将来自分の為に尽くさせる為に恩を売っておく、ということでしょうか」

「尽くさせるにしても相手が生きていないと始まらない。先ずその選択肢を確保しておくに越したことはないだろう？」

「確かに、効果的だとは思います。恩なり好意なりを感じるのは間違いないですから」

「見え透いているからその通りに感情を誘導されるのが気に入らないのかね」

「そうです」

「これ！」

面と向かって気に入らないと肯定した司馬師を、司馬懿がすかさず窘めた。

「いや、良い。

……司馬師。別に俺の思い通りにならなければ良いだけだよ。そう肩肘張るモンじゃない。放っておけばいいじゃないか。自分を思い通りに動かせると思ったら間違いだ、と心で思っておけば良いだけなんだからねぇ」

「……」

司馬師に対して思ったことを言ったが、フイッと顔を背けてしまった。どうやら拗ねたらしい。……この年頃の娘が何を考えて居るのかなんて全く分からん。

右頬を指で掻いていると、司馬懿が助け船とばかりに嫁さんに娘を連れて退出するように勧め、場の雰囲気を察した嫁さんも完璧な礼

儀を以て挨拶して二人を連れて行った。

「……申し訳ありません」
「構わんよ。正直吃驚したけどな。年いくつだ？」
「師は１０、昭は７になります」
「１０であれだけ物を考えられるのか。凄いな」
「それを言うと、風様や郭嘉様、華琳様などは恐らくもっと早い時期からあの様であったと思いますが」
「……この世界の出来る女ってのはみんな早熟だってのか？」
「まあそうです」
「はぁ……大変そうだな、お前さん」
「……教経公に比べればそれ程でもないかと思いますが」
「……その話はおいておこうか。
兎に角、今まで良くやってくれた。望みの官職はあるか？お前さんが望むなら大抵の地位は呉れて遣るが」
「では側で仕える事が出来る立場において頂きたい」
「国政で辣腕を振るいたい、とか思わないのか」
「むしろ戦場に出てみたいと思いますが」
「戦場に、ねぇ……まぁ良いだろう、考えておく。他に何かあるかね？」
「いえ。私からは特にありません」
「なら今日の所は下がってくれ。俺は疲れてるからとっとと風呂に入って寝たいンだ」
「はっ……では風様、華琳様、ご武運を」

司馬懿は場違いな発言をして下がっていった。これから出陣するわけでもないのに、いつ武運を必要とするのだろうか。司馬懿も恐妻からのプレッシャーで疲れていたからよく分からない事を言ったのかも知れない。カカア天下な家庭を持つと大変だねぇ。

「さて、お兄さん？今日は風と一緒に過ごすのですよね？」
「そんなはずないでしょう風……教経？留守を預かった私を労ってくれるのよね？」
「……身の程を知らない女は見苦しいですよ？華琳ちゃん」
「……あら。私と教経は写し身のような存在なのよ？私が優先されるべきだと思うのだけれど？」

振り返って見ると、風と華琳がにこやかに談笑していた……そう、にこやかに。もの凄く胃が痛くなりそうな、そんなイイ笑顔だった。
『第一次教経大戦』とでも言えばいいのかこれは。熾烈な女の戦いが繰り広げられている気がする。
この二人の間に飛び込む勇気は俺にはないし、風と華琳とどちらが相手を負かすのかにも興味がある。此処は静観の一手だ。……静観した結果、後日痛い目に遇いそうなのは気のせいだと思いたい。

「華琳ちゃんは分かっていないのです。風はお兄さんの一番の想い人なのです。恋文を貰ったのは風だけなのですから」
「あら。教経に『お前は俺のものだ』と宣言されたのは私だけのようだけれど？」
「それは言葉の綾というものなのですよ。お兄さんが言いたかったのは、華琳ちゃんを屈服させるのは自分だ、ということであって、女性としての華琳ちゃんを自分のものにするのだ、という意味ではないのです」

おぉ、流石は風だ。しっかり俺が言いたかったことは理解してくれている。

「……そんな事はないわよね？教経。貴方は私のことを掛け替え無く思っているでしょう？」

感心していると、華琳がイイ笑顔でこっちを見ながらそう言ってきた。
そんな事はあるんだが、掛け替え無く思っているのはその通りだ。
一応頷いておく。そうでないとヤヴァイ事になると本能が告げている。

「ふふっ。ほらご覧なさい？教経は私を欲しているのよ」
「気のせいなのですよ、華琳ちゃん。お兄さんを上手いこと誘導しただけなのです。お兄さん自身に否定されるのが怖かったから、否定されないように問いかけたのですね？……曹孟徳も可愛らしくなったものなのです」
「なっ！」
「それに、華琳ちゃん？華琳ちゃんは風に借りがあるはずなのですよ」
「……借りなど無いわよ？」
「……仲達さんの家族を保護したのは風なのですよ。風が保護しなければ、仲達さんの家族は死んでいたに違いないのです。華琳ちゃんだけであれば、どうなっていたか分からないのですよ」
「それはそうかも知れないけれど、だからどうしたというの？」
「……もしそうなっていたらお兄さんはきっと悲しんだに違いないのですよ。つ・ま・り！華琳ちゃんはお兄さんを悲しませるような結果を出そうとしていたわけです。そうならなかったのは風のおかげなのです。華琳ちゃんの為にやったことではないとは言え、借りは借り。これを返さないままで居る事を、華琳ちゃんはきっと心苦しく思っているに違いないのですよ。だから此処で風に借りを返させてあげようと申し出ているのです」
「う……」
「という訳でお兄さん。今日は風の番なのですよ」

どういう訳かは分からんが、風が華琳をやり込めたようだ。風に腕

を引かれながら広間を後にする俺を、華琳は悔しそうに、口をぱくぱくさせながら見ていた……何々……『お・ぼ・え・て・な・さ・い・の・り・つ・ね』……何故俺がきつく当たられなければならないのか、全く理解出来ないねぇ……。

「……お兄さん、風と一緒に居る時は、風のことだけ考えて居ればいいのですよ？」

「……はい」

……胃の辺りがキリキリと痛む中、何故だか先程まで目の前に居た司馬懿を思い出していた。奴とはいい友人になれそうな気がした、そんな一日だった。

蝶の如く～１５０～

～詠　Ｓｉｄｅ～

荊州で教経と別れたボクは、交阯で南蛮に対する情報を収集した後宛へ戻ってきた。
南蛮の情報については、正直よく分からないと言うより他ない感じだった。別に南蛮でどういう政治が行われているか分からないという話ではない。王である孟獲に対して全く不満を持っていないらしい事は分かって居るし、今まで外征してこなかったことから見ても排他的ではあるがむやみやたらに攻撃的であったりはしないと思われる。。経済で言うと物々交換が主流、というよりは物々交換のみ行われており、貨幣は用いられない。物を売りに行った商人が、商売にならなかったとぼやいていた。そこまでは良い。
ボクが分からないのは、軍について。交阯にいた兵や素行の悪そうな連中から訊いた話。『猫のような格好をした子供が複数走ってきて、気が付いたら叩きのめされていた』とか、冗談としか思えない。密林の中を行軍中に襲われたということもあり、はっきりと相手を確認したわけではないとのことだったが、殆ど全ての人間が、アレは子供だったと証言している。頭を強く打たれすぎたんじゃないの？
ただ同時に、冗談や錯覚に過ぎないと言い切ってしまうのもどうかと思っている。今まで具体的な話が一切聞けなかったのに、交阯ではその内容は兎も角も具体的な話が聞けたのだから。現状、南蛮軍についての諜報活動は霧中を手探りで進んでいるような状況だ。見て居ないものを自分が信じられないからという理由であり得ないと決めつけることは良くない。ただでさえ見通しの悪い霧中を自ら目隠しをして歩くことと同義なのだから。ボクとしては、ボクが集めた情報を教経に全て報告して判断を仰ぐより他にないと思っている。

宛に帰還して自室で教経に報告する内容を纏めていると、風から話があるから広間に集まって欲しいとの連絡があった。風がこんな形で声をかけてくる以上、何か大きな謀があるに違いない。一体何の話だろうか。

「詠ちゃん、待っていたのですよ」

広間に行くと、現在宛にいる平家軍の主要な将がほぼ全て集まっていた。いつも高順と共に行動している?忠が、姉の横で参加していることがボクの目を引いた。

武官の参加者は、星、愛紗、琴、霞、雪蓮、百合、?忠、白蓮、華琳、春蘭、秋蘭。
文官からは、風、ボク、冥琳、雛里、吉里、桂花、司馬懿。

錚々たる面子が此処に揃っている。これでまだ、宛に居る全ての将が集まった訳ではないのだ。宛に居ない人間も含めて考えると、本当にとんでもない面子だと思う。その全てが仲睦まじいというわけではないし、それぞれがその胸に抱いている理想もまちまちだろう。だがその全ては、教経というたった一つの個性によって纏まっている。

初めて顔を合わせる人間も多く居たようで、最初は互いに真名を交換したり、これまでの経歴を話したりして交流していた。

「……こうやって全員が顔を揃えると、改めて平家、というか、教経はとんでもない人間だって思い知らされるわ」

そう独りごちたボクに、星が寄ってきて話しかけてくる。その後には冥琳も居るようだ。

「詠よ、今更何を言っているのだ。主の器量が優れていることなど、とうに分かっていただろうに」

「まあそう言うな、星。此処に集まっている人間を見れば、誰もが我が目を疑うに違いないだろう。この国に生きる才在る者の殆どが、一堂に会していると言っても過言ではあるまい」

「冥琳の言う通り、確かに目を疑うだろうな。碧、月、雪蓮、華琳、そして一応私。碧や月は兎も角、それぞれ勢力の長として平家と一戦交えたことがある人間が、それぞれ目的を果たさんとして教経に従っている。一勢力ならまだしも、五勢力の主を臣従させている訳だ。

例えばだけど、この戦乱が始まる前の華琳や冥琳に、先を知る者として私が面会してこの状況を説明しても、『あり得ない』の一言で終わってしまうような状況であることは間違いないよ」

「まぁそうでしょうね。まさか自分が教経に抱かれたりするとは思っても見ないでしょうから」

「華琳はそうかも知れないけど、私は共存できそうだと思っていたし、案外驚かないと思うんだけど？」

「……そう思ったから敢えて雪蓮じゃなくて冥琳と言ったんだけどな、私は」

「あ、成る程。意外に人を見る目があるのね？白蓮」

「もっと早くに色々と気が付いて居れば良かったんだけどな」

皆と談笑していると、風が階を登っていつも教経が座っている椅子の前まで移動して話を始める。

「皆静かにするのですよ。今日集まって貰ったのには理由があるのです。白蓮ちゃんが言った通り、嘗て勢力の主だった人間全てに集まって貰った理由が。お兄さんの独占を目論見ながら表面ではその素振りも見せずに牽制し合う、メス豚共の社交場を設ける為ではないのですよ」

「め、メス豚云々はおいておくとして……勢力の主、と言うことであれば、碧と月が居ないのでは？」

「それは大丈夫なのですよ、愛紗ちゃん。稟ちゃんと碧さんからは書状を貰っていますから。と言うよりも、その二人の連名で提案されたことについて話し合う為に、皆にこうやって集まって貰ったのです。月ちゃんからは、その内容に賛同する旨既に連絡を受けているのですよ」

「……それは何なワケ？」

「二番煎じのボクっ娘は気が付いて居るのではないですか？勿論、ボクっ娘の嚆矢たる詠ちゃんも」

「誰が二番煎じよ、誰が……気が付いて居るというか、此処に居る全員がその方向で動くのは分かってるんじゃない？僕はそう思うけどな」

そうでしょうね。ボクとしても、一旦落ち着いたこの時機にやっておいた方が良いと思うことがある。

「詠ちゃんはどうですか？」

「分かるわよ……正統性を確保してしまおう、ということでしょ？」

「……何の？」

「アンタだって分かってるでしょ、百合。……アイツが、教経が天下を統一する為には、最後に残った袁家を外交で従わせるか、武力でねじ伏せるか、何れかの方策を採る必要がある。そして教経は、恐らく力でねじ伏せる事を選ぶわ。

月も白蓮も華琳も煮え湯を飲まされているし、そして何よりアイツ自身が袁家を目の仇にしているから。そうでないと何かにつけて袁家の領内に対して物心両面で謀略を仕掛けたりはしないでしょう。とことん引っ掻き回す類の策で、かつ相手の領民のことはさほど考えて居ないわけだし、先ず間違いなく叩きのめそうと考えて居る。外交で従わせようとするなら、相手の領民に厭戦の雰囲気を蔓延させることが必須よ。それを行わないのだから、きっとそうするでしょう。

そうなると、大義名分が必要よ。ここまでの戦や謀略によってその地力を削いできたとは言え、現状で膠着させようとすれば膠着させることが出来るだけの底力を袁家は有していると思うわ。もしも、それで構わないと領民が思い始めたら。領民達の中で、教経が『自分たちに幸せをもたらしてくれる偉大な領主』から『平地に無用な乱を求める非道な領主』に転落することになるかも知れない。そうさせない為に、袁家を相容れぬ物として武力で征伐する大義名分が必要なのよ。つまり……」

「……平王朝樹立」

「……そういうこと。これを行う事には利点と欠点があるけど、この場合は樹立してしまった方が良いと思うのよね」

「？……秋蘭、皆何の話をしているのだ？」

「姉者、もう少しだけ様子を見よう」

「？ふむ」

「……誰もその役目を担いそうにないから私がそれを演じてあげるわ。……詠。あの全身白濁破廉恥漢が王朝を樹立する利点より、欠点の方が大きいと思うのだけど？」

「それは何ですか？桂花ちゃん」

「漢の正統は禅譲によって成立した麗が受け継いでいる、と人は思うわ。それと敵対しているから、という理由で勝手に王朝樹立を宣言するのは、袁術のように偽帝と呼ばれるのではないかと思うのだけど？別に私はあの男がどう呼ばれようと構わないけど、華琳様が

そんな屑に仕えている不明の君だと言われるのは耐え難い屈辱だわ」
「詠ちゃんはどう思いますか？」
「それはボクが思うに利点になるのよね」
「……」
「……桂花ちゃん、最後まで演じないと意味がありませんよ？」
「分かってるわよ！……ったく、どうして私がこんな分かりきったことを訊かなければならないのよ……何故それが利点になるのよ？」

心底嫌そうに桂花がそう訊いてくる。
……それならその役割を自分から担おうとしなければいいじゃない
……

「……麗王朝の首脳は、身の程を弁えずに王朝樹立を宣言した、偽帝・平教経を認めることは出来ない。つまり、外交によって屈服させることが出来なかった場合、力によって屈服させるしかないのよ。教経を外交で屈服させることが出来ないのが間違いない以上、戦によって教経を討伐しなければ新王朝の威信に傷が付くことになるわ。それに、もしそれをせずに袁家を討伐しようとすれば、平家と袁家のいずれが漢王朝の正統を継ぐ資格があるのか、という点について争うことになる。それを教経が行うのはちょっと無理があるしね」
「……反董卓連合の折、教経は皇帝を洛陽に放置して長安に去った。その教経が『正統を継ぐ』などと言う資格はない、と言われるだろうな」
「その通り。だからこそ、皇帝として王朝を樹立することを宣言するのよ。漢の正統だの何だのという余計な価値観を取り払って、袁紹と平教経という二人の人間の内、どちらが覇者として相応しいかを純粋な力で競い合う為に」
「ふんっ……分かってるわよ」
「此処に集まっている者で教経を皇帝として戴くことに反対する人間って居るのかしら？」

「……まあ居ないでしょうね。孫家を代表する貴女は賛成なのでしょう？」

「ええ。袁紹には死んでも従いたくないけれど、従うのが教経なら文句はないわよ。約定が守られる限り教経に従う、という約束だしね。教経が皇帝になろうとなるまいと、そんなことはどうでも良いわ。華琳だって同じように思っているんじゃない？」

「私は皇帝になろうとなるまいといずれでも構わないとは思っていないわよ？」

「どういうこと？」

「教経は皇帝にならなければならないのよ。アレが理想としている世の中を現出させようとするならば、絶対的な権力が必要よ。劇的に社会構造を変革するには、絶対的な権威と権力を有する存在が必要になるわ。

そして人一人の人生程度の時間では、その全てを実現させることは出来ないかも知れない。平家の領内では殆どの民がその治世に満足しているけれど、教経はそれを継続するつもりがあるという意思表示を明確に示す必要があるわ。抱いている理想を実現させる為の変革が継続されるという事を、教経が皇帝となって子を為すことで示す必要が、ね。

漢でも麗でも構わないけれど、丞相というものは一代限り。その後同じような治世が継続されるか否かは分からない。でも皇帝が国是として何かしらの方針を定めれば話は別だわ。教経が絶対的な権力を以て方針を定め、それを引き継ぐ者が居る、となれば、民達も安心するでしょう。

権力の掌握と民達への意思表示の為に、王朝樹立と皇帝即位は必要だと思っているのよ」

「白蓮様はどう思っているワケ？」

「私も教経が皇帝になることには賛成だよ。今この世の中で天下を争う勢力の主は、教経と麗羽の二人しか居ない。その片方が皇帝なんだから、それに対抗する意味でも帝位に就くことを宣言するのは

良いと思う。
第一、今まで教経がやって来た政や人材の登用方法、組織の組み立て方なんかは旧来のやり方を否定するものだ。旧弊を打破する人間が、旧時代を代表する漢の正統を引き継ぐと言う方が違和感が強いよ。真っ向から、旧時代を否定し新時代の幕開けを宣言するのに、帝位に就くのは一番有効だと思うよ」

月、碧、雪蓮、華琳、白蓮。各勢力（派閥？）の長が、全員教経が新王朝を樹立することに賛成している。まあ、改めて訊くまでもなく、皆賛成するだろうとは思っていたけど。

「……ねえ、風。皆反対しないと言っている訳だけど、態々集まって確認しなくても、明日教経の前で話をして帝位に就くことをアンタが要請すれば良かったんじゃないの？」
「詠ちゃん。問題は風達臣下にあるのでは無いのですよ」
「……どういうこと？」
「その場にいた詠ちゃんは知っていると思いますが、お兄さんは必要なら王朝を開いてやる、とはっきり言いました。但し、その『必要』という言葉は、お兄さんが自分の理想を追い掛けるのにどうしてもそれが必要になったら、という意味であって、周囲がお兄さんを帝位に就くことを望んだ結果として生じる『必要』のことでは無いのですよ。
お兄さんは、自分がそうしたいと思わない限りそうしないでしょう。幾ら風達がそうして貰いたいと言っても、言うことを聞いてくれない可能性が有ります」

……確かに、教経にはそういうところがあるかも知れない。その利点や必要性を理解していても、『他人に強制されている様な気がする』という理由で意固地になって断る様なところが。

「……要するに私達から教経に強く要請をしろ、と言っているのね？風」

「華琳様。それは風様が先に仰られたことと相反しているのではありませんか？それでは教経公は断る可能性が有るとのことでしたが」

「そんな事はないわ。いきなり教経の前で話をされたら、皆『まあ、良いのではないか？』程度の反応になるでしょう。今この場にいる人間が抱いている温度も、その程度のもののようだしね。それでは教経は動かせない。

だから、月、碧、雪蓮、白蓮、私。嘗て一箇の勢力の主であった人間が、教経に対して新王朝の樹立を正式に要望する形を取るのよ。その上で、麗羽と武力によって雌雄を決する為にはどうしても必要なことだ、ということを風が教経に言えば問題無いでしょう。教経からしてみれば、自分の望みを果たす為にも周囲の人間の要望を満たす為にも必要なことである、ということになるのだから」

「成る程。逃げ道を無くしてしまおうという訳ですな」

「端的に言ってしまえばそういうことなのです。その為に、皆に集まって貰ったのですよ」

「じゃ、後日教経にどういう形で話を切り出すか、考えましょう？早いほうが良いでしょうけど、纏まっていないうちに話を切り出したところで上手く行きそうにないし、細部まで詰めた上で話をしましょうか。ま、わたしは教経にそれを勧める役目を担うだけで、どうやるかについては冥琳達に任せるけど」

「ではまず最初に……」

此処に居る全ての人間が風の言葉に耳を傾ける。ボク達の要求に対して、教経がどういう反応を見せるか。如何にして望ましい反応を引き出すかについて、皆で話し合った。

さて、教経はどうするのだろうか。

～教経　Ｓｉｄｅ～

風から、改まった話がある、と言われて向かった広間には、宛にいる全ての将が集まっていた。俺の護衛についているダンクーガ以外の全ての将が。

凄い光景だな、これは。

元の勢力毎に分かれて、俺の前に並んでいる。孫家の列が寂しいが、雪蓮と冥琳以外は全て揚州にいるのだから当たり前か。公孫家も四名しか居ないが、これも益州と荊州に分かれているから仕方がない。曹家の面子は全て揃っているだけあって、流石の威圧感だ。

皆俺が入室したのを確認して跪拝する。

「呼ばれてきてみれば随分と大仰なことになっているじゃないか」

「それはそうなのですよ、お兄さん。これから真面目なお話がある

のです」
「真面目なお話、ねぇ……」
言われて皆の面を眺める。
星や雪蓮は相変わらずの様子だが、平家では？忠がカッチカチに緊張している様に見える。曹家では、凪が。公孫家では、雛里が。孫家は二人しか居ないが二人とも普段通りに見える。
「で、何だ？エラく緊張している人間が居る様だが、そんなに大層な話なのか？」
「人によっては大層な話なのです」
「勿体振らずにさっさと言って呉れよ、風」
「では話をさせて貰いますね。お兄さん、帝位に就いて下さい」
「……は？」
「帝位に就いて下さい」
「何でまたそんな事を言い出すんだ？」
そう言った俺に、雪蓮が話しかけてくる。
「簡単な話よ。教経がわたし達に約束してくれていることが、ずっと守られるという保証が欲しいのよ」
「……俺が約定を破る、と？」
「そうは言ってないでしょ？教経が死んでしまったら、どうなるか分からない、というだけよ」
「俺が死んだ後？」
雪蓮に聞き返すと、華琳が割って入ってきた。
「……教経。貴方が善政を布き、約定を守ることについては誰一人疑わないと思うわ。民もその殆どが貴方を信頼している。でも、そ

れでは少し弱いのよ」
「弱いってのはどういう意味だ？」
「不安を覚えざるを得ない、ということ。貴方が現状善政を布いているからこそ、人は貴方にその治世がこの先もずっと、貴方が死んでしまった後も続くであろうという証を求めるのよ」
「だから帝位に就け、か？だが、俺に子が出来たとして、その子が俺と同様の政を行うかどうかなど分からんだろうに」

抗弁した俺に、今度は白蓮が話しかけてくる。

「確かにそうだと思うよ。でも、お前がどう思うかというのはこの際意味がないと思う。民がどう思うかが問題なんだ。そして民は、お前が至尊の冠を戴き、お前の血が後世に受け継がれることこそが、後々まで自分達の生活を保証してくれると考えるんじゃないか？」
「……何故そう言い切れるンだね？」
「歴史を見れば民というものがそういうものだってのは分かるだろう？自分達を保護してくれる、強力な権力者とその支配体制の継続を求めるものなんだから」
「ふむ……確かにそういうものかも知れないが、他人が要求するから帝位に就く、というのは少し気に入らないな」

その言葉に、得たりやと司馬懿が応じてきた。

「教経公。教経公は袁紹と力でぶつかり合い、雌雄を決したいのではありませんか？」
「そうだが、それと何の関係がある」
「教経公が帝位に就けば、先方へ挑戦状を叩き付けることになります。それも、挑戦を受けぬという結論を出すことが出来ない形で」
「皇帝だから、か」
「そうですな。思い上がりも甚だしく、同格であることを声高に主

張してくる教経公を討伐しないことには、麗王朝の威光を示すことが出来ませんから」

「……確かにそうなるかもな。だが、俺が皇帝に『ならなければならない』という程のものかね」

「はい」

「何処にそれだけの必要性がある？」

「教経公は天下を統一する、と仰っておられますな」

「そうだ」

「失礼ながら教経公。天下人となるのであれば、ある程度は己というものを殺すべきです。無論、絶対に受け入れられぬ事を受け入れろ、という訳ではありません。風様や星様、華琳様など教経公のお側に仕える方々や、平家の領内に住まう民達の要望に応えるだけの度量があって然るべきではないか、と言っているのです」

「む……」

「別に皇帝になったからと言って、今とすることが変わるわけではありません。手に余る仕事などは私を始め多くの臣下に振ってしまえば構わないでしょう。必要なのは、今貴方が帝位に就く事によって、天下にその決意の程を知らしめることです。

……平家は、旧弊を打破し新時代を築くつもりであるという事を」

「……此処に居る全員が、同じ意見なのか？」

「同じ意見だからこそ、俺がこっち側に居るんですよ、兄貴」

「華琳様がそうしろと言っているのだから従え！」

「必要があれば王朝を樹立する、と言ってたじゃない。今がその時だと思うわよ？」

「御遣い君が何を考えて居るか知らないけど、臣下の期待に応えるのも主君の務めだと思うワケ」

皆の顔の上に視線を滑らせるが、誰一人この話に動揺している人間が居なかった。どうやら、きっちり打ち合わせをした上でこの話し合いに臨んでいるらしいな。

「……はぁ」
「どうしたのです、主？溜息など吐いて」
「お前さん達の計算通りの流れ、か」
「何を言っているのかよく分からないわね。確証があるなら見せてご覧なさい？」
「お前さんが勝ち誇ってそう言っていることが確証足り得ると思うがね」
「あら。誰もが確と目にすることが出来る形で見せて貰わないと、確証とは言わないのよ？貴方らしくもないわね、そんな妄言を吐くなんて」

全く。お前さんは口が減らない女だよ、華琳。

けどまぁ、司馬懿が言ったことは間違いじゃない。袁紹の馬鹿と俺の望む形で雌雄を決するには、皇帝即位が一番の策になるだろう。乗せられているのが気に入らないが、それもまた司馬懿が言う通りだ。天下を望むなら、自分の都合だけでは動けない。

「……是非も無し、か」
「お兄さん？」
「分かったよ。帝位に就こうじゃないか」

そう言い放つと、広間がざわめく。

「どうした？それを皆望んでいたのだろう？何を驚く」
「……もう少し愚図ると思って居たのだけれど、ね」
「愚図ったところで出る結果は変わらなかっただろう。その為に、皆で事前に打ち合わせをしたんじゃないのか？」
「……担ぎ出される覚悟は決まった、ということで良いのよね？教

経」
「まぁ担がれてやるよ、雪蓮」
「そ。それなら問題無いわ」
「……では、董卓、馬騰、孫策、公孫賛、そしてこの私、曹操の五名の連名で、貴方を皇帝に推戴する旨全国に宣言するわ」
「俺が帝位に就くと宣言するんじゃないのか？」
「貴方は担がれて帝位に就くのよ。ここから先、教経を裏切ることは許さない。そういう楔にもなるでしょう。何より、帝位に就くにしても手順というモノを踏むべきでしょうからね」
「二回断れ、か？」
「そうよ。そして最後には受け入れる。そういう形を取るべきよ。……にしても、よく分かったわね」
「俺ならそうするからな」
「ふふっ」
華琳は心底愉しそうに笑いやがった。

「ではお兄さん、然るべき手順を踏みますが、そういうことで良いですね？」
「逃げ場はないしな。皆が必要だというならその期待には応えるさ。それも頭領の務めだろう。……あまり勤勉な方じゃない俺には残念なことながら、な」
皆が一斉に跪拝する。

……幸いなことに、俺の前には轍が在る。権力という道を直走った挙げ句優秀な御者を失って暴走し終には横転した、『平家』という家が残した廃滅への轍が。
その轍を見ている俺は、同じ轍は踏まない。人をして心から頭を下げさせる事が出来るのは、徳だけだ。力では頭を下げさせることが

出来ても、内心何を思っているか分かったモンじゃない。社会ってのがごく少数の身内と圧倒的多数の他人で構成されている以上、他人の反感や恨みを過度に買わないように心掛けるべきだ。

平清盛。俺は、アンタの子供のようにはならない。驕り高ぶって家を滅ぼす基を創るような、阿呆にはねぇ。

蝶の如く～１５１～（前書き）

１８０話じゃ終わらない希ガス。

のんびりやっていきます、はい。

蝶の如く～151～

～教経　Ｓｉｄｅ～

帝位に就く、ということを宣言してから数日が経った。
月、碧、雪蓮、白蓮、華琳の5名は、俺に即位を要請する際の文章を考えて居るらしく、頻繁に書状を遣り取りしたり会合を持ったりしているようだ。

宛は、どこか浮ついた雰囲気に包まれている。恐らく誰も漏らしていないにも関わらず、将達の雰囲気に当てられたのか兵や民達は皆明るく躁がしい。民衆ってのは往々にして愚かだ。俺が生きていた時代でさえ、コントロールされた情報に思惑通りに流されて生きている人間ばかりだった。だが同時に、民衆は天意を読み取って時代の潮流を創り出しもする。それは歴史を振り返れば明らかだ。今の宛の雰囲気は、俺にとっては不吉な予感を感じさせないものであり、嫌な浮つき方じゃない。

その雰囲気の中を、魏越と歩いている。露天などで食い物を買って喰いながら、最近流入してきた民達が住み着いている区画を見回っているのだ。見回りがメインで、買い食いはサブだ。俺が言うんだから間違いない。そういうことにしておこう、うん。
ダンクーガと？忠は、俺たちに先行して見回っている。何があるか分からないから、先に行って掃除をしておくンだそうだ。真面目だねぇ……余程のことがない限りは殺されないと思うがねぇ……まぁ、そうしたいと言っているのだからそうさせてやればいいだろう。

「御遣い様。何処にでも元気の良い若人は居るものですなぁ」
「元気が良すぎるのも考え物だと思うがな」

「いやいや。元気がなければ御遣い様の役に立てませんからな。先ずは元気が大事です」
「お前さんに付きまとわれて延々御遣い様とやらの偉大さについて語られ続けるのに耐えるには、確かに元気が必要だろうなぁ……その全てを失うことになりそうだが」

その区画に、暴れん坊将軍様達がいらっしゃった。本当に暇な奴らだ。もっと他のことにその力を使えよ。将軍様方の輪の中心には見知った人間が二人。
……何故地和は後手に捻り上げられているんだろうか。そして瑛、お前さん、その汚いひげ面の横で何をやってるンだ？

「……新手のプレイか？」
「御遣い様、ぷれいとは何ですかな？」
「性癖を満たす為の行動って事だ」
「……奇特な趣味をされておりますなぁ」
「あー、教経さまだぁー」
「お、天和か。どういう状況だ？これは」
「色々あってちぃちゃんがあの人を怒らせちゃったみたいだよ？」

いや、俺が聞きたいのはその『色々』あった部分の詳細なんだが。これが天然って奴か。

「……簡潔な説明、どうも有り難う」
「別に良いよー」
「いや、礼を言っている訳じゃ無いンだが」
「……天和姉さんに皮肉は通じません」

後から話しかけられて振り返ると、人和が目の前に居た。相変わらずの眼鏡っぷりだった。いやぁ、良い仕事してますねぇ。

「相変わらずかぁいいねぇ……人和、代わりに説明頼めるか？」
「そ、それ程でもない……私達もその場に居合わせたわけではないのですが、ちぃ姉さんがあの男の人とぶつかったらしいのです。かなり強くぶつかったようで思わず強く罵ってしまったらしく……偶々この界隈を視察していた瑛様が仲裁に入ったのですが、ちぃ姉さんも相手も譲らずに互いを罵り合って。その内に引っ込みが付かなくなった相手側が実力行使に出た、という訳です」
「成る程。次女は口が悪いモンなぁ……というか瑛と面識あったのな。そっちのが驚きだわ」
「御遣い様。止めなくても宜しいので？」
「あぁ、止めようとは思ったンだが放っておいても大丈夫だろう」
「はあ」
「先行しているダンクーガと？忠が見逃すと思うか？奴らがこの辺に居ないって事は、何かしら考えて居るんだろう。どうするつもりなのか、お手並み拝見って所だな」
「そう言えばそうですな。では高みの見物と洒落込みますか」
「教経さま、ちぃ姉さんを助けて頂けませんか？」
「そうだよー、知らない仲じゃないんだし、助けてくれても良いと思うなー？」
「……助かるさ。ほれ、役者が揃ったみたいだぜ？」

そう言って屋根の上に顎をしゃくる。

「「え？」」
「待てぇい！」

周辺に声が響き渡る。周囲の人間は皆、声がした方を見やっている。
……まさか俺の真似をするとはねぇ、ダンクーガ。分かってるじゃないか。まぁ本人は蝶人・パピヨンが俺だとは気が付いて居ないだ

ろうが。

「な、何だ！？」

「行く手に危険が待ち受けようと、心に守るもの在るならば
例え命尽きるとも、体を張って守り通す
……人、それを『漢』という……ッ！」

「き、貴様何者だ！？」

「平家軍親衛隊隊長、高順！此処に見参！」

槍を抱え、瑛を押さえつけていた髭面をぶっ飛ばす。
……馬鹿な奴め。最終回じゃないと名乗っちゃ駄目なんだぜ？剣狼的に考えて。

「こ、高順殿」

「……怪我ぁないか？」

「わ、私は大丈夫ですが地和が！」

「ちょっと！やだぁ！」

「テメェ！こ、これが見えねぇのか？」

地和を後手に捻り上げていた男は、剣を地和の首筋に突きつけてダンクーガを牽制している。

「……あ～、ちょっと良いか」

「な、何だこの野郎！」

「人質抱えて凄む時は周囲、特に後に気を付けた方が良い。大将がそう言ってたよ」

「テメェ、何を……」

「おい」

「あぁ！？……ウボァ！」

後から近付いた?忠が、男の後から声をかける。その声に反応して後に振り向いた男を、力一杯殴りつけた。……痛そうだな、あれ。

「口を利く前に動きなよオッサン」
「え?」
「もう大丈夫だ」

?忠が地和の体を引き寄せて声をかける。
流石の地和も普段通りには行かないようだ。端から見ている限りではしおらしい。その地和を後ろに庇う形で?忠が立ちはだかる。

ダンクーガも瑛を後ろに庇いながら、暴れ者たちを牽制している。

「テメェら、何してくれてやがる!」
「やっちまえ!」

ダンクーガの登場に呆気にとられていた人間が正気を取り戻して次々に襲いかかる。彼らを殺しても構わない状況であれば容易く鎮圧できるだろうが、問答無用で殺すわけにもいかない。手加減をして鎮圧することが望ましいが、２０人程度の荒くれ者達に一斉に掛かってこられたら捌ききれないだろう。

「……仕方がないか。オッサン、ちょっと頼むわ」
「は?あ、み、御遣い様!どちらへ!?」

……やっときたか…この日が……この1年の間何度となく風邪との戦いを思い出したぞ。
私のただ一度の敗北!ゴミのような細菌に神が敗れたのだ!1年の間この辱めに耐えてきた。だが今日でそれも終わる。此処で華麗に登場してあの敗北がエロールの仕組んだ罠だったと証明し、この僅

かな瑕を拭い去って、完全な復活を遂げるのだ！

では、私の復活の舞台へ！

屋根の上に上がって下の様子を窺う。オッサンが加勢しているが、相手を抑えるには到っていない。それどころか、離れて成り行きを見守っていた天和と人和まで巻き込まれている。

……本当に仕方がない奴らだ。そう軽く思っただけだったが、違和感を感じて再度目をやる。何だ？何に違和感を覚えたんだ？俺は。

まぁ良い、兎に角今は助けに出ようじゃないか。

「待てぇい！」

「またか！？」

「戦いの空しさを知らぬ愚かな者達よ。

戦いは愛する者を助けるためだけに許される。

その勝利のために我が身を捨てる勇気を持つ者……

……人、それを『英雄』と言う……！」

「な、何者だ貴様は！？」

「貴様らに名乗る名前などないッ！」

天和と人和ににじり寄っていた阿呆共を薙ぎ倒し、二人を後に庇うように暴れ者共との間に割り込む。

「大丈夫か？」

「え、あ、はい……」

「うん、大丈夫だよー」

「それは良かった」
「て、テメェ、パピヨン！何で此処に居やがる！？」
「チッチッ、『パピ☆ヨン☆』。もっと愛を込めて！」
「いいから答えやがれ！」
「やれやれ。もっと余裕を持った方が良いな、武藤カズキ。俺が此処に居ることを問い詰めるより前に、周囲にいる無粋な奴らを叩きのめすのが先なんじゃないのか？」
「チッ……パピヨン、手を貸せ！」
「力を貸してやろう。感謝して敬え」
「一気に行くぞ！」

ダンクーガ、？忠、オッサンが一斉に敵に掛かって行く。
こっちはこっちでやらせて貰う事にしよう。先ずは状況の確認だ。

天和を見る。酷い怪我をしている様子はない。頬をはたかれたのか、少々腫れている様に見えるが。
人和を見る。酷い怪我をしている様子はない。……怪我はしていない。そして、眼鏡もしていない。眼鏡！眼鏡をどうしたンだ！？

天和達が絡まれていた辺りに、眼鏡が転がっていた。レンズにヒビが入った、眼鏡が。先に感じていた違和感の正体はこれか！
……俺を本当に怒らせたな……？

「変態！思い知らせてやるぞ！」
「……思い知るのは貴様らの方だ。俺の大切なものを傷つけた貴様らには、それ相応の報いを呉れて遣る」

最初から全力だ。眼鏡の仇を取らせて貰おうか。

「思い知るが良い、天の怒りを！」

一気に距離を詰めて、鞘で殴る。兎に角殴る。思い切り。手当たり次第に。
一人。二人。三人。四人。
……俺の前で眼鏡を破壊した不届きな奴らを成敗していく。

「こっちも負けていられねえ！？忠、オッサン。分かってるだろうな！？」
「任せとけよ！」
「ガハハハッ！さっさと御遣い様に跪かんか！」

……あっちはあっちで順調らしいな。俺の周囲にいた馬鹿共は暫く起き上がることは出来ないだろうし、この辺りでおさらばするか。ダンクーガだけならまだしも、？忠とオッサンの三人で来られると面倒なことになるだろう。

そう思って移動しようとした俺の腕を、天和が掴む。

「凄いねー、わたし吃驚しちゃったよー」
「もうじき終わるから大人しく待っていろ」
「教経さまは何処に行くの？」
「ちょっとそこｍ……俺は蝶人・パピヨンだ」
「あの、教経さま。何故そのような格好を……？」
「……俺は蝶人・パピヨンだ」
「……分かりました。ではパピヨンさま、何処に行こうとされているのですか？」
「もうそろそろ終わりそうだし、俺の役目は終わっただろうと思ってな。平家の主も直に来るだろう。ここで待っていることだ」
「は、はあ……」
「ではさらばだ！」

危なかった。もう少しで正体がばれるところだった。気を付けないと拙い。

……にしても、完全に見抜いているかのような言動だったな。流石にそんな事はないだろう。普段着物を着ている俺と、この蝶・格好良いスーツを身に纏った俺とが結びつくことはないしな。それが結びつけられる奴は頭がおかしいに違いないのだ。

現場から一旦離脱して着物を着替えて再度合流する。

多くの暴れ者が後手に縛り上げられて連行されている。この後は魏越のオッサンの御遣いトークによって洗脳され、扱きに扱き抜かれることになるだろう。まぁ、ご愁傷様としか言いようがない。

ダンクーガ達はと捜してみると、心温まる交流をしているようだ。

「ったく前回といい、毎度騒動起こしてんじゃねえよ」

「ふ、ふんっ！ちぃが騒動起こしてる訳じゃ無いもんね！大体、助けるならもっと早く助けなさいよね！『もう大丈夫だ』じゃないわよこの馬鹿！死ぬかと思ったじゃないの！」

「うおっ……何しやがる！」

「アンタねえ！私が死んだらどうするのよ！『数え役萬☆姉妹』一の美少女であるこの地和ちゃんが死んでしまったら、アンタの上司も困る事になるんだからね！？」

「俺の上司ってことは……高順か。困ると思えないけどねえ……。第一、困っても別に構わないし」

「違うわよ！平教経よ！」

……呼び方については今更気にしないが、でかい声で俺の名前を叫ぶのは止めてくれないかね。

「……死なれたら困るのは間違いないが、『数え役萬☆姉妹』一の美少女ってのはどうかね？」

「お、兄貴。見てたのか」

「最初からな」

「大将、居たのか」

「途中からな」

「どっちよ！」

「どっちもだよ。ダンクーガ達のことは最初から見てた。お前さんと瑛が絡まれた後にここに来た。だから途中から居たと答えた。お分かり？」

「いちいちムカつくのよ！」

「ちぃ姉さん、落ち着いて」

「ちょっと人和、ちぃを止める前に其奴の物言いを注意しなさいよ！」

「駄目だよちぃちゃん。人和ちゃんは……ね？」

「て、天和姉さん！」

「……ふ～ん？」

地和が何やらニヤついた顔でこっちを見てくる。取り敢えずスルーしておこう。面倒臭いから。

横を見ると、瑛がダンクーガに礼を述べていた。

「あ、あの、高順殿。有り難う御座いました」

「ああ？別に気にしなくて良い。怪我してないよな？」

「はい」

「なら良かった。折角助けに入ったのに、怪我してたってんじゃその甲斐がないからな。女の子だし、一生ものの怪我をしてたら一大

事だしな。そんな事にならなくて良かったよ。そうなったらどう責任取った物か悩んだだろうしなあ……」
「せ、責任……ですか？」
「そう、責任。大将がよくそんな事を言ってるんだけど、俺には全然意味が分からないんだよ。アンタは分かるか？」
「い、いえ。分かりません」
「だよなぁ……」
「あの、高順殿。私の真名は瑛と申します」
「……真名、預けても良いのかよ、俺なんかに」
「貴方に受け取って貰いたいのです、高順殿」
「……そっか。なら有り難く預からせて貰うよ、瑛。これから宜しくな」
「は、はい……あの、高順殿。この後ご予定は？」
「ん？いつも通り大将の身辺警護だ。一応親衛隊関連の報告書類は？忠から報告が上がると思うけど、何か心配事でもあるのか？」
「い、いえ。そういう訳ではありません。お忙しいのであれば、構わないのです」
「？はあ。構わないなら良いんだけどさ」

……ダンクーガよ。お前さん、鈍いにも程があると思うんだが。ニヤニヤと瑛を見やると、少し照れくさそうに視線を外した。要するに、そういうことなんだな？ＯＫＯＫ、任せてくれ給え。

視線を元に戻すと、？忠と地和が何やら仲良く会話をしていた。

「べ、別に助けてくれなくても大丈夫だったわよ！」
「その割に泣きそうになってた癖に」
「五月蠅いわね！」
「ケッ、可愛げの無い奴だ。折角助けてやったっていうのに、礼の一つもまともに出来ないなんてねえ」

「う……」
「お前さんには望むべくも無いんだろうけど」
「……すかったわよ」
「はあ？」
「おかげで助かったわよ！ちぃ一人でも何とか出来たと思うけど、アンタが居たから助かったわ！……本当に一人でも大丈夫だったんだからね！？」
「……ほんっと、素直じゃないのな、お前」
「う、うるさい！一言多いのよ！黙って感謝されておきなさい！」
「成る程、感謝はしてるんだな」
「べ、別に私は……ッ！」
「はいはい、分かったっての。感謝されとくからさ」
「ふ、ふんっ。最初からそう言えばいいのよ」

あっちはまあ……よく分からんが、？忠は重度のシスコンだからしっかりし給え。

「ダンクーガ、？忠。瑛と地和達を送って行ってやれ」
「良いけど、大将の護衛はどうするんだよ」
「魏越のオッサンが居るだろ？」
「……まあ、大丈夫か」
「ガハハハッ。任せておけ！」
「マジかよ、兄貴」
「マジだよ、愚弟。送ってってやれ。強がってはいるが流石に命の危険を感じただろうし、今日ぐらいは面倒見てやれ」
「はぁ……メンドくせぇけど仕方ないか」
「この地和ちゃんに世話を焼けるなんて、アンタ幸せ者じゃない」
「……うわぁい、この世の幸せ独り占め出来て嬉しいなぁ～」
「……文句あるの？」
「……兄貴、やっぱ止めて良い？」

「疲れるのはお前だけで十分だからお前な」

面倒見とけっての。俺は嫌だ。疲れそうだし。

地和も、何だかんだで助けてくれた？忠が居た方が良いだろうしねぇ。

「じゃ、そういう訳で行ってこいや」

「了解」

「……了解ですよ」

「で、ではお願いしますね、高順殿」

「ほら、さっさと歩きなさいよ！」

わいわい騒がしく、それぞれが家に帰っていく。

視察に来たのに、全く視察できなかったな、おい。

「仲が良いねー。あんなちぃちゃん初めて見るかもー」

「……何故お前さん達は此処に居るんだね？」

「？」

「いや、『何を言っているか分かりません』とかありえないだろ？

地和と一緒に？忠に送られればいいじゃないか」

「えー。そんなの駄目だよー。瑛ちゃんは高順と、ちぃちゃんは？

忠と。なら私と人和ちゃんは教経さまと、だよね？」

「何がどうなってるンだ」

「ははあ、要するに、助けてくれた人が送っていくべきだ、と。そう言いたいわけですな？」

「そうそう。いいよね？ね？」

「あのなぁ……」

人和も何か言って呉れよ。

そう言おうとして人和を見ると、胸の前で両手を合わせてこっちを

見つめてた。
……オーケイ。要するに送って欲しいのね……

「……仕方ない。送って行ってやるよ」
「本当？やったね！」
「あ、有り難う……」

送っていくってだけでこれだけ喜ぶとはねぇ……まあ、いいか。

「じゃ、これから何処行く？」
「は？家に送っていくに決まってるだろ？」
「えー。お腹すいちゃったよー」
「ね、姉さん、駄目だってば」
「人和ちゃんだってお腹すいてるでしょ？」
「そ、そんな事は『グゥゥゥゥ』……」
「……」
「……」

今の、人和の腹の虫だよな？
……気まずい。オッサンの顔を見て、顎をしゃくる。

「……ガ、ガハハハ……も、申し訳ありませんなあ御遣い様。儂は腹が減ってしまって仕方がないのです」

流石はオッサン。伊達に歳は取っていないな。空気読めるなんて貴重な存在だぜ、この場では。

「ははっ、仕方ない奴め。頑張ったことだし、俺の奢りで飯でも食いに行こうか。何なら天和と人和も付いてくると良い」
「あー、うん。それが良いよね、人和ちゃん」

「……う、うん」

その日は宛で有名な中華飯店で四人で食事をした。
何故か店内にダンクーガと？忠も居た。それぞれが、二人ずつで。
相手が誰かは言うまでもない。

ダンクーガは俺に気が付かなかった。料理に夢中になっていたが、瑛の事をちゃんと相手できているんだろうな？そっちのテーブルから聞こえてくる声に、教育係というか、上司として恥ずかしい思いをさせられた。『この肉うめぇ！良く分からねぇけど兎に角うめぇ！』って何だよお前。もっと言う事あるだろうが。彦麻呂みたいに訳分からんこと言えとは言わないがな、もっと他にあるだろ？ちゃんとそれなりの物を、俺と一緒に毎日喰ってるだろ？それとお前、一応女性と一緒に居るわけだから、エスコートしなきゃ駄目だからな？心配でしょうがない。今度しっかり教え込んでおかないと駄目だな。

？忠は俺たちに気付くなりこっちに趨って来たが、地和の横を通り過ぎる際に足を出されて転けていた。……ご愁傷様だな、忠。そのまま何やら言われて、致し方なく、といった面持ちで席に着いていた。まあ、お前さんには良い経験だろう。重度のシスコン、克服できると良いな？多分、お前の理想とはかけ離れた相手なんだろうけどなぁ、地和は。人生、何事も経験だよ明智君。頑張り給え。

俺の方は、というと。
天和が酒を飲んで酔っぱらい、俺の腕に抱きついて来たり。人和がそれを止めようとして天和に引っ張り込まれ、真正面から俺の頭を胸に抱えるような態勢になって絶叫したり。オッサンが酒に酔っぱらって如何に俺が素晴らしいかを二人に語ったり。

エラい目に遭った。
あぁ？……まぁ、そりゃ確かに愉しかったよ。天和も人和も美人だし、飯は旨かったしな。

じゃあ何が問題なんだって？
華琳にその光景をしっかり見られてたんだよ。明日はな、覚えておきなさい、とやられてから初めて華琳と一緒に過ごす日なんだよ。
『この舞茸、もう要らないわよね？』とか言われて絶でカットされたらどうするんだよ……憂鬱だよ、憂鬱。

『平教経の憂鬱』ってやつか？
……およびでない？これまた失礼しました。

蝶の如く～１５２～（前書き）

なにこれ、甘い？

蝶の如く～１５２～

～華琳　Ｓｉｄｅ～

「さて教経。私には色々と言いたいことがあるの。何についてか、分かっているでしょうね？」
「ああ……華琳の胸が慎ましい件についｔ　へブッ！」
「……次はないと思いなさい、教経」
「……あい」

教経が宛に還ってきてから、初めて共に過ごす日。風に良いようにやり込められて、私こそが教経の一番であることを示すことが出来なかった。教経には、ちゃんと埋め合わせをする様に言っておいたのに。それを忘れて、風の言うがままになるなんて。私を優先しようとしないなんて。

「……それで、分かっているのでしょうね？」
「分かってるって……最近ちょっと便秘気味なんだｒ　グハッ！」

この期に及んで巫山戯たことを言うなんてね。貴方がそういう人間だと言うことは知っていたつもりだけれど、まさか自分の命が掛かって居る場面でそんな態度に出るなんて思いも寄らなかったわ。

「……今、冗談を受け入れられる程心が広くないのよ」
「……お前さん、それは普段からそうじゃないのか」
「分かっているなら止めなさい。いい加減にしないと、貴方の舞茸を切り落とすわよ？」

微笑みながらそう言ってやると、教経は蒼い顔をして何度も頷いて

居た。

「で、当然分かっているのよね？」

「……宛に帰ってきて一番にお前さんと過ごさなかったことについて、だろ」

「分かっているなら最初からそう答えなさい……女を増やして帰ってきた挙げ句に分かっていなかったら、切り落としてやろうと思っていたのよ？」

「悪かった……と言うのも変だと思うがね。華琳、寂しかったのか？」

「べ、別にそういうわけではないわよ。ただ、きちんと埋め合わせをすると言っていたのに、それを棚に上げるかのような態度だったのが気に入らないのよ。しかも、私を誘わないで天和達を誘って食事に行くなんて、本当に良い度胸をしているわよね、貴方」

「いや、アレは仕方なくだな」

「言い訳は聞きたくないわ」

「……華琳、俺にどうして欲しいンだ？言ってくれなきゃ分からないよ」

降参だ、と言わんばかりの身振りでそう言ってくる。

「今日と明日、私に付き合って貰うわよ？」

「明日も！？」

「誰とも過ごさない日なのでしょう？風がそう言っていたわよ？」

「いや、そりゃ確かにそうなんだが」

「……それとも、私と一緒に居るのは……嫌？」

「……はぁ。これも惚れた弱みか。分かったよ華琳。俺の負けだ」

「そ。其れならば良いのよ」

「ちょ……お前！今のしおらしいのは演技だったのか！？」

「あら。演技ではないわよ？立ち直りが早かっただけで」

「早すぎだろうが」
「早いに越したことはないでしょう？貴方と違って私は女なのだから」
「男で早いのが悪いのかよ」
「昼間から卑猥ね。皇帝になろうという男なら、言葉遣いにはもう少し気を付けて頂戴。仕える私の品性まで疑われてしまうじゃない」
「グッ……ああ言えばこう言う」
「当意即妙な受け答えが出来る家臣が居て良かったわね、教経」
「……」

完全にやり込めてやったわ。これで少しはすっきりしたわね。

「じゃあ教経、街に出るわよ？」
「……ケッ」
「もっと愉しそうになさい。私と一緒に居るのだから」
「知らねぇよ」

やれやれ。拗ねてしまったのかしら。本当、子供なのだから。

街に出て暫く歩く内に教経の機嫌も直り、二人で色々な場所へ行き、様々な事をして過ごした。二日を費やして、共に過ごせなかったこの二月程の空白を埋めるかのように。

「教経。どの下着が良いかしら？」
「……堂々と俺の目の前で着替えるなよ」
「その気が無さそうな言葉の割に、じっくりと私の肢体を見ている

気がするのだけれど？」
「そりゃお前さん、いきなり更衣室に連れ込まれて何かと思っていたらお前さんが着替え始めたからだな……」
「覗きをしようとしていたからでしょう？正々堂々と見れば良いじゃない」
「馬鹿だな華琳。こういうのは覗くことにこそ意義があるんだよ」
「馬鹿は貴方でしょう？で、どの下着が一番私に似合うかしら？」
「……これ、かなぁ……」
「……卑猥ね」
「だが、それが良い！」
「黙りなさい！こんなもの普段から履ける訳がないでしょう！？」

――――下着を買いにいってからかってやるつもりがからかわれたり。

「大盛況のようね」
「それだけ人和達の人気があるって事だろうぜ？」
「『人和』達、ね」
「何だよ」
「何でも無いわよ。そんな事より、ここから今すぐ逃げた方が良いと思うわよ？」
「へ？」
「壇上から地和が貴方を殴って欲しいと言っていたから」
「おいおい、洒落になってないだろうが！」
「だから速く逃げるわよ」
「分かってるっての！とっとと逃げるぞ華琳！」

――――天和達の舞台を見に行って二人で逃げ出したり。

「ちょっと、もっとそっちへ寄りなさい」
「これで限界だよ」

「無駄に大きな図体をしているわね」
「そう言うなよ。これで俺に密着していられる口実が出来たと思えば良いじゃないか」
「……そういう事は口に出す物ではないわよ？」
「……そう思っていたのかよ」
「うるさいわね。……ちゃんと私を抱えていなさい？」
「へいへい」

――――教経が考案した、街の中心にある公園で、二人並んで長椅子に腰掛けて肩を抱かれていたり。

「で、何故私ではなく天和達を誘ってこの店に来たのかしら？」
「だからアレは違うんだって。揉め事があったんで危ないから送って行ってやろうって時に、腹が減ったって言うから仕方なくだな」
「そんなもの、勝手に行かせておけばいいじゃない」
「とんでもなく我が儘だねぇ……お、これ美味いな」
「誤魔化すのは止めなさい……あら、本当に美味しいわね。ちょっとそこの貴方。これを作った人間を呼びなさい」
「呼んでどうするんだよ」
「作り方を教わるのよ」
「秘中の秘です、とか言われたら……？」
「流石に諦めるわ」
「……何となくだが、不穏な雰囲気を感じる言葉遣いだな？」
「気のせいじゃないかしら」
「……断られたら諦めるんだよな？」
「ええ。腕の二、三本は貰うでしょうけどね」
「……華琳、腕ってのは二本しかない。……というか、料理人が居るのが分かってて言いやがったな？華琳」
「あら。気付かなかったわ」
「お、教えて差し上げますので命だけは！」

「別に命を取ろうとは思っていないわよ？安心なさい」
「……紳士的な強盗ってやつじゃねぇか。やってることは結局強盗だっての」
――例の店で夕食を取って、教経が美味しいと言った料理の作り方を教わったり。
そんな風にして過ごしていた。
そして今は。
「華琳、あの下着、結局買ってたのな」
「似合う、と言っていたからよ」
「……まぁ、萌えたよ、うん、萌えた」
「燃えた？」
「何か違う気がするけど、まぁそれでもあっている気がするな」
「どっちよ」
「さあ？」
事が終わって寝台で教経に抱かれたまま、他愛のない話をしている。
「華琳が男にこんな風に甘えてくるとは思わなかったなぁ」
「貴方にこんなに餓鬼っぽい所があるとは思ってもみなかったわよ」
「嫌いになりそうか？」
「……分かっていて訊くのは止めて頂戴」
「そうか」
「嫌いになりそうなの？」
「……分かっていて訊くのは止めてくれ」
「そう。……皇帝になったら、ある程度人間関係にはけじめを付けなさいよ？教経」
「言葉遣いとかだろ？」

「ええ」
「……分かってるさ」

いつも通り、お互いに似たような事を似たような言葉で応酬し合う。料理のこと、お酒のこと、政のこと、戦のこと。教経の女性関係のこと、皇帝即位のこと、思い描く天下のこと。そんな事を止めどなく話し合っている内に、先程までの行為の余熱が冷めて肌寒さを感じた。教経の方でも少々寒さを感じていたようで、私を抱きすくめる形で抱きついて来た。

「なあ、華琳」
「どうしたの？教経」
「少し寒いんだよ。もうちょっとしっかり抱きついてくれ」
「……仕方ないわね」

……寒かっただけかと思ったけれど、どうやらそれだけではないみたいね。

皇帝になろうというのだ。それも、禅譲に拠らず実力に拠って。権力を持った自分が、今の自分から乖離して。
その自分から周囲の者が距離を取り始めて。
そうやって、自分は孤独になってしまうのではないか。そういう、漠然とした不安が教経にはあるのだと思う。でなければ、ああいう顔はしないでしょう。あんな弱々しい、柔らかいが寂しさを感じさせる笑みを浮かべないでしょう。

でもね、教経。貴方は一人ではない。いいえ、一人にはさせない。その為に私が居るのだから。私と貴方の立場が逆になっていれば、貴方はきっと私に同じ事を言ったでしょうね。だから、私も貴方に伝えてあげる。

「教経」
「何だよ」
「私は貴方を理解しているつもりよ。そしてこれからも理解し続けてあげる。貴方が皇帝になろうと、どれ程強力な権力を持つことになろうと、私だけは貴方と対等な存在であってあげる。貴方が間違ったことをしたら、頬桁を張り倒して諫めてあげる。貴方が傷ついてしまったら、癒してあげる。臆病になってしまったら、励ましてあげる。
……決して貴方を一人にはさせないわ。孤独なんて感じる暇がない程愛してあげる。だから教経？私のこと、ちゃんと大切にしなければ駄目よ？」
「……華琳」
少し驚いた顔をして私のことを見て、その後嬉しそうに目を瞑って薄く笑っていた。
『……有り難う、華琳』。
そう言って、私を柔らかく抱きしめていた。
仕方がないから面倒を見てあげるわ。
ずっと、ね。

蝶の如く～153～

～桃香　Ｓｉｄｅ～

平教経さんが揚州の劉表さんを討伐した。

その知らせを受けた麗羽ちゃんは、審配さんと逢紀さん、張コウさんを呼び出した。揚州での戦の詳細と今後の展望について、話をしたかったみたいだ。

「それで、審配さん。劉表さんが殺された、というのは間違いありませんの？」

「間違いありません。劉表殿を筆頭に、カイ良殿、カイ越殿の首が市に晒されていたとのこと」

そんな酷いことを、何故出来るのだろうか。

こんな世の中だ。戦で相手を殺すというのは仕方がない側面があると思う。けれど、晒し者にする必要は無いのではないか。自分に従わない者を惨たらしく殺す。そんな人が天下を治めようとしていることに、怖気を感じてしまう。私達は、何としても彼に勝たなければならない。そうでないと天下は恐怖に塗れてしまうから。

「……劉表軍が平家軍に与えた損害はどの程度だ？劉表軍の練度が低かったとは言え、まさか一人も殺せなかった等と言うことはあるまい？」

張コウさんの問いかけに、逢紀さんが応える。

「死者は2，０００に届かぬそうだ。負傷者が5，０００を少し越える程度。調べた限りではそれで間違いない」
「死傷者が1割、か。1会戦の結果であれば劉表軍もそれなりのものだと言ってやれるが、国を滅ぼされる過程にあってその程度の損害しか与えられないとは」
「審配、それは違うだろうな。どうやっても国が滅ぶような状況を招いて居る時点で、その程度の物でしか在るまい。期待することなど叶うはずもないのだから」
「……それもそうか」
「今更それを語っても致し方在りますまい。問題は、向後我らが如何に平家と対するか、というところでしょう」

その言葉を受けて、麗羽ちゃんが皆の顔を眺めやる。

麗羽ちゃんの表情は悲痛だ。それはそうだと思う。状況としてはまだ袁家の方が不利なのだ。曹操さんと戦い、負けた瑕が癒えていない。この状況で平家と戦うのは厳しい。私でもその程度の事は分かる。

「皆さんの存念を聞きましょう」
「……私としては烏丸を取り込んでみたいと考えております」
「烏丸を？どういう事が説明して貰えますか？審配さん」
「はっ。これまでも何度か共闘して参りましたし、幽州を荒らして回っていた者共は皆張コウに討たれました。袁家の力という物は十分に示すことが出来ていると思います。それに先の公孫賛討伐の際、田豊が態々朝廷に申し出て印綬を与え、単于に任じております。袁家に対して恩義を感じていることでしょうし、彼らを取り込むことによって疲弊した袁家の軍をある程度の水準まで回復させることが出来ると思います」
「成る程……逢紀さんはどうですの？何か存念があれば述べると良

いですわ」

「兵については今審配が言った通りで問題無いと思います。が、今最も気を付けるべきなのは、領内の物資の確保でしょう。間違いなく平家が糧食や鉄、塩などを買い付けており、その価格が上昇傾向にあります。このままではいざというときに購入しようとしても、十分な物資を集めることが出来ないかも知れません。ですから、ここは平家の領内の商人達から物資を買い集めては如何でしょうか。当然買い付ける際にはこちらの窮状を知っているでしょうから高く売りつけられることになりますが、背に腹は代えられません。平家が攻め込んできた際に、兵数が十分にあるにも拘わらず補給が出来ぬ為に満足に迎撃できない等という状況を招かぬ為には、今此処で袁家の余力を吐き出しておく必要があると思います」

審配さんが言ったことも逢紀さんが言ったことも正しい。私にはそう思える。それを行わなければ、勝ち目が薄くなってしまうだろう。二人とも頭が良い人だと思う。私ではそんな事は思いつかないから。

「……張コウさんはどう思いますか？」

「……そうですな。いっその事税率を下げませんか。このままでは来秋を無事迎えることが出来るかどうか分かりませんからな。迎えることが出来なければ袁家は既にないのですから気にする必要はないでしょう。来秋を迎えることが出来たならば、袁家を取り巻く状況は好転している筈ですから税率が下がっていても問題有りますまい」

「何を馬鹿なことを！」

逢紀さんが張コウさんに噛みつく。

「卿は私の話を聞いていなかったのか？ただでさえ物資が不足しているのだぞ？この上税率を下げたらそもそもの軍資金が底を突いて

しまうぞ！？」

「卿も俺の話を聞いていなかったのか？来秋を無事迎えることが出来ないかもしれない、と言っている以上、下げるのは秋の租税についてのみだ。年頭に行う税の徴収に関しては下げよとは言っていない」

「そのようなことをして何の意味がある！？」

「逢紀、落ち着け。

……張コウ、卿は何を気にしているのだ？」

「分からんのか。価格が高騰するのは物資が不足しているからだ。それは民が困窮していることを表している。気にしなければならぬのは、まず民の生活でなければならないだろう。せめて来秋からでも租税が安くなることを知れば、それを希望として耐えることが出来る。そうでなければ暴動が起こりかねない状況だと思うがね」

「暴動が起こるだと？」

「そうだ。平家の領民と袁家の領民の生活を比較すれば、平家の領民の生活水準の方が高い。租税も安く、物価が安定している。暮らしやすいのは平家の方だ。『我らも平家の領民になりたい』と民が思い、平家と対峙している最中にその後背に当たる地域の民が一斉に蜂起したら軍はどうなる。

俺はそんな状況で軍を率いて戦に赴きたくはない。だからこそ、そうならぬように租税を下げておいた方が良いと言っている。大体、俺なら間違いなくそう煽動する。相手は平家だ。奴らなら間違いなくやってくるだろう」

張コウさんの言葉に、審配さんも逢紀さんも押し黙っている。それがありうる、と考えて居るのだろう。それであれば、備えなければならない。張コウさんの言う通り、税率を、租税の率を下げるしかない。何より、租税が安くなるのは良いことだと思う。それだけ民の生活が楽になるという事だから。

「……分かりました。租税の率を下げましょう。但し、庸と調については下げません。それでは立ちゆかなくなりそうですか、逢紀さん？」

「いえ、租税の率だけであれば何とかして見せます」

「ではそのようにしましょう。平家に何か動きがあったら、また話をしたいと思います。今日は一先ずこれで解散とします」

「はっ！」

皆が麗羽ちゃんに跪拝する。勿論、私も。

状況は確かに思わしくない。けれど、皆で力を合わせて頑張っているおかげで、平家は袁家に攻め込むことが出来ていない。

ただ、朱里ちゃん、田豊さん、沮授さん。一度この三人を召還して、話をした方が良いのではないかと思う。曹操さんに打ち克つ為の策を考えた朱里ちゃんとそれを実行した二人なら、思いも寄らない策を考えてくれると思うから。

～霞　Ｓｉｄｅ～

経ちゃんを皇帝に擁立するという方針を確認してから初めての、経ちゃんと一緒に居る日。いつもとは違うて、経ちゃんはボーッとしとった。折角ウチと一緒に居るっちゅうのに失礼なやっちゃでホンマ。まぁ、いつも通り酒呑んどるだけなんやけど。

「ほら経ちゃん、何やっとるんや。折角ウチと二人でおるっちゅうのに、退屈なんか？」
「ンなこたぁ無いが……」
「ほな何でそんな不景気な面をしとんねん。折角の酒が不味なるやろ？」
「そんな不景気な面してるか？」
「しとるなぁ。どないしたんや？ボーッとしとったけど」
「ボーッとはしてない。ちょっと考え事をしてたンだよ」
「何についてや」
「……むぅ」

考え事をしとったと言うたから何について考えとったんか訊いたのに、経ちゃんは返事をしよらんかった。

「……女関係、やな？」

にこやかに訊く。
ホンマ、憎らしいなぁ？経ちゃん。

「はぁ……違うよ」

ちょっと溜息を吐きながら、そう答えよった。感じからすると、ホ

ンマに女の事を考え取るわけや無いみたいやな。

「……ほな何について考えとったんや？」

「国号をどうするかについてだよ。皇帝になって王朝開くってンだから、考えて置かなきゃならないだろ？」

「あ～、そう言えばそうやったな」

「……お前さん達が成れと言うから成るって側面もあるンだが？」

「あははは～、ウチらに担がれたんが運の尽きやで。大体、雪蓮にしても華琳にしても、経ちゃんが墜とさへんかったらこういうことにはなっとらんはずや。要するに、自業自得やで？」

「チッ……憎らしいねぇ」

「ほな気分転換させたるよ」

「おいおい霞、まだ昼だぜ？」

……この好色一代男は。昼間っから何を盛っとんねん。

「この阿呆！そうやない。遠乗りにでも出掛けようやって言おうとしたんや」

「何だ、そういうことか……だが外は寒いぜ？山には雪も積もっていることだし」

「そんなこと言わんと。気分転換して貰わんとウチがかなわんわ。一緒に居るウチの気持ちも考えてくれへんと困るで？」

「……まぁこのままこうやって考えていても埒があかんか」

「そうそう。ほな行こか？」

経ちゃんの腕を取って、厩へ引っ張って行く。

あぁ、断空我、？忠。先に行って準備しとって貰えるか？そうそう、前に言うとった場所に、前に言うとったもんを準備しとってや。それから、ウチらを邪魔せん程度に付いてきて警護するのは構わへんけど、邪魔したらどうなるか、わかっとるやろな？

経ちゃんと一緒に馬を走らせる。初めて見た時から比べると、経ちゃんの馬術は随分上達しとる。流石にウチ程上手くはないけどそこまで望むんはちょっと酷やろうし、星や愛紗と同じ程度に乗りこなせとる時点で十分やろう。

最初は寒がっとった経ちゃんも馬を追っとる内に体が暖こうなったようで、額に汗まで浮かべとった。

「経ちゃん、馬乗るの上手うなったなぁ」
「先生が優秀だったからねぇ」
「星から教わっとったんやろ？」
「そうだが、本格的に馬に乗るようになったのは反董卓連合軍と戦った時からだ。あの時は此処まで乗りこなせていなかったさ」
「ほな、月のおかげみたいなもんか？」

反董卓連合との戦に勝ってから、ずっと月が経ちゃんに馬術を教えとったからなぁ。ああ見えて月の馬術はウチよりも上や。それに馬上から左右に弓を持って同時に射ることが出来る。どうやっとるんか訊いた時、月自身も上手いこと説明出来へんでちょっと困っとったのは可愛かったなぁ。

「そうだな。月や碧、翠のおかげだろうなぁ。ただ、一番は霞のおかげかも知れないな」
「そうか？ウチはあんまり教えてやれてへんと思うけどなぁ」
「いやいや。月はまだしも碧も翠も、『ここでガーっと行く感じで

やるのさ』とか『えいやっっとやればこうなるからやってみろよ、ご主人様』とか意味不明なことを言ってきたからなぁ……」
「あぁ～、そういえばそれが原因でウチが経ちゃんに色々教えたんやったっけ」
「そうそう。論理的で分かりやすかったから正直助かったンだよ。あのまま碧と翠に教わってたら訳が分からなくなって、頭がこう、パーン！って感じに弾けたかも知れん」

顔の前に右手を持ってきて握ったり拡げたりしながらそうおどけてくる。

「アレは横で聞いとっても酷かったからなぁ……面白かったけど、流石に口出しせぇへん訳にもいかんやろ」
「そのおかげで随分上手くなったと思ってるンだよ。有り難うな、霞」

そう言って真っ直ぐウチのことを見つめてくる。

「そ、そか。……なんや面と向かって言われると照れるわ」
「相変わらずこういうのに慣れないねぇ」
「う、うるさいわボケ！すれるよりはマシやろ！」
「確かにな。ま、霞らしい」

そのまま馬なりで歩を進める。
さっきまでええ感じに日が出とったのに、もう傾き始めとる。陽気で大分溶けたとは言え雪が残っとるし、これから先の季節はもっと積もるに違いない。まだまだ春は遠い感じや。

「で、霞。何処まで行くんだ？日が傾き始めているようだし、そろそろ馬を返すか？」

「いやいや経ちゃん、お楽しみはこれからやで？どうしても経ちゃんと行きたいところがあってな。きっと経ちゃんは気に入ると思うねん」

「ふむ、どうしても俺と、ね。なら楽しみにして付いていくさ」

楽しみにしとくとええよ、経ちゃん。間違いなく、経ちゃんは好きやろうからな。

「お～、乙だねぇ」

「せやろ？気に入って貰えたか？」

「気に入るも何も、最高だぜ霞。極楽だわ」

「そかそか。そう言って貰えたらウチも連れて来た甲斐があるっちゅうもんや」

経ちゃんを連れて来たのは、山中にある温泉。湧き出た湯が川縁の岩で囲まれた窪みに溜まり、小川の水を少し入れてやるだけで丁度ええ湯加減になる。

経ちゃんが揚州に遠征しとる間暇で仕方がなかった時、今日と同じように遠乗りに出掛けて見つけた。断空我と？忠に先回りして用意して貰っとって正解やな。

「いいねぇ。露天風呂があって、酒があって、良い女が居て。言う事ぁ無いなぁ」

経ちゃんが上機嫌でウチを後から抱き寄せる。後ろを振り返って経

ちゃんに口付けして、また前に向き直る。湯の上に盆を浮かべ、その盆の上に酒を置いて。チビチビと酒を呑んどった。

「こういうのもええやろ？」
「あぁ、最高だねぇ」
「せやろ？風呂が好きな経ちゃんのことやから、きっと気に入ると思っとったんや」
「嬉しい心遣いだねぇ」

後から、ギュッと抱き抱えられる。ウチの右肩に顎を乗っけて。経ちゃんの左頬と、ウチの右頬がくっついて。何とも言えへん充足感が湧いてくる。

「なぁ経ちゃん」
「ん？」
「経ちゃんのこういうところ、皇帝になって変わってしもたら嫌やで？」
「エロいところか？」
「違うわボケ」
「ンじゃどういうところだよ」
「とっつき易いっちゅうか、付き合い易いっちゅうか。あんまり気取らへんところや」
「ハッ、そりゃ大丈夫だろ。地位が変わって好きな女との付き合い方が変わるとかあり得んよ。変わるのは肩書きだけだ。その肩書きで仕事をする時ならばいざ知らず、個人的な時間の個人的な人間関係にまでその肩書きを持ち込む奴は馬鹿さ。
皇帝と家臣としての場ではきっと皇帝として話をするし、そういう態度で臨むことになるだろうよ。けど個人的な時間にまでそれを持ち込もうとは思わん。俺と霞が一緒に居るのは、皇帝とその家臣だからじゃない。平教経と霞だから一緒に居るンだ。そこに肩書きの

価値なんぞが入り込む余地はない」
「……相変わらず真剣な顔で女を口説くよなぁ、経ちゃんは」
「口説いてる訳じゃ無い。俺は霞の問いかけに対して自分なりに応えただけだろうに」
「その応え方が問題なんやけどなあ……っちゅうても分からへんか、自分には」
「？」

ホンマに分かっとらんのやろうなぁ、経ちゃんは。

「へ……へ……ヘックショイ！畜生め！」
「うるさっ！耳元で何かましてくれんねん！」
「正直済まんかった。だが後悔はしていない！」
「後悔せぇっちゅうの！」

右肩を跳ね上げて顎を叩く。

「あがっ！……いってぇな霞。舌噛み切ったらどうするんだよ」
「自分が阿呆な事言うからやろ？それこそ自業自得っちゅうもんや」

経ちゃんに悪態を吐いとると、空からチラチラと雪が降って来よった。

「へぇ、雪か。そりゃ冷えてくるわけだ」
「綺麗やなぁ」
「あぁ」

そのまま二人とも何もしゃべらんと、酒を呑んどった。言葉を交わさんでも、何と無しに経ちゃんが何を思っとるんかは分かる。今だけは、ゆっくりしたい。何も考えずに、ゆっくりしときたい。そう

思っとるんやろ。

この時間は心地ええ。ゆっくりと時間が過ぎていく。

明日からはまた忙しくなるやろう。やる仕事が山程在るわけやない。経ちゃんは『皇帝』っちゅう新しい服を。ウチらは、『皇帝の家臣』っちゅう新しい服を。それぞれが色々と準備して、服が届いたらそれを着こなすのに苦労することになる。

「……そろそろ帰ろうか。雪の中で警護させるのも申し訳ないしな」

「せやな。帰ろか」

城に帰ってからウチの寝所で経ちゃんと共に過ごした。

……どうせするんやから、と思て折角サラシを取っとったのに、態々巻き直させるっちゅうのはどないやねんな。変態っちゅうんか？

まぁ、経ちゃんがウチに首ったけなんが感じられるからウチとしては別にええんやけど。

経ちゃんに腕枕されながら、訊く。

「なぁ、経ちゃん」

「何だよ」

「今日、ちゃんと気分転換出来たか？」

「あぁ」

「それならええんや」

「どうするか、気にならないのか？」

「気にならん訳やないけど、問い糾そうとは思わへんよ」

「……そうか」

まあ、好きにしたらええと思うよ、経ちゃん。ウチはアンタに付い

ていくだけやから。

その思いは言葉にせず、ただ経ちゃんに抱きついた。そのウチを経ちゃんは優しく抱いてくれた。

……きっと伝わったんやろな。

確信はないけど、多分そうやろ。嬉しそうに笑っとったし、な。

蝶の如く～１５４～（前書き）

ユニークアクセス数が、通算で１００万越えてました。
此処まで頑張って来れたのは、偏に皆様のおかげです。

今後とも、拙作を宜しくお願い致します。

蝶の如く～１５４～

～朱里　Ｓｉｄｅ～

陣屋の外は寒風が吹き荒んでいる。時にはそこに雪が混ざることもある。
本格的な冬がやってきたのだ。

平家に備えて滞陣することおよそ四月。そろそろ引き揚げ時だと思う。南蛮を牽制するに留めいきなり揚州に攻め込んだだけに、可能性は低いが二匹目の鰌を狙ってこちらに攻めて来るかも知れないと思っていたが、やはりそのような真似はしないようだ。

本当に厄介な相手だ。冒険する時は冒険する。手堅く行くべき時は手堅く行く。普通であれば、やはり傾向という物が出てくる。攻勢が好きな者は攻めに偏りがちだし、守勢に強い者はまず守った上で次の行動を考えるというように。

だが、平家にはそれは当てはまらない。

正攻法を好む者、奇策を好む者。
攻勢を好む者、守勢を好む者。
堅実さを好む者、博打を好む者。

そういった人間が提示する策から、平教経が最善と思われるものを選択し、家臣がその準備をして実行する。平教経の嗜好が戦略に色濃く反映されるのは間違いないが、それだけであれば揚州から攻める事はなかっただろう。

自分と異なる発想から生まれた策。

それを己の策より良いと認めることは難しい。また認めたとしても、それを採用することは難しい。己の才覚に自信を持っている人間程、己の才覚を越える才覚を有する他者に対して許容することを知らない。己が到らぬ所を痛感させられたことがない人間が、己より優れた他者を許容出来るはずもない。なぜなら、己に不足はないと感じているのだから。

しかし平教経は突出した才覚を有していながら、他者の才覚を生かし切れる人間のようだ。彼の真骨頂は、人を統べる器量に優れている点にあるのだろう。

そうであればこそ、この現状がある。

――この、如何ともしがたい、閉塞感をもたらす現状が。

石苞を使って行っていた曹操への工作は失敗に終わった。それと同時に石苞は曹操に捕らえられ、その家族は処断されたことになっている。そして家族を処断した幾人かの役人は領内から消えた。それとほぼ時を同じくして、揚州が平家の手に渡った。

出揃った事実を眺めて、初めて気が付いた。

私は最初から彼らの掌の上で踊らされていたに過ぎないのかも知れないということに。曹操は心服していない、という予断を持って事に当たっていた。それを前提とし、それが覆されることを思いもしなかった。揚州を攻めた平家の後背を、曹操を使って扼せるかも知れない。彼らは、その可能性を提示してみせることで、軍事的冒険に乗り出すことを決断しないように誘導して見せたのではないか。

たった一度、後れを取っただけだ。内心ではそう思って居る自分が

居る。いや、そう思いたい自分が居る。だが、後れを取った時機が悪すぎた。たかが一度とは言えない。この一度は、取り返しが付かない一度だ。ここから挽回するのは並大抵のことでは出来ない。

どうすれば平家の力を削ぎ、袁家の力を蓄える事が出来るのか。

それは――――

「失礼致します、孔明殿。少し宜しいでしょうか」

今後の展望について考えて居ると、田豊さんが陣屋の外から声をかけて来た。

何の話だろうか。

「構いません。中へどうぞ」

「それでは失礼致します」

中へ招き入れ、彼が一息吐くまで待ってから用件を尋ねる。

「どうしたのですか？田豊さん」

「平家の領内に放ってあった細作からの報告を纏めていたのですが、彼らはやはり南蛮を征伐した後に袁家を相手取ることを考えて居るようです」

「……そう判断した理由は何でしょうか？」

「はっ。平家家中についてですが、孫策、曹操、公孫賛の三名を中心として頻繁に会合を持っているようです。これが袁家に対する征旅の計画ではないかと疑って内偵を続けて居ましたが、此処に一度として平教経が参加して居ないのです。これまで、出征となると必ず彼の前で基本方針を定めた上で、文武の官が詳細を煮詰めて準備してきました。

これまでそうであったから今後もそうだとは限りません。この間痛

い目に遇ったばかりですし、一旦予断は取り払って考える必要があるのは重々承知の上で敢えて言わせて頂けますならば、それでもやはり彼を除いて征旅の計画を煮詰めるという事はあり得ないだろうと思うのです」

「……それだけが理由ですか？」

「いいえ。平教経が揚州征伐へ向かった際、宛から軍師の賈駆が彼に同行しておりましたが、建業陥落の際彼女は揚州にはおりませんでした。南蛮にいた工作員が帰還する際に、平家の細作と思しき人間が多数交阯から南蛮へ向かっていたのを確認しております。また交阯に元々放っていた細作は、賈駆が交阯にいたことを確認しております。十中八九、南蛮に対する内偵を行っていたに違いありません。

平家の文官の内、軍師として名の知られた人間が直々に調査を行って居たのです。前の事と併せて考えると次に向かうのは南蛮である可能性が非常に高いと思います」

「成る程」

そう一言だけ答えた。

確かに、理に適っている。田豊さんが今述べた理由だけでは今ひとつ説得力に欠けるが、では袁家に攻め掛かってくる可能性が有るのかと考えれば、そちらの可能性の方がより低いと言える。積極的に肯定することが出来ないのが何とも歯がゆいが、消去法に拠れば彼が言っていることの蓋然性は高いと言えるだろう。

「平家が南蛮討伐の軍を起こしたとして、我々がどう動くべきかについて孔明殿の存念を給わりたいと思っているのですが、披瀝して頂くわけには参りませんか」

「先ず田豊さんの存念を伺いたいのですが」

「……『どう動くべきか』存念を給わりたい、と言った手前でこう申し上げるのも如何な物かと思いますが、ここは動くべきではない

と考えております。袁家の力は未だ回復しておりません。此処で下手に仕掛けて平家の全面攻勢を誘うような事になれば目も当てられません。
ここは専守防衛に徹して下手に平家を刺激せず、南蛮討伐へ目を向けさせるべく策を講じるべきです」
「……成る程」
再びそう一言だけ答える。
但し、今度の返答に込められている私の思いは一度目とは異なるが。
その私の気色を察したのか、やや間を置いて田豊さんが問いかけてくる。
「どうやら孔明殿には私とは異なる存念がお有りのようですな。是非お伺いしたいものです」
「私の存念、ですか」
「はい」
真っ直ぐに私の目を見つめてくる。
彼の考えは間違ってはいない。だがそれでは緩やかに死に向かって行くだけだ。より時間が利するのは平家の方だ。時間が経過すればする程、平家との間に力の差を生じさせることになる。
主君の質も、将の質も、兵の質も。
領地経営も、謀略も、調略も。
その全てについて、元々平家は袁家に先んじていた。そしてここに来て、優位であったはずの量でもほぼ同等と言っても構わぬだけの状況を作り出されてしまった。時の経過は、平家をより優位に立た

せるだろう。こちらから何も手出しをせず力を回復することだけに専念した結果、雌雄を決することも許されぬ、そんな状況に追い込まれてしまうことになるだろう。

そうなっても負けぬよう策を施すことは出来る。

だが、それでは駄目なのだ。負けぬのではなく、勝たなければ。勝たなければ、意味がないのだ。勝って夢を叶える為に、全てを捨てて此処に居るのだから。

「……平家がこちらを攻めてくる可能性は確かに低いでしょう。ですが平家が揚州を手中に収めているこの状況では、時間の経過は袁家にとってより厳しい情勢をもたらしかねません。今のままの勢力図での時間経過は、袁家の衰亡をもたらすと言っても良いかも知れません」

私の言葉に、田豊さんが息を呑む。

「勿論、1、2年でそうなると言っている訳では有りません。が、5年10年と時が進めば、時代の潮流は袁家が衰亡する方に向いて居ることに気が付くことになるでしょう。そしてその時にはもう手遅れなのです。それに気が付いたその時にたった一つでも間違いを犯してしまえば、乾坤一擲の勝負に打って出る事すら許されぬ状況に陥ることになるでしょう。

政道を誤れば、反乱を招くかも知れません。また麗から逃散して平家の領地へ移り住む人間が出てくることでしょう。また小競り合いとは言え戦に負ければ、減少した袁家の兵を以て平家と対抗することは難しいでしょう。政戦いずれの場合も、一度でも誤りを犯せば先行きに全く希望を見出せない中で、唯々袁家の命数を引き延ばす為だけにあがき続ける事になります。

時代の潮流に気が付き、そのような重苦しい雰囲気に支配された袁

家の中に有って、袁家に精忠を捧げ続けることが出来る人間が果たして幾人いるでしょうか」

「……流石に恥知らずばかりではありますまい」

「はい、確かにそうでしょう。余程に上手く家臣を統制していたとしても、今貴方が言った通り、『恥知らずばかりではない』という程度でしかないでしょう。要するに、そこには確かに恥知らずが存在する訳です」

口を閉ざすと、陣屋を沈黙が支配する。

今この時こそが、先途である。その事を十分すぎる程に認識出来たようだ。

「……では孔明殿は」

「そうです。平家を攻めます。攻める事によって、あちらの行動を制約することが叶います。平家が南蛮に遠征するなら、その時に僅かなりともその領土を削り取り、少しでも時間の経過が袁家にとって不利に働かぬようにするつもりです。謂わば『西伐』を行おうという訳です」

「ある程度回復しているにしても、まだ完全に袁家の力は回復しておりません。そういった状況であるにも拘わらず、敢えて西伐を行おうというのですか？」

「今しか出来ぬ事であればこそ、今やろうと言っているのです。先程から言っている通り、時間が経過すればする程袁家は身動きが取れなくなっていくだろう、と思っているのです。ですが今ならまだ失敗は許されます。平家を攻めてその力を削ぐには、今をおいて他にありません」

「失敗が許されると仰いますが、何処に余剰の糧食や兵があるのです」

「有るではないですか」

「は？」

「烏丸と高句麗。烏丸については袁家に取り込むよう、調略は為してあります。高句麗についても、陛下が即位された際に朝貢にやって来ました。彼らを使役すれば、袁家は未だ平家を越えるだけの力を得ることが出来るでしょう」

「当てに出来ましょうか」

「烏丸は当てに出来るでしょう。高句麗は分かりませんが、それでも盾代わり程度は務まるのではありませんか？」

「……確かに」

「今すぐに、という訳には行きませんが、平教経が南蛮へ向けて出征した、と聞こえてきたら直ぐに対応出来るようにしておく必要があります。その為に、一度兵を返します」

「上手く行きましょうか？」

「上手く行かせるより他に途はありません。もう、そういうところまで追い詰められているのです。勝って天下を治めるには、此処が先途です」

「……仰る通りだと思います」

「……まあ、まだ少し先の話です。その秋を迎えた際に後れることがないように心構えをしておいて下さい」

「畏まりました」

話は終わったが雰囲気が重苦しい。

その雰囲気を変えようと、田豊さんが話題を変えて話しかけてくる。

「そう言えば、孔明殿はご存じですか？」

「何をでしょうか？」

「石苞とその家族が生きているらしいのです」

「……そうですか」

「何処で生きているのか、気になりませんか？」

「ならない、とは言い切れませんね。何処で生きているというのです？」

「……平家です。司馬懿と名乗っているようですが、その相貌は確かに石苞のものであったと細作から報せがありました。殺されたことになっている家族も、恐らく生きているのではないかと思います」

「……」

「……報復致しましょうか？刺客を放つなりして……」

「それはなりません」

「……何故です？」

「平教経に刺客を放ち、暗殺を試みたのは、それが天下を統一するのに最も効率的な策であったからであって、彼が憎らしくて堪らないからではありません。石苞とその家族に刺客を放つのはただの私怨です。無論、彼が平家においてかなりの権限を有する有能で有力な家臣であり、またその家族に将来有望な能臣になりうる者がいるのであるならば話は別です。彼を殺す事で、平家が現在企画している策謀を覆滅せしむることが叶うなら、刺客を放つ価値はあるでしょう。ですが、彼は一細作であったのです。現実的に考えて、彼にそこまでの影響力はありません。

それに、私は彼と約定を交わしました。例え調略が上手く行かなくとも家族の命は保証する、と。約定という物は、守らなければなりません。それが易々と破られるような世であればこそ、乱世になるのです。それを鎮めようという者は、先ず己が交わした約定を守ってみせねばならないでしょう。それでなくて、誰が約定を守ることを民に求める事が出来るのです？

だから私は報復などはしません」

「そうですか。分かりました」

田豊さんは明らかにホッとした顔をしてそう答えた。

私は、平家を攻めると言った。そのことで、私が冷静さを欠いたりしているのではないか、と考えたのだろうか。

「失礼致します！」

田豊さんに対して真意を問い糾そうとした丁度その時機に、陣屋の外から声をかけられた。

「何でしょうか？孔明殿」

「さあ、私にも見当が付きませんね……入って下さい」

「はっ！」

私が個人的に使っている細作が、陣屋に体を滑り込ませてくる。

「それで、どうしたのですか？」

「はっ……」

細作は、田豊さんを気にしているようだ。

「秘事を漏らすような人では在りませんから大丈夫です」

そう言った私に、田豊さんは頷いた。

「……では、申し上げます」

細作が身に纏っている空気は、非常に重い。

急かしたいところだが、此処で急かしても何も変わらない。彼が言葉を継ぐのを待つ。

「……馬騰・董卓・孫策・曹操・公孫賛の五名により、平教経が皇帝に推戴されました。自らの勢力を『召』と号しております」

「な、なんと……」

五名の有力者に推戴されて帝位に就いた、と言った。だが実情は異

なるだろう。領の内外を問わず、彼に皇帝即位を求める声はあったはずだ。謂わば、民達に推戴されたも同然なのだ。彼が行っている政を継続して貰う為に、それが続くという保証として平王朝開闢を求める。皇帝と王朝という仕組みが存在しない世ならいざ知らず、それがあることを知る民達がそれを求めるのは自然なことだと思う。

それにしても、『召』とは。

天から祈りに応えて降ってきて、刀を以て願いを叶える、という意味だ。天の御使いである平教経が武力で天下を統一し、平穏無事な世を作る。そういう意図があってのこの国号なのだろう。ずっと、考えて居たのだろうか。皇帝となってこの天下を統べることを。それとも、これは天意であり必然であるとでも言うのだろうか。

「ご苦労様でした。下がって良いです」

「はっ、では私はこれで……」

細作が陣屋を出て行くと、田豊さんが浮かない表情で佇んでいた。

「……孔明殿。何故平家は皇帝を僭称するような真似をしたのでしょうか」

「要するに、外交による停戦など受け付けない、ということですね。漢の正統を主張する私達は、平家と共存することは出来なくなりました。平家は袁家を力で叩き潰すつもりなのでしょう。皇帝に即位することで、四海にその決意を表明した。決着は、どちらかの家が無くなる形でしか付かない。それがこれではっきりしたことになります」

「どちらかの家が無くなるまで、ですか」

「はい。無くなるまでです」

「……この国に皇帝が二人立った。このことで、領内の民が動揺するのではありませんか？」

「動揺するでしょう。それも狙いの一つでしょうね。絶対不可侵の存在であった皇帝が、それを自称する者を討伐できないで居るということ自体権威の失墜に繋がります。また、一人であったものが二人になることで、その存在の威厳なり有り難みなりが大きく減ずることは間違いありません。私達にとっては、大きな痛手です」

私の答えを聞いて、田豊さんは黙り込んでしまった。

……細作が外に出て行く際、外の様子が少しだけ見えた。外は本格的に雪が吹き付けていた。陣屋の幕を開けた際に冷たい風が吹き込んでくる訳だ。今年の冬は、きっと厳しい冬になるに違いない。肉体的にも、心情的にも、そして、国としても。

――本格的な冬がやってきたのだ。

蝶の如く～１５５～

～焔耶　Ｓｉｄｅ～

教経様から言われて赴いた弘農でワタシを待っていたのは、最強の武と、最高の武だった。

恋。呂布。呂奉先。

狭い蜀の中で自分は天下でも五指に入ると勝手に思っていたワタシでも、自分より確実に強いと認めていた、天下に名高き飛将軍。向かい合っただけで、その強さは分かった。桔梗様でも話にならないだろう。そう感じられた。ワタシなど、歯牙にも掛けない。天下最強とはこういうものだということを、何故かその一瞬だけで納得させられた。立ち合ってはみたが、当然敵うはずもなくあっけなく負けた。

朔。華雄。

常に月様の後に控えている武人。華雄などという名を聞いたことはなかった。本人も、自分の武勇など高が知れたものでしかないと言っていた。向かい合って、体が萎縮するような威圧感も受けなかった。これなら勝てるだろうと思って立ち合い、完膚無きまでに叩きのめされた。

決して慢心していたわけではない。純粋な力だけで言えば、ワタシと朔様に差はなかったはずだ。むしろワタシの方が力はあったのではないかと思う。その事を認識はしても驕らず、侮らないで向かい合った。にも関わらず、ワタシは負けたのだ。

あの強さがどこから来るのか。

教経様は、『国で一番の猪武者であった』と仰られた。念の為ねねからも話を聞いたが、ねねが語る朔様は間違いなく『猪武者』であった。だがワタシと立ち合った際の立ち居振る舞いは、それとはかけ離れたものであった。後でそう言うと、ねねは『嘗てそうであったと言っただけなのですぞ！今は恋殿でさえ攻めあぐねることがある程立派な武人なのです！但し、恋殿の方が強いのですぞ！？その辺りは勘違いしてはダメなのです！十度戦えば七度勝ち、三度引き分ける程度なのです！』と応じてきた。

例え十中の三だとしても、恋の攻めを抑えてみせるというその強さ。ワタシが実感として掴めなかった、彼女の強さ。

その強さが何であるのかを知る為に、ほぼ毎日手合わせを願い出ては負け続けている。だが、これだけ立ち合ってもまだその強さがどこから来るのか、全く掴めないままだ。

……このままでは、ワタシはまた同じ過ちを犯すかも知れない。もう二度と犯さぬと堅く心に誓っているが、侮辱された時に普段と変わらぬようには居られないだろう。馬岱に浴びせられた罵声を思い出すと、確かに我慢は出来るが、やはり冷静では居られない。このままでは駄目なのだ。何としても、ワタシは克己しなければならない。そうでなければ、武人としても、そして人としても、これ以上先には進めないと感じている。

一日、その事にどうしても我慢できず、朔様に尋ねた。

「朔様、宜しいでしょうか」

「……その、『様』は何とかならんのか。恋に対しては使っておらんだろう」

「しかし何事か教えを受ける立場にある者は先ず礼を知らねばならぬと桔梗様から言われております。もしぞんざいな口を利いたこと

が知れれば、ワタシが只では済みません」
「……慣れぬが、仕方ないか……で、何だ？」
「はっ。その、少々不躾な質問で申し訳ないのですが、朔様はどうやって猪武者である自分を変えることが出来たのでしょうか」
「うん？」

少し訝しげな目でワタシを見ている。
まあ、それはそうだろう。『猪武者だった』、という言葉は、詰まるところ朔様を侮辱しているとも受け取ることが出来るのだから。

「朔様が何処までご存じか分かりませんが、ワタシは白蓮様が教経様に敗れる契機を作ってしまった、愚者なのです」
「……」
「そうなった原因は、偏にワタシが猪武者だったからに相違有りません。ワタシは白蓮様達や教経様達に赦されて、こうしてのうのうと生き長らえています。
……ワタシは同じ過ちを二度と犯すわけには行かないのです。ワタシが先走ったが為に死んでいった者達や赦してくれた人達の為に、何としても変わらなければならないのです。ですから……」
「良い。言いたいことは分かった。ご主人様がどうしてお前を私が居る弘農へ寄越したのかもな。
……焔耶。お前は私と同等以上の強さを持って居ると思う。無論、今この時点でではないぞ？先々を考えると、私を越えることもあるかも知れないと、そう思わせるだけの武勇を有しているという話だ」

朔様と同等。
それはつまり、恋と十度戦って三度分けることが出来るだけの力があると言う事なのか。

「だがな。正直に言うが、私もお前も天下最強の武人には成れぬ。

五本の指に入ることすら出来ぬ」
「……はい」
「……反発してくるかと思ったがな」
「身の程は、思い知らされました。十指にも入らぬ。そう思います」
「そうか」

朔様は目を閉じ、何か懐かしむかのような雰囲気で言葉を続けた。

「私はな、焔耶。天下最強の武人でありたいと願い、恋を打ち破ることでそれを証明してみせることに執着していた。若しくは、恋と同じ戦場で恋を越える武勲を上げることでな。周囲の者が何を言おうと、何を思おうと、私の興味は『天下最強』の四字にのみ有ったのだ」

弘農で何度か賊共を討伐する機会があったが、朔様は常に月様の後に控えてその警護に当たっていた。自分自身の功など不要。そう言い切った朔様からは想像も付かない。

「字も真名も持たぬ私は、生まれてこの方ずっと蔑まれて生きてきた。人から馬鹿にされたくなかった私は、元々膂力に優れていた事もあって武勇で身を立てようとした。だが、官に就き、実績を上げて出世しても尚人は私を馬鹿にしていた。それでは不足だ、その程度で字も真名も持たぬ貴様が認められると思っているのかと周囲の人間に嗤われているような気がして仕方がなかった。今思えば、武勇の優劣にしか興味がなかった私自身の在り方にこそ問題が在ったのだが、あの当時の私にはそんな事は分からなかった。これでまだ不足というのであれば、天下最強の武人になるしかない。だから私は天下最強を目指した。
だが私にとって不幸なことに、この世界には恋がいた。恋を越えてみせぬ限り、私は天下最強には成れない。反董卓連合を相手にした

時、出撃して反董卓連合軍を打ち破れば恋を越えることが出来ると考えて居たのだ。月様の為に武を奮うと言って参加した戦であるにも拘わらず、自分の武人としての矜持に拘って月様を喪うことになる所だった。ご主人様が居なければ、間違いなく反董卓連合軍に一呑みにされてしまっていただろう。

己の武人としての矜持と月様の命。ご主人様から何れかを取れと言われた時、私は私の武人としての矜持よりも月様の命の方が大切だと感じたのだ。

最強と最高とは違う。天下最強でなくとも、月様にとっての最高の盾であり戈であることは叶うのだ。他人が私の武が如何ほどのものかを知らずに貶して来ようとも、月様が真価を知ってくれて居れば構わないではないか。私は月様に己の武と忠とを捧げる為にこの世に生を受けたのだ。『月様の為に』私は存在している。そう思い切る事が出来る様になって、猪武者ではなくなった」

朔様の強さの根底には、月様への無私にして無限の忠誠があるのだろう。いや、最早忠誠という言葉では生ぬるいだろう。愛と言って良いのかも知れない。それがあればこそ、朔様は強いのだ。

『月様の為に』。

文字にすればたった五文字。

だがこの五文字に込められている思いは、ワタシなどでは量れぬものが在る。

「……参考になったかどうかは知らんが、私が猪武者で無くなったのはこんな経緯があってのことだ」

「いえ、有り難う御座います。あまり思い返したくないであろう事を思い返させてしまったようで、申し訳ありません」

「それは構わない。アレがなければ、私はここに居ないだろう。いや、あの時ああいう私でなかったら今のこの私にはなっていないだろう。思い返すのに少々苦々しい思いをするが、そういう過去があ

ってこそ、今こういう私になれているのだからな。
まあ、お前も色々思うところがあるのだろうが、早く己の武を奮う理由というものを見つけ出すことだ」
「己の武を奮う理由ですか」
「そうだ。別に他人の為に戦うことを心に決めれば強くなるというわけではない。自分の武を、広く天下に認めさせたい、というものであっても問題はない。ただ敢えて言わせて貰うが、猪武者というものは己のことしか考えて居ないから猪武者なのだ。私にしてもお前にしてもな。私からお前に言ってやれることはその程度だ」
「十分です。有り難う御座います」

自分が暴走しようとした際に、その行動を掣肘する何かが無ければ変わることは難しい。朔様が言ったことはそういうことだろう。朔様は、月様を守る為に己の武を奮うことを決めた。守らなければならない人間が居ることで、軽々しく前線に飛び出したり挑発に乗ったりすることが無くなったに違いない。

……ワタシには、恩を返さなければならない人が居る。白蓮様はワタシと瑛が独断専行した為に負け、ワタシと瑛を罰さなかった為に月様や雪蓮様のような、教経様に付き従う諸侯として立つことが許されなかった。それにも拘わらず、恨み言一つ言われた事がない。むしろ、ワタシの心情を慮って、白蓮様の今の状況について自分のせいである等と深刻に考えないように、と気を使って下さっている。

ワタシのせいで死んでいった者達も、白蓮様の中に希望を見出して参陣してきたに違いない。彼らが抱いた希望は、白蓮様が生きてある限り消えることはないだろう。

白蓮様を守ること。それがワタシに出来る償いであり、報恩なのではないか。

白蓮様を守る為であれば、戦場で戦功を一つとして挙げられないとしても悔いはない。ワタシが個人の戦功を諦めることで、白蓮様の身の安全が保障されるのであれば喜んで諦めよう。素直に、そう思える。

教経様は言っていた。

『己の武は何の為にあるのか。その一つの、そして恐らく究極の答えがそこにはある』と。一つの究極の答えとは、朔様の在り方の事を指していたのだろう。

ワタシもああなりたい。

その在り方は美しかった。天下を二分する勢力の主でさえ、無視できぬ程に。

ああなれるかどうかは、分からない。

結果が付いてくるかどうかもまた、分からない。

分からないが、分からないから何もせぬのでは結局何も変わらない。

目の前に見えたこの道を、一先ず歩ききってみよう。そうすれば、何かしら得るものが在るであろうから。

～吉里　Ｓｉｄｅ～

御遣い君が皇帝として起ち、新たな王朝を開くことを宣言した。

『召』。それが御遣い君が考えた国号だった。

周の武王を援けた召公セキからその国号を取ったのかと思ったら、

『召』という文字そのものの意味を踏まえた上で、それが相応しいだろうと考えたからしい。

『召』とは、天から祈りに応えて降って来て願いを叶えるという意味がある。これはつまり、『天の御使い』という存在そのものを表しているだろう。もう少し違った見方をすると、刀を以て祈りを捧げて願いを叶える、という意味にもなる。これも、御遣い君には相応しいだろう。何せ本人が刀を常に携行しているのだから。

皇帝に即位してまず最初に行った事は、近しい臣、分かりやすく言うと、御遣い君が自分のことを好きに呼んで構わないと言った人間達に対して、御遣い君をどう呼ぶかは当人に任せる、別に変えなくとも構わない、という布告を出したことだった。その事について詠や冥琳、華琳などが苦言を呈していたが、御遣い君から高順と交わした会話の内容を知り、無理なものは無理なのだという結論を出した。

苦言を呈していた人間を黙らせた高順の発言は、次のようなものだった。

『おい陛下、親衛隊の奴らには陛下って呼ぶように言っておいたからな』。

『なあ。この間陛下が言ってた”えすこーと”っての、殆ど忘れちまったんだけど、もう一回教えてくれよ。また瑛に食事に誘われてるからさあ』。

『テメェ！またおかしなこと言いやがって！やぁぁぁぁぁっってやるぜ！』。

『大将』という言葉が、そのまま『陛下』に変わっただけでしかない……最後など今まで全く変わらない……忠誠心に全く問題がないことは知っているけど、頭は……いや、最早何も言うまい。兎に角、この発言を聞いた御遣い君は暫く笑い転げた後、近臣は今まで通りに呼んで構わないということにしようと思ったらしい。僕も正直どうかとは思うけど、御遣い君らしいとも思う。個性で済む範疇であれば、ある程度は仕方がないのかも知れない。勿論、御遣い君自身は砕けた物言いをすべきじゃないからそれは認められないけどね。

御遣い君が即位して以来、家中の、というよりは最早宮中のと言った方が良いのかも知れないが、雰囲気は非常に明るい。文官・武官に関わらず、来るべき年が全てを決する年になるという予測をしていることだろう。召が天下を統一するという形で。

勿論僕もそう考えて居るし、余程のことがない限りはその流れは覆らないと思う。けど、向こうには朱里がいる。雛里と朱里はほぼ互角だったけど、僕は朱里に負け越している。勝率は三割もあれば良い方だった。悔しいけど、僕では歯が立たないことを納得させられる相手。それが朱里だった。

幾ら盤上の事とは言えあの当時でさえ劣勢を簡単に覆して勝利を収めていた朱里が、彼女の良い所でもあった甘さを完全に捨て去って

立ちはだかってくることを思うと、決して油断は出来ないと思う。余程のことを引き起こすことが叶うだけの知謀は有しているはずだ。どれだけ評価しても、評価しすぎということはない。それが、僕の朱里に対する評価だ。

宮中を歩いていると、何やら人を捜している様子の雛里が居た。訊けば、御遣い君を捜しているらしい。どうしても御遣い君と話したいことがある。そう言った雛里の表情は、真剣で、そして何処か陰鬱さを感じさせる深刻さを伴ったものだった。

仕方がないから僕も一緒に捜してあげるよ、と言うと、何度も有り難うと言っていた。

……こんな顔をして、一体何の話だろうか。

「どうしたンだ、二人揃って」

「僕は御遣い君捜しを手伝っただけだよ。雛里が捜してたからさ」

「雛里が？」

思い当たることがなかったのだろう。御遣い君は不思議そうに雛里を見ている。

ともあれ、御遣い君は見つかったワケだから僕はもう良いかな。

「じゃ、そういうワケだから」

「あ……」

挨拶をして立ち去ろうとした僕の手を、雛里が掴む。かなり力を込

めて握ってきた。雛里の予想外の行動に、思わず振り返ってその顔を見る。

「……その、吉里も居て欲しい」

雛里が深刻な顔をしていて、御遣い君と話をしたがっている。その上で僕にも居て欲しいとなると、大体何について話をしようとしているのかは見当が付く。

「……朱里？」
「……うん」

小さく頷いて御遣い君に向き直る。
雛里の雰囲気から大事な話であると感じ取っているのか、御遣い君は急かすこともせず、唯々雛里が話し始めるのを待っているという様子だ。

「……あの、陛下」
「今は個人的な時間だから好きに呼んだら良い、雛里」
「は、はい……ご主人様に、お願いがあるんです」
「何だね？」
「その……あの……」

雛里が言おうとしていることは分かる。『朱里を助けて欲しい』。そう言おうとしているのだろう。雛里から、大凡の事情は聞いている。朱里は仕える主を誤った。僕にはそう思える。劉備が甘い理想を抱いているとか犠牲を払う覚悟がないとかそんなことはどうでも良い。いや、良くはないけど、一番の問題はそこじゃない。

自分の理想を実現しようというのに、自分の足で立つ覚悟を持って

居ないこと。それが劉備の欠点だと思う。僕は自ら動かない人に付いて行きたいとは思わない。雛里だってそうだ。となれば、朱里だってきっとそうに違いない。僕達が女学院で将来について語り合って居た時、三人とも理想とする主君像に大した差がなかったのだから。

それなのに。命を救われてしまったばっかりに。愚にも付かない夢を、自分自身が抱いた夢だと思い込んで、それを顕現させようとしている。その朱里の目を、戦で打ち破ることで醒まして、その泥沼から救い出したい。そう思って居るのだろう。

ただ朱里は御遣い君を暗殺しようと刺客を放っていた。御遣い君はその事を忘れては居ないだろう。御遣い君が朱里にどういう感情を持っているのかを考えれば、朱里を助けて欲しいという言葉を口にするのは躊躇われる。だからこそ言葉に詰まっているのだろう。

対する御遣い君は、先程と変わらない様子だ。急かすことはせず、雛里が言葉を紡ぎ出すのをゆっくりと待っている。普段はいい加減だと思うけど、こういう所は流石は大国の主であると思わせる。

「……朱里ちゃんを、諸葛亮を、助けて欲しいんです」

「……助ける？」

「は、はい。朱里ちゃんは、劉備さんの夢に囚われて自分の夢を見失い、本来そうあるべき姿からかけ離れた人になってしまっています。だから、助けて欲しいんです。助けるのに助力して欲しいんです」

いきなり敵対している相手を助けて欲しいと切り出された御遣い君は、どう理解して良いものかが分からずに少々混乱してしまっているようだ。雛里もそれを敏感に感じ取り、誤解がないように色々と

述べているけど、時系列も話題も飛び飛びになってしまっていて、それがより一層御遣い君を混乱させてしまうという悪循環に陥ってしまった。

一度、仕切り直した方が良いと思って割って入る。

「雛里。僕は朱里を知っているし、雛里から事情を聞いているからその言葉で理解出来るけど、朱里のことも何の事情も知らない御遣い君にいきなりそう言っても混乱させるだけだよ？ねえ、御遣い君。時間が掛かるけど最初から話をさせて貰っても良いかな？そうでないと、雛里が言いたいことがきちんと伝わらないと思うから」

「あぁ。乗りかかった船だからな。分からず仕舞いで終わりたくはない。この雰囲気で助けて欲しいと言っているんだ。無視できる訳がないし、何を伝えたいのかはきっちり理解したい」

「ん。……というワケだから、雛里？ゆっくり、最初から有ったことを話して、それからお願いしたら良いと思うよ？」

「……うん。有り難う、吉里」

……やれやれ。我が親友ながら世話の焼けることだね。

「……事情は分かった。諸葛亮と対峙するにどういう策を用いるのかについてもそれで良いだろう。が、二つ言っておきたいことがある」

雛里が抱えている想いと来るべき戦をどう考えて居るかについて話

し終えたのを受けて、御遣い君がこう切り出した。何が引っ掛かっているのだろうか。やはり、自分を暗殺しようとしてきたことに釈然としない思いがしているのだろうか。

「暗殺され掛かったのを許すことが出来ない、とか？」

「いンや。今の話を聞いた限りじゃ、諸葛亮をどうこうしてやろうとは思わん」

「どうして？」

「諸葛亮は主に忠たらんとしただけだろう。その主は些かどころかかなり問題が在るが、諸葛亮自身にはさほど問題はない。むしろ、効率を考えて俺を暗殺した方が良いと思い、その手筈を整えて実行する手腕には敬意さえ覚えるな。その方が遙かに人死には少ないのだから」

「……そっか。じゃあ、言っておきたい事って何なワケ？」

「一つ目はだ。当たり前のことだが、勝てるとは限らない。無論戦争には勝つ。だが戦闘では負けることも有るかも知れない。次に諸葛亮と戦場で見えた時、全てが解決するとは限らない」

「……はい」

「だから、戦場で諸葛亮を見える機会があった時、無理矢理に勝ちに行ったりするな。その執心が多くの味方を、そして雛里自身を殺す事になるかも知れないからな。分かったか？」

「はい」

「二つ目は何？」

「俺が勝ったとして素直に降伏するとは思えないが、その辺りをどうするつもりだ？」

「……それについては腹案があります」

「……ふむ。この時の為に色々と考えてきた。そういうことか？」

「はい」

「そうか。ならば何も言うまい」

「え？それだけなの？」

「ああ」
「もっと他にないワケ？」
「ないなぁ。話を聞いた限り、この世界に生きる諸葛亮は嫌いじゃない。その上で雛里が助けるのに助力をして欲しいと言っている。平家に降らせる為の考えも何かしらあるらしい。どうせ諸葛亮とはぶつかることになるンだ。その中で雛里が望むことをやらせてやる程度の器量が無くてどうする」
「想定通りに勝てるとは限らないでしょ？」
「当然覆そうとしてくるだろうがね。それを許さない為にお前さん達がいるんだろ？」
「……確かに雛里なら朱里と互角に渡り合えると思うけど、僕じゃ無理だよ。朱里には勝てない。盤上の模擬戦で三割程度しか勝てないんだから」

そう言うと御遣い君はちょっと驚いた顔をした。

「……何？何か言いたいことでもあるワケ？」
「いや、お前さんが勝てないなんて言うとは思わなかったからな」
「事実よ」
「過去のな。まさか未来永劫そのままだなんて考えて居るんじゃ無かろうな？」
「……悔しいけど、歯が立たないよ」
「馬鹿言え。確かに天下国家を論じさせたら諸葛亮や雛里に一歩譲るのかも知れん。が、事を戦場に限って考えれば、お前さんだって捨てたものじゃないだろう。大体、諸葛亮を相手に三割程度でも勝っている事実があるじゃないか。
俺がお前さんを見てきた印象のみで言わせて貰うがな、お前さんが諸葛亮に負けているのは、『これで勝った』とか『これで策が成った』と思った時点で思考することを停止してしまったからじゃないのか？逆に勝っているその三割程度の勝利は、最後まで、精根尽き

果てるまで思索し続けた結果じゃないのか？」

……確かに、そうかも知れない。

僕が最後まで安心できず、色々と策を考えて盤上の駒を思い通りに動かすことが出来た場合、僕は朱里に勝っている。逆に、これで勝ったと思った勝負では悉く負けている気がする。

「図星、という顔だな？大体、お前さんは軍師だろうが。軍師なんてものはどうしようもなく戦が好きで常に頭の中ではまだ見ぬ敵とまだ知らぬ過酷な戦を戦っているものだろうが。勝てないなどと抜かす暇があったら、勝つ為の方策を考え続けろ。頭の中で四六時中諸葛亮と戦をし続けてみろ。それに全敗して初めて、『勝てない』と言えば良い」

軽く僕の頭を小突きながら、そう言ってくる。

まさか、御遣い君に軍師としての在り方で説教されるなんてね。僕としたことが、最初から戦いもせずに負けを認めるような真似をしていたみたいだ。

「うるさいな。分かってるから黙っててよ」

つい、そう言ってしまう。僕にくれた忠言に本当は感謝しているけど、その感謝を素直に表現できない。

流石に、怒ったかな？

そう思って御遣い君を観察したけど、御遣い君は別段気を悪くした様子もなく、『吉里らしい反応で安心した』と返してきた。雛里も僕を見て微笑んでいる。

まぁ、見てなさい。来るべき朱里との戦のことだけを考えて、必ずこれに勝ってみせるから。

……もし勝てたら、感謝してあげるよ、御遣い君。

蝶の如く～１５６～（前書き）

もげろ☆

蝶の如く～１５６～

～琴　Ｓｉｄｅ～

お屋形様が皇帝として王朝を開闢することを広く天下に喧伝した。宛から長安に帰ってきたお屋形様を、民達が総出で、快哉を叫びながら迎えている。久し振りに長安に帰ってきたけど、変わりが無くて安心した。私がお屋形様にお仕えするようになってから、ずっと此処で信頼して頂こうと務めていた。お屋形様のご厚意で母上も呼び寄せることが出来たし、此処が私の家だと、そう思えるようになっていた。

その長安は、召の国都になる。

長安を国都と定めた際、司馬懿がお屋形様に対して城を拡張・改修して宮殿と為すことを提案していたが、お屋形様はそれを却下した。理由は、と問いかけた司馬懿に対して、『広くなりすぎるから』と答えていた。別の機会に、広くなることは問題無いのではないのかと思ったのでそう言うと、『それだと下手をすると城に居るにも関わらず一度も会わぬうちに一日を過ごすことになる人間が出てくるだろ？今のままでも広さに不足は感じないし、俺は今の生活が、ちょっと歩けば皆に会える生活が気に入ってる。客を迎えるのに謁見の間を改修すること等は必要なンだろうが、宮殿増築なんてものは必要無い。そんな物に金を費やす位なら飢饉に備えた備蓄に回す方が良い』と仰った。

流石はお屋形様だ。新王朝の格式や見栄えなどより民達の生活のことを優先して考えておられるのだ。私個人としても、宮殿拡張は御免被りたい。私はお屋形様と一日一度は顔を合わせたい。それが叶

わなくなる可能性が有るのなら、増築なんて願い下げだった。

一日、お屋形様と私室で話をしていると母上が私を訪ねてきた。母上は私とは別に長安の街中に居を構えているから、態々城内の私の部屋を訪ねて来たのだ。一緒に住まえば、と思ってそう提案したのだけれど、『公私の別をつけなさい』と窘められてしまった。城内の部屋は私個人に与えられているものであるが、だからといって好きに使って良いものではない。国の中枢とも言える場所に、仕えている訳でない自分が常駐することは宜しくない、と。母上はそういうことに厳しい人で、言い始めたら聞かない人だ。平和になれば城に詰めている必要もないし、その時にもう一度一緒に住もうと言ってみようと思っている。

母上が来たのでお屋形様は席を外そうと為されたけど、気を使わないで欲しいという母上と、一緒に居て欲しいという私の願いを聞き入れて下さった。初めはぎこちなかった会話も、ゆっくりと時間が過ぎていく内にそれなりに華を咲かせるようになっていた。

お屋形様の言葉遣いは、普段とはちょっと違って丁寧なものだ。母上がちょっと席を外した際にその事を指摘すると、『一応義母になる予定の人なんだから孝に悖る言葉遣いは良くないだろう?』と返された。

その言葉の意味を理解するのに少し時間が掛かり。

分かって赤面し、俯いてしまった私をいつものように優しく抱いて下さった。そのお屋形様の耳元で、本当ですか?とお伺いしたとこ

ろ、『琴にその積もりがないのなら俺は諦めるよ』と言われてしまい。その積もりがあるとはっきり言うのも恥ずかしいけど何も言わなければ言わなかったで余計な誤解を生みかねない、とかなり混乱してワタワタしていると、いつの間にか『不束者ですが宜しくお願い致します』と応えていた。

――母上が。

「母上!?いつから覗き見をされていたのです!?」
「さて……結構前から外で待っておられたと思うが」
「お、お屋形様は気が付いて居られたのですか!?」
「まあ扉の外で大きく気配が揺らいだからな」
「何故教えて下さらなかったのですか!」
「それにしても、この娘がこうまで変わるとは思ってもみませんでした」
「ちょ、ちょっと母上、無視して話を進めないで下さい!」
「どう変わったんです?」
「お、お屋形様まで!」
「何と言いますか、剣がどうとか正義がどうとか、そういうことにしか興味がない娘でしたのに、朝から晩まで陛下のことばかり話しますのよ?今日の陛下はこうだった、陛下から褒めて貰ったと、それは嬉しそうに語ります。後は陛下の偉大さについて、言葉を換えて力説してきますわ。例えば……」

……何か恥ずかしい。自分の言動、それも一番安心できる自宅での会話をこうも赤裸々に露わにされると何とも居心地が悪い。お屋形様はと見てみると、面と向かって賛辞を述べられてこれまた居心地が悪そうだ。照れていらっしゃるのだろう。でも私が述べた事は事実だから、そうご謙遜をなさることもないと思うのだけれど。

「どうなさいました、陛下？珍妙なお顔をなさっておられますが」
「いや、まあ……面と向かって人から褒められるのは気恥ずかしいものです」
「まあ。奥ゆかしい人ですこと」

母上は何故だか上機嫌だった。普段からコロコロとよく笑う人ではあったけれど、こんなに機嫌が良いのは初めて見る気がする。

「ご機嫌麗しいようですが、何か良いことでもありましたか」
「それはもう」
「良いことがあったのですか？母上？」
「ええ、ありましたよ」

そう言ってお屋形様と私を交互に見やってニコニコと笑っている。

「……何となく予測が出来るので敢えて訊かないでおきますね、母上」
「そうなのよ。貴女達を見ていると、私とお父さんの若い頃を思い出してねえ」

……ダメだ。全く私の言葉を聞いていない。いや、聞くつもりが無いらしい。私の言葉を無視して父上と母上の馴れ初めから結婚、私の誕生までを一気に語った。それはもう、楽しそうに。

一通り話し終えて私の方に向き直る。

「琴、ちょっと良いかい？」
「なんでしょうか、母上」
「いえ、ねぇ。昔話をしていてふと思ったのだけれど、私も年が年だし、いつ躰が不自由になってしまうか分からないわ。だからね琴、

そろそろ孫の顔でも見たいと思ってねえ？」
「ぶっ」
「ブーッ」
私とお屋形様が同時に水を吹き出した。
「あらあら。二人して行儀の悪い。きちんとしなければなりませんよ？」
「こ、ここ子供なんてそんなまだ私は……」
……で、でも、お屋形様の子供なら……お屋形様そっくりの男の子なら……欲しいというか……
そう思って横目にお屋形様を見ると、ちょっと困った顔をして右頬を掻いていた。これは、お屋形様が照れてどうしようもない時によくする仕草だ。私が直截的な表現でお屋形様への思いを口にした時に、同じ反応をされるから。
満更でも無い、ということなのでしょうか？そう思って下さっているのなら、とても嬉しいのですけど。
「まあ！では後は陛下次第ということに」
母上？
「……琴、一部というか全部口にしてるから。思っていること」
「……え？」
「まぁその、子供が欲しいとか何とか……」
「ち、違います！い、いえ、違いません！じゃなくて、そうじゃないんです！」
「琴、支離滅裂すぎる。ちょっと落ち着こう、な？」

「う～」

は、恥ずかしすぎる……まさか、まさか口にしていたなんて。しかもそれを、お屋形様に聞かれるなんて……笑って話し掛けてきて下さっているけど、それがより一層私の失態を際立たせている訳で。母上はそんな私とお屋形様を嬉しそうに見ているし、今度会った時絶対に根掘り葉掘り訊かれる事になるんだろうな……

あの失態の後も、母上からお屋形様と私の普段の生活ぶりについて際どい質問をされ、二人して対応していた。何度も恥ずかしい思いをさせられたけど、お屋形様が上手く話を誘導して、私が一杯一杯にならないように気を使って下さったのが実は嬉しかったりする。

「さて、と。日も落ちそうですから、私はこれで失礼致しますね」

そろそろ日が暮れる、という時分に母上が帰ると言い始めた。確かに今日は私の番だけど、折角母上がいらっしゃったのだから私としては母上と一緒に居ようと思っていたのに。

「母上、夕食を一緒に食べないのですか？」

「ええ。あまり長居をするとお邪魔なようですからね」

「は、母上！」

「邪魔ではありませんよ。折角琴に会いにいらしたのですから、ゆっくりなされば良ろしいでしょうに」

「そういう訳には行きませんでしょう。今日はどうやらこの娘が陛下と共に二人きりで過ごせる日のようですし、また日を改めてくれ

ば親娘水入らずで話も出来ますから。このまま長居をすれば今日は帰らずに泊まって行けとこの娘は言うでしょうが、それだとその、この娘も困るでしょうし、陛下もお困りになられるでしょう？」

「母上！？」

「……答えを口にするのが憚られるんですが」

「ほほほっ。そういう訳ですから今日はこれで失礼致しますわ、陛下。……娘を、宜しくお願い致します」

途中までは茶目っ気のある顔をしていた母上は、最後に真面目な顔でそう言った後お屋形様に頭を下げた。

「……俺で良ければ喜んで」

「お、お屋形様……」

母上の言葉に応えたお屋形様と、その言葉に感極まってしまった私を交互に見て微笑み、母上は帰宅する為に外へ出た。お屋形様が高順に声をかけて、送って行って貰えるように計らってくれた。何度か振り返った母上を、二人並んで見送っている。

「今日はなんだか済みませんでした。母上がまさかああいうことについて訊いてくるとは思っても見なかったので……」

「いや、別に構わんよ」

「で、ですが失礼に当たるかと」

「公私の別で言えば、今の時間は『私』の方だ。だから最低限で良いンだよ、礼儀なんて」

「……有り難う御座います、お屋形様」

「礼を言われるような事じゃないと思うがね」

お屋形様に少し寄りかかった私の肩を抱いて、微笑みながらそう仰った。

日が暮れる前の最後の陽の光が、私達の影を映し出していた。二人の影は重なり合って一つになっている。足下では確かに二つ別々であるのに、そこからずっと伸びていった先は完全に一つに重なり合っていて。私達の未来をそのまま表しているかのような気がして、少し嬉しかった。

「……？なんかご機嫌だな？琴」
「ふふっ。そうですか？」
「あぁ。どうしたンだ？」
「内緒です」
「？」
「それよりお屋形様。夕食を食べましょうか？」
「……そうだな、そうしようか」

お屋形様に肩を抱かれて私室へ戻る。後ろを振り返ると、影は変わらず一つに重なり合っていた。只それだけのことが嬉しくて、その日はずっとご機嫌だった。その理由を何度か訊かれたけど、なんだか子供っぽい理由な気がして、お屋形様には教えてあげないことにした。

私はずっとお側に居たいです。
夜、お屋形様の腕に抱かれて寝ている時にそう言うと、お屋形様から、それこそ天にも昇るかのような幸せを感じられる言葉を頂いた。

……頂いた言葉？そんなもの、教える訳無いじゃないですか。
じゃあ、その言葉の後私が何を言ったのか？ですか？

私も、お屋形様に居て貰わないと困ります、と言いましたが。
え？何を言われたのか分かった？

べ、別に勝手に想像していれば良いんじゃないですか？

お屋形様から頂いた言葉は、私の、私だけのものですから。絶対に誰にも教えてあげないんです。そう決めたんですから。

～教経　Ｓｉｄｅ～

帝位に就いてから、非常に面倒臭い仕事が増えた気がする。

国家の骨組みとなる官僚組織を漢王朝時代に比してその数を削減した。馬鹿が集まっても大馬鹿にしかならない。それに、今は創業の時だ。自分で言うのも何だが、平家には優秀な人間が数多く集っている。風や詠、冥琳など直接俺と面語している人間に、優秀だと思う郎党の名前を上げて貰った事があるが、次から次へと名前を上げられた。聞いたことのある名前もちらほら聞こえてきたが、いつの

間に仕えていたのかねぇ。

兎に角、名が後世に残っている人間が多く居る以上、削減できる部分は削減した方が良いと判断した。無論、将来はどうなるか分からないが、現状国が有している権限を地方に移管していけば、削減後の人員数でも十分にやっていけるだろう。人員削減について相談した時に、風や詠がそう言ってくれたことで踏ん切りが付いたのが一番大きいが。

その他軍制及び政に関しても手を入れているが、それについてはそもそも平家ではそうだったものをそのまま当て嵌めているだけだ。特に混乱は起きていないし、俺自身に掛かってくる負担も大したものではない。司馬懿を側近として扱き使うことで、かなり楽が出来る様になっている。

やたらと増えた典礼も面倒だが、これは仕方がないだろう。形式が必要とされるのは理解出来るし、予め分かっていたことだ。

それらよりも難しい問題で、かつ俺が予測もしていなかった事態が発生している。それは……

「教経？分かっているのでしょうね？写し身のような私が正妻となれば、貴方は今以上に楽が出来るのよ？その利を想像すれば、私を選ぶことこそが貴方にとっても召にとっても最良の結果をもたらすことになるのよ」

「ちょっと華琳は黙ってて。ねぇ教経、当然わたしを正妻として迎え入れるのよね？そうすれば呉の自治権を与えているとは言え、実質的には教経のものになる訳だし」

「二人とも黙るのですよ。お兄さんは風が管理してきたのです。ぽっと出のメス豚共には譲らないのですよ」

……正妻問題、とでも言えば良いのだろうか。
何を阿呆な事を、と言われるかも知れんが、実はこれが一番頭が痛い問題だったりする。まあ、自業自得の極みなんだが。

「やれやれ。良くもそこまで醜く言い争えるものだな。その点私は理知的だ。どんなときにも冷静沈着。醜く言い争いをすることなど無い。それに、臣従が決まったその日の内に求愛されたのも私だ。そのような女は後にも先にも居ない。私こそが相応しいと思うのだがな」

「お屋形様から愛されている程に拠って決しようと言うのであれば、結論が出るはずがありません。お屋形様は皆を平等に愛して下さっているのですから。それであれば、お屋形様の為に如何に尽くすことが出来るのか、が問題になるべきです。その点、私はお屋形様に全てを捧げることが出来ます。お屋形様が望まれれば、例え尊厳が喪われるような行為であっても喜んで致します。己の矜持に拘る貴女達では出来ない様なことだってやってみせる自信がありますから」

「いやいや。アンタらは女と男としての関係と主従としての関係しか築けてへんやろ？その点ウチは違うで。経ちゃんとは主従であり、友人であり、そして恋人でもあるんや。三通りの関係が楽しめるんはウチだけやし、やっぱり此処はウチが選ばれるべきやと思うで？」

さっきからずっとこの調子だ。宛にいる人間だけでやってこの有様だ。遠征中の稟や愛紗は勿論のこと、蓮華が此処に居たらと思うと胃が痛くなる。

「……やはり私達が言い争っていても結論は出せないようね」
「なら、決めて貰うしかないんじゃない？」
「改めて口にして貰うまでもないとは思いますが、お兄さんに選んで貰った方が選ばれなかった事を納得出来るというのであればそれ

でも良いでしょうね～」
「まあ、私の勝ちは揺るがないと思うがな」
「お屋形様に一番尽くすことが出来るのは私だと思いますよ？お屋形様」
「結果は変わらへんよ。ウチが勝つさかいに」

なんともまあかまびすしいことだ。
そう思って居ると瞳に星が映り込んだ。そう言えば、星は今日全く発言していない。珍しい事もあるモンだ。

「星、どうしたンだ？いつもなら絡んでくるところだと思うが」
「私はその、雪蓮や華琳のように一勢力の長ではありません。風や冥琳のように頭も良くありません。琴のように素直に主に甘えることも、出来ません。……その私が、声高に主にとって私が一番の蝶であることを主張することが許されるのでしょうか……」

……こういう星は初めて見る気がする。
他者は他者。自分は自分。自分には他者にはない魅力というものが備わっている。自己と他者との間に存在する差とは、即ち個性であって優劣ではない。そういう考え方をしているはずだ。そしてそれを、不敵な態度と、同じく不敵な言葉で表現してみせる。それが星の魅力の一つだと思う。

その普段の星とのギャップに、完全にやられてしまいそうだ。こうまで自信なさげにされると、放っておけなくなると言うか何というか、保護欲のようなものが湧き出てくる。

「星。許すも許されるも無いだろうに。星らしくないぞ？第一、一番俺と付き合いが長いのは星じゃないか。星だって言いたいことを言っても構わないと俺は思うよ」

「ですがその、私は一介の武辺に過ぎません。その私が……」
「星、そんな事は関係ないだろう？俺は星の事を大切だと思っているんだ。地位なんて関係ない。星という女の子そのものを、俺は必要としているんだから」
「主……」
俺の言葉に、瞳を潤ませて上目遣いでこちらを見てくる星。
……あぁ、この星は可愛い。可愛すぎる。
「では、私が主の一番の蝶だと主張しても構わないのですか？」
「構わないよ、星」
「……主、言質は取りましたからな？」
はれ？何故だか星が黒く見えるよ？
「皆、今聞いた通りだ。主にとっての一番の蝶は、この星、趙子龍であるということを主張することが許された。それは即ち、この私こそが正妻に相応しいという事を主が認めて下さったという事だ！さあ、この正妻である私の前に跪くが良い！」
いや、あれ？星さん？それは確かに言葉だけを捉えればそう言うことも可能だと思うけど、そういう意味で言った訳じゃ無いからね？
「星ちゃん、お兄さんはそういう意味で言った訳ではないと思うのですよ」
流石は風。華琳との仁義なき戦いでも遺憾なく発揮されたその洞察力で星さんを窘めてやって下さい。
「……風。稟と共に、三人が日替わりで正妻という形でも一向に構

わぬが？」
「……という訳で、その他の有象無象共は黙って居るのですよ」
何という風・・さん・・的存在。圧倒的な存在感だ。
「共有する、というならこっちにも考えがあるわ……冥琳？」
「分かっているさ。教経、こちらは雪蓮に私、蓮華様に思春、亞莎と付いてくるぞ？」
「……形勢が悪いわね。詠、此処は共同戦線を張ることを提案するわ。期限は、私達が勝つまで。どうかしら？」
「……良いわよ。ボクの方にも異存はないわ。只人数が不足しているから、琴と霞も巻き込みたいところね」
「霞、私は異存ありませんが貴女はどうですか？」
「取り敢えず『勝つまで』なんやろ？上等や、やったろうやないか」
うん。もう収拾が付かない感じだよねぇ。と言ってこの場から立ち去るという選択肢はないからねぇ。俺の事で揉めているのに我関せずとは行かないし。
ガヤガヤと互いの主張をぶつけ合っている最中、これまたずっと黙って居た百合が手を挙げた。
「……いい？」
「どうしたンだ？百合？」
皆が一斉に百合を見る。
「……全員で共有。日替わりで正妻」
「成る程。それは良い案ね」

良い案って雪蓮、お前さん何を言っているンだ？

「……この際それでも仕方ないか」

冥琳、あっさりと受け入れるなよ。

と言うかだな。

「コレ、『誰が俺と一緒に居るか』が『正妻』になっただけで、今までと何も変わらない結論が出ているんじゃないのか？」

「おお、お兄さん、良く気が付きましたね～」

「気付くわ！」

「チッ……折角主を騙して決定的な言質を得たものを」

いや、星。腹黒すぎるだろうに。

「ですがお兄さん、今まで通りとは言いましたが、形式はきちんと整えて貰いますからね～」

「……形式とな？」

「はい。形式です」

糸目をし、飴を口に咥えながらゆる～く発言してくれたが、こういう時は大体とんでもないことを言っている訳で、ねぇ。こちらとしては警戒せざるを得ない訳で。

「つかぬ事をお伺いしますが……その形式って……？」

「お兄さんとそういう関係にある人間を妻とする旨宣言して貰います」

「さいですか」

「そういうことであれば、当然各人と婚礼の儀式を行って貰うわよ？皇帝の婚礼なのだから、それに相応しいものを、国費でね」

この時代の婚礼の儀式って、かなり手間と時間が掛かるものじゃなかったっけ？それを皇帝に相応しい規模でとかとんでもなく面倒なんじゃ……？

「簡素に、簡略にやるって云う訳には……」

「行くと思うのかしら？」

華琳の言葉に合わせて、皆が一斉に俺の顔を見た。当然、皆イイ笑顔だった。今も昔も結婚式は女の子の夢だってのか？そんな馬鹿な。現代なら兎も角この時代でそんな風潮有る訳がないじゃないか。だが、現に目の前に居る方々はそんな感じに見えるな……あ、胃が痛い。

「……胃が痛いからちょっと席を……」

「では早速今日から形式を整える為に準備をして頂きましょう」

「いや、琴？俺は胃が痛いから……」

「コイツは婚礼の儀式を知らないみたいだから、ボク達がちゃんとしなきゃダメだわ」

「ほなそれぞれの家で経ちゃんと打ち合わせするなりして準備しよか」

「いや、皆、ちょっと……」

「風、稟や愛紗達はどうするのだ？」

「どうせお兄さんは後から益州へ向かう訳ですから、その時に思う存分致せば良いのです。風達に後れを取りますが、風達よりも長い時間お兄さんと居られるのですから」

「ふむ。ではその旨書状で伝えておくか」

「馬鹿正直に一足先に風達が婚礼を行うことを書くこともないのですよ。益州に行ったら、お兄さんが稟ちゃん達と婚礼の儀式を行うと言っている、と伝えておくだけで大丈夫なのです」

「成る程、流石は風だな」
「あら、じゃ、蓮華達にも教えてあげないとね。最近、蓮華ってば怖いんだから」
「では南蛮へ行く際に一度揚州へ行き、婚礼を行った上で行って貰うとするか」
「そうね。そうして貰いましょう」

俺の意志は……？
俺の意向は……！？
一応俺も当事者なんだから意見を聞いてみるとかそういうのはないのか？

「当然無視なのですよ、お兄さん」

……久し振りに俺の頭の中をガッツリ覗かれた気がするねぇ。出来れば、覗くのは止めて貰いたいンだがねぇ？若しくは覗くなら俺の意向をしっかり反映させて貰いたいンだが、その辺り、何とかなりませんかねぇ？

「むむ……確かにお兄さんの言う事も分かります……」

おお、流石は風。俺の言うことをしっかりと理解してくれる！そこに痺れるッ！憧れるぅッ！

「……だが、断るッ！なのです」
「ですよね……というか、何故貴様がそれを知っている！？」
「さあ、知らないのですよ」

それから暫くの間は、ずっと婚礼に追われる日々を過ごすことになった。まあ分かっていたことだけど、居る人間には親がちゃんと居

る訳で。心温まる婚礼の風景をいくつか思い出してみる。

星の時は準備の話をする為に祖母がやって来たが、矍鑠とした婆さんだった。が、偶にぴくりとも動かなくなったりして、昇天したのかと大慌てさせられた。一番初めに『お婆さまが！お婆さまが！』と大騒ぎしていた星だが、どうやらいつものことだったらしく、事が判明した後婆さんと一緒にニヤリと笑っていた……計画通りなのか？その嗤い方的に考えて。

風の時は両親がやってきた。が会話の最中、昔話で少々都合が悪そうな話題になると二親とも寝てしまったりしていた。風が不思議ちゃんなのは両親からの遺伝に違いない。そう思って風を見ると、風も寝てしまった。……コレでどうやって婚礼の段取りを煮詰めろと？その後叩き起こして煮詰めたから上手くいったンだが。

華琳の両親からは、よくぞ娘と結婚するつもりになってくれたと涙ながらに言われた。アレか、ズーレーでドーサーだってのをちゃんと知ってたってことか。取り敢えず感謝して下さいと口を滑らせると、絶を首に宛がわれてもう一度言ってみろと言われた。愛しているよと惚けて伝えてみると、顔を真っ赤にした上でフルボッコにされた。コレも愛情表現なんだろう……どうでも良いが娘を止めろよ。

雪蓮の時は孫静がやって来て、開口一番姪を泣かせたら殺すと言われた。……成る程、シスコンならぬ姪コンな訳ですね、分かります。その可愛い姪っ子は俺と真剣で戦う事が大好きな戦闘狂なんだよ。お前さんがしっかり教育してこなかったからこうなったんじゃないのかよ。まあ、怖くてそんな事は言えなかったんだけれども。着飾った雪蓮は、それはそれは可愛かった。そういうと柄にもなく照れまくっていたが、そうやっていちゃついている俺をもの凄い目で睨み付けている叔父の姿があった……姪離れしろよオッサン。

冥琳の時は母親がやって来て、如何にして冥琳を墜としたのかを根掘り葉掘り聞かれた。論理的な説明が出来ない冥琳を見て、不覚にも萌えてしまった。婚礼の晩非常に燃え上がってしまったが、後から冥琳に聞いたところに拠れば、それは母親の計算通りだったらしい。……流石は冥琳の母親だ。

その他の場合も、色々とあったンだ……本当に色々と……詠なんか酷いモンだった……『あの日』って言うから月一のお客さんが来る日かと思ったら、年に一度やってくる厄寄せの日だったらしい。事前の打ち合わせがその日だったから良かったものの、本番がその日だったら目も当てられない事になっていただろう。

兎に角、滅茶苦茶面倒臭かったが、皆可愛かったから良しとしよう。皆それぞれ表現の仕方は違うが喜んでいたし。相変わらず顔を合わせる度に何かと張り合ってはいるが、じゃれ合いのようなもので大きな問題にはならないからな。まあ、仲が良いと言って良いだろう関係を築けてはいると思う。

仲良きことは美しきかな、かな？

まあ、最後くらいは綺麗に締めさせてくれよ。締まらないことこの上なかったんだからさ。

蝶の如く～157～（前書き）

連続更新してみる。
このペースは結構久し振りだなぁ……

蝶の如く～157～

～教経　Ｓｉｄｅ～

帝位に就いたことによって、自分が置かれている状況というものが把握出来た気がする。

何を言っているかというと、異民族との関係について。元々気を遣ってきたが、今回俺が即位した際に彼らがこちらをどう思っているかが量れた。匈奴、羌、鮮卑、羯、テイ。五胡十六国時代で中華を席捲した五つの族から、それぞれ賀を述べる為に使者がやって来た。そこまでは想像出来ていたが、山越族からも使者がやって来ていた。若年と壮年の二人だが、若年の方が正使で壮年の方が副使だった。恐らく、若年の方は族長の息子か何かだろう。腰に差してある剣の拵えは中々に立派なものだった。

彼らは賀を述べた後、生活が成り立つように配慮して貰えるならば、喜んで傘下に入りたいと言ってきたのだ。平家の領民として、無法を行わなければ差別などさせはしないと伝えると、平伏した上で口数を記した地図を献じてきた。地図を献じると言う事は、その土地を差し出すという事だ。流石に先祖伝来の土地を献じる必要は無いだろう。彼らが持って居る生活文化は中華のそれとは異なるはずだ。傘下に入るだけで良く、支配を受け入れることで文化を、彼らの誇りまでも捨てる必要は無いのだと伝えると、使者達は感極まった顔をして一朝事あった際には必ず兵を以て平家を助けると言ってくれた。彼らがその感動を一族に伝えてくれればこちらの狙い通りだ。

こういったことには、やはり誠心誠意対応するに限る。

人をして心服せしめる為には徳を積まなければならない。土地を直

接支配出来ることなどより、将来に渡って家を助けてくれる味方を得た方が遙かに益が大きい。中華の文化が及ばぬ族が味方であれば、中華から見放されてしまったとしても塞外でなら家を存続させることが出来るだろう。そこまで考えての、対異民族政策だ。無論、言葉通りには受け取れないが、良好な関係が続けば続いただけ愛着のようなものが沸いてくるだろう。少なくとも百年。百年良好な関係が続けば、三世代全てが平家に馴染みのある者で一族が構成されることになる。そうなるように気を遣っていかなければならない。子供が生まれたなら、その辺り含めてきっちり教育してやる必要があるだろう。

烏丸と南蛮からは使者はやって来ない。
絶賛緊張関係にある南蛮は兎も角、これまで何度か遣り取りのあった烏丸から使者が来ないというのは中々に興味深い。歴史的には、曹操が袁家を滅ぼさんとした際に、烏丸は袁家を支援したはずだ。確か烏丸の中心にいたのはトウ頓だったか。まあ、好きにすれば良い。敵対するなら思い知って貰うだけだ。無条件に全ての人間と仲良くできるなどという、痴者の夢に絆された阿呆共は俺を非難するンだろうがそんなものは痛痒にも感じない。

従うか、抗うか。俺はそのどちらかの選択肢しか許すつもりはない。それが気に食わないなら、力で俺にそれ以外の選択肢を認めさせるべきだろう。

一日、長安から函谷関を出て弘農へ向かった。月と話をしておこうと思ったからだ。また、詠をしばらくの間月の所に居させようと思

っており、その事を伝える為でもある。

弘農の治安は上々だ。月の仁政が行き届いていることもあるが、恋と朔の存在が大きいのだろう。無頼共から大いに恐れられているのは、恋。領内の警備兵などから尊敬を集めているのが朔。この二人を両輪として、上手く領内を治めている。

「ご主人様、お久しぶりです」
「あぁ、久し振りだな、月。相変わらず良い政をしているようで何よりだ」

つい、その頭を撫でてしまう。

「へぅ……あ、有り難う御座います」

モジモジする月はかぁいいねぇ。

「月、久し振り」
「詠ちゃん、詠ちゃんも元気そうだね」
「うん。月も元気そうで良かったわ」
「そういえば、詠ちゃん、お目出度う」
「へ？何が？」
「ご主人様とその、正式に……」
「あああ後！後でね！月」

月と詠の関係も昔のままのようで何よりだ。

「それで、陛下。態々此処までいらっしゃったのは月様を撫でる為ではありますまい？」
「いや、撫でる為でもあるんだけど？」

「へぅ……」
「……撫でる為だけではありますまい？」
ふむ。根気よく話し掛けてくるな。朔も随分と変わったモンだ。
「まぁ、ね。月、皆を集めて貰えるか？俺から話があるから」
「あ、はい。分かりました」
「月様、ねねに招集を掛けるように既に申次に伝えてあります」
「今さっき集めてくれって言ったンだが、いつの間に伝えたんだね？」
「おいでになった時点で、です。全員集めるように指示在るものと考えて居ましたので」
「成る程」
「朔さん、いつも有り難う御座います」
「いえ。大した事ではありませんからお気になさらず」
立派に従者をやっているじゃないか。
アレだな、ダンクーガがちょっと賢くなったバージョンなのかもな。
ちょっとだけかも知れんが。けど元が元だからなぁ……。そう思って後ろを振り返る。
「？何だよ大将」
「いや、お前はいつもお気楽で良いよなぁと」
「はぁ？相変わらず訳が分からねぇことを言うよな、大将は」
「この場合のお気楽ってのは、お馬鹿ってのと同じ意味な」
「へー……ってどういう事だコラァ！」
「いや、馬鹿だなって事だけど？」
「『直接言ったのに意味が分からないなんて可哀相』みたいな顔してんじゃねぇ！突然湧いて出た酷ぇ言葉に何の脈絡も見出せずに唖然としてただけだろうが！」

!?

ダンクーガが、ちょっと難しい言葉を、使っている……だとッ!?

「ダンクーガ、『脈絡』とか『唖然』とか、一体どうしたンだ、お前さん」

「……何となく失礼なことを言い始めそうだが敢えて訊こう。どういう意味だ」

「空気まで読み始めるとは……本格的に病気かも知れん。良いかダンクーガ、順番に行くぞ?ダンクーガと言えば馬鹿。此処までは大丈夫か?」

「失礼なこと抜かしてんじゃねぇよ!何だ!?俺は馬鹿じゃなきゃダメなのか!?」

「当然じゃん。なぁ、?忠」

「当然でしょ」

「……」

「どうしたダンクーガ。生まれたての子鹿みたいにプルプルしてるが」

「……やぁぁぁぁぁぁっってやるぜ!」

ダンクーガが肩を震わせた後、奇声を発して飛びかかってきた。血涙が見えた気がする。

面倒臭いのでさっさと殴って気絶させたが。

「やれやれ、いつも通りに愉快な奴だ……広間に移動しようか、詠。オッサン、?忠。ダンクーガ引き摺って先行ってくれ。此処には朔が居るから大丈夫だろ」

「了解ですよ」

「ラーサ!」

「……断空我は本っ当に仕方がないわね。相変わらず言葉遣いがな

ってないし」
「大丈夫だ、詠もあまり変わらないから」
「ボクはあそこまで失礼でも馬鹿でもないわよ！」
「まあまあ。どっこいどっこい位じゃないか？」
「何処がよ！ボクはあんなに無神経じゃないの！」

ふむ。ちょっと誤解があるようだからそこは言っておかないと駄目だな。

「ちょっとダンクーガについての認識が間違っているみたいだから一応真面目に話をしとくがな。ダンクーガはあれで気を使っているんだろうぜ？
陛下と呼べと言われても基本的な物腰を頑なに変えなかったのは、俺がそうされたくないことをちゃんと理解していたからだろう。アイツは学がないだけで馬鹿じゃないんだ。ダンクーガにせよ？忠にせよオッサンにせよ、今までと変わらぬように接するべく努力した結果として、今まで通りで居るんだろうさ。
俺が今まで通りでいられる場所を、あいつらなりに確保しようとしてくれているんだろう。だからな、詠。アレは失礼でも馬鹿でも無神経でも無いんだ。俺の事を考えてくれているんだよ。多分、全身全霊で、な」

ったく、何で俺がダンクーガを弁護してやらなきゃならんのだ。

「……アンタも大概天の邪鬼よね」
「……どこがだよ」
「馬鹿だ何だと言っておきながら、断空我を理解せずして貶すことは許さないってボクに釘を刺してくるようなところがよ」
「うるせぇよ。そんなんじゃ無いンだよ」
「何？照れてる訳？」

「ンな事ある訳無いだろ」
「はいはい。そういうことにしておいてあげるわよ」

……これと似たような光景を嘗て見た記憶がある。ウチの爺や師匠達とその婆さん方の会話が正にこんな感じの雰囲気だった。

ま、まさか、俺は既に尻に敷かれているのか！？

「ほら、何やってんのよ。早く行くわよ？」

詠に腕を引っ張られながら広間へ向かう。
どうにも釈然としなかったが、早く早くと詠に急かされて歩く内、それでも良いかと思える辺りが尻に敷かれる素質がある証なんだろう。正直お断りしたいが。

広間に集まった旧董卓軍の面々＋α。
月、詠、朔、恋、ねね。此処に霞が居れば勢揃いなんだが。

αとしては焔耶が居る。最後に見た時に比べると、幾分落ち着いた印象を受ける。周囲からはかなり陰口を叩かれているに違いないが、それでも真面目に務めることが出来ているようだ。
朔に師事させているのも良かったのだろう。弘農にいる兵達の尊敬を一身に集める朔に師事しているという事実は、当然妬みを生みそれに基づいて陰口を叩かれたりはするだろうが、過去のことを執拗に攻撃してくるような人間を生み出しにくくしているだろう。それをやれば、朔に軽蔑を受ける可能性が有るのだから。そして朔から

軽蔑を受けるということは、弘農で生き難くなってしまうということだ。焔耶に余程の恨みがあるならば話は別だが、そうでなければ進んでその道を選ぼうという奴は居ないだろう。そこまで頭の回らない奴らは何くれと無くちょっかいを掛けてきたりするだろうが、本来焔耶が受ける事になったであろうそれに比べれば微々たるものであるに違いない。

「それで、何をしに来たのですか」
「南蛮の様子を窺う為に俺は益州へ征くことになるが、その前に一つだけ、直接言っておこうと思ってな」
「何をでしょうか？」
「何、簡単なことだ。俺が益州に入ったら、呉か弘農に諸葛亮が攻め込んでくるだろう。それに対して、敵わぬと思ったなら直ぐに函谷関まで退け」
「……攻めてくる？」
「ああ、きっと来る。弘農の方が兵が少ないからこちらの方へ寄せてくる可能性が高い。距離的にもこちらの方が近いしな」
「恋殿と朔が居るのです。そう簡単には負けないのですぞ！」
「それは分かっているさ。だが万が一敵いそうにない場合、此処で必死に抗戦したところで得るものはない。函谷関まで退いて、そこで相手をしてやれば良い。
函谷関には霞を配しておく。驍将三人、軍師二人。負けるはずのない戦を描くことが出来る。戦はな、勝算が立っていて行うものだ。中長期的な戦略的観点に立って彼我を比べた時、こちらが不利で向こうが有利な状況であるというのであれば博打を行う必要があることもあるだろう。が、そうでないなら博打は不要だ。勝てる戦に勝つべくして勝てば良い」
「しかしそれでは不敗の平家軍に土を付けてしまうことになる。陛下にはそれでも構わないということでしょうか」
「あぁ。常勝不敗で居られる訳がないだろうが。負ける時は綺麗に

負けるべきだ。後に尾を引くような負け方はすべきじゃない。勿論、楽に勝てるならば話は別だがな。

弘農を死守したが主要な将が死んでしまった、という結果は最悪だ。逆に、弘農は陥落したがほぼ無傷で軍が残っているという結果は望ましい。『怒りはまた喜ぶべく、慍りはまた悦ぶべきも、亡国はもってまた存すべからず、死者はもってまた生くべからず』だ。死人は還ってこない。土地なんざ幾らでも取り返せる。命を惜しんでくれ、頼むから」

「ふむ……承った」

「あの、ご主人様。軍師二人というのは……」

「ん？そういえばまだ言ってなかったか。一時的にだが、詠に月の補佐をして貰う事にする。弘農、宛、襄陽、建業。この四都市の内で最も手薄なのが弘農だ。後に国都たる長安があるから厳密に言えば手薄とは言えないが、その他に比べれば手薄と言って良いだろう。武に関しては恋、朔、焔耶が居る。あまり問題にはならないだろう。だが智となるとねねしか居ない。一人しか軍師が居ないのは不安だ。多角的な物の見方をする為にも、もう一人欲しい。此処に詠が加わることでかなり安定すると思っているンだよ」

「確かにねね一人では負担が大きいと思うのですぞ。あからさまに言ってしまえば、戦略的にものを考えるのにねねは向いて居ないのです」

「……」

「何なのですか、その顔は！」

「いや、まさか自分でそう言うとは思わなかったからだな」

「失礼なことを言うななのです。ねねも軍師、物事を客観的に見ることぐらいは出来るのです」

「恋のこと以外は冷静に判断出来る、という訳だ」

「恋殿のことについても冷静に判断出来るのですぞ！」

「はいはい」

それは無理だろうねぇ。聞いた話じゃ虎牢関から飛び出そうとしていたんじゃなかったかね？

「そういう訳で詠には月と一緒に居て貰う。その方が俺も安心出来るからだ。分かったかね？」

「はい、ご主人様」

後は揚州へ行って注意を促して益州へ入るだけだ。

何故揚州へ態々出向くのか？だと？

……察しろよ。一言だけ言うとするならば、蓮華が怖いとだけ言っておこう。

南蛮とどうなるかは分からないが、片を付けた時点でどういう状況になっているかでこの先の道程が決まる。年内で全て終わらせることが出来るか、それともう少し時間が掛かるのか。それは諸葛亮次第だろう。

何もせずに手を拱いている、という選択をしてくれるのが一番楽だ。時間を掛けて徐々に力を奪っていき、気が付いたら滅びるしかないという状況に追い込んでやる方が遙かに楽なのだから。

だが同時に、それでは面白くないと感じている自分も居る。我ながら度し難いことだが、天下を統一しようというこの俺の前に立ちはだかる人間が、その程度の低能であって貰いたくはない。知勇の限りを尽くして争い、この手で天下を掴み取りたいと、そう願っている部分が確かにある。

諸葛亮。俺はどちらでも構わない。

だがどちらを選んでも、辛い結果が待ち受けていることだけは覚悟

しておいて貰いたいモンだ。

皆が手を繋いで笑って生きていける世界を作りたいという夢。
お前さんが自分のものだと思い込んでいる、甘ったれが描いたその夢を。

俺が壊してやるよ。それが本当に救いになるかどうかはお前さん次第だがな。

蝶の如く～158～（前書き）

ちょっと短い。

蝶の如く～158～

～蓮華　Ｓｉｄｅ～

南蛮と緊張状態が続いている益州へ向かう教経が、揚州へやって来た。言葉だけを聞けば怪訝に思うかも知れないが、これは既に決まっていたこと。姉様と冥琳から事前に書状でそう連絡があったのだ。ただ、その書状には少々受け入れがたい事実が記載してあったが。

――受け入れがたい事実。

教経は、あの馬鹿は、揚州に残された私達を余所に婚礼を――！

私の想いがどれ程のものか、分かっているはずなのに――！

それなのに私を揚州に放っておいて、他の女と長安で婚礼をしてしまうなんて――！

べ、別に私は他の女と婚礼をするのが許せないという訳ではない。そうではないけれど、私が居ない場所で、私に知らされることもなく、いつの間にか教経が他の女の『夫』になっているというその事実が、何とも私の心をざわつかせる。一体私という存在は、教経の心の中でどういう位置を占めているのだろうか。

考えてみても仕方がないことは分かっているが、どうしても考えてしまう。

しかも姉様と非常に仲睦まじい様子であり、無いことに姉様が『女性として』男性である教経に甘えていた、と言うのだから。化粧をした姉様はそれはそれは美しかったのだ、と余計な事まで教えてくれる人が居た。

その余計な人、親族として姉様の婚礼に出席した叔父様に拠れば、教経は着飾った姉様に対して『本当に綺麗だよ、雪蓮』とか『いつもと違って大人しいな？いつもこうならもっと可愛がってやるのに』とか、姉様の気を惹こうと下心の見え透いた世辞を並べ立てて姉様を騙していたそうだ。

姉様と冥琳が長安で婚礼が執り行われることを事前に知らせておいてくれたのは、そしてその様子を詳細に連絡してきてくれたのは正直正解だったと思う。もしその事実を叔父様の口から直接聞いていたら、『それ』をそのまま信じていたことだろう。『それ』というのは、下心云々のことだ。そしてきっと姉様と冥琳に、勿論教経にも、この私の想いがどれ程のものであるのかを二度と忘れることがないように、魂に刻み込んで貰う事になっただろうから。

ただでさえ苛ついていた私を余計に苛つかせてくれた叔父様は、余計な思惑を持って私にそのようなことを教えてくれたのだろう。基本的には私達姉妹のことを良く気に掛けてくれる、素晴らしい叔父だ。が、姉様に続いて私までもが教経とそういう関係になったことを知った時の叔父様は、少々面倒な人であった。……言葉を飾っても仕方がないのではっきり言ってしまえば、この上なく鬱陶しかった。教経に対して、非常に含むところがあるようだ。それが叔父様の発言に繋がっているのだろう。

本来であれば即座に叔父様には折檻を受けて頂かなければならないのだが、私の婚礼に出席するという重要な役目がある。婚礼前にそれに立ち合うべき立場に有る人間が失踪してしまったら大変だ。私の婚礼が終わったら、きっちりと、そしてしっかりとこの感謝の気持ちを伝える事にしようと思う。

教経が揚州に入ってから五日経過している。もうそろそろ、建業に到着しても良い頃だ。

待っている間、叔父様があること無いこと織り交ぜて頻りに教経に対して予断を持つように仕向けてきた。私が何も知らないと思っているのだろうか。

叔父様は、実は姉様と冥琳から書状が来ており、私が姉様の婚礼の際の教経の様子を既に知っていることを知らない。叔父様には後日虚言の報いを強かに受けて貰おうと決めて居たが、その決意が思わず揺らいでしまいそうになる程に鬱陶しい……この鬱陶しさに悩まされ続けるくらいなら、いっそ行方不明になって貰った方が良いのだろうか。でもそれだと婚礼が……。

――そうだ。誰かを適当に叔父様に仕立て上げれば良いのだ。叔父様が必要なのは婚礼の日だけだから。そうだ！その通りだ！そうすれば私はこの鬱陶しさから逃れられる――

「……蓮華様。落ち着いて下さい」

「何を言っているのかしら、思春。私は落ち着いているわよ？」

「はぁ……落ち着いていらっしゃる様には見えません」

思春が溜息を吐きながら私に意見してくる。

私が教経と男女の仲になった後、思春と話をした。私と一緒に居れば教経とは離れることになってしまう。思春が望むなら、教経に仕えてくれて構わない、と伝えた。

勿論、構わないはずがない。これまでずっと私に仕えてくれてきたし、揚州の防ぎを考えると思春には居て貰わなければ困る。けれど同時に、思春には私に気を使うことなくもっと自由に生きて貰いたいという気持ちもある。そうであればこその、発言であったのだ。その私の言葉に、『私の主君は飽くまで蓮華様です。教経様に惹かれているのは確かですが、それは女としてですから』、と答えてくれた。有り難い事だと思う。

まあその後で『教経様のことに関しては、例え蓮華様でも譲れない部分がありますが』、と余計な一言も付いていた気がするけれど。

「何処が落ち着いていないように見えるのかしら」
「……南海覇王を抜き身で持っている辺りでしょうか」
「ああ、これはあれよ、教経が来た時に料理を振る舞ってあげようと思って。これで野菜についた邪魔な虫を斬るのよ」
「……『切る』では無い辺りが意味深ですが……その虫の名は？」
「聞きたいの？孫ｓ」
「いえ！結構です！」

思春は私の言葉を遮って強い口調でそう言った。
悪い虫＜おじさま＞を斬り捨てようと思っていたけれど、思春に水を差されたことで少し冷静になれた。当初考えていた通り、叔父様には婚礼後に折檻を受けて貰う事にしよう。

「……どうやら少し落ち着かれたようですね」
「最初から落ち着いていたわよ？」
「はあ」
「そんな事より思春、貴女は何とも思わないの？」
「……何を仰っているのか分かりかねます」

「惚けないで。貴女だって分かっているでしょう？教経のことよ。貴女も面白く無い想いをしているのではないの？」

『教経』という言葉を耳にして、思春は少々言葉に詰まった。

「どうなの？思春」

「……そんなことはない、と言えば嘘になります」

「やっぱり」

「ですが」

「？」

「教経様も揚州に留まっている我らのことを全く考えなかった訳では無いと思います」

「どうしてそう思うのかしら」

「考えて居なかったのであれば、態々遠回りをして揚州に立ち寄ってから益州へ向かったりはしないのではないでしょうか」

「そうかしら」

「真相どうあれ、信じることも必要かと」

「……」

「……蓮華様」

「……分かっているわ」

「それならば宜しいのですが。……では、私はこれで失礼致します。準備をしなければなりませんので」

そう言って思春は足早に歩いて行った。

思春が言ったことは私にも分かっている。私だって教経のことは信じて居るつもりだ。けれど、それとこれとはまた話が別だとも思う。理性と感情が一致しないとでも言えばいいのだろうか。何とも、もどかしい。

何とも釈然としない心持ちのまま、建業の城門で教経を待っている。

昼過ぎには到着するという使者を受け、朝から文武百官が揃って迎え入れる準備に大わらわだった。私はと言えば、自分の準備もそこそこにまた埒もないことを考えて居た。

数日前から幾度も考えて分かった事は、私は不安を感じているのだ、ということ。私は、『教経にとっての私』が『私にとっての教経』と同等の価値を有するものであると勝手に思い込んでいた。けれど、そうではないのかも知れない、ということに思い当たり、その事が不安で仕方がないのだ。言葉としてはっきりとそれを把握出来ていなかった為に、情緒が不安定になっていたのだろう。

数日前から私の思考は堂々巡りに陥っている。

教経にとっての私は、実はそれ程重要ではないのではないか。そう考えた直ぐ後に、いやそんな事はない。きっと私が思っているように、私のことを掛け替え無く思ってくれている筈だと考えたり。

教経のことを考えて居ると、自分の度し難さに頭が痛くなる。少なくとも、教経と関わるまでの私は異性に対してこういった感情を持つことはなかった。だからこういう時にどう行動すれば良いのかが分からない。感情に従ってしまえば楽だと思うが、理知的な人間が好きな教経に嫌われてしまいそうだ。といって理性で押さえつけたとしても、どこか他人行儀になったりちょっとしたやりとりの中で酷い言葉を投げかけてしまいそうで。

教経と再会した時に、どう声を掛けたものだろうか。自分がまだ何も考えて居ないことに気が付いて、いくつか考えてみたが少々問題が在る。

『他の女と婚礼して良くものこのこと私の前に出てこられたわね？』

……却下。感情的に過ぎる。他に女が居る事なんて最初から分かっていたことだし、そこに拘りはない。

『私が居ないところで婚礼して、私は後回しなんて……ちょっと考えてくれても良かったと思うのだけれど？』

……却下。ちょっとはそう思うけれど、こんな事を言ったら面倒臭い女以外の何者でもない。教経にも立場というものが在る訳だし、私の都合だけで全てを決することが出来るはずもない。

『待っていたわ教経。さ、早く婚礼を行いましょう？』

……無難……だろうか？けれど、もし教経が私のことをきっちりと見通していた場合、教経は怯えてしまうかも知れない。何故怯えるのかよく分からないが、私が不機嫌になると教経は私に怯えているように見える。不機嫌と言う程不機嫌ではないが、それでも面白くは無いのだということを見抜いていた場合、この言葉を聞いて走って逃げ出すかも知れない。

そんな馬鹿なことを考えて居る私の視界に、教経達に違いない一団が飛び込んでくる。

もう時間が無い。

教経がやってくるまでに、何と言うかを決めてしまおうとして、結局決めることが出来ないまま教経を眼前に迎えてしまった。

「あ……」

何かを言わなければならないと焦る私が出せたのは、その一言だけだった。
そんな私に教経が掛けてくれた言葉は。

「……ただいま、蓮華」

その言葉と共に、私を軽く、そして優しく抱きしめてくれた。
ほんの数瞬でしかなかったけれど、安心してしまった。

教経は、私のことを掛け替えのないものとして想ってくれている。
それを実感させてくれる言葉だった。ただいま、という言葉は、私という存在が、教経にとっての家足り得ているということの証明だと思うから。教経の中で、私は余所の人では無く、自分が帰るべき場所にいるべき人間であるということだから。

たった一言だけで納得してしまう自分もどうかとは思うが、納得してしまったものは仕方がないではないか。

だから私も一言だけ、心を込めて返事をする。

「おかえりなさい、教経」と。

叔父様がどうなったのか?ですって?
教経に関してあること無いこと言っていた報いは強かに受けて貰っ

たわ。

これでもう鬱陶しいちょっかいを掛けてくるようなことはしないでしょう。

私と『私の夫』に関して。

蝶の如く～159～（前書き）

更新遅れました。

ネタがいくつか入ってますが、基本的にはあまり面白みのない話かも知れません。

蝶の如く～159～

～教経　Ｓｉｄｅ～

建業に到着した。

到着して直ぐに、蓮華達と婚礼を行った。亞莎も思春も蓮華も、眼福だったとだけ言っておこう。個人的には思春がずっと顔を赤くして俯いたまま、『な、何でしょうか？何かおかしいところがありますか？』等と言っていたのが良かったねぇ。誰かビデオ撮影してくれてりゃ良かったのに。まあ再生手段どころか電気さえもない訳だが。

ちなみに、孫静は相変わらずだった。『蓮華には前もって宛での貴様の振る舞いを伝えてあるからな！』という台詞と勝ち誇った顔から考えると、色々と余計な事を蓮華に言っていたのだろう。奴の言葉通りに蓮華が踊らされていた場合、俺が酷い目に遇うに違いないと思って戦々恐々としていたが、一緒に居る間蓮華は全くそんな素振りを見せなかった。そればかりか、俺ではなく孫静を見る蓮華の目が尋常でなく怖かった。要するに、蓮華は孫静の言葉に嘘が混じっていることなど分かって居たということだ。アレはきっと後でエラい目に遇ったことだろう……気に入らない奴だったが、心からご冥福をお祈りしたい。孫静ェ……成仏するんだってばよ？

もう亡くなった人間のことをとやかく言っても仕方がない。いや、まぁ死んでは居ないと思うけど。

現在、元々揚州に根付いている豪族達や山越族から、俺を招待したいという内々のお伺いが多数寄せられているらしい。行幸を得て地歩を固めておきたい、ということなのだろう。中々に抜け目がない

ことだ。らしい、というのは、その話を穏と亞莎から聞いているから知っているだけで、実際に俺に直接言ってきた奴が居なかったからだ。

益州へ早く入りたいが、誘いを全てにべもなく断っては角が立ちすぎる。揚州でも名家と言われている家のいくつかと、敢えて山越族の招待を受けようと考えて居る。揚州の名家の招待と山越族の招待を同等のものと見なすかのような態度を取る事になる。当然反感を抱かれるのだろうが、この一手で山越族は完全にこちら側に取り込むことが出来る。

中華の文化に浸っている者達は、向背常ならぬ者達ばかりだろう。それは今まで続いてきた戦乱から得た経験則とでも言うべきものであり、非難するには値しない。強いものが正義であり、約束など当てには出来ない。そういった世相を経験すれば、必然その中で生き残る為に強かにならざるを得ない。だが翻ってみれば、俺が力を持ち続け、彼らを真っ当に遇してやりさえすれば直ぐに靡いてくるという事に他ならない。そして現状、それだけの力を有しており、彼らを殊更に酷く遇するつもりはない。一時臍を曲げてしまったとしても、いずれこちらに靡くことになる。

山越族はそうはいかない。今までが今までだ。人ならざる者共として、正しく牛馬に等しい、いや、それ以下の扱いを受けてきたはずだ。中華との関係が決定的なものになる前に何があったのかは分からない。彼らが略奪をして回ったのかも知れないし、中華が彼らとの共生を拒んだのかも知れない。若しくはその両方が同時に発生したのかも知れない。いずれにせよ、現状の関係性では容易に信用は出来ないし、信頼など冗談でも口に出来る様なものではないだろう。

先に俺が与えた回答がどの程度の信憑性があるものなのか。それを

図る為にも、我が族の扱いというものがどれ程のものであるかを知りたい。であるから、態々揚州の名家と言われている家々が行幸を乞うているのと時を同じくして、同じものを乞うているのではないか。こちらの対応次第で、俺と平家に対する対応を変えてくるはずだ。今時点において、彼ら山越族の将来をこの俺に賭しても構わないと思わせるにはこの対応しかない。だがこれを行えば、少なくとも二世代は安泰だ。まあそれにしても、俺が生きてさえいれば、という限定的な条件が付いてくるのだろうが。

『顧』『陸』『朱』『張』。これらを纏めて『呉の四姓』と言う。元々は呉郡呉県の有名な四姓をそう呼んでいたことに由来しているが、あちらの世界の俺の周りでは三国志の影響か、『孫呉の四姓』と勘違いしている人間が多かった。顧氏と陸氏を代表する人物は有名だが、朱氏と張氏が誰のことを指しているのかを知っている人間は殆ど居なかったし。数多居る行幸を望む土着の豪族の中から数家選ぶとすれば、『呉の四姓』程周囲を納得させる事が出来る家はないだろう。そう考えて、彼らと山越族の招待を受けることに決めた。

行幸前、俺から事前に『出来るだけ質素に持て成してくれるように』と敢えて注文を付けた。乞われた行幸であり、俺が皇帝であるとしても、俺は贅を尽くして歓待されることは御免被りたかった。現代、それも日本で生きていただけに、食にはかなりうるさい方だと思うが、それ以外については特に拘りはないつもりだ。『持て成すに当たっては、先ず格式がなければ駄目だ』などと言うつもりもない。そもそもこちらの作法など詳細に知りはしないのだから。

にも関わらず、陸家以外の三家は贅を尽くして歓待してくれた。陸家に関しては、穏が俺の為人を知っていたことが大きいのだろう。だがそれ以外の三家は、俺の言葉を深読みしたようだ。最後に張家を訪れた際に、家長たる張温にその歓待ぶりについて理由を訊くと、『忠誠心を試されているのだと思った』と回答された。どうやら劉表達の死に様が、俺という人間が峻烈な人間であるという印象を植え付けているらしい。

一言言ってやろうと思ったが、そのまま放っておいた方が蓮華が楽になるだろうと思って止めておいた。

人は峻烈さを嫌い、穏和さを好む。
その二つを目の前にすれば、穏和さを慕い、そちらに親好を見せるのが普通だ。
だがいずれその穏和さに慣れることだろう。

――そして『慣れ』は『狎れ』に変わっていく。

飽くまでも自然に。そして、何処までも際限なく。それが己が身の破滅に繋がりかねない甘えでしかない事に気が付かずに『狎れていく』。

火と水とを比べれば、火の方が猛々しく、それを人は恐れる。だから火があると分かっている処へは近寄らない。その結果、不用意に死ぬ人間は中々出ない。だが水は違う。穏やかで和やかな雰囲気をたたえて人を容易に近付かせる。人はその穏やかな水に慣れ、そして狎れる。だが水は時に厳しい面を見せることがある。その結果、不用意に死ぬ人間が出てくる。

もし俺がその場で釈明し、峻烈であるといった印象を拭い去ってし

まうと、彼らは俺に狎れてくるかも知れない。狎れてきた場合に手厳しくやり込めて立場を分からせようとした際、恨みに思う奴が出て来てもおかしくはないのだ。それどころか、死んで貰うことになる事だってあるだろう。

ダンクーガを筆頭に、現在俺の周囲にいる奴らはその辺りの線引きはしっかりと出来る人間ばかりだが、モノを見る目がない人間が見れば馴れ馴れしく映ることだろう。そしてそれが自分にも許されるかも知れないと思うかも知れない。その結果、徐々に狎れて行き、目に余る振る舞いをして俺に処分されることになる。

それならば俺は火になった方が、恐れられていた方が良い。その下で、蓮華が水として穏和な対応を心掛ければ統治がしやすくなる。蓮華に対して慣れを見せたら、狎れぬように俺が釘を刺してやれば事足りる。それできちんとした距離感と緊張感をを保つ事が出来る。

呉にいる豪族達は蓮華に親しみを感じ、その意を汲んで動くようになるだろう。優しい君主である蓮華の上に、畏怖の対象としての俺が君臨する。そういった形の方が色々と無理が利く。蓮華から言えば角が立つことを、俺からの命令として指示すれば問題無い。かなり無理のある指示を出し、それを蓮華が穏当なものに落ち着かせるのだ。

要は出来レースだが、それを目の前で演じてやれば自分達を護る為に蓮華が俺に意見をしてくれているように映るだろう。そして穏当なものに変更させることが出来たとしても、蓮華は結局俺の基本方針を受け入れざるを得ない立場にあるのだということを理解することだろう。

「そう思っているんだが、甘いかな」

側に立つ司馬懿に、問いかけてみる。
コイツはやっぱり有能だった。何をやって貰うか色々と考え、また本人とも話をしたが、俺の近くに置いて貰いたいという本人の希望もあって、そのようにした。いつの間にか、親衛隊の軍師のような立場をしっかりと確保している。

そして、恐妻家でもある。周囲に対して敢えてそういう自分を見せているだけなのかも知れないと勘繰ったりもしたが、家庭訪問した際に張春華との力関係をまざまざと見せつけられた。政について話をしている時、張春華は全くといって良い程口を出してこなかったが、話が日常生活のものに移行すると、駄目亭主ぶりについて熱く語ってくれた。それを否定しようとする司馬懿にイイ笑顔を向けながら。そしてそれに対して強く出ることが出来ない司馬懿が居た。

それを見て何故か他人に思えなくてそう言うと、司馬懿も俺の事を他人に思えないと言っていた。俺はお前さん程尻に敷かれては居ない、といった具合で、半ばムキになって相手の方がより情けない男だ等と互いに言い合い、二人して張春華と司馬師と司馬昭に説教された。張春華はまだしも、司馬師と司馬昭って……ょぅじょに説教される、そろそろ三十路が見えてきたオッサン予備軍二名……出来る事なら端で見ている側の人間でありたかった。それ以外の表現でその時の心情を表現したくない。

全く関係ないが、俺は司馬師に嫌われていて、司馬昭には懐かれているようだ。二人に会った時、『ご機嫌如何かな？』と訊くと、司馬師には『たった今、悪くなりました』と即座に嫌みで切り返された。丁度良かったので『無理しなさんな。俺に会えて嬉しい癖に』と軽く言ってやると、余りの言い様に怒ってしまったのか、キツい目つきで顔を少し赤くしてそっぽを向いた。クックッ、俺に悪態吐くには五年ばかり早かったようだねぇ。まぁ、兎に角、嫌われてい

るらしい。司馬昭は不機嫌になった姉を傍らにニコニコ笑って挨拶をした後、俺の手を取って家の中へ案内してくれた。これがお年頃になれば、司馬師のようになるんだろうか。俺にはこの年頃の女の子のことはさっぱり分からん。

「打つ手を誤らなければ効果的でしょう。陛下次第ではありますが、今の陛下が道を誤ることが出来るとは思えませんから」

「お前さんがそう言うなら上手いことやれそうだな」

「保証は致しかねますが」

「決定に責任を持つのは俺の役目だ。お前のじゃない。ところで、道を誤ることが『出来る』とは思えない、とはどういう意味だね？明智君」

「……首をひっつかまれるであろう、ということですが、何処かに誤りが御座いますかな？」

「……成る程、経験者は語る、という訳だねぇ」

正直認めたくはないが、境遇が似ているだけにこうやって軽口を叩く仲になるのは早かった。互いにイイ笑顔で対峙し、互いを挑発し合うかのように嗤い合う。

「「……ハッハッハッ！」」

「……どっちもどっちだろ、アレ」

「どちらも自分の方がマシだと思ってるみたいだけど、程度に差があるだけで尻に敷かれてるには違いないって事が見えてないみたいだな」

「そうだな。強く生きろ」

「……何で俺にその言葉を吐いてるんだよ、高順」

「同類項ってのは自覚がないんだな。それとも無意識に自分を棚に上げるのか？」

「どういう意味だ？あぁ？」

「尻に敷かれてるのはお前だって同じだろってことだ」
「誰が誰の尻に敷かれてるって！？」
「？忠が地和の」
「高順が馬謖の、の間違いじゃないか？大体アレはそういうのじゃないってこの間言ったばかりだろうが！」
「俺と瑛はそういう関係じゃない！」
「町で若いの相手に暴れ回って瑛に説教されてたらしいじゃないか！？」
「そっちこそ一緒に町で食事している時、姉貴姉貴言って怒らせた挙げ句謝ってたそうじゃないか！？」
「「ちょっと表出ろやコラァ！」」
「……これが若さか」

ダンクーガと？忠があっちの方で何か騒いで居やぁがるが、どっちもどっちだな。同類項だってのをちゃんと自覚した方が良いぜ？で、オッサン。その台詞はサングラス掛けてないと言っちゃ駄目だ。

「まあ、それは脇に置いておくと致しましょう。……『呉の四姓』との調整は順調でしたか？」
「……順調と言えば順調だねぇ」

行幸を決定した際、司馬懿が面白い提案をしてきた。
『召の民が納めるべき租税は、その年の収穫・収益の五割と定める』という布告を全土に出すべきだ、と。それだけだと何てことはない提案だったんだがね。

司馬懿が併せて提案してきたのは、『召の民については、租税はそれを国に納めるだけで良い』という一文を敢えて最後に付け加えることだった。それを全土に布告することについて、一応『呉の四姓』に意見を聞いてみたが、特に反対はなかった。

それはそうだろう。何せ、当たり前のことを言っているのだ。だが、これが当たり前では済んでいないから民の生活が苦しい。

そもそも地方の豪族達は如何にして力を付けてきたのか。徴税とはそもそも中央から官吏を派遣して徴収するものだ。地方豪族はその地方の名士であり、民達を相手に何かしらの調整を行う場合、彼らが間に立った方が上手く行く場合が多い。それ故に彼らはこれを代行してスムーズに徴収する代わりに、租税の内からそれなりの報酬を得る。それぞれが抱える家業の傍らで、それをやって力を付けてきた。それは構わない。が、彼らは国家の目が届かないのを良い事に官吏と癒着し、過分に徴税し、決して少なくない租税を着服することがある。

だから、彼らからその権限を奪ってやるつもりなのだ。
平家の本拠とも言える涼州と雍州では、既に官吏を中央から派遣してその辺りの不正が行われないようにしてある。後は揚州、荊州、益州でそれを行うつもりだ。それぞれの地方の有力豪族に意見を聞き、反論がない事を確認した上で。

先に述べた通り、官吏自体が腐敗してそれを持ちかけることもあるだろう。
だから或る地方に任官した官吏は、先ず三年その地方で務めを果たさせるが、三年経ったら他の地方へやられる。その地方とは関わりが浅い、遠い地方へ。無論、移動費は国家が負担する。その家族の移動に掛かる経費も全てだ。多少水増ししやがっても許してやる。だから文句は言わせない。そしてまた三年後に移動する。それが嫌なら徴税には関わってはならない、としている。我欲に発する口利きの代償は、最悪死罪。これで俺が死んだ後も、官吏の腐敗が進むのを阻んでくれれば良いのだが。

「気が付かなかった、と言ったところですか」
「そうだろうな。気が付いたら反対しただろう。何せ、徴税権については完全に国のモノにするってンだからねぇ。国から命じられたと言って徴税する事は許されない訳だ。国が徴税官を派遣し、決められた分だけ徴税していく。中間に入ることで得ていた利益を得ることが出来なくなれば、自分達の財力が低下することになる。それはそのまま影響力の低下に繋がりかねないからな」
「ですがこれで事前に相談した実績は作ったということになります。後はなし崩しに彼らの力を削いでいってやるだけですな」
「俺は民の生活を良くしてやりたいからこれをやろうと思っているンだが、どうやらお前さんの思惑は違うみたいだな」
「権力というモノはその柄を握る者が少なければ少ない程宜しいのです」
「……中央集権に向けた第一歩、か？」
「それも絶対的な、です。中途半端は宜しくありません」
「拘るねぇ」
「拘ります。陛下を戴くのであればこそ、これが叶うと見込んでいるのです。その為にお仕えしたのですから。私が思い描く理想の国家像の一部だけでも実現させたいものです」

司馬懿には、某『フハハハッ！』のせいだろうが、元々かなり辛辣な人間性をイメージを持って居たが、こういう時のコイツは油断ならない権謀家の香りがする。ただ、コイツは自分の才能で何が出来るのかを試したいだけで、特に地位や名誉に執着はない。

「実現させてみろ。俺一人で天下を描くには、この天地は広すぎる。雪蓮と華琳に分けてやっても、まだ広い。俺が描くはずの天下を、お前が少々独自の工夫を加えて代わりに描く分には問題無かろう」
「……官僚制度について、温めてきた案があるのですが、それを試

してみても宜しいでしょうか？どちらかというと軍政に関わることなのですが」

「俺の名前で布告しろ。が、一旦は目を通させて貰う。許容出来ないもので無ければ認めてやるさ」

「有り難う御座います」

言っちゃいけないんだろうが、最近ちょっと遊び足りないんだよねぇ。明けても暮れても政について考えている。太原で太守をやり始めた時よりも遙かに忙しい。

だが政に興味を失い、享楽に耽るようになれば歴史が繰り返すことになる。此処で言う繰り返す歴史ってのは、まぁ要するに平家滅亡ってやつだ。だが今の平家には目の前の司馬懿を始め、優秀な人間が多く居る。彼らと共により望ましいシステムを作り上げるのが俺の仕事だ。望むと望まざるとに関わらず、皇帝となった以上は果たすべき義務というものが在る。

面白おかしく自由気ままに振る舞うのは、国家の大枠をしっかりと定めてから。そう決めているのだ。大枠が定まっていない状態では、臣下は碌な仕事が出来ない。『キャンパスに自由に絵を描いても構わない』と言われても、何処から何処までがキャンパスであるのかが分からなければ、描いた絵がキャンパスをはみ出してしまう事になる。だが大枠を作ってさえやれば、彼らはその範囲内で好き勝手にやれるようになる。

さっさと大枠を定めて、楽をしたいモンだ。

蝶の如く～１６０～（前書き）

もの凄く時間が掛かりました。
もげろ回ですが、これのせいで全く筆が進みませんでした……正直、１３１話の時以上の難産でした。

出てくる話というか、とにかく直截的な表現しか出てこなくて……

自分の見積もりが甘かった。

蝶の如く～１６０～

～穏　Ｓｉｄｅ～

我が家を訪問なさった後、教経様は山越族の集落へ行幸なさいました。

異民族であり、これまで揚州の豪族達と対立してきた自分達に、まさかそのような誉れが与えられるとは思っていなかったらしく、恐縮すること頻りであったそうです。行幸なされる直前に連絡を入れたこともあり、本当に質素な歓待になったようですが、真心の籠もった持て成しであったようで、教経様は本当に喜んで居られました。これで楔を打ち込むことが出来た、と仰っていました。これから徐々に取り込んでいくお積もりなのでしょう。私としても山越族を内偵してきた甲斐があったというものです。

今日は教経様の側近としてすっかり地歩を固めた感のある司馬懿さんが考案したいくつかの制度について、私の意見を聞きたいと教経様に居室に招かれて居ます。

司馬懿さんが提案しているのは二つ。

一つ目。

軍の編成上、都督の地位を創設すること。そしてその権限として、ある程度の行政に関する自由裁量を与えること。この先戦で勝利して獲得した土地で急を要する政治的判断が求められた際、何も出来ぬでは役に立たない。与えられる権限が大きい為、信頼が置け、かつ有能な人間でなければならないでしょうけどね～。

「教経様はどうお考えですかぁ～？」
「そうだな……創設しても良い。良いが、都督は常設の地位にはせず、その時々で平家の頭領がその要不要を鑑みて任命することにしようか」
「何故でしょうか～？」
「常設するにしてはその権限は大きい。どういう表現になるかは分からないが、事細かにその権能について記載した書類を後世まで引き継ぐ訳ではあるまい？俺や司馬懿から直接話を聞いて権能を理解している人間が居る内は良いが、そうでなくなった時それは遺された文章を如何に解釈するかで変わって来やがる。都合良く読み取り、より強大な権限を求めて画策するような奴が出てくるだろう」

少しゲンナリとした雰囲気でそう口にする。

「だから常設にはせず、必要に応じて頭領がこれを任ずることにする。要に応じて任ずるなら、その権能は必然的に要を満たすだけのものが与えられ、それ以上のものは与えられないはずだからな」
「その通りですね～。それで、何故そのようなお顔をなさっておられるのですか？」
「……後世の事まで考えてやるのは少し過保護な気もするが、そうしておかなければならない程凡庸な人間が間違って君主になっても、余程の過ちを犯さない限り国が成り立っていくように配慮しておかなければならないだろう。
本当はだ、後のことは後の人間でやってくれればそれで良いンだよ。平家の頭領として器量が不足していれば滅びるだけだ。それを子孫が選ぶならそれもまた良し。後々の平家の頭領の器量まで俺が保証してやれるはずもなし、その時々でその時代に生きている人間が最適だと思う選択をしてくれればそれで良い。俺は基本的にはそう思ってるンだ。
だがそう簡単に突き放す事を、今の俺の立場が許してくれない。『

国が滅びる』ということは、多くの民が側杖を喰って死んでいくことを意味している。それを『後世の奴らの責任だ』という一言で済ます訳には行かないだろう。出来るだけ滅びを先送ることが出来るような仕組みを遺してやることが俺にしてやれることだ。

そう思って居てもだ、後世の奴らの為に何くれと無く備えてやるってのはやっぱり気に食わないンだよ。備えてやること自体が気に入らないというよりは、やりたくないことをやらないという選択が許されない立場になっちまったって事が嫌なンだよ」

「結局やることになるのでしたら、良い方に良い方に考えた方が建設的だと思いますよ～？」

「……分かってるよ」

そう苦笑して会話を続ける。

「で、穏はどう思う？」

「臨時のものとする、というのは良い案だと思います。信任に値する人間が居り、かつその必要がある時にのみ与えられる地位であることを知らしめれば、後々問題になることもないでしょうし」

「そう思うか？」

「はい。それよりも、もう一つの案が気になりますね～♪」

司馬懿さんが提案している二つ目の案。それは人材の登用法についての案です。

これは画期的な案です。漢王朝の下で行われてきた郷挙里選制では、地方の有力者が中央へ官僚を推挙していました。それに因って地方の有力者が中央政府への影響力を増し、そのことで更に地方での地盤を強固なものとする。そういった弊害が出て来ていたのです。

それに対し、提示されている案では各郡に中正官という役職を新設

して中央から派遣し、郡内の優秀な人材をその能に応じて一品から九品に分けて評価し、これを推挙させるというやり方を採ろうというものでした。人品ではなく先ず能力によって評価させる。能力至上主義とも言える人材登用方針であり、またこれによって地方豪族の力を削いでいこうというものです。

これを考え出した司馬懿さんは、本当に優秀な人ですね～。問題もあるとは思いますが、利点と欠点とを差し引きすれば、現時点では利点の方が勝っているでしょう。

「……九品中正法、か」

『九品中正法』とはまた上手い名付けです。が、どうやら教経様はこの案の問題点に気付いていらっしゃるようです。

「どうかなさいましたか？」

「その制度だと中正官の権限が強すぎる。中正官に近い者や賄賂などを用いて近付ける者が有利になってしまう。信頼出来る人間が揃っている今は良い。だが将来、それもそう遠くない内に、そういった不公平が目立つようになるだろう。それが分かっていて放っておく訳には行かないな」

そう淡々と指摘する。

「……教経様には何か対案があるのですかぁ？」

「『対案無くして反論無し』、だろ。考えはあるにはある」

何か、面白いことを言いそうな。

そんな予感がします。

「『科挙』を導入しようと思う」
「科挙？」
「そうだ。全国で官吏となる為の試験を行い、その結果に応じて就ける官途を分ける。無論科挙の結果だけでその後の出世まで決めつける訳にはいかないが、官途に就く際に一旦は色分けしてしまおうという訳だ」
「試験、ですか？しかし……」
「当然今すぐという訳には行かないだろう。試験を行うにしても、それを理解出来るだけの学がある人間は少ないだろうからな。天下を定めてからの話になるが、その手の事が学べる私塾を支援したり、国が学舎を作っても良い。学ぶことが出来る場所を提供してやるつもりだ。兎に角、貴族や豪族だけではなく全ての人間に官途への門を開いてやる。１０年後を目処に科挙を導入してこの国の全ての才能を吸い上げることが出来る態勢を整えたい。
それまでは九品中正法で良いだろう。有能かつ不正を憎む類の人間は、今この創業の時であればこそ数多くいるからな。１０年同じ場所に留まることもさせないから、余程のことがない限り腐ることもないだろう。違う人間が見ることで、また違った類の人間が推挙されてくるであろうし、中正官についてはその辺りを考慮した人選にすべきだろう。様々な色を持った、様々な出自の人間を中正官とするつもりだ」

科挙。全国で試験を行い、優秀な人間を選抜しようという試み。出自に拘わらず、全ての人間に開かれた官途への門。この中華には数多の人間が存在する一方国家の官吏の数が限られている以上、それは狭き門になるでしょう。

ですが。
その狭き門を突破さえ出来れば。

それさえ出来れば、どんな人間でもどんな出自でも、官途へ就く事が叶うのです。才と能とを持ってこの国に生を受けた者達を余すところ無く吸い上げようというその企画に驚かされます。

「それも素晴らしい案ですね～。国中の才有る者を登用してしまおうという意欲が見えます。が、問題もまたあると思いますよ～？」

「何処に問題が在る？」

「学問をすることで知恵を付けた民達が、勝手気ままに振る舞ったり、平気で上を犯すようなことをするのではないでしょうか～？知識は人を成長させます。得た知識を以て様々に思いを巡らせた結果、国の失策を論うようになるでしょう。それが国家の体制を揺るがさない限りは問題有りませんが、揺るがすようになってしまう可能性があります。民が知識を付けることの益は国家にはさほど無く、むしろ弊害の方が大きいと思いますが、その辺りをどうお考えですか？」

「失策が確かに在ったのであれば、論われても致し方有るまい？失策続きの場合に国家転覆を謀るのもまた仕方ないと言えば仕方ないだろう。例えそれを謀ったとしても、多数の人間がそれに同調しなければなんの問題も無い。もしそれに同調する人間が多数居たとしても、それを押さえ込むことが叶うだけの人間が付き従ってくれていれば問題無い筈だ。国が滅ぶというなら、それはその時代に生きる人々の内の過半数を超える人間に愛想を尽かされているか、同じく過半数を超える人間が新しい理想を掲げている誰かの方がより魅力的であると考えているからだ。

国も家も、滅ぶには理由がある。それを棚上げにして、知識を与えることの危険性だけ取り上げるのは不公平だと思うぜ？犬や豚を飼うのであれば知識を与える必要は無いが、俺たちは国家という形態を採って社会共同体の最大利益を希求しようという訳だ。最大利益の中には当然『人としての幸福』も含まれる。

なぁ穏。人の幸福ってのは何処にあると思う？俺はな、自分の分限

を精一杯に使い切って生きていけることにこそ幸福があると思ってる。自己実現が出来ないこと程不幸なことはない。知識がなければ知恵は付かない。知恵のない人間に自己実現は叶わない。知恵が付き自分の器量が大きいと分かっても、それを振るう場所が社会の中で提供されなければ幸福とは言えない。

今の社会では生来の器量を育てることも、また僥倖により育ったとしても出自の低さからそれを振るうことが出来ない人間が多数居る。それは不幸だろう。その不幸が溢れているから漢王朝は滅ばざるを得なくなったのさ。だからそれを変えてやるのが、新しい秩序をもたらそうという俺たちの役目になるだろう。知識を付け知恵を得る機会を呉れて遣り、己の生まれを己の努力によって越えることが出来る、その一つの手段を国家が提供してやろうってンだよ。

それを提供してやっているにも関わらず、努力もせずに恵まれていない等と言うことは許さない。これがあることで、唯の不平屋が不当に高い評価を得ることが無くなるだろう。門が開かれているにも拘わらず努力をせずに不平を鳴らす人間に付き従いたいとは思うまい？ちょっとした騒動が起きても、体制側としては、奴らは努力をしていないという事が出来る。まぁ、そういった形で統治に利用することだって出来るのさ。制度ってのは所詮道具だ。使い様なんだよ」

「成る程～」

教経様は科挙を導入することによって国中の才能を集めようとしている、とそう思って居たのですが。その話しぶりからすると、教経様の中では才能を集めるというのは副次的な目的であるのでしょう。主目的は、生まれを、つまり身分を、越えることが出来る手段を民達に与えてやること。

利害だけを考えれば、民衆に知識を与えることは望ましくはありません。今のままで特に問題がないのですから、現状維持で構わない

はずです。にも関わらず、生まれに拠らず自己実現出来るように、教経様が言うところの『人の幸福』を能動的に追求出来るような社会を作ろうというのです。知恵の付いた民から、厳しい視線に晒されることになるのを分かった上で。

蓮華様や思春ちゃん、亞莎ちゃんが夢中になるのも何となく分かる気がしますね～。

それにつけても、教経様の話は私の知的好奇心をもの凄く刺激してくれます。それはもう、居ても立ってもいられなくなってしまいそうな程に。

～教経　Ｓｉｄｅ～

穏を相手に司馬懿からの提案について話し合い、今後の基本方針らしきものを出すことが出来たと思う。穏の反応からすると、基本的にこの線で話を進めていけばさほど反発は無さそうだ。蓮華や亞莎

だと、俺に対するひいき目も有るだろうし、そもそも俺が言うことを否定的に捉える事が出来るかどうかが疑問だったからな。

「教経様」
「なンだ？」
「官制について、実は腹案があったりするのではありませんかぁ～？」
「ふむ。それもあるにはある」

穏を見やると、期待に胸を膨らませているような顔をしている。膨らませるまでもなく元からデカいのは承知している。これは言葉の綾というものだ。

「……聞きたいのか？」
「是非に」

是非に、とせがまれて話さない訳にも行かない。現時点で俺が考えている官制について、説明をした。

俺が考えて居る官制は、三省六部。唐代の官制を先取りしようという訳だ。科挙の導入もこれを為すに必要となる官吏を創り出すのに必要なのだ。優秀な頭脳を選抜するというよりは、平均よりやや出来る程度の人間を必要とするだけ集めて有機的に組織する事の方が重要なのだ。無論、優秀な頭脳を選抜することも目的ではあるのだが。

突出した才能に依存する組織は脆い。優秀な人間が居る内は良いが、それが居なくなった時に政が停滞するようでは困る。理想は、明の官僚達だ。彼らは皇帝が極度の引き篭もりで全く政に関わらなかったとしても、国家の運営を問題なくやって見せた。そんな行政機構

を作り上げたい。

三省六部を導入することで、問題が出てくるであろう事も分かっている。俺は、官吏の仕事を明確に限定してやり、範囲外の仕事はさせないつもりだ。例え二つ三つ、いや全ての面で秀でた才を有する人材が居たとしても、その仕事は担当部を越えて行わせない。明確に、きっちりと仕事を各省各部で分けるつもりなのだ。だがそのことで、いずれ縄張り意識が生まれるに違いない。その縄張り意識によって、円滑な連携が出来なくなることもあるだろう。

しかし、その弊害よりもこれによってもたらされる利点の方が大きいと思っている。

大きな利点。三省六部に分けることで、権力の掌握が難しくなる事。

突出した才能が輩出され続け、かつその才能の持ち主が国家に対する忠誠を持って居る者ばかりであれば問題無いが、そんな都合の良い話があるはずがない。もし才能さえあれば全ての権力を掌握出来るような組織構造になっていれば、悪意のある個人や権力掌握後に変貌した暴君によって社会構造が破壊される可能性が有る。であれば、才さえあれば権力を集中して掌握出来るという組織にして置いては駄目だ。才があろうと器量があろうと、権力を中々に集中させることが出来ない組織としておくべきだろう。

互いを牽制する形を、如何に弊害にならぬように考えておくか。それもまた重要なことだが、残念ながら俺の頭じゃ良い案をひねり出せそうにはない。だからその辺りは、皆に任せることになる。良い案を考えて貰いたいものだ。穏も、よく考えてみて欲しい。

そんな事を話していた。自分でも思うが珍しく真面目に話をしていた。そう、真面目な話だったんだ。

そのはずだったんだが。

「はぁ～ん♪教経様～♪」

……なんだ、このべったりくっついてくるデカい乳は。

「穏、どうしたン」

「ん～、チュッ♪」

「だ……って……」

「はい、服を脱ぎましょうね～」

「おいおいおいおい」

「どうしたんですか～？」

「それはこっちの台詞だ！なんで盛ってンだよ！」

「教経様が悪いんですよ～。知的な話をされると興奮することを知っていて、あんな話をするんですからぁ～」

そう言いながら、穏がグイグイと躰を寄せてくる。確かに冥琳からそう聞いてはいたが、それは兵法書などを読むとそうなるという形でしか聞いていないんですが。俺の当惑など何処吹く風で、眼鏡を掛けた魔乳がグイグイと迫って来ている。

――俺のこの手が光って唸っている。

――魔乳を掴めと轟き叫んでいる。

「ばぁくれつ！ゴッド！フィンガー！」

「やぁ～だぁ～♪」

おお、素晴らしい柔らかさ。

じゃなくて。

「穏、ちょっと待て」
「待てません♪」
「じゃぁ、ちょっと話を聞け」
「……何ですかぁ？」
「雪蓮に俺との子供を為せ、と言われたからこんな事を」
「している訳ではありませんからね～？ちゃんと教経様の為人を踏まえた上で、こうしたいと思ったからしているんです。私の知的好奇心を、教経様なら満たしてくれる。こういう私でも、教経様なら受け入れてくれるかも知れない。そう思うからこそ、です」
「う」

真面目な顔をしてそう言い放つ穏に、返す言葉が見あたらず言葉に詰まる。

「……という訳で♪」

真面目な雰囲気から一転、少々淫蕩な顔付きをして、さわさわさわさわと内ももの辺りからあの周辺にタッチしてくる。ニッ○ツロマンポルノかよ。敢えて右から読ませて貰うが『国天んらんい師軍』とかいうタイトルになりそうだなおい。

「い、いや、ちょっと待て。流石にこうなし崩しな感じで致すのはどうかと思う」
「ではどのような感じで致すのですか？」
「致すのは確定なのか」
「この状況で放っておかれる私の身になって下さいね～。それとも、お嫌ですか？」

嫌ってことはない。
穏は眼鏡を掛けている。これだけで大体のことはクリア出来る。

だが。だがしかし！これだと乳の誘惑に負けたって感じになるじゃないか！眼鏡ではなく、今もこの右手に感じる魔乳の誘惑に負けたとあっては、眼鏡神様に申し訳が立たん。

それにしても、この魔乳のさわり心地は凄いね。

「教経様も嫌ではないということで良いんですよね～？」

鼻の頭に眼鏡を掛けて、上目遣いでこちらを見上げてくる。

……良いねぇ。俺は眼鏡属性持ちなんだよねぇ。そして、麦茶が好きなんだよねぇ。この世界の眼鏡は全部俺のだ！麦茶は飲む為にあるのだ！掛けない眼鏡や飲まない麦茶などに価値はない！なんだかよく分からんが、兎に角もう辛抱堪らんッ！

「嫌いどころかむしろ大好物だぁッ！」

「やぁ～ん♪」

俺が飛びかかっているような、そんな遣り取りに見えるだろう？押し倒されているんだぜ、これ……

サウザーのように引かず・媚びず・顧みなかった結果、俺の謚が性帝になるであろう未来が予測出来るようになった。俺の死に様はきっと腹上死になるだろう。俺の嫁さん多すぎるんじゃないのか？今更の話ではあるが。

穏との相性は、これまた良かった。眼鏡に萌えたのもそうだし、穏はドが付く程のMかもしれない。破瓜の血を流しながら、痛いけど気持ち良いとか何とか言っていたからねぇ。痛いからの間違いじゃないのかと問い詰めると、『痛いのが気持ち良いですぅ』と返してきたし、言葉攻めにも弱そうだ。

「教経様ぁ～」

「……もう何も出んぞ、俺ぁ。搾り取れるだけ搾って行きやがってからに……」

「身繕いをしようと思ったら立てないんですよ～」

「俺も腰が痛い」

「身繕いはこのままするにしても、家に帰れないですよ～」

……俺の発言はなかったことになっているのね……

「だから、だっこ～♪」

「へ？」

這い寄ってきてそのまま俺に縋り付いてくる。凄いまとわりつき方だな、穏。

「抱っこして外歩く訳には行かないだろ？」

「でも立てない～」

「はぁ……ンじゃ泊まっていけば良い」

言った瞬間、穏の眼鏡が光った気がする。こう、キラーン☆と。

「じゃあ、今日は朝までずっと一緒に居て貰いますね～♪」

しまった！これは陸遜の罠だ！

「だから俺はもう……」

「……今度は教経様の好きなように私を攻めて下さいね～」

俺の好きなように、だとッ！？

此処はやはり最後に眼鏡に蝶・サイコー！するのは譲れないな。シチュエーションはどうするか……穏は虐め甲斐があるからなぁ。俺が教師で穏が生徒……いや、此処は敢えて穏が先生で……手取り足取り教えるつもりが生徒は性徒で……彼の性技もとい正義に堪らなくなった先生は……おお！余りのエロさにマイッチング！

結局翌朝、陸家に別件で再度行幸することになった。責任を取らなきゃならないという義務感よりも、散々肌を合わせた結果愛着というか、執着が出来たからだけど。さほど日を空けずに訪れた俺を見て、最初善からぬ事を想像していたらしいが、事が穏との関係の話に及ぶとそれはもう嬉しそうにこう言われた。

――『どうぞ持って行って下さい』と。

聞けば、穏の眼鏡に適う程の男が居らず、今までずっと浮いた話もなくやって来ていたのだそうだ。書物など知的興奮を得るとそれが性的興奮に直結していることが判明してからは、より一層そういった事について期待をしていなかったのだと。そこに願ってもない相手から願ってもない申し入れがあった、ということらしい。穏のそ

の性癖が気持ち悪くないのか、と聞かれた時に、即座に『全く』と切り返したら、相手の方が驚いていた。

うん、まぁ分かるよ。普通気持ち悪いと思うんだろう。けどねぇ、ああいう穏だからこそ、ああいうプレイが出来ると考えると、それは貴重な性癖であって保護すべきで御座います事よ！と言うかそういう癖があろうと無かろうと眼鏡は正義！眼鏡さえかけて居ればなんだってチャームポイントに変わるに決まってるだろうが！あぁ！？俺はなぁ、眼鏡が好きなんだよ！異論は受け付けんッ！眼鏡の良さが分からん奴はクズだ！人間の出来損ないなンだよ！

……今度はどんなシチュでやろうかなぁ……愉しみだねぇ……

蝶の如く～１６１～

～朱里　Ｓｉｄｅ～

平教経が南蛮討伐の為に移動した。

細作が、長安の宮中ではそう言われているとの報告を上げてきた。
しかしその旅程を見ると、途中で何故か揚州へ移動している。全ては策の内かも知れない。揚州で孫家の兵を糾合し、いきなり攻め込んでくることも考えられる。

徐州へ警戒するよう伝える書状を書き連ね、直ぐに使者を送る。

「孔明殿」

一段落付いたところで、そう声を掛けられる。
声を掛けてきたのは、沮授さんだった。

「一別以来、お変わり有りませんか？」
「ええ。つつがなく過ごせています」
「……嘘は頂けませんな。睡眠時間が不足しておられるのでは？目の下に隈ができておられますが」
「……睡眠時間の不足と袁家の滅亡。どちらかを採れと言われたらどちらを採りますか？」

そう切り返すと、何とも言えぬ苦い表情になって黙ってしまった。

「……今のは少し狡い言い方であったかも知れませんね」
「いえ、構いません。兎に角、ご自愛下さい。我々で可能な仕事に

ついては、全て振って頂きたいものです」
「今お願いしているもので全てですよ」
「そうですか」

今、沮授さん達にお願いしていること。それは、烏丸と高句麗との出兵交渉。

烏丸と高句麗は、麗に従う。その確約を得ることが出来た。だが、それらは麗が召と同等かそれ以上の力があるということを前提とした誓いであって、同等かそれ以下であることを知らさずに交わしたものだ。ここで烏丸と高句麗に出兵を要請するに当たって、その辺りを如何に見せないようにして交渉し、どれだけの兵を差し出させるかが問題になる。

この交渉は、かなり難しいだろう。出兵要請をするということは、どの程度かは分からぬにせよ、こちらの台所事情が苦しい事を意味している。にも関わらず、こちらは負けそうであるという事実をひた隠しにしなければならない。そうでなければ、烏丸はまだしも高句麗は絶対に裏切るだろう。

高句麗の現在の王は、位宮。自己顕示欲が旺盛であり、領土欲もまた旺盛そうだ。父の死後、兄を追放した手際から見て狡猾であろう。またそれ故に利に敏そうでもある。それが彼に対する私の評価だ。これを向こうに回して、弱みを見せずに派兵させることは難しい。

「高句麗との調整は如何です」
「中々に難しいですな。今は先方に面通しをしている段階ですから現状について何とでも言えますが、出兵を要請するとなると途端に難易度が上がります。要請するに適当な理由というものがあれば良いのですが、それは望むべくもありませんから」

『望むべくも無い』。沮授さんは確かにそう言った。それはつまり、適当な理由というものは考え出すことが出来ているが、その理由を現出する事が出来ないだろうと考えているということ。

「その理由を創り出す用意が私にあるとしたらどうです」

「……無理でしょう。平家に勝つなど」

やはり、彼は優秀だ。適当な理由は、平家に勝つ事に拠ってしか生まれない。恐らく、彼が考えている使者の口上は、私が考えて居るそれとそう変わりがないものだろう。

「『国内で皇帝を僭称していた平家の討伐に乗り出し、先頃勝利を収めた。来る年に、大規模な決戦に臨んでくる事は間違いない。麗だけでも相手出来るが、やはりそれなりの被害は覚悟せざるを得ない状況だ。ここで派兵して貰えれば、その分だけ楽になる。言い方は悪いが、尖兵を派遣することで麗に対する忠誠を示して貰いたい』。そう言う事が出来るなら、位宮自身を引っ張り出すことすら出来ると思いますが、その為には先ず平家に勝ったという事実が必要です。出来ますか？それを用意することが」

「出来ます」

出来ると言いきった私に、沮授さんは続ける言葉を無くした。

「確かに現状で平家に、平教経に戦で勝つのは難しいかも知れません。ですが、それは彼の率いる部隊を向こうに回して戦うから難しいという判断になるのであって、彼がいないところでなら勝利を収めることはそれ程難しいとは思いません。何故なら、それは局地戦に過ぎないからです。

平教経は局地戦で敗北することに何の感想も抱かないでしょう。戦

に負けることよりも、戦で有能な配下が死んでしまうことの方をこそ問題視するでしょう。で有れば、勝てる可能性がさほどにない場合、配下の将が撤退したとしてもそれを問題にして処罰をするような真似をしないでしょう。これまで見てきた彼の為人から考えれば、むしろ積極的に撤退しろと配下に言っていたとしても不思議ではありません」

そして恐らくは、そう言っているはずなのだ。平教経は、出立前に弘農に、そして宛にも立ち寄っている。今、揚州にも立ち寄ろうとしている。それはつまり、自分がいない場所が攻められた場合、一時的に敗退しても構わないという事を確かに伝える為に赴いているのではないのか。他でもない皇帝自身の口からそう伝えられることで、配下の者は撤退を考えることが出来る。

「つまり孔明殿は」

「弘農、宛、建業。この何れかを攻めようと思っています。それが何処になるのかは、残念ながら直前までお伝えすることは出来ませんが」

「まだ決めていない？」

「ええ。平教経が南蛮へ向けて本格的に動き始めた時点で最も手薄である箇所を攻める積もりです」

「方針が定まっていないという事ですか？」

「臨機応変、と言って貰いたいですね。攻めるという大方針は決まっていて、何処をどう攻めるかが問題になっているのですから。目的を達する為の方策が問題になっているだけです」

「しかし勝てますかな」

沮授さんも田豊さんも、平家恐怖症とでも言うべき心疾に罹っているようだ。平家を恐れること虎の如く、端から勝算が少ないと考えている。

しかしそれはとんでもない思い違いであり、思い込みも甚だしい。

全体を見れば、優位に立っているのは平家。それは間違いない。だが、平家と向かい合う際に、例えば平家が并州へ三割、エン州へ四割、徐州へ三割の割合で兵力を分散して攻めて来たとする。それに対して、袁家も并州へ三割、エン州へ四割、徐州へ三割の割合で兵力を分散して守るなど愚の骨頂だ。それでは地力の差がそのまま勝敗を決することになってしまうではないか。その場合は、并州へ四割、エン州へ五割を割り振った上で勝利を掴み、徐州は残りの一割で時間稼ぎを行わせる。一割が全滅したとしても、二方面で勝利出来るのであれば決して無駄死にはならない。そしてその結果、勝利を掴むことが出来るだろう。

この形が少々変わるだけだ。袁家が攻め、平家が守るという形に。局地的に優位を創り出せば、局地戦には勝てる。局地戦における勝利を、平家に勝利したと大々的に喧伝すれば良い。それに因って兵の士気は揚がり、また派兵交渉も順調に進めることが出来るはずだ。

「私はそう思って居ますが？」

「……それであれば、確かに……！」

「武器・糧食については、審配さん達に集めて貰っています。後は、時が到るのを待つのみです」

「この度も麹義殿と私で動くのでしょうか？」

「私の発案で兵を動かすのは二度目になります。曹操と争う際に麹義さんと沮授さんを動かしたことは、平家側も承知しているはずです。ですから、二人には徐州へ行って貰います」

「徐州へ、ですか」

「はい。審配さん達に集めて貰った糧食の内、既にいくらかを徐州へ送ってあります。目端が利くものが見れば、こちらの意図を読み

取ったと判断して本国へ報告してくれることでしょう。そうやってそちらに注目を集めておいて、私は張コウさん・田豊さんと共に弘農か宛へ攻め入ろうと思っています」

「分かりました。精々秘密裏に移動することに致します」

「そうして下さい。その方が真実味がありますから」

「平家に悟られずに移動することが成功してしまった場合は如何致しましょうか」

「特に変わったことをする必要はありません。自領と接している土地へ細作を放たない訳がないのです。突如湧いて出た二人に、揚州は緊張するでしょう。その反応が、平家の目を徐州へ向けることに繋がります。どちらに転んでも全ては私の策の内です」

一度、しかも局地戦に負けた程度では平家はびくともしないだろう。しかし袁家にとっては意味のある勝利だ。常勝不敗の軍である平家軍を局地戦とは言え打ち破ったという実績は大きな価値を持つ。それによって軍内部にある閉塞感を取り払うことが出来るだろう。自分達でも勝てるのだという希望と、平家を打倒しようという情熱とを取り戻すことが出来るだろう。負けぬ為に戦うのではなく、勝利する為に戦う集団を組織出来るのだ。

まずは、先勝させて貰う。簡単とは言えないが、此処で勝つ事は出来る。いや、勝ってみせる。その後決戦に臨むことになるだろう。決して勝ち目は多くないが、勝負に出ることが出来るだけの状況は整うと思う。

私は平家の優秀な軍師達を向こうに回して、智を競い合うことになる。郭嘉、賈駆、周瑜、曹操。誰が相手でも手強い相手になるだろうが、私が向かい合うことになるのはその内の誰でもないという予感がある。そして、何故だか理由もなくそれを確信している。

――向かい合うことになるのは『鳳の雛』だと。

～詠　Ｓｉｄｅ～

教経と離れて再び月の側に居ることになったボクは、目下袁家の襲来を想定した戦略・戦術について煮詰めている。平家の内情が分かっている身としては、一番危ういのはやっぱり此処だと思う。外から見た場合でも、きっと此処が一番歪に映るに違いない。

弘農にいる将を思い浮かべてみれば分かる。

恋、朔、焔耶。

皆突出する傾向がある武将と認識されているだろう。

ねねは随分改善されてはいるものの、ともすれば恋に引き摺られて

暴走しかねない。それも、普段の恋至上主義的言動から判明しているだろう。

そして何より、月は戦向きの性格をしていない。

そうやって各人の最も強く印象に残るであろう部分だけを切り取って並べてみれば、宛や建業に比べると均整を欠いているように見えるはずだ。

……ボクが袁家に仕えていたなら、教経が南蛮へ行っているこの間に三都市の内の何れかを陥とす為に行動を起こす。

教経は局地戦での勝利よりボク達の方が大切だと言い切った。らしい価値観だし、その考え方自体はボクも正しいと思う。この世に同じ人は二人と居ない。どう育てたとしても、誰かと全く同じ人間にはならない。本人がそうなろうと志したとしても、なれはしない。誰かを喪うということは、決して埋め合わせることが出来ない穴が出来るということ。だからこそ無理はするなと言っている。

だけど、袁家にとっては話が違う。その勝利によって袁家は平家に敵しうるのだということを内外に印象付けることが出来る。特に家中への効果を考えれば、その勝利は価値あるものになる。勝利によって家中は勢い付くだろう。それが一時的なもので終わるのか、その後も継続するのかは、偏に先方の軍師の手腕とその後も続くであろう一連の戦の結果に拠る。

恐らく、此処で勝負を掛けてくるはずだ。勝負をするなら勝ち易きに勝つ事を考えるだろう。平家の領地の内、最も安定していないのは揚州。最も将が手薄なのは弘農。このどちらかに寄せてくるのは間違いない。そしてボクの予測では、途中経過がどうあろうと結局

弘農に攻め寄せることになる。勝ち易きに勝つ事を考えて兵を出してくる以上、弘農に展開している約3万の平家軍を越える兵数で攻め込んで来るであろう事は想像に難くない。

ボクの計算では、４万までなら野戦でも簡単に膠着状態を作り出せる。ある程度の危険を冒すことになるが、勝つ事だって出来るだろう。だがそれ以上になってくると、こちらもそれなりの損害を覚悟する必要がある。５万を越え、６万に達する様だと、相手側の策によっては一呑みにされてしまう可能性だってある。そうなった時は籠城して専守防衛に徹することを考えたが、堅固な城ではないし全軍を収容することは叶わない。収容しきれなかった隊を城外に展開し城内と連携して迎え撃つとしても、分断されてしまうとやっかいだ。城内にいる隊は良い。門を固く閉ざして防戦に徹すれば暫くは保つだろう。だが城外の隊は、敵のほぼ全軍を相手にしなければならない。その結末は見えている。そして城外の隊が全滅すれば、より増大した兵力差の前に城内も制圧されてしまうことになるだろう。

アイツはそれが分かっていて、ああ言ったのかも知れない。勝とうとするとどうしても無理をせざるを得ない状況を迎えそうなら、最初から勝負をしない。その選択肢によって、絶対に勝てる場所まで退く事が出来る。

函谷関。ここでなら、百戦して百勝する自信がある。城壁は高く、その厚みも中華で一番と言って良い。勝つ為には危険を冒す必要がある。だが函谷関があるならその危険は大幅に減少させることが出来る。ある程度の兵を守備に回し残りを函谷関の外に兵を展開、その部隊を敵にワザと突破させ函谷関と挟み込んで殲滅する、といったことも可能だ。いつか教経が考えていたように、火の水を使っても面白いだろう。どうするにせよ、確固たる地盤と強固な城壁が、ボク達に主導権を与えてくれる。兵達だって此処が最終防衛線であ

ることを認識しているだろうし、先ず間違いなく士気を保ったまま戦い続けることが出来るだろう。

「……詠ちゃん」

「……まぁ、当然よね。函谷関にボクが居るだけで守備は完璧に出来るのに、強力な切り札まで備えることになる訳だから」

「詠ちゃん！」

「うわっ……ど、どうしたのよ月！？」

突然の月からの呼びかけにそう応えると、月は珍しく不満げな顔をしていた。

「もう、何度呼びかけたと思ってるの？」

「え～っと……三度くらい？」

「五度！」

「そんなに！？」

「詠ちゃん、何を考えていたの？首を傾げたり頷いたり忙しかったけど？」

あ、あはは……そんな事してたんだ……全く気が付かなかった……

「こ、この先の事を考えていたのよ」

「先の事？」

「……そう」

敢えて一呼吸置いて、月を正面から見つめる。落ち着いていて自然体。不安は感じていないように見える。と言って、先の事を想定していないから故の自然体でも無さそうな。そんな感じがする。

「きっと此処に……」

「……攻めてくるんだよね？袁紹さんが」
「……月も分かってたんだ」
「ご主人様と詠ちゃんが来る前に、朔さんに恋さん、ねねちゃんに焔耶さんと話をしたの。皆此処が手薄だと思われているに違いないからここに来るだろうって。私もそう思うの。詠ちゃんもそう思ったんだね」
「うん。けどそれは別に」
「分かってるよ、詠ちゃん。私達の客観的な評価を考えると妥当な結論だと思う」

……驚いた。
月は確かに頭が良い方だ。ボクの献策の内容だって、それなりに理解して許可していたんだから。でも、何と言えば良いのか、ちょっと違う。今までの、ボクがよく知っている月とは違う。何処がどう違うのか言ってみろと言われると、上手く表現出来ないけど。それでも、ちょっと違うと思う。

「……ねぇ月」
「なぁに？詠ちゃん」
「何かあった？」
「何が？」
「いや、何て言うかさ、月がちょっと変わった様な気がして」
「そう？」
「ん～、ボクも上手く言えない。暫く会ってなかったから、自分の記憶だと思い込んで勝手に月の肖像を心中に描いていて、それと違うって感じているだけかも知れないし。まあ、気にしないでよ」
「？うん。分かった」

袁紹が攻めてきた時月はどうしようと思っているのか。それが気になる。ボクが指摘する前に、月達は自分でその結論を導き出してい

る。月が口にした理由からして、ボクと同じような思考を辿ったに違いない。では、その先の展望はどうだろうか。同じような事を考え出していたのだろうか。それとも、また別の方策を導き出しているのか。そこの所が気になる。

そう思って訊けば、撤退を考えているとのことだった。

「敵の規模に因らず撤退するって言うの？」

「うん」

「……一応訊くけど、どうして？」

「『戦場で臨機応変に』、というのは自分達には向いて居ないと思うって皆で結論を出したの。朔さんはまだしも、恋さんは夢中になる所があるし、ねねちゃんはその恋さんに引き摺られる可能性が有る。焔耶さんは、自分をしっかり御する自信がない。そう言っていたから」

「月自身はどう思ってるの？」

「私は……最初から犠牲が少なくなる方策があるならそちらの方を選びたいから、かな。ご主人様は気にしなくても良いって言ってくれているし、付き従いたいという人達を引き連れて函谷関まで撤退した方が後がやりやすいと思うの」

「やりやすい？」

「うん。平地で向かい合った後衆寡敵敵せず函谷関に撤退すると相手は勢い付いてしまうし、こちらは犠牲の多寡に拠らず敗軍ということで士気が下がってしまう。それなら中途半端はせずに、最初から函谷関に拠って抗戦した方が良い。函谷関であれば負けない戦いをするのは容易だし、機を見て勝ちに行く戦い方が出来るんじゃないかなって。

……間違ってたら言ってくれると嬉しいな」

「間違ってないと思うわ、月。ボクはそれが一番賢明な選択だと思う」

「本当？」
「うん。そう思うよ」
「……良かった」

仄かに、月が笑う。
その笑顔は、私が記憶している、遠慮したような、消え入りそうな月の笑顔ではなく。
控えめだけど柔和な、本当に美しい笑顔だった。

やっぱり、月は少し変わったんだと思う。強くなったような、そんな気がする。
月が本当に変わったのだとボクが実感するのは、もうちょっと先の話だ。

もうちょっとだけ、先の。

蝶の如く～１６２～

～高順　Ｓｉｄｅ～

大将と共に南蛮を討伐すべく移動している俺たちは、荊州へ入った。荊州へ入って早々、大将は黄忠と馬良に宛と建業へ後詰めが出来るように準備しておくべし、と命じた。つい数日前までは余裕綽々というか、そう張り詰めた感じは無かったんだが。大将をそう変えたのは、司馬懿からもたらされた情報だった。

――――袁家が密かに徐州へ兵を集めようとしているかもしれない。

細作によれば、既に糧食が徐州へ流入してきているらしい。その総量ははっきりしていないらしいが、かなりのものになるそうだ。徐々にではあるが確実に集まって来ている糧食の量から考えて、徐州へ兵を集めようとしているのではないかと言っている。

「こりゃ揚州が危ないっていう事なのか？」

そう言った俺に、？忠が絡んでくる。

「それ以外にどう解釈するんだよ、高順」
「知るか。俺は何か引っ掛かってるだけだ」
「……ダンクーガ、何が引っ掛かってる？」
「分からねぇよ。分からねぇからもどかしい思いをしてるんじゃないか」
「しどろもどろでも論理立って無くても、何でも構わんから言ってみろ。思いつくままに垂れ流してみろ」

大将に言われて、考えていることを少しずつ口にしてみる。
俺は、何が引っ掛かっているのか。上手く言えないが、答えはそれじゃない気がする。当て嵌まり過ぎていると言うか、分かり易すぎると言えば良いのか。

徐州へ人と物とを集中させる。

それに拠って平家＜ウチ＞の不意を打ってやろうってんなら、この時点では絶対に知られてはならない筈だ。頭を殴ってやると叫びながら頭に殴り掛かってきた奴に対して、そのまま大人しく殴られてやる奴なんて居ない。何も言わずに殴る方が良いし、言うにしても絶対殴れると思った時にそう言ってやるだろう。

それがバレて、しかも相当に早い時期に、しまったら困るんじゃないのか。それを知ることが出来たことは運が良かったのかとも思ったが、そんな都合の良い話が起こりうるのか。知り得たこと自体がおかしいんじゃないか。そう言った。

「まぁ確かにそうかも知れんがねぇ。司馬懿、お前さんはどう思う」
「……根拠は高順殿とは異なりますが、十中九まで陽動だと思います」
「何故そう言い切れる？」
「現在の麗には、大きな謀を企画出来る者で諸葛亮以上の者は居りますまい。その諸葛亮には以前ものの見事に謀られましたからなぁ。その経験からすると、今回のこれは陽動であろうと思われるのです」
「以前謀られた、とは何時のことだ？諸葛亮の使者となって華琳に調略を仕掛けたことか？」
「いえいえ。幽州に諸葛亮が監禁されている、という情報を正しいものとして稟様にお伝えしてしまったことです」
「……あぁ、あったな。そんな事が」

「ええ」
「で?その経験の何が、徐州での動きは陽動だとお前さんに言わせしめるンだ?」
「あの折は3つの情報を掴むことが出来ました。その中から、定石通りにモノを考えた結果最も確度が高いと思われた幽州に監禁されていると考えました」

司馬懿が滔々と語り始める。大将はその司馬懿に先を続けろと言わんばかりに黙っている。

「徐州への物資集積の件、定石通りに考えれば徐州から建業へ攻め掛かってくるという判断になると思います。何せ、物資を移動させているのですから。最も目に付く人の移動は行って居らず、集めている糧食にしても一度に運んできている量は少ないものです。兎に角目に付かぬように付かぬようにと気を付けての集積。露見させぬ為に細心の注意を払っていることから見て、建業への侵攻は間違いなく企画されているモノと判断するのが妥当でしょうからな。が、この度もそれは陽動でしょう。『優秀であればこそ、同じ手を二度使うことはない』。そう思うのが人の性という物でしょうが、それを利用してくる可能性が高いと思います。最も与しやすいのは、詠様を配したとは言え弘農であるのは間違いありません。諸葛亮が目的とするところに思いを致せば、その目指すところは弘農の陥落以外にはありますまい」

司馬懿は静かに、だが力強くそう言った。

「やはり弘農か」
「私であれば弘農から目を逸らす為に打てる手立ては全て打ちます。例えば、洛陽に駐屯している兵からいくらかを引き抜いて再編し、その上で兵を宛へ向けて進発させ、途中で進路を変更し弘農を急襲

します。引き抜かれた兵を再編して、引き抜いた方面へ再投入することを想像していたとしても、物理的に備えていなければ動揺がないというだけのことで、優位に戦を進めることが出来るでしょうから」

「皆には撤退しても構わないと言ってある。先の様子からすれば、さほど心配はいらぬと思うがねぇ」

「何の障害もなく撤退出来れば、ですな。平家軍に痛手を与える為に、出来れば後一手策を弄したいところです」

「具体的にはどのような策がある？」

「弘農の責任者である董卓殿には陛下と同じく甘い所がお有りになるとお見受け致します。民を見捨てる事はその性格に適いますまい。何処かの町の有力者に大金と、征服後の身の安全、財産の保証、出世、女。これらを呉れて遣る代わりに、董卓殿に付き従おうとする民達への撤退指示が出た際に、町の者を皆巻き込んで遅れて撤退行動を取らせるのです。そして大軍を以てその民達を皆殺しにせんとします。果たしてこれを見捨てて予定通りに撤退致しますかな？」

「……しないだろうな」

大将は苦虫を噛み潰したような顔をしている。

それはそうだろう。恐らく大将は、董卓が戦場に立つことを避けたかったはずだ。だから撤退しても構わないと伝えた。だが、その思惑は司馬懿が言ったような策で覆される可能性が有る。

正攻法というか、何というか。純粋に軍事で決着を付けるなら、平家に死角は少ないと思う。けど、話が謀略、それも汚いものを絡めて、という話になるとそうはいかない。大将は、自分の謀略の結果民が困窮することが分かっていてもそれが平家の民でなければ気にせずにやる処があるが、策に必要な前提条件として平家の民で無くとも民の犠牲を折り込んで敵を陥れようとするような謀略を考えつくような人間じゃない。想像も出来ないことについて、対処法を考

えつくはずがない。現に今、そういった事があった場合の対処法は考えていなかったようだからな。

「大将、どうするんだ？兵を一旦返すか？」

「……それは駄目だ。起こっても居ない将来の不安要素だけで一旦決めたこの遠征を取り止めることはない。この準備にどれ位の期間と費用が掛かっていると思っている？大体弘農に限らず何処かへ攻め掛かって来るであろうことは想定内であり、またそれに対する準備はさせてある。現状で十分対抗し得るはずだ。それを、明確な根拠もなくただ不安だからという極めて個人的な感情だけで覆す事は出来ん」

個人的って程個人的じゃないと思うけどなぁ。

「それで宜しいので？」

「あぁ。詠を、皆を信頼してる。絶体絶命って訳じゃないし、朔も恋もいる。本当に危ない時は、長安にいる霞達が動いてくれるだろう」

「独断専行を認めると言うのですか」

「当たり前だろうが。何の為に将軍位があると思っているンだ？階級ってのは命令違反する時をきっちり判断出来る者に与えられるモンだ。命令通りに動くだけなら将軍じゃなく、ただの兵卒で良いンだよ。そもそも任せるつもりだったんだから最後まで任せるさ」

「では？」

「あぁ。『当初の予定通り』にやる。宛でも建業でも説明した通りにな」

「畏まりました」

大将と司馬懿は、互いに頷き合っている。

「先ずは、後背を安定させる。南蛮が平家の敵に回ろうと回らなかろうとやることは一つだけだ。俺たちが直接向かい合うのは南蛮だが、実際には袁家と戦をしているも同然だ。南蛮を従わせ、全兵力を叩き付けてやれる状況を整える。そしてその状況を作り出せた時点で戦略的には勝ったも同然だよ。不敗の軍である平家に勝ったという事実をそのまま有効に使えると思っているのだろうが、人間はそんなに出来た生き物じゃないって事を教えてやるさ。こちらの優位が覆される事は恐らくあるまい」

「ご慧眼、恐れ入ります」

「何がご慧眼なモノかよ。分かってただろう？お前さんにだって」

「陛下の軍師ですからな。陛下以下では務まりますまいに」

「当たり前ですって面で言ってンじゃねぇよ、このＭｒ．カカア天下が」

「……どういう意味ですかな？」

「尻に敷かれてる男でダントツの最上位だって事だよ」

「ハハッ、最上位にいらっしゃる方が仰るお言葉には重みがありますな」

二人とも頭の回転が速いからなのか、ポンポンと話題が切り替わる。ついさっきまで真面目な話をしていたはずなのに。まぁ、大将らしいと言えばこれ以上無い程に大将らしいんだけどさ。大将の玩具になる人間が俺以外に増えてくれて、本当に良かったと思う。仲達が側近になるまでは瑛との関係について根掘り葉掘り聞き出そうとしてきて大変だったんだ。別に何もないってのに、大将がしつこく瑛の事を口にするからか、最近瑛の事を考えていることがある……これは何なんだ？

まあ、最近は？忠の奴も浮いた話が出て来ているし、このまま俺の事は放っておいてくれないかな。

二人が賑やかに互いを罵り合っているのを尻目に、そんな事を考えていた。
その後直ぐにその期待は裏切られるんだが。

～人和　Ｓｉｄｅ～

教経様の後を追い掛ける、と言って宛を出発した曹操様に率いられた私達は、江夏で教経様達と合流した。私達が曹操様に付き従って居る理由は簡単で、未だ大々的に公演を行ったことのない荊州・益州の地で公演を行う為だった。曹操様と私達の護衛として、凪さん、真桜さん、沙和さんも付き従って居る。

「やっほー教経様」
「うわっ、面倒臭いのが来やがった……」
「……？忠、聞かれたら不味いんじゃないのか、その呟きは……」
「ふん。来てやったわよ……ちょっとそこ、何逃げようとしてるのよ！？」

「お久しぶりです、教経様」
「ん？天和、地和、人和か。どうしたンだ、こんな所まで」
「華琳様の監督の下、荊州と益州で公演をすることになりまして」
「華琳監督の下で、ねぇ。その華琳は何処だよ」
「此処よ」
「眼鏡掛けてやがる……俺を誘って居やぁがるのか？……遠路遙々ご苦労さん、華琳」
「来ない方が良かったのかしら？折角来てあげたのに」
「いやぁ、宛で守備に従事してくれていると思っていたからねぇ。まさか俺の後を追っただなんて思わないだろうに」
「大丈夫よ。宛には星に風、雪蓮、冥琳、春蘭、秋蘭、桂花に季衣、流琉と揃っているのよ？武略も知略も兵数も後れは取らないはずよ。それに私が居ないことによって、一つに纏まるでしょうからね。私が居れば春蘭や桂花は私を頂点に戴いて守備をしようとするでしょう。それでは諸葛亮に付け入る隙を与えかねないわ。また、三姉妹が荊州と益州で公演を行い、積極的に治安向上に協力して欲しい、と言えばある程度の効果があるでしょうからね。それ故に、よ」
「という適当な理由を、今思いついて口にしている華琳なのでした」
「……そんな事ある訳無いでしょう？」
「……今の華琳に『寂しかったの』とか上目遣いで言われたら、それこそコロリと降参するのに」
「おぉ～。華琳様、今が大将をコロリとイワしてやるエエ機会やで！」
「……さ、寂しかったの……って真桜！貴女この私に何を言わせているのよ！？」
「……結構来るねぇ……眼鏡を掛けているところがかなりのポイントアップに繋がっているねぇ……ヒンヌーのツンデレ眼鏡っ娘……ヤるねぇ……俺は眼鏡属性持ちなんだよねぇ……そして麦茶が好きなんだよねぇ……目の前に見えている河は長江なのかねぇ……おぉ……あんなにも素晴らしい眼鏡達がッ……」

「大将！その河渡ったらアカンで！？」

教経様は止めどなく鼻血を吹き出して何やらぶつぶつと独り言を仰っている。その表情は恍惚としており、ちょっと怖い。私を助けてくれた時には、もっと凛々しい顔をしていたのに。

ふと横を見ると、ちぃ姉さんが？忠さんと仲良く会話をしていた。

「ちょっと！アンタさっき何をぶつくさ言っていたのよ！？」
「あ～はいはい。良い天気ですね～」
「ま、まあそうね……じゃなくて！面倒臭いって言わなかった？」
「ははは。そんな事があるはずないじゃないか」
「そ、そうよね。ちぃと話が出来るなんて光栄に思いなさい」
「ですよね～」
「漸くこのちぃの美しさというものが理解出来るようになってきたのかしら。私って罪よね～」
「ですよね～、主にその頭の中身が」
「……何が言いたい訳？」
「……お目出度い頭をして　へブッ」
「失礼な奴ね！」

相変わらず、ちぃ姉さんは照れ屋だと思う。その照れの表現方法が暴力しかない処が？忠さんには不幸なことだとは思うけど。それでも姉さんを避けることなく話をし、よそよそしくならず、ある意味普段通りに接してくれているのだ。アレはアレで、一つの形なのかなとも思う。

もう一度教経様を見ると、天和姉さんが絡んでいる。その、胸を押しつけるかのように抱きついた天和姉さんに、教経様は困惑気味ながらもだらしない顔をしていた。困惑気味なのは、何故自分にそう

やって絡んでくるのか、教経様には思い当たる節がないからだろう。

天和姉さんはああ見えて身持ちは堅い方だ。誰彼構わずそういうことをする訳じゃ無い。詰まるところ、天和姉さんは教経様が気に入っているのだろう。切っ掛けは、多分暴漢に襲われていた時に教経様が助けてくれたからだと思う……格好は変態のようだったけど。

あの時の教経様の言葉を思い出すと、私も顔が熱くなる。

『俺の大切なものを傷つけた貴様らには、それ相応の報いを呉れて遣る』

そう、言った。

――頬を少し腫らせた天和姉さんと私を交互に見た後。

確かに、言った。

――かなりの怒気を孕んだ口調で。

間違いなく、言ったのだ。

――『俺の大切な者』と。

そしてその口調から感じた通り、私達に手を挙げた暴漢達を容赦なく打ち据えて私達を助けてくれた。

教経様は、公演で暴徒と化した観客から私を助け出してくれた。その時から、漠然とではあるけど、私は教経様に惹かれていたのだと思う。その感情は再び暴漢から助け出してくれたあの時に決定的になった。あの日から、私は教経様のことを考えることが多くなった

と思う。食事に出掛けて点心を注文すれば会食した時の教経様を思い出し、公演で客席に浅葱色にダンダラ模様の羽織を見かけてはその顔を確認していた。

私と教経様との間には、決して埋めることが出来ない身分の差がある。けれど、教経様は異民族で有ろうと差別するような真似はされない。天和姉さんがああやって絡んでも、身分を盾にとって窘めるような真似をしない。ちぃ姉さんの礼を失した言葉遣いや態度にも目くじらを立てない。私自身も、公の場でなければ言葉遣いはあまり気にしなくて良いと言われている。そういった感性を持つ人が私達のことを『大切な者』と考えてくれているなら、私が望んで居ることも絶対に不可能であるとは言えないのではないだろうか。

私が望んで居ることはいくつかある。その中には既に絶対に叶わないと分かっているものもある。例えば、教経様を独占したいという望みは叶うべくも無い。そもそも教経様は他に妻ある身になってしまったわけで。けれど、他の望みは、叶うのではないか。教経様がそう思ってくれているなら、叶うのではないのか。私だって女の子だ。それを望むことくらい、許されるのではないか。

好ましく思っている人に、抱かれたいと望むことくらい。

蝶の如く～１６３～（前書き）

短いですがどうぞ。

蝶の如く～１６３～

～稟　Ｓｉｄｅ～

教経殿が長安を出立したという知らせから二月後、漸く益州へいらっしゃった。通常ならとうに到着しているはずだが、生憎と教経様には所用があって長安から宛、建業、長沙、江夏と回ってからの成都入りとなった為にこれだけの時間が必要だったのです。

回った理由は、注意喚起でしょう。この度の教経殿の南蛮遠征中に、麗が攻め寄せる可能性が有る。それに対する心構えをしっかりと持たせ、対策をとっておく様に言って回ったに違いありません。その他にも理由があるとは思います。例えば、婚礼とか、婚礼とか、婚礼とか、婚礼とか……まあ、それだけでもないでしょうが。

もし弘農を攻められた場合、弘農から撤退せざるを得ない状況になるであろうことは想像に難くない。宛も建業も城壁は高く、また収容出来る兵も蓄えてある糧食も十分にありますが、弘農は城壁が低く、また糧食を蓄えることが出来る倉庫も少ない。無論、兵も全てを収容出来ない。だからこそ、敵は弘農に寄せてくる。

「その場合再び見える時には相手は勢い付いてしまうと思いますが、その辺りについて教経殿はどうお考えですか？」

いつも通り、寝物語に策を語る。それは、私達にとっては当たり前のこと。でも久し振りのそれは、私に嘗て無い程の喜びと悦びを感じさせてくれている。教経殿と離れて居た数ヶ月は、自分で思っていた以上に教経殿への思いを募らせることになっていたらしい。

「不敗の軍であった平家軍に勝利したという実績は大いに敵を勇気づけることだろう。自分達でも敵しうるという実績を、自分達自身の手で作り上げるという事だからねぇ。もしそういった自信を持って次の戦で向かい合った場合、麗軍をそれまでと同じように見積もると痛い目に遇いそうだな」

「それが分かっていて敢えて撤退させるのですね？」

「あぁ。但し、弘農に攻め寄せた場合は、だけどな。宛や建業を攻められたなら、撤退はしなくても良いだろう。十分に余裕を持って勝てるであろうから。ただ、もし弘農に攻め寄せられたなら、建業ではちょっとした調練をして貰うつもりだ」

「ちょっとした調練……成る程、それで各地を回っていたという訳ですね。教経殿風に言うと、ちょっとちょっかいを掛けてやろうということですか」

「よく分かるな」

「それはそうです。私は教経殿の軍師ですから」

麗が動員出来る全兵力はおよそ１７万。もし弘農を攻める場合、必勝を期するならば６万は動員したい。それだけの数が揃えば、短期間での勝利が見込める。短期間での勝利は、糧食事情を考えても喜ばしいことでしょう。そうなると残り１１万で領地の確保を行う事になるが、各地に満遍なく展開すると良い様に各個撃破されることは分かりきっている。

私なら……陳留と合肥。

此処を拠点として抗戦させる。宛と建業を比較した場合、より兵力が厚く機を見て外征を行おうという提案がまかり通りそうな宛に対して、より多くの兵を以て対抗する必要がある。また、弘農へ攻め寄せる軍の後背をしっかりと確保しておかなければ、遠征軍が崩壊してしまう可能性もある。その二つの必要性から、陳留により重きを置いて守備する事になるでしょう。つまり、建業にはかなり余裕

ができるはずなのだ。

だから、調練という名の遠征を行う、ということでしょう。

「何を目的とした調練か分かるか？稟」

「考えられる目的は二つ。

一つは揚州で新規に徴発した兵の練度を上げつつ、実戦経験を積ませることで精強な兵を養おうということでしょう。１０日の調練より、１日の実戦の方がより多くのものを得られるでしょうからね。勿論、基礎が出来上がっていれば、という前提が付いてきますが、そこは蓮華達を信頼しています」

益州攻略戦時に見た孫家の兵の練度は高いものだった。信頼出来るだろう。

その言葉に教経殿は軽く頷く。その顔には、うっすらとした笑いが張り付いている。二つ目の目的を私が読んでいるか、いや、読めていないのではないか、という感じの、ちょっと意地悪な顔をしている。

「もう一つは、『優勢であったが勝つ事が出来なかった』態で合肥攻略戦を終了させ、自信を自信として抱かせぬようにすること。己の力を見誤らせ、平家を見くびらせる。どちらかと言えばそちらの方が主目的です」

「断言するね。しかもちょっかいを掛けに行く地名まで」

「合っていますから」

「そうかな？」

「違いますか？」

「……合ってるよ」

「でしょうね」

笑いかけると、ちょっと舌打ちして苦笑いをしながら、私に口付けてくれた。

「ん」

「……にしても、よく分かったな。この目的を明かした時、わざと勝たない必要など無いと考えているから想像は出来ない、と冥琳や華琳には言われたが。ついでに反対もされたンだがね。稟は反対しないのか？」

「必要があるかどうかで言えば、必要無いと思います。が、反対は致しません。むしろ賛成したいですね」

「それはまたどうして？」

「教経殿は人の心の作用というものを重く見ていらっしゃいます。その思考をなぞれば、敵兵を、そしてあわよくば敵将をも増長させてやった方が戦に勝ちやすいだろうと考えると思ったのです。そしてそれは正しいと私は考えます。

優秀な敵将が平常通りであれば、五人集まれば少なくとも五通りの考えが出来、意見を戦わせることで思考は無限の広がりを見せることが出来ます。その無限の広がりを見せる思考は、私達の戦略・戦術を覆しかねない状況を生み出すことが出来るかも知れません。ですが慢心や油断を誘えばその思考は志向を有することになります。向いて居る方向が分かれば、相手が何を考えるか想像することは難しくないでしょう。

通用するのは一度きりですが、その一度で決定的な結果を掴めば良いのです。今よりも遙かに優位に立つことが出来るでしょうし、その状況に陥ってからあちらが油断や慢心を払拭しても、最早手こずることはあり得ません。その『決定的な一度』を創り出す為に、やれることをやってみようと云うだけのことではありませんか。油断や慢心をしてくれればそれで良し、そうならなくても通常通りに戦うだけです。事前に将兵にその旨通達が有れば、こちらに悪影響は

ありません。ですから、私は賛成します」
「……流石は俺の、俺だけの軍師様だよ、稟」
質問に対してそう答えた私に、教経殿は少し時間をおいてからそう言った。
そんな事は当たり前なのに。
もうずっと前から、私は貴方だけの軍師なのですよ？教経殿。
そんな事が分かっていなかったなんて、ちょっと酷いと思います。
そう言って教経殿をなじると、かなり焦った様子で私のご機嫌を取るべく声を掛けてくる。『いや、それは分かっていたんだ。ただ、そうなんだなぁと実感したのがそのまま言葉に出ただけなんだよ？』とか『当然俺だって稟は俺だけの軍師様だって思っていたんだよ？』とか。その焦っている様子が滑稽で、思わず笑ってしまった。
「……怒ってないってことで良い……ンだよな？」
「ええ、怒っていませんよ」
その答えに、ホッと息を吐き出して安堵した様子の教経様。ちょっと可愛かった。こういう教経様を見ることが出来たのは今日の収穫の中でも中々の価値がある。
今日一番の収穫は、教経様とこうして共に過ごせていること。
そう思って居た。
「なぁ、稟」
「はい、教経殿」
「風達からもう聞いていると思うが、俺は深い仲にある全ての女性と、その、形式を整える事になった」

「ええ。私も、ということですよね？」
「それは当然だよ、稟」

教経殿ははっきりと答えて下さったが、その後の様子がなにやらおかしい。話をしようとして、言い淀んでいる。それは分かるが、教経殿と私の関係で今更言い淀むようなこととは何だろうか。

もしかしたら……。

頭に浮かんだ、考えたくもない最悪な想像を振り払うかのように頭を振る。そんな事はないだろう。『教経殿だけの軍師』という言葉に、私は私が抱いている教経殿への愛情を込めたつもりだ。そしてそれを教経殿も感じ取ってくれていると思う。その上で、教経殿もそう思って居ると答えてくれたのだ。であれば悪い話ではないだろう。

「あ～、その、稟。今は遠征中だし稟の家族も居ないし、正式には長安に帰ってからになると思う。けどまぁ、その、何だ。ちゃんと言葉にして言わなきゃいけないって気がしててだな。あ～……」

右手で頬を掻きながら言葉を継ぐ。

「……その、稟」
「……はい」

少し緊張したような、うわずった声。確かに私が発した声なのに、その声は私のもので無いように聞こえた。私が少し動揺していることを、悟られてしまっただろうか。悟られても不都合はないのかも知れないけれど、悟られたくないと思っている自分が居る。矛盾しているようだけれど、兎に角、嫌なのだ。何となく恥ずかしい。

教経殿が何を言うつもりなのか、何となく分かる。分かるけど、これは恥ずかしいと思う。その一方で、少し楽しみでもある。何と言ってくれるのか。

「俺と結婚して、俺の子供を産んでくれ。ずっと俺の側に居て欲しい」

「……はい、教経殿」

私を妻にという教経殿の申し入れが予想通りであったにも拘わらず、感極まって返事をするのが少し遅れてしまった。子供を産んでくれ、とまで言われるとは思わなかったけれど、凄く嬉しかった。何故なら、雪蓮や蓮華、華琳たちには絶対にそんな事は言っていないと分かるから。

雪蓮達は揚州で、華琳はエン州でそれぞれ王になるだろう。彼女達に子供を産め、というと、事は色恋だけでは済まず、政治的な色合いを持つことになり、そして世間的にはそういった側面が非常に強く映るだろう。そして、教経殿はそれを嫌うに違いない。政治とは全く関係のないところで好ましく思い、抱いたのに、それが政治的な配慮に基づいているかもしれないという勘ぐりを入れられることは不快極まりないはずだ。だから、絶対に言っていない。

多分教経殿は、各人に違う言葉を贈っているはずだ。同じ言葉を贈られた者同士で、どちらがより愛されているかなどという比較が始まってしまうだろうから。だから、各人に異なる言葉を贈っているだろう。ちょっと細かすぎる心遣いだとは思うけれど、そういう人なのだ、この人は。だからこそ皆が夢中になる。ちゃんと自分を見てくれていることを感じる事が出来るから。

だから、子を産めと言われたのは、私だけだと思う。

私が考えを巡らせ、教経殿がこの言葉を私にしか言っていないということを理解すると見抜いた上で、この言葉を贈っているのだとすると、この人は本当にどうしようもない女誑しだと思う。計算尽くでないなら、それはまた違った意味でどうしようもない女誑しだ。

そこまで考え、どちらに転んでも『どうしようもない女誑し』という評価しか出てこない事に気が付いて、私はまた笑ってしまった。

「どうしたンだ？」

「いえ。憎い人だと思っただけです」

「？」

しっかりと教経殿に抱きつくと、私の背に腕を回して抱いてくれた。いつかも思ったけれど、私は幸せなのだろう。軍師として良き主に恵まれ、女として良き男に恵まれた。少々気が多いのが玉に瑕だけど、それでも私はこの人と一緒にいるのが良い。

互いの温もりが睡魔を呼び寄せたらしく、教経殿はかなり眠そうになさっていた。明日も早いことだし、今日はもう寝た方が良いと教経殿に寝て貰う事にした。私の腕の中で気持ち良さそうに眠りに就いた教経殿に、面と向かっては言えそうにない言葉を囁いてから、私も眠りに就くことにした。

私のこと、大切にしてくださいね、教経殿。

私も今日はよく眠れそうだ。今日一番の収穫を、寝る直前に得られた。きっと良い夢を見ることが出来るだろう。

良い夢を。

蝶の如く～１６３～（後書き）

今困っていること。
日常の話だけ書こうとすると話数が多くなりすぎる気がします。
といって飛ばしすぎると用意していた話が書けないので内容が薄くなる、と。

ダラダラ続けるのもどうかと思うので、出来るだけ急ぎ足でぶつかるところまで行きたいのですが、色々とこなさないと行けないイベントというか、何というかがあるので今暫くお付き合い頂ければ幸いです。

蝶の如く～１６４～

～愛紗　Ｓｉｄｅ～

教経様が益州に入った翌日、教経様の御前で現状の報告を行った。
私からは益州に駐屯している平家軍の練度と士気について、稟からは同盟若しくは不可侵条約の締結を提案すべく南蛮へ派遣した使いの結果について、それぞれ報告することになっていた。

「以上が私からの報告です、教経様」
「良くやってくれた、愛紗。元の劉璋軍、公孫賛軍についても随分練度を上げてくれたようだし、うちの郎党共も皆元気そうじゃないか」
「有り難う御座います。ですが私だけではこうも上手く行きませんでした。碧や翠は勿論、蒲公英、紫苑と入れ替わりのような形になった為此処には居ませんが、張任殿に李厳も良く努めてくれたと思います。褒詞を賜りますならば、皆と共に、皆で賜りたいと思います」
「……愛紗らしいな。皆には後で改めて言うが、武官の纏めをしていたのは今こうして俺に報告をしてくれている愛紗だ。纏めを行う者には、纏めを行う者にしか分からぬ苦労があるモンだ……愛紗、ご苦労だった。愛紗が居てくれて助かる。これからも宜しく頼む」

真摯な面持ちで、頭を下げられる。その態度に、その気遣いにホッとしている自分が居た。

皇帝になろうと教経様は教経様だった。その事が、たったこれだけの会話で分かった。それをこれだけの会話で理解出来たことも嬉しかったし、私が皆の纏めのような立場でそれなりに苦労していたこ

とをちゃんと分かってくれていることも嬉しかった。

そして多分、尤もらしい理由を付けて先ず私だけに褒詞を授けられることを私が受け入れられるようにした上で、褒詞を授けて教経様が私を優先してくれているというある種の優越感を与えてくれている。勿論、情において他と比べて私を優先してくれている訳では無いということは分かっているが、形としては間違いなく優先してくれている。ただそれだけのことが、嬉しくて仕方がない。

隣を見れば昨日教経様と共に過ごした稟が居る。稟は一昨日までと違い、随分とすっきりした、充実した『女』の顔をしていた。風からはさっさと『形式』とやらを整え、後背を早々に安定させて教経様を長安に帰せと言ってきている。教経様はこれから、自身とそういう関係にある人間に、風が言うところの『形式』を整えるべく愛を囁くだろう。教経様らしく。

その一番手が、稟だったということだ。教経様から昨晩何を言われたのか、そしてどう過ごしたのかは分からないが、稟の様子から判断する限りかなり羨ましい状況だったのだろう。少々妬けるが順番から云えば今日は私の番だ。思いっきり甘えることだって許されるだろう。

「軍の方は準備万端だとして……稟の方は？」
「はい。南蛮へ送った使者なのですが……」
「……殺されたのか？」
「……いえ。ただ、散々に打ち据えられた状態で、雲南の国境付近に放置されていました」
「……へぇ」

教経様の雰囲気が、剣呑な物に変わる。

「ですが、気になっていることも有ります」
「何が気になる？」
「殺されていない点と、態々人里の近くに放置した点です」
「……前者はまだしも、後者は確かに不可解だな。使者は何か言っていたか？」
「孟獲は今ひとつ要領を得ないことを繰り返して言っていたそうです。食べ物は渡さないとか何とか」
「……よく分からんな」
「はい。ですが、食べ物に執着していることは間違いなさそうだ、とのことです」
「困窮しているのか？」
「しては居ないように見受けられたそうです」
「ふむ……で、誰にどうして打ち据えられた？」
「帰路にて喉が渇いた為に、街道沿いにあった果実を一つ取ろうと手を伸ばしたところを後から打ち据えられたそうです。そして気が付いたら雲南に居た、と」
「打ち据えた相手は分からない、ということか」
「はい」

南蛮側が何を考えて居るのか、さっぱり分からない。これまでも稟が細作を放って情報収集をしてきたが、細作の正気を疑うような情報もあった。例えば、『孟獲を始めとする南蛮側の主力となるであろう武将は全て子供であり、獣の様な格好をしている』などだ。

そもそも南蛮が麗と同盟を結んで我らの後背を脅かそうというのであれば、教経様がこちらに来る前に麗と連携して攻め込んで来ていても良い。それが今まで何の動きも見せていないのだ。狙いは何処にあるのか。

私が南蛮側の人間であり麗との連携を考えて居るのであれば、教経様自身が来るのを待った上で仕掛け、自領奥深くへ引き摺り込んで引き付け続ける。そうしておけば麗がその後背を突く事になるだろう。教経様が南蛮へ引き付けられていれば、極めて少ないとは言え各地の連携が上手く出来ない可能性があるかもしれない。そして攻めてきた麗に対応する為に撤退するならば追撃し、対陣し続けるならばそのまま我慢し続ける。それが基本方針になるだろう。

だが稟が放っている細作からは、南蛮が軍勢を編成したという情報は入ってこない。あちらから動くことは、ひょっとすると無いのかも知れない。麗から見れば、平家軍5万を南蛮へ備えさせ続ける事が出来ている時点で、兵力分散させることには成功している。現状維持でも利点はある。逆に、我らとすれば現状維持は損失しか生まれ得ない状況であると言える。

兎に角、平家とすればどういったものであれ動きが必要だと思う。その辺りを踏まえて、教経様がどう判断するかだろう。

「教経殿、如何なさいますか？」

「……使者が打ち据えられたのは事実。これを盾にとって、軍を進めよう」

「会戦致しますか？」

「会はするが、戦はあちら次第だろう。兎に角、孟獲を引き摺り出す。その上で対応を決めようじゃないか」

「では、軍を進める準備を致します。進軍する部隊の編成は如何なさいますか？複数部隊に分けて侵攻させるという手もあると思いますが」

「不案内な土地で兵力を分散して良いようにやられろと？大体稟だって分けることは考えて居ないだろうに」

「何故そう思うのですか？」

「糧食をひとまとめにして管理していた様だからな。軍を分ける必要があると考えて居るなら、現時点で糧食を分けて居るはずだ。そうしていないと云うことは、そういうことだろう？」
「はい」
「……嬉しそうだな、稟」
「それはもう」

事前に稟と話をした際に教経様には見抜かれるだろうと言っていたが、まさか理由までもが稟の言った通りだとは思わなかった。

「出立は五日後とする。全将兵にその旨を伝達しておいてくれ」
「畏まりました」
「あ、愛紗は今日はこれからずっと俺と一緒な」
「え、し、しかしまだ昼ですが」
「別に日中からしようって言ってる訳じゃ無くて、陣中の見回りに付き合って欲しいって事だったんだが……愛紗、考えることが中々に過激になってきてるな」
「わ、私は別にそのような事は……」

考えては、いない……はずだ。多分。きっと。私に宛がわれた陣屋で、教経様と、日中から二人きり……それは素晴らし……いや、私は平家の蜀方面派遣軍の纏めを任されたのだ。このような軟弱な姿勢では軍紀が損なわれてしまう……だがその誘惑の何と心揺さぶることか。私の制止を振り切って、教経様は強引に私を組み敷いたりして……

「愛紗？どうしたのです？」
「……稟、よく見ておけ。稟が発車する時は大体こんな感じだ」
「は、はあ……」
「……いけません教経様！」

「うおっ！？」
「なっ！……吃驚させないで下さい、愛紗」
危なかった。私を組み敷いて行為に及ぼうとした教経様を何とか引き剥がすことが出来た。
「教経様。日中ですし、人の耳目が何処にあるか分からないのですから、ちゃんと自重して頂かなければ困ります！……まあ、その、夜ならばその、私も嫌ではないと言いますか……望むところと言いますか……な、何を言わせるんですか！反省して下さい！」
「……成る程、無いはずのモノが『実際にあった』事になっちゃってる訳ね、愛紗の中では……」
「教経殿、一体今何が起きているのですか？」
「稟、大丈夫だ……稟はまだここまでイカレては……逝かれては居ないよ……多分鼻血を吹いているからこうなっていないだけで、素質は十分だと思うけど……」
「？大丈夫なんですか？」
「放っておいたらきっと戻ってくると思う……思いたい……そうだと良いねぇ……」
「教経様！聞いていらっしゃるのですか！？」
「身に覚えのないことで此処まで怒られるのは流石に……けどまぁ怒った顔も可愛いからこれはこれで役得だと思うことにするか……後で事実を突きつけて色々虐めてやるのもアリだな……フヒヒ……盛り上がって参りましたッ！」
「教経殿、腹黒い感じが……あと若干後半部分が生理的に受け付けない雰囲気なので自重して下さい」
全く教経様には本当に困ったものだ。白昼堂々とその、淫行に及ぶなんて。

……後で真実を知らされるまで、本当にそう思っていた。お説教もしてしまっていた。反省して貰う為に、ちょっときつめにお灸を据えたりもした。その全てが、その、私のちょっとした勘違いから派生したものだなんて。

夜、教経様に説教の内容と私の態度を散々引き合いに出されて、虐められてしまった。恥ずかしくて、頭がどうにかなりそうだった。逃げだそうとしても、腕の中にいて逃げることも出来なかったし。まあその、教経様の腕の中から逃げ出すつもりが無かったからというのが一番の理由かも知れないが。

余りにもからかわれた為に、つい恨み言を、ほんの戯れのつもりで口にしてしまった。

――『酷いです、教経様。もうお嫁に行けません』と。

教経様はそれに対して返して曰く、『俺の嫁にも来てくれないのか』。

流石に、息が詰まってしまった。顔を見れば、真面目に言っていることは分かる。私に否やがあろう筈もない。

喜んで、と応えようとして、結局私は『あうあう』と言いながら首肯することでしか応えられなかった……我ながら思うが、かなり情けない。『本当に私で良いのでしょうか』と思わず余計な事まで訊いてしまった。その私に、『愛紗じゃなきゃ駄目なんだよ』と言った後、『俺の可愛い、自慢の嫁さんなんだからもっと自信を持て』と囁かれた。

あまり女らしくない、と兵達から陰口をたたかれることもある私を、

可愛いと言ってくれるのは教経様しか居ない。武人としての私も、女としても私も、同時に欲してくれている教経様の存在が、私は私のままで良いのだという安心感を与えてくれる。

教経様は、私にとって安心出来る、それこそ我が家のような存在だ。私も、教経様にとってのそういう存在になりたいと思いつつ、愛しい人の腕に抱かれ、その体を掻き抱きながら眠りに就いた。

教経様への偽りない気持ちを口にしながら。

～教経　Ｓｉｄｅ～

姉さん、事件です。

いや、俺に姉は居ないがお約束だからそう言っただけだ。嫁が不細工でがめついと大変だよねぇ……ＤＶされたから殴り返したのにＤ

V夫呼ばわりされるし、んじゃ離婚してくれって言ったら離婚は絶対しないと言うし……金を好き放題に使いたいだけじゃねぇか、あの糞ブスが……強く生きて下さい、一平さん。あぁ？これじゃドラマじゃなくてリアルな方のT島さんの話と一緒になってる？細けぇことは良いンだよ。

「ちょっとご主人様、聞いてるの？」
「俺はむしろ訊きたいんだけどな」
「蒲公英の性感帯？」
「違う！」
「も～、冗談だってば」

あはは♪と眼鏡を掛けた小悪魔が笑う。

寝台の中で。
俺の横で。
そして、全裸で。

冒頭の事件とはこのことだ。昨日は翠（と碧）の番だったはず。それなのに何故か蒲公英が眼鏡を掛けて俺の横で寝ていたのだ。そのせいで動揺してしまい、東京プラトンに就職してしまった。

しかしまぁ、何故全裸で此処に居るんだ？武神装攻ダイゼンラーなのか？
その俺の不審そうな視線を受けて、蒲公英が口をとがらせる。どうやらご不満なようだ。

「……ご主人様、ひょっとして昨日のこと全く覚えてないの？」
「あ～……うん、まぁ、覚えてない」

蒲公英に言われて昨日のことを思い返してみる。

昨日は珍しく愛紗よりも俺の方が先に目覚めてしまった為、たっぷりと愛紗の寝顔と寝惚け顔を堪能させて貰った（その後でオラオラッシュも当然堪能した）。日中に益州にいる人間を集め、南蛮への対応について昨日稟と愛紗と話をして決めた内容を改めて伝達した。皆既に伝達を受けていた為、ただの確認以上の意味は持たないが、改めて宣言されたことで気合いが入ったようだった。ちなみに、張任の爺と李厳は居ない。紫苑と馬良が俺に同行した為、それと入れ替わる様に荊州へ移動したのだ。

会議の後、久々に皆に逢えたということで酒宴を催した。碧と翠からしこたま酒を飲まされ、酔った愛紗には一昨日夜から昨日の朝に掛けての妻へのご機嫌伺いが不十分であると詰られ、華琳からまた新しく嫁を増やしただなんてと穏の件で首を絞められた。稟は稟で、一昨昨日の夜の俺の言葉が嬉しかったと言いながら久々に発車していた……何を想像したんだ、何を。

そういえば、酒宴に参加した天和がいつも通りに俺の腕に胸を当ててきていたな。感触の方も、いつも通りに良い乳だった。宗旨替えをしようかと悩む程に良い乳だった。ただその時に、反対側の腕に人和が抱きついて来たことにはちょっと驚かされた。眼鏡っ娘がかなり恥ずかしそうに俺の腕を取り、上目遣いでちょっとおどおどしながら、俺の表情から機嫌を読み取ろうとしていた。嫌そうにしないかどうかを気にしていたんだろう。その様子がまた堪らなかったんだよねぇ……。嫌そうにする訳がないじゃないか。眼鏡っ娘は俺にとってはご褒美なのだから。

他にも、これまた酔っぱらった真桜が絡繰りについて熱く語り始め、紛いなりにも話に付いて行ける俺に絡んでヘッドロックを噛まし、

長安で売っている絡繰り人形を買ってくれとごねている処に、沙和が服のカタログを持って突っ込んできて、俺がクロノクルに頼んで作ったゴシック系衣装について賛美を繰り返していた……カタログが何故あるのかには突っ込む気力もない。それは俺が意匠を凝らした衣装だと教えると、欲しい欲しいと強請られた。その二人を窘めるべく動いていた凪だったが、真桜と沙和がニヤニヤしながら「「なら凪（凪ちゃん）は大将（教経様）が欲しいって言うたら（言ったら）ええやんか（良いの）ー！」」という台詞で顔を真っ赤にして逃げ出した……凪は真面目だからねぇ……可哀相に。

問題はその後の記憶があやふやなことだ。寝台に連れられてきた時には、碧と翠に両脇を抱えられて居た。その特徴的なワンレンとポニーテールを間違えるはずはない。何より、二人の体臭を俺が間違えるはずがない。そこから二人と致した……はずだ。要するにそこから先が全く記憶にない。蒲公英と致したかどうか思い出そうと努力はしたが、どうしても思い出せない。

「ねえご主人様。これを見ても思い出せないの？」

促されて、蒲公英が指さした先にある『これ』を見やる。

――寝台のシーツには、はっきりと『血の跡』が付いていた。

それはその、要するに致した証なんだろう。が、残念ながら俺の記憶中枢を刺激することは叶わなかった。

「……済まない。どうしても思い出せない」

「……」

俺の返答に、流石の蒲公英が哀しそうな顔をした。

それは当然だろう。当初は性的な事への年相応な興味から俺に言い寄っていただけだろうが、流石にこの時点ではそうではないことぐらいは分かる。何せ、初めて逢ってから1年以上経過しているのだ。単純な興味であれば、それを満たす為の相手は他にも居たはずだし、何より今の蒲公英の哀しそうな顔がそれを物語っている。もし単純な興味だけであったなら、いつも通りの笑顔で大した事ではないから気にしないで良いと言うだろう。

自分で言うのもどうかと思うが、最低だな……

「……なら、もう一回して？」
「ん？」
「もう一回してよ、ご主人様。これが初めてのつもりで、蒲公英を抱いて？」

いつものようにグイグイ押してくる感じではなかった。ちょっと俯いていたから確信が持てないが、自信なさげな様子であったように思える。

「……分かったよ」
「……え？」
「分かった、と言ったんだ。昨日したというのなら、今日しても同じ事だろう？酒に酔った挙げ句に流されて蒲公英とそういうことになったんだろうけど、したと云うことは要するに蒲公英が好きだと思ったからに違いない。流石に好ましく思えない娘とやろうと思う程飢えて居やしないだろうから」
「……ねえご主人様、約束して。何が起きても、途中で止めちゃ駄目だよ？例えお姉様が乱入してきても途中で止めちゃ嫌だからね？」

……成る程。要するに、碧や翠に一杯喰わせてこうして一緒に居る

という訳か。

「良いだろう。但し、南蛮が攻めてきたら話は別だからな？それは譲ることは出来ない。良いな？」

「うん。それなら良いよ。それじゃ、ご主人様……」

「分かってる……んっ」

「ん……うむぅ……はぁう……」

やはり昨日初めて経験したというだけあって、まだまだぎこちない感じを受ける。しっかりと蒲公英の準備が出来たところで、再び蒲公英が念を押すように一言、言って寄越す。

「ご、ご主人様……約束、絶対だからね？」

「？分かってるよ。そんなに信頼出来ないか？」

「そんなんじゃないけど……絶対だよ？」

「あぁ、分かってる。絶対に守るよ」

「うん……」

蒲公英は目を瞑り、何か覚悟した様な面持ちで居る。少し緊張しているようだ。躰も、やや強ばっている。ひょっとして、昨日の経験は、蒲公英に壮絶な痛みを与えただけの物であったのかも知れない。俺が酔って全く覚えていないから何とも言えないが、今の様子から判断するとそう的を外した予想でもないだろう。

意を決して蒲公英と躰を重ねる。重ねた時に、もの凄い違和感を覚えた。

「……蒲公英」

「……な、に？ご、主人、さ、ま」

「なんて馬鹿なことを」

「……蒲公英は、大丈夫、だよ？」
「大丈夫な訳があるか。兎に角……」
状況を完全に把握して退こうとした俺の腰に、そうはさせじと蒲公英が両足を絡めてくる。
「……後で聞くから……だから、約束。お願い、ご主人様。絶対に守るって、嘘だったの？」
「……だからあんなに拘っていたのか」
事が此処に至っては、今更どうしようもない。騙されたという思いよりも、むしろそこまで慕ってくれて居たのかという気持ちの方が大きかった。痛みに耐えながら、自分をちゃんと抱いて欲しいと言い募る蒲公英が愛おしかった。
「……躰の力を抜け、蒲公英。止めないから。蒲公英をちゃんと抱くから、言うことを聞け。痛いだけの想い出にはしたくないだろ？」
「……うん」
俺が止めないということを信じることが出来たからか、躰の力を抜いて、後は俺に為されるがままにされていた。最初こそ凄まじく痛がっていたが、最後にはちゃんと快感を得ることが出来ていたようだった。これで、多少マシな想い出になったのではないかと思う。いや、そうあって貰いたいものだ。
――――これは、蒲公英の『初体験』なのだから。

「で、蒲公英。どうしてこんな事を？」

行為の後、蒲公英と話をする。

最初は翠が抱かれた相手だということで、俺という存在に興味を持っただけだったらしい。性的な事に対する興味もあったし、翠をからかいつつそちらの興味も満たせるなら、といった軽い気持ちだった。が、自分が色目を使ったり、ボディタッチなど少々過剰なスキンシップを図っても、全く靡いてこなかった事が却って好印象になったらしく、俺を陥落させるべく色々と為人を調べあげたのだそうだ。

思想、行動、好きな食べ物、女性の好み。

全て調べた、と。そう言った。

「だから眼鏡を掛けているのか」

「そうだよ？ご主人様、眼鏡掛けてる女の子好きでしょ？」

「……否定はしないさ」

「否定出来ない、の間違いだよね」

蒲公英が、『えへへ♪』と闊達に笑う。今まで通りに。

「ま、それは置いておいて……気が付いたら自分が陥落しちゃってたんだよね～。本当、ご主人様って女誑しなんだ～」

「しちゃってたんだよねってお前……」

「仕方ないじゃん。本当にいつの間にかだったんだから」

「まぁ、それは良しとしよう。けど何でまた嘘付いてまで」

「だってそうでもしないと、ご主人様は蒲公英が単なる興味でご主人様に言い寄ってるって誤解したままだったもん」

「そんな事はないって。ちゃんと考えて気がつけたさ」
「嘘。ご主人様は誤解したままで居たかったんじゃないかな？ちゃんと考えてくれたのって、たんぽぽが朝横に裸で寝てたからじゃないの？」

そう言われて、言葉に詰まる。
確かに、そうかも知れない。蒲公英を女性として意識したのは、朝横に裸で寝ていたからかも知れない。愛おしさが急速に高まったのも、痛みの中でそれでも俺に抱かれたいと縋ってくる、健気な蒲公英を見てからだ。

「……その話はもう良い。あの血は？」
「ああ、あれはね、鶏の血だよ？何時こういう機会が来ても良いように、いつも準備してたんだ～♪」
「……突発的なものじゃなくて計算尽くなのね……んじゃ碧と翠は？俺は二人に寝台へ連れて来られたと記憶しているんだが？」
「叔母様とお姉様に真面目にお願いしたら、仕方がないからって譲ってくれたんだよ？でないと流石に入り込めないよ」
「そもそも部屋に良く入れたな？」
「あ、コージュン？ご主人様に真面目な話があるって言ったら溜息吐いて入れてくれたよ？」

……良しダンクーガ。テメェは後で折檻だ。どうやって折檻してくれようか……

「ねえ、ご主人様。たんぽぽがご主人様を好きなのは本当だよ？軽々しい気持ちで言ってる訳じゃ無いんだから……」
「……」

どう折檻してやろうかと考えていたが、今は蒲公英と話をしていた

ことに気付いて止める。比較的早い段階で考えるのを止めたから、まだそれ程時間は経っていないはずだ。

ただ、蒲公英を誤解させるには十分な時間だったようで。

「……な～んちゃって。嘘だよ、嘘、嘘♪ただ単に興味があったから、どうせならご主人様で試そうと思ってしただけなんだ～♪」

「蒲公英……」

「あ、勘違いしちゃった？御免ね～ご主人様。でも蒲公英は遊びのつもりだったんだよね。だから、諦めてね？ご主人様♪」

そうあっけらかんと言い放ち、身を翻して扉へ向かおうとする。

――その時に少し、そう、ほんの少しばかりではあるが、肩を震わせながら。

「蒲公英」

後から手を引いて、後から、腕の中に蒲公英を抱きすくめる。

本当に、この娘はしようがない娘だ。俺の沈黙を、自分の気持ちが拒絶されるものと勘違いして、はっきり拒絶されるのが怖くて逃げだそうとするなんて。逃げだそうとしたことは、あまり感心出来ないことなのかも知れない。けれどそれは、それだけ蒲公英が真剣であるということだろう。ただの憧れ程度であれば、そして蒲公英が言うようにどうでも良ければ、そんな物は怖くなんて無いはずだから。

「だ、駄目だよご主人様。蒲公英言ったじゃない。ご主人様とは遊びだったんだよ？だから蒲公英のことは諦めて貰わないと困るんだから」

「……泣きながら言う台詞じゃないだろ」
「泣いてないもん」
「馬鹿。ちゃんと俺の話を聞けよ」
「……嫌だもん。面と向かって振られるなんて嫌だよ、ご主人様」

涙声で蒲公英が口にした言葉からは、自分を拒絶する言葉を聞きたくないという気持ちと、自分を引き止めてくれたのは、もしかしたら心変わりして自分を受け入れてくれるからかも知れない、いやそうであって欲しいという、今の蒲公英からしてみると本当に僅かでしかない可能性に縋り付きたいという気持ちとが感じられた。

「蒲公英」

ビクッと体を震わせて、観念したかのように俯く。その蒲公英の耳元に口を近付けて、ゆっくりとした口調で話し掛けた。

「責任、取らせてくれないかな。蒲公英」
「……責任？」
「そう、責任。蒲公英が良かったら、だけど」
「……責任感からそう言ってるの？」
「いいや、独占欲からだよ」
「独占欲？」
「そ、独占欲。蒲公英に一杯喰わされたとは言え、俺は結局蒲公英の好意を断ることは出来なかった。蒲公英を抱いたのは、俺の意志だよ。そうなった以上、誰にも渡したくはないんだ」
「……本当に？たんぽぽのこと、女の子として独占したいって思ってくれてるの？」
「あぁ、心からそう思ってる」
「……たんぽぽの事が誰よりも好き？お姉様より？」
「……それはどうかな」

「あ～！ひっど～い！」

腕の中で反転し、俺の顔を見ながらそう詰ってくる。少しは普段の調子を取り戻せたか？

「でも」

「でも？」

「蒲公英が居てくれないと困る。我ながら気が多いと思うけど、そういう関係になった娘が誰かに盗られるのは嫌だ。蒲公英だけの為に生きることは出来ないけど、蒲公英に側に居て貰いたい。もの凄く自分本位で都合が良いことを言っている自覚はあるけど、そう思って居るんだよ、俺は。……駄目かな？」

「……ど～してもってご主人様が言うんなら、一緒に居てあげても良いかな」

「……どうしても」

蒲公英らしい言い様に、思わず苦笑いをしながらそう応える。蒲公英がそう応えて欲しいと言っているのは分かりきっているのだから、そう応えてやるのが男の甲斐性ってモンだろう。

「ど～しても？」

「どうしても」

「……えへへ、そこまで言われたら仕方がないかな～」

『仕方がない』って顔はしていない様に見えるけどねぇ。でもまぁ、泣かれるよりはこっちの方が良い。蒲公英らしい笑顔で居てくれた方が良い。

「蒲公英は遊びのつもりだったんだけど、本気になっちゃったご主人様の訴えに絆されて、仕方なく一緒に居るうちに蒲公英もご主人

様のことが好きになっちゃったから仕方がないよね？」
「苦しい説明だな」
「いいの！これが唯一無二の真実なんだから！たんぽぽは全てまるっとお見通しなの！」
「はいはい」

ふと、思う。
これで俺は涼州から移動している馬家の人間で平家軍に参加している者を、全て抱いたことになる。後から碧や翠に何を言われるか分かった物じゃない。翠は兎も角、碧はそれを見越して蒲公英に今朝の時間を譲ってやったに違いないのだ。

何を言われる事になるやら。どうせいつか、三人同時に攻め掛かってきたりするんだろうなぁ……翠はまだしも、碧に、悪のりしそうな蒲公英……腎虚で死ぬかも知れんな……。

「ご主人様、聞いてるの！？」
「あ～はいはい、聞いてる聞いてる」
「も～、全然聞いてないじゃん！」

怒っているような口調の癖に、満面の笑みを浮かべてそう言ってくる。そんな蒲公英を見て、改めて自分は蒲公英に惹かれているのだと云うことを実感する。それと同時に、蒲公英に大切なことをちゃんと言葉にして伝えていないことに気が付いて、改めて伝えるべく口を開いた。

「蒲公英」
「何？ご主人様」
「順番がおかしい気もするけど、ちゃんと言っておこうと思ってな。……好きだよ、蒲公英」

そう言った俺に、そんな事は分かってるの！と言って笑った蒲公英は、その後で小さく『私も好きだよ、ご主人様』と呟いていた。あまり聞かれたくなかった様だから敢えて聞こえなかった振りをしたが、年相応な女の子なんだよなぁと実感させられる呟きだった。

さて。

……窓から覗き込んで笑っている碧と翠から、どうやって逃げようか。

蝶の如く～１６４～（後書き）

お待たせ致しました。

中々進みませんが、後１話で色々始まる……と思います。
始まったら途中でナニか入ると思いますが、最後までいくんジャマイカと。

あとちょっとで終わりなので、頑張りたいと思います。
奇特な方々、最後までお付き合い下さいませ。

あ、あとＰＶが２０００万越えてました。
皆様のおかげで御座います。今後とも宜しくお願い致します。

蝶の如く～１６５～（前書き）

ちょっと短いですが。

蝶の如く～１６５～

～郭図　Ｓｉｄｅ～

官渡大戦での勝利後暫く休養を取っていた私は、現在麗領内の代官として代県に赴任して先の皇帝を監視しつつ、次の戦に必要となる糧食を集めている。本来であれば次の戦を取り仕切る軍師として麗羽様の膝元で袁家の兵を取り纏め、軍備を整えるべく指示を出し、平家を追い落とす為の策を練って居たはずだ。

それがこうして代県くんだりまで来ているのには理由がある。

一つには、麗羽様に禅譲した愚物の処分を行う為。田豊と沮授、そして当初は禅譲後に愚物を処分することに賛成していた筈の審配や逢紀までもが、あの愚物を処分することに反対してきた。当初そうすると決めた事を途中で変更しても良い結果は得られない。機に臨みてこれに応じたつもりかも知れぬが、生かしておいても利益は無いし、病死であればそれも天命と世間は言うだろう。何より、劉虞に心を寄せる人間など皆無。後々どんな我が儘を言い出すか知れたものではないし、此処で処断しておくのが上策だ。

現在、先帝である劉虞は城の一角にある倉庫の中で、彼奴が溜め込んできた芸術品を愛でている。もう１０日、寝は兎も角食は忘れて愛で続けて居る。残念なことに私には審美眼というものが備わっていない為先帝に付き合うことは出来なかったが、田豊が付けた先帝の護衛達はその役割上側を離れる訳には行かない為、ずっと共にいるようだ。その役目への情熱には本当に頭が下がる……馬鹿めが。

そのあまりの熱中ぶりに、ひょっとすると、いやきっとそのような

ことはないと思うのではあるが、餓死してしまうのではないかと心配になってしまう。こちらから美味なる食事を窓から差し入れているにも関わらず、全く手を付けていらっしゃらないようだ。そのあまりの美味しさに喜び勇みすぎて壁に頭を打ち付け続け、歓喜のあまり血涙どころか顔に空いている穴という穴から血潮を吹き出して倒れた護衛が居たが、それを見てから誰も手を付けなくなってしまったのだ。少々味付けを薄くすべきであったかも知れない。そうすれば先帝も好んで食して下さったかも知れないのに。全く、我が儘で困ったことだ。

ただまあ、こちらから食事を差し出し何くれと無く世話を焼いたにも拘わらず、己の趣味を優先して食を忘れた結果衰弱死してしまったとしても、最善の手立ては講じていたのだから致し方のないことではある。世の中は上手く行かないことばかりだが、これで一つ目的を果たせると思うと肩の荷が下りた心持ちがする。

そして代県にいるもう一つの理由は、私が描いた戦で最後の最後に勝利を決定付けた、その場に偶々居合わせたに過ぎなかったにも関わらず、名声を独り占めした忌々しい少女が、代県で私に力を奮って欲しいと依頼してきたからだ。

言うことを聞いて貰いたかったら裸になって見せろという私の言葉に、躊躇いなく衣服を脱ぎ始めた少女を慌てて押し止め、少女のお願いとやらを聞く羽目になった。これが女性を強く感じさせる、例えば顔良などであれば問答無用で処女を散らしてやったに違いないが、流石に私は少女趣味ではない。正直忌々しいが、その覚悟は見事ではある。それさえも認められない程腐っては居ないつもりだった。

諸葛亮に依頼されたのは、糧食の備蓄と弘農の内偵。

糧食の備蓄は傍目には分からぬよう并州を中心に分散して隠して備蓄し、一報を受けたら即座に集積出来るようにして欲しいというもの。言うのは簡単だが為すのは難しい。分散して隠す。それは良いが、即座に集積出来るように、という部分がどうにも難しい。生半可な才能を有している人間では務まらないだろう。だからこそ、これは田豊でも沮授でもなく、貴方にしか頼めないことだと少女は言っていた。皮肉なことだが、私ほどの器量を持つ人間を理解する者はあの少女しか居ないらしい。

集積に時間が掛かるのは、集積命令を伝達する速度に問題があるからだ。人が馬に跨ってその命令を伝達しに行ったのでは、使者に駿馬を選んで与え、使い潰すつもりで無理をさせたとしても『即座に』集積行動を開始することは出来ないだろう。私は天賦の才を有すが故に、煙を利用した情報伝達方法を考案した。それがかつて平教経が使用したことがある情報伝達方法だということを後で李孚に指摘されたが、それが本当なら平教経という男は中々の才があるのだろう。まあそれであればこそ、此処まで生き残っているのであろうが。

弘農の内偵については田予にやらせている。平家の治世に対し不満を覚えている人間はさほど居ないが、平家の治世が安定しているが故に美味しい思いが出来なくなった人間はおり、何とかその治世を覆す事が出来ないかと画策しているようだ。彼らに渡りを付け、繋がりを保持しておくことで後々役に立たせることが出来るかも知れない。こちらからの交流の申し出に対し、総じて好意的な反応を返してきているらしい。精々有効に使い潰してやることにしよう。

一日、こちらの状況を視察する為に張コウがやって来た。
この私が準備に当たっているにも関わらず、張コウを視察に寄越すとは。残念ながらあの少女でも私と云う存在の真価を理解することは出来ないらしい。

「張コウ、貴様は何をしに来たのだ」
「何、卿が真面目に務めているのかを確認しに、な」
「ふん。貴様に心配される程落ちぶれては居らん。この私を舐めているのか?貴様は」
「良く吼えるな、郭図。逃げるように戦場から去った人間の言とは思えん」
「逃げる?何を馬鹿なことを言っているのだ?撤退は予定の内であったろう。たまさか撤退する部隊に属していただけではないか。馬鹿馬鹿しい」

そう言ってやると、少し眉間に皺を寄せ、眉を顰めた。

「正気で言っているのか?卿は」
「何がだ?」
「ふむ……一つ、良いか?」
「何だ?」
「烏巣襲撃後、麗羽様の前で何があったか、覚えているか?」
「敗戦の責任に耐えられず、辛評・辛毘が自害したな」
「……害を為すような真似はしないと天に誓おう。で、何があったか覚えているか?」

この男は一体何を言っているのか。天に誓うまでもなく、私を害することなど出来るはずもない。

「貴様には耳が付いていないらしいな。辛評・辛毘が自害した、と言っただろう」
「……そうか。それならば良い」

何を気にしているのか分からぬな、この男は。

「で、状況は？」
「私がやっているのだ、抜かりはない。糧食集積については今までに比すれば遙かに早く集めることが出来るだろう」
「自信があるようだな？」
「まあ見て居よ。文句は言わせぬわ」
「ならばそうさせて貰う事にしよう。調略も行っているはずだと孔明殿からは聞いているが？」
「弘農の有力者の内、旧時代の権勢を懐かしんでいる者共に既に渡りは付けてある。如何様にでも使い捨てることが出来るとまでは言えぬが、それでも何かしらの役には立つはずだ」
「どう役立たせるつもりだ？」
「さてな。ただどう使うにせよ、情に訴えるような形で使うのが一番だろう。平家の連中は総じて甘いからな。それが悪いと言うつもりはないが、その優しさはこの乱世にあっては害をもたらすだろうよ」
「そう上手く踊ってくれるかな？」
「簡単では無かろうが、踊らざるを得ない形を整えてやれば良かろう。選択肢が残っているから思い通りに踊らぬだけだ。それならば選択肢を限定してやれば良いだけのこと。奴らは『民の為に』戦をし、『民の為に』より良き政を行うことを心掛けているそうだ。私なら自縄自縛に陥らせてやる事が出来るだろう」
「孔明殿もそう考えているからこそ調略を命じているのだろうよ」
「甘いな張コウ。あの少女は私ほど非情には成れまい」
「そうかな。俺の目から見てかなり非情だと思うが」

「言い方を換えようか。何かを為す為に生じるであろう犠牲については織り込むことは出来るのであろうが、犠牲を前提にそこから派生する状況を利用することを思いつくような人間ではあるまい。人として香気を放ちはするだろうが、私のような人間には敗れるより他に途はない。だからこそこの任を与えるに私を選んだのだろう」

「……まあ一理あるな」

「そしてそれが真理でもある」

「……郭図。卿は一体どうしたのだ？こう言っては何だが、今の卿の姿は以前からは想像出来ぬ」

「昔からこのようであったろうが」

「ふむ……何も語るまい」

「用は済んだか？済んだなら私は席を外させて貰う。これでも忙しい身でな。卿もとっとと還るが良い、長居されて事が露見したのでは目も当てられぬ」

私に返事を返すこともなく少し考え込んでいる張コウを置いて、広間を後にした。

官渡大戦から此処までは全て想定通りに来ている。私が描いた絵図通りに。この次の戦でも、私の想像通りに勝利することが出来るだろう。

何もかもが、私の思うが儘なのだから。

～張コウ　Ｓｉｄｅ～

「どうでしたか？郭図さんの様子は」
「はぁ……まぁ何とも言えませんな」

孔明殿の問いかけに、何とも曖昧な答えを返す。

ギョウへ帰還した俺を待っていたのは、当然孔明殿。郭図が真面目に務めているかどうか、その準備に穴がないかどうか。そういった事を視察して報告して欲しいと言ったのは孔明殿であり、その依頼を受けて代県まで行ってきたのだから。

「何とも言えない、とは？準備や調略の内容を聞いて、判断に困ることがあったと云うことですか？」
「いや、そんな事はありません。郭図にしては冴えていたと思いますよ」
「では納得が行かないことでも有りましたか」
「いや。どちらかというと、『納得が行かないことがなかったことに納得が行かない』という状況ですかな。色々と言いたいことはありますが、特に言いたいのは奴の俺に対する態度が面妖しかったことについてですな」

「……事情は聞いていますが、怖れられるのは致し方ないことでは？」

「怖れられたのであれば納得が行っていますよ。今までの郭図から考えると怯えを見せて当然であるにも拘わらず、奴は俺を見ても何の怯えも見せなかった。それがどうしても腑に落ちないと云うだけです」

孔明殿は少し目を瞑り、眉間を右手で揉んでいる。出立の時にも思ったが、改めて見るとやはり疲労の色が濃い。官渡大戦からこちら、ずっと働きづめで休む暇など無かっただろう。それは皆に言えることだが、陣頭に立ちつつ全体を把握し、様々に手を打って居たのだ。考えれば直ぐに分かることだが、陣屋で休むのと城内で休むのとでは勝手が違う。余程しっかりしたもので無ければ陣屋では隙間風が入ってくるだろうし、寝台も堅い。敵襲を警戒して気を張っていなければならないと云うのも疲労の蓄積を大きくしたに違いない。

大丈夫なのか。

こちらの視線に気付いた孔明殿に、言葉ではなく、目でそう問いかける。

「……大丈夫ですよ。続けて下さい」

「はぁ。真実大丈夫なら構いませんが、大丈夫だと仰っているだけで実は……、と云うことはありませんかな？」

「大丈夫、と言ったはずです……平家に調略されている可能性はありますか？」

「平家について奴なりの分析を語る際の語り口から考えて、それはありますまい。それよりもむしろ、奴は頭がおかしくなっているのではないかと、そちらの方が心配になったのですがね」

「頭が……おかしい？」

「少々灸が効き過ぎたのかも知れませんからな。戦に出て苛烈な経験、有り体に言えば強烈な恐怖を体験した兵に、ああいった一種の健忘症のような症状を見せる者が居ます。まあそれにしてはしっかりとした話し口でしたし、頭脳の方も明晰でしたが」

「……仕事を任せられそうではあったのですね？」

「……俺が知る今までの郭図よりも、今の郭図の方が手強いでしょう。何故だか分かりませんが、自信に満ち溢れていましたからな。あれが己の至らなさを知らぬが故の過信でないことを祈りたいものです」

「派遣前に彼と話をした際には、そう云った処は見受けられませんでした。貴方が抱いた違和感が気になりますが……まあ、良いでしょう。それで、準備の方はどうでしたか？」

「糧食集積についてですが……」

良くはない気がするのですがね、アレは。報告をしながら、そう考える。

どうもこう、違和感が俺の躰に纏わり付いている感じが拭えない。アレは確かに郭図ではあった。俺に対する尊大な態度も、己の才覚に悦に入った様子も、郭図が郭図であることを示していたと思う。だが、やはりアレは郭図ではない何かであった気がして仕方がない。

「成る程、それは良い案ですね。では調略の方はどうですか？」

「そちらは……」

糧食集積の手立てと、弘農への調略の状況について報告をしながら、自分が抱いた違和感をどうにもねじ伏せることが出来ずにいた。

そして俺は、後日孔明殿と交わしたこの日の会話を思い出すことになる。

此処で感じた違和感は、決して軽視すべきモノではなかったという悔恨の念と共に。

蝶の如く～１６５～（後書き）

＞何もかもが、私の思うが儘だ……
ＢＦ団万歳。色々考えての、埋め込み台詞です。ええ。

猛烈に違和感を感じる郭図さんにはちゃんと意図がありますので…
…まぁ、見え透いている気もしますけど。書いておかないと作者は
基地外か！？とか言われそうなので、後書きに書いておきます。

郭図には意図がある……プッ

蝶の如く～１６６～（前書き）

後一話で始まるとか言っておきながらどうしても一話に納められませんでした。しかも大幅に投稿が遅れ……面目ありません。

後前回の後書きにも書きましたが、ＰＶ約２１００万、ユニーク１４０万アクセスを越えました。皆様から頂くコメントに励まされて、此処までやってこれました。本当に有り難う御座います。

今後とも、宜しくお願い致します。

蝶の如く～１６６～

～教経　Ｓｉｄｅ～

巴蜀の地を後にし、南蛮へ侵攻してから五日が経過している。現状全軍を待機させ、情報収集を行っている。細作からの報告を全面的に信じるならば、南蛮は軍を編成していないようだ。念の為斥候を放って周囲を警戒させているが、今のところ全て徒労に終わっている。見通しの利かない森に通してある、道と呼ぶのがおこがましいほどの道を警戒しながら進んで来た為、さほど距離は稼げていないが先ず順調と言って良い行軍だろう。

しかしそれにしても暑い。体感でしかないが湿度もかなり高いことから熱中症になる者も居るし、水も合わない人間が続出している。熱中症に関しては致し方がない部分もあるかも知れない。帽子を被って水分と塩分を取るようにしろ、と言った処で症状が出る人間はどうしても出てくる。そもそも塩分を効率的に採取する為の食品があまりないしねぇ。梅干し持参で来ているが、嫌いな奴は食べようとしないし。だが、水の話は別だ。水はきちんと煮沸したものを冷まして飲むようにしろと言ったはずなのに。言うことを聞かないからそう云うことになる。

これは先生と凱を連れてきて正解だったな。特に凱。兵達の面倒を見てくれる点では先生と変わらないが、稟を見て病魔がどうとか言いながら、ヘルアンドヘブンかましてたからな。凱に言われて、稟は『郭嘉』だったことに改めて気が付いた。早逝と等号で結ばれるのは、冥琳だけじゃなかったってことを。

華麗にスルーしていたが、そろそろそう云う時期だったということ

だろう。稟曰く、最近気怠さを感じていたらしいが、針を打ち込まれてから全くそんな事はなくなったらしい……お抱え医師に昇格して貰いたいねぇ。死亡フラグは数有れど、病のそれを事前に取り除けるだけでも大きな違いがあるだろうし。

まぁそれはさておき、だ。

「しかしあれだな、お前は馬鹿だな？ダンクーガ。どうして煮立った熱湯を飲まないかねぇ」

そう。目の前にはダンクーガが居る。ポンポン痛くなったのか、腹を押さえながら。そして何故か、俺を異常に警戒しながら。恐らく俺が余計なちょっかいを掛けてくると思っているのだろうが、それは正解だよ明智君。

「沸騰したお湯なんて飲める訳無いだろうが！」
「んじゃ煮沸した水を冷まして飲めば良かっただろ？」
「俺には『そのまま飲んでも大丈夫かも知れないが念の為に』と言っただろうがアンタは！」
「……馬鹿だから大丈夫。そう考えていた時期が、私にもありました」
「遠く見て独りごちれば良いってもんじゃねぇぞ！？何想い出にして呉れちゃってるんだ！？」

俺のあまりの言い様に、あれだけ警戒していたにも拘わらずその警戒を一瞬緩めて身を乗り出して来る。

……ククク、ダンクーガ。恨むなら我が身の至らなさを恨むが良い！

「おおダンクーガよ！漏らしてしまうとは情けない！」

裂帛の気合いと共に放たれた、必殺の一撃。俺の行動に驚愕と、そして警戒していたにも拘わらずそれを防げなかった後悔の表情を浮かべ、それでも回避しようと躰を動かす。

だが俺はそれを許さない。一歩前へ。ダンクーガの股下へ踏み込んで腹を狙う。重心の中心に俺が踏み込んでいる以上、これを躱すことは出来ない。いや、正確には、『今の奴には』躱すことは出来ない。躱すなら後方へ跳び退るしかないが、その急激な運動に奴は耐えられないからだ。

俺の右拳が狙い通り、過たずに奴の腹に吸い込まれる。拳を叩き込んだ瞬間、拳から伝わった衝撃が背中に突き抜けていく快感。ダンクーガが苦悶の表情を浮かべる。

間違いない。今までで最高の手応え。間違いなく、奴は『やった』に違いない。

「あ……ああ……」
「お、おい、高順。大丈夫か……？」
「……と、？、忠」
「な、なんだ？」
「……済まんが暫く警護を頼む……ッ！」

ダンクーガはそう言い残して脱兎の如く駆け出した。奴が向かう先は山。要するに、そう云うことだろう。

「……なあ兄貴」
「何だよ」

「ちょっと臭くないか？」
「……触れてやるな」
「……やった人間が言う事じゃない気がするけどね、俺は」
「……ま、それも置いとけ」

ちょっと味噌が付いたようだが、此処まではまぁまず順調な行軍だったな、うん。

「陛下」

？忠と他愛もない話をしている処へ、司馬懿がやってきた。

「どうした司馬懿。何か問題でもあったのか？」
「は。実は兵達に用意した料理の何割かが無くなるという事件が発生しておりまして、布告を出して注意を喚起したいのです。その際に陛下からの通達とさせて頂きたいのですが。……何か臭くありませんか？」
「臭いは置いとけ……糧食ではなく料理が消えるのか？」
「まあ置いておけと仰るなら置いておきますが、まさか陛下が致したのですか？……報告している私も疑問に思って調べましたが事実です。失せたのが糧食であれば横領・着服も考えられますが、料理が失せただけであれば余程に腹を空かせていた兵が居たのであろうとしか……」
「俺がやるかよ、テメェじゃ有るまいし。……仕方のない奴が居たモンだ。そこまで腹が減っているなら言ってくれれば考えてやるものを。ただ、決まりを守れないってのは問題だな。欲しいから持って行くと云うのではそこらの賊と変わらないだろうが。下手人は探し出して、それなりに反省させろ」
「私はそう云う経験はありませんが？……御意。では陛下からの通達としても？」

「なら突っ込むなよ。……それで良い。お前さんの良い様にやってくれ」
「有り難う御座います……お大事に、陛下」
料理泥棒、ねぇ。
あと司馬懿、かましたのは俺じゃない。ブン殴るぞこの野郎。

「ちょっと！どうなっているのよ！」
そろそろ昼食にしようかと話していたところに、華琳の声が辺りに響き渡る。
声の感じからして穏やかじゃない。怒髪天を衝く華琳の様子が目に浮かぶ……あのツインテールが空に向かって突き立っているのを想像して白湯を吹いた。ったく、何だってンだ？
聞こえてきた声の勢いそのままに、華琳が陣屋に乱入してくる。ダンクーガ達は流石にあの状態の華琳を止めようとはしなかったようだ。目の前に不用意に立ちたくない感じがするからねぇ……。その華琳は、偶々陣屋にいた百合を捕まえて、此処に陣屋を構えてから不審人物を見なかったか、華琳の陣屋に侵入を図る不届き者を見なかったかと矢継ぎ早に質問をしては『……見てない』と云う回答を引き出していた。
一通り質問をした後珍しく渋面を見せていた華琳を眺めて居ると、俺の視線に気が付いたのか眉を顰めて俺を注視してくる。……不機

嫌だねぇ。俺が寝台で寝転がりながら誤って『貧乳だね』とこぼした時並に不機嫌だ。耳がちぎれるかと思うほど引っ張られた記憶が蘇って来て、思わず耳に手をやってしまう。『慎ましくていいね』と俺が言ったから、今日は貧乳記念日』というネタを思いついてどうしても伝えたかったのだが、命が惜しかったので泣く泣く我慢した、あの苦い想い出が蘇る。

「……何かムカつくことを考えて居るみたいだけれど、まあそれは後で良いでしょう」

華琳がこめかみに浮いた血管をピクピクと動かしながらそう宣う。後で問い詰めるのかよ。

「貴方に訊きたい事があるのだけれど、答えてくれるかしら？」
「……そこまで不機嫌になるなんてねぇ。一体何があったんだ？」
「教経、まさか貴方が食べたんじゃないでしょうね！？」
「何を？」
「私が朝から手間を掛けて仕込んできた料理を、よ！」
「……良い匂いがしていたが、華琳が料理してたからか」
「良い匂いが食欲をそそる香りのことを指しているのならそうなのでしょうね。それで？貴方が食べたのではないか、という私の質問に貴方は答えていないのだけれど？」

世の著名な画家が『不機嫌』という題材で絵を描くとしたら、この人をおいて他にモデルはないと言うだろう。華琳がそんな顔をして俺に詰め寄ってくる。……鬼気迫るものが有るな。これだけ怒るってことは、その料理は華琳にとって余程の会心作であったのか。それとも、俺の自惚れでなければ、俺に美味い料理を振る舞おうと腕によりを掛けたものであったのか。

後者だとしたら、本当に可愛い処があると思う。本人にそう言うと間違いなく照れ隠しに怒るから言わないけどな。まぁそんなところもまた可愛らしいと感じているが、これが世に言うところの末期症状だってのは自覚があるから指摘してくれなくても良い。

兎に角、一旦真面目に答えることにする。

「ンな訳無いだろうが。俺は華琳が料理をしていたことさえ知らなかったのに」

「本当かしら？」

「本当だよ」

「天に誓って？」

「平家の赤旗に誓って」

「……そこまで言うのなら貴方ではないのでしょうね」

華琳は一拍置いてそう言った。取り敢えず俺の言う事を信用したようだ。怒気も終熄傾向にあることだし、ここでチキチキ華琳レースでも愉しむことにしよう。

「……料理、会心の出来だったのか？」

「ええ、そうよ。ここ最近で一番の出来だったのに……ッ！」

「……俺の為に腕によりを掛けて作ったってのに、災難以外の何物でもないな」

「全くよ！本当、どうしてやろうかしら！？」

「……華琳、力強く肯定してくれたが、お前さん全く気が付いて居ないようだな？」

「何がよ？」

「『俺の為に腕によりを掛けて作った』ってのを肯定したんだぜ？今。お前さんは」

フヒヒ。これはかなり恥ずかしがるに違いないッ！
してやったりと華琳を見やると、呆れた顔をしてこっちを向いていた。

「貴方ねえ……私達は『夫婦』なのよ？妻が愛しく思う夫の為に腕によりを掛けて料理を作るのは当然じゃない」

華琳はそう、サラリと返して来やがった。恥ずかしがるかと思って居たんだが、その態度は普段と変わりがない。むしろそのストレートな返答に俺の方が照れてしまう。糞ッ、これは想定外だぞ！？

「……そうだな」
「……あら、教経？もしかして貴方、照れているのかしら？」

斜に構えて、こう、俺を見下ろすような感じで声を掛けてくる。
何か負けた気分だ。何に、と訊かれると返答に困るが。

「照れてない」
「照れてるわね」
「照れてないって」
「貴方って意外に純真なところがあるわよね。ま、普段その純真さは餓鬼っぽさとして発露しているんでしょうけれど」
「……酷いことを言われたってことは理解出来たかな」
「そう？私が口にした事実を『酷い』とするなら貴方の人生は悲惨なものになるわね？貴方の存在自体が悲惨だと言ったに等しいのだから」
「そこまで言うかね？」
「私をからかおうとした罰よ。甘んじて受け入れなさい」
「へいへい」

からかってやるつもりだったのに、完全にやり込められた。

「で、此処まで訊きに来たって事は未だ犯人は分かっていないってことなのか？」

「ええ。忌々しいことながら、ね」

「……腹が減っただけにしてはやり過ぎだな。華琳の陣屋に忍び込むなんざ正気の沙汰じゃない」

「どういう意味かしら？」

「そのままだよ。華琳自身が言った通り、華琳は俺の嫁さんだぜ？平家の人間が、家長たる俺の妻の陣屋に無断で忍び込んで勝手に料理を食う何てことをしたらどうなるか、想像出来ないはずがないだろうが。だから正気の沙汰じゃないって言ったのさ」

「へえ……愛されているのね？私」

「当たり前だ。お前さんは俺の嫁さんだぜ？」

「……そうだったわね」

何だ？華琳も照れてやがるのか？

それを突っ込んでやろうとしたその時。

「みぎゃ～～～～～～～～～～！？」

絶叫が聞こえてきた。

～華琳　Ｓｉｄｅ～

教経の陣屋から、悲鳴が聞こえてきた方向へ駆け出す。前を行く高順と？忠の後を、教経と共に追い掛ける。

横を走る教経の顔は真剣なものだった。眼光は鋭く、獲物を見つけた鷹のように厳しく前を見据えている。その肢体はしなやかな力強さに溢れていた。全身から醸し出している雰囲気は、『なんとしてもこの男が欲しい』と思わせるものがあった。こういう時の真面目な教経は、本当に良い雰囲気を持っている。普段からこうであってくれればと思うけれど、それは望むべくも無いのでしょうね。

悲鳴が上がった方向には、稟、愛紗、琴の陣屋がある。稟は兎も角、愛紗と琴は一流の武人だ。彼女達の内いずれかが不心得者を捕らえたのかも知れない。走っていくと、一つの陣屋の前に稟と琴が居た。どうやら愛紗の陣屋らしい。駆けてくる私達へ向けて、陣屋を指さして頷いていた。

先ず高順が、その後に？忠が陣屋に飛び込んでいく。そこには何の躊躇もない。あの二人も普段はいい加減に見えるが、流石に親衛隊の隊長と副長を務めているだけのことはある。その後に続いて教経と私も陣屋へ飛び込む。

「愛紗、大丈夫か！？」
「あ、は、はい、教経様」

愛紗の陣屋に飛び込んだ私達の目の前には、愛紗が立っていた。どうやら怪我などはしていないようで、それを見た教経はホッと吐息を漏らした。

「……良かった」

そう言って愛紗を包み込むように抱きしめた。対する愛紗も陣屋に飛び込んできた教経の様子から、自分に対する愛情の深さをしっかりと読み取ったようで幸せそうな顔をしていた。

「……そろそろ良いかしら？」
「あ」
「愛紗、また今度な」
「は、はい！」

全く。今日は私の番だというのに、その私の前で他の女に現を抜かすだなんて。

「で？何があったのかしら？」
「……アレを見て貰えれば、と」
「アレ？」

愛紗が指さした先には、獣のような格好をした子供が泡を吹いて倒れていた。獣と言ったが、虎若しくは猫の様な格好をしているとも言えるかも知れない。躰を改めた限り凶器は身につけていなかった。愛紗が確かめた限り、この子供は女の子だそうだ。

何故泡を吹いているのか不思議に思って周囲を見渡すと、机から落ちたのであろう木碗が目に入った。碗には未だ僅かばかりではあるが、汁物が残っていた。状況から考えると、あの子供はこれを食べようと忍び込み、その後泡吹くような何らかの不幸にあったようだ。

「あの子供が私の料理を食べたのだろうということは分かったけれど、何があったのかはよく分からないわね。泡を吹いて倒れているなんて、普通では考えられないことよ。ここでそうなるようなことが起きたと考えるべきでしょうね」

その私の言葉に、教経が同意してくる。

「確かにな。後から何者かに殴られた、と云う状況じゃない。泡を吹いているところが何とも状況を分かりにくくしているンだよねぇ。例え子供と雖もこれが男なら股間を蹴り上げられたなりぶつけたなりしたのだ、と言えるンだが」

「どうして股間一択なのよ！」

「他に何があるんだよ」

「あのね……締め落とされたり、後ひきつけを起こした人間も泡を吹くことがあるわよ？」

「そう言われればそうか。いや、全く思いつかなかったわ。俺ぁ男だし、あの痛みを多少なりとも知っていればそれ以外は思いつかんと思うがねぇ」

「はあ……まあいいわ。此処で結論が出ない話をしているよりも医者を呼んだ方が良いでしょう。黒男も華佗も優秀なのだから原因は分かるはずよ」

「そうだな」

「それと、愛紗が作ってくれた料理。下に落ちてしまっているとは言え、未だ碗の中には残っているけれど？」

どうするの?と言ったつもりで教経を見る。

その私の視線を受けて少し首を傾げ、当然と言わんばかりの態度で自分が全部食べると言い放った。まぁ、そうでしょうね。どう考えても、愛紗は教経の為に料理を作っていたのでしょうから。それと察していてそれを食さないという決断は教経には下せないでしょう。

「の、教経様……」

愛紗が嬉しそうにその名を口にする。

私の料理を食べた犯人は確保したし、後は教経が愛紗を喜ばせてやれば一件落着ね。

教経が木碗を拾い上げ、その中身を口を付けて一呑みに飲み干す。

「ン〝ッ!?」

「?教経?どうかしたの?」

「教経様?如何なさいましたか?その、宜しければ、私の料理の感想を聞かせて頂きたいのですが……」

料理を飲み込んだ瞬間、教経は不自然に動きを止めた。何とも表現しにくい声を出しながら。

教経が手にしていた碗を奪い、僅かばかり付着した汁を舐め取ってみる。

「――――!!!!?」

「?華琳、どうしたのですか?」

これは――――――不味いッ！犬でさえこれを食べることは能わないだろう。それを確信させるだけの、破滅的な不味さ。一体どうやれば此処まで不味くなるのか。これは食品への冒涜ではないのか。私の胸の内に、止めどなく、愛紗の料理に対する様々な罵詈雑言が湧き出してくる。

「愛紗」

「？」

「……もの凄く不味いわ」

「なッ！そんなはずが……ッ！」

「……なら食べてみなさいッ！」

碗から残りの汁を掬って、その口に捻じ込んでやる。

「ん〝～～～～！？ぺっ！……な、何なのですか！？これは！？」

「それはこっちの台詞よ！貴女が作った料理でしょう！？」

医者の診断を待つまでもない。子供が泡を吹いていた理由は、目の前にあった。

「教経殿？しっかりして下さい！」

「お屋形様！？」

謎が解決してすっきりとした心持ちになった私を余所に、教経は死域に足を踏み入れていた。

「教経様！？一体どうしてこんな事に！？」

凄まじく不味かったからよ、愛紗。

あの惨劇から二日。意識を取り戻した猫娘を尋問しているが、さほど成果は上げられていない。分かった事と言えば、あの娘の名前が“ミケ”と云うことと、他にも幾人か平家軍の周囲にやって来ているということくらい。

虎のような格好の、猫のような名前の娘を見て居ると、何故だか頭が痛くなる。率直に言うと理解に苦しむ。この暑い気候の中、露出度は高いとは言え毛皮を被っている部分は暑いと思うのだけれど。その格好は何の要有っての格好なのかしらね。

桂花？あの娘はあれで良いのよ。『淫乱な雌猫』と罵ると悦ぶから、あの格好で良いの。あれは必要有っての格好なのよ。今度は豚の格好でもさせて罵ってみようかしら。きっと良い反応をしてくれることでしょう。

“ミケ”は自分の名前を告げて以降、一切話をしようとしない。これが普通の、例えば魏越のようなむさ苦しい成年男子であれば容赦なく尋問を行うのでしょうけど、流石に相手が女で、しかもこれだけ幼さを残していると強引な手段を以て尋問しようという気にはならないのでしょう。

陣屋に将達を集めて今後の方針について話し合いをしていると、配下からの報告を受ける為に中座していた稟が帰ってきた。

「教経殿、少し宜しいでしょうか」

「どうした？」

「それがその……」
「？」
「自らを孟獲と名乗る少女が訪いを入れてきました」
「はぁ？孟獲が？何でまた」
「ミケを解放しろ、というのが彼女の要望です」

南蛮へ攻め入って来ている平家軍へ訪いを入れる。

どう考えても自殺行為だ。ただの使者でさえ、この時点で送れば斬り捨てられてもおかしくはない。そこを敢えてやって来る。何か考えがあるのか。

相手の身になって考える。私が、南蛮を統べる王であったならどうするか。

この時点で平家軍の陣屋に赴いて何が出来るのか。
――南蛮軍としての力を纏め平家軍をどうにかしようと画策するなら、行軍経路として予測される地点に埋伏した方が余程利口と云うものね。何も今此処で自ら陣屋に赴く必要は無いわ。

これが策だとして、何を狙ったものなのか。
――孟獲という存在をその目で確かめた者は南蛮へ使者として赴いた者しか居ない。その者に面通しをさせずに引見した場合、それが孟獲でなくともそれと気付く者は居ない。それであれば、孟獲を名乗って油断させ、刺殺を狙うと云うこともあり得る。尤も高順や？忠がそれを易々と許すとは思えないけれど。まあ警戒はしておいた方が良いでしょうが、これは会ってみないことには分からない。

教経は少し俯いてそれなりの時間考え込んでいたが、顔を上げて私と視線を合わせる。

その上げた顔は、何かを決断した顔をしていた。当然その自称孟獲に会うと云うことを決心したのでしょう。会わなければ何も始まらない。そもそも孟獲を引き摺り出す為に遠征を仕掛けたのだから、この展開はむしろ望むところと言って良いでしょう。

そう思いながら頷くと、教経は薄く笑って孟獲に会うことを宣言した。

蝶の如く～167～

～教経　Ｓｉｄｅ～

ダンクーガと?忠を引き連れて陣屋に入る。

そこには捕らえた“ミケ”と同じような格好をした少女が三人居た。俺がやってきたことに気が付いてこちらを観察しているようだ。中央の少女がやや前に立っており、その左右に二人が控えているという形。中央が孟獲、その後ろが護衛なのだろう。

やって来たのが孟獲本人に間違いないことは、かつて稟が南蛮へ遣った使者に確かめさせてある。念の為に確認しておくべき、という華琳の意見に、稟も司馬懿も強く同意した為そうした。三人が心配したというのがそうした理由だが、皆心配しすぎだと思うがねぇ。殺しに来るなら本人であろうとそうでなかろうと返り討ちにするだけだろうに。そう言ったら三者三様の言葉で俺の事を叱ってきた。要約すれば、可能性を排除する重要性が分かっているのならそうしろと云うことだった。

……良い家族に恵まれた、と言うべきなんだろうな。

「で、何の用だね?今更お前さんと話し合わなければならないことは無いと思うンだが?」

席に着きながら先ず突き放すべく言葉を発する。この程度で愠色を露わにするようなら、交渉するに容易い相手と言えるだろう。どういった感情をその面に表すのか。それを見逃すまいと孟獲らしき少女を見据える。さて、何と応えるかな。

「ミケを解放するにゃ！お前が捕まえているのは分かっているのにゃ！」

……こちらの態度は全く関係無しに、ミケを解放しろと来たモンだ。やはり何かしらの思惑在っての言動か。その物言いに怒った俺が近寄ったところを刺殺する、と云う程度の事は考えていると警戒した方が良さそうだ。そうでなければ余程の阿呆としか言い様がないが、流石にそんな事はないだろう。

語尾については取り敢えずスルーの方向でお願いしたいねぇ……あぁ、頭が痛い。

「何故捕まっているのか分かっているのか？殺されても文句は言えない状況だと云うことを理解した方が良い」

「どうしてミケを解放しないにゃ？」

「余所様の処の料理を盗んで食べたからだ。第一、密偵だろうが。ミケを陣中に派遣してこちらの様子を窺っていたのだろう？今度から派遣するなら食い意地の張っていない奴を派遣するんだな」

「盗む？盗むって何にゃ？」

……白を切るにしてももう少しこう、知性が感じられる切り方をして貰いたいンだが。私は純真な少女であって何を言っているのか分からない、と云った風情の、この態度は気に入らない。全て分かっていて、俺の神経を逆撫でて遊んでいるのか？幾ら子供だと言え、此処まで相手を馬鹿にした対応をしてただで帰して貰えるとでも思って居るのか？

「あの、ご主人様。宜しいでしょうか？」

すれ違いというか、話の的がずれているというか。些か性急な気もしたが兎に角苛立ちしか募らない不毛な会話に終止符を打ってやろうとした処に、紫苑が横槍を入れてきた。何やら言いたいことがありそうだ。この場に控えているその他の人間とは違い、唯一その表情に余裕を見せている。

そのまま続けろ、という意味を込めて頷く。

「有り難う御座います。……孟獲様、私は黄忠と申しまして、現在ミケちゃんの世話をさせて頂いています。一つ、訊いても良いでしょうか？」

「何なのにゃ？」

「孟獲様は、平教経様と戦をなさるつもりは御座いますか？」

「場合によってはあるにゃ」

場合によっては、だと？どういうことだ？

思わず口を差し挟みそうになったが、未だ紫苑が言いたいことを全て言っていないであろうことは明白だ。少々イライラするが、同じようにイライラしている華琳でさえ我慢しているのに、俺が先に爆発する訳にも行かないだろう。間違いなく収拾が付かない。此処は紫苑が話の道筋を付けてくれるまで大人しく任せておくべきだ。

納得いかない部分はあるが、そう割り切って静観する。

「それはどういう場合にですか？」

「平教経がみぃ達の食べ物を奪うなら戦わざるを得ないにゃ。そうでないなら、みぃ達は別に戦いたくはないにゃ」

「平家から使者がやって来て、敵対する積もりがあるのかどうかを伺ったと思うのですが？」

「えんしょーとかいう奴のおつかいが、平家の人間は口ばかり良い事を言うだけでみぃ達を騙そうとしてくると言っていたにゃ。言うことを聞いたら悪い様にはしないなんて信用出来る訳無いにゃ」
「……平家からの使者を叩きのめしたのは間違いありませんね？何故ですか？」
「みぃ達の食べ物を勝手に食べたからにゃ。あの辺りからこっちは全部みぃ達のものにゃ。勝手に食べたアイツが悪いにゃ」

……なんとまぁ。政戦両略併せて様々な事を画策していると思いきや、実は全く考えて居なかったというのか。平家を相手にする理由がまた奮っているじゃないか。『食っていく為』に平家と戦う、と言っている訳だ。成る程、確かに俺たちが略奪者だと考えて居るならそう云う考えになるだろう。

「他の人の食べ物を勝手に食べるのは良くない、ということですか？」
「当たり前にゃ！食べられたらみぃ達のお腹が空くにゃ！」
「そうですね。私もそう思います。最初に孟獲様がお訊きになったミケちゃんが捕まった理由は、今孟獲様が良くないと言ったことをミケちゃんがしてしまったからです。ミケちゃんは勝手に平教経様の食べ物を食べたから捕まえられているんですよ？」
「嘘にゃ！」
「嘘かどうか、ミケちゃん自身に訊くのが良いと思いますわ……ご主人様、ミケちゃんをこれへ呼んでも構わないでしょうか？」
「……あ、あぁ、構わない」
「有り難う御座います」

俺を筆頭に、多少頭が回る連中は全員間違った前提に立ってものを考えていた。

南蛮の情報がないのは孟獲が有能であるからであり、孟獲が動きを見せないのは平家を誘い込む為である。使者を打擲したものの生かしたのは平家への挑発行為であり、攻め入られても姿を見せないのは大規模な奇襲をする為である。

皆、自分を基準にしてそう考えていた。だが結局、皆それぞれ勝手に想像した孟獲像、謂わば自分が創り出した影に怯えていただけだったと言う訳だ。

考えるだけ無駄だった、か。何とも気の抜けた話もあったものだな。

あれからミケを陣屋に入れて紫苑がミケに質問し、紫苑が言う通りミケが美味しそうな匂いに我慢出来ず料理を勝手に食べたことが証明された。どうやら美以達には個人が物を所有するという感覚が今ひとつ分からないらしく、『盗む』という言葉の意味がよく分からなかったようだ。正確に言えば、目の前の木の実は自分の物だと考えても、その実を付ける木自体が自分の物であるという考え方が出来ない。

あの手この手で『勝手に食べる』＝『盗む』だと教えると、そういうものなのだと云うことは何とか理解していた……と思う。

また、『購う』と云うこともよく分からないらしい。今まで外部から入ってきた商人とは物々交換を行う事でそれなりに文化的な品物を手に入れていたようだが、貨幣というものがあり、それと物品を交換するという概念自体が意味不明なのだそうだ。俺と華琳で一緒

になって教えてやっていたが、全く以て理解しなかったので最終的には教えることを放棄した。

俺たちが教えることを放棄した美以達には、紫苑が根気よく、まるっきり子供扱いで教えていた。

紫苑は、何故だかトラやシャムに『はは』『かあ様』と呼ばれていた。ミケも『ははしゃま』呼ばわりをしていたが、どうやら彼女達の母親と同じ匂いがしたからそう呼んでいるらしい。ちなみに、トラとシャムとは、孟獲の左右に控えていた南蛮兵のことだ。

美以も良く紫苑に懐き、平家が南蛮から食べ物を勝手に持って行かないことを教え諭すと、平家とは戦はしないと約束をしていた。そう云うのは俺と約束しないと意味がないと思ったが、突っ込む気力が湧いて来ず、そのまま放っておいた。

戦をしないという結論がしっかり出たところで堅苦しい雰囲気が霧消した為、料理でも食べながら友好を深めてはどうかと云うことになり、会食の席を持つことにした。その席で今後のことについて改めて紫苑から話をし、平家と敵対しないと云うだけでなく、利益を与えられる限りに於いて従ってはどうか?と切り出したのだ。

折しも稟・碧・琴・華琳、そして紫苑が孟獲達の為に作った料理に舌鼓を打っている席であったが、その南蛮では味わえない料理の数々に骨抜きにされてしまったらしく、『平家がそれなりの料理人を南蛮へ派遣すること』という、今までの南蛮への警戒ぶりは何だったのだと言いたくなる様な条件でこちらに従うことになった。

その際についでに真名を預けられたが、本当に『ついでに真名を預けるにゃ』と言いやがった。それで良いのかよと突っ込みたかった

が、もうどうでも良かったのでそれも放置した。真名という文化が南蛮にもあったこと自体に実は驚いたンだがね、俺は。

兎に角、従ってくれることになった訳だ。

ただ、最初から平家に付き従ってくれた族と同じような扱いをする訳にはいかない。勿論、あからさまに虐げるつもりは毛頭無いが、兵を向けるまでもなく従ってくれた族とほぼ変わらない条件の待遇が与えられた場合、先に従ってくれていた族は面白く無いだろう。だから、条件を幾つか付け加えた。

1つ。象兵を編成し、中央へ送ること。これは無報酬とする。

象兵は脅威だ。混沌としがちな戦場に在って、遠くまで見渡せる高所を確実に確保することが出来るし、何より象そのものが有する突破力・殲滅力は凄まじいものが有るだろう。この時代において、これに比肩する破壊力と機動力を兼ね備えた部隊は絶対に存在しない。

例え稟や冥琳、華琳に司馬懿を向こうに回したとしても、1度だけなら完勝する自信がある。皆俺とは違って天才だと思うが、経験して対処を学ぶ天才であって、経験していないことまでも見通して対処をする、謂わば気違い型の天才ではない。

諸葛亮もまた間違いなく経験して対処を学ぶ型の天才だろう。研究の為に江北へ象が送られたという話を聞いていない以上、残念ながら彼女は大スキピオには成れそうにない。その終わりを考えれば、大スキピオに成れないことを感謝して貰いたいものだ。それに対するこちらのハンニバルは雛里と吉里と云うことになるだろうが、象兵の特性を教えておけば上手く扱うだけの器量は在ると信じて居る。騎兵と有機的に組み合わせ、包囲戦術を展開することを考えつくの

ではないか。まぁ、一任した以上俺は彼女達が建てる戦略・戦術を信じるだけだ。

そしてもう1つ。南蛮の特産品は、平家にのみ供出することが許されること。こちらは報酬というか、美以達が欲しがる物品での取引という形を取る。

供出先が平家に限定される、と云うのがこの話の味噌だ。正直な話、南蛮の特産品は珍しい物が多く、中央でそれなりの値段が付くだろうことは間違いない。これを大量に仕入れて捌けば大きな利益が生まれるはずだ。要は美以達がその価値を理解していないことを良い事に、平家がその利を独占するのだ。蚊帳の外から注視している異民族達のその目には、手向かったばかりに少々厳しい待遇に落ち着いてしまった哀れな族に映ることだろう。

だがその実、美以達には南蛮の特産品という物は中央で捌けばそれなりに利益が出ることを理解させた上で、南蛮の特産品と交換するものを選ばせた結果、金銭ではなく料理の素材となる物品と腕の良い料理人をその都度派遣することにしたのだ。端から見れば悲惨な結果なのかも知れないが、彼女達は自分が真に望む物を手に入れている、と云う寸法だ。

平家は利益を、南蛮は食を、その他の異民族達は優越感を。それぞれ得ることが出来る。

これだけのことを取り決めて領土の境界を取り決めている最中に、

長安にいる霞の参謀を務めている瑛から書状が届いた。使者の手から書状を受け取り、広げて内容を確認する。その書状には簡潔に、ただ事実だけが記されていた。

『袁家来る』。

素っ気ない簡潔な記述。それがより一層、来るべき時が来たという実感を与える。そして同時に、今まで感じたことのない武者震いを覚えた。糞爺とほぼ互角に戦っている最中や恋を相手に全力でやり合っている時に覚えた震えをも凌駕する、この三十年になりなんとする人生で最も大きな武者震いを。

俺はその時、嗤っていただろうと思う。この乱世における最後の幕が上がる音を、確かにこの耳に捉えたのだ。

これで乱世は終わる。その結末がどういうものになるにせよ、これで終わることは間違いない。

全身全霊を傾けて。

言葉通り、平教経という人間の全てを賭して。

――――勝ってみせようじゃないか。

～月　Ｓｉｄｅ～

「ほら！早く出発しろ！もうすぐそこまで迫っているんだぞ！」
「婆さん！荷車に乗れって！」
「警備兵共は何をしている！誘導さえもまともに出来んのか！？」
「今やっているところです！……おいちょっと待て！貴様らはまだ出発許可を受けていないだろう！」

私は今、洛陽に近い集落にいる。ご主人様の威徳を慕って長安まで移動したいという人々が、馬が嘶き怒声が飛び交う喧噪の中、慌ただしく移動の準備をして出発して行く。軍で誘導を行っているが、進捗ははかばかしくない。

「良し、急いで出立しろぉッ！次出立する荷車にはもう少し余裕があるから爺婆なり荷物なりを早く持ってこい！」

今また新しい集団が長安へ向けて出発したようだ。予定なら此処まで慌ただしくなるようなことは無かったのに。

「月様、そろそろ月様にも出発して頂かなければ困ります」
「朔さん……」

「麗軍の一部が進路を変更したのは間違いないようです。五日後にはこの辺りにやって来るでしょう」
「……そうですか」

慌ただしくなったのは、宛に向かって移動していた麗軍の一部が突如進路を変更して弘農へやってきた為。宛で麗に備えていた雪蓮さん達は、徐州から発せられる可能性が高い軍勢と宛に寄せてくると予測されていた軍勢の二つに備える必要があり、身動きが取れない状況だった。

「洛陽の部隊は動きを見せていないのですか？」
「はい。流石に1万程度ではこちらに寄せては来ないでしょう。各個撃破の良い的になるだけです」
「詠ちゃん達はどうしていますか？」
「各集落を回って居ますが、進捗ははかばかしくない様です。月様……」
「朔さん、私よりも遙かに洛陽に近い集落を恋さんやねねちゃんが廻っているのに、私だけが安全な後方に下がるなんて出来ません。限界まで此処に居ます」
「ですが危険です」
「承知の上で言っています。それに、ある程度の危険であれば朔さんが居てくれれば大丈夫です」
「私を評価して下さっていることは感謝に堪えませんが、さほど大したものではありません。国士無双の武勇を誇ったとしても、数の暴力の前には膝を屈せざるを得ません。確かに恋は三万もの賊を相手に無傷で居られた猛者ですが、その時その背後に護るべき者がいたなら結果はまた違ったものになったことでしょう。将の将たる者はその身の安全を先ず第一に考えなければなりません」
「でも……」

朔さんの言いたいことは分かる。けれどまだ敵軍が来た訳ではないし、本当に危険なら詠ちゃんが黙って居ないだろう。

詠ちゃんは基本的に私の意思を尊重してくれるけど、同時にまた絶対に譲れないと思っている部分については絶対に譲ってくれなくなった。以前は譲ってくれていたけど、反董卓連合軍との戦の後からは何があっても譲ってくれない頑なさを感じるようになった。

その詠ちゃんが何も言ってきていないと云うことは、まだ私は私のやりたいようにしていても取り返しの付かないことにはならないと云うことだと思う。だからもう少しだけ、此処で皆が帰ってくるのを待っていたい。

「……分かりました。但し、詠が合流した時点で出発致します」

「有り難う御座います、朔さん」

「ゆ、月!?何で未だこんなところにいるのよ!?」

暫く待っていると、すぐに詠ちゃんが合流してきた。詠ちゃんは私が未だ此処に残っているとは思っても見なかったらしく、私を見てもの凄く吃驚した顔をしていた。

「朔!アンタ何やってたのよ!?」

「……済まぬ」

「詠ちゃん、朔さんは悪くないよ?どうしても皆が帰ってくるのを待っていたいって、私がお願いしたの」

「あ～～ったくもう！兎に角直ぐに移動するわよ！？」
「詠ちゃん、恋さんとねねちゃんは？」
「先行して間違いが起こらない様に警戒してるわ。月のおかげで賊が減ったとは言え、長安付近とは違ってまだまだ治安が悪いから」
「長安へ移動したい人達はどんな様子かな？」
「それは道々話してあげる……ほらそこ！何チンタラやってるのよ！もっときびきび動きなさい！アンタ達が最終なんだからね！？……さあ！出発するわよ！」

詠ちゃんに急かされて、最後の組が出発する。私も朔さんと詠ちゃんと連れだって馬上の人となった。馬を走らせつつ後方を確認するが、未だ何も見えてこない。

間に合った。

そう思ってホッと息を吐く。少し離れた場所では、朔さんが匈奴の方達を幾人か集めて何か指示を出していた。集まっている人達は、皆馬術が達者で、しかも駿馬に跨っている人だった。多分、周辺の様子を確認してきて貰える様にお願いしているのだと思う。

匈奴の皆さんは故郷を離れて私の様な人間の下に付けられているにも関わらず、文句一つ漏らさず私の指示に従ってくれている。それどころか、私が城外へ外出する際には進んで私の警護をさせて貰いたいと言ってくれたりした。当初厳しい言葉を吐いていた朔さんも、ある時から私の警護を務める際に彼らを伴うことを厭わなくなった。

朔さんと匈奴の皆さんの間でどんな話があったのかは分からないけれど、朔さんが彼らを信用出来ると判断したから何も言わなくなったのだろうと勝手に思って居る。稀に匈奴の皆さんの言動に困惑させられることもあるけど、そう云う時は朔さんが『教育』と云う名

の折檻をすべく、彼らを追いかけ回す。

その時は追い掛ける朔さんも、追い掛けられる匈奴の人達も皆楽しそうにしていた。勿論、捕まれば嫌そうな顔をするし、痛そうには違いないけど、それでも皆笑って楽しそうだったから。

私は自分の為に他の人に死んで下さいとお願いをすることが出来なかった。私の、より良い政を遍く天下に広めたいと云う夢を実現する為に、誰かを犠牲にすることに耐えられなかった。ご主人様は私とは違う。自分の夢が多くの血を流すことになると分かった上で、それでも猶その夢を求めて已まない。

ご主人様が考えて居る理想の世の中。その夢を実現することが出来れば、皆あんな風に笑って過ごせると思う。

その為に、私は私が出来る事をするのだ。

蝶の如く～１６８～（前書き）

ちょっと遡りますよと。

蝶の如く～１６８～

～朱里　Ｓｉｄｅ～

平教経が益州から南蛮へ向かって兵を移動させた。南蛮征討を開始したのだ。

その確実な情報を得て、主立った将が招集された。斗詩さん、猪々子さん、張コウさん、田豊さん、審配さん、逢紀さん、郭図さん、桃香様、鈴々ちゃん、七乃さん。それに私を加えた１１名が、広間に集っている。

話し合う内容は、出兵について。

何故この時機に、と問う人間は居ない。召と事を構えるならば、今この時機をおいて他にないということを皆分かっているのだろう。

召と共存し、天下を二分出来ればそれで良いと云う考え方も出来る。だが麗は召を認めない。いや、認めることが出来ない。漢の正統を受け継いだ麗に従属せず、それればかりか自ら王朝を開闢することを宣言した召とは、倶に天を戴くことは出来ない。

それは己の矜持に懸けて出来ないということもあるだろう。また、正統を主張しているにも拘わらず敵わないから異端を受け入れるというのでは二律背反すること甚だしい。だが、それらを棚に上げて従属したとしても、それをすれば麗領内の不満分子が黙って居ないだろう。

不満分子の中には、麗が漢の正統を継いだからこそ我慢していると

いう輩も居る。それが自ら正統を破却するが如き振る舞いをすれば、箍が外れる事は間違いない。しかも彼らが反乱する際に口にする理由には筋が通っているに違いないのだ。

共存することを考えることが即ち滅亡への第一歩となる。私達には、召と戦う以外の結論を出すことは許されない。

「出兵に反対する人間は一人も居ない事は分かって居ります。ですのでこの場では、何処に攻め掛かるかについて話をさせて頂きたいと思いますが宜しいでしょうか」

田豊さんの言葉に、各人が思っていることを発言し始める。

方針としては二つ。

孫家による統治によって急速に落ち着きを見せ始めているとはいえ、未だ万全とは言いがたい揚州を攻めると云うのが先ず一つ。こちらを支持しているのは、斗詩さん、猪々子さん、田豊さん、審配さん、逢紀さん。桃香様と鈴々ちゃんもこちらだ。恐らく麹義さんと沮授さんを徐州に派遣したことから推測したのだろう。

もう一つは、宛を衝くと見せかけて弘農を攻めると云う方針。こちらの支持者は、張コウさんと郭図さん、七乃さん。張コウさんには軍の編成を、郭図さんには糧食の備蓄を、七乃さんには宛にいる敵軍の北上を阻止する為の対策を、それぞれ任せている。それぞれ私の意図を察して弘農へ攻めると言っているのは間違いない。

私の結論は当然弘農への侵攻一択だ。それ以外の選択はあり得ない。

徐州へ麹義さんと沮授さんを遣ったのも、一旦洛陽から兵を引き抜

いて再編しているのも、全て弘農から目を背けさせる為だ。目論見通り引っ掛かって呉れれば良し、そうでなくとも弘農に展開している敵軍より多数の兵を遠征に充てるつもりだ。その他を攻めるより与しやすいのは間違いない。

戦略上、弘農は重要な拠点ではない。細作に拠れば、直ぐに撤退可能な態勢を整えつつあるとのことだった。労せずして勝利をこの手に掴むことが出来そうだが、油断は禁物だ。弘農にいる賈駆は有能な軍師であるし、他にも優秀な軍師は多い。『神算鬼謀』『奇計百出』『機略縦横』『深慮遠謀』『権謀術数』。彼女達を言い表すに相応しい言辞を考えれば、自ずとその危険性が分かろうというものだ。ただ、今回の出兵にあたってはこちらが先手を取ることになる。あちらとしてはこの一手に関しては受けざるを得ない。先ず受けて、而る後に対処する。そう云う流れになる以上、初手に関しては思う通りに勝つ事は叶う。

「麗羽様、ご判断を頂きたく存じます」

「……朱里さん。貴女は最初から一度も発言をしておりませんが、何か意見があるのではありませんこと?その思う所を忌憚なく聞かせて頂きたいのですが」

「私としては弘農への侵攻しか考えておりません。状況を鑑みれば、その一手が最も勝利する可能性が高い策です」

「……徐州での備えは何であったのです?苦労して糧食を集積したのです。それを無駄にすると言うのですか?」

「弘農を攻める前までは侵攻の可能性を考慮させることでそれに備えさせることが出来ます。そして現状、そうなっております。これを無駄とは言いません。弘農へ攻めた後は寄せて来るであろう敵軍を禦ぐに籠城が可能となります。糧食に余裕を持って籠城出来ると云う点で無駄にはなりません。

今この状況で固着するのであれば備えは無駄になりかねませんが、

今正に状況を変化させようという話をしているのです。状況が変化するのであれば、それがどういう状況であろうと、徐州の備えは無駄にはなりません」

「……朱里さんの意見を踏まえて、皆さんはどう思いますの？」

私の意見を受けて、皆が再び言葉を交わしながらそれぞれの考えを纏めている。方針が決定した後のことを考えると、ここでさほど時間を費やす訳にはいかない。この時間が無駄であるとまでは言わないが、貴重な時間を浪費しているだけに思える。だが、合議の結果として結論を出したという形がなければ、この後がやりにくくなる。その為には、方針を決定的にした意見を私が言うべきではない。

議論が粗方尽くされた頃、郭図さんと七乃さんを見やる。郭図さんは半眼で苛つき、七乃さんはどうでも良さそうな雰囲気を滲ませている。早く終わらせよう。そうその目が言っている。

確かに、頃合いだろう。そう思って頷いた。

「結論はもう出ている。弘農を攻めるしか途はない。何故なら、私は弘農を攻める準備しかしていないのだからな。今から準備をしていたのでは、平教経の虚を衝くことは出来ない。確実に先手を取ることが出来ると分かっている戦で重要なのは、拙速さだ。時間を掛ければ対策を立てられかねないし、どちらを攻めても違いがないというのであれば、戦う事を前提に準備が為されてきた弘農方面で戦を為すべきだ。

勝ち易きに勝つべくして勝つ。これが最上の策であろう。『天下を統一する為に今この時点で平家と戦をする』という決断自体は博打のような物だが、だからといって戦の仕方まで博打を打つことはない。

『一歩ずつ着実に、確実な要素を積み上げて博打に臨む』。

矛盾している様だが、これは戦の要諦を良く表せていると思う。この逆説が理解出来ぬ卿らでもあるまい」

郭図さんの言葉に、田豊さんが考え込んだ。揚州攻めと弘農攻め。どちらがより確実だと言えるのか、今まで得た情報を整理して見ようというのだろう。

「私も弘農を攻めるしかないと思いますね～。軍を洛陽から引き抜いたのは、弘農を攻めることを前提にしているからですよね～？これが徐州から揚州を攻めるという話になれば、平家の逆撃は洛陽に対して行われる事になるんですよ～。

洛陽は戦略的に重要な拠点ですよ？洛陽がこちらの手中にあれば、あちらは函谷関と宛に兵力を分散して禦がねばなりません。洛陽が陥落して平家の物になれば、陳留に掛かる圧力は今の二倍と云うことになりますね～♪

洛陽を手薄にすると、力を集中させることが出来る状況を作り出す良い機会だとあちらは考えるのではないですか～？」

七乃さんの意見。これに対してはそういう状況になった時にどう対処出来るか、そしてその実現性が高いことを明らかにすることでその意見を押さえることが出来るが、皆彼女の言が剴切であるかどうかを判断しようとしているようだ。七乃さんの意見は、誰がどう考えても正しい。その正しさを覆す事は出来ない。剴切であるか否かで全てを決しようと云うのであれば、弘農攻めの主張を押し止めることは出来ないだろう。

結局この郭図さんと七乃さんの意見が決め手となって弘農を攻める事が決定された。

弘農攻めの大将は私。

配下に、張コウさん、郭図さん、田予さん、李孚さん。
率いる兵は6万。
後詰めとして審配さんが1万を率いて参加する。

弘農に展開している平家軍は3万強でしかない。長安の守備に就いている物を併せると5万を超えるが、6万には届かないだろう。今回の目的は長安を落とす事ではなく、函谷関手前までを全て袁家の支配下に置くことだ。兵は7万で十分足りる。

それぞれ遠征の準備をするように、との指示を最後に宮中を後にした。

出兵の準備が整い、閲兵式の後に出立する段取りを整えていると、今までのことがまるで走馬燈の様に思い起こされた。苦く、決して忘れ得ぬ想い出もあるが、軍師として充実した日々を過ごしてきたと言って良いだろう。

思えば志を定めて故郷を旅立ってから、本当に様々な事があった。

桃香様との出会い。
――純粋に、この人を主として乱世を終わらせたいと願った。

反董卓連合。
――平教経の手強さを実感し、そして私の夢が死んでしまった。

公孫賛討伐。

――討伐したつもりだった。だが彼女は生き延びて、雛里ちゃんを従えて復讐の機会を狙っている。

雛里ちゃんの出奔。

――己を信頼してくれぬ主君に愛想を尽かした。当たり前のことだと思う。

徐州への左遷。

――全てが虚しく感じられた。だがこれで色々と気持ちの整理が出来たから今の私がある。

官渡大戦での勝利。

――私の器量一つで戦に勝てる。それが確認出来たことが一番の収穫だった。

曹操討伐の失敗と揚州侵攻時期の見誤りによる失態。

――平教経は私の予測を超えることを行う事を思い知らされた。だが次は覆轍は踏まない。

長い道のりだったが、あと僅かで乱世が終わる処まで来ている。

漸く此処まで漕ぎ着けた。それが偽らざる実感だった。主君に戴くつもりだった人に自主独立の道を拒絶され、共に歩むつもりだった親友とは道を違えた。気付けば、私は一人で歩みを進めていた。孤独な道だった。当初は辛くて涙を流したこともあった気がするが、それももう遠い昔のことの様に感じる。

こうなったことについて、誰を恨むつもりもない。現状は、私自身の選択と行動によって、私が創り出したものだから。

だから、今回も私自身の選択と行動によって道を切り開いてみせる。

この戦に勝ち、更に次の戦で平教経と直接干戈を交え、これを戦場で討ち取る。戦の勝敗自体は問う所ではない。例え戦に負け、軍が散り散りになってしまったとしても、私が生き残りかつ平教経を死んでいれば私の勝ちだ。それで私は時代を創る資格を得ることが出来る。私が想う理想を、私が実現したい世の中を創り出す事が出来る。

私の命を救ってくれた桃香様の理想の世の中を。

其れを顕現させる為だけに、今私は此処で生きているのだから。

～郭図　Ｓｉｄｅ～

弘農侵攻が決定され、軍と共にギョウを出立した。目的は弘農侵攻。

出来得ればその過程で平家軍に大きな損害を与えておきたいものだが、さて上手く行くだろうか。

兵の練度が低い為、準備にかなりもたつくだろうと思って居たが、どうやら張コウが前以て準備を進めていたらしく、さほど混乱することもなく閲兵式を終える事が出来た。練度は今ひとつだが、新兵に比べれば遙かにマシだ。兵の一人を掴まえて聞いた所に拠れば、鮮卑や匈奴相手の戦に最低1度は参加したことがある人間が集められているらしい。初陣で死なないだけの才覚があった人間ではある、という程度だが、新兵を引き連れていくことにならないだけ恵まれていると思っておこう。

ギョウを出立した我が軍は黎陽を経由して陳留へ軍を集結させ、許を掠める様に進んで宛を攻めると見せかけて、途中で一気に転進して司隷州へ侵攻した。そのまま平家が北上しないように宛へ圧力を掛ける為に許へ向かったのは、劉備、張飛、張勲の外様に、それらを監視するべく遣わされた顔良に逢紀の5名。あちらが禦いでいる内に弘農から平家を駆逐しなければならない。

その為には手段なぞ選んでいられない。そもそも彼我の関係は、あちらが強者でこちらが弱者なのだ。弱者が強者に対抗するに、強者と同じ土俵で戦うなど愚の骨頂ではないか。弱者には弱者なりの戦い方というものが有る。あちらの弱みを攻めることに徹底しなければ勝ちの目は見えてこない。

平家の弱みとは此即ち民の風評であろう。平家は民の為の政を為す。乱世を終わらせ奴らが顕現させる世の中は、凡ての人間が平凡な人生を送れる世の中であり、生きていくのに他人の命という犠牲を必要としないで済む世の中なのだそうだ。その立派な題目を掲げ、今のところ民を斬り捨てる様な真似をしたことがないからこそ、民達

は漢の正統から外れる『召』を認めているのだ。

では、もし平家が民を見捨てるような真似をしたらどうなるだろうか。

急転直下、掌を返す様に変化がもたらされることはないだろうが、見捨てた事実は澱の様に民の心に溜まる。そうなった時、余程上手くやらなければならないだろうが、民に平家と袁家とを天秤に掛けさせることが出来るようになる。

『平家も所詮程度の差があるだけで袁家とやっていることは違わない』。

そう想わせることが出来れば、それぞれが主張する、それぞれの王朝の正統性と云うものをどう判断していくかが、どちらの側に立つかを決める一つの基準になり得る。その時、袁家が漢の正統を受け継いだ家である事が大きな意味を持つことだろう。

今のところ侵攻は順調だ。進軍を阻害するものはない。洛陽入城後、直ぐに集めさせてあった平家の情報を検めると、既に撤退を開始しているとのことだった。流石に行動が早い。凡百の指揮官ではこうはいかないだろう。だが、今回は向かい合う相手が悪かった。私が相手でなければ思惑通りに撤退出来たであろうが、私はそう易々と撤退を許すつもりはない。

洛陽に仮に用意された居室に田予と孔明を迎えて、現状把握と今後の展望について語り合う。ここで私の企謀を披歴するつもりだが、孔明は賛同するだろうか。

「田予、状況はどうなっている」

「順調です。既に新安の顔役数名から、委細承知した旨返書を受け取っております。もし平家軍が新安の民衆を見捨てぬと言うのであれば、あちらの撤退は遅々として進まないでしょう。」

「そうか」

「……貴方達は何の話をしているのです？」

「新安について、事前に調略を行っていたのは知っているだろう？その際にこちらに色好い返答をしていた愚物共を利用し、平家軍の撤退を手間取らせることに成功しそうだ、という話だ」

「それだけでは何のことか分かりませんが」

「平家軍撤退時にその足を引っ張って泥沼に引き摺り込め、と言ってある。要するに時間を掛けて移動しろと云うことだ。此で平家軍に追いつき、強かに損害を与える事が出来るだろう」

「民を置いて先に撤退した場合はそうは行かないでしょう」

「そう簡単には行かせぬよ。何せこれから我らはその逃げ遅れている民達を撃殺する為に軍を進めようというのだからな。其れを放置すれば平家の名声は墜ちる。結局この乱世に数多あった諸勢力と変わりがないという風評は、奴らにとっては中々に痛かろう」

「……それでも放置して撤退する可能性はありますね」

「それならば撃殺してやるだけだ。平家が見捨てたが為に多くの命が奪われた。その事実を広く喧伝する為に、敢えて幾人かは生かしておく必要が在るだろうが、それ以外には平家を貶める為に役立って貰おうではないか。所詮袁家を嫌って逃げ出す様な民なのだ。幾人死んだ所で我らの懐が痛む訳ではないし、こんな事は乱世にあってはごくありふれたことに過ぎん」

「馬鹿なことを」

「……馬鹿だと？」

「そうです。それ以外に表現しようがないではありませんか。敵を討つ過程で『意図せず』策に巻き込まれて『民が死んでしまう』ことは、確かに痛ましいことではありますが、貴方が言った通り乱世にあっては決して珍しくはありません。しかし、『民を殺す事を前提として』策を立てた上で『民を殺す』。これは認められることではありません。

国の基は民なのです。その必要がない時に無道に踏みにじる様な真似をするべきではありません。己が躰を支えている足を食んでいる様なもので、輿望を失い、いずれ国勢は衰頽することになるでしょう」

「結果が全てに優先されるべきこの時に、過程を問うてどうするつもりだ？これを行えば奴らが撤退しようと護らんとしようと、いずれにしても袁家は実利を得ることが出来るではないか」

「勝敗だけを考えれば確かにその通りかもしれません。ですが、天下を経略しようという者はそれでは駄目です。無駄なこと、遠回りと言えることは、その言葉のままの価値しか有さないわけではありません。

何かを決断する際に考慮すべきなのは、得ることが出来る利益についてではなく、結果として失うことになるものについてであるべきです。得た結果失うものを充当する手立てがないのであれば、失うことの害は大きいと言って良いでしょう。その場合は得る利益が多かろうとも、その選択をすべきではないのです。

今貴方は眼前の実利を獲る事に執心しており、先の困難に想いを馳せることが出来ていません。良い風評というものはそれなりにしか力を有しませんが、悪評は袁家が蓄えてきた力を容易に削ぐでしょう。今民を撃殺するような真似をすれば、袁家に心を寄せている者達が離れて行ってしまう。その結果袁家は迎えることが出来るはずの回天の秋を掴み損ねることになりかねません」

「私は何も無差別に民を虐殺させろと言っている訳ではない。平家

に付き随いたいと願い、袁家を嫌忌する輩を撃殺すると言っているだけだ。奴らには選択の余地があったはずだ。これが平家が無理矢理に徴発して同道させているというのであれば、天下は袁家の非を鳴らして止まぬであろう。だがこの度は違う。奴らは自ら望んで袁家を捨てて平家に付き随うことを選んだのだ。平家と共に生きると云うことは、平家と共に死ぬと云うことでもある。そのあたりを己の都合に合わせて取捨選択することは許されるべきことではないだろう。

大体、貴様の言うことは破綻している。策が成った場合と成らなかった場合を、混同して話をしてしまっていることに気付いて居ないのか？

良く考えよ。策が成った場合、つまり平家が民を守るために兵を展開していた場合は、民を撃殺するとしてもその数は民の全てではありえない。平家を駆逐し、その過程で民が巻き込まれたのだ、と強弁出来る程度の損害で済むだろう。袁家に心を寄せる者達を失望させる程の民を殺すことはありえない。

逆に策が成らなかった場合、つまりは民の悉くを撃殺した場合は、我らは平家の民として生きて行くことを選択した民を撃殺したのだ、という一貫した主張を述べておれば世論を少なくとも二つに割ることは出来る。その多寡は知らぬがな。だが少なくとも、全く理解の届かぬ話ではあるまい。何か言われたとしても、貴様の正義と我の正義とは違うのだ、の一言で表現できる程度のものでしかない。

失うものについて考えよと言ったが、我らに失うものがあるということは大いに理解出来るしそれが確かであることは認める。が、その我らよりも遥かに多くのものを平家は失うことになるではないか。奴らが掲げる題目が欺瞞に過ぎず、その実像はやはりその他の有象無象と同じく最終的には我が身を優先させるのだと示すことになる。我らと平家とを比較した結果、どちらもそう大した変りがないというのであれば、袁家に心を寄せている者達は今まで通り袁家に心を寄せ続けるだろうし、平家に心を寄せている者達は理想が欺瞞であ

ったことを憎んで心離れする者が多く出て来よう。これを利用すれば回天の秋を容易く掴むことも叶う。何を憂えることがあるのか」

「……それでも、私は認められません。策を為した結果として民を切り捨てることになるのと、民を切り捨てることを前提に策を為すこととは同じようで全く異なります。私はその策を認めることは出来ません」

その余りの物分かりの悪さに思わず舌打ちをしたくなったが、それを堪えて殊勝な態度で頭を下げておく。この軍の主将は孔明だ。戦端を開く前に軍の一体感が損なわれるような発言は慎むべきだ。そうでなければ、平家に付け入られることになるかも知れない。この段階に至ってこれから調略ということは考えられぬが、万が一と云うこともある。用心するに越したことはない。

頭を下げた私の殊勝な態度に満足したのか、孔明は念を押すことなく居室を立ち去った。洛陽に進駐したばかりで、報告を受けることは山積している。ここで私に掛かり切りになっている暇などないのだろう。

孔明は『認めない』と言った。それは要するに、この策が有効であることは認めているが自分はそれを行わない、という意味だ。そして私に、それを為さないように、とは言わなかった。それをせぬように念を押さなかったのではなく、為すなと言わなかった。

仕方があるまい。

自らそれを行いたくないのであれば、私がそれを為してやろうではないか。この私が。

田予が私の大人しい態度を訝しんで目を覗き込んでくる。功を為さんと用意してきたその準備が、すべて水泡に帰することになったの

か。それを確認しようというのだろう。その田予を安心させる為に私は微笑んで頷いてやったのだった。

蝶の如く～168～（後書き）

突込みがありそうなので先に答え合わせを。

＞私の命を救ってくれた桃香様の理想
どこに読点を打つかで意味が全く変わりますね。要するにそういうことです。

＞混同している
そろそろスリちゃん限界かな……？

＞私がそれを為してやろうではないか。この私が。
くどい。繰り返さなくても分かる。理由はあるけど分かるのはまだ先……既にばれてる可能性も大ですが。

年末は忙しくていけない。更新が遅れてしまい申し訳ないです。

蝶の如く～１６９～（前書き）

前の話、長くなったので分割したんですよねぇ。
こっちが本命です、はい。

蝶の如く～１６９～

～焔耶　Ｓｉｄｅ～

洛陽付近の集落から、撤退しつつ同道したい民と合流しながら長安を目指し移動しているが、思ったように距離を稼ぐことが出来ていない。月様や朔様達が前もって準備してきたこともあり、新安までは想定より早く撤退出来ていた。だが何事にも想定外の事態と云う物は付き物だ。出発直前になって老人が死に、その喪に服そうと邑を出立することに難色を示した者を説得したり、移動する車が壊れてそれを修理したりした為に、当初の予定より二日行程が遅れている。

先を急ぐ民達は、皆必死の形相を浮かべ、互いを励ましあいながら進んでいる。彼らが必死なのには訳がある。撤退する我らの後を袁紹軍が追ってきているが、彼らは平家を慕い、袁家を忌む民達を撃殺すると言って憚らないらしい。流石にそう公言している人間が追って来ていると知れば、あのような形相になるのだろう。

この情報が入る前に、一度朔様が月様に、民だけを置いて軍が撤退してはどうかと提案を行った。我らと同道することで民が危難に遇う恐れは高いが、我らと離れて行動すれば危難には遇わぬのではないか。詠様も伴っての献言だったが、その際は悩んだ末に民達の代表者を呼びだして話したところ、見捨てないで欲しいと云う意見が大勢を占めた為沙汰止みとなったようだ。現状では民を置いて撤退するという決断を、月様は決して下されないであろう。

月様の意図を汲み、かつ月様の安全を図るために何をすべきなのか、ワタシには分からない。月様の身辺の警護をより慎重に務め、迫り

くる袁紹軍がどの程度距離を詰めてきたのかを確認していた。

一日、朔様から配下の兵たちに対し、いざと云う時に月様の為に働けるよう覚悟をしておけと云う訓示があった。要するに、死ぬつもりで居ろということだった。反董卓連合時から朔様に従ってきた者達は平然としていたが、匈奴の連中も月様の為に命を投げ出すことに躊躇いを覚えていないことに少々感心してしまった。華雄隊は、月様の為に己の命を投げ出さんと考えている朔様同様に月様の為に死のうと考えている者と、月様の為に死のうと考えている朔様の為に死のうと考えている者とが居るが、何れにせよ死を恐れていない者ばかりだ。だが彼らは違う。ご主人様から月様の下で働くように言われたに過ぎない。無理に付き合って無駄に死ぬことはないのではないかと尋ねて、彼らから引き出したのは彼らの月様に対する意外な誠心だった。

かつて月様が涼州に在った際、匈奴の民が困窮していた時に真っ先に手を差し伸べてくれ、また長が訪ねてきた際には耕馬を殺して持て成してくれた月様の恩は、現在分け隔てなく遇してくれるご主人様から受けている恩よりも深いものである。富貴の人からの施しは余分なものをくれただけであり礼を述べるだけで構わないと思うが、自分に余裕がないにも拘らず文字通り身を削って施しをしてくれた人の恩義をそれと同等に捉えるべきではない。

今、月様は危険な状況にある。差し迫っているわけではないが、それは自分たちでも理解できる。その状況で自分たちが出来る報恩は、月様が為したいことを為したいように助力をし続けることである。たとえその結果死ぬことになったとしても、それは彼らにとっては当たり前の報恩の形であり、厭う所ではない。

話を聞いた匈奴の者達は、皆好い顔をしていた。何を言おうと絶対にそれを枉(ま)げることはないだろう。そう思わせる強い意志を眉目に

漂わせつつも悲壮感はなく、稀に『美少女の為なら何度でも死ねるッ！』等と騒いでは笑っていた。個々人の武勇はワタシの足元にも及ばないが、その在り方には学ぶべきところが多くあり、尊敬に値すると思う。

詠様は長安に向けて使者を発したり、ねね様と書簡を遣り取りしながら函谷関以東に展開している平家軍の状況を把握し、月様が安全に撤退できるように打てる手は全て打とうとしているようだ。それと同時に、新安で合流してきた民達の動静に不穏なものを感じたらしく、間諜が紛れ込んでいないかどうか内偵を進めているらしい。良くもそこまで頭が回るものだ。ワタシではそうはいかないだろう。まあ、比較すること自体が誤っている類の比較でしかないのは間違いない。

知恵が必要とされることについては、詠様に任せておくより他に選択肢はない。ワタシのような門外漢が口を差し挟んでも得るところは何もないだろう。ワタシに出来ることは、月様や朔様から命じられることを着実にこなすだけだ。

弘農を通り過ぎたあたりで、再び朔様から招集が掛けられた。あと二日以内に追いつかれることは間違いないという状況から考えて、今後の方針についてお話があるのだろう。逃げている最中に後背を衝かれると態勢を整えるのに精一杯となり、軍も、そして民も、大きな被害を受けることになる。それを避ける為に、こちらから敵に当ろうというのではないか。しかしその場合、撤退し続ける月様の警護を務める者と敵を足止めして時間を稼ぎ出す者とが必要である

が、人選はどうなされるお積りだろうか。

そんなことを考えながら陣屋へ向かう途上、匈奴の取りまとめを行っている去卑と行き逢ったのでそのまま同道することにした。どうやら彼も朔様に呼ばれているようだ。必然、会話はこの後のことについてのものになる。

「焔耶の姐さん、聞きやしたかい？」
「何をだ？」
「今回の招集は朔の姐さんが掛けたものですが、大元は月様から出たものらしいですぜ？」
「月様から？」
「ええ。ウチの連中の間じゃ専らの噂でして、誰が曲の代表として参加するかで揉めてまさぁ。流石に月様に直接お目にかかる機会ってのはそうは御座いやせんからねぇ」
「……程々にしておけよ。朔様から大目玉を喰らうことになるぞ？」
「そいつはいつものことでさぁ」
「ははっ、違いない」

去卑は口は悪いが繊細な心遣いが出来る人間で、取りまとめとして遣わされるだけの器量を有している。明るく騒ぐのが好きな奴ではあるが軽躁ではなく、噂話が好きだが口は軽くなく、約束事は滅多にしないがした約束は何があっても守る。匈奴の者達は皆彼に敬服しているようだった。

間違いなく袁紹軍とぶつかり合うことになる。それと分かっていて普段通りに振舞える去卑は、少なくとも益州で平家を向こうに回していた頃のワタシなどより遥かに将として優れている。『自分に何が出来て何が出来ないのか』が分かっている人間しか、こうは振舞えない。朔様からそう教わった。ワタシも、そう居られているので

あろうか。出来れば、そうであって貰いたいものだ。

仮に設けられた陣屋に入ると、朔様が目を瞑って床几に腰かけておられた。少々厳しい顔をなさっている。その身に纏っている雰囲気は重苦しい。やはり想像通り、誰かをここに残して時間を稼ぐという話を為されるお積りなのだろう。要は、『ここで死ね』と命じる事になる。それは辛い役目だ。

その辛さを想って一瞬何と声を掛けたものかと躊躇っている間に、去卑が軽々と声を掛けた。

「朔の姐さん、話があると聞きやしたが、やっと月様親衛隊の設立を認めて下すった訳ですかい？」

「そんな訳が……はぁ、貴様はいつも通りだな。まあ委縮するより遥かにマシだ」

「でがしょう？自分でも驚くほど普段通りでして、逆に吃驚している処でさぁ」

「には見えんがな。……焔耶もよく来た。まだ各部曲の主だった者達が集まっておらん。暫し待て」

「は、ハッ！」

指された辺りに用意された床几の一つに腰を掛ける。朔様は床几に腰かけられたまま、再び目を瞑られた。朔様の気に障らぬように気を付けながら、すぐ隣に座った去卑と話す。

「おい、去卑。良くあの朔様に気軽に話しかけられたな？」

「話しかけなきゃ始まらねぇじゃないですかぃ」

「そうは言っても朔様は『我らは生きるか死ぬかの瀬戸際にあるのだ』と言わんばかりの雰囲気を身に纏っていたではないか。流石にワタシは気軽には声を掛けられなかった」

「まあさいでしたがね、あっしとしては月様の為に死ぬのは本望でさぁ。今更生きるの死ぬのと言われても大したことは御座いやせん。覚悟ってぇのは、撤退すると聞かされた時にもう済ませちまいましたからねぇ。後は風の向くまま気の向くままに生きたり死んだりするだけでさぁ。どちらの目が出るにせよ、手前が出会う目をただ待ってりゃ良いだけですからねぇ」

「……ワタシはまだ覚悟が足りていない、ということか」

「そう云う物でも御座いやせんでしょう。あっしらは抑々月様の為に働きたいと考えている人間ですからねぇ。でも焔耶の姐さんは違うでしょう？死ぬならば月様のためではなく、もっと他の誰かの為に死にたいと考えてらっしゃるんじゃねえんですかい？」

「……そうだ。ワタシには、ワタシの命を以て報恩せねばならぬ人が居る」

「ならその違いでさぁ。あっしらは月様の為だから即決出来る。覚悟も出来る。きっと焔耶の姐さんも、その人の為なら即決出来るし、覚悟も出来まさぁ。大体死ぬことを厭わぬだけが覚悟とは言わねぇでしょうに。その人の為に死ぬ日を迎える為に、必ず生きて帰るってぇのも立派な覚悟でさぁ」

「……そうか、そうだな」

今の月様の立場に白連様が立たれた時、ワタシは去卑のように泰然自若として居られるのだろうか。

考え込んだワタシを見てもう一言言葉を継いでおこうと思ったのか、去卑が口を開こうとして周囲を見渡した。話をしていた時間は短いと感じていたが、思いの外時間が経っていた様で周囲に人だかりが出来ていた。

「皆集まったようだな。耳を澄まして、これから話すことを良く聞け」

頃合いと見て、朔様が話を始められた。

「今我々は袁紹軍の追撃を受けている。これは皆も知っている通りだ。このままの速度で進めば、二日後には追い付かれるだろう。その事が確実となった」

朔様が皆を見渡す。誰一人言葉を発する者はいない。皆ワタシと同じように、身を乗り出すようにして朔様の話を、全身で聞いているに違いない。

「すぐ後ろを追撃してきている3万。その後ろに更に2万の兵が続いている。月様に確実に、そして安全に撤退して頂く為には、どうしても誰かがどこかで時間を稼ぐ必要が出てきた、と云うことだ」

「朔の姐さん、勿体ぶらずにはっきり言いましょうや。何人此処で死ねば良いんです？あっしらぁ疾っくの疾うに覚悟は決めてんだ。朔の姐さんが決めてくれりゃあ今すぐにでも奔って行って死んで来まさぁ」

去卑の言葉に皆が一斉に頷く。躊躇する様は見られなかった。

こいつ等は手強い。間違いなく、死戦になる。今の様子からすると、誰も、一歩も譲らないだろう。本当に、最後の一人まで手向かって逝くだろう。ぞっとする。唯でさえ剽悍な匈奴の戦士が、此処を死に場所と定めて戦い続ける。これを抜くには、尋常ではない被害を覚悟しなければならない。

「貴様らだけ行かせるような真似をする訳があるまい。反董卓連合軍との戦からずっと、月様を守る為に生きてきた。今日またあの時と同じ袁紹軍が、同じように月様に追い縋っている。此れから月様

を守れずして何が護衛か。これある時に月様を生かす為に私は生きてきたのだ。華雄隊は皆、此処で月様を逃がすための防壁となるつもりだ。

貴様らには、二手に分かれて貰いたい。一方は月様を護衛して函谷関へ移動せよ。もう一方は私と共に月様の為の防壁としてここで死ね。どちらも、それを率いる将は決めてある。月様を護衛する隊は焔耶、此処で死ぬ隊は去卑とする」

思わず聞き流しそうになったが、ワタシを護衛する隊の将に、と聞こえたのは気のせいではあるまい。それでは、ワタシが逃げるようではないか。確かに去卑たちに比べれば覚悟は不足しているのかも知れぬが、それなりの武勇を持っている私が居た方が楽に決まっているではないか。

「これは決定事項だ、嫌とは言わせぬ」

ワタシが言を継ぐ前に、朔様がワタシを見据えて宣言する。それでも、ある種の後ろめたさから反論をしようとしたワタシに、止めを刺すような一言を投げかけてきた。

「月様を、頼む。お前に頼みたい。今のお前であれば、月様を護る私の代わりが適うであろう」

ひどい言いぐさだ。そんなことを言われたら、断るようなことが言い出せなくなってしまうではないか。朔様は酷く優しげな表情でワタシを見ている。

「……分かりました」

「……良く聞き分けてくれた。去卑、匈奴隊を二手に分けるのは貴様に預ける。良いように分けろ。皆、異論はないな！？」

皆が静かに佇んでいたその時、陣屋の外から月様の入来を告げる声が聞こえてきた。

～朔　Ｓｉｄｅ～

「皆さん、態々集まって頂いて有難う御座います」

月様からの言葉に、皆一様に頭を下げる。事前の衆議にて決したことを、皆を代表して私から月様に伝えるべく口を開いた。

「月様。皆には既に状況を説明してあります」

「そうですか」

「此度の撤退に当って、どうしても民が撤退する為の時間を稼ぎ出す必要があります。此れについては、我が華雄隊と匈奴隊の半数を以てその任に充てるつもりです。匈奴隊のもう半分は、月様と共に

民を護りつつ函谷関を目指すことになっております。月様、どうか此処に残って足止めをする兵達にお言葉を掛けて頂けないでしょうか。そのことが兵達の励みになりましょう」

匈奴の兵達が色めきだっている。『やったねたえちゃん！』『ヒャッハー！』など、意味不明な言葉がひっきりなしに飛び交っている。……貴様ら、明日にも死のうと云う話をしている時に悲壮感も糞もない反応をするとはどういう了見だ。

他を見ると、去卑は苦笑していた。焔耶もそれを見て苦笑していたが、次に月様から発せられた言葉に私を含めて色を失った。

「その必要はありません」

ある者は目を見開き、ある者は思考が追い付かずに呆けた顔を見せている。前者の代表が去卑で、後者の代表が焔耶だ。私はは前者の仲間入りをしているだろう。

「月様、何を」

「朔さんこそ、何を言っているんですか。私は確かに皆さんを集めて欲しいと言いましたが、それは朔さんにこういう調整をして欲しいという意味ではないんです。本当に私から皆さんにお話したいことが有って集まるように伝えて貰ったんです」

思わず、月様の隣に立っている詠を見る。詠とは事前に話し合い、私が衆議を決した時機を見計らって月様を陣屋に導き、居残る兵達を励まして頂いた後に退去して頂く段取りであった。退去することを月様に因果を含めて納得させるのが詠の役割ではなかったか。月様大事の点で、私も詠も一致していたはずではなかったのか。詠は、何をやっているのか。

「……詠、どういうことだ？」

「……ボクは月のことを見損なって居たみたい。アンタも多分そうよ。今から月が話をするから、月の話を聞きなさい。ボクは月の望みを最善の形で叶える為に、ボクの智謀の全てを振り絞るわ」

どういう事かと訝しんでいると、月様が話し始めた。

「今私達は多くの民衆を連れて関西を目指していますが、袁紹軍に追い縋られ、明後日には捕捉されるという状況になっています。このままただ撤退を続けたのでは袁紹軍に追いつかれ、軍はまだしも民衆に多大な被害が出ることは疑いありません」

言葉を切り、少し俯き気味になりながら目を瞑って、再び言葉を紡ぎ始める。

「……嘗て私を討伐するために連合が組まれた時、私は私の命を守る為だけに、私の為に戦って、そして死んで下さいと配下の人にお願いすることが出来なかった人間です。それは、私の弱さに違いありません。私には覚悟がありませんでした。知らない誰かを殺し、そして知っている人が殺されるということに耐えられなかったんです。自分の理想を貫く為に、自分の命と他人の命とを懸けることが出来なかった。もしご主人様が居なかったら、私は今此処にこうして居られなかったでしょう。

そのご主人様の理想は、凡ての民が平凡な人生を送ることが出来る世の中を創り出すことです。私はご主人様のお蔭で今こうして生きています。だから私はご主人様の理想を叶えるお手伝いをしたいんです。……私は自分の理想を実現させる為に自分の命を懸けることが出来ず、私の為に私を慕ってくれる誰かに死んで下さいと言う事が出来なかった人間です。でもご主人様の理想を実現する為なら…

…いいえ、ご主人様の為なら命を懸けることが出来ます。今民達を見捨てれば、ご主人様の理想を穢すことになります。民達は皆、ご主人様の理想は欺瞞に過ぎぬではないかと口を極めて非難することでしょう。ですから、私にはそれは出来ません」

眦を決して、話を続ける月様。

こんな月様は、見たことがない。月様に近侍するようになってからもう随分になるが、このような勁さを感じさせる表情をなさっている月様を、私は知らない。

――まさか、月様は手に入れられたのか。

――勢力の長であった頃、終に得ることがなかった英雄としての資格を。

――この乱世で、己の理想を貫く為に必要とされる覚悟を。

「だから、皆さんにお願いします。私と一緒に戦って下さい。皆さんの命を、私に預けて下さい。そしてそれが必要とされるなら――」

次の言葉を発するまでに空いたその僅かな間に、期待と不安と緊張とをない交ぜにしたような感情が沸き起こってどうにも制御できない。私は、次に発せられるその言葉を、待ち焦がれていた。私がこれと定めた主に、いつの日にかその言葉を言って貰いたかった。そして、その日は来ないだろうと、勝手に諦めてしまっていたその言葉を、月様は口にされようとなさっているのではないか。

我知らず、唾を飲み込む。月様は、何と仰られるのか。

月様が我らに掛けるその言葉は――

「――私と一緒に死んで下さい」

「！」

この方を生涯の主として選んだ私の目に狂いはなかった……！この方はやはり英雄だったのだ！群雄として立った理由も、そして英雄として求められる覚悟を決めた理由も、他人の為であるという処が誠に月様らしいではないか！

詠の言った通りであった。私は、月様を見損なって居た。何かを誤ってこれ程嬉しかったことはないし、これからも二度とないだろう。

気付けば周囲の者達が、皆私を見ている。もはや事前に衆議で決めたことなどどこかに吹き飛んでしまったかのような面魂を見せている。月様の望みを叶えるために。それだけの為に我らは今此処に居る。

「皆、聞いたか！？月様が人の主として、初めて犠牲にしようと心に決めたその命が、我々の物であったという今日のこの誉れをその心魂に刻み込め！月様と共に、己が身命を賭して、民を犠牲にせんとする敵兵と戦う事を誇りに思え！この一挙は、民を犠牲にし続ける乱世そのものを向こうに回すも同然である！月様をこの汚辱に満ちた乱世から護るのではなく、月様と共に乱世を断つ為に戦う事が出来る！敬愛して已まない主君に、共に死ねと命じられる！士としてこれに勝る慶びは有るまい！」

皆、感極まって顔を紅潮させている。我が隊の中には目に涙を溜めている者さえいる。

「月様の為に、私と共にその御前で死ね！」

陣屋の中で、異常な熱気と喊声が爆発した。

皆雨に打たれたかのように、その顔を濡らしていた。

蝶の如く～１７０～

～朱里　Ｓｉｄｅ～

あり得べきでない事態が出来した。

郭図さんがその翼将である田予さんと李孚さんを引き連れ、新安の民を撃殺するために進発したというのだ。報告を聞いた当初、何を馬鹿なことを言っているのだと思った。事前に話をした際に、それは認められないとはっきり伝えてある。再度事実を確認して報告するように命じたが、結果は同じだった。

――何と云うことをしてくれたのか。

私が建てていた戦略上、此処で無理をして平家軍を叩く必要はなかった。一戦もせずに撤退するならそれも良し、平家は袁家の武威を畏れて居るのだと喧伝することが出来た。矛を交えることが出来たにも拘らず、それを為さずに撤退したという事実がその主張を補強することになったであろう。

民衆を撃殺するという策を実行すれば、間違いなく袁家は衰頽する。何故それが分からないのか。徳義が明らかでない国の社稷が永く保たれるはずがない。何れが勝つにせよ最終的な目的とする処は『民を安んじる』事であろうが、袁家がそれを掲げることが譎詐に過ぎなくなってしまう。

沈鬱な心持で居る所へ審配さんがやって来た。どうやら彼は郭図さんの策に賛同しているようだ。郭図さんが彼に依頼した役割は、私と話して先行した部隊の後詰として兵を派遣することを認めさせる

ことだろう。放っておく訳には行かないのだから、後詰は認めざるを得ない。

挨拶もそこそこに話を切り出そうとした審配さんの機先を制して、後詰に兵を回すことを認め、またその指揮官として張コウさんと審配さんを指名すると、驚いた後納得の表情を浮かべた。その彼と今後の展望について話をするが、やはり彼も社稷の臣足り得ないらしい。先のことを考えて沈鬱さを拭い去ることが出来ずにいた私に対し、審配さんが不思議そうに指摘をしてくる。

「孔明殿、一体何が貴女にそのような沈鬱な表情を作らせるのか、私には皆目見当がつかない。郭図の策により、平家が進退何れを選ぶにせよ、代償を支払わねばならぬと云う状況に追い込んでいるではないか。この戦は我らの勝ちであり、その先に繋がる勝ち方が出来ることが分かっている今、何を心配することが有るのか」

「私が畏れるのはただ天の采配のみです」

「天の采配？」

「そうです。貴方は先に繋がる勝ち方が出来ると言いましたが、将来麗が『民を安んじる』ことを理由に何かを為そうとした時、人はそこに譎詐を見るでしょう。本当にそれを目的として発した言葉でも、ある人にとっては信を欠き、またある人にとっては嘘臭さを感じるものかも知れません。信（まこと）を欠く言葉を戯言と云い、嘘に塗れた言葉を妄言と云います。私達はそれを為す者と見做されてしまうのです。

老子に『天道に親なし、常に善人に与（くみ）す』と有ります。善人がどのような人を指すのか、厳密には老子以外には言い表せぬと思いますが、少なくとも戯言や妄言を為しはしないでしょう。また易経に『積善の家には必ず余慶あり、また積不善の家には必ず余殃あり』と有ります。民を撃殺しなかったとしても、それはそうならなかっただけでそれを為そうとした事実は変わりません。それは不善を積ん

だこと以外の何物でもないではありませんか。故に天の采配は袁家に辛くなるのではないかと、ただそれを畏れて居るのです」

「確かに我らが民を撃殺するような事態になればそのようなこともあるかも知れないが、平家が留まって民を護らんとした場合は、真実を知ることが出来る者は居ないはず。撃殺しようとしていたと言われようと、そのようなことはないと強弁すれば問題ないのではないか？民意が天を動かすものであるとしても、民と云う物は総じて愚劣だ。証がなければ強弁して押し通すことが出来るであろう。我らが企図したことが噂されることはあっても民に知れることはあるまい」

「貴方は関西の孔子と呼ばれた楊震がかつて言ったことを知りませんか？『天知る、地知る、子知る、我知る』。今貴方は、真実を知る者はなく、民はその愚劣さゆえに我らの企図に気が付かないだろうと言いましたが、貴方の言う『誰も知らないはずの真実』を、既に天地、そして私達は知っているではありませんか。そういった意識の粗漏からは、人は自由では居られません。それでどうして他に漏れないと言えるでしょうか」

「孔明殿は心配しすぎだ。日頃の激務により、少々不安定になっておられるだけだろう。麗羽様は変わられ、我ら家臣団はいがみ合うことをしなくなった。平家に対してもやり方次第で優位に戦えることは立証できた。我らの前途はまだ暗いとはいえ、光が射して来ているには違いないのだ。油断はならぬが、少し気楽に考えられよ」

審配さんは少し苦味を含んだ表情をし、そう言い残して洛陽を後にした。

――楽観的に過ぎはしないか。

郭図さんにせよ審配さんにせよ、目先のことしか見えていない。これから始まる戦は、これまでの戦とは全く異なる。天に、袁家と平家、その何れが相応しいのか判断を仰ぐ。そう云う側面も有した戦

になる。袁家が作り上げようとする統一後の王朝がどのようなものなのかを、血で血を洗う戦の中で民に、そして天に見せなければならない。だからこそ、天を動かしうる民に対して説明のつかない扱いをするべきではない。

ふと、郭図さんや審配さんの、臣下としての在り様について疑問を覚える。彼らは自らを袁家の忠臣だと考えているだろう。実際、この先袁家が滅ばんとしたならば、彼らは袁家を裏切ることなく死ぬつもりなのだろうし、主家に忠実であると云う点では間違いなく忠臣なのだろう。だが、仕える家が進む途を誤らせ、その将来を危うくするが如き臣を果たして忠臣と呼べるのだろうか。

だが今更そのようなことを言っても始まらない。既に賽は投げられた。投げられてしまったのだ。私が描いた戦場で、私が投げるつもりであった賽とは趣の異なる賽が、私の手に依らずに投じられてしまった。

撃殺せんとする意図は民に知れただろう。そう考えるべきだ。そしてそれを拭い去ることは最早叶わない。どう取り繕おうとしても、表層だけの薄っぺらい嘘としか見えないだろう。最早当初企図していた策を為すことは、無意味を通り越して有害ですらある。

――この戦、私にはもう見ていることしか出来ない。

既にこの戦が私の手から離れてしまったことを感じながら、自分の中心にぽっかりと空いてしまった、何かしらの喪失感を持て余していた。

～詠　Ｓｉｄｅ～

民を護る為、敢えて教経の言に従わずに袁紹軍とぶつかる。

月の方針を聞かされた時、正直それは下策だと思った。教経が一番恐れているのは、ボク達弘農駐留軍の主力を喪う事。それを避けることに至上の価値を置き、その上で出処進退を決定するように、という命を受けている。それを覆すような真似をする月に、最初は戸惑った。月だって理解できているはずだ。それにも拘らず出撃し、覆滅される危険を冒すのは何故なのか。

そう問い詰めたボクに対して月が述べたことは、ボクを驚かせた。

教経はこれまで民を安んじる為に戦をしてきた。その戦の過程で、不必要に民を殺すような真似はしてこなかった。だからこそ、皆教経が語る理想の世の中を信じることが出来る。けどもし此処で民を見捨てて撤退したら、教経を信じることが出来なくなる人間が出てくるだろう。

王朝の性質と云う物は、それを開闢した人間が掲げた理想やその性格、近臣の質に大きく依存している。ここでもし、教経が乱世に乗り出してから、その骨子として掲げ続けてきた恤民の心が偽りであることにされてしまったとしたら、たとえ召が天下を統一しようとその治世は長く続かない。真実がどうあれ、この時代に生きる民がそこに如何わしさを感じてしまったら、社稷は安定を見ない。孟子も『民を貴しと為し、社稷之に次ぐ』と言っている。民意が天を動かし、天意が民を通して示されるものであるならば、民を踏み付けにするような真似は絶対にするべきではない。

そして何よりも、圧倒的な力を前にして己の身を守る事すら叶わぬ弱者を故なき暴力から護ることは、『義』と言えるだろう。

『見義不為無勇也』。

教経はそう言って月を助けてくれた。もし教経が今同じ立場に居たとしたら、きっと同じことを言って目の前の民を助けようとするだろう。月は、教経に助けられた命を保って、教経の代理として、今此処に居る。だから月は、教経に成り代わって義を見て為すのだ。他の誰のものでもない、教経の理想が穢されることだけは、何があっても耐えることが出来ないから。

ゆっくりと、しかしはっきりと、ボクの目を見つめながらそう言った。

今まで、月が自分の意思を此処まではっきりと、諫めることは出来ないと思わせる程に表に出すことはなかった。それは他者の考えを受け入れる度量の広さの表れであると同時に、他者の思惑を脇に置き自分の想いを貫き通すことが出来ないの心の弱さを月が持ってい

たからだと思う。

その月が、意志を押し通すどころか理想を貫く為に犠牲を払おうとまで言っているのだ。驚かない訳がない。

――ねえ月。月が変わったのってひょっとして……。

そう切り出したボクに、それまで凛々しかった月は明らかに動揺して、ボクが良く知る月のように俯いて、途切れ途切れに、そして紆余曲折は有りながらも、『教経のお蔭』ではなく『教経の為』であることを認めた。全く、本当にアイツはポンポンポンポンあちこちで女を落とすんだから。まあ月については風が随分前から怪しいって言ってたし、ボクとしても月の気持ちは応援してあげたいから別に良いんだけど。

ともあれ、応援するにしても先ずここを切り抜けないとね。ただ教経、次に会ったら思い切り蹴飛ばしてやるんだから。覚悟しておきなさいよね。

月が迎撃することを表明した翌日、ボク達は最後の軍議を開いて方針を確認した。皆緊張していたが、それも仕方がないのかも知れない。

前方には３０，０００の敵軍が、こちらの動きを察知して展開を始めている。朔や焔耶、去卑は軍を幾つかの集団に分けてそれぞれ独自に動き、時間を稼ぐということを考えていたみたいだけど、それ

は全然理に適ってない。唯でさえ敵より兵が少ないのに、それを更に少なくするなんて有り得ない。各個撃破の良い的になるだけよ。

相手は３０，０００だけど、その後ろに更に２０，０００が迫っていることは分かっている。それに対するボク達は、急使を仕立てて呼び寄せている恋達が合流したとしても２５，０００弱にしかならない。霞が都合良く動いてくれていたとしても、今この場に駆けつけることは絶対に無理だ。恋達が間に合わなかった場合は此処に居る１８，０００で最悪５０，０００を相手にすることになる。民達を護る為に、彼らが逃げるための時間を稼ぎ出す必要があるが、時間を掛ければ掛ける程ボク達にとって状況は悪くなる。

状況は最悪に近いけど、その最悪はまだ現実になってない。最悪な状況だと約3倍の敵を相手にしなければならないけど、現状だと2倍に満たない敵を相手にするだけで済む。後詰が合流する前に眼前の敵を一撃し、それが可能であれば痛手を与え、不可能であればある程度の損害を覚悟の上で撤退する。何れにせよ、あちらが合流した後に撤退するのは現実的じゃないし、それを許してくれるとは思えない。

全軍で正面からぶつかり、互角に戦うことは可能だ。歩兵の数に劣るボク達は、しかし騎兵の数ではあちらを圧倒できるだけの数が揃っている。敵の攻勢を中央で支えている間に、左右に配置した騎馬隊で敵両翼を蹂躙、突破して敵後背を脅かす。それに対処しないようであればそのまま包囲して殲滅すべく兵を動かし、敵の後詰が来る時機を見計らって撤退すれば良い。対処してくるようであれば、それを機に撤退すれば良いだろう。さも何か策が用意してあるかのように撤退すれば追い難いものがあるだろうし、実際恋達と合流すべく移動するから追いかけて来ても恋達に駆逐されるだけだ。

だから、正面からぶつかり合う。余力は残すことは考えないで良い。今回の戦全体でみれば先手を取られ続けているが、事をこの戦場に限ればボク達が先手を取っている。戦の結果として弘農を喪うことになるのは間違いないが、此処での戦闘には勝てる。そして今重要なのは、此処での戦闘に勝つことだ。

「いよいよ始まるわよ、月」
「うん」

夜が明け、目の前には戦場が開けてくる。ここで、月は戦うのだ。

「……大丈夫？」
「大丈夫だよ、詠ちゃん。私は焔耶さんや去卑さんを信じて此処で耐えるだけだから」
「ご期待に背かぬよう、最善を尽くします！」
「まあ騎馬戦であっしらに勝とう何ざちゃんちゃらおかしい話でさぁ」
「……月様に害を為さんとする者共は、必ずや我らが駆逐して見せます。そうだな？貴様ら」
「「「「「おぉーーーーーーー！！！」」」」」

華雄隊だけじゃなく、全体的に士気が高い。士気だけで戦に勝てる訳がないけど、低いと抑々戦にならないことを考えると、士気が高いに越したことはない。

「皆さん……有難う御座います。そして、お願いします。私に力を貸してください」
「可憐な美少女のお願いだぁ～！」
「「「「「ヒャッハー！」」」」」

……高いに越したことはない、と思う。

「アンタたち、分かってるでしょうね？」

「ハッ！中軍が劣勢であろうとも、眼前の敵を突破して後方を扼することだけを考えます！」

「与えられた役割を果たして見せまさぁ」

「月様を守護する壁となる。何人たりとも月様の御前に生きて進ませはしない」

「この戦は進退が難しいから、必ず中軍からの指示には従って。焔耶、去卑、いいわね？」

「ハッ！」

「ヘイ」

「月、最後に皆に言葉を」

「……征きましょう。恤民の理想を掲げ続ける資格を勝ち獲る為に。時代を創るのです、私達自身の手で」

皆が頭を垂れる。月の為に、そして月が言った通り教経の為にも、民を護り、そしてせめて将は皆無事に還りたいものだと思う。

～朔　Ｓｉｄｅ～

袁紹軍とぶつかりあってから暫くの間、先鋒は何とか相手を抑え込んでいたが、やはり数の差は如何ともしがたい。かなり前方で交わされていたはずの剣戟が、その音を耳に入れることが出来る程の距離で交わされている。随分と前線が押し込まれているらしい。

此処で我が隊を前線に投入し、戦線を押し戻すのも一つの手だ。もっと引き込んで徹底的に叩くという手もあるが、支えきれずに潰走する危険性もある。月様はどう判断するのだろうか。そう思い、本陣へ目をやると、『董』の旗が縦に振られていた。

前進し、奮戦せよ――――

旗はそう言っている。それが一番の策だろう。月様の用兵は悪くない。そう思うと、無性に嬉しくなった。

「聞けッ！華雄隊の皆よ、月様に従う同朋達よ！」

気を引き締め、隊士の士気を鼓舞する為に声を張る。士気を極限まで高めて力を奮える状態を作り出し、これを一気に叩きつけて前線を押し戻す。

「月様の命により、我らは之より死地に入る！これから我らの前に多くの敵兵が立ちはだかり、我らを殺さんと殺到してくるだろう！奴らが目的としているのは、何か！？貴様らの命を吹き消すこともその目的とする処であるが、それは附帯に過ぎない！奴らの目的と

する処はひとつ、月様を戮すことである！貴様らはそれを認められるのか！？」

「否ッ！断じて否ッ！」

「認められる訳があるか！」

次々に否定の言葉が投げ掛けられる。

「では月様を戮さんとする敵を前に、貴様らが為すべきことは何かッ！？」

私の問いに対し、至る所で『敵を殺せ』と声を張り上げている。戦意旺盛で結構なことだが、嘗ての私宜しく至上目的を忘れるようでは困る。

「心得違いをするな、この莫迦者共がッ！我らが為すべきことはただ一つ、月様を護り参らせることであるッ！」

「護り参らせる……」

叱責されたことで少々頭は冷めただろう。これでその頭に、敵を殲滅することより、己が手柄を立てる事より、先ず何よりも、月様を護り参らせることが我らの任であることをしっかりと刻み付けることが出来る。それを確と刻み込みながら、冷めた頭をもう一度熱してやる。

「そうだッ！己が命を捨てて月様の為の盾と成れ！月様の為の剣となる役目は他の者達に与えられる栄誉であるッ！我らはただ、月様を護り参らせる為だけの盾であるッ！敵を殲滅したとてそれは我らの誉に非ず！我らの誉はただ月様の生存だけ！ただそれだけが我らにとってこの上もなき誉れとなろうッ！

厳しい訓練に傷ついた貴様らを手当てするように手配して下さった

のは月様だ！貴様らが夜番警護に当たっている時、差し入れを下されたのは月様だ！先の戦で死んだ者達の家族を手厚く保護して下されたのも月様だ！その月様が生きるも死ぬも、我らの働き次第であることを知れッ！」

「……月様の為に！」

感極まった一人の兵が、そう叫んだ。それが切っ掛けとなり、其処彼処でそれに続いて声が上がる。

「「「「「月様の為にッ！！」」」」」

私の言葉で極限まで高められた月様への忠誠心が、堰を切ったかの様に奔流となってその場を支配するのが分かった。後はこれを叩きつけてやるだけだ。

「さあ、括目せよッ！今貴様らの眼前で多くの同朋が、月様を護らんと奮闘して居よう！我らは同朋を援け、敵を押し戻すッ！征くぞッ！」

「「「「「おおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」」」」」

これ以上ないほどに士気が高まった状態で、前線へ進み始める。私が心血を注いで育て上げた部隊は、数的な不利をものともせずに討ちかかってくる敵兵を次々に殺しながら前線を押し上げている。後は深追いをせず、月様の前に戻って再び壁としての役目を果たすだけだ。

戦線は一進一退を繰り返していたが、日没を迎えると双方計ったように矛を収めた。

私自身が前線へ乗り出す回数は既に五度を数え、兵達の疲労もかなりのものがある。敵両翼を撃破するように指示を受けている焔耶や去卑がどうなっているかは残念ながら私には分からない。知らされていたとしても、私がすることは月様の傍らで月様を護る壁となることであり、私がすべきことが変わらない以上、特にこれと云った行動を起こすことはないだろうし、大した感想を抱くこともないだろう。

改めて陣中を見回ってみると、随分と多くの兵を喪っていた。１８，０００を数えた我が軍は大きくその数を減じている。目算で４，０００余の兵を喪ったように見える。反董卓連合の折からずっと私と共にあった者達もその例外ではなく、幾人も冥府への門をくぐった。寂しさは感じるが、彼らが護りたかった月様を護り抜くことが彼らの供養になると信じて励むだけだ。

見回りを続けていると、向こうから月様と詠がやって来た。月様自身も、敵を押し戻すために前線へ三度お出ましになり、弓袋を左右に携え、巧みに敵兵を射抜いては味方を鼓舞して回っていた。当然私もその都度月様に付き随い、月様を目敏く見つけては害さんとやって来た者達から月様を護り続けたが、私の力が及ばず月様は二、三の矢疵を受けてしまっている。

「月様」

「朔さん、お疲れ様です。朔さんも見回りを？」

「ハッ。兵の状態を把握しておくのは将として当然の事でありますので」

通り一遍の挨拶を交わしていると、詠が私に、現状についてどう考えているのかと問いかけてきた。

現状は、中々に難しい状況だろう。戦況こそ一進一退で推移してはいたものの、体力的には限界を越えつつあったのだ。兵の練度と連携の良さで数の不足を補ってはいるが、間断なくやってくる敵を相手に戦い続けている状態だ。明日一杯我慢出来るかどうかという処だろう。

「だからそれ以上の戦線維持は無理だと思われる」
「そう。ボクもそう思うわ」
「詠、焔耶と去卑の方はどんな具合だ？」
「それぞれに感想を聞いたら、焔耶は自分の相手をしている将は侮れないのではないかと言っていたけど、去卑は今日の戦闘で底は知れたと言っていたわ」
「ふむ。全ては明日決するということだな」
「いいえ、違うわ」

明日、全てを掛けて決戦に及ばんと意気込んだ私に、詠が笑いながら首を振る。

「何が面白い？」
「ああ、ゴメンゴメン。今のアンタでも今日の戦闘はもうないって思ってるってことは、きっと向こうも同じなんだろうと思って」

――――まさか。

虚を突かれた思いで詠の目を覗き込む。

「そ、そのまさか。焔耶と去卑の指揮する騎馬隊を合流させて、焔

耶が手強いと言っていた敵左翼に一気にぶつけるのよ。焔耶は手強いと言っていたけど、それはそこに手強い将を配置する必要があるということを意味しているわ。つまり、扇の要となっているのはその部隊と云うことでしょう。そこを叩けば、敵を壊滅させることは出来ないとしても、軍を再編せざるを得ない程度には混乱させることが出来る。そうすればボク達も撤退できるって寸法よ」

「相手の不意が衝けるか？気取られる公算の方が高いと思うが」

「普通なら気取られるかもね。通常、馬は思い通りには動いてくれないものだから。黙っておけと言ったところで嘶くのを止めることは難しいしね。けど、今回は去卑達が居るわ。馬の扱いに慣れている彼らが居れば、気取らずに接近することも出来る。初手は取れるでしょう。その後焔耶が突入すれば、更なる圧力を受けた敵は混乱を来すはずよ」

「そうかもしれぬが、二人だけで大丈夫なのか？敵陣を衝いた後、容易に逃がしてくれる相手とは思えぬが？」

「大丈夫よ。騎馬隊がぶつかったら、本隊を敵正面に叩きつけることで、敵左翼に向かう援護を差し止める。本隊の方が数が多いし、騎馬隊が陽動でこちらが本命だと思うでしょう。そうすれば騎馬隊は撤退するだけの余裕を与えられるわ。騎馬隊が撤退し始めたらこちらも退く。後拒は去卑と焔耶の騎馬隊が行えば、然程被害を出さずに済むでしょう」

問題は兵の疲労だが、此処で敵陣を攪乱して時間を稼ぐことが出来るなら、多少の無理をさせるだけの価値はある。撤退に成功すれば恋達と合流できるし、函谷関の霞は座して待つのみではあるまい。函谷関付近まで撤退すれば、形勢は此方の方が優位になる。そこに至るまでに、更に多くの犠牲を払うことになるのだろうが、それは戦うことを決めた時点で分かっていたことだ。此処が踏ん張り処だろう。

蝶の如く～１７１～

～霞　Ｓｉｄｅ～

人を放って袁家の動静を探っていた瑛から、袁紹軍が弘農に侵攻したと報告を受けた。

袁紹軍の総勢は７０，０００。それに対する月達は３２，０００程度。兵数では完全に負けとるけど詠が付いとるし、そう間違った選択をすることもないやろ。函谷関まで退いて来れば問題なく対処できるのは分かっとるやろうしな。ただ、万全を期すために、迎えの兵を派遣しとくべきかも知れへん。多くの民を引き連れて撤退する以上、どこかで袁紹軍に追い付かれる可能性もある。

もし追い付かれた場合、民を護りつつ袁紹軍と戦いながら撤退することになる。言葉にしたらあんまり大したことがない印象を受けるけど、その実同時に三つのことをやろうっちゅう訳や。それは流石に骨やろう。ウチが兵を率いて袁紹軍を牽制する役目を果たしたら、月達に掛かる負担が一つ減る。それを独断でするだけの裁量がウチには与えられとる訳やし、此処は月を援護する為に兵数を整えて追撃部隊の牽制に回ってやろうやないか。

「ウチはそうしよう思てるけど、アンタはどう思うんや？」

報告を上げてきた瑛に、水を向けてみる。朔の処に居る焔耶と一緒に、独断専行して白連討伐を招き寄せた。その後焔耶とは別れて華琳の処に預けられ、南蛮遠征前にウチの参謀にと経ちゃんの鶴の一声で配属されてきた。

経ちゃんが言うには、瑛には申し分のない才能が備わっているらしい。でも自分の策の出来栄えに酔うようなところがあり、そういう処が無くなれば安心して仕事を任せることが出来るっちゅうことやった。瑛を側に付けて色々と使っとった華琳は違うことを言うとったけどな。まあ今回の配属は、亞莎の時と同じくウチに付けて何かしら学ばせようっちゅうことか、それともウチにこの娘を見極めさせようとしとるんか、兎に角何かしらの魂胆があるんやろう。

「……即座に兵を出されますか？」

「いや。そうは思うてへんよ」

即座に飛び出しても状況を把握しとる訳やないし、今率いて行くことが許される数を率いて出撃して月達と合流したとしても、相手の兵数によっては合流してもせんでも結果が同じっちゅうことになりかねへん。経ちゃんがこっち方面を危険視しとったのを受けて風が独自に工作した結果、羌族の連中で月に恩義を感じとる人間が鉄騎を編成し、長安を目指して移動して来とる。そいつらと合流して弘農を目指すのが良いやろ。

「ウチは必要にならんかったらそのまま経ちゃんに会うて帰って貰たらエエっちゅうつもりで居ったけど、風の言うとった通りの展開になったみたいや。この件は風とウチ以外には百合と華琳しか知らへん。どこにも漏れて無いやろうし、向こうの把握してない兵力が目の前に展開したら、何ぼ阿呆でもちっとは慎重にならざるを得ん。せやから、羌族の連中が合流するのを待ってから進発しようと思うとる。それやったら経ちゃんに狼煙？で連絡して、許可を得てから行動を起こすことも出来るしな。何か問題あるか？」

「あると思います」

「どこに問題があるんか聞きたいトコやけど、それより自分ならどうするんかを聞かせて貰おか。主将であるウチの案にケチをつける

んや、腹案は当然あるんやろ？」
「……ここは今率いて行くことが許される兵を全て伴い、董卓様を援けるべきです」
「理由を聞こか」
瑛が話し始める。
こう云う時はまず最悪な状況を想定して行動すべきだ。この場合のそれは、既に月達が敵軍に捕捉され、戦わざるを得ない状況に追い込まれているというものだろう。そして敵軍は６０，０００強、即ち二倍の数を揃えていると仮定するべきだ。
月達が率いている兵は３２，０００。その内民の誘導と警護に専念する兵として３０００～５０００を要すると考えると、何かあった時に戦える兵数は２７，０００～２９，０００になる。元々月に付き随ってきた涼州兵と、経ちゃんに従うことになった匈奴兵がその配下に居ることから騎馬の数が軍の規模に比して多い。袁紹軍の編成が今まで通りであったとすれば、騎馬の数は月達の方が多いと思われる。騎馬の機動力と突破力を有効に活用出来れば一時互角の戦は展開出来るかもしれないが、何れ兵力の差が戦況に色濃く反映されるようになる。
「戦うとなった場合、状況から考えると一撃して敵軍を乱し、後退する以外の策は取り得ません。それ以外の策は賭けるモノが大きすぎます」
「月んトコには詠が居るんやで？」
「だからこそです」
詠が優秀であればこそ、戦と云う物は結局数が物を言うことを知っている。如何に士気が高かろうとも、倍する敵を相手にして正面か

らぶつかり合うだけでは、時間が経過すればするほど相手に優位な形を作られやすくなるだろう。逃げ場が無く、此処で全てを決しなければならない状況ではない。この切所を切り抜けることが出来れば先は拓けていることを知っているのだから、策を以て敵の虚を撃ち、然る後に後退することを考えるはずだ。

但し、虚を撃ったからと言ってこちらが望むほどの損害を相手に与えることが出来るとは限らない。月達の手札を考えると撤退さえ出来ないという状況は考え難いので、次に想定すべき最悪の状況とは即ち一撃したがすぐに追撃を受けているという状況であるべきだ。

だから鉄騎を待って整然と合流を目指して移動するのではなく、今この瞬間率いることが許されるだけの兵を率いて即座に支援行動を開始するのが最良の策である。

「１０日後に出立する２０，０００の鉄騎より、今出立する５，０００の軽騎こそが求められるのではないでしょうか」

「アンタはウチに独断専行せえ、ちゅうとる訳やな？」

「そうです」

「自分、一遍それで失敗しとるんとちゃうんか。白連が今の境遇に落ち着いたんはアンタらのせいやろ」

「……そうです」

「それでも独断専行せえ、ちゅうんやな？」

「はい」

「理由を言うてみ」

「純粋に軍事に限って考えると、今回のことで平家の屋台骨が揺らぐようなことはありません。その意味では、平家としては差し迫った状況にはないと言って良いと思います。ですが、董卓様としては差し迫った状況にあるのではないでしょうか。董卓様の傍には詠様もいらっしゃいますが、詠様は自分一人の身の安全を図って逃げ出

すようなことはされないでしょう。むしろ逃がそうとされても逃げない公算が高いと思います。最悪の場合、召は皇帝の夫人を殺される、という無惨な結果が齎されます。

高順殿から話を伺った限りでは、陛下は理の人でもありますが、より情の人であると言えると思います。その陛下が、掛け替えなく思って居る女(ひと)を殺されて黙っているとは思えません。報復が行われることは間違いありませんが、問題はその報復の仕方にあります。まず間違いなく未だ嘗てない規模の兵を以て、情けや容赦が寸毫も入り込む余地がない程苛烈な戦を仕掛ける事でしょう。罪を特定の人間に限って背負わせ、これを処刑するならば問題ありませんが、不特定多数に対し、関与の如何を問わずしてその非を鳴らし、これを戮殺するが如き真似をすれば、天下の輿望を喪うことに繋がりかねません。その害が何ら与り知らぬ兵にまで及ぶのであれば尚更です。敵の兵とは即ち将来慰撫すべき民ではありませんか。必要な犠牲は兎も角、本来不要であろう人死には避けるべきです」

確かに、もし詠が死ぬようなことになったら、経ちゃんは復讐に狂うかも知れへん。この乱世にあって珍しいことやと思うけど、経ちゃんは自分が親しく付き合っとる人間を戦で亡くしたことが無いはずや。もし詠を奪われたら、我を失ってもおかしないし、そうなったら何を仕出かすか分からへん。

「ですから、兵を今すぐ派遣すべきです。順調に撤退出来ているならそれで良し、小心に過ぎるということで私を罰すればそれで事足ります。平家の優位は変わらず、輿望を失うようなこともなく、今皆が描いている通りの展望が開ける事でしょう。ですがもし今述べた通りの状況になって居たなら、最早後はないと思うべき状況です。傳説も『これ事を事とする。即ち其れ備え有り、備えあれば患い無し』と言っているではありませんか。逆鱗に触れさせるようなことが有ってはなりません。霞様には、私に令箭をお与えになり、兵を

率いて支援に向かわれますように。私は此処に残って到着予定の鉄騎を待ち、再編し、送り出して後付近の安寧をテイ族と協力して確保致します」

瑛はそう言うた後、口を噤んでジッとこちらを見つめとった。後はウチの心積もり次第っちゅうことやろう。ウチ自身の考えを纏める為に、瑛の発言を思い返してみる。

自分の才を恃んでそれに溺れとったか？

――いや、そんなことはない。どこにも自分なら出来るっちゅう驕りは感じられんかった。何より、自分自身は此処に残るっちゅうとる。功名に逸っての発言やない。

虫のエエ考えをしとったか？

――それもない。想定しとったのは最悪の状況。策は、それを切り抜ける為に必要やと思われる、今から間違いなく出来る範囲での対処を基に計算しとる。地に足の着いた考え方をしとった。

此処は今すぐに月を援けに出立した方が良さそうやな。

ウチの考えは決まったけど、どうせならこの機に瑛の性根を見極めときたい。国の為を想うなんぞ、口先だけなら何とでも言える。ウチが自分の考えに固執した時に、果たして瑛はどうするやろか。適当に抗弁してそれで終わりっちゅう程度なら、瑛にはその程度の器しかない。

例え才に溢れとったとしても、それを容れる器が小さかったとしたら、溢れ出る才はその器から溢れ出して己と周囲とを濡らし、終には溺れ死なせることになるやろう。そしてその時を抜き差しならない場面で迎えるとしたら、取り返しのつかへんことをやりかねへん。

それは迷惑極まりない。せやったらここで確かめさせて貰うっちゅうのが一番や。確かめて、不足が有れば経ちゃんにそう伝える。経ちゃんが考えを改めることが出来へんのやったら、最悪ウチが処分してもええ。

「……アンタが言うたことは良う分かる。でもそれは予測に過ぎんやろ？せやから此処は当初の予定通り、鉄騎を待って出立することにするわ」

「霞様！」

「主将たるウチが決めたことや、従って貰おか。従えへんならウチにも考えちゅうもんがあるで？」

飛龍偃月刀を瑛に突き付ける。

「霞様、お考え直し下さい。召という国が今後どういうものになるのか、その舵を切る場所に立っているのは霞様ただお一人であると言っても過言ではありません。此処で道を誤る基を創らぬ為に、何としても霞様には出立して頂かなければなりません」

「黙っとりぃ。アンタ、目が無いんか？」

殺気と共に偃月刀を押し出して、首の皮を薄皮一枚切った。ちぃとでも動いたらホンマに死ぬところやったのに、微動だにせんとウチに面を向けたまま諫言してくる。

「『亡国の大夫は以て存を図るべからず』と申します。何れ死なねばならぬなら、今死んだとしても同じことです。弘農を失うことは憂慮するに値しませんが、此処で詠様を喪うことで召は一時的なこととは言え英主を喪います。その喪うであろう一時が、天が陛下に与えた秋でないと誰が言えるでしょうか。いいえ、寧ろその一時こそが、陛下にとって天与の秋であるに違いないと想うべきなのです。

天与の秋を掴まぬ者には必ず報いがありましょう。即ち召は黎明にして滅ぶということになりかねません。

霞様、御再考下さい。お腹立ちが収まらぬようであれば、私を処断した後に改めて考えて頂ければ、きっと理解頂けると思います。どうか、お願いします。今すぐ兵を率いてご出立下さい」

まぁ、こんなもんやろ。中途半端な覚悟しかしてへん人間に耐えられるほど、ウチの殺気は甘うないはずや。華琳の言うた通り、ある程度『モノになった』んやろうよ、この娘は。

「アンタの言うことを聞くわけにはイカン……ちゅうのは冗談や」

「そう言わず、御再考を……って、えっ？」

「やから、冗談ちゅうたんや。アンタの言うた通りやろ、ウチもそう思うよ。せやから諫言に従うわ。今率いて行くことが出来る人数は？」

「あ、冗談……え？」

「ほれ、さっさと答えんかい」

「そ、即出立なら5，０００という処かと。一刻、いや、半刻頂けるなら8，０００で行軍出来るだけの秣と水、糧食を揃えて見せます」

「ほな準備しぃ。ウチは兵に声を掛けてくる……8，０００連れて行くで？」

「は、はいっ！必ず揃えて見せます！」

慌ただしく駆け去って行った瑛の後を追って、ウチも部屋から出る。

瑛は詠にだけ言及しとったけど、それだけやったら不十分や。助けるんは詠だけやない。月も朔も恋もねねも、皆助けなアカン。経ちゃんがあの時諸侯を敵に回してウチらに味方してくれたんは、月を助けるためや。その月を殺されて黙っとるはずがない。朔の考え方

どころか生き方まで変えさせたんは経ちゃんや。経ちゃんは他人の人生に大きく干渉しといて後は知らへんっちゅうようなことは絶対にせえへん。恋にしてもねねにしても同じことで、経ちゃんの中では完全に身内や。全員、親しく付き合っとる親類みたいなもんや。

瑛は、詠以外の人間を、『郎党』として捉えて物を考えたんやろうけど、経ちゃんの人間性についてもうちょっと考えが足りとらん。悪い言い方をすると、経ちゃんは自分が見知った人間とそうでない人間とを同列に扱えるほど人間が出来とらん。同じ身内やったとしても、『普段から親しく顔を合わせている人間』と『生まれてこの方一度も顔を合わせたことが無い親類』とを同列に扱える人間は中々に居らへん。けど、君主に求められるのはそれらを出来るだけ同列に扱うことやろう。此処で言う『同列』っちゅうのは、親しさからくる態度や私人としての扱いが同じっちゅうことやなく、その才に応じた官を与え、結果について個人的な心情を抜きにして評価するっちゅうような、公人としての扱いを『同列』にするっちゅうことや。当然経ちゃんもそう云うことは分かっとるやろうし、平常時ならそれはきちんと出来とると思う。

せやけど、これが誰かを殺されるっちゅう話になるとちょっと違うてくる。ウチが見るところに依れば、経ちゃんにとっては『顔を合わせたことが無い身内を殺される』っちゅうんと『見知った、家族に等しい人間が殺される』んとは明確に違う。前者を殺されたら当然怒るんやろうけど、悲しみに打ちひしがれてどうにもならないような状況には陥らんやろう。せやけど後者を殺されるっちゅうのは相当に大きな衝撃やろうし、経ちゃんの心に、決して消えることのない傷を残すのは間違いない。そして殺された人間の霊を慰めんとして、その死に関わった全ての人間を殺し尽くすような、極端な結論を出しかねへん。

召の行く末云々について色々と言うとったけど、それよりも先ず、経ちゃんが傷付くことが分かっとるのにそれを放置するっちゅう解は出せへんやろ。それを禦ぐついでに、召の行く末も何もかもウチが纏めて面倒見たろうやないか。自惚れさせて貰えば、ウチにはそれが出来るだけの器量はあるやろしな。

～焔耶　Ｓｉｄｅ～

去卑達が敵陣への奇襲に成功したのを受け、ワタシも配下に付けられた者達を率いて敵陣へ躍り込んだ。敵陣の様子を見ると、ある程度予測をしていたのであろう、大混乱はしていないようだ。

「魏延様、どうやら先手は取れたようですが、全てがこちらに都合よく動いている訳ではないようです。如何なさいますか？」

配下の者からそう声を掛けられる。

周囲を良く見渡す。確かに然程混乱しては居ないようだが、此方を誘い込んで殲滅する構えには見えない。何と言えば良いか分からぬが、命を落としかねないという、肌を粟立たせる様な感じを受けない。現状は、こちらの思い通りではないがあちらの思い通りでもない、と言った処だろう。それであれば、混乱をより大きなものにする為に敵中に吶喊するべきだ。

だが、それを行うのがワタシの隊でなければならない理由はない。寧ろ去卑の隊こそがその務めを果たすに相応しく思える。

「だからワタシ達は去卑達の後詰として彼らを支援し、また退路の確保を行う」

「我々が吶喊すれば良いではありませんか」

「自惚れるな」

騎馬の戦において、ワタシ達は去卑達の足元にも及ばない。集団での戦闘であれば然程遜色はないと思うが、個人の技量では比べるのもおこがましいほどに劣っている。見通しの利かない暗闇の中で求められるのは、集団としての練度より個人としての力量であるだろう。徒でなら兎も角、騎馬で馬と共に生きてきた去卑達より優れた戦果を挙げれると思って居るのならそれは思い上がりに過ぎない。任せるに足る僚友が居るのであれば、ワタシ達は彼らがより働きやすい状況を創り出してやるべきだ。博打に使う札は、自分の手札の中で最も間違いのない札でなければならぬ。この状況で最も間違いない札は、去卑達であろう。

「先行する去卑達に合流し、彼らの前進を支援しろ。分かったな？分かったらさっさと人数を率いて征け」

「ハッ！」

「残りはワタシと此処で退路を確保するぞ。この役目が一番重要な役目だ。ワタシ達の失敗は去卑達の全滅に繋がるだけでなく、月様の生死にさえ関わることを知れ」

白連様を護ろうと言っているワタシが、去卑達の退路を確保しこれを護ることが出来なくてどうするのか。全く関係が無い事柄だが、ワタシにはそうは思えなかった。去卑達を護ることが出来れば、白連様を護ることが能うと証明出来るような気がして仕方がなかった。

「敵が来たぞ！此処を奪い返させるな！撃ち払え！」

兵達が喊声を上げて敵を迎え撃つ。ワタシも敵兵を薙ぎ払いながら、しかし戦況を見失わぬよう周囲に注意を払い続ける。

日中戦った相手方の将は、手強かった。武芸の腕は知らない。唯その陣立ては非常に嫌らしいものだった。正面から正攻法で攻めることが一番被害が少なく、かつ最も損害が与えられる。そう云う陣を構築していたのだ。油断は出来ない。見縊る事など以ての外だ。だが、少なくともワタシは日中の陣を確認して、奇を衒えばこちらが殲滅されかねないことを見抜くことが出来た。それであれば、相手の策はワタシの想像を超えることはないだろう。つまり、戦況を注視しておけば、変化する状況が相手の策をワタシに教えてくれるはずだ。

突然、ワタシ達に対する、敵からの圧力が強まった。退路を断とうというのであろう。退路を断とうとしていると云うことは、即ち去

卑達が撤退を開始したと云う事に他ならない。その攻め寄せ方も今までとは違って鬼気迫るものがあったが、惜しむらくは兵数が若干不足しているようだ。

「今まで通り深追いはするな！追い払うだけで良い！」

声を張って指示を出す。

当初周辺に居た敵兵の質は低かった。だが、それは恐らく誘いの罠だったのではないか。こちらが歩を進めればあちらは退く。面白いように退いて行く敵に吊られて突出した結果、退路を遮断される。そういう画を描いていたのではないか。

此方に向かってきている兵の質は、序盤周辺に居た者達とは違って高いように思われる。ワタシが振るった獲物に、刃を合わせようと反応出来るだけの力量があった。突然後ろを見せて逃げ出したりしている者も居るが、それは今まで周囲に居た弱兵の真似をしているだけだろう。弱兵であったと思い、放置放念したらばその隙を衝かれて刺殺されると思っておいた方が良い。

何度となく打ち寄せた敵を適当にいなしている処へ、去卑達先行部隊が還って来た。かなり数を減らされているようだ。合流を阻止しようとする敵兵を排除し、迎え入れる。誰の軽甲にもかなりの傷が付いて居り、戦闘の激しさを想わせる。

去卑はワタシに気付くなり破顔して話しかけてきた。

「流石焔耶の姐さん、きっちり仕事をしてくれまさぁ」

「そっちはどうだったのだ？」

「かなりやられちまいましたが、一定の戦果は挙げられたってぇ処

でさぁ。序盤は思い通りに蹂躙出来やしたが、中盤で誘引され、終盤に本営近くから叩き出されたって感じですかい。感じていたよりも随分と機敏な反応をされやしたね。あっしの見立てが間違ってやした」

「いや、多分お前がぶつかったのは、ワタシが手強いと感じた部隊だろう。日中お前が相手をしていた隊より、そちらの方が上手だったというだけだ。お前の見立てが間違っていたわけではない。一定の戦果を挙げたと言えるだけの成果はあった訳だし、此処までは想定範囲内と言っても良いだろう。何ら憂えることはない」

「本隊からの支援のお蔭で撤退も出来そうですしねぇ」

「全くだ。敵兵がもう少し多ければ少々厄介な状況になっていただろう。当初の目的も達したことだし、最早此処に用はない。早々に撤退するとしよう」

「もう少しで決定的な成果が出せたと思うんですがねぇ……」

「……欲張るまい。現状でも十分混乱はさせているし、我らが撤退した後軍を再編せざるを得ない状況にはなって居る。確かにもう一撃出来そうな気もするが、それが相手の誘いではないと断言できないし、ここは現状で満足すべきだろう」

第一、お前の目の前にいる人間が、何処で何をやらかしてどういう迷惑を白連様に掛けたのか、聞いたことが無い訳ではあるまい。

そう続けると、『経験者が語ると重みが違いやすねぇ』と切り返された。言葉尻だけを捉えると頭に来ても良さそうなものだが、嘲りも嫌味も感じられなかった為か、そのようなことはなかった。思い返すと苦々しい思いがするのは、恐らく生ある限り変わることはないだろう。だが、あの経験があればこそ、今ワタシは冷静に判断を下せている。

あの経験を無駄にしてはならぬのだ。独善的だが、あの場で命を失

った人間が犬死ではなかったのだという証を、二度とワタシが同じ失敗をせぬことで立てねばならぬ。そうでなければ本当に無駄死にであったことになってしまうではないか。状況に流されて自分に与えられている役目を忘れることは、ワタシには絶対に許されないということを肝に銘じておかねばならない。

「ワタシ達が撤退するのを機に、本隊も撤退を開始する。一旦戦場を離脱後、ワタシとお前の隊から人数を選抜し、先ず殿を務める隊を再編する。最初はワタシが率いて征こう。お前は残った人数を率いて休息しつつ、再編を行ってワタシ達と入れ替わりで殿が務まるよう準備をしておいてくれ」

「分かりやした」

思って居たよりも兵を失ってしまったが、此処からが正念場だ。想定通りに撤退できるか否かに占める、ワタシ達の働きは大きなものだ。ワタシ達後拒には、敵に釣り出されずさりとて敵を釣り出さず、と言った、正しく絶妙な進退を行うことが求められる。

ワタシにそれが可能なのか不明だが、事此処に至って『出来るかどうか』などと言って居られない。

「さあ、征くぞ！前面の敵を叩いたら一斉に撤退を開始する！」

ワタシは『やる』しかないのだ。

蝶の如く～171～（後書き）

明けまして御目出とう御座います。本年も宜しくお願い致します。

前話投稿時に気付いてませんでしたが、投稿開始から1年経過していました。開始当初は時間があったこともあり、先年中に終わることが出来るはずでしたが、多忙の為叶いませんでした。

多忙になっても投稿を続けてこれたのは、偏に読者様方からの温かいコメントがあったればこそです。この場を借りて御礼申し上げます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6305p/

蝶の如く

2012年1月15日01時55分発行